

# 山王・柴遺跡群

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査（その3）報告書

2016.3

国 土 交 通 省  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

## 山王・柴遺跡群

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査（その3）報告書

二〇一六・三

国 土 交 通 省  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 山王・柴遺跡群

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査（その3）報告書

2016.3

国 土 交 通 省  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

# 序

東京日本橋を基点とする国道17号は、江戸時代の中山道と三国街道の機能を引継いで、首都圏と群馬県・新潟県とを結ぶ幹線国道です。昭和36年の計画以来、埼玉県熊谷市の深谷バイパス上武インターチェンジから伊勢崎・前橋の赤城山南麓を経由する「上武道路」として整備されてきました。当事業団では、設立以来この道路建設予定地の遺跡を発掘調査してまいりました。その成果につきましては今まで報告を公にできなかったところです。

今回、報告します山王・柴遺跡群の調査も、これら一般国道17号(上武道路)改築工事にともない、国土交通省からの委託を受けて、当事業団が平成22年1月から平成25年7月まで、断続的に発掘調査を実施したものです。

今回の発掘調査により古墳時代前期から平安時代の集落と生産域や古墳時代中期から後期の墓域、近世の生産域・墓域など、様々な時代の遺構が新たに発見されました。それぞれの時代について地域の歴史をひもとく上で新たな資料を提供できたものと考えております。今後、本報告書が郷土の歴史解明や教育の場で活用されることを切に願ってやみません。

最後に、発掘調査にあたっては、国土交通省をはじめ、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、並びに地元関係者の皆様には多大なご指導、ご協力を賜りました。本報告書を上梓するにあたり、これらの関係者の皆様に心から感謝を申し上げて序といたします。

平成28年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理 事 長 中 野 三 智 男



# 例 言

1. 本書は、一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)による、山王・柴遺跡群の発掘調査報告書である。
2. 山王・柴遺跡群は群馬県前橋市上細井町1578、1581、1616、青柳町906-1・5・6・7・8、907-1、908-1・2、909-1、910-1・2、911-1、912-1、948、952、954、956、960-1・3・4、961-1、963-1・2・3・4・5、964-1、973-2、974、975-1・2・3・4・5・6・7、978、979-1、980-1番地に所在する。
3. 事業主体 国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所
4. 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(平成24年4月1日以前は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)
5. 整理主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
6. 発掘調査の体制と期間は次のとおりである。

## 平成21年度

調査担当 長谷川博幸、巾隆之

遺跡掘削請負工事 スナガ環境測設株式会社

地上測量及び空中写真撮影 技研測量設計株式会社

履行期間 平成21年4月1日～平成22年3月31日

調査期間 平成22年1月1日～平成22年3月31日

調査面積 4,783㎡

## 平成22年度

調査担当 新倉明彦、杉山秀宏

遺跡掘削請負工事 技研測量設計株式会社

地上測量及び空中写真撮影 技研測量設計株式会社

履行期間 平成22年4月1日～平成23年3月31日

調査期間 平成22年10月1日～平成23年3月31日

調査面積 10,720㎡

## 平成23年度

調査担当 新倉明彦、杉山秀宏

遺跡掘削請負工事 技研測量設計株式会社

地上測量及び空中写真撮影 技研測量設計株式会社

履行期間 平成23年4月1日～平成24年3月31日

調査期間 平成23年4月1日～平成23年4月30日

調査面積 1,427㎡

## 平成25年度

調査担当 小林正、相京建史

遺跡掘削請負工事 スナガ環境測設株式会社

地上測量及び空中写真撮影 株式会社横田調査設計

履行期間 平成25年4月1日～平成25年9月30日

調査期間 平成25年4月1日～平成25年7月31日

調査面積 4,563㎡

7. 整理事業の体制と期間は次のとおりである。

整理担当：須田正久、長谷川博幸

平成24年度

履行期間：平成24年4月1日～平成25年3月31日

整理期間：平成25年3月1日～平成25年3月31日

平成25年度

履行期間：平成25年4月1日～平成26年3月31日

整理期間：平成25年4月1日～平成26年3月31日

平成26年度

履行期間：平成26年4月1日～平成27年3月31日

整理期間：平成26年4月1日～平成27年2月28日

平成27年度

履行期間：平成27年4月1日～平成28年3月31日

8. 本書作成関係者

編集・本文執筆 長谷川博幸、岩崎泰一、神谷佳明、徳江秀夫 デジタル編集 齊田智彦

文責は以下のとおりである。

第1章1節・2節 上武道路8工区共通、長谷川(第1章第3節・4節、第3章第1節1項、第4章第1節、第5章第3節)、神谷(第3章第2節1・2・4～6・8項、第5章第2節)、岩崎(第2章、第3章第1節2項、第2節7項、第3節、第4節、第5章第1節)、長谷川・徳江(第3章第2節3項)

遺構写真 発掘調査担当者、遺物写真 佐藤元彦、長谷川博幸、岩崎泰一、石田典子、石坂茂、関邦一

遺物観察・観察表作成 石器・石製品 岩崎泰一、石田典子 縄文時代・弥生時代の土器 谷藤保彦、石坂茂

古墳時代以降の土器 徳江秀夫、神谷佳明 中世陶磁器 大西雅広 金属器・金属製品 関邦一

保存処理 関邦一

9. 石器・石製品、1区5号墳の石材鑑定は飯島静男氏に依頼した。

10. 発掘調査および報告書の作成にあたり群馬県教育委員会事務局文化財保護課、前橋市教育委員会事務局文化財保護課の多大なご協力を得た。

11. 発掘調査の記録資料と出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

# 凡 例

1. 本文中に使用した方位は、総て国家座標世界測地系(日本測地系2000平面直角座標IX系)の北を用いた。調査区は X=47,775~47,915、Y=-68,195~-68,565の範囲に収まる。
2. 遺構平面図や遺構断面図に示した数値は標高であり、単位はメートルである。
3. 遺構平面図、遺物実測図の縮尺は各図にそれぞれ示した。遺物写真の縮率は原則1/3とし、それ以外のものは明記した。
4. 遺物番号は出土遺構ごとの通し番号とし、器種・分類順に記載した。番号は遺構図、遺物実測図、遺物観察表、遺物写真図版とも一致している。
5. 本書の図版に使用したスクリーントーン及びマークは、次のことを示す。なお、第5章での使用は、そのつど提示してある。

## 遺物図

粘土  煤  漆  釉  摩滅  黒色  赤色  金属はがれ 

## 遺構図

硬化面  焼土  炭化物  灰  粘土  ローム  As-C  Hr-FA  攪乱 

## 遺物記号

●土器 ▲石器・石製品

6. 遺構の方位は、カマドが構築されている竪穴住居ではカマドをもつ辺に対して直交する方向、炉の竪穴住居では炉に近い辺に直交する方向、その他、土坑などは長軸方向による。  
遺構の面積は、下端を計測した。計測はプランメーターで3回行いその平均値、スリースペース計測器による計測値を採用した。遺構・遺物の計測値で、全体を計測できないものについては、現存の値を記載した。
7. 土層断面の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1988年版』に基づいている。
8. 遺構からの出土遺物点数は大型製品片・中型製品片・小型製品片に分類し記載している。土師器の大型製品に分類した器種は壺・甕類、土釜、中型品は高杯類、小型製品は椀・杯類である。須恵器の大型製品に分類した器種は壺甕類・羽釜・瓶・壺類、中型製品は高杯・盤類・甗、小型製品は椀・杯・皿類である。灰釉陶器の大型製品に分類した器種は瓶・壺類である。小型製品は椀・皿類である。
9. 遺物観察表の記載方法は以下のとおりである。
  - ・計測値の( )は推定値を、[ ]は現存値を示す。
  - ・土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1988年版』に基づいている。
  - ・土器計測値は、口：口径、底：底径、高：器高、台：高台径、稜：模倣杯などの稜径、最：内湾口縁部杯での口縁部最大径、胴：甕・壺などの胴部最大径、摘：摘み径である。
  - ・縄文土器・弥生土器の胎土については、下記のとおり略記した。
    - A：石英、長石、黒・白色粗・細砂を中量含む比較的緻密な胎土。
    - B：石英・長石の礫・粗砂と雲母の粗・細砂を多量含む比較的緻密な胎土。
    - C：雲母・石英・長石の粗・細砂を中量含む緻密な胎土。
    - D：中量の石英、長石、黒・白色粗・細砂と繊維を含む比較的緻密な胎土。

E：中量の長石、黒・白色細砂と微量の石英礫を含む緻密な胎土。

・金属器類観察表の計測値、破片については残存部分での値である。

10. 本書で使用した石器・石製品の図版上での表現は以下のとおりである。

・石斧刃部側の摩耗痕については縦位定規線で、着柄部と想定される部分の摩耗痕については横位定規線で図示した。

・磨石等礫石器類に用いた縦位・横位定規線は摩耗範囲を示す。

11. 本書で使用した浅間山噴火による降下火砕物等の呼称については、以下のように表記する。

浅間A軽石：A s-A 浅間B軽石：A s-B 浅間C軽石：A s-C 浅間板鼻黄色テフラ：A s-Y P

榛名二ツ岳火山灰：H r-F A 榛名二ツ岳軽石：H r-F P

12. 本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。

国土地理院 地形図1:200,000「宇都宮」(平成18年4月1日発行)

国土地理院 地形図1:50,000「前橋」(平成10年3月1日発行)

国土地理院 地形図1:25,000「前橋」(平成22年12月1日発行)

「前橋」(平成9年5月1日発行)

「大胡」(平成22年12月1日発行)

「渋川」(平成14年10月1日発行)

「鼻毛石」(昭和56年11月1日発行)

前橋市 1:2,500前橋市現形図(平成21年)



# 目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
表目次	
写真目次	
写真図版目次	

## 第1章 調査の経過 …………… 1

第1節 上武道路について …………… 1
第2節 上武道路と埋蔵文化財 …………… 2
第3節 調査に至る経過 …………… 4
第4節 調査の方法と経過 …………… 4

## 第2章 遺跡の立地と環境…………… 11

第1節 遺跡の立地 …………… 11
第2節 遺跡周辺の歴史環境…………… 13
第3節 基本土層…………… 22

## 第3章 検出遺構と出土遺物…………… 24

調査の概要…………… 24
第1節 近世…………… 24
第2節 古墳時代～平安時代…………… 37
第3節 弥生時代…………… 318
第4節 縄文時代…………… 318
第5節 旧石器時代…………… 328

## 第4章 自然科学分析…………… 333

第1節 分析の目的…………… 333
第2節 1区テフラ分析…………… 334
第3節 2区東側谷地テフラ分析…………… 338
第4節 プラント・オパール分析…………… 342
第5節 出土炭化材樹種同定…………… 345
第6節 出土人骨分析…………… 349
第7節 黒曜石産地分析…………… 353

## 第5章 成果と課題

第1節 赤城白川と縄文期洪水…………… 359
第2節 集落変遷…………… 367
第3節 竪穴式小石槨について…………… 379

出土遺物観察表…………… 384
報告書抄録…………… 420

# 挿図目次

第1図	上武道路と遺跡地の位置図(国土地理院発行1/200,000地勢図「宇都宮」平成18年発行を縮小して使用)……………	1	第57図	3区6号竪穴住居出土遺物図……………	69
第2図	首都圏連絡幹線道路と上武道路予定路線(←) 首都圏整備委員会『首都圏整備』(1959)に加筆……………	2	第58図	3区7号竪穴住居遺構図(1)……………	71
第3図	上武道路8工区の遺跡(国土地理院1/50,000地形図「前橋」平成10年発行を使用……………	3	第59図	3区7号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(1)……………	72
第4図	上武道路調査測量グリッド設定図(国土地理院1/25,000地形図「前橋」平成22年発行「渋川」平成14年発行を使用……………	5	第60図	3区7号竪穴住居出土遺物図(2)……………	73
第5図	調査区及び中小グリッド図……………	6	第61図	3区8号竪穴住居遺構図(1)……………	74
第6図	山王・柴遺跡群周辺図(前橋市役所発行1/2,500前橋市現形図(平成21年)使用)……………	8	第62図	3区8号竪穴住居遺構図(2)……………	75
第7図	調査年度別 調査範囲図(1/1,500)……………	10	第63図	3区8号竪穴住居出土遺物図……………	76
第8図	遺跡地周辺の地形分類図(群馬県『群馬県史通史編1』付図2を改編)……………	12	第64図	3区9号竪穴住居遺構図(1)……………	77
第9図	周辺遺跡位置図(国土地理院1/25,000地形図「前橋」平成9年発行「渋川」平成14年10月発行を使用)……………	18	第65図	3区9号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図……………	78
第10図	基本土層図……………	23	第66図	3区10号竪穴住居遺構図(1)……………	79
第11図	2区1号土坑墓遺構図・出土遺物図……………	26	第67図	3区10号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図……………	80
第12図	2区2号土坑墓遺構図・出土遺物図……………	26	第68図	3区11号竪穴住居遺構図……………	81
第13図	2区3号土坑墓遺構図・出土遺物図……………	27	第69図	3区11号竪穴住居出土遺物図……………	82
第14図	2区4号土坑墓遺構図・出土遺物図(1)……………	27	第70図	3区12号竪穴住居遺構図……………	83
第15図	2区4号土坑墓出土遺物図(2)……………	28	第71図	3区12号竪穴住居出土遺物図……………	84
第16図	3区1号土坑墓遺構図・出土遺物図(1)……………	28	第72図	4区1号竪穴住居遺構図(1)・出土遺物図……………	85
第17図	3区1号土坑墓出土遺物図(2)……………	29	第73図	4区1号竪穴住居遺構図(2)……………	86
第18図	2区1面水田遺構図(1)……………	30・31	第74図	4区2号竪穴住居遺構図……………	87
第19図	2区1面水田遺構図(2)……………	32	第75図	4区2号竪穴住居出土遺物図……………	88
第20図	3区1号溝遺構図……………	33	第76図	4区3号竪穴住居遺構図(1)……………	89
第21図	3区2号溝遺構図(1)……………	34	第77図	4区3号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(1)……………	90
第22図	3区2号溝遺構図(2)・出土遺物図……………	35	第78図	4区3号竪穴住居出土遺物図(2)……………	91
第23図	4区6・7号溝遺構図……………	35	第79図	4区4号竪穴住居遺構図(1)……………	92
第24図	4区1～5・8～20号溝遺構図……………	36	第80図	4区4号竪穴住居遺構図(2)……………	93
第25図	2区5号竪穴住居遺構図……………	38	第81図	4区4号竪穴住居出土遺物図……………	94
第26図	2区5号竪穴住居出土遺物図……………	39	第82図	4区5号竪穴住居出土遺物図(1)……………	94
第27図	2区6号竪穴住居遺構図……………	40	第83図	4区5号竪穴住居遺構図(1)・出土遺物図(2)……………	95
第28図	2区6号竪穴住居出土遺物図……………	41	第84図	4区5号竪穴住居遺構図(2)……………	96
第29図	2区10号竪穴住居遺構図(1)・出土遺物図……………	42	第85図	4区6号竪穴住居遺構図・出土遺物図……………	97
第30図	2区10号竪穴住居遺構図(2)……………	43	第86図	4区7号竪穴住居出土遺物図(1)……………	97
第31図	2区17号竪穴住居遺構図……………	44	第87図	4区7号竪穴住居遺構図・出土遺物図(2)……………	98
第32図	2区18号竪穴住居遺構図(1)……………	45	第88図	1区9号竪穴住居遺構図(1)……………	99
第33図	2区18号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図……………	46	第89図	1区9号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(1)……………	100
第34図	2区32号竪穴住居遺構図(1)……………	47	第90図	1区9号竪穴住居出土遺物図(2)……………	101
第35図	2区32号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図……………	48	第91図	1区10号竪穴住居遺構図(1)……………	102
第36図	2区33号竪穴住居遺構図(1)……………	49	第92図	1区10号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(1)……………	103
第37図	2区33号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(1)……………	50	第93図	1区10号竪穴住居出土遺物図(2)……………	104
第38図	2区33号竪穴住居出土遺物図(2)……………	51	第94図	1区12号竪穴住居遺構図(1)……………	105
第39図	2区39号竪穴住居遺構図……………	52	第95図	1区12号竪穴住居遺構図(2)……………	106
第40図	2区39号竪穴住居出土遺物図……………	53	第96図	1区12号竪穴住居出土遺物図……………	107
第41図	3区1号竪穴住居遺構図(1)……………	54	第97図	1区16号竪穴住居遺構図(1)……………	107
第42図	3区1号竪穴住居遺構図(2)……………	55	第98図	1区16号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図……………	108
第43図	3区1号竪穴住居遺構図(3)……………	56	第99図	1区17号竪穴住居出土遺物図(1)……………	109
第44図	3区1号竪穴住居出土遺物図……………	57	第100図	1区17号竪穴住居遺構図(1)・出土遺物図(2)……………	110
第45図	3区2号竪穴住居遺構図(1)……………	58	第101図	1区17号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(3)……………	111
第46図	3区2号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図……………	59	第102図	1区18号竪穴住居遺構図(1)……………	112
第47図	3区3号竪穴住居遺構図(1)……………	60	第103図	1区18号竪穴住居遺構図(2)……………	113
第48図	3区3号竪穴住居遺構図(2)……………	61	第104図	1区18号竪穴住居出土遺物図……………	114
第49図	3区3号竪穴住居遺構図(3)……………	62	第105図	1区19号竪穴住居遺構図……………	115
第50図	3区3号竪穴住居出土遺物図(1)……………	63	第106図	1区19号竪穴住居出土遺物図……………	116
第51図	3区3号竪穴住居出土遺物図(2)……………	64	第107図	1区20号竪穴住居遺構図・出土遺物図(1)……………	117
第52図	3区4号竪穴住居遺構図(1)……………	64	第108図	1区20号竪穴住居出土遺物図(2)……………	118
第53図	3区4号竪穴住居遺構図(2)……………	65	第109図	1区21号竪穴住居遺構図・出土遺物図……………	119
第54図	3区4号竪穴住居遺構図(3)・出土遺物図(1)……………	66	第110図	1区22号竪穴住居遺構図……………	120
第55図	3区4号竪穴住居出土遺物図(2)……………	67	第111図	1区22号竪穴住居出土遺物図……………	121
第56図	3区6号竪穴住居遺構図……………	68	第112図	1区23号竪穴住居遺構図(1)……………	121
			第113図	1区23号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(1)……………	122
			第114図	1区23号竪穴住居出土遺物図(2)……………	123
			第115図	1区24号竪穴住居遺構図……………	124
			第116図	1区24号竪穴住居出土遺物図(1)……………	125
			第117図	1区24号竪穴住居出土遺物図(2)……………	126
			第118図	1区27号竪穴住居遺構図(1)……………	127
			第119図	1区27号竪穴住居遺構図(2)……………	128

第120图	1区27号竖穴住居出土遗物图(1)	129	第186图	2区37号竖穴住居遺構图(1)	196
第121图	1区27号竖穴住居出土遗物图(2)	130	第187图	2区37号竖穴住居遺構图(2)	197
第122图	1区27号竖穴住居出土遗物图(3)	131	第188图	2区37号竖穴住居出土遺物图(1)	198
第123图	1区28号竖穴住居遺構图(1)	132	第189图	2区37号竖穴住居出土遺物图(2)	199
第124图	1区28号竖穴住居遺構图(2)·出土遺物图(1)	133	第190图	2区38号竖穴住居遺構图(1)	200
第125图	1区28号竖穴住居出土遺物图(2)	134	第191图	2区38号竖穴住居遺構图(2)	201
第126图	1区30号竖穴住居遺構图(1)	135	第192图	2区38号竖穴住居遺構图(3)	202
第127图	1区30号竖穴住居遺構图(2)·出土遺物图	136	第193图	2区38号竖穴住居出土遺物图	203
第128图	2区1号竖穴住居遺構图(1)	137	第194图	2区40号竖穴住居遺構图·出土遺物图	204
第129图	2区1号竖穴住居遺構图(2)	138	第195图	2区41号竖穴住居遺構图(1)	205
第130图	2区1号竖穴住居出土遺物图(1)	139	第196图	2区41号竖穴住居遺構图(2)	206
第131图	2区1号竖穴住居出土遺物图(2)	140	第197图	2区41号竖穴住居出土遺物图	207
第132图	2区3号竖穴住居遺構图(1)·出土遺物图	141	第198图	2区42号竖穴住居遺構图	208
第133图	2区3号竖穴住居遺構图(2)	142	第199图	2区42号竖穴住居出土遺物图	209
第134图	2区4号竖穴住居遺構图(1)	143	第200图	2区43号竖穴住居遺構图(1)	211
第135图	2区4号竖穴住居遺構图(2)	144	第201图	2区43号竖穴住居遺構图(2)	212
第136图	2区4号竖穴住居出土遺物图	145	第202图	2区43号竖穴住居遺構图(3)·出土遺物图(1)	213
第137图	2区11号竖穴住居遺構图(1)	146	第203图	2区43号竖穴住居遺構图(4)·出土遺物图(2)	214
第138图	2区11号竖穴住居遺構图(2)	147	第204图	2区43号竖穴住居出土遺物图(3)	215
第139图	2区11号竖穴住居出土遺物图(1)	148	第205图	2区46号竖穴住居遺構图	216
第140图	2区11号竖穴住居出土遺物图(2)	149	第206图	2区47号竖穴住居遺構图·出土遺物图	217
第141图	2区13号竖穴住居遺構图	150	第207图	2区48号竖穴住居遺構图	218
第142图	2区13号竖穴住居出土遺物图	151	第208图	3区5号竖穴住居遺構图(1)	219
第143图	2区14号竖穴住居遺構图(1)	152	第209图	3区5号竖穴住居遺構图(2)·出土遺物图(1)	220
第144图	2区14号竖穴住居遺構图(2)	153	第210图	3区5号竖穴住居出土遺物图(2)	221
第145图	2区14号竖穴住居出土遺物图(1)	154	第211图	1区1号竖穴住居遺構图(1)	221
第146图	2区14号竖穴住居遺構图(3)·出土遺物图(2)	155	第212图	1区1号竖穴住居遺構图(2)·出土遺物图	222
第147图	2区15号竖穴住居遺構图(1)·16号竖穴住居遺構图	157	第213图	1区2号竖穴住居遺構图(1)	223
第148图	2区15号竖穴住居遺構图(2)·出土遺物图	158	第214图	1区2号竖穴住居遺構图(2)	224
第149图	2区19号竖穴住居遺構图(1)	159	第215图	1区2号竖穴住居出土遺物图	225
第150图	2区19号竖穴住居遺構图(2)	160	第216图	1区3号竖穴住居遺構图	225
第151图	2区19号竖穴住居出土遺物图	161	第217图	1区3号竖穴住居出土遺物图	226
第152图	2区20号竖穴住居遺構图(1)	162	第218图	1区4号竖穴住居遺構图(1)	227
第153图	2区20号竖穴住居遺構图(2)	163	第219图	1区4号竖穴住居遺構图(2)·出土遺物图(1)	228
第154图	2区20号竖穴住居出土遺物图	164	第220图	1区4号竖穴住居出土遺物图(2)	229
第155图	2区21号竖穴住居遺構图(1)	165	第221图	1区4号竖穴住居出土遺物图(3)	230
第156图	2区21号竖穴住居遺構图(2)	166	第222图	1区5号竖穴住居遺構图	231
第157图	2区21号竖穴住居出土遺物图	167	第223图	1区5号竖穴住居出土遺物图	232
第158图	2区22号竖穴住居遺構图	168	第224图	1区6号竖穴住居遺構图·出土遺物图	233
第159图	2区22号竖穴住居出土遺物图	169	第225图	1区7号竖穴住居遺構图	234
第160图	2区24号竖穴住居遺構图	170	第226图	1区8号竖穴住居遺構图·出土遺物图	235
第161图	2区24号竖穴住居出土遺物图	171	第227图	1区11号竖穴住居遺構图	236
第162图	2区25号竖穴住居遺構图(1)	172	第228图	1区11号竖穴住居出土遺物图	237
第163图	2区25号竖穴住居遺構图(2)·出土遺物图(1)	173	第229图	1区13号竖穴住居遺構图	238
第164图	2区25号竖穴住居遺構图(3)	174	第230图	1区13号竖穴住居出土遺物图	239
第165图	2区25号竖穴住居出土遺物图(2)	175	第231图	1区14号竖穴住居遺構图·出土遺物图	240
第166图	2区26号竖穴住居遺構图(1)	176	第232图	1区15号竖穴住居遺構图	241
第167图	2区26号竖穴住居遺構图(2)·出土遺物图(1)	177	第233图	1区15号竖穴住居出土遺物图(1)	242
第168图	2区26号竖穴住居遺構图(3)·出土遺物图(2)	178	第234图	1区15号竖穴住居出土遺物图(2)	243
第169图	2区26号竖穴住居出土遺物图(3)	179	第235图	1区25号竖穴住居遺構图	244
第170图	2区27号竖穴住居遺構图(1)	180	第236图	1区26号竖穴住居遺構图(1)·出土遺物图(1)	245
第171图	2区27号竖穴住居遺構图(2)	181	第237图	1区26号竖穴住居遺構图(2)·出土遺物图(2)	246
第172图	2区27号竖穴住居遺構图(3)	182	第238图	1区26号竖穴住居出土遺物图(3)	247
第173图	2区27号竖穴住居出土遺物图	183	第239图	1区29号竖穴住居遺構图(1)	247
第174图	2区29号竖穴住居遺構图(1)	185	第240图	1区29号竖穴住居遺構图(2)·出土遺物图	248
第175图	2区29号竖穴住居遺構图(2)·出土遺物图(1)	186	第241图	2区8号竖穴住居遺構图·出土遺物图(1)	249
第176图	2区29号竖穴住居遺構图(3)·出土遺物图(2)	187	第242图	2区8号竖穴住居出土遺物图(2)	250
第177图	2区30·31号竖穴住居遺構图	188	第243图	2区8号竖穴住居出土遺物图(3)	251
第178图	2区30·31号竖穴住居出土遺物图	189	第244图	2区9号竖穴住居遺構图	252
第179图	2区34号竖穴住居遺構图(1)	190	第245图	2区9号竖穴住居出土遺物图	253
第180图	2区34号竖穴住居遺構图(2)·出土遺物图(1)	191	第246图	2区23号竖穴住居遺構图·出土遺物图(1)	254
第181图	2区34号竖穴住居出土遺物图(2)	192	第247图	2区23号竖穴住居出土遺物图(2)	255
第182图	2区35号竖穴住居遺構图·出土遺物图	193	第248图	2区28号竖穴住居遺構图	256
第183图	2区36号竖穴住居遺構图(1)	194	第249图	2区28号竖穴住居出土遺物图	257
第184图	2区36号竖穴住居遺構图(2)·出土遺物图(1)	195	第250图	2区1号掘立柱建物遺構图	258
第185图	2区36号竖穴住居出土遺物图(2)	196	第251图	2区2号掘立柱建物遺構图	259

第252図	2区3号掘立柱建物遺構図	260
第253図	2区4号掘立柱建物遺構図	261
第254図	2区5号掘立柱建物遺構図	262
第255図	2区6号掘立柱建物遺構図	263
第256図	3区1号掘立柱建物遺構図	264
第257図	2区2号・3号柵遺構図	265
第258図	1区1号墳遺構図	266
第259図	1区2号墳遺構図	268
第260図	1区3号墳遺構図(1)・出土遺物図	269
第261図	1区3号墳遺構図(2)	270
第262図	1区4号墳遺構図	271
第263図	1区5号墳遺構図(1)	273
第264図	1区5号墳遺構図(2)	274
第265図	1区5号墳遺構図(3)	275
第266図	1区5号墳遺構図(4)・出土遺物図	276
第267図	1区6号墳出土遺物図	276
第268図	1区6号墳遺構図	277
第269図	2区1号粘土採掘坑遺構図・出土遺物図	278
第270図	1区1・2号土坑遺構図	282
第271図	1区3号土坑・2区1・2号土坑、3区1～5号土坑遺構図 ・2区1号土坑出土遺物図	283
第272図	3区8～12・15・16号土坑、4区1・2号土坑遺構図	284
第273図	2区ピット遺構図(1)	285
第274図	2区ピット遺構図(2)	286
第275図	2区ピット遺構図(3)	287
第276図	2区ピット遺構図(4)	288
第277図	3区ピット遺構図(1)	289
第278図	3区ピット遺構図(2)	290
第279図	3区ピット遺構図(3)	291
第280図	3区ピット遺構図(4)	292
第281図	3区ピット遺構図(5)	293
第282図	3区ピット遺構図(6)	294
第283図	3区ピット遺構図(7)	295
第284図	3区ピット遺構図(8)	296
第285図	1区埋没谷遺構図	300
第286図	1区埋没谷周辺柱状図	301
第287図	1区埋没谷出土遺物図(1)	302
第288図	1区埋没谷出土遺物図(2)	303
第289図	1区17・18号溝遺構図	303
第290図	2区谷状遺構図	304
第291図	2区7～10号溝・2面水田全体図	306・307
第292図	2区11～13号溝・3面水田全体図	308・309
第293図	2区2面・3面水田土層断面図	310
第294図	2区2面・3面水田出土遺物図	311
第295図	1区1号畠遺構図	312
第296図	1区2号畠遺構図	313
第297図	1区3号畠遺構図	314

第298図	1区4号畠遺構図	314
第299図	1区5号畠遺構図	315
第300図	1区6号畠遺構図	315
第301図	3区1号畠遺構図	316
第302図	飛鳥時代～平安時代の遺構外出土遺物図	317
第303図	古墳時代後期の遺構外出土遺物図	317
第304図	古墳時代前期・中期の遺構外出土遺物図	317
第305図	遺構外出土の弥生土器図	318
第306図	遺構外出土の縄文土器図(1)	319
第307図	遺構外出土の縄文土器図(2)	320
第308図	遺構外出土の縄文土器図(3)	321
第309図	遺構外出土の縄文土器図(4)	322
第310図	遺構外出土の縄文土器図(1)	323
第311図	遺構外出土の縄文土器図(2)	324
第312図	遺構外出土の縄文土器図(3)	325
第313図	遺構外出土の縄文土器図(4)	326
第314図	遺構外出土の縄文土器図(5)	327
第315図	3区旧石器遺物図及び出土状態図	328
第316図	3区旧石器確認調査の調査地点図	329
第317図	3区旧石器確認調査の調査地点土層断面図	330
第318図	4区旧石器確認調査の調査地点図	331
第319図	4区旧石器確認調査の調査地点土層断面図	332
第320図	1区テフラ分析採取地点と採取地点の土層柱状図	337
第321図	2区テフラ分析採取地点と採取地点の土層柱状図	341
第322図	2区水田南地点におけるプラント・オパール分析結果	343
第323図	3区7号竪穴住居炭化材分布状態図	347
第324図	黒曜石産地分布図(東日本)	354
第325図	黒曜石産地推定判別図(1)	355
第326図	黒曜石産地推定判別図(2)	355
第327図	山王・柴遺跡群I区基本土層図	360
第328図	洪水層と出土土器(山王・柴遺跡群)	361
第329図	洪水層下出土の土器(引切塚遺跡)	362
第330図	洪水層下出土の土器(青柳宿上遺跡)	362
第331図	洪水層と出土土器(青柳宿上遺跡)	363
第332図	赤城山麓域の洪水層堆積時期	364
第333図	山王・柴遺跡群周辺域に見られる旧河道の痕跡	365
第334図	1区No.3の土層堆積詳細図(早田原図をトレース)	366
第335図	As-C堆積状態図	368
第336図	古墳時代前期～中期の集落変遷	373
第337図	古墳時代後期の集落変遷	374
第338図	飛鳥時代～奈良時代の集落変遷	375
第339図	平安時代の集落変遷(1)	376
第340図	平安時代の集落変遷(2)	377
第341図	山王・柴遺跡群周辺竪穴式小石槨	381
第342図	山王・柴遺跡群周辺竪穴式小石槨位置図 国土地理院 1/50,000地形図「前橋」昭和56年編集を使用	382

## 表 目 次

第1表	上武道路8工区遺跡一覧表	3
第2表	遺構名称変更相対表	9・10
第3表	主な周辺遺跡	19・20・21
第4表	3区7号竪穴住居 柱穴計測表	72
第5表	2区38号竪穴住居 柱穴計測表	202
第6表	2区1号掘立柱建物 柱穴計測表	258
第7表	2区2号掘立柱建物 柱穴計測表	259
第8表	2区3号掘立柱建物 柱穴計測表	261
第9表	2区4号掘立柱建物 柱穴計測表	261
第10表	2区5号掘立柱建物 柱穴計測表	262
第11表	2区6号掘立柱建物 柱穴計測表	263
第12表	3区1号掘立柱建物 柱穴計測表	264
第13表	2区2号柵 柱穴計測表	265
第14表	2区3号柵 柱穴計測表	265

第15表	1区5号墳石室使用石の石材一覧表	276
第16表	2区ピット計測表	296・297
第17表	3区ピット計測表	298・299
第18表	1区テフラ検出分析結果	336
第19表	1区テフラ屈折率測定結果	336
第20表	2区テフラ検出分析結果	340
第21表	山王・柴遺跡群におけるプラント・オパール分析結果	343
第22表	推定生産量	343
第23表	3区7号竪穴住居出土炭化材樹種同定結果	347
第24表	山王・柴遺跡群出土人骨のまとめ	353
第25表	山王・柴遺跡群出土人骨歯冠計測値及び比較表	353
第26表	出土黒曜石分析対象	354
第27表	黒曜石産地(東日本)の判別群名称(望月, 2004参照)	354
第28表	出土黒曜石測定値および産地推定結果	356

# 本文中写真目次

写真1 3区旧石器出土状態 北西→ …… 328  
 写真2 3区旧石器出土状態近接 西→ …… 328  
 写真3 3区T-2グリッド南壁土層断面 北→ …… 330  
 写真4 3区J-3グリッド南壁土層断面 北→ …… 330  
 写真5 4区旧石器確認調査 調査状況 東→ …… 331  
 写真6 4区旧石器確認調査 調査状況 西→ …… 331  
 写真7 4区82区T-1グリッド南壁土層断面 北→ …… 332  
 写真8 4区73区F-19グリッド南壁土層断面 北→ …… 332  
 写真9 4区83区I-4グリッド南壁土層断面 北→ …… 332  
 写真10 植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真 …… 344  
 写真11 炭火材顕微鏡写真 …… 348  
 写真12 2区1号土抗墓出土人骨[後頭骨] …… 349  
 写真13 2区1号土抗墓出土歯[異常摩耗] …… 349  
 写真14 2区2号土抗墓出土人骨[出土歯] …… 350

写真15 2区3号土抗墓出土人骨[出土歯] …… 350  
 写真16 2区4号土抗墓出土人骨[出土歯] …… 351  
 写真17 3区1号土抗墓出土人骨[左寛骨大坐骨切痕部] …… 351  
 写真18 3区1号土抗墓出土人骨[左上顎骨左側面観] …… 351  
 写真19 3区1号土抗墓出土人骨[左上顎歯咬合面観] …… 352  
 写真20 3区1号土抗墓出土人骨[右下顎歯咬合面観] …… 352  
 写真21 3区1号土抗墓出土人骨[前頭骨前頭縫合] …… 352  
 写真22 黒曜石産地分析資料(1) …… 357  
 写真23 黒曜石産地分析資料(2) …… 358  
 写真24 河床礫上位の土層堆積 …… 360  
 写真25 1号河道遺物出土状況(東から) …… 362  
 写真26 1号河道遺物出土状況(北から) …… 362  
 写真27 洪水層下、早期土器群の出土状態(青柳宿上遺跡) …… 363

# 写真図版目次

PL.1 1 山王・柴遺跡群遠景 南東→  
 2 山王・柴遺跡群近景 西→  
 PL.2 1 1区と榛名山 東→  
 2 1区と赤城白川 北→  
 PL.3 1 1区全景 垂直  
 2 1区全景(平成25年度調査) 垂直  
 PL.4 1 2区全景 南西→  
 2 2区全景 垂直  
 PL.5 1 3区全景 南→  
 2 3区全景 垂直  
 PL.6 1 3区全景(平成23年度調査) 東→  
 2 3区全景(平成23年度調査) 垂直  
 PL.7 1 4区全景 西→  
 2 4区全景 垂直  
 PL.8 1 2区土坑墓全景 北→  
 2 2区1号土坑墓全景 北→  
 3 2区1号土坑墓遺物出土状態 南西→  
 4 2区1号土坑墓土層断面A-A' 南西→  
 5 2区1号土坑墓土層断面A-A' 南西→  
 6 2区2号土坑墓全景 北→  
 7 2区2号土坑墓遺物出土状態 北西→  
 8 2区3号土坑墓全景 北→  
 PL.9 1 2区3号土坑墓遺物出土状態 北→  
 2 2区4号土坑墓全景 北→  
 3 2区4号土坑墓遺物出土状態 北西→  
 4 3区1号土坑墓遺物出土状態 北東→  
 5 2区東側谷土層断面A-A' 南→  
 6 2区東側谷土層断面A-A' 南→  
 7 2区東側谷土層断面A-A' 南→  
 PL.10 1 2区1面水田部分 南→  
 2 2区1面水田部分 西→  
 3 2区1面水田部分 南西→  
 4 2区1面水田部分 南→  
 5 2区1面水田部分 南西→  
 6 2区1面水田耕作痕 南→  
 7 2区1面水田耕作痕(確認時) 南→  
 8 2区1面水田耕作痕(拡大) 南→  
 PL.11 1 2区1～3号溝全景 北→  
 2 2区21号溝全景 南→  
 3 2区1号溝全景 西→  
 4 2区1号溝土層断面 東→  
 5 2区1号溝土層断面 西→  
 6 2区21号溝土層断面 南→

PL.12 1 3区1号溝全景 北→  
 2 3区1号溝南側部分 南→  
 3 3区1号溝北側部分 北→  
 4 3区1号溝土層断面A-A' 南→  
 5 3区1号溝土層断面D-D' 南→  
 6 3区2号溝土層断面A-A' 南東→  
 7 3区2号溝土層断面C-C' 南西→  
 PL.13 1 3区2号溝全景 南東→  
 2 3区2号溝全景 東→  
 3 4区1号溝全景 南→  
 4 4区1号溝土層断面A-A' 南→  
 5 4区2号溝全景 北→  
 PL.14 1 4区2号溝土層断面A-A' 南→  
 2 4区3号溝土層断面A-A' 南→  
 3 4区3号溝全景 南→  
 4 4区4号溝全景 北→  
 5 4区4号溝土層断面B-B' 南→  
 6 4区5号溝全景 南→  
 7 4区5号溝土層断面A-A' 南→  
 PL.15 1 4区6・7号溝全景 北→  
 2 4区6号溝土層断面B-B' 南→  
 3 4区6・7号溝土層断面A-A' 南→  
 4 4区8号溝全景 南→  
 5 4区8号溝土層断面A-A' 南→  
 6 4区11号溝全景 西→  
 7 4区11号溝土層断面B-B' 西→  
 PL.16 1 4区10号溝全景 東→  
 2 4区10号溝全景 東→  
 3 4区10号溝土層断面C-C' 西→  
 4 4区12号溝全景 東→  
 5 4区12号溝土層断面A-A' 西→  
 6 4区13号溝全景 東→  
 7 4区13号溝土層断面A-A' 西→  
 PL.17 1 4区14号溝全景 西→  
 2 4区14号溝土層断面A-A' 西→  
 3 4区15号溝全景 東→  
 4 4区15号溝土層断面A-A' 西→  
 5 4区17号溝全景 東→  
 6 4区17号溝全景 東→  
 7 4区17号溝土層断面A-A' 西→  
 PL.18 1 4区16号溝全景 東→  
 2 4区16号溝土層断面C-C' 西→  
 3 4区18号溝全景 南→

	4	4区18号溝土層断面A-A'	南→		7	3区1号竪穴住居柱穴P2土層断面H-H'	南→
	5	4区19号溝全景	東→		8	3区1号竪穴住居柱穴P3土層断面I-I'	南→
	6	4区19号溝全景	西→	PL.27	1	3区1号竪穴住居柱穴P3土層断面I-I'	南→
	7	4区19号溝土層断面A-A'	東→		2	3区1号竪穴住居柱穴P4土層断面j-j'	南→
PL.19	1	2区5号竪穴住居遺物出土状態	南→		3	3区1号竪穴住居柱穴P4土層断面j-j'	南→
	2	2区5号竪穴住居土層断面	南→		4	3区1号竪穴住居柱穴P5・P6土層断面K-K'、L-L'	北→
	3	2区6号竪穴住居全景	西→		5	3区1号竪穴住居柱穴P5・P6全景	南→
	4	2区6号竪穴住居遺物出土状態	西→		6	3区1号竪穴住居柱穴P7遺物出土状態	南→
	5	2区6号竪穴住居土層断面A-A'	南→		7	3区1号竪穴住居貯蔵穴全景	西→
	6	2区6号竪穴住居土層断面B-B'	西→		8	3区1号竪穴住居カマド全景	西→
	7	2区6号竪穴住居掘方確認状況	南→	PL.28	1	3区1号竪穴住居カマド遺物出土状態	西→
	8	2区6号竪穴住居カマド	西→		2	3区1号竪穴住居カマド土層断面M-M'	南西→
PL.20	1	2区6号竪穴住居カマド土層断面	南→		3	3区1号竪穴住居カマド土層断面N-N'	西→
	2	2区6号竪穴住居カマド掘方	西→		4	3区2号竪穴住居全景	西→
	3	2区10号竪穴住居全景	西→		5	3区2号竪穴住居遺物出土状態	北西→
	4	2区10号竪穴住居遺物出土状態	西→		6	3区2号竪穴住居遺物出土状態	西→
	5	2区10号竪穴住居土層断面	西→		7	3区2号竪穴住居遺物出土状態	西→
	6	2区10号竪穴住居土層断面	南→		8	3区2号竪穴住居土層断面A-A'	北→
	7	2区10号竪穴住居掘方全景	西→	PL.29	1	3区2号竪穴住居土層断面B-B'	西→
	8	2区10号竪穴住居カマド全景	西→		2	3区2号竪穴住居掘方全景	西→
PL.21	1	2区10号竪穴住居カマド土層断面	南西→		3	3区2号竪穴住居掘方土層断面B-B'	西→
	2	2区10号竪穴住居カマド土層断面	西→		4	3区2号竪穴住居床下土坑1全景	西→
	3	2区17号竪穴住居全景	西→		5	3区2号竪穴住居床下土坑1土層断面F-F'	南→
	4	2区17号竪穴住居遺物出土状態	西→		6	3区2号竪穴住居床下土坑2遺物出土状態	西→
	5	2区17号竪穴住居土層断面	西→		7	3区2号竪穴住居床下土坑2土層断面G-G'	南→
	6	2区17号竪穴住居掘方土層断面	西→		8	3区2号竪穴住居カマド全景	西→
	7	2区17号竪穴住居カマド土層断面	西→	PL.30	1	3区2号竪穴住居カマド土層断面D-D'	南西→
	8	2区17号竪穴住居カマド掘方確認状況	西→		2	3区2号竪穴住居カマド土層断面E-E'	西→
PL.22	1	2区18号竪穴住居全景	西→		3	3区2号竪穴住居カマド掘方全景	南西→
	2	2区18号竪穴住居遺物出土状態	西→		4	3区3号竪穴住居全景	西→
	3	2区18号竪穴住居土層断面A-A'	西→		5	3区3号竪穴住居遺物出土状態	西→
	4	2区18号竪穴住居貯蔵穴土層断面	西→		6	3区3号竪穴住居遺物出土状態	西→
	5	2区18号竪穴住居カマド遺物出土状態	西→		7	3区3号竪穴住居土層断面A-A'	南→
	6	2区18号竪穴住居カマド土層断面C-C'	南西→		8	3区3号竪穴住居土層断面B-B'	西→
	7	2区18号竪穴住居カマド土層断面D-D'	西→	PL.31	1	3区3号竪穴住居掘方全景	西→
	8	2区18号竪穴住居カマド掘方全景	西→		2	3区3号竪穴住居掘方土層断面	北西→
PL.23	1	2区18号竪穴住居カマド掘方土層断面C-C'	南西→		3	3区3号竪穴住居床下土坑	東→
	2	2区32号竪穴住居遺物出土状態	西→		4	3区3号竪穴住居床下土坑	西→
	3	2区32号竪穴住居全景	西→		5	3区3号竪穴住居床下土坑	西→
	4	2区32号竪穴住居カマド全景	西→		6	3区3号竪穴住居カマド1全景	西→
	5	2区32号竪穴住居カマド土層断面B-B'	南西→		7	3区3号竪穴住居カマド1灰層確認	南→
	6	2区32号竪穴住居カマド土層断面C-C'	北西→		8	3区3号竪穴住居カマド1土層断面D-D'	西→
	7	2区32号竪穴住居掘方全景	西→	PL.32	1	3区3号竪穴住居カマド2全景	東→
	8	2区32号竪穴住居カマド掘方土層断面C-C'	北西→		2	3区3号竪穴住居カマド2遺物出土状態	東→
PL.24	1	2区33号竪穴住居全景	西→		3	3区3号竪穴住居カマド2土層断面E-E'	南西→
	2	2区33号竪穴住居カマド土層断面D-D'	西→		4	3区3号竪穴住居カマド2土層断面F-F'	東→
	3	2区33号竪穴住居カマド土層断面C-C'	南西→		5	3区4号竪穴住居全景	西→
	4	2区33号竪穴住居カマド掘方土層断面D-D'	西→		6	3区4号竪穴住居遺物出土状態	西→
	5	2区33号竪穴住居カマド掘方全景	西→		7	3区4号竪穴住居土層断面A-A'	北→
	6	2区33号竪穴住居カマド掘方土層断面C-C'	南西→		8	3区4号竪穴住居土層断面B-B'	西→
	7	2区39号竪穴住居全景	西→	PL.33	1	3区4号竪穴住居掘方全景	西→
	8	2区39号竪穴住居遺物出土状態	西→		2	3区4号竪穴住居掘方床下土坑	西→
PL.25	1	2区39号竪穴住居土層断面A-A'	西→		3	3区4号竪穴住居掘方床下土坑	西→
	2	2区39号竪穴住居掘方全景	西→		4	3区4号竪穴住居カマド全景	西→
	3	2区39号竪穴住居カマド全景	西→		5	3区4号竪穴住居カマド土層断面C-C'	南→
	4	2区39号竪穴住居カマド掘方全景	南西→		6	3区4号竪穴住居カマド土層断面D-D'	西→
	5	2区39号竪穴住居カマド土層断面B-B'	南→		7	3区4号竪穴住居カマド遺物出土状態	西→
	6	2区39号竪穴住居カマド土層断面C-C'	西→		8	3区4号竪穴住居カマド掘方全景	西→
	7	3区1号竪穴住居全景	西→	PL.34	1	3区6号竪穴住居全景(22年度調査分)	北→
	8	3区1号竪穴住居遺物出土状態	西→		2	3区6号竪穴住居全景(25年度調査分)	西→
PL.26	1	3区1号竪穴住居土層断面A-A'	北→		3	3区6号竪穴住居土層断面A-A'(22年度調査分)	北→
	2	3区1号竪穴住居土層断面B-B'	西→		4	3区6号竪穴住居土層断面B-B'北側(22年度調査分)	西→
	3	3区1号竪穴住居掘方全景	西→		5	3区6号竪穴住居土層断面B-B'南側(25年度調査分)	西→
	4	3区1号竪穴住居柱穴P1土層断面G-G'	南→		6	3区6号竪穴住居貯蔵穴全景(22年度調査分)	北→
	5	3区1号竪穴住居柱穴P1土層断面G-G'	南→		7	3区6号竪穴住居カマド全景(25年度調査分)	西→
	6	3区1号竪穴住居柱穴P2土層断面H-H'	南→		8	3区6号竪穴住居カマド土層断面D-D'(25年度調査分)	南→

PL.35	1	3区6号竪穴住居カマド土層断面E-E' (25年度調査分) 西→	3	4区3号竪穴住居土層断面A-A' 北→	
	2	3区6号竪穴住居カマド掘方全景(25年度調査分) 西→	4	4区3号竪穴住居土層断面B-B' 西→	
	3	3区7号竪穴住居全景 西→	5	4区3号竪穴住居掘方全景 西→	
	4	3区7号竪穴住居遺物出土状態 北→	6	4区3号竪穴住居柱穴P1全景 南→	
	5	3区7号竪穴住居遺物出土状態 西→	7	4区3号竪穴住居柱穴P1土層断面C-C' 西→	
	6	3区7号竪穴住居土層断面A-A' 南→	8	4区3号竪穴住居カマド全景 西→	
	7	3区7号竪穴住居土層断面B-B' 西→	PL.44	1	4区3号竪穴住居カマド土層断面D-D' 南→
	8	3区7号竪穴住居掘方全景 北→	2	4区3号竪穴住居カマド土層断面E-E' 西→	
PL.36	1	3区7号竪穴住居貯蔵穴1遺物出土状態 西→	3	4区3号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→	
	2	3区7号竪穴住居貯蔵穴1遺物出土状態 西→	4	4区4号竪穴住居全景 西→	
	3	3区7号竪穴住居貯蔵穴2全景 北→	5	4区4号竪穴住居土層断面A-A' 南→	
	4	3区7号竪穴住居貯蔵穴2土層断面 南→	6	4区4号竪穴住居土層断面B-B' 西→	
	5	3区7号竪穴住居棚状施設土層断面 西→	7	4区4号竪穴住居掘方全景 西→	
	6	3区7号竪穴住居カマド全景 西→	8	4区4号竪穴住居貯蔵穴土層断面C-C' 西→	
	7	3区7号竪穴住居カマド土層断面P-P' 南→	PL.45	1	4区4号竪穴住居カマド全景 西→
	8	3区7号竪穴住居カマド掘方全景 西→	2	4区4号竪穴住居カマド掘方土層断面D-D' 南西→	
PL.37	1	3区8号竪穴住居全景 西→	3	4区4号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→	
	2	3区8号竪穴住居土層断面A-A' 南→	4	4区5号竪穴住居全景 西→	
	3	3区8号竪穴住居土層断面B-B' 西→	5	4区5号竪穴住居土層断面A-A' 南→	
	4	3区8号竪穴住居掘方全景 西→	6	4区5号竪穴住居土層断面B-B' 西→	
	5	3区8号竪穴住居カマド全景 西→	7	4区5号竪穴住居掘方全景 西→	
	6	3区8号竪穴住居カマド土層断面D-D' 南西→	8	4区5号竪穴住居貯蔵穴遺物出土状態 西→	
	7	3区8号竪穴住居カマド土層断面E-E' 西→	PL.46	1	4区5号竪穴住居カマド全景 西→
	8	3区8号竪穴住居カマド掘方全景 西→	2	4区5号竪穴住居カマド土層断面D-D' 南→	
PL.38	1	3区9号竪穴住居全景 西→	3	4区5号竪穴住居カマド土層断面E-E' 西→	
	2	3区9号竪穴住居土層断面A-A' 北→	4	4区5号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→	
	3	3区9号竪穴住居掘方全景 南→	5	4区6号竪穴住居全景 南→	
	4	3区9号竪穴住居カマド全景 西→	6	4区6号竪穴住居土層断面A-A' 西→	
	5	3区9号竪穴住居カマド土層断面C-C' 南→	7	4区6号竪穴住居土層断面B-B' 北→	
	6	3区9号竪穴住居カマド掘方全景 西→	8	4区6号竪穴住居掘方全景 西→	
	7	3区10号竪穴住居全景 西→	PL.47	1	4区7号竪穴住居全景 西→
	8	3区10号竪穴住居土層断面B-B' 北東→	2	4区7号竪穴住居土層断面A-A' 西→	
PL.39	1	3区10号竪穴住居掘方全景 南西→	3	4区7号竪穴住居土層断面B-B' 南→	
	2	3区10号竪穴住居カマド全景 南西→	4	1区9号竪穴住居全景 北東→	
	3	3区10号竪穴住居カマド土層断面C-C' 南→	5	1区9号竪穴住居遺物出土状態 北東→	
	4	3区10号竪穴住居カマド掘方全景 南西→	6	1区9号竪穴住居柱穴P1土層断面 南→	
	5	3区11号竪穴住居全景 西→	7	1区9号竪穴住居柱穴P2土層断面 南→	
	6	3区11号竪穴住居土層断面A-A' 南→	8	1区9号竪穴住居柱穴P3土層断面 南→	
	7	3区11号竪穴住居土層断面B-B' 東→	PL.48	1	1区9号竪穴住居カマド全景 北東→
	8	3区11号竪穴住居掘方全景 西→	2	1区9号竪穴住居カマド土層断面E-E' 北→	
PL.40	1	3区11号竪穴住居カマド全景 西→	3	1区9号竪穴住居カマド土層断面F-F' 北東→	
	2	3区11号竪穴住居カマド土層断面C-C' 南→	4	1区9号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 北→	
	3	3区12号竪穴住居全景 西→	5	1区9号竪穴住居カマド掘方土層断面F-F' 北東→	
	4	3区12号竪穴住居貯蔵穴遺物出土状態 西→	6	1区10号竪穴住居全景 南西→	
	5	3区12号竪穴住居掘方全景 西→	7	1区10号竪穴住居遺物出土状態 南西→	
	6	3区12号竪穴住居カマド全景 西→	8	1区10号竪穴住居遺物出土状態 東→	
	7	3区12号竪穴住居カマド掘方全景 北→	PL.49	1	1区10号竪穴住居土層断面A-A' 南→
PL.41	1	4区1号竪穴住居全景 西→	2	1区10号竪穴住居柱穴P1土層断面C-C' 南→	
	2	4区1号竪穴住居土層断面A-A' 南→	3	1区10号竪穴住居柱穴P2土層断面H-H' 南→	
	3	4区1号竪穴住居土層断面B-B' 西→	4	1区10号竪穴住居柱穴P3土層断面 南→	
	4	4区1号竪穴住居掘方全景 西→	5	1区10号竪穴住居柱穴P4土層断面I-I' 南→	
	5	4区1号竪穴住居貯蔵穴全景 西→	6	1区10号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→	
	6	4区1号竪穴住居カマド全景 西→	7	1区10号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→	
	7	4区1号竪穴住居カマド掘方土層断面D-D' 南→	8	1区10号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→	
	8	4区1号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→	PL.50	1	1区10号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→
PL.42	1	4区2号竪穴住居全景 西→	2	1区10号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→	
	2	4区2号竪穴住居土層断面A-A' 南→	3	1区10号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→	
	3	4区2号竪穴住居土層断面B-B' 東→	4	1区10号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→	
	4	4区2号竪穴住居掘方全景 西→	5	1区10号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→	
	5	4区2号竪穴住居カマド掘方土層断面D-D' 南→	6	1区10号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→	
	6	4区2号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→	7	1区10号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→	
	7	4区2号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→	8	1区10号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→	
	8	4区2号竪穴住居カマド掘方全景 西→	PL.51	1	1区12号竪穴住居土層断面A-A' 南→
PL.43	1	4区3号竪穴住居全景 西→	2	1区12号竪穴住居土層断面B-B' 北東→	
	2	4区3号竪穴住居遺物出土状態 西→	3	1区12号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→	
			4	1区12号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→	

	5	1区16号竪穴住居全景	南西→		7	1区27号竪穴住居柱穴P 1 土層断面E-E'	西→
	6	1区16号竪穴住居遺物出土状態	南→		8	1区27号竪穴住居柱穴P 2 土層断面	西→
	7	1区16号竪穴住居土層断面A-A'	南→	PL.60	1	1区27号竪穴住居柱穴P 3 土層断面F-F'	西→
	8	1区16号竪穴住居土層断面B-B'	東→		2	1区27号竪穴住居柱穴P 4 土層断面G-G'	西→
PL.52	1	1区16号竪穴住居貯蔵穴土層断面	南→		3	1区27号竪穴住居貯蔵穴全景	西→
	2	1区16号竪穴住居カマド全景	南西→		4	1区27号竪穴住居貯蔵穴土層断面H-H'	東→
	3	1区16号竪穴住居カマド土層断面C-C'	南東→		5	1区27号竪穴住居カマド全景	西→
	4	1区16号竪穴住居カマド掘方全景	南西→		6	1区27号竪穴住居カマド土層断面I-I'	北→
	5	1区17号竪穴住居全景	西→		7	1区27号竪穴住居カマド土層断面J-J'	西→
	6	1区17号竪穴住居遺物出土状態	西→		8	1区27号竪穴住居カマド掘方全景	西→
	7	1区17号竪穴住居遺物出土状態	南→	PL.61	1	1区27号竪穴住居カマド掘方土層断面I-I'	北→
	8	1区17号竪穴住居遺物出土状態	南東→		2	1区27号竪穴住居カマド掘方土層断面J-J'	西→
PL.53	1	1区17号竪穴住居柱穴P 1 土層断面	東→		3	1区28号竪穴住居全景	南西→
	2	1区17号竪穴住居柱穴P 2 遺物出土状態	東→		4	1区28号竪穴住居遺物出土状態	南西→
	3	1区18号竪穴住居全景	南西→		5	1区28号竪穴住居土層断面A-A'	西→
	4	1区18号竪穴住居土層断面A-A'	南→		6	1区28号竪穴住居土層断面B-B'	北東→
	5	1区18号竪穴住居掘方全景	北→		7	1区28号竪穴住居柱穴P 1 土層断面E-E'	南→
	6	1区18号竪穴住居柱穴P 1 土層断面	南→		8	1区28号竪穴住居柱穴P 2 土層断面F-F'	南→
	7	1区18号竪穴住居柱穴P 2 土層断面F-F'	南→	PL.62	1	1区28号竪穴住居柱穴P 3 土層断面G-G'	南西→
	8	1区18号竪穴住居柱穴P 3 土層断面	南→		2	1区28号竪穴住居柱穴P 4 土層断面H-H'	南西→
PL.54	1	1区18号竪穴住居柱穴P 4 土層断面	南→		3	1区28号竪穴住居貯蔵穴全景	南西→
	2	1区18号竪穴住居貯蔵穴全景	南東→		4	1区28号竪穴住居貯蔵穴土層断面I-I'	西→
	3	1区18号竪穴住居カマド全景	南西→		5	1区28号竪穴住居カマド全景	南西→
	4	1区18号竪穴住居カマド土層断面I-I'	南東→		6	1区28号竪穴住居カマド土層断面J-J'	南東→
	5	1区18号竪穴住居カマド燃焼部	南西→		7	1区28号竪穴住居カマド土層断面K-K'	南西→
	6	1区18号竪穴住居カマド掘方全景	南西→		8	1区28号竪穴住居カマド掘方全景	南西→
	7	1区18号竪穴住居カマド掘方土層断面I-I'	南→	PL.63	1	1区28号竪穴住居カマド掘方土層断面J-J'	南東→
	8	1区18号竪穴住居カマド煙道部	南西→		2	1区28号竪穴住居カマド掘方土層断面L-L'	南西→
PL.55	1	1区19号竪穴住居土層断面A-A'	北東→		3	1区30号竪穴住居全景	東→
	2	1区19号竪穴住居貯蔵穴土層断面C-C'	南→		4	1区30号竪穴住居遺物出土状態	東→
	3	1区19号竪穴住居カマド土層断面D-D'	南→		5	1区30号竪穴住居土層断面A-A'	南→
	4	1区19号竪穴住居カマド掘方全景	西→		6	1区30号竪穴住居土層断面B-B'	東→
	5	1区20号竪穴住居全景	西→		7	1区30号竪穴住居柱穴P 1 土層断面	南→
	6	1区20号竪穴住居土層断面A-A'	南→		8	1区30号竪穴住居柱穴P 2 土層断面	南→
	7	1区20号竪穴住居カマド周辺遺物出土状態	西→	PL.64	1	1区30号竪穴住居柱穴P 3 土層断面E-E'	南→
	8	1区20号竪穴住居カマド全景	西→		2	1区30号竪穴住居柱穴P 4 土層断面H-H'	北→
PL.56	1	1区20号竪穴住居カマド土層断面D-D'	南→		3	1区30号竪穴住居カマド全景	東→
	2	1区20号竪穴住居カマド掘方全景	西→		4	1区30号竪穴住居カマド土層断面G-G'	北→
	3	1区21号竪穴住居土層断面B-B'	北東→		5	1区30号竪穴住居カマド掘方全景	東→
	4	1区22号竪穴住居全景	西→		6	1区30号竪穴住居カマド掘方土層断面H-H'	西→
	5	1区22号竪穴住居カマド発掘前	西→		7	2区1号竪穴住居全景	南西→
	6	1区22号竪穴住居カマド土層断面C-C'	北→		8	2区1号竪穴住居遺物出土状態	南西→
	7	1区22号竪穴住居カマド土層断面D-D'	西→	PL.65	1	2区1号竪穴住居掘方全景	南西→
	8	1区22号竪穴住居カマド煙道部	南→		2	2区1号竪穴住居柱穴P 1 土層断面E-E'	南→
PL.57	1	1区23号竪穴住居全景	西→		3	2区1号竪穴住居柱穴P 2 土層断面F-F'	南→
	2	1区23号・24号竪穴住居全景	南→		4	2区1号竪穴住居柱穴P 3 土層断面G-G'	南→
	3	1区23号竪穴住居遺物出土状態	西→		5	2区1号竪穴住居柱穴P 4 土層断面H-H'	南→
	4	1区23号竪穴住居土層断面	南西→		6	2区1号竪穴住居柱穴P 5 土層断面I-I'	南→
	5	1区23号竪穴住居貯蔵穴土層断面C-C'	西→		7	2区1号竪穴住居柱穴P 6 土層断面G-G'	南→
	6	1区23号竪穴住居カマド全景	西→		8	2区1号竪穴住居貯蔵穴土層断面J-J'	西→
	7	1区23号竪穴住居カマド土層断面	南→	PL.66	1	2区1号竪穴住居カマド全景	南西→
	8	1区23号竪穴住居カマド煙道部	南→		2	2区1号竪穴住居カマド土層断面K-K'	南→
PL.58	1	1区23号竪穴住居カマド掘方全景	西→		3	2区1号竪穴住居カマド土層断面L-L'	西→
	2	1区24号竪穴住居全景	西→		4	2区1号竪穴住居カマド掘方全景	南西→
	3	1区24号竪穴住居遺物出土状態	西→		5	2区3号竪穴住居全景	南西→
	4	1区24号竪穴住居P 1 土層断面	西→		6	2区3号竪穴住居遺物出土状態	南→
	5	1区24号竪穴住居カマド全景	西→		7	2区3号竪穴住居土層断面A-A'	南東→
	6	1区24号竪穴住居カマド土層断面E-E'	南→		8	2区3号竪穴住居土層断面B-B'	南西→
	7	1区24号竪穴住居カマド掘方全景	西→	PL.67	1	2区3号竪穴住居掘方全景	南→
	8	1区24号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E'	南→		2	2区3号竪穴住居床下土坑1 土層断面	西→
PL.59	1	1区27号竪穴住居全景	西→		3	2区3号竪穴住居柱穴P 1 土層断面	西→
	2	1区27号竪穴住居遺物出土状態	西→		4	2区3号竪穴住居柱穴P 2 土層断面	西→
	3	1区27号竪穴住居遺物出土状態	西→		5	2区3号竪穴住居貯蔵穴土層断面D-D'	西→
	4	1区27号竪穴住居遺物出土状態	西→		6	2区3号竪穴住居カマド全景	南西→
	5	1区27号竪穴住居土層断面A-A'	北西→		7	2区3号竪穴住居カマド土層断面E-E'	南西→
	6	1区27号竪穴住居土層断面B-B'	北東→		8	2区3号竪穴住居カマド土層断面F-F'	西→



PL.68	1	2区3号竪穴住居カマド土層断面F-F' 西→	3	2区19号竪穴住居全景 西→	
	2	2区3号竪穴住居カマド掘方全景 南西→	4	2区19号竪穴住居遺物出土状態 西→	
	3	2区4号竪穴住居全景 西→	5	2区19号竪穴住居土層断面A-A' 南→	
	4	2区4号竪穴住居遺物出土状態 北西→	6	2区19号竪穴住居土層断面B-B' 西→	
	5	2区4号竪穴住居土層断面A-A' 南→	7	2区19号竪穴住居掘方全景 西→	
	6	2区4号竪穴住居土層断面B-B' 東→	8	2区19号竪穴住居掘方土層断面 西→	
	7	2区4号竪穴住居掘方全景 西→	PL.77	1	2区19号竪穴住居掘方全景 南→
	8	2区4号竪穴住居柱穴P1土層断面 南→	2	2区19号竪穴住居掘方床下土坑全景 西→	
PL.69	1	2区4号竪穴住居柱穴P2土層断面 南→	3	2区19号竪穴住居柱穴P1土層断面 南→	
	2	2区4号竪穴住居柱穴P3土層断面 西→	4	2区19号竪穴住居貯蔵穴1土層断面E-E' 西→	
	3	2区4号竪穴住居柱穴P4土層断面G-G' 南→	5	2区19号竪穴住居貯蔵穴2土層断面F-F' 西→	
	4	2区4号竪穴住居柱穴P5土層断面H-H' 南→	6	2区19号竪穴住居カマド全景 西→	
	5	2区4号竪穴住居柱穴P6土層断面I-I' 南→	7	2区19号竪穴住居カマド土層断面G-G' 南西→	
	6	2区4号竪穴住居柱穴P7・P8土層断面 北→	8	2区19号竪穴住居カマド土層断面H-H' 西→	
	7	2区4号竪穴住居貯蔵穴土層断面L-L' 西→	PL.78	1	2区19号竪穴住居カマド土層断面H-H' 西→
	8	2区4号竪穴住居カマド全景 西→	2	2区19号竪穴住居カマド掘方全景 西→	
PL.70	1	2区4号竪穴住居カマド土層断面M-M' 南西→	3	2区19号竪穴住居カマド掘方土層断面G-G' 南西→	
	2	2区4号竪穴住居カマド土層断面M-M' 南西→	4	2区19号竪穴住居カマド掘方土層断面 西→	
	3	2区4号竪穴住居カマド土層断面N-N' 西→	5	2区20号竪穴住居全景 南西→	
	4	2区4号竪穴住居カマド掘方全景 南西→	6	2区20号竪穴住居土層断面A-A' 南→	
	5	2区11号竪穴住居全景 南西→	7	2区20号竪穴住居土層断面B-B' 東→	
	6	2区11号竪穴住居掘方全景 北東→	8	2区20号竪穴住居掘方全景 南西→	
	7	2区11号竪穴住居カマド全景 南西→	PL.79	1	2区20号竪穴住居床下土坑全景 南西→
	8	2区11号竪穴住居カマド土層断面 南東→	2	2区20号竪穴住居柱穴P1土層断面 南→	
PL.71	1	2区11号竪穴住居カマド土層断面I-I' 南東→	3	2区20号竪穴住居柱穴P2土層断面 西→	
	2	2区11号竪穴住居カマド土層断面J-J' 南西→	4	2区20号竪穴住居柱穴P3土層断面 西→	
	3	2区11号竪穴住居カマド掘方全景 南西→	5	2区20号竪穴住居柱穴P4土層断面 西→	
	4	2区11号竪穴住居カマド掘方土層断面I-I' 南東→	6	2区20号竪穴住居柱穴P5土層断面 西→	
	5	2区13号竪穴住居全景 南西→	7	2区20号竪穴住居貯蔵穴土層断面G-G' 西→	
	6	2区13号竪穴住居遺物出土状態 南西→	8	2区20号竪穴住居カマド全景 西→	
	7	2区13号竪穴住居掘方全景 南西→	PL.80	1	2区20号竪穴住居カマド土層断面H-H' 南→
	8	2区13号竪穴住居カマド全景 南西→	2	2区20号竪穴住居カマド土層断面I-I' 南西→	
PL.72	1	2区13号竪穴住居カマド土層断面 南→	3	2区20号竪穴住居カマド土層断面I-I' 西→	
	2	2区13号竪穴住居カマド掘方全景 南西→	4	2区20号竪穴住居カマド土層断面H-H' 南→	
	3	2区14号竪穴住居全景 南→	5	2区20号竪穴住居カマド掘方土層断面H-H' 南→	
	4	2区14号竪穴住居遺物出土状態 南→	6	2区20号竪穴住居カマド掘方土層断面I-I' 西→	
	5	2区14号竪穴住居掘方全景 南→	7	2区21号竪穴住居全景 西→	
	6	2区14号竪穴住居掘方土層断面B-B' 南→	8	2区21号竪穴住居遺物出土状態 西→	
	7	2区14号竪穴住居柱穴P4土層断面 南→	PL.81	1	2区21号竪穴住居土層断面A-A' 北→
	8	2区14号竪穴住居柱穴P5土層断面 南→	2	2区21号竪穴住居土層断面B-B' 西→	
PL.73	1	2区14号竪穴住居カマド1土層断面I-I' 南→	3	2区21号竪穴住居掘方土層断面A-A' 北→	
	2	2区14号竪穴住居カマド1掘方全景 南西→	4	2区21号竪穴住居掘方土層断面B-B' 西→	
	3	2区14号竪穴住居カマド1掘方土層断面I-I' 南→	5	2区21号竪穴住居床下土坑土層断面G-G' 西→	
	4	2区14号竪穴住居カマド1掘方土層断面I-I' 北→	6	2区21号竪穴住居貯蔵穴土層断面C-C' 西→	
	5	2区14号竪穴住居カマド2全景 南→	7	2区21号竪穴住居カマド全景 西→	
	6	2区14号竪穴住居カマド2土層断面J-J' 南東→	8	2区21号竪穴住居カマド土層断面D-D' 北西→	
	7	2区14号竪穴住居カマド2土層断面J-J' 南東→	PL.82	1	2区21号竪穴住居カマド土層断面E-E' 南西→
	8	2区14号竪穴住居カマド2土層断面K-K' 南→	2	2区21号竪穴住居カマド土層断面E-E' 西→	
PL.74	1	2区14号竪穴住居カマド2掘方全景 南→	3	2区21号竪穴住居カマド掘方土層断面D-D' 南西→	
	2	2区14号竪穴住居カマド2掘方土層断面J-J' 南→	4	2区21号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→	
	3	2区15・16号竪穴住居全景 西→	5	2区22号竪穴住居全景 南西→	
	4	2区15号竪穴住居遺物出土状態 西→	6	2区22号竪穴住居遺物出土状態 南西→	
	5	2区15・16号竪穴住居土層断面A-A' 北→	7	2区22号竪穴住居土層断面A-A' 南東→	
	6	2区15・16号竪穴住居土層断面B-B' 西→	8	2区22号竪穴住居掘方土層断面A-A' 東→	
	7	2区15・16号竪穴住居掘方全景 西→	PL.83	1	2区22号竪穴住居カマド土層断面B-B' 南西→
	8	2区15号竪穴住居柱穴P1土層断面E-E' 西→	2	2区22号竪穴住居カマド土層断面B-B' 南→	
PL.75	1	2区15号竪穴住居柱穴P2土層断面 西→	3	2区24号竪穴住居全景 南西→	
	2	2区15号竪穴住居柱穴P3土層断面 西→	4	2区24号竪穴住居土層断面A-A' 南→	
	3	2区15号竪穴住居柱穴P4土層断面F-F' 西→	5	2区24号竪穴住居土層断面B-B' 西→	
	4	2区15号竪穴住居貯蔵穴土層断面G-G' 西→	6	2区24号竪穴住居掘方全景 南西→	
	5	2区15号竪穴住居カマド全景 西→	7	2区24号竪穴住居カマド土層断面E-E' 南西→	
	6	2区15号竪穴住居カマド土層断面H-H' 南西→	8	2区24号竪穴住居カマド土層断面E-E' 南西→	
	7	2区15号竪穴住居カマド土層断面I-I' 西→	PL.84	1	2区24号竪穴住居カマド土層断面E-E' 南→
	8	2区15号竪穴住居カマド土層断面I-I' 西→	2	2区24号竪穴住居カマド土層断面F-F' 西→	
PL.76	1	2区15号竪穴住居カマド掘方土層断面H-H' 南西→	3	2区24号竪穴住居カマド掘方全景 南西→	
	2	2区15号竪穴住居カマド掘方土層断面I-I' 西→	4	2区24号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 南西→	

	5	2区25号竪穴住居全景	南西→		7	2区29号竪穴住居カマド全景	西→
	6	2区25号竪穴住居遺物出土状態	南西→		8	2区29号竪穴住居カマド土層断面F-F'	南西→
	7	2区25号竪穴住居遺物出土状態	北→	PL.93	1	2区29号竪穴住居カマド土層断面G-G'	西→
	8	2区25号竪穴住居土層断面A-A'	南→		2	2区29号竪穴住居カマド掘方全景	西→
PL.85	1	2区25号竪穴住居土層断面B-B'	西→		3	2区30号竪穴住居全景	北→
	2	2区25号竪穴住居掘方全景	南西→		4	2区30号竪穴住居土層断面A-A'	西→
	3	2区25号竪穴住居柱穴P 1土層断面	西→		5	2区30号竪穴住居土層断面B-B'	北→
	4	2区25号竪穴住居柱穴P 3土層断面E-E'	西→		6	2区30号竪穴住居土層断面B-B'	北東→
	5	2区25号竪穴住居柱穴P 4土層断面	西→		7	2区34号竪穴住居全景	西→
	6	2区25号竪穴住居柱穴P 5土層断面F-F'	西→		8	2区34号竪穴住居遺物出土状態	西→
	7	2区25号竪穴住居貯蔵穴土層断面G-G'	南西→	PL.94	1	2区34号竪穴住居土層断面A-A'	南→
	8	2区25号竪穴住居カマド全景	南西→		2	2区34号竪穴住居土層断面B-B'	東→
PL.86	1	2区25号竪穴住居カマド掘方全景	南西→		3	2区34号竪穴住居掘方全景	西→
	2	2区25号竪穴住居カマド掘方土層断面J-J'	西→		4	2区34号竪穴住居柱穴P 1土層断面C-C'	西→
	3	2区26号竪穴住居全景	南西→		5	2区34号竪穴住居貯蔵穴土層断面	西→
	4	2区26号竪穴住居遺物出土状態	南西→		6	2区34号竪穴住居カマド全景	西→
	5	2区26号竪穴住居遺物出土状態	西→		7	2区34号竪穴住居カマド土層断面E-E'	南西→
	6	2区26号竪穴住居土層断面A-A'	南東→		8	2区34号竪穴住居カマド土層断面F-F'	西→
	7	2区26号竪穴住居土層断面B-B'	南西→	PL.95	1	2区34号竪穴住居カマド掘方全景	西→
	8	2区26号竪穴住居掘方全景	南西→		2	2区34号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E'	南西→
PL.87	1	2区26号竪穴住居掘方土層断面A-A'	南東→		3	2区35号竪穴住居全景	北西→
	2	2区26号竪穴住居柱穴P 1土層断面E-E'	西→		4	2区35号竪穴住居遺物出土状態	北東→
	3	2区26号竪穴住居柱穴P 2土層断面	西→		5	2区35号竪穴住居土層断面A-A'	北→
	4	2区26号竪穴住居柱穴P 3土層断面	西→		6	2区35号竪穴住居土層断面B-B'	西→
	5	2区26号竪穴住居柱穴P 4土層断面F-F'	南西→		7	2区35号竪穴住居掘方全景	北西→
	6	2区26号竪穴住居柱穴P 5土層断面G-G'	南西→		8	2区35号竪穴住居カマド全景	西→
	7	2区26号竪穴住居貯蔵穴全景	南西→	PL.96	1	2区35号竪穴住居カマド土層断面D-D'	西→
	8	2区26号竪穴住居貯蔵穴土層断面	西→		2	2区35号竪穴住居カマド土層断面D-D'	西→
PL.88	1	2区26号竪穴住居カマド全景	南西→		3	2区35号竪穴住居カマド土層断面E-E'	西→
	2	2区26号竪穴住居カマド土層断面I-I'	南西→		4	2区35号竪穴住居カマド掘方全景	西→
	3	2区26号竪穴住居カマド土層断面I-I'	南→		5	2区35号竪穴住居カマド袖石露出状況	西→
	4	2区26号竪穴住居カマド土層断面K-K'	南西→		6	2区35号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E'	西→
	5	2区26号竪穴住居カマド土層断面K-K'	西→		7	2区36号竪穴住居全景	西→
	6	2区26号竪穴住居カマド掘方土層断面K-K'	南西→		8	2区36号竪穴住居遺物出土状態	西→
	7	2区27号竪穴住居全景	南西→	PL.97	1	2区36号竪穴住居遺物出土状態	東→
	8	2区27号竪穴住居遺物出土状態	南西→		2	2区36号竪穴住居土層断面A-A'	南→
PL.89	1	2区27号竪穴住居土層断面A-A'	南→		3	2区36号竪穴住居土層断面B-B'	西→
	2	2区27号竪穴住居土層断面B-B'	西→		4	2区36号竪穴住居掘方全景	西→
	3	2区27号竪穴住居掘方全景	南西→		5	2区36号竪穴住居カマド全景	西→
	4	2区27号竪穴住居柱穴P 1土層断面E-E'	西→		6	2区36号竪穴住居カマド土層断面F-F'	南西→
	5	2区27号竪穴住居柱穴P 2土層断面	西→		7	2区36号竪穴住居カマド土層断面F-F'	南西→
	6	2区27号竪穴住居柱穴P 3土層断面	西→		8	2区36号竪穴住居カマド土層断面F-F'	西→
	7	2区27号竪穴住居柱穴P 4土層断面	西→	PL.98	1	2区36号竪穴住居カマド掘方全景	西→
	8	2区27号竪穴住居柱穴P 5土層断面	西→		2	2区36号竪穴住居カマド掘方土層断面F-F'	南西→
PL.90	1	2区27号竪穴住居柱穴P 6土層断面F-F'	西→		3	2区37号竪穴住居全景	西→
	2	2区27号竪穴住居柱穴P 7土層断面	西→		4	2区37号竪穴住居遺物出土状態	西→
	3	2区27号竪穴住居柱穴P 4・P 7土層断面	西→		5	2区37号竪穴住居遺物出土状態	南西→
	4	2区27号竪穴住居貯蔵穴土層断面G-G'	西→		6	2区37号竪穴住居遺物出土状態	西→
	5	2区27号竪穴住居カマド全景	南→		7	2区37号竪穴住居土層断面A-A'	南→
	6	2区27号竪穴住居カマド土層断面H-H'	南→		8	2区37号竪穴住居土層断面B-B'	東→
	7	2区27号竪穴住居カマド土層断面I-I'	西→	PL.99	1	2区37号竪穴住居柱穴P 4土層断面F-F'	西→
	8	2区27号竪穴住居カマド土層断面I-I'	西→		2	2区37号竪穴住居カマド全景	西→
PL.91	1	2区27号竪穴住居カマド掘方土層断面H-H'	南→		3	2区37号竪穴住居カマド土層断面I-I'	南→
	2	2区27号竪穴住居カマド掘方土層断面I-I'	西→		4	2区37号竪穴住居カマド掘方土層断面J-J'	南西→
	3	2区29号竪穴住居全景	南西→		5	2区38号竪穴住居全景	南西→
	4	2区29号竪穴住居遺物出土状態	南西→		6	2区38号竪穴住居遺物出土状態	南西→
	5	2区29号竪穴住居遺物出土状態	南西→		7	2区38号竪穴住居掘方全景	南西→
	6	2区29号竪穴住居遺物出土状態	南西→		8	2区38号竪穴住居柱穴P 1土層断面C-C'	西→
	7	2区29号竪穴住居掘方全景	南西→	PL.100	1	2区38号竪穴住居柱穴P 3土層断面D-D'	南西→
	8	2区29号竪穴住居掘方土層断面A-A'	南東→		2	2区38号竪穴住居貯蔵穴土層断面E-E'	南西→
PL.92	1	2区29号竪穴住居掘方土層断面B-B'	南西→		3	2区38号竪穴住居カマド全景	西→
	2	2区29号竪穴住居柱穴P 1土層断面	南→		4	2区38号竪穴住居カマド土層断面H-H'	南西→
	3	2区29号竪穴住居柱穴P 3土層断面	南→		5	2区38号竪穴住居カマド土層断面F-F'	南→
	4	2区29号竪穴住居柱穴P 4土層断面	南→		6	2区38号竪穴住居カマド煙道部	南西→
	5	2区29号竪穴住居柱穴P 5土層断面	南→		7	2区38号竪穴住居カマド煙道部断面	南→
	6	2区29号竪穴住居貯蔵穴土層断面	西→		8	2区38号竪穴住居カマド掘方全景	南西→

PL.101	1	2区38号竪穴住居カマド掘方土層断面F-F'	南西→	3	3区5号竪穴住居土層断面A-A' (22年度調査分)	北西→	
	2	2区38号竪穴住居カマド掘方土層断面H-H'	南→	4	3区5号竪穴住居土層断面B-B' (22年度調査分)	北東→	
	3	2区41号竪穴住居全景	南西→	5	3区5号竪穴住居掘方全景(22年度調査分)	北西→	
	4	2区41号竪穴住居遺物出土状態	南西→	6	3区5号竪穴住居貯蔵穴全景(22年度調査分)	北東→	
	5	2区41号竪穴住居遺物出土状態	南→	7	3区5号竪穴住居カマド全景(22年度調査分)	南西→	
	6	2区41号竪穴住居土層断面A-A'	南東→	8	3区5号竪穴住居カマド土層断面E-E' (22年度調査分)	南→	
	7	2区41号竪穴住居土層断面B-B'	南西→	PL.110	1	3区5号竪穴住居カマド土層断面F-F' (22年度調査分)	南→
	8	2区41号竪穴住居柱穴P 1 全景	南西→	2	3区5号竪穴住居カマド掘方全景(22年度調査分)	南西→	
PL.102	1	2区41号竪穴住居柱穴P 1 土層断面E-E'	南西→	3	3区5号竪穴住居全景(25年度調査分)	北西→	
	2	2区41号竪穴住居柱穴P 2 全景	南西→	4	3区5号竪穴住居掘方全景(25年度調査分)	北→	
	3	2区41号竪穴住居柱穴P 2 土層断面	南西→	5	1区1号竪穴住居全景	北→	
	4	2区41号竪穴住居柱穴P 3 全景	南西→	6	1区1号竪穴住居遺物出土状態	北→	
	5	2区41号竪穴住居柱穴P 3 土層断面	南西→	7	1区1号竪穴住居土層断面A-A'	北→	
	6	2区41号竪穴住居柱穴P 4 全景	南西→	8	1区1号竪穴住居土層断面A-A'	北→	
	7	2区41号竪穴住居柱穴P 4 土層断面F-F'	南西→	PL.111	1	1区1号竪穴住居土層断面B-B'	東→
	8	2区41号竪穴住居柱穴P 5 全景	南西→	2	1区1号竪穴住居掘方全景	北→	
PL.103	1	2区41号竪穴住居柱穴P 5 土層断面G-G'	南西→	3	1区1号竪穴住居柱穴P 1 土層断面C-C'	西→	
	2	2区41号竪穴住居貯蔵穴土層断面J-J'	西→	4	1区1号竪穴住居柱穴P 2 土層断面D-D'	西→	
	3	2区41号竪穴住居カマド全景	南西→	5	1区2号竪穴住居全景	南西→	
	4	2区41号竪穴住居カマド土層断面K-K'	南西→	6	1区2号竪穴住居全景	北西→	
	5	2区41号竪穴住居カマド掘方全景	南西→	7	1区2号竪穴住居土層断面A-A'	東→	
	6	2区41号竪穴住居カマド掘方土層断面L-L'	南西→	8	1区2号竪穴住居土層断面A-A'	東→	
	7	2区42号竪穴住居全景	南西→	PL.112	1	1区2号竪穴住居掘方全景	東→
	8	2区42号竪穴住居遺物出土状態	南西→	2	1区3号竪穴住居全景	東→	
PL.104	1	2区42号竪穴住居土層断面A-A'	南西→	3	1区3号竪穴住居土層断面A-A'	北→	
	2	2区42号竪穴住居掘方全景	南西→	4	1区3号竪穴住居柱穴P 1 全景	東→	
	3	2区42号竪穴住居カマド全景	南西→	5	1区3号竪穴住居柱穴P 2 全景	南→	
	4	2区42号竪穴住居カマド土層断面B-B'	南→	6	1区3号竪穴住居炉全景	東→	
	5	2区42号竪穴住居カマド土層断面C-C'	西→	7	1区4号竪穴住居全景	東→	
	6	2区42号竪穴住居カマド掘方全景	南西→	8	1区4号竪穴住居遺物出土状態	南東→	
	7	2区43号竪穴住居全景	南西→	PL.113	1	1区4号竪穴住居遺物出土状態	北東→
	8	2区43号竪穴住居遺物出土状態	南西→	2	1区4号竪穴住居遺物出土状態	北東→	
PL.105	1	2区43号竪穴住居掘方全景	南西→	3	1区4号竪穴住居土層断面A-A'	東→	
	2	2区43号竪穴住居床下土坑1 土層断面	南→	4	1区4号竪穴住居土層断面B-B'	西→	
	3	2区43号竪穴住居床下土坑2 土層断面	南→	5	1区4号竪穴住居貯蔵穴1 全景	東→	
	4	2区43号竪穴住居床下土坑4 土層断面	南→	6	1区4号竪穴住居貯蔵穴1 土層断面F-F'	東→	
	5	2区43号竪穴住居床下土坑5 土層断面	東→	7	1区4号竪穴住居貯蔵穴2 土層断面G-G'	北東→	
	6	2区43号竪穴住居柱穴P 1 土層断面F-F'	南→	8	1区4号竪穴住居炉跡全景	東→	
	7	2区43号竪穴住居柱穴P 2 土層断面	南→	PL.114	1	1区5号竪穴住居全景	北東→
	8	2区43号竪穴住居柱穴P 3 土層断面G-G'	南西→	2	1区5号竪穴住居遺物出土状態	北東→	
PL.106	1	2区43号竪穴住居柱穴P 4 土層断面	南→	3	1区5号竪穴住居遺物出土状態	北東→	
	2	2区43号竪穴住居貯蔵穴1 土層断面H-H'	北東→	4	1区5号竪穴住居土層断面A-A'	南→	
	3	2区43号竪穴住居貯蔵穴2 土層断面I-I'	南→	5	1区5号竪穴住居土層断面B-B'	東→	
	4	2区43号竪穴住居カマド1 全景	南西→	6	1区5号竪穴住居炉2 土層断面E-E'	北→	
	5	2区43号竪穴住居カマド1 土層断面J-J'	南→	7	1区6号竪穴住居全景	南→	
	6	2区43号竪穴住居カマド1 掘方全景	南西→	8	1区6号竪穴住居遺物出土状態	東→	
	7	2区43号竪穴住居カマド2 全景	南西→	PL.115	1	1区6号竪穴住居土層断面A-A'	南→
	8	2区43号竪穴住居カマド2 遺物出土状態	南西→	2	1区6号竪穴住居土層断面B-B'	東→	
PL.107	1	2区43号竪穴住居カマド2 土層断面K-K'	南→	3	1区6号竪穴住居貯蔵穴土層断面	東→	
	2	2区43号竪穴住居カマド2 土層断面M-M'	南西→	4	1区6号竪穴住居炉跡発掘前	東→	
	3	2区43号竪穴住居カマド2 掘方土層断面L-L'	南西→	5	1区7号竪穴住居全景	西→	
	4	2区43号竪穴住居カマド2 掘方全景	南→	6	1区7号竪穴住居土層断面A-A'	北→	
	5	2区46号竪穴住居全景	北→	7	1区8号竪穴住居全景(21年度調査分)	西→	
	6	2区46号竪穴住居遺物出土状態	南西→	8	1区8号竪穴住居全景(25年度調査分)	西→	
	7	2区47号竪穴住居全景	北→	PL.116	1	1区11号竪穴住居全景	東→
	8	2区47号竪穴住居遺物出土状態	北→	2	1区11号竪穴住居遺物出土状態	東→	
PL.108	1	2区47号竪穴住居土層断面A-A'	南西→	3	1区11号竪穴住居遺物出土状態	北→	
	2	2区47号竪穴住居掘方全景	北→	4	1区11号竪穴住居土層断面A-A'	東→	
	3	2区47号竪穴住居カマド全景	北西→	5	1区11号竪穴住居炉全景	南→	
	4	2区47号竪穴住居カマド遺物出土状態	北西→	6	1区11号竪穴住居炉土層断面D-D'	南→	
	5	2区47号竪穴住居カマド土層断面B-B'	南→	7	1区13号竪穴住居全景	東→	
	6	2区47号竪穴住居カマド土層断面C-C'	北西→	8	1区13号竪穴住居遺物出土状態	南東→	
	7	2区48号竪穴住居全景	南西→	PL.117	1	1区13号竪穴住居遺物出土状態	南西→
	8	2区48号竪穴住居土層断面A-A'	南西→	2	1区13号竪穴住居土層断面A-A'	南→	
PL.109	1	3区5号竪穴住居全景(22年度調査分)	南西→	3	1区13号竪穴住居土層断面B-B'	東→	
	2	3区5号竪穴住居遺物出土状態(22年度調査分)	南西→	4	1区13号竪穴住居柱穴P 1 土層断面	南西→	

	5	1区13号竪穴住居柱穴P 2土層断面	南西→		7	3区1号掘立柱建物全景	垂直
	6	1区13号竪穴住居柱穴P 3土層断面	西→		8	2区2・3号柵全景	垂直
	7	1区13号竪穴住居柱穴P 4土層断面	西→	PL.126	1	1区1号墳検出状態	北東→
	8	1区13号竪穴住居跡掘方全景	北東→		2	1区1号墳検出状態	南東→
PL.118	1	1区14号竪穴住居全景	南→		3	1区1号墳検出状態	北西→
	2	1区14号竪穴住居遺物出土状態	南→		4	1区1号墳中央部拡大	西→
	3	1区14号竪穴住居土層断面A-A'	南西→		5	1区1号墳礫床除去	北東→
	4	1区14号竪穴住居跡掘方全景	西→		6	1区1号墳掘方検出状態	北東→
	5	1区15号竪穴住居全景(21年度調査分)	北→	PL.127	1	1区1号墳土層断面	北東→
	6	1区15号竪穴住居全景(25年度調査分)	西→		2	1区2号墳検出状態	南→
	7	1区15号竪穴住居遺物出土状態(21年度調査分)	西→		2	1区2号墳検出状態	東→
	8	1区15号竪穴住居遺物出土状態(21年度調査分)	西→		3	1区2号墳検出状態	東→
PL.119	1	1区15号竪穴住居土層断面B-B'(21年度調査分)	西→		4	1区2号墳検出状態	北→
	2	1区15号竪穴住居土層断面A-A'(25年度調査分)	北→		5	1区2号墳礫床除去	北→
	3	1区15号竪穴住居柱穴P 2土層断面D-D'(21年度調査分)	南→		6	1区2号墳礫床除去	東→
	4	1区15号竪穴住居柱穴P 3土層断面E-E'(21年度調査分)	南→		7	1区2号墳掘方検出状態	東→
	5	1区15号竪穴住居柱穴P 1土層断面C-C'(25年度調査分)	南→	PL.128	1	1区3号墳検出状態	北東→
	6	1区15号竪穴住居貯蔵穴土層断面F-F'(21年度調査分)	南→		2	1区3号墳検出状態	北西→
	7	1区15号竪穴住居跡掘方全景(25年度調査分)	東→		3	1区3号墳検出状態	南西→
	8	1区15号竪穴住居跡掘方土層断面G-G'(25年度調査分)	東→		4	1区3号墳遺物出土状態	西→
PL.120	1	1区25号竪穴住居全景	西→		5	1区3号墳礫床除去	東→
	2	1区25号竪穴住居土層断面A-A'	南→		6	1区3号墳掘方検出状態	北東→
	3	1区25号竪穴住居柱穴P 1土層断面	南→		7	1区3号墳土層断面C-C'	北東→
	4	1区25号竪穴住居柱穴P 2土層断面	南→	PL.129	1	1区4号墳検出状態	北東→
	5	1区25号竪穴住居跡掘方全景	南→		2	1区4号墳検出状態	北西→
	6	1区26号竪穴住居全景	西→		3	1区4号墳中央部拡大	北西→
	7	1区26号竪穴住居遺物出土状態	西→		4	1区4号墳2面目全景	北東→
	8	1区26号竪穴住居遺物出土状態	西→		5	1区4号墳礫床除去	北西→
PL.121	1	1区26号竪穴住居跡掘方土層断面D-D'	西→		6	1区4号墳裏込め	北東→
	2	1区26号竪穴住居跡掘方土層断面E-E'	西→		7	1区4号墳遺物出土状態	北西→
	3	1区26号竪穴住居跡掘方掘方全景	東→	PL.130	1	1区4号墳検出状態	北西→
	4	1区29号竪穴住居全景	西→		2	1区4号墳土層断面C-C'	北東→
	5	1区29号竪穴住居土層断面A-A'	東→		3	1区5号墳検出状態	北東→
	6	1区29号竪穴住居土層断面B-B'	南→		4	1区5号墳床面検出状態	北東→
	7	1区29号竪穴住居跡掘方全景	北→		5	1区5号墳石室床面状態	北東→
	8	1区29号竪穴住居跡掘方土層断面C-C'	東→		6	1区5号墳石室検出状態	北東→
PL.122	1	2区8号竪穴住居全景	北西→		7	1区5号墳石室床面状態	北→
	2	2区8号竪穴住居遺物出土状態	南東→	PL.131	1	1区5号墳西側側壁状態	東→
	3	2区8号竪穴住居遺物出土状態	東→		2	1区5号墳遺物出土状態	東→
	4	2区8号竪穴住居土層断面A-A'	西→		3	1区5号墳舗石検出状態	北東→
	5	2区8号竪穴住居土層断面B-B'	北西→		4	1区5号墳土層断面	北→
	6	2区8号竪穴住居跡掘方全景	南→		5	1区5号墳掘方検出状態	北東→
	7	2区9号竪穴住居遺物出土状態	南→		6	1区5号墳遠景	北東→
	8	2区9号竪穴住居遺物出土状態	南西→		7	1区5号墳周堀痕跡	北→
PL.123	1	2区9号竪穴住居土層断面A-A'	西→		8	1区6号墳検出状態	南→
	2	2区9号竪穴住居土層断面B-B'	北→	PL.132	1	1区6号墳土層断面A-A'西側周掘	南→
	3	2区9号竪穴住居重複部土層断面	北西→		2	1区6号墳土層断面A-A'東側周掘	南→
	4	2区9号竪穴住居跡掘方全景	南→		3	1区6号墳土層断面B-B'北側周掘	東→
	5	2区23号竪穴住居全景	西→		4	1区6号墳土層断面B-B'南側周掘	東→
	6	2区23号竪穴住居遺物出土状態	北→		5	1区6号墳遺物出土状態	北→
	7	2区23号竪穴住居遺物出土状態	北→		6	1区6号墳遺物出土状態	南→
	8	2区23号竪穴住居跡掘方全景	西→		7	1区6号墳遺物出土状態	南→
PL.124	1	2区28号竪穴住居全景	南西→		8	2区1号粘土採掘坑全景	南東→
	2	2区28号竪穴住居遺物出土状態	南西→	PL.133	1	2区1号粘土採掘坑全景	北西→
	3	2区28号竪穴住居遺物出土状態	南西→		2	2区1号粘土採掘坑土層断面A-A'	北東→
	4	2区28号竪穴住居土層断面A-A'	東→		3	2区1号粘土採掘坑土層断面B-B'	西→
	5	2区28号竪穴住居土層断面B-B'	南→		4	1区1号土坑全景	東→
	6	2区28号竪穴住居貯蔵穴1土層断面D-D'	南→		5	1区1号土坑全景	南→
	7	2区28号竪穴住居貯蔵穴2土層断面E-E'	南→		6	1区1号土坑土層断面A-A'	西→
	8	2区28号竪穴住居跡掘方全景	北西→		7	1区2号土坑全景	北→
PL.125	1	2区1号掘立柱建物全景	南西→		8	1区2号土坑土層断面A-A'	南→
	2	2区2号掘立柱建物全景	南→	PL.134	1	1区3号土坑全景	北→
	3	2区3号掘立柱建物全景	東→		2	1区3号土坑土層断面A-A'	南→
	4	2区4号掘立柱建物全景	西→		3	2区1号土坑全景	東→
	5	2区5号掘立柱建物全景	南→		4	2区1号土坑土層断面A-A'	南→
	6	2区6号掘立柱建物全景	南→		5	2区2号土坑全景	南→

	6	2区2号土坑土層断面A-A'	南→		3	3区49号ピット土層断面	西→
	7	3区1号土坑土層断面A-A'	南→		4	3区50号ピット土層断面	西→
	8	3区2号土坑土層断面A-A'	南西→		5	3区53号ピット土層断面	西→
PL.135	1	3区3号土坑土層断面A-A'	南東→		6	3区52号ピット土層断面	西→
	2	3区4号土坑土層断面A-A'	西→		7	3区54号ピット土層断面	南西→
	3	3区5号土坑土層断面A-A'	南西→		8	3区56号ピット土層断面	北西→
	4	3区8号土坑土層断面A-A'	西→		9	3区55号ピット土層断面	南西→
	5	3区9号土坑土層断面A-A'	東→		10	3区61号ピット土層断面	南西→
	6	3区10号土坑土層断面A-A'	南→		11	3区95号ピット土層断面	南西→
	7	3区11号土坑全景	南西→		12	3区59号ピット土層断面	南西→
	8	3区11号土坑土層断面A-A'	南西→		13	3区57・58号ピット土層断面	南西→
PL.136	1	3区12号土坑全景	南→		14	3区62号ピット土層断面	西→
	2	3区12号土坑土層断面A-A'	南→		15	3区63号ピット土層断面	南→
	3	3区15号土坑全景	南→	PL.141	1	3区65号ピット土層断面	南→
	4	3区16号土坑全景	南→		2	3区67号ピット土層断面	北西→
	5	4区1号土坑全景	南→		3	3区68号ピット土層断面	南→
	6	4区1号土坑土層断面A-A'	西→		4	3区69号ピット土層断面	北西→
	7	4区2号土坑全景	北→		5	3区70号ピット土層断面	南西→
	8	4区2号土坑土層断面A-A'	西→		6	3区71号ピット土層断面	南→
PL.137	1	2区24号ピット土層断面	南西→		7	3区72号ピット土層断面	西→
	2	2区23号ピット土層断面	南→		8	3区73号ピット土層断面	南→
	3	2区22号ピット土層断面	南→		9	3区74号ピット土層断面	南→
	4	2区30号ピット土層断面	南西→		10	3区75号ピット土層断面	北西→
	5	2区43号ピット土層断面	西→		11	3区76号ピット土層断面	南→
	6	2区35号ピット土層断面	南西→		12	3区77号ピット土層断面	南→
	7	3区1号ピット土層断面	西→		13	3区79号ピット土層断面	南→
	8	3区4号ピット土層断面	南→		14	3区78号ピット土層断面	西→
	9	3区14号ピット土層断面	西→		15	3区80号ピット土層断面	西→
	10	3区13号ピット土層断面	西→	PL.142	1	3区81号ピット土層断面	南西→
	11	3区12号ピット土層断面	南→		2	3区83号ピット土層断面	南→
	12	3区8号ピット土層断面	西→		3	3区84・85号ピット土層断面	西→
	13	3区93号ピット土層断面	西→		4	3区86号ピット土層断面	南東→
	14	3区7号ピット土層断面	南西→		5	3区87号ピット土層断面	南東→
	15	3区5号ピット土層断面	西→		6	3区88号ピット土層断面	南西→
PL.138	1	3区92号ピット土層断面	西→		7	3区89号ピット土層断面	南→
	2	3区11号ピット土層断面	南西→		8	3区90号ピット土層断面	南→
	3	3区10号ピット土層断面	南→		9	3区91号ピット土層断面	北→
	4	3区9号ピット土層断面	南→		10	3区94号ピット土層断面	南東→
	5	3区17号ピット土層断面	南→		11	3区97号ピット土層断面	西→
	6	3区16号ピット土層断面	南西→		12	3区98号ピット土層断面	南→
	7	3区15号ピット土層断面	南西→		13	3区99号ピット土層断面	西→
	8	3区18号ピット土層断面	南→		14	3区100号ピット土層断面	西→
	9	3区19号ピット土層断面	南→		15	3区101号ピット土層断面	南→
	10	3区21号ピット土層断面	南西→	PL.143	1	3区102号ピット土層断面	南→
	11	3区20号ピット土層断面	南西→		2	3区103号ピット土層断面	南→
	12	3区22号ピット土層断面	南→		3	3区104号ピット土層断面	南→
	13	3区23号ピット土層断面	東→		4	3区105号ピット土層断面	南→
	14	3区24号ピット土層断面	南→		5	3区108号ピット土層断面	南→
	15	3区25号ピット土層断面	南→		6	3区110号ピット土層断面	南→
PL.139	1	3区28号ピット土層断面	南西→		7	3区111号ピット土層断面	南西→
	2	3区26号ピット土層断面	南東→		8	3区113号ピット土層断面	南→
	3	3区32号ピット土層断面	南西→		9	3区114号ピット土層断面	南→
	4	3区33号ピット土層断面	南西→		10	3区115号ピット土層断面	南→
	5	3区36号ピット土層断面	南→		11	3区116号ピット土層断面	南→
	6	3区37号ピット土層断面	西→		12	3区109号ピット土層断面	南→
	7	3区38号ピット土層断面	南西→		13	3区117号ピット土層断面	南→
	8	3区39号ピット土層断面	南→		14	3区118号ピット土層断面	南→
	9	3区40号ピット土層断面	南西→		15	3区119号ピット土層断面	南西→
	10	3区41号ピット土層断面	南西→	PL.144	1	1区南西端埋没谷全景	北西→
	11	3区42号ピット土層断面	西→		2	1区南西端埋没谷部分	北西→
	12	3区43号ピット土層断面	西→		3	1区南西端埋没谷部分	北西→
	13	3区44号ピット土層断面	南西→		4	2区南西端埋没谷全景	垂直
	14	3区45号ピット土層断面	南西→		5	2区南西端埋没谷土層断面A-A'	北→
	15	3区46号ピット土層断面	西→		6	2区南西端埋没谷土層断面	南→
PL.140	1	3区47号ピット土層断面	西→	PL.145	1	2区2面水田全景	西→
	2	3区48号ピット土層断面	南→		2	2区2面水田全景	垂直

PL.146	1	2区2面水田7・10号溝部分 北東→	PL.157	4区7号竪穴住居、1区9号竪穴住居、1区10号竪穴住居出土遺物
	2	2区2面水田7・10号溝部分 南東→	PL.158	1区10号竪穴住居、1区16号竪穴住居出土遺物
	3	2区2面水田7・8・9・10号溝部分 北→	PL.159	1区17号竪穴住居出土遺物
	4	2区2面水田7・9・10号溝部分 南→	PL.160	1区18号竪穴住居、1区19号竪穴住居、1区20号竪穴住居出土遺物
	5	2区2面水田7・8・9・10号溝部分 北→		
	6	2区2面水田部分 南→	PL.161	1区20号竪穴住居、1区22号竪穴住居、1区23号竪穴住居、1区24号竪穴住居出土遺物
	7	2区2面水田7・10号溝部分 南→		
	8	2区2面水田部分 北西→	PL.162	1区24号竪穴住居、1区27号竪穴住居出土遺物
PL.147	1	2区2面水田7・9・10号溝部分 北→	PL.163	1区27号竪穴住居出土遺物
	2	2区2面水田9号溝部分 北→	PL.164	1区27号竪穴住居、1区28号竪穴住居出土遺物
	3	2区2面水田7～10号溝土層断面B-B' 南西→	PL.165	1区30号竪穴住居、2区1号竪穴住居、2区3号竪穴住居、2区4号竪穴住居、2区11号竪穴住居出土遺物
	4	2区2面水田7～10号溝土層断面C-C' 南西→	PL.166	2区11号竪穴住居、2区13号竪穴住居、2区14号竪穴住居出土遺物
	5	2区2面水田7・9・10号溝土層断面D-D' 南西→		
	6	2区2面水田7～10号溝土層断面 南西→	PL.167	2区14号竪穴住居、2区15号竪穴住居、2区19号竪穴住居出土遺物
	7	2区2面水田D-D' 7号溝部分土層断面 南西→	PL.168	2区20号竪穴住居、2区21号竪穴住居、2区22号竪穴住居、2区24号竪穴住居、2区25号竪穴住居出土遺物
PL.148	1	2区3面水田全景 垂直	PL.169	2区25号竪穴住居、2区26号竪穴住居、2区27号竪穴住居出土遺物
	2	2区3面水田全景 南西→	PL.170	2区29号竪穴住居、2区34号竪穴住居、2区35号竪穴住居、2区36号竪穴住居出土遺物
	3	2区3面水田12号溝土層断面 南西→	PL.171	2区37号竪穴住居、2区38号竪穴住居、2区41号竪穴住居出土遺物
	4	2区3面水田南壁土層断面 北→	PL.172	2区42号竪穴住居、2区43号竪穴住居出土遺物
	5	2区3面水田11号溝土層断面 北東→	PL.173	2区43号竪穴住居、2区47号竪穴住居、3区5号竪穴住居、1区1号竪穴住居、1区2号竪穴住居、1区3号竪穴住居出土遺物
PL.149	1	1区1号畠全景 東→	PL.174	1区3号竪穴住居、1区4号竪穴住居出土遺物
	2	1区1号畠全景 北→	PL.175	1区4号竪穴住居、1区5号竪穴住居出土遺物
	3	1区2号畠全景 南東→	PL.176	1区5号竪穴住居、1区6号竪穴住居、1区8号竪穴住居、1区11号竪穴住居、1区13号竪穴住居出土遺物
	4	1区2号畠土層断面A-A' 南東→	PL.177	1区13号竪穴住居、1区14号竪穴住居、1区15号竪穴住居出土遺物
	5	1区3号畠全景 南東→	PL.178	1区15号竪穴住居、1区26号竪穴住居出土遺物
	6	1区3号畠全景 北東→	PL.179	1区29号竪穴住居、2区8号竪穴住居出土遺物
	7	1区4号畠全景 北東→	PL.180	2区9号竪穴住居、2区23号竪穴住居出土遺物
	8	1区5号畠全景 南→	PL.181	2区23号竪穴住居、2区28号竪穴住居、1区3号墳、1区5号墳、1区6号墳出土遺物
PL.150	1	1区5号畠全景 南→	PL.182	1区埋没谷、2区2面・3面水田、飛鳥～平安時代の遺構外、古墳時代前期～中期の遺構外、古墳時代後期の遺構外出土遺物
	2	1区6号畠全景 南→	PL.183	遺構外出土の弥生土器、遺構外出土の縄文土器
	3	1区6号畠全景 西→	PL.184	遺構外出土の縄文土器
	4	1区6号畠土層断面A-A' 南→	PL.185	遺構外出土の縄文土器
	5	3区1号畠全景 北→	PL.186	遺構外出土の縄文土器、遺構外出土の縄文石器
	6	3区1号畠全景 西→	PL.187	遺構外出土の縄文石器
	7	3区1号畠部分 北→	PL.188	遺構外出土の縄文石器、出土した旧石器
	8	3区1号畠土層断面A-A' 北→		
PL.151		2区1号土抗墓、2区2号土抗墓、2区3号土抗墓、2区4号土抗墓出土遺物		
PL.152		3区1号土抗墓、2区5号竪穴住居、2区6号竪穴住居、2区10号竪穴住居、2区18号竪穴住居出土遺物		
PL.153		2区32号竪穴住居、2区33号竪穴住居、2区39号竪穴住居出土遺物		
PL.154		3区1号竪穴住居、3区2号竪穴住居、3区3号竪穴住居、3区4号竪穴住居出土遺物		
PL.155		3区4号竪穴住居、3区6号竪穴住居、3区7号竪穴住居、3区8号竪穴住居出土遺物		
PL.156		3区9号竪穴住居、3区11号竪穴住居、4区1号竪穴住居、4区3号竪穴住居、4区4号竪穴住居、4区5号竪穴住居、4区6号竪穴住居出土遺物		

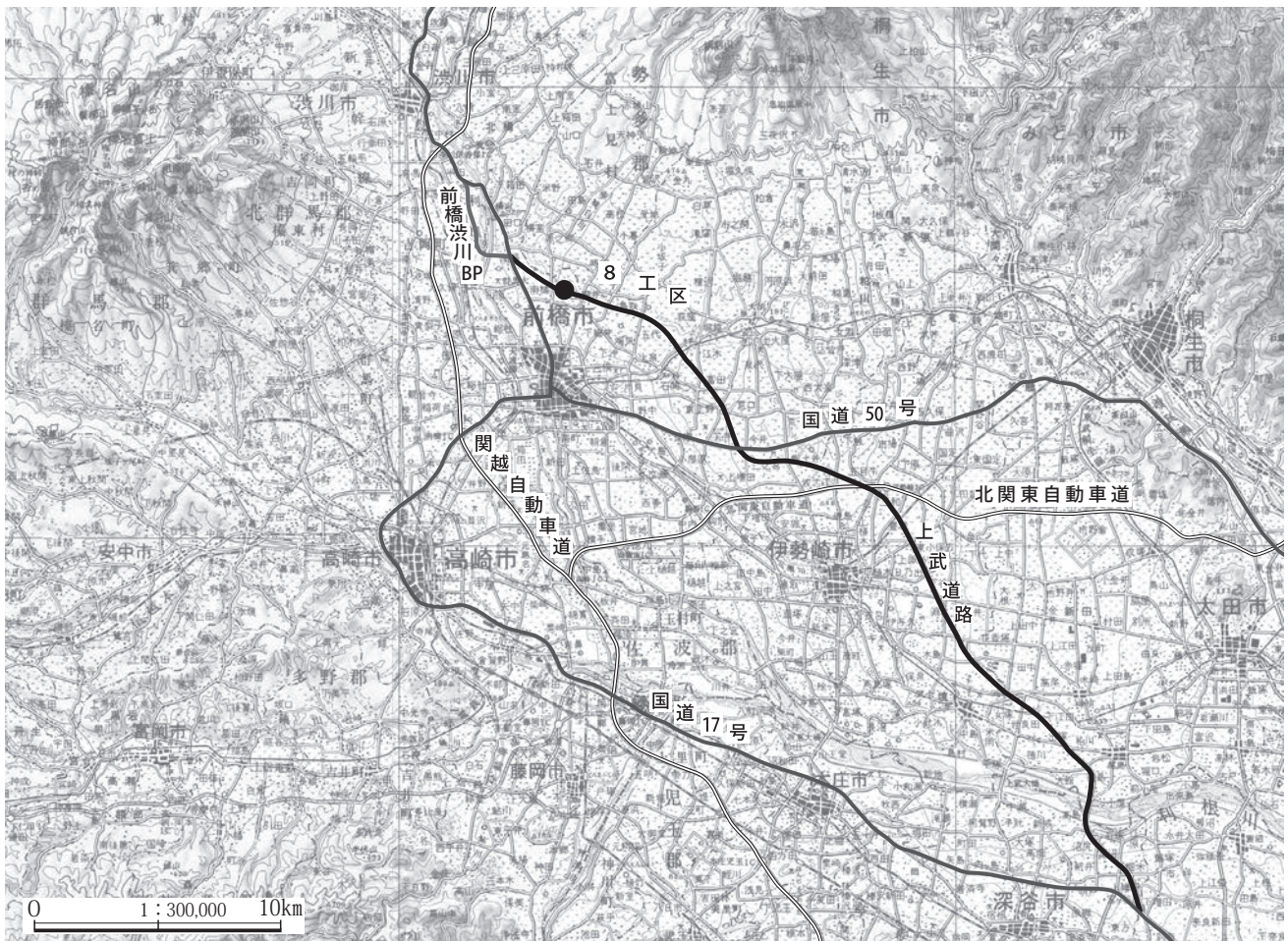
# 第1章 調査の経過

## 第1節 上武道路について

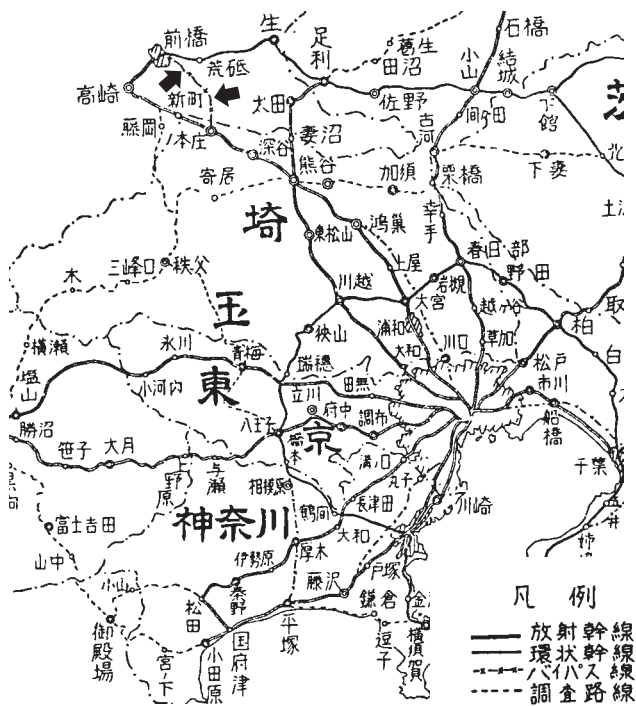
上武道路は一般国道17号の交通混雑の緩和と地域活性化を目的として計画された大規模バイパスで、埼玉県熊谷市西別府で深谷バイパスから分岐する地点から、群馬県前橋市田口町で一般国道17号線と交差し且つ前橋渋川バイパスに接続する地点までの延長約40.5kmの大規模バイパス道路である。また上武道路は、国に於いては平成10年に計画路線の指定を受けた地域高規格道路「熊谷渋川連絡道路」の一部区間であり、群馬県に於いては『幹線交通乗り入れ30分構想』の中で主要幹線のひとつに位置付けられている。

そもそも上武道路建設の企画は、首都圏整備法(昭和31年法律第83号)に基づいて設置された首都圏整備委員

会での昭和31・32年の検討にまで遡る。同委員会ではバイパス線に関する検討も行っていたが、一般的な市街地をバイパスする路線とは別に「大きく幾つかのバイパス線を考えて」おり、このうち首都から放射線に延びるバイパスとして、第3京浜線と共に「1級国道17号線について前橋、本庄間のバイパス」が取り上げられている(首都圏整備委員会1958)。この時点で「上武道路」という呼称があったか否かの確認はできていないが、前橋市街地から(伊勢崎を經由し)本庄市街地を結ぶ東に張り出す弧状の想定路線が「首都圏連絡幹線道路網図」に示されている(第2図)。その後、昭和37年までの間に特段の動きはなかったが、昭和39年3月27日付の『首都圏整備委員会告示第1号』でその整備が告示され、昭和44年1月の『首都圏整備』(首都圏整備委員会1969)に附された「首都圏



第1図 上武道路と遺跡地の位置図(国土地理院発行1/200,000地勢図「宇都宮」平成18年発行を縮小して使用)



第2図 首都圏連絡幹線道路と上武道路予定路線(←)  
首都圏整備委員会『首都圏整備』(1959)に加筆

整備の長期展望」に「上武国道」の呼称と整備が明記されるに至った。

上武道路の建設は昭和45年度に着手され、平成4年2月までには起点から国道50号までの延長27.4km区間が供用開始された。その後、供用区間が延伸するとともに交通量は増大し、平成元年度に着手された国道50号から前橋市上泉町までの4.9km区間(7工区)が、平成20年6月に暫定2車線で供用開始された。

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)が対象とする8工区は、平成17年度に事業が着手され、平成24年度に主要地方道前橋赤城線までの4.7km区間が暫定開通し、全線開通までの最終3.5km区間の発掘調査と工事が進められている。

## 第2節 上武道路と埋蔵文化財

上武道路が通過する地域は、群馬県内でも有数の埋蔵文化財包蔵地が多く分布する地域である。群馬県は昭和48年に文化財保護室を文化財保護課に拡充して調査にあたり、昭和53年度からは財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(現公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)が調査事業を受託して、現在に至っている。

上武道路の建設事業は起点側から段階的に進められてきた。その工程は概ね①埼玉県境から国道50号まで、②国道50号から前橋市上泉町まで、③前橋市上泉町から前橋市田口町の現国道17号までの3区間に分けることができる。

埼玉県境から国道50号までの区間では、35カ所の遺跡の発掘調査が行われ、調査の成果は26冊の発掘調査報告書として刊行され、平成7年には冊子総集編『地域をつなぐ 未来へつなぐー上武道路埋蔵文化財22年の軌跡ー』が刊行された。この総集編では平野部での発掘調査や「芳郷」の墨書土器出土で話題となった古代勢多郡の芳賀郷、中世「あずま道」など、この地域の歴史的課題に対する検討の結果がまとめられており、今後取り組むべき考古学的課題も特記されている。

国道50号から前橋市上泉町までは7工区にあたる。ここでは17カ所の遺跡が発掘調査の対象となり、16冊の発掘調査報告書が刊行されている。この区間の発掘調査では、荒砥川の東で検出された古墳時代の集落が周辺の今井神社古墳や大室古墳群の築造と関連する可能性があること、荒砥前田Ⅱ遺跡では県内でも希少な巴形銅器破片が出土したこと、女堀の調査では浅間粕川テフラが確認されたことで開削年代を特定する手掛かりが得られたこと等が成果としてあげられている。荒砥川の西では、帯状低地に分断された台地ごとに縄文時代前期の集落が立地し、旧石器時代の遺物も暗色帯および上位の複数の土層から出土したこと等が注目されている。

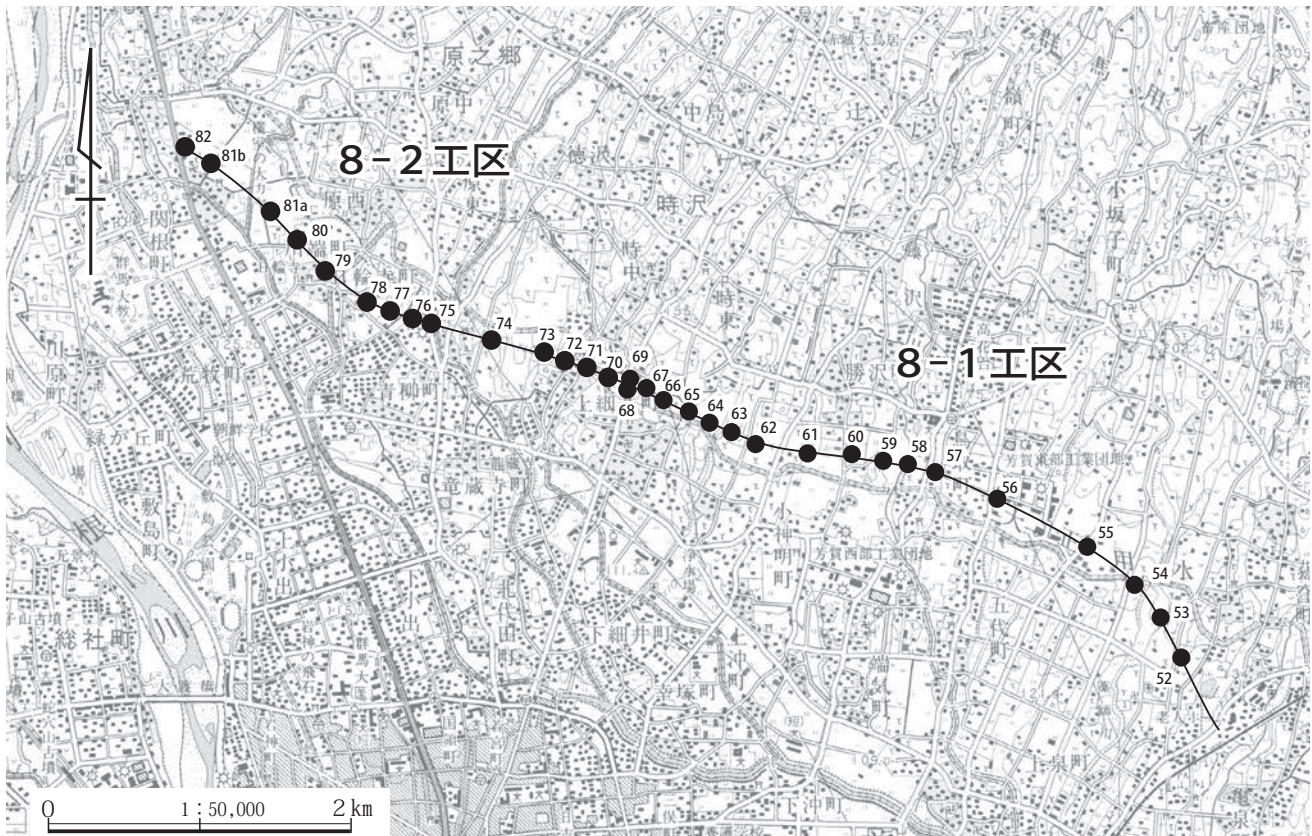
前橋市上泉町から現国道17号までは8工区にあたり、31カ所の遺跡、約40万㎡が埋蔵文化財の調査対象となっている。工区名称は県道前橋赤城線を境界にして東が8-1工区、西が8-2工区と呼ばれている。調査は、平成18年度に8-1工区の東端から始められ、工事工程との調整により、平成23年度からは8-2工区の西端である終点の田口下田尻遺跡の調査も開始された。

8-1工区は、これまでと同様に旧石器時代や縄文時代の遺構・遺物が多いのに対して、8-2工区では縄文時代より新しい遺跡の存在が明らかになった。遺跡の実態が未知数であった赤城白川流域の白川扇状地では、予想外の縄文時代の埋没谷や旧石器までの遺物が確認された。また広瀬桃ノ木低地帯では最西端の田口下田尻遺跡で大集落が調査され、従来の広瀬川低地帯の遺跡分布の



第1表 上武道路8工区遺跡一覧表

J K No.	遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	調査年度	報告書 刊行年度
52b	上泉唐ノ堀遺跡	前橋市 上泉町	00774	平成18・19・20年度	平成23年度
53	上泉新田塚遺跡群	前橋市 上泉町	00775	平成18・19・20年度	平成23年度
54	上泉武田遺跡	前橋市 上泉町	00773	平成19年度	平成24年度
55	五代砂留遺跡群	前橋市 五代町	00772	平成19年度	平成23年度
56	芳賀東部団地遺跡	前橋市 五代町・鳥取町	00357	平成18・19・20年度	平成24年度
57	鳥取松合下遺跡	前橋市 鳥取町	00776	平成20年度	平成23年度
58	胴城遺跡	前橋市 鳥取町	00041	平成19・20・21年度	
59	鳥取塚田遺跡	前橋市 勝沢町		調査除外	
60	堤遺跡	前橋市 勝沢町	00034	平成20年度	平成24年度
61	小神明勝沢境遺跡	前橋市 小神明町	00778	平成20年度	平成23年度
62	小神明富士塚遺跡	前橋市 小神明町・上細井町	00403	平成20・21年度	
63	東田之口遺跡	前橋市 上細井町	00125	平成20年度	平成23年度
64	丑子遺跡	前橋市 上細井町	00134	平成20年度	平成24年度
65	上細井五十嵐遺跡	前橋市 上細井町	00777	平成20・21年度	平成24年度
66	天王・東紺屋谷戸遺跡	前橋市 上細井町	00131	平成20・21年度	平成25年度
67		前橋市 富士見町	90094	平成20・21年度	
68		前橋市 上細井町	00798	平成21年度	平成24年度
69	上町・時沢西紺屋谷戸遺跡	前橋市 富士見町	90097	平成21年度	
70	王久保遺跡	前橋市 上細井町・富士見町	00794	平成21・24年度	平成24年度
71	新田上遺跡	前橋市 上細井町	00128	平成24年度	平成26年度
72	上細井中島遺跡	前橋市 上細井町	00787	平成21・24年度	平成25年度
73	上細井蟬山遺跡	前橋市 上細井町	00786	平成21・24年度	平成24年度
74	山王・柴遺跡群	前橋市 青柳町	00795	平成21・22・23・25年度	平成27年度
75	引切塚遺跡	前橋市 青柳町	00434	平成24年度	平成26年度
76	青柳宿上遺跡	前橋市 青柳町	00325	平成24年度	平成26年度
77	日輪寺諏訪前遺跡	前橋市 日輪寺町		調査除外	
78	諏訪遺跡	前橋市 日輪寺町	00144	調査除外	
79	川端根岸遺跡	前橋市 川端町	00807	平成24年度	
80	川端山下(道東)遺跡	前橋市 川端町	00808	平成24年度	
81a	関根細ヶ沢遺跡	前橋市 関根町	00802	平成24年度	平成26年度
81b	関根赤城遺跡	前橋市 関根町	00803	平成24年度	平成25年度
82	田口下田尻遺跡	前橋市 田口町	00804	平成23・25年度	平成27年度予定



第3図 上武道路8工区の遺跡(国土地理院1/50,000地形図「前橋」平成10年発行を使用)

理解を見直す資料が得られている。

これまで、群馬県内の上武道路関連で発掘調査を実施してきた遺跡には、Jが上武、Kが国道を指すJKを冠した遺跡略号が南側の起点から順次算用数字で付されている。8工区も、7工区最終番号JK52に続けてこの略号を付したが、工区を跨ぐJK52(上泉唐ノ堀遺跡)は7工区分にJK52a、8工区分にはJK52bを付けて区別した。またJK59(鳥取塚田遺跡)は水田遺構が想定されていたが、試掘調査で遺構の無いことが判明し、発掘調査対象から除外したものの略号は欠番としなかった。更に関根遺跡群は関根細ケ沢遺跡、関根赤城遺跡、田口下田尻遺跡に細分されたものの、田口下田尻遺跡を先行してJK82としたことから、関根細ケ沢遺跡にJK81a、関根赤城遺跡にJK81bと付した。

### 第3節 調査に至る経過

上武道路7工区の発掘調査は平成16年度末で終了した。その後平成16年度には国道17号の現道から西の前橋渋川バイパスが着工されたことから、8工区は、現に開通した部分と前橋渋川バイパスとの間に残された格好となり、早期着工を待ち望む声が一段と強まっていた。

8工区が建設に向けて動いたのは、平成18年度に入ってからである。国土交通省による路線測量、関係機関との調整や地元への協力要請を経て、用地取得等の工事着工準備が起点側から始まった。これまでの調査状況から埋蔵文化財の用地内での包蔵は明確であったため、埋蔵文化財の発掘調査実施のための調整がおこなわれた。

埋蔵文化財の発掘調査について実施に向けての協議が、国土交通省関東地方整備局長と群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で行われ、平成18年2月16日付で「一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)の実施に関する協定書」(以下、「協定書」という。)が三者の間で締結された。これによって、群馬県教育委員会の調整を経て、埋蔵文化財の発掘調査を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が受託することとなった。

協定書では、協定の適用区間、発掘調査の実施場所・対象面積が示され、平成18年10月1日～平成29年3月31日に発掘調査を完了させることが明記された。なお「協

定書」は、平成18年6月20日付で、調査期間開始を3カ月前倒しとする変更のための「変更協定書」が締結されて、現在に至っている。

また各遺跡が発掘調査に入る前には、調査範囲と調査面積の確定、調査期間や経費算定のため、群馬県教育委員会文化財保護課により、平成18年4・5月、同年8月、同年12月、平成19年8月、同年12月、平成21年1月、同年4月～5月、同年9月、平成22年12月、平成23年、同年8月、同年10月の13回(23年度末現在)に亘って、8工区の試掘調査が実施された。

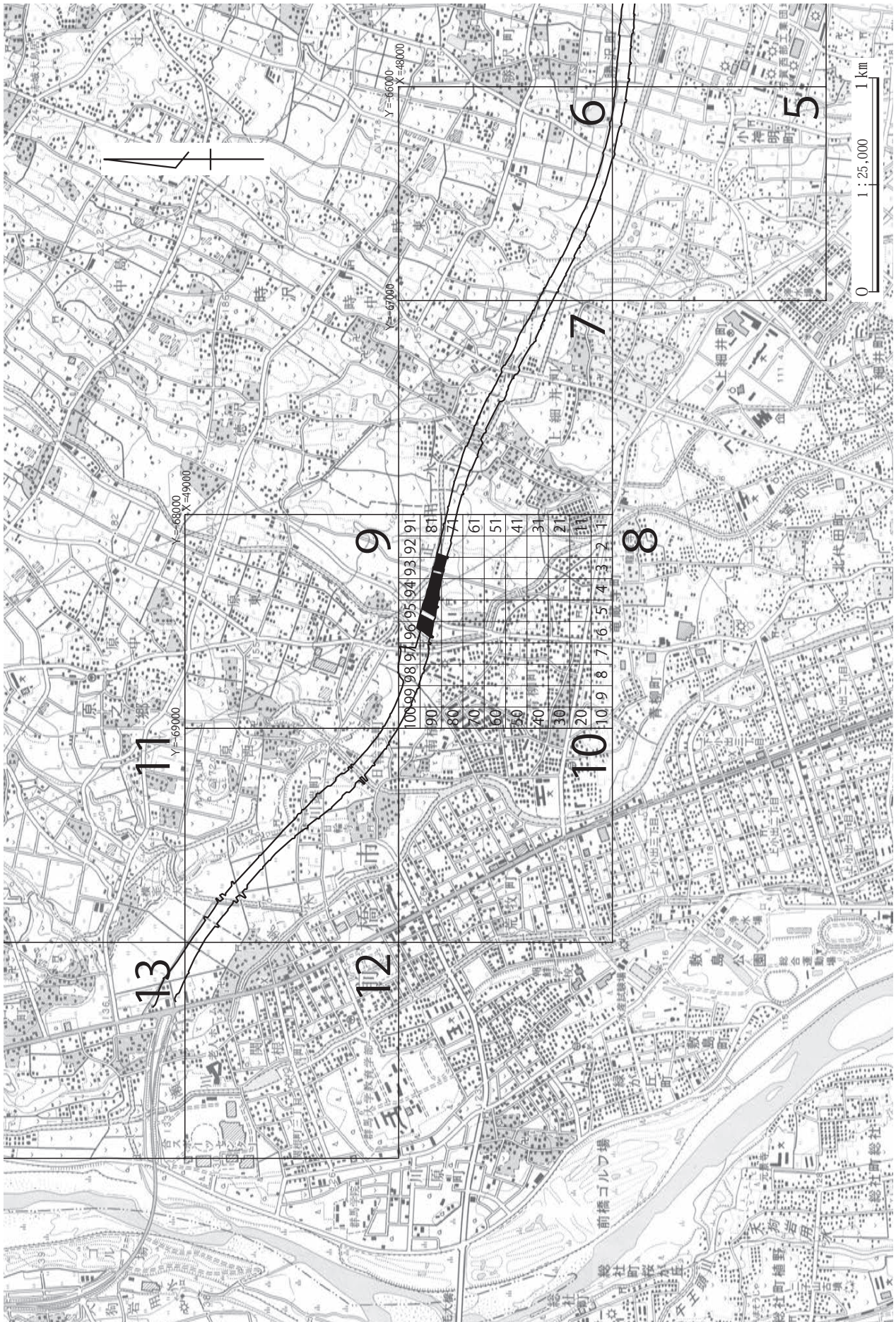
山王・柴遺跡群の試掘調査は、平成21年9月25日・29日におこなわれている。同年度の試掘調査は2カ所で実施されており、対象面積は14,000㎡と通知されている。それによると、本遺跡試掘対象地内には試掘溝6本が設定されており、本遺跡は「縄文時代および平安時代の集落跡が存在」するとされた。この試掘結果を受け、発掘調査実施に向けた調整が群馬県教育委員会より、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に山王・柴遺跡群の発掘実施計画書及び経費見積書の提出依頼がおこなわれた。これにより、国土交通省と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団との間で平成21年度の発掘調査の契約が締結され、平成22年1月4日調査開始に向けた発掘届等の事務処理が進められることとなった。

### 第4節 調査の方法と経過

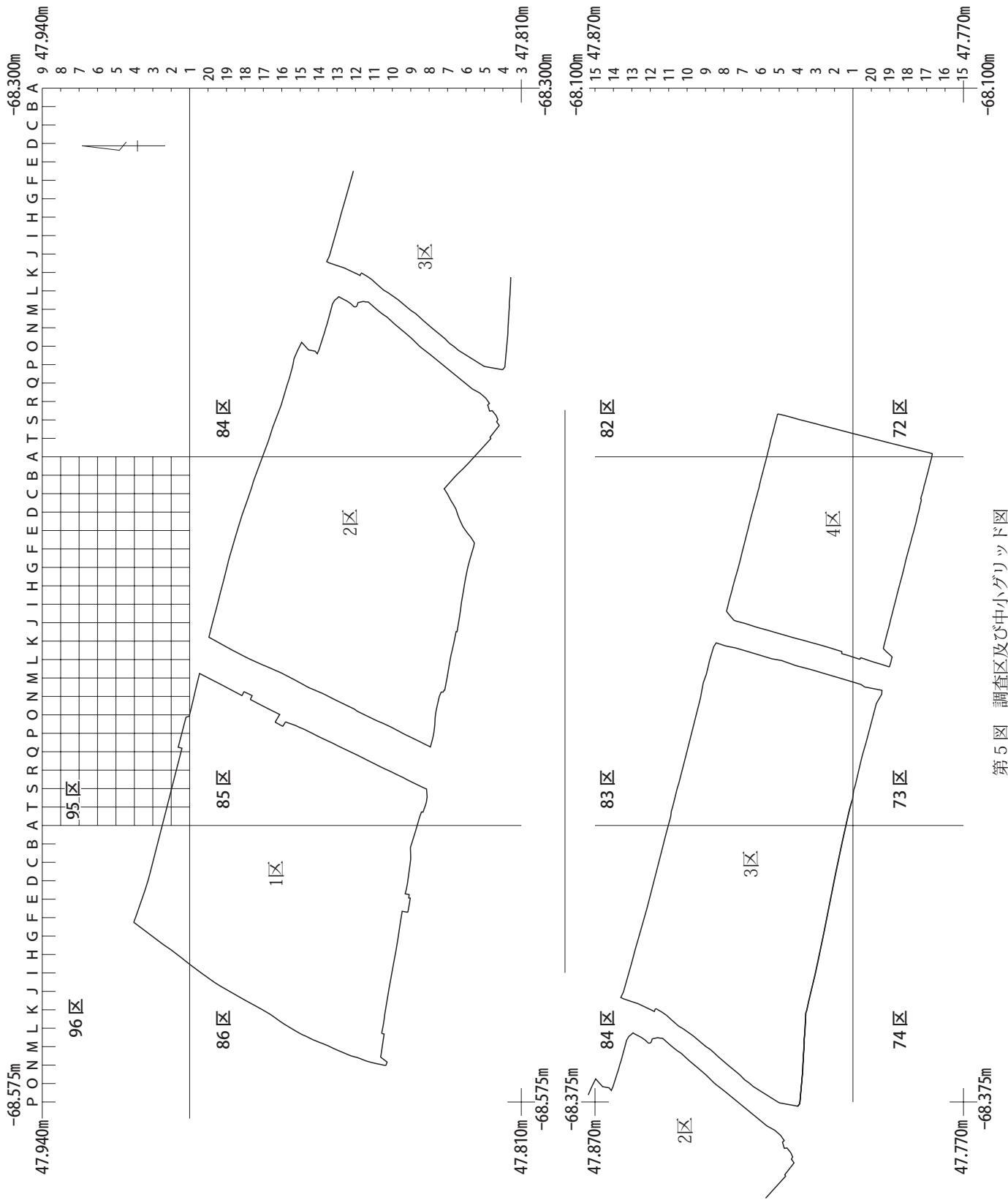
#### 1. グリッドの設定

グリッド設定は、国家座標「世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)」を用い、 $X=45,000$ 、 $Y=-63,000$ を起点として路線全域が網羅できるように設定されている。これは、上武道路8工区調査遺跡の統一仕様である。

統一仕様では、1km四方を大グリッド、地区と呼称している。8工区では、東から順に第5地区から13地区までが設定されている(第4図、紙幅の都合上5区から図示した)。各地区は100m四方に区切られ、これを中グリッドとして区と呼んでいる。それぞれの区には南東隅を基点として、西へ1区～10区、1区の北隣から西へ11区～20区、最北列に91区～100区と順に番号を付した。中グ



第4図 上武道路調査測量グリッド設定図(国土地理院1/25,000地形図「前橋」平成22年発行「渋川」平成14年発行を使用)



第5図 調査区及び中グリッド図

リッドはさらに5m四方に区切られ、400個の小グリッドに細分されている。小グリッドの呼称法については、区の南東隅を基点としてX軸に算用数字(1～20)、Y軸にアルファベット(A～T)を付け、83区A-1のように区番号-グリッド番号で表記した(第5図)。地区の表記については遺跡全体が8地区にあることから、グリッド表記としては省略した。

## 2. 調査区の設定

遺跡内の現道、用水路を境界として、4カ所の調査区に区分した。調査区名は遺跡西側の赤城白川寄りから東に向かい1区、2区、3区、4区とした。

発掘調査時には、3区については平成22年度に調査した北半分を3-1区と、平成23年度に調査した南半分を3-2区と呼称して調査していたが、本報告ではこれをまとめ3区として報告することとした。

## 3. 遺跡略号

第1章2節で述べたように、上武道路関連で発掘調査を実施した遺跡には、JKを冠した遺跡略号が付されている。8工区は、県道前橋赤城線を境に8-1工区と8-2工区に分かれており、JK52b(上泉唐ノ堀遺跡)以下30遺跡がある。山王・柴遺跡群は8-1工区にあり、遺跡の略号はJK74が付されている(第3図、第1表)。

## 4. 調査経過

本遺跡の調査は平成22年1月～3月、平成22年10月～23年3月、平成23年4月、平成25年4月～7月の4年次にわたり実施された。(第7図参照)

平成21年度は、遺跡西側1区から調査を開始した。1月に1区南から表土掘削を行い、この地点から遺構検出作業を開始した。2月に入り、1区全域の表土掘削を終わり、これと並行して1区中央より南の遺構調査を進めた。表土掘削の遅れた1区北の遺構調査は3月中旬で、全景写真を撮り、3月下旬に埋め戻し、これをもって平成21年度の調査を終えた。

平成22年度は、2区および3-1区の調査を行った。10月に調査に入り、前年度調査を終えた地点(1区)東側の2区から表土掘削を開始した。11月に入り、3-1区の表土掘削を開始した。以後、2区・3-1区の遺構調

査を並行して進めた。3月23日に調査が終了し、埋め戻し作業をおこない、平成22年度の調査が終了した。

平成23年度は、3-2区のみ調査を実施した。路線内の民家跡地であるため、造成が著しく、土坑を1基検出ただけで調査を終えた。

平成25年度の調査は、平成21年度に墓地の移転が完了しないため調査できなかった1区の南東部、平成22・23年度に用地の都合で調査できなかった3区の一部および4区の調査を行った。年度当初の4月に1区・4区の表土掘削を連続して行い、遺構確認の後に調査に着手した。5月に1区の調査が終了し、3区の調査に着手した。6月には、4区南の調査が終了し、4区北の調査に着手した。7月に4区北の調査が終了し、山王・柴遺跡群のすべての調査が終了した。

## 5. 調査日誌抄録

平成21年度

22年1月

- 4日 調査着手、機材搬入。
- 6日 1区南半分表土掘削開始。
- 11日 遺構調査開始。

同年2月

- 2日 前夜降雪、除雪作業を行う。
- 8日 1区北半分表土掘削開始
- 16日 1区南半分空中写真撮影。
- 23日 1区南半分調査終了。

同年3月

- 17日 1区北半分調査終了
- 19日 1区北半分空中写真撮影。
- 23日 1区埋め戻し開始。
- 29日 1区埋め戻し作業終了。
- 31日 機材撤収、調査終了。

平成22年度

22年10月

- 1日 調査着手、機材搬入。
- 6日 2区表土掘削開始
- 12日 遺構調査開始。

同年11月

- 1日 3-1区表土掘削開始。
- 9日 3-1区表土掘削終了。



第6図 山王・柴遺跡群周辺図(前橋市役所発行1/2,500前橋市現形図(平成21年)使用)

10日 2区水田調査着手。  
 15日 3-1区遺構調査開始。  
 同年12月  
 14日 2区水田2面目調査終了。  
 15日 2区、水田を中心に空中写真撮影。  
 平成23年1月  
 19日 3-1区空中写真撮影。  
 同年2月  
 1日 3-1区旧石器試掘調査。  
 14日 旧石器試掘、拡張調査開始。  
 同年3月  
 11日 14時46分大規模地震発生。現場・事務所ともに被害なし。  
 23日 2・3-1区調査終了。  
 24日 2・3-1区埋め戻し開始。  
 30日 2・3-1区埋め戻し終了。  
 31日 機材撤収、調査終了。  
 平成23年度  
 平成23年4月  
 4日 3-2区表土掘削開始  
 6日 3-2区遺構調査開始。  
 13日 3-2区旧石器試掘調査開始。  
 27日 3-2区調査終了、埋め戻し開始。  
 28日 3-2区埋め戻し終了。  
 29日 機材撤収、調査終了。  
 平成25年度  
 平成25年4月  
 1日 調査着手、準備  
 15日 1区表土掘削。  
 17日 1区表土掘削終了、4区南側掘削準備(安全対策)  
 18日 4区南側表土掘削開始、1区遺構調査開始。  
 25日 4区南側表土掘削終了、遺構調査開始。  
 同年5月  
 13日 1区調査終了。  
 14日 1区・4区空中写真撮影。  
 16日 1区埋め戻し、3区表土掘削。  
 17日 3区遺構調査開始。  
 20日 4区南側2面目調査開始。  
 30日 4区南側旧石器試掘調査開始。

同年6月  
 6日 3区旧石器試掘調査開始。  
 20日 4区南側調査終了。  
 21日 4区北側表土掘削開始。  
 24日 4区北側表土掘削終了、遺構調査開始。  
 26日 3区調査終了。  
 同年7月  
 1日 4区南側旧石器試掘調査開始。  
 12日 4区南側調査終了。  
 31日 機材撤収、調査終了。

## 6. 整理作業の経過及び遺構名称変更

山王・柴遺跡群の整理作業及び報告書編集作業は、平成25年3月1日から平成26年2月28日まで実施した。平成24年度(平成25年3月)は、収納されている出土遺物や記録類の確認作業を実施した。

平成25年度は、デジタル遺構写真のリネーム作業、遺構図の修正作業、出土土器片類や石器の分類、住居出土土器類の復元作業および写真撮影、原稿執筆のための基礎整理作業などを行った。平成25年度は、発掘調査が並行して行われており、調査終了後にはその出土資料についても整理作業を行った。

平成26年度は、報告書掲載の遺構写真の選び出し作業、土器・石器の実測・トレース作業、観察表の作成、遺構図のデジタルトレース作業を行い、これと並行して本文原稿の執筆を進めた。すべてのデータが揃ったところで、印刷原稿としてのデータ化をおこなった。

整理作業の最後には、遺物管理台帳および写真管理台帳を作成し、今後の活用に備えて遺物や図面類の収納作業を行った。

なお、報告書の印刷及び刊行は、諸事情により平成27年度に実施した。

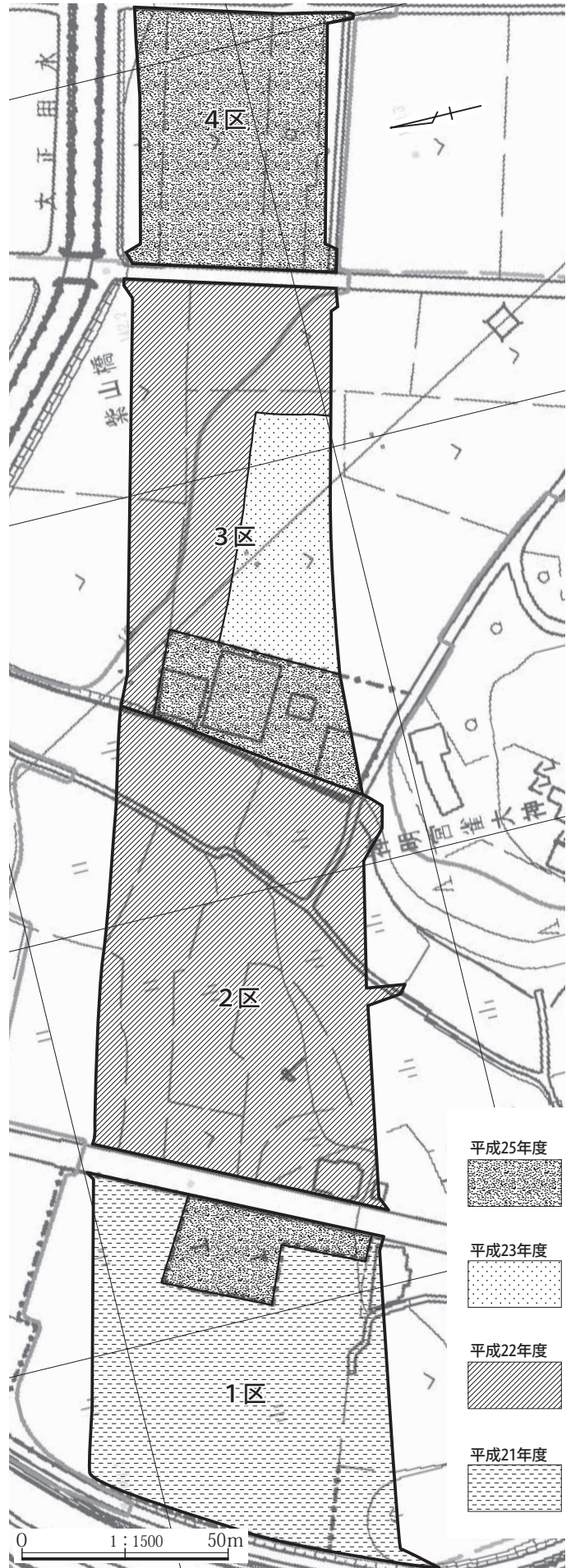
第2-1表 遺構名称変更相対表

調査時の名称	本報告書での名称
2区2号住居	欠番
2区44号住居	欠番
2区45号住居	欠番
2区1号竪穴状遺構	2区47号竪穴住居
2区2号竪穴状遺構	2区48号竪穴住居
2区1号柵列	2区5号掘立柱建物
2区1号ピット	2区1号掘立柱建物5号柱穴
2区2号ピット	2区1号掘立柱建物4号柱穴
2区3号ピット	2区1号掘立柱建物3号柱穴
2区4号ピット	2区1号掘立柱建物1号柱穴

第1章 調査の経過

第2-2表 遺構名称変更相対表

調査時の名称	本報告書での名称
2区6号ピット	2区1号掘立柱建物7号柱穴
2区8号ピット	2区3号掘立柱建物10号柱穴
2区9号ピット	2区3号掘立柱建物11号柱穴
2区10号ピット	2区3号掘立柱建物12号柱穴
2区11号ピット	2区3号掘立柱建物13号柱穴
2区12号ピット	2区3号掘立柱建物8号柱穴
2区13号ピット	2区3号掘立柱建物7号柱穴
2区14号ピット	2区3号掘立柱建物5号柱穴
2区15号ピット	2区3号掘立柱建物4号柱穴
2区16号ピット	2区3号掘立柱建物3号柱穴
2区17号ピット	2区3号掘立柱建物2号柱穴
2区18号ピット	2区5号掘立柱建物3号柱穴
2区19号ピット	2区5号掘立柱建物2号柱穴
2区20号ピット	2区5号掘立柱建物1号柱穴
2区28号ピット	2区2号掘立柱建物6号柱穴
2区29号ピット	2区2号掘立柱建物5号柱穴
2区31号ピット	2区2号掘立柱建物4号柱穴
2区32号ピット	2区2号掘立柱建物3号柱穴
2区33号ピット	2区2号掘立柱建物7号柱穴
2区34号ピット	2区2号掘立柱建物8号柱穴
2区37号ピット	2区2号掘立柱建物2号柱穴
2区38号ピット	2区2号掘立柱建物9号柱穴
2区39号ピット	2区2号掘立柱建物10号柱穴
2区40号ピット	2区2号掘立柱建物12号柱穴
2区41号ピット	2区2号掘立柱建物1号柱穴
2区58号ピット	2区4号掘立柱建物1号柱穴
2区59号ピット	2区4号掘立柱建物4号柱穴
2区60号ピット	2区4号掘立柱建物3号柱穴
2区61号ピット	2区4号掘立柱建物2号柱穴
2区69号ピット	2区6号掘立柱建物2号柱穴
2区70号ピット	2区6号掘立柱建物1号柱穴
2区72号ピット	2区6号掘立柱建物9号柱穴
2区73号ピット	2区6号掘立柱建物10号柱穴
2区74号ピット	2区6号掘立柱建物7号柱穴
2区75号ピット	2区6号掘立柱建物6号柱穴
2区77号ピット	2区6号掘立柱建物4号柱穴
2区78号ピット	2区6号掘立柱建物3号柱穴
2区85号ピット	2区5号掘立柱建物8号柱穴
2区86号ピット	2区5号掘立柱建物9号柱穴
2区87号ピット	2区5号掘立柱建物10号柱穴
2区88号ピット	2区5号掘立柱建物4号柱穴
2区89号ピット	2区5号掘立柱建物5号柱穴
2区90号ピット	2区5号掘立柱建物6号柱穴
2区91号ピット	2区5号掘立柱建物7号柱穴
2区92号ピット	2区6号掘立柱建物11号柱穴
2区93号ピット	2区6号掘立柱建物8号柱穴
2区95号ピット	2区2号柵2号柱穴
2区96号ピット	2区2号柵3号柱穴
2区97号ピット	2区2号柵4号柱穴
2区98号ピット	2区2号柵5号柱穴
2区99号ピット	2区2号柵6号柱穴
2区101号ピット	2区3号柵4号柱穴
2区102号ピット	2区3号柵3号柱穴
2区103号ピット	2区3号柵2号柱穴
2区104号ピット	2区3号柵1号柱穴
2区108号ピット	2区2号柵1号柱穴
3区13号土坑	欠番
3区14号土坑	欠番
1区4群島	1区1号島
1区5群島	1区2号島
1区1群B島	1区3号島
1区1群A島	1区4号島
1区2群島	1区5号島
1区3群島	1区6号島
3区1群島	3区1号島



第7図 調査年度別 調査範囲図



## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡の立地

山王・柴遺跡群は、群馬県前橋市上細井町948-2番地・青柳町906-1番地ほかに所在する。前橋市は平成の市町村合併により旧勢多郡4町村(大胡町、富士見村、粕川村、宮城村)を合併、赤城山南西麓に大きく市域を広げた。これにより前橋市の北端は赤城山頂部に及んだ。

赤城山は那須火山帯の西端に位置し、典型的な複合成層火山として知られている。『裾野は長し赤城山』と「上毛かるた」で詠まれているように、南・西麓には長く裾野が延びている。赤城山は「吾妻鏡」の記載を根拠に活火山とされているが、これまでこれに相当するテフラは確認されていない。赤城火山の火山活動については、古期成層火山形成期、新期成層火山形成期、中央火口丘形成期の三つの時期に区分されている。

古期成層火山形成期は、約40～50万年前から始まり、約13万年前頃まで続いた。このころ、大規模な成層火山が形成されたとされている。約20～30万年前には、山体崩壊による大規模な岩屑なだれ「梨木泥流」が発生し、大量の泥流堆積物(約4km<sup>3</sup>)が東麓から南東麓に堆積した。この山体崩壊に伴い赤城山南麓には「流れ山」と呼ばれる独立丘陵が形成されたとされる。多田山、石山、峰岸山、権現山などの独立丘陵がそれである。本遺跡の所在する赤城山南西麓にも蟬山や九十九山と呼ばれる独立丘陵が点在しているが、いずれも「赤城橋山岩屑なだれ」と呼ばれる山体崩壊に伴い形成された「流れ山」である。

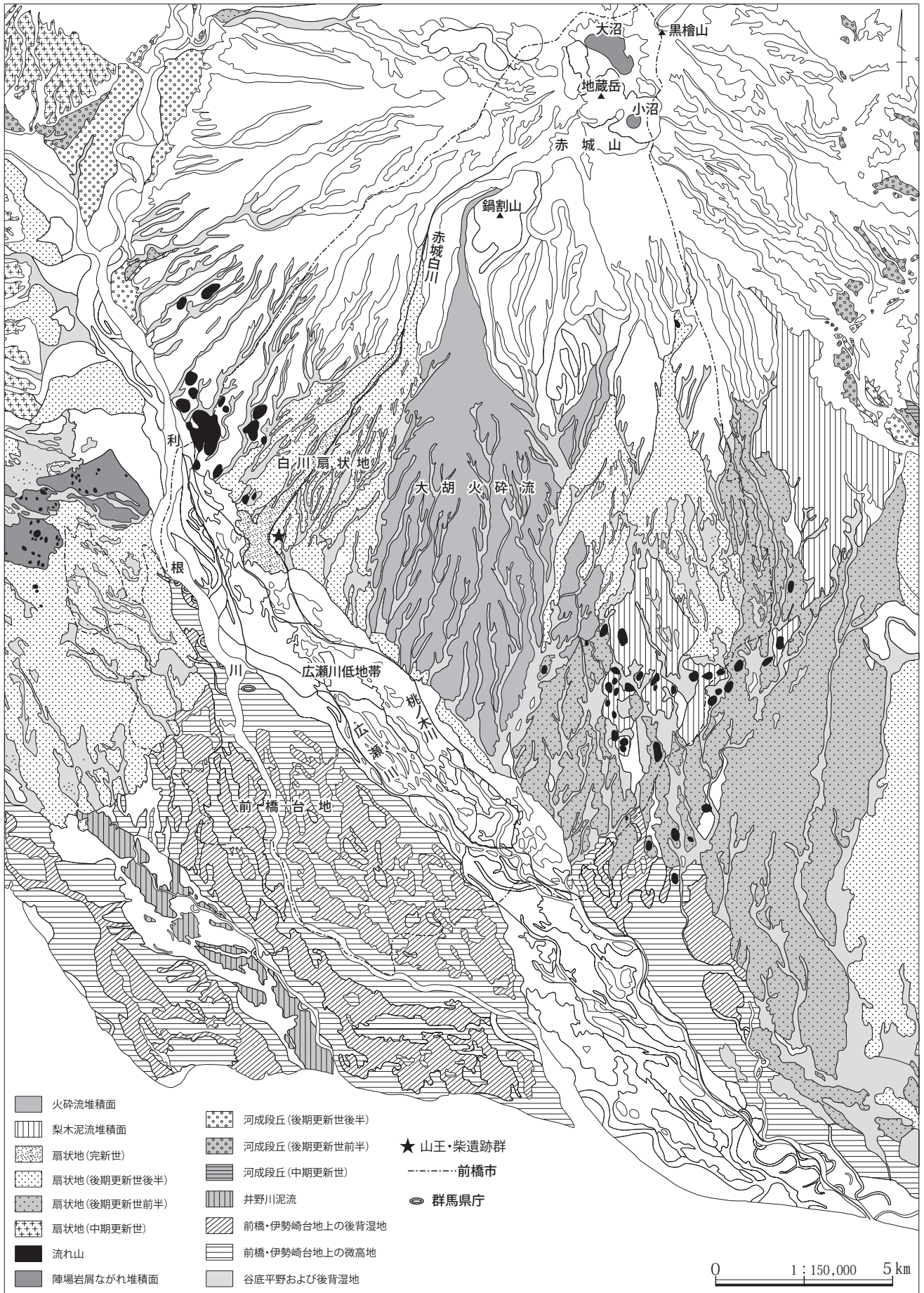
新期成層火山形成期には、山頂部溶岩ドームが形成されたほか(約13万年前～7.5万年前)、荒山や鍋割山など側火山が形成されたという。西麓から南麓を埋めた「棚下火砕流」や「大胡火砕流」はこのとき発生したとされ、これにより長大な裾野が形成されたようである。

中央火口丘形成期とされるころに、現在の山頂カルデラ及びカルデラ湖が形成(湯ノ口軽石As-UPの噴出、約4.5万年前)されたほか、鹿沼軽石(As-Kg、3.0万年前)の噴出に伴い中央火口丘が形成されたとされている。これまで述べたような大規模な火山活動が終わり、山体の侵食

が徐々に進み、山麓の基本的地形が形成されていく。市内の地形は、その地形的特徴から「赤城山南西麓斜面」、「広瀬川低地帯」、「前橋台地」に分けることができる。

赤城山は標高1,828mの黒檜山をはじめとする地蔵岳、鍋割山、荒山、鈴ヶ岳など10あまりの山々から構成されている。赤城山は標高500m付近を境に傾斜変換点があり、山岳地形から山麓斜面部に移行する。赤城山南麓に広がるこの緩斜面が「赤城南麓斜面」と呼ばれるものである。南麓斜面部には赤城白川、藤沢川、寺沢川、荒砥川、神沢川、粕川など大小の河川が放射状に流下しており、これが斜面部を浸食して南北方向に長く起伏に富んだ丘陵性台地を形成している。さらに、山麓には山体からしみ出る浸透水(湧水)による樹枝状の開析が加わり、台地と低地が複雑に入り組んだ地形がつくられていった。中央火口丘形成期を経た後の山麓域には、各所に扇状地地形が形成されている。代表的なものとして更新世末(約30,000年前)から完新世はじめにかけて赤城山南西麓を流れる赤城白川流域に形成された「赤城白川扇状地」や、赤城山南麓を流れる荒砥川流域に形成された「荒砥川扇状地」がある。同様な扇状地地形は完新世にも断続的に形成されたようで、粕川流域や神沢川流域に小規模なそれがある。このほか、818年の地震災害に伴う山体崩壊が知られている。この山体崩壊は桐生市新里町新川に路頭があり、黒色土の上位に再堆積ローム層が厚く堆積、のちにこれが土石流となり、下流域に大きな被害を及ぼしたことが明らかにされている。縄文時代にもこれに類する地震災害が確認され、赤城山西麓域に縄文時代前期より古い再堆積ローム層が広く堆積するなど、浸食と堆積を繰り返す複雑な地形発達の様子が明らかにされてきている。赤城南麓斜面の末端は南東側が旧渡良瀬川、南西側が旧利根川に浸食され、比高10m程度の崖線となっており、南東側が「大間々扇状地」に、南西側が「広瀬川低地帯」に接している。

その「広瀬川低地帯」は赤城山南西麓の崖線と前橋台地の北東側崖線に挟まれ、市街地の北西から南東に延びている。低地帯の幅は3km前後で、前橋台地との比高差は



第8図 遺跡地周辺の地形分類図(群馬県『群馬県史通史編1』付図2を改編)

赤城山南西麓の崖線とは異なり、わずか数mである。現在、利根川は前橋台地の中央部を南流しているが、中世末に変流、それ以前は広瀬川低地帯を流れていたであろうことが想定されている。昭和20年代に撮影された米軍の航空写真によれば、広瀬川低地帯(前橋市田口町から伊勢崎市馬見塚町に至る間)と呼ばれる地域には各所に三日月状に入り組んだ複雑な地形が読み取れ、それが流痕であることが容易に分かる。この流痕は広瀬川低地帯全域に見られるものではなく、赤城山南西麓に近い前橋市田口町から筑井町にかけての一带、対岸の伊勢崎市東上之宮町から阿弥大寺町にかけての一带にはそのような流痕はなく、南南東から東南東へ流路を変えたものとみられる。赤城南西麓の崖線に近い地域や東上之宮地区付近は、地形的に安定していたようで、後述するように古墳時代以後の集落が点在、発掘調査されている。旧利根川の変流時期については、文献によるもので享禄・天文の「洪水説」が良く知られており、これが用水に流れ込んで広瀬川筋から現流路に変流したとするものである。

旧市街地を載せる「前橋台地」は、市域の南西部に大きく広がる。「前橋砂礫層」と呼ばれている厚さ200m以上にも及ぶ砂礫層の上に「前橋泥流」と呼ばれる泥流や火山灰などの火山起源の堆積物が約15m前後堆積しており、それを被覆してAs-BP(浅間板鼻褐色軽石)より上位のローム層が堆積する。前橋台地内を流れる小河川は、おおむね南東方向に流れていることや、古墳時代の小区画水田が北西-南東方向を軸に区画されていることから分かるように、台地は緩く南東方向に傾斜していることが分かる。

本遺跡は旧前橋市の北部にあり、大正用水を挟んで富士見町(旧富士見村)が接する。地形的には、赤城山南西麓を流れる赤城白川の形成した「白川扇状地」上にあり、赤城白川左岸に立地するということになるが、遺跡内には長狭な開析谷があり、これを生産域とした農耕集落とすることができる。白川扇状地は前橋市富士見町大河原付近を頂部として東は藤沢川、西は細ヶ沢川の間広がる欠水性扇状地である。『群馬県史通史編1』によると、その扇状地地形は新旧二時期の扇状地からなるとされている。古い時期の扇状地は、榛名八崎テフラ(Hr-HP)の堆積する地点や、浅間板鼻褐色テフラ群(As-BP)の堆積する地点、浅間板鼻黄色テフラ(As-YP)の堆積する地点

が見られ、更新世後半に形成されたとされている。新しい時期の扇状地は、富士見町天神平(標高400m付近)を扇頂部として、現赤城白川右岸に広がるとされる。その扇端部は青柳町にあり、旧利根川により形成された広瀬川低地帯に張り出している。その形成時期は赤城白川右岸に立地する引切塚・青柳宿上遺跡の調査所見より、縄文時代早期の条痕文系土器群を遡らないことが明らかになるとともに、旧流路が確認されたことにより、それ以後も激しく流路を変え、断続的に扇状地形成が展開したことが判明した(第8図)。本遺跡の標高は現地表面で4区北が最も高く約142m、1区南西端が最も低く約137mである。

## 第2節 遺跡周辺の歴史環境

山王・柴遺跡群が立地する赤城山南西麓にはおよそ3万年前の旧石器時代遺構から中・近世に至るまで多くの遺跡が残されている。ここでは、赤城山南西麓における各時代の様相について、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代・中世について概要を述べる。詳細については、周辺遺跡位置図(第9図)、及び主な周辺遺跡(第3表)を参照されたい。

### 1. 旧石器時代

赤城山西南麓の旧石器遺跡は、これまでほとんど確認されていなかったが、上武道路建設に伴う発掘調査で、旧石器時代石器群が良好な状態で出土しており、徐々にではあるが、その様相が明らかになりつつある。具体的には、旧石器遺跡の立地や遺跡分布密度、文化層の重複性などであるが、ここでは便宜的に県道前橋一大胡線以北の旧石器遺跡を南西麓旧石器遺跡と呼び、それらについてその概要を述べておこう。

南西麓に立地する旧石器遺跡は12遺跡があり、いずれも火山麓扇状地面に立地する。うち、7遺跡が大胡火砕流堆積面、5遺跡が赤城白川扇状地面に立地する(第8図)。大胡火砕流堆積面上に立地する7遺跡には上泉唐ノ堀、上泉新田塚、上泉武田、五代砂留遺跡群、芳賀東部団地、胴城遺跡があり、また、赤城白川扇状地表面には新田上(第9図4、以下図版番号を省略する)、上細井中島(3)、上細井蟬山(2)、青柳宿上(15)、それに本遺跡

(1)がある。

大胡火砕流堆積面にある7遺跡は、いずれも断続的に石器群が残されている。その出土層位は浅間大窪沢第1軽石(As-0k1)の前後、浅間板鼻褐色軽石群(As-BP)の下位から暗色帯にかけてである。上層石器群は上泉武田や胴城遺跡を除き槍先形尖頭器や搬入剥片の単独出土例が多い。下層石器群では上泉武田や五代砂留、芳賀東部団地遺跡で石刃石器群が石器ブロックを形成して、上泉唐ノ堀や芳賀東部団地遺跡の2地点で「環状ブロック群」が報告されている。このほか芳賀東部団地遺跡ではAs-BP直下で礫群が発見されている。

赤城白川扇状地内に立地する5遺跡は小規模で、貧弱な遺跡が多い。扇状地地形が暗色帯を前後するところであるため、いずれも上層石器群に限られる。上細井中島遺跡ではAs-0k1下位のローム層から縦長剥片1点が、上細井蟬山や青柳宿上遺跡ではAs-YPより下層で削器や剥片類が出土している。これと同じ層序から新田上遺跡では硬質頁岩製の北方系細石刃石器群が出土した。

赤城山南西麓は火山麓扇状地に大別されることからわかるように、大胡火砕流堆積面(約7.5万年前)及び赤城白川扇状地(約3万年前)は形成年代が異なるだけで、基本的な地形的特徴は変わらないというべきである。が、しかしこの若い地形であるということが赤城白川扇状地の旧石器遺跡の分布や規模に影響したのだろうと考えている。すなわち、扇状地内の旧石器遺跡で集落遺跡として評価することができる遺跡は、龍ノ口川の左岸に所在した新田上遺跡のみであり、概して小規模(単独出土の遺跡が多い)で、短期逗留の痕跡しか残されていないためである。そうした背景として扇状地形成が断続的に進行したことが指摘され、また、更新世の末に生活環境(環境資源)が安定するようになり、はじめて長期逗留が実現したということだろう。

## 2. 縄文時代

縄文時代の遺跡として、現在まで73遺跡が確認されている。扇状地内の縄文遺跡は藤沢川右岸と細ヶ沢川左岸に分布する傾向が指摘されるほか、旧利根川の形成した崖線に近い扇状地端部に分布するようであるが、その立地は扇状地内を流れる小河川に規制されている。時期別に見ると、前期遺跡が25遺跡と最も多く、次いで中期・

後期遺跡が各12遺跡で、こうした傾向は県内縄文期遺跡の動向に大きく変わるものではない。

草創期遺跡は、上武道路関連の堤遺跡で石槍の製作跡が発見されている。草創期土器片類は上百駄山遺跡にあるとされているが、詳細については不明である。赤城山南麓においては同時期の製作跡が点在しており、小神明勝沢境や小神明湯気遺跡で単独で有茎尖頭器が出土していることからみて、扇状地内にも堤遺跡同様の石器群が発見される可能性は高い。

早期遺跡には上細井五十嵐(10)、上細井中島(3)、青柳宿上遺跡(15)などがある。いずれも撚糸文系の土器が出土しているが、青柳宿上遺跡ではこれ以外に沈線文土器や条痕文土器が多量に出土した。宿上遺跡は赤城白川の右岸に立地する遺跡(引切塚遺跡と隣接、本来的には同一遺跡)で、早期土器群は厚く氾濫層に覆われ良好な状態で出土した。青柳宿上や上細井中島遺跡では、撚糸文期の石組炉が発見されている。

前期遺跡は、25遺跡が知られている。主な遺跡には藤沢川流域に芳賀西部団地、小神明西田、芳賀北曲輪遺跡があり、そのほか扇状地内には上百駄山(諸磯期住居7)、久保田遺跡(花積下層式期住居6)、新田上遺跡(諸磯c式期住居1)などがある。また、扇状地から外れた細ヶ沢川右岸に田中田(24)、田中(28)、陣場(32)、下庄司原東遺跡(33)などがあり、集落跡が確認されている。

中期遺跡は13遺跡が知られている。扇状地内の集落遺跡としては龍ノ口川流域の新田上(4)、上細井中島(3)、小神明九料、芳賀北曲輪遺跡があるほか、東田之口(12)、丑子(11)、上細井五十嵐(10)、上庄司原北遺跡(37)などでは土器片だけが発見されている。赤城白川の右岸には未報告だが旭久保B遺跡(48)があり、中期の大規模遺跡と目されている。これと同様に、新田上や芳賀北曲輪遺跡も比較的規模が大きく、安定した集落とすることができる。旭久保B遺跡の詳細については不明だが、概して扇状地内の中期遺跡は短期に終わる例が多い。前期遺跡に比べ、中期遺跡は減少傾向にあるのであろうが、藤沢川や龍ノ口川流域に前期から中期への継続性が指摘できよう。

後期遺跡は、14遺跡が確認されている。うち、集落遺跡が5遺跡で、残る大多数は土器片のみが出土する遺跡である。集落遺跡として堤遺跡で柄鏡形敷石住居が調査

されているが、堤遺跡の南には約200m離れて小神明遺跡群があり、堤遺跡と同じ柄鏡形敷石住居が発見されている。本遺跡では、この時代の遺構は確認されなかったが、赤城白川に近い4区で縄文時代の遺物が出土している。

晩期遺跡は、引切塚(14)や青柳宿上遺跡(15)で晩期土器群(千網式、氷式、大洞式)が赤城白川の旧河道からまともって発見された。従来、広瀬川低地帯にある西新井遺跡などにより、晩期遺跡の低地部進出が想定、こうした傾向は変わらないであろうが、上記遺跡は河川性氾濫堆積物の下で発見されたものであり、これについて留意しておきたい。

### 3. 弥生時代の遺跡

赤城山南西麓の弥生遺跡は概して少なく、遺跡が小規模であるのも明らかである。

赤城山西南麓の弥生遺跡は、新田上遺跡で中期中葉の住居・土坑が調査された。本遺跡に隣接する引切塚遺跡(14)では、中期の再埋葬として使用された可能性が高い大型壺が出土しており、本遺跡でも中期中葉の特徴を有する弥生土器片が出土している。後期では小神明勝沢境遺跡(61)及び丑子遺跡(11)で浅間C軽石(As-C)降下前の樽式土器を伴う竪穴住居跡が調査されている。また、端気着帳遺跡(102)では周溝墓が2基確認されている。この周溝墓は、周溝埋土中に底部から2層の間層をおいて浅間C軽石純層が厚さ10cmから15cmほど堆積していた。弥生時代末期から古墳時代初頭の周溝墓であることが想定される。いずれも現標高で150mを下回る位置の遺跡である。端気遺跡は広瀬川低地帯に程近い崖線上に立地する。

扇状地内の弥生遺跡は小規模だが、弥生時代中期のものが多い。それは農耕集落が平野部に本格的進出を遂げる前段階のもので、狭い谷に水田を営んだころのものとも目されている。扇状地内は基本的に欠水性扇状地であり、継続的遺跡の立地を難しくしていたということであろう。

### 4. 古墳時代

古墳時代前期になると、赤城南麓は人々の生活が再び活気づくようになる。本遺跡では弥生時代後期から古墳

時代前期にかけての在り系である樽式土器にとらわれないバラエティに富んだ土器と、それに伴う竪穴住居がみついている。このほか、丑子遺跡でも前期の住居が調査されているように、扇状地内の前期集落は小河川に臨んだ扇状地端部に立地する傾向を示している。これに似た傾向は扇状地内の遺跡に限らず、赤城山南西麓に立地する遺跡にもいえるだろう。これとは対照的に、南西麓に近接する広瀬川低地帯の微高地上に立地する田口上田尻・下田尻遺跡(20)では、古墳時代初頭の大規模集落が形成されていることから分かるように、その立地条件は明らかな水田志向が窺える。

本遺跡では6世紀代の集落が主に調査されているが、5世紀代から6世紀代の集落は隣接する引切塚・青柳宿上遺跡でも調査されている。これに続いて、6世紀から7世紀にかけて主流になっていくのが東田之口遺跡(12)である。同遺跡では68軒の住居が調査されているが、このうち4軒が5世紀代のもので、その他の64軒は6世紀から7世紀にかけてのものである。隣接する丑子遺跡でも同時期の住居群が確認されているが、後述するように両遺跡間に広がる水田跡が、これを支えたのであろう。赤城山西南麓で6世紀代のこれだけの規模の集落の調査例はなく、6世紀代の拠点地域と言える。しかし、この遺跡は後代に続かず、短期間で終わっている。そのほかにも、芳賀東部団地遺跡西側台地などこの時期からはじまる小集落があり、7世紀代まで集落を継続させていく。そして、それは6世紀以降の赤城山南西麓の古墳動向とも合致している。

上毛古墳総覧によれば、山王・柴遺跡群の立地する旧南橋村には45基、旧芳賀村に64基、旧桂萱村に79基の古墳があったとされる。旧南橋村上細井地区には17基の古墳があったとされ、現存しているのは丑子塚古墳(67)、狐塚古墳(72)などであり、いずれも調査されていない。上毛古墳総覧で周知されている古墳で調査されているのはオブ塚古墳、大日塚古墳などだけである。いずれも6世紀以降の古墳である。青柳地区では、引切塚に古墳が2基あったとされている。前橋市が調査した引切塚遺跡では古墳の石室が確認されているが、これとは別の古墳であり、総覧の記載から漏れた古墳である。上武道路8工区路線内では、胴城遺跡で芳賀村1号墳の周溝が調査されている。本遺跡では小石塚墓・方墳・横穴式石室が

確認されているが、これは青柳古墳群とされるものである。

集落域、墓域があれば、当然生産域を伴うはずである。本遺跡では、古墳時代まで遡るだろう水田跡が想定されている。また、4世紀から5世紀代の畠跡が調査されている。赤城山南西麓では古墳時代水田跡の調査例は少なく、その実態は明らかとはいえないが、こうした本遺跡の調査成果を踏まえるならば、台地を刻んだ小規模な開析谷や台地上の空闲地を利用した生産域が想定されてくるだろう。また、さらに広瀬川低地帯まで視野を広げると、川端根岸(16)・関根細ヶ沢(18)・関根赤城遺跡(19)で水田跡が調査されている。こうした調査成果からするならば、扇状地内の標高150m以下の地域では、崖線下の広瀬川低地帯の開発も視野に入れて考えることも必要となるであろう。今後、この地域の古墳時代を考えていくうえで生産域の検討が鍵となっていく。

## 5. 飛鳥・奈良・平安時代

赤城山南西麓は、古代においては現在の渋川市の利根川以東、前橋市の南部を除く範囲、桐生市新里町を含む範囲に古代勢多郡が設置された。平安時代に源順によって編纂された『和名類聚抄』によれば、古代勢多郡は深田(ふかた)、田邑(たむら)、芳賀(はが)、桂萱(かいがや)、真壁(まかべ)、深渠(ふかみぞ)、深澤(ふかさわ)、時澤(ときざわ)、藤澤(ふじさわ)の9郷に区分されている。現存する地名から推察すると、真壁郷が渋川市北橋町付近に、芳賀郷が前橋市芳賀町付近に、時沢郷が前橋市富士見町時沢付近に、桂萱郷が前橋市桂萱付近に比定することができる。しかし、現在の芳賀地区から8kmほど東に離れた二之宮洗橋遺跡(前橋市二之宮町)から芳賀郷と解される「芳郷」の墨書土器が出土しており、いまだその不確定な要素が多い。そして古代勢多郡の郡衙については解明されていないが、大室古墳群などの大規模な古墳や上西原遺跡にみられる伽藍を有す寺院が存在する荒砥地区に存在していたことが想定される。なお、遺跡地は現存する前橋市富士見町時沢から比較的近いことから古代では時沢郷に比定できる。

赤城山南西麓において、地域の拠点集落と言えるのが、芳賀東部団地遺跡である。芳賀東部団地遺跡は、昭和40年代から断続的に発掘調査が行われ、総計111棟を

超える竪穴住居跡や掘立柱建物跡が発見されたほか、鍛冶遺構などがみついている。古代の集落は古墳時代から11世紀の後半まで続いている。また、周辺には五代砂留遺跡群をはじめとする支群とも言える同時期の集落があり、これらを含めて地域の拠点集落であることが確実視されている。芳賀東部団地遺跡から直線距離2.5kmほど西で上武道路建設に伴い王久保(5)、時沢上町(6)、時沢西紺屋谷戸(7)、東紺屋谷戸(8)、天王遺跡(9)で7世紀代から9世紀代にかけての集落が調査されている。芳賀東部団地遺跡と比べ小規模だが、いずれも推定「時沢郷」の比定地内にある遺跡であり、それが果して「時沢郷」を構成する集落の一部であった可能性が高い。

一方、本遺跡の西に位置する広瀬川低地帯では関根細ヶ沢遺跡・関根赤城遺跡、田口下田尻遺跡・田口上田尻遺跡などにおいて律令期の集落が調査されている。これらの遺跡では古墳時代前期から開発が始まり集落の盛衰はみられるが、平安時代中期まで集落が継続していたことがわかっている。特に田口下田尻遺跡・田口上田尻遺跡では、馬具や大量の施釉陶器が出土しており、富豪層の存在が窺えている。

古代律令期の生産域について、その詳細は明らかにされていない。古墳時代と同様に赤城山南西麓の調査例は少ない。しかし、本遺跡や、上細井五十嵐遺跡(9)では天仁元年(1108)噴火の際の降下に比定される浅間B軽石(As-B)下の水田が調査されており、平安時代の生産域の存在が確認されている。集落を支える生産域がその周辺に営まれたことは想像に難くない。

## 6. 中世

平安時代末から中世にかけて、赤城山南西麓一帯で勢力があったのは藤原秀郷を祖とする武士団である。そのなかでも本遺跡周辺で勢力をふるったのは、足利重俊を祖とする大胡氏である。平安時代末期の『平治物語』にその名が登場し、『吾妻鏡』では建久元年(1190)1月7日の条に源頼朝入洛の供奉人中大胡太郎の名が見える。

中世では特定の地域が荘(庄)や御厨、保といった私有地となり、それ以外の土地は公領の郷であった。しかし、郷の中には在地領主の開発・再開発によって私有地化していた郷もあった。史料等により赤城南麓で確認できるのは大室庄、青柳御厨、細井御厨、大胡郷である。青柳

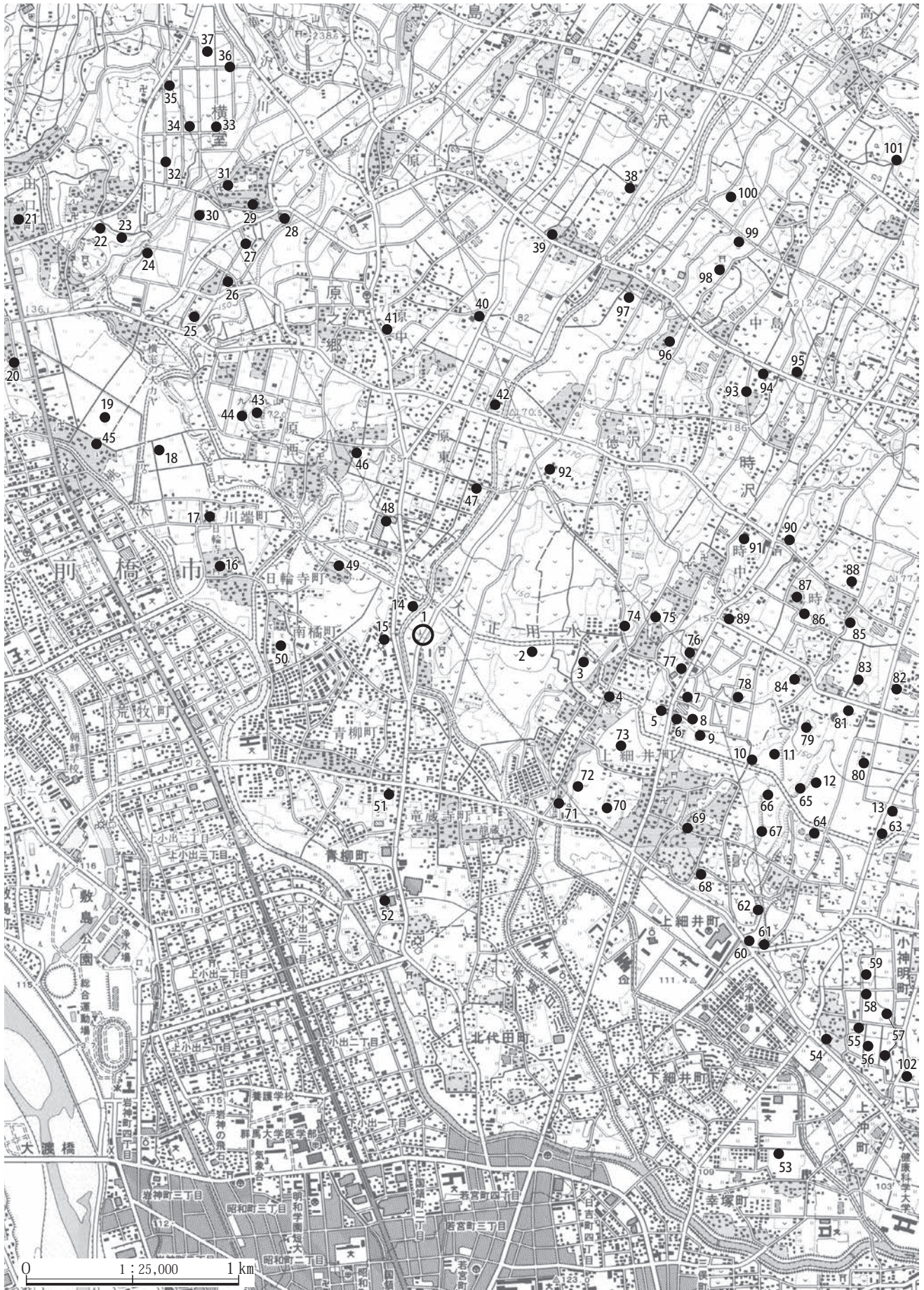
御厨は延文五年(1360)成立の「神鳳抄」という伊勢皇大神宮の所領を書きあげた記録に、内宮領であると記されている。細井御厨は同じく「神鳳抄」に伊勢二見の来迎院が領主であると記されている。大室庄は現在の東大室町・西大室町付近の神沢川流域である。鎌倉時代の所領譲状、室町時代の恩賞請求書に記録が残っている。

大胡郷は現在の大胡町付近を頂点にして、荒砥川流域を一遍として、底辺が小屋原・今井・片貝・野中・小島田等の旧利根川河道の低地まで下がる扇状の土地で、上泉・沖・三俣等も含む広大な郷である。大胡氏一族が、荒砥川流域に基盤を作り、利根川旧河道の開発・再開発を行い、発展を遂げた郷である。今のところこれら土地開発に直接関わるような遺構は見つかっていない。赤城南麓の中世史を考えるうえでも今後に期待したい。

戦国時代には嶺城が築城され、小坂子城、勝沢城(50)などが支城であったとされる。箕輪長野氏に味方し、聖剣と言われている上泉伊勢守信綱は大胡城の支城上泉城を本拠とし、大胡武蔵守とも称している。

#### 参考文献

- 前橋市史編さん委員会1971『前橋市史第1巻』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団1983『青柳寄居遺跡』
- 前橋市教育委員会1983『小神明遺跡群』
- 前橋市教育委員会1985『小神明遺跡群Ⅲ』
- 前橋市教育委員会1985『引切塚遺跡』
- 前橋市教育委員会1987『西堀遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団1987『南田之口遺跡』
- 前橋市教育委員会1990『谷端遺跡』
- 前橋市教育委員会1993『引切塚Ⅱ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団2000『田口八幡Ⅰ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団2000『田口八幡Ⅱ遺跡』
- 前橋市教育委員会2001『市内遺跡発掘調査報告書』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団2008『南橋東原遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団2009『上細井北遺跡群No. 1』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団2010『上細井北遺跡群No. 2』
- 富士見村教育委員会1986『富士見遺跡群 田中田遺跡 窪谷戸遺跡 見眼遺跡』
- 富士見村教育委員会1987『富士見遺跡群 向吹張遺跡 岩之下遺跡 田中遺跡 寄居遺跡』
- 富士見村教育委員会1987『田中遺跡』
- 富士見村教育委員会1991『富士見地区遺跡群 陣場・庄司原古墳群』
- 富士見村教育委員会1992『東紺屋谷戸遺跡』
- 富士見村教育委員会1995『上百駄山遺跡・寺間遺跡・孫田遺跡』
- 富士見村遺跡調査会1996『組之木原遺跡』
- 富士見村教育委員会1997『平成8年度村内遺跡』
- 富士見村教育委員会1998『時沢中谷遺跡』
- 富士見村教育委員会1998『小沢の場遺跡』
- 富士見村教育委員会1998『原之郷鰻沢遺跡』
- 富士見村教育委員会1998『旭久保B遺跡』
- 富士見村教育委員会1998『平成9年度村内遺跡』
- 富士見村教育委員会1999『平成10年度村内遺跡』
- 富士見村教育委員会2000『平成11年度村内遺跡』
- 富士見村教育委員会2001『平成12年度村内遺跡』
- 富士見村教育委員会2002『平成13年度村内遺跡』
- 南橋村誌編纂委員会1955『南橋村誌』
- 山崎 一1978『群馬県古城壘址の研究』上巻
- 群馬県1938『上毛古墳総覧』
- 群馬県文化事業振興会1978『群馬県古城壘址の研究』上巻
- 群馬県教育委員会1988『群馬県の中世城館址』
- 群馬県統合型地理情報システム(GIS)
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2009『年報28』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2010『年報29』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2011『東田之口遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2012『小神明勝沢境遺跡・小神明富士塚遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2012『田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡』
- 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2013『年報32』
- 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2013『王久保遺跡』
- 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2013『丑子遺跡・上細井五十嵐遺跡』
- 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2013『上町・時沢西紺屋谷戸遺跡』
- 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2013『上細井蟬山遺跡』
- 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2013『天王・東紺屋谷戸遺跡』
- 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2013『上細井中島遺跡』
- 前橋市教育委員会1983『端気遺跡群』



第9図 周辺遺跡位置図(国土地理院1/25,000地形図「前橋」平成9年発行「渋川」平成14年10月発行を使用)



第3表 主な周辺遺跡

No.	遺跡名	時代・性格 集落○、墳墓●、生産■、遺物のみ△							備考	文献
		旧石器	縄文	弥生	古墳 前期	古墳 中後	奈良 平安	中世 近世		
1	山王・柴遺跡群	△	△		○●	○●	○●	○●	本報告遺跡	
2	上細井蟬山遺跡	△	○			○●	○		珪質頁岩削器、黒色頁岩槍先形尖頭器出土。縄文前期集落。古墳住居1、古墳1。奈良・平安の住居27、井戸1。	40・48
3	上細井中島遺跡	△	○●				○	○	As-0k下縦長剥片出土。縄文住居5、配石遺構7。平安住居8。中近世掘立柱1、井戸3、粘土採掘坑1。	40・50
4	新田上遺跡		△		△		○		旧石器、縄文住居、弥生住居、奈良・平安住居。	44
5	王久保遺跡						○	○	平安住居25、掘立柱1、溝。中近世溝8。	45
6	上町遺跡						○		奈良・平安集落、道路、溜井。	40・47
7	時沢西紺屋谷戸遺跡						○	■	奈良・平安集落、道路、近世水田。	40・47
8	東紺屋谷戸遺跡						○	○●	奈良・平安集落。中近世掘立柱、火葬墓1。	20・39・49
9	天王遺跡		△			○	○	○	古墳後期～奈良・平安集落。	39・49
10	上細井五十嵐遺跡		○				○■		縄文住居1。平安住居4、水田、棚状遺構。	39・46
11	丑子遺跡			○	○	○	○	○	弥生後期住居1。古墳住居38。平安住居3。中世館。	39・46
12	東田ノ口遺跡					○	○	○	古墳住居6、掘立柱6、粘土採掘坑7。奈良～平安粘土採掘坑1、溜井1。中世掘立柱1、土坑、溝、井戸6。	41
13	小神明富士塚遺跡		○			○	○	○	縄文包含層。古墳住居9、溝1、土坑2。奈良住居3、掘立柱6、溝6、土坑5。中近世竪穴1、道1、溝1、井戸1。	42
14	引切塚遺跡		△			○●	○		古墳後期住居30横穴式石室1。奈良・平安住居3。	5・9
15	青柳宿上遺跡	△	○			○			縄文住居1、集石遺構。古墳住居、集積遺構。	44
16	川端根岸遺跡			△	○■	○■	○	○	古墳溝9、水田2。平安住居4、溝1、土坑10。中世竪穴7、掘立柱2、溝37、道1、土坑1086、水田1。近世馬廄。	44
17	川端山下(道東)遺跡						○	○	平安住居1、溝1。中世竪穴1、溝2、土坑2、地下式土坑2。近世溝1。	44
18	関根細ヶ沢遺跡					■	○	○	古墳水田。平安住居155、土坑338、溝34、製鉄炉3。中・近世耕作痕。	44
19	関根赤城遺跡					■	○	○●	古墳墓。平安住居39、土坑101、溝12。中・近世溝7、土坑15、火葬墓3。	44
20	田口上田尻遺跡・ 田口下田尻遺跡					○	○	○	古墳～古代住居311、溝24、畑26、道2、墓坑2、集石5、土坑272。中世溝41、畑1、墓坑14、集石16、土坑125。近世天明泥流復旧痕59、建物3、井戸1、溝68、水田6、畑21、道12、集石1、墓坑4、土坑140。	43
21	塩原塚古墳					●				1・33
22	田口八幡Ⅰ遺跡						○		円墳1。平安住居14。	10
23	田口八幡Ⅱ遺跡						○		平安住居24。	11
24	田中田遺跡		○		○	○			縄文前期住居1・中期住居1、古墳前期住居37・後期住居24・溝1、他	16
25	岩之下遺跡		○			○	○		縄文土坑3、古墳住居9、奈良～平安住居15・掘立柱2、他	17
26	荒井古墳								円墳1。	10・17
27	寄居遺跡		△					○	縄文土器片。中近世館址。溝。	17
28	田中遺跡		○●						縄文住居2、配石遺構6、土坑。	18
29	横室古墳								円墳10。	10・17
30	横室中遺跡								不明土坑。	28
31	陣場古墳					○			終末期円墳1。	10・17
32	陣場遺跡		○			○	○		縄文前期住居7・中期住居15・後期住居2・土坑50以上、終末期円墳2、平安住居73。	19
33	下庄司原東遺跡		○		○	○	○		縄文前期住居5・中期住居1、古墳前期住居1・方形周溝墓3・前方後方形周溝墓1・後期住居9、奈良～平安住居41、他。	19

第2章 遺跡の立地と環境

No.	遺跡名	時代・性格 集落○、墳墓●、生産■、遺物のみ△							備考	文献
		旧石器	縄文	弥生	古墳 前期	古墳 中後	奈良 平安	中世 近世		
34	下庄司原西遺跡		○			○	○		縄文前期住居4・土坑5、終末期円墳1、平安住居20・溝2・土坑・ピット。	19
35	上庄司原西遺跡				○	○	○		古墳時代前期方形周溝墓1・中期溝1・終末期住居6、奈良～平安住居6。	19
36	上庄司原東遺跡		○			○	○	○	縄文前期住居4、後期円墳2、平安住居7・土坑墓1、中世墓1。	19
37	上庄司原北遺跡		△			○			縄文前・中期包含層・土坑群、終末期円墳1。	19
38	小沢金沢遺跡		△							38
39	小沢的場遺跡		○			○	○	○	縄文土坑1。古墳溝1。平安住居1。中近世溝1。	23・25
40	原之郷鰻沢遺跡		△				○		縄文土器片。平安住居2、掘立柱1、竪穴1、土坑、柱穴。	23・26
41	原之郷中子遺跡						△			38
42	原之郷白川遺跡					△			土師器片散布。	29
43	九十九古墳									10
44	九十九山古墳					●			前方後円墳。6世紀後半。上毛古墳総覧16号墳。	35
45	関根の寄居							○	中世砦。	36
46	原之郷東原遺跡		○				○		縄文前期住居、土坑。奈良～平安住居、柱穴。	23
47	原之郷下白川遺跡					△			土器片散布。	31・32
48	旭久保B遺跡		△			○		○	縄文中期包含層。古墳住居1。中近世溝1。	27
49	旭久保Ⅱ・Ⅲ遺跡		○				○		縄文住居、溝。平安住居、溝、ピット。	32
50	南橘東原遺跡					○	○	○	古墳～奈良・平安住居52、掘立柱1、柱穴群。中世溝15、土坑、道路2。	13
51	青柳宿前Ⅱ遺跡						○		平安住居、溝。	12
52	青柳寄居遺跡						○■	○	平安住居12、水田址。中～近世土坑53、柱穴群。	2
53	上沖五反田遺跡		△							38
54	上沖上ノ山古墳					●			消滅。径17.5mの円墳。横穴式石室。直刀、耳環、人骨、歯など出土。	1
55	小神明の寄居							○	掘。土居。	34・37
56	上沖神明宮裏遺跡				△		△			38
57	谷端遺跡					○	○		古墳後期住居7。平安住居1、土坑1、溝3。	8
58	時沢遠堀遺跡							○	全長2.7kmの堀跡。	34・37
59	谷向遺跡		△			△			縄文土器片散布。井戸1。土坑。	4
60	南橘村1号墳					●			円墳。金環、刀剣15、人骨、歯。径50尺。	33・35
61	南橘村2号墳					●			円墳。金環、刀剣、人骨、歯。径66尺。	33・35
62	西堀遺跡		○			○			縄文土坑1。古墳住居3。	6
63	小神明富士塚下遺跡		△				○	△	縄文前期土器片。奈良～平安住居2。江戸時代磁器片。	3
64	南田之口遺跡		○			○			縄文土坑1、立石。古墳住居8。中近世溝11。	7
65	上細井北遺跡No.1		○			○●	○	○	縄文前期住居1、土坑1。古墳住居40、円墳1、平安住居15、溝7。中世溝4、土坑、井戸3。	14
66	上細井北遺跡No.2		●			○●	○		縄文集石土坑1。古墳住居1、円墳2。奈良・平安住居1。時期不明住居2、道路。	15
67	丑子塚古墳					●	○		上毛古墳総覧6号墳。前方後円墳。昭和29年平安住居調査。	1
68	南橘村号墳					●			消滅。	33・35
69	荒屋敷遺跡		△	△						18

No.	遺跡名	時代・性格 集落○、墳墓●、生産■、遺物のみ△							備考	文献
		旧石器	縄文	弥生	古墳 前期	古墳 中後	奈良 平安	中世 近世		
70	薬師遺跡		△			△				38
71	八幡山の砦							○	詳細不明。五輪塔。板碑。	34・37
72	狐塚古墳					●			上毛古墳総覧南橘村14号墳。円墳。	33・35
73	王間久保遺跡		△			△				38
74	時沢西萩林遺跡							△		38
75	時沢萩林遺跡					△				38
76	時沢西高田遺跡							○	平安住居10、柱穴30。	28・29・30
77	時沢西高田B遺跡							○	平安住居、土坑、柱穴。	29
78	時沢中屋敷遺跡					△		△		38
79	定福遺跡					△				38
80	田之口遺跡						△	△		38
81	時沢上福遺跡		△							38
82	組之木原遺跡		△				○	○	古墳後期住居6。奈良・平安住居20、掘立柱2。	22・32
83	時沢森後遺跡					△		△		38
84	時沢吉田遺跡					△				38
85	時沢滝脇遺跡		△			△				38
86	時沢東諏訪遺跡							△		38
87	時沢東諏訪Ⅱ遺跡							△		38
88	時沢山王遺跡		△							38
89	時沢宮東遺跡							△		38
90	時沢四ッ塚遺跡		△			△				38
91	時沢大角谷戸遺跡					△				38
92	念仏遺跡							△		38
93	時沢猿B遺跡		△					△		38
94	時沢猿遺跡		△					○	縄文土器片。中近世柱穴、土坑。	23
95	時沢庚東遺跡		△						縄文土器片散布。	21
96	時沢中谷遺跡		△					○	縄文土器片。平安住居1、柱穴6。	23・24
97	時沢中島遺跡					●				38
98	時沢諏訪遺跡		△						縄文包蔵地。	38
99	時沢甚太夫遺跡		△						縄文包蔵地。	38
100	時沢六万坊遺跡		△							38
101	北所替戸遺跡		△							38
102	端気着帳遺跡		○●	○		○		○	縄文住居1。弥生周溝墓2。古墳住居2。中世敷石遺構、土坑。	51

### 第3節 基本土層

本遺跡は赤城山南西麓斜面にあり、赤城白川の左岸に立地する。赤城白川は典型的な「天井川」であり、前橋市富士見町大河原付近を扇頂部とする比較的規模の大きな扇状地である。扇状地は新旧2面からなり、現河道流域に新期扇状地が旧河道を埋めるように広がり、その端部は広瀬川低地帯まで延びている。調査地は東西に長く、新旧2面の扇状地面に及んでいた。このため、2区東端の狭い谷を境に地点毎に土層堆積が大きく相違していた。以下、地点毎に土層の堆積状態を記す。

<1区台地部> 赤城白川に近い台地部には、河川性の氾濫堆積物が厚く堆積、これが赤城白川起源の河床礫を覆い堆積した。⑤・⑦層としたそれが氾濫堆積物である。図示した地点では確認できていないが、②(白色パミスを含む黒色土)・③(Hr-FA)層が調査区の南西端窪地に堆積した。また、礫層は調査区北東側で確認されただけであり、現河道側から離れるほど容易に確認できるようなのである。氾濫層は確実に2区にも及び、1区南西端同様の埋没谷が2区南西端にもあり、土層註にもあるように、1区では⑥層(氾濫砂)を挟んで縄文期包含層があり、地形的に新期扇状地に区分されることは明らかである。これが2区にも広がるわけだが、同調査区にはデータがなく、はたしてこれがどこまで広がり、ローム台地を被覆しているのか、具体的に明らかにすることができない。

<2区東端の低地部> 低地部では5層・12層・16層下に水田面が想定されている。いずれも明確な畦畔は確認できておらず埋没水田とはいいがたいが、各水田面で確認されている溝は明らかに人工的であり、水田耕作に伴う給・排水用の溝としていいものである。テフラはAs-Bを除いて確認できていないが、それを前後して厚く洪水起源の砂質土(4層、7・8層、14・15層)が堆積しており、度重なる赤城白川の氾濫が思い浮かぶようである。こうして見ると、2面水田以外は洪水層下水田ということになるが、土層註には「砂質土30%を含む」とあり、相当に攪拌されていることは明らかであり、ここから継続的な水田耕作をよみとるべきだろう。こうした継続的な水田耕作はAs-Bに埋もれた水田も同様で、As-Bの堆積が低地東側のみであり、西側ではAs-Bが鋤き込まれ(10・11層)、

同テフラが残されていないことから容易に推察されるところである。

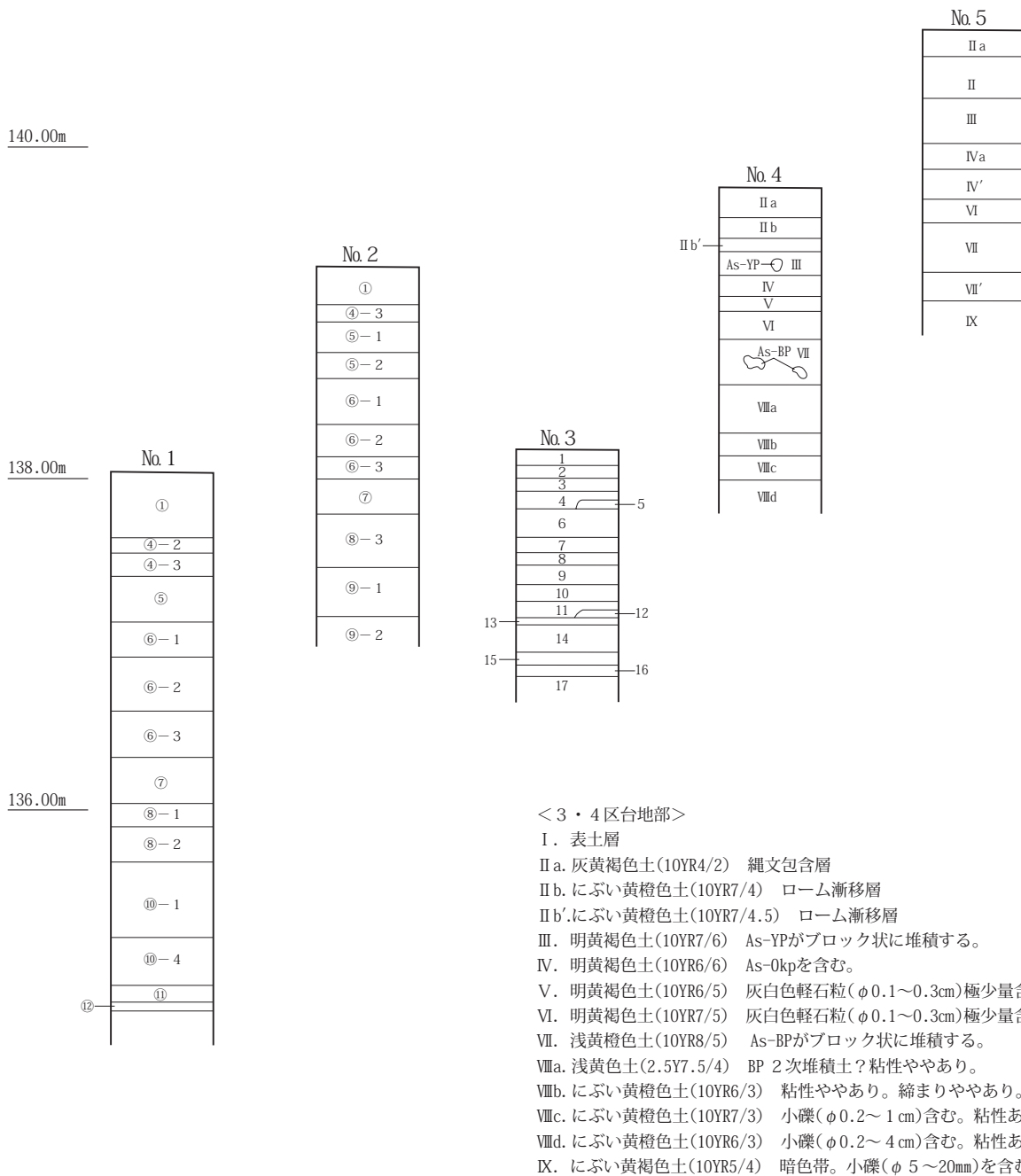
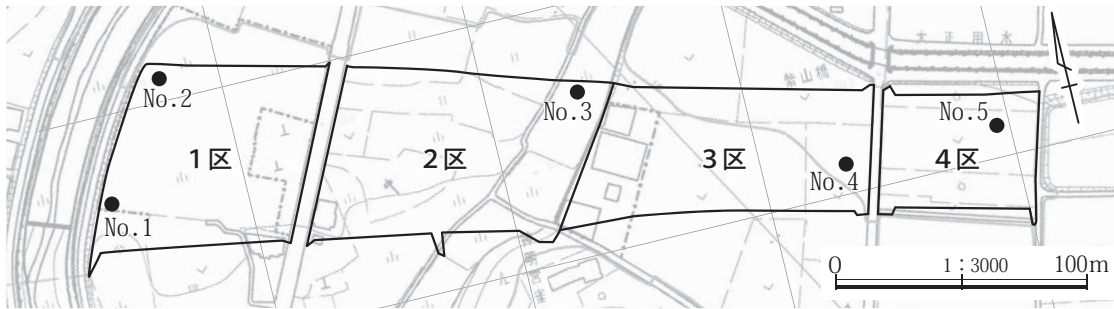
<3・4区台地部> As-BP以上のロームが堆積している。地形的には「古期扇状地」とされ、通称「蟬山」と呼ばれる「流れ山」に続く同じ台地上に位置する。本遺跡に隣接する「上細井蟬山遺跡」では古期扇状地の基層部にHr-HAが確認されているが、ロームの堆積は不安定であり、完全に離水したとはいえない堆積状態を示していた。本遺跡でもⅧ層(As-BP)以下の堆積は二次堆積したとされているが、蟬山のそれをみれば、容易に頷けるように思う。また、Ⅸ層についても注記には「暗色帯」とされているが、上層のⅧ層が二次堆積であるというなら、これも二次堆積としておいた方が無難かもしれない。Ⅷ層としたロームのAs-BPは上位グループのものであり、その上位の白色パミスはAs-Srに由来するパミスということになるだろう。なお、3区台地西側縁辺ではAs-YP下のⅣ層から石器類が出土した。白川扇状地の端部を走る上武道路調査地内の旧石器遺跡は、いずれもローム層中の上位にあり、小規模であることが指摘されよう。

<1区台地部>

- ①. 表土層
- ②-2. As-C純層。
- ③-3. 黒色土 白色パミスを含む。
- ⑤-1. 黄色砂層 赤城白川起源の氾濫層(縄文中期か)。部分的に礫層を伴う。
- ⑤-2. ⑤-1よりやや黒味が強い。
- ⑥-1. 黒色土 ⑤層を斑状に含む。白色パミスを含む。縄文後期と考えられる土器片類が⑥-2層まで出土、包含層となっている。⑤層が縄文中期であるとする、整合性がなくなる。
- ⑥-2. 黒褐色土 下層黄色土をブロック状に含む。
- ⑥-3. 黒褐色土 ⑦層の暫移層。
- ⑦. 黄色土 砂質で、褐色土がブロック状に混じる。
- ⑧-1. 黄白色砂層 ⑦層をブロック状に含む。
- ⑧-2. 白色砂層 鉄分凝集ブロックを含む。
- ⑧-3. 黒褐色土 砂質で、黒味が強い。
- ⑨-1. 黒灰色砂層 ⑨-2. 黒褐色砂層
- ⑩-1. 白色砂層 ⑩-2. 黒灰色砂層 ⑩-3. 淡青白色砂層
- ⑪. 灰色砂層 ⑪. 青灰色砂層

<2区東側の低地部>

1. 褐灰色土(10YR6/7) 耕作土
2. 黒褐色土(10YR3.5/1) 砂質土を含む。
3. 灰黄褐色土(10YR 4/3) 砂質土。
4. 褐灰色(10YR4/1)砂質。
5. 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質土30%含む。
6. 灰黄褐色土(10YR4.5/2) 1面水田耕作土。
7. 灰黄褐色土(10YR4.5/2) 砂質土5%含む。
8. 灰黄褐色土(10YR4.5/2) 締まり良。粘性少ない。
9. 灰黄褐色土(10YR4.5/2) 締まりやや良。粘性少ない。
10. 灰黄褐色土(10YR3.5/1.5) As-B10%含む層。
11. 黒褐色土(10YR3/1.5) As-B混土層。
12. As-B純層。
13. 黒褐色土(10YR3/1.5) As-B下の水田耕作土(2面)。
14. にぶい黄褐色土(10YR7/3) 細砂質土。
15. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 砂質土。
- 15'. 灰黄褐色土(10YR4/1.5) 砂質土、粗砂中心層(φ0.2~1.5mm)。
16. 黒褐色土(10YR3/1) 粘性ややあり。シルト質土。
17. 黒褐色土(10YR4/1) 3面水田耕作土。シルト質に近い粘質土。



第10図 基本土層図

## 第3章 検出遺構と出土遺物

### 調査の概要

山王・柴遺跡群では、既存の道路による4分割した調査区から近世以降の土坑墓、溝、水田、古墳時代～平安時代の竪穴住居、掘立柱建物、柵、墳墓、粘土採掘坑、土坑、ピット、畠、溝などの遺構を検出し、これに伴う遺物が出土している。また、弥生時代、縄文時代、旧石器時代では遺構は検出されなかったが、遺物が出土している。本報告書では、これらの遺構や遺物について上層から下層の順で報告することとした。

また、概ね画期がみられることから遺構・遺物を時代ごとに区分して掲載した。なお、時代については遺物と遺構の埋没土によって区分している。

なお、時代区分であるが、基本的には考古学的な時代区分を採用しているが、考古学的時代区分では古墳時代以降を歴史時代として一括区分しているため、政治的区分での平安時代(本報告ではAs-B降下以前と以後で区分)の以前と以後を区分できないため、政治的区分と大区分を混在させる不合理がみられるが、敢えて採用した。また、古墳時代～平安時代も時代区分を混在させることになるが、ここでは古墳時代と歴史時代を区分できる遺構として竪穴住居や墳墓、畠があるが、他の遺構ではほとんど遺物が出土していないことや埋没土での区分ができないため、この時代区分による区分とした。

### 第1節 近世

近世遺構は2区東端の低地部から水田跡が確認されたほか、低地部を挟んだ両側の台地上に土坑墓5基、溝24条が確認されている。

本遺跡が立地する赤城白川扇状地では水田跡の発掘例が少なく、上細井五十嵐遺跡のAs-B下水田が確認されているだけである。本遺跡の水田は氾濫性堆積物を起源とする砂質土の下層で確認されたもので、層位的にはAs-Bが混じる黒色土より新しいこと、付近に近世江戸後期の墓域が存在することなどから、その帰属時期についてはそれが近世にまで遡るものと考えた。

#### 1. 土坑墓

近世の土坑墓は、2区4基・3区1基の計5基を調査した。このほか、1区東には調査対象から外した墓地があり、これを含めて畑の片隅に造られた近在集落の墓地と捉えた。土坑墓には略方形形状を呈するものと、略円形状を呈するものがあり、その底面には棺の痕跡が残されていた。また、それぞれの土坑墓には大小があり、そのすべてから人骨が出土し、結果として成人用と幼児用の土坑墓があることが判明した。出土遺物には、六文銭やキセル、矢立などがある。

人骨は専門家に鑑定(第4章の出土人骨分析の項を参照)を依頼、それぞれについて土坑被葬者の性別および年齢、その病歴等について検討した記載した。

#### 2区1号土坑墓(第11図、PL.8・151)

**位置** 2区調査区西寄り、85区J・K-14に位置する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されなかった。2～4号土坑墓とは近接する位置である。

**形状** 土坑上面の平面は不整形形状を呈す。これに対し、底面の形状は方形を呈し、本来的には土坑が方形を呈していたことが分かる。底面には棺の痕跡とみられる円形状の浅い溝(径0.5mほど)が確認されている。

**規模** 長軸1.07m、短軸1.02m、深さ0.93mを測る。

**方位** N-43°-W

**埋没状態** 土層断面では、白色軽石粒を含む灰黄褐色土が順次堆積したように観察できるが、土坑墓の性格上、人為的に埋め戻しが行われたと考える。

**出土遺物** 銭貨・釘が出土している。銭貨は、銅銭12枚が錆化癒着した状態で出土したもの(1)、銭貨6枚が錆化癒着した状態で出土したもの(2)がある。1は、S撚り糸を平織した布が付着していた。両端とも文字面を内側にして、錆付き未分離状態のため、個別銭種は不明である。2は、両端の2枚は寛永通宝で文字面を外側にして錆付いていた。内側の4枚は、未分離のため銭種不明である。釘は3本出土した。すべて角釘で、木片が付着

していた。木棺を留めていた釘と見られる。

**所見** 自然科学分析の結果、被葬者は年齢30歳代の女性であるとされた。底部の円形状の溝から、丸形の木桶に埋葬されていたものと見られる。

#### 2区2号土坑墓(第12図、PL. 8・151)

**位置** 2区調査区西寄り、85区J-14に位置する。

**重複** 29号竪穴住居と重複していた。新旧関係は、本土坑墓のほうが新しい。

**形状** 平面は確認面、底面とも方形状を呈し、断面は箱形を呈す。

**規模** 長軸0.74m、短軸0.70m、深さ0.54mを測る

**方位** N-66°-W

**埋没状態** 29号竪穴住居として調査を進行したため記録を作成していない。

**出土遺物** 銭貨が出土している。銭貨は、13枚が錆びて癒着した状態で出土したもの(1)と、6枚が錆びて癒着した状態で出土したもの(2)がある。1は、両端の銭表面から側面にかけて、断片的にS撚り糸を平織した布が残存していた。両端の2枚は寛永通宝であった。内面の銭貨は未分離のため銭種は不明である。2は、側面にS撚り糸を平織した布が残存していた。端部の1枚は寛永通宝で外縁・文字・郭とも明瞭であり、反対側の1枚は文字面を内側にしており、錆付銭種は不明である。内面の銭貨は未分離のため銭種は不明である。

**所見** 自然科学分析の結果、被葬者は年齢20歳代の男性であるとされた。

#### 2区3号土坑墓(第13図、PL. 8・9・151)

**位置** 2区調査区西寄り、85区J-14に位置する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されなかった。

**形状** 平面は確認面、底面ともが楕円形を呈し、底面には棺の痕跡とみられる円形状の浅い溝が確認された。

**規模** 長軸0.90m、短軸0.84m、深さ0.71mを測る。

**方位** N-43°-E

**埋没状態** 人為的な埋め戻しが行われたと想定される。

**出土遺物** カワラケ、銭貨、釘が出土している。銭貨は、銅銭・鉄銭の複数枚が錆化癒着した状態で出土したもの(4)、銭貨複数枚が錆化癒着した状態で出土したもの(5)、銭貨12枚が錆化癒着した状態で出土したもの

(3)、銅銭3枚が錆化癒着した状態で出土したもの(2)がある。4は、外側の銭は錆色から銅銭と見られるが、全体を覆う錆は鉄さびであり、鉄銭が含まれていると考えられる。錆化が著しく未分離のため銭の枚数・銭種は不明である。5は、両端が銅銭である。内側には鉄銭2～3枚が並んでいるが、錆化が著しく枚数不明。端部から側面にかけて平織の布が錆に覆われて残る。それぞれの銭種は未分離のため不明である。3は、側面から鉄銭1枚と銅銭2枚が確認されるものの、1枚は錆化が著しく不明である。表面には、方向の揃った繊維が絡まる薄い布が幾重にも折り重なっており、その外側の一部に撚りのない糸を平織した布が付着する。それぞれの銭種は未分離のため不明である。2は、外側の一枚が寛永通宝であり、彫の深い外縁・文字・郭とも明瞭である。表面は、方向の揃った繊維が絡まり、薄い布状に残存する。他の銭は錆付着のため銭種不明である。

釘は、2本が出土した。それぞれ角釘で、木片が付着しており、木棺を留めていた釘と見られる。

**所見** 自然科学分析の結果、被葬者は老齢の男性であるとされた。土坑底部は環状にくぼんでおり、木桶に埋葬されていたことが分かる。

#### 2区4号土坑墓(第14図、PL. 9・151)

**位置** 2区調査区西寄り、85区J-14に位置する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されなかった。

**形状** 平面は確認面、底面とも方形を呈す。

**規模** 長軸0.54m・短軸0.52m・深さ0.28mを測る。

**方位** N-12°-E

**埋没状態** 人為的な埋め戻しが行われたと想定される。

**出土遺物** 銭貨・矢立・煙管・釘が出土している。銅銭と鉄銭が錆化癒着した状態で出土したもの(1)、銅銭・鉄銭10枚が錆化癒着した状態で出土したもの(2)がある。1は、銅銭4枚と破損した鉄銭2枚が錆化癒着したように観察される。銅銭1枚と鉄銭1枚を覆い、錆化した平織の布の痕跡が残り、劣化・錆付のためそれぞれの銭種は不明である。2は、銅銭4枚・銅銭5枚・鉄銭1枚がまとまり三角形に錆付いている。このうち端部の銅銭3枚は文字面を内側に向けて錆付き、銭種は不明である。ほとんど撚りのない糸を平織した布が銭貨全体を覆い、錆付いている。

第3章 検出遺構と出土遺物

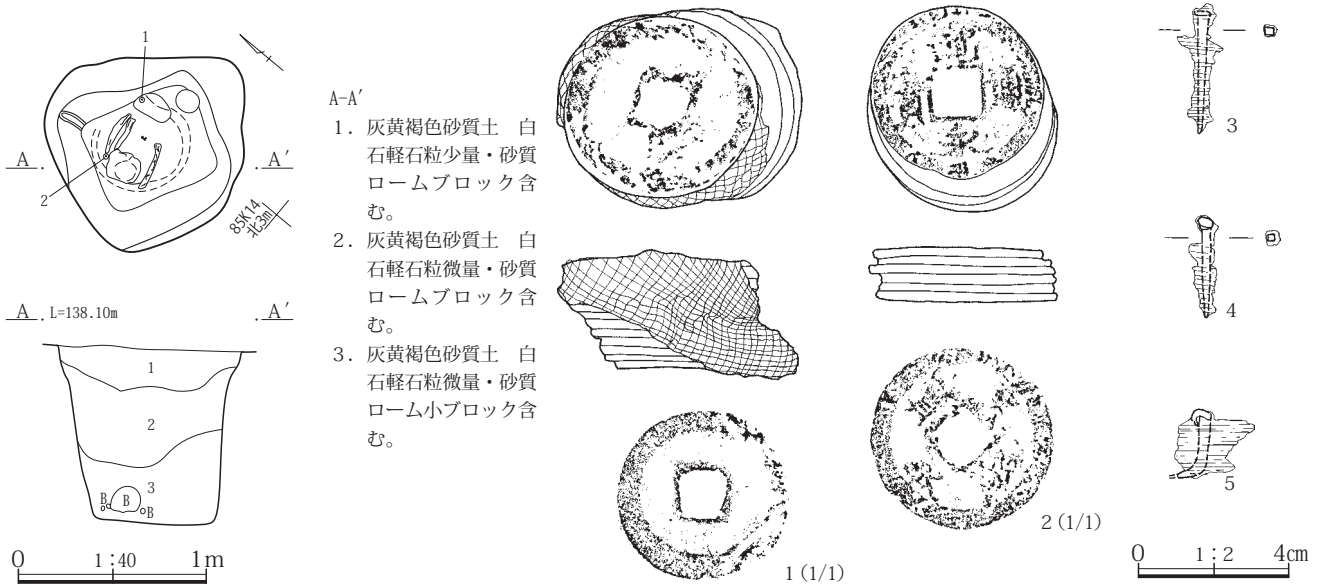
矢立は本体および蓋(4)が出土した。本体は直径約3cm厚さ1.3cmの円筒形の墨壺と、直径0.8cmの円筒形軸部から構成されている。墨壺部の上部は、かまぼこ型の蓋付蝶番により開閉できる構造になっている。軸は9.5cm程で折れ曲がり、長さ11cmほどで破損する。墨壺部分の内面および上部の一部に墨が残存する。また円筒形墨壺の外側面には木綿と見られる平織の布が付着していた。蓋は、円形状部の約3分の2程度の形状を留めており、中央部に蝶番が残存していた。

煙管は2点が出土している。どちらも雁首部分であり、「羅宇(らう)」が端部に残存していた。5は、火皿も形状

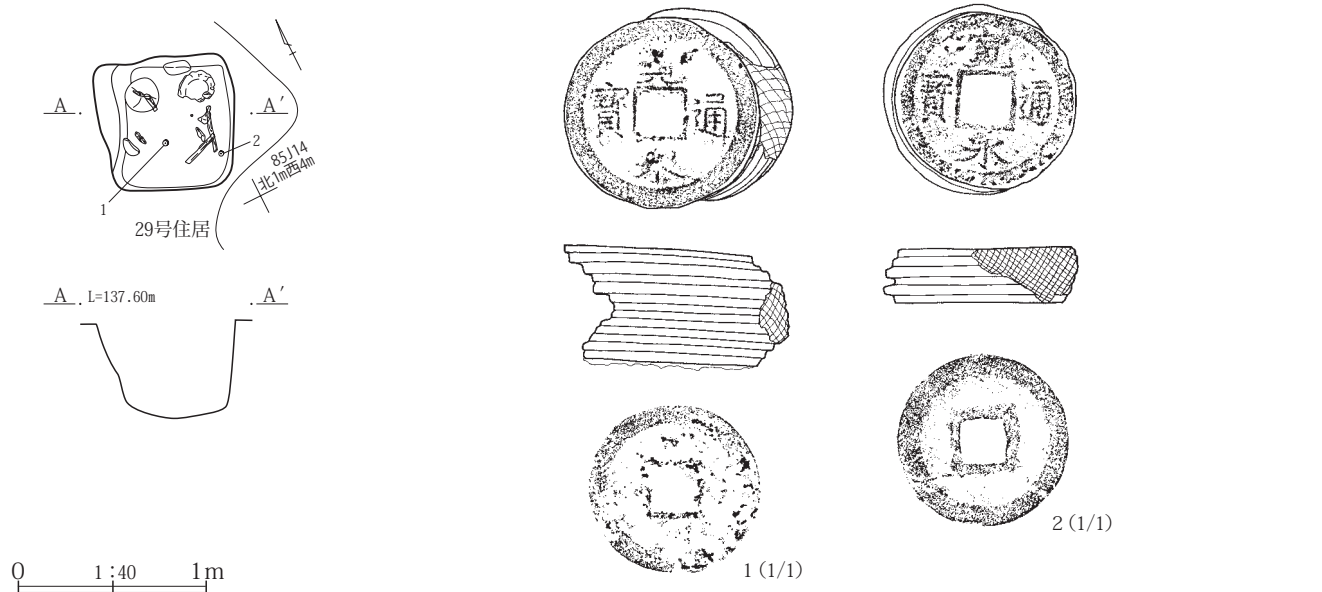
を留めていた。錆の下に一部銀色が見られる。銀を鍍金している可能性が考えられる。

釘は、6本出土した。5本には木片が付着しており、木棺を留めていた釘と見られる。

**所見** 自然科学分析の結果、被葬者は約3歳の女性(女兒)であるとされたが、副葬品には煙管や矢立など3歳の幼児が使用しないものも含まれている。こうした状況が当時の埋葬風習を表すものなのか、別の要因があるのかは不明であるが、近世の埋葬風習の事例としては興味深いものである。

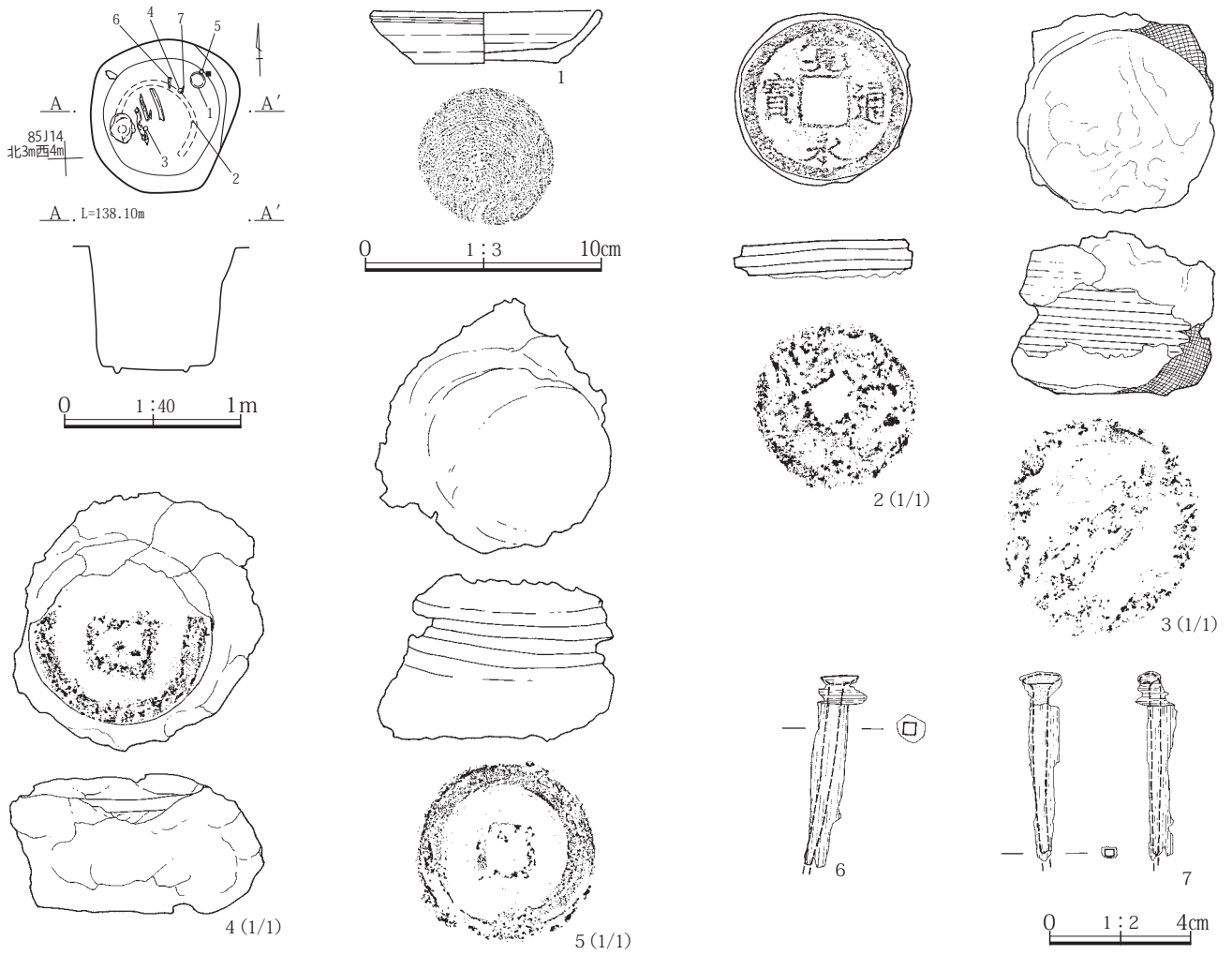


第11図 2区1号土坑墓遺構図・出土遺物図

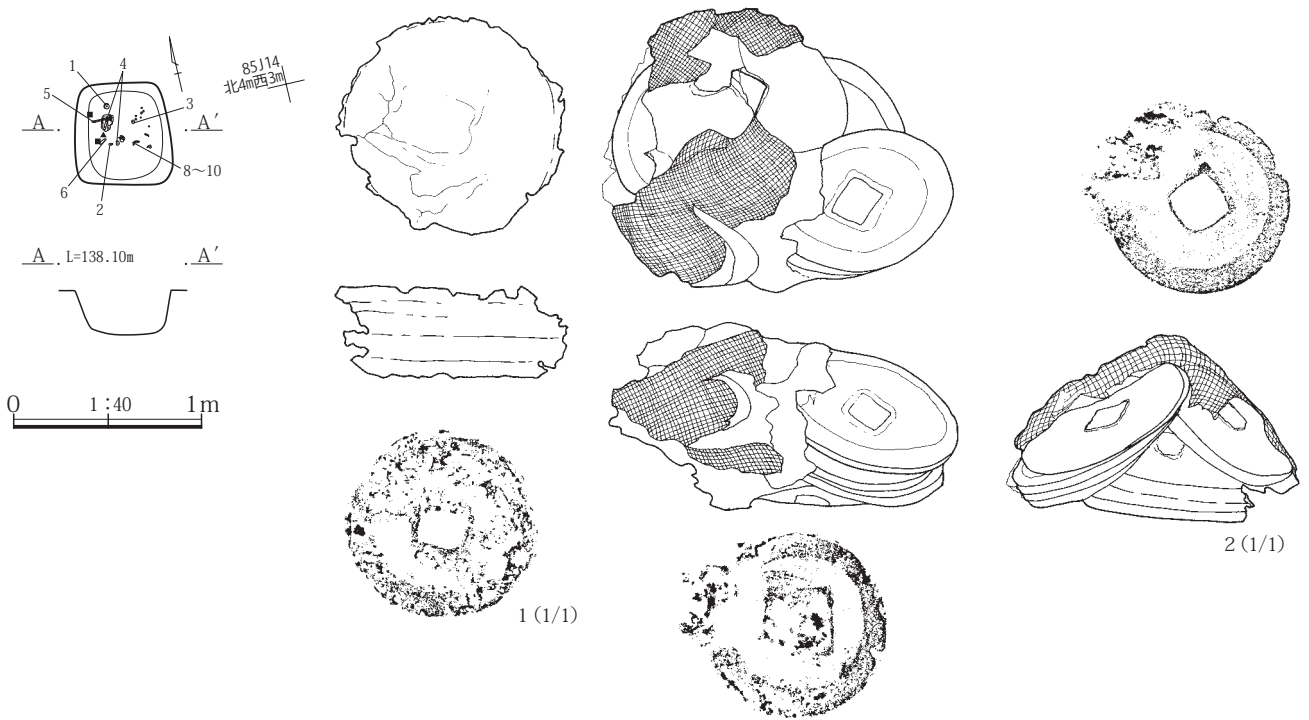


第12図 2区2号土坑墓遺構図・出土遺物図

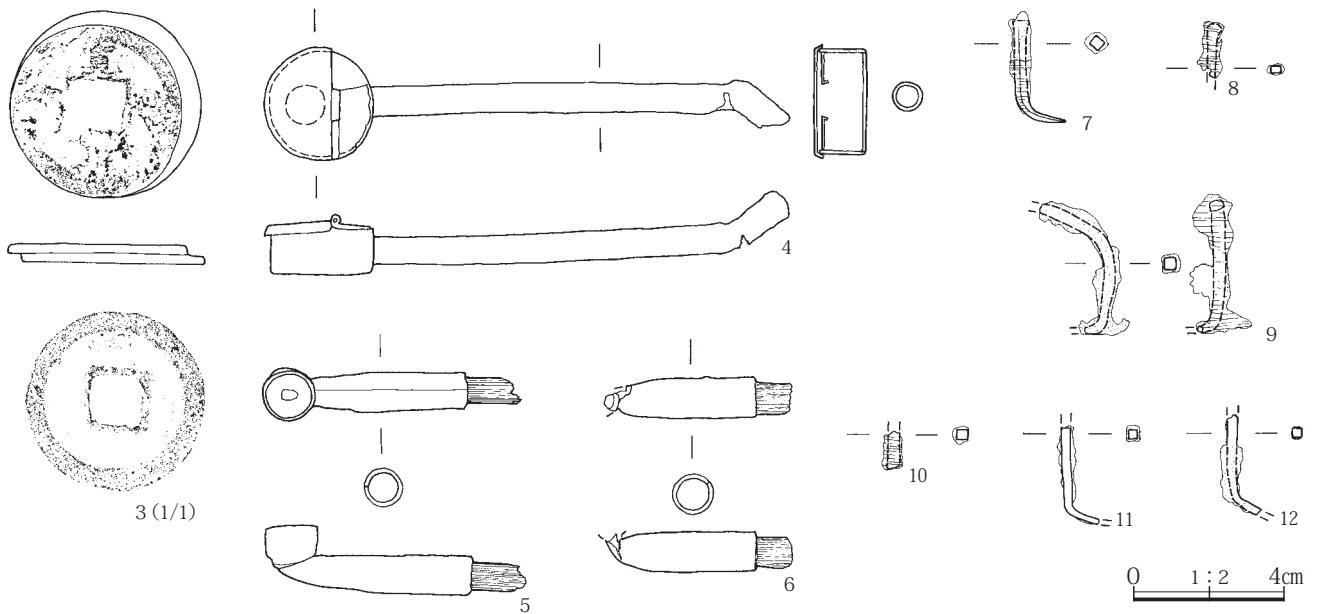




第13図 2区3号土坑墓遺構図・出土遺物図



第14図 2区4号土坑墓遺構図・出土遺物図(1)



第15図 2区4号土坑墓出土遺物図(2)

3区1号土坑墓(第16・17図、PL. 9・152)

**位置** 3区調査区南西隅、84区N-5に位置する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されなかった。

**形状** 平面は確認面、底面とも正方形状を呈す。底面には棺の痕跡とみられる正方形状に浅い溝が残されていた。

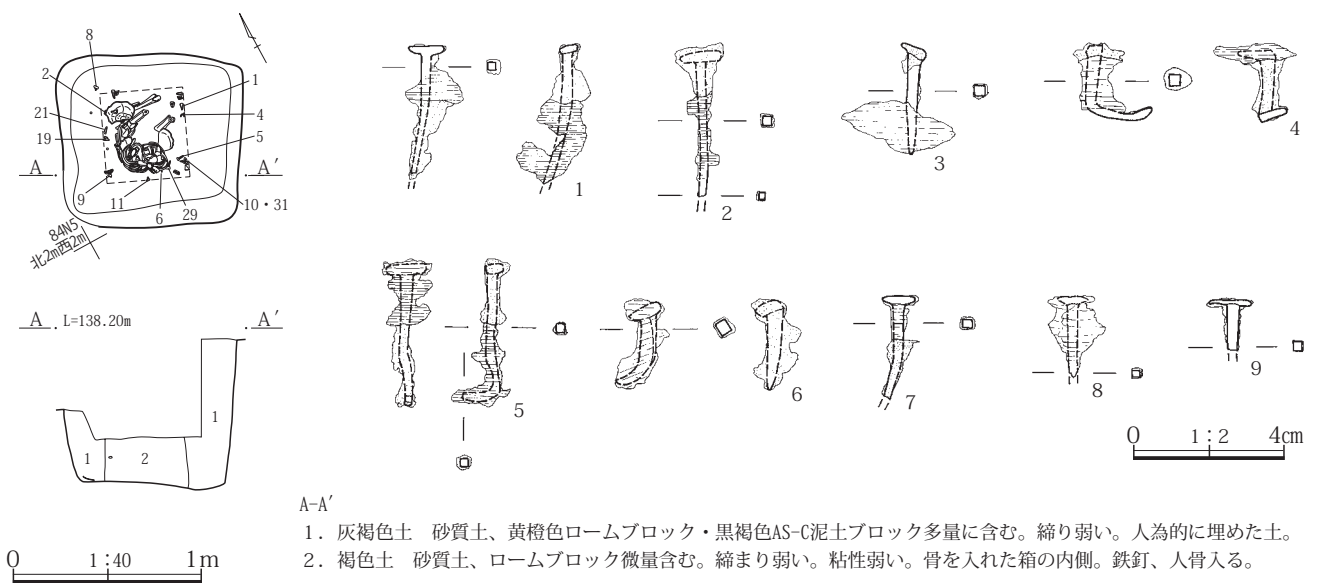
**規模** 長軸0.98m、短軸0.92m、深さ0.77mを測る。

**方位** N-60°-W

**埋没状態** 土層断面では棺の外側とみられる箇所に灰褐色土、内側に褐色土の堆積が観察された。この状態から人為的埋め戻しが行われたとみられる。

**出土遺物** 銭貨・釘が出土している。銭貨は鉄銭および銅銭が錆化・癒着した状態で出土した。全体に厚く鉄錆に覆われ、脆弱なため枚数・銭種ともに不明である。釘は36本が出土した。そのうち出土位置がわかるものは13本であり、それ以外は埋土中から出土した。1本を除いて、木片が付着していることから木棺を留めていた釘と見られる。

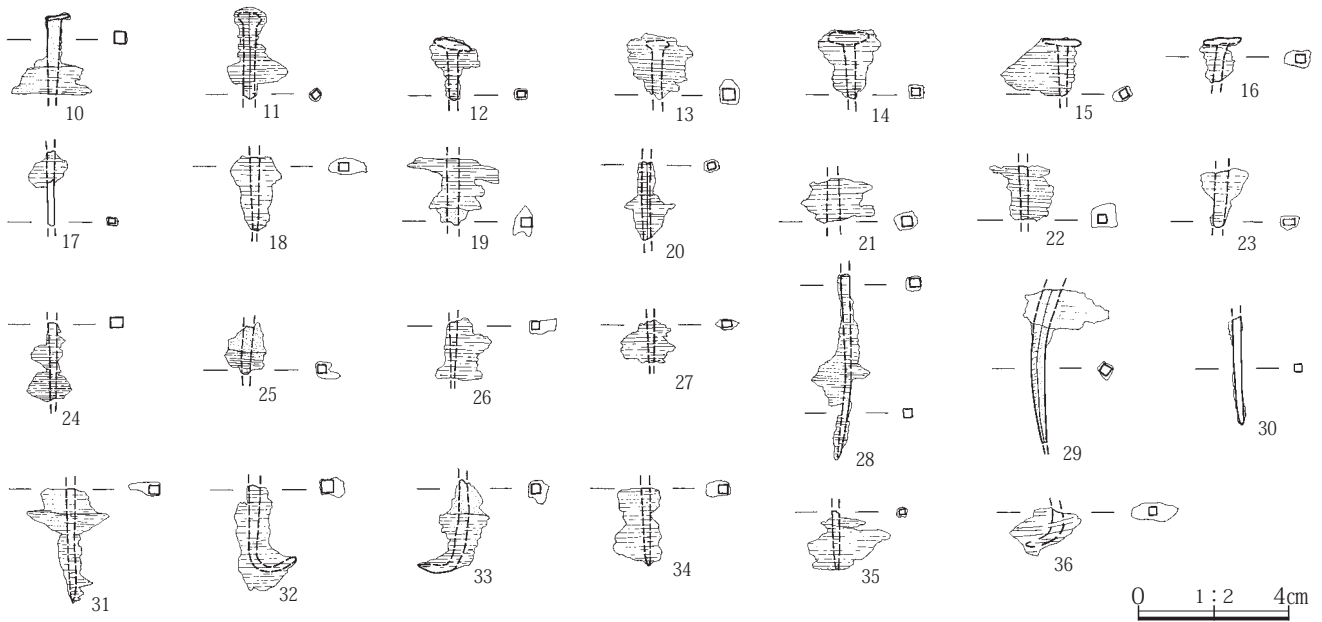
**所見** 自然科学分析の結果、被葬者は年齢30歳代の女性であるとされた。底部に残る正方形状の溝から、方形の木桶に埋葬されたと想定される。



A-A'

- 1. 灰褐色土 砂質土、黄橙色ロームブロック・黒褐色AS-C泥土ブロック多量に含む。締り弱い。人為的に埋めた土。
- 2. 褐色土 砂質土、ロームブロック微量含む。締まり弱い。粘性弱い。骨を入れた箱の内側。鉄釘、人骨入る。

第16図 3区1号土坑墓遺構図・出土遺物図(1)



第17図 3区1号土坑墓出土遺物図(2)

## 2. 水田と溝

2区東端の低地部で、東西方向に区画されたであろう水田を確認した。この低地部は幅20m強と狭く、低地の両側を広げるように水田を開削、給・排水路と見られる溝を西側台地の縁に配していた。台地東側については水路があり、調査を断念しているの、それが古い水路を改修したものか、単に水路を西から東に付け替えたものか、詳細は明らかではない。水田のある低地部は調査地の北へ500mほど延びているが、現在その谷頭に湧水等は確認できていない。台地西側の縁辺を流れる溝は複数条があり、これが水田の給・排水路として機能したことは明らかで、ここでは水田およびこれに伴う溝4条(2区1～3号溝・21号溝)を併せ、その概要を記載する。

### 水田(1面) (第18・19図、PL.9・10・11)

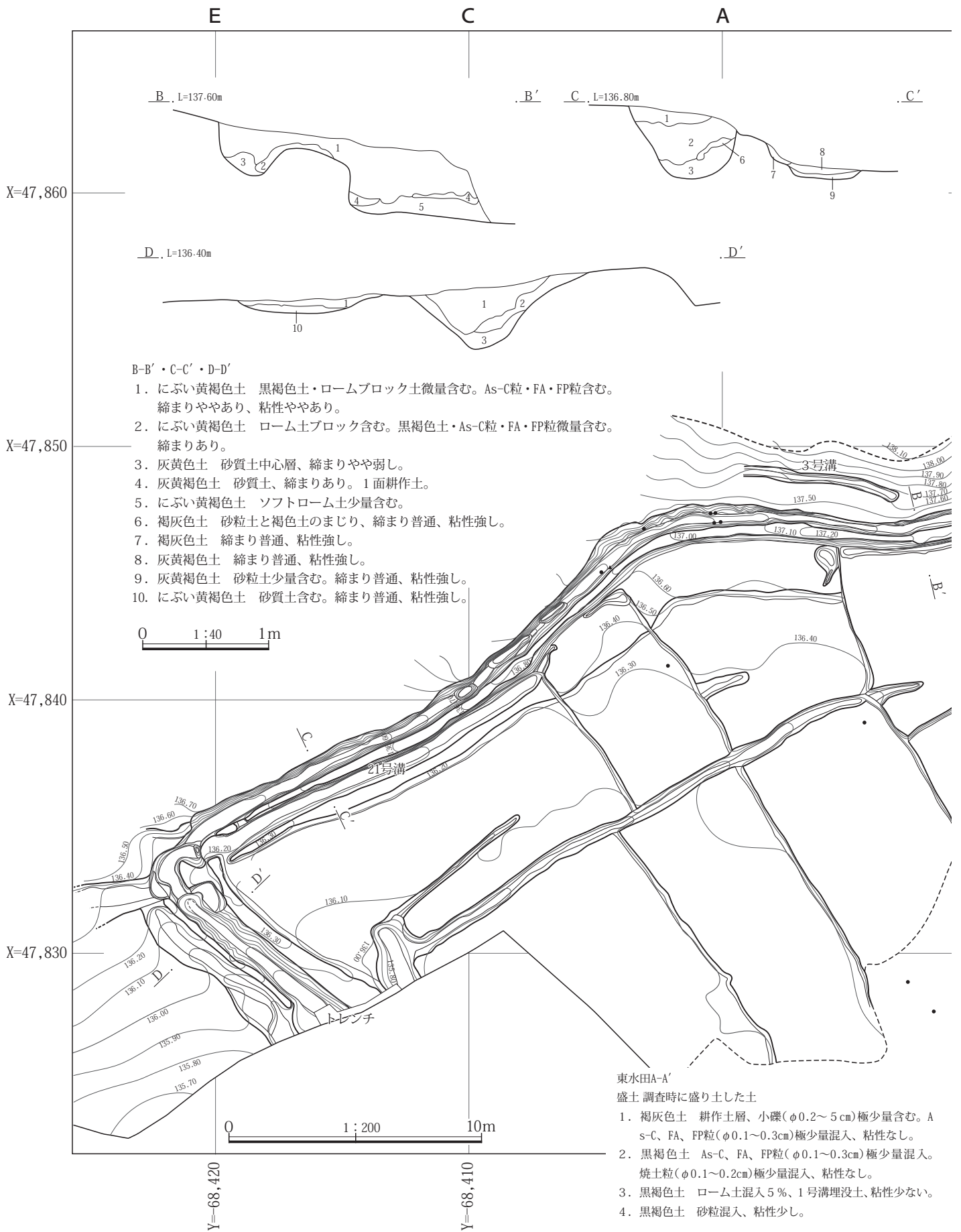
上述したように、水田は赤城白川扇状地内に刻まれた狭い低地部内に残されていた。この低地部は赤城白川の旧流路と見られ、調査地南250mほどで山麓崖線部を深く浸食して広瀬川底地帯に至る。現在、低地部は耕作を放棄されているが、地元農家の話では以前は水田として耕作されていたそうで、これを裏付けるように表土下には斑鉄層が形成されていた。これに対し、明治期の迅速測図では畑地とされ、当地の土地利用の変遷を明らかにすることが課題となるだろう。発掘調査では砂質土の下

層から段造成された耕作面が確認され、畝冊が確認されないことや台地縁辺に溝が配されていたことから、水田と考えた。

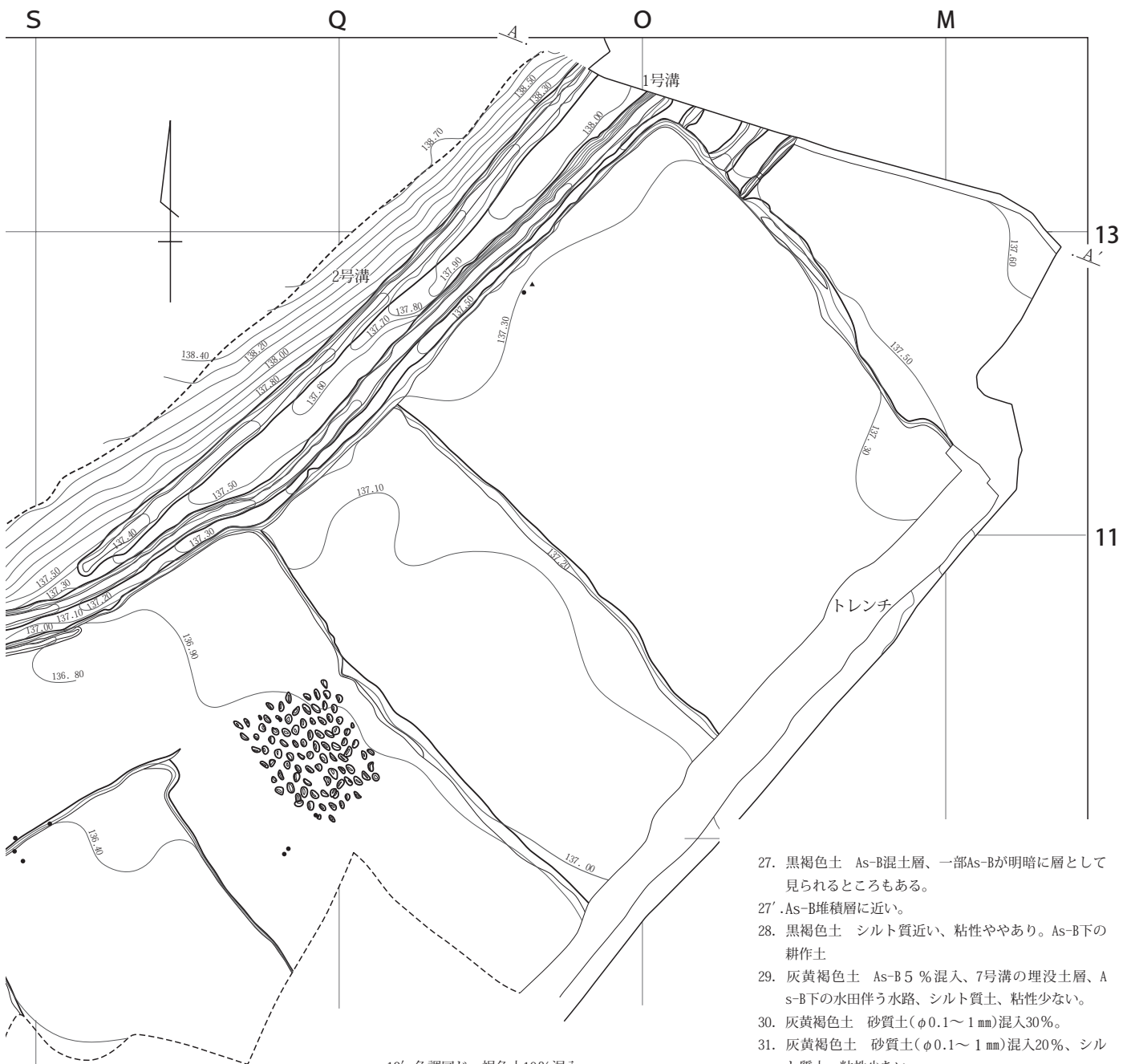
水田面に明確な畦畔が確認されていないが、北から南に段々に造成され、水田面1面が確認されている。調査所見には水田面は砂質土(3層)を除去して確認されたとあり、84区Q-9グリッド付近に鋤先痕(第18図)が残されていたとある。

水田は地形の傾斜に直交するように東西方向に畦畔を配し、全体としてハシゴ状に区切られていた可能性が高い。幅の狭い低地部を横に水田を区画する明確な畦畔は確認されていないが、北側水田面と南側水田面は1.5mの比高差があり、比較的勾配(2.3%)が強く、ハシゴ状に水田を区画することでこれに対処したものと見られる。水田は84区N-13グリッド～85区D-6グリッドに広がり、面積は864.9㎡ほどである。低地部中央付近(Sライン)には縦方向の段があり、L字型となる水田区画がある。また、この水田区画より南西側には台地縁辺の溝に並行する溝や段がある。これについては水田面を切るように見えるところもあり、東西方向の段が食い違っているところもあり、その性格は明らかにできないが、台地側に水田を広げたということも考えておくべきかもしれない。

この水田調査に伴い溝4条が台地西側縁辺で確認されている。溝の埋没状態からみる限り、通水していたよう



第18図 2区1面水田遺構図(1)



- 5. 灰黄褐色土 鉄分沈着層、砂質土10%、粘性少し。
- 6. 灰黄褐色土 砂質土主体(φ0.1~2mm)褐色土混入30%。
- 7. 6層に近似、鉄分沈着の強い層、内容物6層と同様。
- 8. 灰黄褐色土 砂質土鉄分沈着が強めの層、褐色土混入10%。
- 9. 灰黄褐色土 砂質土主体(φ0.1~2mm)褐色土混入15%の混入多い。
- 10. 褐灰色土 砂質土多い60%(φ0.1~2mm)。
- 11. 褐灰色土 砂質土層(粗砂~細砂)(φ0.1~2mm)褐色土3%ほど混入。
- 11'. 11層と同色 砂質土層、小礫含む。
- 11''. 11層と同色 砂質土主体、小礫含む5%。
- 12. 褐灰色土 砂質土主体、褐色土30%混入。
- 13. 褐灰色土 砂質土主体、褐色土20%混入。

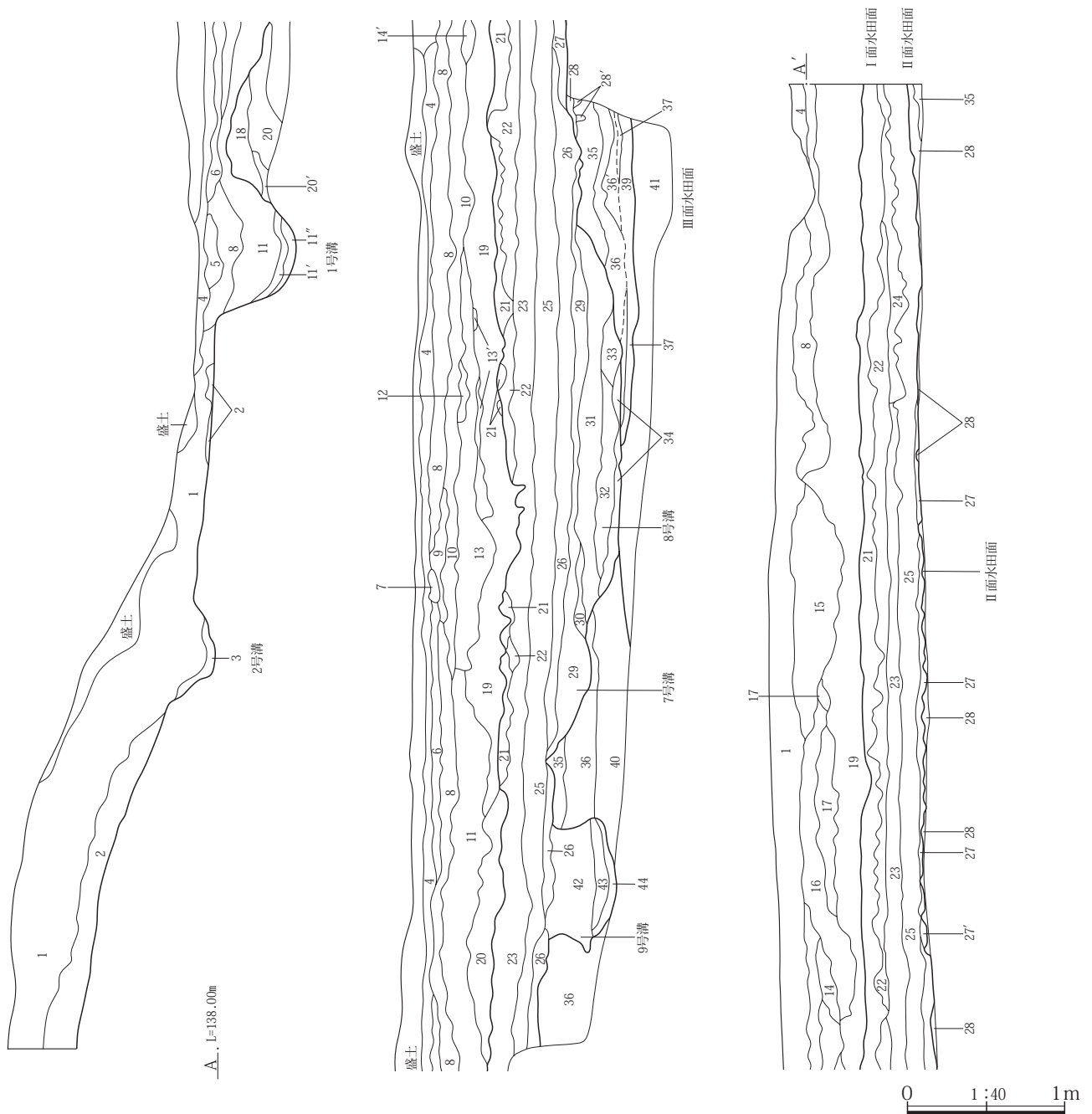
- 13'. 色調同じ、褐色土10%混入。
- 14. 褐灰色土 砂質土50%。
- 15. 褐灰色土 灰色土主体80%、砂質土20%混入。
- 16. 褐灰色土 砂質土60%、灰色土40%。
- 17. 褐灰色土 砂質土40%、灰色土60%。
- 18. 18層に比べ、灰色土の割合高い70%、砂質土30%。
- 19. 灰黄褐色土 砂質土30%混入、褐色土70%。
- 20. 灰黄褐色土 砂質土40%、褐色土60%。
- 20'. 灰黄褐色土 20層に比べやや黒味あり。
- 21. 灰黄褐色土 砂質土混入10%(耕土が川の氾濫により攪乱して砂が耕土に入り込んでいる)。水田耕作土
- 22. 灰黄褐色土 砂質土混入5%。
- 23. 灰黄褐色土 締まり良、粘性少し。
- 25. 灰黄褐色土 締まりやや良、粘性少し。
- 26. 灰黄褐色土 As-B10%混入、FA、FP粒(φ0.1~4cm)極少量混入。

- 27. 黒褐色土 As-B混土層、一部As-Bが明暗に層として見られるところもある。
- 27'. As-B堆積層に近い。
- 28. 黒褐色土 シルト質近い、粘性ややあり。As-B下の耕作土
- 29. 灰黄褐色土 As-B5%混入、7号溝の埋没土層、As-B下の水田伴う水路、シルト質土、粘性少ない。
- 30. 灰黄褐色土 砂質土(φ0.1~1mm)混入30%。
- 31. 灰黄褐色土 砂質土(φ0.1~1mm)混入20%、シルト質土、粘性少ない。
- 32. 黒褐色土 砂質土(φ0.1~0.5mm)、シルト質土。
- 33. 黒褐色土 シルト質土、砂質土混入5%(φ0.1~0.2mm)。
- 34. 黒褐色土 やや粘性あり、焼土粒(φ0.1~0.2mm)極少量混入。
- 35. にぶい黄褐色土 細砂質土。
- 36. にぶい黄褐色土 砂質土(φ0.1~2mm)細砂粒~粗砂混入の土、鉄分沈着。
- 36'. 灰黄褐色土 砂質土(粗砂φ0.2~1.5mm)主体。
- 37. 黒褐色土 やや粘性あり、粘土に近いシルト質土。
- 39. 黄灰色土 38層と対応する層、砂質土(φ0.1~1mm)シルト質土がラシナ状に入る。
- 40. 褐灰色土 やや粘性あり、シルト質土に近い粘質土。
- 41. 黒褐色土 やや粘性あり、粘土に近いシルト質土。
- 42. 黒褐色土 シルト質土。9溝埋没土
- 43. 黒褐色土 締まりやや弱い。9溝埋没土
- 44. 黒褐色土 小礫混入。9溝埋没土

にはみえないが、溝3条(1～3号)については位置的に見て水田に伴う給・排水用の溝となる可能性が高い。1号溝は調査区南西端で直角に折れ、それより下(南西側)は谷地形に移行する。これはこの地点が地形変換点に当たり、浸食力が大きくなるためであるが、自然排水するだけなら、直角に曲げる必要がなく、下流側の土地利用に関係しているということだろう。水田面に近い21号溝については給・排水溝としての機能を想定するには無理があり、「畦塗り」等の耕作に関連した痕跡と考えておきたい。また、北側水田面にある段に直交する溝とL字状を呈する水田面より下手(西)の溝は連続する位置関係に

あること、その下流側端部が直角に曲がるなど、1号溝が直角に曲がる状態と相同関係にあり、耕作地の拡大という枠内で理解されるだろうと考えている。

水口については判然としないものの、調査区中央付近の水田面には、その北西側が変形するものや、幅の狭い溝がとりつくものがあり、注意しておきたい。鋤先痕は部分的な確認に止まり、その詳細は不明である。上層の砂質土が河川氾濫に起源するものなら、復旧痕の一種ということになるだろう。ここでは、状態の良い84区Q-9グリッド付近の鋤先痕を図化した。



第19図 2区1面水田遺構図(2)

3. 溝(第20~24図、PL.12~18)

3区に2条と4区全域に溝20条が確認されている。このうち、4区7・8号溝としたものは溝幅が広く、残る溝18条は溝幅も概ね一様で、互いに直交するように確認されている。調査所見では、これらについて溝の切り合い関係は確認できていないとされているが、溝幅が明らかに異なることを踏まえれば、近接する時間内の前後関係を認めざるを得ない状況にある。

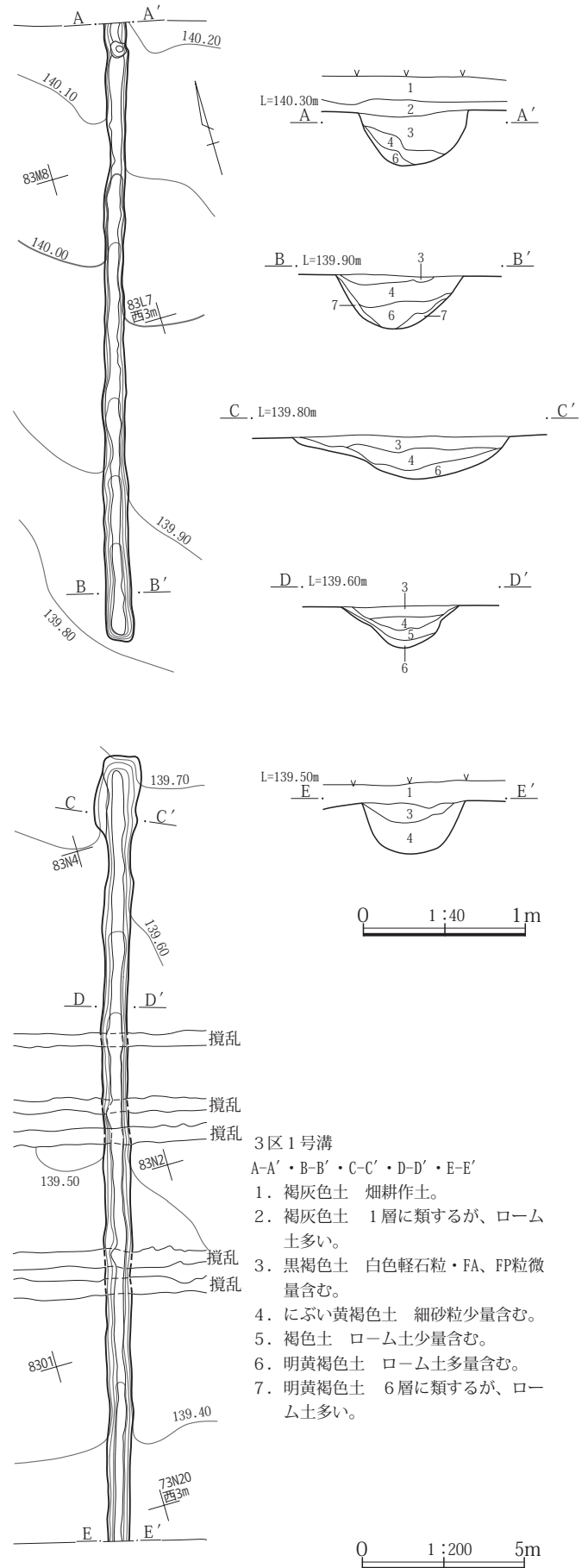
7・8号溝は溝幅が広いところで2m弱、狭いところで1m強があり、斜面部を下がる南ほど幅が狭い。溝は途中で切れ、3mほど間を置いて続いている。これと同じ構造を持つ溝(3区1号溝)が3区にもあり、これを含めてその性格を検討されるべきだろうが、出土遺物による時期決定は難しい。

残る18条の溝は、方形区画されたように確認されている。半数が調査区外に延びており、その全貌は不明とせざるを得ないが、南北方向に延びる溝8条、東西方向に延びる溝8条がある。両者は直交関係にあり、溝幅も多様だが、南北軸に延びる溝が10cmほど広く、深い傾向を示している。主軸方位は南北軸の溝が約16°東に、東西軸の溝が約75°西に振れる。いずれも直交しているが、明確な切り合い関係は見られない。南北軸の溝は5条(1・2・4・6・8号溝)があり、1-2号溝間が11.5m、2-4号溝間が11m、4-6号溝間が12.3m、6-8号溝間が8mの間隔を置いている。東西軸の溝は19-10号溝間が5m、10-12号溝間が4m、12-13号溝間が9.5m、13-15・16号溝間が9m、15・16-17号溝間が9m弱の間隔を置いている。方形区画されたそれぞれは、狭いところで60m<sup>2</sup>弱、広いところで100m<sup>2</sup>弱ということになる。

方形に区画されたそれは、ほぼ現道に並行する。遺構の確認地点は扇状地内の独立丘陵「蟬山」の北側で、明治期の迅速測図では雑木林とされ、現道は記されていない。これにより、本遺構は明治期を遡らないものとする事ができるだろう。

3区1号溝(第20図、PL.12)

本溝は、途中で中断する箇所があるが、一直線上に位置することや埋没土がほぼ同様であることから同一時に掘削された遺構と判断し、同一遺構名称を付けた。なお、



第20図 3区1号溝遺構図

北側をA、南側をBとした。

**位置** 3区調査区東寄り、A部分は83区L-7・8、M-5~7、B部分は73区N-19・20、73区N-1~3、83区M-1~4に位置する。南北とも調査区外に延びる。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されなかった。

**形状** 平面はほぼ同一の幅で直線である。断面は、本来A-A'にみられるような箱形を呈していたとみられるが、廃棄、埋没段階で壁の崩落などによって丸みを持った断面になったとみられる。

**規模** 調査範囲内では、A部分の全長が19.0mであり、幅は、上端0.85~0.43m、底面0.46~0.20m、深さ0.27~0.15mである。B部分の全長は24.2mであり、幅は、上端1.30~0.65m、底面0.32~0.20m、深さ0.28m~0.18mである。

**走行** 方位はN-16°-Eを指す。勾配は、北から南に低くなっており、A部分が比高差0.41m、勾配率2.2%である。B部分は比高差0.29m、勾配率1.2%である。

**埋没土** 土層断面では、地点により堆積状態がやや異なるが黒褐色土・褐色土・明黄褐色土が流れ込み、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**出土遺物** 遺物の出土はみられなかった。

**所見** 水流の痕跡は確認されないことから、区画をする目的に掘削されたと想定される。

なお、本溝と4区7号溝・8号溝は平行する位置にあり、途中の中断する位置や間隔がほぼ同様であることからほぼ同時期に掘削されたことが想定される。

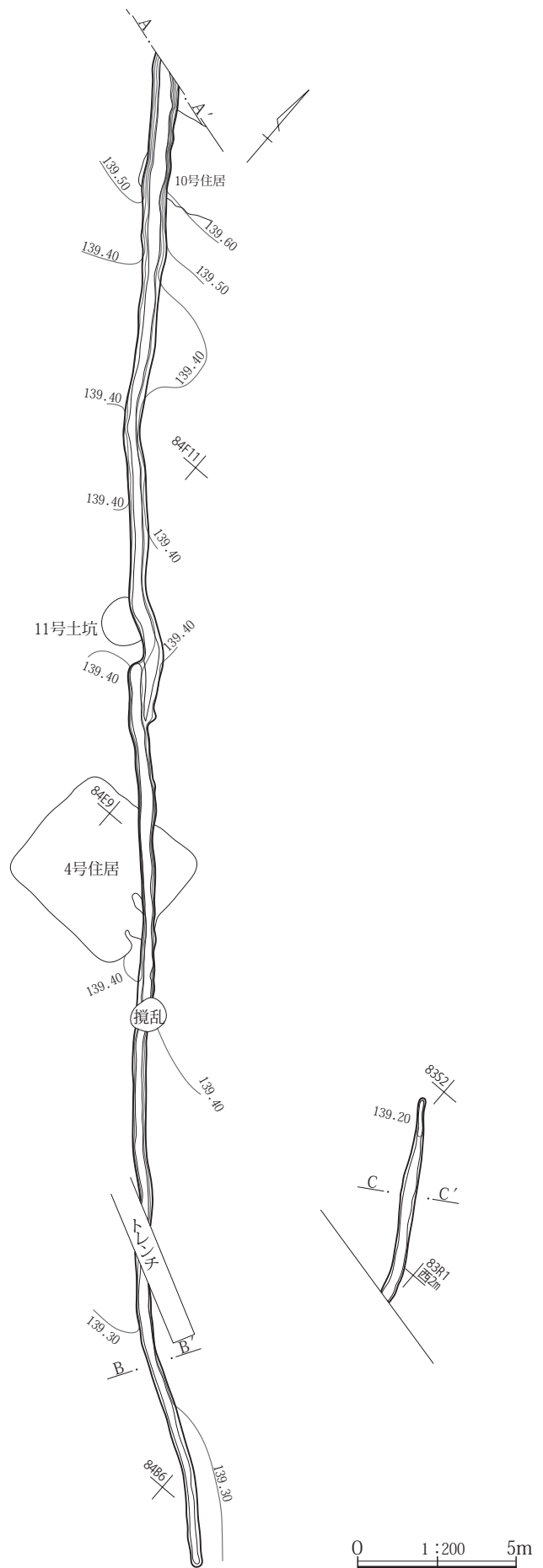
### 3区2号溝(第21・22図、PL.12・13)

本溝は、途中に中断する個所や断面形状が異なるなど共通点に欠くところがあるが、ほぼ直線上に位置することから、発掘調査時には同一時に掘削された遺構と判断し、同一遺構名称を付けた。なお、北側をA、南側をBとした。

**位置** 3区調査区を北西から南北に斜めに位置する。グリッドではB部分が73区R-20、83区S-1、A部分が84区A-4~G-12にあたる。南北とも調査区外に延びる。

**重複** 4号竪穴住居、10号竪穴住居、11号土坑と重複する。新旧関係は、本溝のほうが新しい。

**形状** 平面は若干蛇行するが、直線的である。断面はA



第21図 3区2号溝遺構図(1)



部分は丸みを持つ逆台形状、B部分は皿状である。

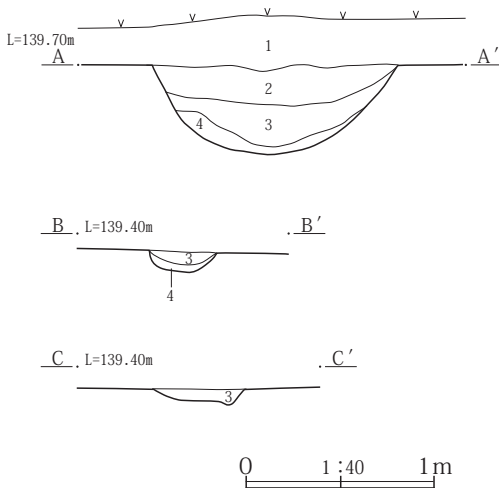
**規模** 調査範囲では、A部分が全長47.6m、幅は、上端1.00~0.35m、底面0.34~0.10m、深さ0.37~0.04mである。B部分は全長が6.50m、幅は上端0.48~0.18m、底面0.34~0.10m、深さ0.11m~0.05mである

**走行** 方位はN-30°~39°-Wを指す。勾配は北西から南東に低くなっており、A部分が比高差は0.29m、勾配率は1.2%である。B部分が比高差は0.10m、勾配率は1.5%である。

**埋没状態** 土層断面では、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**出土遺物** 図示できる遺物は鉄器が1点出土しているだけである。この他に土師器片が21点178g出土している。これらの遺物は重複する竪穴住居のものと思われる。

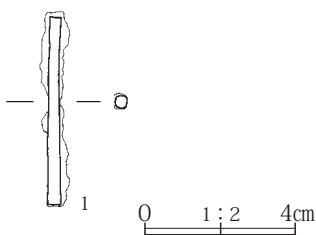
**所見** 水流の痕跡は確認されないことから、区画をする目的で掘削されたと想定される。時期は重複する遺構から中世以降に想定される。



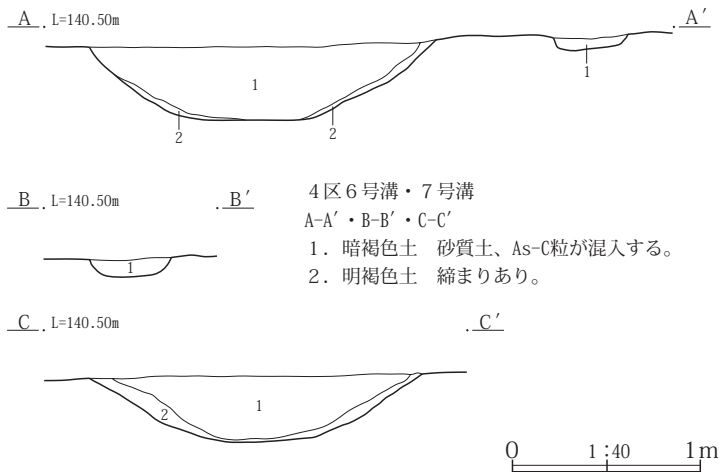
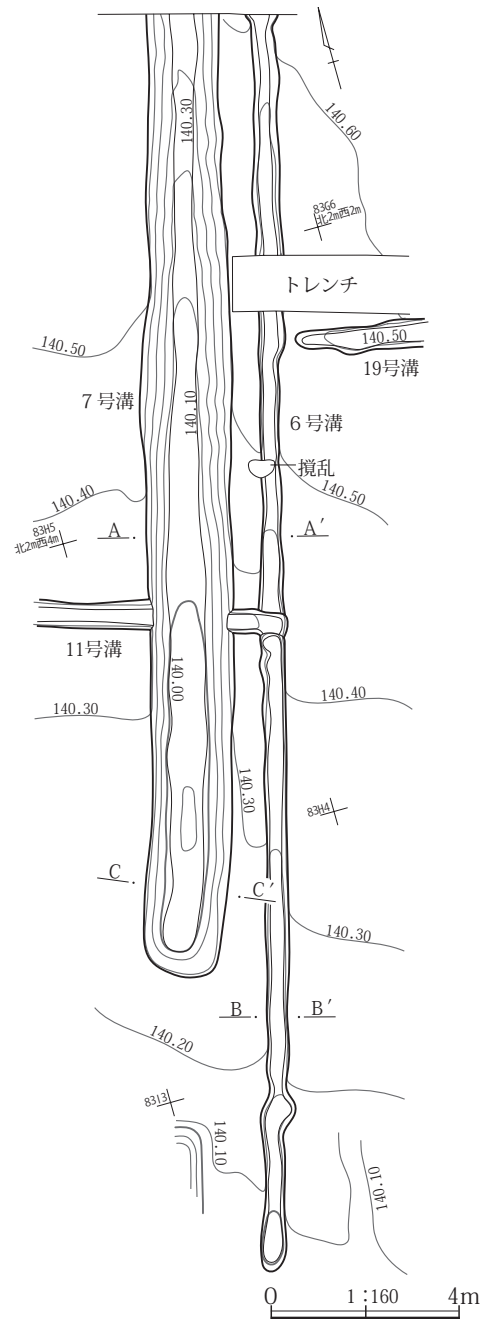
3区2号溝

A-A'・B-B'・C-C'

1. 灰黄褐色土 耕作土。
2. 黒褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。
3. 灰黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。
4. にぶい黄褐色土 ローム土微量含む。



第22図 3区2号溝遺構図(2)・出土遺物図

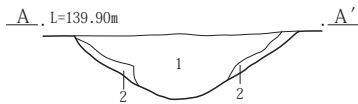
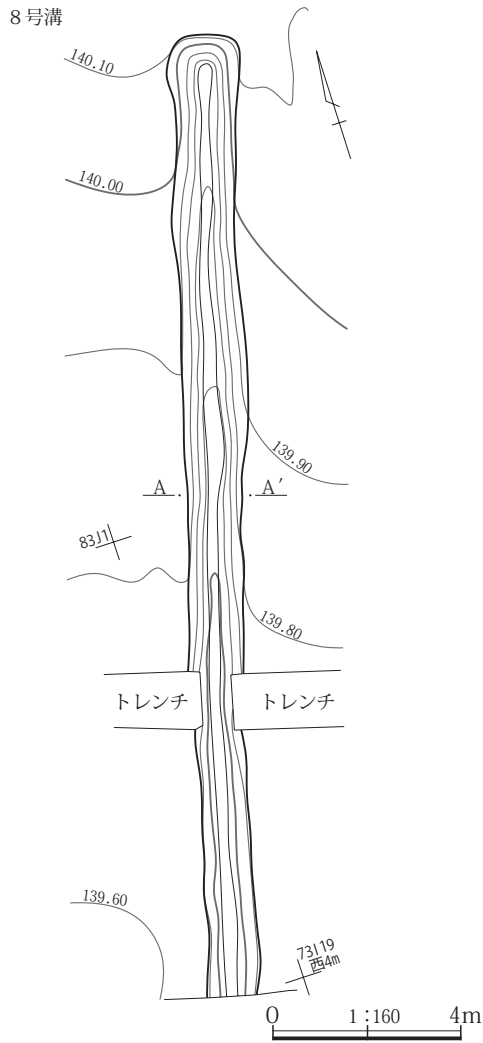


4区6号溝・7号溝

A-A'・B-B'・C-C'

1. 暗褐色土 砂質土、As-C粒が混入する。
2. 明褐色土 締まりあり。

第23図 4区6・7号溝遺構図

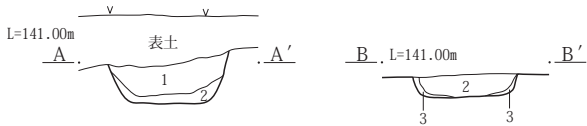


4区8号溝

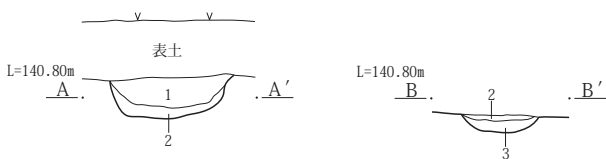
A-A'

1. 暗褐色土 砂質土、As-C粒が混入する。
2. 明褐色土 縮まりあり。

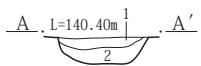
1号溝



2号溝



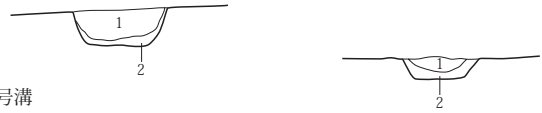
3号溝



※平面図は付図参照  
A-A'の方向は南から北を見ている  
西から東をみている

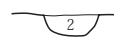
4号溝

A, L=140.50m .A' B, L=140.50m .B'



5号溝

A, L=140.10m .A'



16号溝

B, L=140.10m .B' C, L=140.10m .C'



9号溝

A, L=140.30m .A'



11号溝

B, L=140.40m .B'



10号溝

A, L=141.00m .A' B, L=141.00m .B'



C, L=141.00m .C'



12号溝

A, L=140.70m .A'



13号溝

A, L=140.10m .A'



14号溝

A, L=140.10m .A'



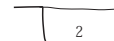
15号溝

A, L=140.20m .A'

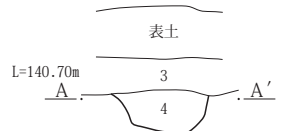


17号溝

A, L=140.00m .A'



18号溝



19号溝

A, L=141.30m .A'



20号溝

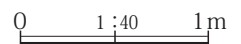
A, L=140.80m .A'



4区1～5・9～20号溝

A-A'・B-B'・C-C'

1. 暗褐色土 砂質土、As-C粒が混入する。
2. 明褐色土 縮まりあり。
3. 灰褐色土 砂質土、白色軽石微量含む。縮まり弱い。粘性なし。
4. 暗褐色土 砂質土、As-C粒微量含む。縮まり弱い。粘性弱い。
5. 灰褐色土 砂質土、As-C粒・丸礫微量含む。縮まり弱い。粘性なし。
6. 暗褐色土 砂質土、As-C粒・明黄褐色ロームブロック微量含む。縮まり弱い。粘性なし。



第24図 4区1～5・8～20号溝遺構図

## 第2節 古墳時代～平安時代

この時代の遺構としては、竪穴住居、掘立柱建物、柵、墳墓、粘土採掘坑、土坑、ピット、谷地、溝、畠、水田などを検出している。なお、水田はアゼ等の遺構は検出されていないが、自然科学分析でのプラントオパール分析の結果から水田が存在したとみられることから掲載した。

竪穴住居と畠については、出土遺物や埋没土によって画期がみられることから時期の区分を行って掲載した。

時期の区分は、前述のように出土遺物や埋没土によるが、詳細はそれぞれの項に記載してある。

竪穴住居と畠以外は、遺物が出土していない遺構がほとんどで遺物での時期が比定できないのと、埋没土による区分もAs-CやHr-FAの含有、As-Bを含有しないなど大まかに古墳時代から平安時代(As-B降下以前)としか判断できないため区分していない。

なお、墳墓では構築されている時期が、古墳時代中期から後期にまたがるが、その年代幅は概ね半世紀から3四半世紀の間に推移していたと想定され、さらに画期を見出すことが難しいことから、区分を行わなかった。

### 1. 竪穴住居

今回の山王・柴遺跡群の発掘調査では、竪穴住居を92棟検出した。竪穴住居は古墳時代前期から平安時代にかけての時期に比定できる。これらの竪穴住居は、属する時代や時期の区分を比較的明確することが可能であるため、掲載にあたっては、「飛鳥時代～平安時代の竪穴住居」、「古墳時代後期の竪穴住居」、「古墳時代前期～中期の竪穴住居」に区分した。なお、時代の名称については考古学的時代区分と政治的時代区分を混在させる。考古学的時代区分の歴史時代を使用するとその後の時代との区分での名称に不都合が生じるが、あえて使用した。

区分の基準は、古墳時代後期と飛鳥時代を区分するものとしては金属器模倣の土器出現をもって行った。そのため、飛鳥時代は本来7世紀初頭からであるが、古代上毛野では金属模倣の土器出現は7世紀中頃になってからであるため齟齬が生じているが、ここでも適切な時代名称が見当たらないため「飛鳥時代」を使用した。

次に「古墳時代後期」と「古墳時代前期～中期」の区分であるが、竪穴住居の火処として炉からカマドへの変化と土器において須恵器杯模倣の土師器杯が出現する時期もこの時期であることから、この2要素をもって区分した。しかし、カマドや模倣杯の出現は5世紀後半の段階で起きていることなので本来なら区分の基準とすることに問題があるが、幸いなことに山王・柴遺跡群では5世紀後半に比定できる竪穴住居が検出されていないことから便宜的に採用した。

竪穴住居は、1区調査区から4区調査区まで分布するが、東へ向かうほど減少している。時期別にみると「飛鳥・奈良・平安時代」の竪穴住居は、27棟を検出している。この分布は、1区調査区では検出されず、2区39号竪穴住居が2区調査区南西隅に単独で位置するほかは、2区調査区北東部から4区にまとまっている。

「古墳時代後期」の竪穴住居は46棟を検出している。この分布は、1区調査区と2区調査区にまとまっており、3区調査区の北西隅に位置する3区5号竪穴住居が最も東端に位置するものである。

「古墳時代前期」の竪穴住居は19棟を検出している。この分布は「古墳時代後期」の竪穴住居とほぼ同様に1区調査区と2区調査区である。

発掘調査した範囲が、道路予定地に限定されるものの時期によって集落が移動した可能性が窺える。

なお、詳細な変遷については、総括にて記述する。

掲載にあたってはできるだけ発掘調査での見解を重視しているが、出土遺物の中には重複関係などから取り扱いが異なる場合が生じているものもみられた。こうした遺物については遺構を移動したものがある。

カマドの記載にあたっては、従来、竪穴住居内に構築されている焚口から燃焼部の両側に設けられている部分を「袖」と呼称しているが、この部分については前記のように焚口から燃焼部までを表している。今回、カマドを観察していると焚口が残存しているのは1区16号竪穴住居などごく一部であることから、この部分については「燃焼部側壁」として記載した。

(1) 飛鳥・奈良・平安時代の住居

2区5号竪穴住居(第25・26図、PL.19・152)

**位置** 2区調査区北側の中ほど、85区B-17、C-17・18に位置する。調査区北端に位置するため、全体の4分の3ほどが調査区外に存在するため全貌は不明である。

**重複** 40号竪穴住居と重複する。本竪穴住居跡5号竪穴住居の方が新しい。また、土層断面では東側で竪穴状の落ち込みが確認されたが、明確にすることができなかった。

**形状** 長方形ないし方形を呈するものと考えられる。

**規模** 長軸5.30m、短軸の残存長は0.87m、南辺は5.00mを測る。

**面積** 調査範囲内の床面積は4.59㎡である。

**方位** N-70°-W

**埋没状態** 土層断面では、大部分が白色軽石粒を含む灰黄褐色土・黒褐色土で埋没していることが観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 床面は、灰黄褐色土を使用し、構築されていた。確認面から床面までの深さは、0.11~0.18mを測る。

**掘方** 掘り込みが住居全体に施されているが、東辺と西辺の壁寄りの0.50mは床面より5cmほどであったが、その内側は20cmほどと深い掘り込みであった。なお、床下土坑などの施設は確認されなかった。

**壁溝** 調査範囲内では、検出されなかった。

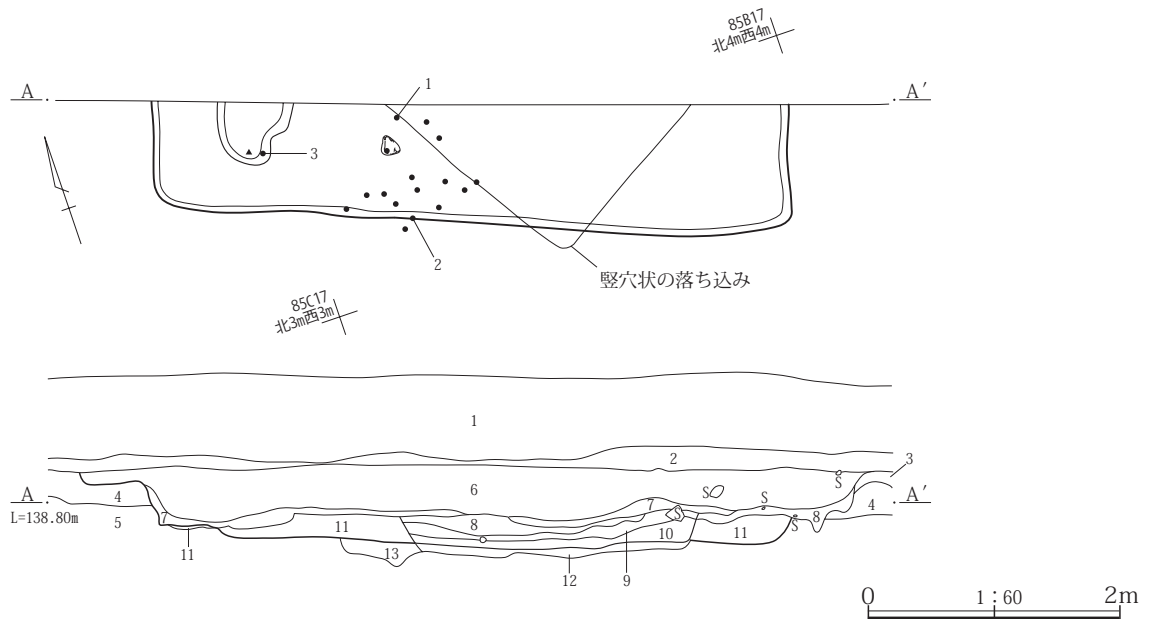
**柱穴** 調査範囲内では、検出されなかった。

**貯蔵穴** 調査範囲内では、検出されなかった。

**カマド** 調査範囲内では、確認されなかった。

**出土遺物** 掲載した遺物は灰釉陶器椀、土師器甕、須恵器羽釜の3点である。この3点は床面より10cm以上の位置からの出土であるため、本竪穴住居に共伴するか否かについての確証はない。この他に土師器大型製品片56点・小型製品片10点、灰釉陶器小型製品片4点が出土している。

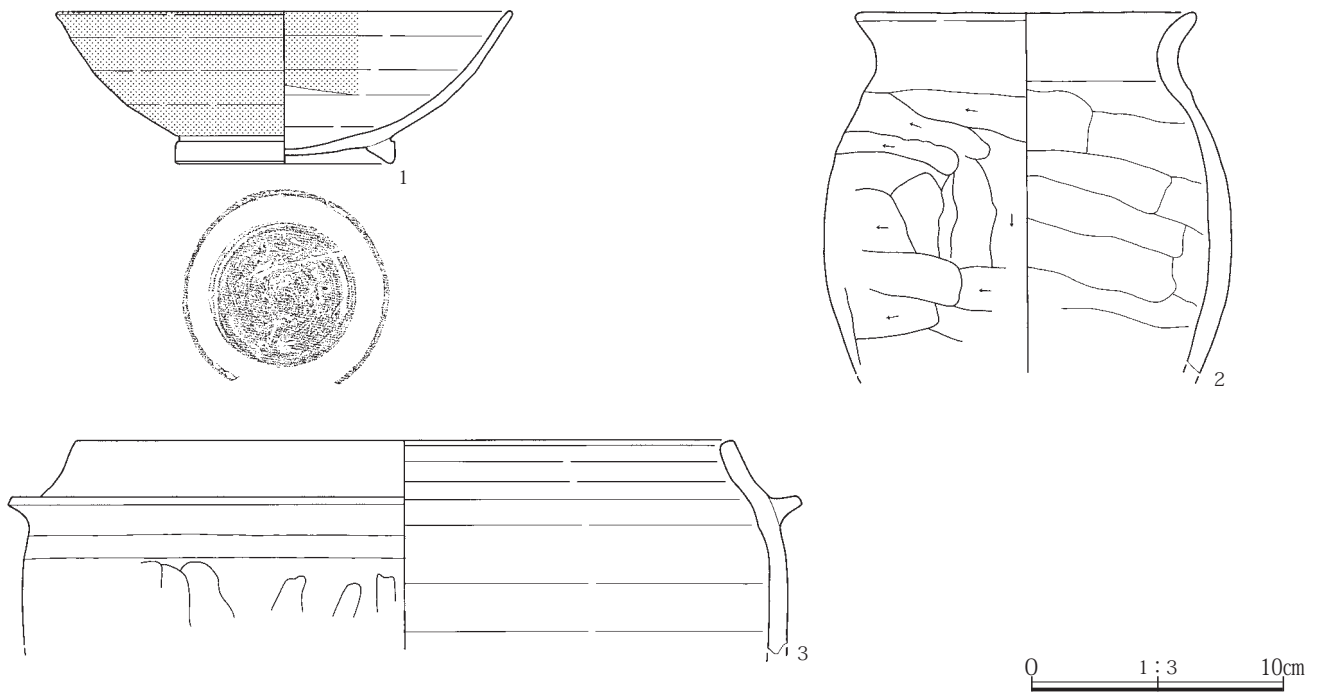
**所見** 本竪穴住居の時期は出土した遺物の大多数の特徴から10世紀第2四半期に比定できる。



A-A'

- |  |  |
|--|--|
| <p>1. 灰黄褐色砂質土 現耕作土。</p> <p>2. 灰黄褐色砂質土 土地改良客土。</p> <p>3. 灰黄褐色土 小円礫多量含む氾濫堆積土、白色軽石少量含む。基本層序</p> <p>4. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量含む。基本層序</p> <p>5. 黒褐色土 白色軽石粒多量含む。基本層序</p> <p>6. 灰黄褐色土 白色軽石粒多量・にぶい黄橙色砂質ローム小ブロック微量・小円礫含む。</p> <p>7. 暗褐色土 白色軽石粒少量・黒色土ブロック多量含む。5号竪穴住居埋没土</p> | <p>8. 暗褐色土 白色軽石粒少量含む。</p> <p>9. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量含む。</p> <p>10. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量、黒色土ブロック・灰多量、焼土ブロック少量含む。</p> <p>11. 暗褐色土 白色軽石粒多量含む。5号竪穴住居埋没土</p> <p>12. 灰黄褐色土 少量の白色軽石と黒色土ブロックを含む。40号竪穴住居埋没土</p> <p>13. 灰黄褐色土 12に類似 40号竪穴住居埋没土</p> |
|--|--|

第25図 2区5号竪穴住居遺構図



第26図 2区5号竪穴住居出土遺物図

## 2区6号竪穴住居(第27・28図、PL.19・152)

**位置** 2区調査区北側調査区境中央、85区A-16・17、B-16・17に位置する。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

**形状** 長方形を呈す。使用面ではカマド燃烧部右側側壁と南辺壁とが一体になっているため平面形態が鍵状にみられるが、掘方では南辺、北辺とも全長に大きな差はみられない。

**規模** 長軸3.55m、短軸2.90mを測る。

**面積** 8.52㎡

**方位** N-69°-E

**埋没状態** 埋没土は、にぶい黄褐色土ブロック・白色軽石・炭化物を含む灰黄褐色土・黒色土であるが、遺構確認面から床面までが浅く、埋没過程は不明である。埋没土中に炭化物等が含有されているが、床面直上に炭化物、炭化材が散在することから焼失後に埋没した可能性が考えられる。

**床面** 中央部と東辺付近で灰黄褐色土を埋め戻して形成されていた。炭が、住居中央部分から東壁にかけての床面に散見される。北西部分では中央から放射状に径5～8cm、長さ50～60cmの炭化材に対して北東部の炭化材はやや小片が多く出土していた。

確認面から床面までの深さは、0.07～0.15mを測る。

**掘方** 中央部で径1.50×0.70m、深さ0.10m、東辺壁際で径0.60m、深さ0.10mほどの浅い掘り込みがみられた。なお、床下土坑などの施設は検出されなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 北東部隅にて検出された。貯蔵穴は、楕円形状を呈し、長軸0.54m、短軸0.50m、深さ0.25mを測る。

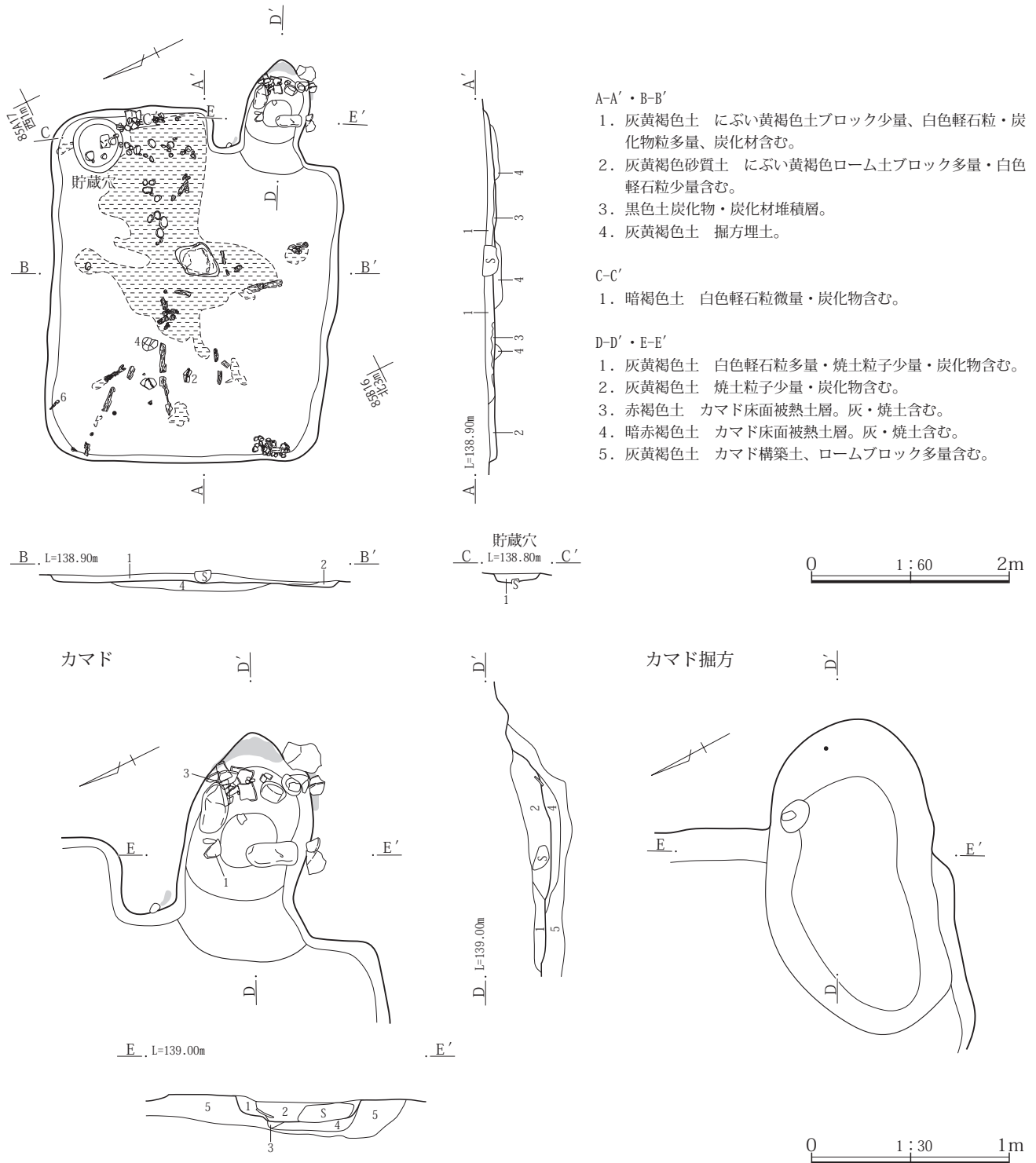
**カマド** 東辺の南隅に構築されていた。残存状態は燃烧部の上位に天井を構築されていたと想定される灰黄褐色土が確認できることから、竪穴住居廃絶時に壊されたとみられる。規模は、全長1.04m、全幅1.30m、燃烧部幅0.70mを測る。燃烧部は床面よりやや窪んでおり、煙道部は緩やかな傾斜で立ち上がっていた。側壁はロームブロックを含む灰黄褐色土で構築されている。

掘方は、全体を径1.60×0.85mほどの楕円形状に掘り込まれていた。なお、燃烧部から煙道手前に円柱状の礫が残存していたが、支脚に使用されていたものかどうかは明確ではない。

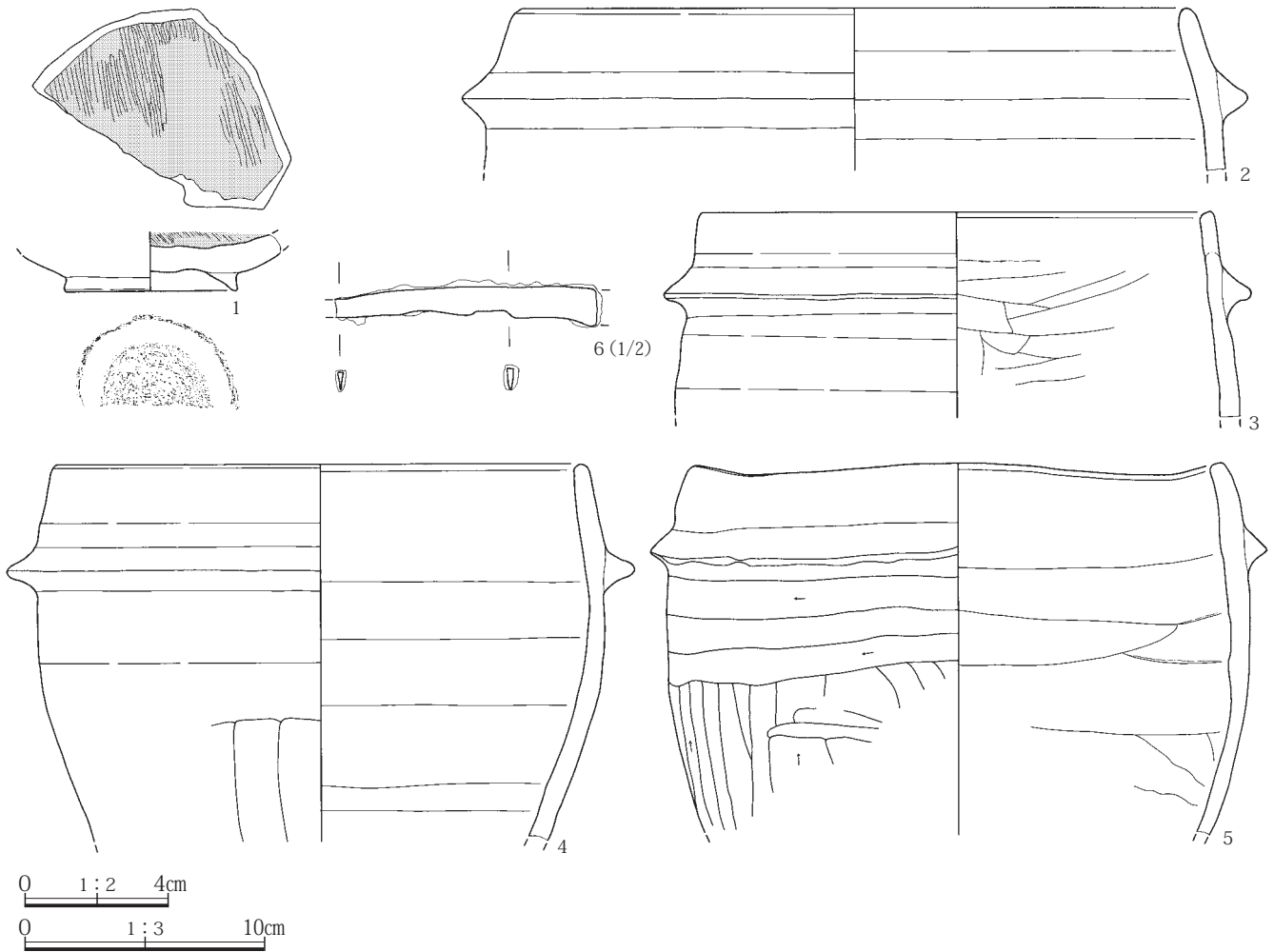
**出土遺物** 図示した遺物は黒色土器椀1点と須恵器羽釜4点、鉄器刀子1点の6点である。これらの遺物は1と3がカマド内、5の須恵器羽釜は貯蔵穴際、2と4は床面より8～10cmほどの位置から出土している。土器はこ

の他に土師器大型製品片85点・小型製品片5点、灰釉陶器小型製品片1点が出土している。また、中央部からは50×30×15cm大のやや扁平な礫、南西角からは5cmから20cm大の礫がまとまって出土している。南西角からのものは一部には弧編石ではないかとみられるものも存在していたが、円礫もみられることから断定に至らなかった。

**所見** 本竪穴住居の時期はカマド内から出土した3の須恵器羽釜や1の黒色土器碗などの遺物から10世紀第2四半期に比定できる。なお、床面直上に炭化物、炭化材が散在することから本竪穴住居は焼失住居の可能性が考えられるが、炭化材の出土状態やカマドの廃絶状態から住居を廃絶後に不要材を焼却したことが窺える。



第27図 2区6号竪穴住居遺構図



第28図 2区6号竪穴住居出土遺物図

2区10号竪穴住居(第29・30図、PL.20・152)

**位置** 2区調査区北東部の谷地寄り、84区Q-13、R-12~14、S-13に位置する。

**重複** 2区9号竪穴住居、11号竪穴住居と重複する。新旧関係は本竪穴住居が最も新しい。

**形状** 東辺4.20m、北辺4.38m、西辺4.00m、南辺4.50mと各辺長が異なる四角形状を呈す。

**規模** 長軸4.50m、短軸4.38mを測る。

**面積** 15.94㎡

**方位** N-128°-E

**埋没状態** 土層断面では、ロームブロックを含む黄褐色砂質土が壁際と床面上を薄く堆積した後に暗褐色土によって全体が埋没した状態が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より10~15cmほど、にぶい黄褐色土・黒褐色土を埋め戻して構築されている。床面はわずかな凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.41~0.57mを測る。

**掘方** 床面より中央部は10cmほど、各壁際は1.0~1.5mほどの幅で15~25cmほど周囲が低くなるように掘り込まれていた。なお、中央部には楕円形状に径1.10×0.98m、深さ0.20mの床下土坑が検出されたが、遺物などの出土はみられなかった。

**壁溝** 東辺のカマド以南の東辺・南辺・西辺の北半で検出された。規模は、上端0.17~0.20m、下端0.01~0.10m、深さ0.03~0.09mを測る。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**カマド** 東辺の中央より、やや南寄りに構築されている。残存状態は燃烧部側壁が残存していたが、焚口と燃烧部から煙道部の天井は壊された状態であった。規模は、全長2.20m、全幅1.10m、燃烧部幅0.80mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪んでおり、煙道部は135度の傾斜で立ち上がっていた。燃烧部側壁には構築材として使用され

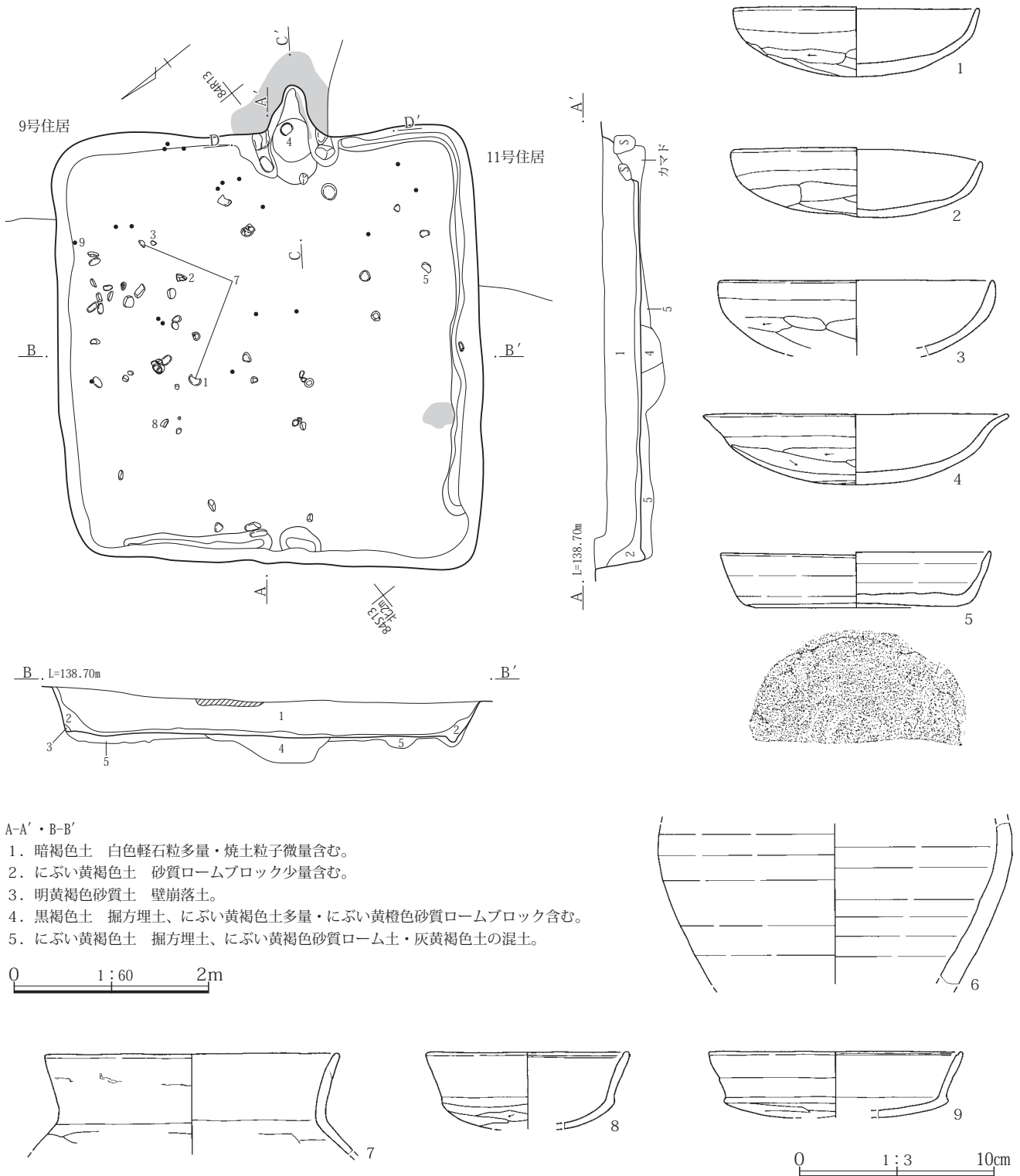
た礫や底面には灰が残存していた。

掘方は燃烧部ではわずかな充填土しか確認されなかったが、煙道部は深く掘りこまれていた。

**出土遺物** 図示した遺物のうち1の土師器杯と5の須恵器杯が床面、4の土師器杯がカマドからの出土である。図示した以外の遺物では土師器大型製品片371点・小型

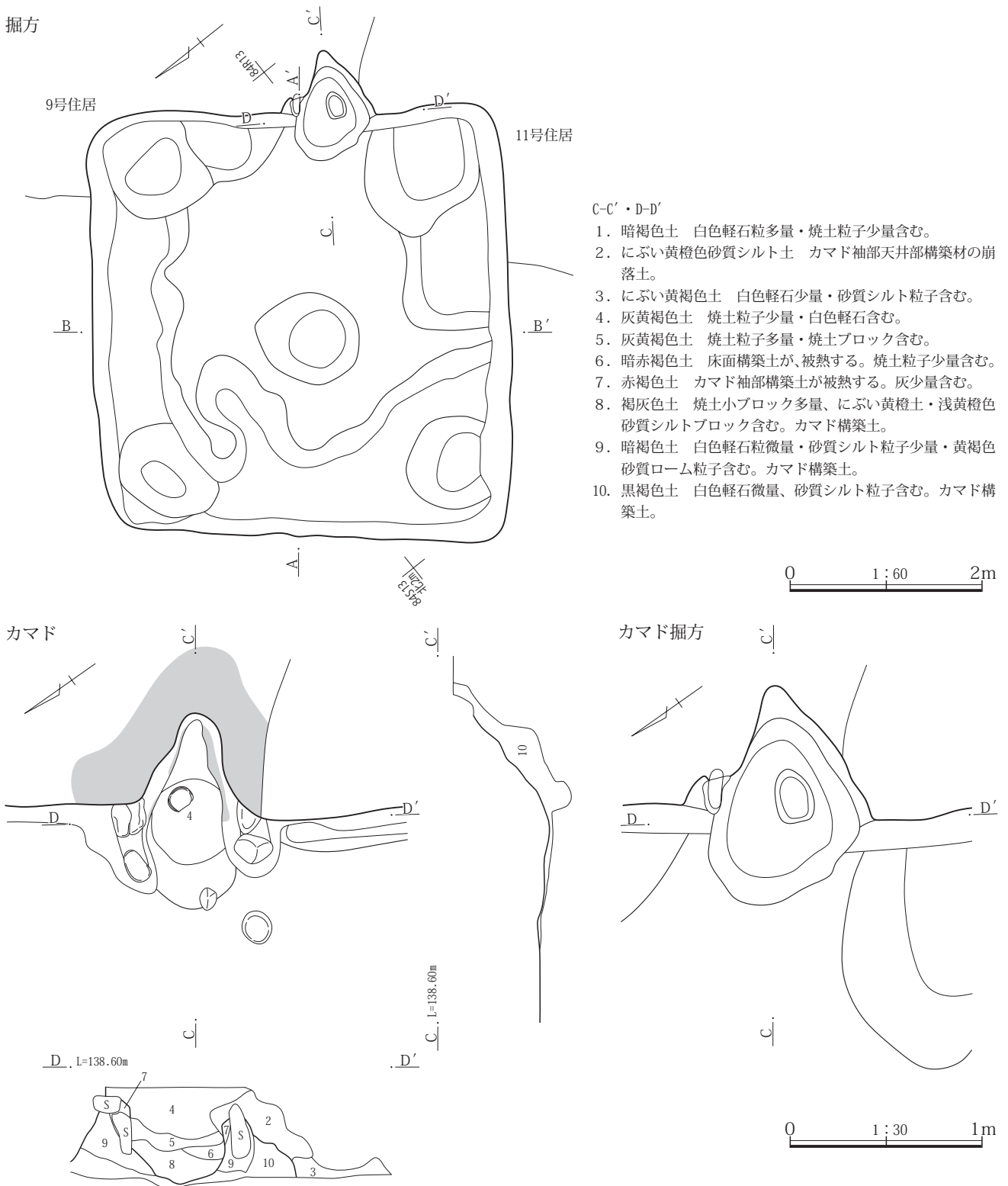
製品片82点、須恵器大型製品片6点・小型製品片8点が出土している。なお、8・9の土師器杯は本竪穴住居廃棄後に混入したものとみられる。

**所見** 本竪穴住居の時期は床面やカマドから出土した1・4・5の遺物から8世紀第1四半期に比定できる。



第29図 2区10号竪穴住居遺構図(1)・出土遺物図





第30図 2区10号竪穴住居遺構図(2)

2区17号竪穴住居(第31図、PL.21)

位置 2区調査区北東部、84区T-13、85区A-13に位置する。

重複 攪乱と重複するが、他の遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

形状 南辺が北辺より0.20mほど長いがほぼ長方形を呈す。

規模 長軸3.86m、短軸3.00mを測る。

面積 9.46㎡

方位 N-93°-E

**埋没状態** 土層断面では床面上に暗褐色土が薄く堆積した後、にぶい黄褐色土で埋没しているのが観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 地山の暗褐色土をそのまま使用している。床面は若干の凹凸はみられるが、ほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.30~0.37mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は構築されていなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**カマド** 東辺のやや南寄りに構築されていた。残存状態は両側側壁が壁際の一部に残るだけで、焚口や燃烧部から煙道部の天井、燃烧部側壁の大部分は構築材も残されていない状態であった。規模は全長0.83m、燃烧部幅0.32mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪められており、煙道部は140度の傾斜で立ち上がっていた。

掘方は燃烧部を中心に径0.90×0.80mの楕円形に10cmほど掘り込まれていた。側壁底面にあたる箇所では構築材に使用されていた礫を据え付けていたとみられる径15~30cmの小穴がみられた。

**出土遺物** 図示可能な遺物は出土していない。出土した遺物は土師器大型製品片8点・小型製品片19点、須恵器小型製品片1点である。この他に埋没土中には10cmから50cm大の垂角礫が散乱した状態で出土している。この礫は住居に使用されたものか廃棄されたものかについては明らかではない。

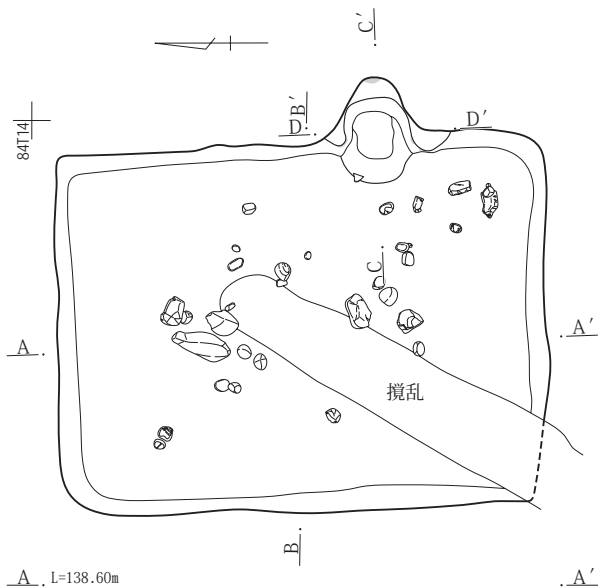
**所見** 本竪穴住居の時期は9世紀後半に比定できる。

A-A'

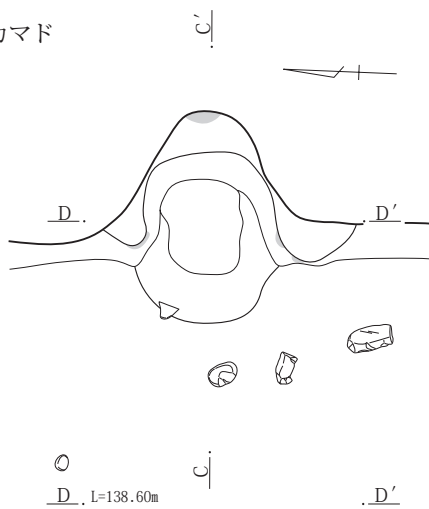
1. 暗褐色土 白色軽石粒多量含む。
2. にぶい黄褐色土 白色軽石粒微量含む。

C-C'・D-D'

1. 暗褐色土 白色軽石粒多量・焼土粒子少量含む。
2. 暗褐色土 焼土小ブロック多量含む。上部に黄褐色砂質シルトブロック含む。
3. 暗褐色土 焼土粒子少量含む。
4. 暗褐色土 白色軽石粒少量・にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック含む。焼土粒散見する。カマド構築土。
5. 黒褐色土 白色軽石粒微量含む、カマド構築土。



カマド



カマド掘方



第31図 2区17号竪穴住居遺構図

2区18号竪穴住居(第32・33図、PL.22・23・152)

**位置** 2区調査区北東部、85区A-12、B-12に位置する。

**重複** 攪乱と重複するが、他の遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

**形状** 東辺が西辺に比べ0.50mほど長く台形状を呈す。

**規模** 長軸3.52m、短軸2.94m、東辺3.60m、南辺2.50m、西辺3.00m、北辺2.90mを測る。

**面積** 7.55㎡

**方位** N-120°-E

**埋没状態** 土層断面では床面に暗褐色砂質土が堆積した後に微量の炭化物を含有する暗褐色砂質土で埋没しているのが観察できることから、自然埋没と想定される。

**床面** 地山暗褐色土を踏み固めて使用している。床面は多少の凹凸がみられるが、ほぼ平坦で、カマド前(トーン貼付範囲)を中心に硬化していた。

確認面から床面までの深さは、0.16~0.25mを測る。

**掘方** 地山を床面としているため、掘り込みなどは確認されていない。

**壁溝** カマド構築部分と南東角部分を除き各辺壁下で検出した。規模は、上端0.12~0.26m、下端0.02~0.07m、深さ0.02~0.07mを測る。

**柱穴** 検出されなかった。

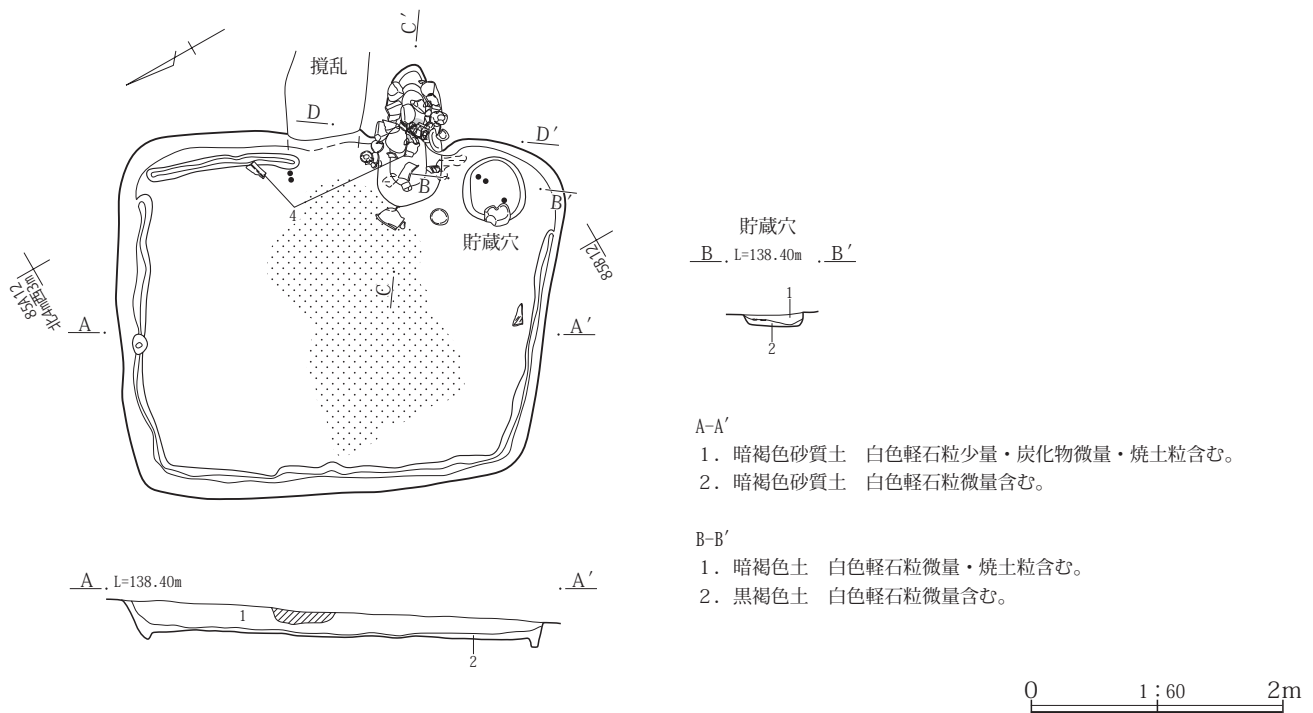
**貯蔵穴** 南東隅にて検出した。形状は平面がほぼ円形、断面は箱形を呈す。規模は径0.50×0.47m、深さ0.12mを測る。内部より数点の土器片と垂角礫が出土している。

**カマド** 東辺やや南寄りに構築されていた。残存状態は煙道部に構築材として使用されていた礫がそのまま残るなど比較的良好な残存状態を示していたが、焚口から燃烧部は壊された状態であった。規模は全長1.12m、全幅0.60m、焚口部幅0.45m、燃烧部幅0.42mを測る。燃烧部は焚口より窪んでおり、煙道部はゆるやかな傾斜で立ち上がっていた。燃烧部の奥には長さ30cm、径20cmの円礫が立てられた状態で検出された。当初、支脚に使用されたのではと想定されたが、位置的なことを考慮すると他の用途の可能性も考慮される。

掘方は燃烧部を中心に径1.35×0.65mの楕円形状に15cmほど掘り込まれていた。

**出土遺物** 遺物の出土は大部分がカマドと貯蔵穴からである。図示した遺物のうち1の須恵器碗はカマド左の床面、3の土師器甕はカマド前部、4の須恵器羽釜は東壁下壁溝からも破片が出土している。図示した遺物以外では土師器大型製品片34点・小型製品片4点、須恵器小型製品片3点が出土している。

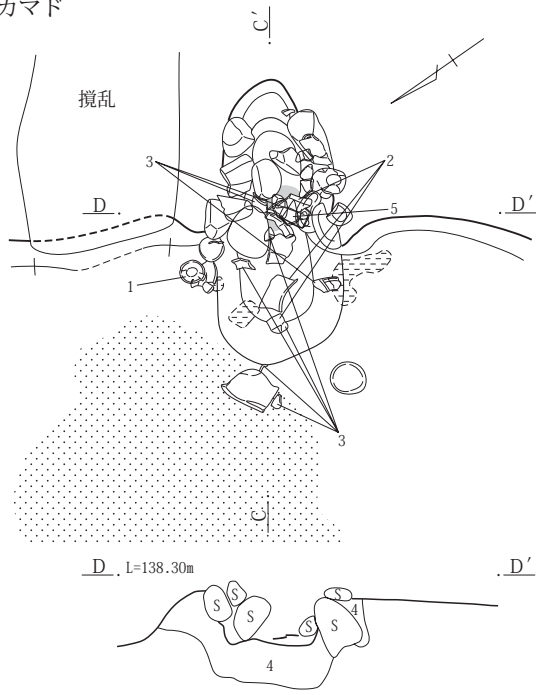
**所見** 本竪穴住居の時期は共伴が確実な1・3・4の遺物から10世紀第3四半期に比定できる。



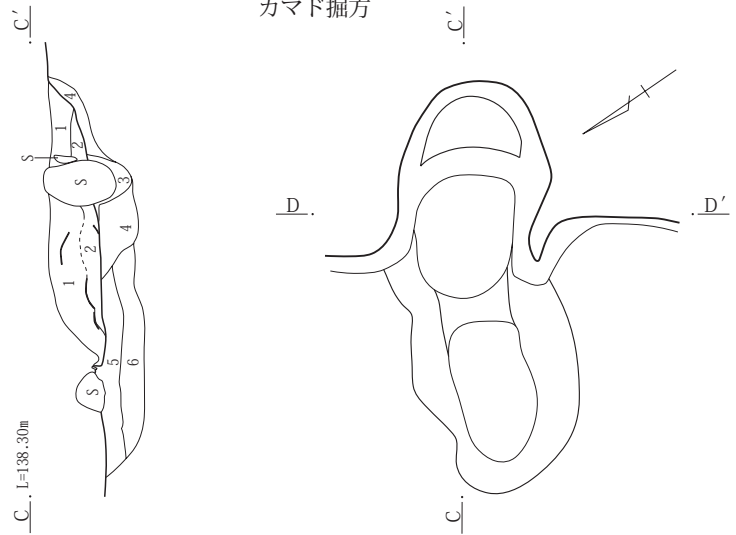
第32図 2区18号竪穴住居遺構図(1)

第3章 検出遺構と出土遺物

カマド

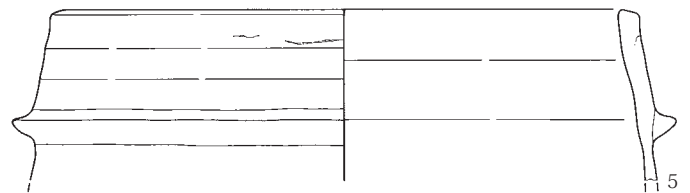
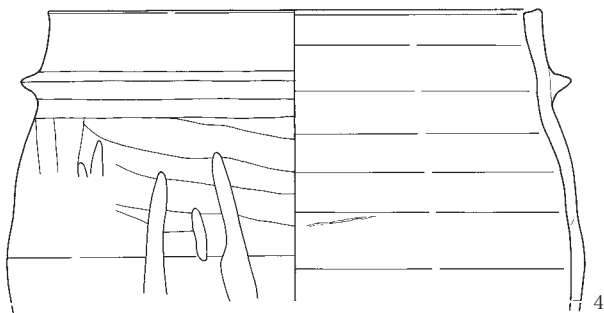
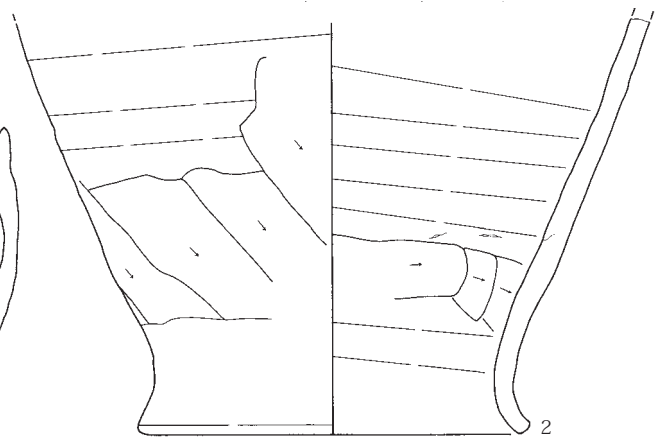
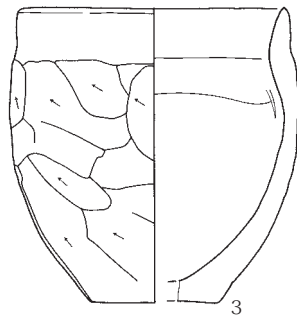
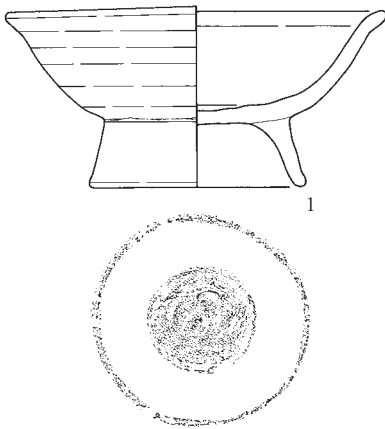


カマド掘方



C-C'・D-D'

1. 暗褐色土 白色軽石粒少量含む。
2. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量含む。
3. 黒褐色土 白色軽石粒少量・焼土粒子含む。
4. にぶい黄橙色砂質ローム土 白色軽石粒微量含む。
5. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量含む。
6. 暗褐色土 白色軽石粒微量含む。



0 1:3 10cm

第33図 2区18号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図

2区32号竪穴住居(第34・35図、PL.23・153)

**位置** 2区調査区北東隅、84区O-14・15、P-14・15に位置する。北側4分の1ほどは調査対象外に存在するため全貌は不明である。

**重複** 南辺の中ほどで8号竪穴住居とわずかに重複する。新旧関係は本竪穴住居の方が新しい。

**形状** 南東角はやや隅丸でやや狭角、南西角は広角を呈していることから台形に近い長方形を呈するとみられる。

**規模** 調査範囲内では長軸3.87m、短軸3.36mを測る。

**面積** 調査範囲内では9.87㎡

**方位** N-133°-E

**埋没状態** 土層断面では周囲からの流れ込みによる堆積のようにみられるが、中央部に灰黄褐色土が小山状に堆積したのち白色軽石粒を含む暗褐色土、黒褐色土の堆積が観察できることから人為的な埋め戻しの可能性も想定される。

**床面** 灰黄褐色土を埋め戻して構築されていた。床面の状態はやや高低差や凹凸がみられた。

確認面から床面までの深さは、0.20～0.32mを測る。

**掘方** 全体的には浅い掘り込みである。一部に土坑状の掘り込みがみられたが、床下土坑などの施設は確認されなかった。

**壁溝** 西辺壁下から南西隅壁下にかけて検出された。規模は、上端0.17～0.30m、下端0.02～0.06m、深さ0.03～0.10mを測る。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

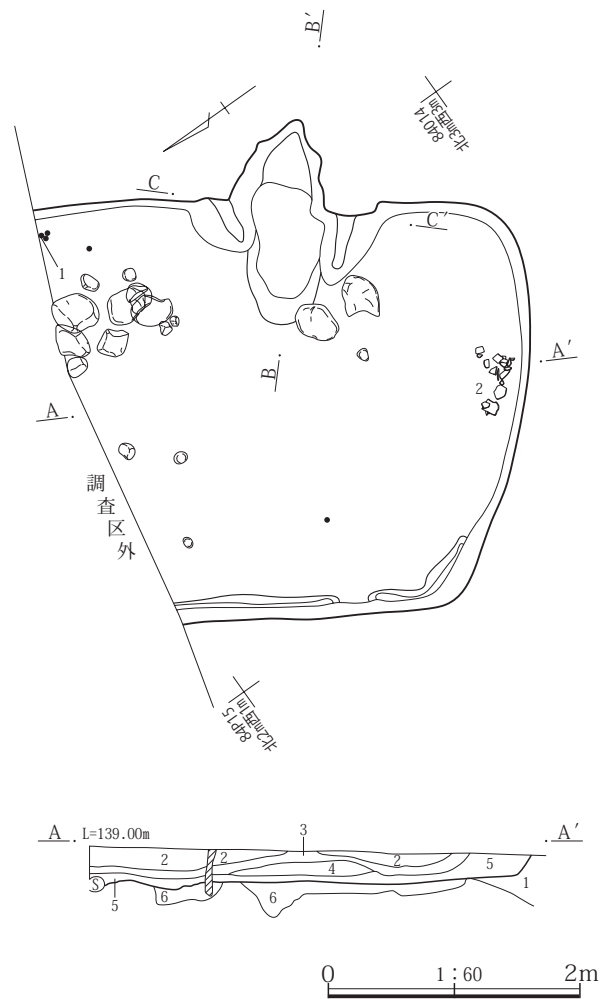
**カマド** 東壁中央部分に構築されていた。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井はすべて壊された状態であった。規模は全長1.60m、全幅1.50m、煙道部長0.70m、燃焼部幅0.76mを測る。燃焼部は焚口からほぼ平坦に移行している。煙道部は緩やかな傾斜で立ち上がっていた。両側壁の基部は地山をそのまま掘り残して使用していた。

掘方は、燃焼部を中心に、東西軸を長軸として径1.2×0.7mの楕円形状に10cmほど掘り込まれていた。

なお、カマド前と住居北東部に径20cmから40cm大の川原石が散乱した状態で出土しており、これらの礫はカマドの構築材として使用されていたものが、廃棄された可能性が窺える。

**出土遺物** 図示した遺物は土師器杯2点と甕1点の3点である。1・2とも床面よりやや上位からの出土である。3の土師器杯は掘方からであるが、全体の遺物の形態を見ると混入の可能性が高い。図示できなかった遺物には土師器大型製品片32点・小型製品片39点、須恵器大型製品片2点・小型製品片1点が出土している。

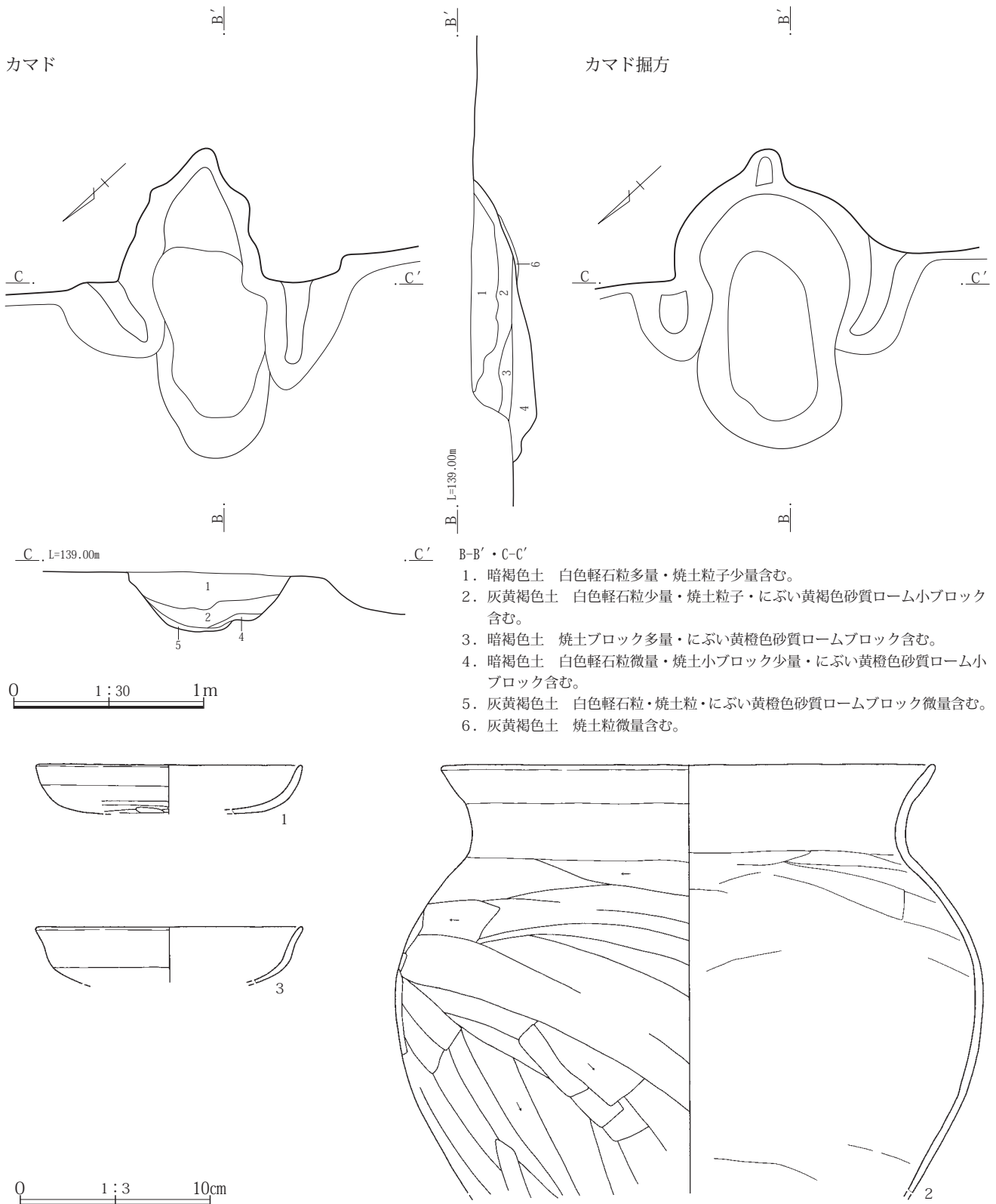
**所見** 本竪穴住居の時期は1・2やその他の遺物から8世紀第4四半期に比定できる。



A-A'

1. 8号竪穴住居埋土
2. 暗褐色土 白色軽石粒多量含む。
3. 暗褐色土 白色軽石粒少量・にぶい黄橙色砂質ローム粒子微量含む。
4. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・焼土粒子・にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック含む。
5. 黒褐色土 白色軽石粒多量含む。
6. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量・焼土小ブロック少量・炭化物含む、掘方埋土。

第34図 2区32号竪穴住居遺構図(1)



第35図 2区32号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図

2区33号竪穴住居(第36~38図、PL.24・153)

**位置** 2区調査区北東隅寄り、84区R-15、84区T-15に位置する。本竪穴住居は、14号竪穴住居内で重複するため確認時は1棟の竪穴住居と認識していたが、調査を

進める中で本竪穴住居の存在を確認したため、壁などの調査に不十分な点があり、全貌が不明な点もある。

**重複** 2区14号竪穴住居と重複する。新旧関係は本竪穴住居の方が新しい。

**形状** 本竪穴住居の大部分は14号竪穴住居と重複していたため平面形態の把握が困難であった。そのため重複部分は土層の観察用ベルトでの判断をしたため不明確な点が多い。形状は東辺に対して西辺が短い台形状を呈すると想定される。

**規模** 長軸4.84m、短軸は推定で4.4mを測る。

**面積** 推定18.49㎡

**方位** N-115°-E

**埋没状態** 土層断面では黒褐色土の単一層で埋没しており、埋没状況については自然埋没とみられるが、断定には至っていない。

**床面** 14号竪穴住居と重複していない箇所では掘方が確認されなかったことから、地山をそのまま踏み固めて床面としていたとみられる。

確認面から床面までの深さは、0.16～0.43mを測る。

**掘方** 構築されていないとみられる。

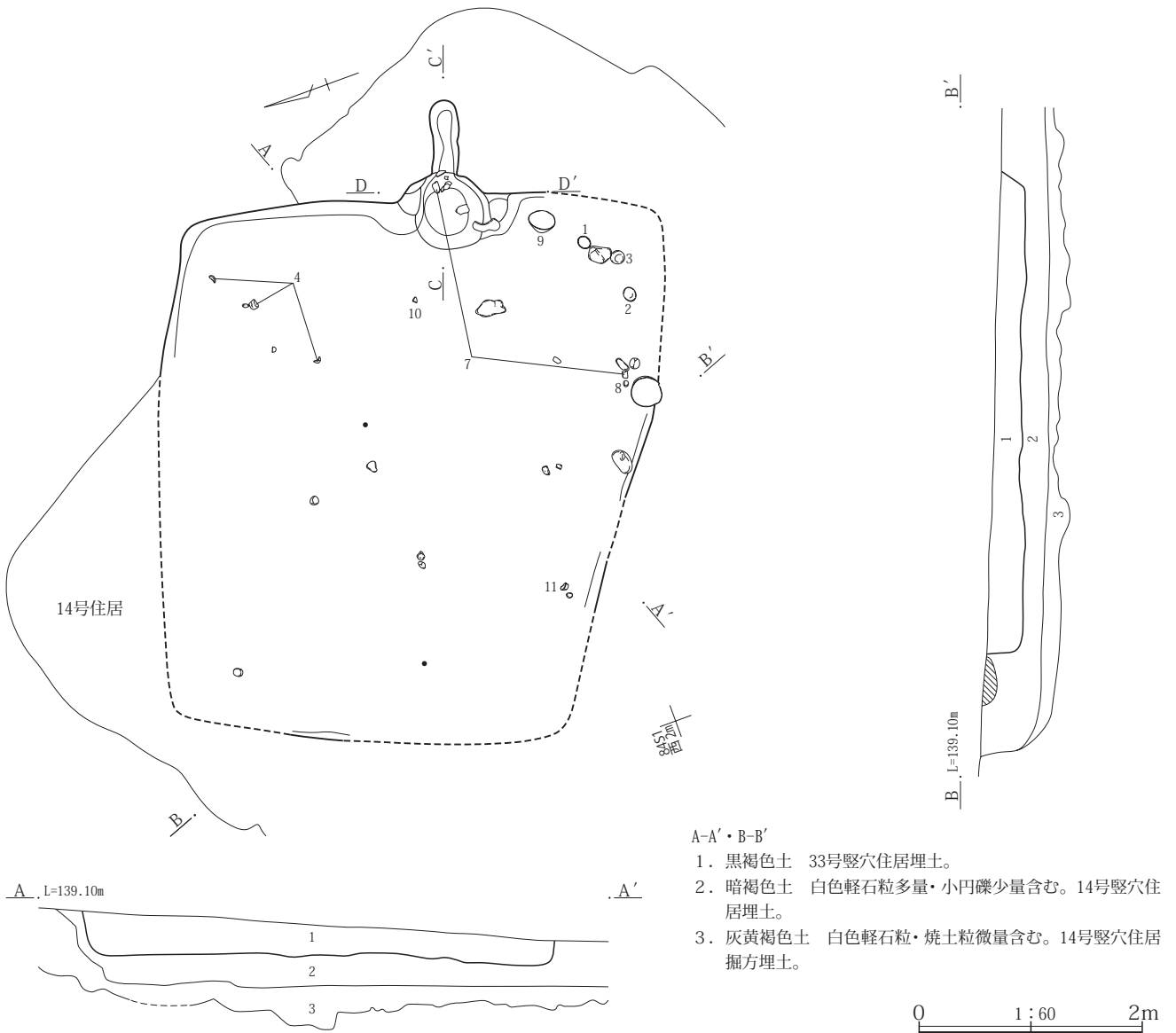
**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**カマド** 東壁中央部付近に構築されていた。残存状態は側壁の袖下部が残存する程度で焚口や天井部は壊されていた。規模は全長1.33m、全幅1.30m、煙道部長0.67m、燃烧部幅0.58mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪められており、奥壁に向かいなだらかに立ち上がっていた。掘方は、燃烧部を中心に、東西軸を長軸として楕円形状に掘り込まれていた。燃烧部から6の土師器甕が出土している。

**出土遺物** 図示した土師器杯、甕、須恵器杯蓋、杯身の



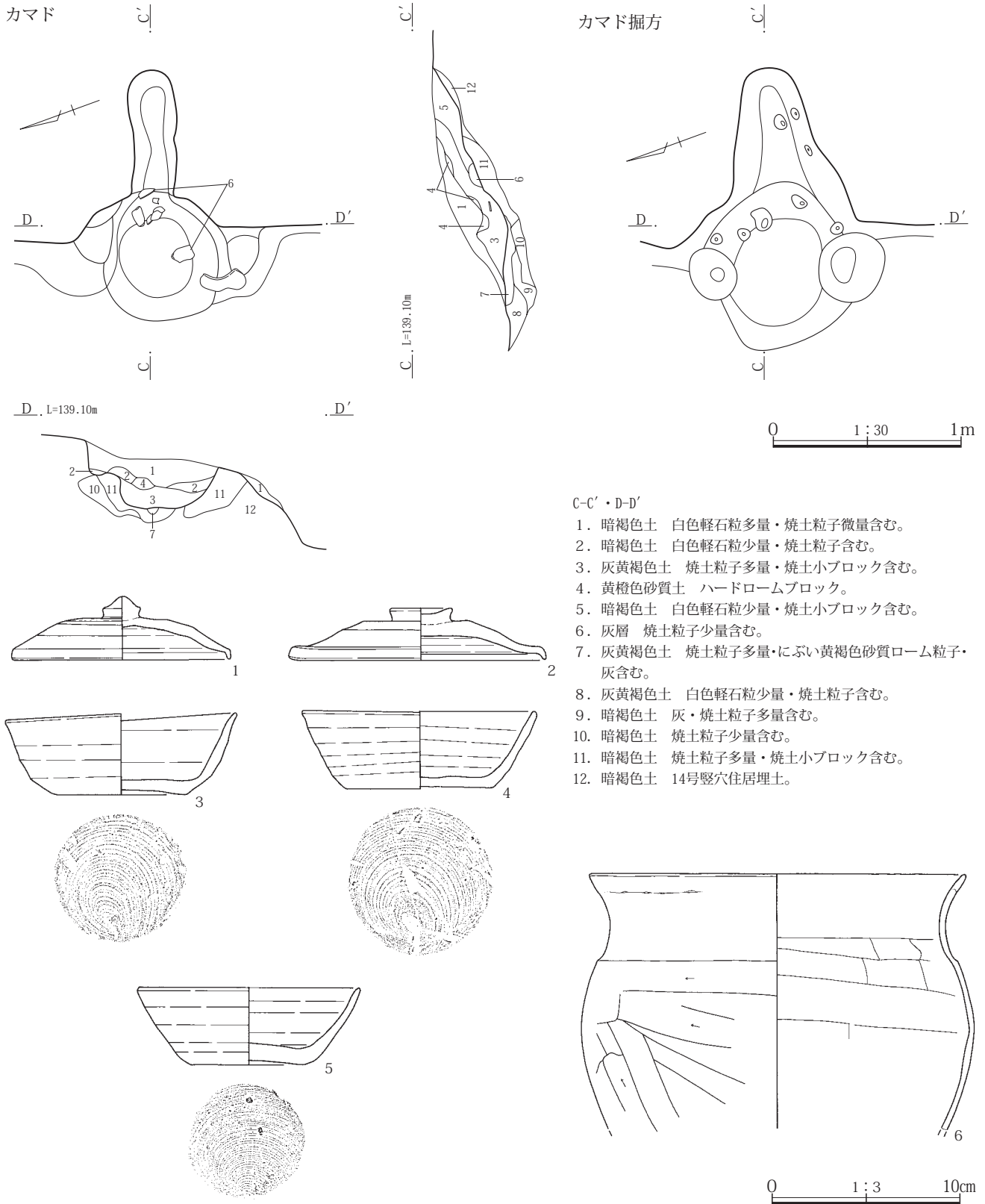
第36図 2区33号竪穴住居遺構図(1)

第3章 検出遺構と出土遺物

うち6・7の土師器甕と10の須恵器甕の一部はカマドからの出土である。図示した遺物以外に土師器大型製品片85点・小型製品片47点、須恵器大型製品片1点・小型製品片1点が出土している。なお、11の土師器杯は重複す

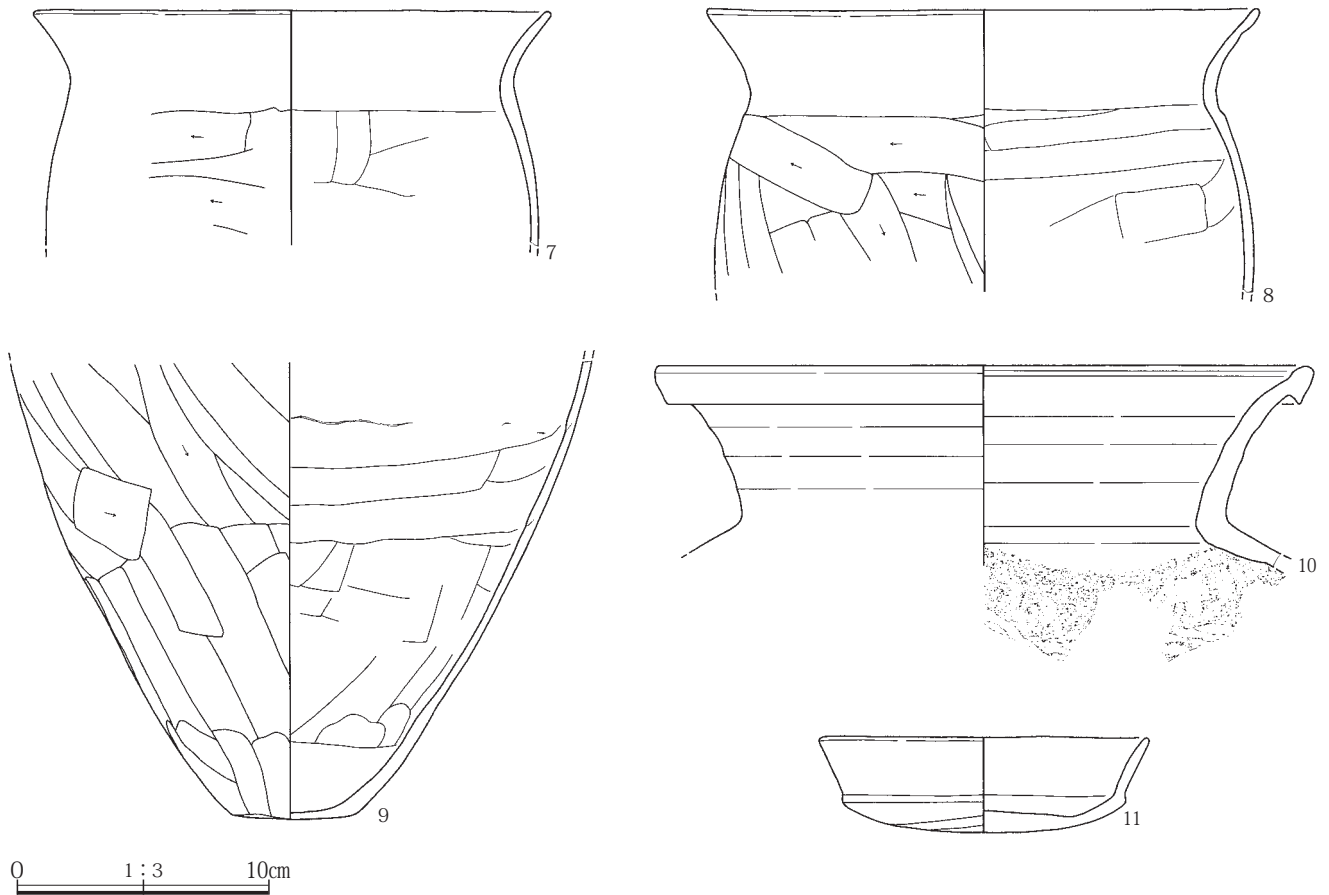
る14号竪穴住居に伴うものとみられる。

**所見** 本竪穴住居の時期はカマドから出土した6・7の土師器甕などの遺物の特徴から8世紀第4四半期に比定できる。



第37図 2区33号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(1)





第38図 2区33号竪穴住居出土遺物図(2)

2区39号竪穴住居(第39・40図、PL.24・25・153)

**位置** 2区調査区南西隅、85区O-8に位置する。西側半分が攪乱によって欠落するため全貌は不明である。

**重複** 攪乱と重複するが、他の遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

**形状** 残存状況からは隅丸長方形または正方形を呈するものと想定される。

**規模** 南北方向4.16m、東西方向は残存範囲で1.54mを測る。

**面積** 残存範囲で4.81㎡を測る。

**方位** N-81°-E

**埋没状態** 土層断面では床面上に灰黄褐色土が若干堆積した後に白色軽石粒を含む暗褐色土単一層で埋没していることが観察され、人的埋め戻しと自然埋没の両方の可能性が想定された。

**床面** 掘方面より5~20cmほど炭化物や焼土を含む灰黄褐色土を埋め戻して構築していた。床面は多少の凹凸がみられるがほぼ平坦であった。

確認面から床面までの深さは、0.27~0.33mを測る。

**掘方** 土坑状の掘り込みが行われていた。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

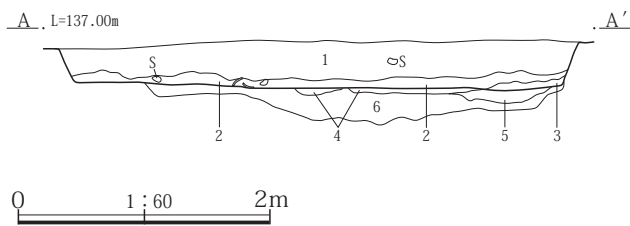
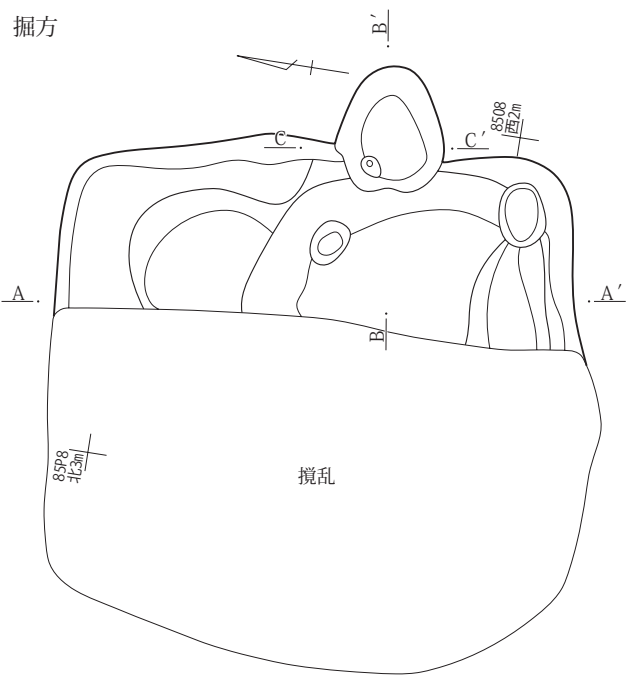
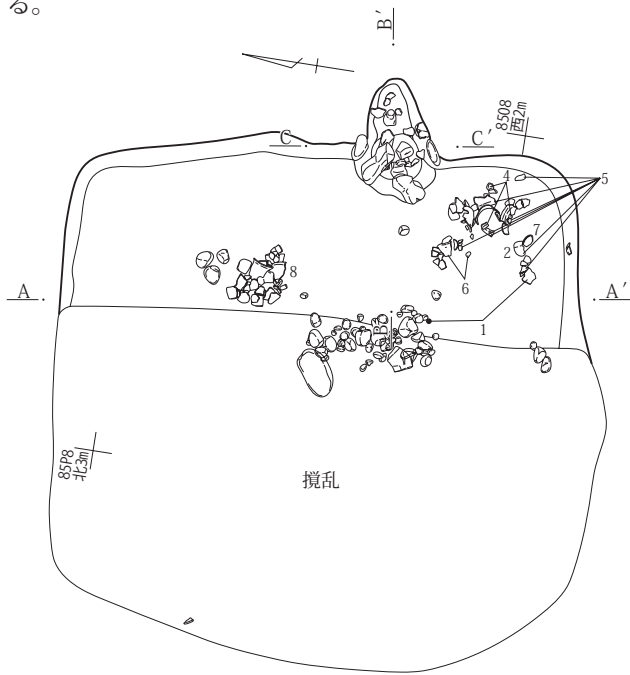
**カマド** 東壁南寄り部分に構築されていた。残存状態は焚口天井部に使用されていたとみられる角柱状の角礫が落とされて分割された状態など天井部や側壁の一部が壊された状態であった。しかし、側壁の構築に使用されていたやや扁平な円礫や煙道部手前の円柱状の礫は現状のままの状態であった。規模は全長0.94m、全幅0.70m、燃烧部幅0.50mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪められており、奥壁は角度をつけて立ち上がっていた。掘方は、焚口部・燃烧部・煙道が一体となり掘り込まれていた。3と4の土師器甕の一部が燃烧部と煙道部から出土している。

**出土遺物** 図示した8点のうち、7の土師器杯、8の土師器甕は混入品とみられるが、8は床面からの出土であることから何らかの形で再利用された可能性がある。2の須恵器杯、4~6の土師器甕などは住居東南角寄りの

第3章 検出遺構と出土遺物

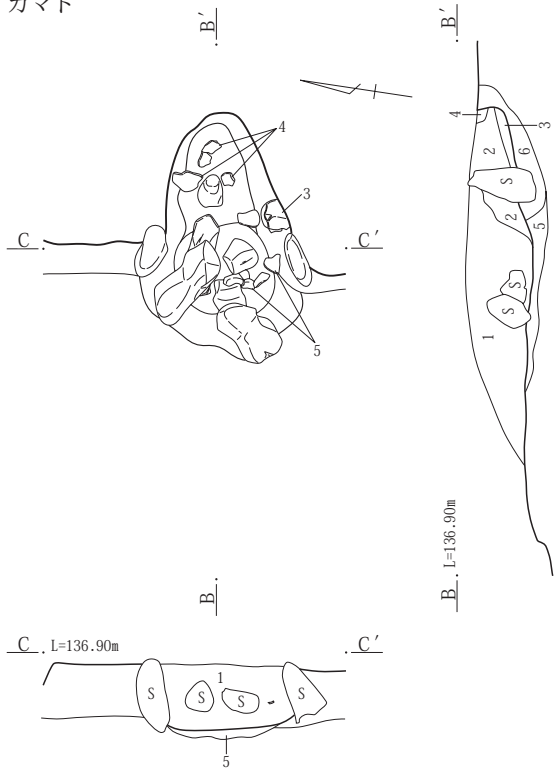
床面近くにまとまって出土している。図示した遺物の他に土師器大型製品片39点・小型製品片6点が出土している。

所見 本竪穴住居の時期はカマドや床面などから出土の遺物から9世紀第3四半期に比定できる。

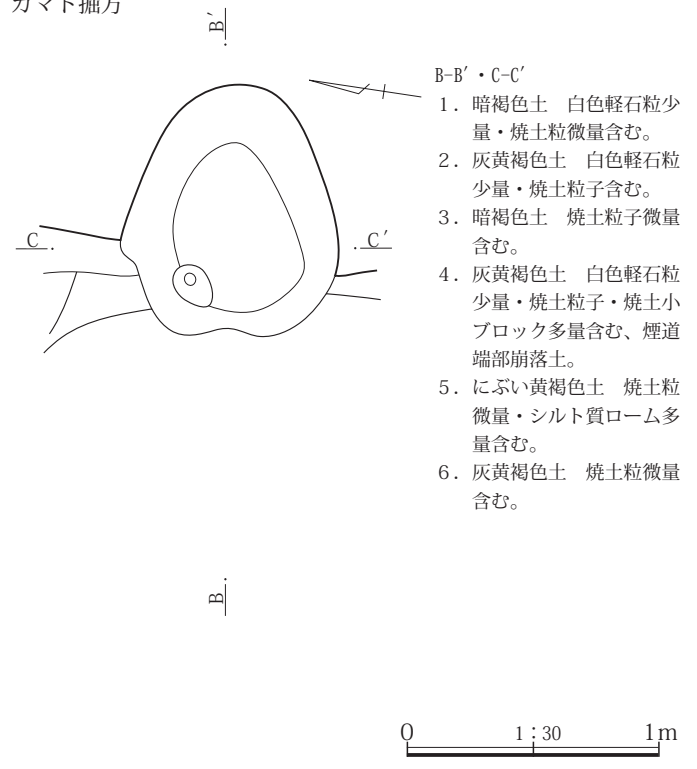


- A-A'
1. 暗褐色土 白色軽石粒多量・にぶい黄橙色砂質ロームブロック少量含む。
  2. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・焼土粒子・炭化物含む。
  3. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・焼土粒子・炭化物・灰白色粘質土ブロック少量含む。
  4. 灰黄褐色土 焼土粒微量含む。
  5. 灰黄褐色土 小礫微量含む。
  6. 灰黄褐色土 炭化粒・焼土粒・FA、FP粒微量含む。

カマド

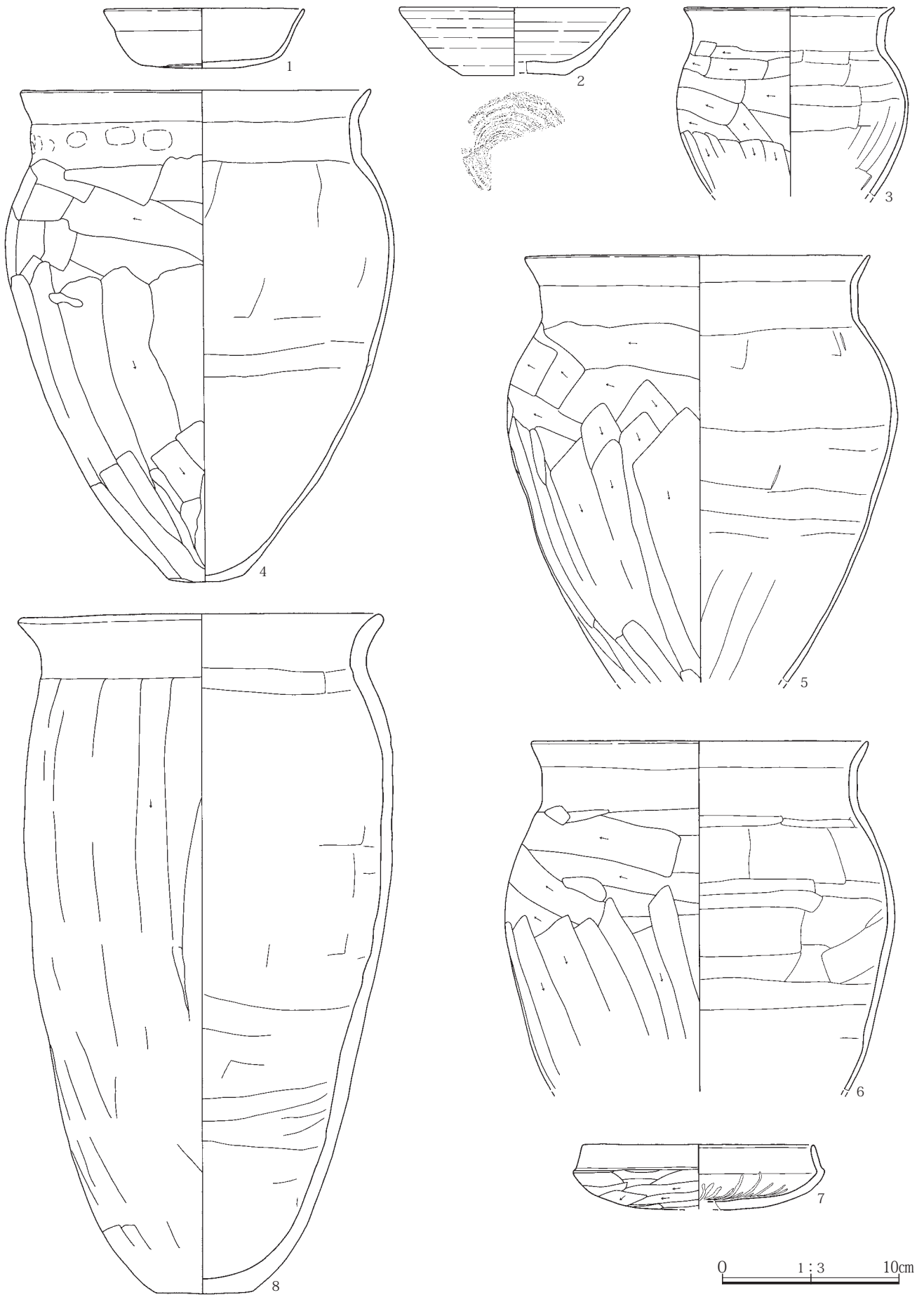


カマド掘方



- B-B'・C-C'
1. 暗褐色土 白色軽石粒少量・焼土粒微量含む。
  2. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・焼土粒子含む。
  3. 暗褐色土 焼土粒子微量含む。
  4. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・焼土粒子・焼土小ブロック多量含む、煙道端部崩落土。
  5. にぶい黄褐色土 焼土粒微量・シルト質ローム多量含む。
  6. 灰黄褐色土 焼土粒微量含む。

第39図 2区39号竪穴住居遺構図



第40図 2区39号竪穴住居出土遺物図

3区1号竪穴住居(第41~44図、PL.25~28・154)

位置 3区調査区中央北寄り、83区R-8・9、S-8・9に位置する。

重複 他の遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

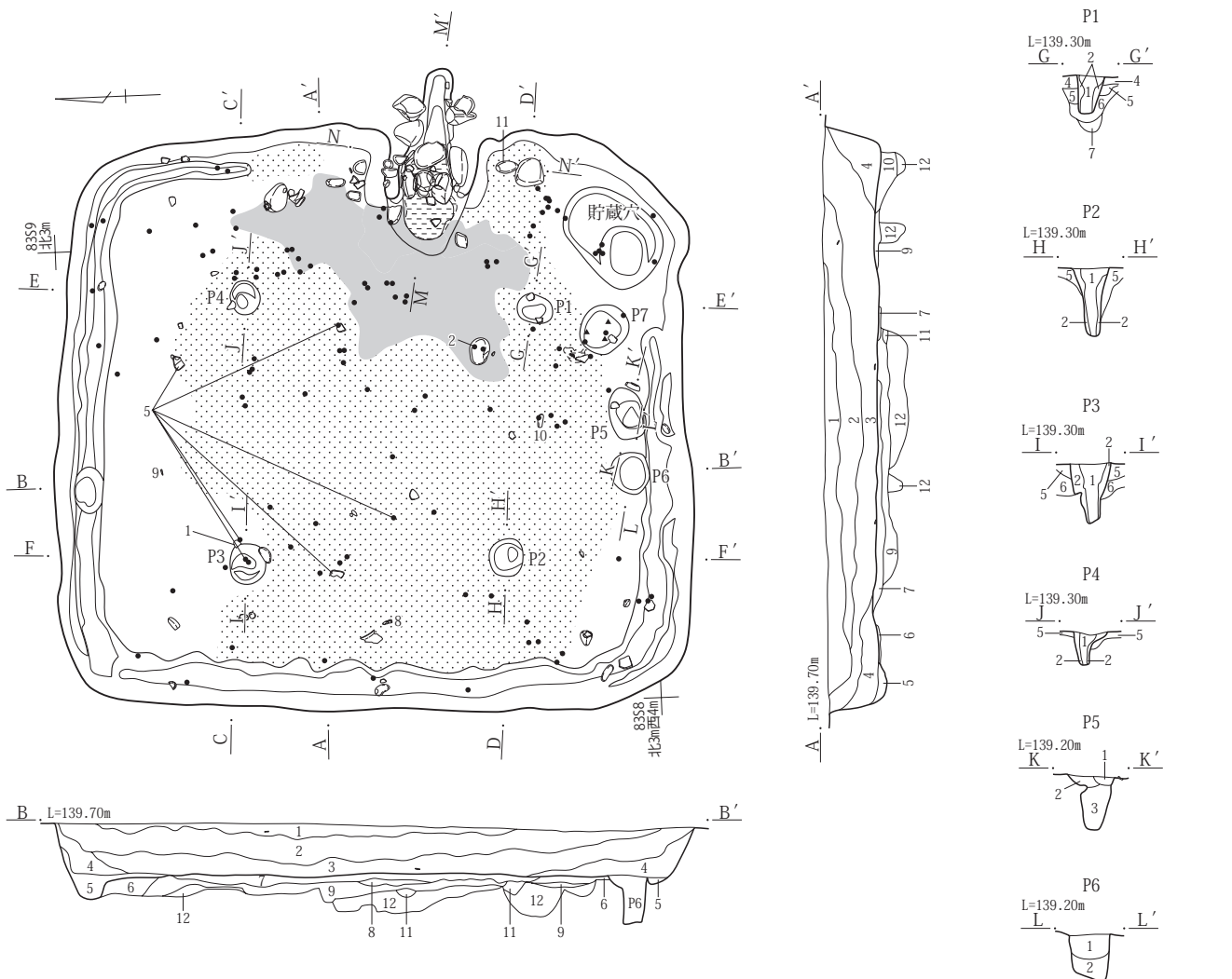
形状 南東角が鈍角ではあるが南北方向にやや長い隅丸長方形を呈す。

規模 長軸5.40m、短軸5.04mを測る。

面積 22.61m<sup>2</sup>

方位 N-97°-E

埋没状態 土層断面では壁際に白色軽石粒を含む灰黄褐色土が三角堆積した後、その内側に灰黄褐色土がレンズ状に堆積しているのが観察できることから、自然埋没と想定される。



A-A'・B-B'

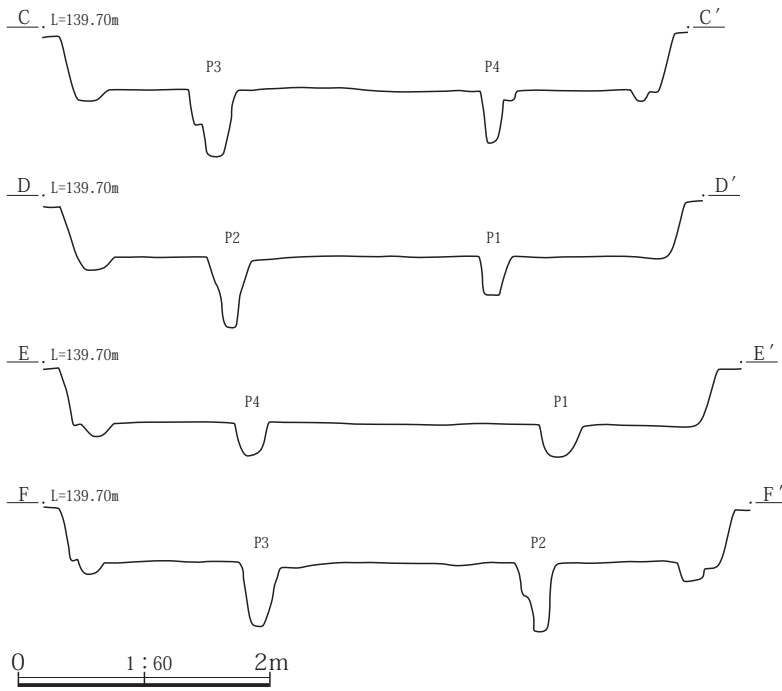
1. 灰黄褐色土 FA、FP粒少量・焼土粒微量含む。
2. 灰黄褐色土 1層に類するが、灰黄色味が強い。
3. 灰黄褐色土 焼土少量含む。
4. 灰黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。
5. にぶい黄褐色土 ローム土粒・白色軽石粒・FA、FP粒含む。
6. 灰黄褐色土 焼土粒微量含む。
7. 褐灰色土 貼床土。
8. 褐灰色土と黄褐色土の混土 貼床土・掘方埋土の混土。
9. にぶい黄褐色土 ローム土含む。
10. 褐灰色土 灰含む。
11. にぶい黄褐色土 ローム土含む。
12. 暗灰黄色土 ローム土・白色軽石粒・FA、FP粒含む。ところどころ焼土粒微量含む。

G-G'・H-H'・I-I'・J-J'・K-K'・L-L'

1. 灰黄褐色土 ローム土ローム粒・FA、FP粒少量含む。
2. 灰黄褐色土 ローム土ブロック少量含む。
3. 灰黄褐色土 ローム土少量含む。2層に類するが、色調やや暗い。
4. 灰黄褐色土 貼床層、焼土粒微量含む。
5. にぶい黄褐色土 ローム土少量・焼土粒微量含む。
6. 黒褐色土 ローム土少量含む。
7. 黒褐色土 ローム粒微量含む。

0 1:60 2m

第41図 3区1号竪穴住居遺構図(1)



第42図 3区1号竪穴住居遺構図(2)

**床面** 掘方面より15～35cmほど灰黄褐色土を埋め戻して構築している。床面は若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦で、壁際を除いて硬化していた。

確認面から床面までの深さは、0.39～0.57mを測る。

**掘方** 土坑が連続した状態で掘削されていたが、床下土坑などの施設は確認されなかった。

**壁溝** カマドの両側では確認されなかったが、東辺の北寄りから南辺の南東角手前までの壁下で確認された。規模は、上端0.11～0.25m、下端0.03～0.22m、深さ0.06～0.10mを測る。

**柱穴** 4基が確認された。P 1は、楕円形状を呈し、長軸0.30m、短軸0.24m、深さ0.34mを測る。P 2は、不整形形状を呈し、長軸0.32m、短軸0.30m、深さ0.57mを測る。P 3は、不整形形状を呈し、長軸0.35m、短軸0.30m、深さ0.47mを測る。P 4は、円形状を呈し、径0.28m、深さ0.43mを測る。柱穴間の距離は、P 1～P 2間が2.10m、P 2～P 3間が2.20m、P 3～P 4間が2.25m、P 4～P 1間が2.45mである。また、各柱穴では土層断面で柱痕が確認され、断面での計測では柱径8～10cmであったとみられる。

南辺中央壁下ではP 5とP 6の2基の小ピットが検出され、その間隔が0.50mであり、住居での位置から梯子を設置した痕跡とみられた。P 5は、形状が不整形形状を

呈し、規模は長軸0.44m、短軸0.30m、深さ0.45mを測る。P 6は、形状が不整形形状を呈し、長軸0.36m、短軸0.34m、深さ0.39mを測る。

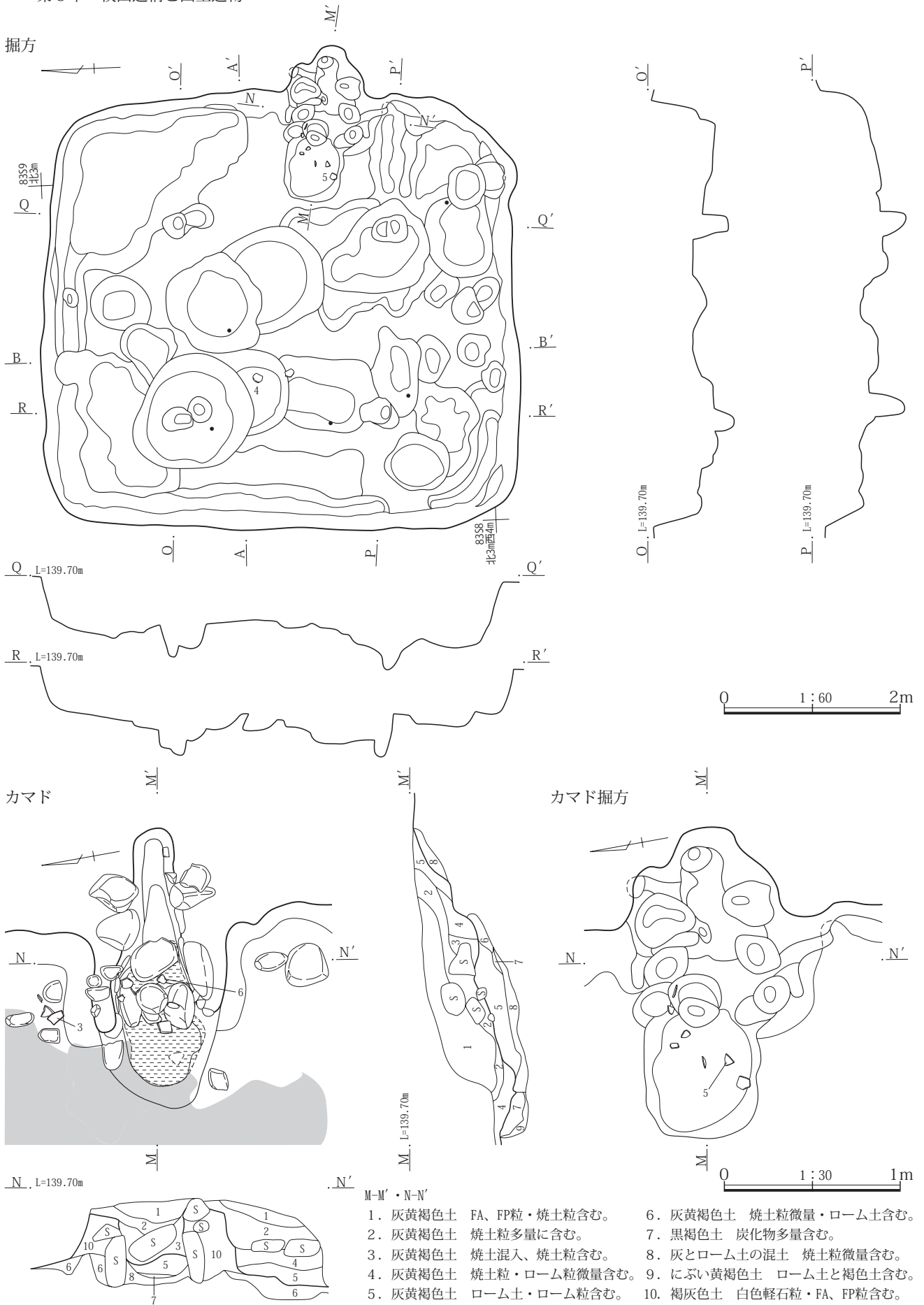
この他に柱穴P 1の南側でP 7を検出した。P 7は楕円形を呈し、長軸0.28m、短軸0.25m、深さ0.24mを測る。内部からは土師器の小片や礫が出土したが、図示できるものはなかった。

**貯蔵穴** 南東角の壁際で検出した。形状は楕円形を呈し、規模は、長軸0.62m、短軸0.43m、深さは0.19～0.36mを測る。内部はほぼ平坦であるが、南に径0.40mほどのピット状の落ち込みが検出された。内部からは、土器片が出土しているが、図示できるものはなかった。

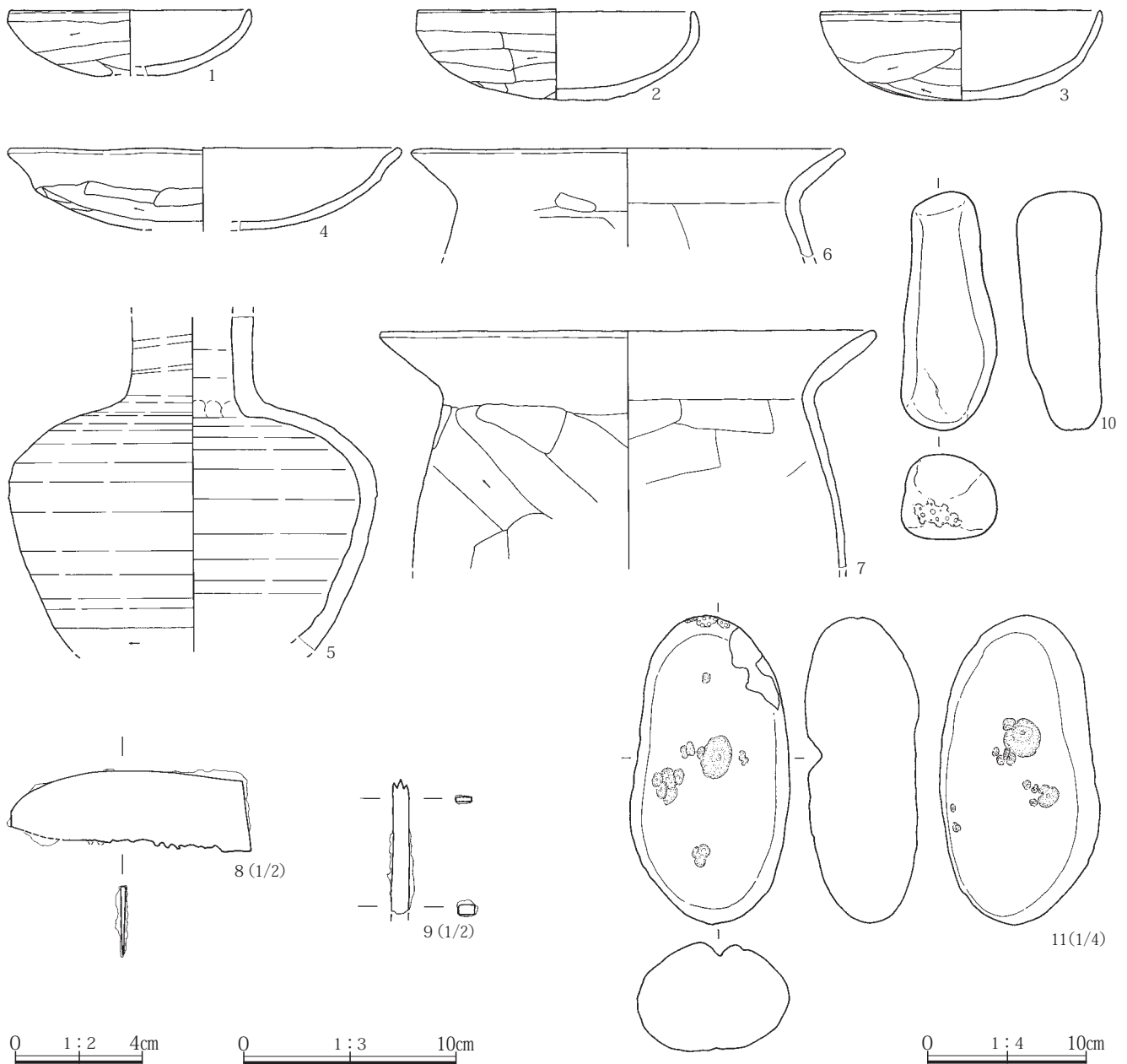
**カマド** 東壁や南寄り部分に構築されていた。残存状態は、燃烧部側壁に使用されていた礫は現状を保っていたが、天井部に使用されていた礫は崩落した状態であった。また、焚口から燃烧部手前側は構築材も残存していない状態であった。規模は全長1.58m、全幅1.00m、煙道部長1.07m、燃烧部幅0.46mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪められており、奥壁に向かいなだらかに立ち上がっていた。側壁内面は被熱により赤褐色化しており、燃烧部底面には、灰・炭化物が残存していた。掘方は、焚口部を中心に、東西軸を長軸とし、楕円形状に掘り込まれていた。側壁底面では礫を据え付けた小ピット状のものが、連続して掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示した遺物のうち1の土師器杯が柱穴P 3、3の土師器杯、6の土師器甕がカマド内、5の須恵器長頸壺はカマド内掘方と埋没土、4の土師器杯が掘方からの出土である。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片584点・小型製品片394点、須恵器大型製品片12点・小型製品片18点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は1・3～6など柱穴やカマドなど確実に相伴する遺物から8世紀第1四半期に比定できる。



第43図 3区1号竪穴住居遺構図(3)



第44図 3区1号竪穴住居出土遺物図

3区2号竪穴住居(第45・46図、PL.28～30・154)

**位置** 3区調査区中央のやや北寄り、83区T-7・8、84区A-7・8に位置する。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

**形状** 南北方向がやや長い長方形を呈す。

**規模** 長軸4.44m、短軸3.80mを測る。

**面積** 13.44㎡

**方位** N-81°-E

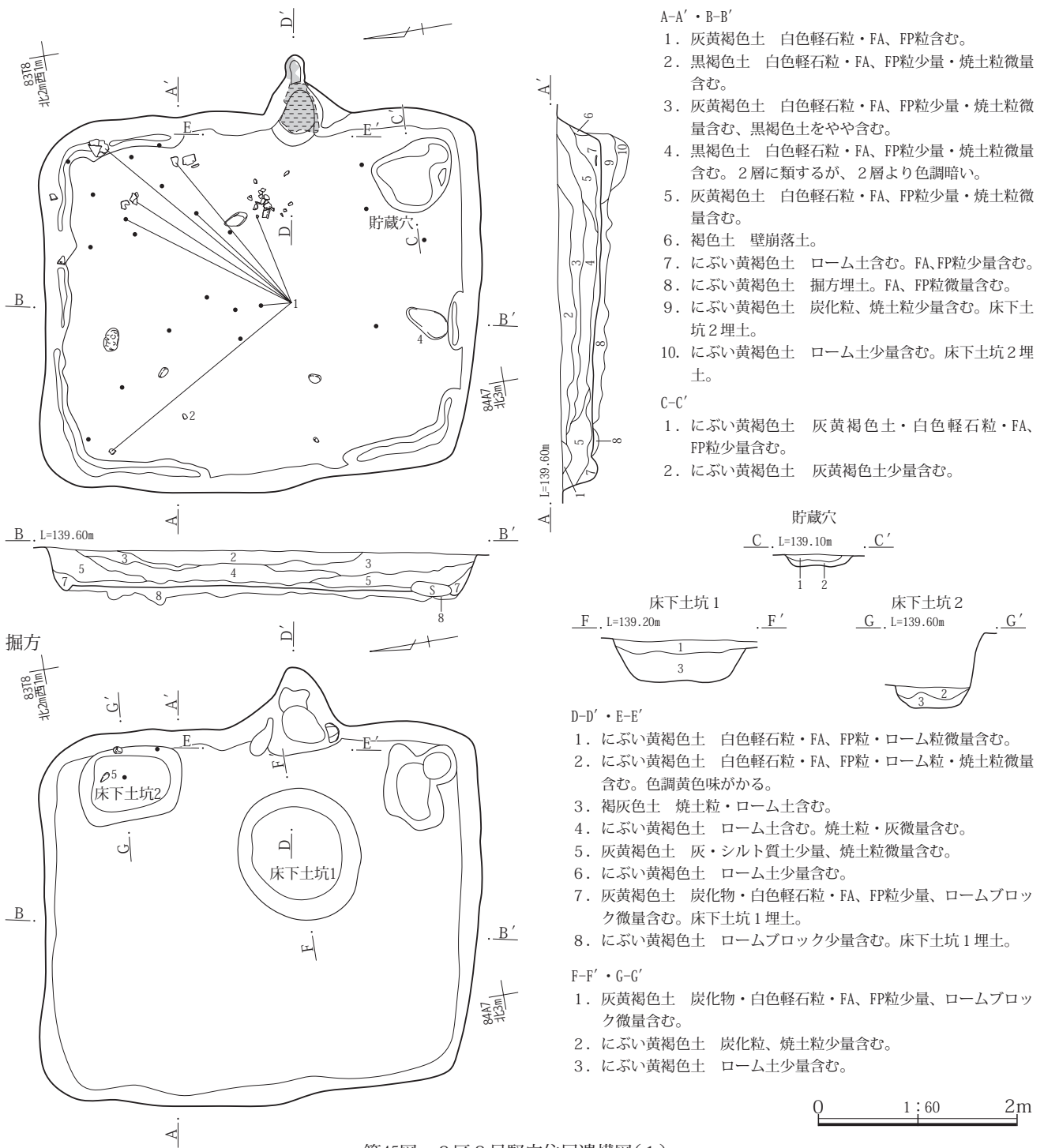
**埋没状態** 土層断面では白色軽石粒・FA粒・FP粒を含む灰黄褐色土や黒褐色土が周囲より流れ込んだ様子が観察

できることから、自然埋没と想定できる。

**床面** 掘方面より10cmほど、にぶい黄褐色土を埋め戻して構築されていた。

確認面から床面までの深さは、0.31～0.50mを測る。

**掘方** 床面より10cm前後の浅い掘り込みが住居全体に施されていた。東辺の北東角寄りとカマド前の住居中央やや東寄りで床下土坑2基を検出した。床下土坑1は楕円形状を呈し、長軸1.34m、短軸1.24m、深さ0.41mを測る。床下土坑2は、長方形形状を呈し、長軸1.04m、短軸0.74m、深さ0.26mを測る。なお、床下土坑2からは5の敲き石が出土している。



**壁溝** 住居北東隅から北壁、南壁にかけて確認された。南壁の一部でも確認されており、規模は、上端0.18～0.42m、下端0.01～0.11m、深さ0.02～0.04mを測る。

**柱穴** 検出されなかった。

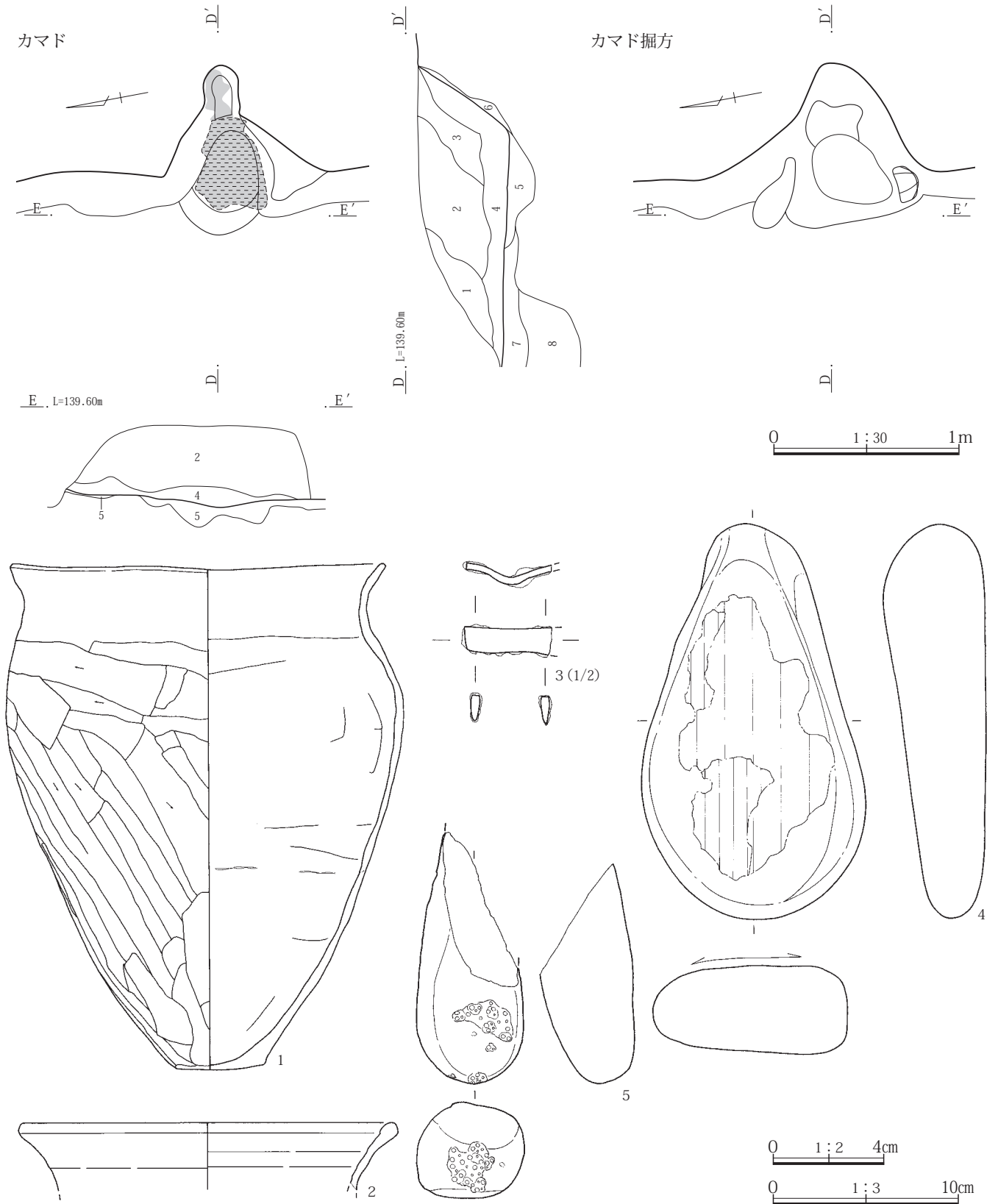
**貯蔵穴** 南東隅部にて、確認された。形状は不整形状を呈し、規模は長軸0.82m、短軸0.70m、深さ0.16mを測る。位置より貯蔵穴の可能性が想定されるが、掘り込みの浅さから、断定するには至らなかった。

**カマド** 東壁やや南寄り部分に、焚口を除き、燃燒部や煙道部を壁外に構築していた。残存状態は焚口、天井部とも壊されていた。規模は全長0.91m、全幅0.90m、燃燒部幅0.50mを測る。燃燒部は焚口よりやや窪められており、奥壁に向かいやや角度をつけて立ち上がっていた。燃燒部底面は、焼土化し、灰・炭化物が残存しており、使い込まれた様子が窺える。掘方は、燃燒部を中心に、径0.7×0.5mの楕円形状に15cmほど掘り込まれていた。



**出土遺物** 図示した遺物のうち、1の土師器甕が竪穴住居北半に散乱した状態で出土していて、4の石皿が南壁際の床面に据えられた状態で出土している。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片190点・小型製品片39点、

須恵器大型製品片16点・小型製品片2点が出土している。  
**所見** 本竪穴住居の時期は1の土師器甕の特徴から9世紀第2四半期に比定できる。



第46図 3区2号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図

3区3号竪穴住居(第47・51図、PL.30~32・154)

**位置** 3区調査区中央のやや北寄り、84区B-8・9、C-8・9に位置する。

**重複** 3区7号竪穴住居と北辺がわずかに重複する。本竪穴住居のほうが古い。

**形状** 東辺に比べて西辺が30cmほど長く、南辺と北辺がわずかに膨らむがほぼ長方形を呈す。

**規模** 長軸4.90m、短軸4.40mを測る。

**面積** 17.16㎡

**方位** N-93°-E

**埋没状態** 土層断面では壁際に三角堆積後ほぼ水平な堆積が観察でき自然埋没と想定される。なお、埋没土はともに白色軽石粒・FA粒・FP粒を含む灰黄褐色土である。

**床面** 灰黄褐色土・にぶい黄褐色土を壁際では5cm、中

央部では20cm~40cmほど埋め戻して構築している。床面の状態は、若干の凹凸がみられるがほぼ平坦で、壁際を除いては硬化しているのを確認している。

確認面から床面までの深さは、0.50~0.73mを測る。

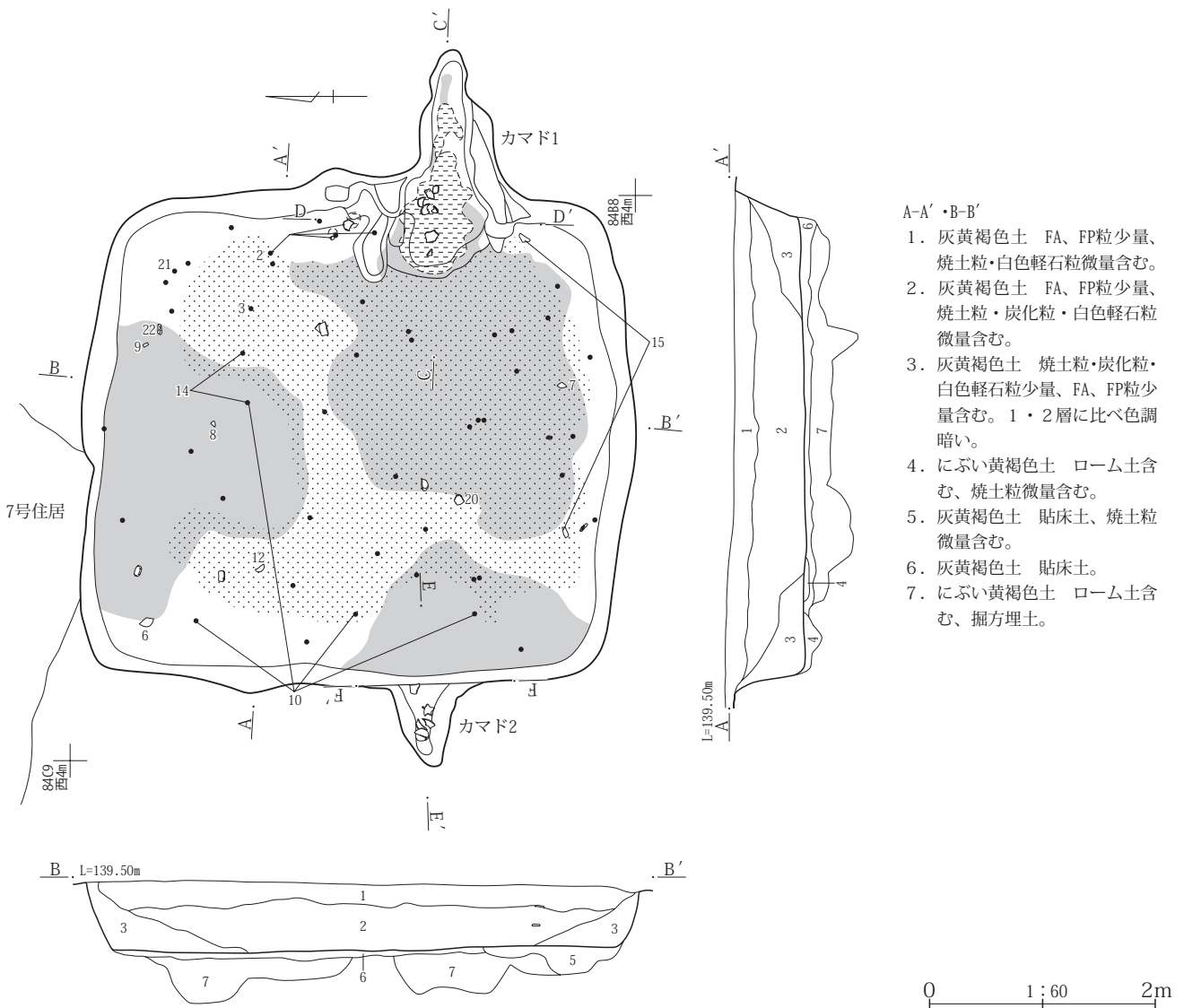
**掘方** 東壁、北壁、西壁のやや内側で幅30~50cm、深さ15cm前後の溝状落ち込み、その内側では連続する土坑状の掘り込みを検出した。これらの土坑は径1.0~1.5m、深さ0.2~0.4mである。床下土坑からは4の土師器杯、19の土師器甕が出土している。

**壁溝** 検出されなかった。

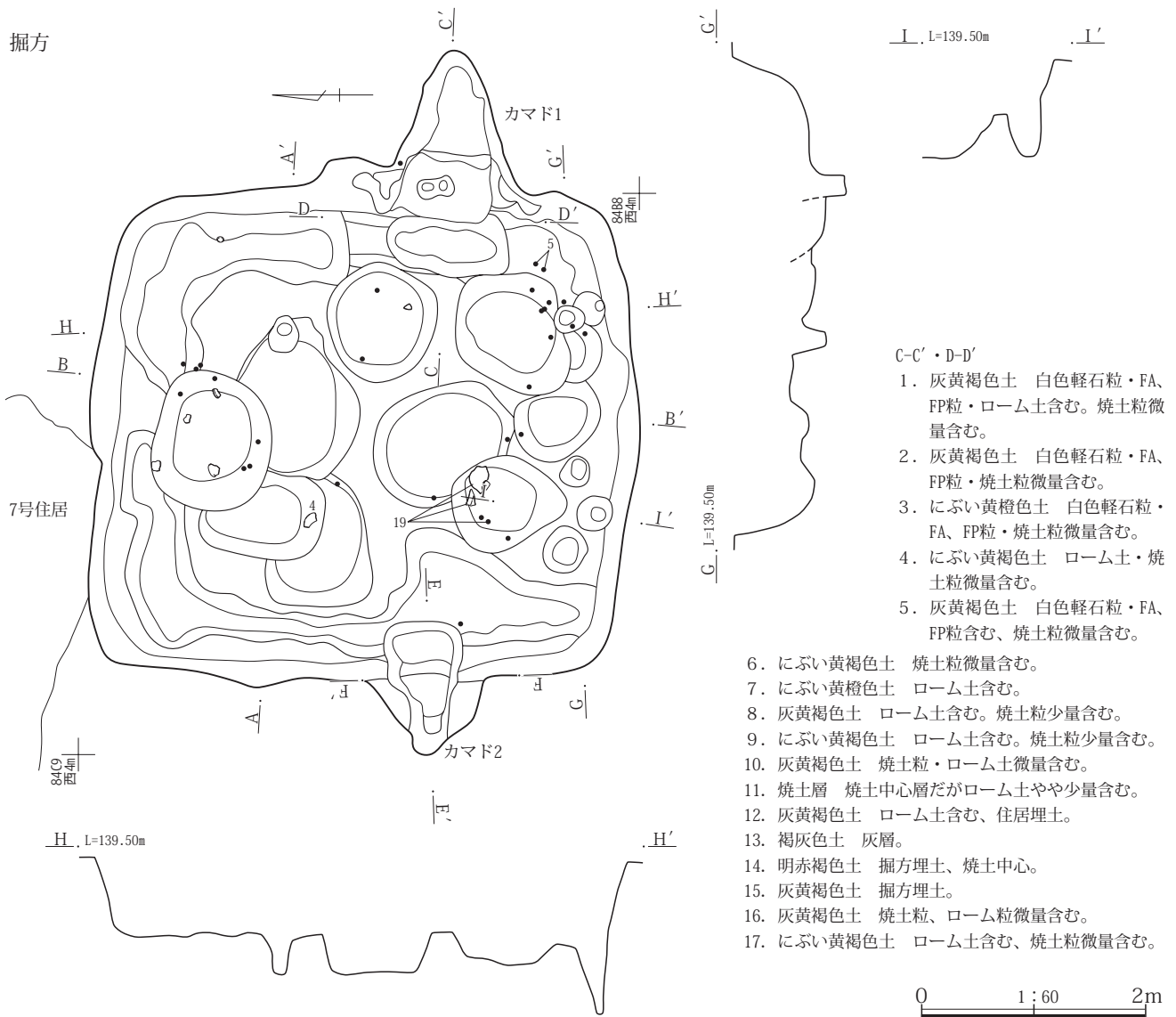
**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**カマド** 東辺及び西辺にて、それぞれ各1基が構築されていた。東辺をカマド1、西辺をカマド2とした。



第47図 3区3号竪穴住居遺構図(1)



第48図 3区3号竪穴住居遺構図(2)

カマド1は東辺のやや南寄り部分に構築されている。残存状態は側壁の一部は残っていたが、焚口や天井部は壊された状態であった。カマド土層11は天井部側の焼土とみられることから、天井部を構築していた土は壊され、さらに住居外に持ち出されたと想定される。規模は全長2.00m、煙道部長1.06m、全幅1.60m、燃烧部幅0.72mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪められており、奥壁に向かいなだらかに立ち上がっていた。焚口部から燃烧部にかけて、灰・炭化物が残存し、燃烧面は焼土化していた。掘方は、焚口部を中心として径0.5×1.1mの楕円形状に10cmほど掘り込まれていた。

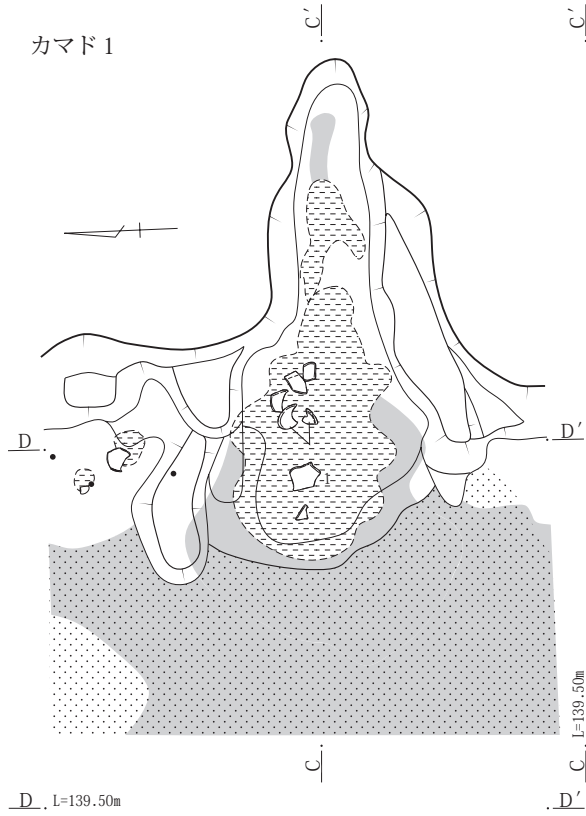
カマド2は、西壁やや南寄り部分に構築されていた。このカマドは住居が使用されている間に廃棄されたとみられ、焚口や燃烧部は撤去され、燃烧部の窪みは埋め戻

され、硬化面になっていた。残存するのは煙道部の一部と掘方だけであった。規模は煙道部長0.68m、煙道部幅0.48mを測る。掘方では、燃烧部から煙道部までの全長が1.20mを確認できた。残存状態からカマド2はカマド1に先行して使われていたものである。

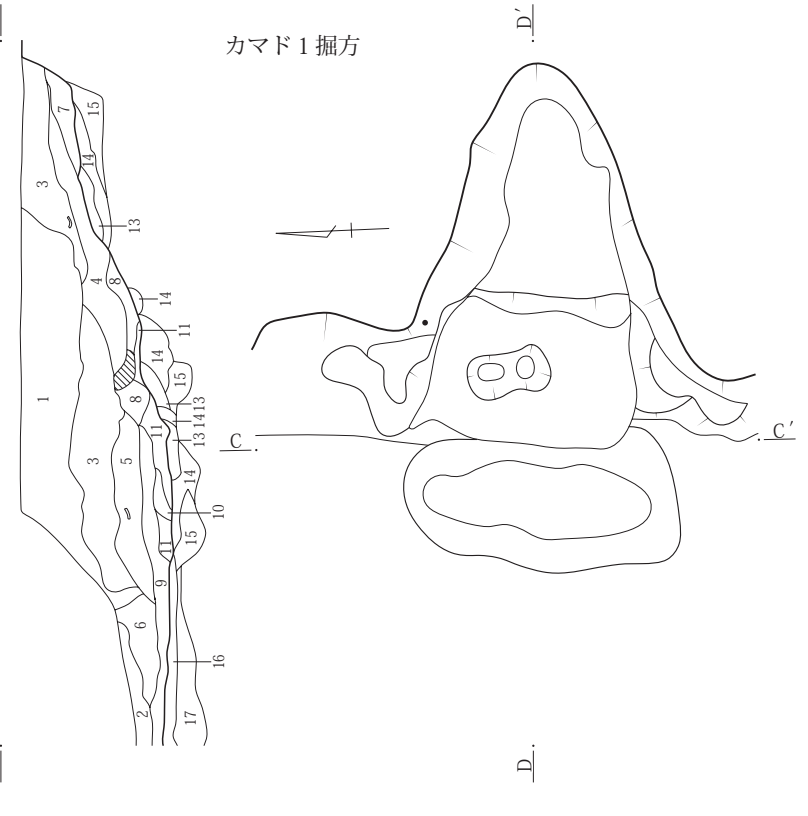
**出土遺物** 図示した遺物のうち、1の土師器杯と16の土師器甕がカマド、2の土師器杯、14・15の土師器甕が床面からの出土で、本竪穴住居に伴うものである。図示した他に土師器大型製品片1078点・小型製品片385点、須恵器大型製品片16点・小型製品片24点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は1、2、14~16や掘方から出土した遺物の特徴から7世紀第4四半期から8世紀第1四半期に比定できる。

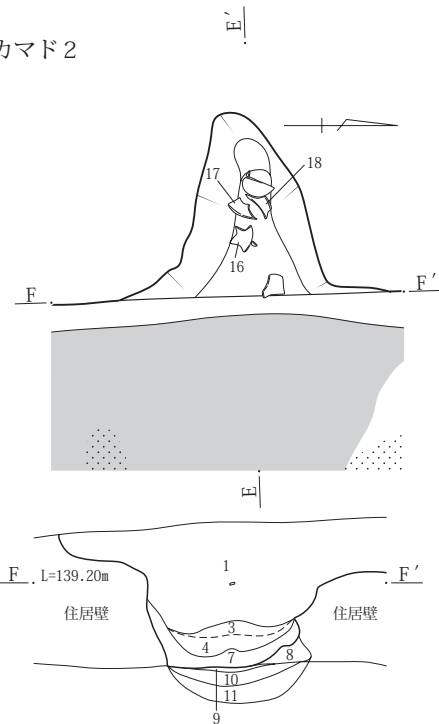
カマド1



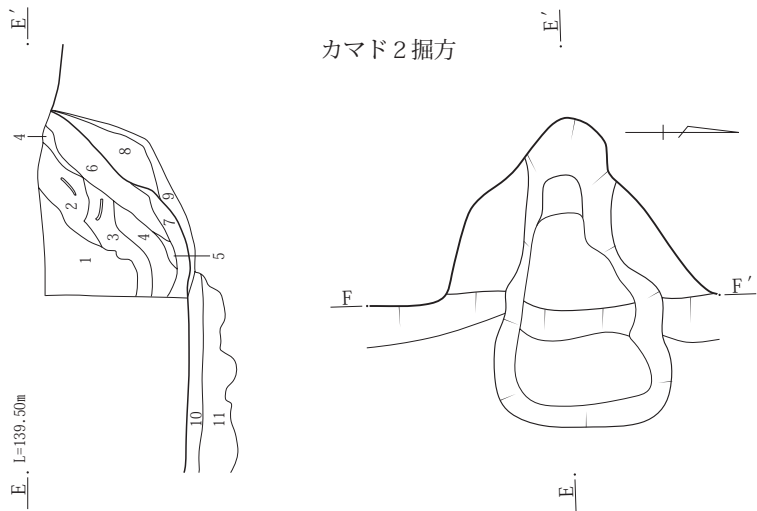
カマド1掘方



カマド2



カマド2掘方



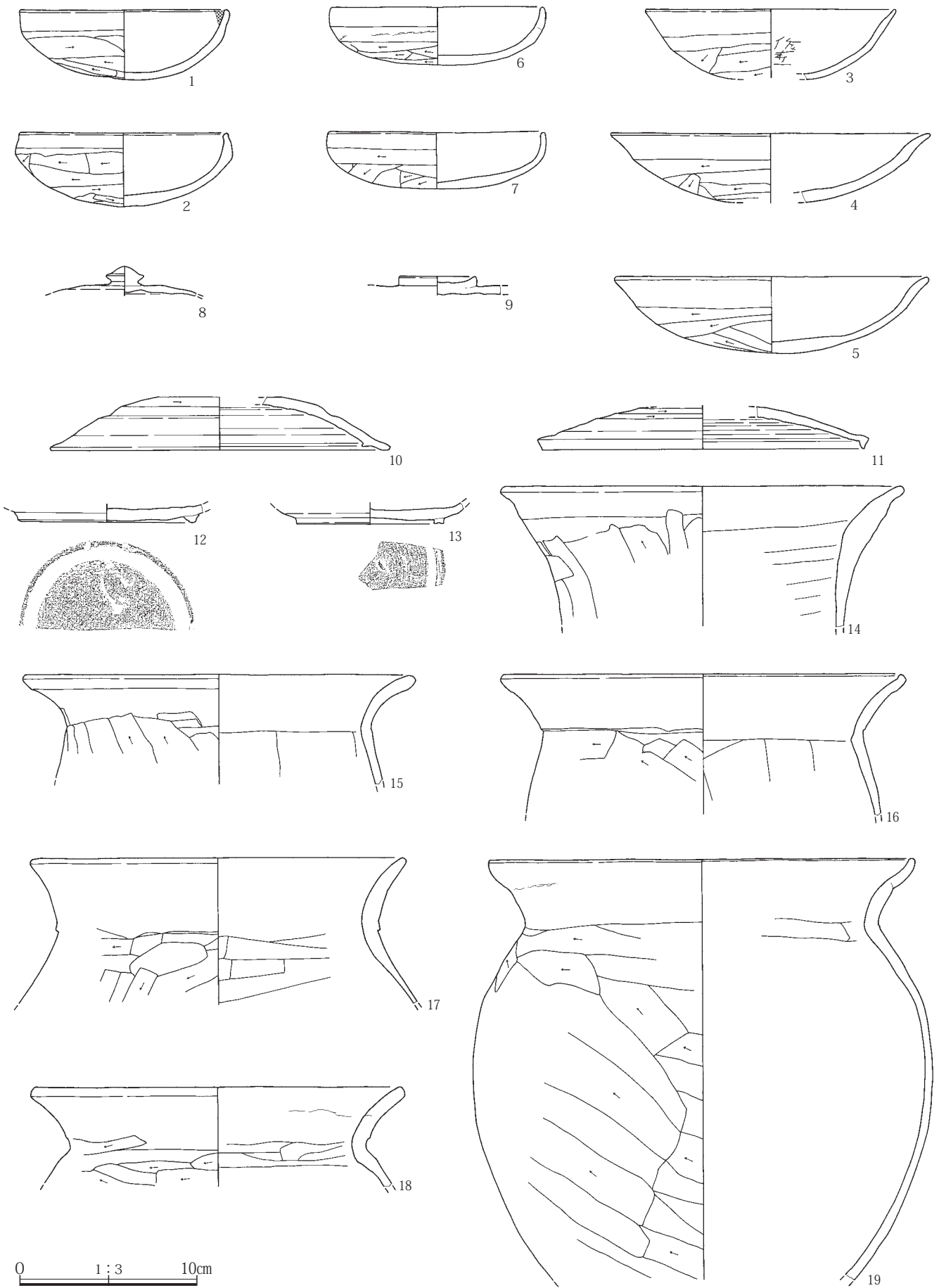
E-E'・F-F'

1. 灰黄褐色土 焼土・ローム土含む。白色軽石粒・FA、FP粒少量含む。
2. にぶい黄橙色土 ローム土含み、焼土粒わずかに含む。
3. 明赤褐色土 焼土層。
4. 灰黄褐色土 焼土粒・灰少量含む。
5. 褐灰色土 灰が中心となり堆積する。

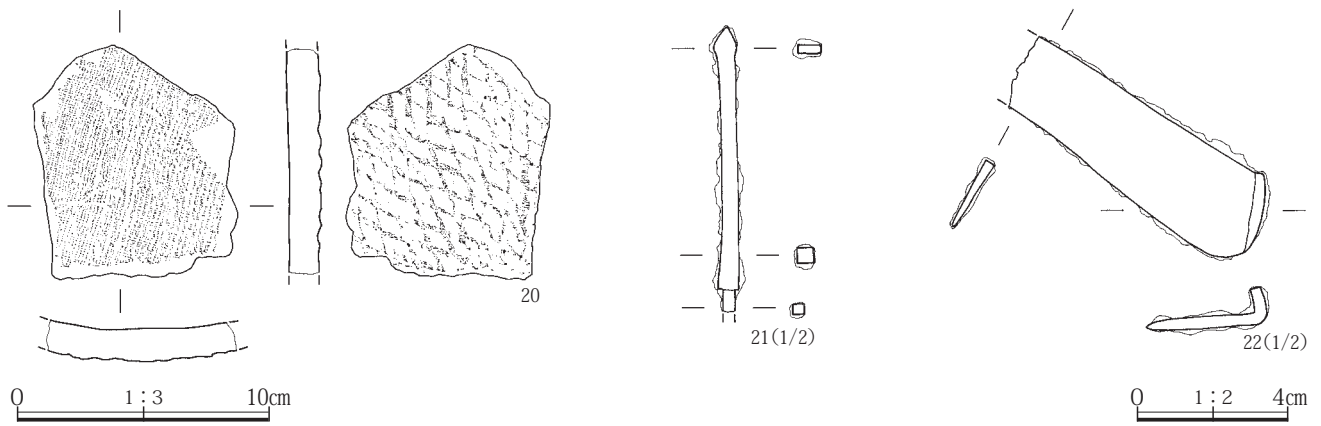
6. 灰黄褐色土 焼土粒・ローム土少量含む。
7. 赤褐色土 焼土が中心となり堆積する。
8. 灰黄褐色土 ローム土含む。
9. 灰黄褐色土 ローム土・白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。掘方埋土。
10. 灰黄褐色土 住居貼床土。
11. にぶい黄褐色土 住居掘方埋土。

0 1:30 1m

第49図 3区3号竪穴住居遺構図(3)



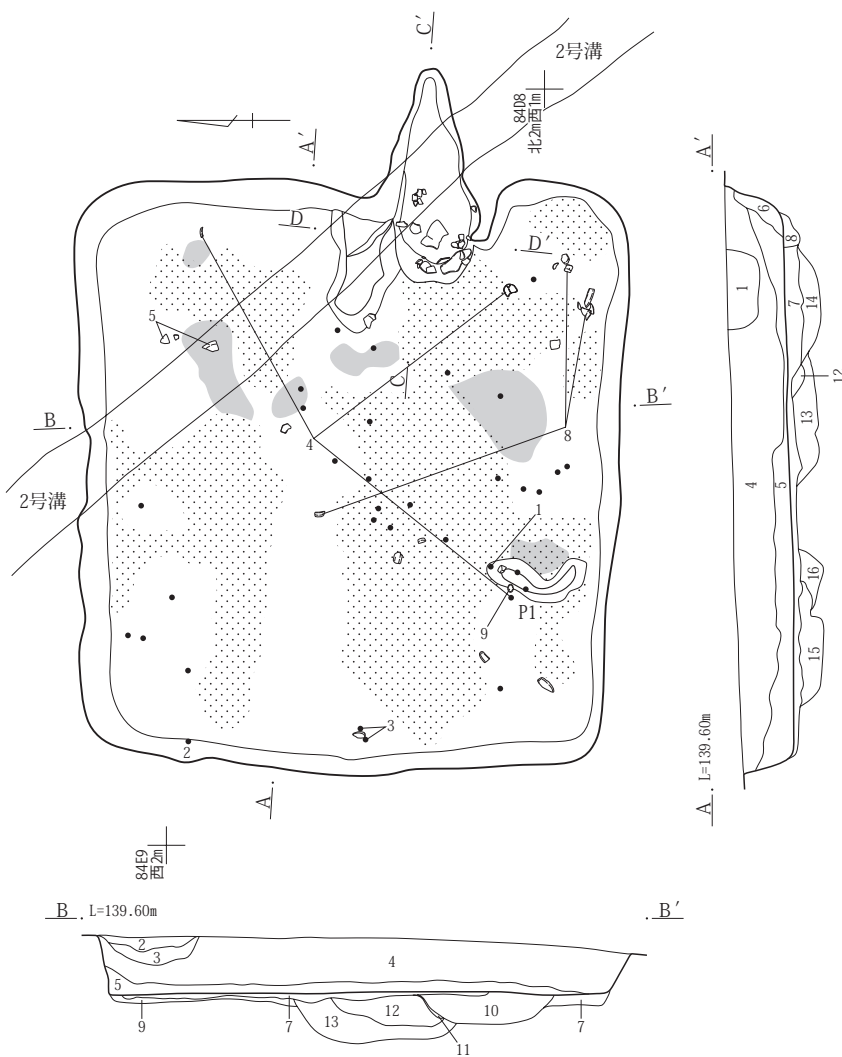
第50図 3区3号竪穴住居出土遺物図(1)



第51図 3区3号竪穴住居出土遺物図(2)

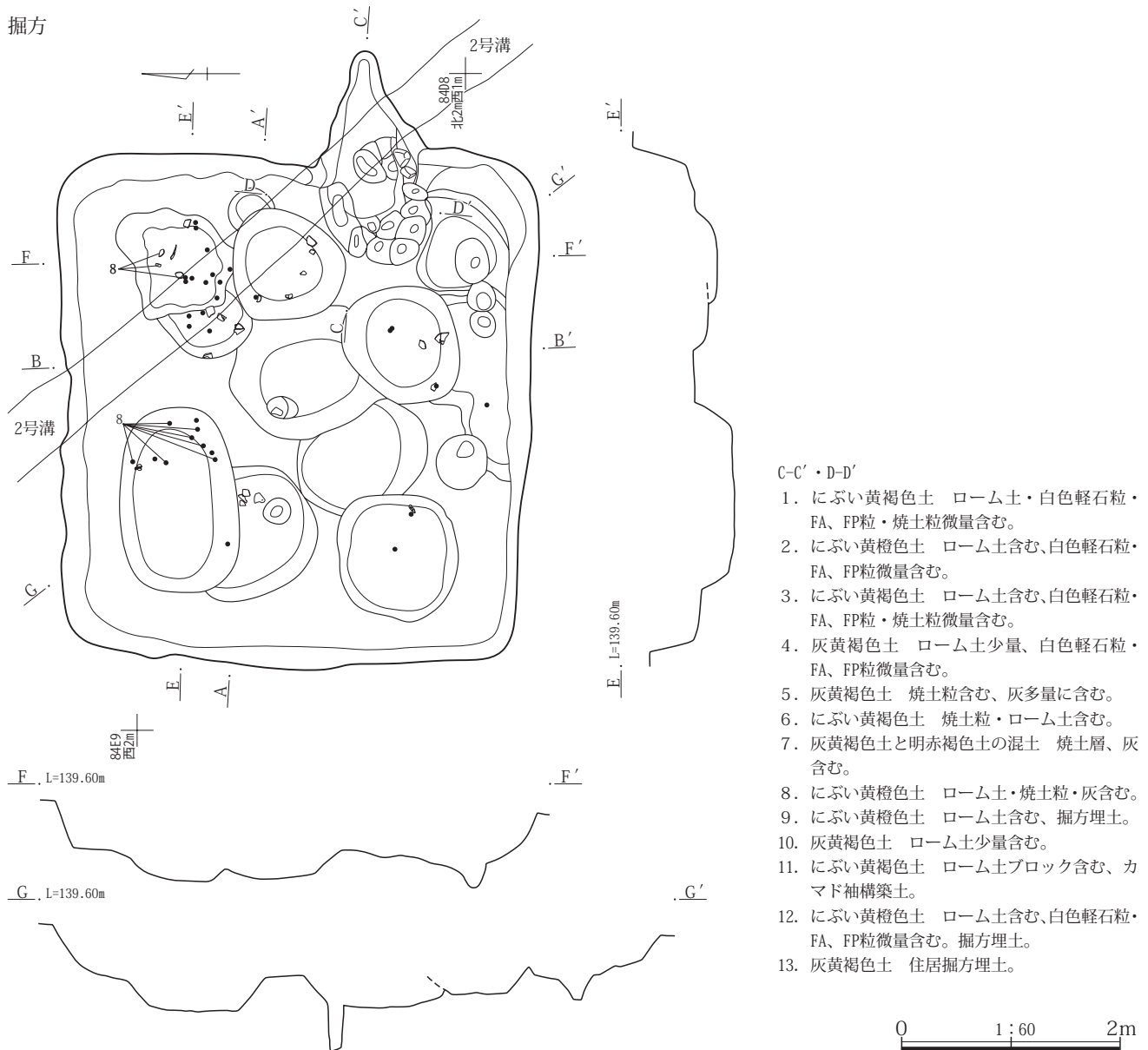
**3区4号竪穴住居**(第52～55図、PL.32・33・154・155)  
**位置** 3区調査区中央のやや北寄り、84区D-8・9、E-8・9に位置する。  
**重複** 2号溝と重複する。本竪穴住居の方が古い。

**形状** 東辺が西辺に比べて20cmほど長い、長方形を呈す。  
**規模** 長軸4.70m、短軸4.40mを測る。  
**面積** 16.53㎡  
**方位** N-94°-E



- A-A'・B-B'
1. 褐色土耕作土。
  2. 灰黄褐色土 ローム土・白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。2号溝埋土。
  3. 灰黄褐色土 2層に類するが、焼土粒含む。2号溝埋土。
  4. 灰黄褐色土 ローム土含む、白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。
  5. 黒褐色土 焼土粒・白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。ローム土含む。
  6. 灰黄褐色土 焼土粒・白色軽石粒・FA、FP粒・ローム土微量含む。
  7. 灰黄褐色土 ローム土・焼土粒・白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。部分的にしまる、掘方埋土。
  8. 灰黄褐色土 ローム土・焼土粒・白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。
  9. にぶい黄褐色土 ローム土やや多量含む。
  10. にぶい黄褐色土 焼土粒少量含む、白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。
  11. 明黄褐色土 ローム土中心。
  12. にぶい黄褐色土 FA、FP粒微量含む。
  13. 灰黄褐色土 ローム土含む。
  14. 褐灰色土 焼土粒・ローム土微量含む。灰白シルト質土含む。
  15. 褐灰色土 ローム土含む、焼土粒微量含む。
  16. 灰黄褐色土 ローム土・焼土粒・白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。

第52図 3区4号竪穴住居遺構図(1)



- C-C'・D-D'
1. にぶい黄褐色土 ローム土・白色軽石粒・FA、FP粒・焼土粒微量含む。
  2. にぶい黄褐色土 ローム土含む、白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。
  3. にぶい黄褐色土 ローム土含む、白色軽石粒・FA、FP粒・焼土粒微量含む。
  4. 灰黄褐色土 ローム土少量、白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。
  5. 灰黄褐色土 焼土粒含む、灰多量に含む。
  6. にぶい黄褐色土 焼土粒・ローム土含む。
  7. 灰黄褐色土と明赤褐色土の混土 焼土層、灰含む。
  8. にぶい黄褐色土 ローム土・焼土粒・灰含む。
  9. にぶい黄褐色土 ローム土含む、掘方埋土。
  10. 灰黄褐色土 ローム土少量含む。
  11. にぶい黄褐色土 ローム土ブロック含む、カマド袖構築土。
  12. にぶい黄褐色土 ローム土含む、白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。掘方埋土。
  13. 灰黄褐色土 住居掘方埋土。

第53図 3区4号竪穴住居遺構図(2)

**埋没状態** 土層断面では北側から流れ込んだ焼土や炭化物を含む黒褐色土が薄く覆った後、白色軽石粒・FA粒・FP粒を含む灰黄褐色土で埋没していることが観察できることから、自然埋没によると想定される。

**床面** 床下土坑部分以外では灰黄褐色土・にぶい黄褐色土を5cmほど埋め戻して構築されている。床面の状態は、若干の凹凸がみられたがほぼ平坦である。全体的に硬化していた。また、東側半分には焼土の広がり確認できた。

確認面から床面までの深さは、0.29～0.48mを測る。

南壁際にて土を半円状に高め、内側に焼土が確認される箇所が確認され、炉としての機能が窺えるが、断定に

は至っていない。この施設は長さ70cm、幅15cm、高さ3～5cm、焼土範囲は50×30cmほどである。

**掘方** 各壁のやや内側に連続する土坑状の掘り込みが確認され、床下土坑とみられる。床下土坑は形状が円形ないしは楕円形を呈し、規模は径1.00～1.70m、深さ0.10～0.50mを測る。なお、南東角で検出された落ち込みは貯蔵穴の可能性がみられる。形状は矩形にやや角ばった円形、規模は径0.70m、深さは床面より0.40mを測る。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 床面では確認されなかったが、掘方で可能性のある落ち込みを確認した。(掘方の項目参照)

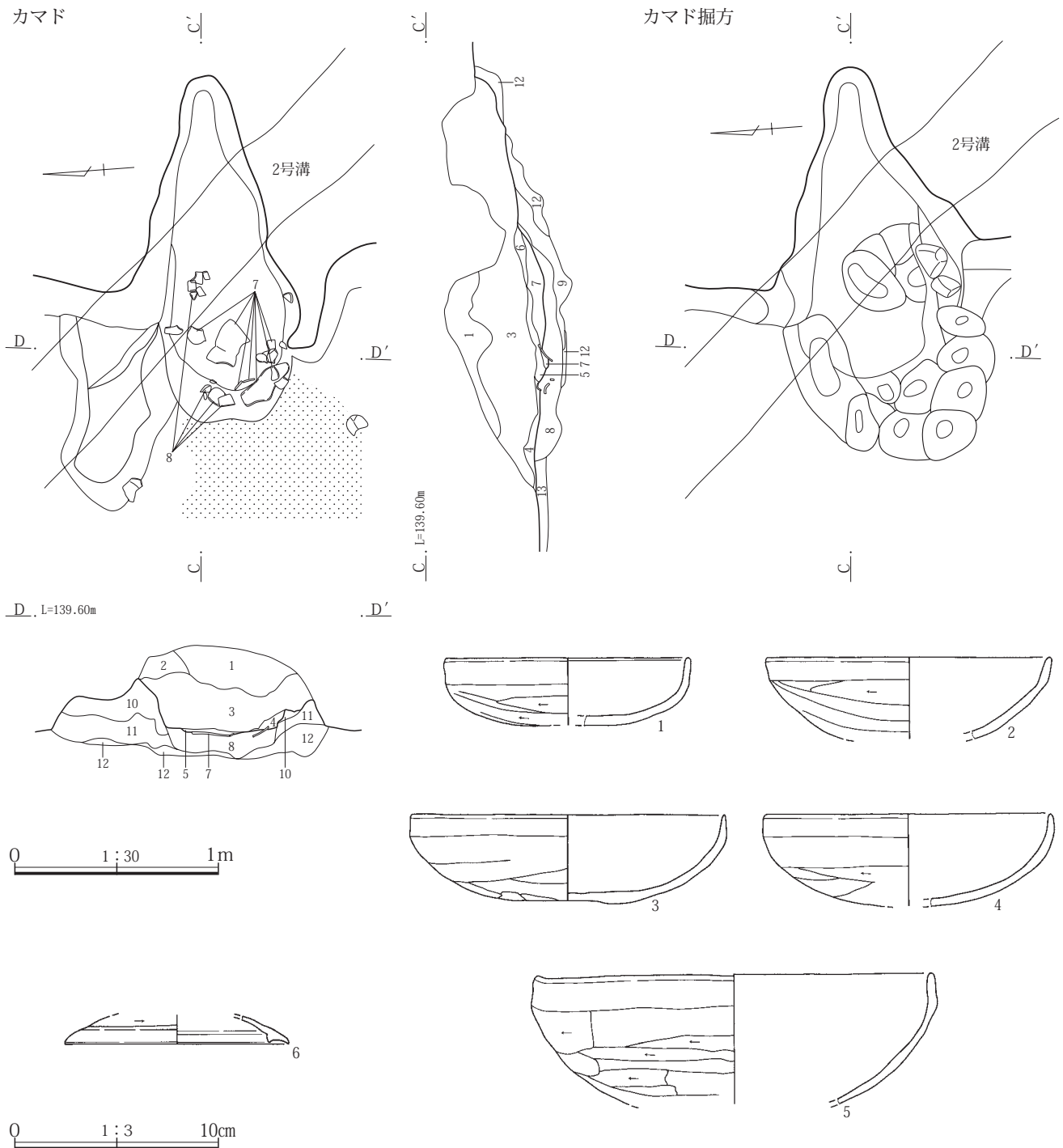
**カマド** 東壁やや南寄り部分にて確認された。残存状態は左側の側壁の一部が残っていたが、焚口や天井部は壊された状態であった。規模は全長1.66m、全幅1.45m、燃焼部幅0.66mを測る。燃焼部は焚口よりやや窪められており、奥壁に向かいなだらかに立ち上がっていた。

掘方は、焚口部分にて、径30cm前後の小穴が連続して掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示した遺物のうち、1の土師器杯、7・8

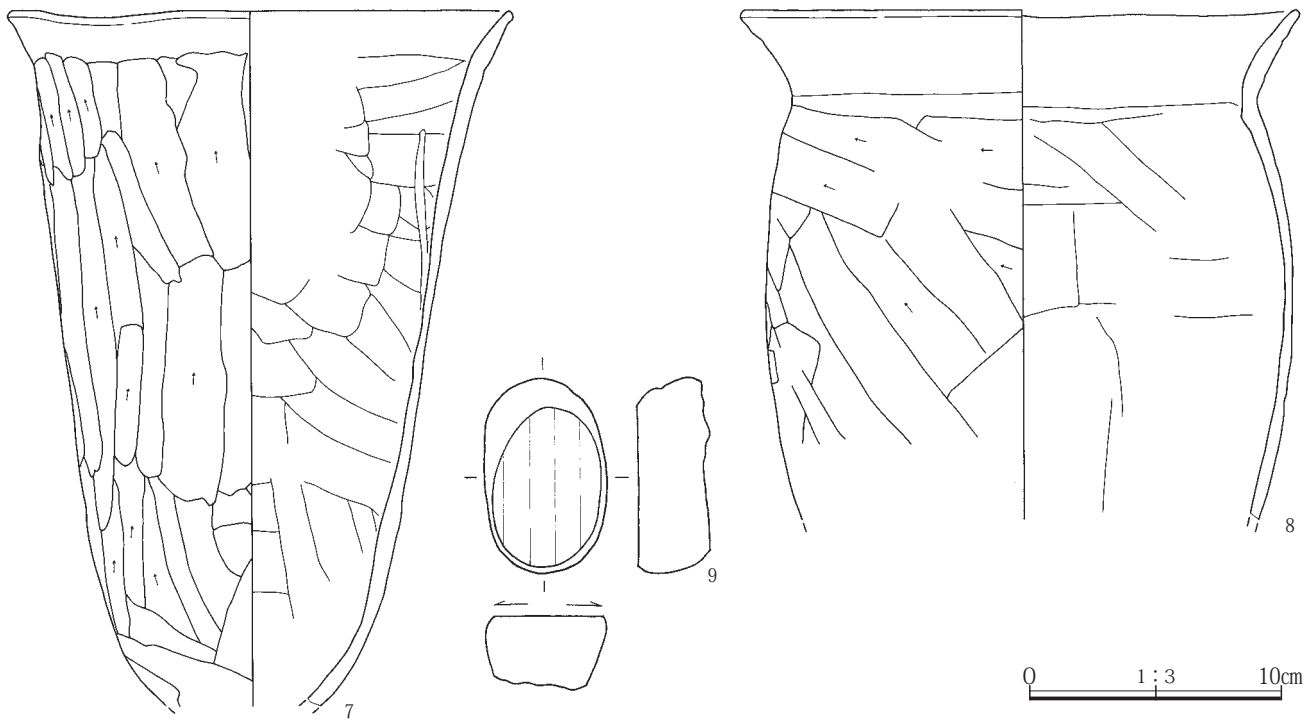
の土師器甕はカマドや掘方からの出土で本竪穴住居に伴うものである。図示した遺物の他に土師器大型製品片486点・小型製品片201点、須恵器大型製品片4点・小型製品片12点が出土している。

**所見** カマドや掘方から出土した遺物のうち、7は1や8に比べて古い様相を呈することから、本竪穴住居の時期は1・8の遺物の特徴から8世紀第1四半期に考えられる。



第54図 3区4号竪穴住居遺構図(3)・出土遺物図(1)





第55図 3区4号竪穴住居出土遺物図(2)

**3区6号竪穴住居(第56・57図、PL.34・35・155)**

**位置** 3区調査区北西隅寄り、84区I-10・11、J-11に位置する。調査は平成22年度・23年度と2カ年に分けて行われている。各年度の調査範囲は22年度は北辺側1.3～1.5m、25年度はカマドを含め中央部分である。なお、南側3分の1は攪乱によって欠くため全貌は不明である。

**重複** 攪乱の他は、他の遺構との重複関係は確認されなかった。

**形状** 北東の角は直角に近いが、北西の角はやや広角で西辺の中ほどで屈曲する様子が見られることから多角形状を呈する可能性が想定される。

**規模** 東西方向は4.15m、南北方向は残存する範囲で2.74mを測る。

**面積** 残存範囲で9.17㎡を測る。

**方位** N-115°-E

**埋没状態** 土層断面では白色軽石粒・FA粒・FP粒を含む灰黄褐色土、にぶい黄褐色土の堆積が観察され、堆積状態から自然埋没と想定される。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めて平坦面をつくり使用している。

確認面から床面までの深さは、0.07～0.11mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、構築されていなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 北西角で検出したP1が貯蔵穴としての可能性が想定されている。形状は円形状を呈し、規模は径0.52m、深さ0.27mを測る。

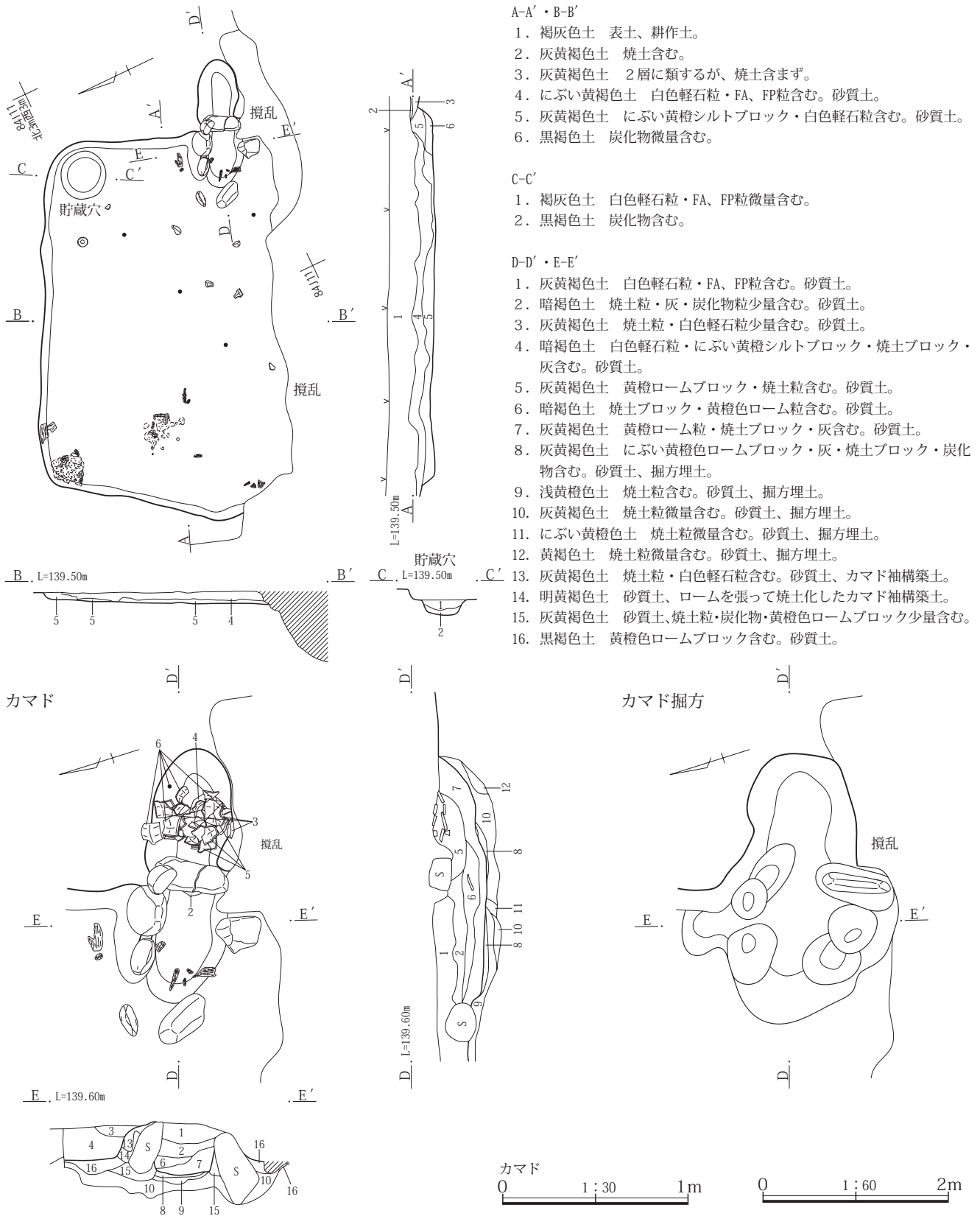
**カマド** 東壁中ほどに構築されていた。残存状態は燃焼部左側壁や沿道部に補強材として利用されていた礫はそのままの状態が残っていたが、焚口や燃焼部の天井、右側壁は壊され、右側壁に利用されていた礫はカマド脇に廃棄された状態であった。規模は全長1.37m、残存する全幅は0.60m、煙道部長0.80m、燃焼部幅0.40mを測る。燃焼部は焚口よりやや窪められており、奥壁に向かいなだらかに立ち上がっていた。掘方は、焚口部を中心に、南北軸を長軸として楕円形状に窪められていた。側壁の構築材には径20～35cmの扁平な礫が利用されていた。カマド前には焚口に掛けられていたとみられる円柱状の礫が廃棄されていた。煙道部には3～6に図示した円筒埴輪や形象埴輪基部が利用されていた。

**出土遺物** 図示した遺物のうち1の須恵器杯は床面から出土し、2の土師器羽釜はカマドで煮沸用として使用されていたものが残されたとみられる。図示した以外に土

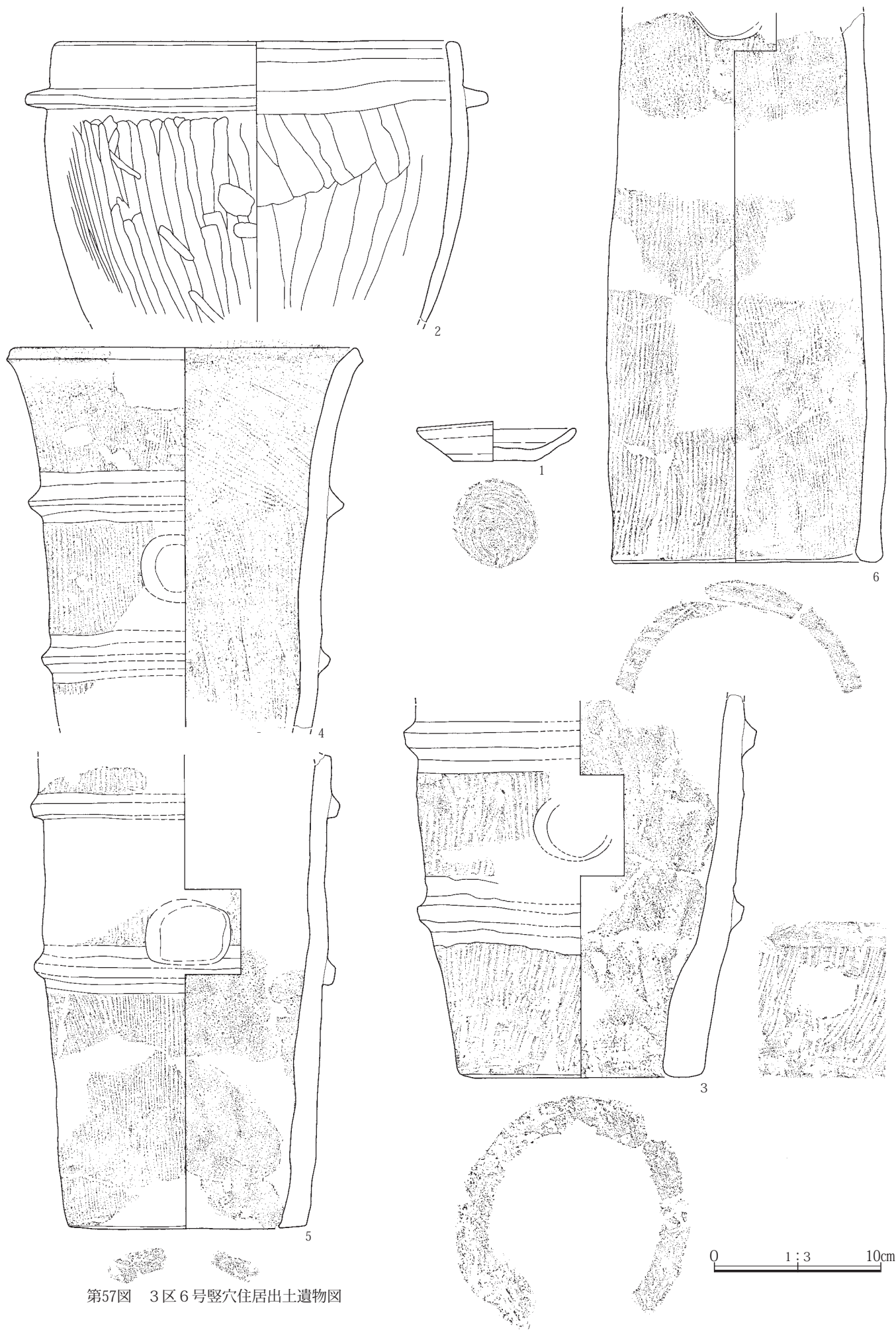
師器大型製品片13点・小型製品片9点、埴輪片83点が出土している。

遺物以外では、北西角からは板状の炭化材、北西部分では径の細い棒状の炭化材が出土している。なお、炭化

材の出土状況からは焼失した可能性は低いとみられる。  
**所見** 本竪穴住居の時期は床面やカマドから出土した須恵器杯や土師器羽釜などの遺物の特徴から10世紀第4半期に比定できる。



第56図 3区6号竪穴住居遺構図



第57图 3区6号竖穴住居出土遗物图

3区7号竪穴住居(第58～60図、PL.35・36・155)

**位置** 3区調査区中央部やや北寄り、3区3号竪穴住居の北側、84区C-9・10に位置する。

**重複** 南東角で3区3号竪穴住居と重複する。本竪穴住居のほうが新しい。

**形状** 南北方向が東西方向に比べ0.50mほど長い長方形を呈す。

**規模** 長軸4.72m、短軸3.98mを測る。

**面積** 15.75㎡

**方位** N-110°-E

**埋没状態** 土層断面では壁際に、にぶい黄褐色土が三角堆積をした後、白色軽石粒・FA粒・FP粒を含む灰黄褐色土によって大部分が埋没していることが観察されることから自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より灰黄褐色土を10cmほど埋め戻して構築されていた。床面は北東部の壁際に設けられた柵状施設を除き、若干の凹凸がみられるがほぼ平坦で、全面が硬化していた。

確認面から床面までの深さは、0.29～0.35mを測る。

東辺のカマド北側から北辺の東半、西辺の各壁際から炭化材が出土し、焼土がみつまっている。なお、炭化材については、自然科学分析を行なった。分析結果は第4章第4節にて述べるが、使用されていた材はクヌギ・コナラ・タケ・イネなどであった。炭化材の出土状況から、これらの材は、住居上屋構造に使用されていた材と考えられる。北東隅や西辺壁際に出土したタケやイネは稈状にまとめられていたカヤ材と考えられ、西辺及び東辺壁沿いに出土しているクヌギは桁材、北壁沿いに出土したクヌギは梁材、北東隅及び北西隅にて住居中央部に向かうような位置で出土したクヌギ材は垂木材とみられる。

**掘方** 浅い掘り込みが全体に施されていた。南西部分と北西隅寄りから小規模な土坑状の掘り込みを確認した。規模が小規模なことなどから床下土坑とは認定には至らなかったが、適当な名称がないため、床下土坑と仮称した。床下土坑1は、形状が楕円形を呈し、規模は長軸0.46m、短軸0.40m、深さ0.12mを測る。床下土坑2は、形状が楕円形を呈し、規模は長軸0.65m、短軸0.59m、深さ0.32mを測る。ともに遺物の出土はみられなかった。

**壁溝** 検出されなかった。掘方でも痕跡が確認できないことから当初より設けられていないとみられる。

**柱穴** 南東角壁際から2本、北東角、北西角、南西角壁際から各1本、北辺中ほどの壁際から2本、西辺、南辺、東辺中ほどの壁際から4本を検出した。各柱穴の規模は第4表のとおりである。柱穴は全体的に小規模であるが、壁と一体の構造がとられていたと考えられる。

柱痕は柱穴P4以外の柱穴で確認されている。規模は径5cmから10cm前後と差がみられる。なお、多くの柱は炭化材の出土状況から竪穴住居焼失の際と一緒に燃えた可能性がみられるが、柱穴P2では抜き取りが行われた可能性が窺えた。

**貯蔵穴** カマド北側と柵状施設の西で検出した。カマド北側を貯蔵穴1、柵状施設の西を貯蔵穴2とする。

貯蔵穴1は平面形状が楕円形状、断面形状は途中が脹らむ箱形を呈す。規模は長軸0.72m、短軸0.70m、深さ0.61mを測る。内部からは炭化材や11の須恵器羽釜、12の須恵器甕が出土しているが、11の羽釜の一部片はこの貯蔵穴際の床面からも出土している。

貯蔵穴2は、形状が隅丸長方形、断面形状は箱形を呈し、底面は平坦であった。規模は長軸0.88m、短軸0.74m、深さ0.55mを測る。内部からは8の灰釉陶器椀が出土している。

**柵状施設** 北壁側の東半は幅1.0mほどの範囲で高さ15～20cmほど粘土で盛り上げられた、柵状施設が構築されていた。柵状施設の表面は若干の凹凸が見られたが、ほぼ平坦である。また、柵状施設の西端には貯蔵穴2が存在した。

**カマド** 東辺南寄りに構築されていた。残存状態は焚口、側壁、燃焼部天井ともほとんど残らない状態まで壊されていた。規模は全長1.21m、全幅1.05m、燃焼部幅0.50mを測る。燃焼部は焚口よりやや窪んでいた。煙道部はほとんど壁外に延びず、燃焼部から角度をつけて立ち上がっていた。

掘方は、燃焼部を中心に細長い楕円形状に10cm前後掘り込まれていた。

燃焼部からは10の須恵器羽釜、1・2の須恵器杯が出土している。

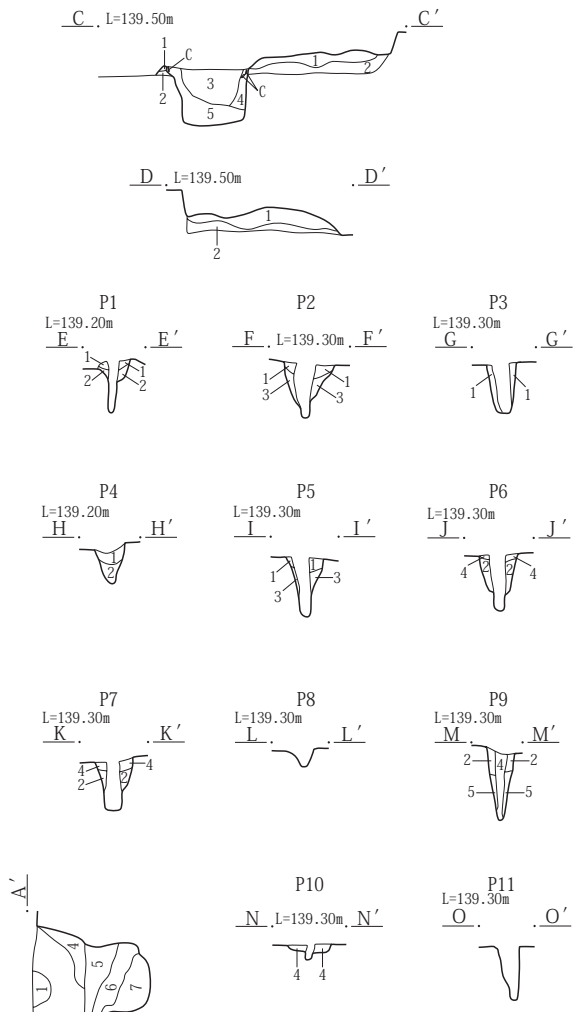
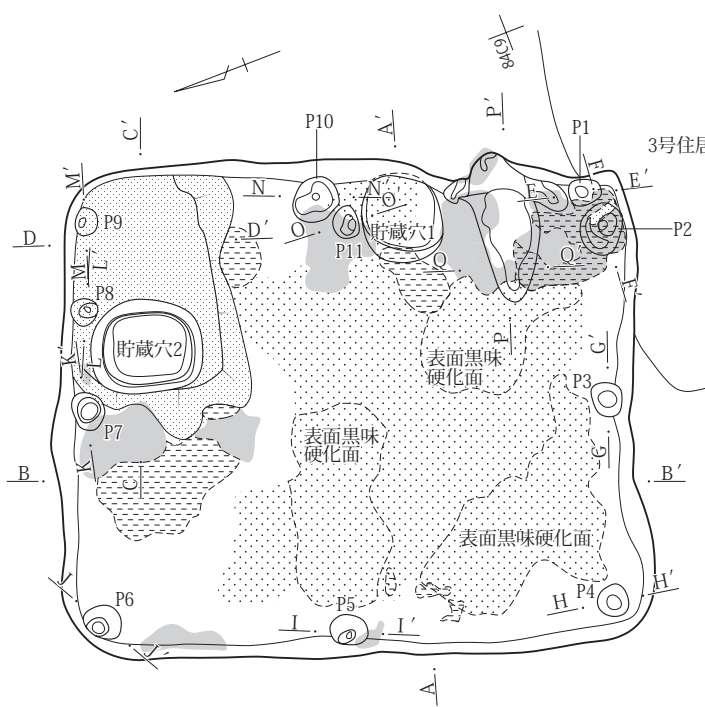
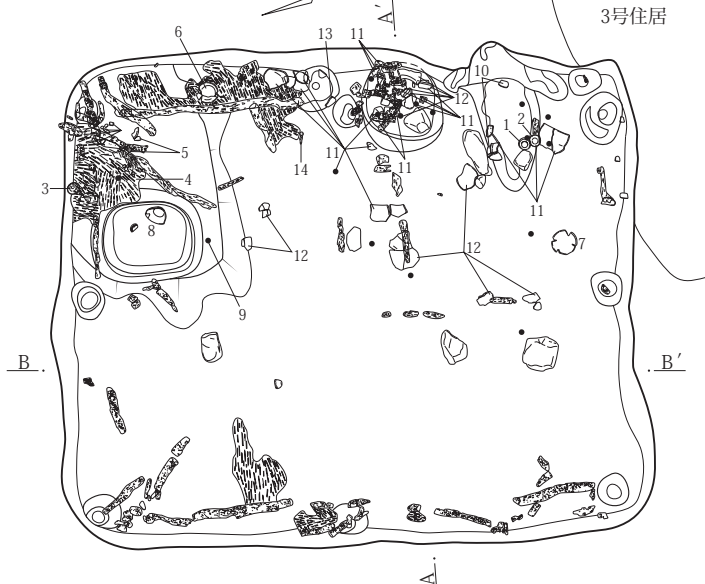
**出土遺物** 1・2の須恵器杯、10の須恵器羽釜はカマド、11の須恵器羽釜、12の須恵器甕は貯蔵穴1、3～6の須恵器の杯・椀、7の黒色土器椀は床面からの出土である。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片147点・小

型製品片76点、須恵器大型製品片4点・小型製品片9点  
 が出土している。

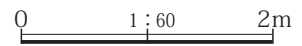
**所見** 本竪穴住居は、多くの炭化材が出土し、焼土が床  
 面に散布していることから焼失家屋とみられるが、炭化  
 材や焼土の範囲が一部に限られることから廃棄後に不要

材を焼却した可能性が想定される。時期はカマドや貯蔵  
 穴、床面などから出土し、確実に共伴する遺物には10世  
 紀の第3四半期から第4四半期の特徴があることから10  
 世紀後半代に比定できる。

炭化材等出土状況



- A-A'・B-B'
1. 褐灰色土 耕作痕埋土。
  2. 黒褐色土 FA、FP粒微量含む。
  3. 灰黄褐色土 焼土粒極少量・白色軽石粒・FA、FP粒少量含む。
  4. にぶい黄褐色土 ローム土含む、白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。
  5. 灰黄褐色土 焼土粒微量・FA、FP粒少量含む。
  6. 灰黄褐色土 ローム土やや多量含む。
  7. 灰黄褐色土 焼土粒微量含む。底部に炭化物が認められる。
  8. にぶい黄褐色土 締まり非常に良い。ローム土、FA、FP粒少量含む。硬化面形成土。
  9. にぶい黄褐色土 ローム土多量に含む。
  10. 灰黄褐色土 ローム土少量含む。
  11. にぶい黄褐色土 ローム土少量含む。



第58図 3区7号竪穴住居遺構図(1)

第4表 3区7号竪穴住居 柱穴計測表

ピットNo.	形状	長軸長 (m)	短軸長 (m)	深さ (m)	柱穴間距離 (m)
P1	不整形	0.24	0.20	0.40	0.30
P2	楕円形	0.42	0.34	0.35	1.40
P3	不整形	0.28	0.24	0.39	1.62
P4	円形	0.24	0.24	0.36	2.13
P5	楕円形	0.30	0.24	0.49	2.01
P6	不整形	0.32	0.26	0.48	1.75
P7	不整形	0.31	0.24	0.49	0.81
P8	不整形	0.22	0.21	0.18	0.69
P9	楕円形	0.22	0.18	0.66	1.85
P10	楕円形	0.38	0.36	0.27	~ P1 2.11
P11	不整形	0.26	0.20	0.48	-

C-C'・D-D'

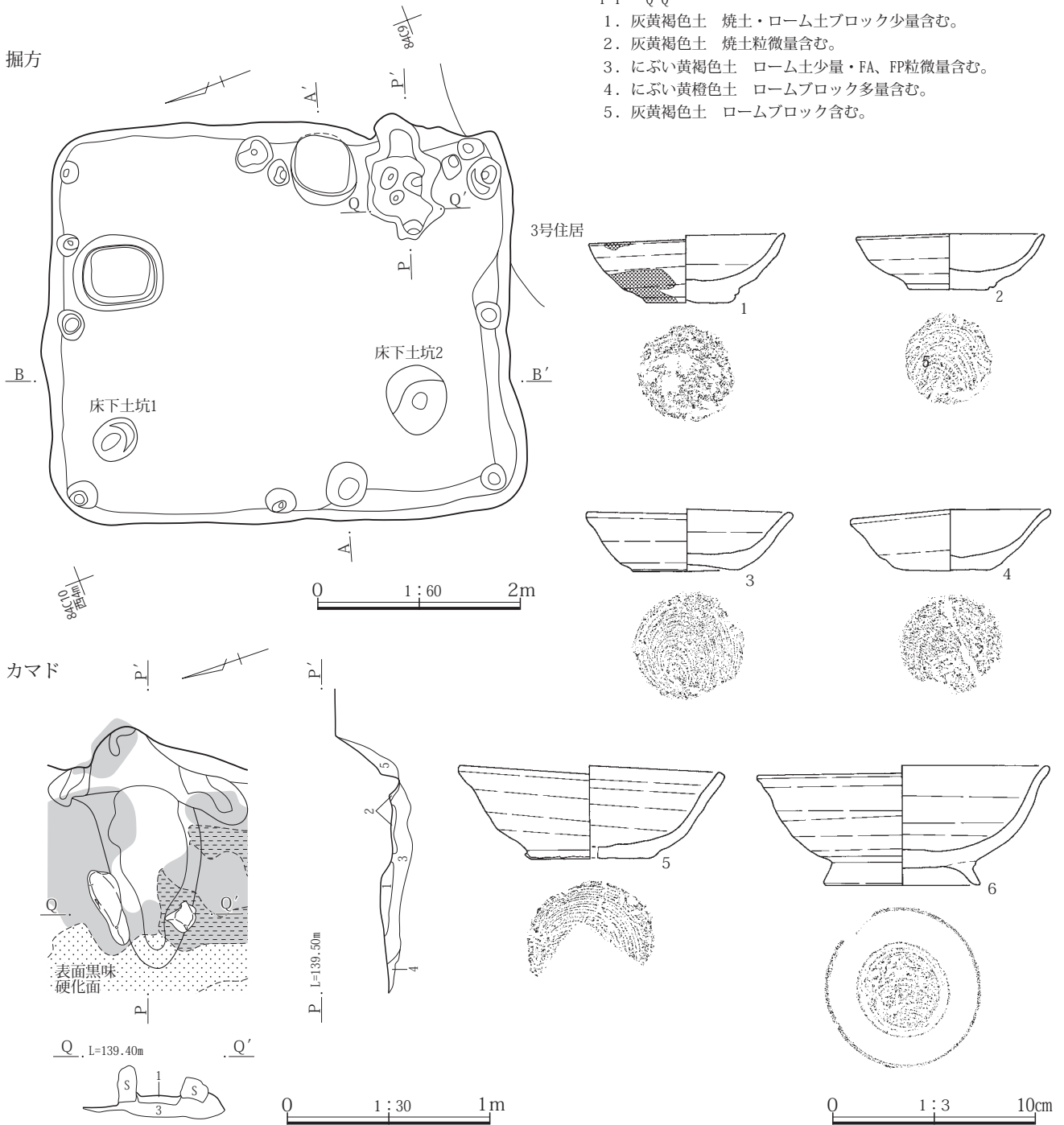
1. にぶい黄橙色土 ローム土中心。
2. 灰黄褐色土 ロームブロック多量含む。
3. 灰黄褐色土 FA、FP粒微量含む。
4. 灰黄褐色土 炭化物少量含む。上層の壁際に炭化物あり、蓋か？締まり弱い。
5. 灰黄褐色土 ローム土微量含む。

E-E'・F-F'・G-G'・H-H'・I-I'・J-J'・K-K'・L-L'・M-M'

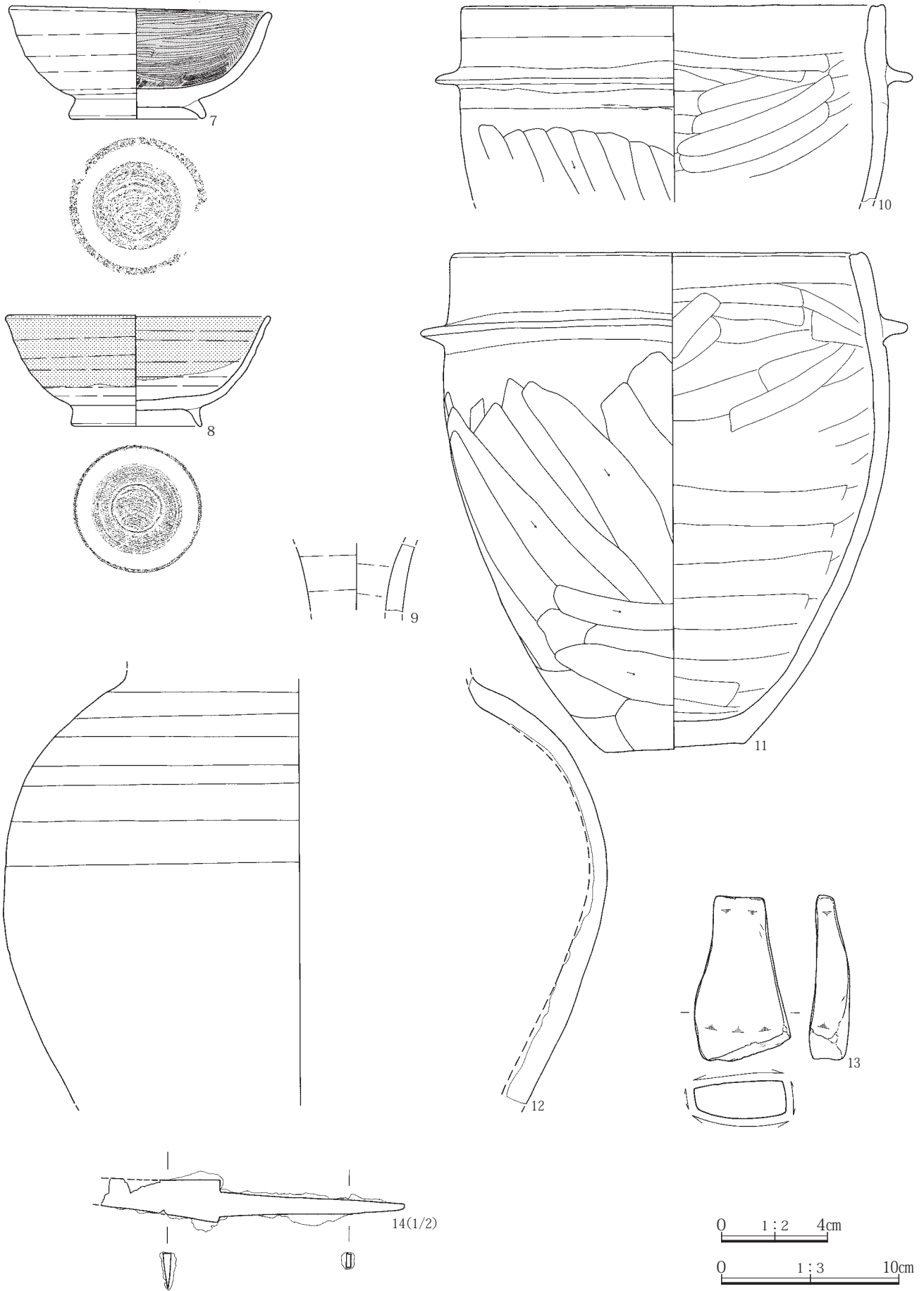
1. にぶい黄褐色土 ローム土含む。締まりやや弱い。
2. 灰黄褐色土 ローム土少量含む。締まりやや弱い。
3. 灰黄褐色土 ローム土微量含む。締まりやや弱い。
4. にぶい黄褐色土 ローム土少量含む。締まりやや弱い。
5. 灰黄褐色土 締まりやや弱い。

P-P'・Q-Q'

1. 灰黄褐色土 焼土・ローム土ブロック少量含む。
2. 灰黄褐色土 焼土粒微量含む。
3. にぶい黄褐色土 ローム土少量・FA、FP粒微量含む。
4. にぶい黄橙色土 ロームブロック多量含む。
5. 灰黄褐色土 ロームブロック含む。



第59図 3区7号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(1)



第60図 3区7号竪穴住居出土遺物図(2)

3区8号竪穴住居(第61～63図、PL.37・155)

**位置** 3区調査区南側調査区境寄り、83区R-1、S-1・2に位置する。

**重複** 他遺構との重複は確認されず、単独で占地している。

**形状** 東辺はカマドで30cmほどの差を有す鍵の手状をしているが、ほぼ長方形を呈す。

**規模** 長軸4.80m、短軸3.90mを測る。

**面積** 14.77㎡

**方位** N-86°-E

**埋没状態** 土層断面では、壁際ににぶい黄橙色土がわずかに三角堆積をした後、FA粒・FP粒を含む灰黄褐色土がレンズ状に堆積していることから自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面よりいぶい黄褐色土を5～10cmほど埋め戻して構築されていた。床面は若干の凹凸がみられるがほぼ平坦で、カマド周囲から中央部にかけて硬化した状態であった。

確認面から床面までの深さは、0.32～0.36mを測る。

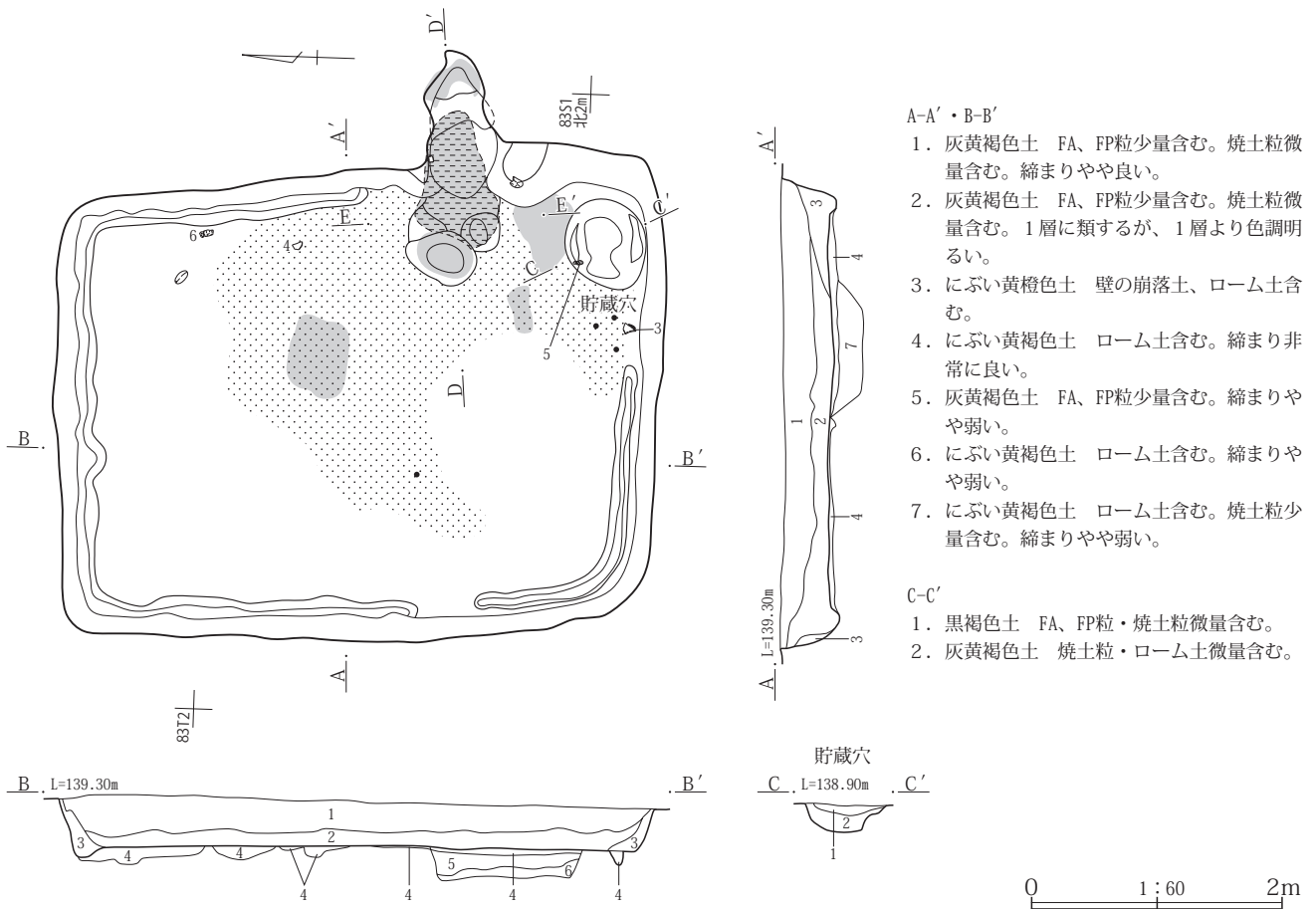
**掘方** 浅い掘り込みが住居全体に施されていた。土坑状の掘り込みを3基確認した。床下土坑1は、形状が楕円形を呈し、規模は長軸1.35m、短軸1.12m、深さ0.37mを測る。床下土坑2は、形状が楕円形を呈し、規模は長軸1.45m、短軸1.30m、深さ0.24mを測る。床下土坑3は、形状は楕円形状を呈し、規模は長軸1.24m、短軸1.10m、深さ0.25mを測る。各床下土坑とも遺物などの出土はみられなかった。

**壁溝** 貯蔵穴の存在する南東隅を除き、ほぼ全周で確認された。規模は、上端0.10～0.38m、下端0.03～0.15m、深さ0.04～0.09mを測る。

**柱穴** 検出されなかった。

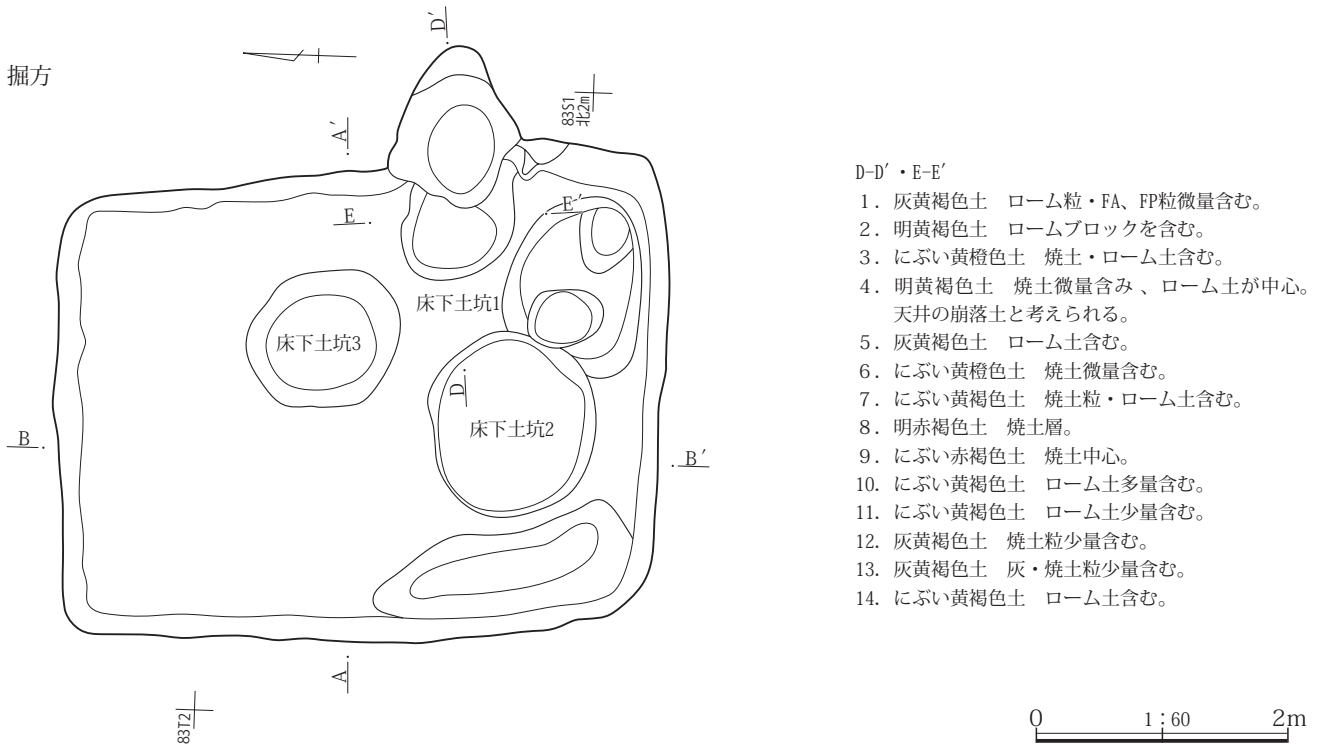
**貯蔵穴** 南東隅にて検出した。形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.70m、短軸0.65m、深さ0.24mを測る。

**カマド** 東辺やや南寄り部分に構築されていた。残存状態は壁際で側壁の一部が残るだけで、焚口、燃烧部天井などはほとんど壊された状態であった。規模は全長1.86m、全幅1.50m、煙道部長0.76m、燃烧部幅0.66mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪んでおり、奥壁に向かい角



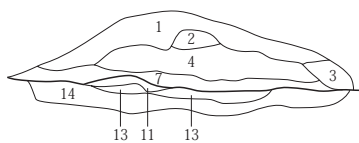
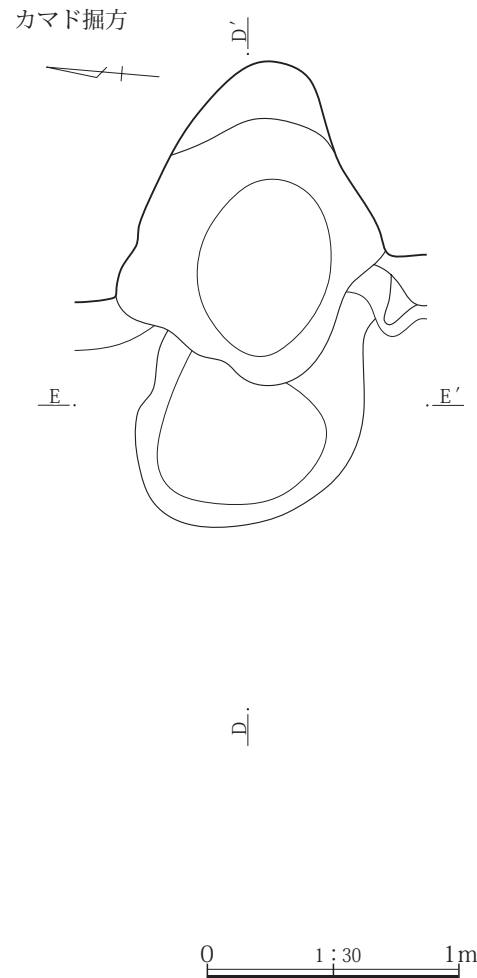
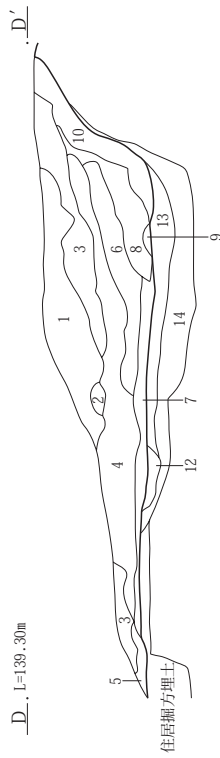
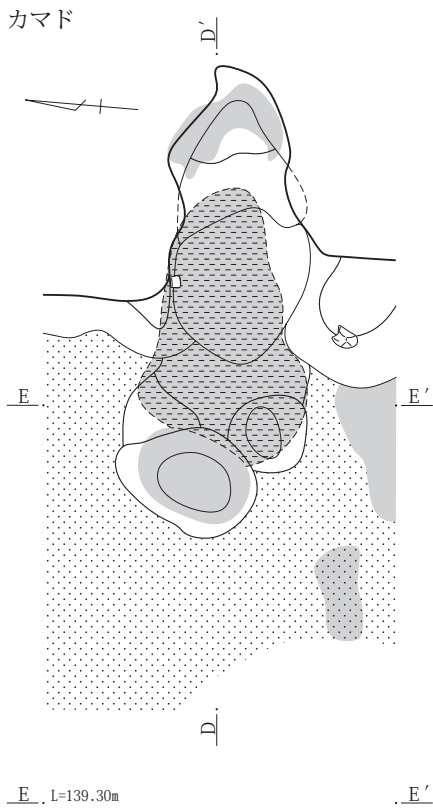
第61図 3区8号竪穴住居遺構図(1)





D-D'・E-E'

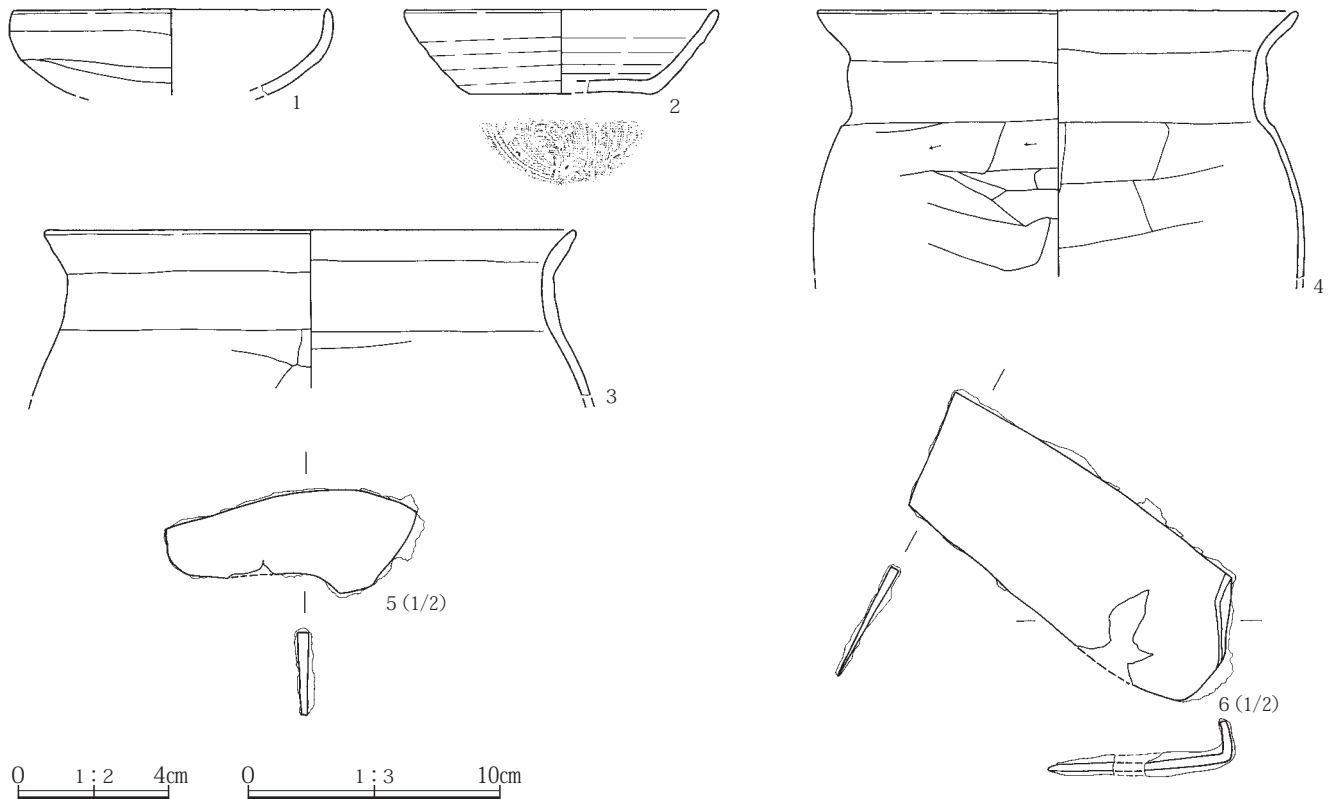
1. 灰黄褐色土 ローム粒・FA、FP粒微量含む。
2. 明黄褐色土 ロームブロックを含む。
3. にぶい黄橙色土 焼土・ローム土含む。
4. 明黄褐色土 焼土微量含み、ローム土が中心。天井の崩落土と考えられる。
5. 灰黄褐色土 ローム土含む。
6. にぶい黄橙色土 焼土微量含む。
7. にぶい黄褐色土 焼土粒・ローム土含む。
8. 明赤褐色土 焼土層。
9. にぶい赤褐色土 焼土中心。
10. にぶい黄褐色土 ローム土多量含む。
11. にぶい黄褐色土 ローム土少量含む。
12. 灰黄褐色土 焼土粒少量含む。
13. 灰黄褐色土 灰・焼土粒少量含む。
14. にぶい黄褐色土 ローム土含む。



第62図 3区8号竪穴住居遺構図(2)

度をつけて立ち上がっていた。燃烧部には、灰・炭化物が残存していた。掘方は、焚口部を中心に楕円形に近い形状に掘り込まれていた。

**出土遺物** 2の須恵器杯がカマド、3の土師器甕が床面からの出土で本竪穴住居に共伴する遺物である。なお、1の土師器杯は住居廃絶後の混入品とみられる。図示し



第63図 3区8号竪穴住居出土遺物図

3区9号竪穴住居(第64・65図、PL.38・156)

**位置** 3区調査区北西隅、84区J-12・13に位置する。本竪穴住居の西半は調査区外に位置するため全貌は不明である。

**重複** 調査区内では中央部に攪乱が存在したが、他の遺構との重複は確認されなかった。

**形状** 北東角はほぼ直角であるが、南東角は丸みを呈している長方形または正方形を呈するものと考えられる。

**規模** 南北方向が5.76m、東西方向は調査範囲内で2.42mを測る。

**面積** 調査範囲内では10.66㎡

**方位** N-100°-E

**埋没状態** 土層断面では南辺と東辺側ではにぶい黄褐色土と灰黄褐色土による三角堆積、中ほどはFA粒・FP粒を

他に土師器大型製品片78点・小型製品片25点、須恵器大型製品片4点・小型製品片6点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期はカマドや床面から出土した須恵器杯や土師器甕などの遺物から9世紀第3四半期に比定できる。

含む灰黄褐色土、にぶい黄褐色土のレンズ状堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 床面は、5~10cmほど灰黄褐色土を埋め戻して構築されていた。カマド前面から中央部にかけて硬化していた。

確認面から床面までの深さは、0.37~0.49mを測る。

**掘方** 浅い掘り込みが住居全体に施されていた。床下土坑も中央やや北寄りで検出した。調査範囲では3分の1ほどであったが、形状は円形を呈し、規模は径1.2m、深さ0.22mを測る。

**壁溝** 調査範囲内では、検出されなかった。

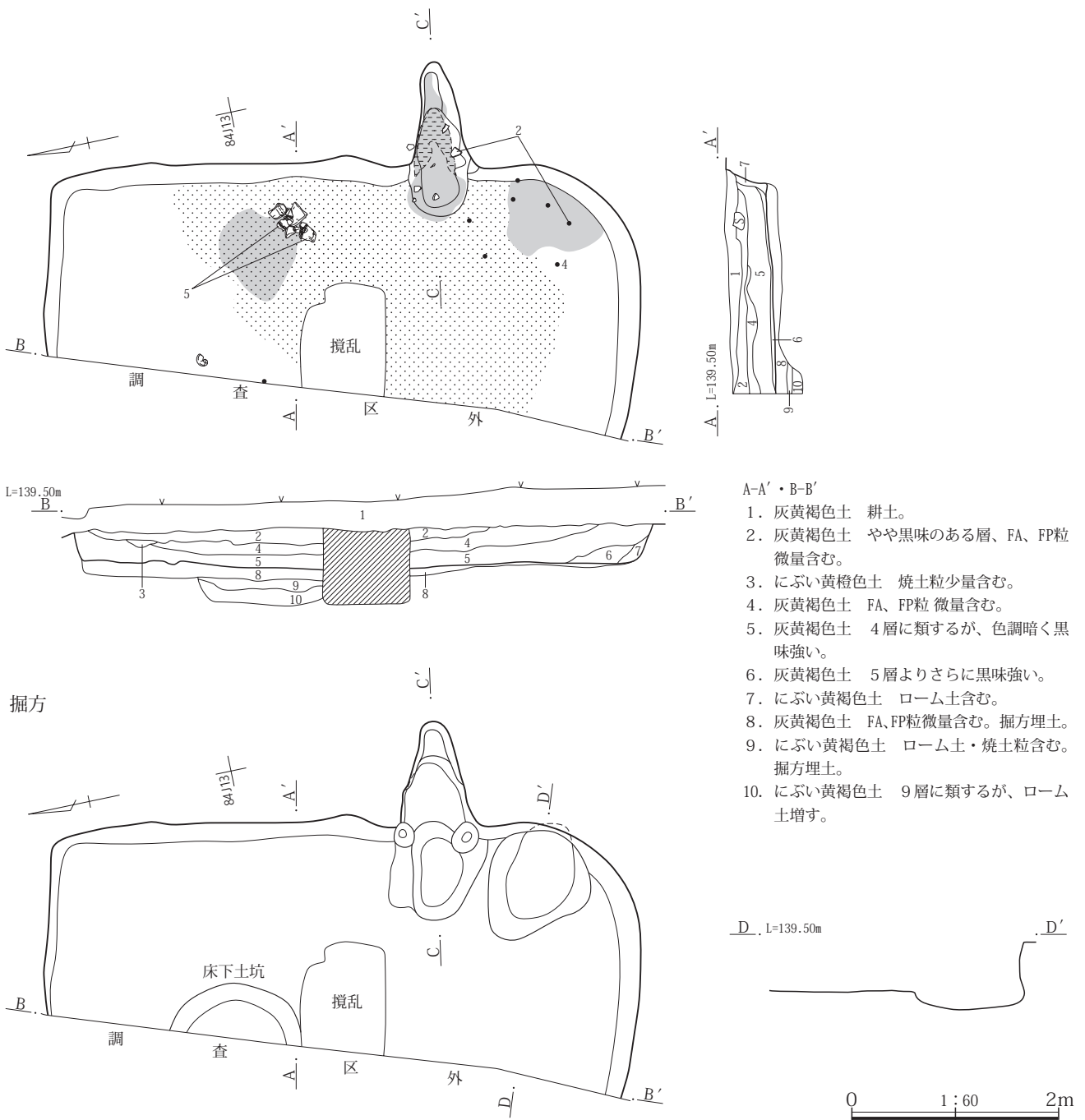
**柱穴** 調査範囲内では、検出されなかった。

**貯蔵穴** 調査範囲内では、検出されなかった。

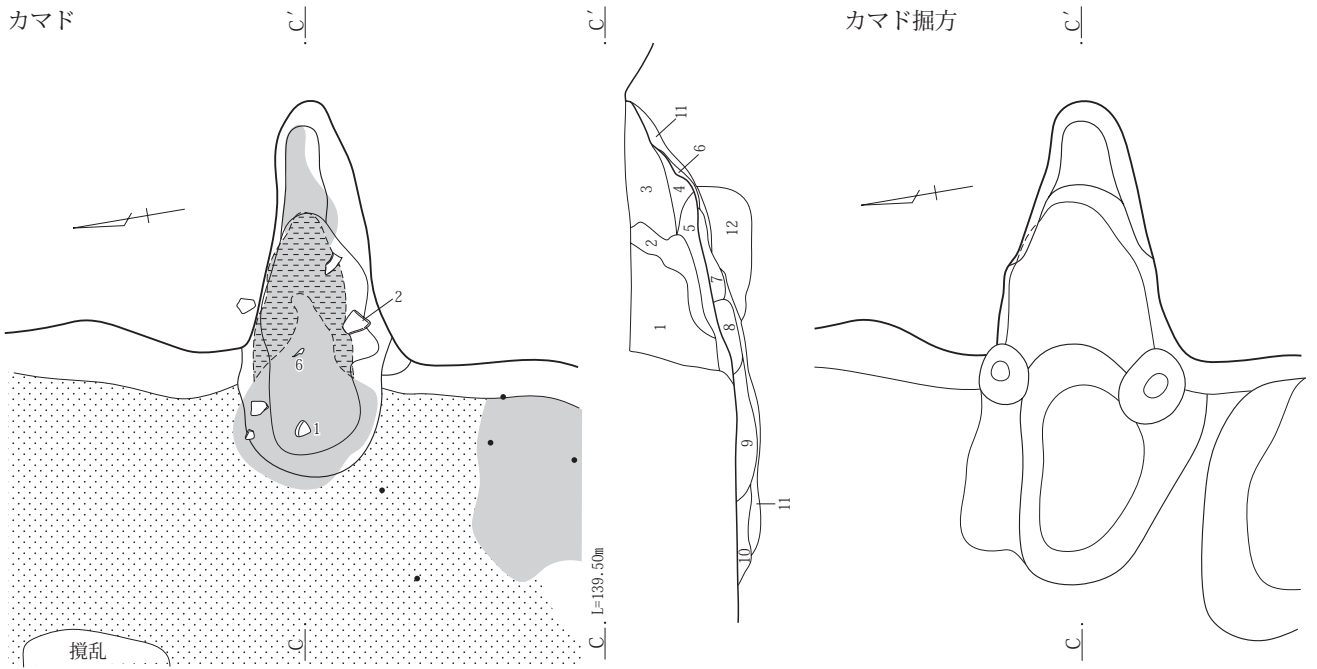
**カマド** 東辺やや南寄りに構築されていた。残存状態は

焚口、側壁、燃烧部から煙道部の天井とも壊され、構築材も残されていない状態であった。規模は全長1.48m、全幅0.60m、煙道部長0.44m、燃烧部幅0.64mを測る。焚口は壁内に位置するが、燃烧部は壁外に設けられていたとみられる。燃烧部は焚口よりやや窪められており、奥壁に向かいなだらかに立ち上がっていた。燃烧部底面には、焼土・灰・炭化物が残存していた。掘方は、焚口部を中心に楕円形状に掘り込まれていた。カマドが壁と接する箇所では構築材に使用した礫を据え付けたとみられる小穴が確認されている。

カマド内からは、1と2の土師器杯が出土している。  
**出土遺物** 図示した遺物のうち、1と2はカマド内、4の土師器甕は床面からの出土である。なお、2の土師器杯の一部は住居床面から出土している。5の円筒埴輪片も床面からの出土である。図示した他に土師器大型製品片40点・小型製品片7点、埴輪片1点が出土している。  
**所見** 本竪穴住居の時期はカマドや床面から出土した土師器杯や甕などの遺物から7世紀第4四半期から8世紀第1四半期に比定できる。

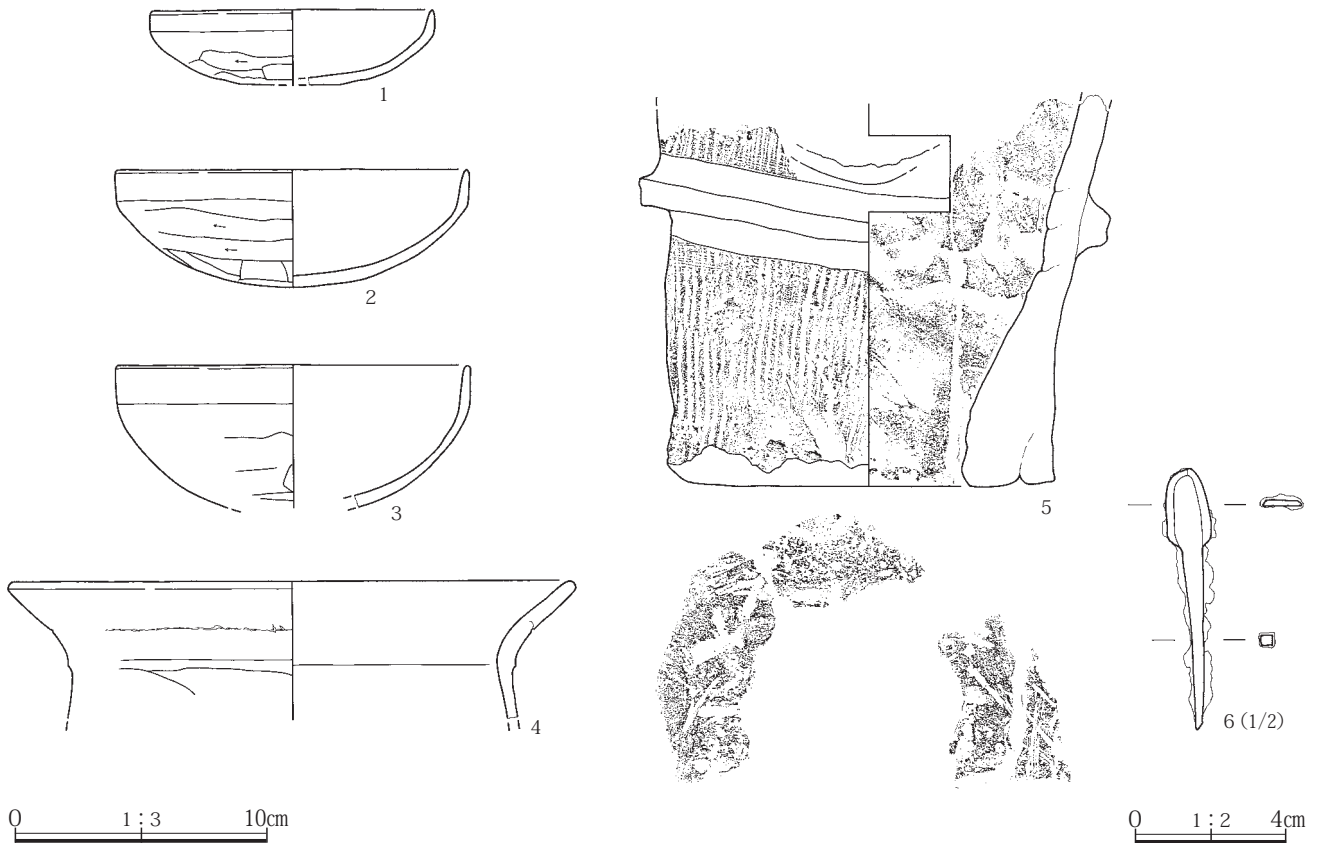
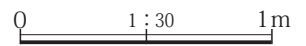


第64図 3区9号竪穴住居遺構図(1)



C-C'

- |                      |                              |
|----------------------|------------------------------|
| 1. 灰黄褐色土 FA、FP粒微量含む。 | 7. 明赤褐色土 焼土層。                |
| 2. 灰黄褐色土 FA、FP粒少量含む。 | 8. 灰褐色土 焼土粒・ローム土含む。灰微量含む。    |
| 3. にぶい黄褐色土 ローム土含む。   | 9. 灰黄褐色土 焼土粒含む。              |
| 4. 灰黄褐色土 焼土ブロック含む。   | 10. 灰黄褐色土 9層に類するが、焼土粒含まず。    |
| 5. にぶい黄褐色土 焼土粒微量含む。  | 11. にぶい黄褐色土 ローム土含む。          |
| 6. 褐灰色土 灰層、焼土含む。     | 12. にぶい黄褐色土 ローム土含むが11層より少ない。 |



第65図 3区9号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図

3区10号竪穴住居(第66・67図、PL.38・39)

**位置** 3区調査区北西の北側調査区境、84区F-12、G-12に位置する。重複する遺構によって西側を欠くため、全貌は不明である。

**重複** 2号溝と重複する。本竪穴住居のほうが古い。

**形状** 南北方向が東西方向に比べ0.4mほど長い長方形を呈す。

**規模** 長軸2.60m、短軸2.18mを測る。

**面積** 調査範囲内では4.67㎡を測る。

**方位** N-88°-E

**埋没状態** 土層断面では黒褐色土が床面にわずかに堆積した後、As-Bが堆積しているのが観察できることから、自然埋没と想定される。なお、As-Bの堆積は12~13cmであるが、その上層の層位でも鋤きこまれたAs-Bが確認できることから、天仁元年の浅間山噴火ではこの地にも相当量のAs-Bが堆積したことが想定できる。

**床面** 床面は、灰黄褐色土を5cmほど埋め戻して構築されている。

確認面から床面までの深さは、0.05~0.11mを測る。

**掘方** 浅い掘り込みが住居全体に施されていた。床下土坑などの施設は検出されなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

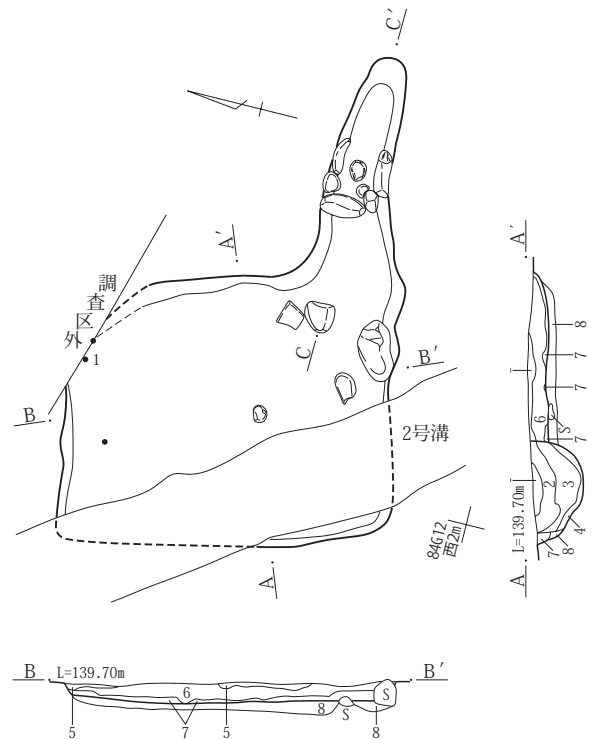
**貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

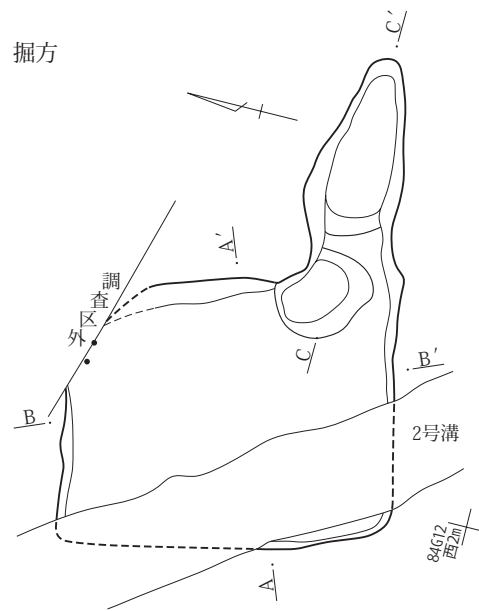
**カマド** 南東角に煙道を東に向けて構築されていた。残存状態は煙道部の側壁や燃焼部天井の構築材に使用されていた一部の棒状の垂角礫が残存していたが、焚口や燃焼部から煙道部の天井は壊された状態であった。なお、燃焼部の構築材に使用されていたと想定される礫がカマド前部に散乱した状態で出土していた。規模は全長2.27m、全幅0.70m、煙道部長1.70mを測る。掘方では、焚口から燃焼部と推定される部分に、楕円形状に掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示した遺物は1だけである。1は床面より11cmほど上位から出土した須恵器の杯蓋片である。この他に土師器などがわずかに出土しているだけであった。

**所見** 本竪穴住居の時期は堆積しているAs-Bの状態から11世紀後半代に比定できる。なお、図示した須恵器杯蓋は8世紀代に比定できることから混入品とみられる。



掘方

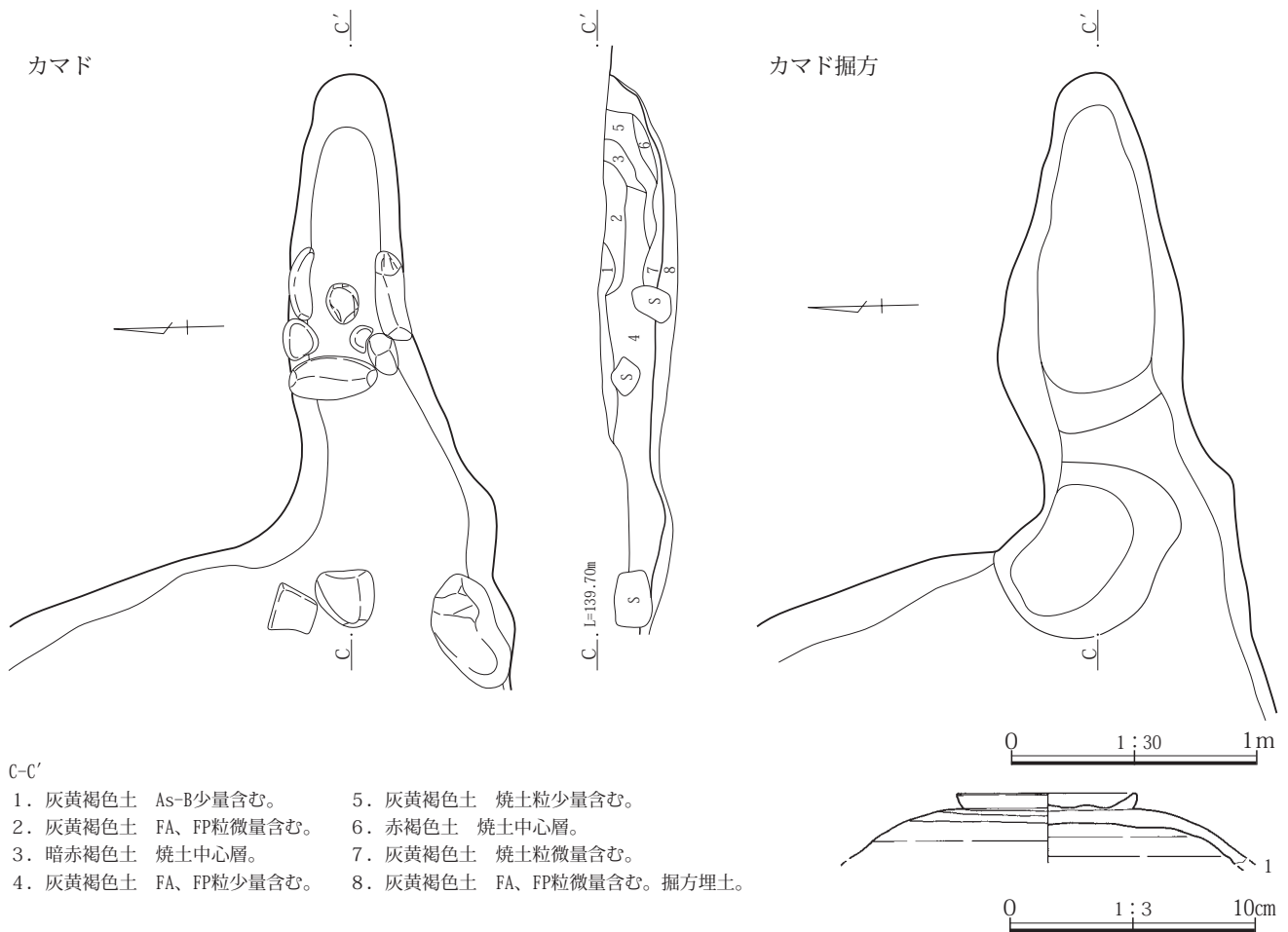


A-A'・B-B'

1. 褐灰色土 As-B含む。FA、FP粒微量含む。2号溝埋土。
2. 灰黄褐色土 As-B含む。FA、FP粒微量含む。2号溝埋土。
3. 灰黄褐色土 As-B含む。FA、FP粒微量含む。2層に類するが色調暗い。2号溝埋土。
4. 灰黄褐色土 FA、FP粒微量含む。2号溝埋土。
5. 灰黄褐色土 As-B含む。10号竪穴住居埋土。
6. As-B堆積層
7. 黒褐色土 As-B含む。10号竪穴住居埋土。
8. 灰黄褐色土 FA、FP粒微量含む。10号竪穴住居掘方埋土。

0 1:60 2m

第66図 3区10号竪穴住居遺構図(1)



第67図 3区10号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図

3区11号竪穴住居(第68・69図、PL.39・40・156)

**位置** 3区調査区の北側調査区境中央、83区S-10に位置する。本竪穴住居の北半は調査対象外に存在するため全貌は不明である。

**重複** 調査区内では他遺構との重複関係は確認されなかった。

**形状** 南東角は隅丸、西辺は中程が張る形状であるが、ほぼ長方形を呈すると想定される。

**規模** 東西方向が3.40m、南北方向は調査区内で2.10mを測る。

**面積** 調査区内で6.01㎡を測る。

**方位** N-98°-E

**埋没状態** 土層断面ではFA粒・FP粒を含む灰黄褐色土、にぶい黄褐色土がほぼ水平な堆積をしているのが観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より5~10cmほど、にぶい黄褐色土を埋め戻して構築されていた。カマド前面を中心に東半で床面が硬化しているのが確認された。

確認面から床面までの深さは、0.42~0.50mを測る。

**掘方** 径1.0~1.5m、深さ0.2~0.3mの土坑状の掘り込みが3カ所で確認されたが、床下土坑など明確な性格を有する施設は存在しなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

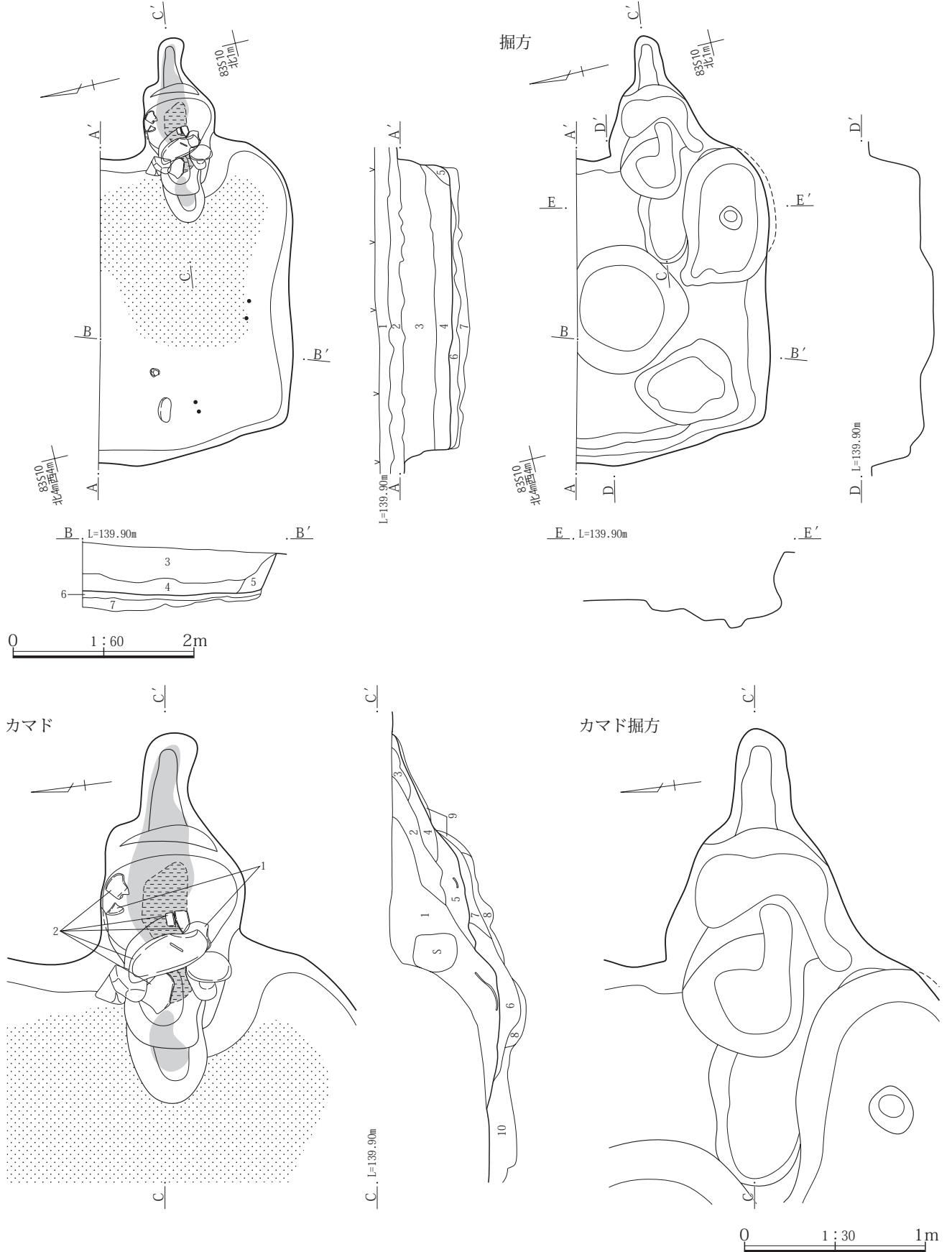
**貯蔵穴** 検出されなかった。

**カマド** 東辺南寄り部分に構築されていた。残存状態は燃烧部天井が壊され、煙道部の天井は崩落していた。なお、焚口に掛けられていた礫はそのままの状態であった。規模は全長2.03m、全幅0.90m、煙道部長0.60m、焚口部幅0.55m、燃烧部幅0.80mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪んでおり、奥壁に向かいなだらかに立ち上がっていた。燃烧部は底面から側面にかけて焼土化しており日常での使用状態が頻繁であったことが窺えた。掘方は、焚口部を中心に楕円形状に掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示可能な遺物は1の土師器杯と2の甕の2点だけで、ともにカマド内からの出土である。図示した

以外の遺物も土師器杯と須恵器大型製品片3点・小型製品片4点と少量の出土であった。

所見 本竪穴住居の時期はカマドから出土した土器から8世紀第1四半世紀に比定できる。



第68図 3区11号竪穴住居遺構図

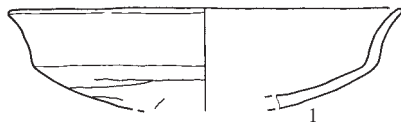
### 第3章 検出遺構と出土遺物

A-A'・B-B'

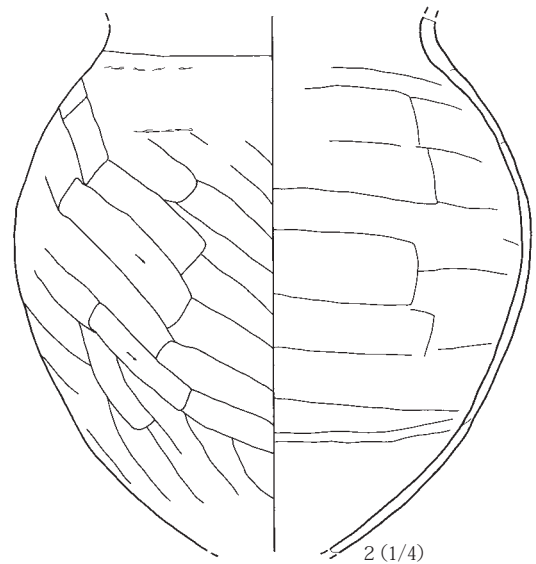
1. 表土耕作土。
2. 黒褐色土 FA、FP粒少量含む。
3. 灰黄褐色土 FA、FP粒・ローム土微量含む。
4. 灰黄褐色土 FA、FP粒微量、ローム土少量含む。
5. にぶい黄褐色土 ローム土含む。壁の崩落土。
6. にぶい黄褐色土 FA、FP粒微量含む。掘方埋土。
7. にぶい黄褐色土 ローム土少量含む。掘方埋土。

C-C'

1. にぶい黄褐色土 焼土粒微量・ローム土少量含む。
2. にぶい黄褐色土 焼土粒・FA、FP粒微量含む。
3. 明赤褐色土 焼土中心層。
4. にぶい黄褐色土 焼土含む。
5. 灰黄褐色土 焼土粒微量含む。
6. 灰黄褐色土 焼土粒微量・灰少量含む。
7. 褐灰色土 灰と焼土の混土層。
8. にぶい黄褐色土 ローム土含む。
9. 黄褐色土 ローム土含む。
10. にぶい黄褐色土 ローム土含む。



0 1:3 10cm



0 1:4 10cm

第69図 3区11号竪穴住居出土遺物図

#### 3区12号竪穴住居(第70・71図、PL.40)

**位置** 3区北西部、84区J-10に位置する。本竪穴住居の周囲は最近の土砂採取により攪乱を受けており、本竪穴住居も北西角から北辺の上位を欠いた。

**重複** 攪乱以外では、他の遺構との重複関係は確認されなかった。

**形状** 図上で復元すると東西・南北方向はほぼ等規模であったと想定できることから隅丸正方形を呈すると想定される。

**規模** 東西方向3.02m、南北方向は北壁の中位までで2.94mを測る。

**面積** 6.73㎡

**方位** N-117°-E

**埋没状態** 土層断面では下位からAs-Cを含むにぶい黄褐色土、褐色土などがレンズ状に堆積していることが観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より10~15cmほど、にぶい黄褐色土で平坦に埋め戻されている。

確認面から床面までの深さは、0.41~0.51mを測る。

**掘方** 北東部は床面より3cm前後と浅い掘り込みであったが、他は土坑状の掘り込みが行われていた。なお、床下土坑などの施設は確認されなかった。

**壁溝** カマド南側から貯蔵穴間を除く、他の壁下で検出

した。規模は、上端0.15m前後、下端0.05~0.13m、深さ0.01~0.06mを測る。

**柱穴** 検出されなかった。

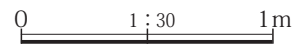
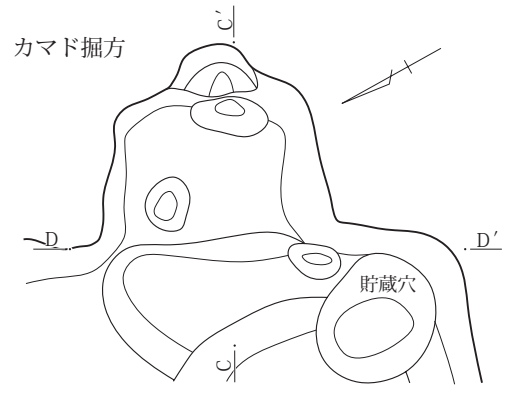
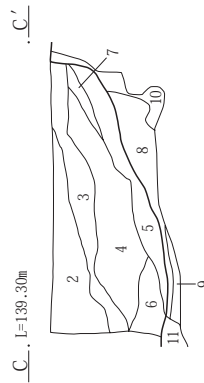
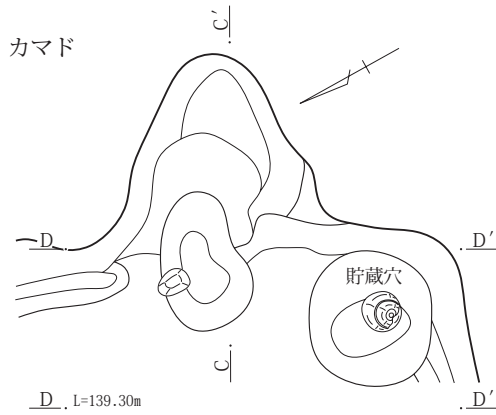
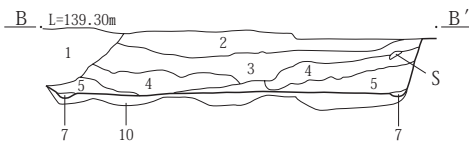
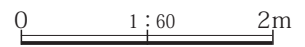
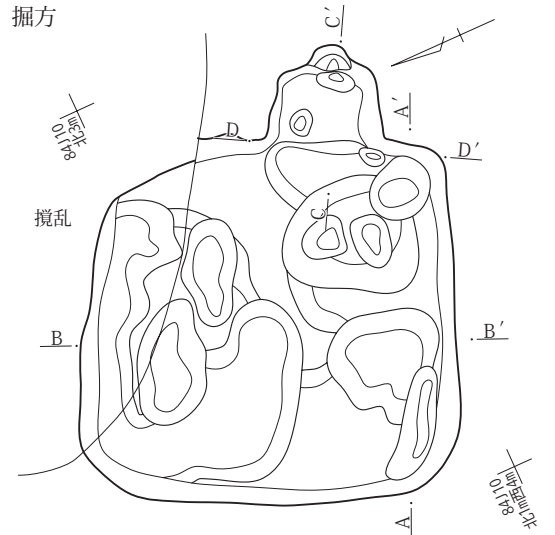
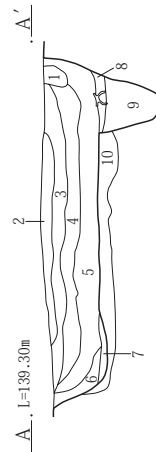
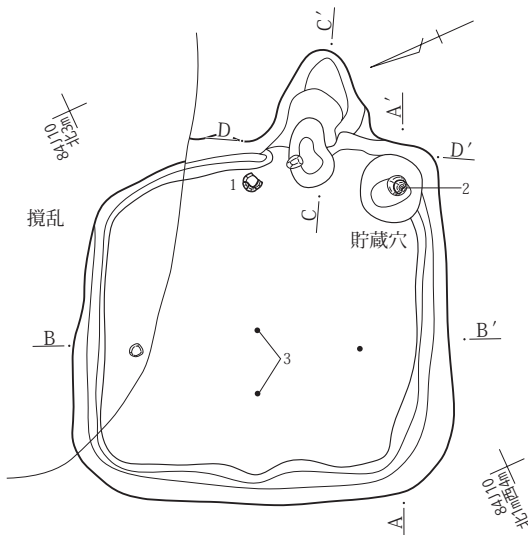
**貯蔵穴** 南東隅にて検出した。形状は、楕円形状を呈し、規模は長軸0.54m、短軸0.49m、深さ0.44mを測る。なお、貯蔵穴内からは2の土師器台付甕が出土しているが、口縁部が下方を向いていることから床面または壁上に置かれていたものが転落したと想定される。

**カマド** 東辺南寄り部分に構築されていた。残存状態は焚口、燃焼部天井とも壊された状態でカマドの構築土・構築材とも住居外に廃棄されたとみられる。規模は全長1.10m、全幅0.80m、燃焼部幅0.74mを測る。燃焼部は焚口よりわずかに窪んでおり、奥壁に向かいやや角度をつけて立ち上がっていた。掘方は、焚口部を中心に楕円形状に掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示した遺物は3点である。1の土師器杯は床面、2は貯蔵穴内であることから本竪穴住居に共伴するとみられるが、3は住居廃絶後の混入とみられる。図示した以外の遺物には土師器大型製品片48点・小型製品片13点、須恵器小型製品片3点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は出土遺物1・2から8世紀第2四半期に比定できる。





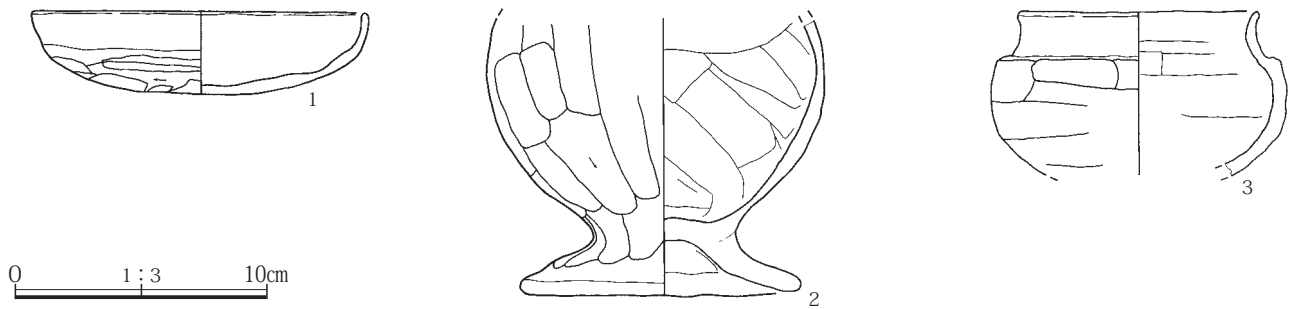
A-A'・B-B'

1. 攪乱土 礫・ゴミ混入する。
2. にぶい黄褐色土 砂質土、As-C粒少量含む。締まり弱い、粘性弱い。
3. 褐色土 砂質土、As-C粒・にぶい黄褐色ロームブロック少量含む。締まり弱い、粘性弱い。
4. にぶい黄褐色土 砂質土、As-C粒微量、にぶい黄褐色ロームブロック含む。締まり弱い、粘性弱い。
5. 暗褐色土 砂質土、As-C粒微量、にぶい黄褐色ロームブロック含む。締まり弱い、粘性弱い。
6. 暗褐色土 砂質土、にぶい黄褐色ロームブロック少量含む。締まり弱い、粘性弱い。
7. 暗褐色土 明黄褐色ロームブロック多量に含む。締まり弱い、粘性弱い。
8. にぶい黄褐色土 砂質土、暗褐色化したAs-C泥土ブロック含む。締まり弱い、粘性弱い。
9. にぶい黄褐色土 砂質土、暗褐色化したAs-C泥土ブロック含む。8層に類するが、8層より色調暗い。
10. にぶい黄褐色土 明黄褐色ロームブロック多量、As-C粒微量含む。締まりやや強い。粘性弱。床面構築土層。

C-C'・D-D'

1. 攪乱土
2. にぶい黄褐色土 砂質土、As-C粒・黄褐色ローム粒微量含む。締まり弱い、粘性弱い。
3. 黒褐色土 砂質土、As-C粒・黄褐色ロームブロック微量含む。締まり弱い、粘性弱い。
4. 灰黄褐色土 砂質土、黄褐色ロームブロック多量に含む。締まり弱い、粘性弱い。
5. 灰黄褐色土 砂質土、黄褐色ロームブロック・焼土粒・灰微量含む。締まり弱い、粘性弱い。
6. 灰黄褐色土 砂質土、黄褐色ロームブロック微量含む。締まり弱い、粘性弱い。
7. 灰黄褐色土 砂質土、黄褐色ロームブロック多量、焼土粒少量含む。締まり弱い、粘性弱い。
8. 灰黄褐色土 砂質土、灰少量、黄褐色ロームブロック・焼土粒ブロック微量含む。締まり弱い、粘性弱い。使用面。
9. 灰黄褐色土 砂質土、黄褐色ロームブロック少量含む。締まり弱い、粘性弱い。掘り方。
10. 灰黄褐色土 砂質土、にぶい黄褐色ロームブロック少量、焼土粒微量含む。締まり弱い、粘性弱い。掘り方。
11. にぶい黄褐色土 住居掘方埋土。
12. 褐色土 砂質土、黄褐色ロームブロック微量含む。締まり弱。粘性弱。掘り方。

第70図 3区12号竪穴住居遺構図



第71図 3区12号竪穴住居出土遺物図

4区1号竪穴住居(第72・73図、PL.41・156)

**位置** 4区調査区南東部の中ほど、73区A-19・20、B-19・20に位置する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

**形状** 南北方向が東西方向より1.0mほど長い長方形を呈す。

**規模** 長軸4.02m、短軸2.98mを測る。

**面積** 9.72㎡

**方位** N-87°-E

**埋没状態** 土層断面ではローム土を含む橙色土が周囲より流れ込み、にぶい褐色土が若干壁際に三角堆積した後、大量の白色軽石粒を含むにぶい暗褐色土で埋没したことが観察できることから自然埋没と想定される。なお、竪穴住居内土坑も住居廃絶期に埋没しているが、住居が埋没し始める前に埋没していることから人為的な埋め戻しが行われた可能性も想定される。

**床面** 掘方面より5~10cmほど橙色土を埋め戻して構築されている。床面の状態は、若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.26~0.37mを測る。

**掘方** 浅い掘り込みが住居全体に施され、南辺側に2基と北辺側と北西角寄りに各1基の計4基の床下土坑が確認された。床下土坑1は、形状が不整形を呈し、規模は長軸0.92m、短軸0.85m、深さ0.18mを測る。床下土坑2は、形状が方形に半円状の形状がついた不整形を呈し、規模は長軸0.91m、短軸0.74m、深さ0.70mを測る。床下土坑3は、形状は不整形を呈し、規模は長軸1.12m、短軸0.70m、深さ0.25mを測る。床下土坑4は、形状が不整形を呈し、規模は長軸0.78m、短軸0.60m、深さ0.12mを測る。

**壁溝** 東壁北側から北壁、西壁までの約半周で確認された。規模は、上端0.19~0.31m、下端0.03~0.10m、深さ0.01~0.07mを測る。

**柱穴** 床面では、検出されなかったが、掘方面で柱穴とみられるピットを南東角寄り(P1)と南西角寄り(P2)、北西角寄り(P3)で検出した。P1とP3は竪穴住居の対角線上に位置する。各柱穴の形状と規模は次のとおりである。なお、深さは床面から計測したものである。P1は、形状が楕円形、規模は長軸0.40m、短軸0.37m、深さ0.31mである。P2は、形状が楕円形、規模は長軸0.25m、短軸0.18m、深さ0.76mである。P3は、形状が楕円形、規模は長軸0.42m、短軸0.32m、深さ0.33mである。

**貯蔵穴** 南東隅にて確認された。形状は、不整形を呈す。規模は、長軸0.42m、短軸0.40m、深さ0.46mを測る。

**その他施設** カマド北側にて土坑1を検出した。土坑1は、形状が楕円形状を呈し、規模は長軸0.90m、短軸0.74m、深さ0.34mを測る。貯蔵穴などの施設も想定されるが、規模がやや大きすぎることと、内部から遺物などの出土がみられないため用途は不明としておきたい。

**カマド** 東辺南寄り部分に構築されていた。残存状態は側壁下部が残存するだけで焚口、燃焼部の天井や燃焼面は壊され、住居外に廃棄されたとみられる。規模は全長1.08m、全幅1.10m、燃焼部幅0.68mを測る。燃焼部は焚口よりやや窪められており、奥壁に向かいやや角度をつけて立ち上がっていた。

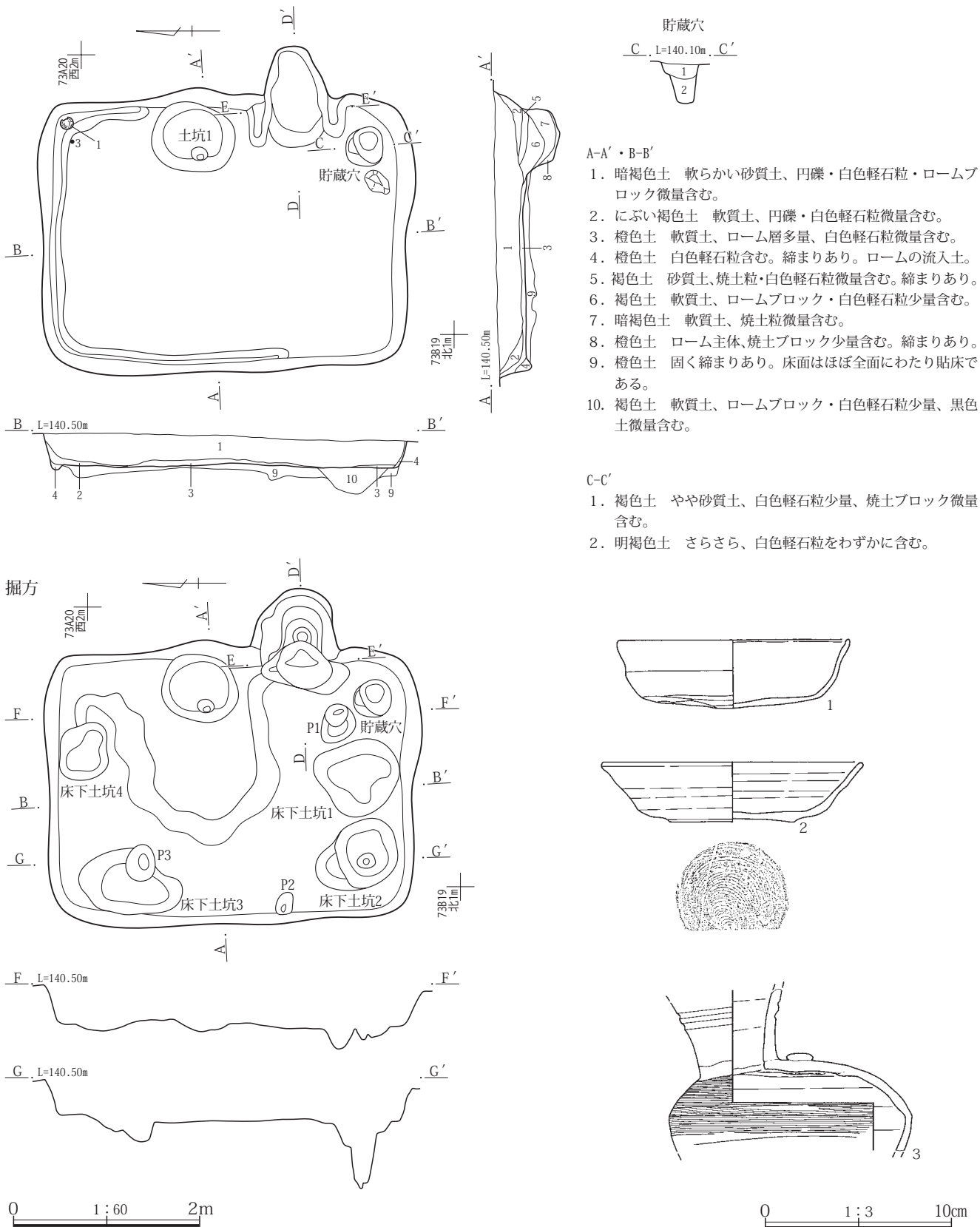
掘方は、燃焼部を中心に楕円形状にやや深く掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示した遺物は1が北東角の壁溝内、2がカマドと貯蔵穴内、3が1に近い床面からの出土である。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片56点・小型

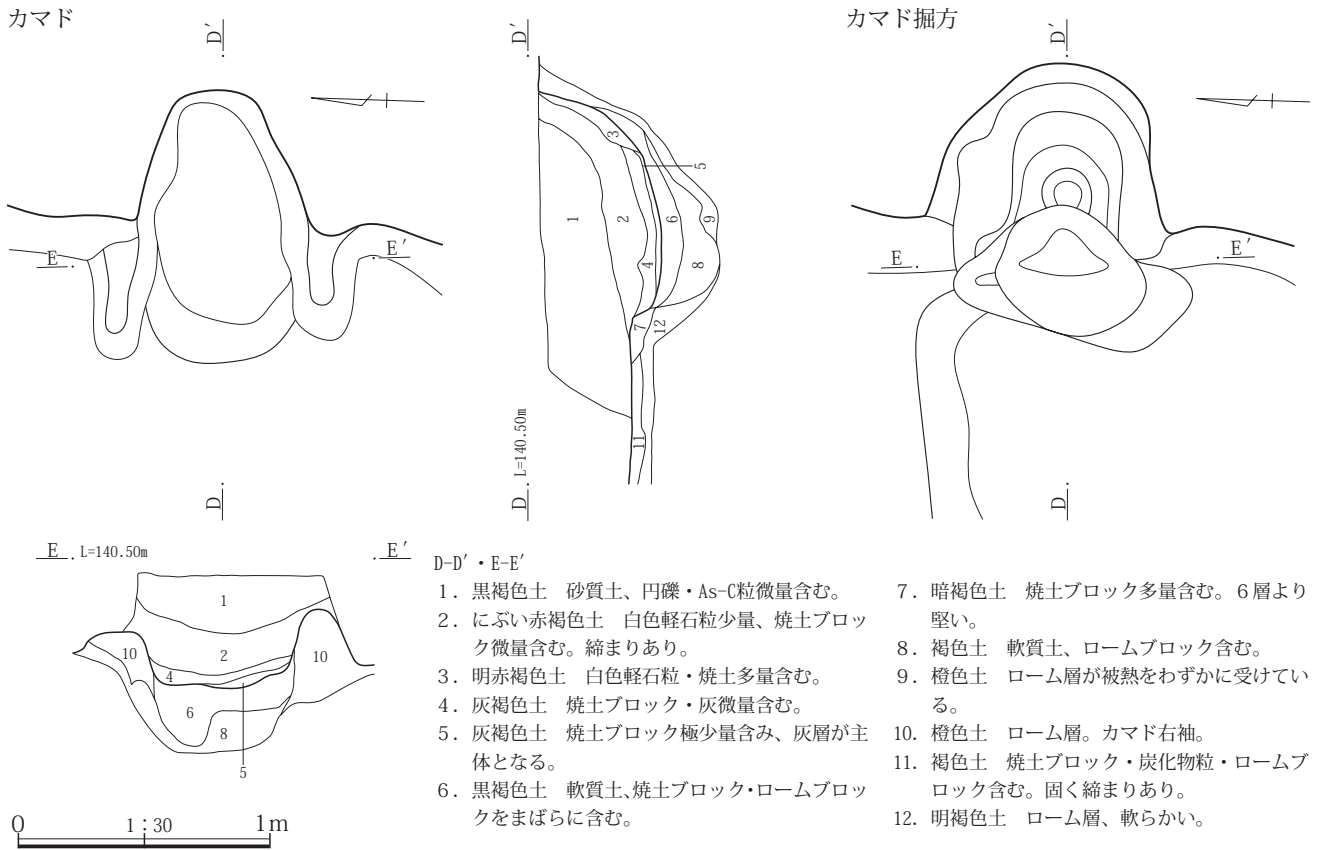
製品片13点、須恵器小型製品片14点が出土している。

所見 本竪穴住居の時期は、カマドから出土した遺物から9世紀第3四半期に比定できる。なお、3の須恵器平

瓶は床面からの出土であるが、1・2とはやや年代的な差がみられる。



第72図 4区1号竪穴住居遺構図(1)・出土遺物図



4区2号竪穴住居(第74・75図、PL.42)

**位置** 4区調査区中央より東寄り、83区A-2、B-2に位置する。

**重複** 4区1号溝と重複する。新旧関係は本竪穴住居のほうが古い。

**形状** 東西方向が南北方向に比べ0.3mほど長く、南辺が北辺より0.2m長い、やや変形した長方形を呈す。

**規模** 長軸3.30m、短軸2.95mを測る。

**面積** 7.52㎡

**方位** N-111°-E

**埋没状態** 土層断面では橙色土と、にぶい褐色土が薄く覆った後に白色軽石粒を含む暗褐色土で埋没した状況が観察できることから、自然埋没であると想定される。

**床面** 掘方面より明褐色土、明黄褐色土を10~15cmほど埋め戻して構築されている。床面の状態は、若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.37~0.47mを測る。

**掘方** 全体的に凹凸が激しくみられ、特に住居の四隅では鋤先で掘削したような工具跡が確認された。北辺中央で床下土坑を1基検出した。床下土坑は形状がやや歪ん

だ楕円形を呈し、規模は径1.25×1.12m、深さ0.30mを測る。埋土は黒褐色土に径の大きなロームブロックを多量に含む土で埋められていた。なお、遺物の出土はみられなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

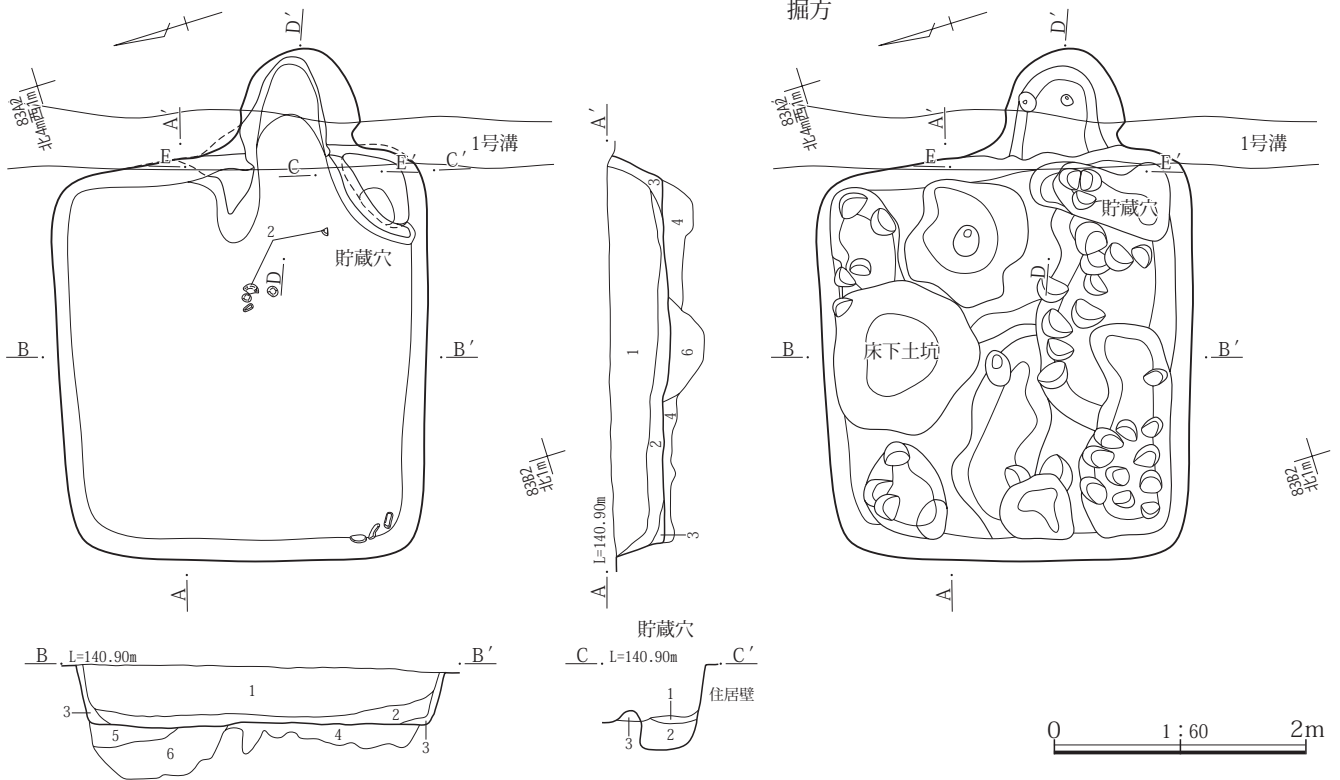
**貯蔵穴** 南東隅にて検出した。形状は不整形を呈し、規模は長軸0.72m、短軸0.34m、深さ0.62mを測る。北側は幅20cm、高さ10cmで土手状粘土を盛って床面と区分していた。

**カマド** 東辺やや南寄り部分に構築されていた。残存状態は燃焼部側壁の左側下部が残存していたが、天井は燃焼面に崩落するなど廃絶時の破壊が確認された。規模は全長2.24m、焚口部幅0.65m、燃焼部幅0.70mを測る。燃焼部は焚口よりやや窪められており、奥壁に向かいやや角度をつけて立ち上がっていた。掘方は、焚口部を中心に楕円形状に掘り込まれていたが、貯蔵穴と一体となり掘り込まれていたようである。

**出土遺物** 図示した遺物は2点である。1の土師器杯は掘方、2の須恵器杯蓋は床面からの出土である。床面か

らは中央部で4点の円礫、南西隅で3点の弧編石が出土している。図示した他には土師器大型製品片2点・小型製品片14点が出土している。

所見 本竪穴住居の時期は1・2の遺物から7世紀第3四半期に比定できる。



A-A'・B-B'

1. 暗褐色土 軟らかい砂質土、円礫・白色軽石粒・ロームブロック微量含む。
2. にぶい褐色土 軟質土、円礫・白色軽石粒微量含む。
3. 橙色土 白色軽石粒を含む。縮まりあり。ローム流入土。

4. 明褐色土 ロームブロック・黒色ブロック混入。上位部分は硬いが、下位になると軟らかい。
5. 明黄褐色土 ロームブロックがブロック状で集中堆積している。床面は硬いが下部は軟らかい。
6. 明褐色土 黒色ブロックをわずかに含む。

カマド

カマド掘方

第74図 4区2号竪穴住居遺構図

### 第3章 検出遺構と出土遺物

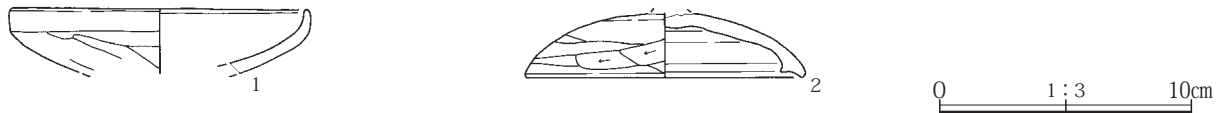
C-C'

1. にぶい褐色土 ロームブロック、上位に炭化物を含む。ロームブロックは硬い。
2. 橙色土 軟質土、ローム粒子が多く、一部白色軽石粒が混入。
3. 黄褐色土 周提帯として構築している。

D-D'・E-E'

1. 暗褐色土 砂質土、円礫・白色軽石粒・ロームブロック微量含む。
2. 明赤褐色土 ロームブロック・焼土ブロック多量含む。
3. 明褐色土 カマド構築材、天井残部。

4. 明黄褐色土 締まりあり、ロームブロック主体。最下部に灰層があり、その上はロームブロック土の焼土化が強い。カマド天井部の崩落土か。
5. 黄褐色土 ロームブロックが多く焼土化しているが、土にひびが入り二次堆積的である。壁が崩れかけた可能性あり。
6. 褐灰色土 灰層に焼土ブロックが混入する。
7. にぶい黄褐色土 軟質土黒色土ブロック・ロームブロックが斑に混入する。
8. 明黄褐色土 硬く締まりあり。ローム土。
9. にぶい黄褐色土 軟質土、ローム土と黒褐色土混入する。
10. 明黄褐色土 ローム土、掘方埋土。
11. にぶい黄褐色土 ロームブロックに黒色土が混入する。掘方埋土。



第75図 4区2号竪穴住居出土遺物図

#### 4区3号竪穴住居(第76～78図、PL.43・44・156)

**位置** 4区調査区中央よりやや北、83区D-4・5、E-4に位置する。

**重複** 10号溝と重複する。新旧関係は本竪穴住居のほうが古い。

**形状** 南北方向が東西方向より0.3mほど長い長方形を呈す。

**規模** 長軸4.84m、短軸4.50mを測る。

**面積** 15.57㎡

**方位** N-93°-W

**埋没状態** 土層断面では壁際に三角堆積した後、東側より土砂が流れ込んだ様子が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より5～30cmほど明褐色土、橙色土を埋め戻して構築している。床面の状態は、若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。なお、カマド前面を中心に硬化していた。北壁際、北西隅などに灰が散らばっていた。

確認面から床面までの深さは、0.65～0.85mを測る。

**掘方** 連続する土坑状の掘り込みが全体に施されていた。

**壁溝** カマドを除く各辺壁下で検出した。規模は、上端0.17～0.34m、下端0.05～0.17m、深さ0.04～0.13mを測る。カマド北側にてP1が確認された。

**柱穴** 明確に柱穴と断定できるものは検出されなかったが、中央と東辺の間でP1を検出した。形状は円形状を

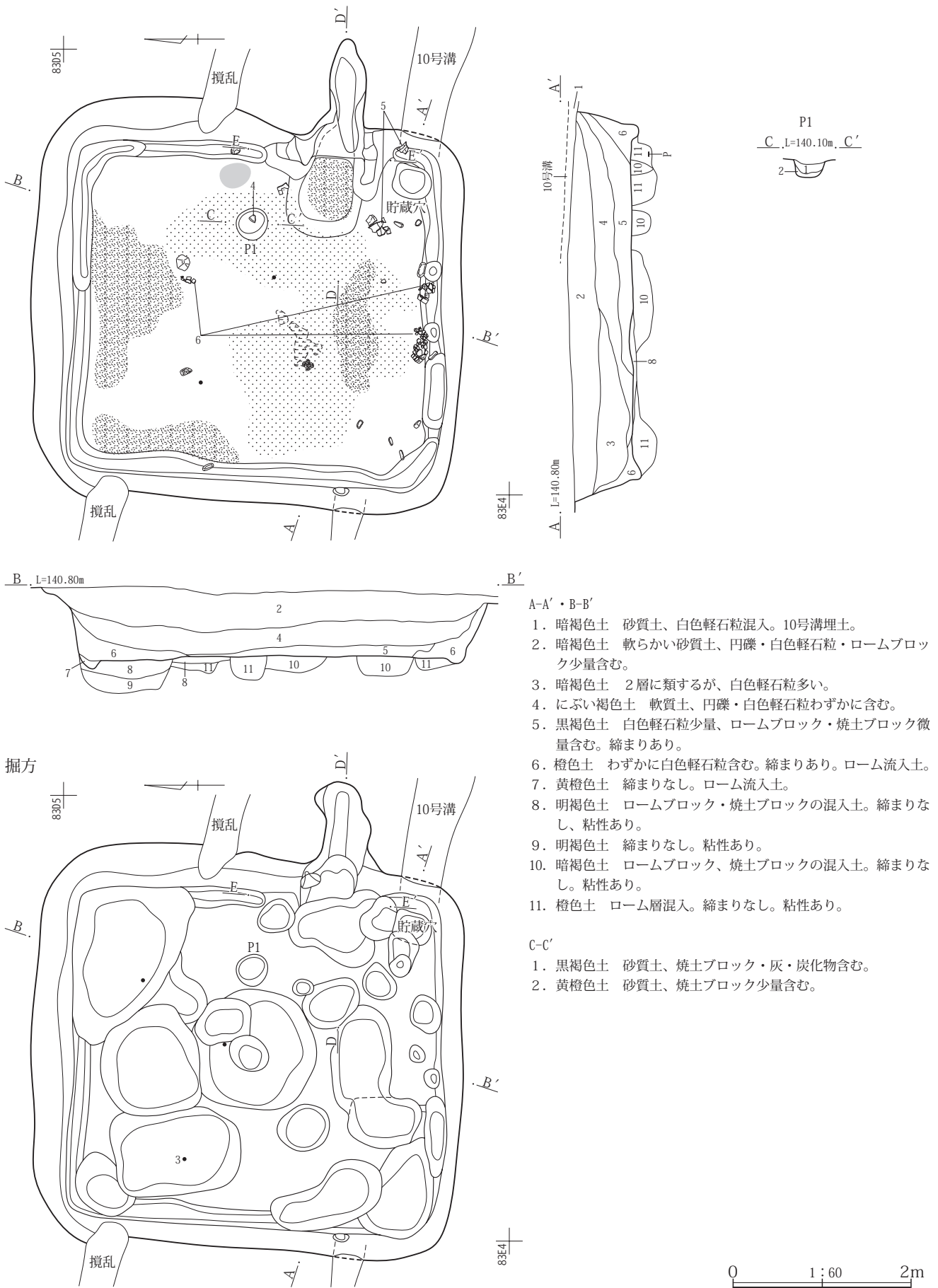
呈し、規模は径0.53m、深さ0.18mを測る。

**貯蔵穴** 南東隅にて検出した。形状は隅丸方形を呈し、規模は長軸0.43m、短軸0.35m、深さ0.26mを測る。

**カマド** 東辺やや南寄り部分に構築されていた。残存状態は燃烧部側壁の一部が残存していたが、焚口から燃烧部、煙道部の天井はほとんど崩落した状態であったが、燃烧部と煙道部の間のごくわずかな箇所だけ現状のまま残存していた。また、燃烧部底面には支脚に使用されていたとみられる棒状の礫が立てられたまま残存していた。規模は、全長2.24m、全幅1.40m、煙道部長1.32m、燃烧部幅0.84mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪められており、煙道部に向けてやや傾斜をもち立ち上がる。煙道部はほぼ平坦で奥壁はほぼ垂直に立ち上がっていた。側壁には構築材として礫が使用されていた。掘方は、焚口部を中心に楕円形状に掘り込まれていたが、貯蔵穴と一体となり掘り込まれていたようである。なお、燃烧部からは2の土師器杯、7と8の土師器甕が出土している。

**出土遺物** 図示した遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯など8点がある。このうち、5・6の土師器甕が床面、2・7・8がカマドからの出土である。図示した以外の遺物には、土師器大型製品片158点・小型製品片111点、須恵器大型製品片7点・小型製品片8点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は、カマドや床面から出土した遺物から7世紀第4四半期から8世紀第1四半期に比定できる。



A-A'・B-B'

1. 暗褐色土 砂質土、白色軽石粒混入。10号溝埋土。
2. 暗褐色土 軟らかい砂質土、円礫・白色軽石粒・ロームブロック少量含む。
3. 暗褐色土 2層に類するが、白色軽石粒多い。
4. にぶい褐色土 軟質土、円礫・白色軽石粒わずかに含む。
5. 黒褐色土 白色軽石粒少量、ロームブロック・焼土ブロック微量含む。縮まりあり。
6. 橙色土 わずかに白色軽石粒含む。縮まりあり。ローム流入土。
7. 黄橙色土 縮まりなし。ローム流入土。
8. 明褐色土 ロームブロック・焼土ブロックの混入土。縮まりなし、粘性あり。
9. 明褐色土 縮まりなし。粘性あり。
10. 暗褐色土 ロームブロック、焼土ブロックの混入土。縮まりなし。粘性あり。
11. 橙色土 ローム層混入。縮まりなし。粘性あり。

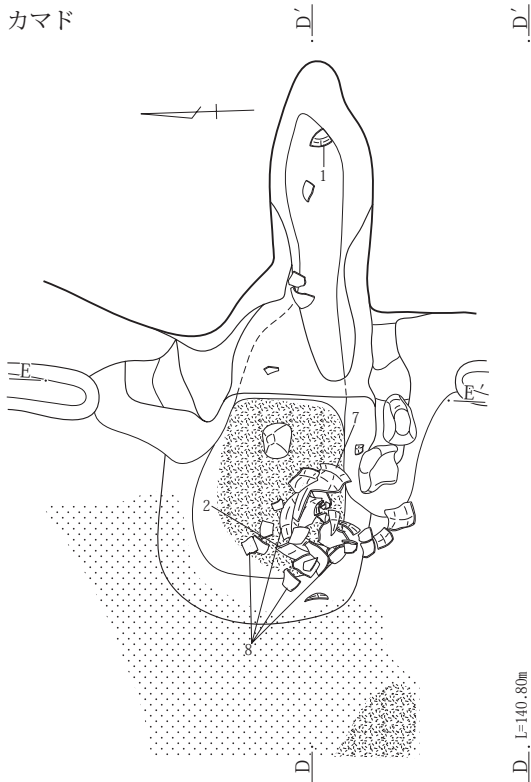
C-C'

1. 黒褐色土 砂質土、焼土ブロック・灰・炭化物含む。
2. 黄橙色土 砂質土、焼土ブロック少量含む。

第76図 4区3号竪穴住居遺構図(1)

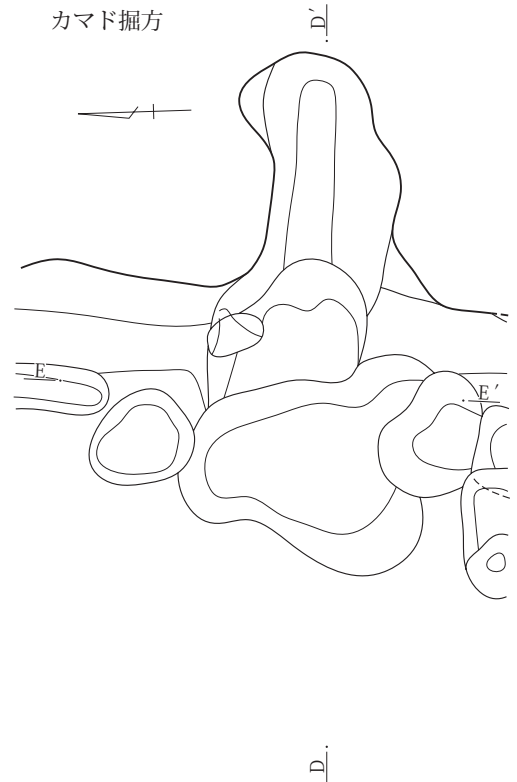
第3章 検出遺構と出土遺物

カマド



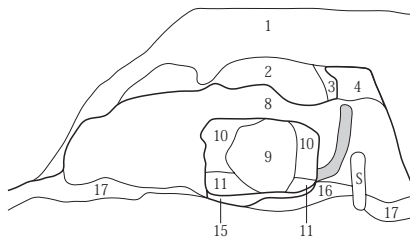
D., L=140.80m

カマド掘方

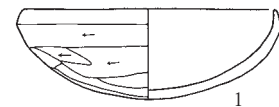


D.

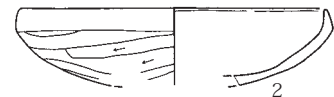
E., L=140.80m



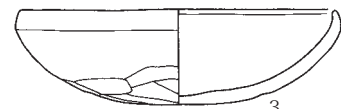
E'



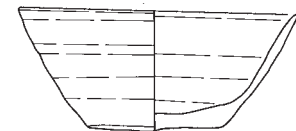
1



2



3



4



D-D'・E-E'

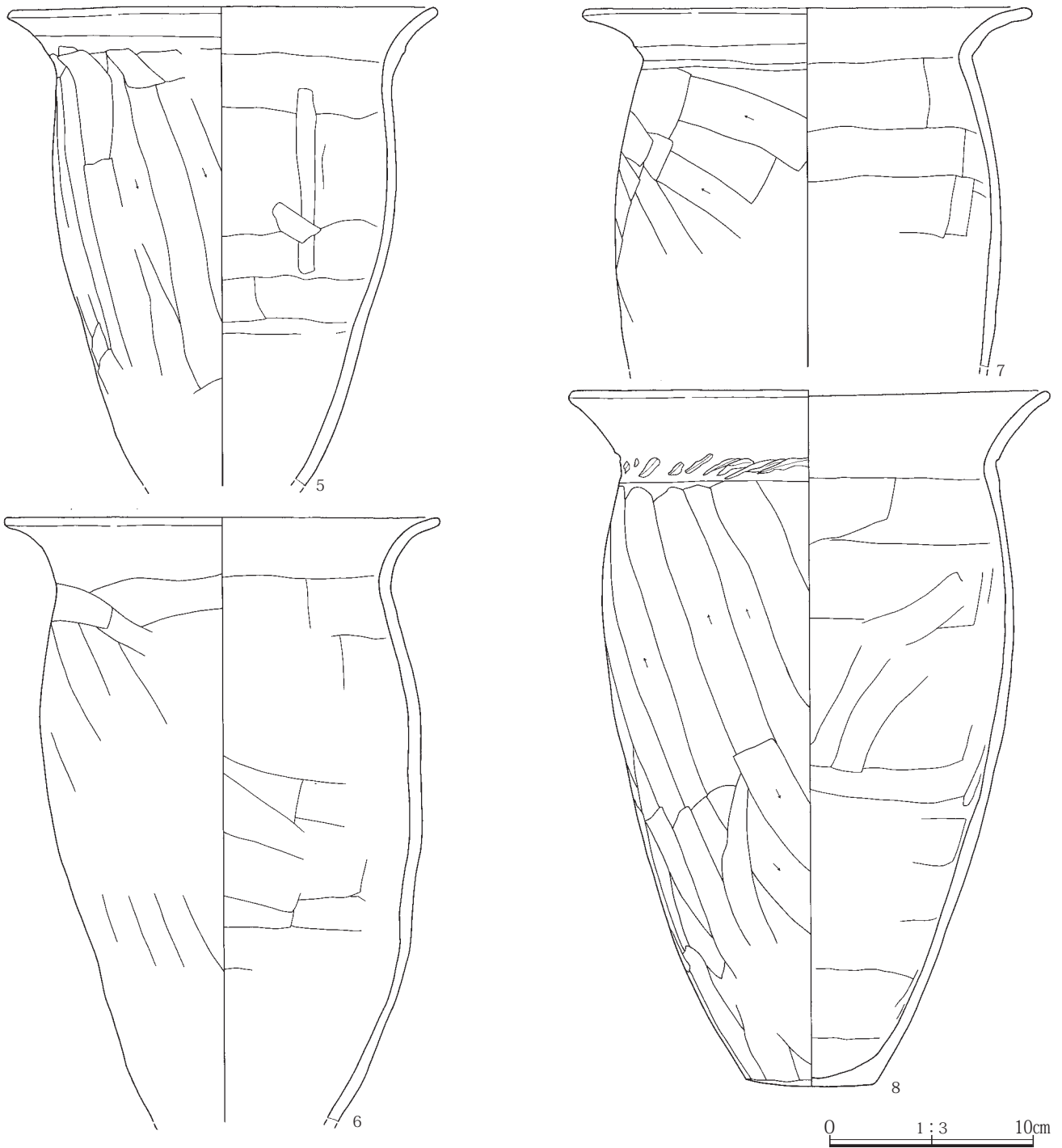
1. 暗褐色土 砂質土、白色軽石粒少量含む。
2. 黄褐色土 下位に焼土ブロック含む。締まりなし。
3. 褐色土 下位に焼土ブロック含む。締まりなし。
4. 赤褐色土 カマド袖構築土、上層。
5. 明赤褐色土 焼土、天井部が崩落したと思われる。
6. にぶい褐色土 白色軽石粒・焼土ブロックをわずかに含む。
7. 褐色土 軟質土、ロームブロック、焼土ブロック多量含む。
8. 黄褐色土 カマド構築土、天井・袖部が残存し、一部被熱により赤褐色化する。
9. 明赤褐色土 締まりあり、暗褐色土含む。
10. にぶい黄褐色土 軟質土、焼土ブロック・白色軽石粒含む。
11. 灰黄褐色土 軟質土、焼土粒ブロック・灰少量含む。
12. 明赤褐色土 天井部崩落土、9層に比べローム土の割合が多い。
13. 明黄褐色土 焼土多量含む。煙道堆積層と天井崩落土の混土。
14. 褐色土 軟質土、ロームブロック・焼土ブロック多量含む。煙道内堆積物。
15. 灰褐色土 灰・炭化物・焼土・ロームブロック含む。最上部に灰層が広がる。
16. 明褐色土 焼土化しているが軟らかい。わずかに炭化物が入る。
17. 灰褐色土 カマド掘方埋土。
18. 橙色土 住居掘方埋土。

0 1:30 1m

0 1:3 10cm

第77図 4区3号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(1)





第78図 4区3号竪穴住居出土遺物図(2)

**4区4号竪穴住居**(第79～81図、PL.44・45・156)

**位置** 4区調査区中央、83区D-1・2、E-1・2に位置する。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

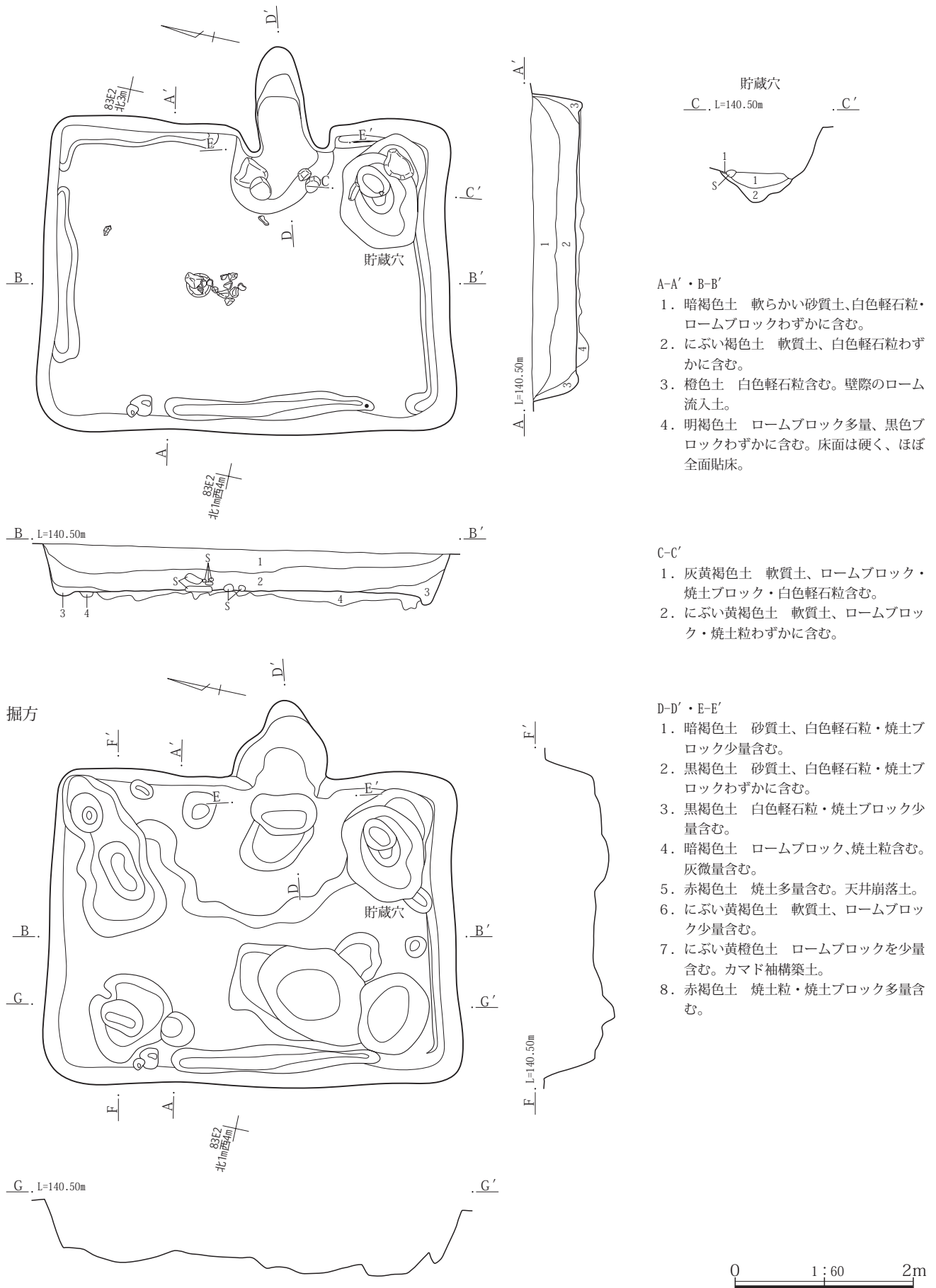
**形状** 南北方向が東西方向より1.2mほど長い長方形を呈す。

**規模** 長軸4.71m、短軸3.53mを測る。

**面積** 13.19㎡

**方位** N-74°-E

**埋没状態** 土層断面では北壁を除く各壁際でロームブロック等の壁崩落などによる三角堆積が行われた後、褐色土によるレンズ上の堆積が観察できたことから、自然埋没と想定される。



第79図 4区4号貯穴住居遺構図(1)

**床面** 掘方面より10～30cmほど明褐色土をほぼ平坦に埋め戻して構築されていた。床面の状態は、若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.45～0.58mを測る。

**掘方** 貯蔵穴が確認された南東角を除く各コーナー部分に土坑状の掘り込みが確認された。掘方面は土坑状の掘り込みも含め全体的に掘削時の凹凸がそのまま残る状態であった。

**壁溝** 北西隅と一部を除き、各辺の壁下で確認された。規模は、上端0.15～0.26m、下端0.03～0.15m、深さ0.03～0.08mを測る。

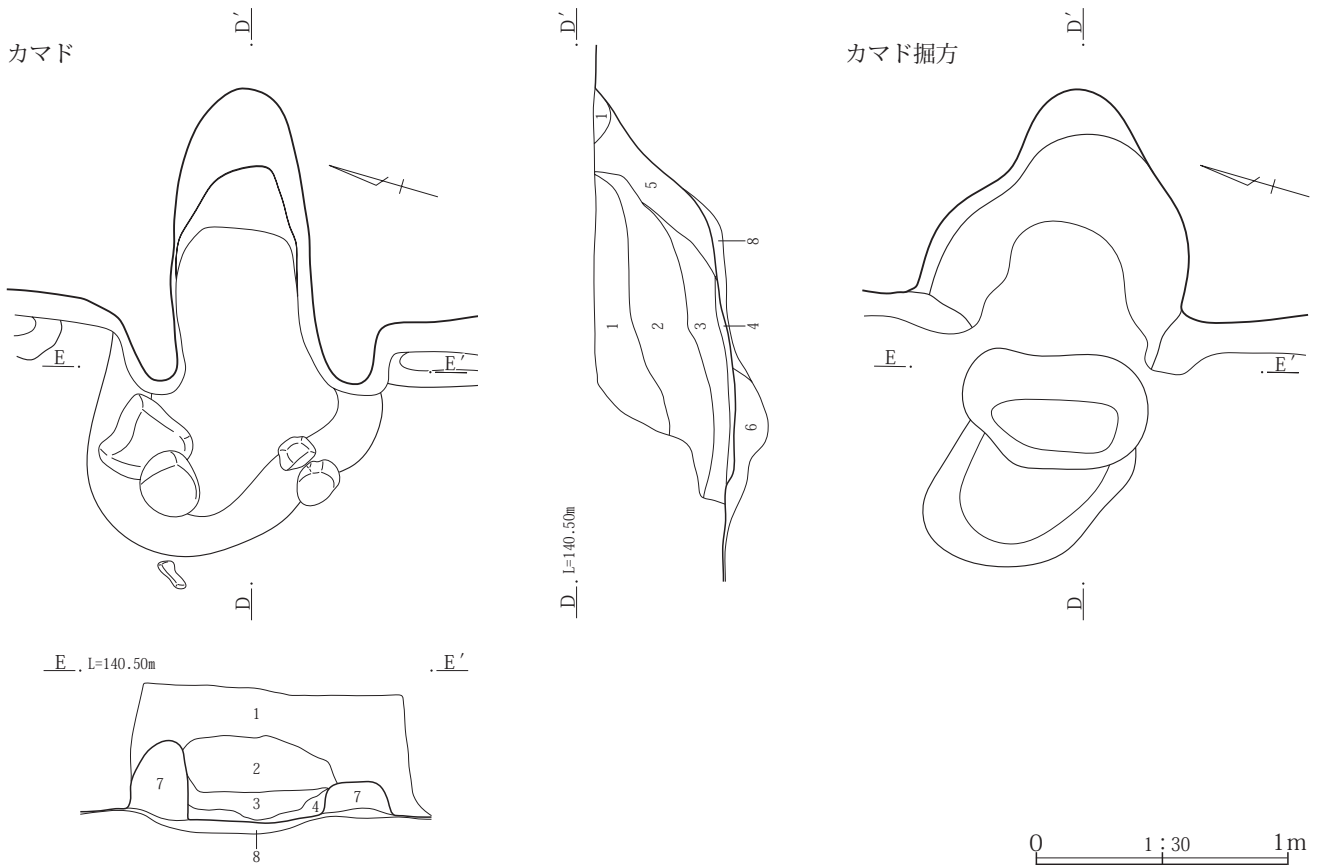
**柱穴** 床面では確認されなかったが、掘方では北東隅寄りで径0.45×0.35m、深さ0.50mのビット状の落ち込みが検出されている。なお、他の箇所では確認できなかったことから断定には至らなかった。

**貯蔵穴** 南東隅にて検出した。形状は、不整形形状を呈し、規模は長軸1.30m、短軸0.90m、深さ0.50mを測る。南東角寄りの段上に径35×28cm、厚さ20cmほどの扁平な礫が置かれた状態で出土していた。なお、この礫は被熱を受けていた。

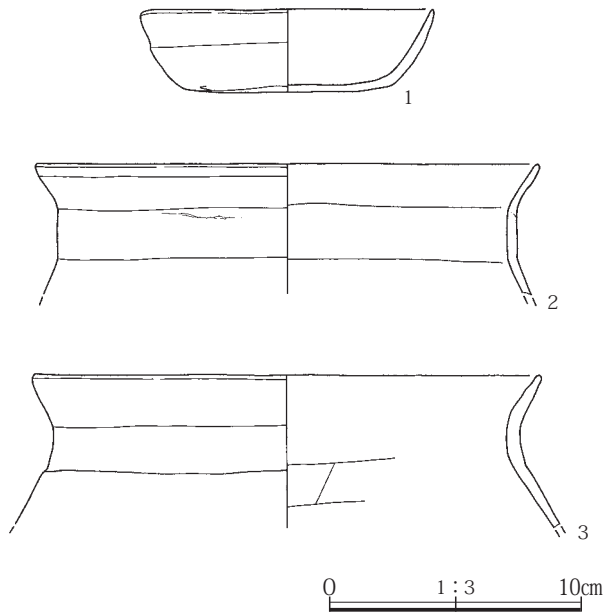
**カマド** 東辺中央部分に構築されていた。残存状態は廃絶時にカマドも壊されたのか、煙道から燃烧部の天井が底面に崩落した状態であった。また、燃烧部、焚口の側壁も壁際のごく一部と構築材に使用されたとみられる礫が残るだけの状態であった。規模は全長1.87m、全幅1.10m、燃烧部幅0.58mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪められ、煙道部から奥壁は135度の角度で立ちあがっていた。掘方は、焚口部を中心に楕円形状に掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示したのは土師器杯1点と甕2点であるが、3点とも床面より高い位置での出土である。図示した他では土師器大型製品片213点・小型製品片37点、須恵器大型製品片1点・小型製品片5点が出土している。なお、床面中央に径10～30cm大の礫が集積された状態で出土していた。このうちの扁平な円礫は被熱を受けていた。

**所見** 本竪穴住居の時期は確実に本竪穴住居に相伴するとは断定できないが図示した1～3の遺物から9世紀第2四半期に比定できる。



第80図 4区4号竪穴住居遺構図(2)



第81図 4区4号竪穴住居出土遺物図

4区5号竪穴住居(第82～84図、PL.45・46・156)

**位置** 4区調査区南西隅、73区J-20、K-20、83区K-1に位置する。

**重複** 北辺中ほどで4区1号土坑、南辺中ほどで4区2号土坑、カマド煙道部で攪乱と重複する。それぞれの遺構より本竪穴住居の方が古い。

**形状** 南北方向が東西方向より0.6mほど長い長方形を呈す。

**規模** 長軸4.20m、短軸3.58mを測る。

**面積** 12.05㎡

**方位** N-87°-E

**埋没状態** 土層断面では白色軽石粒を含む褐色土、明褐色土、にぶい褐色土が北東側から流入し、レンズ状の堆積をしているのが観察できることから、自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より5～25cmほど橙色土・明褐色土によって埋め戻されて構築されている。なお、床面の状態はほぼ平坦であった。

確認面から床面までの深さは、0.51～0.59mを測る。

**掘方** 北東部で長方形、中央部で楕円形を呈する土坑状の掘り込みが検出されたが、ともに床面より10cmと25cmと浅いものであった。北西部の掘り込みの中には平面形態がやや不整形を呈し、規模が径1.00×0.70m、深さ0.70mほどの床下土坑とみられる施設が検出されている。な

お、この床下土坑から遺物などの出土はみられなかった。

**壁溝** カマド南側を除く各辺壁下で検出した。規模は、上端0.21m前後、下端0.01～0.10m、深さ0.03～0.13mを測る。

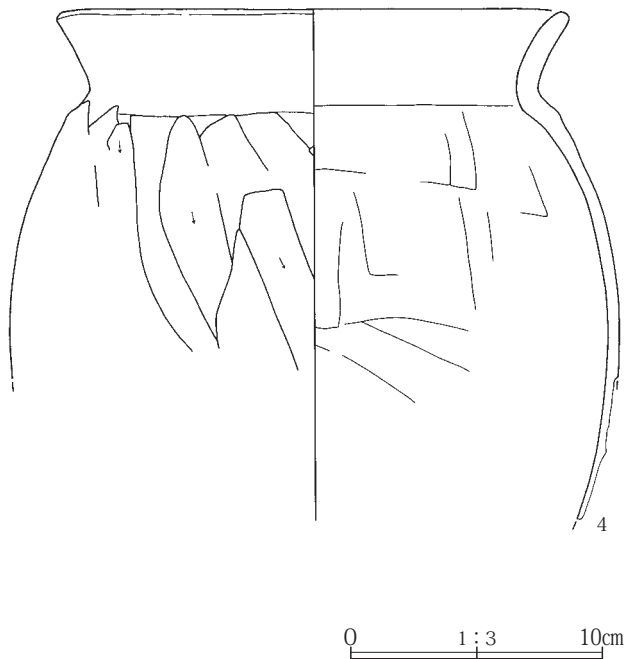
**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 南東隅にて検出した。形状は円形状を呈し、規模は径0.60m、深さ0.96mを測る。なお、底面から13cm上位に1・3の土師器杯が並べられた状態で出土していた。

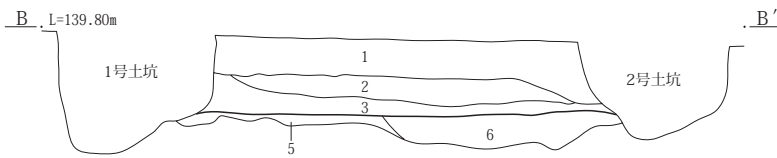
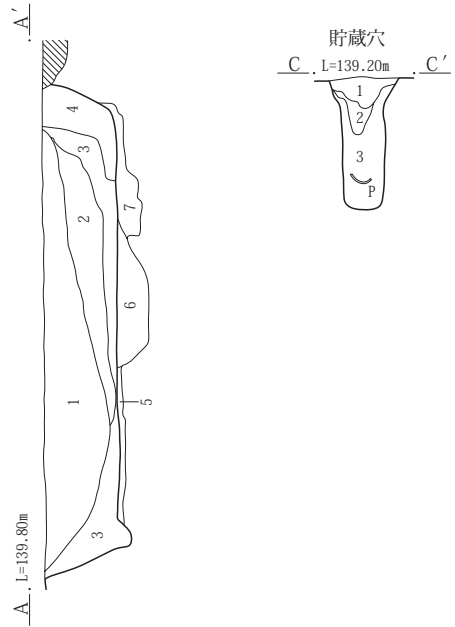
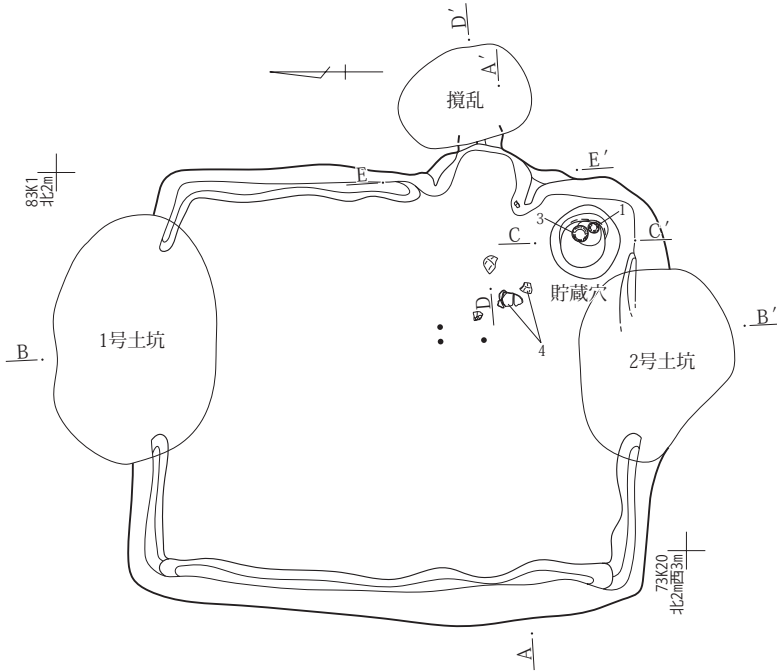
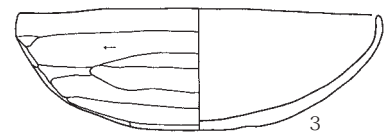
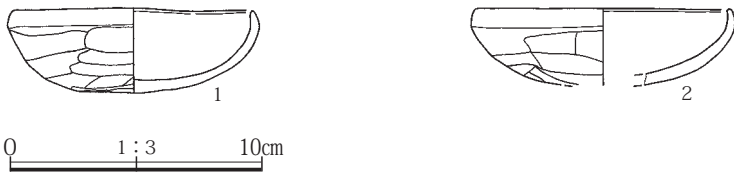
**カマド** 東辺やや南寄り部分に構築されている。残存状態は煙道部が攪乱により欠落しているため不明であるが、燃烧部の側壁が竪穴住居壁際にわずかに残存するだけで焚口や天井は形状がわからない状態まで壊されていた。規模は焚口から燃烧部までの全長が0.60m、全幅1.0m、燃烧部幅0.74mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪められており、底面に灰の堆積が確認された。掘方は、焚口部を中心に楕円形状に掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示した遺物は貯蔵穴内出土の1・3とカマドから出土した2の土師器杯、4の土師器甕である。図示した以外では土師器大型製品片168点・小型製品片15点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は貯蔵穴やカマドから出土した遺物から7世紀第4四半期に比定できる。



第82図 4区5号竪穴住居出土遺物図(1)

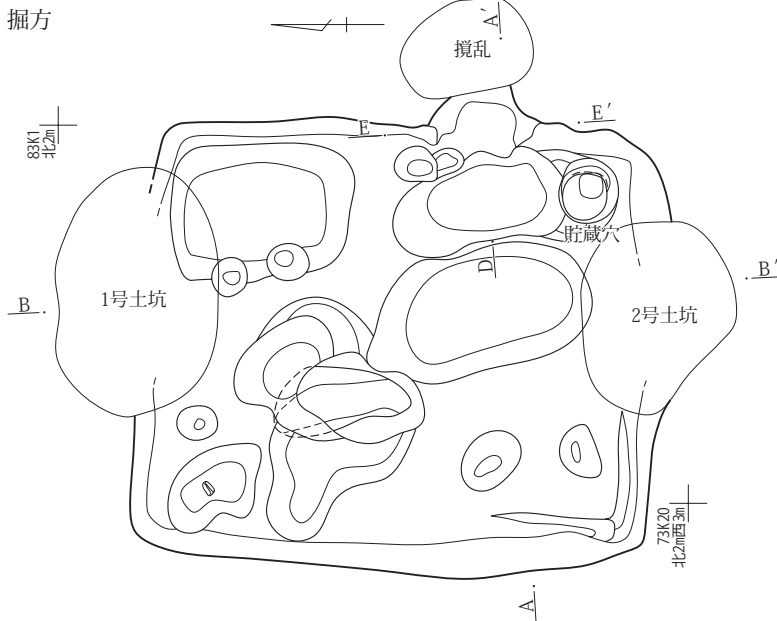


A-A'・B-B'

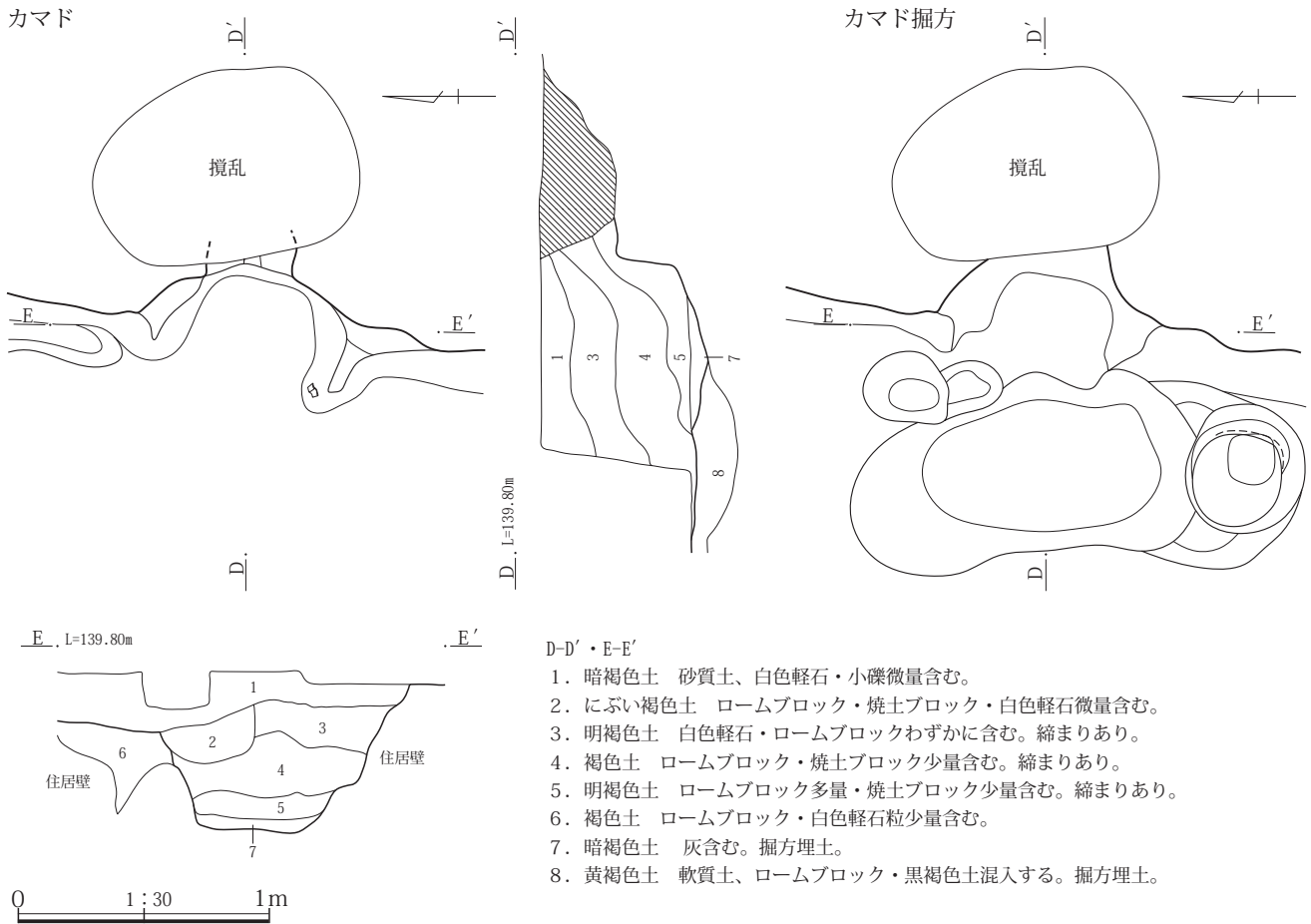
1. 褐色土 砂質土、白色軽石粒含む。
2. 明褐色土 砂質土、白色軽石粒少量含む。
3. にぶい褐色土 白色軽石粒・ロームブロック含む。
4. 黄褐色土 カマド埋土。
5. 橙色土 硬く締まりあり。貼床。
6. 明褐色土 ロームブロック・黒色土ブロック混入。掘方埋土。
7. 黄褐色土 カマド掘方埋土。

C-C'

1. 褐色土 ロームブロック微量含む。
2. にぶい褐色土 軟質土、ロームブロック少量含む。
3. 橙色土 軟質土。



第83図 4区5号竪穴住居遺構図(1)・出土遺物図(2)



第84図 4区5号竪穴住居遺構図(2)

4区6号竪穴住居(第85図、PL.46・47・156)

**位置** 4区調査区北東隅、82区R-4、S-4に位置する。本竪穴住居の大半は市道部分に位置する調査対象区域外のため全貌は不明である。

**重複** 調査範囲内では、他遺構との重複関係は確認されなかったが、南西角は攪乱によって住居上端の一部を欠く。

**形状** 方形または長方形を呈すると想定される。

**規模** 南北方向が3.06m、東西方向は調査区内で0.74mを測る。

**面積** 調査区内で1.85㎡を測る。

**方位** N-15°-E

**埋没状態** 土層断面では白色軽石粒を含む灰褐色土、褐色土によるレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 中央部の落ち込みでは、にぶい褐色土を埋め戻しているが、その周囲は地山をそのまま踏み固めて平坦面としている。

確認面から床面までの深さは、0.29~0.34mを測る。

**掘方** 住居中央部で5~7cmの浅い掘り込みが確認された。

**壁溝** 調査範囲では、検出されなかった。

**柱穴** 調査範囲では、検出されなかった。

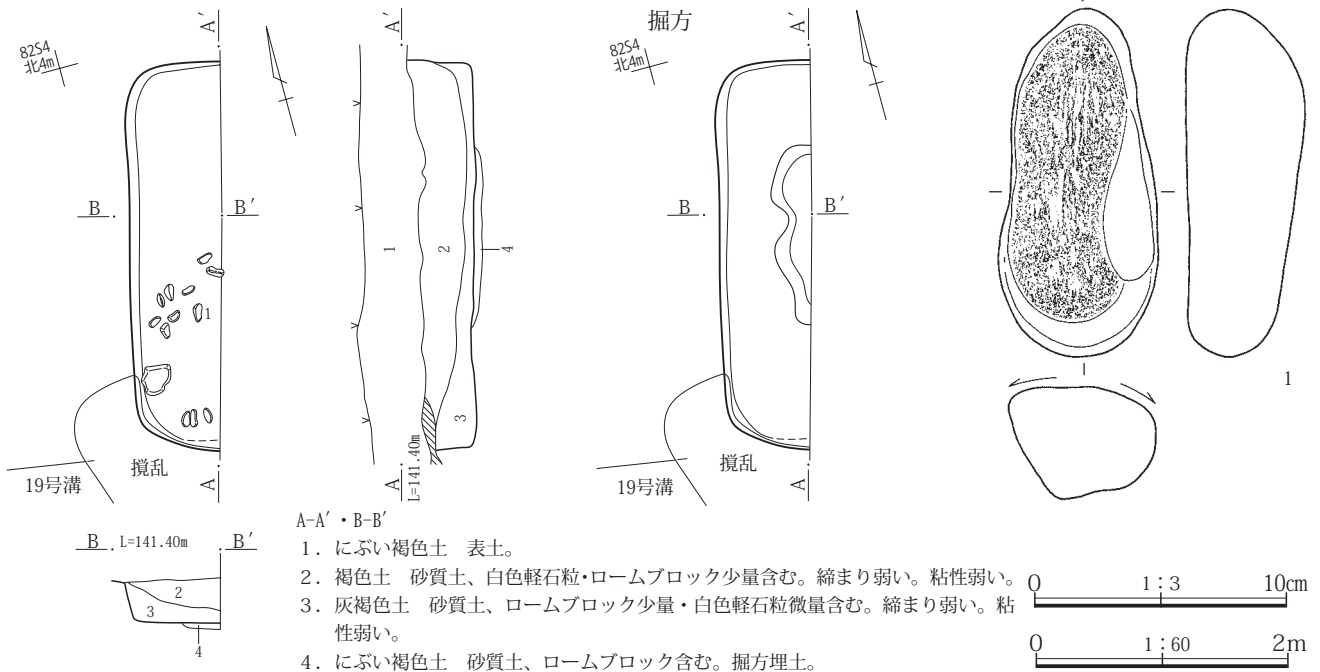
**貯蔵穴** 調査範囲では、確認されなかった。

**カマド** 調査範囲では、確認されなかった。

**その他** 南西角で落ち込みが検出されたが、性格は不明である。

**出土遺物** 図示可能な遺物は出土しなかったが、土師器大型製品片4点、埴輪片1点が出土している。また、調査範囲の南側では径30cmの扁平な礫や長さ10cm、径5cm前後の棒状礫が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は出土遺物の検討から9世紀後半に比定できる。



第85図 4区6号竪穴住居遺構図・出土遺物図

4区7号竪穴住居(第86～87図、PL.47・157)

**位置** 4区調査区北東隅、82区S-3に位置する。本竪穴住居の大半は市道部分に位置する調査対象区域外のため全貌は不明である。

**重複** 調査を実施した範囲内では他遺構との重複関係は確認されなかった。

**形状** 隅丸長方形または正方形を呈するものと想定される。

**規模** 南北方向が3.26m、東西方向は調査区内で1.72mを測る。

**面積** 調査区内で4.43㎡

**方位** N-14°-E

**埋没状態** 土層断面では中ほどがやや盛り上がる不自然な状態が観察されたが、自然埋没の可能性が高いと想定される。

**床面** 地山をそのまま踏み固めて平坦面としている。

確認面から床面までの深さは、0.55～0.62mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は、構築されていなかった。

**壁溝** 調査範囲では、各辺壁下で検出した。規模は、上端0.16～0.20m、下端0.03～0.14m、深さ0.02～0.09mを測る。

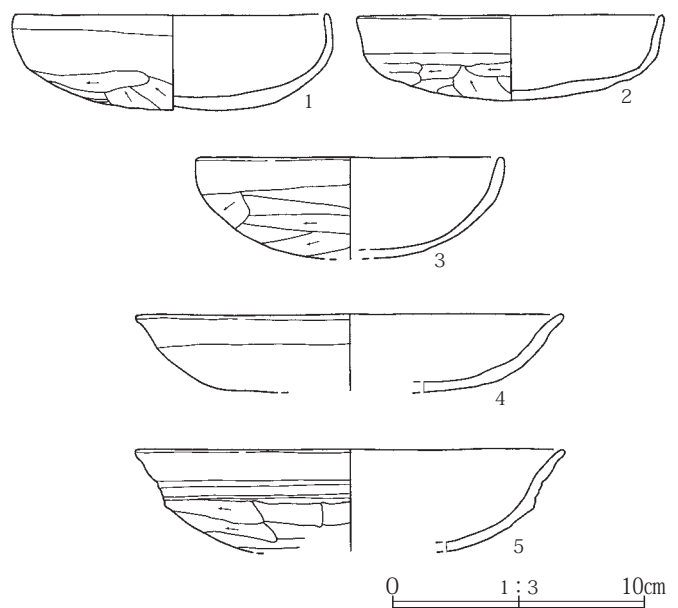
**柱穴** 調査範囲では、検出されなかった。

**カマド** 調査範囲では、確認されなかった。

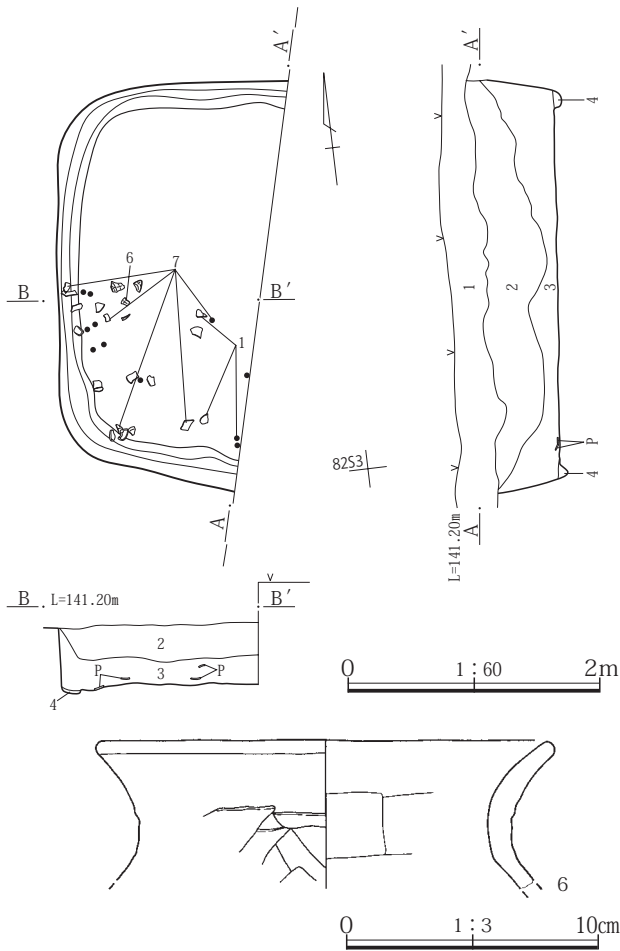
**貯蔵穴** 調査範囲では、確認されなかった。

**出土遺物** 図示した遺物では1の土師器杯が床面より15cm、6の土師器甕が床面より15cm、7の土師器甕が床面より9cm上位で出土している。図示した以外には土師器大型製品片39点・小型製品片37点、須恵器大型製品片2点・小型製品片1点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は明確に共伴すると断定できる遺物は確認できないが、比較的床面に近い位置から出土している1・7から8世紀第2四半期に比定できる。

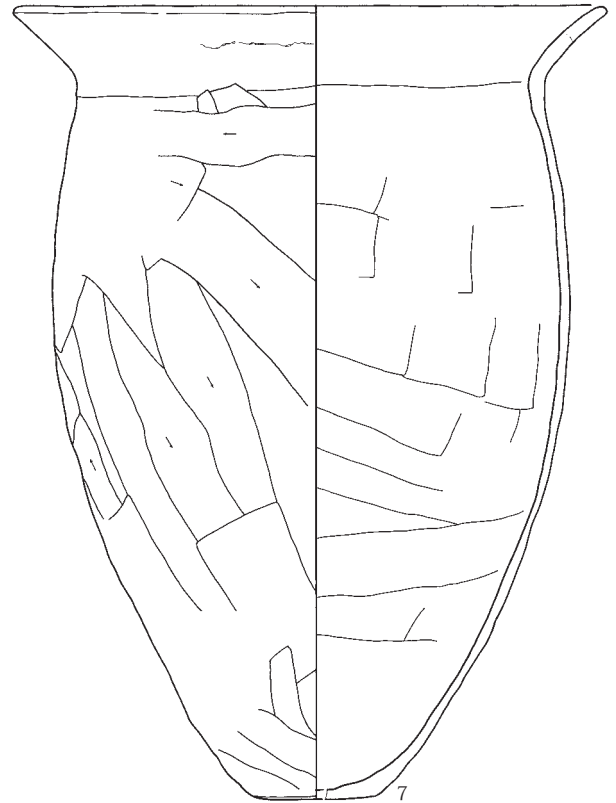


第86図 4区7号竪穴住居出土遺物図(1)



A-A'・B-B'

1. にぶい褐色土 表土。
2. 褐色土 砂質土、ロームブロック少量、白色軽石粒・焼土粒微量含む。
3. 灰褐色土 砂質土、ロームブロック少量、白色軽石粒微量含む。
4. 明黄褐色土 砂質土、白色軽石粒微量含む。周溝埋土。



第87図 4区7号竪穴住居遺構図・出土遺物図(2)

## (2)古墳時代後期の竪穴住居

1区9号竪穴住居(第88～90図、PL.47・48・157)

**位置** 1区南東部、85区S-10・11、T-10～12、86区A-11に位置する。

**重複** 北辺寄りで小規模な攪乱が存在するが、他遺構との重複は確認されなかった。

**形状** ほぼ方形を呈す。

**規模** 長軸5.76m、短軸5.72mを測る。

**面積** 26.07㎡

**方位** N-115°-W

**埋没状態** 土層断面では床面上に軽石粒を含む黒色土が10cmほど水平に堆積した後、壁際に暗褐色土が三角堆積し、黒褐色土が水平堆積しているのを観察できたことから自然埋没であると想定される。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めている。床面の状態は、若干の凹凸がみられるがほぼ平坦面をつくっている。

確認面から床面までの深さは、0.52～0.61mを測る。

**掘方** 地山を床面としているため、掘方は、構築されていない。

**壁溝** 北壁の北西角より1.0mから東壁、そして南壁の南西角の手前1.5mにかけて検出した。規模は、上端0.10～0.15m、下端0.04～0.20m、深さ0.05～0.17mを測る。

**柱穴** 竪穴住居平面の対角線上、北東部・南東部・南西部の各壁際から0.8～1.2mほど内側から各1本、計3本を検出した。P1は、楕円形状を呈し、長軸0.46m、短軸0.40m、深さ0.52mを測る。P2は、楕円形状を呈し、長軸0.44m、短軸0.38m、深さ0.54mを測る。P3は、楕円形状を呈し、長軸0.46m、短軸0.40m、深さ0.35mを測る。柱穴間の距離は、P1～P2間が3.20m、P2～P3間が2.50mである。

柱痕は、P2の土層断面にて確認できた。これによると柱径は10cm前後とみられる。なお、P1・P3の柱は抜き取られた状態が観察されている。

また、北西部では柱穴が確認されていない。柱穴が想



定される位置付近には攪乱も確認されているが、攪乱は床面を10cmほどしか掘り込んでいないため、もともとこの位置には柱穴が存在しないとみられる。こうした状況から北西部分の柱は礎石状または礎板などによる対応が想定される。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

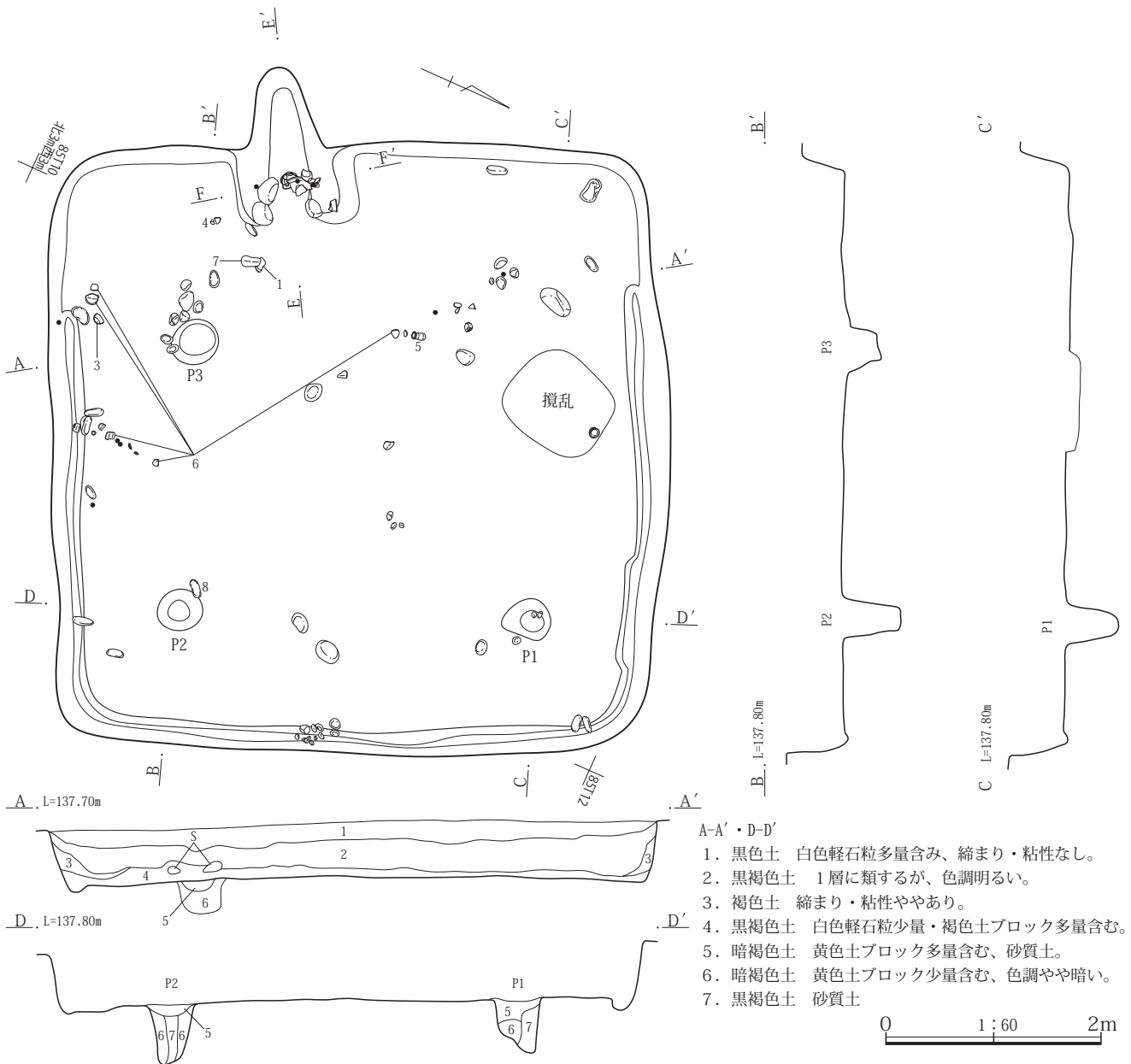
**カマド** 西壁やや南寄り部分に構築されていた。残存状態は焚口と燃焼部の天井が壊され崩落していたが、焚口や燃焼部側壁は構築材に使用されている円柱状の川原石がそのまま残存しているなど良好な状態であった。規模は全長1.07m、全幅1.12m、煙道部長0.92m、煙道部幅0.60m、焚口部幅0.43m、燃焼部幅0.38mを測る。燃焼部は焚口よりやや窪められており、煙道部奥壁は110度

ほどの急傾斜で立ち上がっていた。

掘方は燃焼部の下に径1.0×0.9mほどの楕円形に10cmほど掘り込まれ、暗灰黄褐色土を充填して底面を構築していた。

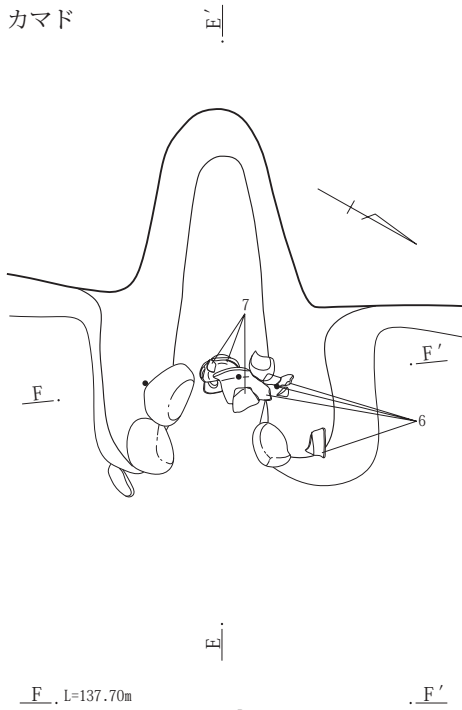
**出土遺物** 図示した遺物のうち、1の土師器杯が床面、2の土師器杯、6・7の土師器甕がカマド、4の土師器杯はカマド内と埋没土中からの出土である。図示できなかった遺物には土師器大型製品片119点・小型製品片43点、須恵器小型製品片7点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は、床面やカマドから出土した1・2・6・7の遺物から6世紀末から7世紀初頭に比定できる。



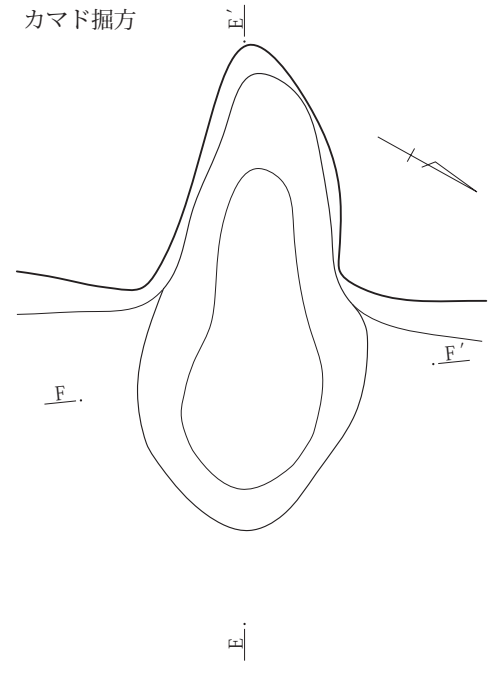
第88図 1区9号竪穴住居遺構図(1)

カマド



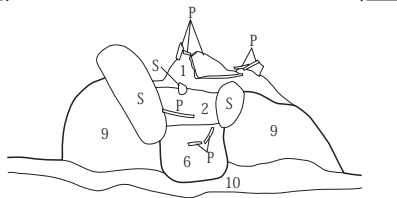
E-E'   
 F-F'   
 E-E', l=137.70m

カマド掘方

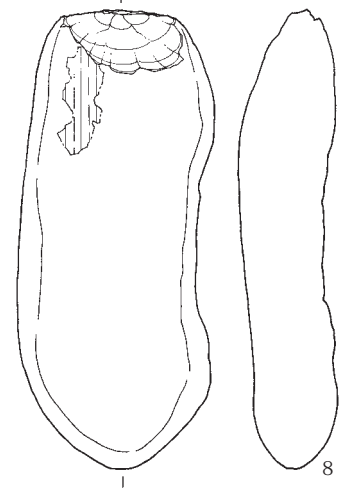
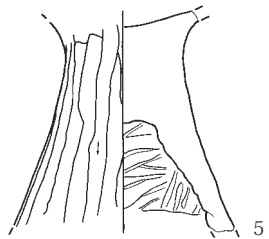
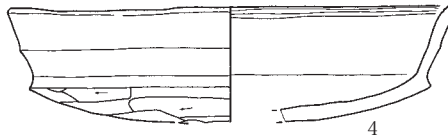
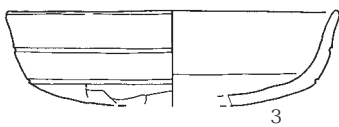
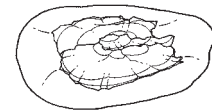
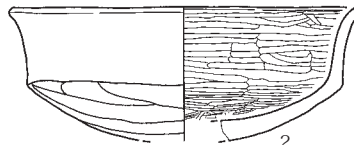
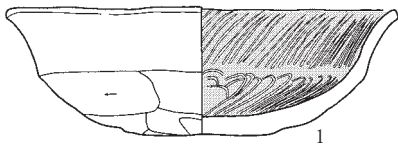


E-E'・F-F'

1. 黒色土 白色軽石粒多量含み、締まり・粘性なし。
2. 暗灰黄褐色土 天井崩落土。
3. 灰黄褐色土 カマド奥壁構築土。使用面に近い所は被熱し、赤褐色化する。
4. 暗灰黄褐色土 奥壁崩落土、焼土含む。
5. 暗褐色土 地山。
6. 暗灰褐色土 灰・焼土堆積層、炭化物含む。
7. 暗灰黄褐色土 煙道流入土、焼土・炭化物含む。
8. 暗赤褐色土 焼土層、灰・炭化物含む。
9. 灰黄褐色土 カマド袖構築土。
10. 暗灰黄褐色土 カマド構築土。

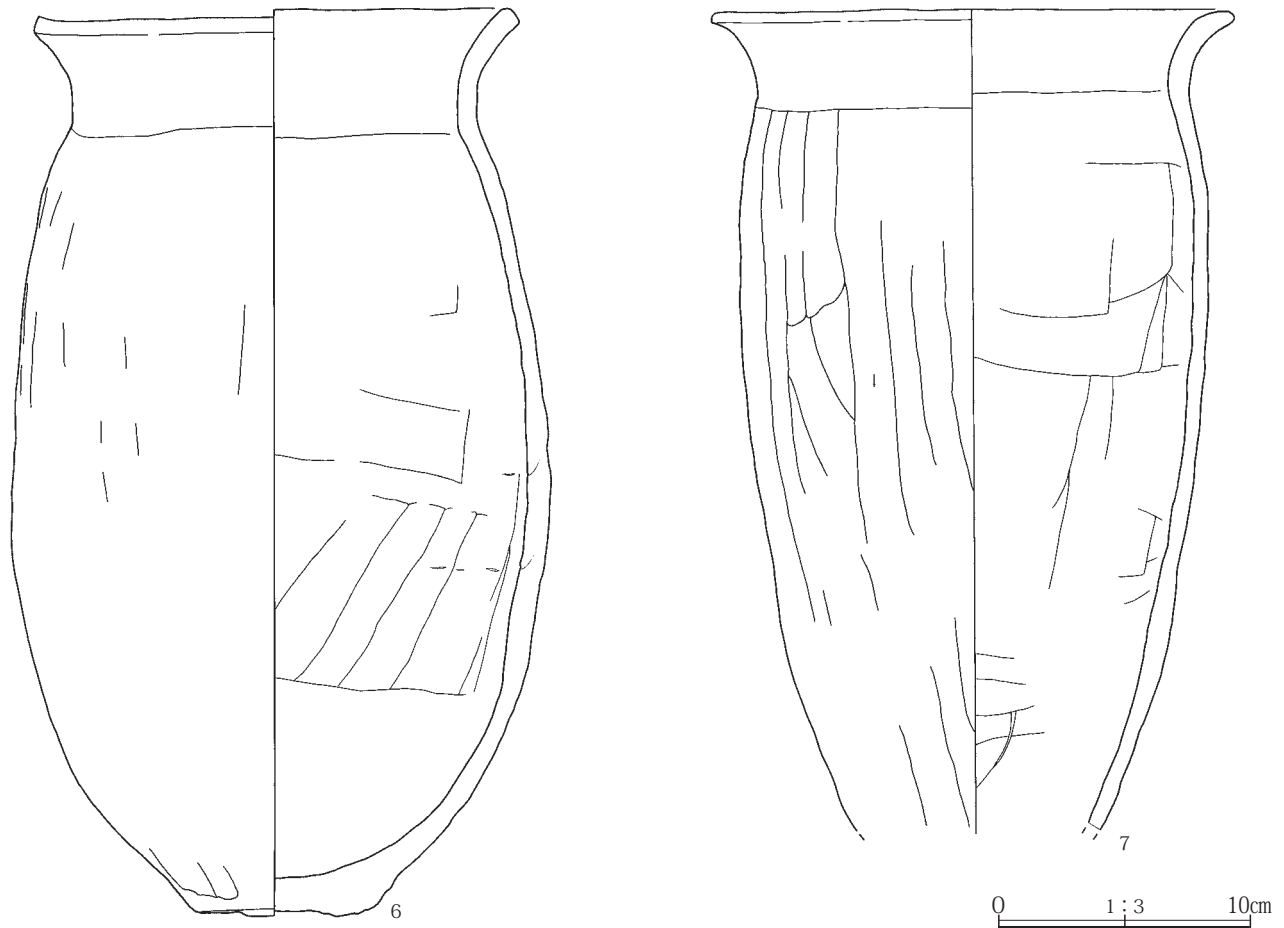


0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第89図 1区9号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(1)



第90図 1区9号竪穴住居出土遺物図(2)

**1区10号竪穴住居**(第91～93図、PL.48～50・157～158)

**位置** 1区南東部、9号竪穴住居の南側、85区T-9・10、86区A-9・10に位置する。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

**形状** 東西方向がわずかに長い長方形を呈す。

**規模** 長軸5.30m、短軸5.16mを測る。

**面積** 22.23㎡

**方位** N-73°-E

**埋没状態** 土層断面では床面上に軽石粒を含む黒褐色土が10cmほど水平堆積した後、暗褐色土が周囲から流れ込んで堆積したのが観察できたことから、自然埋没と想定される。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めていた。床面の状態は若干の凹凸がみられるがほぼ平坦であった。

確認面から床面までの深さは、0.50～0.71mを測る。

**掘方** 地山を床面としていることから、掘方は構築されていなかった。

**壁溝** 北壁西半及び西壁の中ほどで断続的に検出した。規模は、上端0.25～0.30m、下端0.06～0.16m、深さ0.03～0.13mを測る。

**柱穴** 竪穴住居平面の対角線上、各四隅の壁より1.0mほど内側で4本を検出した。P1は、楕円形を呈し、長軸0.58m、短軸0.52m、深さ0.53mを測る。P2は、楕円形を呈し、長軸0.60m、短軸0.52m、深さ0.49mを測る。P3は、楕円形を呈し、長軸0.32m、短軸0.24m、深さ0.54mを測る。P4は、楕円形を呈し、長軸0.58m、短軸0.50m、深さ0.57mを測る。柱穴間の距離は、P1～P2間が2.85m、P2～P3間が3.00m、P3～P4間が2.85m、P4～P1間が2.90mである。なお、柱穴の土層断面では柱が抜き取られている状態が観察できた。

**貯蔵穴** 北東部隅にて検出した。形状は各辺がやや張る隅丸長方形を呈す。規模は長軸0.86m、短軸0.78m、深さ0.59mを測る。貯蔵穴内からは11の土師器甕が出土している。

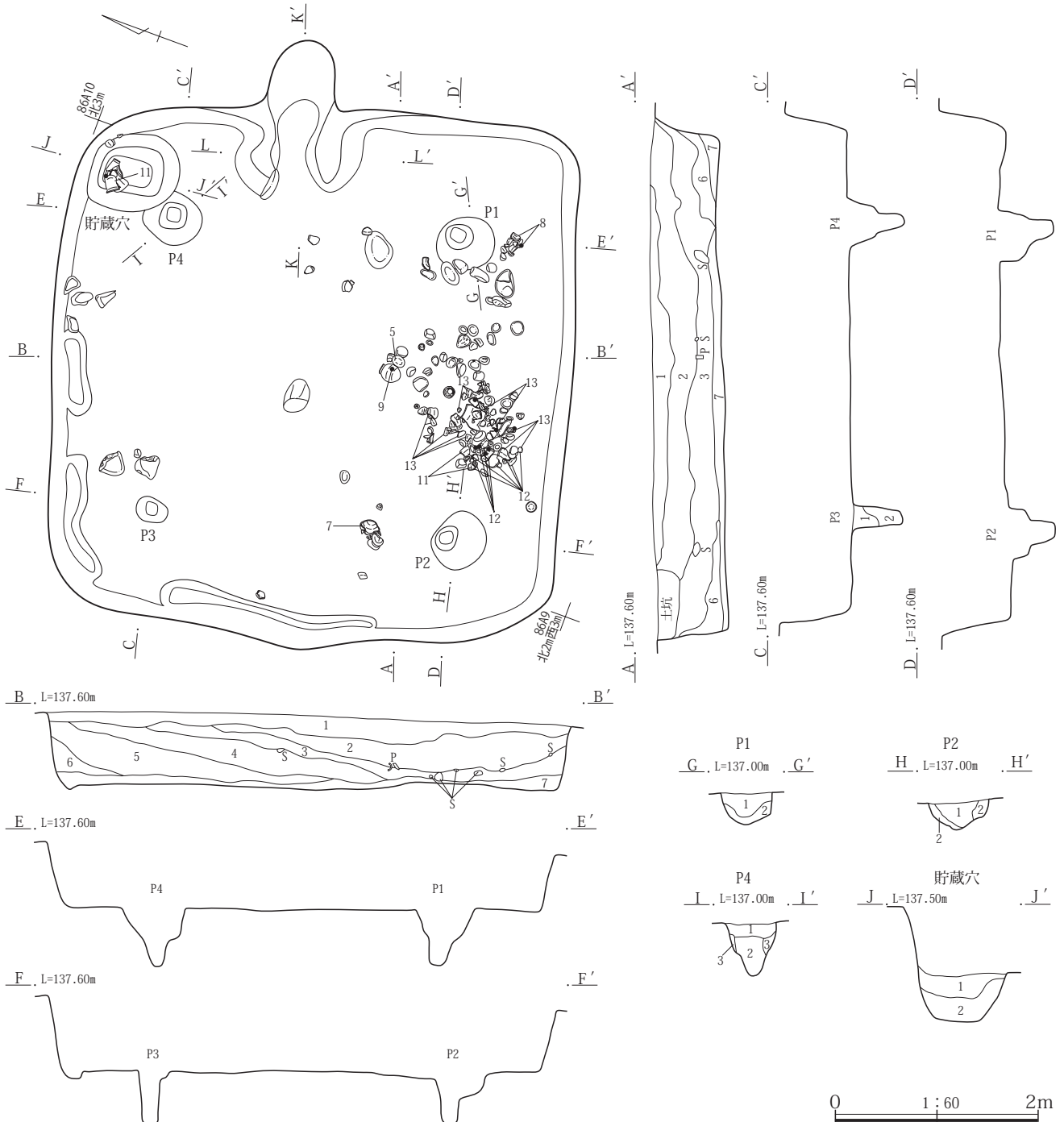
**カマド** 東壁やや北寄り部分に構築されていた。残存状

態は焚口から燃焼部の天井が壊され崩落していたが、焚口から燃焼部側壁は構築材の礫がそのまま残っているなど比較的良好な状態であった。全長1.54m、全幅1.03m、煙道部長0.56m、煙道部幅0.54m、焚口部幅0.45m、燃焼部幅0.36mを測る。燃焼部は焚口よりわずかに窪み、煙道部は120度ほどのなだらかな傾斜で立ち上り、奥壁では急な立ち上がりになっていた。

掘方は床面より10cmほど掘り込み、暗灰黄褐色土を充填、及び側壁の外側を構築していた。

**出土遺物** 11の土師器甕が貯蔵穴から出土した。他の遺物の多くは、P1とP2間の床面より15cm前後ほど上位から径10～20cm大の円礫といっしょに廃棄された状態で出土している。図示した遺物のうち5・9・12・13の土師器杯・甕が該当する。図示できなかった遺物には土師器大型製品片286点・小型製品片117点、須恵器小型製品片11点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は確実に相伴する11の土師器甕から6世紀末から7世紀初頭に比定できる。



第91図 1区10号竪穴住居遺構図(1)

A-A'・B-B'

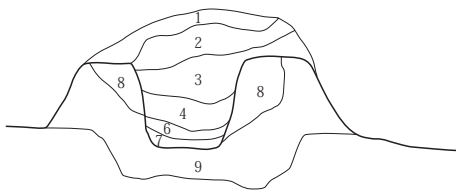
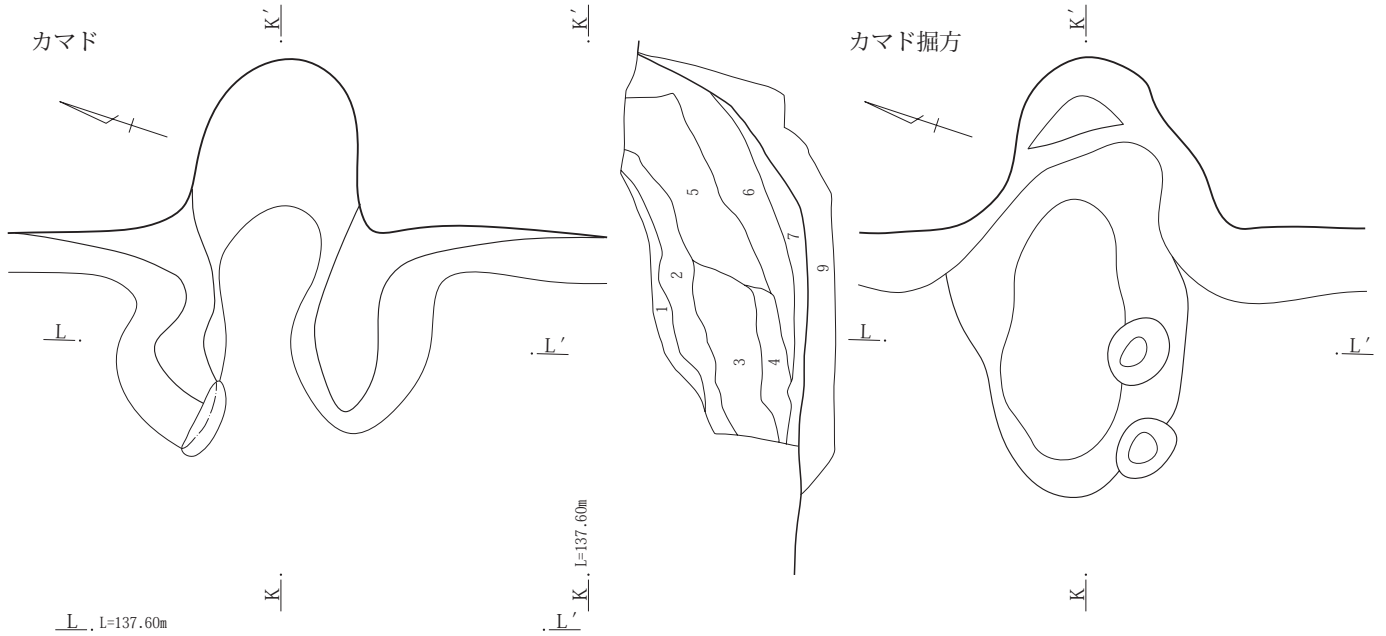
1. 黒褐色土 白色軽石粒少量含む砂質土、締まり・粘性なし。
2. 暗褐色土 白色軽石粒・褐色土ブロック多量含む。
3. 暗褐色土 白色軽石粒多量含む、締まり・粘性のない砂質土。
4. 褐色土 白色軽石粒少量・褐色土ブロック含む。3層より色調明るい。
5. 暗褐色土 白色軽石粒多量含む。
6. 褐色土 砂質土、壁崩落土。
7. 黒褐色土 締まりあり。

C-C'・G-G'・H-H'・I-I'

1. 黒褐色土 黄褐色粒少量・白色軽石粒微量含む。砂質で粘性なし。
2. 黒褐色土 1層と比べ色調暗い。砂質で粘性なし。
3. 暗褐色土 色調明るく、黄褐色土ブロック含む。

J-J'

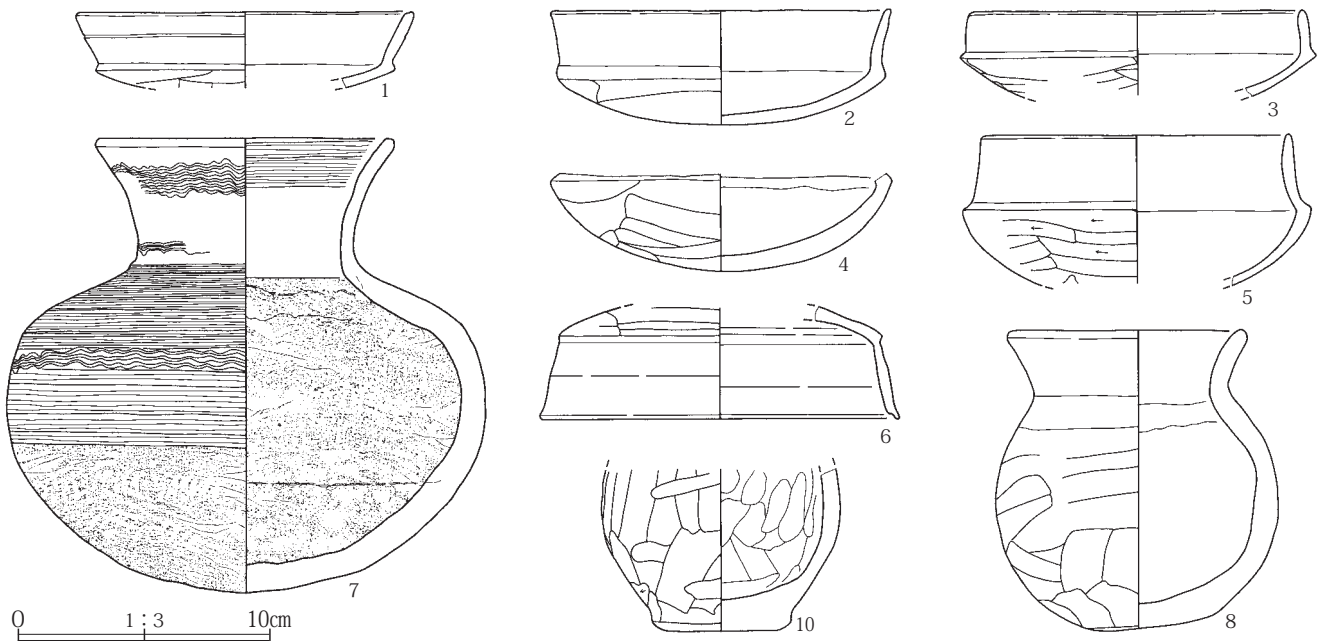
1. 黒褐色土 黄色土ブロック多量・白色軽石粒含む。砂質で粘性なし。
2. 暗褐色土 1層より色調明るく、白色軽石粒微量含む。砂質で粘性なし。



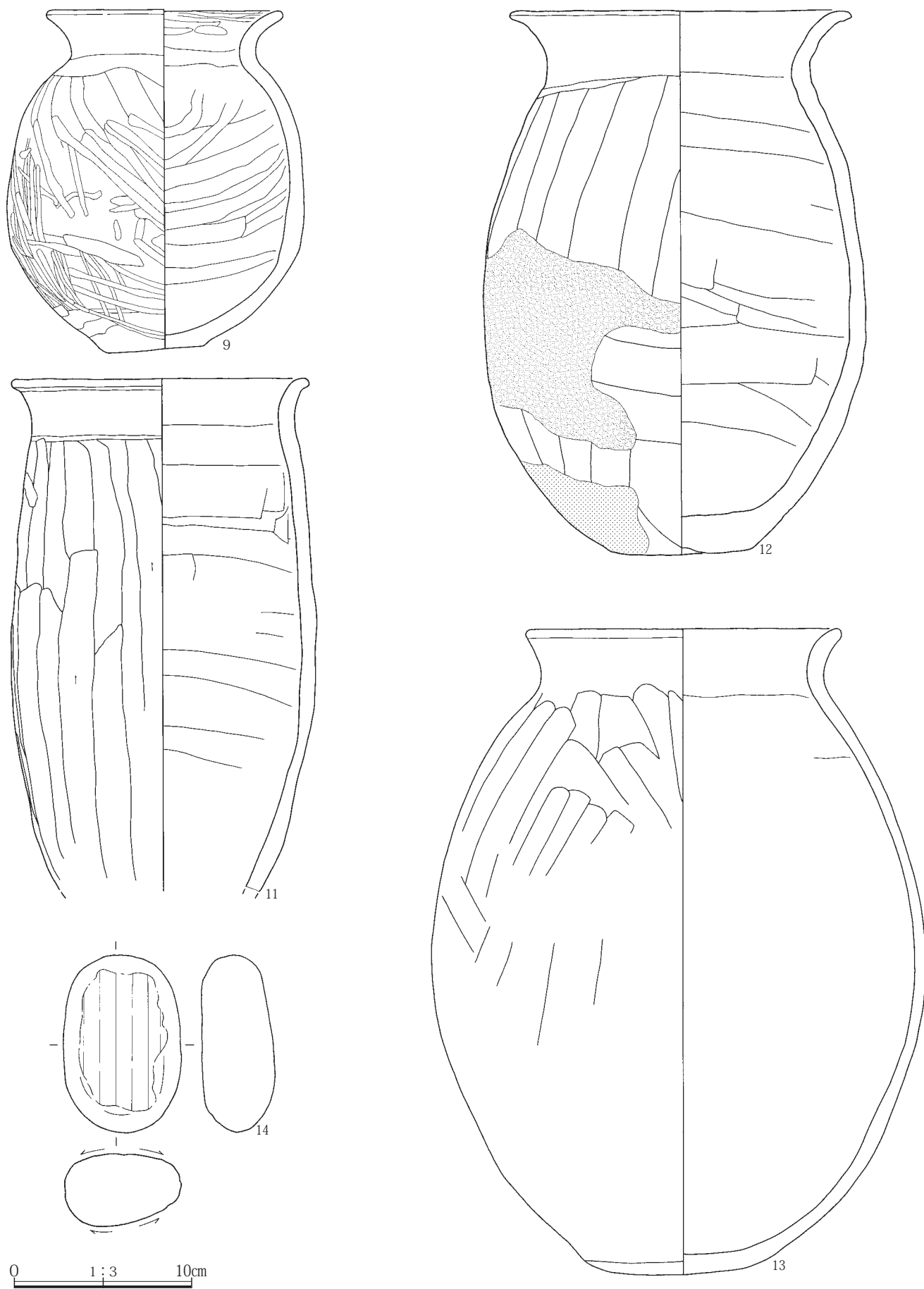
0 1:30 1m

K-K'・L-L'

1. 黒褐色土 白色軽石粒含む黒味のある褐色土。
2. 褐色土 黒色土ブロック状含む。
3. 黒色土 白色軽石粒・焼土粒少量含む。
4. 赤褐色土 焼土多量含む、黄色土、黒色土、白色粘土をブロック状含む。
5. 灰黄褐色土 カマド天井崩落土。一部被熱しており、赤色化する。
6. 暗褐色土 焼土多量含む、煙道流入土。
7. 暗赤褐色土 焼土層、灰・炭化物含む。
8. 灰黄褐色土 カマド袖構築土、被熱し一部赤褐色化する。
9. 暗灰黄褐色土 カマド構築土。



第92図 1区10号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(1)



第93図 1区10号竪穴住居出土遺物図(2)

1区12号竪穴住居(第94～96図、PL.50・51)

**位置** 1区調査区西端、86区H-18・19、I-18・19に位置する。

**重複** 他遺構との重複は確認されず、単独での占地である。

**形状** 北東、南東角は比較的直角に近いが、北西、南西角は丸みを持つ隅丸長方形を呈す。

**規模** 長軸5.36m、短軸5.10mを測る。

**面積** 23.20㎡

**方位** N-105°-W

**埋没状態** 土層断面では床面上に5cmほど軽石粒を含む黒褐色土が堆積した後、壁際に暗褐色土が三角堆積した後、暗褐色土、黒褐色土が堆積している。最上位で観察された黒褐色土はやや不自然な堆積状態が観察できることから、下位3層は自然埋没と想定できるが、最上位については人為的な掘削が行われた後、埋没した可能性も

想定される。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めていた。床面の状態は若干の凹凸がみられるがほぼ平坦であった。

確認面から床面までの深さは、0.36～0.53mを測る。

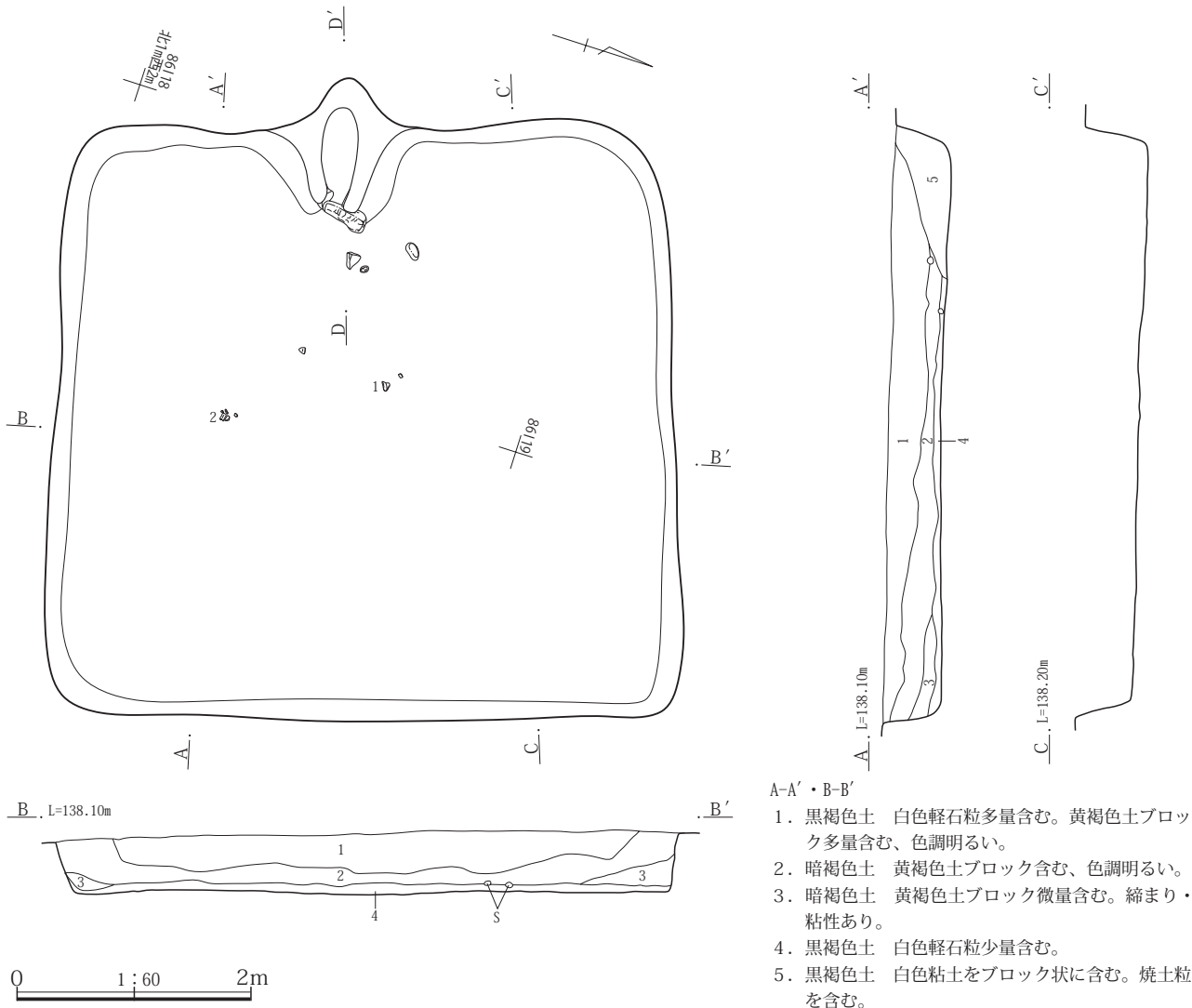
**掘方** 地山を床面としており、掘方は構築されていなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**カマド** 西壁やや南寄り部分に構築されていた。残存状態は燃烧部から煙道部の天井部が壊されていたが、焚口と燃烧部の側壁は現状が保たれていた。規模は全長1.50m、全幅1.30m、煙道部長0.60m、煙道部幅0.32m、焚口部幅0.15m、燃烧部幅0.25mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪められており、煙道部奥壁は急な立ち上がりであった。



第94図 1区12号竪穴住居遺構図(1)

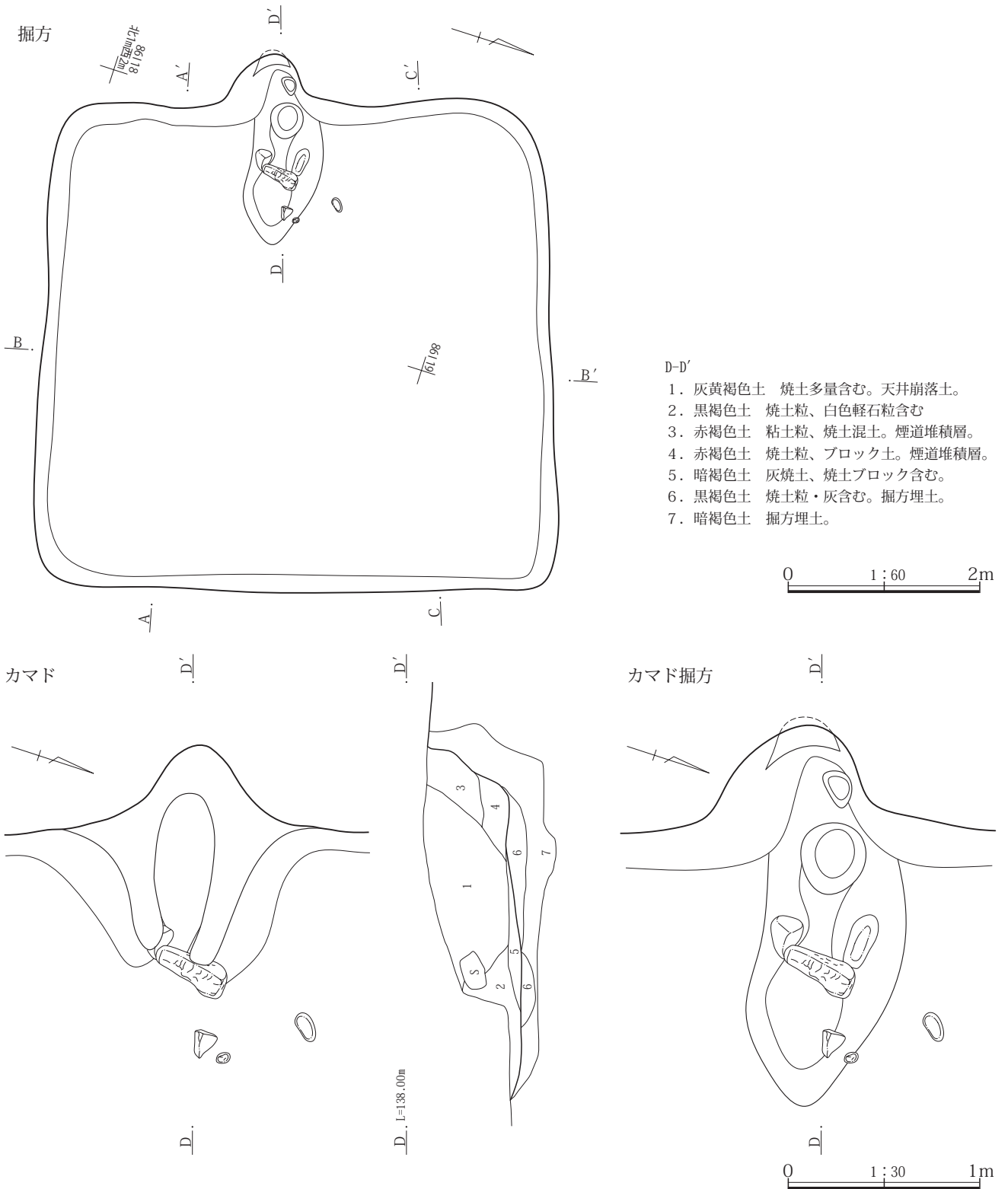
第3章 検出遺構と出土遺物

掘方は焼部下に1.4×1.2mの三角形に7～8cm掘り込み、暗褐色土を充填して焼部底面を整形し、側壁などを構築していた。

**出土遺物** 図示可能な遺物が2点と少量であった。1の土師器甕は床面からの出土である。図示した以外の遺物

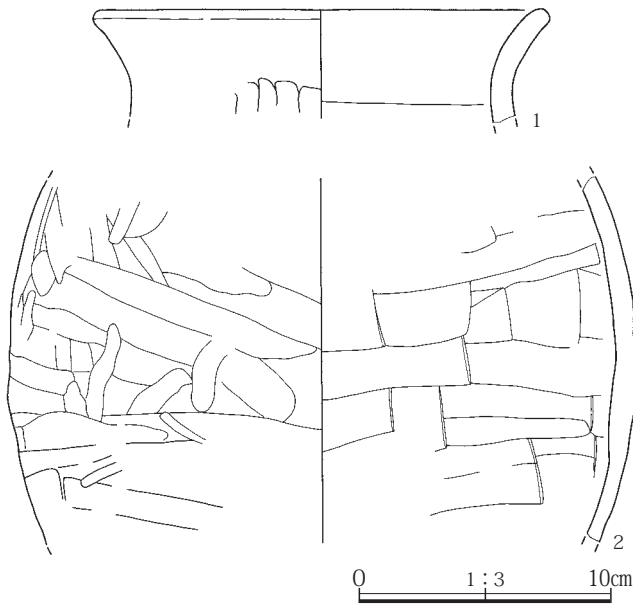
では土師器大型製品片39点・小型製品片4点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は出土遺物から6世紀後半代に比定できる。



第95図 1区12号竪穴住居遺構図(2)





第96図 1区12号竪穴住居出土遺物図

1区16号竪穴住居(第97・98図、PL.51・52・158)

**位置** 1区調査区中央北辺寄り、95区T-1、96区A-1・2に位置する。

**重複** 南西隅で1区26号竪穴住居との重複が確認された。新旧関係は本竪穴住居のほうが新しい。

**形状** 南東角が鈍角であるが、東西方向に長い隅丸長方形を呈す。

**規模** 長軸4.54m、短軸3.34mを測る。

**面積** 12.36㎡

**方位** N-63°-E

**埋没状態** 土層断面では床面に5cmほど軽石粒を含む黒色土が水平に堆積した後、黒褐色土・黒色土がレンズ状の堆積をしているのが観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めている。床面の状態は若干の凹凸がみられるがほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.37～0.53mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、構築されていなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 南東部隅にて検出した。形状は、楕円形状を呈し、規模は長軸0.70m、短軸0.54m、深さ0.47mを測る。

貯蔵穴内からは2の土師器杯が出土している。

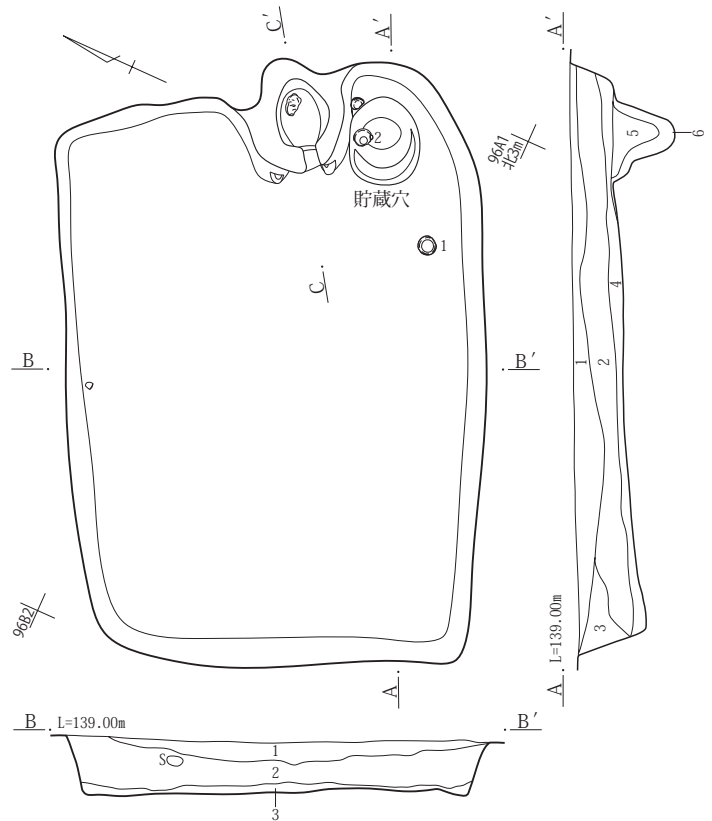
**カマド** 東壁やや南寄り部分に構築されていた。残存状態は燃焼部から煙道部の天井部が壊されていたが、焚口

天井の構築に使用された礫や燃焼部側壁は現状のまま残存していた。規模は全長0.94m、全幅1.10m、焚口部幅0.36m、燃焼部幅0.42mを測る。燃焼部は焚口よりやや掘り下げられており、奥壁はやや角度をつけて立ち上がっていた。

掘方は燃焼部底面より5～7cmほど掘り込まれ、暗褐色土を充填してあった。

**出土遺物** 図示できた遺物は土師器杯・碗の3点だけであった。図示した以外の遺物では土師器大型製品片17点・小型製品片1点、須恵器大型製品片23点・小型製品片1点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は出土遺物から6世紀末から7世紀初頭に比定できる。

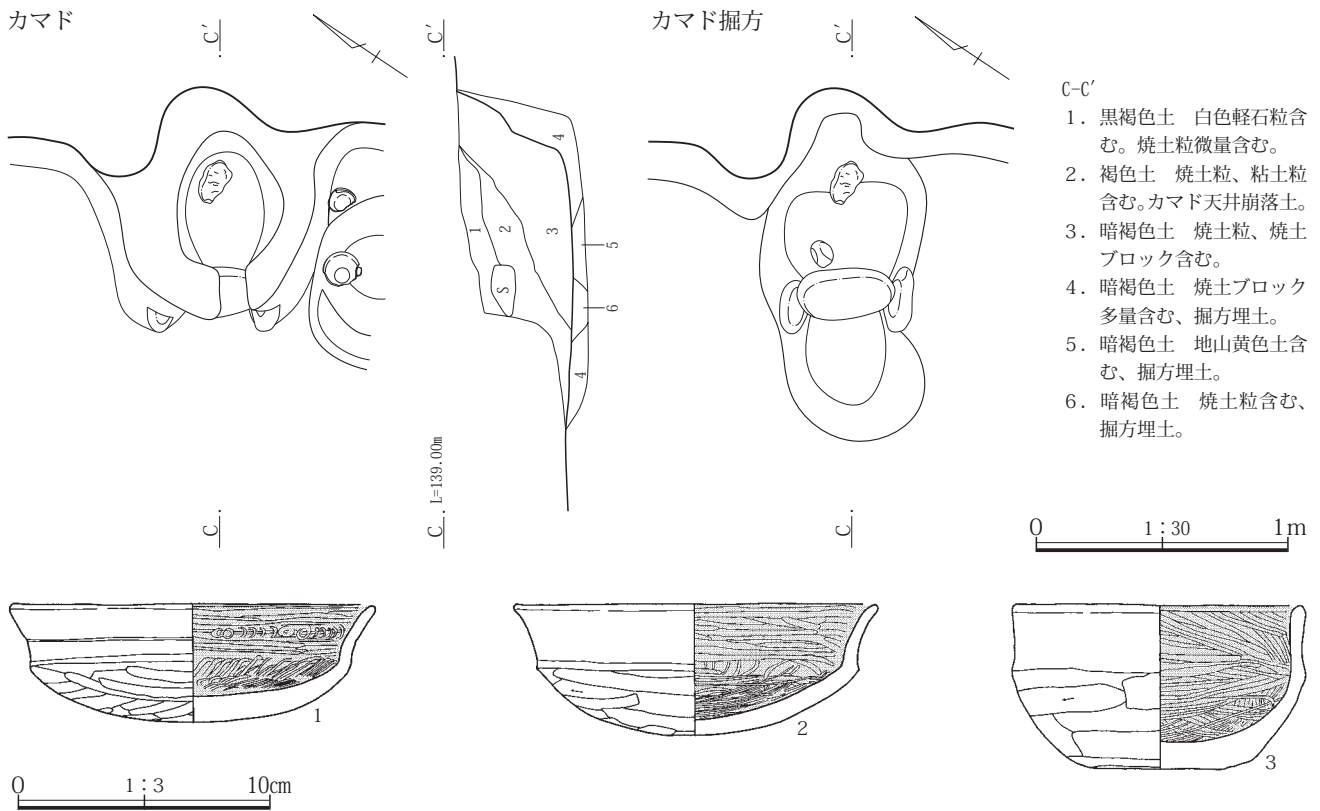


A-A'・B-B'

1. 黒色土 白色軽石粒少量含む、砂質土。
2. 黒褐色土 褐色土ブロック含む、白色軽石粒少量含む。
3. 黒褐色土 基本的には2層と同一。褐色土は小粒となり、2層より明るい。
4. 黒褐色土 2層に類似するが、床面全体に薄く堆積して、灰色がかかる。褐色土ブロック微量含む。
5. 黒色土 白色軽石粒なし。黄色土ブロック含むが、基本は淡黒色土。
6. 黄褐色土 黄色土主体、黒色土ブロック含む。色調も黄色味が強い。

0 1:60 2m

第97図 1区16号竪穴住居遺構図(1)



- C-C'
1. 黒褐色土 白色軽石粒含む。焼土粒微量含む。
  2. 褐色土 焼土粒、粘土粒含む。カマド天井崩落土。
  3. 暗褐色土 焼土粒、焼土ブロック含む。
  4. 暗褐色土 焼土ブロック多量含む、掘方埋土。
  5. 暗褐色土 地山黄色土含む、掘方埋土。
  6. 暗褐色土 焼土粒含む、掘方埋土。

第98図 1区16号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図

1区17号竪穴住居(第99～101図、PL.52・53・159)

**位置** 1区調査区北東部北端、85区O・P-20、95区O・P-2に位置する。本竪穴住居は3分の1ほどが調査区外に存在するため全貌は不明である。

**形状** ほぼ隅丸方形を呈するとみられる。

**規模** 長軸6.00m、短軸5.90mを測る。

**面積** 調査範囲内では22.95㎡を測る。

**方位** N-21°-W

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

**埋没状態** 土層断面ではレンズ状の堆積が観察できていることから自然埋没と想定される。

**床面** 地山暗褐色土を踏み固めている。床面の状態は多少の凹凸がみられるがほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.37～0.49mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は構築されていない。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 調査範囲内では各角寄り、壁から1.0mほどの箇所、竪穴住居平面対角線上とみられる位置から3基を検出した。P 1は、円形を呈し、径0.65m、深さ0.75mを

測る。P 2は、円形を呈し、径0.50m、深さ0.60mを測る。

P 3は、楕円形を呈し、長軸0.60m、短軸0.50m、深さ0.54mを測る。柱穴間の距離は、P 1～P 2間が2.60m、P 2～P 3間が2.70mである。

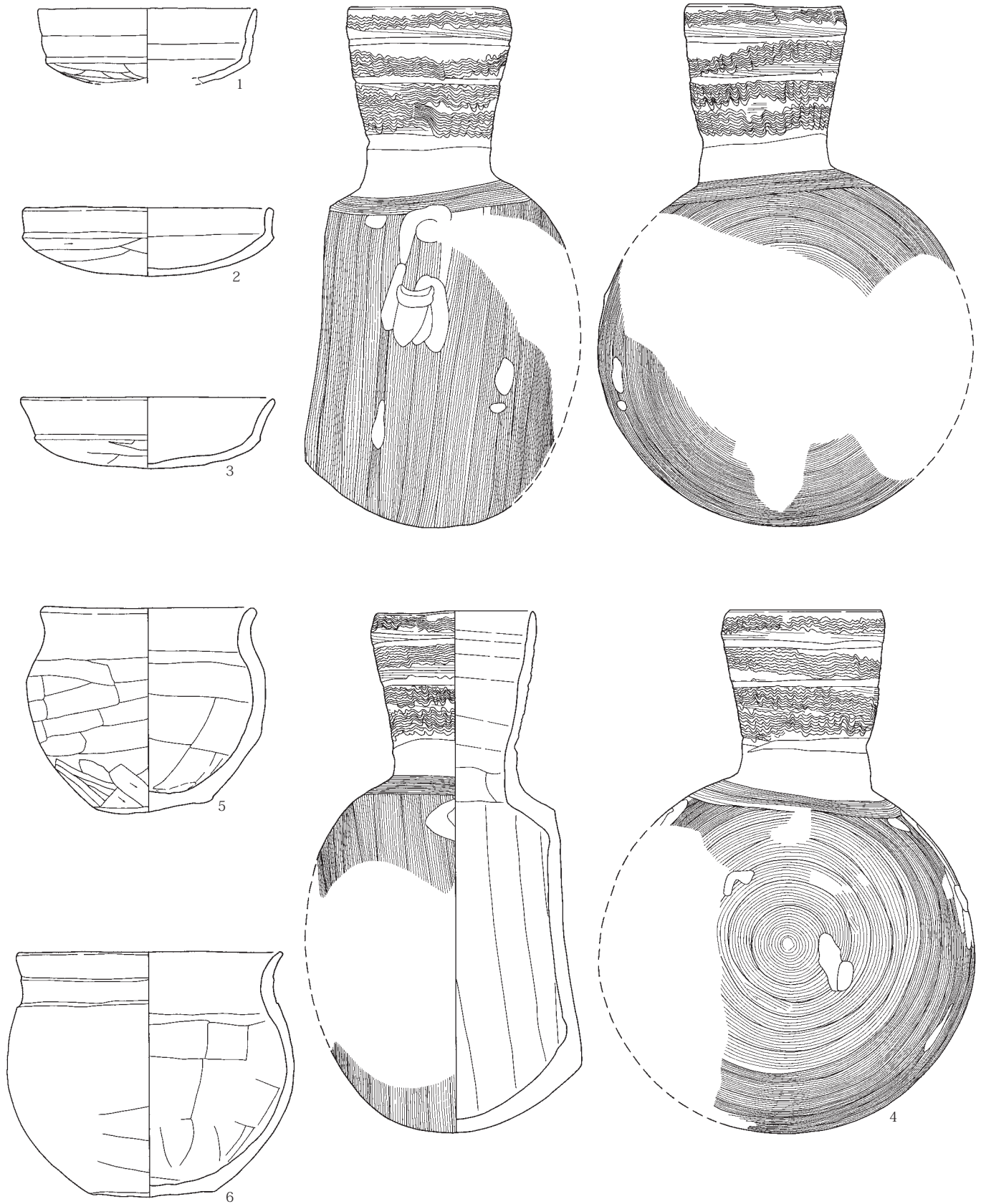
柱痕はP 2、P 3では確認できなかったが、P 1では抜き取られた痕跡が確認されている。

**貯蔵穴** 調査区内では検出されなかった。

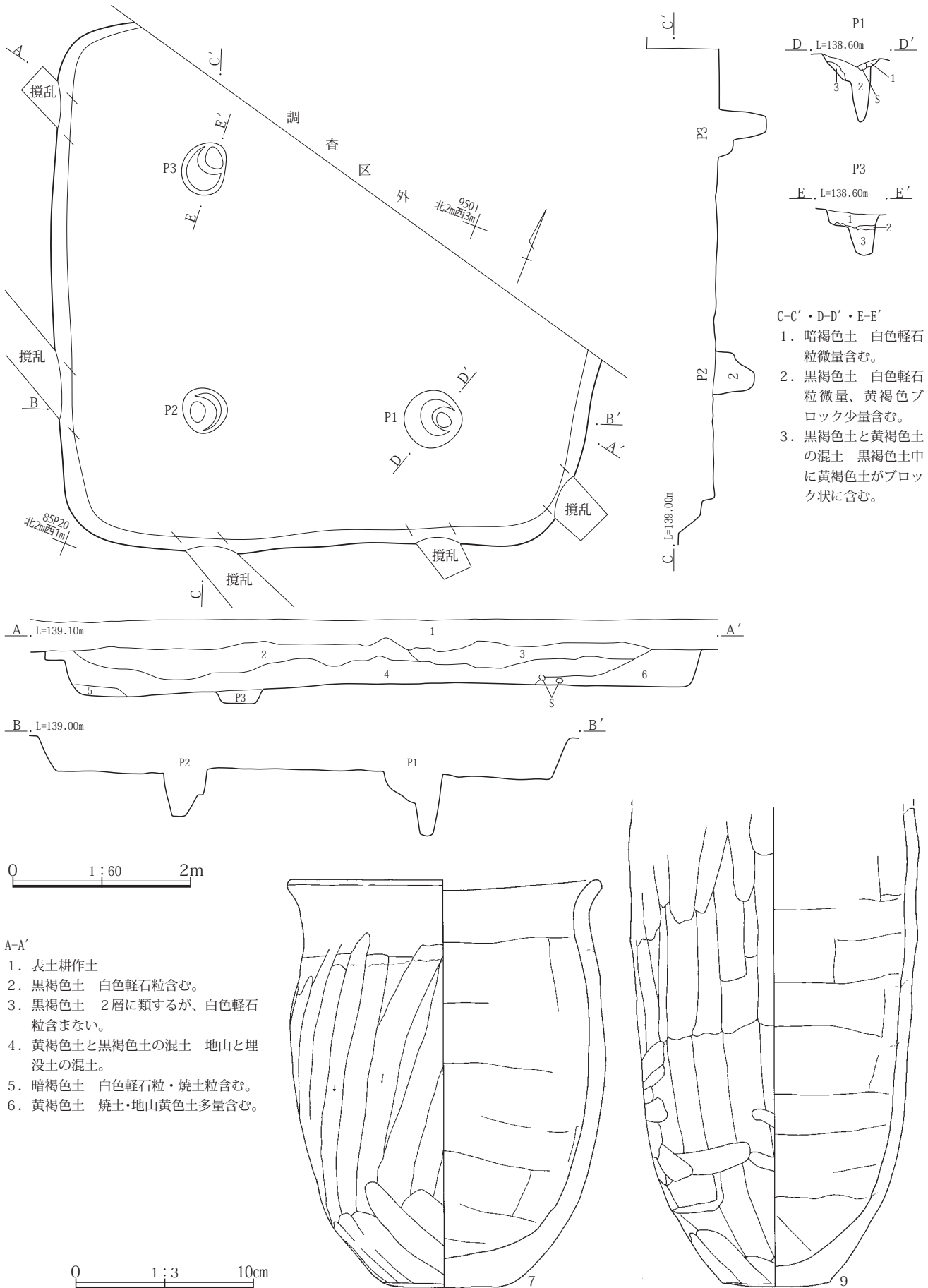
**カマド** 調査区内では検出されなかった。

**出土遺物** P 1周辺に径30～40cmの円礫とともに多くの遺物が出土している。ここからは10の土師器甕が出土しているが、整形や形態から、廃絶後の投棄などの可能性が高い。図示した遺物のうち、2の土師器杯、4の提瓶、6・8・9の土師器甕が床面、5の土師器甕がP 2から出土している。図示した以外の遺物では土師器大型製品片127点・小型製品片53点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は共伴する遺物から7世紀前半に比定できる。



第99図 1区17号竪穴住居出土遺物図(1)



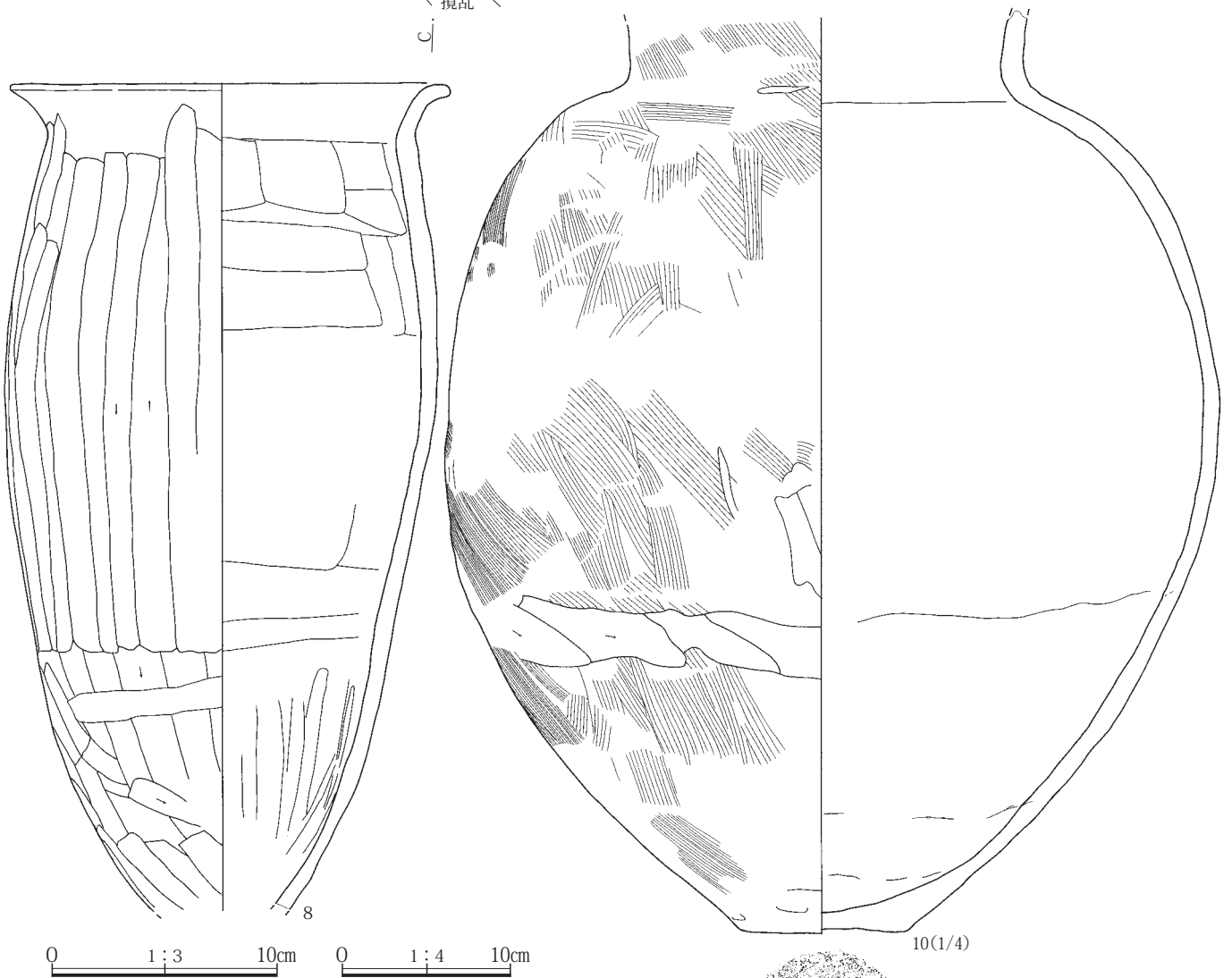
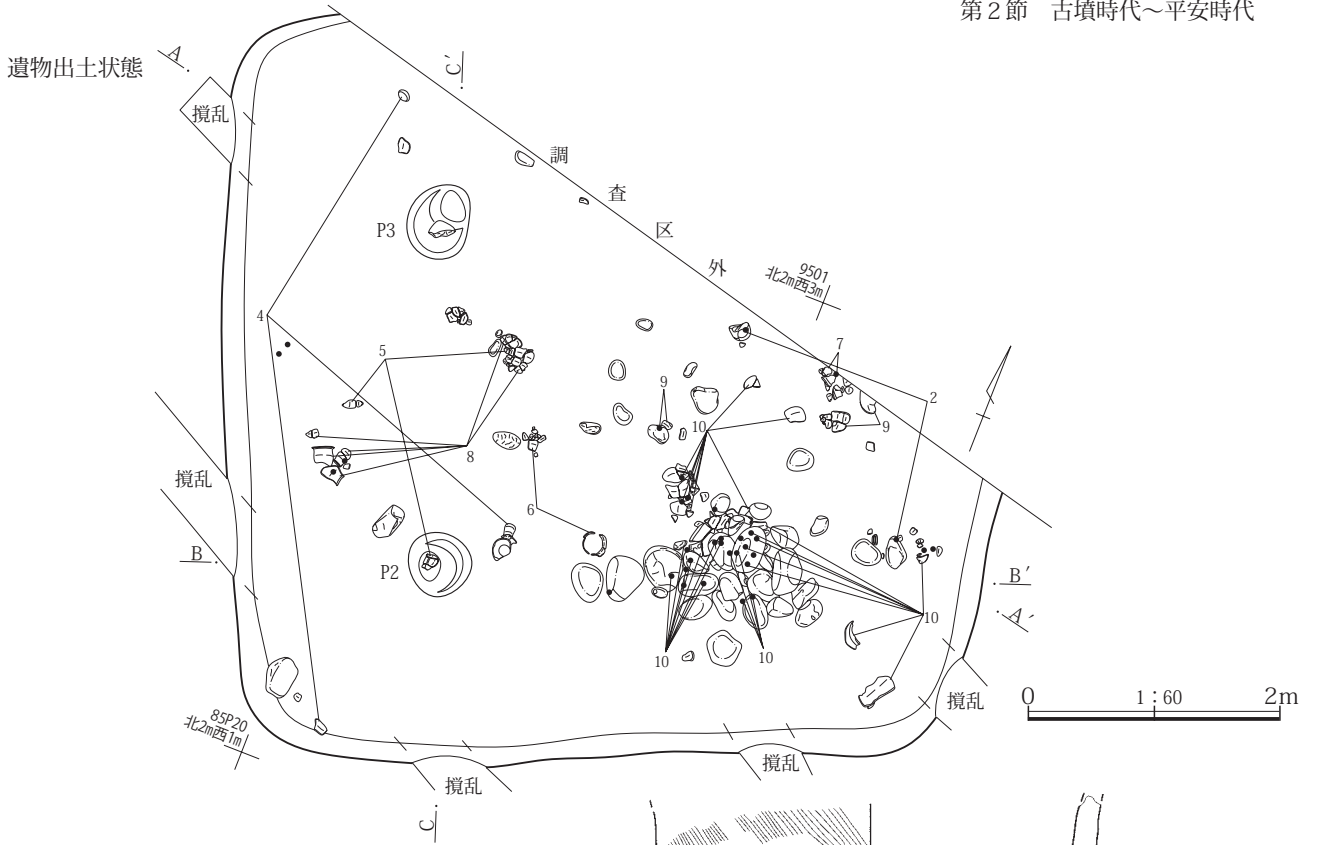
C-C'・D-D'・E-E'

- 1. 暗褐色土 白色軽石粒微量含む。
- 2. 黒褐色土 白色軽石粒微量、黄褐色ブロック少量含む。
- 3. 黒褐色土と黄褐色土の混土 黒褐色土中に黄褐色土がブロック状に含む。

A-A'

- 1. 表土耕作土
- 2. 黒褐色土 白色軽石粒含む。
- 3. 黒褐色土 2層に類するが、白色軽石粒含まない。
- 4. 黄褐色土と黒褐色土の混土 地山と埋没土の混土。
- 5. 暗褐色土 白色軽石粒・焼土粒含む。
- 6. 黄褐色土 焼土・地山黄色土多量含む。

第100図 1区17号竪穴住居遺構図(1)・出土遺物図(2)



第101図 1区17号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(3)

1区18号竪穴住居(第102～104図、PL.53・54・160)

位置 1区調査区北東隅、85区N-17・18～O-17・18に位置する。

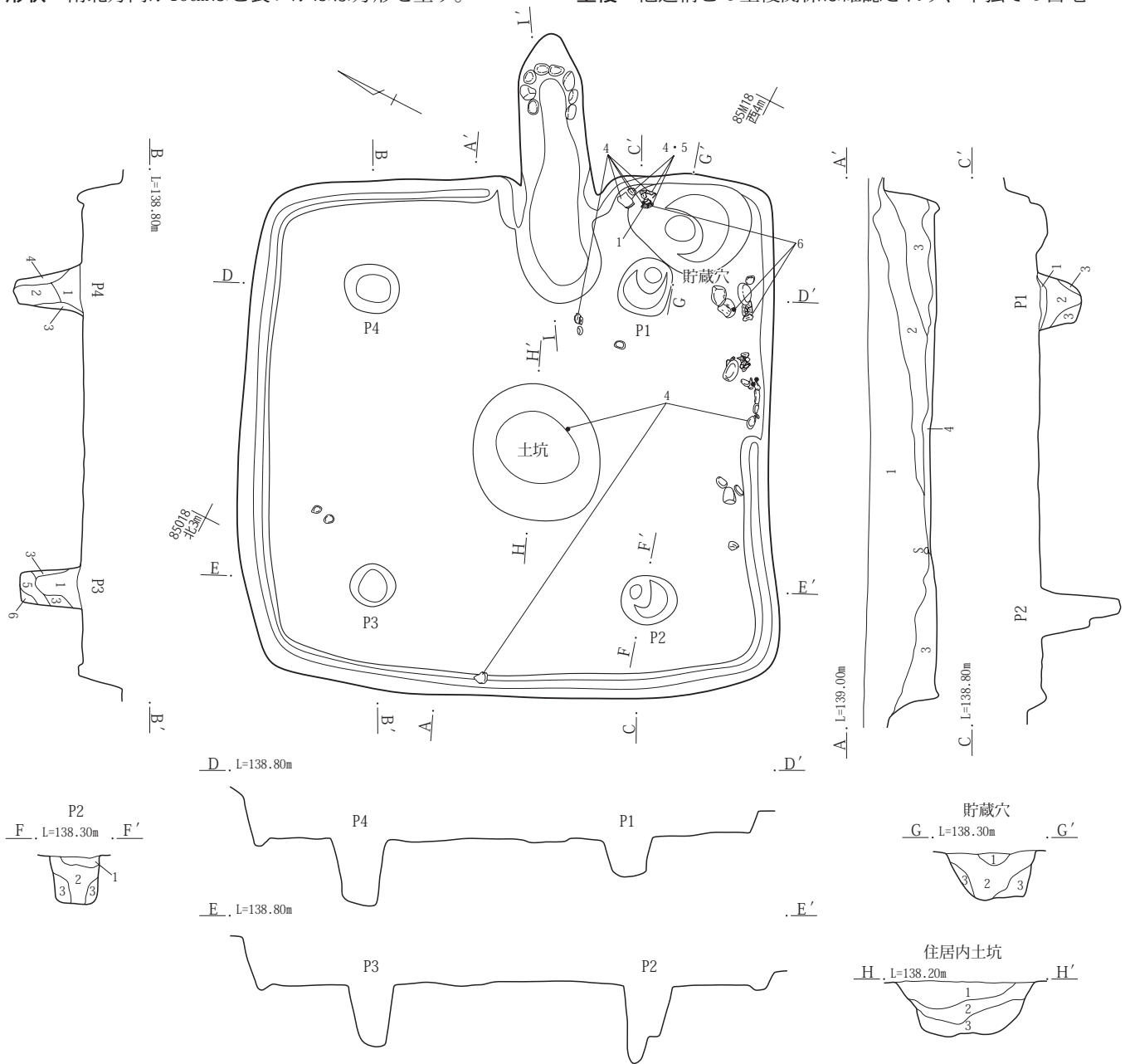
形状 南北方向が10cmほど長いがほぼ方形を呈す。

規模 長軸5.10m、短軸5.00mを測る。

面積 20.13㎡

方位 N-63°-E

重複 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地



A-A'

1. 黒褐色土 白色軽石粒多量含む。
2. 暗褐色土 白色軽石粒・焼土粒含む。1層に比べ色調明るい。
3. 褐色土 白色軽石粒・焼土粒微量含む。
4. 黄褐色土 焼土粒含む。

B-B'・F-F'

1. 暗褐色土 白色軽石粒微量含む。縮まりややあり。
2. 暗褐色土 白色軽石粒微量含む。粘性あり。
3. 黒褐色土 白色軽石粒含まず、縮まりややあり、ざらつきややあり。
4. 暗褐色土 黄褐色ブロック含む、粘性強し。
5. 暗褐色土 黄褐色ブロック含む、粘性強し。色調やや明るい。
6. 黄褐色土 縮まりあり、粘性強い。

C-C'

1. 黒褐色土 赤褐色粒少量、黄褐色粒微量含む。
2. 黒褐色土 赤褐色粒1層より多量含む。赤褐色土ブロック状に堆積している。
3. 黒褐色土 赤褐色粒微量含む。

G-G'・H-H'

1. 暗褐色土 白色軽石粒、赤褐色粒微量含む。ややざらつきあり。
2. 暗褐色土 赤褐色粒少量、炭化物微量含む。縮まりややあり。1層と比べ色調明るい。
3. 暗褐色土 粘性強し、縮まりややあり。黄褐色ブロック含む。

0 1:60 2m

第102図 1区18号竪穴住居遺構図(1)

である。

**埋没状態** 土層断面では周囲から土砂が流入して堆積した状態が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めている。床面の状態は若干の凹凸はみられるがほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.21～0.63mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は構築されていないが、中央部分に土坑が検出された。この土坑は床下土坑の可能性が高い。形状は楕円形状を呈し、規模は長軸1.38m、短軸1.20m、深さ0.49mを測る。内部から遺物等の出土はみられなかった。

**壁溝** 南壁の東半及びカマドの南側を除いて検出した。規模は、上端0.20～0.30m、下端0.05～0.08m、深さ0.02～0.08mを測る。

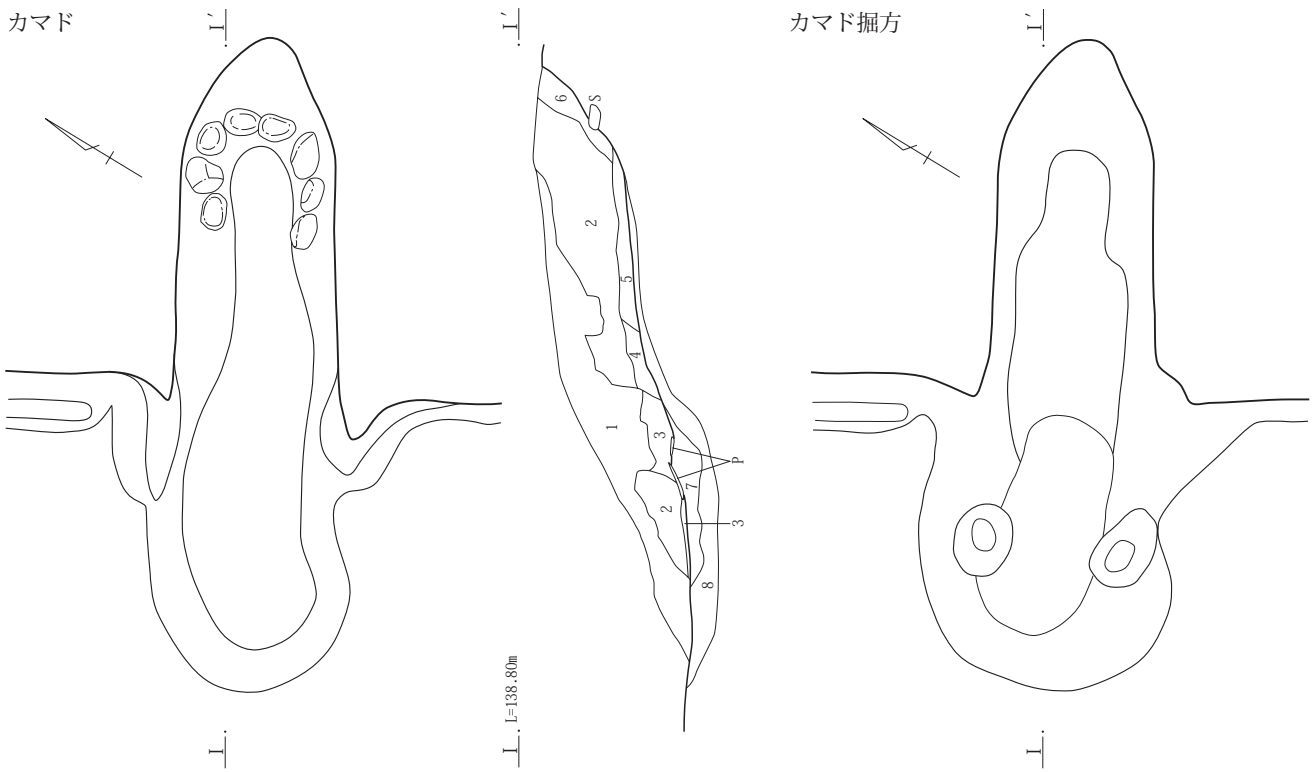
**柱穴** 各隅より、壁から1.0～1.2mほど内側、竪穴住居の対角線上に近い位置から4本を検出した。P 1は、楕円形を呈し、長軸0.58m、短軸0.48m、深さ0.56mを測る。P 2は、楕円形を呈し、長軸0.54m、短軸0.48m、

深さ0.76mを測る。P 3は、楕円形を呈し、長軸0.42m、短軸0.40m、深さ0.59mを測る。P 4は、楕円形を呈し、長軸0.54m、短軸0.46m、深さ0.66mを測る。柱穴間の距離は、P 1～P 2間が2.95m、P 2～P 3間が2.62m、P 3～P 4間が2.85m、P 4～P 1間が2.60mである。

柱痕については柱穴土層断面の2にあたる部分が相当するとみられるが、断定には至っていない。また、土層断面の状態からはP 1・P 2では柱を抜き取ったとみられる。

**貯蔵穴** 南東部隅にて検出した。形状は、楕円形を呈し、規模は長軸1.18m、短軸0.90m、深さ0.57mを測る。内部からは4～6の土師器甕が出土している。

**カマド** 東壁中央部分に構築されていた。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井や燃焼部側壁の焚口側の大部分が壊されていた。規模は全長2.60m、全幅1.15m、煙道部長1.54m、煙道部幅0.44m、焚口部幅0.52m、燃焼部幅0.60mを測る。燃焼部は焚口よりやや掘り下げられ、煙道部に続く。煙出し部分には、礫を配置して煙突



I-I'

1. 黒褐色土 白色軽石粒・焼土粒少量含む。やや赤褐色を呈する。
2. 黄褐色土 焼土含む。一部被熱し赤褐色化する、カマド天井崩落土。
3. 暗褐色土 焼土粒多量含む。
4. 赤褐色土と灰色土の混土 焼土と灰の混土層、炭化物含む。
5. 暗褐色土 焼土粒含む。灰がブロック状に堆積する。

6. 黒褐色土 焼土粒少量含む。
7. 黒褐色土 カマド掘方埋土、焼土含む。
8. 暗褐色土 カマド掘方埋土、7層に比べ色調明るい。

0 1:30 1m

第103図 1区18号竪穴住居遺構図(2)

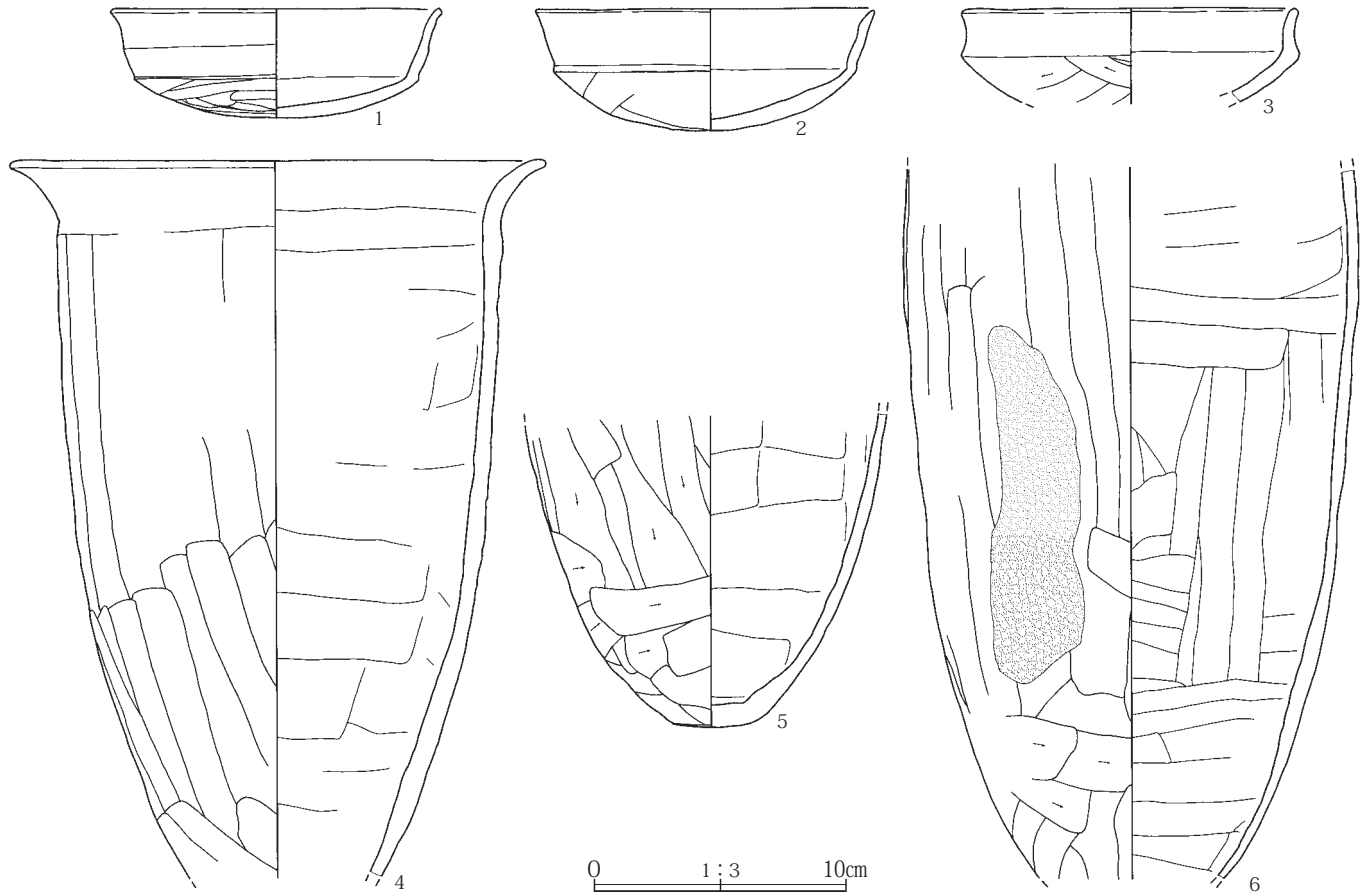
状の施設を構築していたと想定される。礫は長軸0.14～0.20m、短軸0.08～0.12mのU字状に8個が配列されていた。

掘方では、側壁に構築材として使用した礫を据え付けたとみられる小穴が検出されている。

**出土遺物** 図示した遺物のうち1の土師器杯がカマド、

4～6は貯蔵穴出土であるが貯蔵穴周囲の床面からも破片が出土している。図示した以外の遺物では土師器大型製品片70点・小型製品片53点、須恵器小型製品片1点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期はカマドや貯蔵穴などから出土した遺物から7世紀前半に比定できる。



第104図 1区18号竪穴住居出土遺物図

**1区19号竪穴住居**(第105・106図、PL.55・160)

**位置** 1区調査区85区S・T-20、95区S・T-1に位置する。

**重複** 一部に攪乱がみられるが、他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

**形状** 南辺4.2m、東辺3.3m、北辺4.3m、西辺3.0mと各辺にやや差がみられるが、東西に長い台形状を呈す。

**規模** 長軸4.30m、短軸3.24mを測る。

**面積** 11.02㎡

**方位** N-82°-E

**埋没状態** 土層断面では壁際にロームの崩落土とみられる黄褐色土が三角堆積した後、As-C粒を含む黒褐色土・

暗褐色土が水平に近い状態で堆積しているのが観察できることから、自然埋没と想定される。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めている。床面の状態は若干の凹凸はみられるがほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.37～0.56mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は構築されていなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 南東部隅にて検出した。形状は、楕円形を呈し、規模は長軸0.46m、短軸0.38m、深さ0.27mを測る。内部からの出土遺物などはみられなかった。

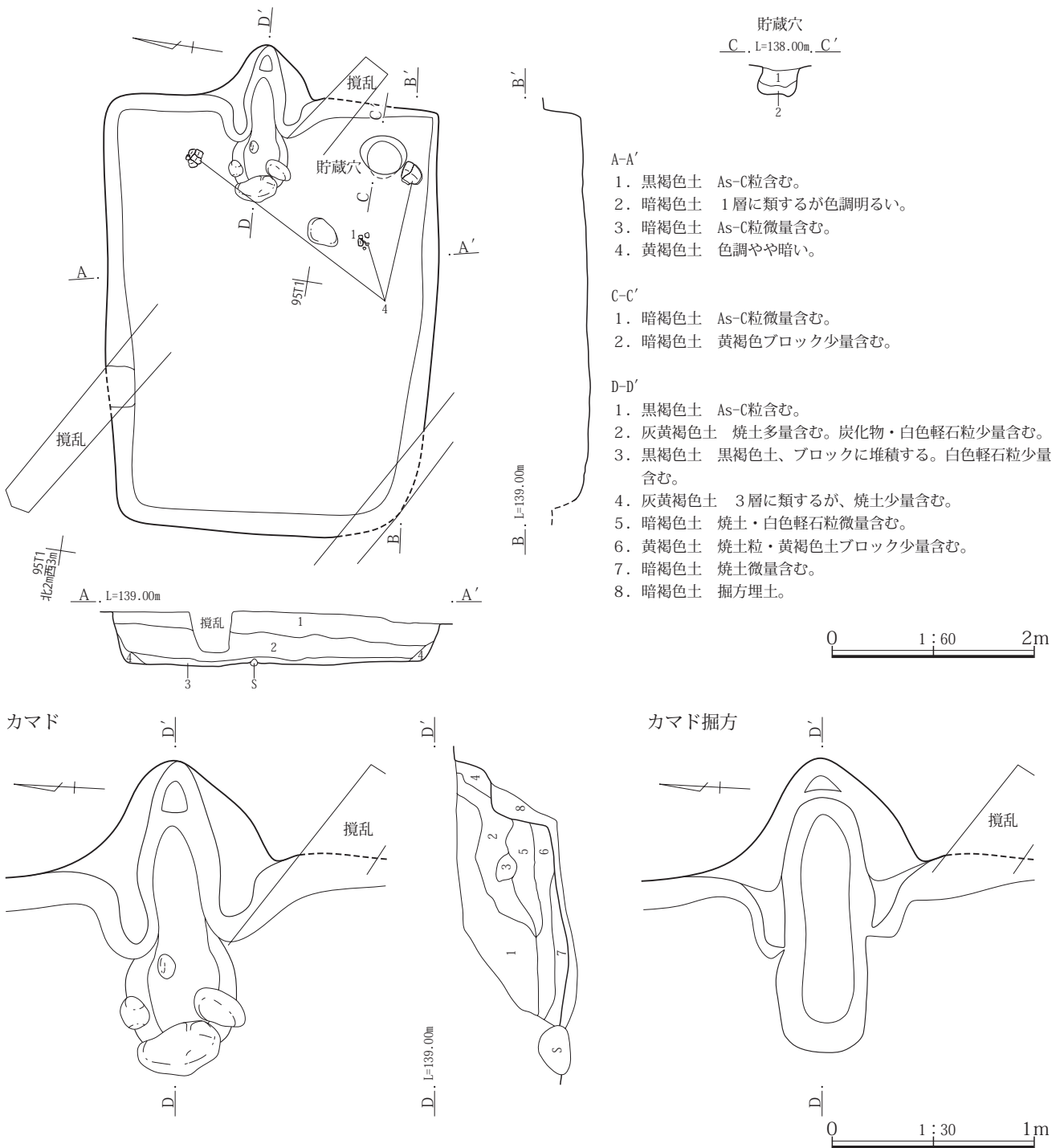


**カマド** 東壁中央部分に構築されていた。残存状態は焚口・燃烧部から煙道部の天井や燃烧部の焚口側側壁は壊されていた。なお、焚口付近から出土した円礫は焚口側壁や天井の構築材に使用されていたものとみられる。規模は、全長1.40m、全幅1.00m、焚口部幅0.44m、燃烧部幅0.41mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪められており、煙道部はほぼ平坦に壁外にのび奥壁は100度ほどのやや急な角度で立ち上がっていた。

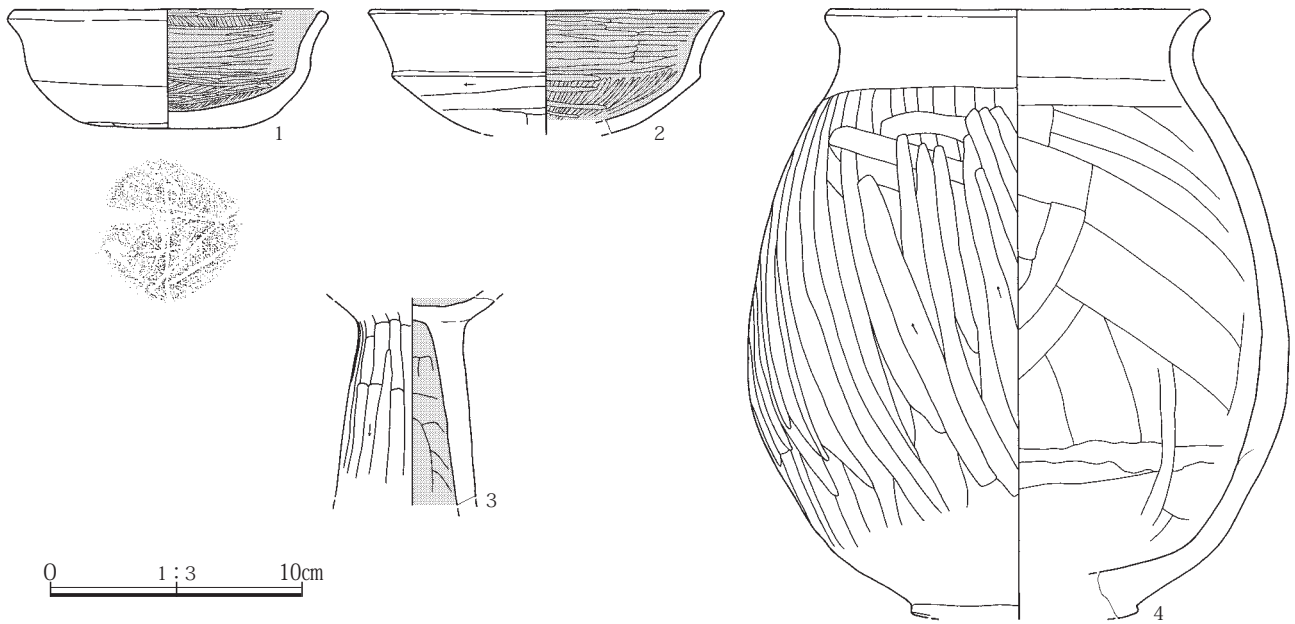
掘方は、燃烧部から煙道部にかけて1.5×0.5mの長円形状に5cmほど掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示した遺物のうち1の土師器杯と4の土師器甕が床面から出土している。図示した以外の遺物では土師器大型製品片27点・小型製品片13点、須恵器大型製品片1点・小型製品片2点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は床面から出土した遺物から6世紀後半に比定できる。



第105図 1区19号竪穴住居遺構図



第106図 1区19号竪穴住居出土遺物図

**1区20号竪穴住居**(第107・108図、PL.55・56・160・161)

**位置** 1区調査区北東部北側調査区境、85区Q・R-20、95区Q・R-1に位置する。本竪穴住居周囲には農耕による攪乱が深い箇所まで及んでいる場所が多く、本竪穴住居でも北辺から西辺の壁の大部分を攪乱で欠落している。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

**形状** 不明な部分もあるが、南北にやや長い長方形を呈す。

**規模** 長軸3.38m、短軸3.12mを測る。

**面積** 8.56㎡

**方位** N-92°-E

**埋没状態** 土層断面では壁際に三角堆積した後、中ほどにレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めている。床面の状態は若干の凹凸がみられるがほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.59~0.69mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は構築されていなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

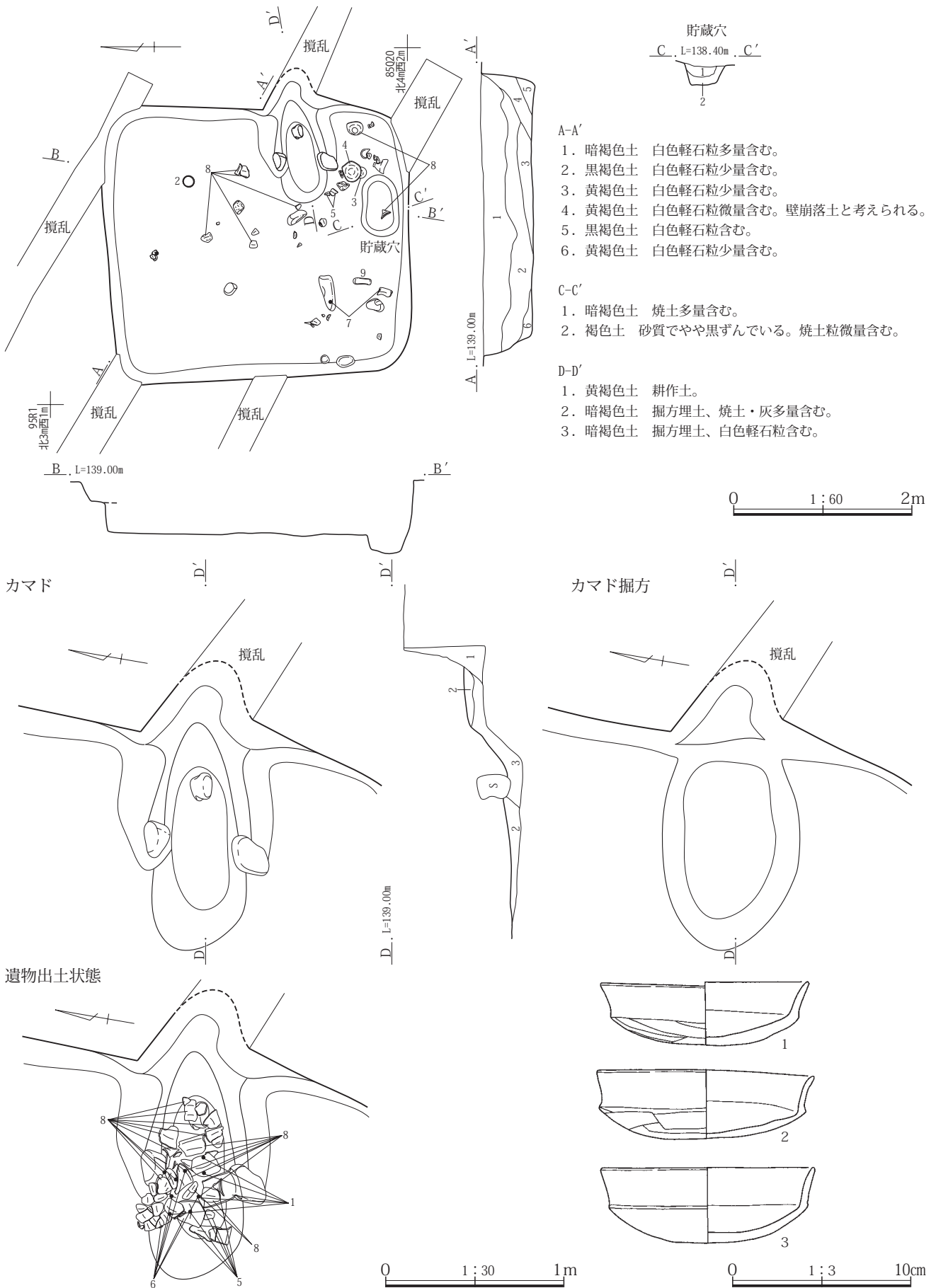
**貯蔵穴** 南辺中ほどの壁際にて検出した。位置関係から疑問は残るが、形状や規模から貯蔵穴と判断した。形状

は楕円形状を呈し、規模は長軸0.70m、短軸0.40m、深さ0.19mを測る。貯蔵穴上位から8の土師器甕の一部が出土している。

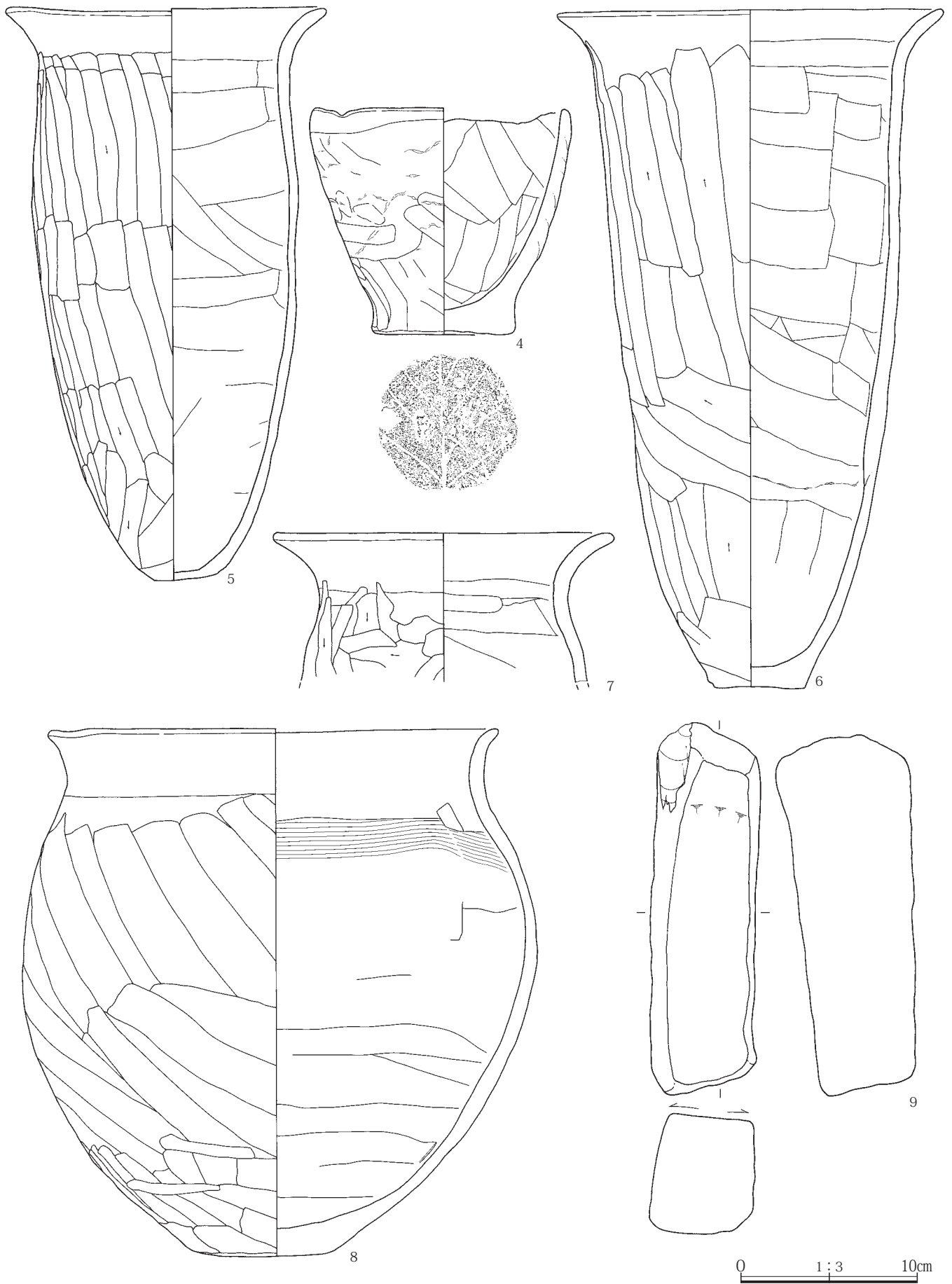
**カマド** 東辺の中央やや南寄り部分に構築されていた。煙道先端部の上面は攪乱により欠落してしていた。確認時は燃烧部に大量の角礫が検出されたことから、構築材に利用された礫が残されていたと想定されたが、調査を進めたところ礫は住居廃絶後にカマド部分に廃棄されたものとみられた。残存状態は上部がわずかに残存する程度で上半のほとんどは欠落した状態であった。そうした中でも焚口両側に据え付けられた礫と燃烧部底面中央に据え付けられ支脚として使用されたとみられる礫が残存していた。規模は攪乱で欠落した部分までの全長が1.54m、全幅0.80m、焚口部幅0.42m、燃烧部幅0.38mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪められておおり、煙道部奥壁は120度ほどの角度をつけて立ち上がる。

**出土遺物** 図示した遺物のうち、1・5・6・8の土師器杯・甕はカマド廃棄礫中、3の土師器杯、4の土師器鉢、7の土師器甕は床面からの出土である。なお、4の土師器鉢は甕の製作途中に転用したものである。図示した以外の遺物では土師器大型製品片52点・小型製品片31点、須恵器大型製品片1点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は床面から出土した遺物から7世紀前半に比定できる。



第107図 1区20号竪穴住居遺構図・出土遺物図(1)



第108図 1区20号竪穴住居出土遺物図(2)

1区21号竪穴住居(第109図、PL.56)

本竪穴住居は確認時に形状や規模からやや規模の大きな土坑とも判断されたが、全掘後底面の状態や1区22号竪穴住居や2区47号竪穴住居のような小規模な竪穴住居が遺跡内から検出されていることなどの点により竪穴住居と判断した。

**位置** 1区調査区北東部北側調査区境、95区R-1に位置する。本竪穴住居周囲には農耕による攪乱が深い箇所まで及んでいる場所が多く、本竪穴住居でも北西角、南東角、南西角付近を攪乱により欠落している。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

**形状** 北辺2.3m、東辺1.7m、南辺3.0m弱、西辺2.0mと辺長に差がみられ、南辺は弧状の張りを有す四角形を呈す。

**規模** 長軸2.70m、短軸2.22mを測る。

**面積** 攪乱によって不確定ではあるが4.75㎡を測る。

**方位** N-83°-E

**埋没状態** 土層断面では壁下際に壁のローム崩落土とみられる黄褐色土が三角堆積した後、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めている。床面の状態はやや中央部が盛り上がり、若干の凹凸がみられるがほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.28~0.32mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は構築されていなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

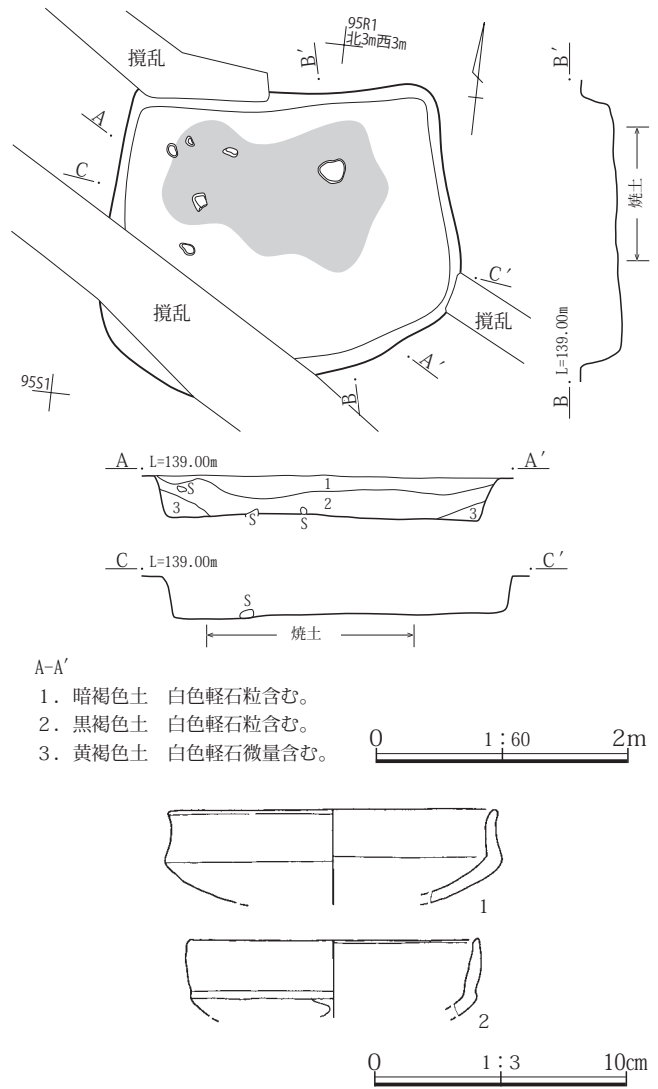
**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**カマド** 検出されなかった。

**出土遺物** 図示した2点の土師器杯は埋没土中からの出土で本竪穴住居に共伴するとは断定できない。図示した遺物以外にも土師器大型製品片16点・小型製品片6点が出土しているが、床面からの出土はみられなかった。なお、挿図中に示した遺物は礫である。

**所見** 本竪穴住居の時期は共伴する遺物が確認できないため明確ではないが、埋没土中の遺物が6世紀後半代であることから、それ以前に比定したい。



第109図 1区21号竪穴住居遺構図・出土遺物図

1区22号竪穴住居(第110・111図、PL.56・161)

**位置** 1区調査区中ほどよりやや西寄り、86区F-16・17、G-16・17に位置する。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

**形状** 南北方向に長い長方形を呈す。

**規模** 長軸2.40m、短軸1.90mを測る。

**面積** 3.22㎡

**方位** N-93°-W

**埋没状態** 土層断面では壁際で褐色砂質土の流れ込みによる三角堆積が行われた後、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 地山をそのまま踏み固めている。床面の状態は若干の凹凸がみられるがほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.40~0.57m前後を測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は構築されていなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

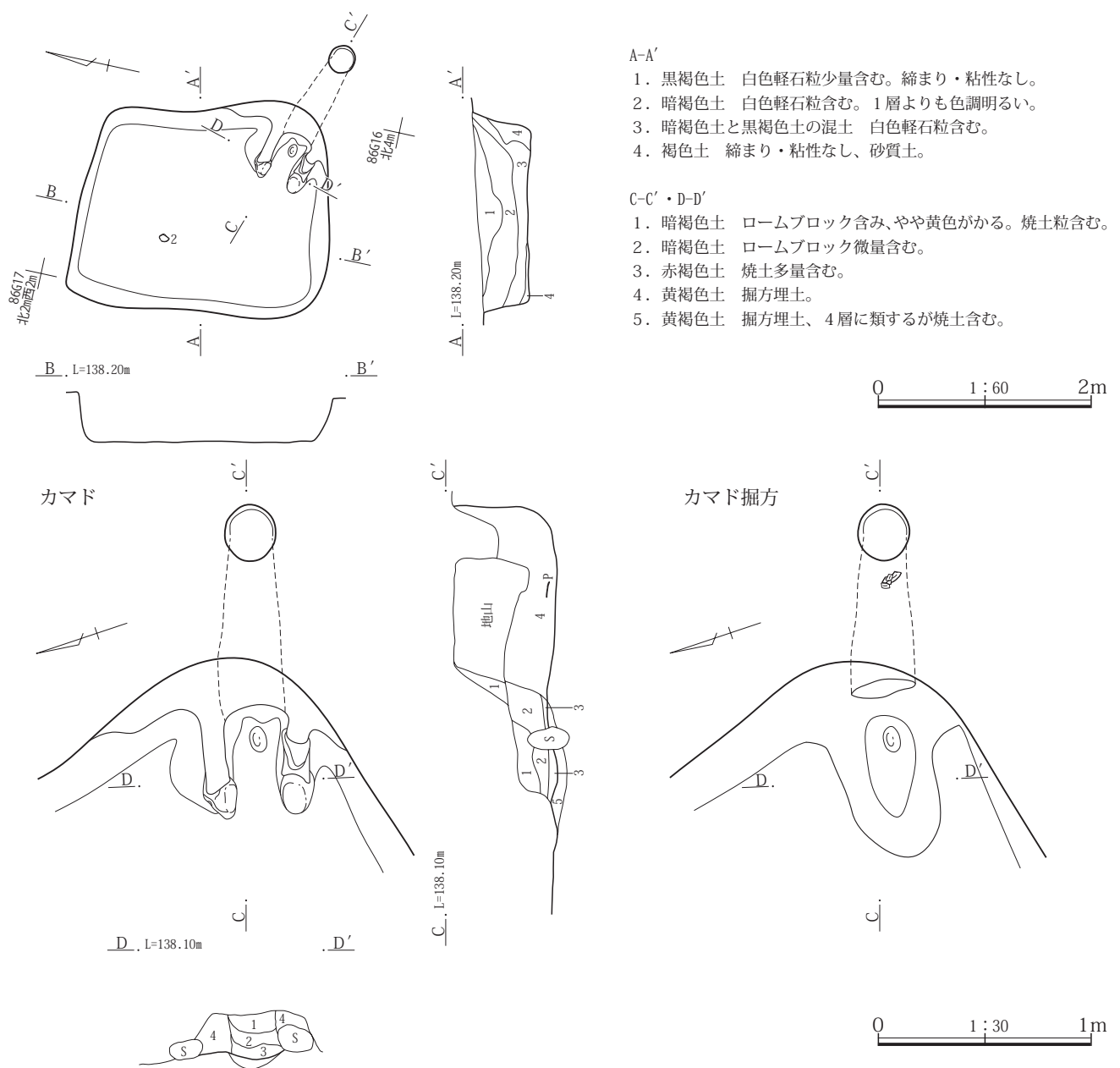
**カマド** 東壁南東角に構築されていた。残存状態は焚口と燃烧部天井部は壊されているが、燃烧部側壁や地山を掘り抜いた煙道部は残存していた。規模は全長2.40m、全幅0.70m、煙道部長1.09m、煙道部幅0.58m、焚口部幅0.44m、燃烧部幅0.30mを測る。焚口の両側には礫が

据え付けられ、燃烧部側壁には、粘土を構築材として使用していた。

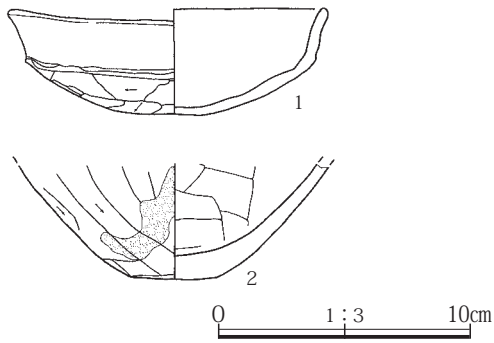
掘方は、燃烧部下に0.8×0.45mほどの長円形に5cmほど掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示した遺物はともに埋没土、床面より12cm上位と確実に共伴するとは断定できない位置からの出土であった。図示した以外の遺物では土師器大型製品片23点・小型製品片3点が出土しているが、これらもほとんどが埋没中であつた。

**所見** 本竪穴住居の時期は出土遺物から判断することは難しいが、おおむね6世紀末から7世紀初頭に比定できる。



第110図 1区22号竪穴住居遺構図



第111図 1区22号竪穴住居出土遺物図

1区23号竪穴住居(第112～114図、PL.57・58・161)

**位置** 1区調査区北東部、85区R-18・19、S-18・19に位置する。

**重複** 1区24号竪穴住居と北辺の一部でわずかに重複する。新旧関係は土層断面から本竪穴住居の方が古い。

**形状** 東西方向にやや長い長方形を呈す。

**規模** 長軸3.64m、短軸3.35mを測る。

**面積** 8.52㎡

**方位** N-82°-E

**埋没状態** 土層断面では壁際に三角堆積した後、中ほどにレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めている。床面の状態は若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.44～0.61mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は構築されていなかった。

**壁溝** 東辺のカマド以南から南辺の東南角から1.0m、北西隅の両辺1.0mほどを除く各辺壁際で検出した。規模は上端0.15～0.20m、下端0.03～0.09m、深さ0.04～0.05mを測る。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 南東部隅にて検出した。形状は、円形状を呈し、規模は径0.60m、深さ0.61mを測る。貯蔵穴内部から遺物の出土はみられなかったが、際から礫や2の土師器短頸壺が出土している。

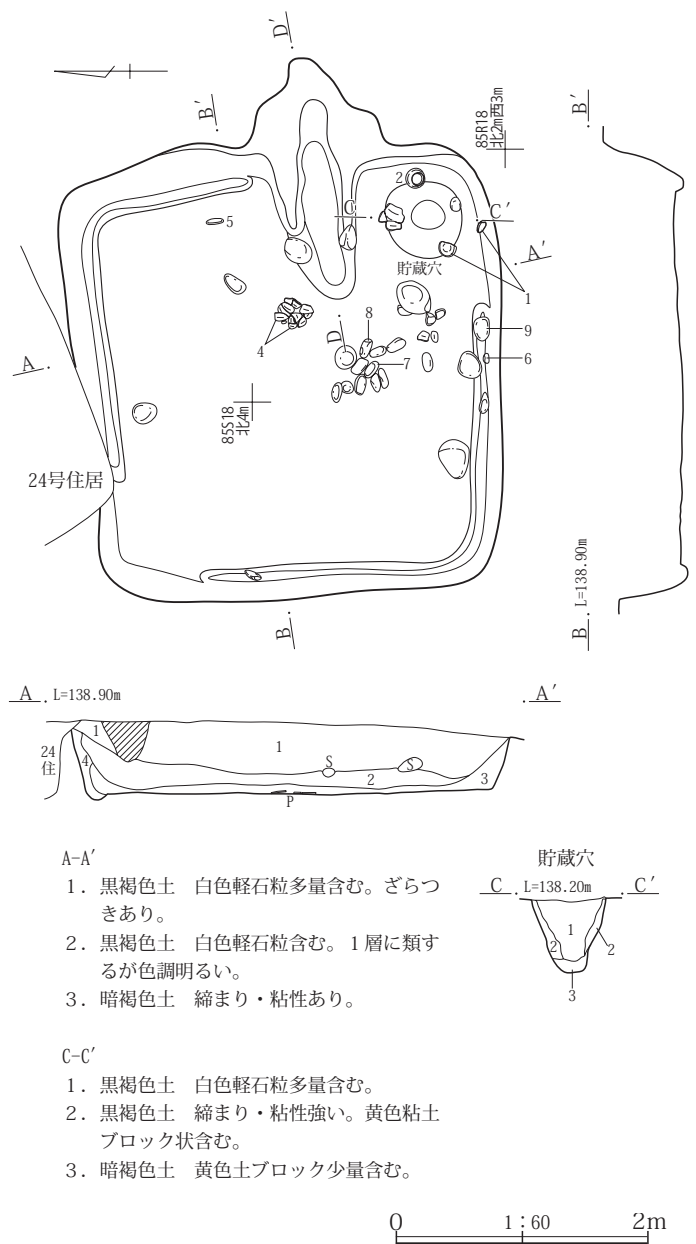
**カマド** 東壁中央やや南寄り部分に構築されていた。残存状態は焚口から煙道部にかけての天井は壊されていたが、焚口両側に据え付けられた礫と燃烧部側壁は残存していた。規模は全長1.94m、全幅0.70m、煙道部長0.78m、煙道部幅0.29m、焚口部幅0.22m、燃烧部幅0.38m

を測る。燃烧部は焚口よりやや窪められており、煙道部は平坦に壁外にのび、奥壁は130度ほどの角度で立ちあがっていた。

掘方は、燃烧部下に1.5×0.5mほどの楕円形に5cmほど掘り込まれていた。

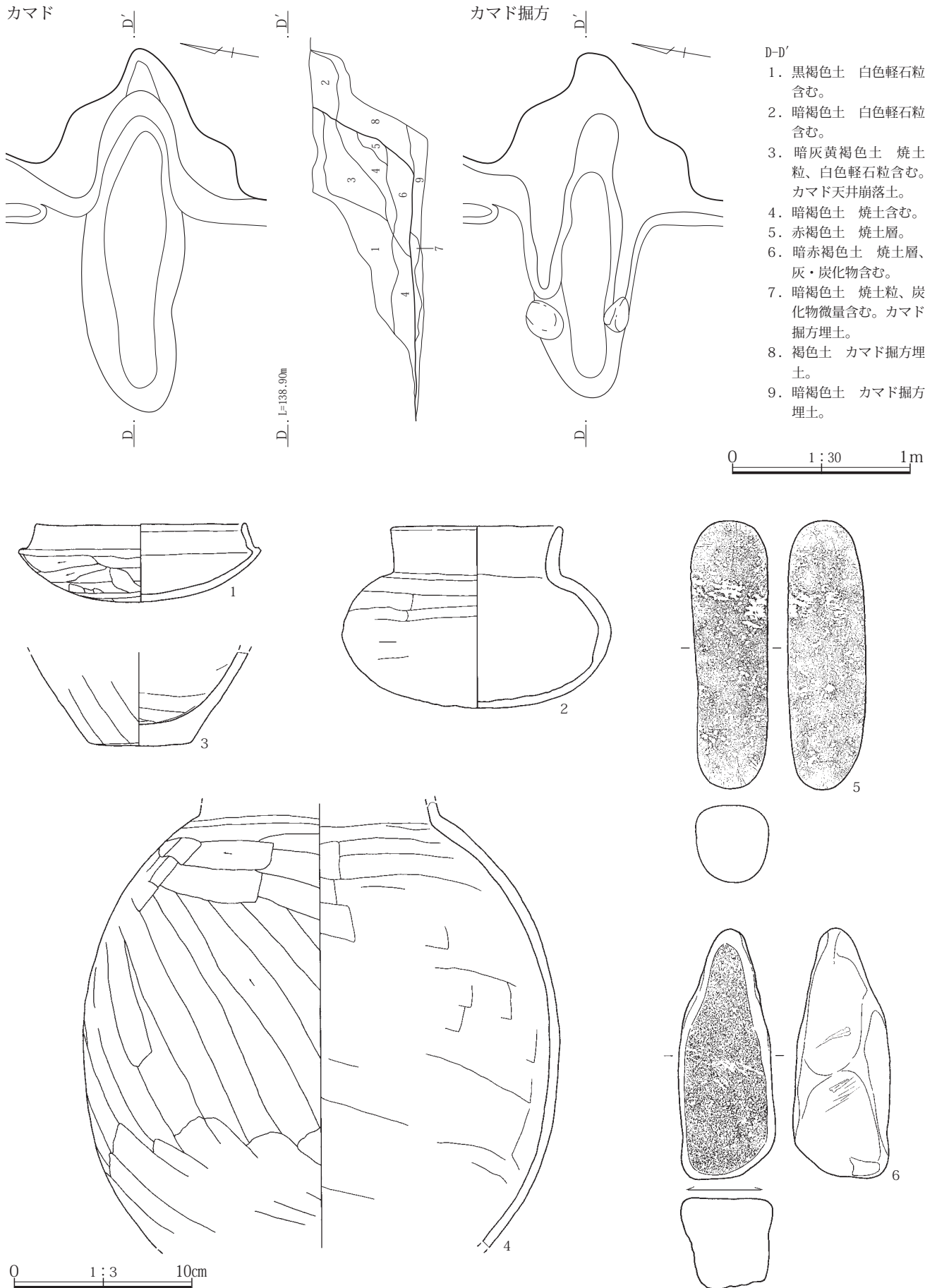
**出土遺物** 図示できた遺物は少なく、土器では2の土師器短頸壺と4の土師器甕が床面、石製品では5の棒状礫、7・8の磨石が床面から出土している。図示した以外の遺物では土師器大型製品片45点・小型製品片10点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は床面から出土した遺物から6世紀後半代に比定できる。



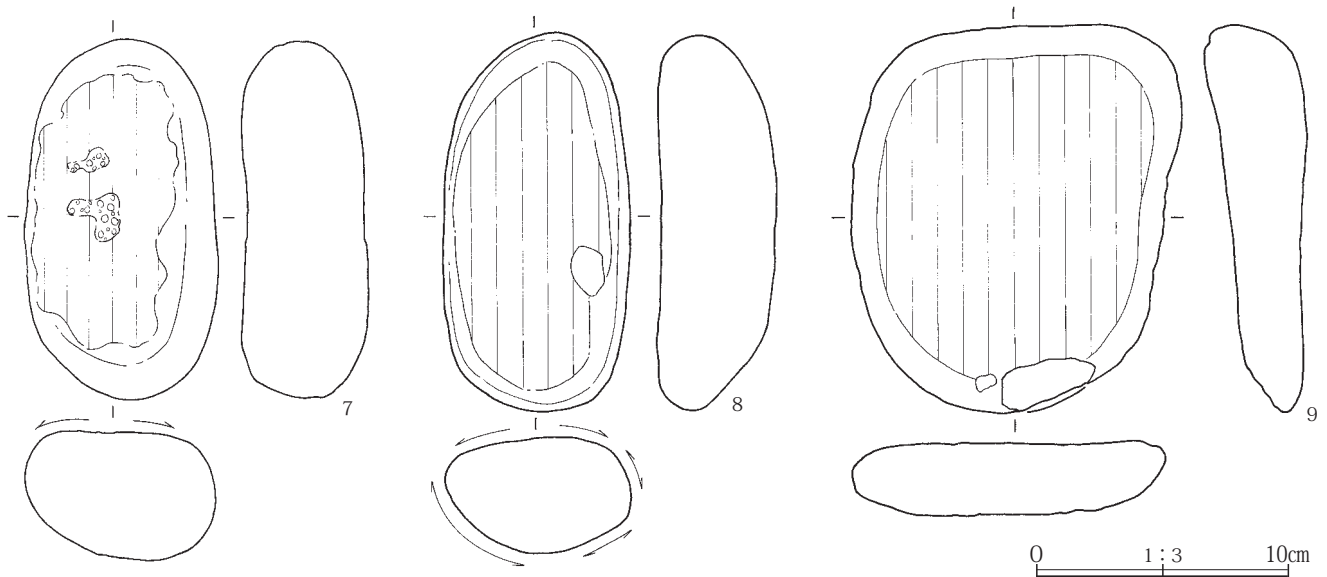
- A-A'
1. 黒褐色土 白色軽石粒多量含む。ざらつきあり。
  2. 黒褐色土 白色軽石粒含む。1層に類するが色調明るい。
  3. 暗褐色土 締まり・粘性あり。
- C-C'
1. 黒褐色土 白色軽石粒多量含む。
  2. 黒褐色土 締まり・粘性強い。黄色粘土ブロック状含む。
  3. 暗褐色土 黄色土ブロック少量含む。

第112図 1区23号竪穴住居遺構図(1)



第113図 1区23号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(1)





第114図 1区23号竪穴住居出土遺物図(2)

**1区24号竪穴住居(第115～117図、PL.58・161・162)**

**位置** 1区調査区北東部、85区R・S-19に位置する。  
**重複** 南辺の南西角で1区23号竪穴住居と重複する。新旧関係は土層断面から本竪穴住居の方が新しい。

**形状** 東西方向にやや長い長方形を呈す。

**規模** 長軸3.56m、短軸3.18mを測る。

**面積** 8.82㎡

**方位** N-63°-E

**埋没状態** 土層断面では北側から流れ込んだ様子が観察できるレンズ状堆積が示めされていることから、自然埋没と想定される。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めている。床面の状態は若干の凹凸がみられるがほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.51～0.65mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は構築されていなかった。

**壁溝** 東辺の北東角寄りの0.50m、南辺の西半から西辺の南側3分の1と一部と北辺壁下で検出した。規模は、上端0.18～0.20m、下端0.05～0.09m、深さ0.04～0.09mを測る。

**柱穴** 貯蔵穴の南側でP1を検出した。形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.45m、短軸0.40m、深さ0.20mを計る。

**貯蔵穴** 南東部隅にて検出した。形状は、楕円形状を呈し、規模は長軸0.44m、短軸0.30m、深さ0.18mを測る。内部から遺物などの出土はみられなかったが、東側と上部にかけて多くの土器が出土している。

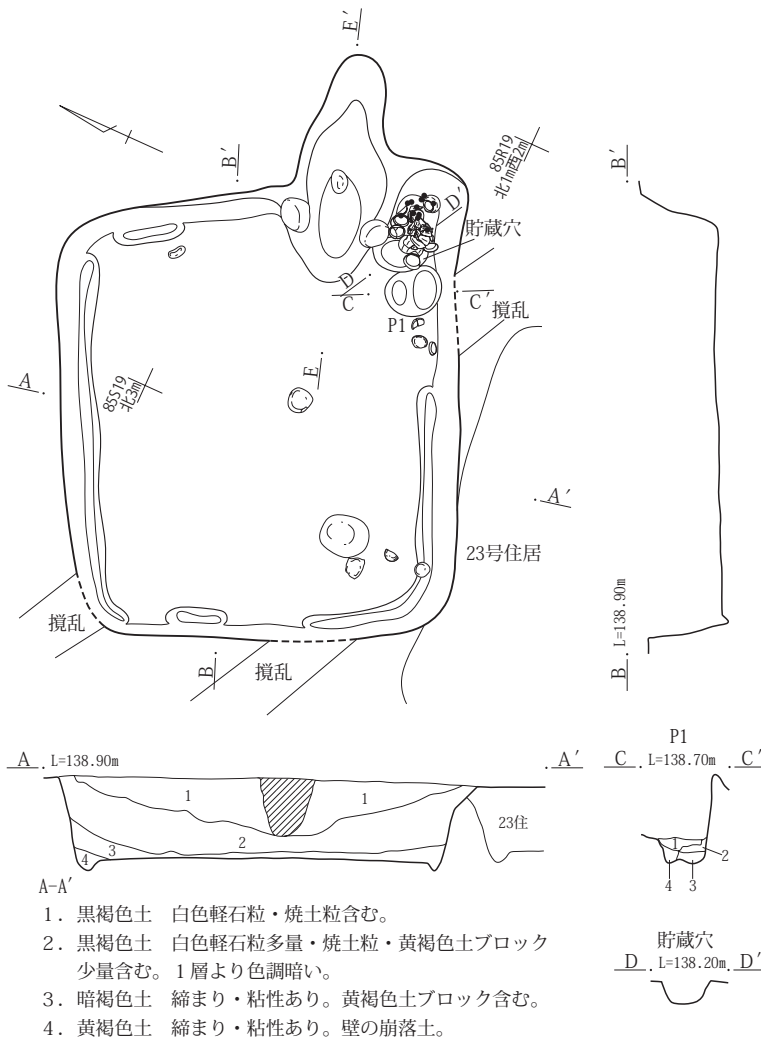
**カマド** 東辺南東角寄り部分に構築されていた。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は壊されていたが、燃焼部側壁の一部は残存していた。規模は全長1.82m、全幅1.00m、焚口部幅0.40m、燃焼部幅0.74mを測る。燃焼部底面は焚口よりやや掘り下げられており、煙道部奥壁はゆるやかに立ち上がっていた。燃焼部側壁には、構築材として使用されたとみられる礫が残っていた。

掘方は、燃焼部を中心に径1.20×0.90mの楕円形で深さ0.1mほど掘り込まれていた。

燃焼部から24～27の土師器甕が出土している。これらのうち24・26・27は煮沸用として使用されたものとみられるが、25は出土状態から焚口の構築材に利用された可能性が窺える。

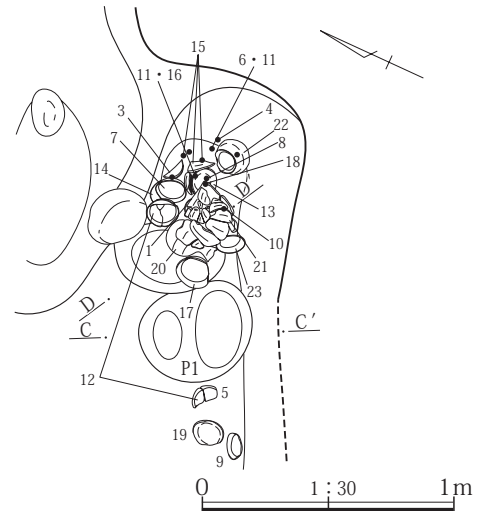
なお、カマド焚口右側に位置するP1は、堆積土中に焼土・炭化物が多量に含まれることから、カマドの灰等を廃棄したピットと想定される。形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.44m、短軸0.36m、深さ0.26mを測る。

**出土遺物** 図示した遺物の多くは、南東角、貯蔵穴東側から出土している。ここからは図示した土師器杯13点と20の須恵器提瓶、23・24の土師器甕がまとめて出土していることから、カマド南側の壁に置かれていたものが、住居廃絶期に落とされたことによると想定される。この他、P1の西側から5・9・19の土師器杯が出土している。図示した以外の遺物では土師器大型製品片128点・小型製品片31点、須恵器小型製品片8点が出土している。



- A-A'
1. 黒褐色土 白色軽石粒・焼土粒含む。
  2. 黒褐色土 白色軽石粒多量・焼土粒・黄褐色土ブロック少量含む。1層より色調暗い。
  3. 暗褐色土 締まり・粘性あり。黄褐色土ブロック含む。
  4. 黄褐色土 締まり・粘性あり。壁の崩落土。

貯蔵穴周辺遺物出土状態

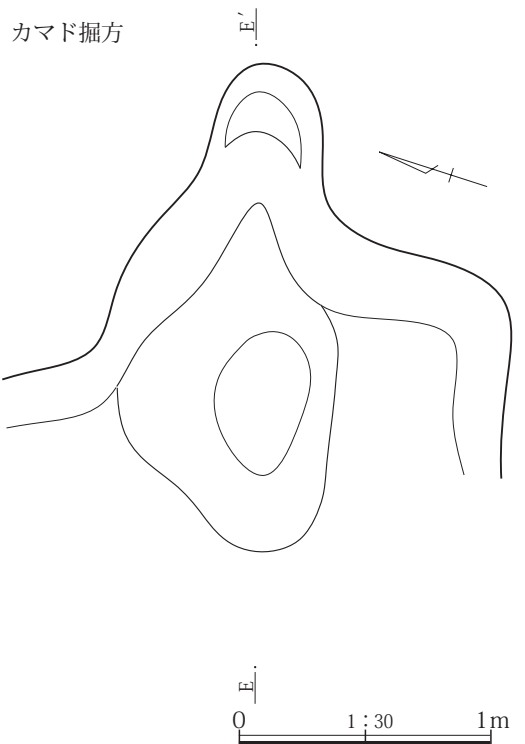
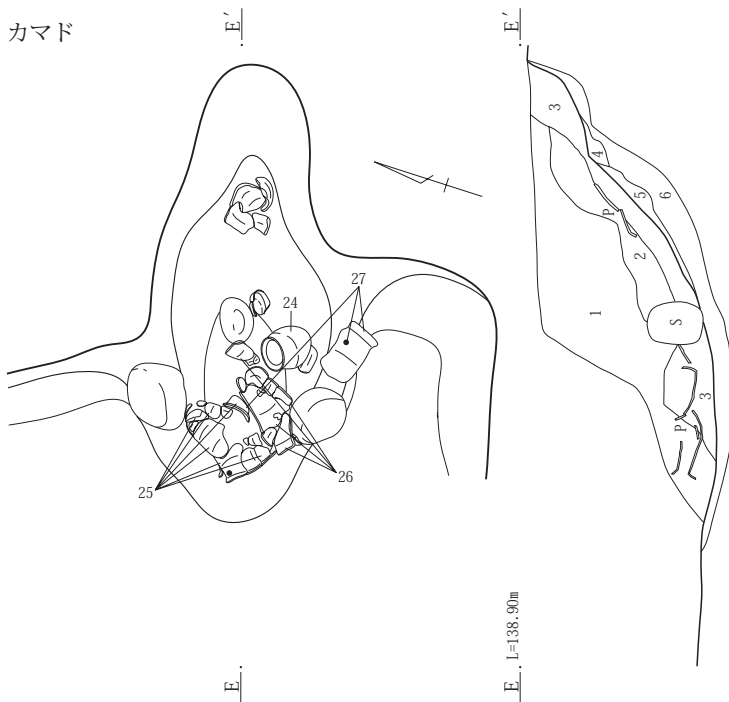
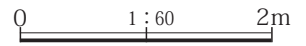


C-C'

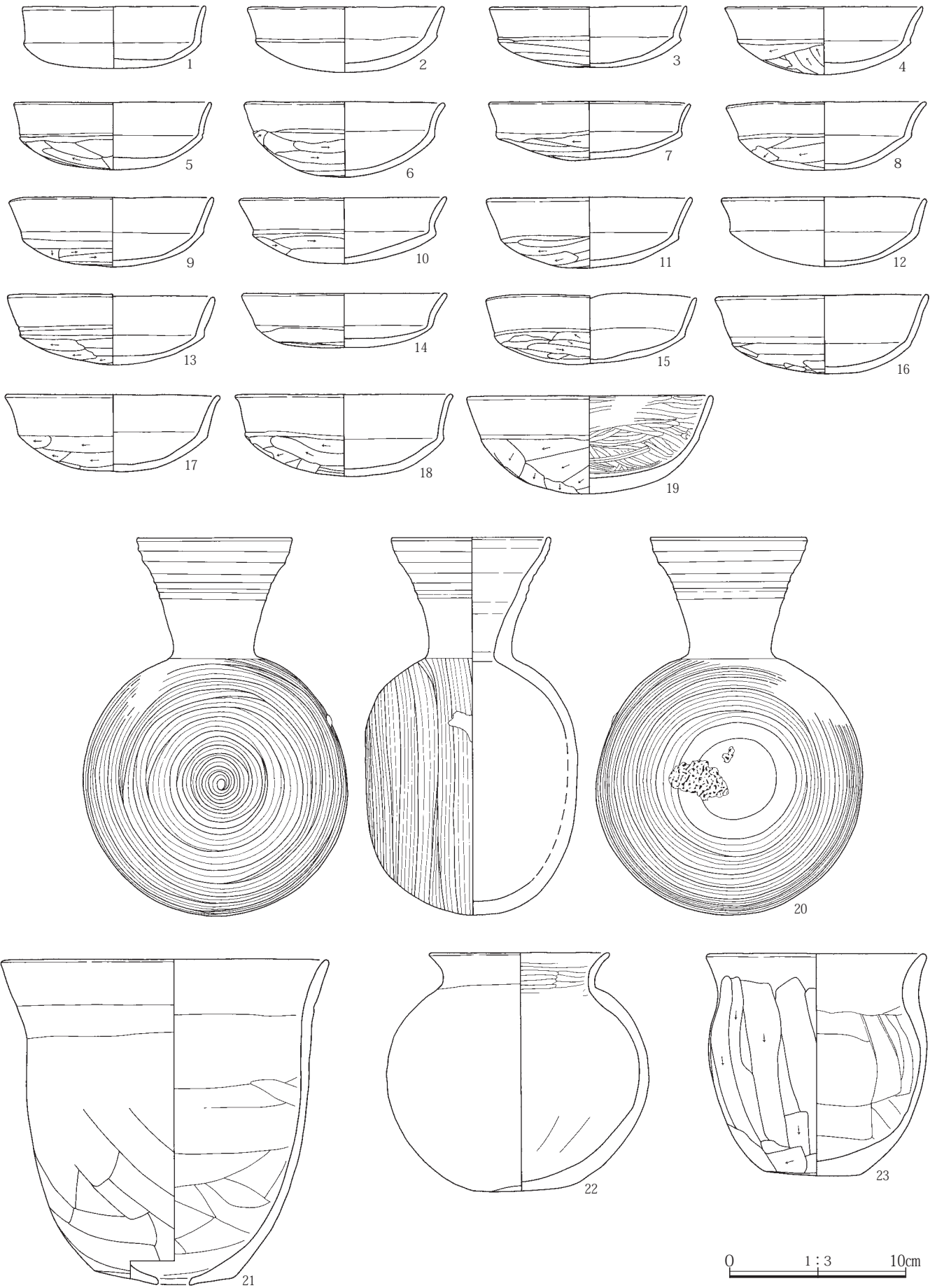
1. 赤褐色土 焼土粒多量・炭化物少量含む。
2. 暗赤褐色土 焼土粒微量含む。
3. 黄褐色土 焼土粒少量含む。
4. 黄褐色土 焼土粒少量含む。3層に類似するが、やや黒味増す。

E-E'

1. 暗褐色土 白色軽石粒少量含む。
2. 灰黄褐色土 カマド天井崩落土。
3. 暗褐色土 焼土・灰多量含む、炭化物少量含む。
4. 黄褐色土 締まり強い、粘性あり。カマド掘方埋土。
5. 暗褐色土 焼土粒、黄褐色色粒微量含む。カマド掘方埋土。
6. 暗褐色土 締まり・粘性あり。カマド掘方埋土。

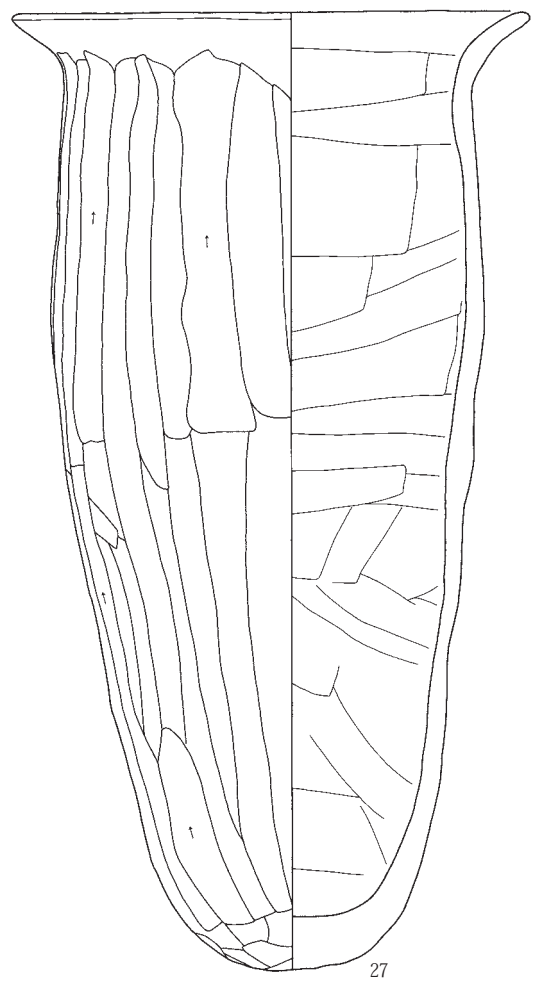
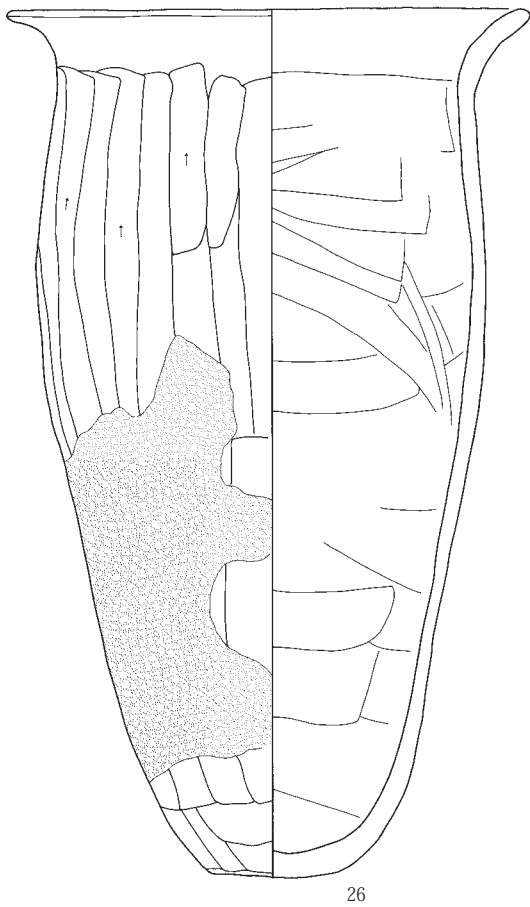
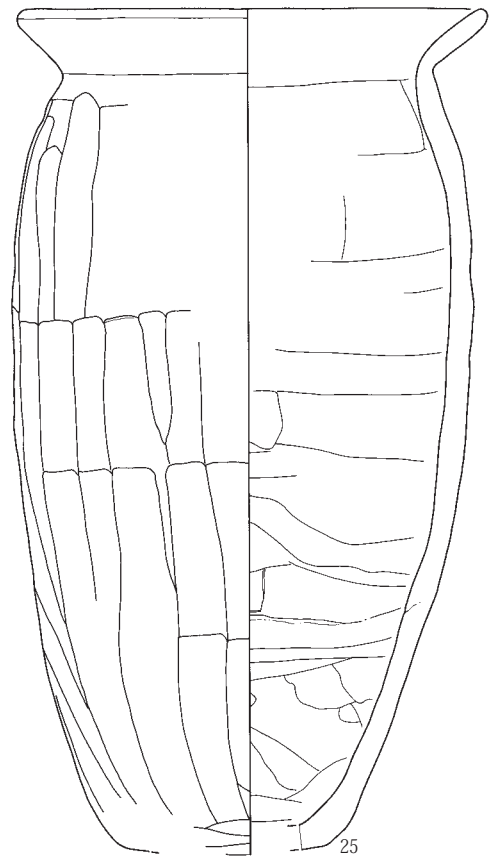
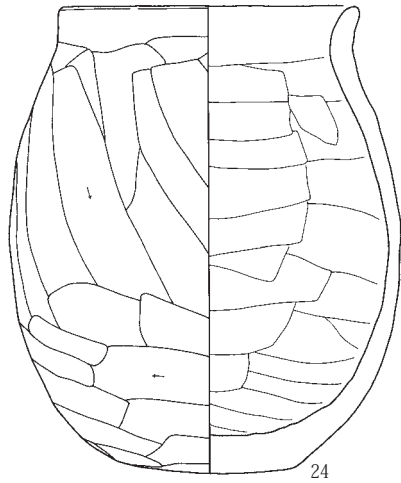


第115図 1区24号竪穴住居遺構図



第116図 1区24号竪穴住居出土遺物図(1)

所見 本竪穴住居の時期はカマドや貯蔵穴東側から出土した共伴するとみられる遺物から7世紀前半に比定できる。



0 1:3 10cm

第117図 1区24号竪穴住居出土遺物図(2)

1区27号竪穴住居(第118～122図、PL.59～61・162～164)

**位置** 1区調査区東南部、85区S-13、T-13・14に位置する。なお、本竪穴住居は平成25年度の調査分である。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

**形状** 東西方向に長い長方形を呈す。

**規模** 長軸4.84m、短軸4.10mを測る。

**面積** 16.19㎡

**方位** N-113°-W

**埋没状態** 土層断面では壁際にロームブロックを含む褐色砂質土による三角堆積後、レンズ状の堆積が観察でき

ることから自然埋没と想定される。

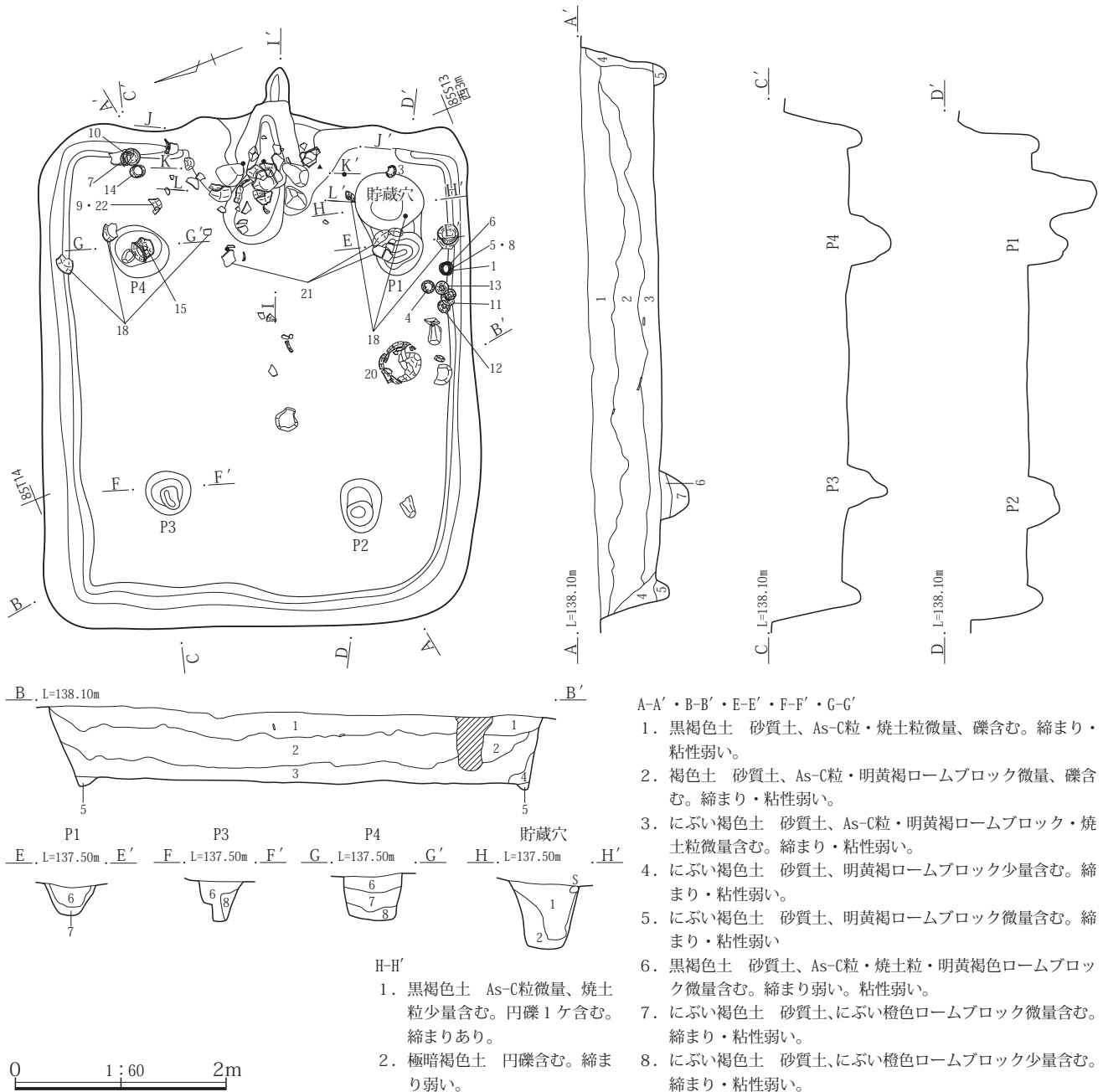
**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めている。床面の状態は若干の凹凸がみられるがほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.56～0.74mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は構築されていない。

**壁溝** カマド南側のごくわずかな部分を除いて、ほぼ全周しているのを検出した。規模は、上端0.21～0.30m、下端0.04～0.14m、深さ0.06～0.15mを測る。

**柱穴** 各角寄りから4基確認された。P2・P3は竪穴住居の対角線上に位置するが、P1・P4はやや内側の



第118図 1区27号竪穴住居遺構図(1)

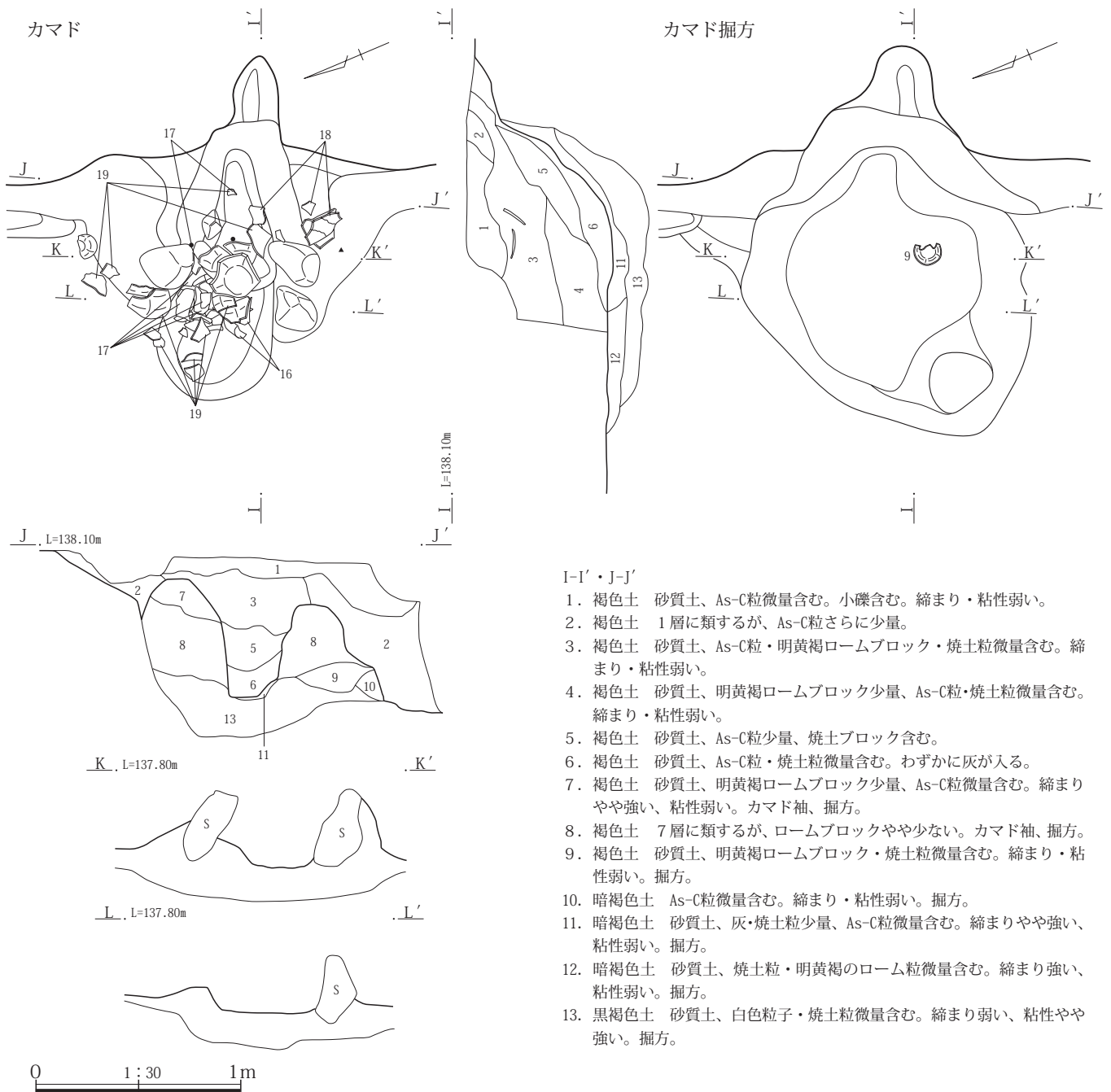
位置である。P 1は、楕円形を呈し、長軸0.46m、短軸0.38m、深さ0.38mを測る。P 2は、楕円形を呈し、長軸0.52m、短軸0.40m、深さ0.29mを測る。P 3は、円形を呈し、径0.42m、深さ0.35mを測る。P 4は、楕円形を呈し、長軸0.56m、短軸0.48m、深さ0.44mを測る。柱穴間の距離は、P 1～P 2間が2.40m、P 2～P 3間が1.82m、P 3～P 4間が2.30m、P 4～P 1間が2.45mである。

柱痕は明確ではないが、各柱穴底部に10cm前後の痕跡が窺えた。なお、土層断面ではP 3の下部で確認できた

だけである。

**貯蔵穴** 南東部隅にて検出した。形状は、平面が楕円形、断面は逆台形状を呈し、規模は長軸0.66m、短軸0.56m、深さ0.67mを測る。内部からは18の土師器甕の一部が出土したが、他の遺物の出土はみられなかった。

**カマド** 東壁中央部分に構築されている。残存状態は焚口と燃烧部から煙道部の天井は掛け口に掛けられていた土師器甕とともに壊された状態であったが、燃烧部側壁は比較的良好な状態であった。規模は全長1.70m、全幅1.45m、煙道部長0.46m、煙道部幅0.22m、焚口部幅0.37



第119図 1区27号竪穴住居遺構図(2)

m、燃烧部幅0.84mを測る。燃烧部は焚口よりやや掘り下げられており、奥壁はやや角度をつけて立ち上がっていた。燃烧部側壁には、構築材として使用されたとみられる礫が残存していた。

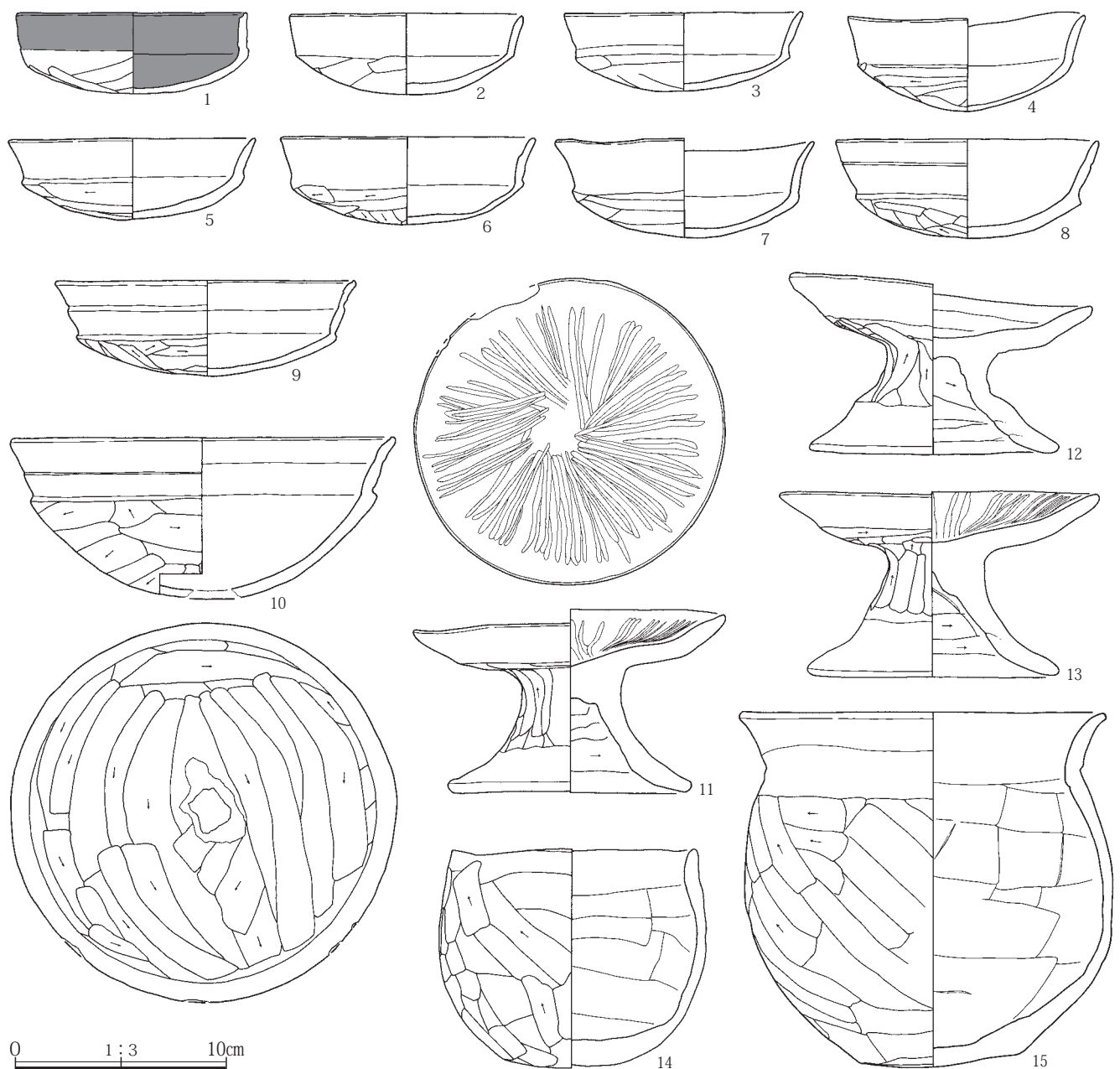
掘方は、燃烧部を中心に径1.4mほどの楕円形状に掘り込まれていた。この掘方底面には9の土師器杯が正位の状態で置かれており、カマド構築時の祭祀が行われた可能性が窺える。

なお、燃烧部から16～19の土師器甕が出土している。17は煮沸用に使用されていたものとみられるが、残りの3個体については煮沸用か構築材に使用されたものかについて明確にできなかった。

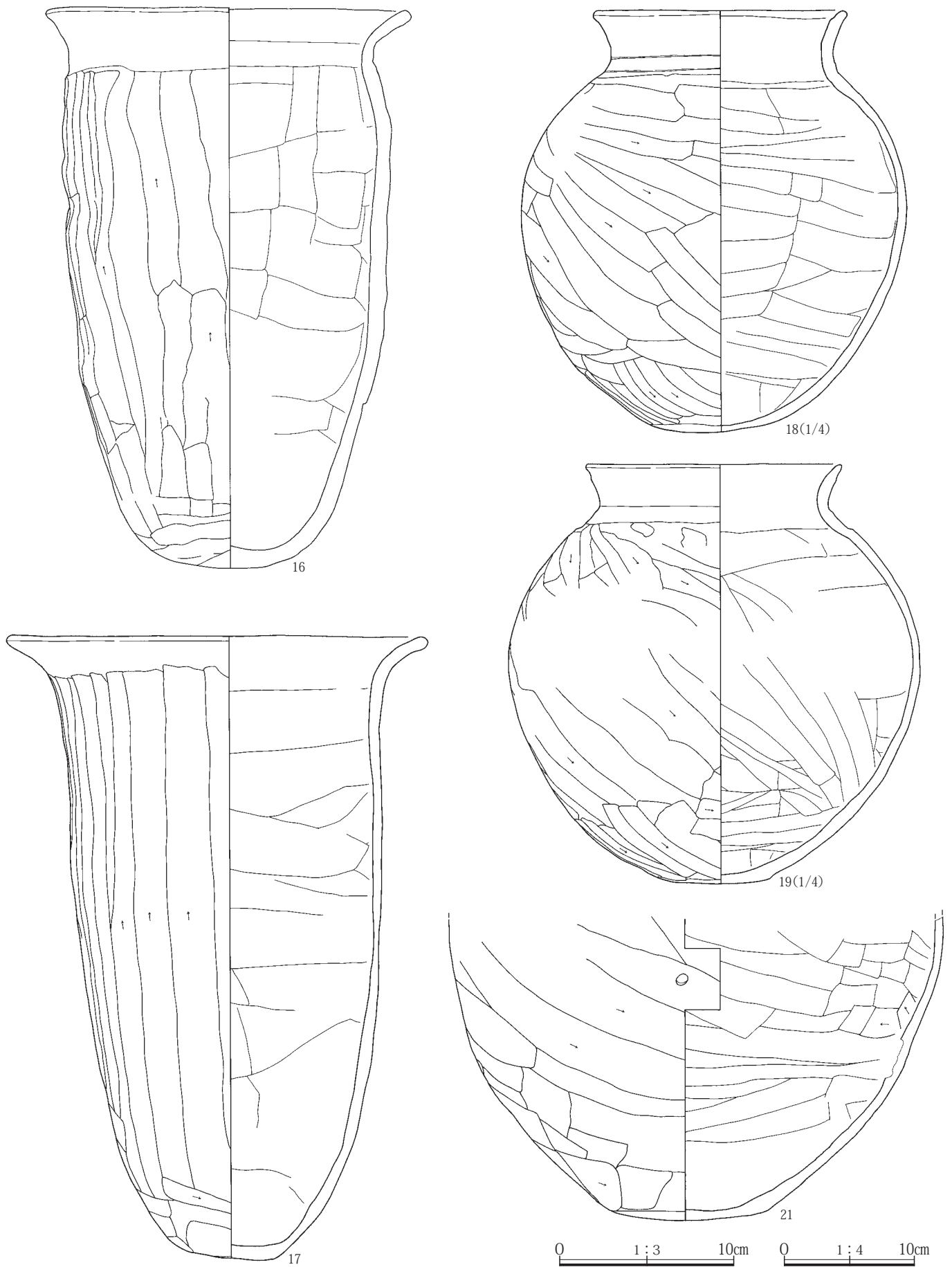
ついて明確にできなかった。

**出土遺物** 図示した遺物の大半は床面近くやカマド内から出土したものである。20の土師器甕は南辺壁寄りからつぶれた状態で出土しており、この場所に据え付けられていた可能性がみられるが、据え付けの窪みなどは確認されていないことから、他の方法によるとみられる。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片235点・小型製品片49点、須恵器大型製品片2点、打製石斧1点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は床面やカマドなどから出土した遺物から6世紀末から7世紀初頭に比定できる。

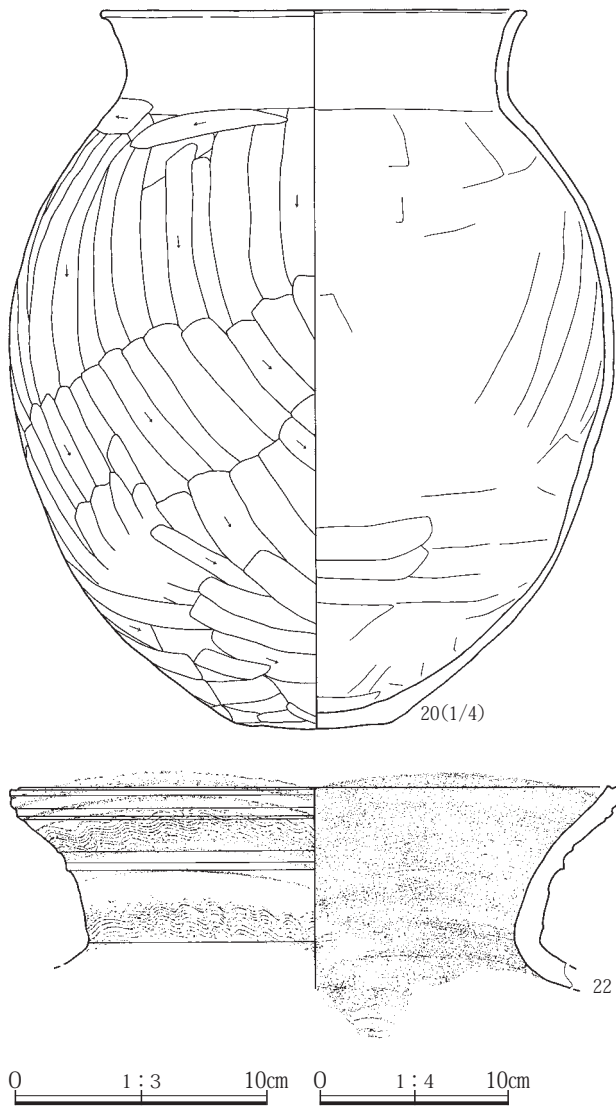


第120図 1区27号竪穴住居出土遺物図(1)



第121図 1区27号竪穴住居出土遺物図(2)





第122図 1区27号竪穴住居出土遺物図(3)

1区28号竪穴住居(第123～125図、PL.61～63・164)

**位置** 1区調査区東端の中ほど、85区Q-13・14、R-13・14に位置する。なお、本竪穴住居は平成25年度の調査分である。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

**形状** 平面形態は東西方向に長い長方形を呈す。断面形態は断面図で示したように残存する掘り込みの下半はほぼ垂直な壁面状態であるが、上半は30度ほどの傾斜で立ち上がっている。図上では東辺のカマド両側は平坦面で柵状に見えるが、この部分も緩やかな傾斜を持っている。

**規模** 確認面では長軸5.50m、短軸5.04m、傾斜壁の内側では長軸4.75m、短軸4.30mを測る。

**面積** 19.31㎡

**方位** N-57°-E

**埋没状態** 土層断面では壁際に三角堆積した後、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めている。床面の状態は若干の凹凸がみられるがほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.63～0.82mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は構築されていなかった。

**壁溝** カマド部分を除いて全周するのを検出した。規模は、上端0.15～0.30m、下端0.04～0.20m、深さ0.07～0.15mを測る。

**柱穴** 各角寄りにやや不均衡な配列であるが、4本を検出した。P 1は、楕円形を呈し、長軸0.54m、短軸0.49m、深さ0.36mを測る。P 2は、楕円形を呈し、長軸0.49m、短軸0.42m、深さ0.35mを測る。P 3は、円形状を呈し、径0.52m、深さ0.18mを測る。P 4は、楕円形を呈し、長軸0.46m、短軸0.36m、深さ0.32mを測る。柱穴間の距離は、P 1～P 2間が1.85m、P 2～P 3間が2.55m、P 3～P 4間が2.60m、P 4～P 1間が1.80mである。

柱痕は各柱穴とも確認されなかったが、柱穴P 1では底面で柱が建っていた時の痕跡が確認されている。

**貯蔵穴** 南東部隅にて検出した。形状は、平面が楕円形、断面は途中に段を有している。規模は、長軸0.66m、短軸0.60m、深さ0.47mを測る。

**カマド** 東壁の中央よりやや南寄りに構築されている。残存状態は焚口と燃烧部から煙道部の天井は壊されていたが、燃烧部側壁は残存していた。規模は、全長1.65m、全幅1.15m、煙道部長0.60m、煙道部幅0.24m、焚口部幅0.42m、燃烧部幅0.80mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪められており、奥壁はやや角度をつけて立ち上がる。煙道部は燃烧部底面より70cmほど上位で平坦面をつくり壁外にのびる。燃烧部側壁端部には、焚口両側の構築材として使用されたとみられる礫が残存していた。

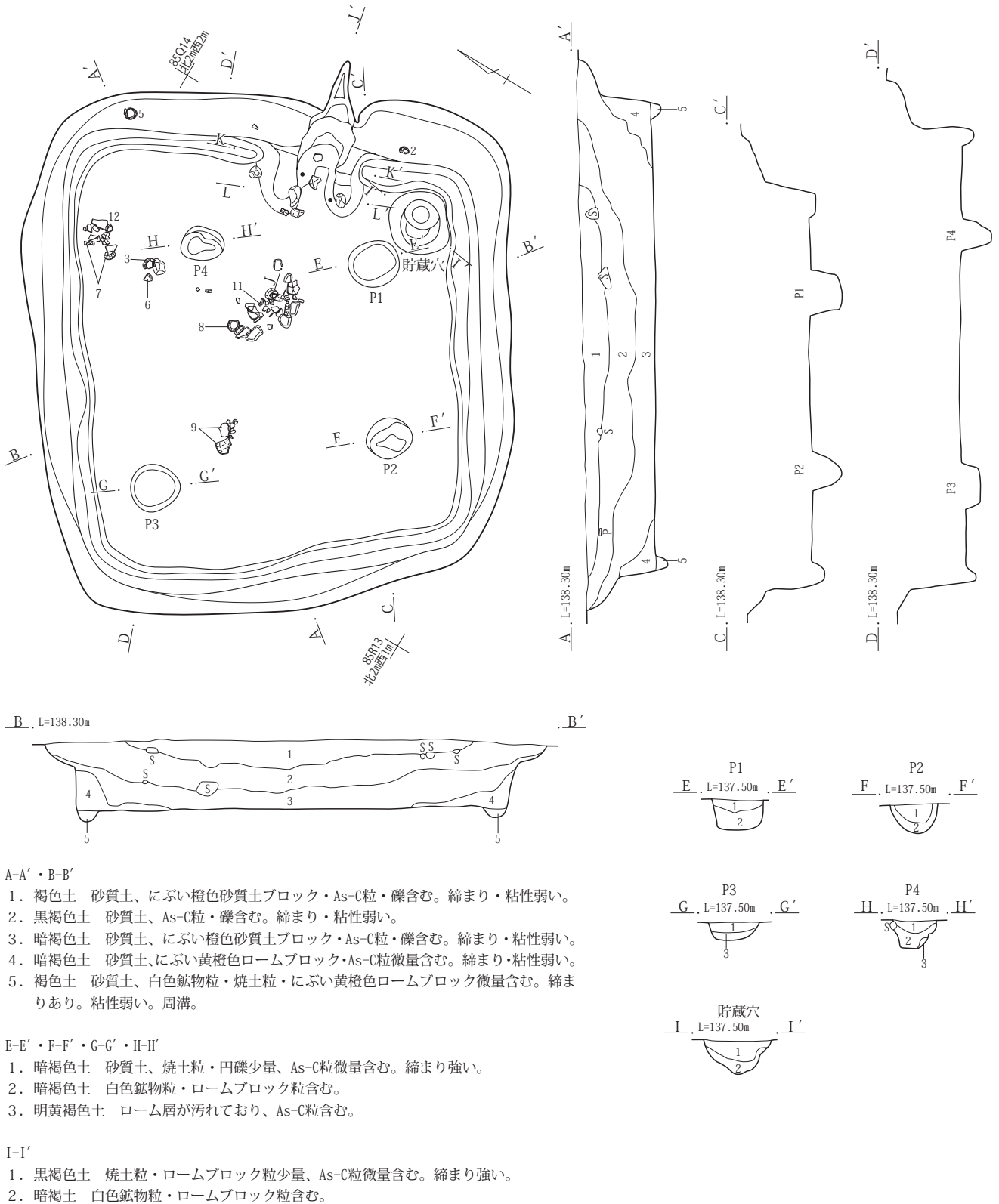
掘方は、焚口部から燃烧部は床面より10cmほど掘り窪められ、煙道部は緩やかな傾斜で立ち上がるように掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示した遺物のうち2・5の土師器杯は東壁上半の傾斜面、他の遺物は床面より12～30cmほど上位からの出土であった。図示した以外の遺物では、土師器大

型製品片339点・小型製品片90点、須恵器大型製品片13点が出土している。

と断定できるものが存在しないが、遺物全体の様相から7世紀前半に比定できる。

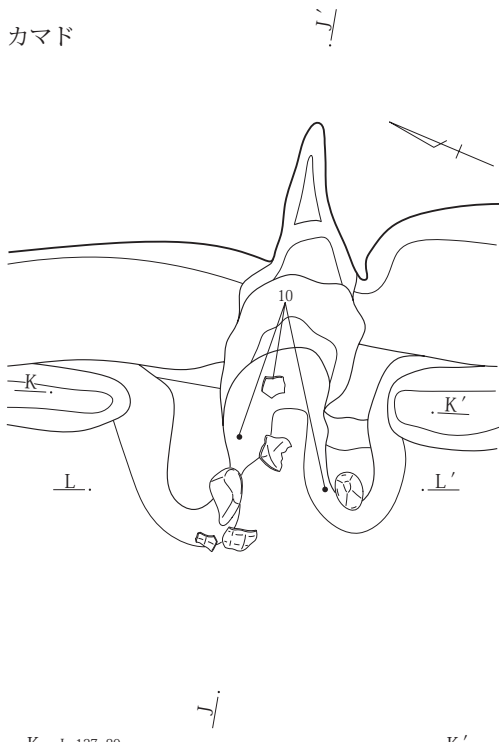
所見 本竪穴住居の時期は出土位置から確実に相伴する



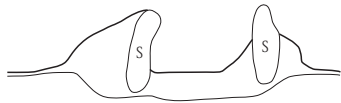
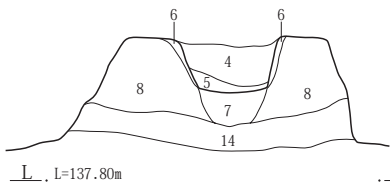
0 1:60 2m

第123図 1区28号竪穴住居遺構図(1)

カマド



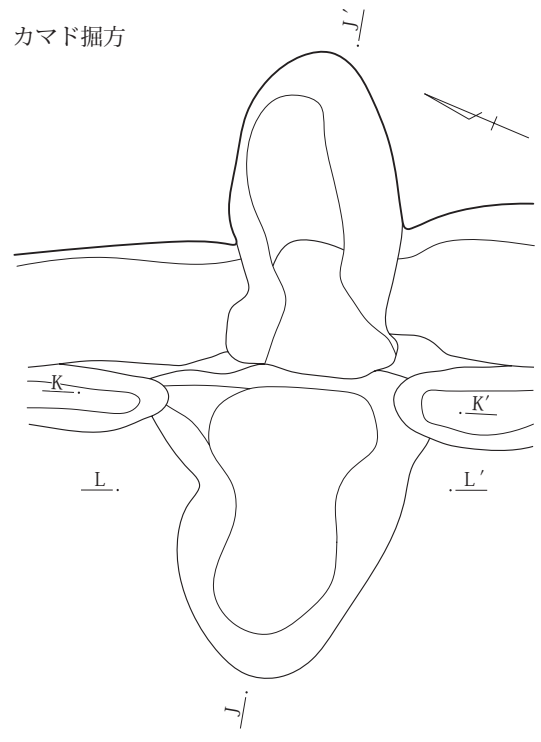
K, L=137.80m



J-J'・K-K'

1. 灰褐色土 砂質土、As-C粒・焼土粒・礫微量含む。締まり・粘性弱い。
2. 褐色土 砂質土、As-C粒・焼土粒微量含む。締まり・粘性弱い。
3. 黒褐色土 砂質土、As-C粒・明黄褐色ロームブロック・焼土粒微量含む。締まり・粘性弱い。
4. 褐色土 砂質土、As-C粒・明黄褐色ローム粒・焼土粒微量含む。締まり・粘性弱い。

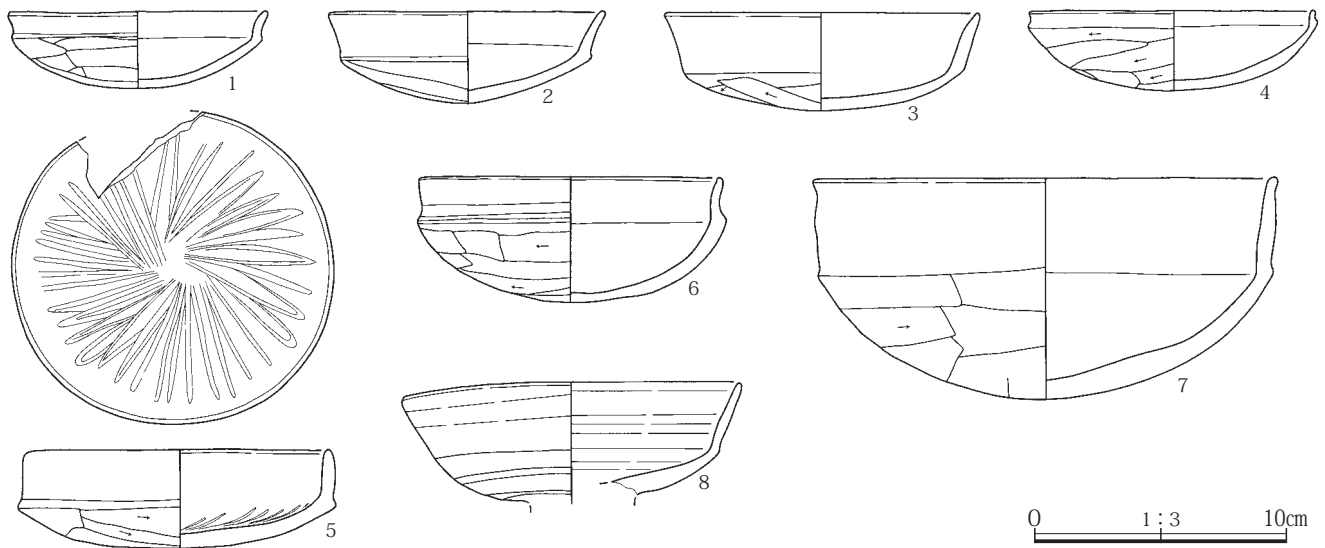
カマド掘方



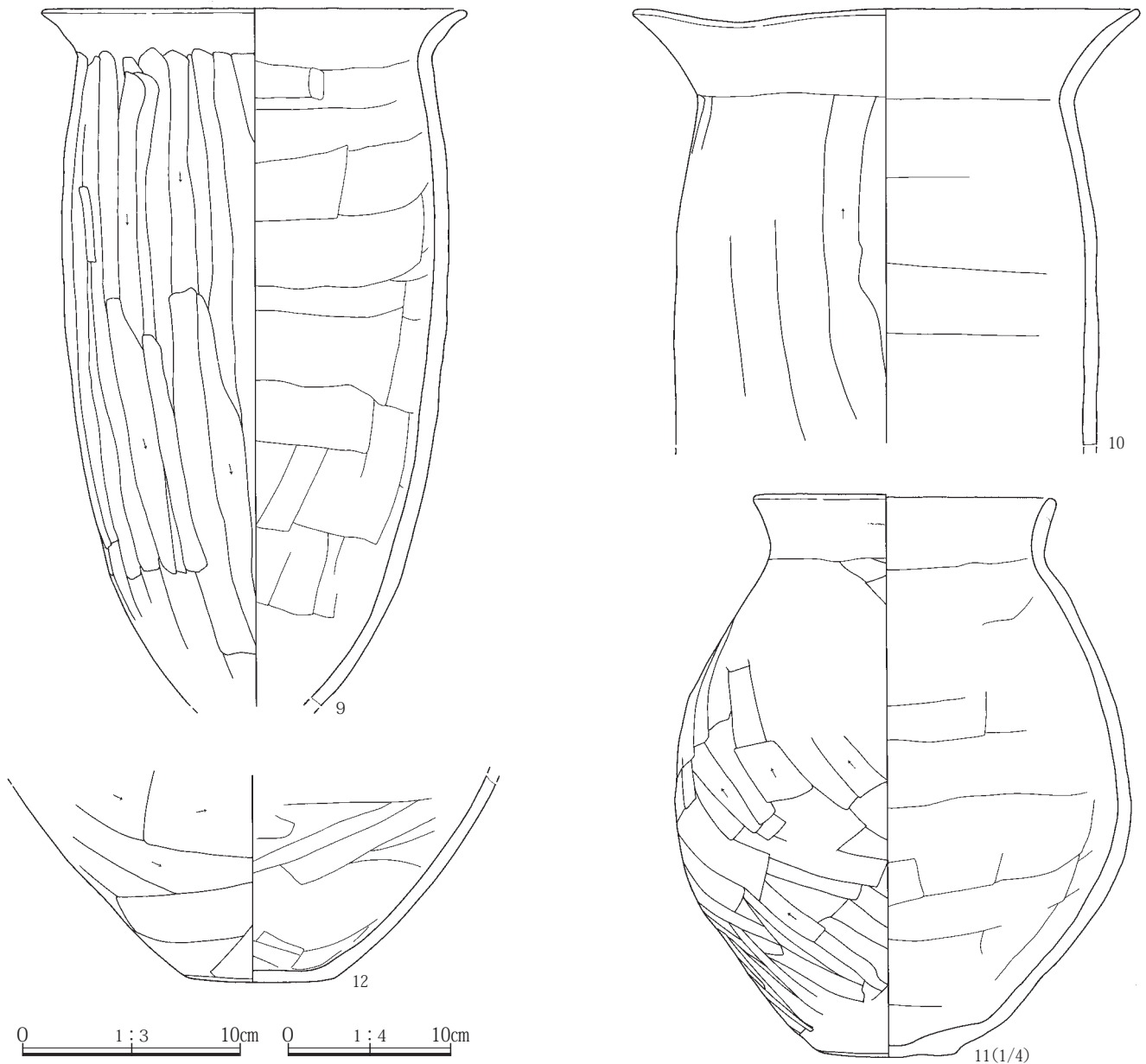
J, L=138.20m

5. 褐色土 砂質土、焼土粒少量、As-C粒・明黄褐色ロームブロック微量含む。締まり弱い。粘性弱い。
6. 暗赤褐色土 砂質土、カマド袖部が被熱し、赤褐色化する。
7. 褐色土 砂質土、焼土粒少量、灰微量含む。締まり強い、粘性弱い。掘方。
8. 褐色土 砂質土、締まりやや強い。粘性弱い。カマド袖構築土。
9. 褐色土 砂質土、焼土粒・As-C粒微量含む。締まりやや強い、粘性弱い。掘方。
10. 褐色土 砂質土、明黄褐色ロームブロック含む。締まり・粘性弱い。掘方。
11. 黒褐色土 砂質土、明黄褐色ロームブロック・焼土粒微量含む。締まり・粘性弱い。掘方。
12. 褐色土 砂質土、明黄褐色ロームブロック・焼土粒微量含む。締まりやや強い、粘性弱い。掘方。
13. 黒褐色土 砂質土、As-C粒・明黄褐色ロームブロック微量含む。締まり・粘性弱い。掘方。
14. 黒褐色土 砂質土、焼土粒・白色粒子微量含む。締まり弱い、粘性やや強い。掘方。

0 1:30 1m



第124図 1区28号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(1)



第125図 1区28号竪穴住居出土遺物図(2)

**1区30号竪穴住居(第126・127図、PL.63・64・165)**

**位置** 1区調査区東端の中ほど、85区Q-16・17、R-16・17に位置する。本竪穴住居は現代の墓地に位置していたため、広範囲に攪乱を受けており、明らかにできなかった点も多い。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

**形状** 南北方向が10cmほど長いがほぼ正方形を呈す。

**規模** 長軸4.93m、短軸4.81mを測る。

**面積** 攪乱により不明な箇所があるが、18.61㎡を測る。

**方位** N-92°-W

**埋没状態** 土層断面ではレンズ状の堆積が観察できるこ

とから自然埋没と想定される。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めている。床面の状態は若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.41~0.53mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は構築されていなかった。

**壁溝** 攪乱部分と東辺の南東角寄りを除いた各辺壁下から検出した。規模は、上端0.20~0.25m、下端0.01~0.11m、深さ0.02~0.07mを測る。

**柱穴** 各隅の角寄り、竪穴住居のほぼ対角線上で4本を検出した。P1は、円形を呈し、径0.30m、深さ0.32mを測る。P2は、楕円形を呈し、長軸0.35m、短軸0.34

m、深さ0.49mを測る。P3は、円形を呈し、径0.30m、深さ0.34mを測る。P4は、攪乱により半分以上が欠落していたが、楕円形を呈し、長軸0.32m、短軸は調査範囲内で0.18m、深さ0.28mを測る。柱穴間の距離は、P1～P2間が3.20m、P2～P3間が3.10m、P3～P4間が2.70m、P4～P1間が3.45mである。

柱痕については各柱穴とも確認できないことから、抜き取られたとみられる。

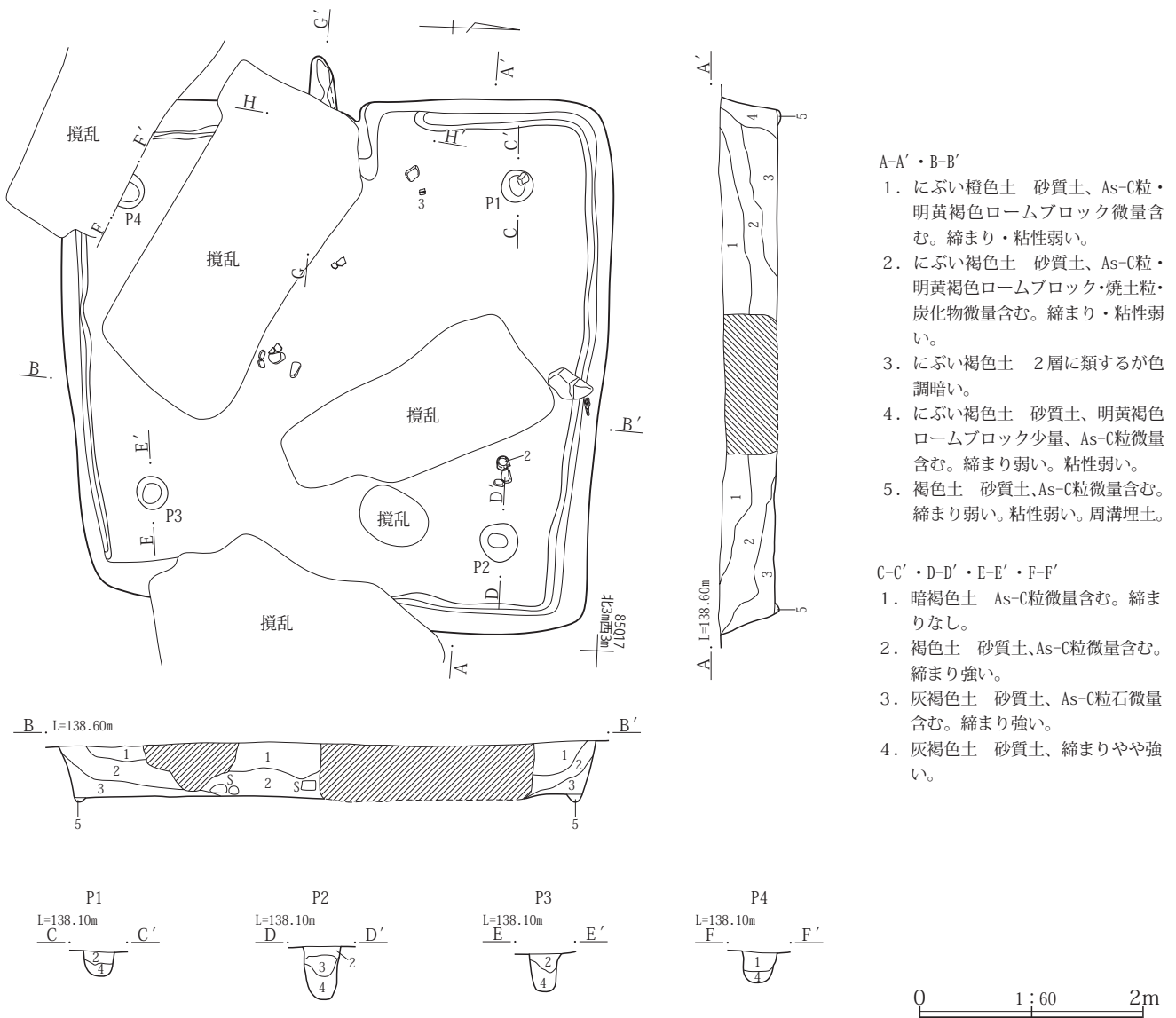
**貯蔵穴** 攪乱で床面の一部を欠くが、カマドの両脇などに設置される可能性が高い箇所を確認できなかったことから、もともと設置されていなかったとみられる。

**カマド** 西辺中央よりやや南寄り部分に構築されていた。大半が攪乱により壊されてしまっており、煙道部と

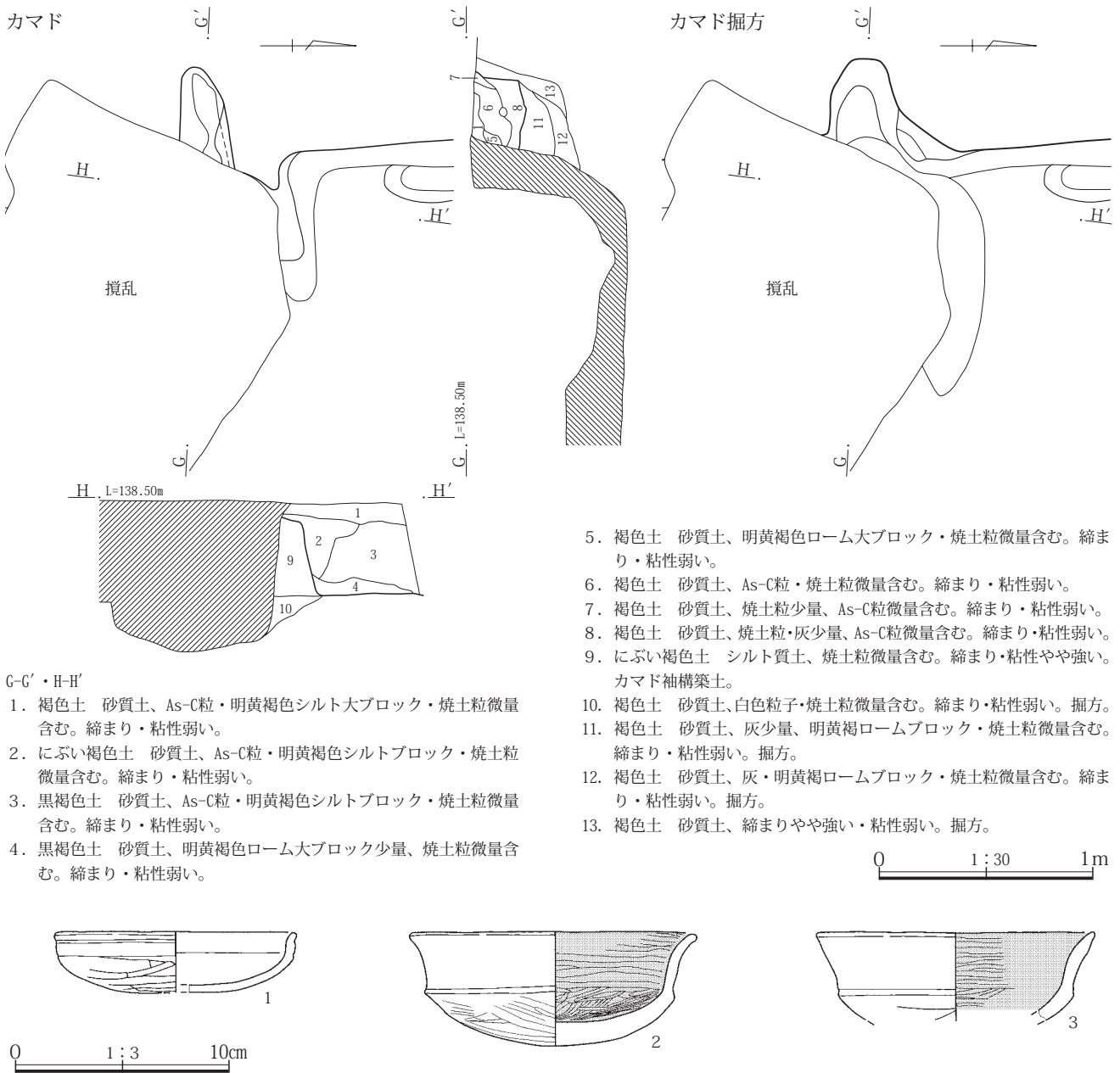
燃焼部北側側壁の一部が残存していただけである。残存状態は煙道部の天井は壊されていたが、燃焼部側壁は残存していた。調査範囲での規模は、全長0.60m、全幅0.70m、煙道部長0.60m、煙道部幅0.24mを測る。カマドの掘り込みについては、不明である。

**出土遺物** カマドの大半を欠くため出土遺物量が少なく、図示できた遺物も3点だけであった。この3点とも床面より20cmほど上位や埋没土中からの出土であった。図示した以外の遺物では土師器大型製品片74点・小型製品片5点、須恵器大型製品片1点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は出土位置から確実に共伴すると断定できるものが存在しないが、遺物全体の様相から7世紀前半に比定できる。



第126図 1区30号竪穴住居遺構図(1)



第127図 1区30号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図

2区1号竪穴住居(第128~131図、PL.64~66・165)

**位置** 2区調査区西端中ほど、85区J-16・17、K-16・17、L-16・17に位置する。本竪穴住居の北西角部分は現道下に存在するため調査対象から除外されるため全貌は不明である。

**重複** 東辺の北側で2区1号土坑と重複する。新旧関係は本竪穴住居のほうが古い。

**形状** 東西方向に長い長方形を呈す。

**規模** 長軸6.66m、短軸5.94mを測る。

**面積** 調査範囲内では34.43㎡を測る。

**方位** N-69°-E

**埋没状態** 土層断面ではHr-FPを含む黒褐色土、暗褐色土、灰黄褐色土などがレンズ状に堆積しているのが観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より灰黄褐色土を10cmほど埋め戻して構築されていた。床面の状態は若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦でカマド前3m四方が硬化していた。

確認面から床面までの深さは、0.55~0.70mを測る。

**掘方** 浅い掘り込みが住居全体に施され、一部に深さ30cmほどの土坑状の落ち込みも存在していたが、床下土坑などの施設は確認されなかった。

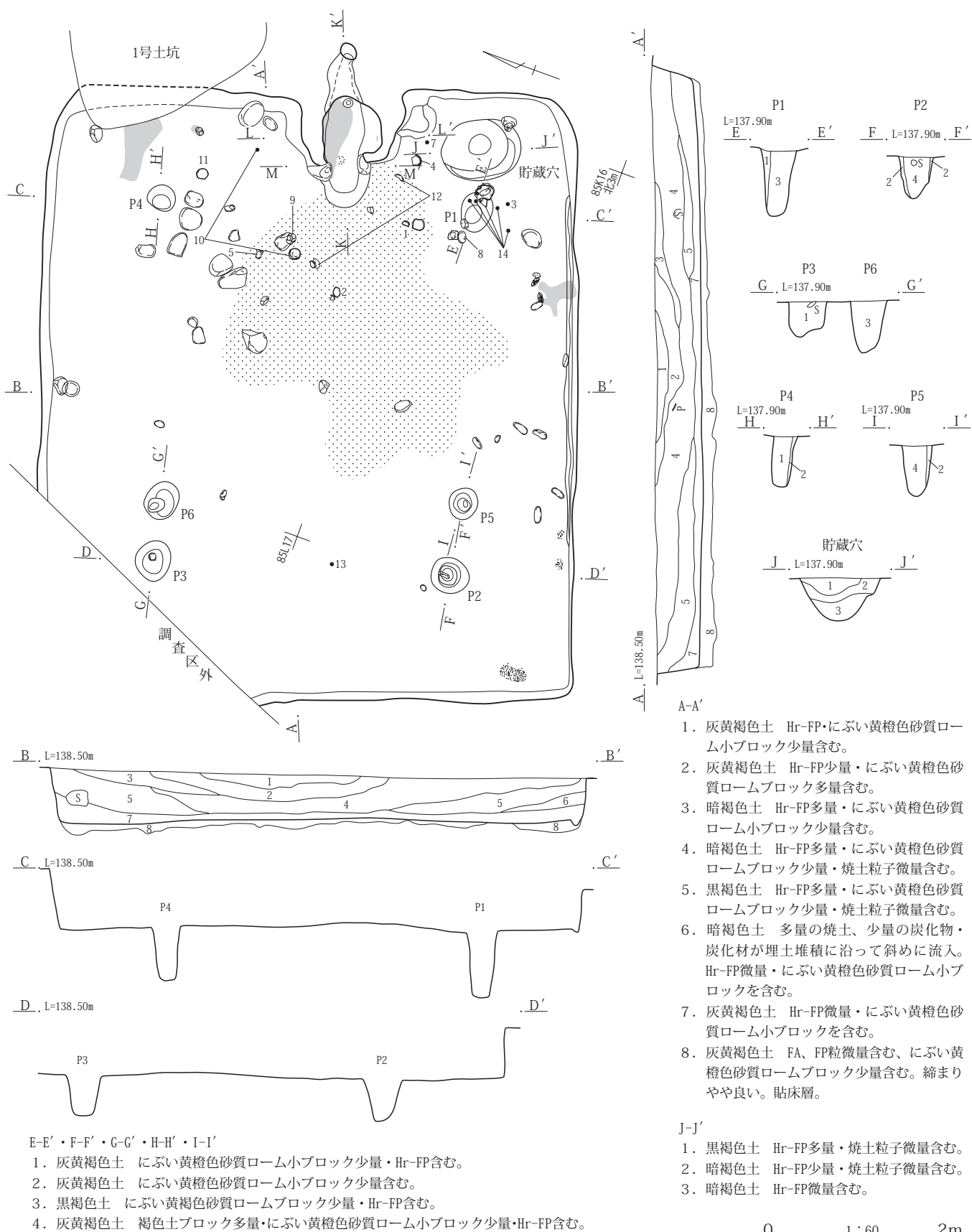
**壁溝** 南壁の中ほどで全長4.0mを検出した。上端0.08

～0.10m、下端0.01～0.04m、深さ0.02～0.03mを測る。

柱穴 南東、北東角寄りから各1本、南西角・北西角寄

りから各2本ずつ、計6本を検出した。6本の柱穴は掘

方で拡張などの痕跡が確認できないことやP1、P2、



- E-E'・F-F'・G-G'・H-H'・I-I'
1. 灰黄褐色土 にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック少量・Hr-FP含む。
  2. 灰黄褐色土 にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック少量含む。
  3. 黒褐色土 にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック少量・Hr-FP含む。
  4. 灰黄褐色土 褐色土ブロック多量・にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック少量・Hr-FP含む。

- A-A'
1. 灰黄褐色土 Hr-FP・にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック少量含む。
  2. 灰黄褐色土 Hr-FP少量・にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック多量含む。
  3. 暗褐色土 Hr-FP多量・にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック少量含む。
  4. 暗褐色土 Hr-FP多量・にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック少量・焼土粒子微量含む。
  5. 黒褐色土 Hr-FP多量・にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック少量・焼土粒子微量含む。
  6. 暗褐色土 多量の焼土・少量の炭化物・炭化材が埋土堆積に沿って斜めに流入。Hr-FP微量・にぶい黄褐色砂質ローム小ブロックを含む。
  7. 灰黄褐色土 Hr-FP微量・にぶい黄褐色砂質ローム小ブロックを含む。
  8. 灰黄褐色土 FA、FP粒微量含む、にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック少量含む。締まりやや良い。貼床層。
- J-J'
1. 黒褐色土 Hr-FP多量・焼土粒子微量含む。
  2. 暗褐色土 Hr-FP少量・焼土粒子微量含む。
  3. 暗褐色土 Hr-FP微量含む。



第128図 2区1号貯穴住居遺構図(1)

第3章 検出遺構と出土遺物

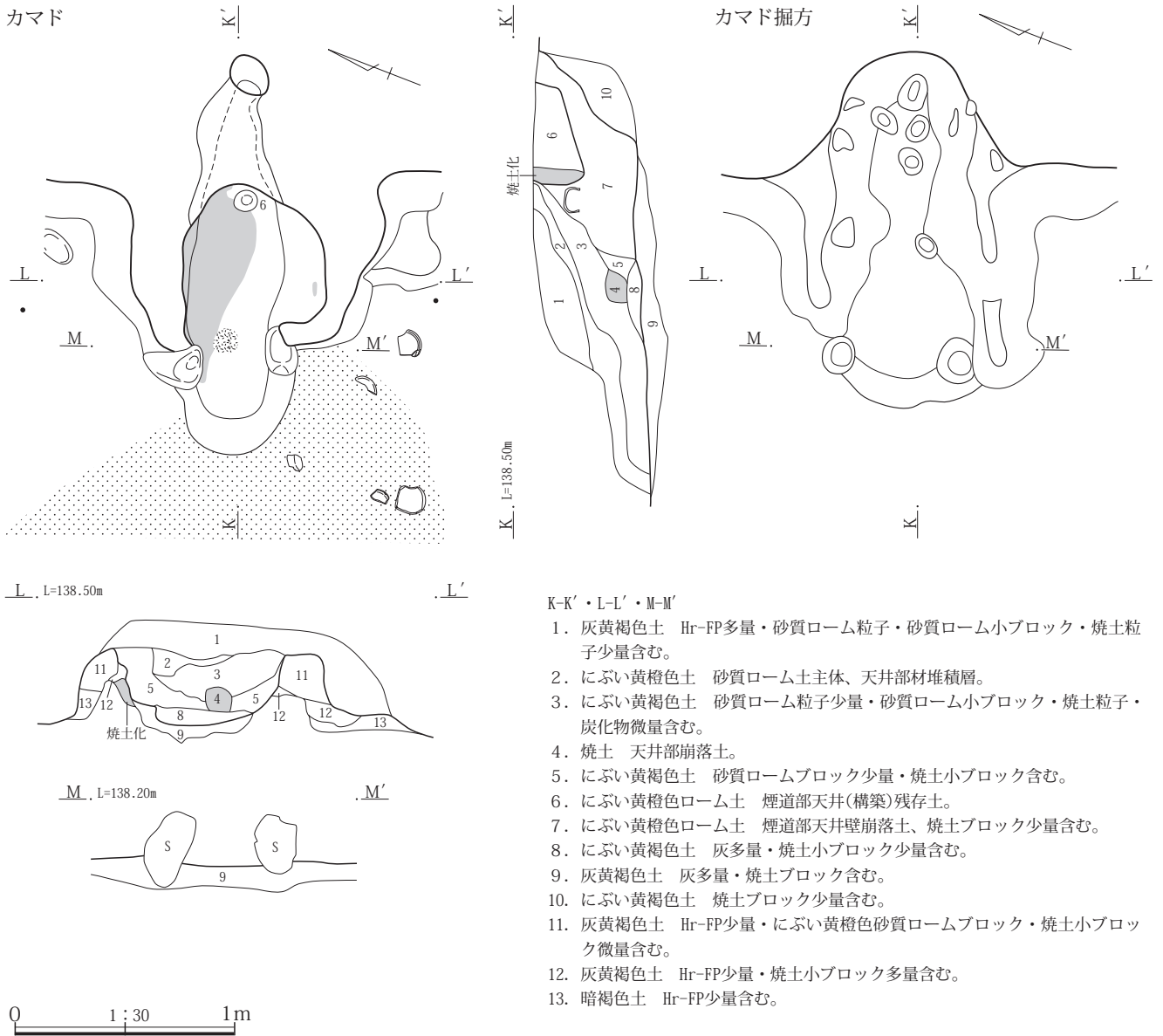
P 3、P 4 が竪穴住居の対角線上に位置することから、この4本が支柱穴とみられ、P 5、P 6 は長軸方向に対する補助的な柱穴とみられる。各柱穴の形状と規模は次のとおりである。P 1 は、形状が楕円形、規模は長軸0.44m、短軸0.34m、深さ0.74m。P 2 は、形状が楕円形、規模は長軸0.42m、短軸0.40m、深さ0.43m。P 3 は、形状が楕円形、規模は長軸0.45m、短軸0.39m、深さ0.45m。P 4 は、形状が楕円形、規模は長軸0.32m、短軸0.28m、深さ0.59m。P 5 は、形状が円形、規模は径0.36m、深さ0.53m。P 6 は、形状が楕円形、規模は長軸0.43m、短軸0.36m、深さ0.61mを測る。柱穴間の距離は、P 1～P 2間が4.00m、P 2～P 3間が3.28m、P 3～P 4間が4.00m、P 4～P 1間が3.50m、P 2～

P 5間が0.80m、P 3～P 6間が0.68m、P 5～P 6間が3.47mを測る。

柱痕は各柱穴とも確認されず、土層断面でもほぼ単一土で埋没した状態が観察されたことから、6本とも抜き取られたとみられる。

**貯蔵穴** 南東部隅にて検出した。形状は、平面形態が楕円形、断面は南から西の立ち上がりに7～10cmほどの段をもっていた。規模は、長軸0.88m、短軸0.68m、深さ0.54mを測る。内部からは遺物などの出土はみられなかった。また、埋没土は住居埋没土の3～6に近似した土砂で埋没していた。

**カマド** 東壁中央よりやや南寄りに構築されていた。残存状態は焚口と燃烧部の天井が壊されていたが、燃烧部



第129図 2区1号竪穴住居遺構図(2)



側壁、煙道部天井は残存していた。規模は全長1.80m、全幅1.55m、煙道部長0.58m、煙道部幅0.29m、焚口部幅0.31m、燃烧部幅0.52mを測る。燃烧部は焚口よりやや掘り下げられており、煙道部奥壁は垂直に近い角度で立ち上がっていた。焚口両側には径15cm、長さ20・30cmの棒状の円礫が構築材として使用されていた。

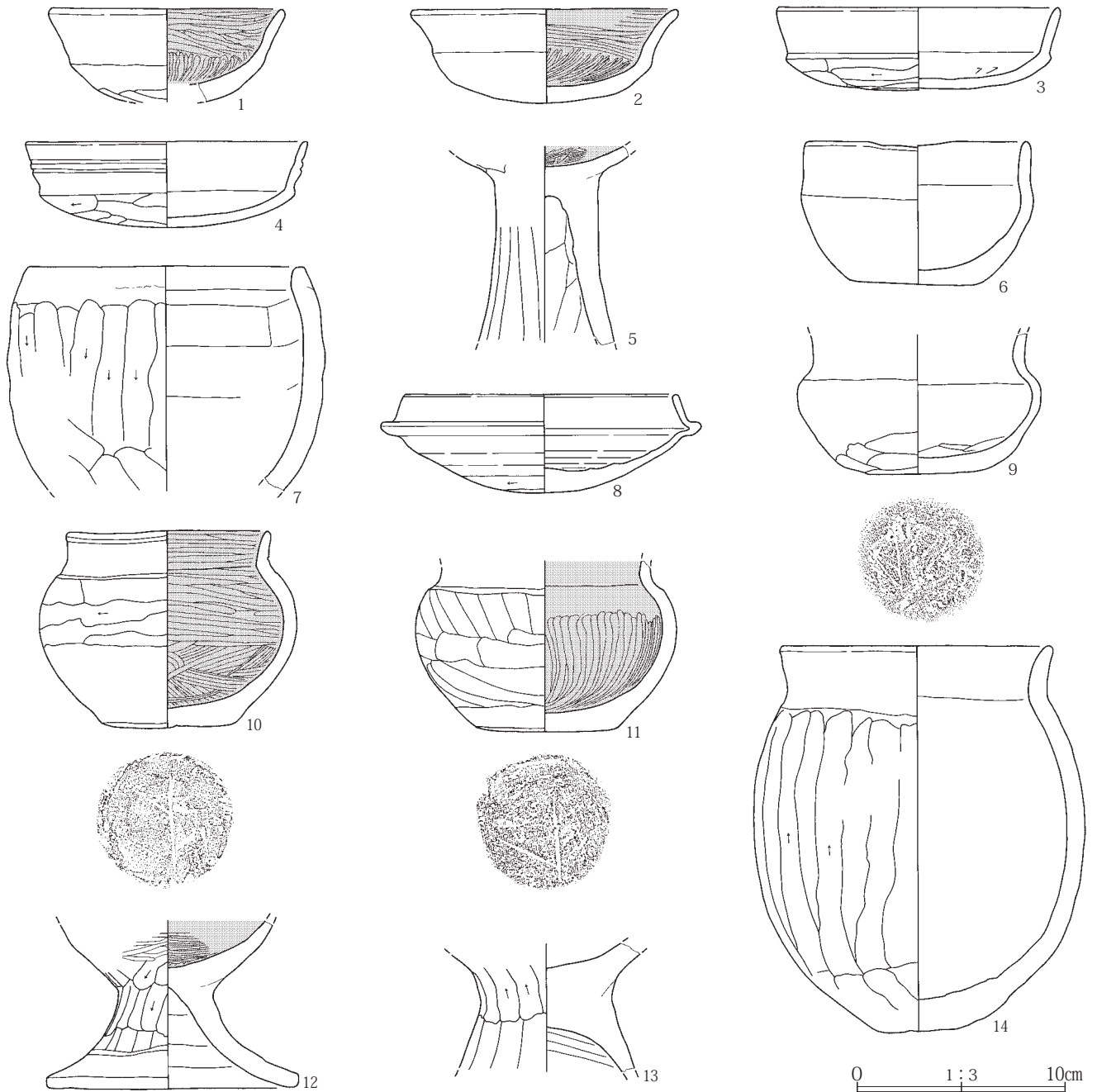
掘方は側壁の基部は地山をそのまま利用し、その内側を細長い楕円状に掘り込んでいた。

燃烧部奥の天井崩落土から6の土師器鉢が伏せられた状態で出土している。出土の状態や位置からカマドを廃

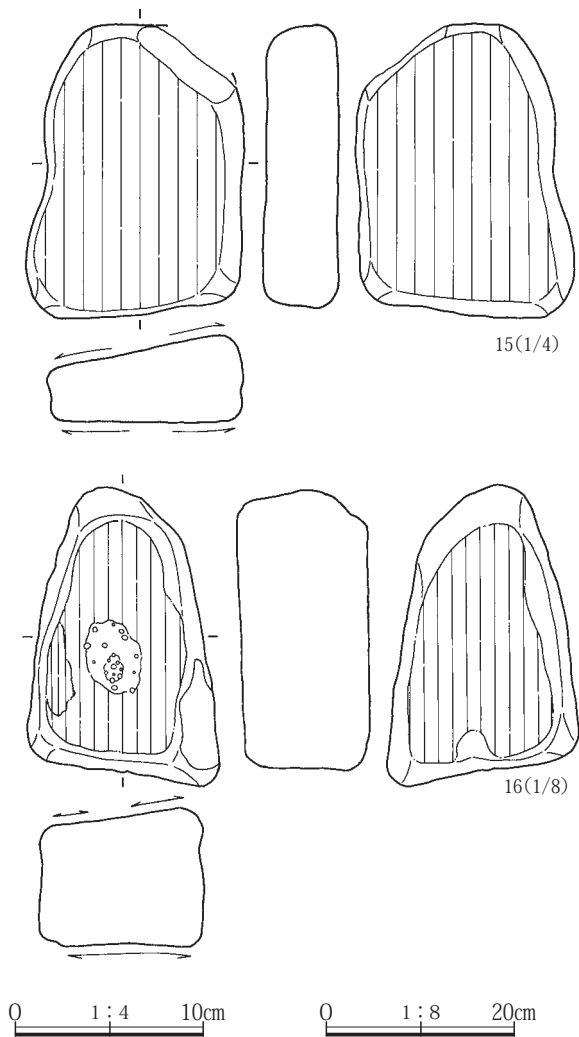
棄した際の祭祀にかかわる可能性が窺える。

**出土遺物** 遺物の多くはカマド周囲からであるが、出土位置は床面よりやや上位からである。図示した遺物のうち、6・7の土師器鉢はカマドからの出土であることから、本竪穴住居に共伴する遺物とみられる。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片222点・小型製品片45点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期はカマドから出土した6・7などの遺物から6世紀末から7世紀初頭に比定できる。



第130図 2区1号竪穴住居出土遺物図(1)



第131図 2区1号竪穴住居出土遺物図(2)

2区3号竪穴住居(第132・133図、PL.66~68・165)

**位置** 2区調査区北西隅、85区H-18・19、I-18に位置する。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

**形状** 東西方向に0.40mほど長い長方形を呈す。

**規模** 長軸3.30m、短軸2.91mを測る。

**面積** 7.75㎡

**方位** N-63°-E

**埋没状態** 土層断面では壁際に三角堆積がなされた後にレンズ状の堆積が観察できることから、自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より15~20cmほど灰黄褐色土を埋め戻して構築されていた。床面の状態は住居東半のカマド前面を中心とした1m四方ではにぶい黄橙色土・黒色土を充填

して硬化がみられた。なお、住居西半の床面はあまり硬化した状態でなかった。

確認面から床面までの深さは、0.27~0.36mを測る。

**掘方** 掘り込みは住居全体に施され、高低差のある凹凸面がそのままの状態であった。土坑状の掘り込みを3基検出した。床下土坑1は南西部に位置し、形状が楕円形を呈し、規模は長軸0.84m、短軸0.68m、深さ0.27mを測る。床下土坑2は北西部に位置し、形状が楕円形を呈し、規模は長軸0.94m、短軸0.56m、深さ0.10mを測る。床下土坑3は、住居中央部やや北寄りに位置し、形状が不整形状を呈し、規模は長軸1.30m、短軸0.90m、深さ0.09mを測る。床下土坑1の内部から、角礫とわずかな土器片が出土しただけであった。これらの土坑がどのような性格を有しているかについては明らかではない。

**壁溝** カマド部分を除いて壁下で全周するのを検出した。規模は、上端0.10~0.18m、下端0.02~0.07m、深さ0.02~0.07mを測る。

**柱穴** 住居中央部から1本を検出した。P1は、形状が楕円形状を呈し、規模は長軸0.16m、短軸(0.10)m、深さ0.30mを測る。

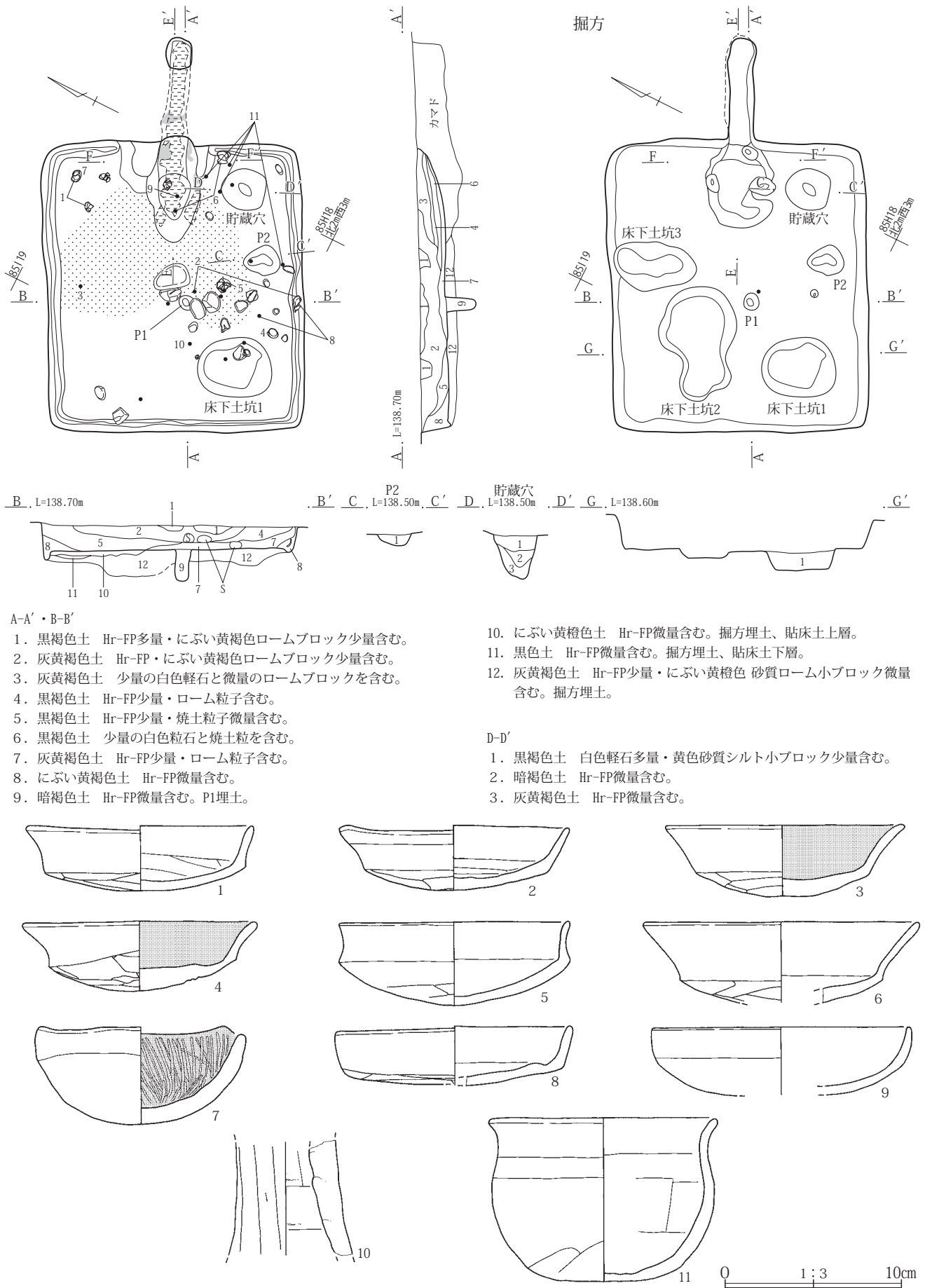
柱痕については土層断面では確認できなかった。

**貯蔵穴** 南東部隅にて確認された。形状は楕円形状を呈し、規模は長軸0.50m、短軸0.48m、深さ0.56mを測る。内部からは土器の小片が出土しただけであった。

**カマド** 東壁中央部分に構築されていた。残存状態は焚口と燃焼部の天井は壊され、崩落した状態であったが、燃焼部側壁と煙道部は現状のまま残存していた。規模は、全長2.28m、煙道部長1.10m、全幅1.05m、煙道部幅0.28m、焚口部幅0.36m、燃焼部幅0.59mを測る。燃焼部は焚口よりやや窪められており、燃焼部底面から煙道にかけて灰が残存していた。

**出土遺物** 図示した遺物のうち、6・9の土師器杯はカマドから、3を除いた他は床面からの出土である。3は床面よりやや上位からの出土である。図示した以外の遺物では土師器大型製品片79点・小型製品片19点、須恵器大型製品片1点・小型製品片1点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は出土した遺物から7世紀前半に比定できる。



A-A'・B-B'

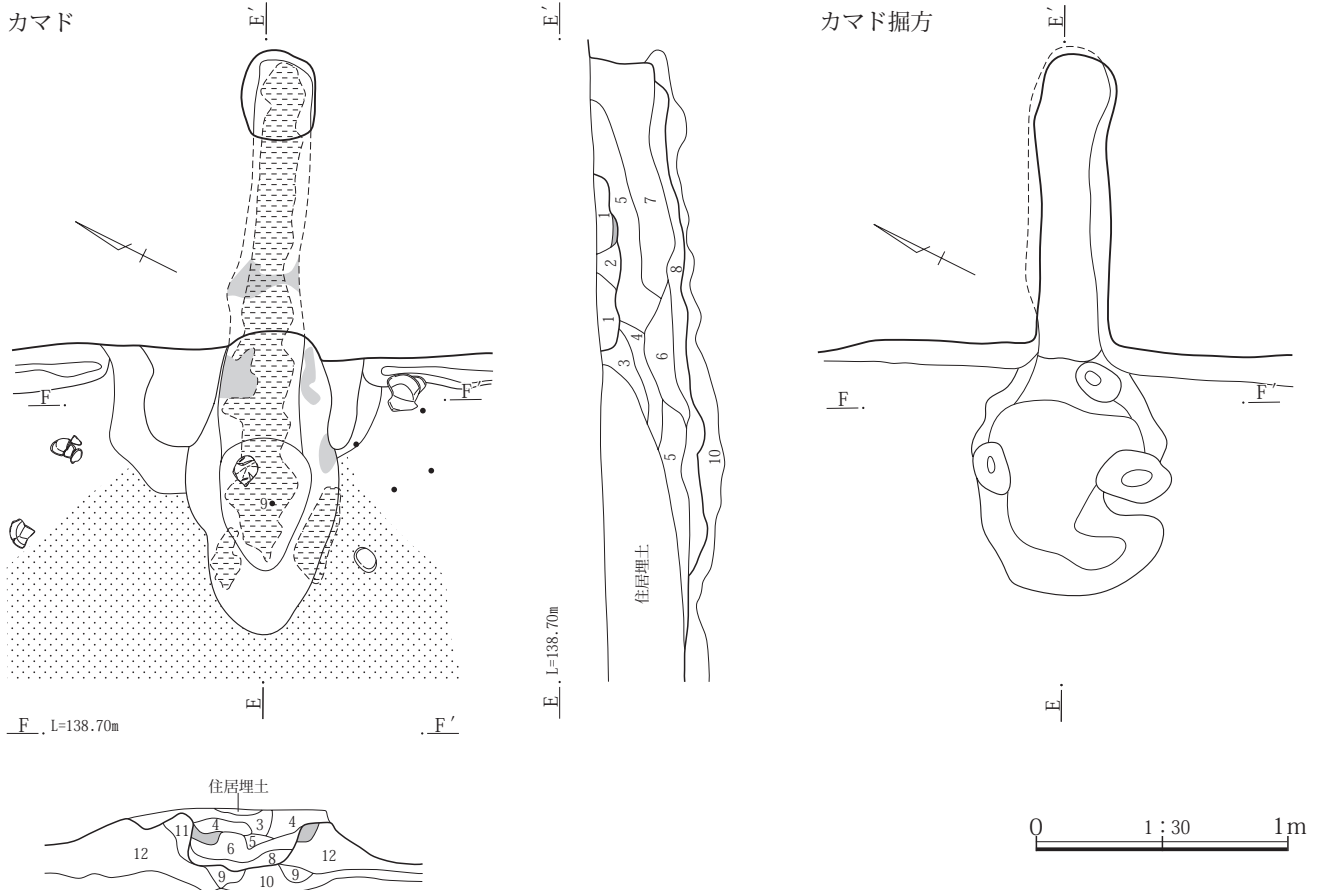
1. 黒褐色土 Hr-FP多量・にぶい黄褐色ロームブロック少量含む。
2. 灰黄褐色土 Hr-FP・にぶい黄褐色ロームブロック少量含む。
3. 灰黄褐色土 少量の白色軽石と微量のロームブロックを含む。
4. 黒褐色土 Hr-FP少量・ローム粒子含む。
5. 黒褐色土 Hr-FP少量・焼土粒子微量含む。
6. 黒褐色土 少量の白色粒石と焼土粒を含む。
7. 灰黄褐色土 Hr-FP少量・ローム粒子含む。
8. にぶい黄褐色土 Hr-FP微量含む。
9. 暗褐色土 Hr-FP微量含む。P1埋土。

10. にぶい黄褐色土 Hr-FP微量含む。掘方埋土、貼床土上層。
11. 黒色土 Hr-FP微量含む。掘方埋土、貼床土下層。
12. 灰黄褐色土 Hr-FP少量・にぶい黄褐色 砂質ローム小ブロック微量含む。掘方埋土。

D-D'

1. 黒褐色土 白色軽石多量・黄色砂質シルト小ブロック少量含む。
2. 暗褐色土 Hr-FP微量含む。
3. 灰黄褐色土 Hr-FP微量含む。

第132図 2区3号竪穴住居遺構図(1)・出土遺物図



E-E'・F-F'

1. 暗褐色土 Hr-FP含む。
2. 灰黄褐色土 Hr-FP含む。焼土粒微量含む。
3. 黒褐色土 Hr-FP多量含む。
4. 暗褐色土 Hr-FP微量含む。
5. 灰黄褐色土 Hr-FP多量・にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック少量・焼土ブロック含む。砂質。

6. 灰黄褐色土 焼土ブロック多量含む。崩落天井部土。
7. 灰黄褐色土 ローム漸移層土に焼土小ブロック少量含む。
8. 暗灰色土 床面構築土。灰多量・焼土含む。
9. 褐色土 床面構築土。灰微量・焼土含む。
10. 灰黄褐色土 掘方埋土。
11. にぶい黄橙色土 カマド構築材土。
12. 褐色土 カマド構築土。10層に類するが、色調暗い。

第133図 2区3号竪穴住居遺構図(2)

2区4号竪穴住居(第134～136図、PL.68～70・165)

**位置** 2区調査区北西部、85区F-16～18、G-16～18に位置する。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

**形状** 東西方向がわずかに長いがほぼ方形を呈す。

**規模** 長軸5.84m、短軸5.70mを測る。

**面積** 27.35㎡

**方位** N-73°-E

**埋没状態** 土層断面では壁際に近い部分が三角堆積した後、中ほどが灰黄褐色砂質土によって埋没しているのが観察できることから自然埋没と想定される。

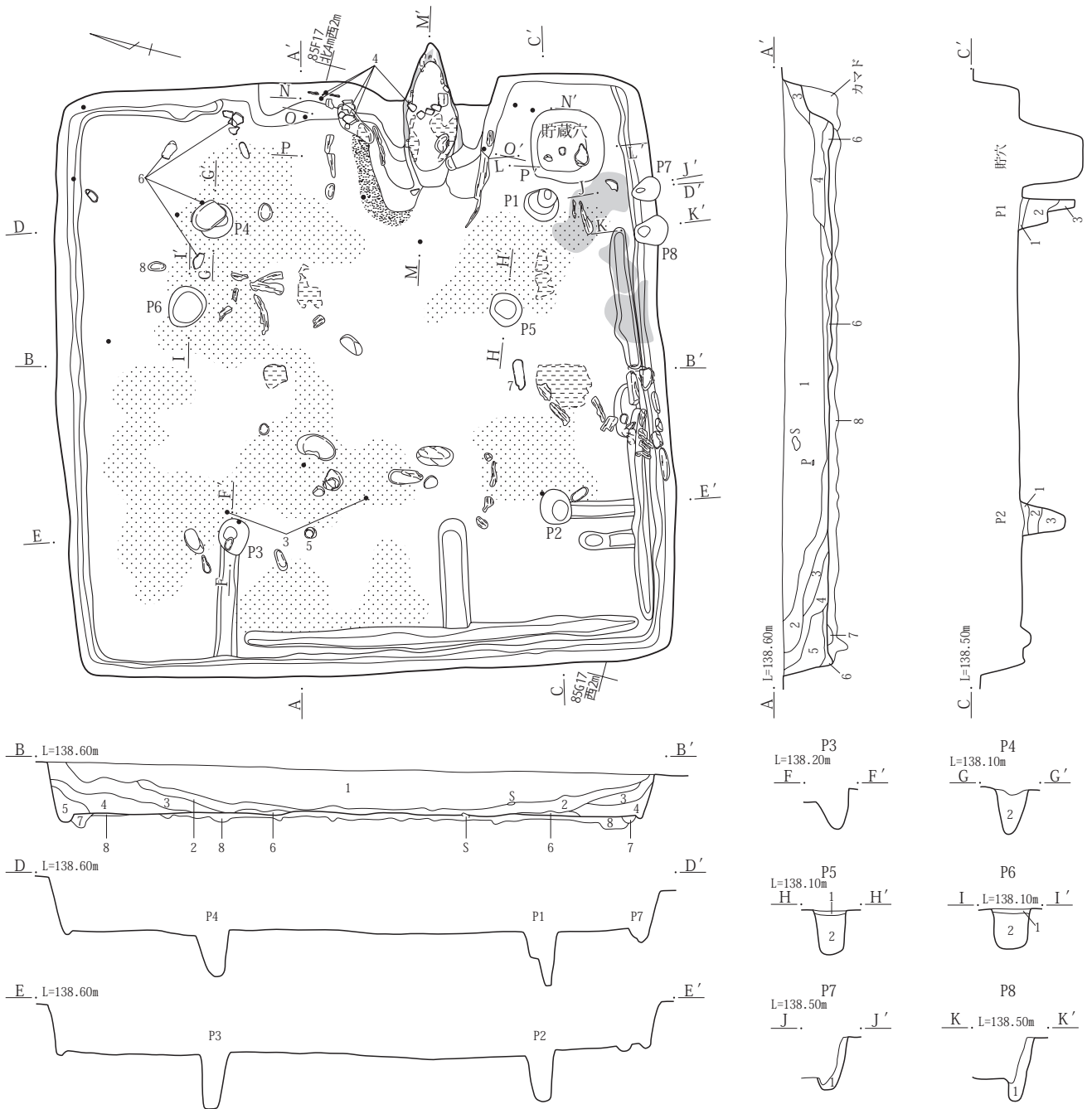
**床面** 全面を掘方面より5cm前後灰黄褐色土を埋め戻して構築されている。床面の状態はカマド前部はあまり硬化していなかったが、その周囲は硬化しているのが確認

された。

**確認面から床面までの深さは、0.33～0.52mを測る。**  
**掘方** 浅い掘り込みが住居全体に行われていたが、床下土坑などの施設はみられなかった。

**壁溝** カマドと東辺のカマド両側を除いた各辺壁下で検出した。規模は上端0.05～0.15m、下端0.02～0.14m、深さ0.04～0.12mを測る。

**柱穴** 各角寄りから4本とP1、P4の内側から2本の計6本を検出した。このうち、P1～P4は竪穴住居平面の対角線上に位置することから支柱穴とみられる。P5とP6は支柱穴より若干北側にずれる位置関係であり、この柱がどのような役割を持っていたかについては明確にできなかった。形状と規模は次のとおりである。P1は、楕円形、長軸0.34m、短軸0.30m、深さ0.51m。P2は、楕円形、長軸0.34m、短軸0.30m、深さ0.42m。



A-A'・B-B'

1. 灰黄褐色砂質土 Hr-FP多量・炭化物少量、焼土粒子含む。
2. 灰黄褐色土 Hr-FP微量含む。
3. 黒褐色土 Hr-FP少量含む。
4. 灰黄褐色土 Hr-FP少量・にぶい黄褐色土ブロック含む。
5. 黒褐色土 Hr-FP少量・にぶい黄褐色土ブロック含む。
6. 灰黄褐色土 炭化物多量・焼土ブロック少量含む。
7. 黒褐色土 にぶい黄褐色砂質ロームブロック少量・白色軽石微量含む。
8. 灰黄褐色土 FA、FP粒・炭化物・焼土粒微量含む。硬化層土。

G-G'・H-H'・I-I'

1. 暗褐色土 白色軽石粒多量・焼土粒子少量・炭化物含む。
2. にぶい黄褐色土 炭化物少量含む。

J-J'・K-K'

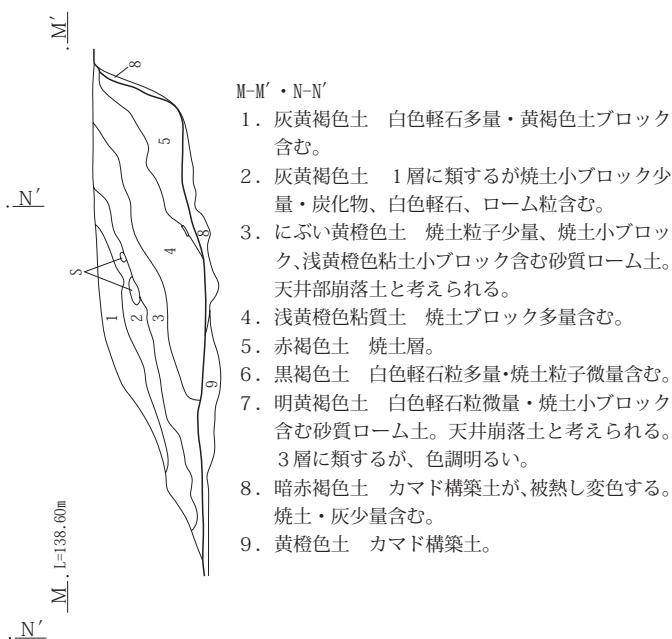
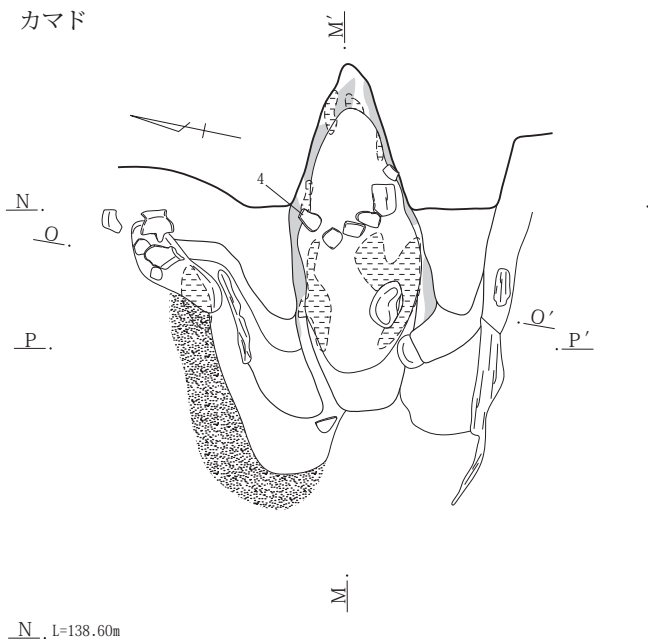
1. 暗褐色土 Hr-FP多量含む。

L-L'

1. 黒褐色土 白色軽石粒多量・大粒の炭化物・にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック少量含む。
2. 灰黄褐色砂質土 にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック少量・大粒の炭化物含む。
3. にぶい黄褐色弱粘質土 黒褐色土ブロック少量含む。

第134図 2区4号竪穴住居遺構図(1)

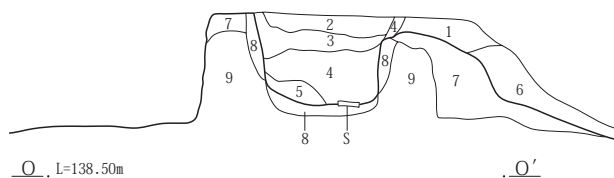
カマド



- M-M'・N-N'
1. 灰黄褐色土 白色軽石多量・黄褐色土ブロック含む。
  2. 灰黄褐色土 1層に類するが焼土小ブロック少量・炭化物、白色軽石、ローム粒含む。
  3. にぶい黄橙色土 焼土粒子少量、焼土小ブロック、浅黄褐色粘質土小ブロック含む砂質ローム土。天井部崩落土と考えられる。
  4. 浅黄橙色粘質土 焼土ブロック多量含む。
  5. 赤褐色土 焼土層。
  6. 黒褐色土 白色軽石粒多量・焼土粒子微量含む。
  7. 明黄褐色土 白色軽石粒微量・焼土小ブロック含む砂質ローム土。天井崩落土と考えられる。3層に類するが、色調明るい。
  8. 暗赤褐色土 カマド構築土が、被熱し変色する。焼土・灰少量含む。
  9. 黄橙色土 カマド構築土。

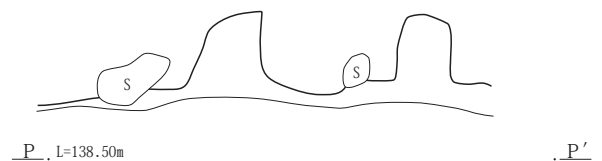
N, L=138.60m

N', L=138.60m



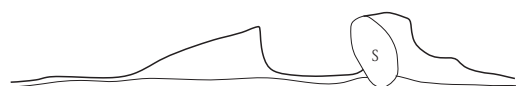
O, L=138.50m

O'

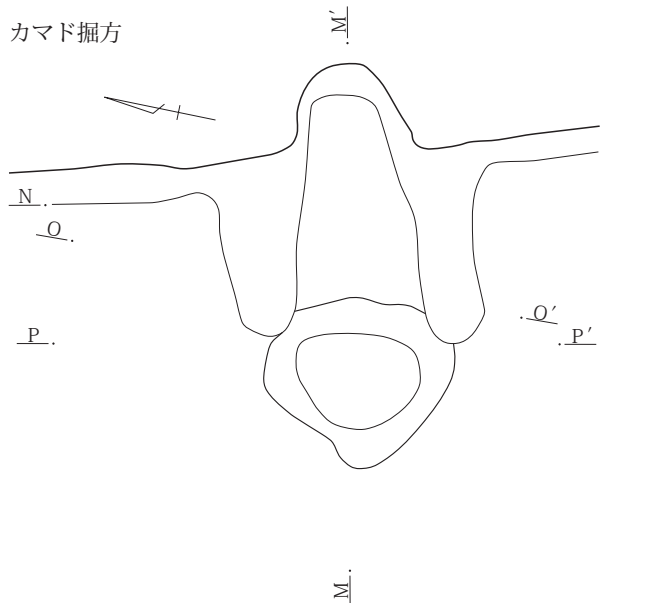


P, L=138.50m

P'



カマド掘方



0 1:30 1m

P 3は、楕円形、長軸0.32m、短軸0.28m、深さ0.52m。  
 P 4は、楕円形、長軸0.32m、短軸0.28m、深さ0.45m。  
 P 5は、楕円形を呈し、長軸0.32m、短軸0.30m、深さ0.45m。  
 P 6は、楕円形、長軸0.40m、短軸0.34m、深さ0.03mを測る。柱穴間の距離は、P 1～P 2間が2.90m、P 2～P 3間が3.10m、P 3～P 4間が3.00m、P 4～P 1間が3.10mである。P 1～P 5間は1.00m、P 4～P 6間は0.90mとやや近接した位置関係である。

**入口施設** 南辺南東角から1.0mと1.3mの壁際にて小ピットを2基検出した。P 7は楕円形を呈し、長軸0.28m、短軸0.22m、深さ0.50mを測る。P 8も楕円形を呈し、長軸0.32m、短軸0.26m、深さ0.63mを測る。この2本のピット間は0.30mを測る。このピットは貯蔵穴と間仕切り溝との間に位置することから梯子などを設置した出入口施設に伴うピットと考えられる。

**間仕切り溝** 南辺と西辺の壁溝のやや内側にそれに直行する溝を検出した。南辺側は南西角から入口施設までの3.75mと南辺側から柱穴P 2にまでの間とそのわずかに西側、西辺側は南西角から3.80m、南西角から1.8m地点から東方向へ1.05m、間仕切り溝北端の北側、壁溝から柱穴P 3へかけて位置する。規模は幅が0.15～0.30m、深さ0.03～0.09mであった。

**貯蔵穴** 南東部隅にて検出した。形状は、隅丸方形を呈し、規模は長軸0.70m、短軸0.60m、深さ0.60mを測る。内部からは礫と土器の小片が出土している。

**棚状施設** カマド北側では床面より0.20mほど高く、長

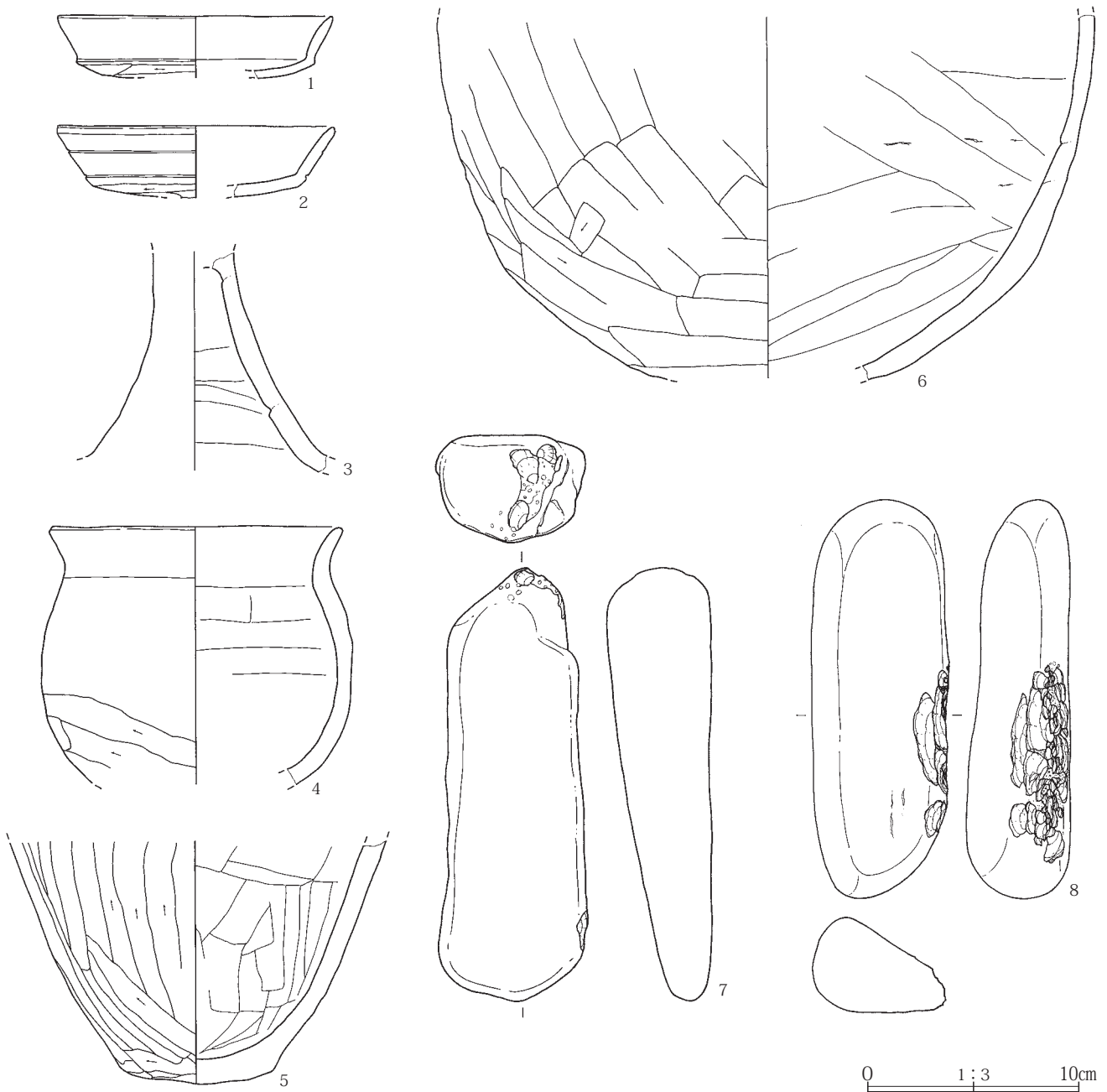
第135図 2区4号竪穴住居遺構図(2)

さ1.10m、幅0.20mほどの平坦面を構築しており、棚状施設の可能性が窺えた。この棚状施設から落ちるような状態で4の土師器甕が出土している。

**カマド** 東辺の中央よりやや南寄りに構築されていた。残存状態は焚口と燃烧部から煙道部の天井は壊されていたが、燃烧部側壁は残存していた。規模は、全長1.38m、全幅1.65m、焚口部幅0.46m、燃烧部幅0.48mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪められており、奥壁は燃烧部底面から120度ほどの角度で立ち上がっていた。燃烧部底面に灰が残存し、燃烧部側壁内側は激しく焼土化しており、使用の状態が窺えた。

**出土遺物** 本竪穴住居からの出土はみられたが、土器の出土はやや少量であった。そのため図示できた土器は6点と少ない。これらの土器では3の土師器高杯、5・6の土師器甕が床面付近で散乱した状態で出土していた。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片249点・小型製品片23点、須恵器大型製品片1点・小型製品片1点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は確実に相伴するとみられる遺物が少ないため不明な点もあるが、7世紀前半に比定できる。



第136図 2区4号竪穴住居出土遺物図

2区11号竪穴住居(第137~140図, PL.70・71・165・166)

**位置** 2区調査区北東部、84区Q-11・12、R-11~13、S-12に位置する。本竪穴住居は重複する遺構や隣接する谷地、攪乱のため一部不明な点がある。

**重複** 2区9号竪穴住居、10号竪穴住居と重複する。新旧関係は本竪穴住居の方が9号竪穴住居より新しく、10号竪穴住居より古い。

**形状** 重複する10号竪穴住居により北東角部を欠落するため明確ではないが、南東角と南西角がやや鋭角、北西

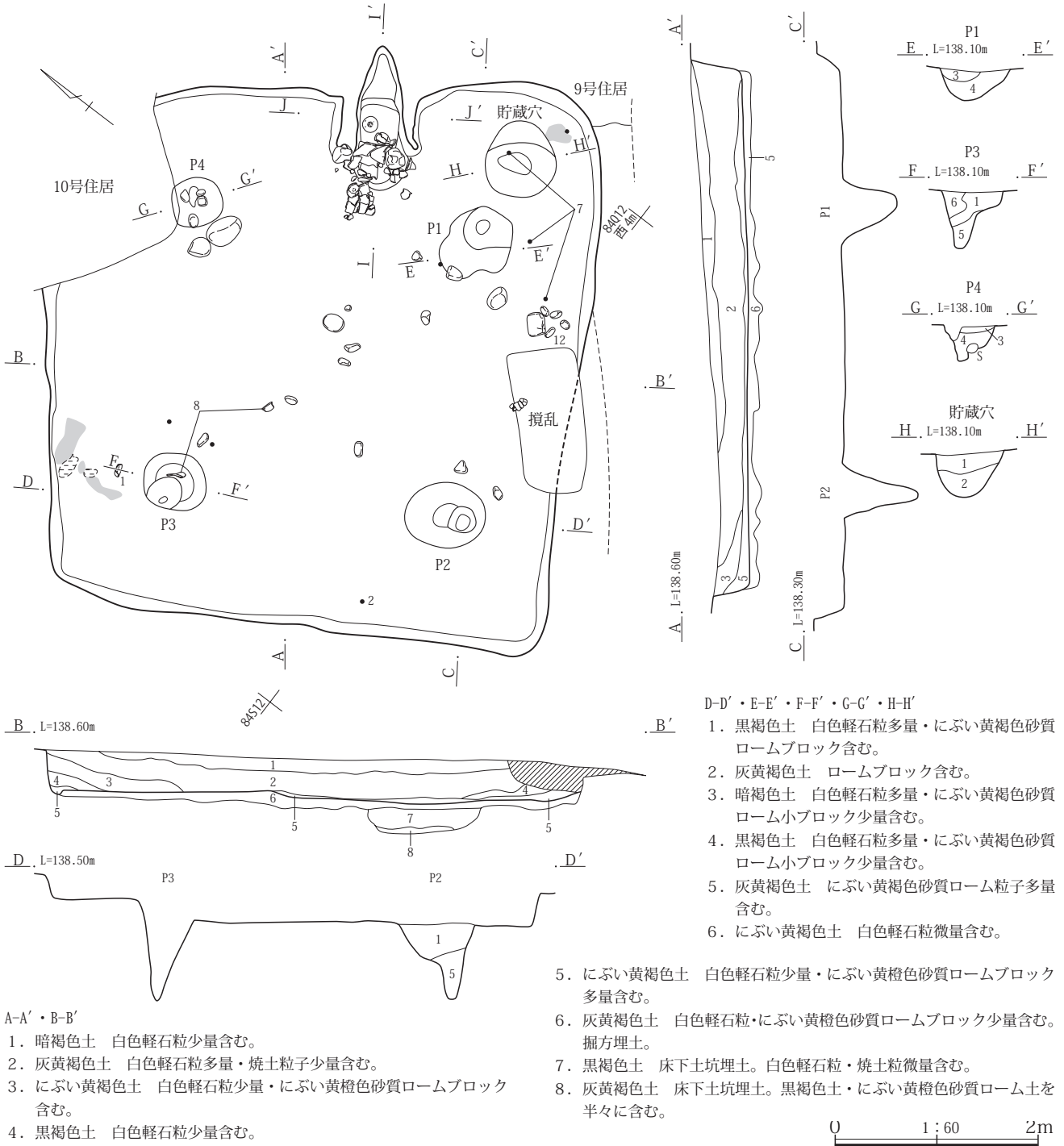
角がやや広角であることから南辺がやや長い台形状を呈するとみられる。

**規模** 長軸5.54m、短軸5.30mを測るが、長軸側も北辺側では5.15m、短軸側も西辺側では4.90mになる。

**面積** 残存範囲では25.71㎡を測る。

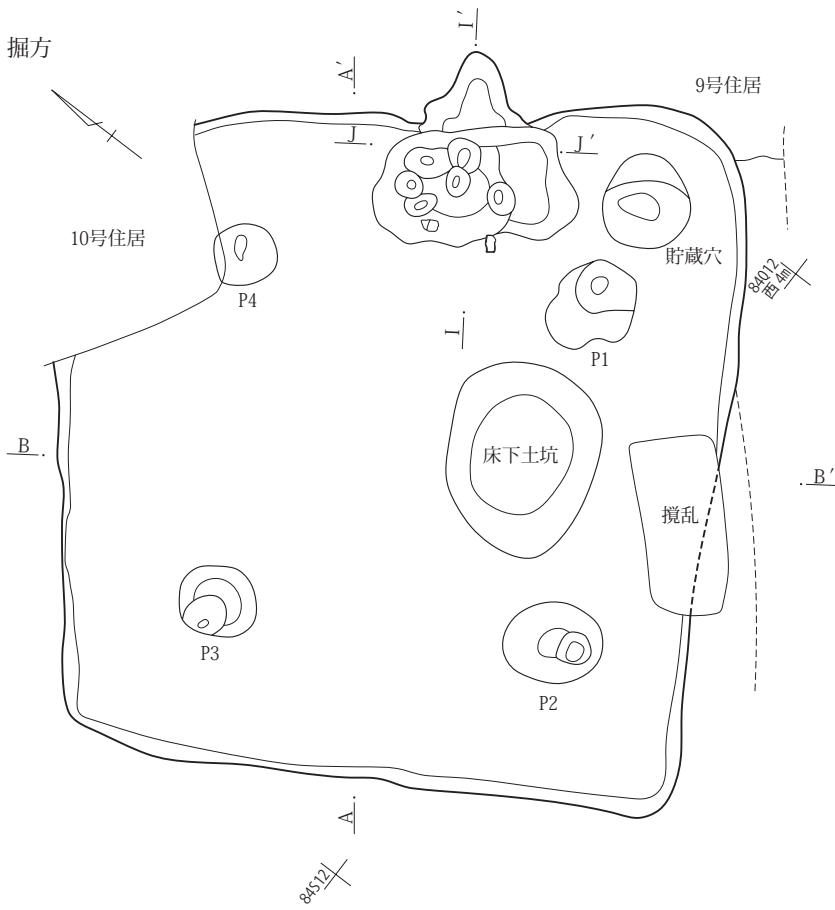
**方位** N-53°-E

**埋没状態** 土層断面では壁際に黒褐色土やにぶい黄褐色土が三角形に堆積した後、中ほどに灰黄褐色土や暗褐色土によるレンズ状の堆積が観察できることから自然埋



第137図 2区11号竪穴住居遺構図(1)

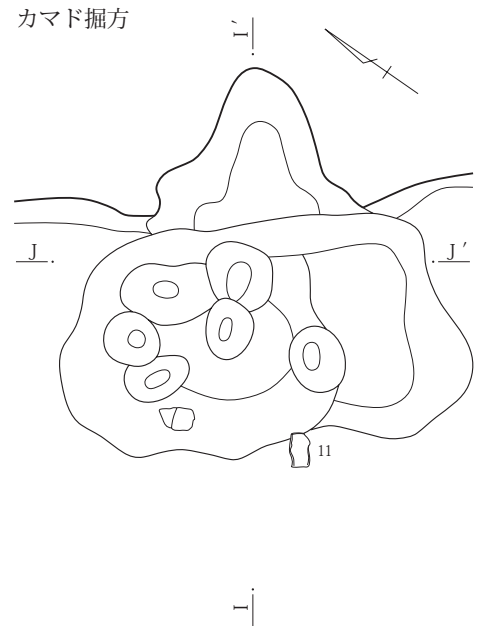
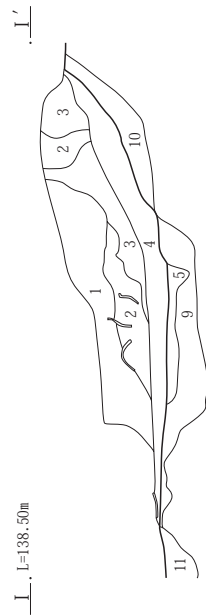
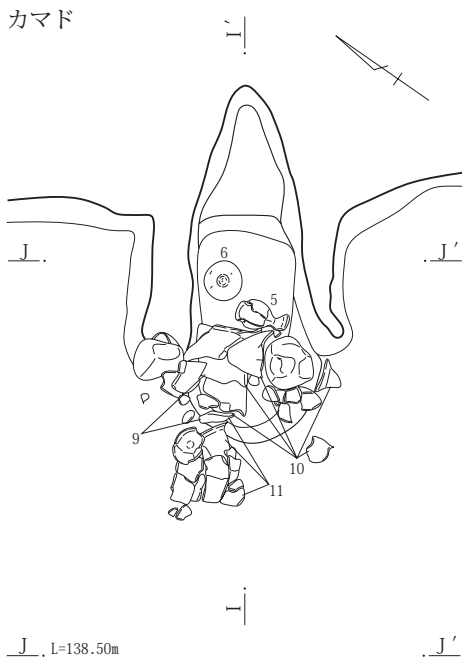




I-I'・J-J'

1. 暗褐色土 白色軽石粒多量・砂質ローム粒少量・焼土粒子含む。
2. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・焼土小ブロック・炭化物含む。
3. 灰黄褐色土 焼土小ブロック多量・にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック含む。
4. 灰黄褐色土 焼土小ブロック少量・炭化物含む。
5. 暗褐色土 灰少量・焼土小ブロック多量含む。床使用面。
6. 暗赤褐色土 カマド袖部が被熱し、赤色化する。焼土含む。
7. にぶい黄橙～にぶい黄褐色土 カマド袖構築土。地山砂質ローム主体、白色軽石粒微量含む。
8. にぶい黄褐色土 カマド袖構築土。地山砂質ローム漸移層土主体、Hr-PP少量含む。
9. 暗褐色土 白色軽石粒多量・にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック少量含む。
10. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・焼土粒含む。
11. 灰黄褐色土 住居掘方埋土。

0 1:60 2m



0 1:30 1m

第138図 2区11号竪穴住居遺構図(2)

没と想定される。

**床面** 掘方底面より5～10cmほど、にぶい黄褐色土・黒褐色土を埋め戻して構築している。床面の状態は若干の凹凸がみられるがほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.30～0.50mを測る。

**掘方** 浅い掘り込みが住居全体に施されていた。底面は掘削時の凹凸がそのまま残存していた。中央部分南壁寄りに、床下土坑を検出した。形状はやや不整な楕円形を呈し、規模は長軸1.54m、短軸1.20m、深さ0.37mを測る。内部から土器などの遺物は出土していない。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 各角寄りから4本を検出した。その位置関係はP1とP3は竪穴住居の対角線上に位置するが、P2とP4はややずれた位置である。しかし、この4本の柱穴はほぼ方形の配置を示している。各柱穴の形状と規模は次のとおりである。P1は、楕円形、長軸0.70m、短軸0.62m、深さ0.54m。P2は、楕円形、長軸0.80m、短軸0.65m、深さ0.37m。P3は、楕円形、長軸0.62m、短軸0.55m、深さ0.78m。P4は、楕円形、長軸0.50m、短軸0.45m、深さ0.39mを測る。柱穴間の距離は、P1～P2間が2.70m、P2～P3間が2.70m、P3～P4間が2.75m、P4～P1間が2.75mである。

柱痕は、各柱穴とも確認できず、土層断面の状態からは抜き取られた痕跡が観察できた。

**貯蔵穴** 南東隅にて検出した。形状は楕円形を呈し、規

模は長軸0.74m、短軸0.70m、深さ0.51mを測る。内部からは7の土師器甕の一部が出土している。

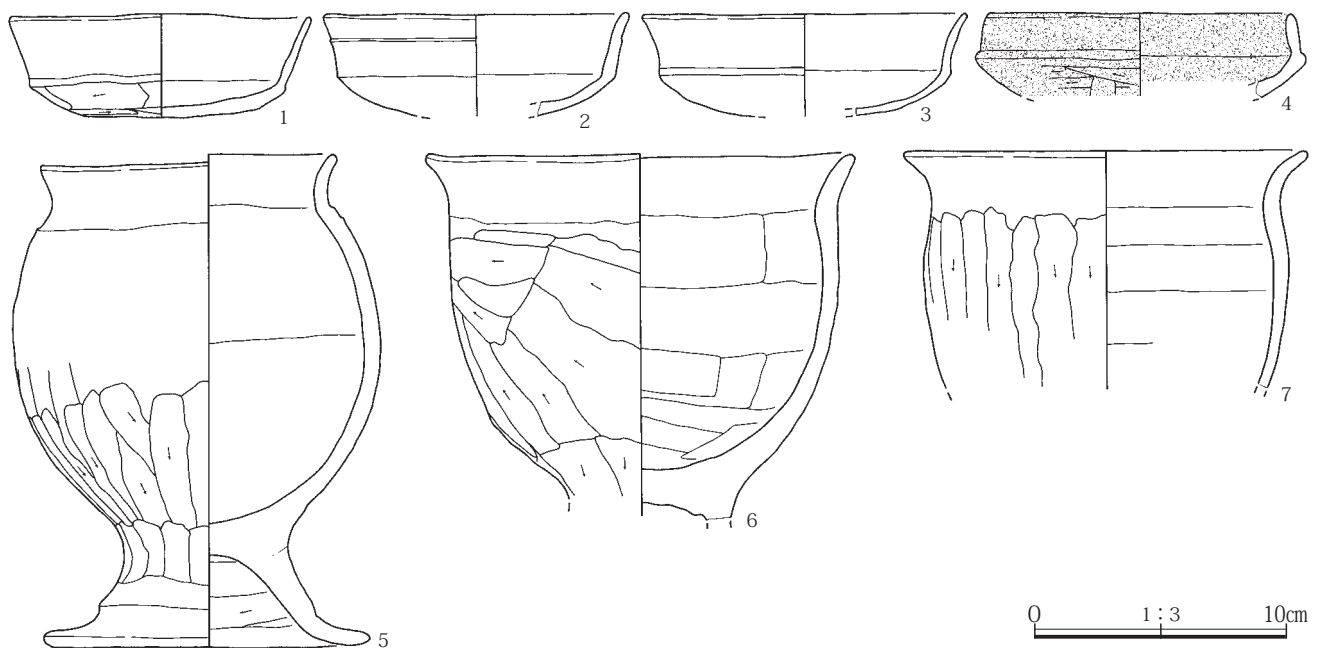
**カマド** 東辺中央よりやや南寄りに構築されていた。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井は壊されていたが、焚口の両側に据え付けられていたとみられる円柱状の礫や燃焼部側壁は残存していた。規模は、全長1.42m、全幅0.85m、煙道部長0.52m、焚口部幅0.52m、燃焼部幅0.48mを測る。燃焼部は焚口よりやや掘り下げられており、奥壁は緩やかな傾斜で立ち上がっていた。

掘方は、焚口部から燃焼部を南北軸を長軸として、楕円形状に掘り込まれていた。

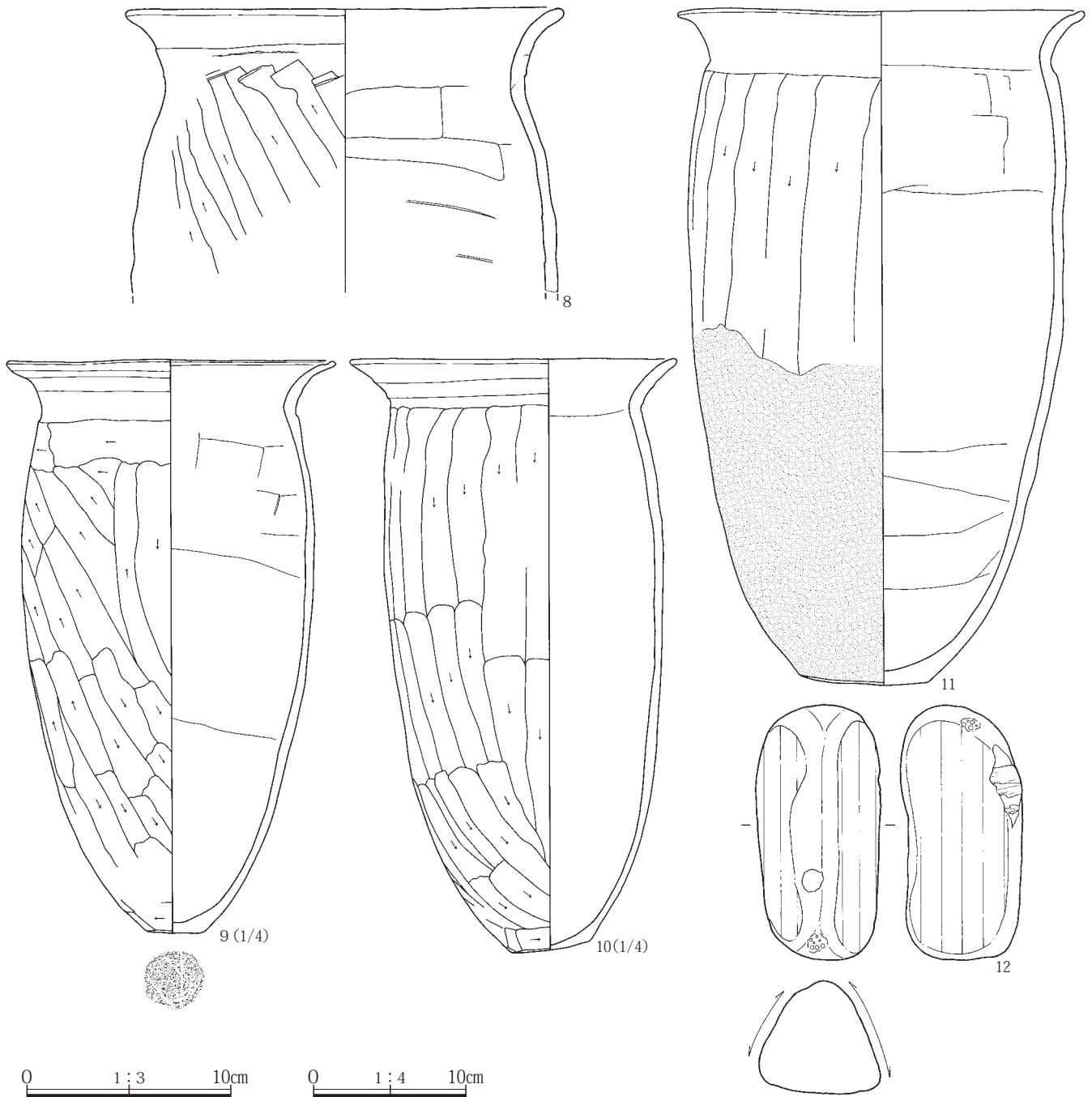
なお、焚口前から燃焼部にかけては5・6の土師器台付甕と9～11の土師器甕が出土している。これらの土器のうち、11は焚口天井の構築材、6は逆さに伏せてある状態から支脚、9と10は煮沸用に使われたとみられる。5については支脚として使用された可能性もうかがえるが、倒れた状態のため明確ではない。

**出土遺物** 図示した遺物のうち5・6と9～11はカマド、2は床面、7は貯蔵穴内と床面、8の土師器甕が柱穴P3と床面からの出土である。図示した以外の遺物では土師器大型製品片147点・小型製品片81点、須恵器大型製品片3点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期はカマドなどから出土した遺物から、7世紀前半に比定できる。



第139図 2区11号竪穴住居出土遺物図(1)



第140図 2区11号竪穴住居出土遺物図(2)

2区13号竪穴住居(第141・142図、PL.71・72・166)

**位置** 2区東部中ほど、84区S-11に位置する。

**重複** 近世に形成された谷地と重複する。新旧関係は本竪穴住居のほうが古い。なお、微高地から谷地へ移行する地点の土層は黒色土が堆積していたため遺構の確認が困難な面があった。そのため、谷地と住居床面との関係では明確にできていない点もある。

**形状** 住居東側が、谷地形に浸食されており、不明であるが、南北に長い長方形を呈す。

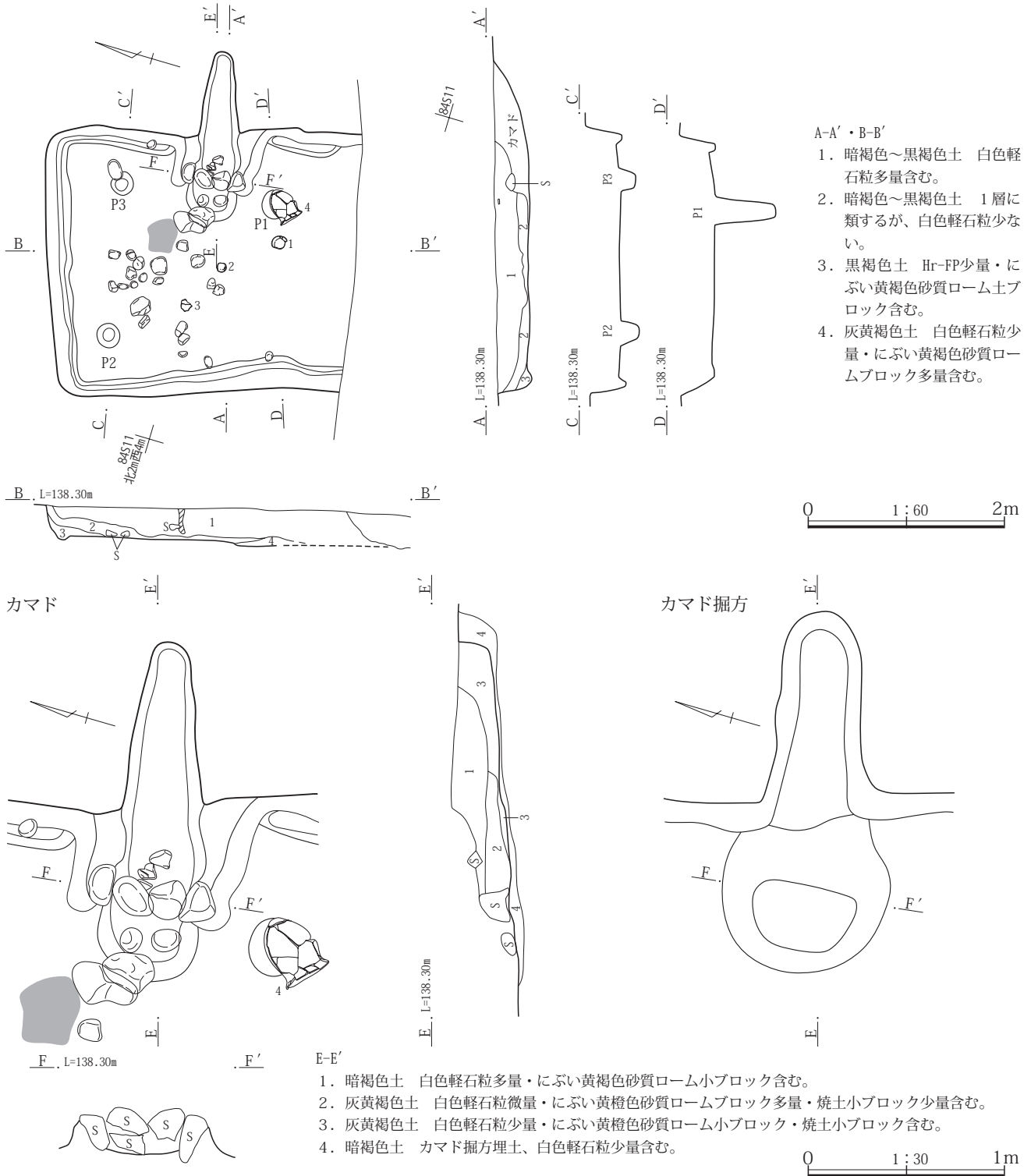
**規模** 長軸は把握できた範囲で4.16m、短軸2.74mを測る。

**面積** 把握できた範囲では8.50㎡を測る。

**方位** N-74°-E

**埋没状態** 土層断面では壁際に灰黄褐色土や黒褐色土による三角堆積がなされた後、暗褐色土などによるレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めている。床面の状態は若干の凹凸がみられるがほぼ平坦である。



第141図 2区13号竪穴住居遺構図

確認面から床面までの深さは、0.28～0.36mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は構築されていなかった。

**壁溝** 床面を把握できた東辺のカマドを除く部分と北辺、西辺の壁下で検出した。規模は上端0.15～0.32m、下端0.02～0.08m、深さ0.03～0.07mを測る。

**柱穴** 北東角、北西角寄りとカマド焚口南側で3本を検出した。形状と規模は、P1が楕円形を呈し、長軸0.30m、短軸0.27m、深さ0.63mを測る。P2は、円形を呈し、径0.24m、深さ0.21mを測る。P3は、楕円形を呈し、長軸0.24m、短軸0.22m、深さ0.17mを測る。柱穴間の距離は、P2～P3間が1.55m、P3・P1間が1.55m

である。

柱痕については確認できていない。なお、P 1 上面では1の土師器甕が倒れた状態で出土している。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

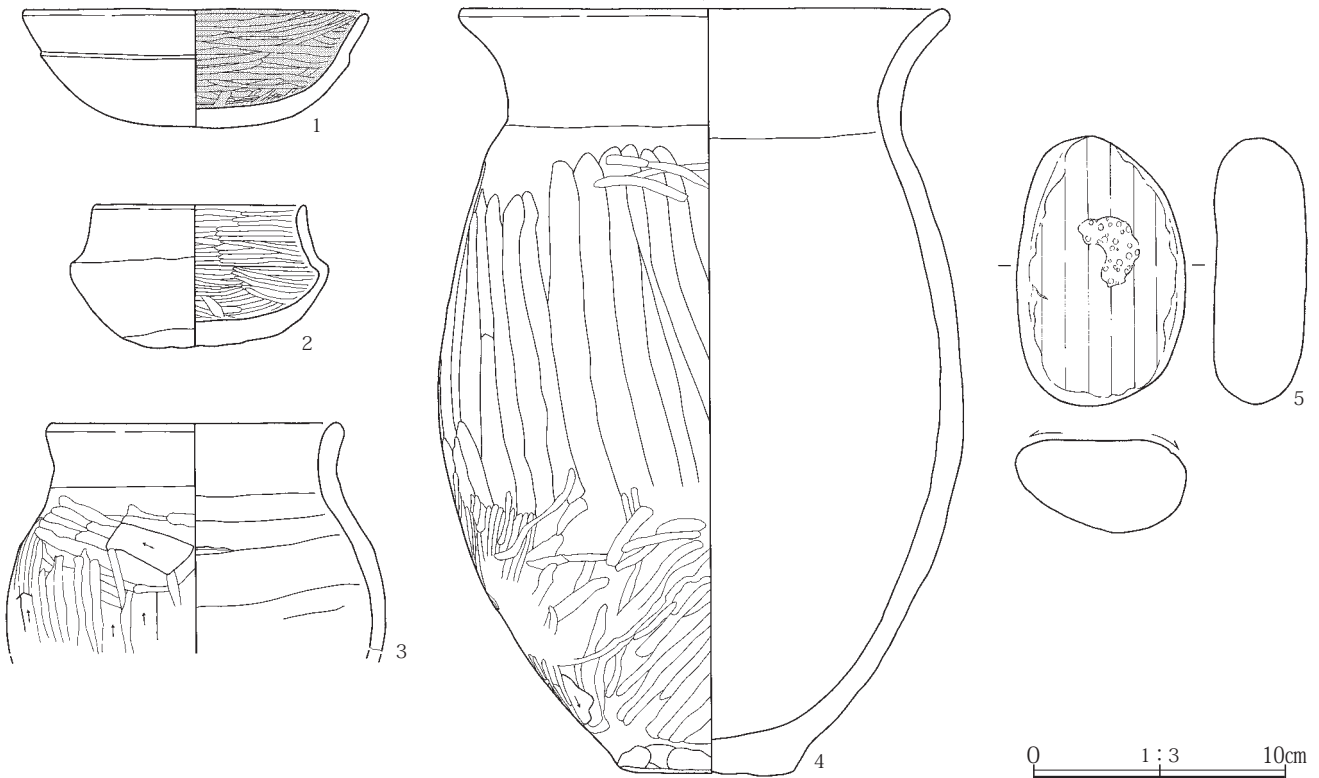
**カマド** 東壁の中ほどとみられる部分に構築されている。残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井が壊されているが、燃焼部側壁は残存していた。なお、燃焼部の構築材として使用されていた礫の一部は現状を保っていたが、燃焼部底面の礫は焚口などに使用されたものが廃棄された可能性がある。規模は、全長1.70m、全幅0.90m、煙道部長0.90m、焚口部幅0.48m、燃焼部幅0.42m

を測る。燃焼部は焚口よりやや掘り下げられている。煙道部奥壁はほぼ垂直に立ち上る。

掘方は、焚口部から燃焼部を南北軸を長軸として、径0.84×0.74mの楕円形状に5cmほど掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示した遺物は1～3の土師器杯・土師器短頸壺・土師器甕が床面、4がP 1からの出土である。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片95点・小型製品片16点、須恵器小型製品片1点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は床面などから出土した遺物から6世紀末から7世紀初頭に比定できる。



第142図 2区13号竪穴住居出土遺物図

2区14号竪穴住居(第143～146図、PL.72～74・166・167)

**位置** 2区調査区北東部、84区R-14～16、S-14・15に位置する。

**重複** 2区33号竪穴住居と重複し、15号竪穴住居とは接する位置関係である。新旧関係は33号竪穴住居より本竪穴住居のほうが古い。15号竪穴住居とは竪穴自体は重複していないが、位置関係から周堤帯が重複していたとみられる。

**形状** 北辺7.8m、東辺7.0m、南辺7.3m、西辺7.0mと各辺長に差がみられる状態で、南北にやや長い台形を呈

する。

**規模** 長軸7.84m、短軸7.50mを測る。

**面積** 51.18㎡

**方位** N-55°-E

**埋没状態** 土層断面では西側の一部に灰黄褐色土がわずかに堆積した後、全体を暗褐色土によって埋没した状況が観察できることから自然埋没と想定できる。

**床面** 掘方面から10～20cmほど灰黄褐色土を埋め戻して構築されている。床面の状態は若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。

第3章 検出遺構と出土遺物

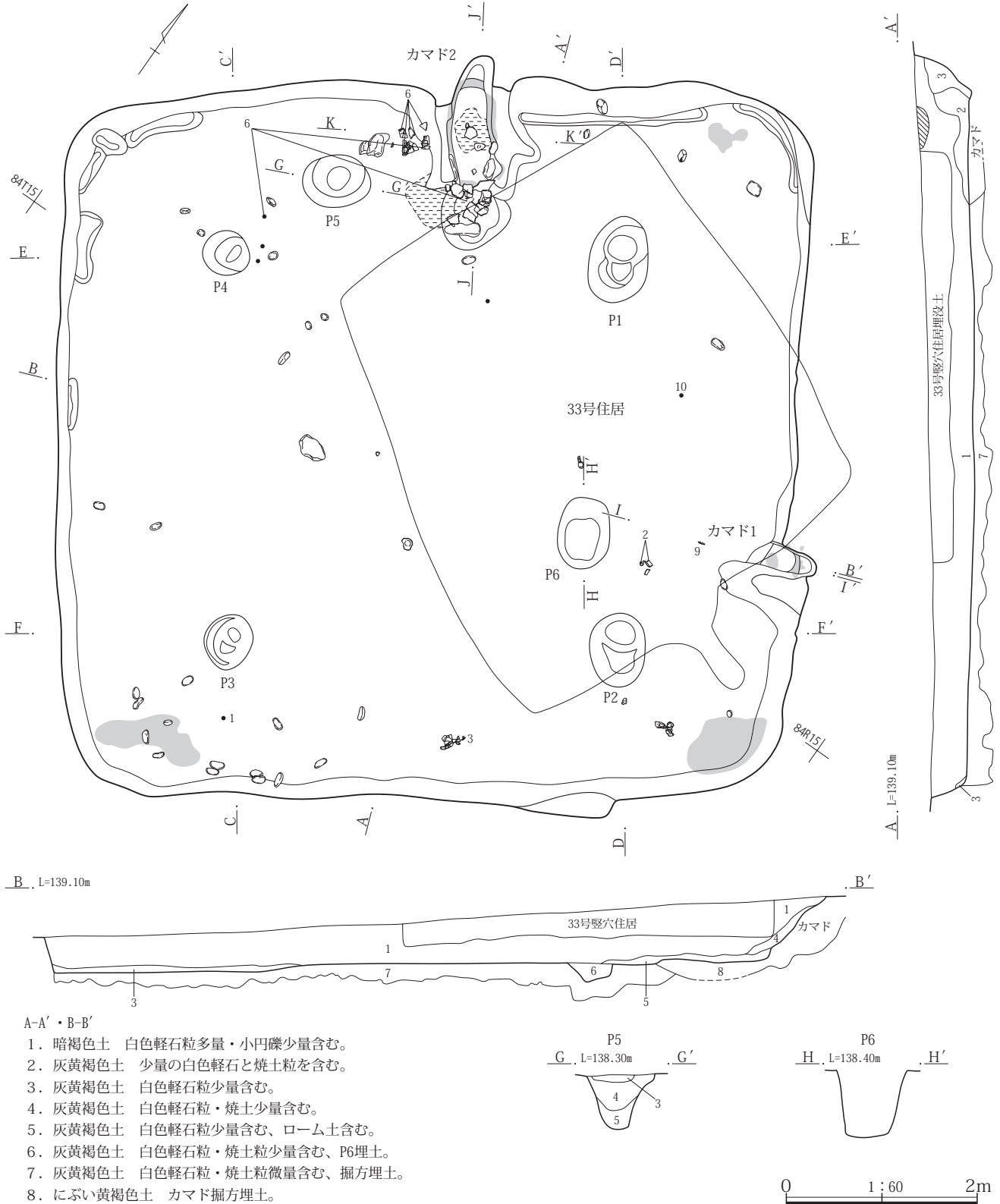
確認面から床面までの深さは、0.35～0.74mを測る。

**掘方** 全体的に床面より10～20cmほど掘り込まれているが、床下全域にわたって調査していないため全貌は不明である。

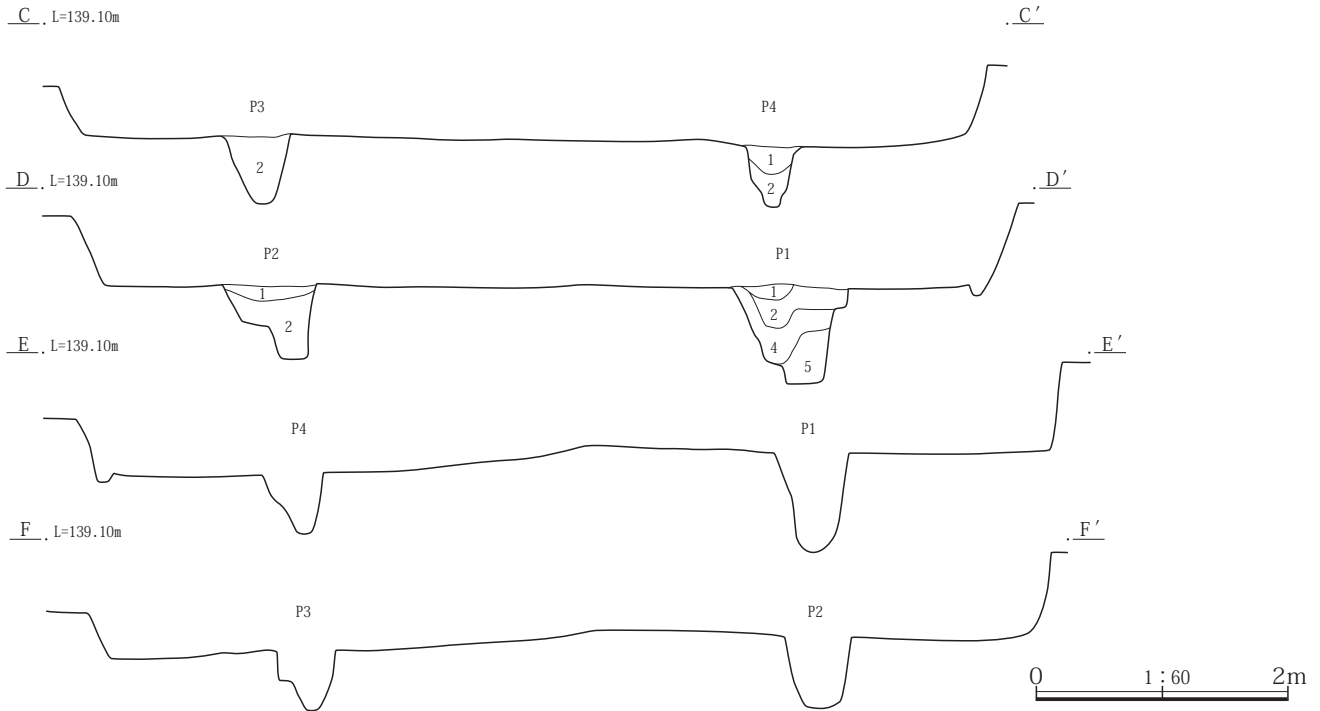
**壁溝** 北辺カマド東側から北東角までの壁下、西辺の北

半で断続的に壁下から検出した。規模は上端0.15～0.25m、下端0.02～0.22m、深さ0.02～0.07mを測る。

**柱穴** 竪穴住居平面の対角線上でP1～P4の4本とカマド2の西側にP5、カマド1の西側にP6の2本、計6本を検出した。P1～P4は前述のように対角線上に



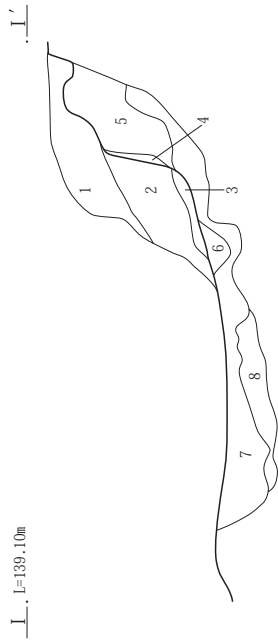
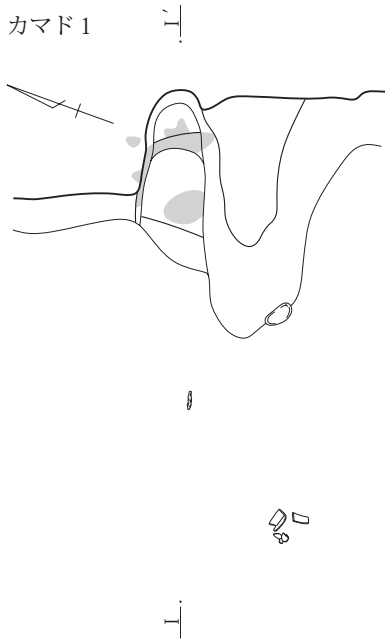
第143図 2区14号竪穴住居遺構図(1)



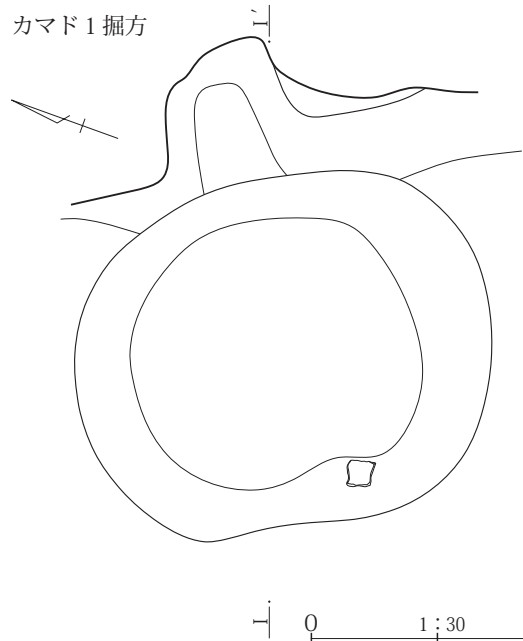
C-C'・D-D'・E-E'・F-F'

- |                                   |                                |
|-----------------------------------|--------------------------------|
| 1. 暗褐色土 白色軽石粒多量・黒色土ブロック含む。        | 3. 黒褐色土 白色軽石粒多量含む。             |
| 2. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・黄褐色砂質ローム小ブロック含む。 | 4. 灰黄褐色土 にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック多量含む。 |
|                                   | 5. 灰黄褐色土 にぶい黄褐色砂質ロームブロック少量含む。  |

カマド 1



カマド 1 掘方



I-I'

- |                                     |   |
|-------------------------------------|---|
| 1. 灰黄褐色土 Hr-FP多量・にぶい黄褐色砂質ローム粒子少量含む。 | 6. 暗褐色土 焼土粒子多量含む。                               |
| 2. 灰黄褐色土 天井部構築材崩落。                  | 7. 暗褐色土 にぶい黄褐色砂質シルト小ブロック多量・焼土小ブロック少量含む。カマド掘方上層。 |
| 3. 灰褐色土 灰層、焼土粒少量・炭化物含む。             | 8. 暗褐色土 白色軽石粒少量・にぶい黄褐色シルト小ブロック含む。カマド掘方下層。       |
| 4. 赤褐色土 壁が被熱し、赤色化する。                |   |
| 5. にぶい黄褐色土 にぶい黄褐色砂質ロームブロック多量含む。     |   |

第144図 2区14号竪穴住居遺構図(2)

位置することから支柱穴とみられるが、P 5、P 6については規模が同様であるが、その位置関係から役割・性格について判断ができなかった。形状と規模は次のとお

りである。P 1は楕円形、長軸0.92m、短軸0.64m、深さ0.79m。P 2は楕円形、長軸0.78m、短軸0.59m、深さ0.65m。P 3は楕円形、長軸0.59m、短軸0.50m、深

さ0.76m。P 4は円形、径0.48m、深さ0.52mを測る。柱穴間の距離は、P 1～P 2間が4.10m、P 2～P 3間が4.05m、P 3～P 4間が4.05m、P 4～P 1間が4.10mである。

なお、P 5は楕円形を呈し、長軸0.72m、短軸0.56m、深さ0.66mを測る。P 6は楕円形を呈し、長軸0.74m、短軸0.54m、深さ0.67mを測る。2基のピットの用途は不明である。

柱痕については明確ではないが、P 1～P 4では柱穴内部に一段掘り込まれている箇所がみつかることから、この箇所に据えられたとみられる。なお、断面観察では各柱とも抜き取られたとみられる。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

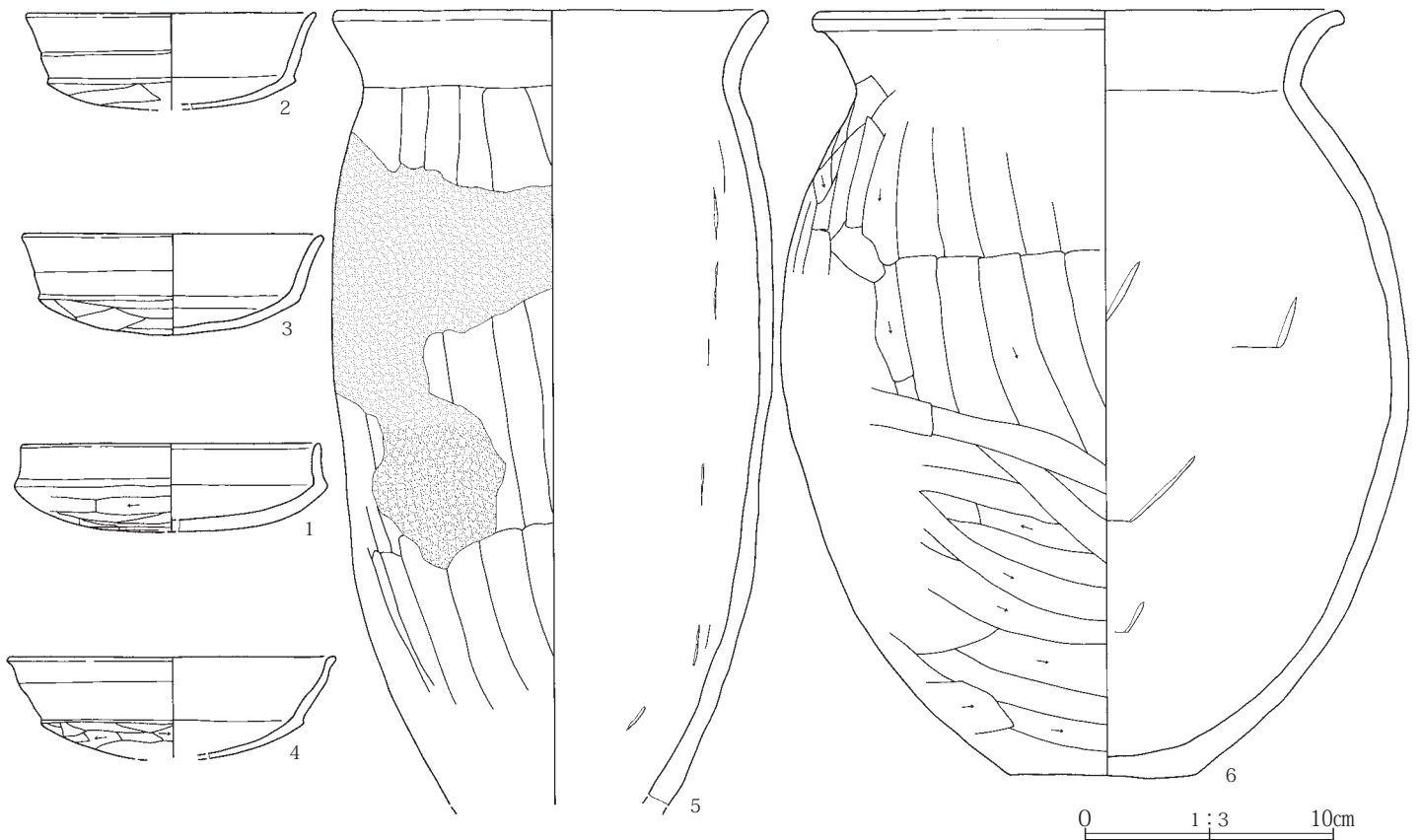
**カマド** 東辺の中央よりやや南寄りのカマド1と北辺中央部分のカマド2の2基が構築されていた。

カマド1は重複する33号竪穴住居によって焚口と燃焼部北側壁を欠落する。カマド1は、欠落する部分が多いため全貌を明らかにできないが、残存状態は燃焼部から煙道部の天井が壊されているが、燃焼部南側壁は残存していた。規模は、全長1.00m、全幅は残存部分で0.75m、

煙道部長0.25m、燃焼部幅0.45mを測る。燃焼部は焚口よりやや掘り下げられており、燃焼部から煙道部は垂直に近い立ち上がりで移行し、煙道部は緩やかな傾斜である。掘方は燃焼部を中心に径1.7×1.4mほどの楕円形状に20cmほど掘り込まれていた。

カマド2は、残存状態は焚口と燃焼部から煙道部の天井部は壊されているが、燃焼部側壁は残存、底面には支脚に使用されたとみられる礫が現状のまま残存していた。なお、焚口の前にはカマドに掛けられていたとみられる5の土師器甕や焚口の天井に構築材として使用されていた礫が散乱した状態で出土していた。規模は、全長2.01m、全幅1.20m、煙道部長0.40m、焚口部幅0.35m、燃焼部幅0.40mを測る。燃焼部は焚口よりわずかに窪み、煙道部との間には15cmほどの段をもつ。煙道部は平坦で煙道奥壁は急に上がっていた。掘方は、燃焼部から焚口にかけて三角形に掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示した遺物では5の土師器甕がカマド2前の床面、6の土師器甕がカマド2前の床面と埋没土中、1～3の土師器杯は床面よりやや上位からの出土である。7・8・11・12の金属器の紡錘車や鍬は埋没土中か



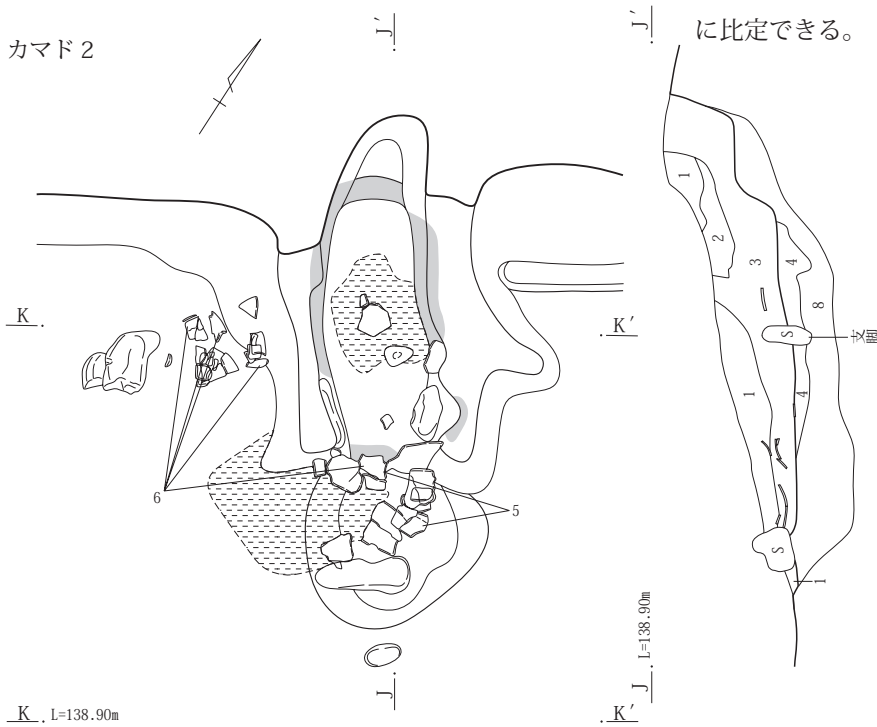
第145図 2区14号竪穴住居出土遺物図(1)



らの出土である。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片648点・小型製品片250点、須恵器大型製品片3点・小型製品片7点が出土している。

所見 本竪穴住居の時期は、確実に相伴するといえる遺物は、カマド前から出土している5の土師器甕だけであるため明確に断定できないが、6世紀末から7世紀初頭に比定できる。

カマド2

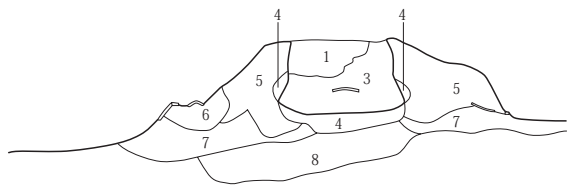


J-J'・K-K'

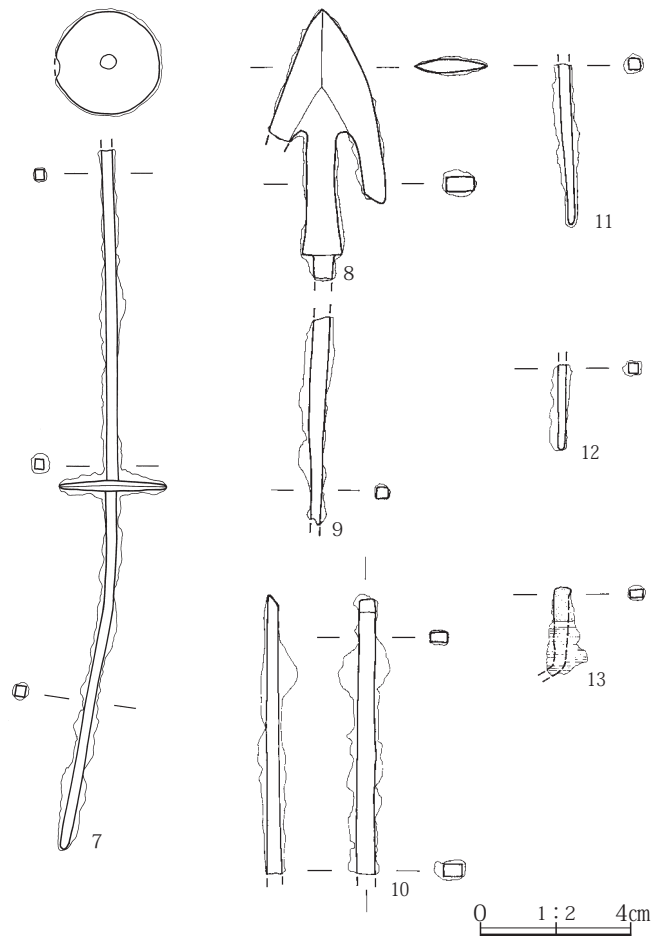
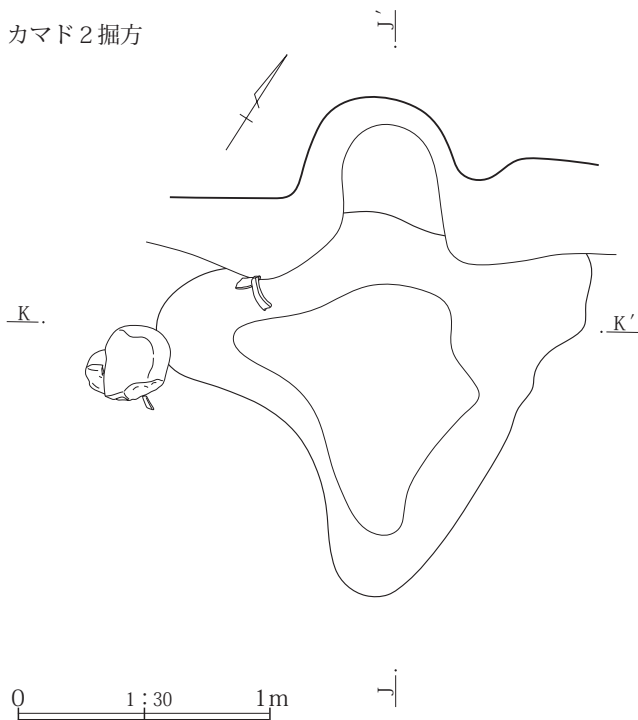
1. 暗褐色土 白色軽石粒多量・焼土粒子少量・焼土小ブロック・にぶい黄橙色砂質ローム小ブロック含む。
2. にぶい黄褐色土 焼土ブロック多量含む、天井部崩落土。
3. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・焼土小ブロック・にぶい黄橙色砂質ローム粒含む。
4. 暗赤褐色土 カマド構築土が被熱し、赤色化している。
5. にぶい黄褐色土 砂質ローム主体、白色軽石粒少量・焼土小ブロック含む、カマド袖構築土。
6. にぶい黄橙色土 白色軽石粒微量含む。ローム土、カマド袖構築土。Hr-FP微量含む。ローム土。
7. 灰黄褐色土 白色軽石粒多量・にぶい黄橙色砂質ローム粒少量含む、カマド掘方埋土
8. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・にぶい黄橙色砂質ロームブロック・焼土粒子微量含む、カマド掘方埋土。

K, L=138.90m

J, L=138.90m



カマド2掘方



第146図 2区14号竪穴住居遺構図(3)・出土遺物図(2)

2区15号竪穴住居(第147・148図、PL.74～76・167)

**位置** 2区調査区北東部、84区S-12～14、T-13～14に位置する。

**重複** 2区16号竪穴住居と4号掘立柱建物と重複し、14号竪穴住居とは接する位置関係である。新旧関係は2区4号掘立柱建物より本竪穴住居のほうが古く、16号竪穴住居より新しい。14号竪穴住居とは竪穴自体は重複していないが、位置関係から周堤帯が重複していたとみられる。

**形状** 北東角が70度とやや鋭角で、東辺はカマド部分で屈曲し、各辺長も東辺5.3m、南辺5.0m、西辺5.3m、北辺5.9mと差がみられる、やや歪な四角形を呈する。

**規模** 長軸6.0m、短軸5.94mを測る。

**面積** 27.75m<sup>2</sup>

**方位** N-108°-E

**埋没状態** 土層断面では周囲からにぶい黄褐色土、灰黄褐色土、暗褐色土が流れ込んで堆積した状態が観察できることから、自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より5～20cmほど灰黄褐色土を埋め戻して構築されていた。

確認面から床面までの深さは、0.31～0.46mを測る。住居南側部分と北側の一部が硬化していた。

**壁溝** 南壁・西壁・北壁の一部で確認された。上端0.13～0.30m、下端0.01～0.05m、深さ0.03～0.08mを測る。

**掘方** 床面から5～20cmほど掘り込まれていたとみられる。土層断面では底面は掘削時の凹凸が激しいようである。

**柱穴** 各角寄り、竪穴住居平面の対角線上で4本を検出した。各柱穴の形状と規模は次のとおりである。P1は円形を呈し、径0.34m、深さ0.62mを測る。P2は、不整形を呈し、長軸0.36m、短軸0.34m、深さ0.54mを測る。P3は、円形を呈し、径0.34m、深さ0.61mを測る。P4は、不整形を呈し、長軸0.34m、短軸0.32m、深さ0.53mを測る。柱穴間の距離は、P1～P2間が2.90m、P2～P3間が3.05m、P3～P4間が2.85m、P4～P1間が2.85mである。

柱痕は、明確ではないが、P4の土層断面では柱径が7cm前後であったと推測される。なお、P1～P3の断面観察から、各柱は抜き取られたとみられる。

**貯蔵穴** 南東隅にて確認された。形状は平面が隅丸方形、

断面は逆台形状を呈し、規模は長軸0.82m、短軸0.68m、深さ0.77mを測る。内部からは土器の小片が出土しているだけであった。

**カマド** 東辺の中央よりやや南寄りに構築されていた。残存状態は焚口と燃烧部から煙道部の天井が壊されていたが、燃烧部側壁は残存していた。なお、焚口からカマド前にかけては30～40cm大の垂角礫が出土しており、カマドの構築材とみられるが、使用箇所については明らかにできなかった。また、燃烧部からは3の土師器杯と7の土師器甕が出土しているが、残存率が少なくカマドでの使用については疑問がもたれた。規模は、全長1.58m、全幅1.20m、煙道部長0.52m、燃烧部幅0.46mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪み、煙道部は比較的急な傾斜で上がっていた。燃烧部には3cmほどの厚さで灰が残存していた。

掘方は燃烧部を中心に歪な楕円形が連続する形状に掘り込まれており、焚口には構築材として礫が使用されていたことが窺えた。

**出土遺物** 図示した遺物のうち、3・7はカマド、5の土師器杯が貯蔵穴、2・4・6の土師器杯と甕が床面からの出土である。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片52点・小型製品片13点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期はカマドや床面などから出土した遺物から6世紀末から7世紀初頭に比定できる。

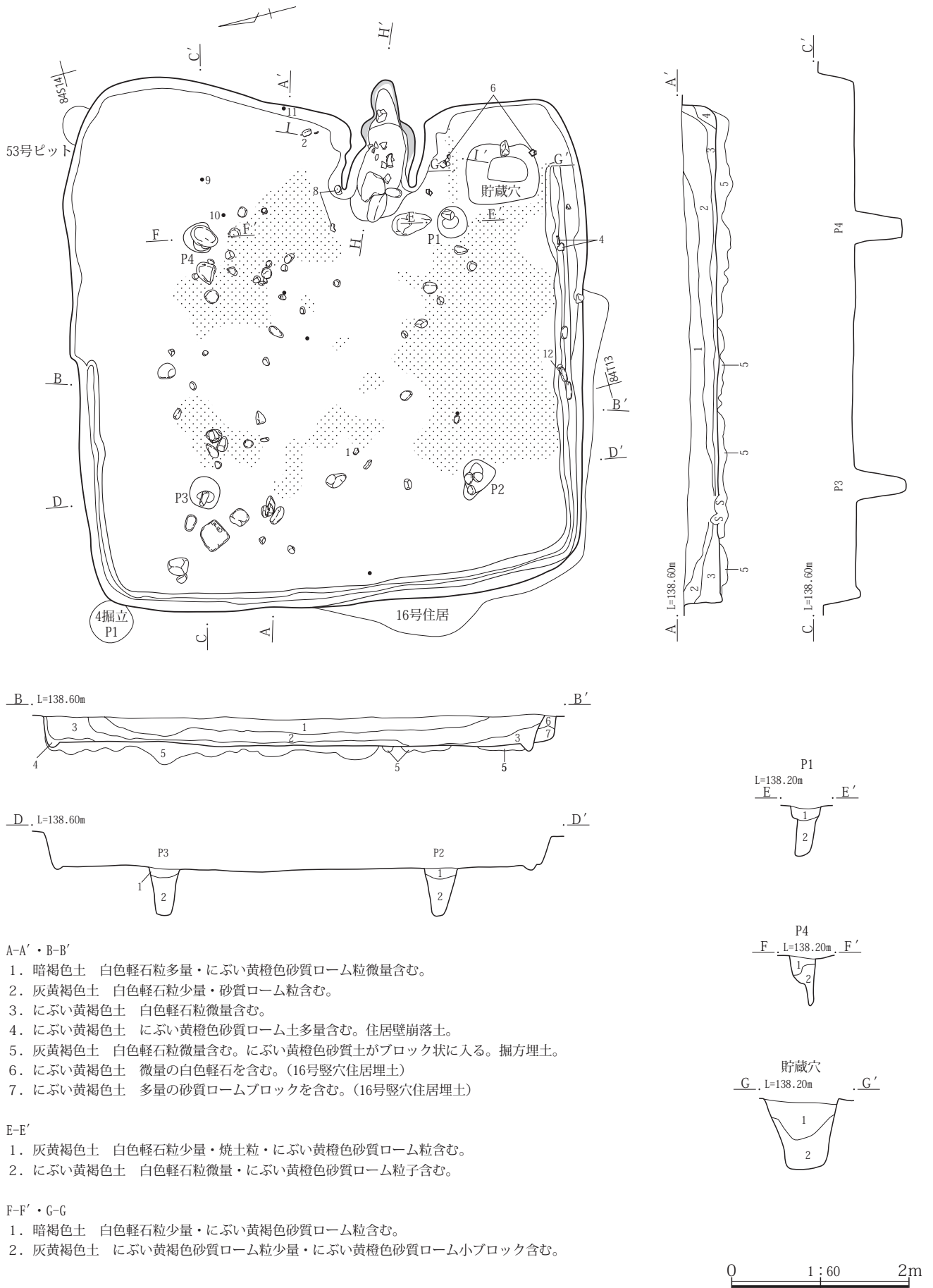
2区16号竪穴住居(第147図)

本竪穴住居は大部分が2区15号竪穴住居と重複しており、検出された箇所は南辺と西辺の一部だけであるため、全貌が不明である。なお、本竪穴住居は15号竪穴住居を調査中に土層断面で確認されたのである。

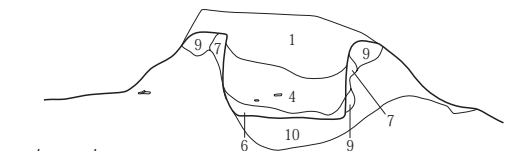
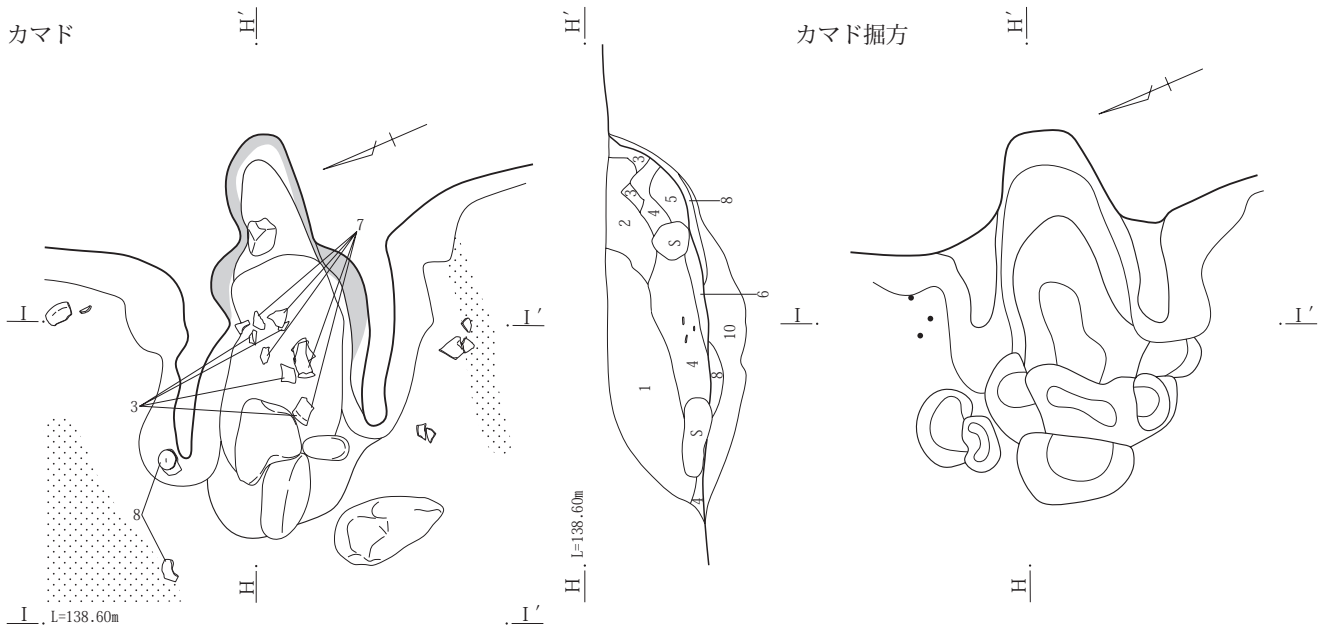
南辺は3.00mを測り、確認面から床面までの高さは0.30～0.39mであった。

出土遺物については確認されなかった。

**所見** 発掘調査の状況から15号竪穴住居より古い時期であることは判断できたが、出土遺物が確認できないことなどから時期については不明とする。

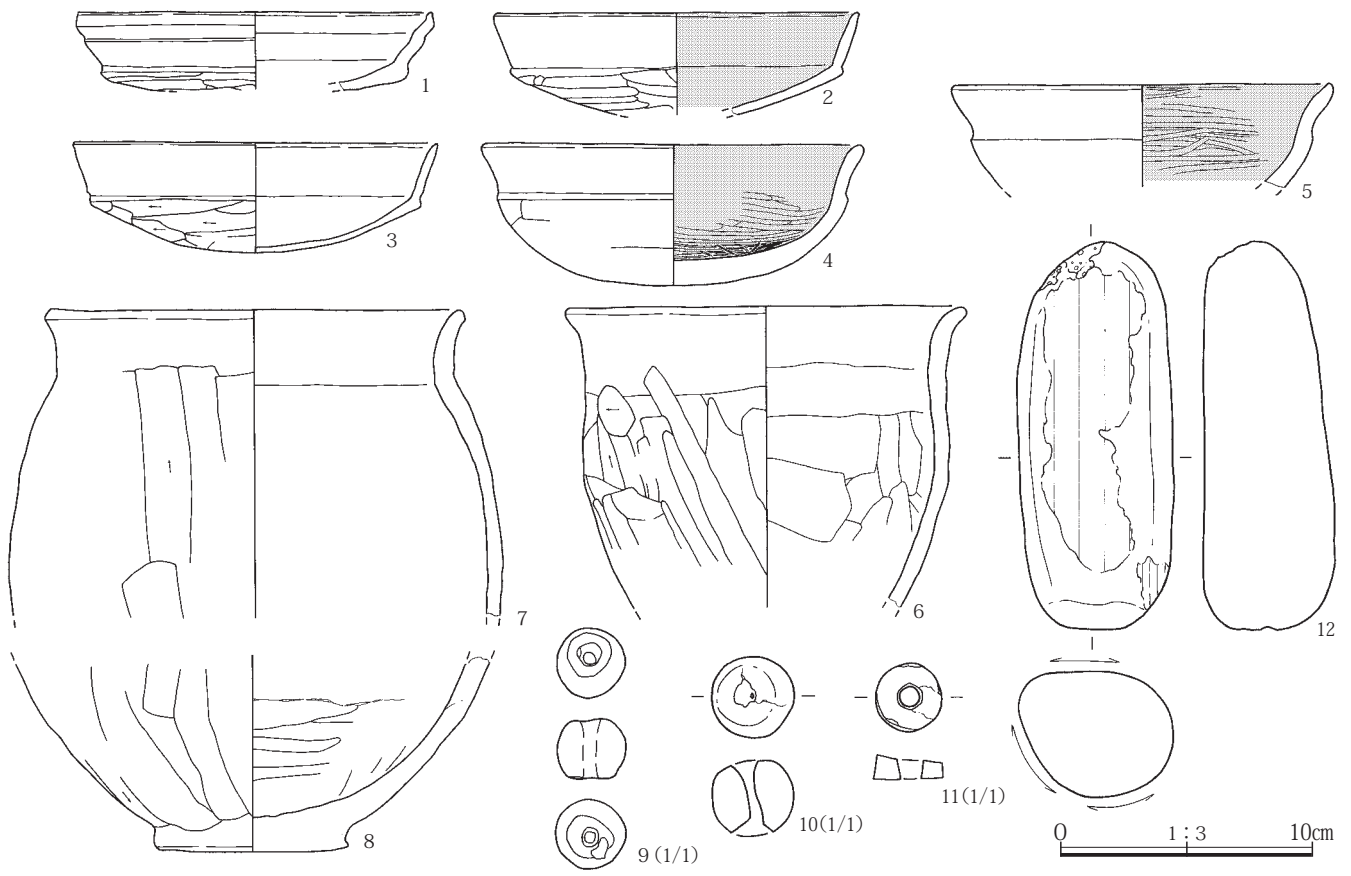


第147図 2区15号竪穴住居遺構図(1)・16号竪穴住居遺構図



- H-H'・I-I'
1. にぶい黄褐色土 白色軽石粒多量・にぶい黄橙色砂質シルト粒子・焼土粒少量含む。
  2. にぶい黄褐色土 焼土ブロック多量・にぶい黄橙～浅黄橙色シルトブロック・白色軽石粒少量含む。
- 0 1:30 1m

3. 黒褐色土 焼土粒子微量含む。
4. 灰黄褐色土 焼土粒多量・焼土小ブロック・にぶい黄橙色砂質シルト小ブロック少量含む。
5. 黒褐色土 焼土ブロック少量含む。
6. 灰層 焼土粒子少量含む。
7. 赤褐色土 カマド袖部が被熱し、赤色化する。
8. 灰黄褐色土 にぶい黄橙色砂質ローム小ブロック多量含む。カマド構築土。
9. 明黄褐色土 カマド袖構築材。
10. 灰黄褐色土 白色軽石微量・にぶい黄褐色砂質ローム土多量含む、カマド構築土。



第148図 2区15号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図

2区19号竪穴住居(第149～151図、PL.76～78・167)

位置 2区中央部よりやや北東、85区A-13・14、B-13・14に位置する。

重複 他遺構との重複は確認されなかった。

形状 東西方向が1.2mほど長い長方形を呈す。

規模 長軸4.58m、短軸3.40mを測る。

面積 12.83㎡

方位 N-93°-W

埋没状態 土層断面では、にぶい黄褐色土や黒褐色土、白色軽石粒を含む暗褐色土が流れ込み、レンズ状の堆積をしているのが観察できることから自然埋没と想定される。

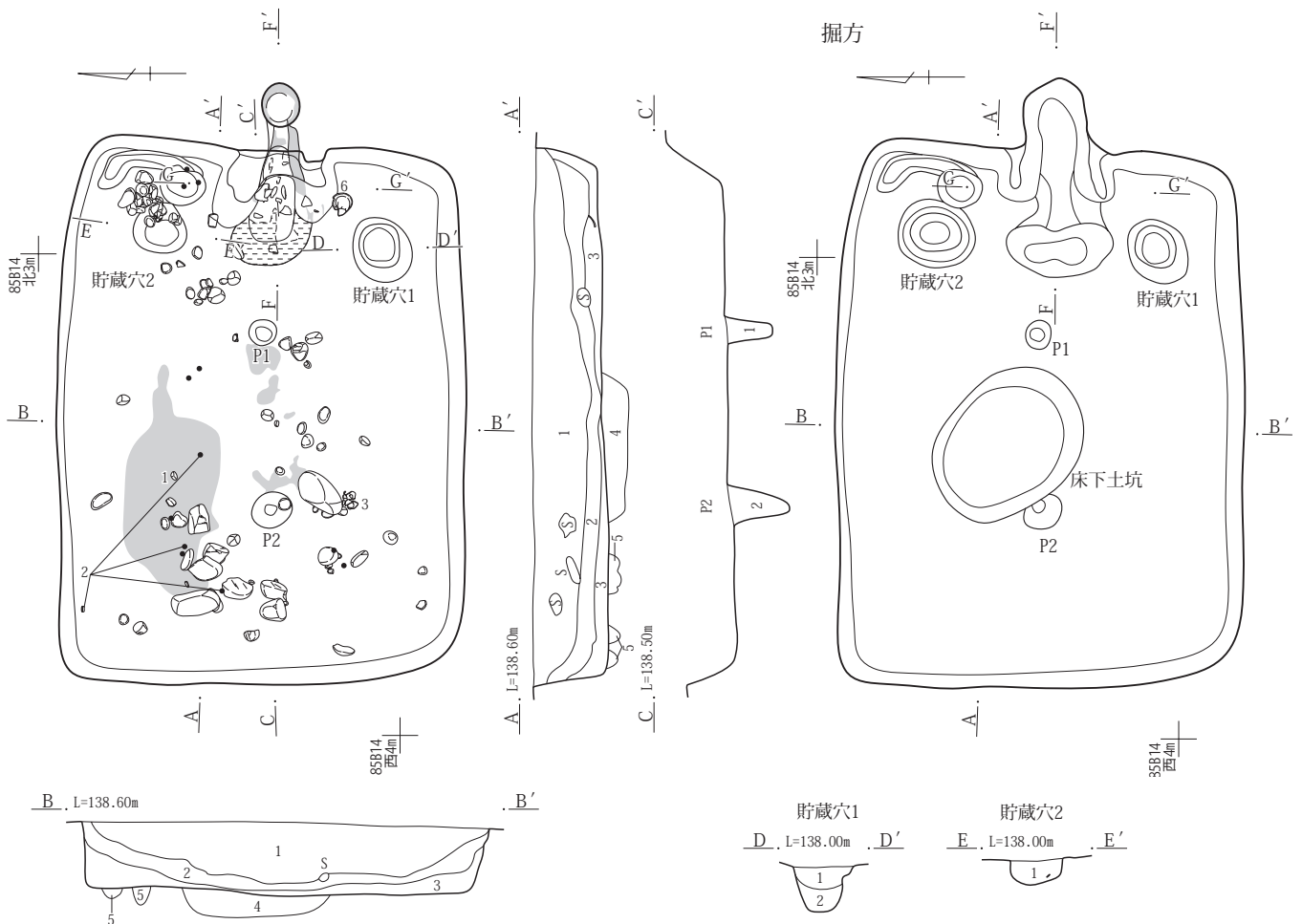
床面 中央部で検出した床下土坑は灰黄褐色土を埋め戻しているが、その他の部分は地山をそのまま踏み固めて構築していた。床面は5cm前後の凹凸がみられた。

確認面から床面までの深さは、0.55～0.61mを測る。

掘方 住居中央部分で床下土坑を検出した。形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.37m、短軸1.05m、深さ0.20mを測る。内部から遺物などの出土はみられなかった。

壁溝 東辺のカマド北側壁下で検出した。規模は、上端0.14～0.20m、下端0.04～0.09m、深さ0.01mを測る。

柱穴 竪穴住居長軸線上で2本検出した。規模と形状はP1が、円形を呈し、径0.23m、深さ0.39mを測る。P2は、楕円形状を呈し、長軸0.34m、短軸0.30m、深



A-A'・B-B'

1. 暗褐色土 白色軽石粒多量・にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック微量含む。
2. 黒褐色土 白色軽石粒少量・にぶい黄褐色砂質ロームブロック含む。焼礫を含む多量の円礫及び部分的に焼土を含む。
3. にぶい黄褐色土 白色軽石粒微量含む。
4. 灰黄褐色土 白色軽石粒・焼土粒微量含む。にぶい黄褐色砂質ロームブロック含む。縮まりやや弱いが上層は縮まり良い。
5. 灰黄褐色 白色軽石粒微量含む。

C-C'・D-D'・E-E'

1. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量・にぶい黄褐色砂質ロームブロック少量含む。
2. 灰黄褐色土 にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック多量含む。

第149図 2区19号竪穴住居遺構図(1)

さ0.48mを測る。

柱痕については2本とも確認できなかった。

**貯蔵穴** その位置関係から、カマドの両脇に存在するものが該当するとみられる。規模と形状は次のとおりである。貯蔵穴1は、形状が楕円形状を呈し、規模は長軸0.54m、短軸0.50m、深さ0.47mを測る。貯蔵穴2は、形状が楕円形を呈し、規模は長軸0.66m、短軸0.54m、深さ0.22mを測る。なお、調査時の状況から見ると貯蔵穴2は途中で埋め戻された可能性も窺える。内部からはともに土器の小片が出土しているだけである。

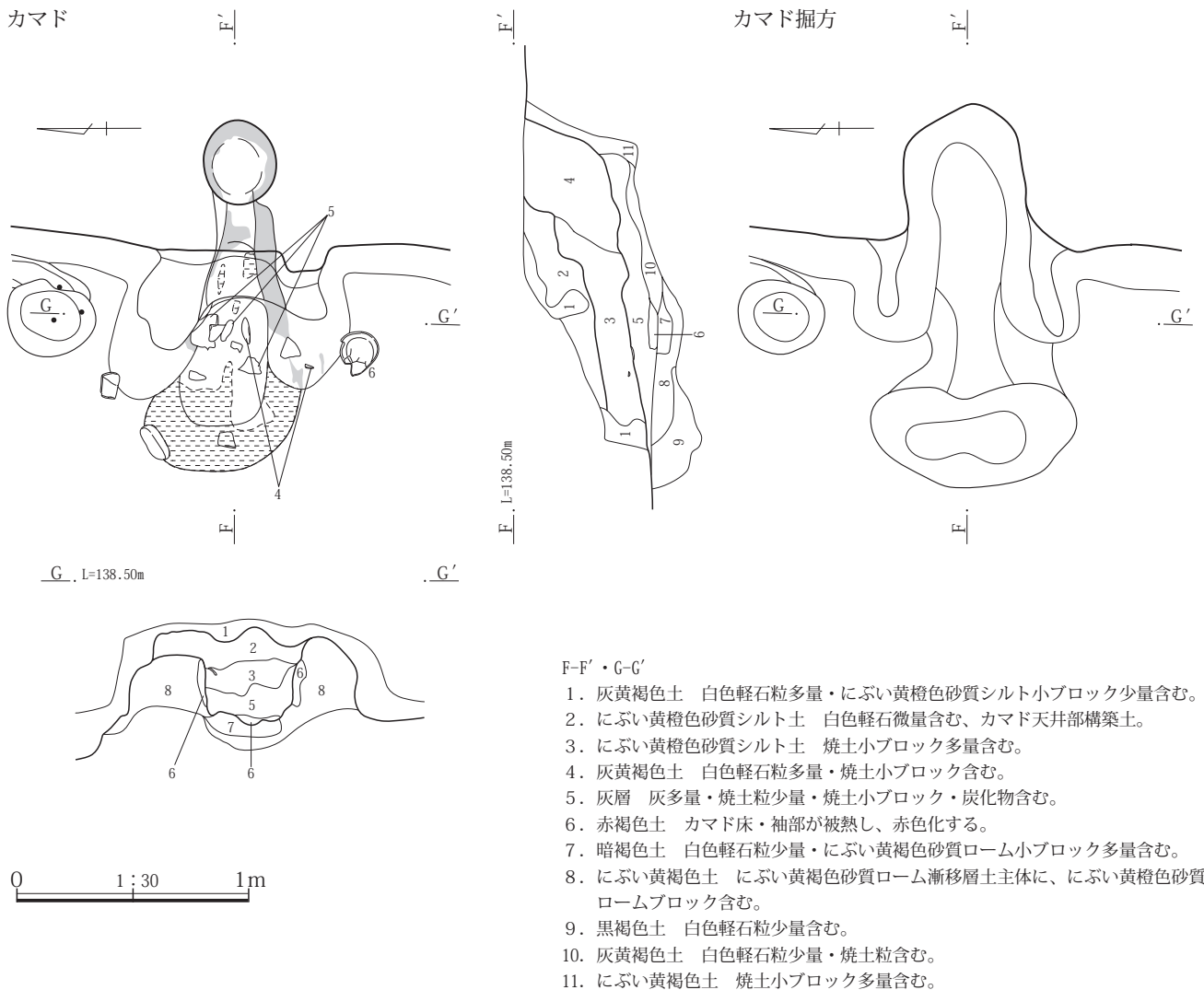
**カマド** 東辺中央に構築されていた。残存状態は焚口と燃烧部天井は壊されていたが、燃烧部側壁と煙道部は現状を保った状態で残存していた。規模は全長1.51m、全幅0.95m、煙道部長0.75m、燃烧部幅0.35mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪められており、煙道部にかけてわ

ずかな傾斜で移行する。煙道部奥壁は130度の角度で立ちあがる。燃烧部から煙道部底面には灰が残存していた。燃烧部側壁内面と煙道部天井内面は激しく焼土化しており、使用の状態を窺うことができた。

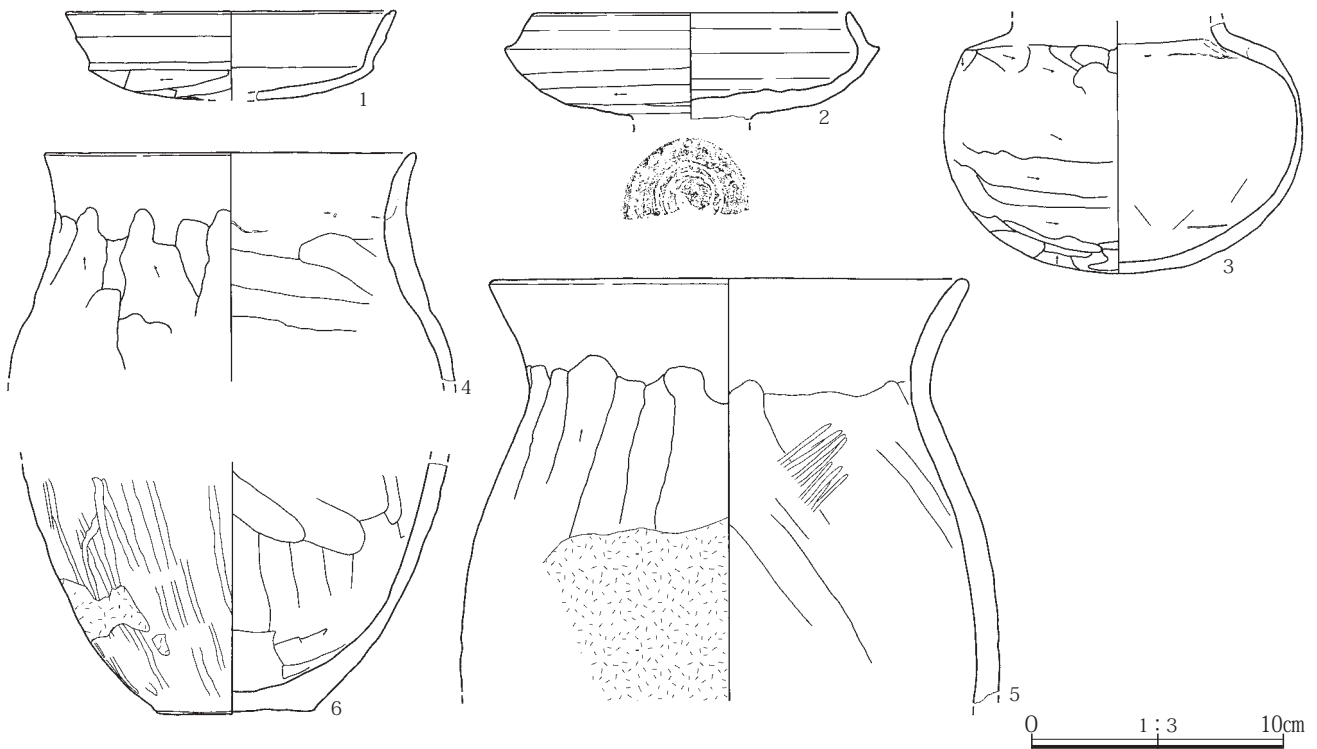
掘方は焚口部を中心に径0.80×0.40mほどの楕円形状に20cmほど掘り込まれていた。

**出土遺物** 本竪穴住居は2層が堆積する前後に大量の礫や焼土が廃棄されたとみられる。図示した遺物では4と5の土師器甕がカマド、1の土師器杯と2の須恵器高杯、6の土師器甕が床面からの出土である。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片94点・小型製品片41点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期はカマドや床から出土した遺物から6世紀末から7世紀初頭に比定できる。



第150図 2区19号竪穴住居遺構図(2)



第151図 2区19号竪穴住居出土遺物図

## 2区20号竪穴住居(第152～154図、PL.78～80・168)

**位置** 2区調査区中央部やや北、85区D-14・15、E-14・15に位置する。

**重複** 直接は他の遺構との重複関係は確認できなかったが、周囲の遺構確認状況からは38号竪穴住居や2号・3号柵と近接する位置関係である。こうした状況からすると38号竪穴住居とは周堤帯が重複していたと想定される。新旧関係は出土土器から見ると本竪穴住居の方が新しい。

**形状** 東西方向が0.1mほど長いが、ほぼ正方形を呈す。

**規模** 長軸4.70m、短軸4.60mを測る。

**面積** 17.53㎡

**方位** N-63°-E

**埋没状態** 土層断面では周囲からの流れ込みが観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 住居周縁部と中央は掘方面から15～20cmほど灰黄褐色土を埋め戻して構築しているが、中央の床下土坑周辺は地山をそのまま踏み固めていた。床面の状態は若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.45～0.63mを測る。

**掘方** 前述のように住居周縁部と中央は掘削されていた。中央部に床下土坑を検出した。形状は楕円形を呈し、

規模は長軸1.65m、短軸1.45m、深さ0.32mを測る。内部からは土器などの遺物は出土していない。

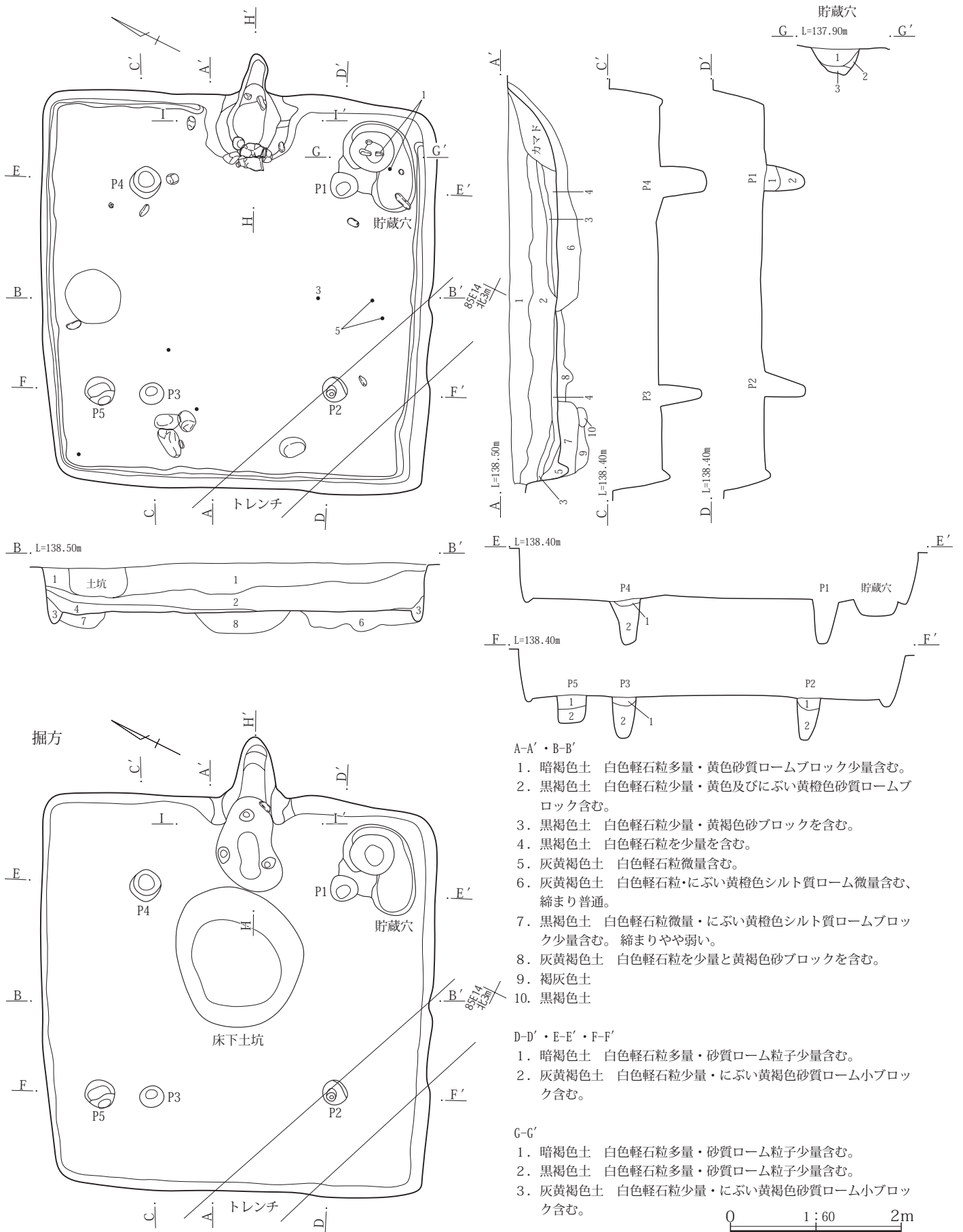
**壁溝** カマドとカマドの南側を除く、各辺壁下で検出した。規模は上端0.12～0.15m、下端0.02～0.13m、深さ0.04～0.11mを測る。

**柱穴** 各角寄り、竪穴住居平面の対角線上で4本を検出した。各柱穴の形状と規模は次のとおりである。P 1は不整形、長軸0.32m、短軸0.30m、深さ0.54m。P 2は、円形、径0.30m、深さ0.55m。P 3は、楕円形、長軸0.28m、短軸0.26m、深さ0.59m。P 4は、楕円形、長軸0.38m、短軸0.36m、深さ0.56mを測る。柱穴間の距離は、P 1～P 2間が2.35m、P 2～P 3間が2.15m、P 3～P 4間が2.50m、P 4～P 1間が2.30mである。

柱痕は各柱穴とも確認できなかった。また、土層断面の観察では柱の抜き取りの可能性が窺えた。

また、柱穴P 3の北側からはP 5を検出した。P 5は形状が楕円形状を呈し、規模は長軸0.36m、短軸0.32m、深さ0.37mを測る。その位置から柱穴P 3の補助的役割を持っていた可能性が窺えるが、土層断面の観察では他の用途の可能性も窺えた。

**貯蔵穴** 南東隅で検出した。貯蔵穴周囲は8～15cmほど平坦に掘り込まれ、その北隅が土坑状に掘り込まれてい



第152図 2区20号竪穴住居遺構図(1)



た。規模は、楕円形を呈し、規模は長軸0.52m、短軸0.48m、深さ0.30mを測る。貯蔵穴内部と平坦面部分から1の土師器杯が出土している。

**カマド** 東辺の中央部に構築されていた。残存状態は、焚口は壊され、燃烧部から煙道部の天井が崩落していたが、燃烧部側壁は残存していた。規模は、全長1.30m、全幅1.13m、煙道部長0.30m、焚口部幅0.28m、燃烧部幅0.35mを測る。焚口の両側には径10～15cm、長さ30cmほどの棒状円礫が据え付けられていた。また、礫間では構築材として使用されたとみられる4の土師器甕が出土している。燃烧部は焚口よりやや窪められ、煙道部奥壁はほぼ垂直に立ち上がっていた。

掘方は燃烧部を中心に径1.10m×0.70mほど楕円形状

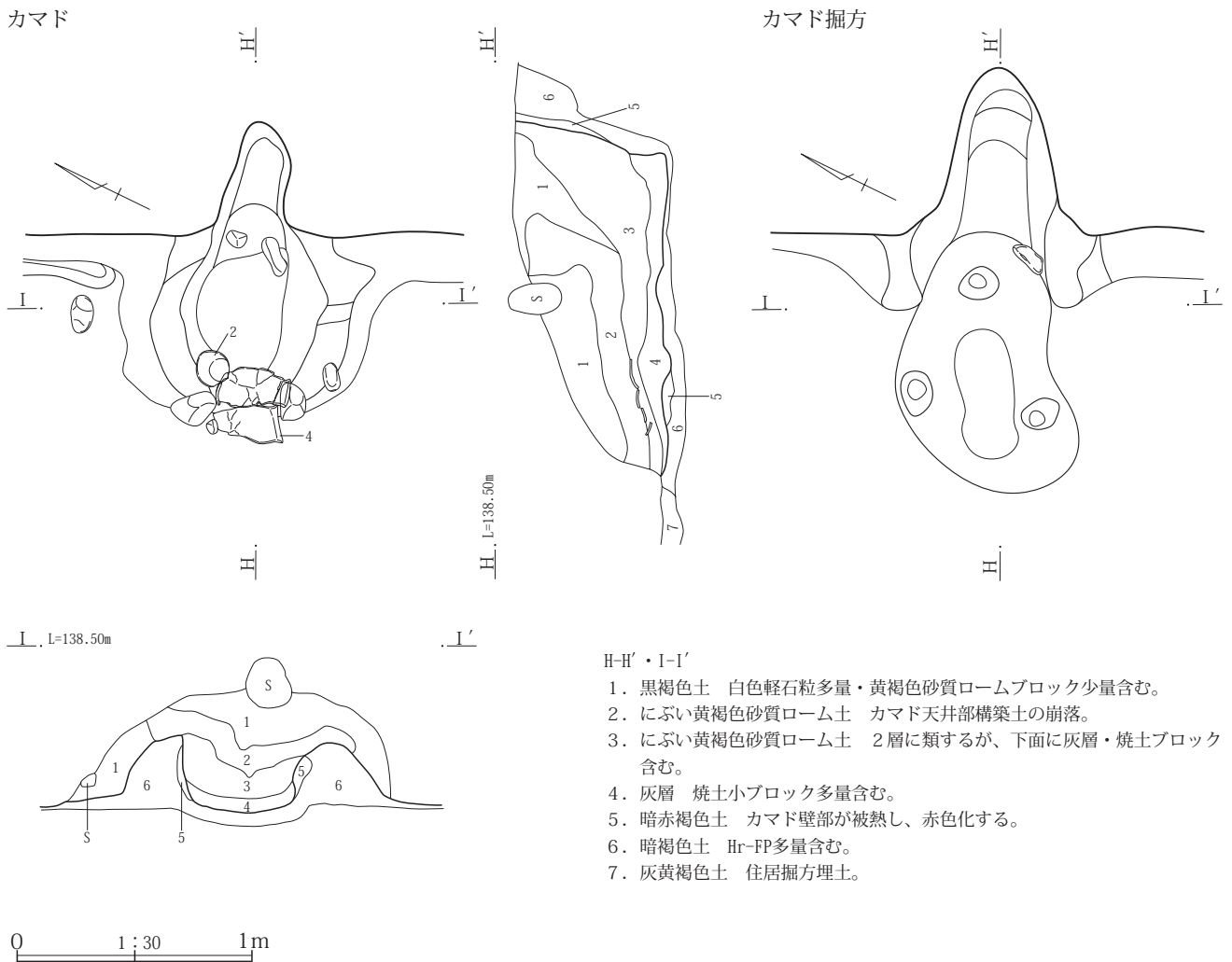
に10cmほど掘り込まれ、煙道部掘方は10～20cmほど暗褐色土を充填してあった。

燃烧部底面には灰の堆積がみられ、側壁や天井の内面は激しく焼土化がみられ、使用の様子が窺えた。

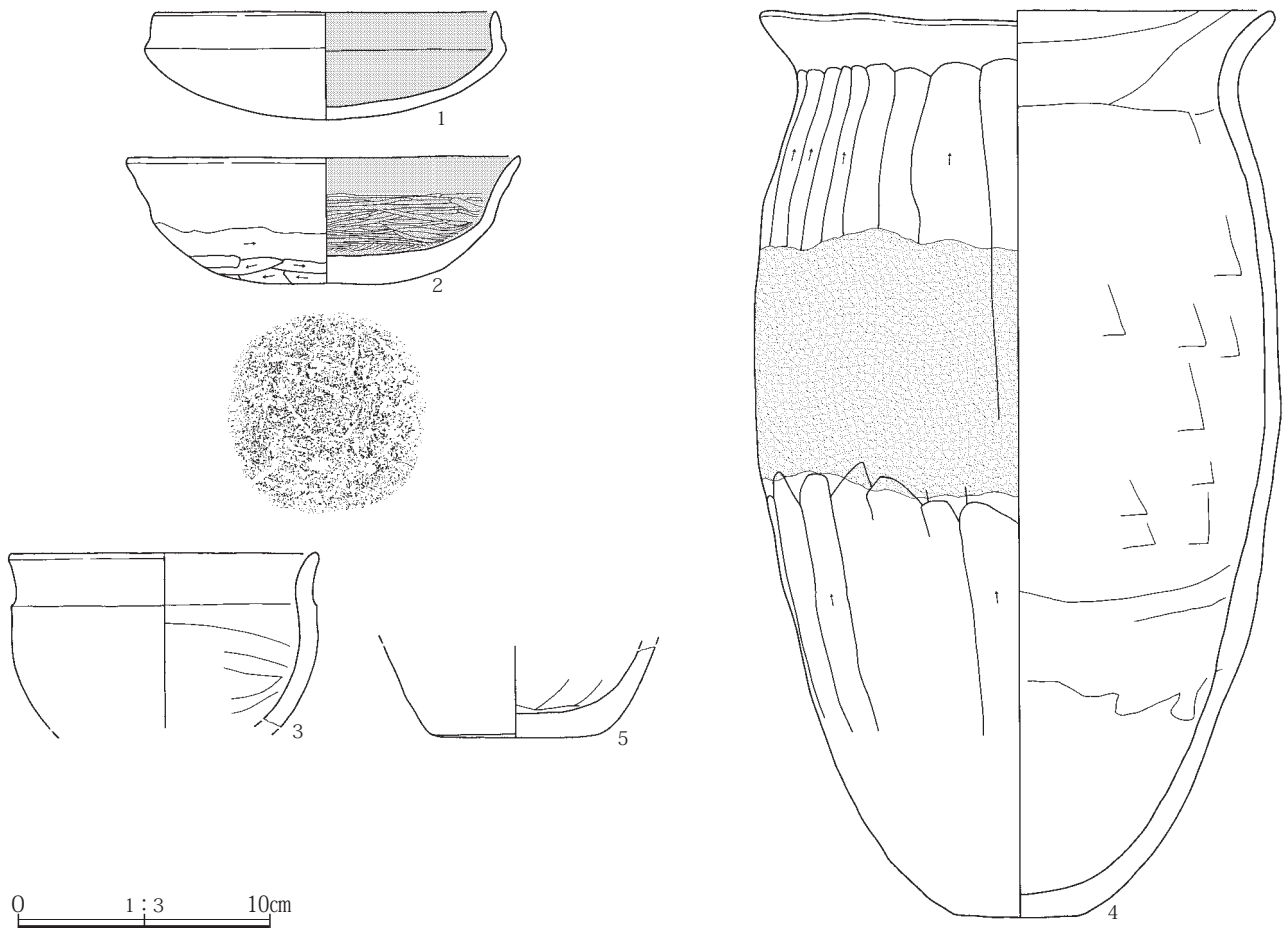
なお、カマド中央上位から出土した径12cm、長さ22cmの円礫については廃棄時の祭祀に伴うものとの可能性もみられるが、判断には至っていない。

**出土遺物** 図示した遺物のうち、カマドと貯蔵穴以外では5の土師器甕が床面から出土している。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片45点・小型製品片30点、須恵器小型製品片1点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期はカマドや貯蔵穴などから出土した共存する遺物から7世紀前半に比定できる。



第153図 2区20号竪穴住居遺構図(2)



第154図 2区20号竪穴住居出土遺物図

2区21号竪穴住居(第155～157図、PL.80～82・168)

**位置** 2区調査区のほぼ中央、85区C-12・13、D-11に位置する。

**重複** 直接は他の遺構との重複は確認されなかったが、22号・37号竪穴住居と近接する位置関係である。こうした状況からは周堤帯での重複関係はあったと想定される。なお、新旧関係については本竪穴住居のほうが新しい。

**形状** 南北方向に0.25mほど長い長方形を呈す。

**規模** 長軸4.50m、短軸4.26mを測る。

**面積** 16.37㎡

**方位** N-70°-E

**埋没状態** 土層断面では5の灰黄褐色土が床面全体に水平堆積した後、暗褐色土や黒褐色土が流れ込んだレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より15～30cmほど灰黄褐色土を埋め戻して構築されていたが、一部は地山をそのまま踏み固めてい

た。床面の状態は、若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。

確認面から床面までの深さは、0.31～0.50mを測る。

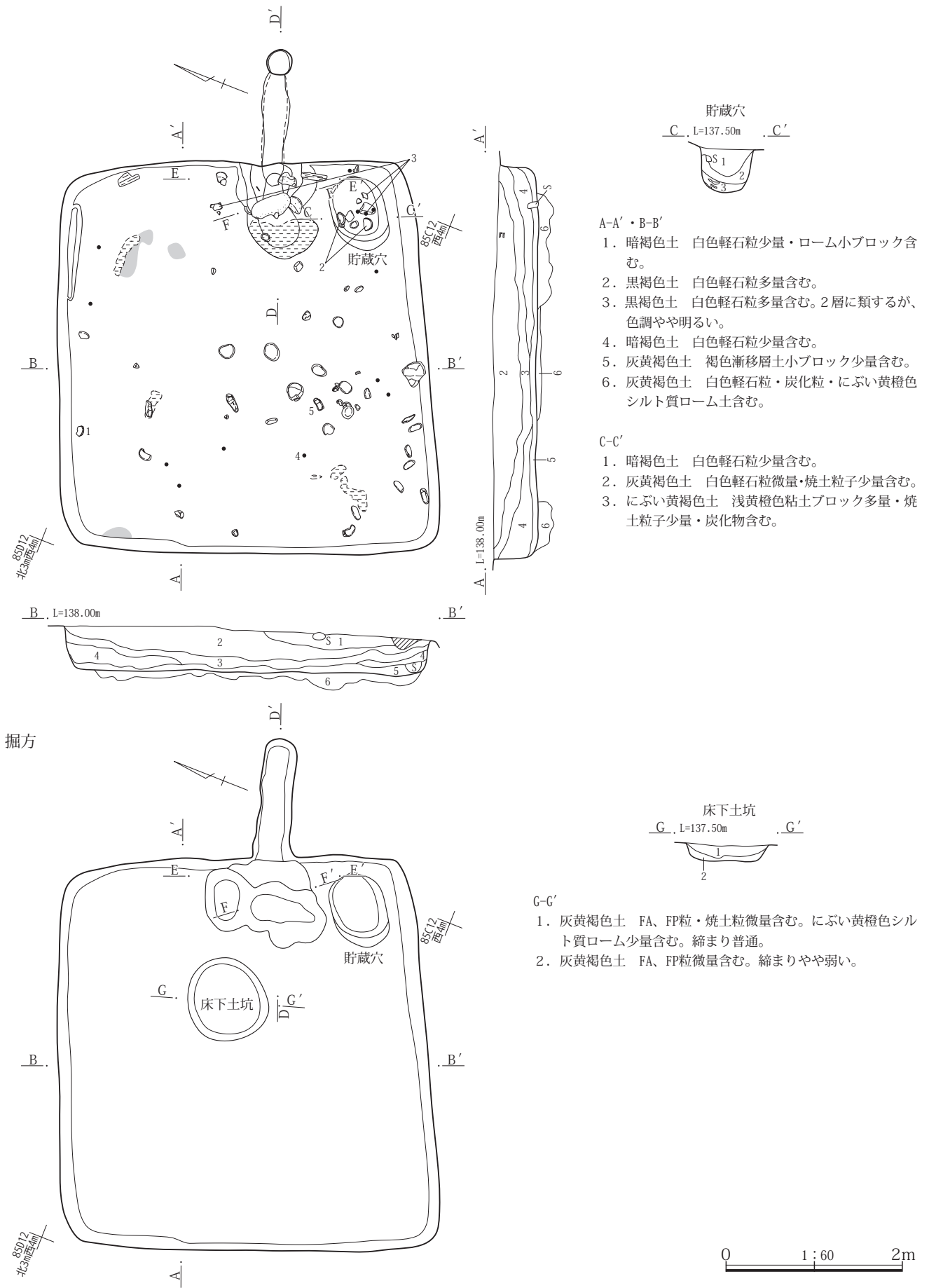
**掘方** 広範囲で浅い掘り込みが施されていた。掘方面で5cm前後の凹凸がみられ、中央部カマド寄りで、床下土坑を検出した。形状は円形を呈し、規模は径0.94m、深さ0.25mを測る。内部から土器などの遺物は出土していない。

**壁溝** 北辺北東角から西へ1.0mほど壁下で検出した。規模は、上端0.17～0.15m、下端0.04～0.08m、深さ0.01mを測る。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 南東隅にて検出した。形状は楕円形状を呈し、規模は長軸0.84m、短軸0.62m、深さ0.49mを測る。内部からは2の土師器杯と3の土師器甕が出土している。

**カマド** 東辺中央よりやや南寄りに構築されていた。残存状態は燃焼部の天井は壊されていたが、焚口や煙道部



第155図 2区21号竪穴住居遺構図(1)

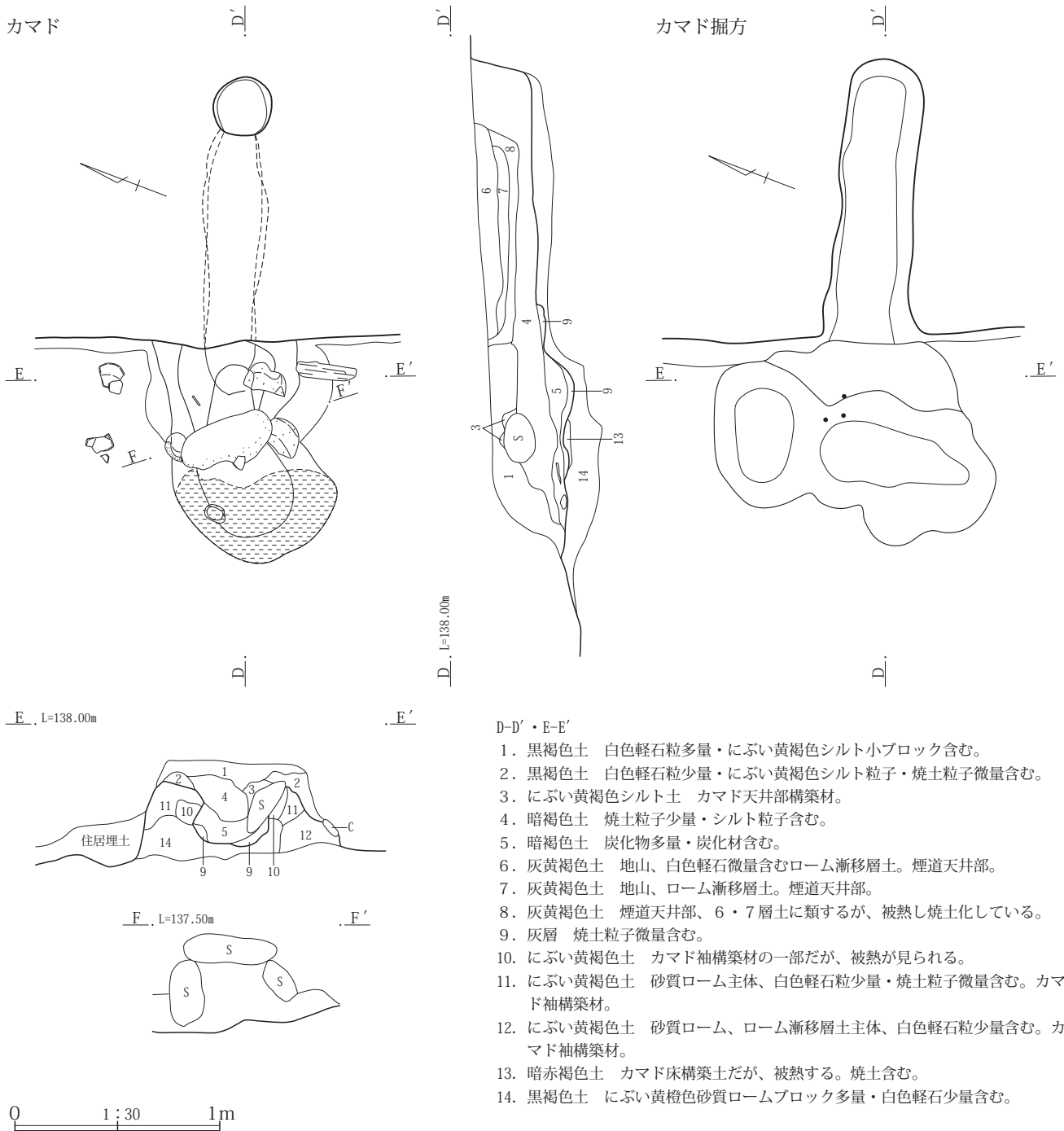
は現状に近い状態であった。規模は全長2.34m、全幅0.90m、煙道部長1.28m、焚口部幅0.35m、燃烧部幅0.40mを測る。燃烧部は焚口より窪められており、煙道部はほぼ平坦で奥壁は垂直に立ち上がる。焚口は両側に径10cm、長さ25cmと径15cm、長さ30cmの棒状円礫を立てるように据え付け、その上に長さ45cm×幅25cm、厚さ12cmのやや扁平な円礫をかけて構築してあった。なお、燃烧部の天井にも扁平な礫が使用されていた。煙道部は地山を掘り抜いて使用しており、天井部は激しく焼土化がみられ、

使用状況が窺えた。

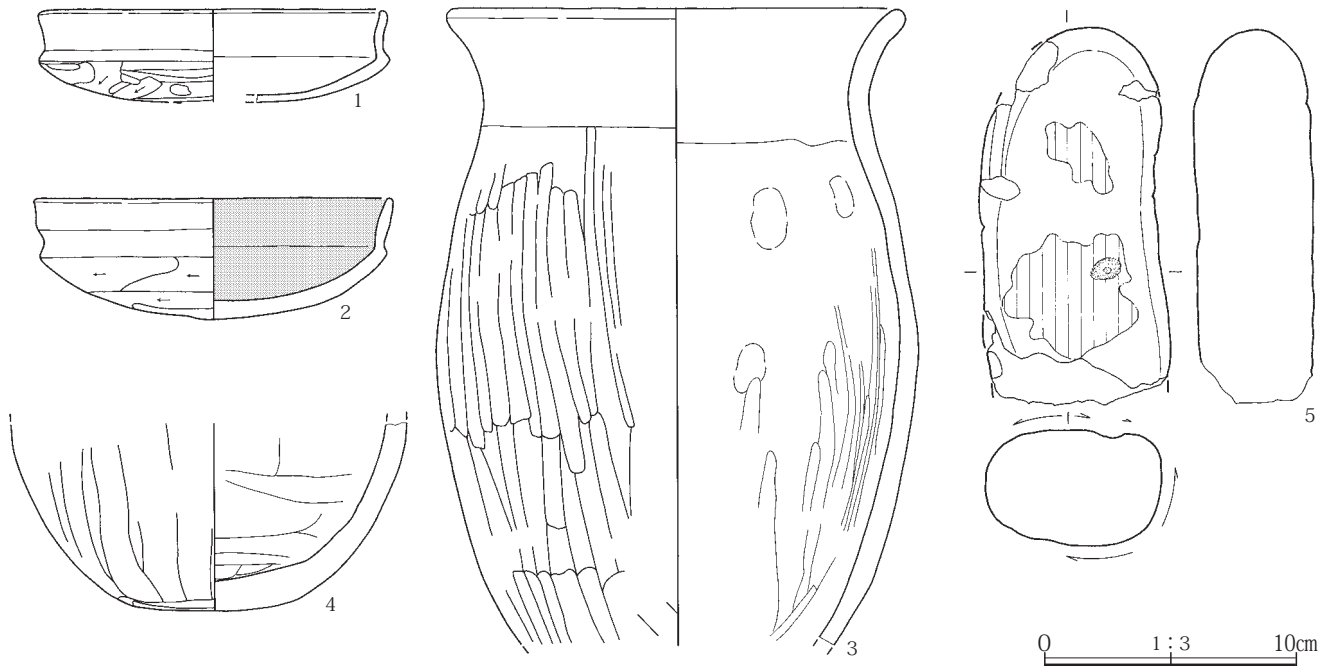
掘方は、燃烧部を中心に、南北軸を長軸として径1.3×1.0mの楕円形状に20cmほど掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示した遺物では2と3が貯蔵穴、1が床面上8cm、4が床面上22cmからの出土であった。図示した以外の遺物では土師器大型製品片59点・小型製品片19点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は貯蔵穴から出土した遺物から6世紀末から7世紀初頭に比定できる。



第156図 2区21号竪穴住居遺構図(2)



第157図 2区21号竪穴住居出土遺物図

## 2区22号竪穴住居(第158・159図、PL.82・83・168)

**位置** 2区調査区の中央、85区C-11、D-11に位置する。本竪穴住居は南東部分を攪乱、南西角を重複する遺構によって欠落するため、全貌は不明である。

**重複** 南西角で47号竪穴住居と重複する。新旧関係は調査時の見解では本竪穴住居のほうが古い。21号竪穴住居の項でも記述したが、位置関係から見ると周堤帯は21号竪穴住居と重複し、新旧関係は本竪穴住居のほうが古い。

**形状** 東西方向が1.2mほど長い長方形を呈す。

**規模** 長軸4.50m、短軸3.34mを測る。

**面積** 調査範囲内では11.88㎡

**方位** N-58°-E

**埋没状態** 土層断面では壁際に三角堆積した後、中ほどはレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より5cmほど灰黄褐色土を埋め戻して構築しているが、一部は床面をそのまま踏み固めている。床面の状態は若干の凹凸がみられるがほぼ平坦である。確認面から床面までの深さは、0.32~0.46mを測る。

**掘方** 大部分で浅い掘方が確認されている。

**壁溝** カマド部分と北辺の北西角寄りの一部を除いて調査範囲で検出した。規模は、上端0.18~0.25m、下端0.03~0.09m、深さ0.03~0.15mを測る。

**柱穴** 検出されなかった。

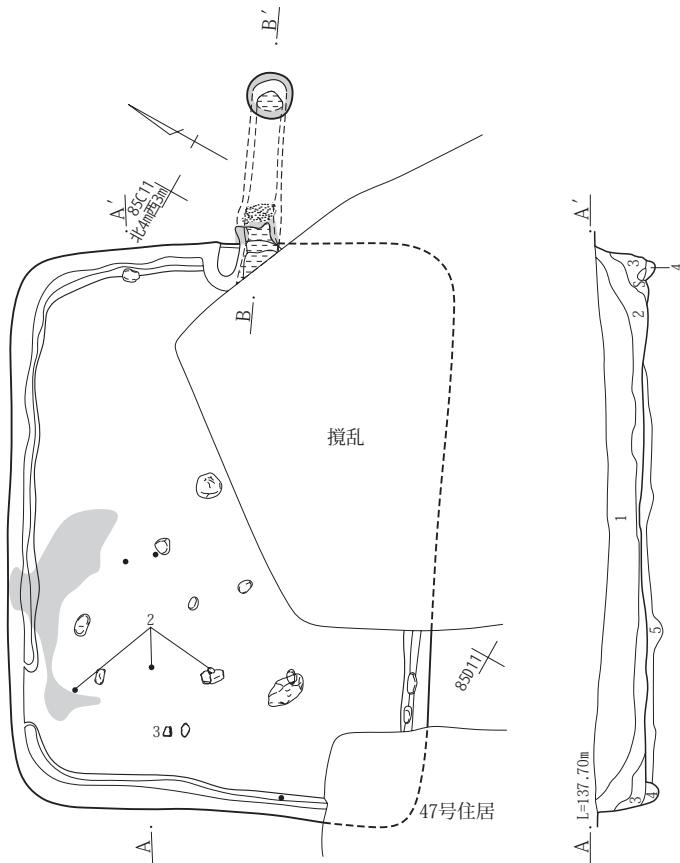
**貯蔵穴** 検出されなかった。

**カマド** 東辺のほぼ中央に構築されている。残存状態は燃烧部南側が攪乱によって欠落し、燃烧部天井は壊されているが、燃烧部側壁や煙道部はそのままの状態を保っていた。調査範囲内での規模は全長1.70m、全幅0.65m、煙道部長0.93mを測る。燃烧部底面には灰が残存しており、煙道部の天井は激しく焼土化していた。

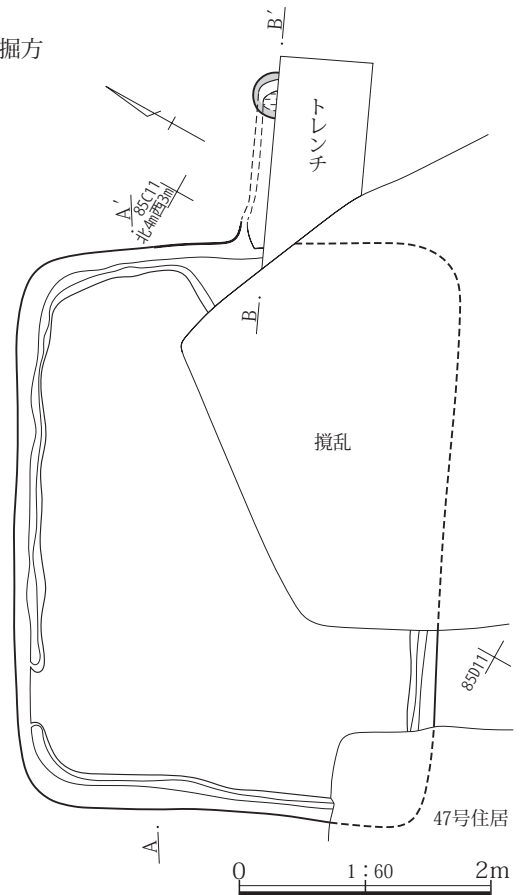
掘方は、調査範囲がごく一部であったため詳細は不明であるが、燃烧部の下部に及んでいたと想定される。

**出土遺物** 攪乱によって欠落する部分が多いため出土した遺物も少なく、図示できた遺物は3点だけであった。そのうち、2の土師器甕が床面からの出土である。3の須恵器甕は後の混入とみられる。図示した以外の遺物には、土師器大型製品片21点・小型製品片17点、須恵器小型製品片4点が出土している。

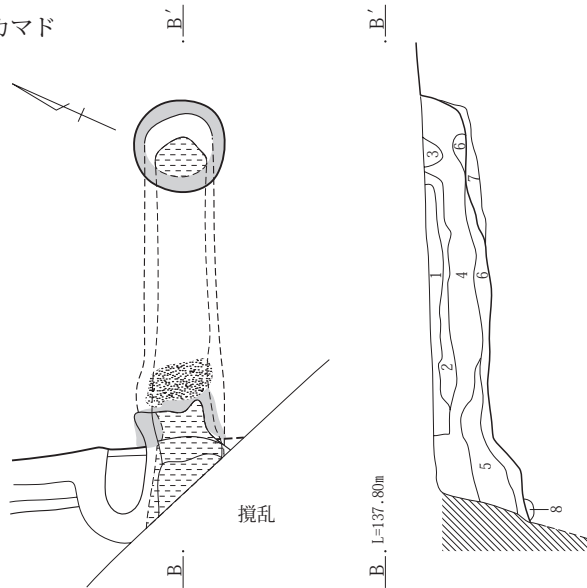
**所見** 本竪穴住居の時期は共伴すると判断できる遺物が1点しかないため断定はできないが7世紀前半代に比定できる。



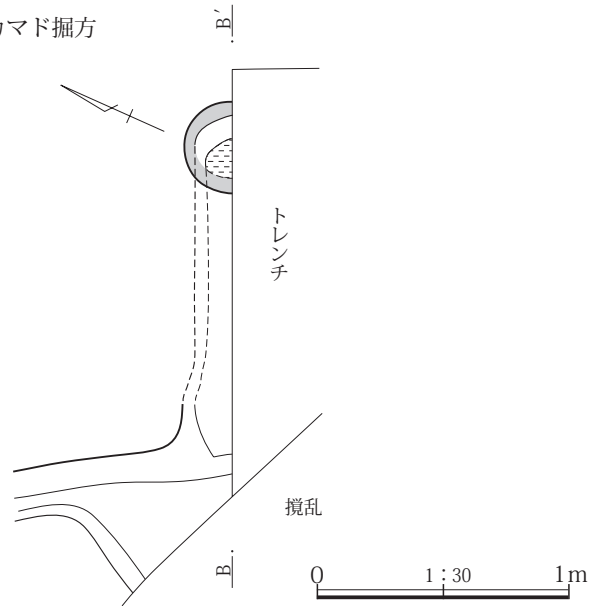
掘方



カマド



カマド掘方



A-A'

1. 灰黄褐色土 白色軽石粒多量含む。
2. 灰黄褐色土 にぶい黄褐色ローム小ブロック多量・白色軽石粒少量・焼土粒子・炭化物流含む。
3. 黒褐色土 白色軽石粒少量・にぶい黄褐色ローム小ブロック含む。
4. にぶい黄褐色土 白色軽石粒微量含む。
5. 灰黄褐色土 焼土粒・FA、FP粒微量含む。にぶい黄橙色砂質ロームブロック少量含む。締まりやや良い、掘方埋土。

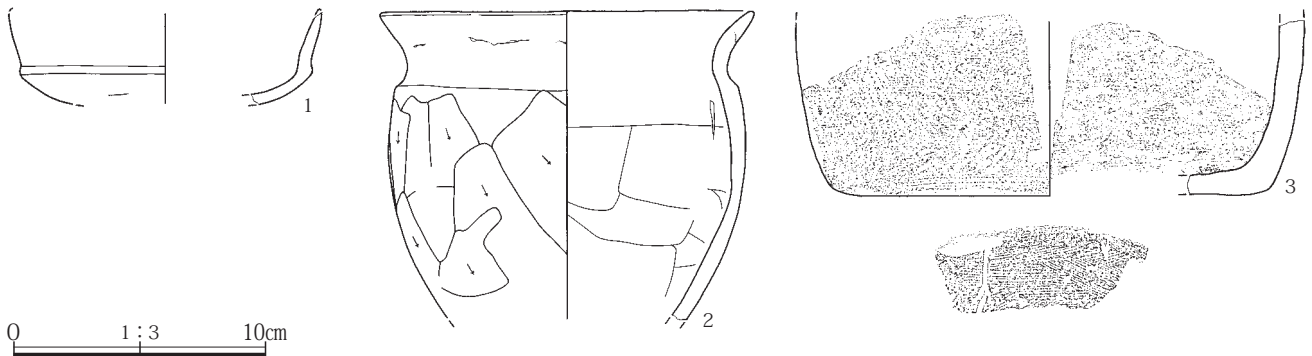
B-B'

1. 灰黄褐色土 地山、白色軽石微量含むローム漸移層土。煙道天井部。

2. 灰黄褐色土 煙道天井部、1層目に類するが、被熱し焼土を含む。

3. にぶい黄褐色土
4. 暗褐色土 白色軽石粒多量・にぶい黄橙色砂質シルト小ブロック少量・焼土粒子含む。
5. 暗褐色土 白色軽石粒少量・にぶい黄橙色砂質シルトブロック多量・焼土ブロック少量含む。
6. 灰層 焼土小ブロック少量含む。
7. 灰黄褐色土 灰多量・焼土粒子少量・砂質ローム粒子含む。
8. 灰黄褐色土 にぶい黄橙色砂質シルトブロック多量含む。カマド掘方埋土。

第158図 2区22号竪穴住居遺構図



第159図 2区22号竪穴住居出土遺物図

## 2区24号竪穴住居(第160・161図、PL.83・84・168)

**位置** 2区調査区ほぼ中央、85区E-11・12に位置する。

**重複** 直接には他の遺構との重複は確認されなかったが、23号竪穴住居とは接する位置関係である。

**形状** 東辺3.2m、南辺4.1m、西辺3.7m、北辺4.2mと各辺長に差がみられる。東西に長い台形状を呈する。

**規模** 長軸4.30m、短軸3.60mを測る。

**面積** 11.27㎡

**方位** N-67°-E

**埋没状態** 土層断面では周囲から流れ込んだ様子が観察できるが、2層の暗褐色土は西側の標高が低い方からの流れ込みであることから、人為的な埋没の可能性も窺える。

**床面** 掘方面より5cm前後灰黄褐色土を埋め戻して構築されているが、東辺側では一部地山をそのまま踏み固めている部分もみられる。床面の状態は若干の凹凸がみられるがほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.30～0.47mを測る。

**掘方** 浅い掘り込みが東辺の一部を除いて行われていた。掘方面は凹凸がみられる。

**壁溝** カマドとカマドの南側から南辺の東南角から0.8mを除いた壁下から検出した。規模は、上端0.17～0.20m、下端0.04～0.12m、深さ0.03～0.14mを測る。

**柱穴** 住居のほぼ中央でP1を検出し、規模から柱穴と判断した。形状は円形を呈し、規模は径0.30×0.28m、深さ0.54mを測る。住居南壁際ではP2が確認された。P2は楕円形状を呈し、長軸0.46m、短軸0.36m、深さ0.24mを測る。他に柱穴とみられる遺構は検出されておらず、屋根がどのような構造をもっていたか、判断に苦慮する竪穴住居である。

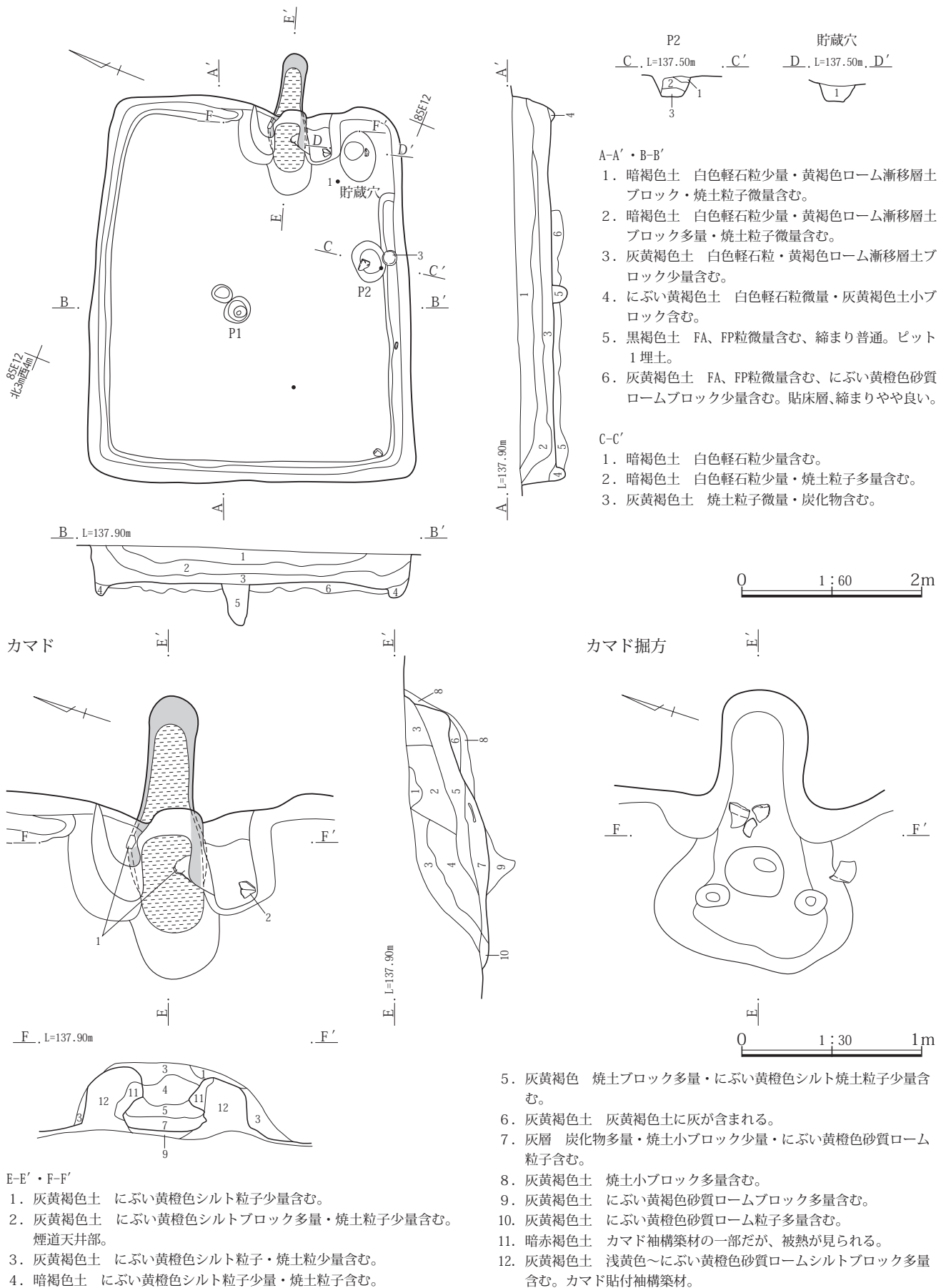
**貯蔵穴** 南東隅にて検出した。形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.56m、短軸0.40m、深さ0.35mを測る。内部からは遺物などの出土はみられなかった。

**カマド** 東辺中央よりやや南に構築されていた。残存状態は焚口と燃焼部の天井は壊されていたが、燃焼部側壁は残存、煙道部天井は崩落した状態であった。規模は全長1.30m、全幅1.15m、煙道部長0.60m、燃焼部幅0.36mを測る。燃焼部は焚口よりやや窪んでおり、煙道部は緩やかな傾斜で移行し、奥壁は垂直に立ち上がっていた。燃焼部から煙道部の底面には灰が残存していた。燃焼部側壁や煙道部天井の崩落土は焼土化しており、使用の状態を窺うことができた。

掘方は、燃焼部を中心に、南北軸を長軸とした径1.1×0.7mほどの範囲を楕円形状に5cm前後に掘り込まれていた。

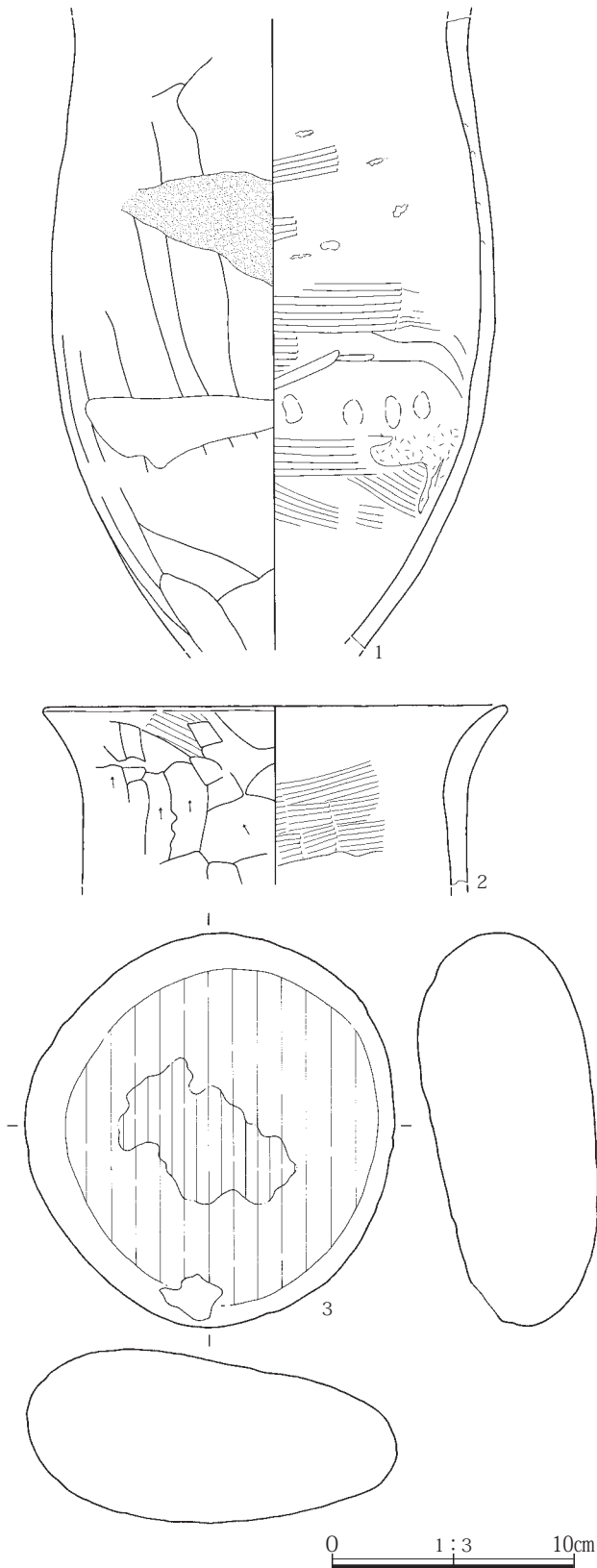
**出土遺物** 図示できた遺物は3点だけであった。そのうち、1の土師器甕はカマドからの出土である。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片16点・小型製品片13点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は出土遺物が少ないため判然としないところはあるが、概ね6世紀後半に比定できる。



第160図 区24号竪穴住居遺構図





第161図 2区24号竪穴住居出土遺物図

2区25号竪穴住居(第162～165図、PL.84～86・168・169)

位置 2区調査区ほぼ中央、85区E-12・13、F-12・13、G-12・13に位置する。本竪穴住居は西辺側4分の

1ほどが攪乱で欠落するため全貌は不明である。

**重複** 直接には他の遺構との重複関係は確認できなかったが、26号竪穴住居とは近接する位置関係である。

**形状** 若干南北が長い長方形を呈す。

**規模** 長軸6.76m、短軸6.60mを測る。

**面積** 調査範囲内では37.66㎡、推定で35.09㎡である。

**方位** N-70°-E

**埋没状態** 土層断面ではほぼレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より、5～30cmほど灰黄褐色土や暗褐色土を埋め戻して構築していた。床面の状態は若干の凹凸がみられたがほぼ平坦であった。その中でもカマド前の南東部分は特に硬化していた。

確認面から床面までの深さは、0.49～0.62mを測る。

**掘方** 浅い掘り込みが全体に施され、掘方面は激しい凹凸がみられる。床下土坑などの施設は検出されていない。

**壁溝** 調査範囲では北西角など一部を除き、各辺の壁下で検出した。規模は上端0.15～0.30m、下端0.03～0.16m、深さ0.01～0.12mを測る。

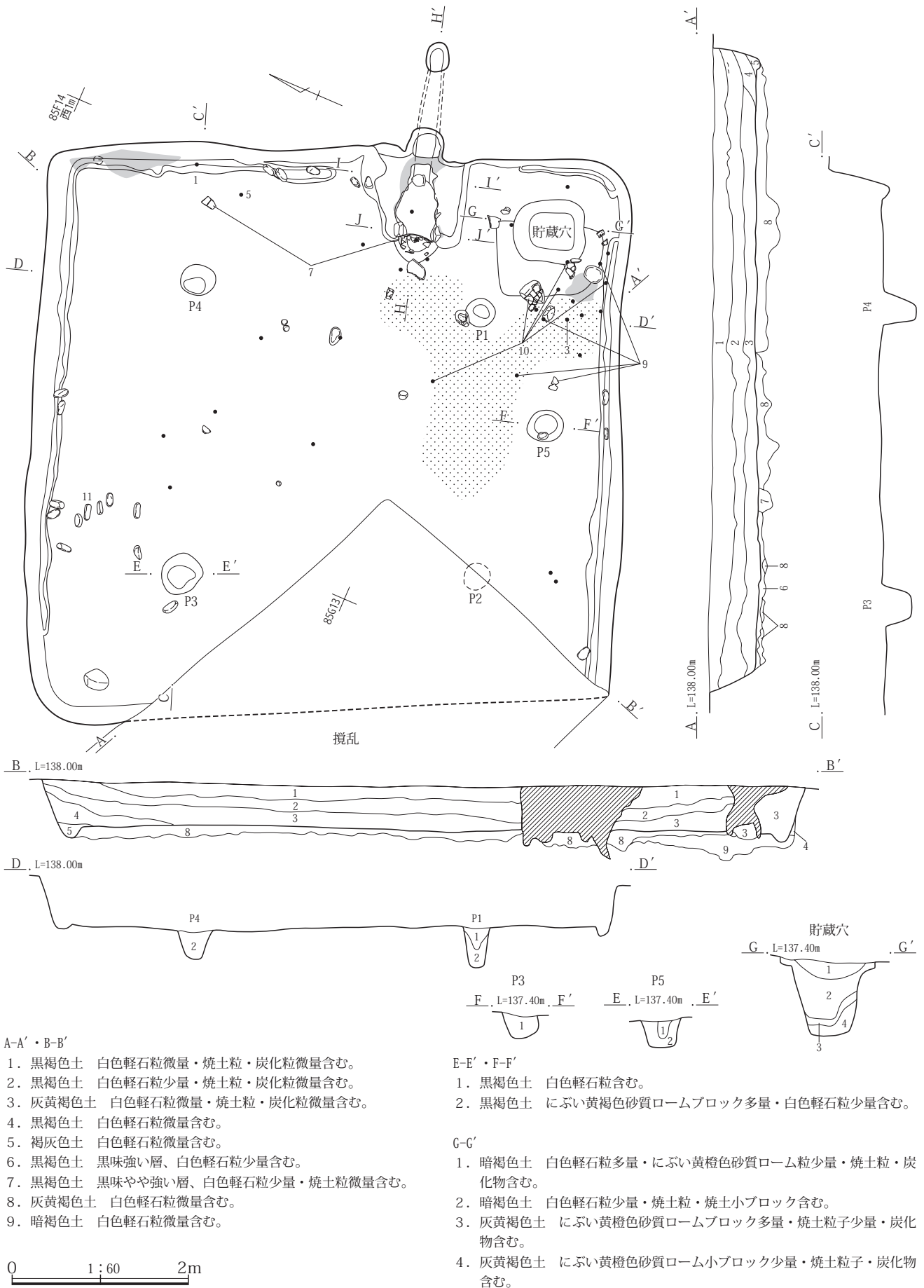
**柱穴** 竪穴住居平面の対角線上で3本を検出した。本来なら南西角寄りでも柱穴P2が存在するはずであるが、攪乱により欠落していた。各柱穴の形状と規模は次のとおりである。P1は円形を呈し、径0.32m、深さ0.47mを測る。P3は、楕円形を呈し、長軸0.48m、短軸0.46m、深さ0.27mを測る。P4は、楕円形を呈し、長軸0.40m、短軸0.36m、深さ0.40mを測る。柱穴間の距離は、P3～P4間が3.35m、P4～P1間が3.20mである。

柱痕はP1とP3の土層断面でそれらしきものが観察されたが、確定には至っていない。

なお、南辺際の中ほどからP5を検出した。P5は、楕円形を呈し、長軸0.40m、短軸0.36m、深さ0.29mを測る。位置関係から柱穴とは想定できないが、用途については不明である。

**貯蔵穴** 南東隅で検出した。形状は隅丸長方形を呈し、長軸0.80m、短軸0.70m、深さ0.88mを測る。内部からは遺物などの出土はみられなかった。

**カマド** 東辺の中央よりやや南寄りに構築されていた。残存状態は焚口と燃焼部天井は壊されていたが、煙道部や燃焼部側壁はそのままの状態を保っていた。煙道部天井は粘土による構築ではあるが、早い段階に煙出しによ



A-A'・B-B'

1. 黒褐色土 白色軽石粒微量・焼土粒・炭化粒微量含む。
2. 黒褐色土 白色軽石粒少量・焼土粒・炭化粒微量含む。
3. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量・焼土粒・炭化粒微量含む。
4. 黒褐色土 白色軽石粒微量含む。
5. 褐灰色土 白色軽石粒微量含む。
6. 黒褐色土 黒味強い層、白色軽石粒少量含む。
7. 黒褐色土 黒味やや強い層、白色軽石粒少量・焼土粒微量含む。
8. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量含む。
9. 暗褐色土 白色軽石粒微量含む。

E-E'・F-F'

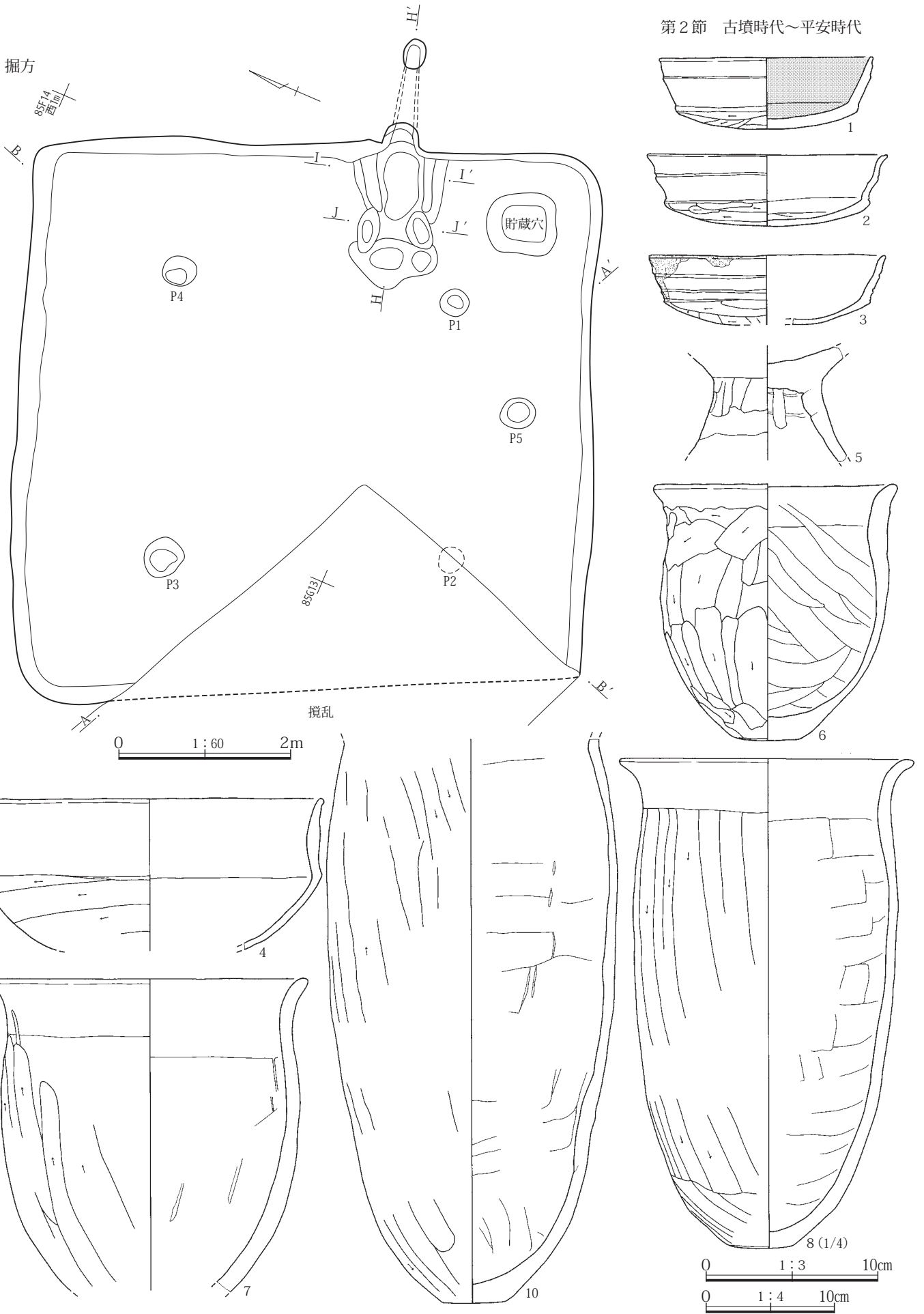
1. 黒褐色土 白色軽石粒含む。
2. 黒褐色土 にぶい黄褐色砂質ロームブロック多量・白色軽石粒少量含む。

G-G'

1. 暗褐色土 白色軽石粒多量・にぶい黄褐色砂質ローム粒少量・焼土粒・炭化物含む。
2. 暗褐色土 白色軽石粒少量・焼土粒・焼土小ブロック含む。
3. 灰黄褐色土 にぶい黄褐色砂質ロームブロック多量・焼土粒子少量・炭化物含む。
4. 灰黄褐色土 にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック少量・焼土粒子・炭化物含む。

第162図 2区25号竪穴住居遺構図(1)

第2節 古墳時代～平安時代



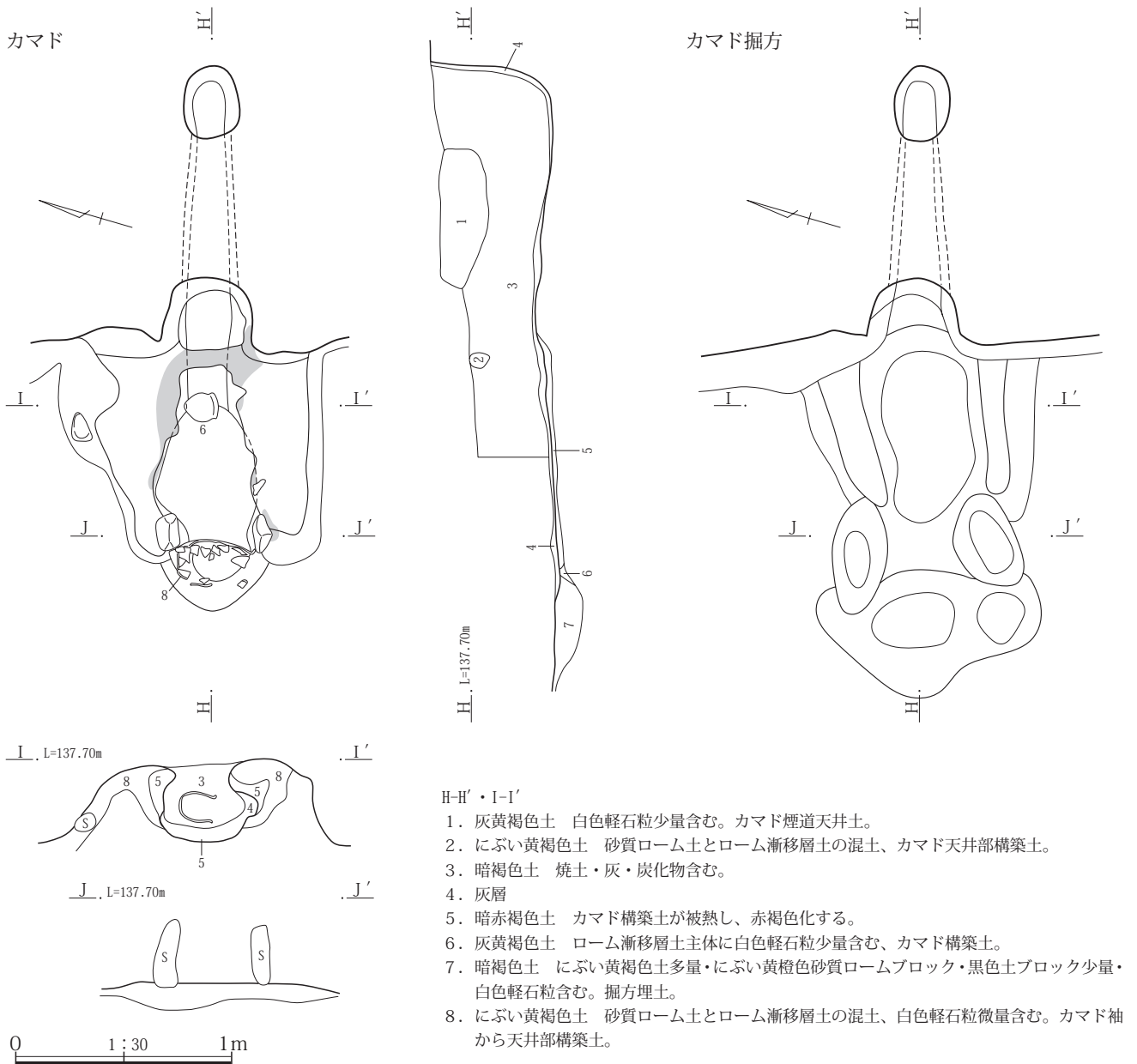
第163図 2区25号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(1)

り土砂が流入したためか崩落していなかった。規模は全長2.49m、煙道部長1.10m、全幅1.25m、煙道部幅0.26m、焚口幅0.25m、燃烧部幅0.44mを測る。燃烧部底面は焚口よりやや窪められており、煙道部底面もほぼ水平に延び、奥壁で垂直に立ち上がる。焚口の両側には径15cm、長さ35cmの棒状円礫が据え付けられ、この礫に8の土師器甕が掛けられて焚口を構築してあったとみられる。燃烧部と煙道は地山をそのまま掘り残し、その上に粘土を張り付けて構築してあった。燃烧部側壁やわずかに残存していた天井部は激しく焼土化し、燃烧部底面には灰が残存していたことから、使用頻度が高かったことが窺えた。

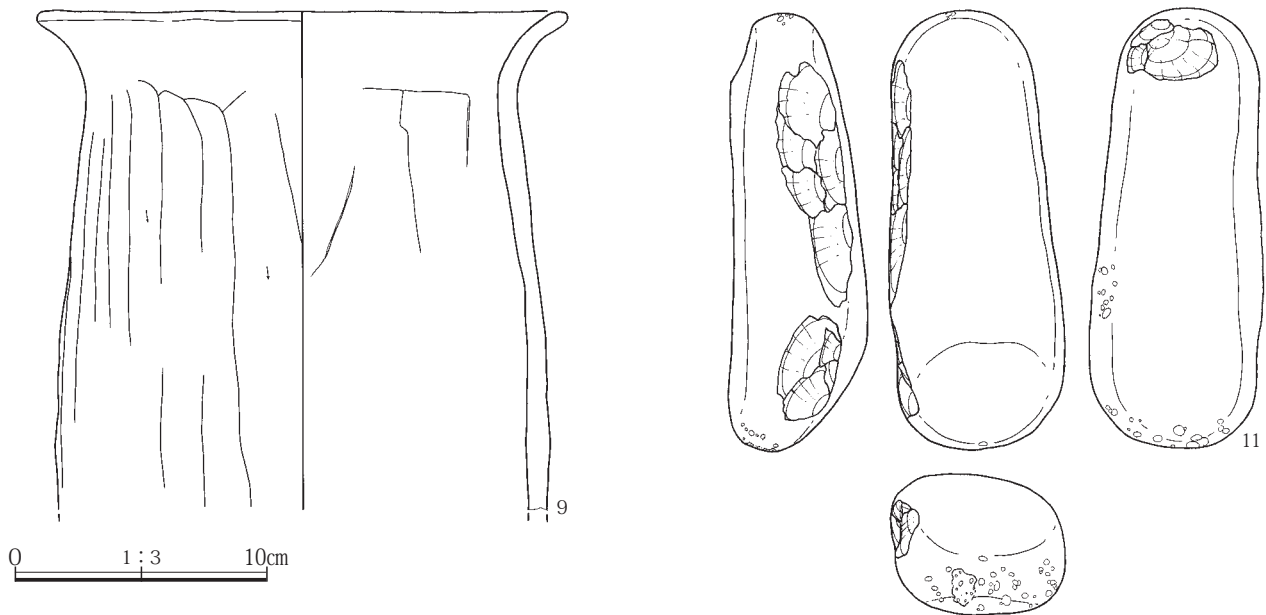
掘方は、燃烧部と焚口前に楕円形状の掘り込みが検出された。

**出土遺物** 図示した遺物では3の土師器杯と10の土師器甕が貯蔵穴脇、4の土師器杯と6～8の土師器甕がカマド、10の土師器甕が床面に散乱した状態で出土していた。また、北辺の壁際と柱穴P3の間には弧編石とみられる礫がまとまって出土していた。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片169点・小型製品片70点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期はカマドや貯蔵穴などから出土した遺物から7世紀前半に比定できる。



第164図 2区25号竪穴住居遺構図(3)



第165図 2区25号竪穴住居出土遺物図(2)

2区26号竪穴住居(第166～169図、PL.86～88・169)

**位置** 2区調査区ほぼ中央、85区G-11・12、H-11・12に位置する。北角を攪乱によって欠くが、欠落する箇所はわずかであったため、全貌は明らかである。

**重複** 直接には他の遺構との重複関係は確認できなかったが、25号竪穴住居とは近接する位置関係である。

**形状** 東西方向に長い長方形を呈す。

**規模** 長軸6.14m、短軸5.80mを測る。

**面積** 30.37㎡

**方位** N-56°-E

**埋没状態** 土層断面では壁際に灰黄褐色土が三角状に堆積した後、中ほどを黒褐色土や暗褐色土がレンズ状に堆積しているのが観察できることから、自然埋没と想定される。

**床面** 大部分は掘方面より10cm前後灰黄褐色土を埋め戻して構築されていたが、カマド前の一部では地山をそのまま踏み固めていた。床面の状態は多少の凹凸がみられるが、ほぼ平坦で、カマド前から柱穴P1とP2の間は特に硬化がみられた。

確認面から床面までの深さは、0.37～0.68mを測る。

**掘方** 大部分は浅い掘り込みであったが、壁際とカマド前では溝状や床下土坑のようなやや深い掘り込みが検出されている。その中で中央のものを床下土坑1、北角寄りのものを床下土坑2とした。床下土坑1は、形状が楕

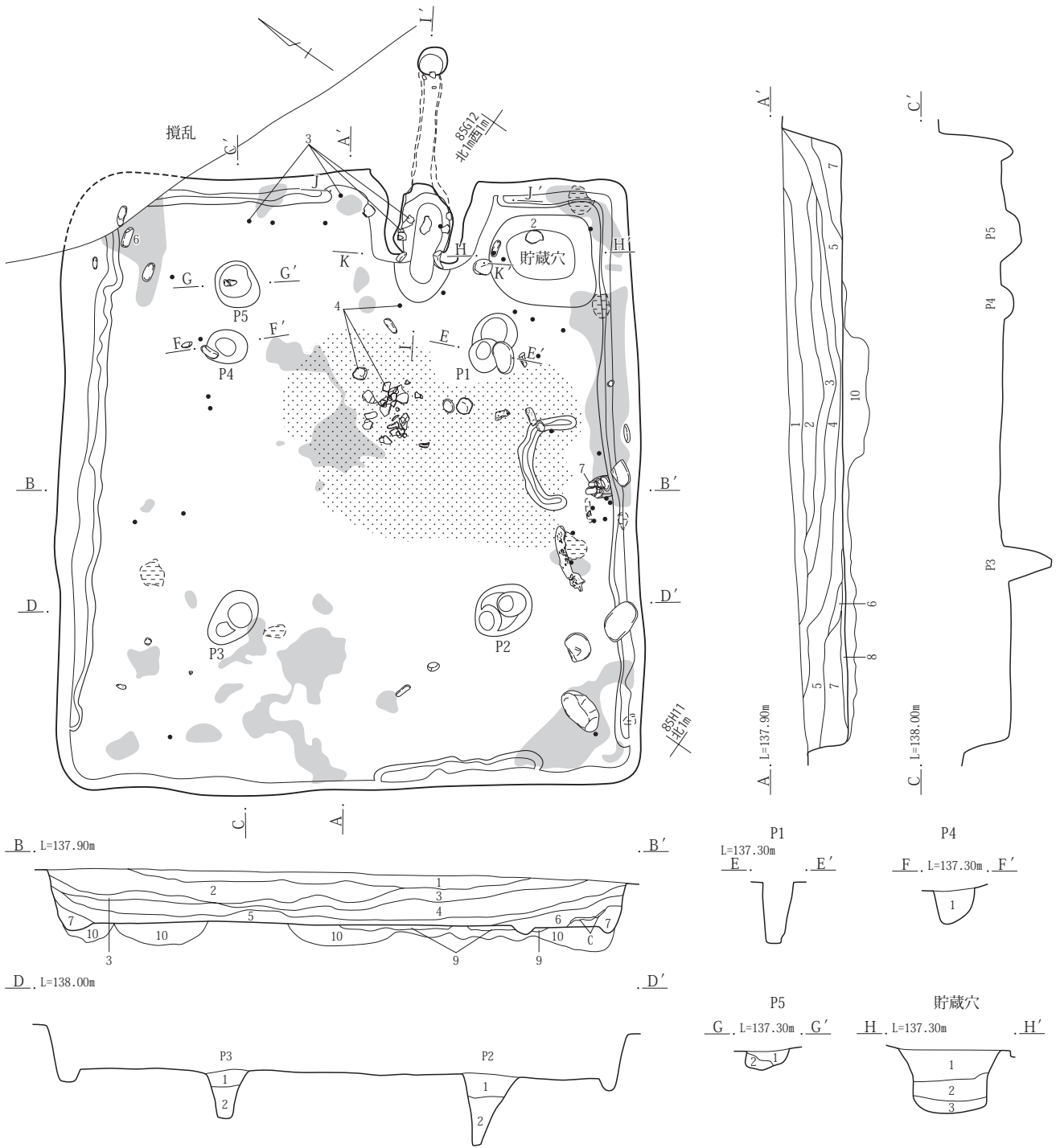
円形を呈し、長軸1.46m、短軸1.32m、深さ0.19mを測る。床下土坑2は、形状は不整形を呈し、長軸2.05m、短軸1.35m、深さ0.15mを測る。両床下土坑とも遺物などの出土はみられなかった。

**壁溝** 東辺のカマド南側から南辺、西辺の南角から1.0m北から1.6mと北辺から東辺のカマド北側までの間で検出した。規模は上端0.17～0.30m、下端0.02～0.15m、深さ0.02～0.16mを測る。

**柱穴** 竪穴住居平面の対角線上で4本を検出した。各柱穴の形状と規模は次のとおりである。P1は、円形を呈し、径0.32m、深さ0.62m。P2は、楕円形を呈し、長軸0.62m、短軸0.50m、深さ0.60m。P3は、楕円形を呈し、長軸0.60m、短軸0.40m、深さ0.50mを測る。P4は、楕円形状を呈し、長軸0.40m、短軸0.34m、深さ0.41mを測る。柱穴間の距離は、P1～P2間が2.55m、P2～P3間が2.60m、P3～P4間が2.70m、P4～P1間が2.55mである。

柱痕は確認されなかったが、柱穴P2の断面の状態から10cmほどの柱が使用されていたとみられる。

なお、北角寄りでは柱穴P4の東側でP5を検出した。形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.46m、短軸0.42m、深さ0.18mを測るが、深さが0.18mと浅いことから、柱穴の補助的役割は持たないと判断されたが、用途は不明である。



A-A'・B-B'

1. 暗褐色土 白色軽石粒少量・にぶい黄橙色砂質ローム小ブロック含む。
2. 暗褐色土 白色軽石粒多量・にぶい黄橙色砂質ローム小ブロック少量含む。
3. 黒褐色土 白色軽石粒多量・にぶい黄橙色砂質ローム小ブロック少量含む。
4. にぶい黄褐色土 白色軽石少量・にぶい黄橙色砂質ローム小ブロック含む。
5. 黒色土 白色軽石粒多量・にぶい黄褐色土ブロック少量含む。
6. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・焼土ブロック多量・炭化物含む。
7. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量含む。
8. 黒褐色土 白色軽石粒少量・にぶい黄橙色砂質ローム小ブロック含む。
9. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・黒褐色土含む。
10. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量含む。

D-D'・F-F'・G-G'

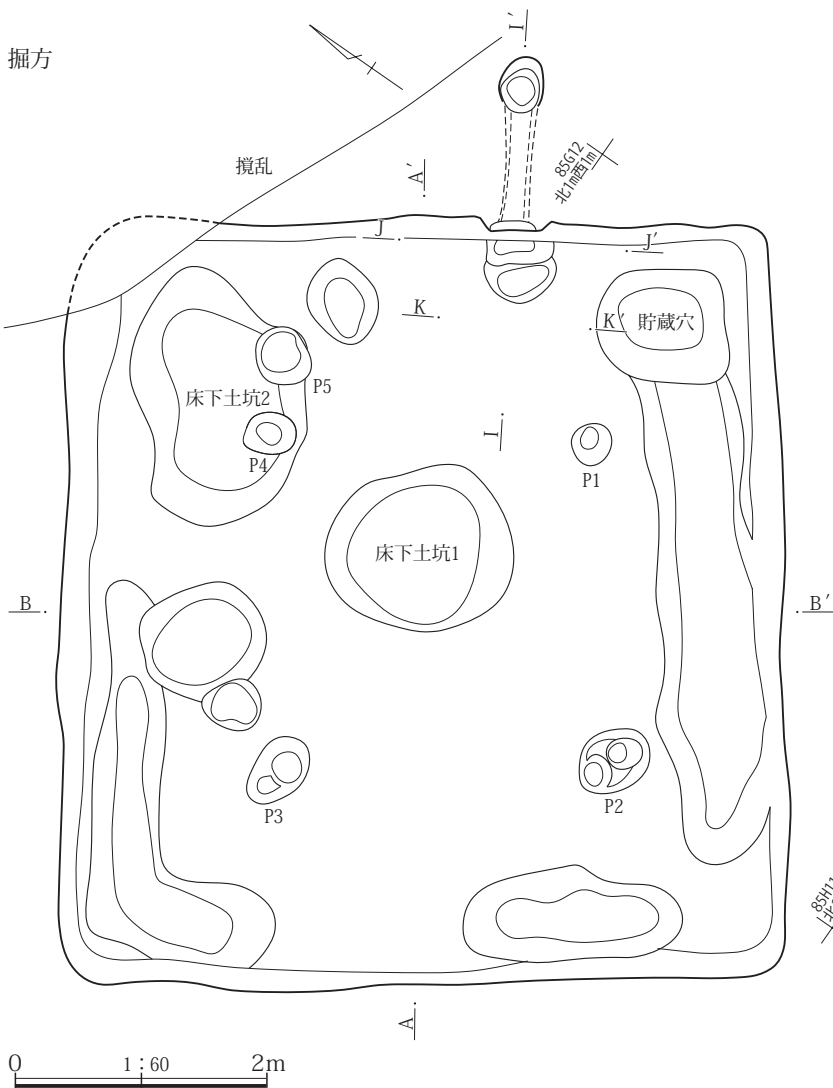
1. 暗褐色土 白色軽石粒多量・焼土粒子少量含む。
2. 暗褐色土 にぶい黄橙色砂質シルトブロック多量・白色軽石粒少量・焼土粒子・焼土小ブロック含む。

H-H'

1. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・砂質ローム小ブロック・焼土粒子微量含む。
2. 灰黄褐色弱粘質土 砂質ロームブロック多量・焼土ブロック少量含む。
3. 灰黄褐色弱粘質土 砂質ローム小ブロック微量含む。

0 1:60 2m

第166図 2区26号竪穴住居遺構図(1)

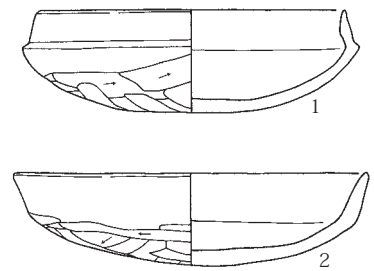


焚口には径8cm、長さ30cmと径12cm、長さ30cmの棒状礫が据えつけてあった。

掘方は、燃烧部下に径0.60×0.50mの楕円形状に10cmほど掘り込まれていた。燃烧部側壁下はほぼ平坦であった。

**出土遺物** 図示した遺物では2の土師器杯が貯蔵穴から出土している他に、1の土師器杯と3の土師器甕がカマド、4の土師器甕はカマド前の床面上に割られた状態で出土していた。図示した以外の遺物では土師器大型製品片166点・小型製品片37点が出土している。

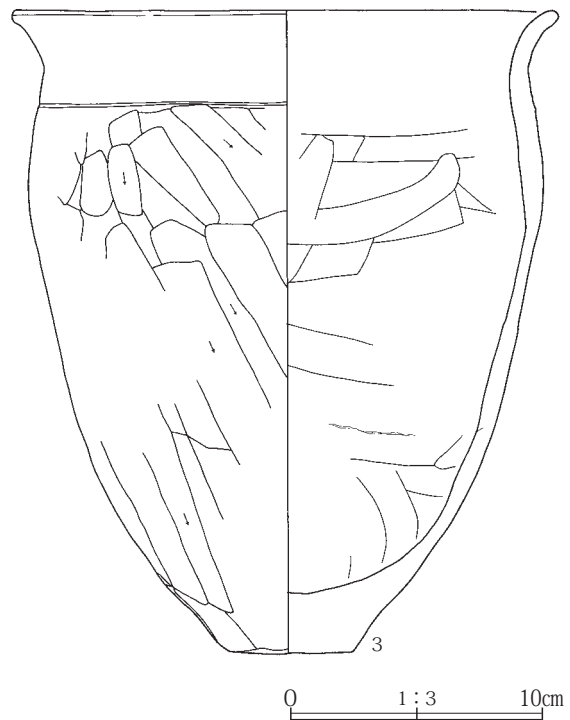
**所見** 本竪穴住居の時期は貯蔵穴やカマドなどから出土した遺物から6世紀後半に比定できる。



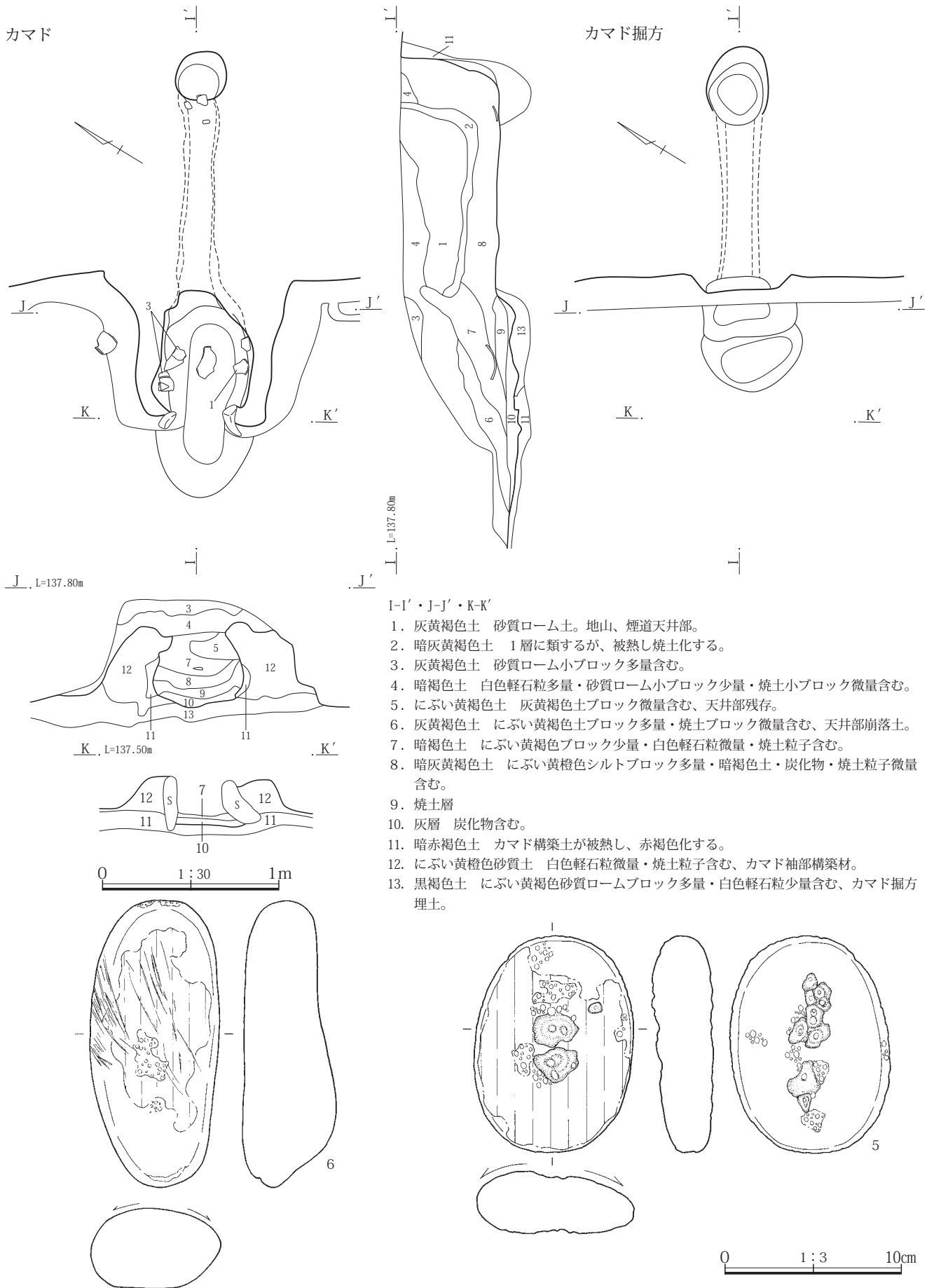
**貯蔵穴** 南東隅で検出した。形状は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.02m、短軸0.90m、深さ0.72mを測る。内部からは2の土師器杯が出土しているが、底面より29cm上位であることから、貯蔵穴脇に置かれていたものが廃棄の過程で内部に落ちたとみられる。

**その他施設** 南辺中ほどの壁際からU字状を呈する細い溝を検出した。この溝は全長1.30m、幅0.15m前後、深さ4～6cmの小規模なものであった。用途については位置関係から見ると入口の梯子などを設置したものと想定されるが、断定には至らなかった。

**カマド** 東辺中央よりやや南寄りに構築されている。残存状態は、焚口と燃烧部天井は壊されていたが、燃烧部側壁、煙道部はそのままの状態が保たれていた。規模は、全長2.52m、全幅1.30m、煙道部長1.08m、焚口幅0.28m、燃烧部幅0.54mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪められ、煙道部は地山を掘り抜き、奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。

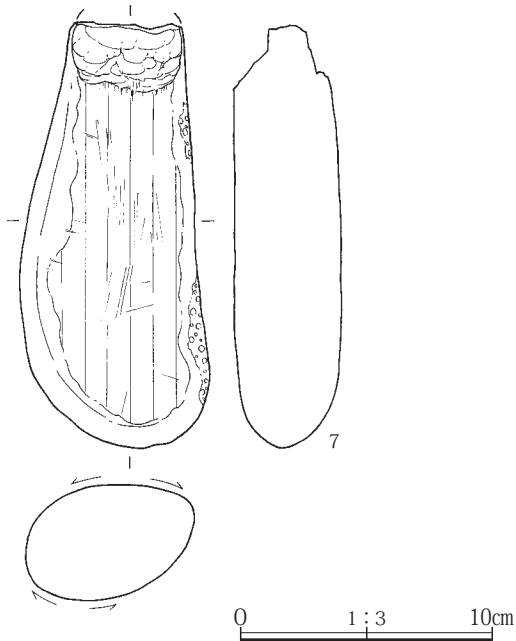
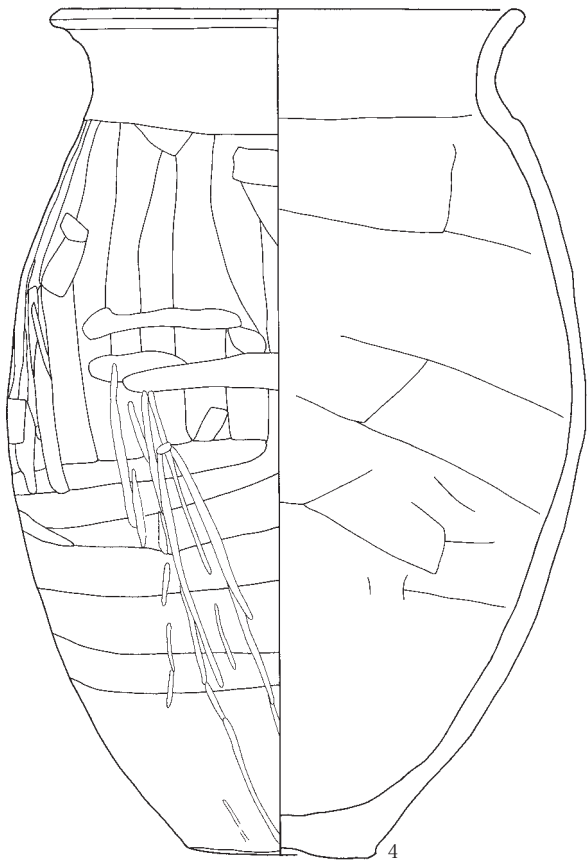


第167図 2区26号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(1)



第168図 2区26号竪穴住居遺構図(3)・出土遺物図(2)





第169図 2区26号竪穴住居出土遺物図(3)

2区27号竪穴住居(第170～173図、PL.88～91・169)

**位置** 2区調査区中央よりやや西、84区H-12～14、I-12～14、J-13・14に位置する。

**重複** 直接には他の遺構との重複関係は確認できなかったが、29号竪穴住居とは近接する位置関係である。

**形状** 南北方向に長い長方形を呈す。

**規模** 長軸7.85m、短軸6.82mを測る。

**面積** 47.89㎡

**方位** N-63°-E

**埋没状態** 土層断面では壁際に黒褐色土が堆積した後、中ほどに灰褐色土や黒褐色土がレンズ状の堆積をしていることが観察できることから、自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より5～20cmほど灰黄褐色土・黒褐色土を埋め戻して構築されていた。床面の状態はほぼ平坦であった。

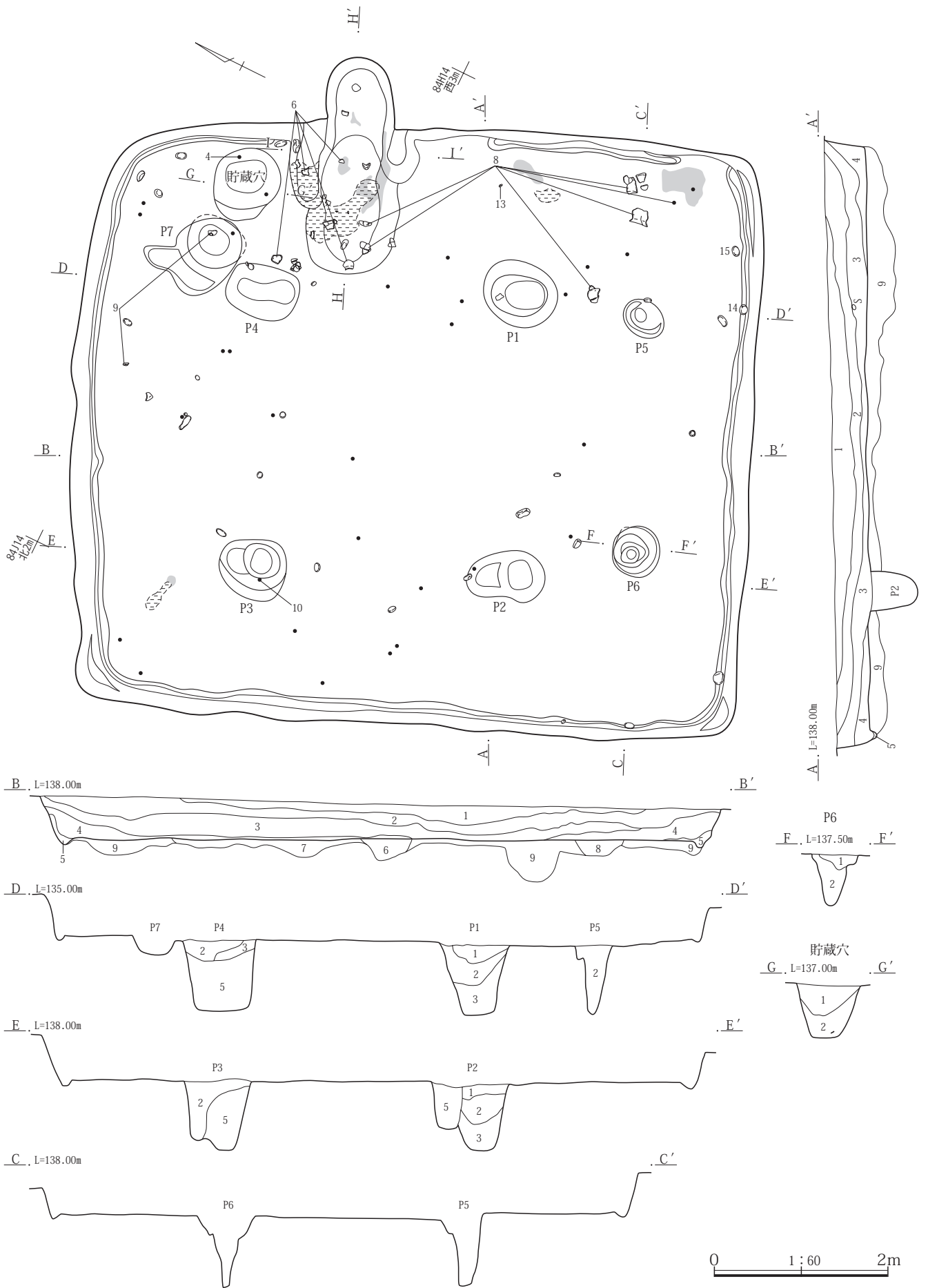
確認面から床面までの深さは、0.35～0.52mを測る。

**掘方** カマド前面に浅い掘り込みが行われていたが、北辺から西辺の壁際では溝状、南東部ではやや深い掘り込み箇所がみられた。また、中央部では床下土坑を2基検出した。床下土坑1は、形状が楕円形を呈し、規模が長軸1.76m、短軸1.60m、深さ0.10mを測る。床下土坑2は、形状が楕円形に近い形状を呈し、規模が長軸1.10m、短軸0.96m、深さ0.12mを測る。なお、内部から遺物などは出土していない。

**壁溝** カマド南側と南東角を除いて各辺壁下で検出した。規模は上端0.17～0.20m、下端0.02～0.11m、深さ0.02～0.11mを測る。

**柱穴** 竪穴住居対角線上に近い位置からP1～P4、P1・P2の南側1.3mの箇所でP5・P6の6本を検出した。各柱穴の形状と規模は次のとおりである。P1は、楕円形、長軸0.88m、短軸0.74m、深さ0.87m。P2は、楕円形、長軸0.58m、短軸0.50m、深さ0.76m。P3は、楕円形、長軸0.78m、短軸0.70m、深さ0.78m。P4は、隅丸長方形、長軸0.81m、短軸0.62m、深さ0.82m。P5は、楕円形を呈し、長軸0.50m、短軸0.40m、深さ0.78m。P6は、円形、径0.60m、深さ0.81mを測る。柱穴間の距離は、P1～P2間が3.20m、P2～P3間が3.05m、P3～P4間が3.15m、P4～P1間が2.90m、P1～P5間が1.30m、P2～P6間が1.30m、P5～P6間が2.70mを測る。

各柱穴の位置関係はP1～P4がほぼ長方形を呈し、P5とP6はP4-P1、P3-P2の延長線上よりやや内側に位置する。こうした状況からP1～P4は主柱穴とみられ、P5とP6は長軸方向にやや長い規模の建物を建てるための補助的な柱穴と想定される。



第170図 2区27号竖穴住居遺構図(1)

A-A'・B-B'

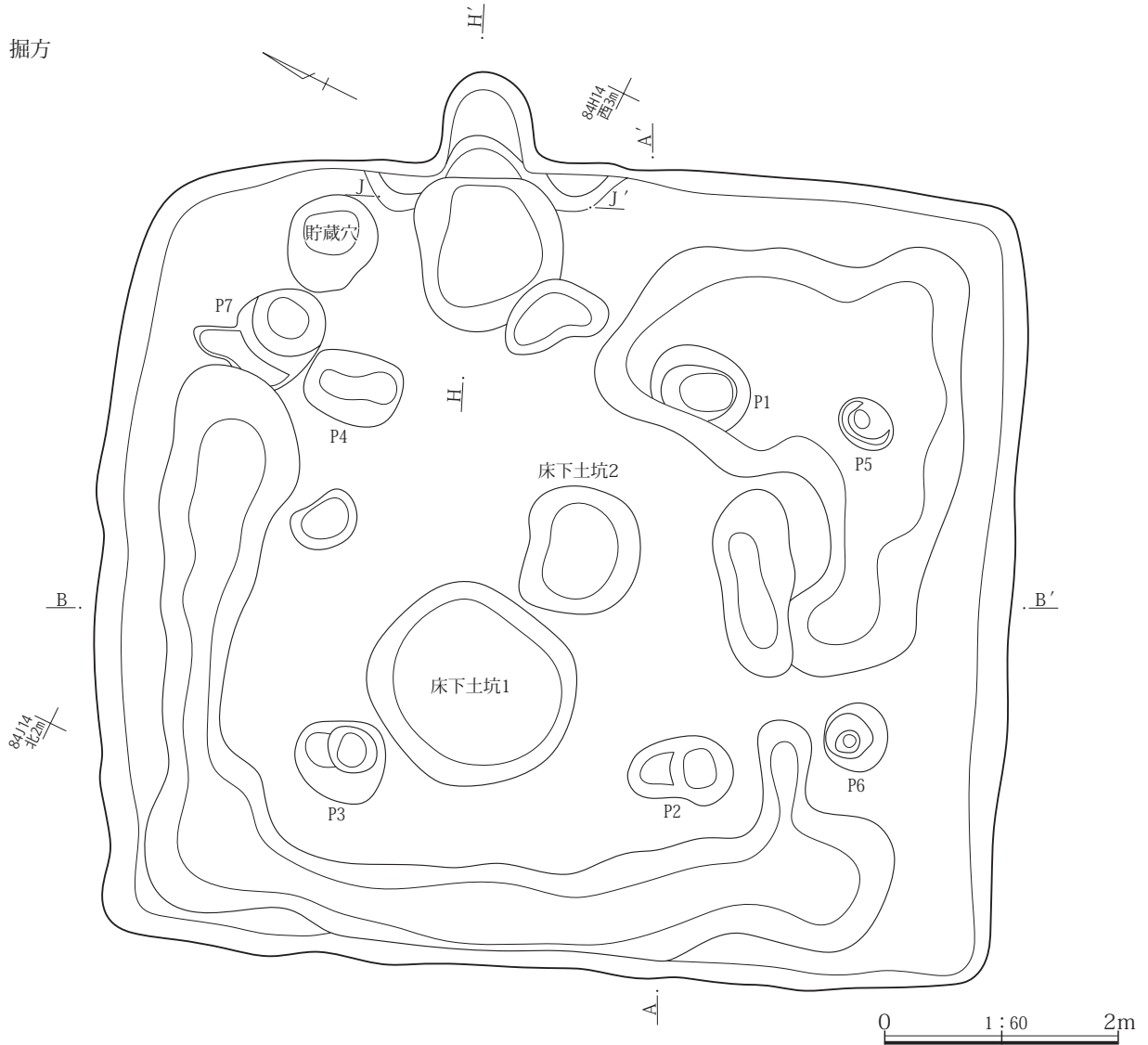
1. 暗褐色土 白色軽石粒少量・黄褐色ローム漸移層土ブロック・焼土粒子微量含む。
2. 黒褐色土 白色軽石粒少量・ハードロームブロック含む。
3. 灰黄褐色土 白色軽石粒多量・ハードロームブロック少量含む。
4. 黒褐色土 白色軽石粒少量・焼土粒子微量含む。
5. にぶい黄褐色土 白色軽石粒微量含む。
6. 灰黄褐色土 焼土粒ブロック少量・白色軽石粒・灰微量含む。
7. 灰黄褐色土 焼土粒ブロック少量・白色軽石粒微量含む。
8. 黒褐色土 焼土粒微量含む。
9. 灰黄褐色土 焼土粒・焼土粒ブロック少量含む。

D-D'・E-E'・F-F'

1. 黒褐色土 白色軽石粒多量含む。
2. 暗褐色土 白色軽石粒少量・黄褐色砂質ローム小ブロック含む。
3. 灰黄褐色土 にぶい黄褐色砂質ロームブロック少量含む。
4. 黒褐色土 白色軽石粒少量・にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック含む。
5. 灰黄褐色土 にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック多量含む、人為的埋戻土。

G-G'

1. 灰黄褐色土 白色軽石粒多量・焼土粒子少量・炭化物含む。
2. 暗褐色土 白色軽石粒少量・にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック含む。



第171図 2区27号竪穴住居遺構図(2)

なお、P4の北側には柱穴と規模の近いピットが検出されている。このピットについては埋没土から柱穴P4に先行して掘削された柱穴で、その位置の修正のため埋め戻され、柱穴P4が新たに掘削されたとの見解があるが、確定するには至っていない。

柱痕は確認されていない。土層断面の観察では各柱とも抜き取られた可能性が高い。

**貯蔵穴** カマドの北側北東隅で検出した。形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.84m、短軸0.76m、深さ0.65mを測る。内部から1と4の土師器杯が出土している。

**カマド** 東辺の中央よりやや北寄りに構築されていた。残存状態は、焚口や燃焼部から煙道部の天井と燃焼部側壁の上半は壊されていた。規模は、全長2.49m、全幅1.50m、煙道部長約1.0m、燃焼部幅0.70mを測る。燃焼部

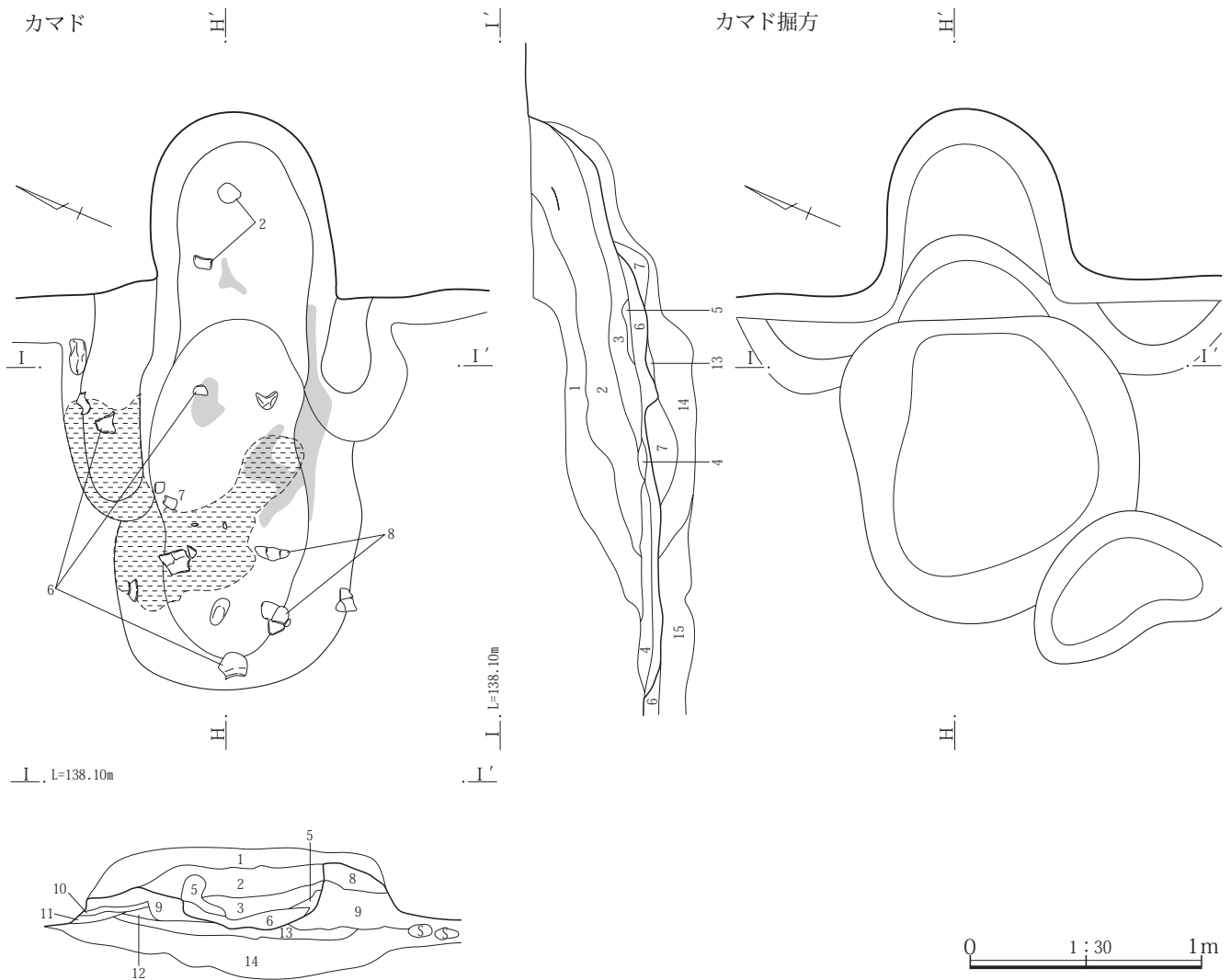
はずかに窪むがほぼ平坦で、煙道部は緩やかな傾斜で延びるが、奥壁は急な立ち上がりをしていた。

掘方は、燃烧部を中心に、1.25×1.20mの楕円形状に5cmほど掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示した遺物は、貯蔵穴から出土した4の土師器杯の他に、カマドから出土した2・6～8の土師器杯・壺・甕である。また、柱穴P3からは10のS字状口

縁台付甕が出土しているが、これは柱を建てた際に充填した土砂に混入したものとみられる。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片568点・小型製品片87点、須恵器小型製品片1点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は貯蔵穴やカマドから出土した遺物から7世紀前半に比定できる。

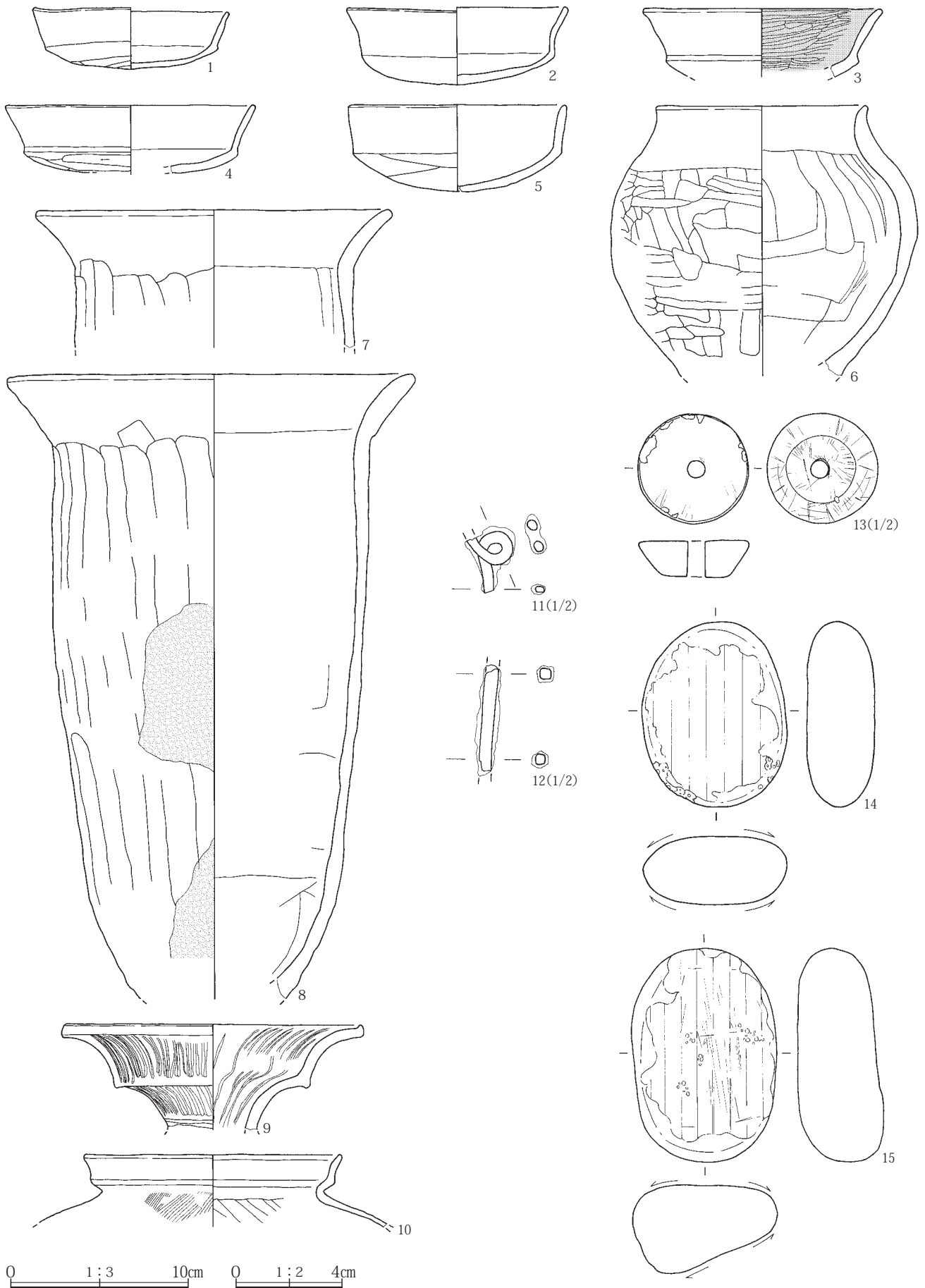


H-H'・I-I'

1. 暗褐色土 黒褐色土小ブロック多量・白色軽石粒・焼土粒子少量含む。
2. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・焼土粒子含む。
3. にぶい黄褐色土 焼土粒子微量含む。砂質ローム土であり、カマド構築土。
4. にぶい黄褐色土 焼土粒子多量・焼土小ブロック・黄褐色シルト小ブロック含む。
5. 暗赤褐色土 崩落焼土層。
6. 灰層 焼土小ブロック多量含む。
7. 暗赤褐色土 カマド構築土が被熱し赤褐色土化する。
8. 灰黄褐色土 灰多量・焼土小ブロック少量含む。

9. 黒褐色土 白色軽石粒多量含む。
10. 灰黄褐色土 灰多量・焼土小ブロック少量含む。
11. 浅黄橙色土 砂質シルト土。
12. 灰黄褐色土 砂質ローム漸移層土主体にHr-FP微量・炭化物・焼土粒子含む。
13. 暗褐色土 にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック多量・白色軽石粒微量含む。
14. 灰黄褐色土 にぶい黄褐色砂質ロームブロック多量・焼土小ブロック微量・炭化物含む。
15. 暗褐色土 白色軽石粒少量・にぶい黄褐色砂質ロームブロック・焼土小ブロック含む、掘方埋土。

第172図 2区27号竪穴住居遺構図(3)



第173図 2区27号竪穴住居出土遺物図

2区29号竪穴住居(第174～176図、PL.91～93・170)

**位置** 2区調査区西寄り、85区J-13・14、K-13・14、L-14に位置する。南辺の中ほどを攪乱によって欠落するが、この攪乱は床面までは達していない。

**重複** 竪穴住居内で2号墓と重複する。新旧関係は本竪穴住居の方が古い。また、27号竪穴住居とは近接する位置関係である。

**形状** 長軸と短軸は同じ距離を測るが、東辺5.9m、南辺6.3m、西辺6.4m、北辺6.7mと辺長に差がみられることから台形状を呈する。

**規模** 長軸6.48m、短軸6.48mを測る。

**面積** 36.47㎡

**方位** N-66°-E

**埋没状態** 土層断面では灰黄褐色土と黒褐色土の混じり合った土砂が壁際に三角状に堆積した後、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より10～35cmほど灰黄褐色土・黒褐色土を埋め戻して構築されていた。床面の状態は、若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦で、特に中心部から東側にかけては硬化していた。

確認面から床面までの深さは、0.33～0.49mを測る。

**掘方** 周辺部が深く、中央部は浅い掘り込みが行われていた。住居全体に施されていた。中央部で床下土坑1を検出した。形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.50m、短軸1.25m、深さ0.16mを測る。この床下土坑からは遺物などの出土はみられなかった。

**壁溝** カマド部分を除いて各辺壁下から検出した。規模は、上端0.10～0.28m、下端0.03～0.18m、深さ0.02～0.11mを測る。

**柱穴** 床面では、竪穴住居平面の対角線上でP1・P3・P4の3本を検出、掘方の調査時にP4の対角に位置するP2を検出した。形状と規模はP1が、楕円形を呈し、長軸0.60m、短軸0.48m、深さ0.21m。P2は、円形を呈するとみられ、径0.80m、深さ0.27m。P3は、楕円形を呈し、長軸0.48m、短軸0.45m、深さ0.27m。P4は、楕円形を呈し、長軸0.58m、短軸0.51m、深さ0.27mを測る。柱穴間の距離は、P1～P2間が2.80m、P2～P3間が2.70m、P3～P4間が2.70m、P4・P1間が2.75mである。

なお、P1の南側1.0mでP5を検出した。形状は、楕

円形を呈し、規模は長軸0.34m、短軸0.30m、深さ0.20mを測る。P5はその位置から、P1の支柱穴との見方もあるが、用途については断定できない。

**貯蔵穴** 南東隅にて検出した。形状は平面が楕円形状、断面は南北方向に段を有する逆凸状を呈していた。規模は長軸1.24m、短軸0.72m、深さ0.56mを測る。内部からは7・8・10の土師器甕や垂角礫が出土しているが、その位置は底面より10～15cmほど上位で埋没過程で廃棄された可能性が窺える。

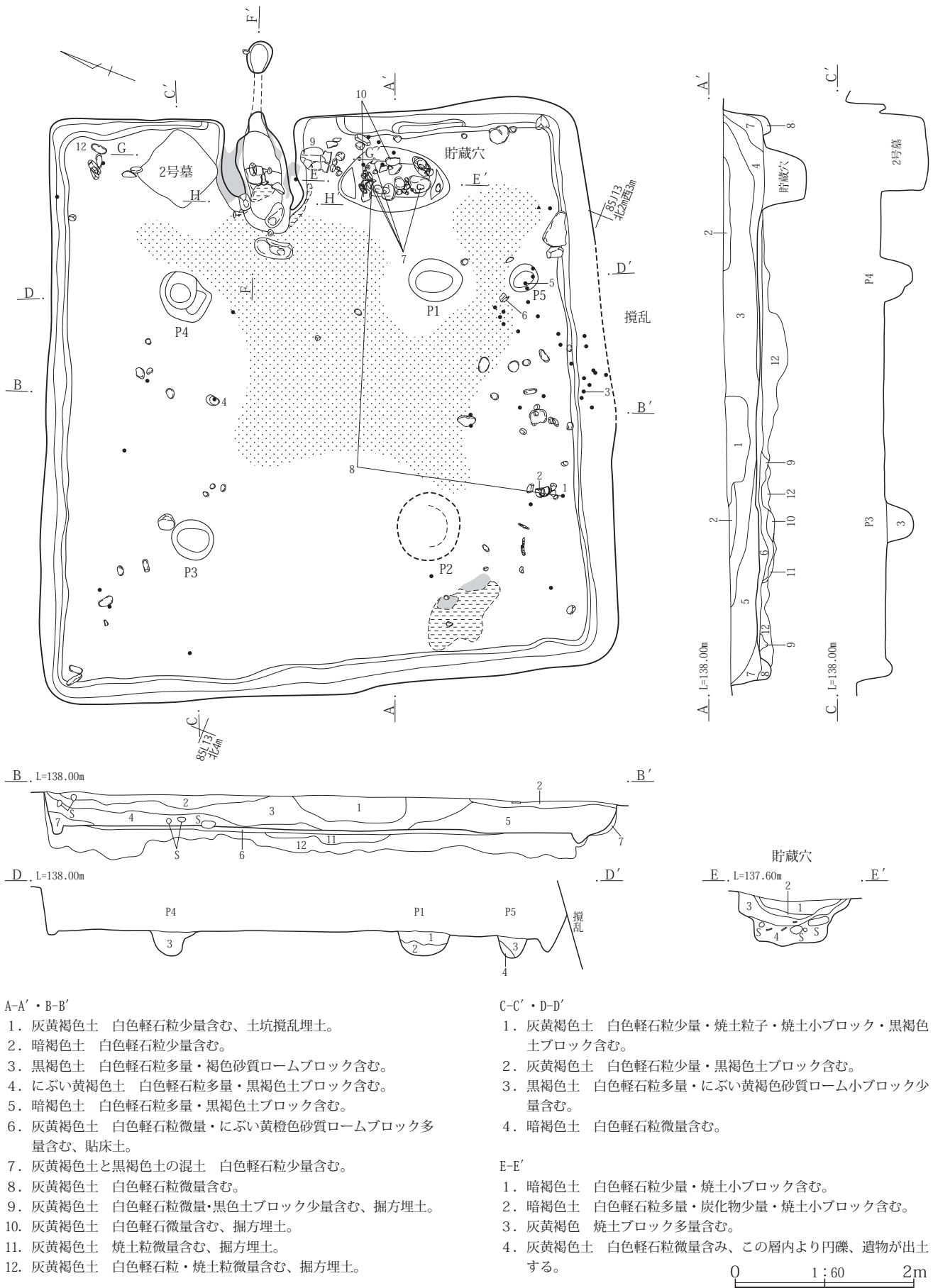
**カマド** 東辺の中央よりやや北寄りに構築されていた。残存状態は焚口と燃焼部天井は壊されていたが、煙道部と燃焼部側壁はそのままの状態を保たれていた。なお、燃焼部底面には支脚が抜き取られず、そのまま残存していた。規模は、全長2.13m、全幅0.95m、煙道部長0.64m、焚口部幅0.46m、燃焼部幅0.56mを測る。燃焼部は焚口よりわずかに窪められている。煙道部底面はほぼ平坦に延び、奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。焚口の両側には径15cm、長さ30～40cmの礫が据え付けられていたが、右側は倒されていた。なお、カマド前から出土した径20cm、長さ44cmの棒状円礫は焚口に建てられていた礫の上に掛けられた構築材とみられる。

掘方は燃焼部下を1.0×0.6mほどの楕円形状に7～12cmほど掘り込まれていた。

燃焼部底面には灰が厚く残り、側壁内側は激しく焼土化しており、使用状態を窺うことができた。なお、カマド内からは9・10の土師器甕が出土しているが、9の土師器甕は燃焼部から胴部の一部、右側壁外側から大部分が出土しており、カマドに煮沸用として掛けられていたものが取り外しの時に破損し、一部がカマド内に残ったとみられる。

**出土遺物** 図示した遺物のうち、7・9・10の土師器甕がカマドや貯蔵穴、4の土師器杯が床面からの出土である。この他、1・2の土師器杯、8の土師器甕は南辺の壁際、床面よりやや上位からの出土であり埋没過程で廃棄された可能性が窺える。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片224点・小型製品片60点、須恵器小型製品片4点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期はカマドや貯蔵穴、床面などから出土した遺物から6世紀後半に比定できる。



A-A'・B-B'

1. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量含む、土坑攪乱埋土。
2. 暗褐色土 白色軽石粒少量含む。
3. 黒褐色土 白色軽石粒多量・褐色砂質ロームブロック含む。
4. にぶい黄褐色土 白色軽石粒多量・黒褐色土ブロック含む。
5. 暗褐色土 白色軽石粒多量・黒褐色土ブロック含む。
6. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量・にぶい黄褐色砂質ロームブロック多量含む、貼床土。
7. 灰黄褐色土と黒褐色土の混土 白色軽石粒少量含む。
8. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量含む。
9. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量・黒色土ブロック少量含む、掘方埋土。
10. 灰黄褐色土 白色軽石微量含む、掘方埋土。
11. 灰黄褐色土 焼土粒微量含む、掘方埋土。
12. 灰黄褐色土 白色軽石粒・焼土粒微量含む、掘方埋土。

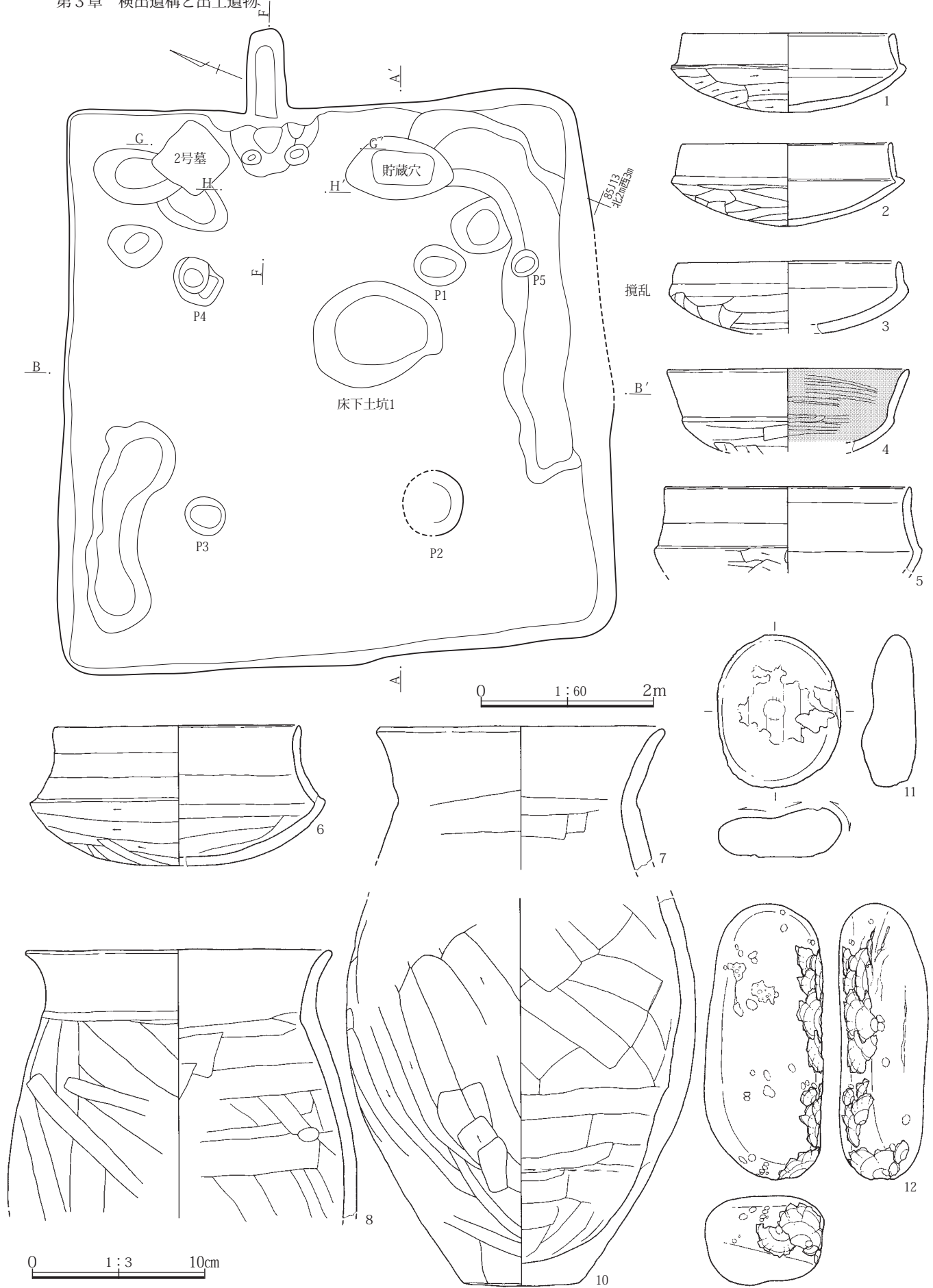
C-C'・D-D'

1. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・焼土粒子・焼土小ブロック・黒褐色土ブロック含む。
2. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・黒褐色土ブロック含む。
3. 黒褐色土 白色軽石粒多量・にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック少量含む。
4. 暗褐色土 白色軽石粒微量含む。

E-E'

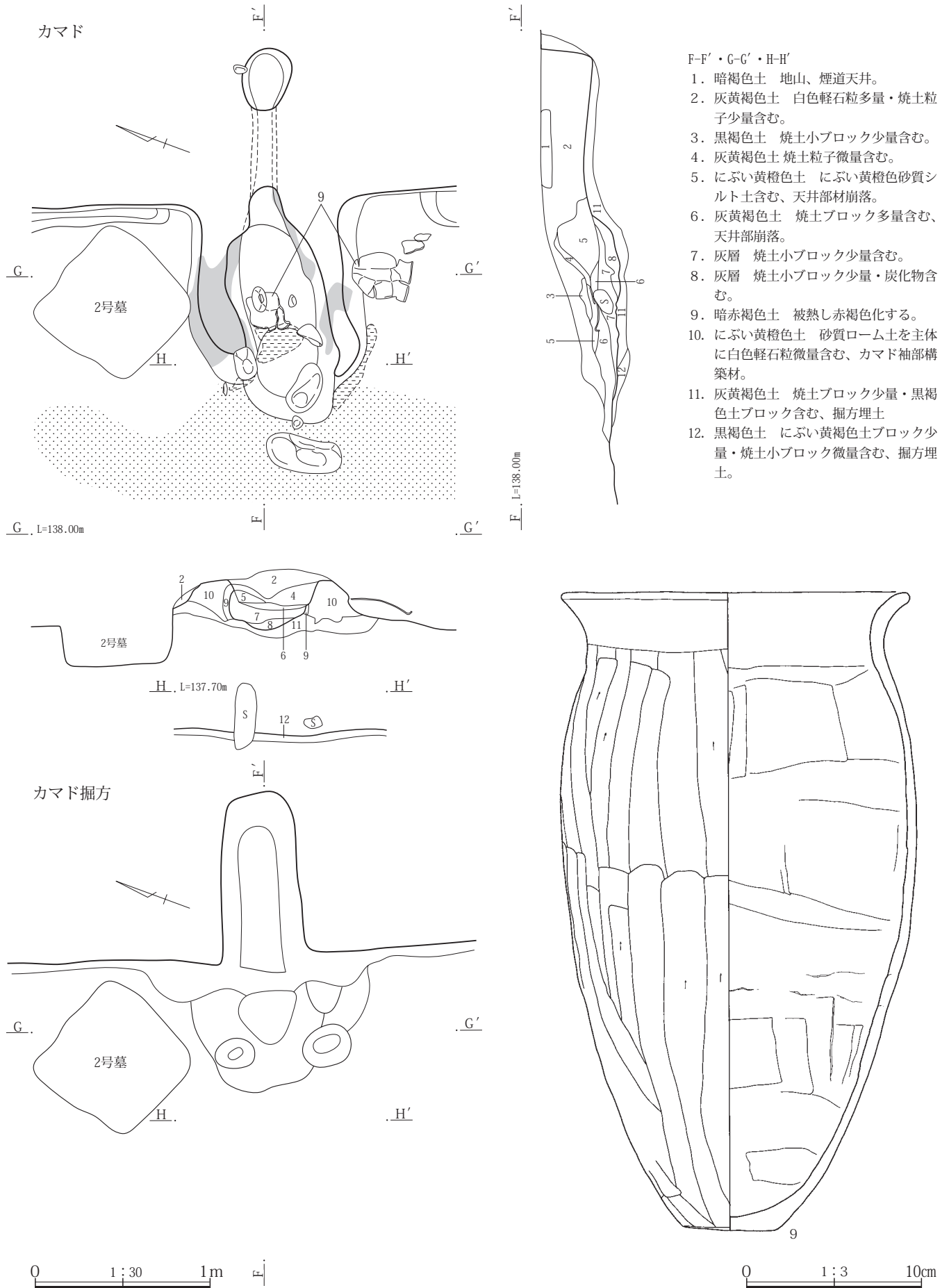
1. 暗褐色土 白色軽石粒少量・焼土小ブロック含む。
2. 暗褐色土 白色軽石粒多量・炭化物少量・焼土小ブロック含む。
3. 灰黄褐色 焼土ブロック多量含む。
4. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量含む、この層内より円礫、遺物が出土する。

第174図 2区29号竪穴住居遺構図(1)



第175図 2区29号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(1)





第176図 2区29号竪穴住居遺構図(3)・出土遺物図(2)

2区30号竪穴住居(第177・178図、PL.93)

**位置** 2区調査区東寄り、84区T-10、85区A-10・11に位置する。重複する谷地で南側の2分の1ほどが欠落するため全貌は不明である。

**重複** 3号溝、谷地、31号竪穴住居、1号粘土採掘坑と重複する。本竪穴住居は3号溝、谷地より古く、31号竪穴住居、1号粘土採掘坑より新しい。

**形状** 中ほどがやや膨らむが、ほぼ南北に長い長方形を呈するとみられる。

**規模** 調査範囲内では、長軸4.32m、短軸4.25mを測る。

**面積** 調査範囲内では10.55㎡を測る。

**方位** N-82°-E

**埋没状態** 土層断面では東側より黒褐色土、暗褐色土が流れ込んだ様子が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 地山をそのまま踏み固めていた。床面の状態は、

若干の凹凸がみられたが、ほぼ平坦である。なお、東側と西側では最大で10cmの高低差がみられ、床面は東から西へ向けて緩やかに傾斜していた。

確認面から床面までの深さは、0.43~0.49mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘削されていなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

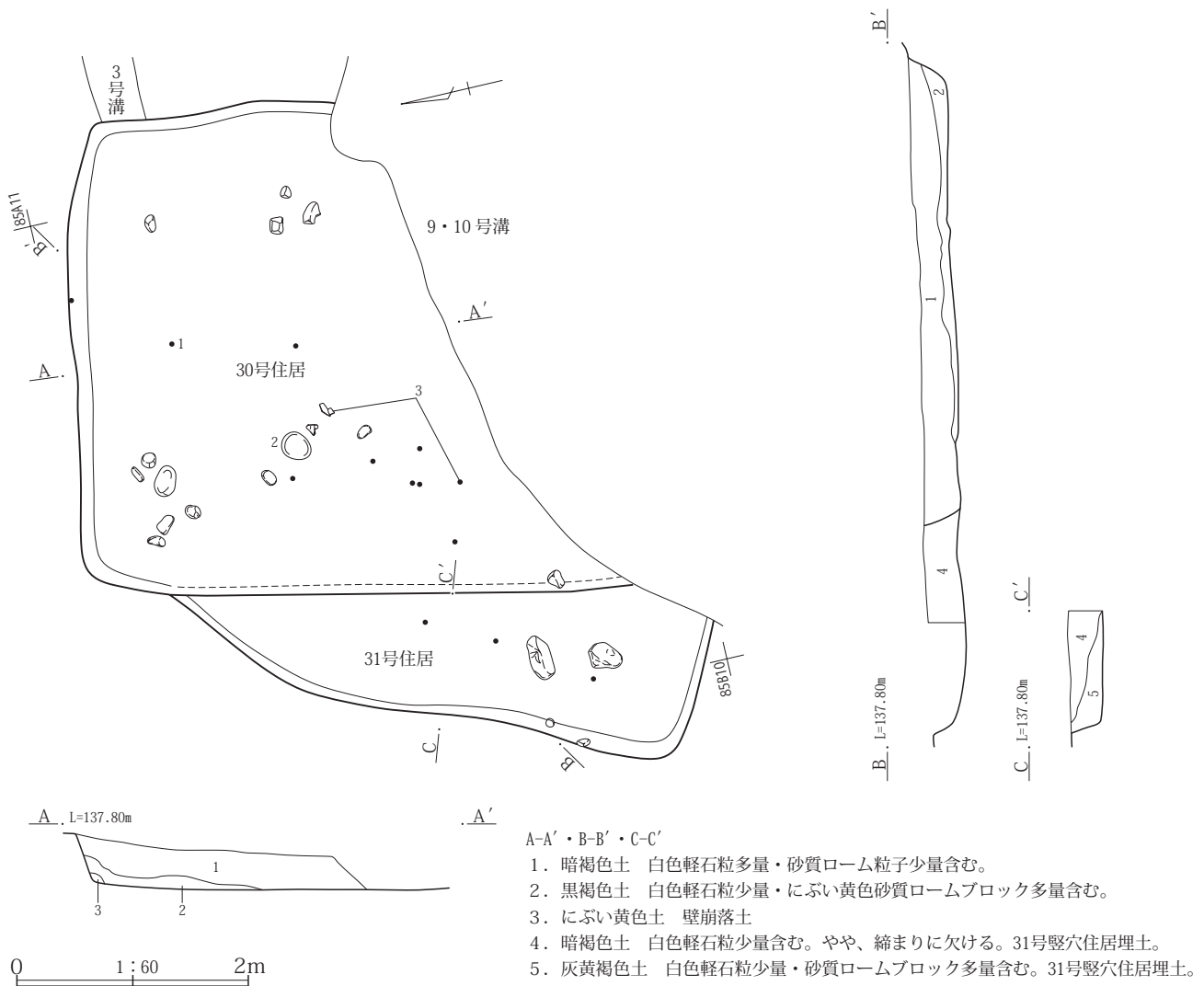
**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**カマド** 調査範囲内では、確認されなかった。

**出土遺物** 図示した遺物のうち2の土師器鉢と3の須恵器甕片が床面から出土している。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片19点・小型製品片17点、須恵器大型製品片22点・小型製品片1点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は床面から出土した遺物から6世紀末から7世紀初頭に比定できる。



第177図 2区30・31号竪穴住居遺構図

2区31号竪穴住居(第177・178図)

**位置** 2区調査区東寄り、85区A-10、B-10に位置する。本竪穴住居は重複する遺構や谷地によって西辺側のわずかな部分しか残存していなかったため全貌は不明である。

**重複** 3号溝、谷地、30号竪穴住居、1号粘土採掘坑と重複する。本竪穴住居は3号溝、谷地、30号竪穴住居より古く、1号粘土採掘坑より新しい。

**形状** 西辺は直線ではなく、中ほどで弧状を呈しているが、長方形に近い形状を呈するとみられる。

**規模** 調査範囲内では、長軸4.60m、短軸1.20mを測る。

**面積** 調査範囲内では3.34㎡を測る。

**方位** 長軸方向でN-30°-Eを指す。

**埋没状態** 土層断面では灰黄褐色土の単一層しか観察できないため埋没状態についての判断はできない。

**床面** 地山をそのまま踏み固めていた。床面の状態は、

若干の凹凸がみられたが、ほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.30~0.40mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘削されていなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

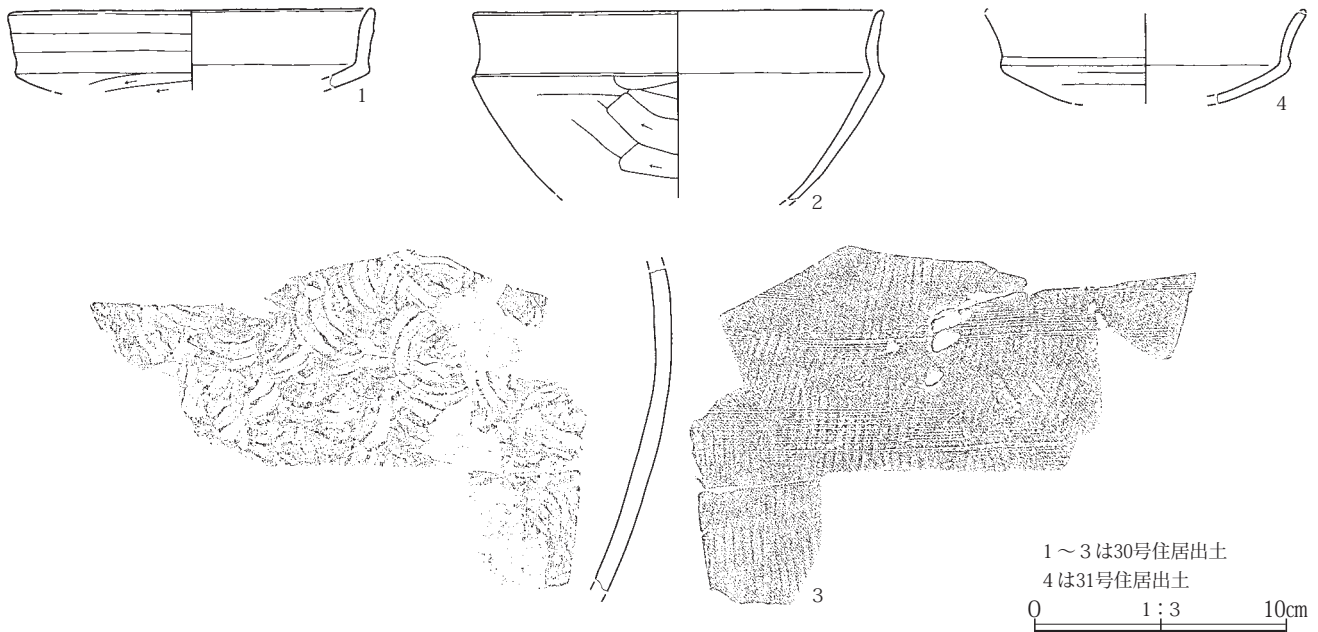
**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**カマド** 調査範囲内では、確認されなかった。

**出土遺物** 図示した遺物は埋没土中から出土した1の土師器杯だけであった。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片10点・小型製品片1点、須恵器大型製品片4点、灰釉陶器小型製品片1点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は、形状がわかるもので共伴する遺物が存在しないため、断定できないが、おおよそ6世紀後半に比定できる。なお、出土遺物からは重複する30号竪穴住居との時間差は明確ではない。



第178図 2区30・31号竪穴住居出土遺物図

2区34号竪穴住居(第179~181図、PL.93~95・170)

**位置** 2区調査区中央の北寄り、85区B-15に位置する。

**重複** 遺構確認では確認できなかったが、土層断面で3基の土坑と重複しているのを確認した。新旧関係は本竪穴住居の方が古い。

**形状** 東辺2.8m、南辺3.8m、西辺2.6m、北辺4.4mと辺長に差がみられ、台形状を呈する。

**規模** 長軸4.32m、短軸2.90mを測る。

**面積** 8.50㎡

**方位** N-93°-E

**埋没状態** 土層断面は重複する遺構によって不明確なところもあるが、5cmほど灰黄褐色土が床面に堆積した後、暗褐色土が周囲から流れ込んだ様子が観察できることから、自然埋没と想定される。ただし、A-A'では3層が途中で不自然な盛り上がりを見せており、断定には至らなかった。

**床面** 掘方面より10cmほど灰黄褐色土を埋め戻して構築している。床面の状態は若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.48～0.64mを測る。

**掘方** 全体的に浅い掘り込みが行われていた。カマド前で床下土坑1を検出した。床下土坑1は、形状が隅丸の三角形を呈し、規模は長軸0.93m、短軸0.72m、深さ0.17mを測る。内部からは遺物などの出土はみられなかった。

**壁溝** 東辺のカマド南側壁下、南辺南東角から西辺の中ほどの壁下、北辺の中ほどの壁下で1.4mほどを検出した。規模は上端0.10～0.20m、下端0.02～0.15m、深さ

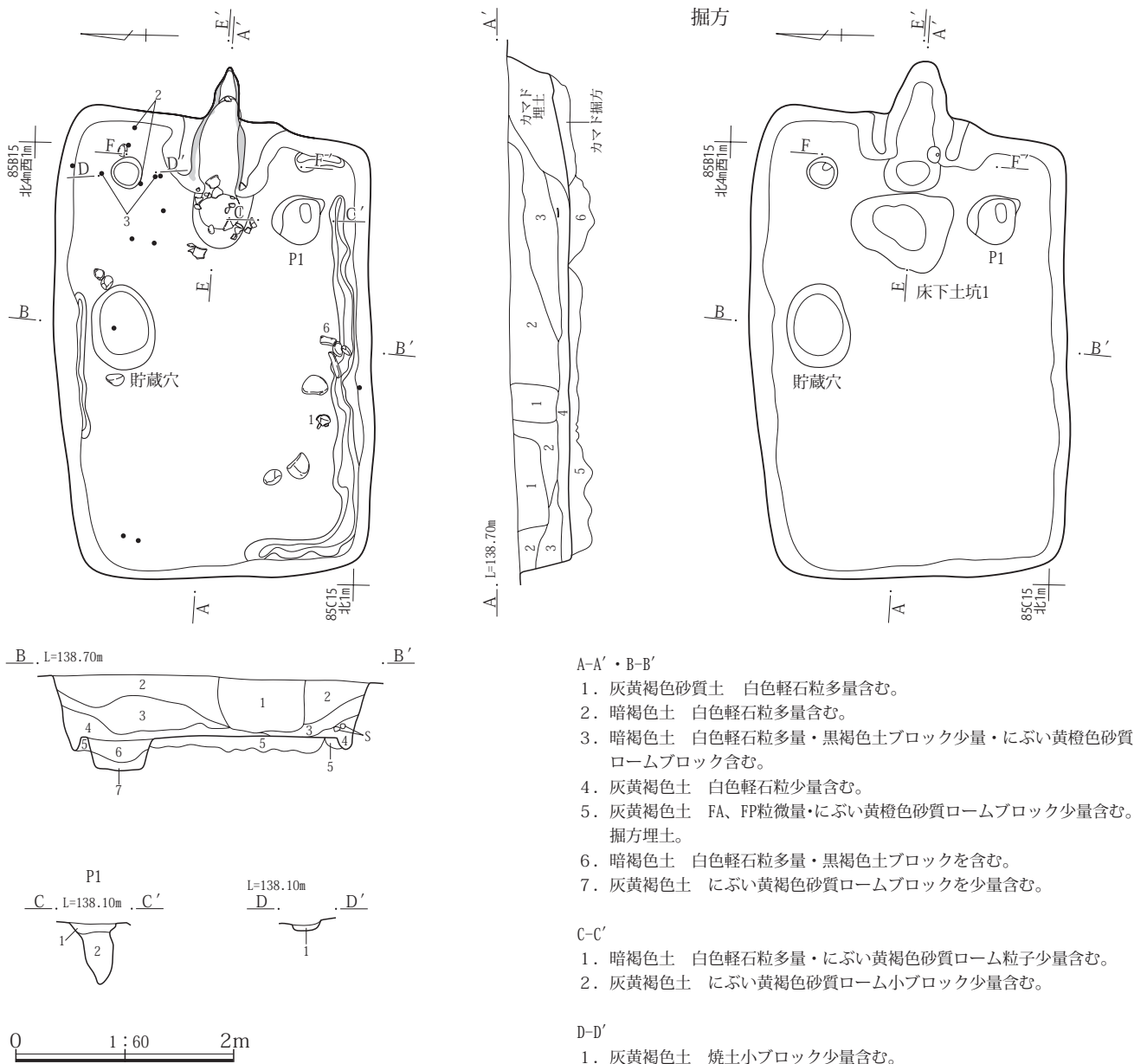
0.04～0.10mを測る。

**柱穴** 南東角寄りで1本を検出した。形状は、楕円形状を呈し、規模は長軸0.46m、短軸0.44m、深さ0.81mを測る。他の角寄りで床面を精査したが、柱穴の検出にはいたらなかった。

なお、柱痕は確認できなかった。

**貯蔵穴** 確定には至らないが、1区20号竪穴住居の例からも北辺寄りの中ほどで検出した土坑が該当する可能性がある。形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.80m、短軸0.58m、深さ0.28mを測る。内部からは土器の小片が出土しているが、図示できるものではなかった。

**カマド** 東辺のほぼ中央に構築されていた。残存状態は



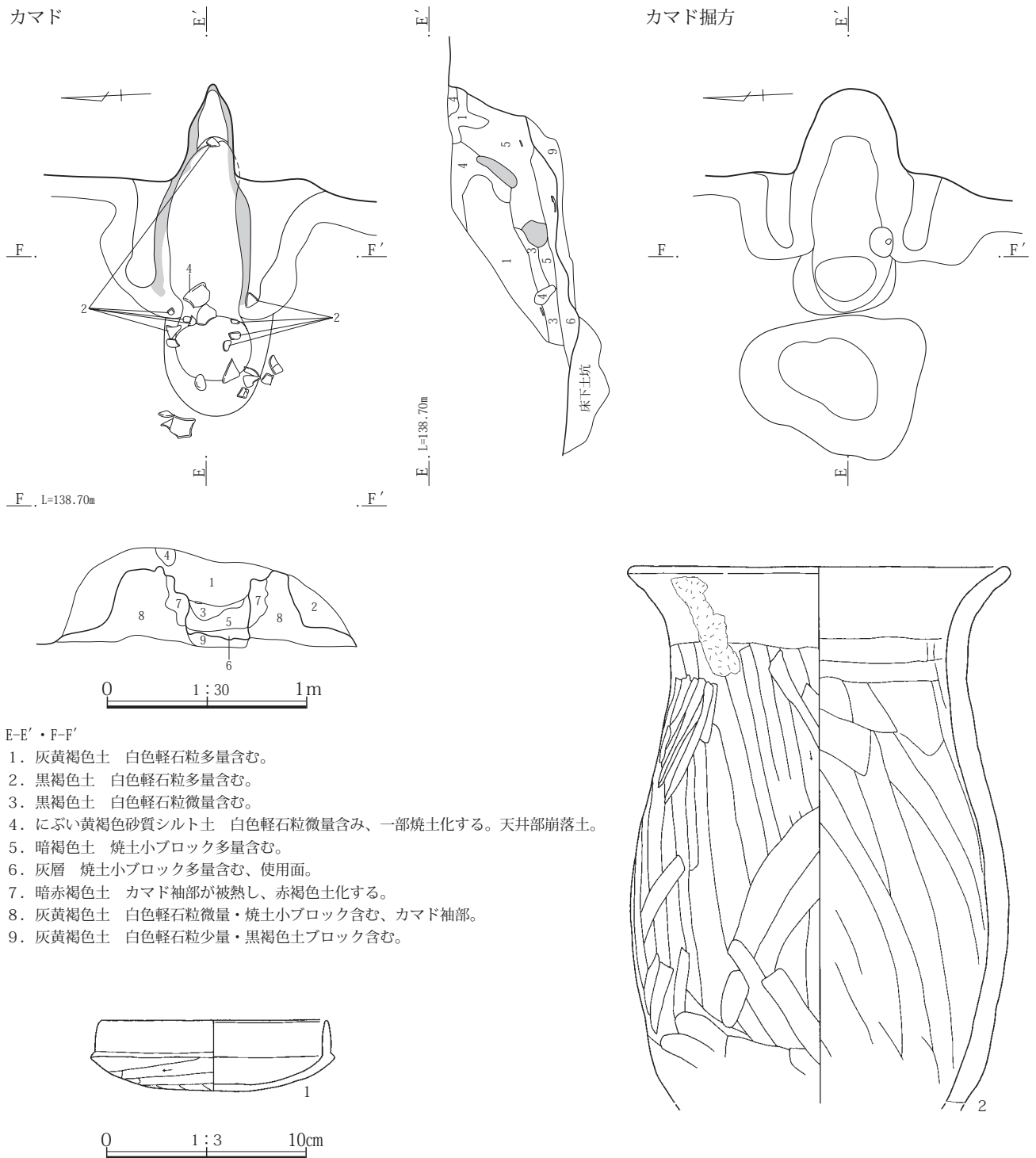
第179図 2区34号竪穴住居遺構図(1)

焚口と燃焼部から煙道部の天井は壊され、構築材も煙道部に残る程度であった。なお、燃焼部側壁は残存していた。全長1.65m、全幅1.05m、燃焼部幅0.48mを測る。燃焼部は焚口よりやや窪められており、煙道部は緩い傾斜で延び、奥壁は急な角度で立ち上がっていた。

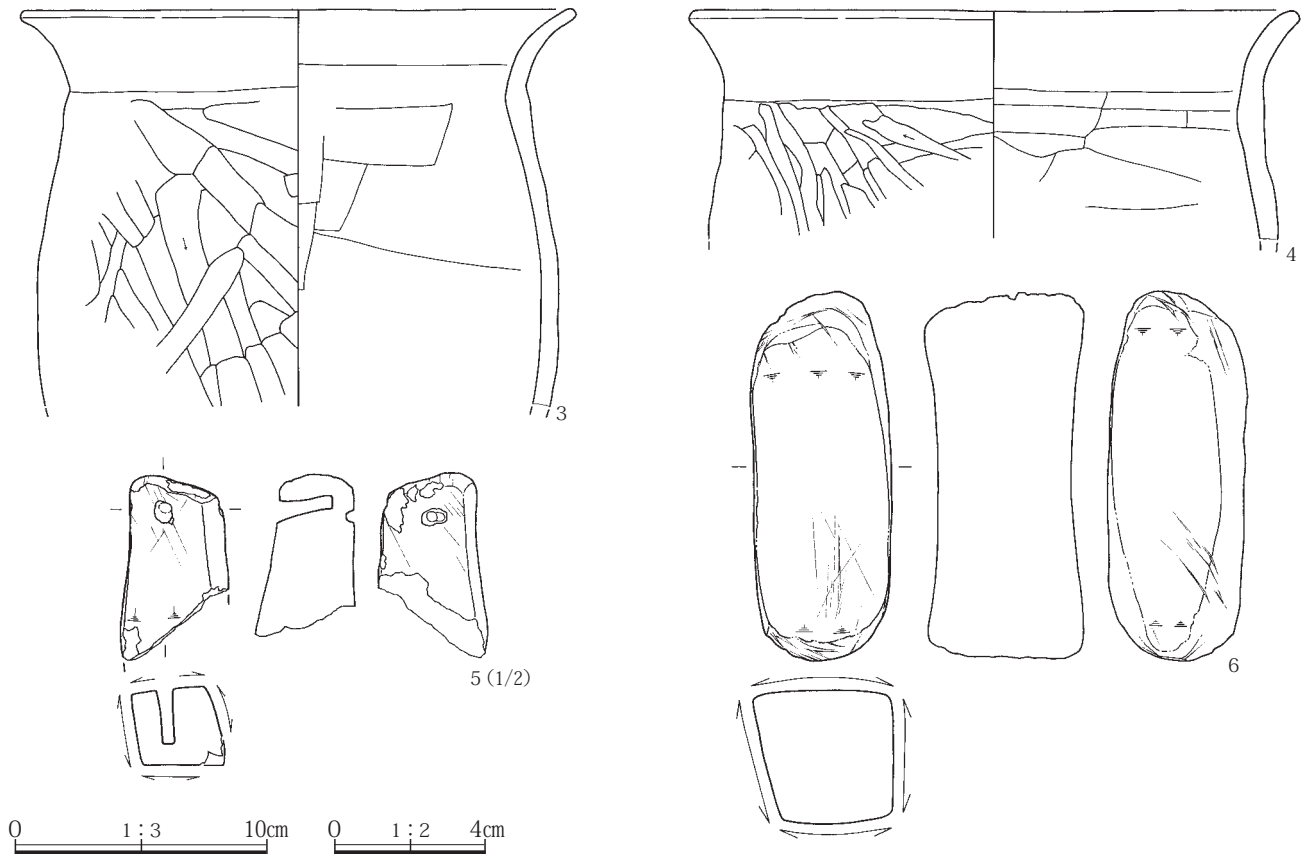
掘方は、焚口部から燃焼部にかけて0.5×0.4mほどの楕円形状に6cmほど掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示した遺物は土器4点、砥石2点である。そのうち、2・4の土師器甕はカマド、1の土師器杯は床面からの出土である。6の砥石は床面からの出土である。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片22点・小型製品片3点、須恵器小型製品片1点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期はカマドや床面から出土した遺物から6世紀後半に比定できる。



第180図 2区34号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(1)



第181図 2区34号竪穴住居出土遺物図(2)

2区35号竪穴住居(第182図、PL.95・96・170)

**位置** 2区南西部、85区K-8・9、L-8に位置する。本竪穴住居は西側に位置する谷地に向けてやや傾斜の急なところに立地している。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されなかった。

**形状** 隅丸正方形を呈す。

**規模** 長軸3.68m、短軸3.60mを測る。

南壁上端の一部が攪乱により壊されていた。

**面積** 11.08㎡

**方位** カマドは南東角に位置するが東辺を主軸とするとN-68°-Eを指す。

**埋没状態** 土層断面の観察では周囲から流れ込んだとみられるレンズ状の堆積が観察できることから、自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より10cmほど灰黄褐色土を埋め戻して構築されていた。床面の状態は多少の凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.20~0.56mを測る。

**掘方** 全体的に浅い掘り込みが行われていた。床下土坑などの施設は検出されなかった。

**壁溝** カマドが構築されている部分を除き、各辺壁下から検出した。規模は上端0.15~0.18m、下端0.03~0.09m、深さ0.02~0.08mを測る。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** カマド北側で検出した。形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.50m、短軸0.44m、深さ0.41mを測る。内部からは遺物などの出土はみられなかった。

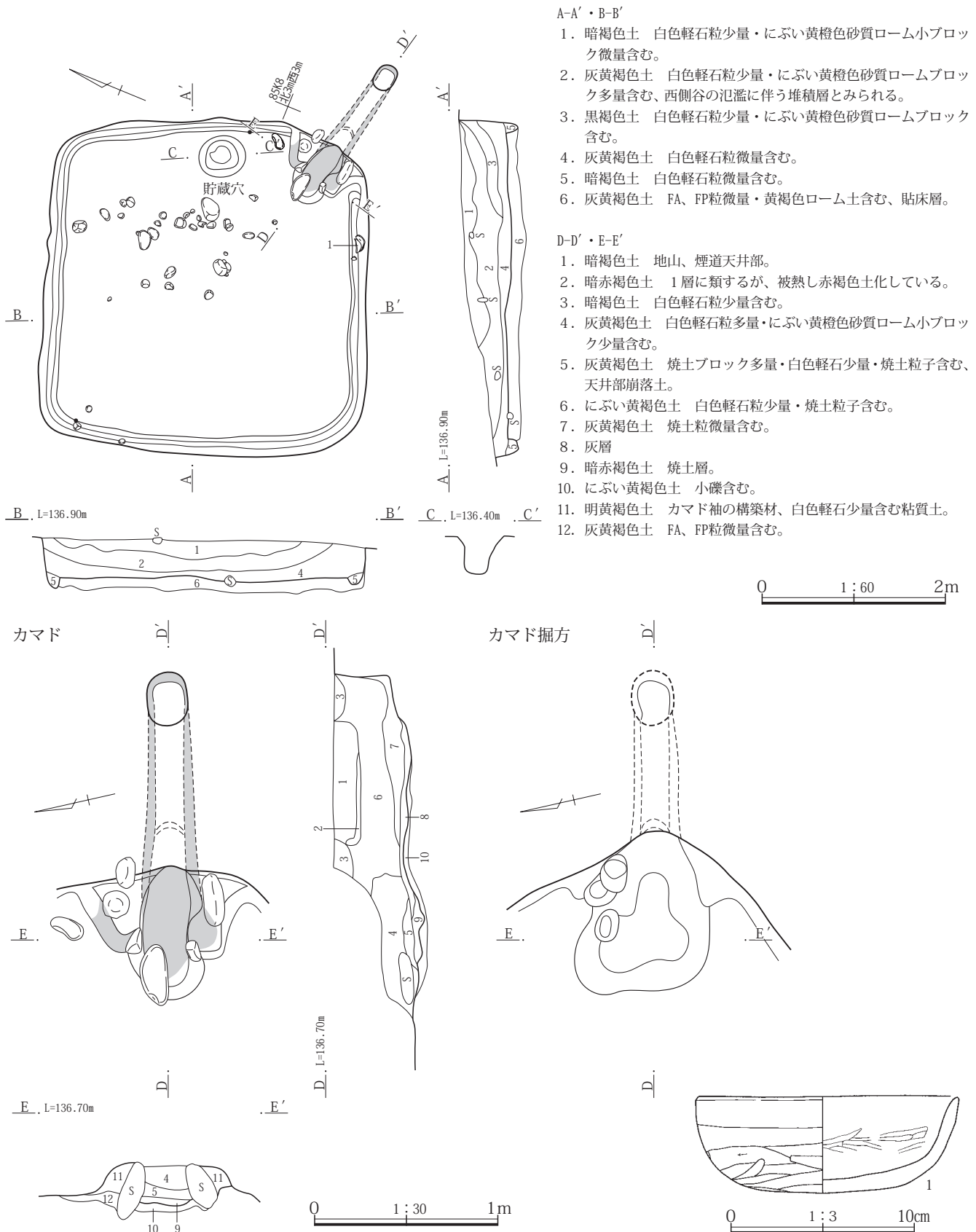
**カマド** 南東角に構築されていた。残存状態は焚口と燃烧部天井は壊されていたが、燃烧部側壁、煙道部はそのままの状態が保たれていた。規模は全長1.78m、全幅0.85m、煙道部長0.56m、焚口部幅0.34m、燃烧部幅0.32mを測る。燃烧部底面は焚口よりわずかに窪められており、煙道部底面もほぼ平坦に延び、奥壁は垂直に立ち上がる。なお、焚口には径15cm、長さ30cmほどの礫が両側に据えられ、その上にはカマド前から出土した長さ35cmほどの円礫が構築材として掛けられていたとみられる。また、燃烧部両側壁は、内部に礫を構築材として使用していた。

掘方は、焚口から燃烧部にかけて径75cmほどの方形に10cmほど掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示できた遺物は土師器杯の1点だけであっ

た。この土器も床面から8cm上位の出土である。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片5点・小型製品片14点が出土している。

所見 本竪穴住居の時期は出土した遺物から7世紀前半に比定できる。



第182図 2区35号竪穴住居遺構図・出土遺物図

2区36号竪穴住居(第183~185図、PL.96~98・170)

**位置** 2区調査区南西部、85区I-7・8、J-7・8、K-8に位置する。本竪穴住居は台地縁辺に立地しており、南側は急傾斜地に移行する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されなかった。

**形状** 各辺はほぼ4.3mである。南辺はやや膨らむが、ほぼ正方形を呈す。

**規模** 長軸4.60m、短軸4.32mを測る。

**面積** 17.06㎡

**方位** N-73°-E

**埋没状態** 土層断面では黒褐色土、灰黄褐色土が壁際に三角堆積した後、暗褐色土、黒褐色土がレンズ状の堆積をしたことが観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より10~20cmほど灰黄褐色土・黒褐色土を埋め戻して構築されていたが、カマド周辺では地山をそのまま踏み固めていた。

確認面から床面までの深さは、0.29~0.57mを測る。

**掘方** カマド周囲を除き、中央部は浅く、周縁部はやや深い掘り込みが行われていた。床下土坑などの施設は検

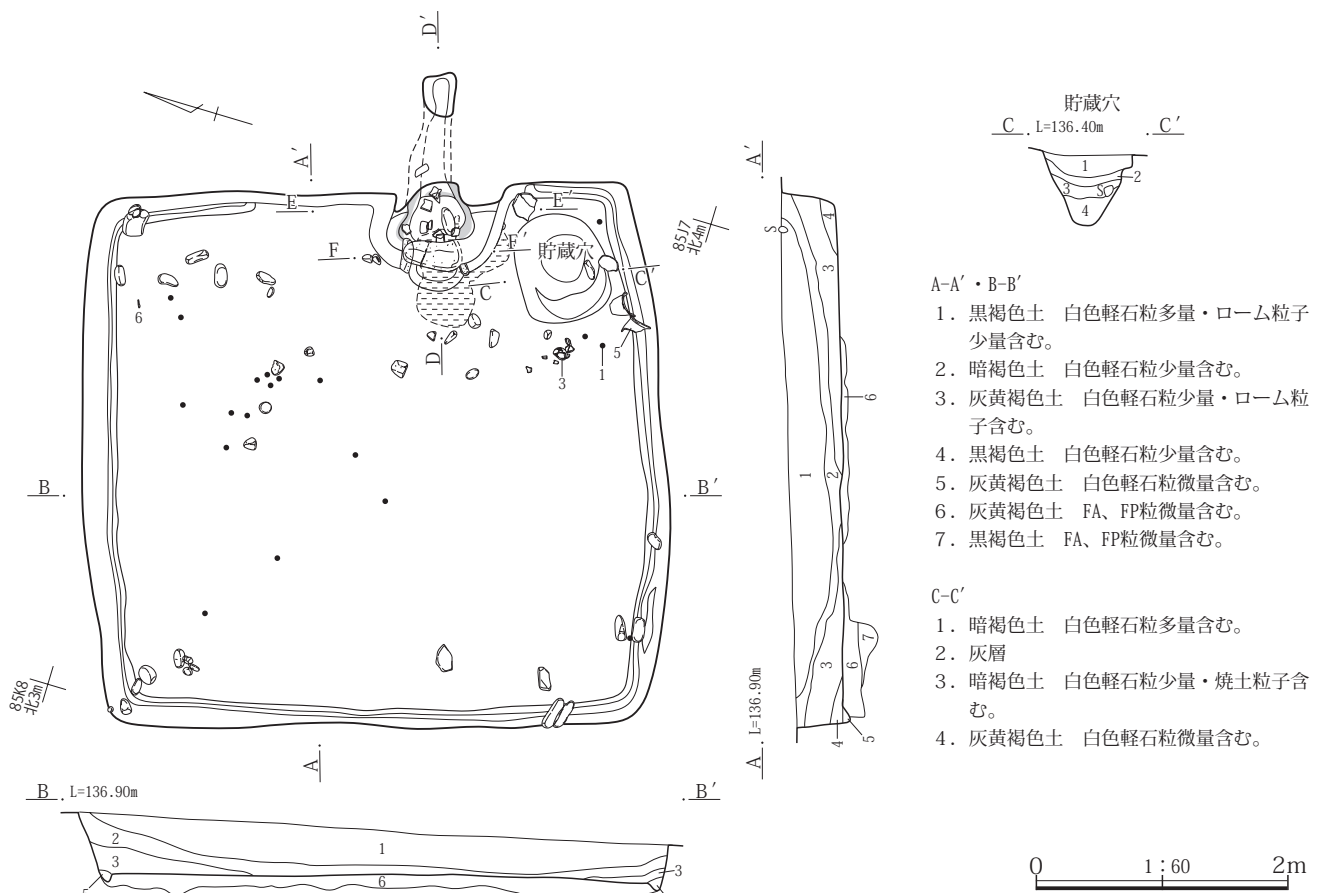
出されなかった。

**壁溝** カマド北側1.0mを除いて各辺壁下で検出した。規模は、上端0.10~0.15m、下端0.02~0.07m、深さ0.03~0.09mを測る。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 南東隅で検出した。形状は、平面が隅丸長方形、断面は西側に段を有していた。規模は長軸0.88m、短軸0.70m、深さ0.59mを測る。内部からは礫や土器の小片が出土している。

**カマド** 東辺の中央よりやや南寄りに構築されていた。残存状態は、燃烧部天井が壊され、底面に支脚が倒されて放置されていたが、焚口や燃烧部側壁は良好、煙道部は天井がそのままの状態を保っていた。規模は、全長1.72m、全幅1.10m、煙道部長0.45m、焚口部幅0.40m、燃烧部幅0.50mを測る。焚口の両側には径10cm前後、長さ35cmと25cmの棒状円礫が立てられ、その上に長さ55cm、幅23cm、厚さ17cmのやや扁平な垂角礫が掛けられていた。焚口から燃烧部はほぼ平坦で、煙道部は緩やかな傾斜、奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。燃烧部底面には灰が残存し、燃烧部側壁内側と煙道部天井は焼土化していた。



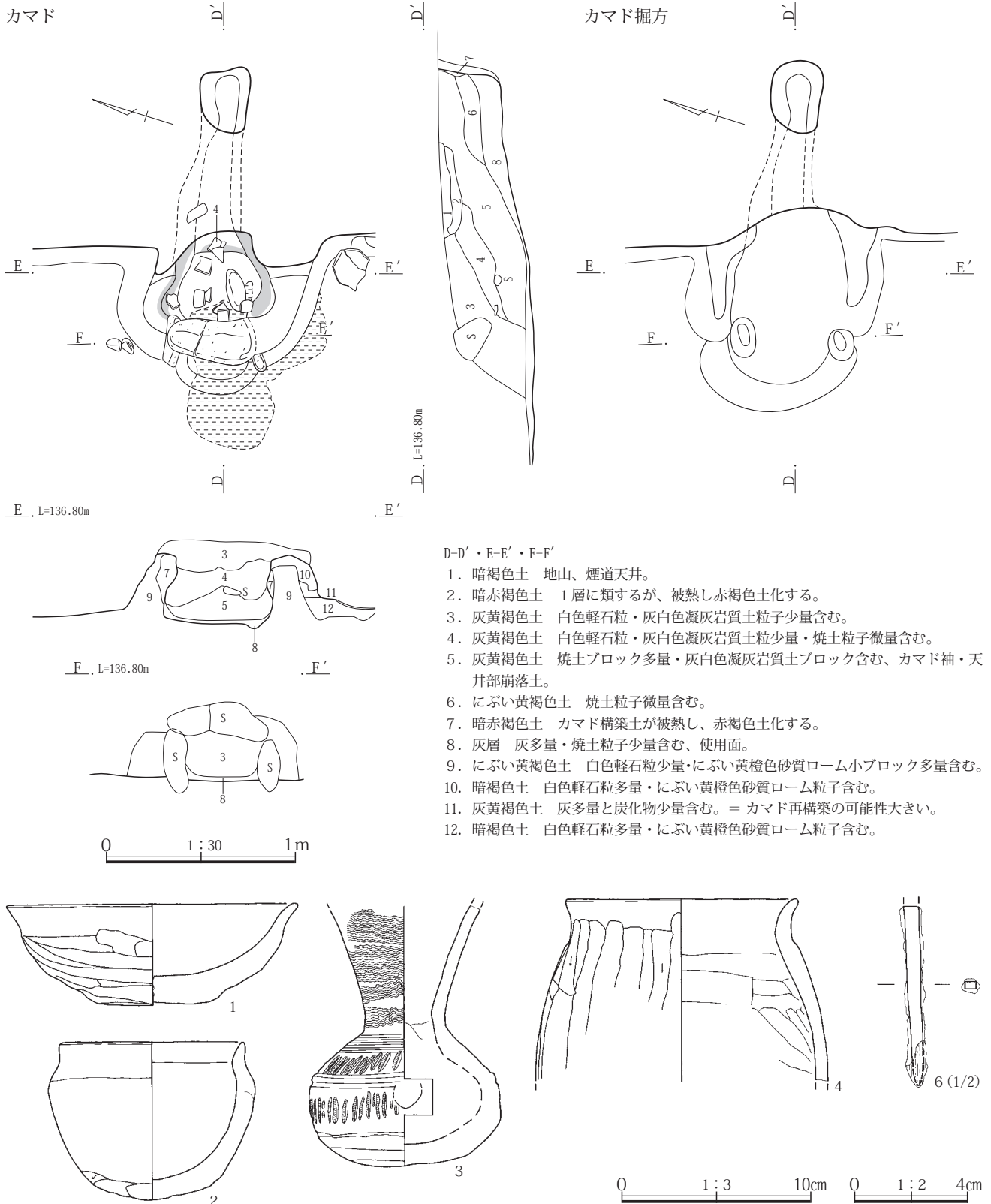
第183図 2区36号竪穴住居遺構図(1)



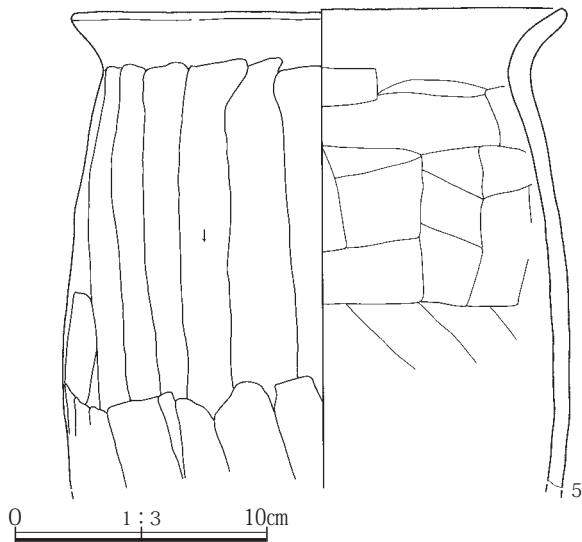
**出土遺物** 図示した遺物のうち、1の土師器杯と3の須恵器壘、5の土師器甕が床面、4の土師器甕がカマドからの出土である。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片128点・小型製品片13点、須恵器大型製品片1点・

小型製品片4点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は床面やカマドから出土した遺物から6世紀後半に比定できる。



第184図 2区36号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(1)



第185図 2区36号竪穴住居出土遺物図(2)

2区37号竪穴住居(第186~190図、PL.98・99・171)

位置 2区調査区中ほど、85区B-12・13、C-12・13に位置する。

重複 北辺で38号竪穴住居と重複する。新旧関係は当初、本竪穴住居の方が古いとみられたが、床面や掘方の状態から再検討した結果、本竪穴住居の方が新しいと判断した。

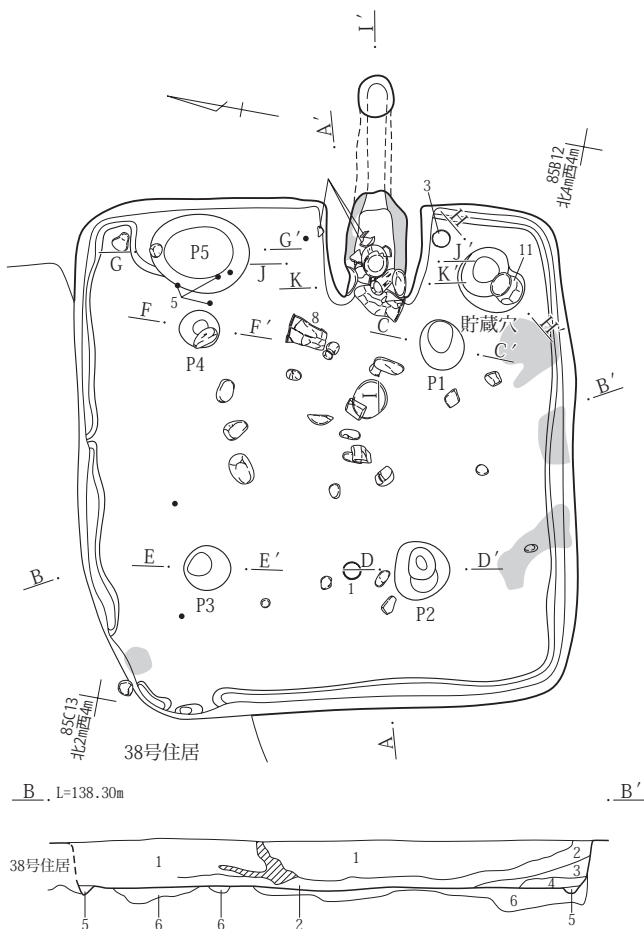
形状 東西方向に15cmほど長い長方形を呈す。

規模 長軸4.10m、短軸3.96mを測る。

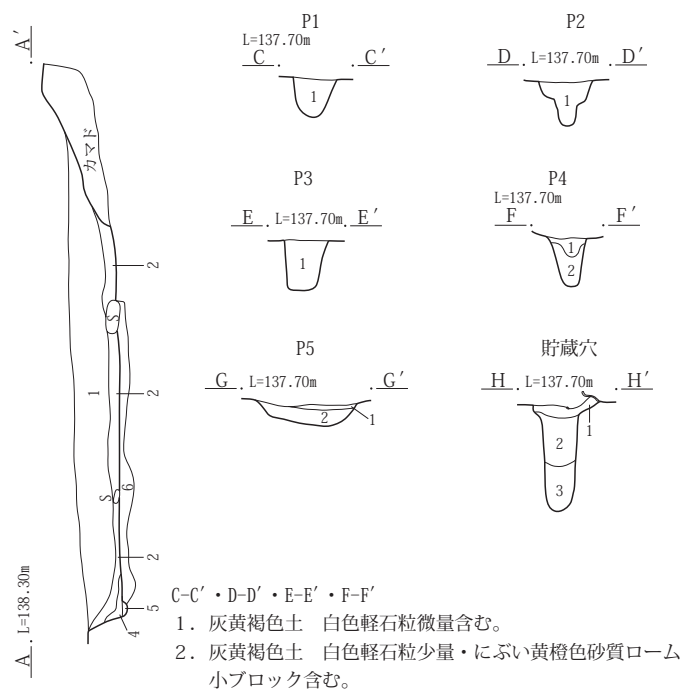
面積 14.26㎡

方位 N-76°-E

埋没状態 土層断面では38号竪穴住居との重複部分は堆積土の違いが観察できなかったことから明らかではないが、他の辺の壁際で三角堆積後、中ほどにレンズ状の堆



第186図 2区37号竪穴住居遺構図(1)



C-C'・D-D'・E-E'・F-F'

1. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量含む。
2. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・にぶい黄橙色砂質ローム小ブロック含む。

G-G'

1. 灰黄褐色土 焼土粒子少量含む。
2. 灰黄褐色土 焼土小ブロック多量・黒褐色土ブロック少量含む。

H-H'

1. 暗褐色土 白色軽石少量・炭化物含む。
2. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・にぶい黄橙色砂質ローム小ブロック含む。
3. 灰黄褐色土 にぶい黄橙色砂質ローム小ブロック多量含む。

A-A'・B-B'

1. 黒褐色土 白色軽石粒多量含む。
2. 黒褐色土 白色軽石粒少量含む。
3. 黒褐色土 白色軽石粒微量・にぶい黄橙色砂質ローム小ブロック少量含む。
4. 黒褐色土 白色軽石粒微量含む。
5. 黒褐色土 白色軽石粒少量含む、壁周溝埋土。
6. 灰黄褐色土 白色軽石粒・焼土粒少量含む、掘方埋土。

積が観察できることから、自然埋没と判断される。

**床面** 掘方面より5cmほど灰黄褐色土を埋め戻して構築されていた。床面の状態は多少の凹凸がみられたが、ほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.31～0.60mを測る。

**掘方** カマド周辺以外に浅い掘り込みが行われていた。床下土坑などの施設は検出されなかった。

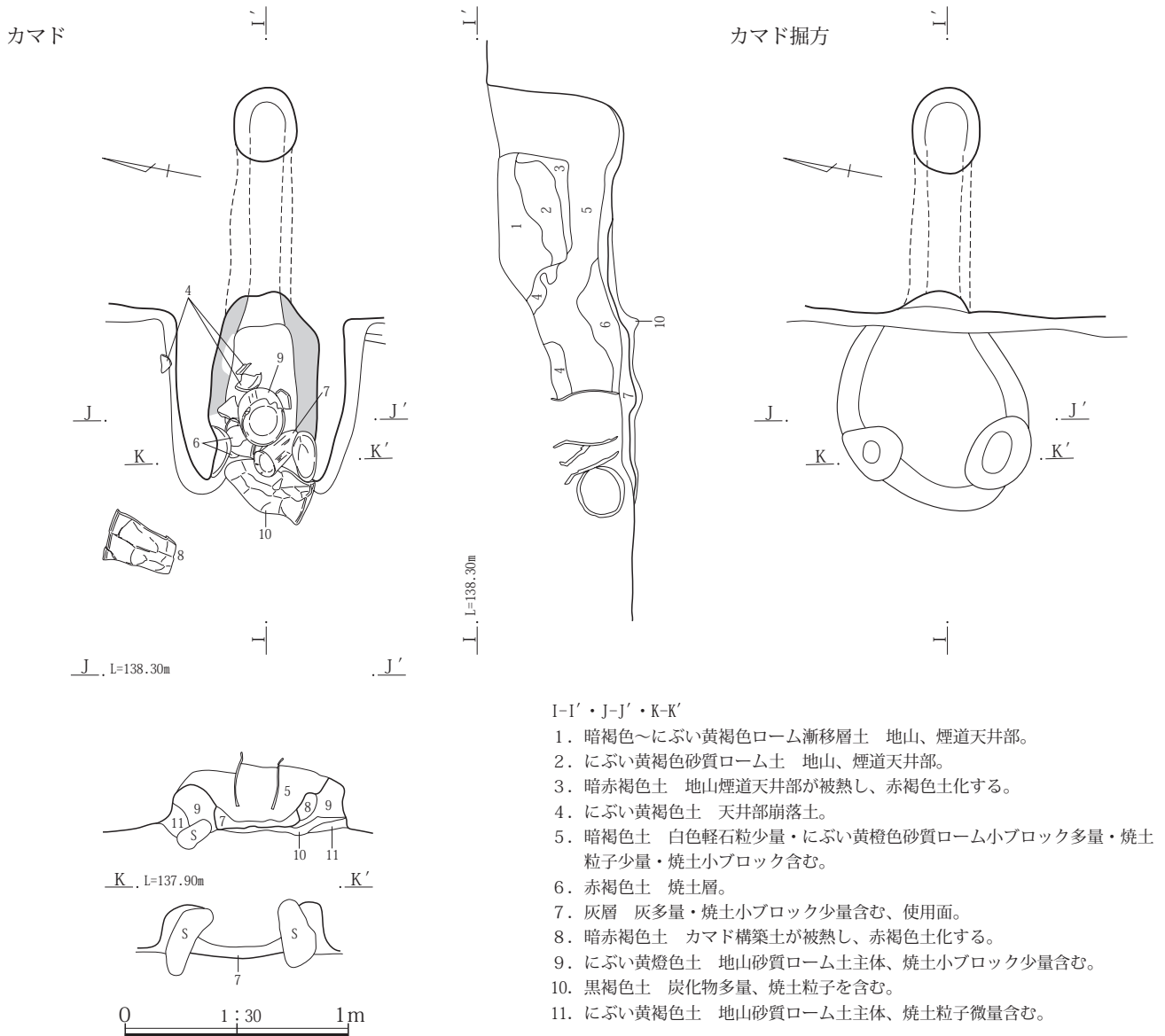
**壁溝** 東辺のカマド北側から北東角、北西角の一部以外の各辺壁下で検出した。上端0.12～0.20m、下端0.03～0.10m、深さ0.04～0.11mを測る。

**柱穴** 壁穴住居平面の対角線上及び線上に近い位置からP1～P4の4本を検出した。なお、P3は対角線上に位置しないが、これは北西角が他の角と異なり鈍角を呈するためとみられる。なお、北西角も他の角度と同様に

直角を呈すれば、P3も対角線上に位置していた。しかし、北辺とP3とP4を結ぶラインは5度の開きが生じている。各柱穴の形状と規模は、P1が楕円形、長軸0.40m、短軸0.36m、深さ0.39m。P2は楕円形、長軸0.46m、短軸0.44m、深さ0.44m。P3は円形、径0.38m、深さ0.45m。P4は円形、径0.32m、深さ0.41mを測る。柱穴間の距離は、P1～P2間が1.80m、P2～P3間が1.70m、P3～P4間が1.90m、P4～P1間が1.90mである。

柱痕は確認されなかったが、P2の掘方から見ると柱自体は径10cmほどであったとみられる。

**貯蔵穴** 南東角で検出した。本体の西側から南側にかけ床面より10cmほど下がった段を有していた。形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.54m、短軸0.46m、深さ0.86



第187図 2区37号壁穴住居遺構図(2)

mを測る。貯蔵穴の段部分からは11の土師器甕が出土している。

**その他施設** 北東隅にて土坑状のP5を検出した。形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.78m、短軸0.62m、深さ0.19mを測る。内部に焼土が堆積していた。用途については明らかではない。

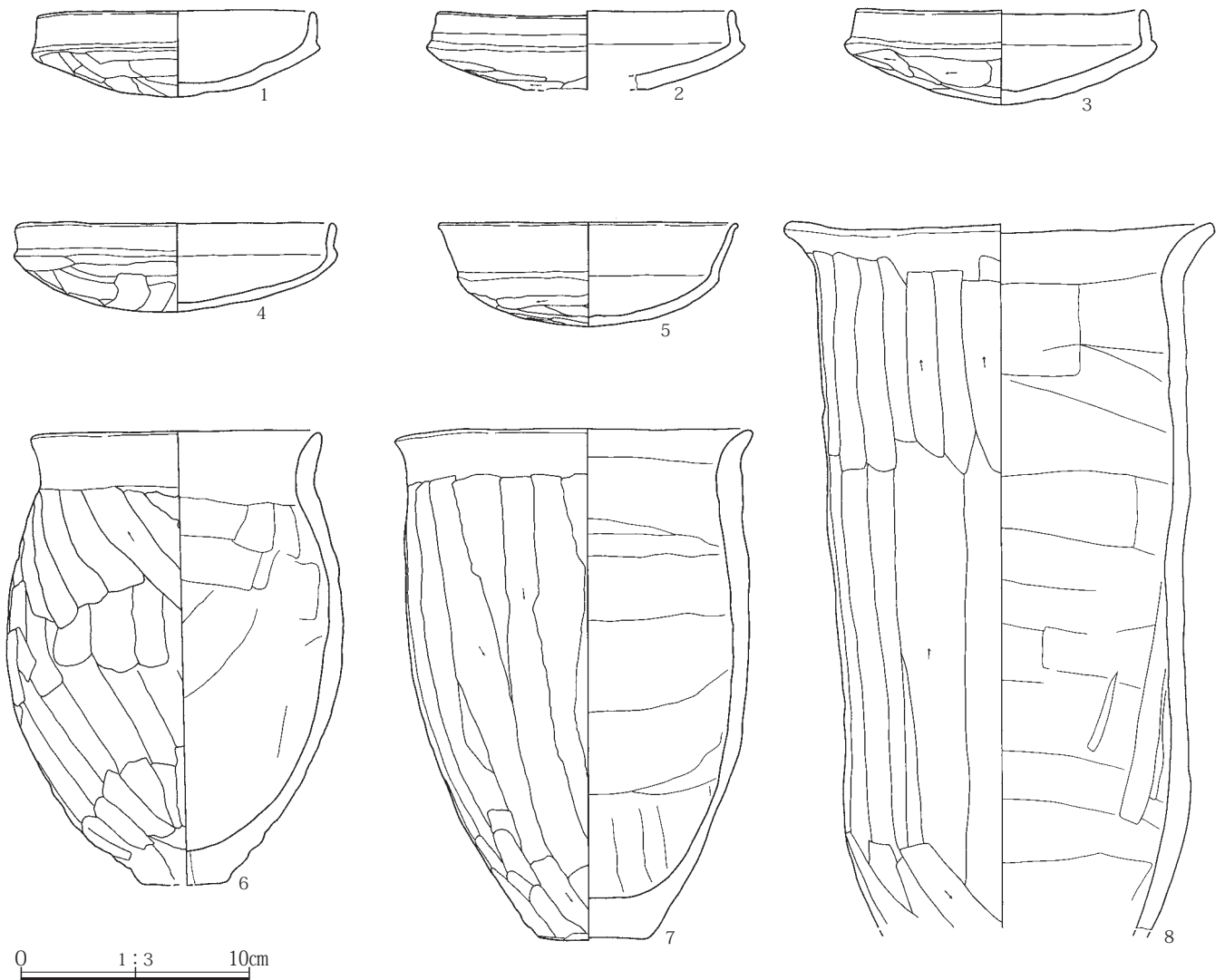
**カマド** 東辺中央より南寄りに構築されていた。残存状態は焚口と天井の構築材として使用されていた土師器甕10が手前に落とされ、燃烧部天井は底面に落とされた状態であったが、煮沸用に使用されたとみられる土師器甕6・7・9はそのまま残されていた。なお、煙道部と燃烧部側壁はそのままの状態を保っていた。規模は全長1.85m、全幅0.90m、煙道部長0.60m、焚口部幅0.34m、燃烧部幅0.35mを測る。燃烧部は焚口よりやや掘り窪められており、煙道部はごくゆるい傾斜で延び、奥壁は急

な立ち上がりであった。焚口には径10cm、長さ35cmと径15cm、長さ30cmの棒状円礫が立てられており、その上に10の甕が構築材として掛けられていたとみられる。燃烧部左側壁には円礫が構築材の一部に使われていたが、右側ではみられなかった。

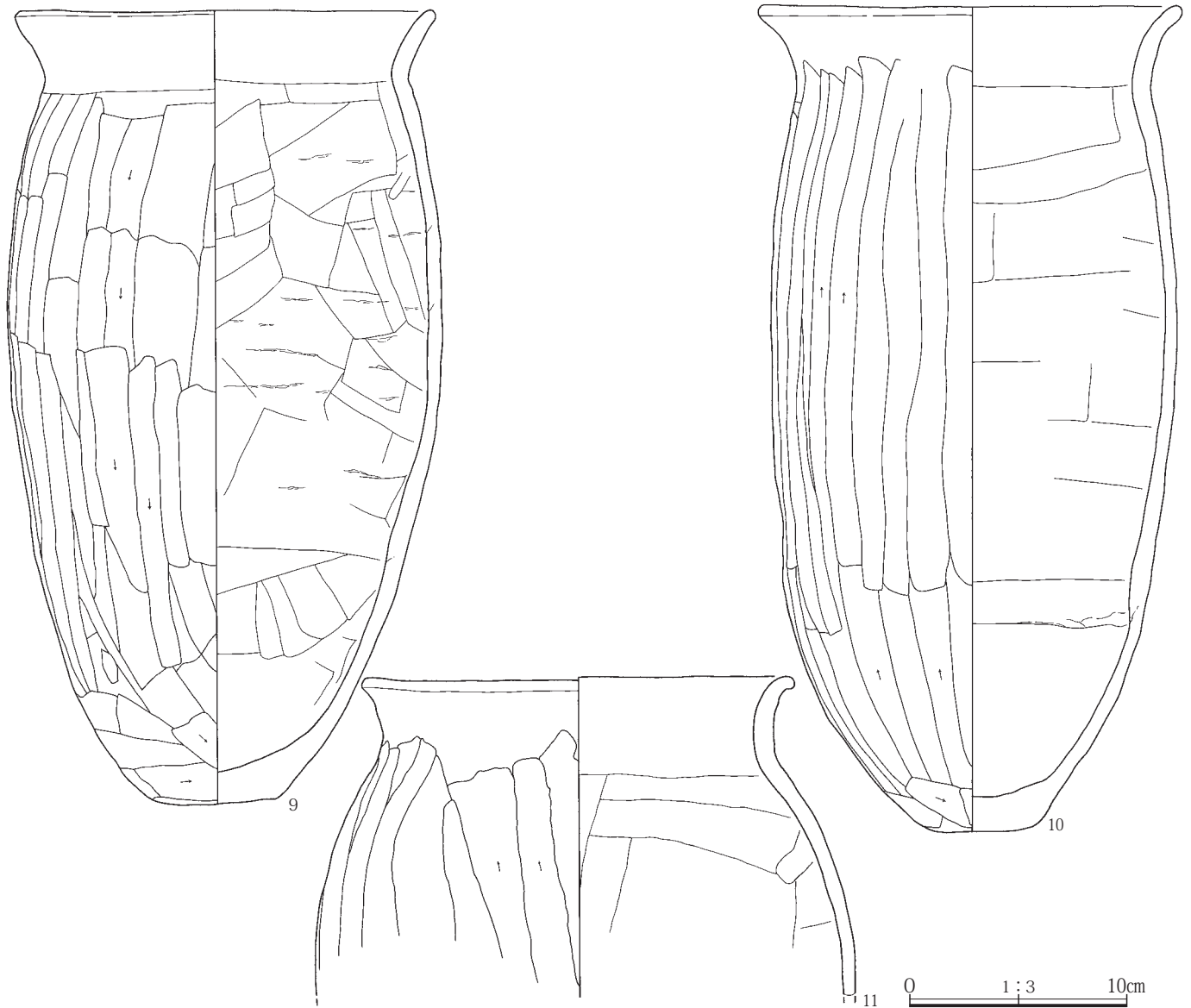
掘方は、燃烧部下を径1.0×0.8mほどの楕円形状に6cmほど掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示した遺物のうち、カマドからは6・7・9・10の土師器甕の他、4の土師器杯が出土し、床面からは1・3の土師器杯、8の土師器甕が出土している。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片30点・小型製品片35点、磨石2点・砥石1点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期はカマドや貯蔵穴、床面から出土した遺物から6世紀末から7世紀初頭に比定できる。



第188図 2区37号竪穴住居出土遺物図(1)



第189図 2区37号竪穴住居出土遺物図(2)

**2区38号竪穴住居**(第190～193図、PL.99～101・171)

**位置** 2区調査区中ほど、85区C-13～15、D-12～14、E-14に位置する。

**重複** 南辺東側で37号竪穴住居と重複する。新旧関係は当初、本竪穴住居の方が新しいとみられたが、床面や掘方の状態から再検討した結果、本竪穴住居の方が古いと判断した。

**形状** 東辺8.0m、南辺6.8m、西辺8.2m、北辺7.0mと各辺長に多少の差がみられるが、ほぼ南北に長い長方形を呈す。

**規模** 長軸8.48m、短軸7.26mを測る。

**面積** 55.23㎡

**方位** N-57°-E

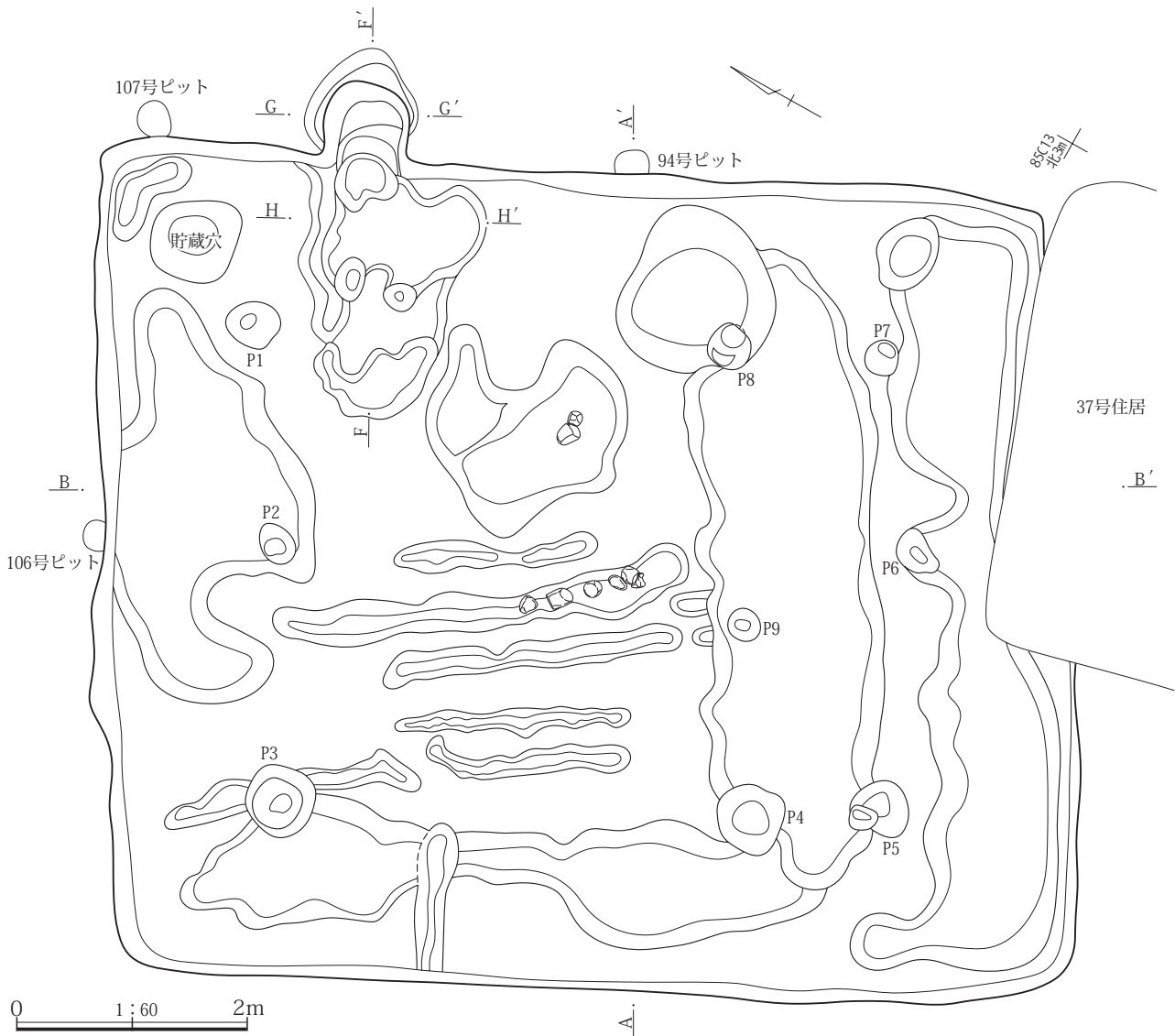
**埋没状態** 土層断面では灰黄褐色土や黒褐色土が三角堆積した後、暗褐色土が堆積した様子が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より5～25cmほど灰黄褐色土を埋め戻して構築されていた。床面の状態はカマド周辺と南西部では10cmほどの高低差がみられ、やや傾斜しているが、床自体はほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.33～0.74mを測る。

**掘方** 浅い掘り込みが全体に行われていたが、中には東辺側に土坑状、南辺側には溝状、その内側から西辺側にかけてL字の溝状、北側には不定形、中央部には細い溝状などやや深い掘り込みも検出された。その中で西辺の北西角から3.0mの位置で辺に直交する長さ1.5mの溝状





第191図 2区38号竪穴住居遺構図(2)

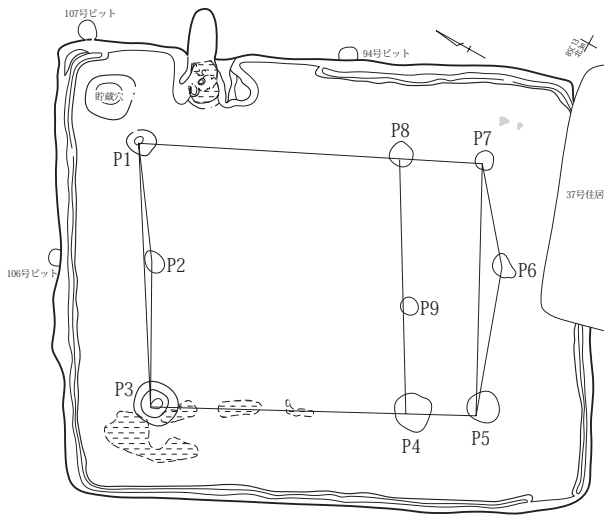
**柱穴** 床面ではP1・P3の2本を検出した。その後、掘方でP2、P4～P9の7本を検出した。このうち、竪穴住居平面での対角線上に位置するのはP1、P3、P5、P7である。柱穴の形状や規模、柱穴間距離は第5表計測表と模式図のとおりであるが、長軸方向のP1～P8、P3～P4間は、4m以上の間隔があり、山王・柴遺跡群で調査した竪穴住居の柱穴間の間隔としては最も長い間隔である。なお、竪穴住居の構造からは、P1、P3、P5、P7が支柱穴とみられ、残りの柱穴は支柱穴を補助する役割をもつものと想定される。

柱痕はP1、P3とも確認されなかった。なお、他の柱穴での柱痕は掘方調査の中での検出のため不明である。

**貯蔵穴** 北東隅にて検出した。形状は台形状を呈し、規

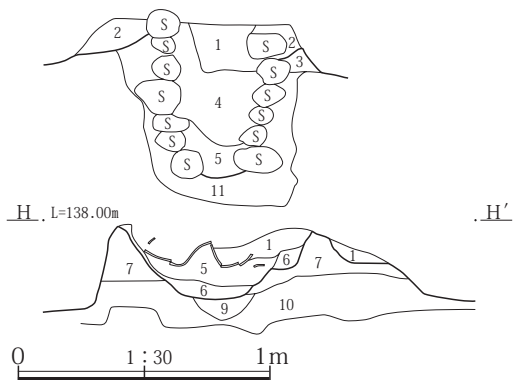
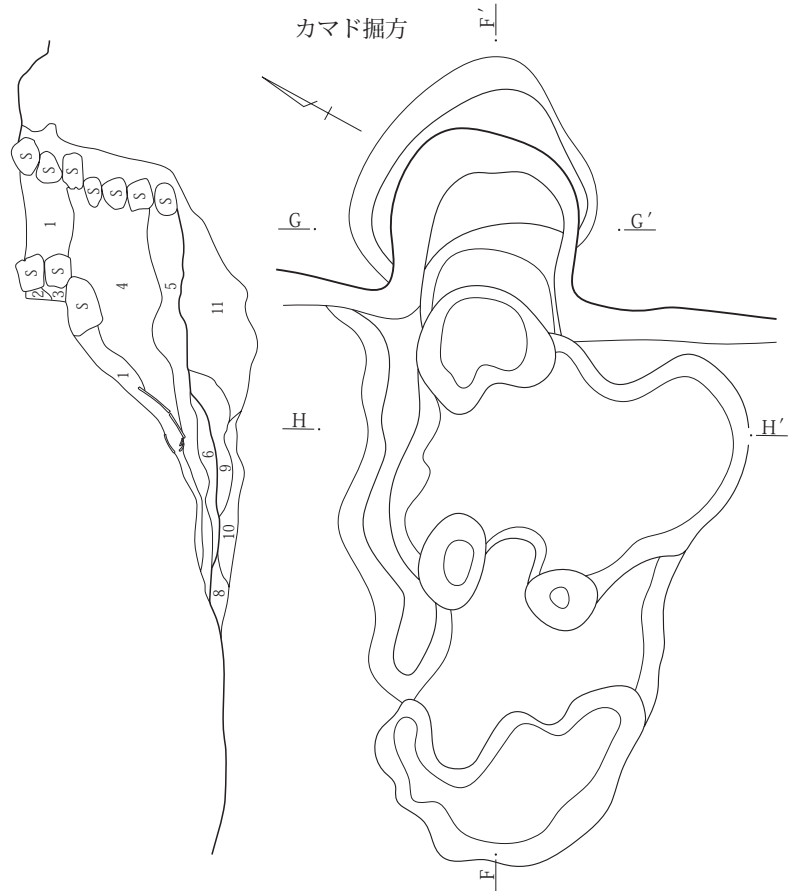
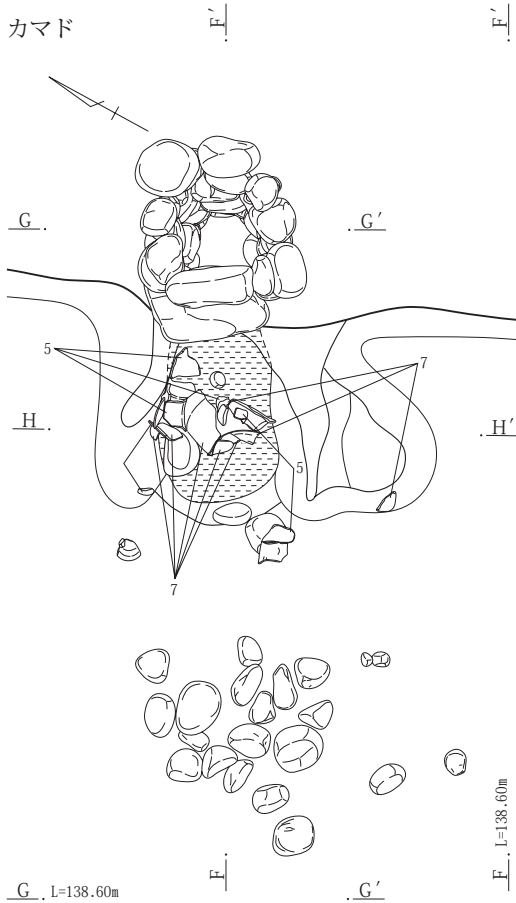
模は長軸0.74m、短軸0.70m、深さ0.45mを測る。内部からは遺物などの出土はみられなかった。

**カマド** 東辺の北東角から2m南に構築されていた。残存状態は焚口と燃烧部天井は壊され、燃烧部側壁はやや崩れていたが、煙道部はそのままの状態を保っていた。また、燃烧部底面には煮沸に使用された土師器甕5・7が残されていた。規模は全長1.54m、全幅1.35m、煙道部長0.34m、煙出し(内径)0.32m×0.28m、煙出し高0.62m、焚口部幅0.45m、燃烧部幅0.54mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪められ、煙道部には10cmほどの段で移る。煙出し部は底面が平坦で120度の角度で立ちあがる。煙出しは奥・側面は底面より、手前側は煙道部上から礫を井戸枠のように四角形に積み上げ、周りを土砂で固めて煙突状に構築していた。この煙出しは確認面より25cmほ



第5表 2区38号竪穴住居 柱穴計測表

ピットNo.	形状	長軸長 (m)	短軸長 (m)	深さ (m)	柱穴間距離 (m)
P1	円形	0.46	0.40	0.69	1.85 ~ P3 4.20
P2	楕円形	0.39	0.28	0.40	2.30
P3	円形	0.72	0.66	0.48	4.05
P4	不整形	0.58	0.56	0.39	1.20
P5	楕円形	0.52	0.50	0.35	2.30 ~ P7 3.90
P6	楕円形	0.44	0.38	0.24	1.70
P7	楕円形	0.31	0.30	0.51	1.30
P8	円形	0.38	0.36	0.67	2.35 ~ P1 4.20
P9	円形	0.30	0.28	0.52	~ P4 1.60



F-F'・G-G'・H-H'

1. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・焼土粒子・焼土小ブロック含む。
2. 暗褐色土 白色軽石粒少量含む、堆積土。
3. にぶい黄褐色土 白色軽石粒微量・にぶい黄橙色砂質ローム粒子多量含む、カマド礎裏込土。
4. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量・焼土粒子少量・焼土小ブロック含む。
5. 灰層 焼土小ブロック少量含む、最終使用面。
6. 灰黄褐色土 焼土ブロック多量含む。
7. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量・焼土粒子・炭化物含む。
8. にぶい黄橙色 砂質ローム土ブロック状に入る。
9. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・にぶい黄橙色砂質ローム粒子・焼土粒子微量含む。
10. 黒褐色土 白色軽石粒・焼土粒微量含む。
11. 暗褐色土 にぶい黄橙色砂質ローム小ブロック少量含む。

第192図 2区38号竪穴住居遺構図(3)



ど上まで残存し、さらに上位まで構築されていた可能性がある。

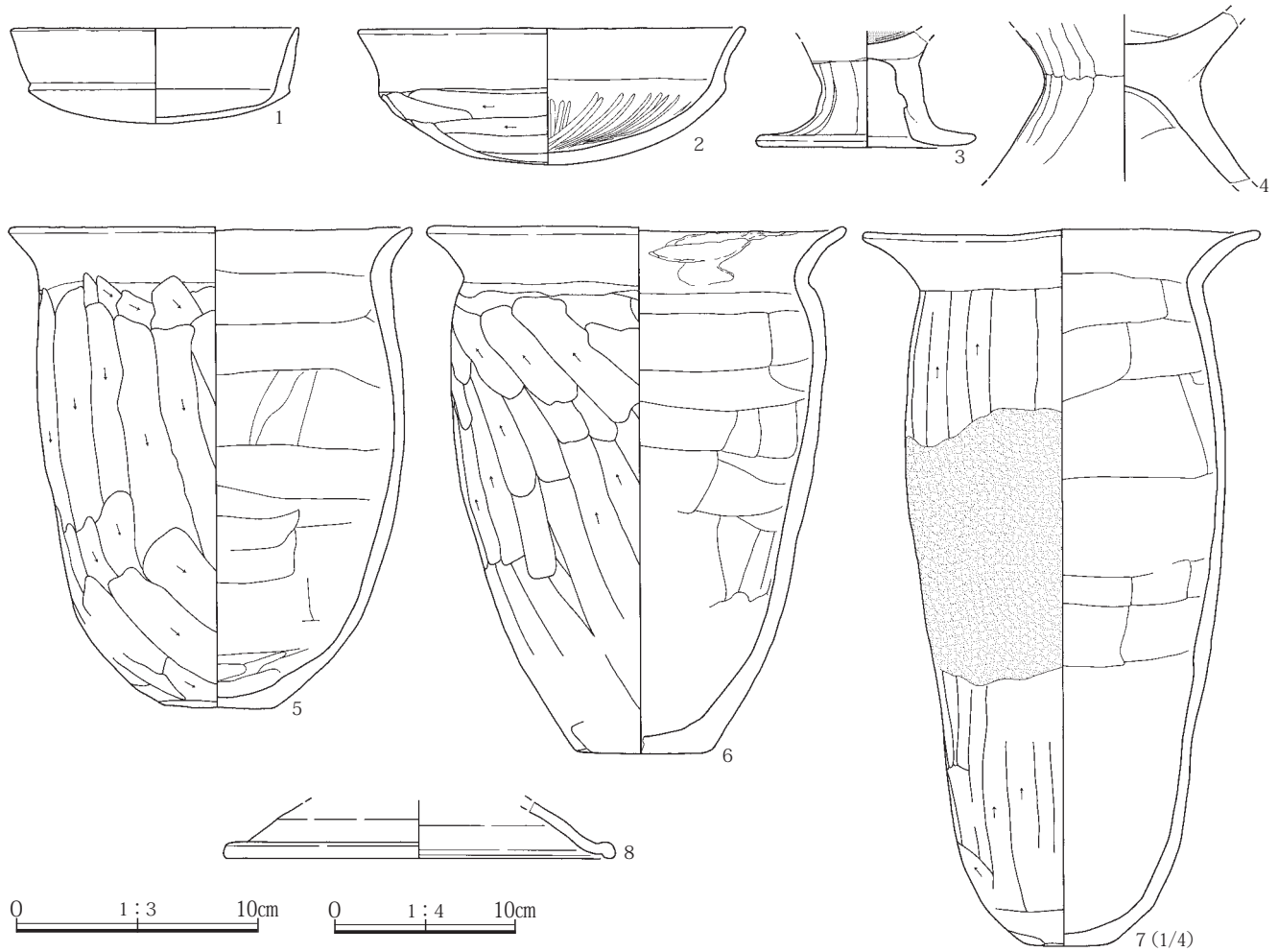
掘方は、燃烧部下を径50cmの円形状に15cmほど掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示した遺物のうち、5・7の土師器甕はカマドからの出土であるが、7はカマド以外にも貯蔵穴西側の床面でも出土している。5の土師器甕も貯蔵穴東側床面での出土もある。なお、8の須恵器杯蓋は時期差の

ある遺物であるが、出土位置は床面の8cmであることからこの住居埋没後に掘られた土坑などに入っていた可能性が高い。

図示した以外の遺物では、土師器大型製品片104点・小型製品片28点、須恵器大型製品片6点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期はカマドや床面より出土した遺物から6世紀末から7世紀初頭に比定できる。



第193図 2区38号竪穴住居出土遺物図

**2区40号竪穴住居(第194図)**

2区調査区北端中ほど、85区B-17、C-17に位置する。竪穴住居北側3分の1は調査区外に位置し、上部を竪穴状遺構や2区5号竪穴住居によって欠落するため全貌は不明である。

**重複** 竪穴状遺構や2区5号竪穴住居と重複する。新旧関係は本竪穴住居の方が古い。

**形状** 調査範囲内から想定すると長方形を呈する。

**規模** 調査範囲内では長軸3.10m、短軸2.50mを測る。

**面積** 調査範囲内では5.46㎡を測る。

**方位** 長軸方向でN-15°-Wを指す。

**埋没状態** 設定した土層断面では掘方しか確認できていないため不明である。

**床面** 重複していない部分でも明確な床面は確認できなかった。

**掘方** 東辺中ほど寄りで不定形、西辺寄りで溝状の掘り込みと南西角で床下土坑を検出した。床下土坑は形状が楕円形を呈し、規模が長軸0.78m、短軸0.65m、深さ0.17

mを測る。なお、この床下土坑からは遺物などの出土はみられなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

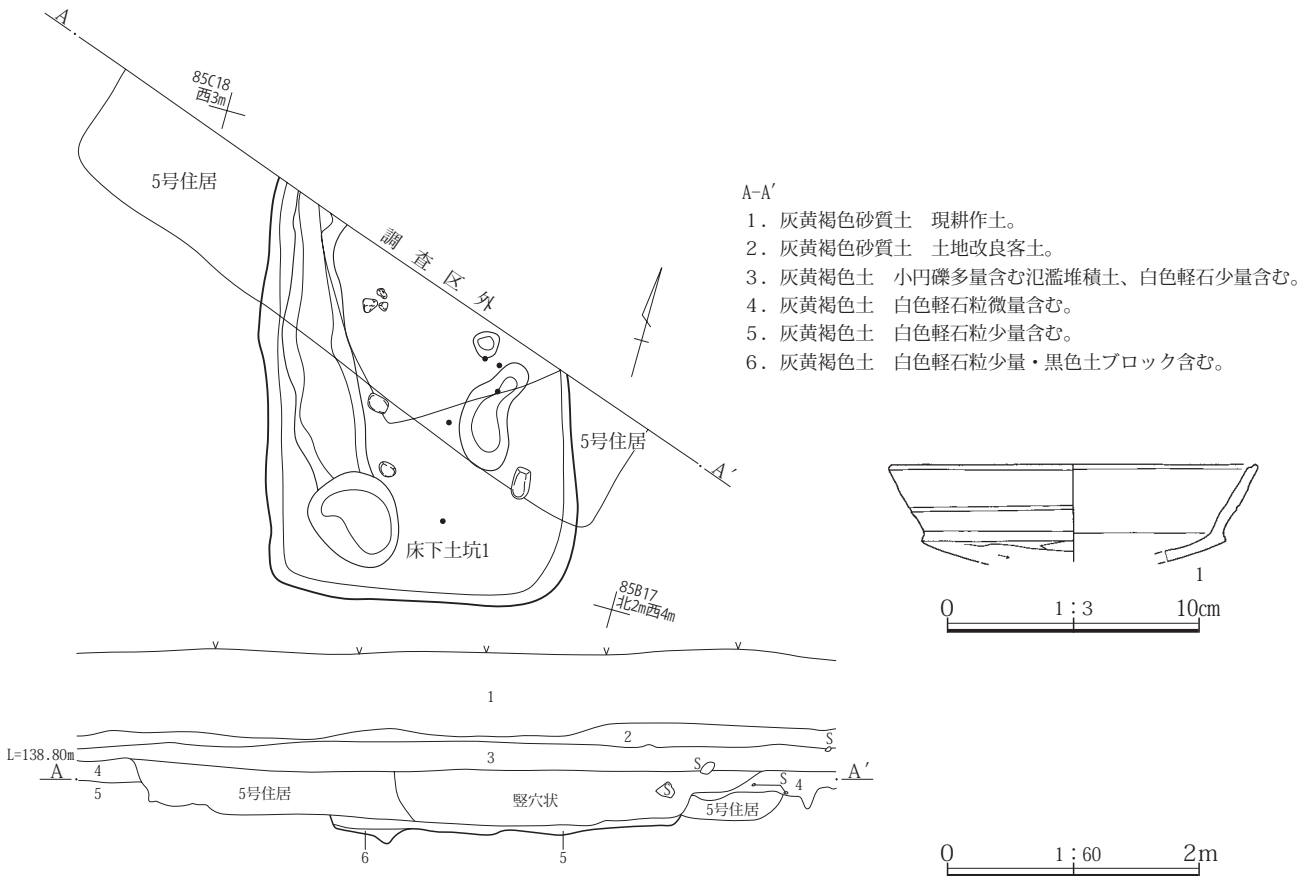
**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 調査範囲内では検出されなかった。

**カマド** 調査範囲内では検出されなかった。

**出土遺物** 図示できた遺物は土師器杯の1点だけであった。なお、この遺物は調査状況からみると掘方からの出土である。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片19点・小型製品片4点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は出土遺物から7世紀前半に比定できる。



第194図 2区40号竪穴住居遺構図・出土遺物図

2区41号竪穴住居(第195～197図、PL.101～103・171)

**位置** 2区調査区、南西部でも中央寄り、85区I-10・11、J-10・11に位置する。南辺、西辺、床面の一部を試掘トレンチによって欠落するが、全貌についてはほぼ明らかである。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

**形状** 南北方向に0.1mほど長いが、ほぼ正方形を呈す。

**規模** 長軸6.20m、短軸6.10mを測る。

**面積** 33.12m<sup>2</sup>

**方位** N-72°-E

**埋没状態** 土層断面ではレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より5～10cmほど灰黄褐色土を埋め戻して構築されていた。床面の状態は、若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。また、住居南東部は特に硬化していた。

確認面から床面までの深さは、0.21～0.49mを測る。

**掘方** 全体的に浅い掘り込みであるが、カマド周囲と壁寄りには中央部より若干深く行われていた。

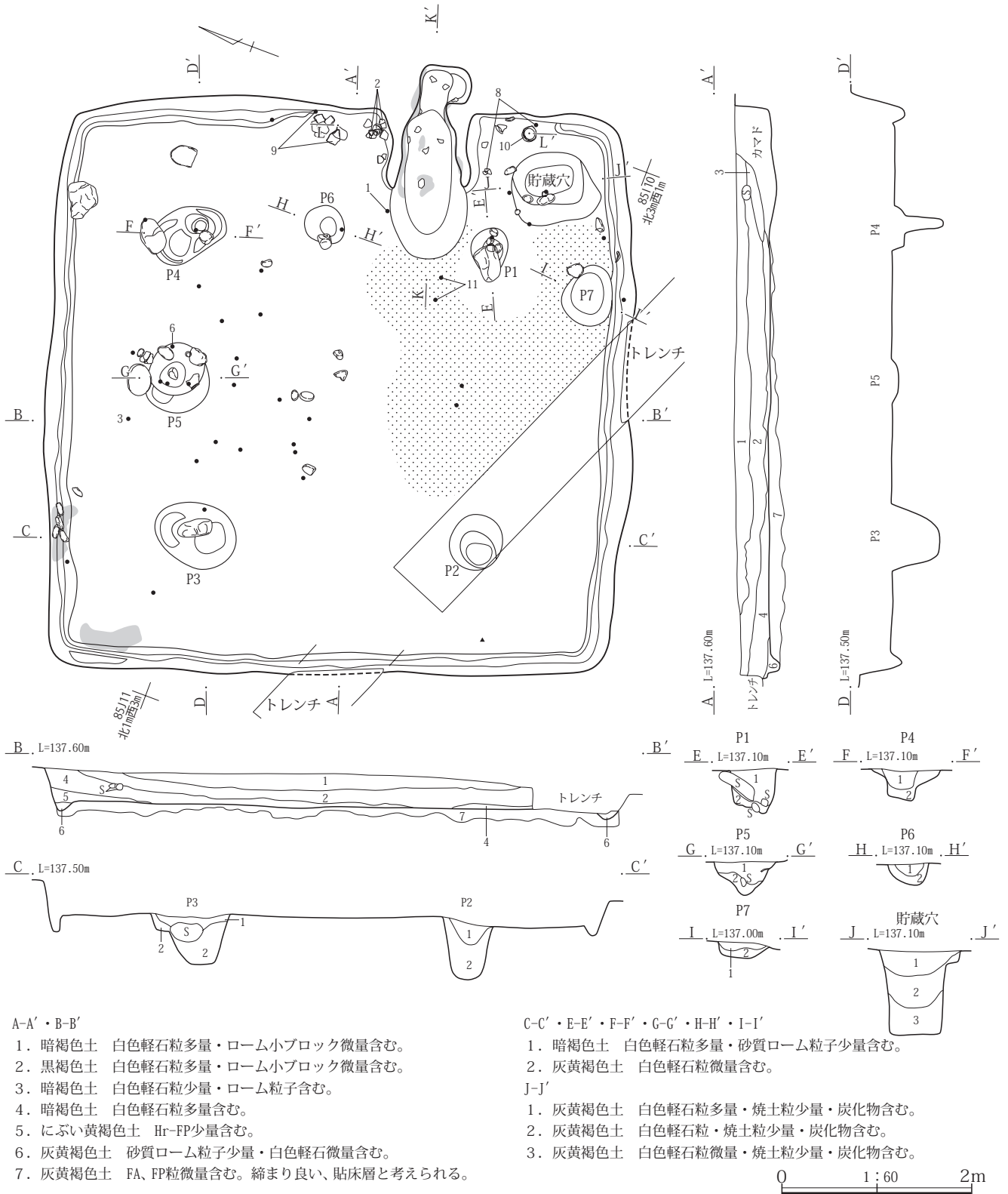
**壁溝** カマドの両側0.5、0.7mを除く各辺壁下で検出した。上端0.15～0.25m、下端0.02～0.11m、深さ0.04～0.14mを測る。

**柱穴** 竪穴住居平面の対角線上で4本とP3とP4の中間で1本の計5本を検出した。P5についてはP3とP4を結んだ線上に位置することと規模から柱穴と認定し

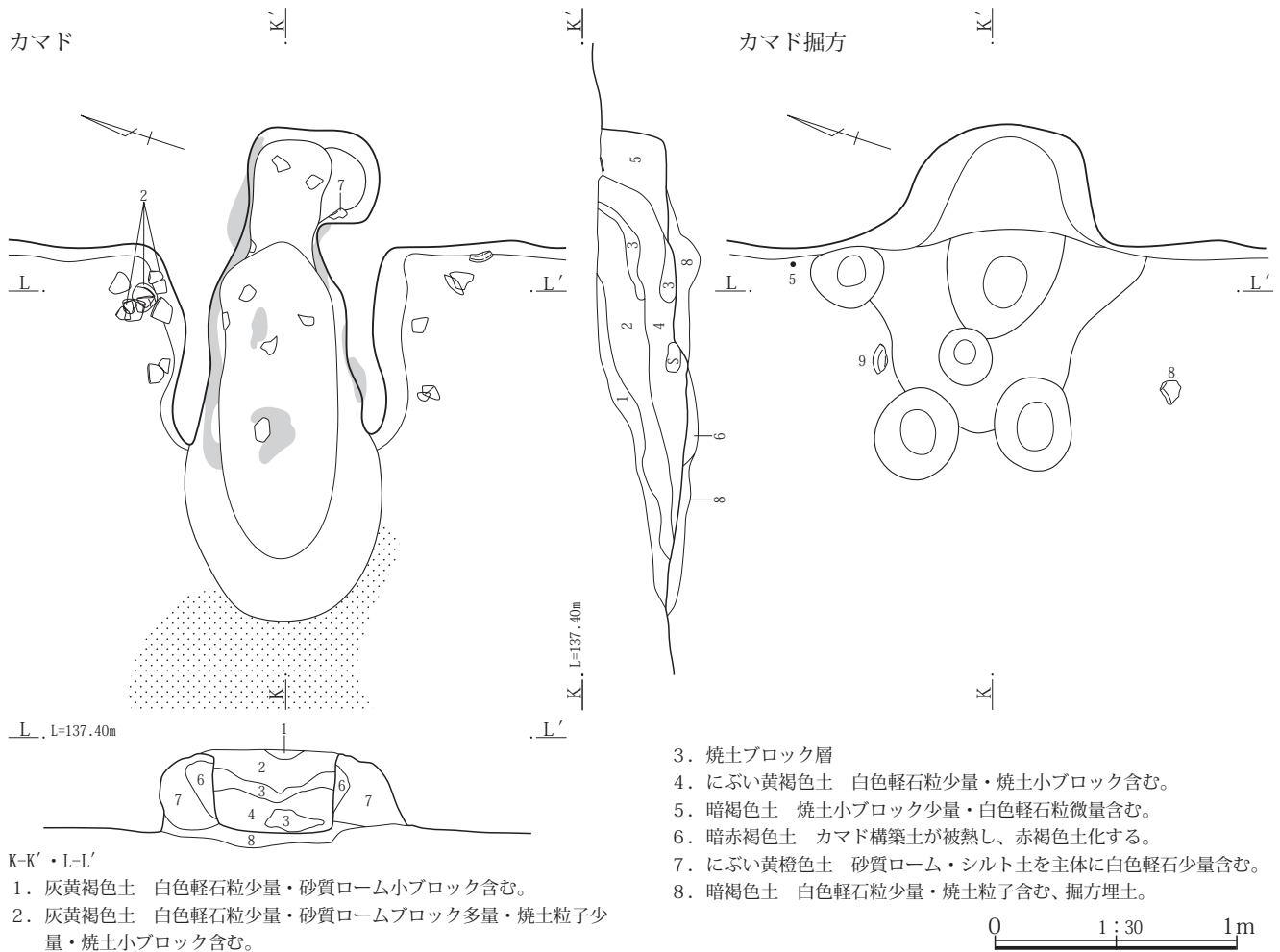
た。各柱穴の形状と規模は次のとおりである。P 1は楕円形、長軸0.45m、短軸0.40m、深さ0.41m。P 2は円形、径0.60m、深さ0.61m。P 3は楕円形、長軸0.86m、短軸0.68m、深さ0.47m。P 4は楕円形、長軸0.80m、短軸0.52m、深さ0.42m。P 5は楕円形、長軸0.74m、短

軸0.64m、深さ0.39mを測る。柱穴間の距離は、P 1～P 2間が3.10m、P 2～P 3間が3.00m、P 3～P 5間が1.65m、P 5～P 4間が1.55m、P 4～P 1間が3.00mを測る。

柱痕は各柱穴とも確認されなかった。土層断面の観察



第195図 2区41号竪穴住居遺構図(1)



第196図 2区41号竪穴住居遺構図(2)

では抜き取られた痕跡がみられた。なお、P1、P3～P5の内部からは径20cm、長さ30cm前後の垂角礫が出土している。出土位置は柱穴の中位からで、柱を抜き取り後に廃棄されたとみられるが、柱穴で使用されていた礫である可能性は高い。

なお、P4とP1の間でも小規模なピットを検出した。これをP6とするが、位置関係からは柱穴の可能性が窺えたが、規模からみるとやや疑問が残る。P6は楕円形を呈し、長軸0.43m、短軸0.38m、深さ0.35mを測る。

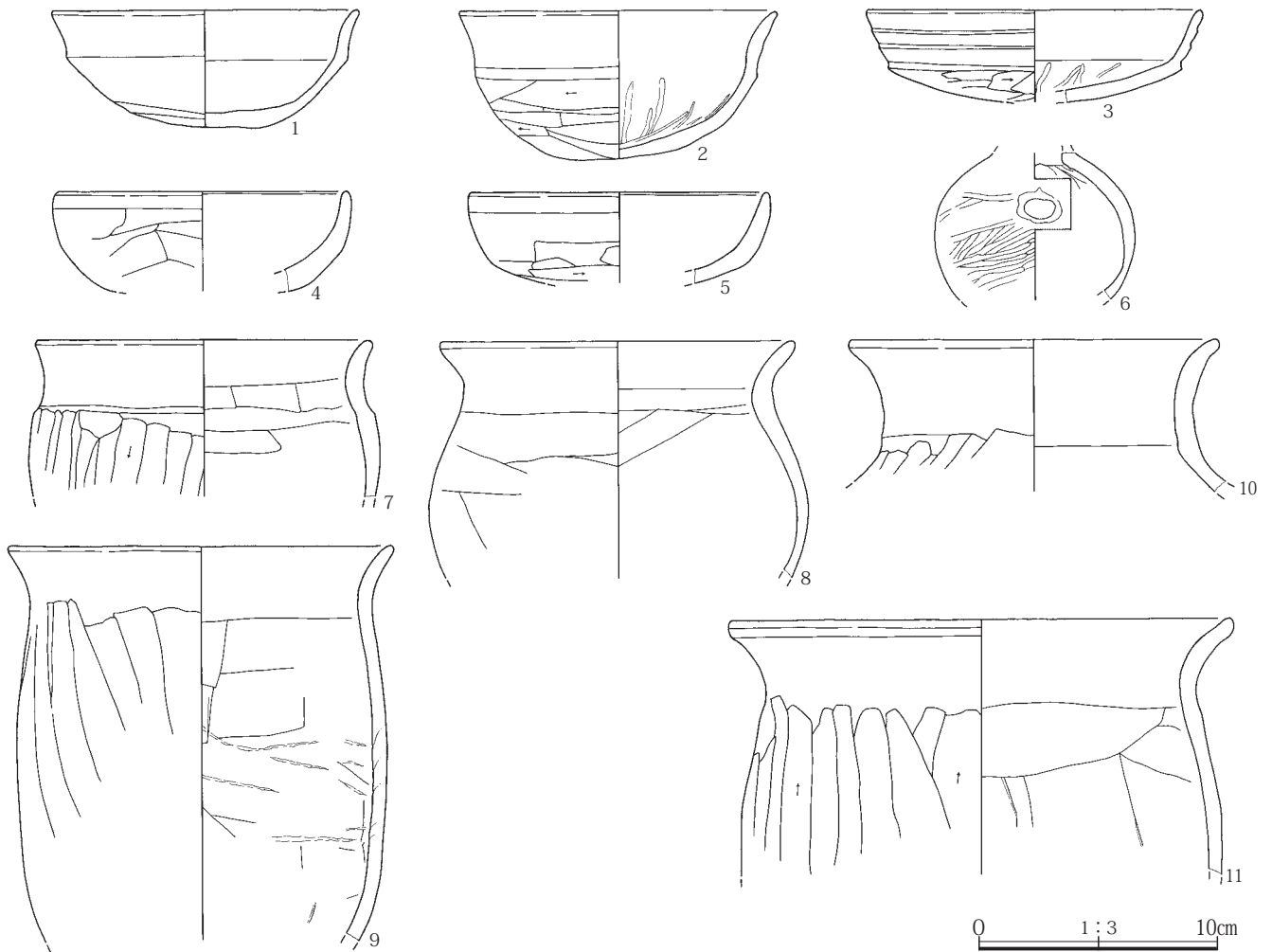
**貯蔵穴** 南東隅にて検出した。形状は長方形に近い形状を呈し、長軸0.84m、短軸0.76m、深さ0.81mを測る。貯蔵穴脇からは8の土師器甕と礫が出土している。

**その他施設** 南辺壁下の中央よりやや東寄りで浅い落ち込みを検出した。形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.65m、短軸0.52m、深さ0.20mを測る。内部からは遺物などの出土もみられず、用途などについては明らかにできなかった。

**カマド** 東辺中央よりやや南寄りに構築されていた。残存状態は焚口は痕跡がみられなかったが、燃烧部から煙道部の天井は廃棄過程のなかで崩落したとみられる。なお、燃烧部側壁は残存していた。規模は、全長2.02m、全幅1.10m、煙道部0.50m、燃烧部幅0.52mを測る。燃烧部はやや窪められている。煙道部は燃烧部底面より5cmほど上がり平坦に延び、奥壁は垂直に立ち上がる。掘方は燃烧部下を1.0×0.8mの逆台形状に10cmほど掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示した遺物のうち、7と9の土師器甕がカマド、8の小型甕が貯蔵穴脇、1～3の土師器杯と10・11の土師器甕が床面からの出土である。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片168点・小型製品片62点、須恵器小型製品片2点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期はカマドや貯蔵穴、床面などから出土した遺物から7世紀前半に比定できる。



第197図 2区41号竪穴住居出土遺物図

2区42号竪穴住居(第198・199図、PL.103・104・172)

**位置** 2区調査区中央よりやや南西寄り、85区G-10、H-9・10に位置する。南西部の一部を試掘トレンチにより欠落する。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。なお、2区48号竪穴住居とは隣接する位置関係である。

**形状** 南北に長い長方形を呈す。

**規模** 長軸4.61m、短軸3.30mを測る。

**面積** 11.75㎡

**方位** N-72°-E

**埋没状態** 土層断面では3のにぶい黄褐色土が中央よりやや南辺寄りで盛り上がった不自然な状態が観察できるが、その上位の土層は両側からの流れ込みが観察できる。以上のことから、埋没土の下半では人為的な埋め戻しの可能性もみられる。

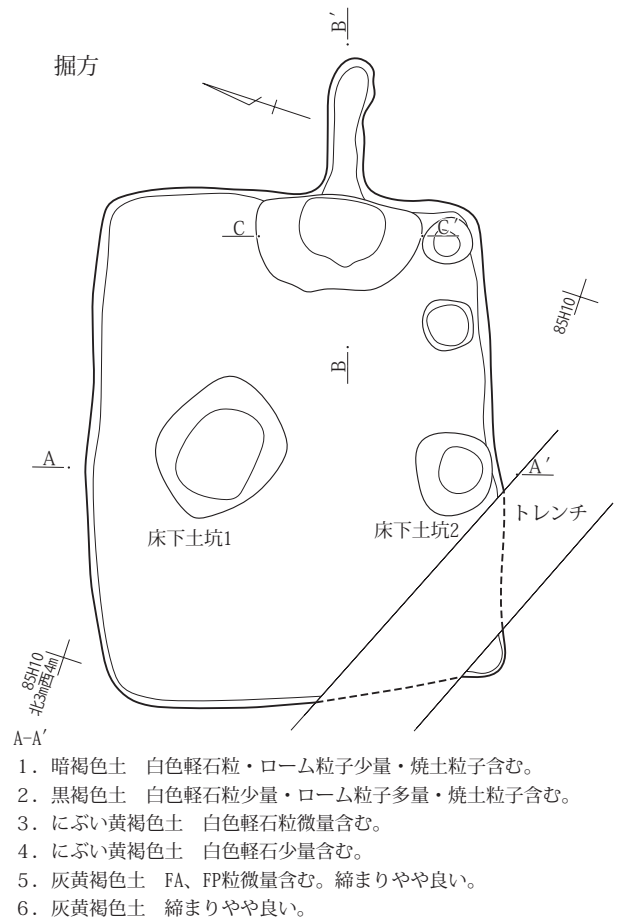
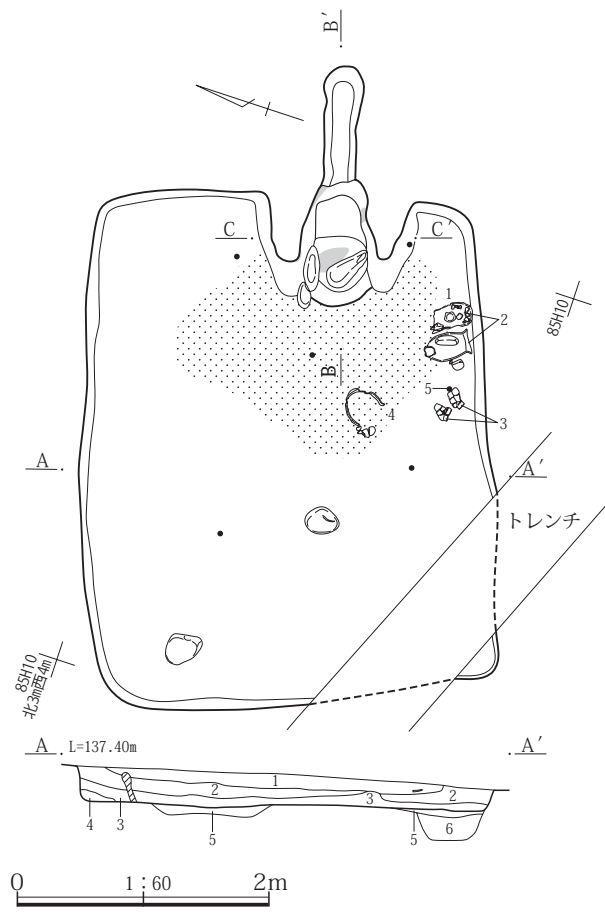
**床面** 掘方面より5～10cmほど灰黄褐色土を埋め戻して構築しているが、一部は地山をそのまま踏み固めていた。床面の状態は若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦で、カマド前は特に硬化していた。

確認面から床面までの深さは、0.08～0.27mを測る。  
**掘方** 一部を除き、浅い掘り込みが全体的に行われていた。中央部の北寄りと南辺寄りで2基の床下土坑を検出した。床下土坑1は、形状が隅丸長方形を呈し、長軸1.04m、短軸0.94m、深さ0.11mを測る。床下土坑2は、形状が楕円形を呈し、規模は長軸0.66m、短軸0.60m、深さ0.29mを測る。両床下土坑とも遺物などの出土はみられなかった。

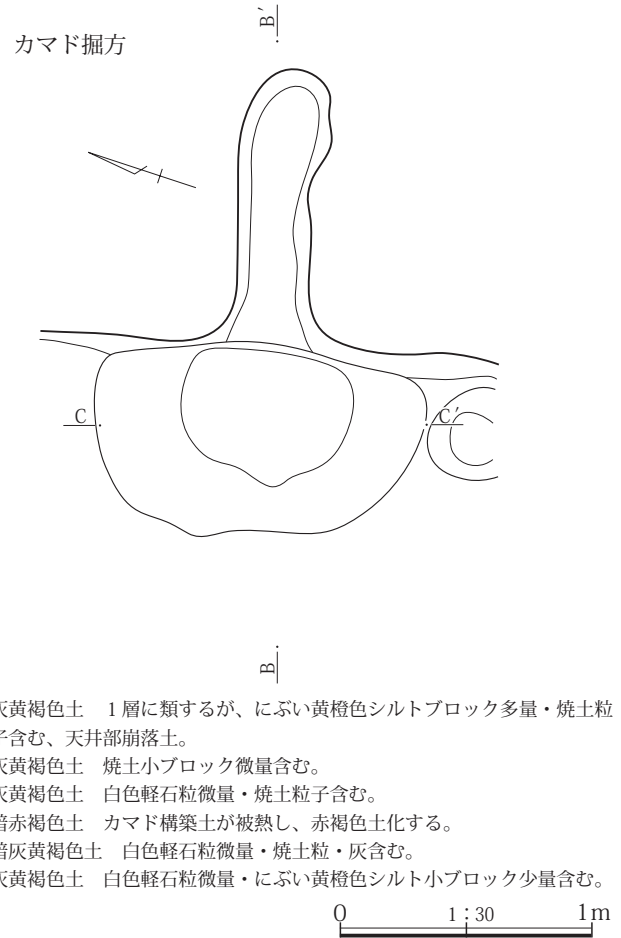
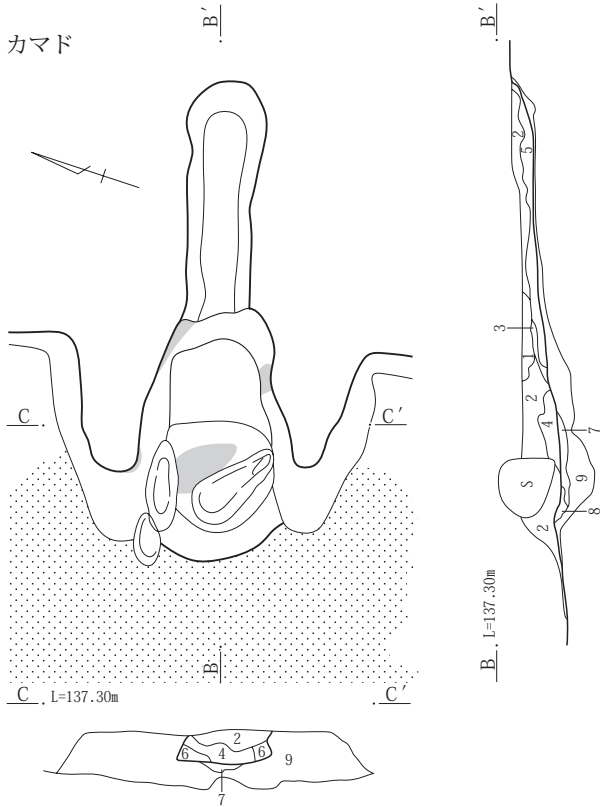
**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 床面では検出されなかったが、掘方面では南東隅で可能性のある落ち込みを検出した。この落ち込みは



- A-A'
1. 暗褐色土 白色軽石粒・ローム粒子少量・焼土粒子含む。
  2. 黒褐色土 白色軽石粒少量・ローム粒子多量・焼土粒子含む。
  3. にぶい黄褐色土 白色軽石粒微量含む。
  4. にぶい黄褐色土 白色軽石少量含む。
  5. 灰黄褐色土 FA、FP粒微量含む。締まりやや良い。
  6. 灰黄褐色土 締まりやや良い。



- B-B'・C-C'
1. 灰黄褐色 焼土ブロック多量含む、天井部崩落土。
  2. 灰黄褐色土 Hr-FP少量・焼土小ブロック含む。
  3. 灰黄褐色土 灰多量・焼土粒子少量含む。
  4. 灰黄褐色土 1層に類するが、にぶい黄褐色シルトブロック多量・焼土粒子含む、天井部崩落土。
  5. 灰黄褐色土 焼土小ブロック微量含む。
  6. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量・焼土粒子含む。
  7. 暗赤褐色土 カマド構築土が被熱し、赤褐色土化する。
  8. 暗灰黄褐色土 白色軽石粒微量・焼土粒・灰含む。
  9. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量・にぶい黄褐色シルト小ブロック少量含む。

第198図 2区42号竪穴住居遺構図

形状が楕円形を呈し、規模は長軸0.40m、短軸0.36m、深さ0.66mを測る。なお、内部からは遺物などの出土はみられなかった。

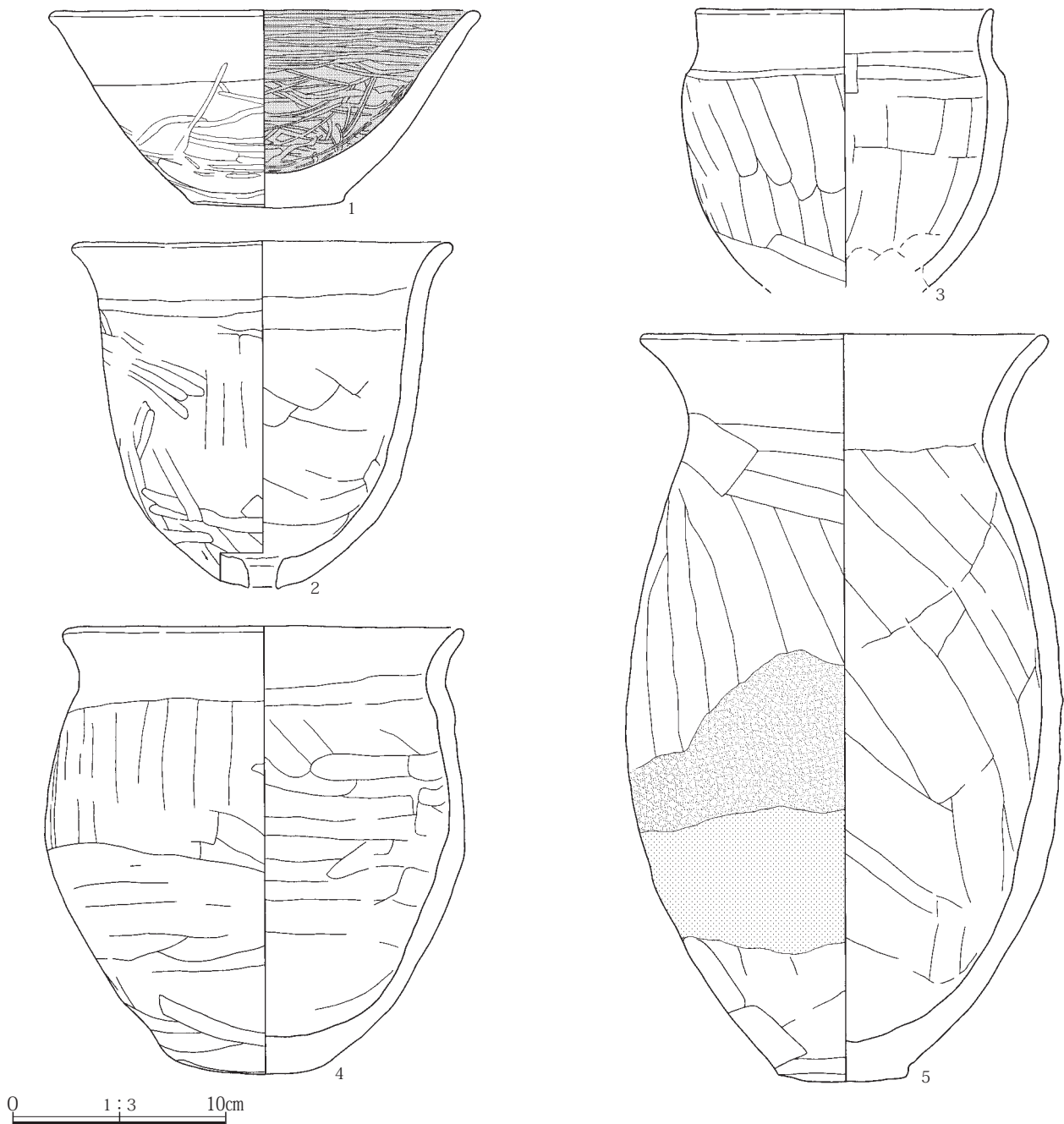
**カマド** 東辺中央よりやや南寄り部分に構築されていた。残存状態は焚口と燃烧部天井は壊されていたが、燃烧部側壁は残存していた。なお、煙道部天井は崩落した状態であった。規模は全長1.90m、全幅1.25m、煙道部長0.92m、燃烧部幅0.60mを測る。燃烧部は焚口よりやや窪められており、煙道部はほぼ平坦で壁外に延びる。焚口や燃烧部には構築材として礫が使用されていた。燃

烧部底面から長さ40cmほどの垂角礫が出土しており、この礫は焚口上部に掛けられていた可能性がみられた。

掘方は、燃烧部を中心に南北軸を長軸として1.3×0.7mの楕円形状に10cmほど掘り込まれていた。

**出土遺物** 図示した遺物は竪穴住居南東部の床面及びやや上位からの出土である。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片42点・小型製品片9点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は、床面より出土した遺物から6世紀後半に比定できる。



第199図 2区42号竪穴住居出土遺物図

2区43号竪穴住居(第200~204図、PL.104~107・172・173)

**位置** 85区2区調査区西端の中ほど、K-14~16、L-14~16、M-15に位置する。南西角部分が現道の下に延びるため全貌は明らかではない。

**重複** 平面での遺構確認時では、他遺構との重複関係は確認されなかったが、床面の検出時と土層断面の観察では西辺寄り土坑との重複が確認された。この土坑は、住居土層断面で確認した落ち込みと同一である。なお、2区1号竪穴住居とは隣接する位置関係である。

**形状** 南北方向に長い長方形を呈す。

**規模** 長軸7.00m、短軸6.35mを測る。

**面積** 調査範囲内では35.22㎡を測る。

**方位** N-60°-E

**埋没状態** 土層断面の観察では、西辺際が調査区外のため詳細は不明であるが、壁際の三角堆積後中ほどにレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。なお、東辺から北辺の壁上部は埋没段階で崩落し始めていた。

**床面** 大部分は地山をそのまま踏み固めているが、床下土坑などが位置する箇所では黒褐色土によって埋め戻されていた。床面の状態は、若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。

確認面から床面までの深さは、0.48~0.82mを測る。

**掘方** 床下土坑を4基と土坑状の浅い掘り込みを6カ所検出した。床下土坑は中央部に3基と南西隅寄りに1基が位置する。床下土坑の形状規模は次のとおりである。床下土坑1は楕円形で、長軸1.34m、短軸1.12m、深さ0.32m。床下土坑2は楕円形で、長軸2.24m、短軸1.02m、深さ0.30m。床下土坑3は双円形で、長軸1.48m、短軸0.56m、深さ0.29m。床下土坑4は楕円形で、長軸1.35m、短軸0.65m、深さ0.38mを測る。各床下土坑からは遺物などの出土はみられなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 竪穴住居平面の対角線上で4本を検出した。形状と規模は次のとおりである。P1は楕円形状、長軸0.57m、短軸0.51m、深さ0.52m。P2は円形、径0.34m、深さ0.35m。P3は楕円形、長軸0.74m、短軸0.54m、深さ0.63m。P4は円形、径0.46m、深さ0.30mを測る。柱穴間の距離は、P1~P2間が3.25m、P2~P3間が3.50m、P3~P4間が3.10m、P4~P1間が2.95

mである。

各柱穴とも柱痕は確認されなかった。なお、土層断面の観察では柱は抜き取られたとみられる。

**貯蔵穴** カマド南側で2基を検出した。位置関係から南側に位置する貯蔵穴1が古く、貯蔵穴2はカマド1を廃棄・撤去後に新たに設置されたとみられる。なお、貯蔵穴2の設置後において貯蔵穴1が埋め戻されたか否かについては明らかではない。遺物がほとんど出土していない状態を見ると住居廃絶期には使用されていなかった可能性が高い。

貯蔵穴1は形状が不整な楕円形を呈し、規模は長軸0.98m、短軸0.54m、深さ0.36mを測る。

貯蔵穴2は、楕円形を呈し、長軸0.85m、短軸0.70m、深さ0.34mを測る。なお、貯蔵穴2からは8・10の土師器短頸壺や小型甕が出土していた。

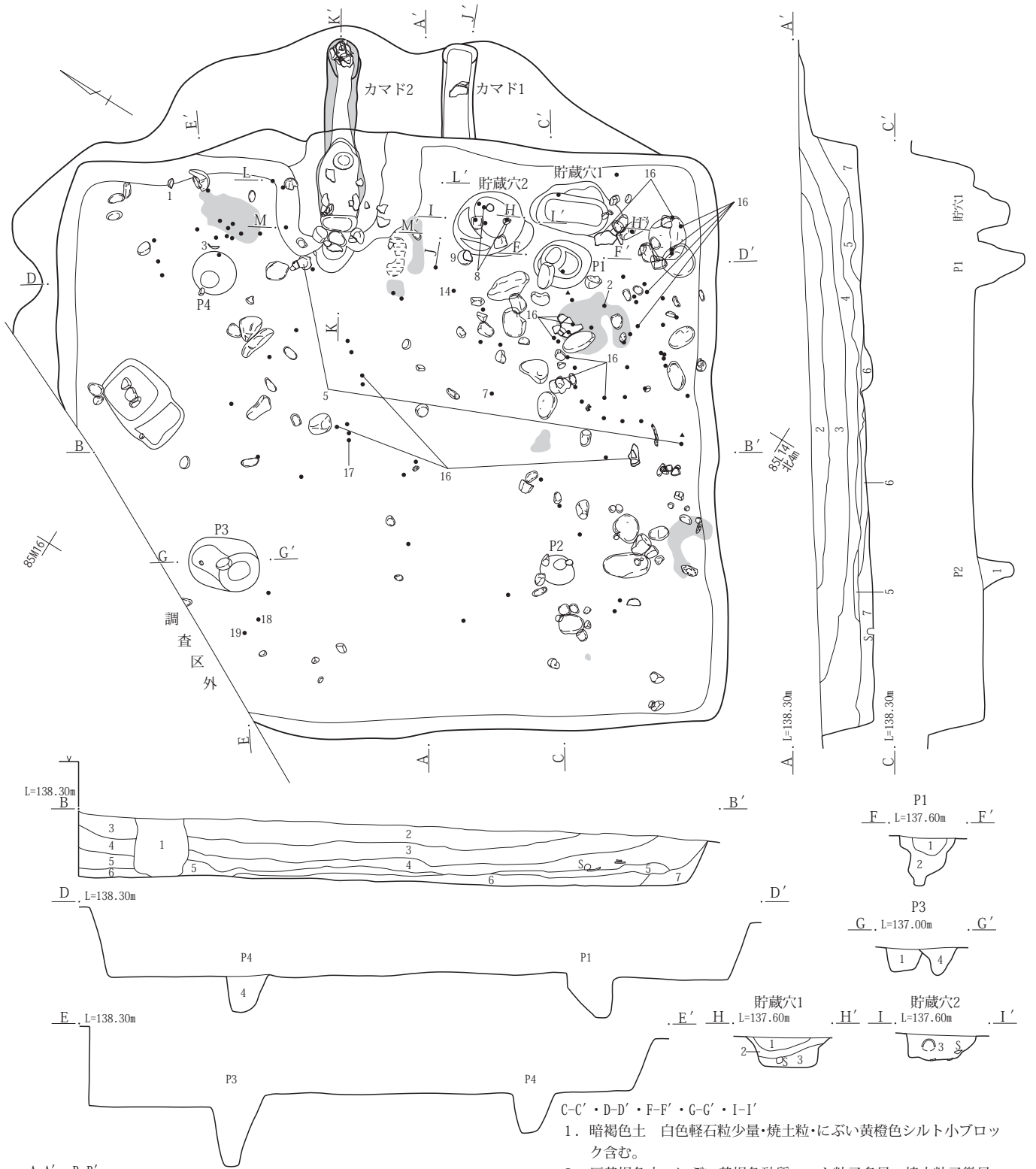
**カマド** 東辺の中ほどに2基が構築されていた。南側をカマド1、北側をカマド2とした。検出状態では、両カマドとも併設して構築されていたとみられる。この根拠は、カマド2の掘方を調査時に燃焼部右側壁一部が地山を掘り残して構築されていたことによる。ただし、カマド2の左右で東辺にずれがみられるような状態が、カマド1の左右で生じていたなら、カマド1が先行して使用され、その後にカマド2が構築され、カマド1が廃棄された可能性もあり得る。

カマド1では煙道部壁面の焼土化がみられることから一定の間使用されていたことがわかる。そして竪穴住居を使用している途中で壁内の燃焼部などを撤去したものと考えられる。

**カマド1** 残存状態は焚口や燃焼部が取り除かれ、煙道部だけであった。煙道部は内部に黒褐色土を充填した後天井が崩落したとみられる。規模は、残存する煙道長は0.76m、煙道幅0.34mを測る。なお、煙道部中ほどから13の土師器甕が出土している。掘方は燃焼部手前側に小規模な土坑状の窪みが連続する状態を検出した。

**カマド2** 残存状態は、焚口と燃焼部天井は壊されているとみられるが、燃焼部側壁はそのままの状態、煙道部天井は廃棄後に崩落したとみられる。規模は全長2.48m、全幅1.55m、煙道部長1.05m、焚口部幅0.38m、燃焼部幅0.50mを測る。燃焼部は焚口より窪められており、煙道部は燃焼部より緩やかな傾斜でのぼり、奥へきてまた





A-A'・B-B'

1. 灰黄褐色砂質土 白色軽石粒少量・黄白色ロームブロック含む。
2. 暗褐色土 白色軽石粒多量・砂質ローム粒子少量含む。
3. 暗褐色土 白色軽石粒多量・砂質ローム粒子少量含む。色調2層より暗い。
4. 暗褐色土 白色軽石粒多量・砂質ローム粒子少量含む。色調3層より明るい。
5. 暗褐色土 白色軽石粒少量・焼土粒子含む。
6. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・にぶい黄褐色砂質ローム粒子・にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック含む。
7. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量・にぶい黄褐色砂質ロームブロック少量含む。

C-C'・D-D'・F-F'・G-G'・I-I'

1. 暗褐色土 白色軽石粒少量・焼土粒・にぶい黄褐色シルト小ブロック含む。
2. 灰黄褐色土 にぶい黄褐色砂質ローム粒子多量・焼土粒子微量・白色軽石粒含む。
3. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・焼土粒子・炭化物粒含む。
4. 灰黄褐色土 にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック多量・白色軽石少量・焼土粒子含む。

H-H'

1. 黒褐色土 白色軽石粒少量・にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック・焼土粒子含む。
2. 灰黄褐色土 焼土ブロック多量・にぶい黄褐色砂質ローム粒子含む。
3. にぶい黄褐色土 白色軽石粒微量含む。

0 1:60 2m

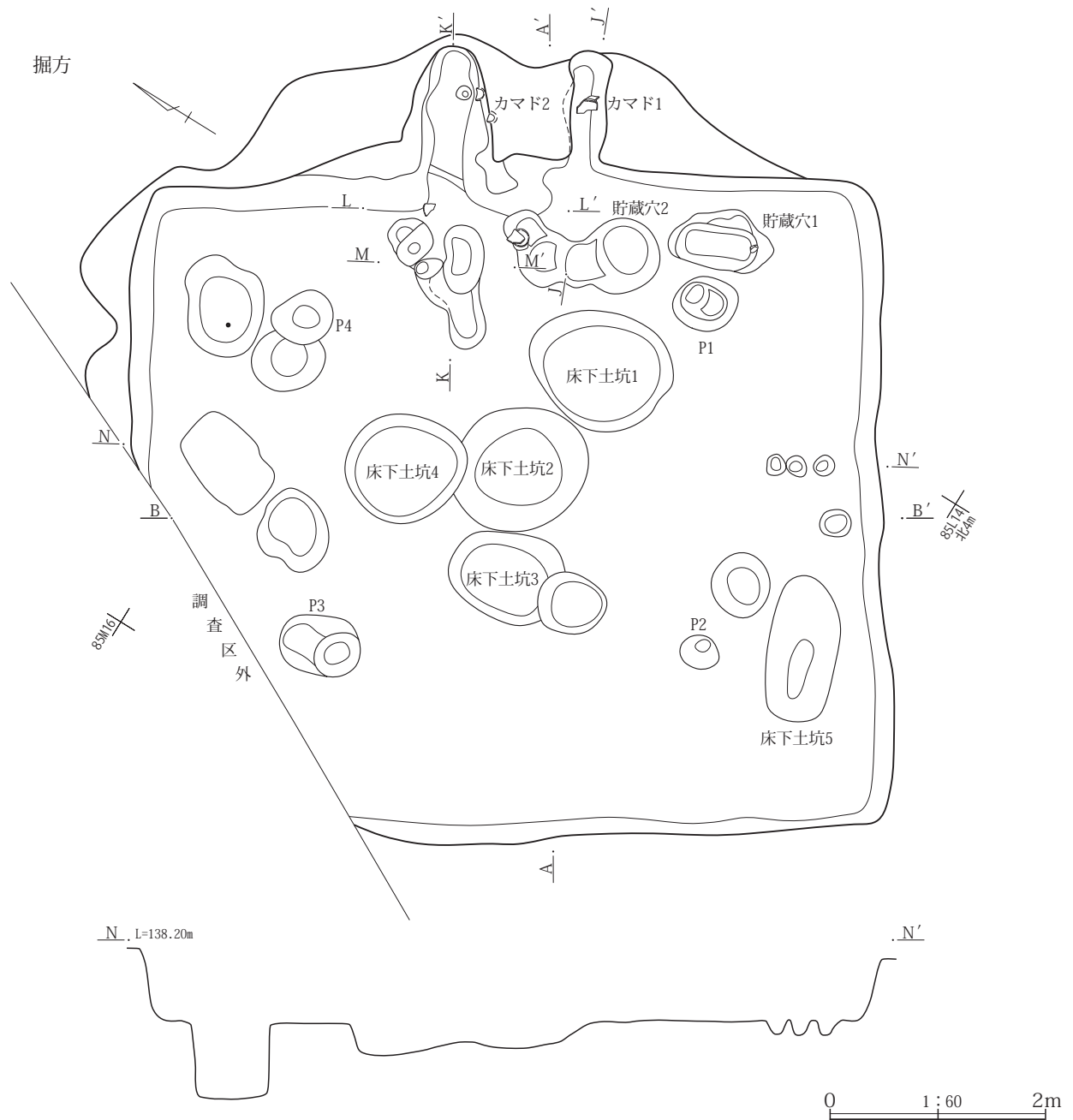
第200図 2区43号竪穴住居遺構図(1)

下がり、奥壁はほぼ垂直に立ち上がる。袖の構築に使われた礫及び天井に使われていた礫が確認された。焚口の両側には径18cmで長さ35cmと40cmの棒状円礫が立てられていた。この礫に掛けられていたとみられる長さ40cm、幅18cm、厚さ6cmの亜角礫が燃焼部側に落とされた状態で出土していた。燃焼部右側壁には14の土師器甕が構築材として使用されていた。また、煙道部奥からは12・15の土師器甕が出土した。この土器が煙出しでの煙突構造の構築材として使用された可能性が窺えた。また、燃焼部底面からは6の土師器高杯が出土している。この高杯は杯身部が完形であったが、脚部を欠いた状態であるこ

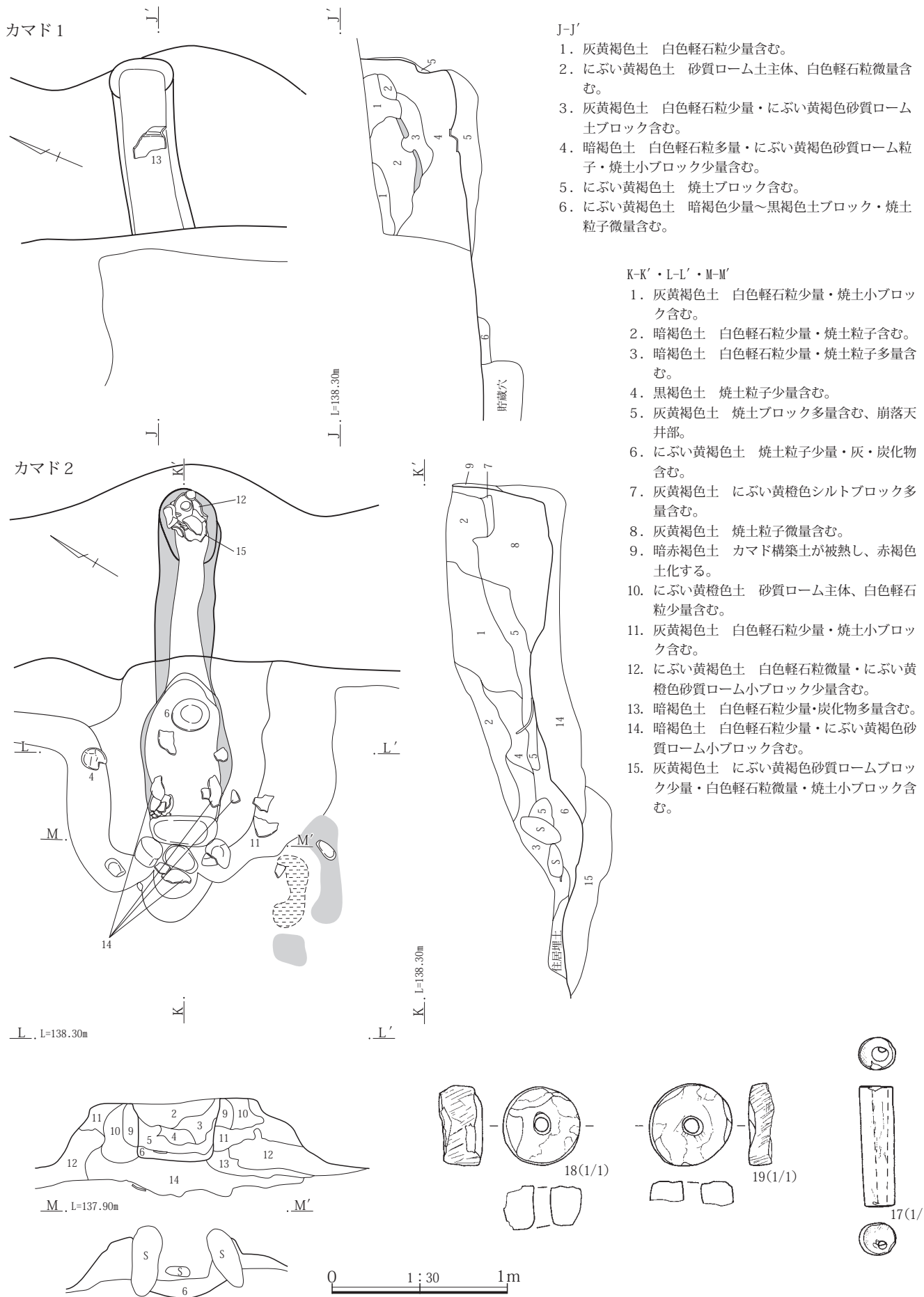
とから、甕の蓋などとして転用された可能性が窺えた。掘方は、燃焼部下にカマド1と同様に、中心に小規模な土坑状の窪みが連続する状態を検出した。

**出土遺物** 図示した遺物のうち前述した以外で本竪穴住居に共伴する遺物には、16の土師器甕が床面より出土しているが、住居内の広範囲に散乱した状態で出土している。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片278点・小型製品片124点、須恵器小型製品片8点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期はカマドや貯蔵穴などから出土した遺物から7世紀前半に比定できる。

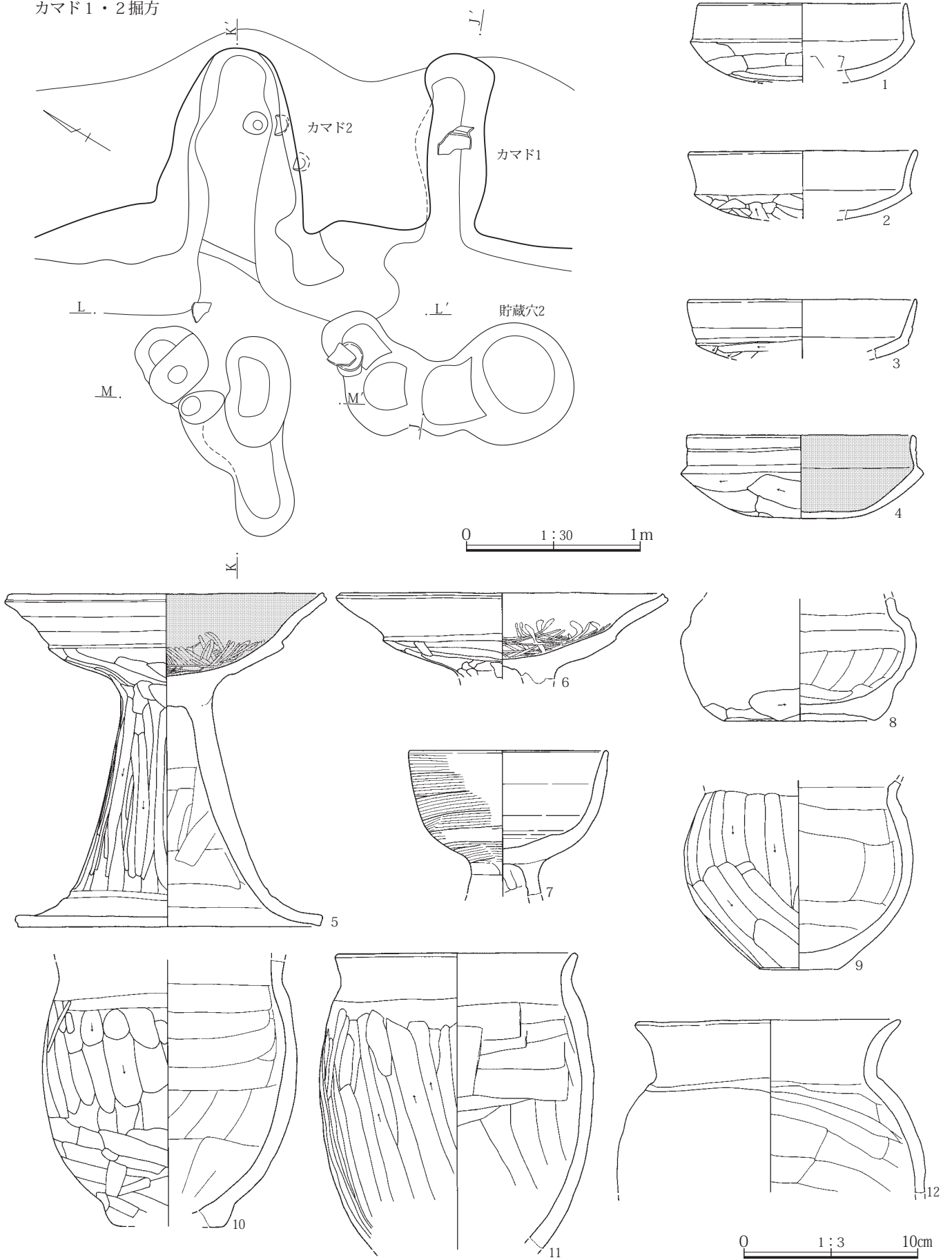


第201図 2区43号竪穴住居遺構図(2)

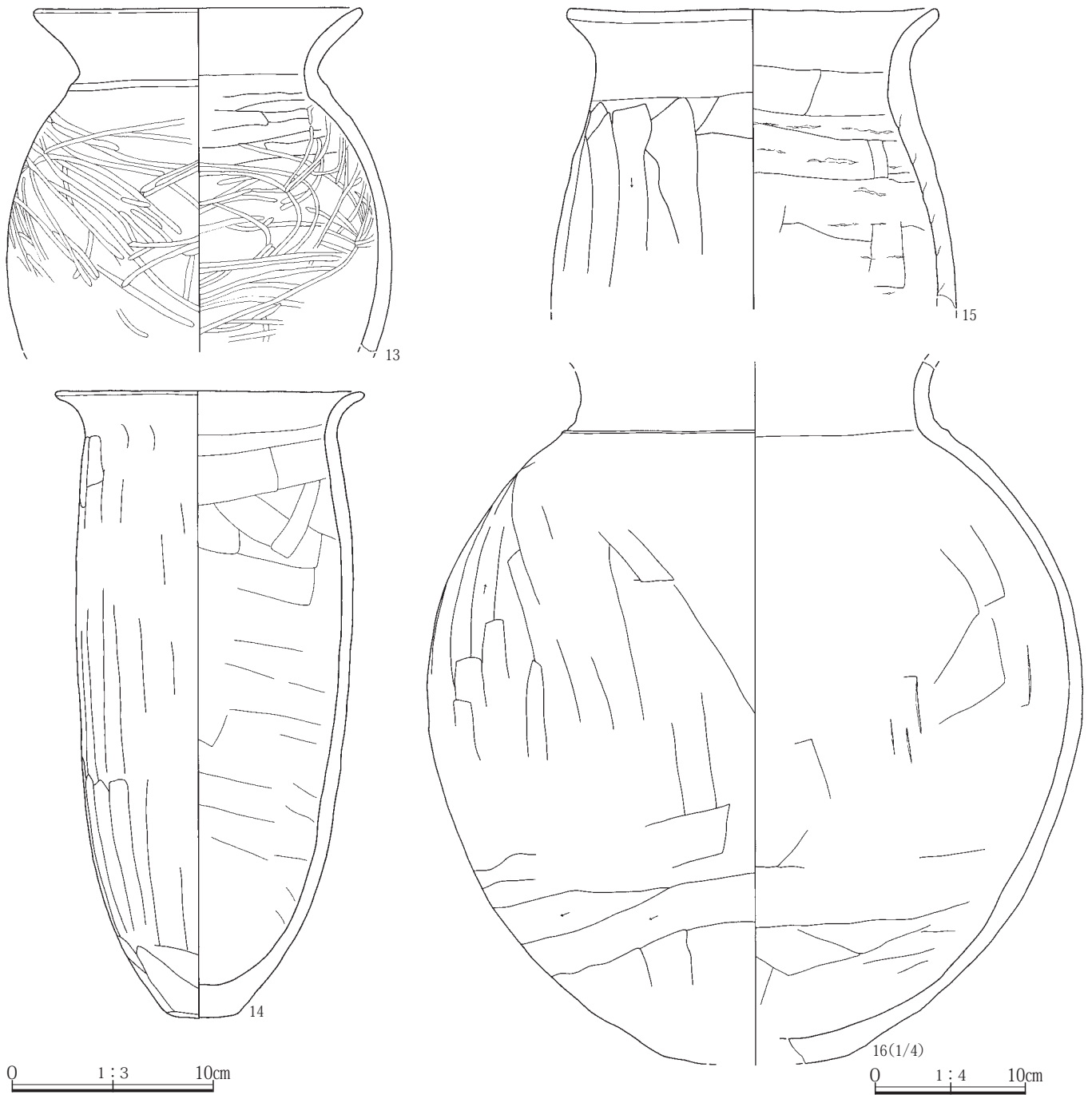


第202図 2区43号竪穴住居遺構図(3)・出土遺物図(1)

カマド1・2掘方



第203図 2区43号竪穴住居遺構図(4)・出土遺物図(2)



第204図 2区43号竪穴住居出土遺物図(3)

2区46号竪穴住居(第205図、PL.107)

**位置** 2区調査区北東角、84区N-14・15、O-14・15に位置する。大半は調査区外に存在するため全貌は不明である。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。なお、2区32号竪穴住居とは隣接する位置関係である。

**形状** 調査範囲内の成果では長方形を呈すると想定される。

**規模** 調査範囲内では長軸2.64m、短軸2.00mを測る。

**面積** 調査範囲内では4.00㎡

**方位** N-50°-E

**埋没状態** 土層断面の観察ではレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 地山をそのまま踏み固め使用していた。床面の状態は細かい凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。

確認面から床面までの深さは、0.81~0.87mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は構築されていない

かった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 調査区内では検出されなかった。

**カマド** 調査区内では検出されなかった。

**出土遺物** 図示できる遺物は出土していないが、土師器大型製品片149点・小型製品片18点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は、確実に共伴する遺物や図示可能な遺物は出土していないが、埋没土や出土遺物から古墳時代後期に比定される。

**規模** 長軸2.46m、短軸2.34mを測る。

**面積** 4.48㎡

**方位** N-60°-E

**埋没状態** 土層断面では周囲から流れ込んだ様子が観察できることから、自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より5~20cmほど灰黄褐色土を埋め戻して構築していた。床面の状態は、若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。

確認面から床面までの深さは、0.39~0.64mを測る。

**掘方** 掘り込みは全体に及んでいたが、中央部では床下土坑が検出された。床下土坑は楕円形を呈し、規模は長軸1.40m、短軸1.05m、深さ0.26mを測る。内部から遺物などの出土はみられなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

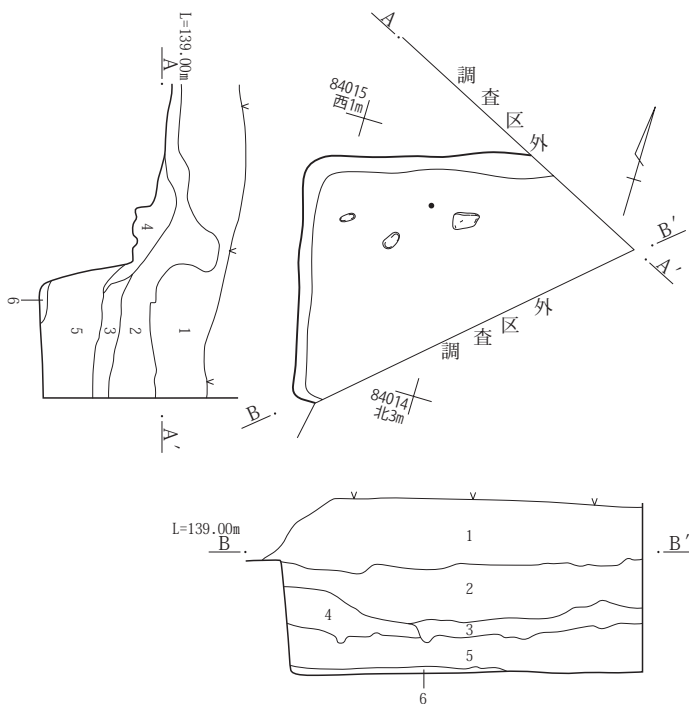
**貯蔵穴** 検出されなかった。

**カマド** 南東角、煙道方位をN-125°-Eに向けて構築されていた。残存状態は焚口と燃烧部天井は壊されていたが、焚口は両側の天井に使用された礫がカマド手前側に落とされ、据え付けられていた礫も倒された状態であった。また、燃烧部天井は内部に残存していなかった。なお、燃烧部側壁と煙道部はそのままの状態であった。規模は、全長1.87m、全幅0.60m、煙道部長0.95m、焚口幅0.35m、燃烧部幅0.34mを測る。燃烧部は焚口よりほぼ平坦で煙道部にかけてはごく緩い傾斜をもち、奥壁は120度の角度で立ちあがっていた。煙出し部分では、確認面近くで長さ30cm、幅20cm、厚さ8cmの扁平な円礫が出土していたが、用途や使用目的については明らかではない。燃烧部側壁は地山を掘り残して、そのまま使用していた。

掘方は、ほとんど見られない状態で、焚口の礫を据え付けるための小穴が検出されたただけであった。

**出土遺物** 図示した遺物はカマド左側壁間の床面から出土した1~3の土師器杯だけである。この土師器杯は1と2を重ねた状態の横に3が置かれた状態であった。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片1点が出土している。

**所見** 本遺構は規模から日常の竪穴住居とは想定されず、竈屋としての機能が考えられる。時期は床面から出土した遺物から6世紀末から7世紀初頭に比定できる。



A-A'・B-B'

1. 灰黄褐色砂質土 表土、現耕作土。
2. 暗褐色土 白色軽石粒少量含む。
3. 黒褐色土 白色軽石粒少量・にぶい黄褐色砂質ロームブロック含む。
4. 暗褐色土 白色軽石粒少量・にぶい黄褐色砂質ロームブロック含む。
5. にぶい黄褐色土 白色軽石粒微量・焼土粒子含む。
6. にぶい黄褐色土 にぶい黄褐色砂質ローム小ブロック多量含む。

0 1:60 2m

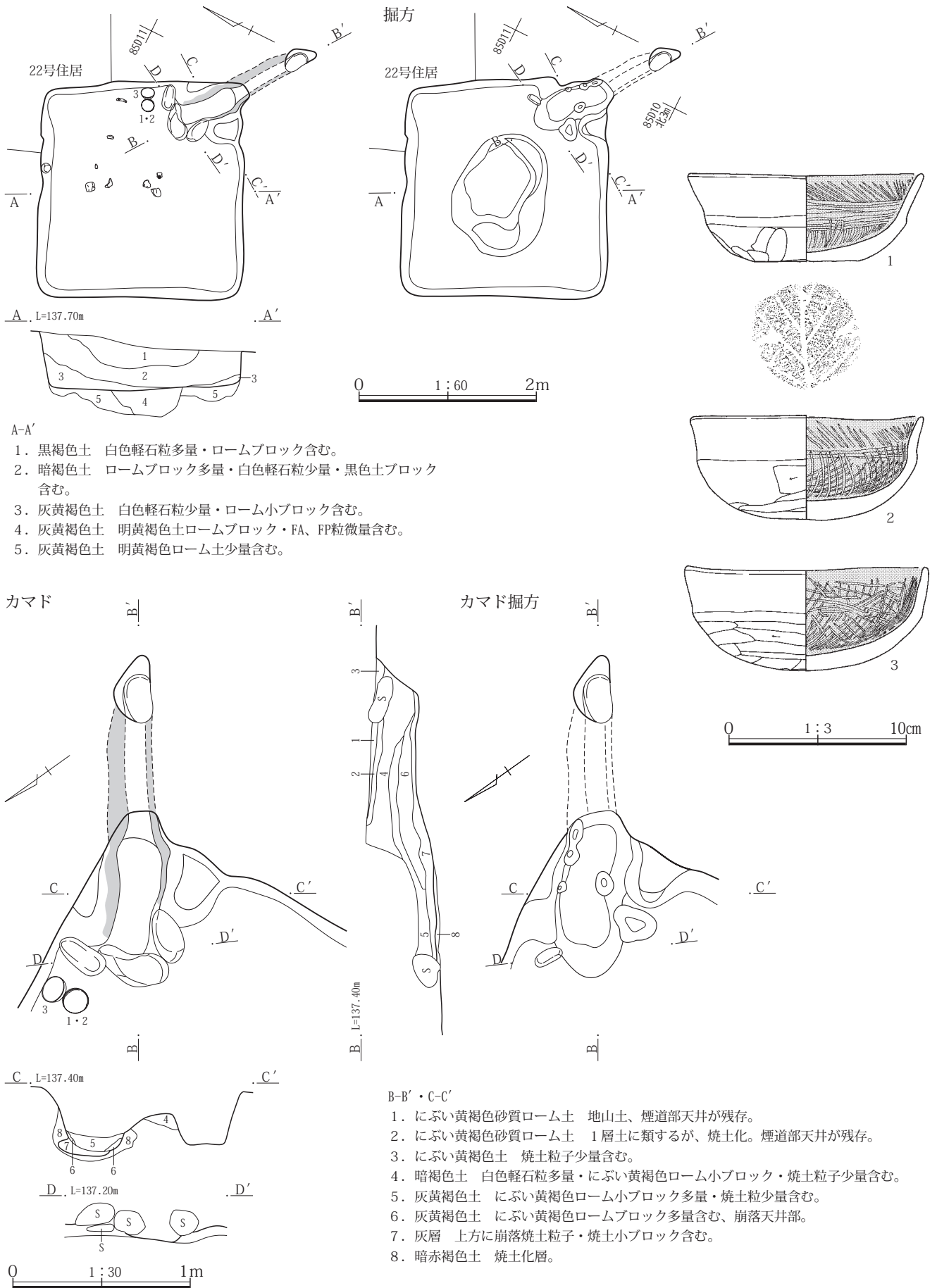
第205図 2区46号竪穴住居遺構図

2区47号竪穴住居(第206図、PL.107・108・173)

**位置** 2区調査区中央よりやや東寄り、85区C-10、D-10・11に位置する。

**重複** 2区22号竪穴住居と本竪穴住居北西角が重複する。調査時の見解では本竪穴住居の方が新しい。

**形状** 東西方向にやや長い長方形を呈す。



- A-A'
1. 黒褐色土 白色軽石粒多量・ロームブロック含む。
  2. 暗褐色土 ロームブロック多量・白色軽石粒少量・黒色土ブロック含む。
  3. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・ローム小ブロック含む。
  4. 灰黄褐色土 明黄褐色土ロームブロック・FA、FP粒微量含む。
  5. 灰黄褐色土 明黄褐色ローム土少量含む。

B-B'・C-C'

1. にぶい黄褐色砂質ローム土 地山土、煙道部天井が残存。
2. にぶい黄褐色砂質ローム土 1層土に類するが、焼土化。煙道部天井が残存。
3. にぶい黄褐色土 焼土粒子少量含む。
4. 暗褐色土 白色軽石粒多量・にぶい黄褐色ローム小ブロック・焼土粒少量含む。
5. 灰黄褐色土 にぶい黄褐色ローム小ブロック多量・焼土粒少量含む。
6. 灰黄褐色土 にぶい黄褐色ロームブロック多量含む、崩落天井部。
7. 灰層 上方に崩落焼土粒子・焼土小ブロック含む。
8. 暗赤褐色土 焼土化層。

第206図 2区47号竪穴住居遺構図・出土遺物図

2区48号竪穴住居(第207図、PL.108)

**位置** 2区調査区中ほど、85区G-10に位置する。本竪穴住居は台地南側に広がる緩斜面に立地する。

**重複** 遺構確認時では、他の遺構との重複は確認されず、単独での占地である。なお、42号竪穴住居とは隣接する位置にある。

**形状** 各辺長は北辺2.10m、東辺2.25m、南辺2.50m、西辺2.60mと差がみられる台形状を呈す。

**規模** 長軸2.60m、短軸2.48mを測る。

**面積** 4.95㎡

**方位** N-24°-W

**埋没状態** 土層断面では、壁際に三角堆積後、その内側に流れ込みとみられる堆積が観察できることから、自然埋没と想定される。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めていた。床面の状態は、若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.37~0.47mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、構築されていなかった。

**壁溝** 東辺の北東角から0.5mから南辺、西辺の中ほどまでの壁下で検出したが、南辺と西辺では連続せず、部分的に存在していた。規模は、上端0.03~0.22m、下端0.02~0.08m、深さ0.03~0.09mを測る。

**柱穴** 幾つかのピットが検出されているが、その中では

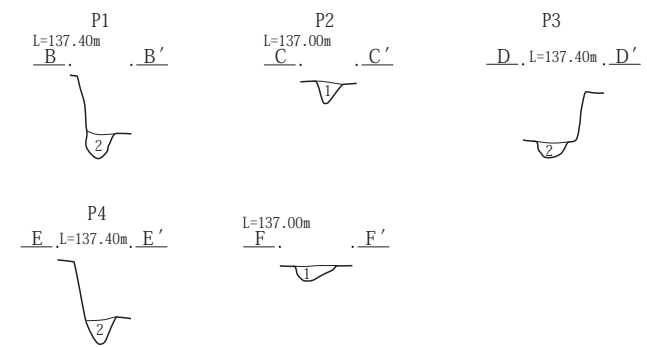
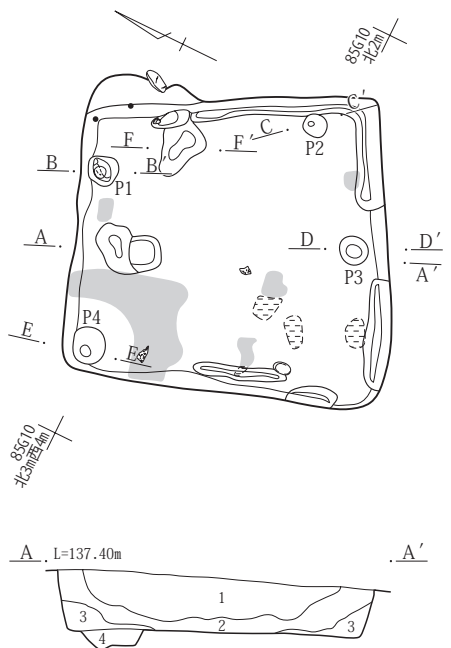
壁下に位置するものが該当するとみられる。配置は、北辺北東角寄りの壁下(P1)、南辺南東角よりの壁下(P2)、南辺中ほどの壁下(P3)、北西角壁下(P4)と規則性がみられない。形状と規模は次のとおりである。P1は形状が楕円形を呈し、規模は長軸0.25m、短軸0.23m、深さ0.21mを測る。P2は形状が楕円形を呈し、規模は長軸0.20m、短軸0.17m、深さ0.14mを測る。P3は円形を呈し、径0.23m、深さ0.16mを測る。P4は形状が楕円形を呈し、規模は長軸0.29m、短軸0.26m、深さ0.18mを測る。

**貯蔵穴** 2カ所で浅い落ち込みを検出したが、形状や規模から該当するとは考えられなかった。

**炉・カマド** 床面で焼土が検出されているが、炉とみられる痕跡は存在しなかった。また、カマドも構築されていなかった。

**出土遺物** 出土した遺物の中には図示可能なものは存在していなかった。出土遺物の点数は、土師器甕などの大型製品片13点と杯・鉢などの小型製品片7点である。小型製品片には模倣杯片や内面黒色処理された杯片がみられた。

**所見** 本竪穴住居の時期は、出土した遺物がすべて古墳時代後期の特徴を示していることから6世紀後半から7世紀初頭に比定できる。



A-A'

1. 暗褐色土 白色軽石多量・にぶい黄褐色砂質ロームブロック含む。
2. 暗褐色土 白色軽石粒を不均質に含み、にぶい黄褐色砂質ロームブロック・焼土小ブロック微量・炭化物含む。
3. 暗褐色土 白色軽石粒少量・砂質ロームブロック含む。
4. 黒褐色土 白色軽石粒多量・にぶい黄褐色砂質ロームブロック少量含む。

B-B'・C-C'・D-D'・E-E'・F-F'

1. 黒褐色土 白色軽石粒多量・にぶい黄褐色砂質ロームブロック少量含む。
2. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量含む、壁際柱穴か。

0 1:60 2m

第207図 2区48号竪穴住居遺構図



3区5号竪穴住居(第208～210図、PL.109・110・173)

**位置** 3区調査区北西部、84区H-10・11、I-10・11に位置する。本竪穴住居の調査は用地の都合上、平成22年度・23年度と2カ年に分けて行った。なお、南西角の上部を攪乱によって欠くが、ほぼ全貌は明らかである。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。なお、3区6号竪穴住居とは隣接する位置関係であるが、本竪穴住居とは存続時期に大きな隔たりがある。本竪穴住居が埋没、平地化した後に6号竪穴住居が構築されている。

**形状** 東西方向に長い長方形を呈す。

**規模** 長軸3.92m、短軸3.78mを測る。

**面積** 10.76㎡

**方位** N-67°-E

**埋没状態** 土層断面では壁際に三角堆積した後、中ほどにレンズ状の流れ込みとみられる堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より15cm前後、灰黄褐色土・にぶい黄褐色土を埋め戻して構築していた。床面の状態は若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。その中でもカマド前から南辺にかけては特に硬化し、カマド前の1m弱四方には焼土や灰が散布された状態であった。

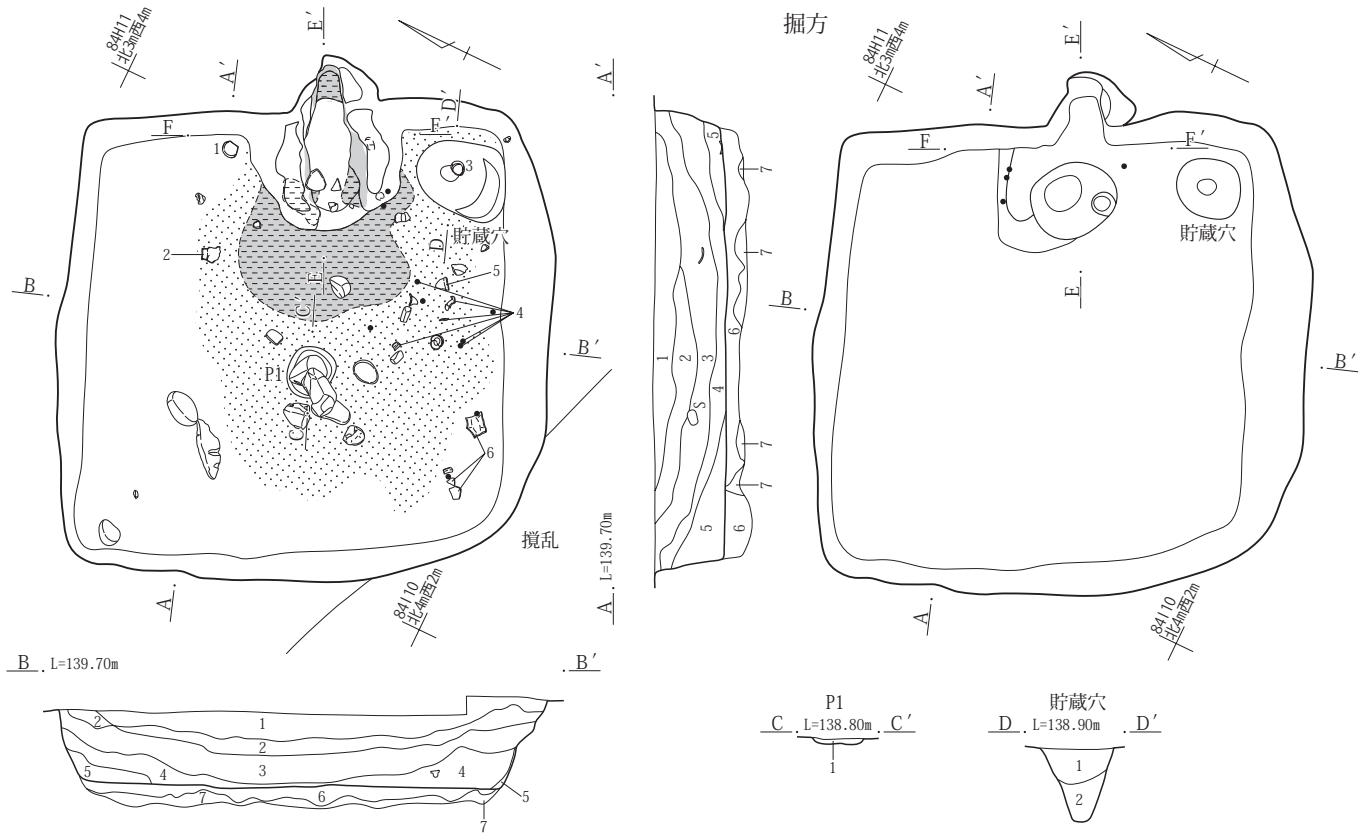
確認面から床面までの深さは、0.53～0.69mを測る。

**掘方** 全面が床面より深く掘り込まれていたが、床下土坑などの施設は検出されなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 南東隅にて検出した。形状は平面が隅丸台形を



A-A'・B-B'

1. 灰黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒少量含む、焼土粒微量含む。
2. 灰黄褐色土 1層に類するが、色調1層よりやや黒味がかかる。
3. 灰黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒少量含む、ロームブロック微量含む。
4. 黒褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。
5. 灰黄褐色土 ロームブロック微量含む。
6. 灰黄褐色土 ローム土含む、白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。掘方埋土。
7. にぶい黄褐色土 ローム土含む、掘方埋土。

C-C'

1. 灰黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒少量含む。

D-D'

1. 黒褐色土 焼土粒・炭化粒・白色軽石粒・FA、FP粒少量含む。
2. 灰黄褐色土 ローム土含む。

0 1:60 2m

第208図 3区5号竪穴住居遺構図(1)

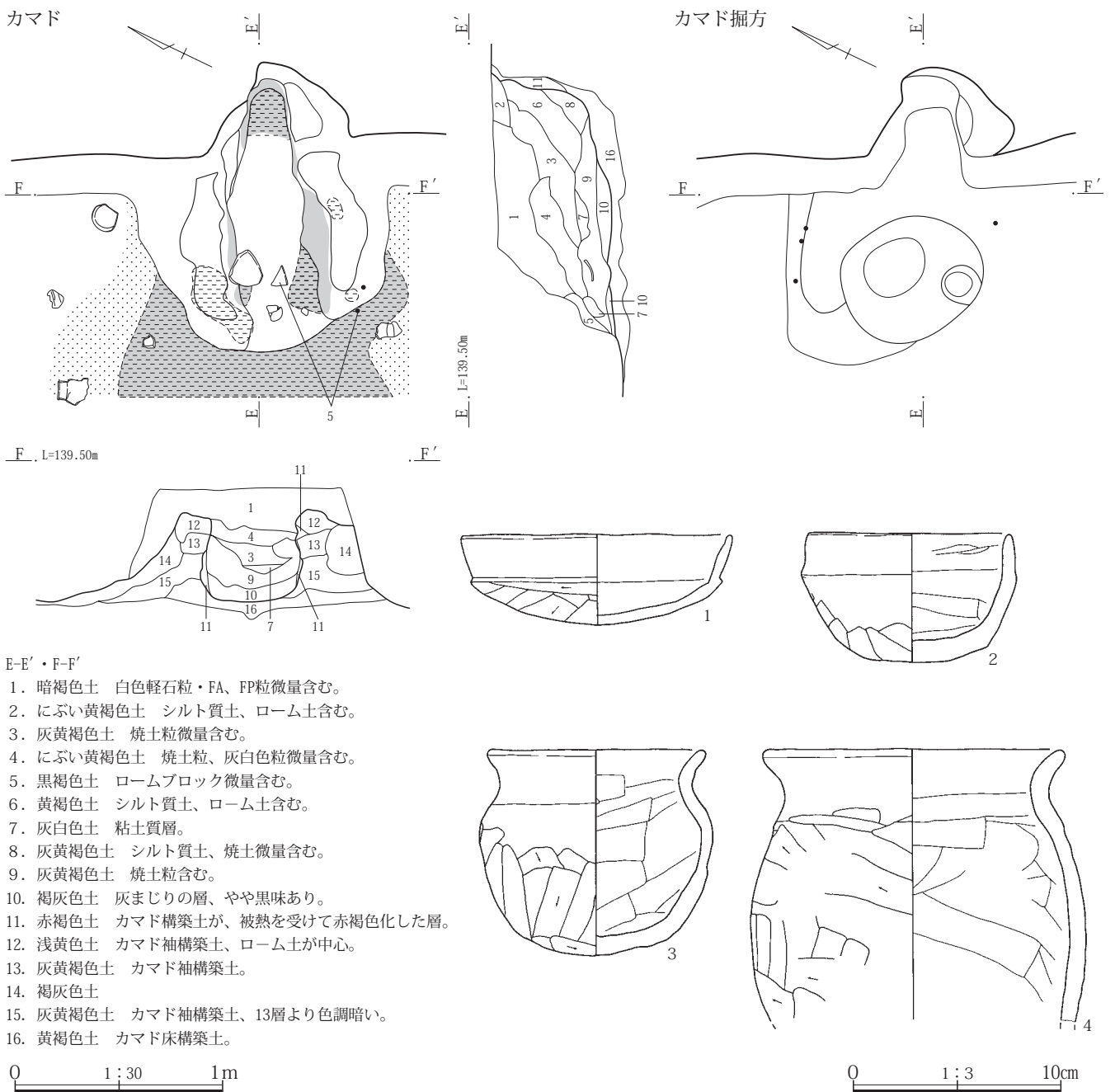
呈し、断面は南側にテラス状の段を有する。規模は長軸0.76m、短軸0.58m、深さ0.65mを測る。内部からは底面より3の土師器小型甕が出土している。

**カマド** 東辺のほぼ中央部に構築されていた。残存状態は焚口や燃烧部から煙道部の天井は壊されていたが、燃烧部側壁は比較的上部まで良好な状態で残存していた。規模は、全長1.40m、全幅1.20m、煙道部長は0.3mほど、燃烧部幅0.52mを測る。焚口から燃烧部、煙道部底面はほぼ平坦で、奥壁はほぼ垂直に立ち上がっていた。燃烧部底面には、灰・炭化物が残存していた。

掘方は燃烧部下に径0.35×0.30mの楕円形状に7cmほど掘り込まれていた。

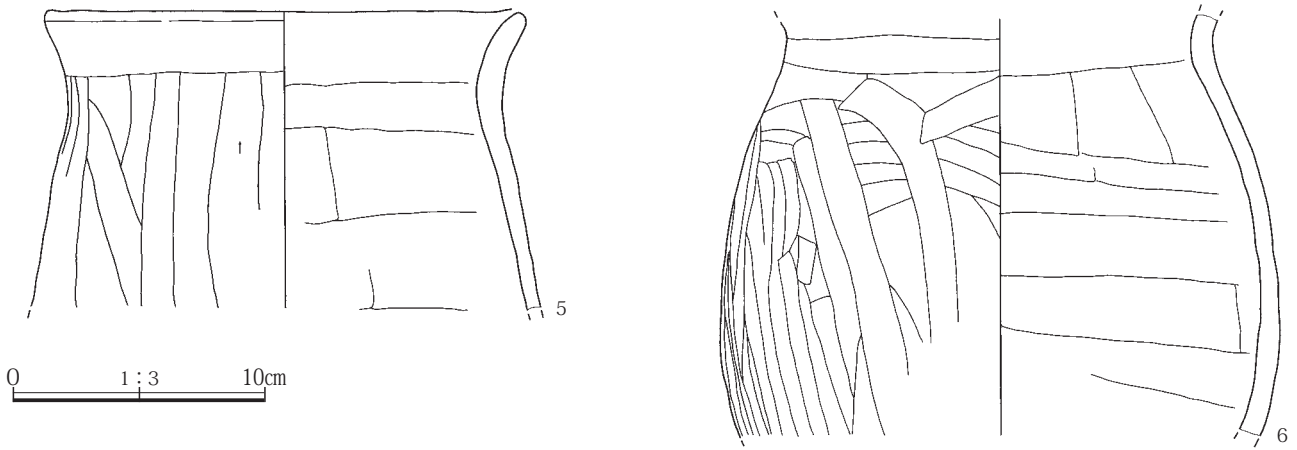
**出土遺物** 図示した遺物では3の土師器小型甕が貯蔵穴から出土している。他には1の土師器杯と6の土師器甕が床面、5の土師器甕はカマドと床面からの出土である。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片10点・小型製品片21点、埴輪片3点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は貯蔵穴や床面より出土した遺物から、6世紀後半に比定できる。



- E-E'・F-F'
1. 暗褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。
  2. にぶい黄褐色土 シルト質土、ローム土含む。
  3. 灰黄褐色土 焼土粒微量含む。
  4. にぶい黄褐色土 焼土粒、灰白色粒微量含む。
  5. 黒褐色土 ロームブロック微量含む。
  6. 黄褐色土 シルト質土、ローム土含む。
  7. 灰白色土 粘土質層。
  8. 灰黄褐色土 シルト質土、焼土微量含む。
  9. 灰黄褐色土 焼土粒含む。
  10. 褐灰色土 灰まじりの層、やや黒味あり。
  11. 赤褐色土 カマド構築土が、被熱を受けて赤褐色化した層。
  12. 浅黄色土 カマド袖構築土、ローム土が中心。
  13. 灰黄褐色土 カマド袖構築土。
  14. 褐灰色土
  15. 灰黄褐色土 カマド袖構築土、13層より色調暗い。
  16. 黄褐色土 カマド床構築土。

第209図 3区5号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(1)



第210図 3区5号竪穴住居出土遺物図(2)

(3) 古墳前期～中期の竪穴住居

1区1号竪穴住居(第211・212図、PL.110・111・173)

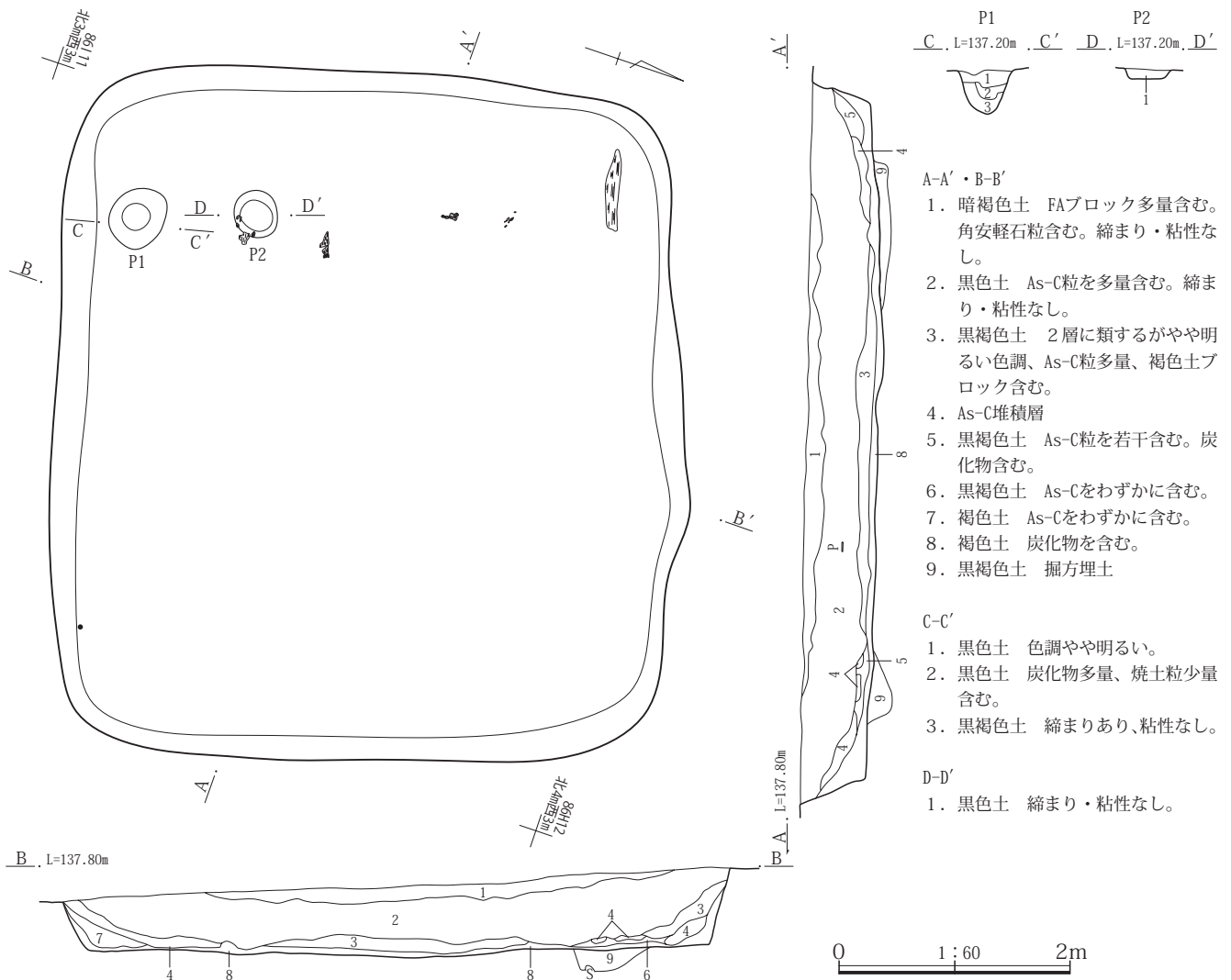
位置 1区調査区南西部、86区H-11・12、I-11・12に位置する。なお、本竪穴住居は舌状台地の緩斜面から

急傾斜地へ移行する地点に立地する。

重複 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

形状 東西方向に長い隅丸長方形を呈す。

規模 長軸5.98m、短軸5.53mを測る。



第211図 1区1号竪穴住居遺構図(1)

**面積** 26.47m<sup>2</sup>

**方位** N-73° -E

**埋没状態** 土層断面では周囲から流れ込んだレンズ状の堆積と埋没途中でのAs-Cの堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 掘方面より2~20cmほど黒褐色土を埋め戻して床面を構築していた。床面の状態は南西部と北西部では15cmほどの高低差がみられ、凹凸も目立っていた。

確認面から床面までの深さは、0.34~0.48mを測る。

**掘方** 全体的に掘削時の凹凸が残る浅い掘り込みがみられたが、西辺から東辺にかけて壁下よりやや内側にコの字状に巡る溝状の掘り込みが検出された。掘り込みは上端0.18~1.85m、下端0.04~0.83m、深さ0.07m~0.18mであった。なお、掘方では遺物の出土はみられなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 北西隅の南辺寄りでP1を検出した。形状は楕円形を呈し、長軸0.56m、短軸0.46m、深さ0.44mを測る。この他にP1の北0.7mの位置でP2を検出したが、これは深さが5cmしかないため柱穴とは断定できなかった。

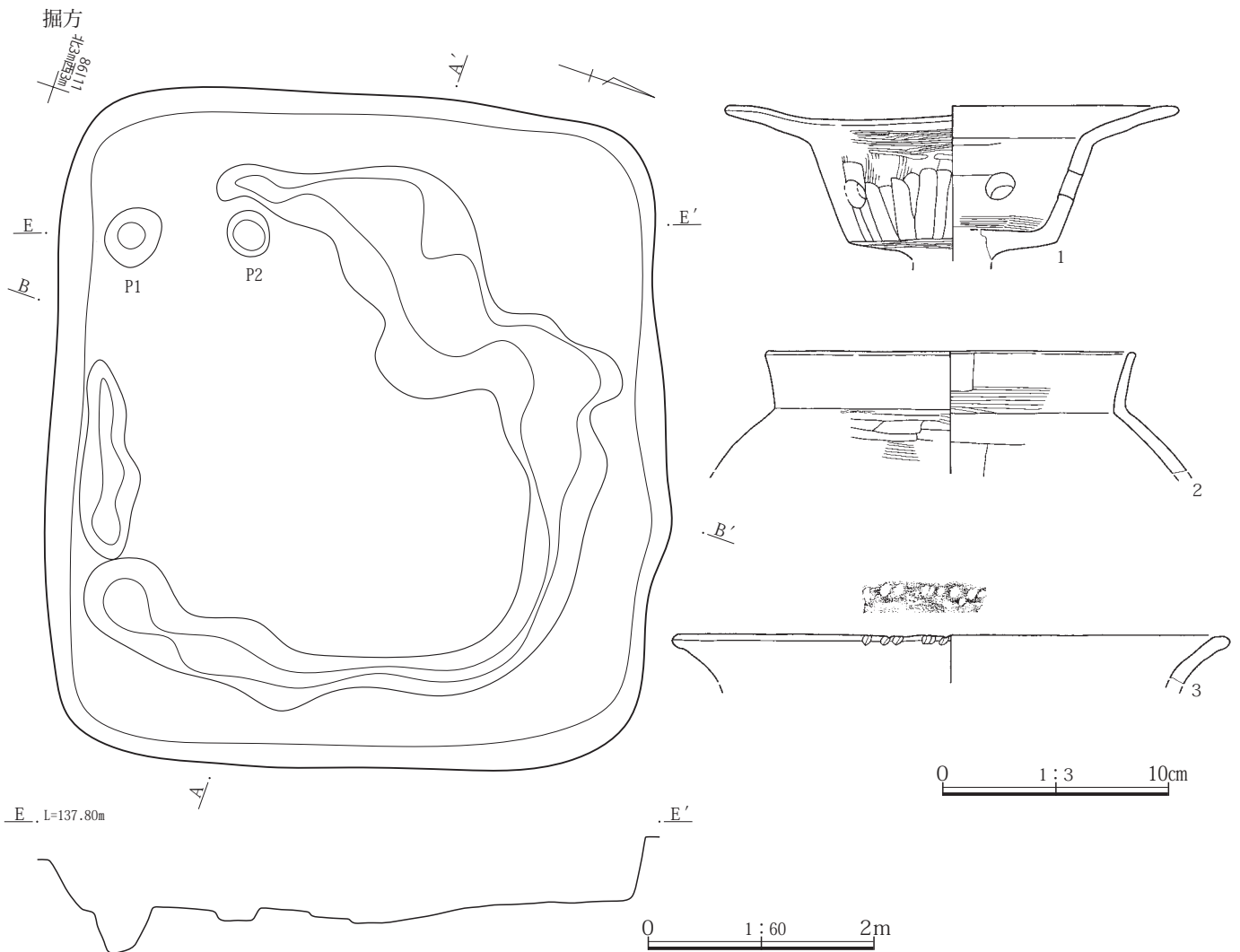
なお、掘方面でも柱穴の痕跡は確認できていない。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**炉** P2の西側で焼土が幅10cmほどで径40cmの環状に巡る箇所を検出したが、炉とは断定できなかった。

**出土遺物** 図示した遺物は器台1点と甕2点であるが、この3点は埋没土中からの出土で本竪穴住居に共伴するとは断定できなかった。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片30点・小型製品片2点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は、共伴する遺物が出土していないが、埋没土階層にAs-Cが堆積していることから3世紀後半に比定できる。



第212図 1区1号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図

1区2号竪穴住居(第213～215図、PL.111・112・173)

**位置** 1区調査区南西部1号竪穴住居の北、86区G-13・14、H-13～15、I-14に位置する。なお、本竪穴住居は台地の縁辺に立地する。

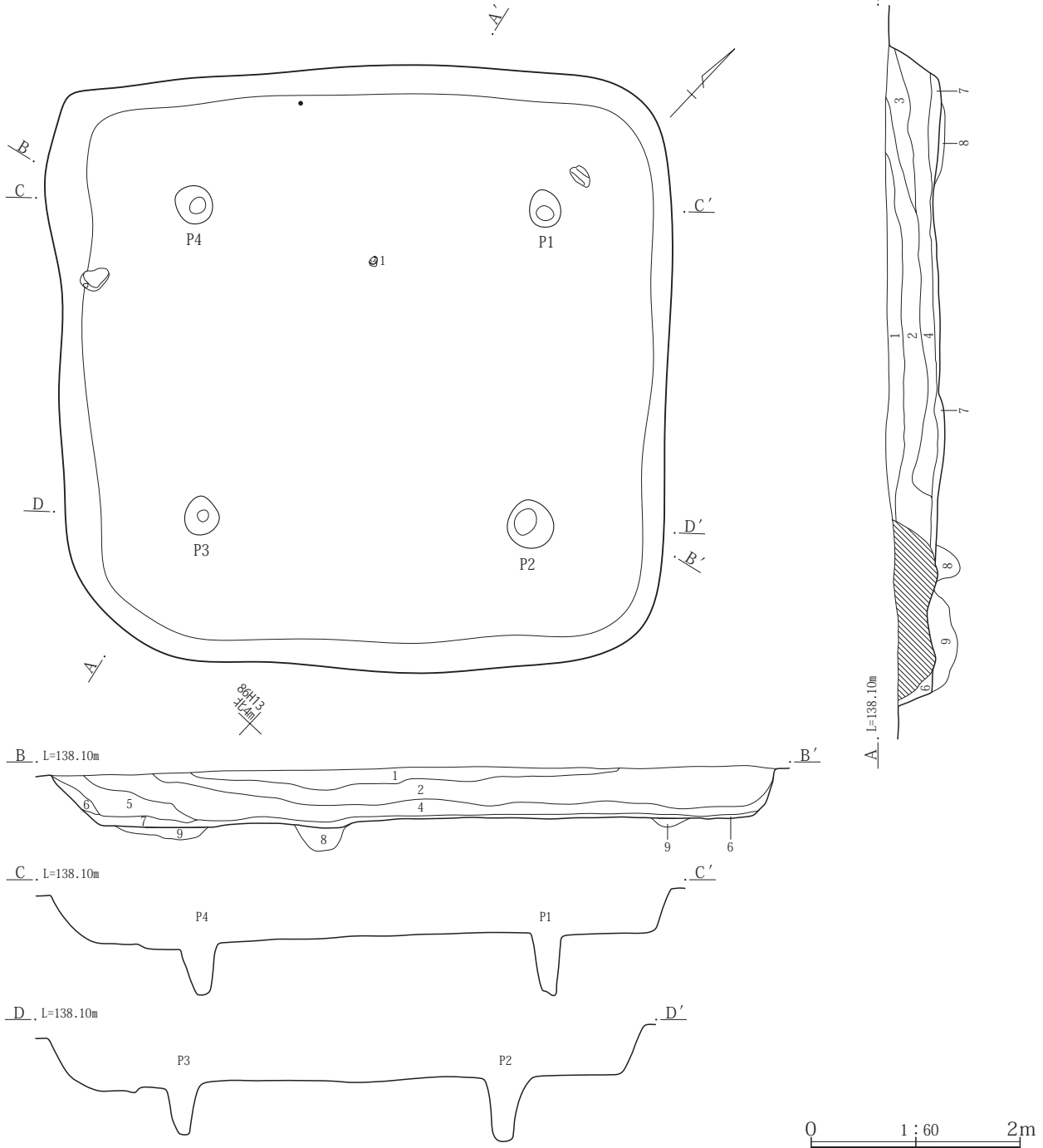
**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地

である。

**形状** 東西・南北方向とも同じ距離であるが、北西角がほぼ直角、南西角が丸みの大きい隅丸正方形を呈す。

**規模** 長軸5.80m、短軸5.80mを測る。

**面積** 26.52㎡



- A-A'・B-B'
1. 黒褐色土 色調やや明るい。As-C粒微量、FAブロック含む。粘性・縮まりなし。
  2. 黒色土 As-C粒やや多い。粘性・縮まりなし。
  3. 黒褐色土 2に類似する。2よりAs-Cが少ない。
  4. 黒褐色土 2層に類するが、As-C粒少ない。黄色土をブロック状に含む。

5. 黒色土 As-C粒多量、黄色土ブロック微量含む。
6. 黒褐色土 As-C粒少量含む、色調は褐色味が強い。
7. 黒褐色土 As-C粒少量含む。下部黄色土ブロック多量含む。
8. 黒色土 As-C粒含み、色調やや褐色味がかかる。粘性・縮まりなし。1号床下土坑埋土。
9. 暗褐色土 黒色土ブロック微量含み、As-C粒少量含む。

第213図 1区2号竪穴住居遺構図(1)

**方位** N-45°-W

**埋没状態** 土層断面では不自然な点がみられるが、標高の高い方から流れ込んだとみられるレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 中ほどは地山をそのまま踏み固めているが、周縁部は10cmほど暗褐色土を埋め戻して構築している。床面の状態はほぼ平坦であるが、周縁部は細かい凹凸が多くみられた。なお、周縁部に対して中央部はやや盛り上っていた。

確認面から床面までの深さは、0.45~0.50mを測る。

**掘方** 壁下から10~20cmほど内側に溝状に巡る掘り込みを検出した。規模は、上端0.18~1.25m、下端0.12~0.57m、深さ0.05~0.22mである。

また、中央よりやや北西角寄りで床下土坑1を検出した。形状は楕円形を呈し、規模は長軸1.17m、短軸0.50m、深さ0.23mを測る。なお、内部からは遺物などは出土していない。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 竪穴住居平面の対角線上、各辺から1.2~1.3mの

位置で4本を検出した。各柱穴の形状と規模は次のとおりである。

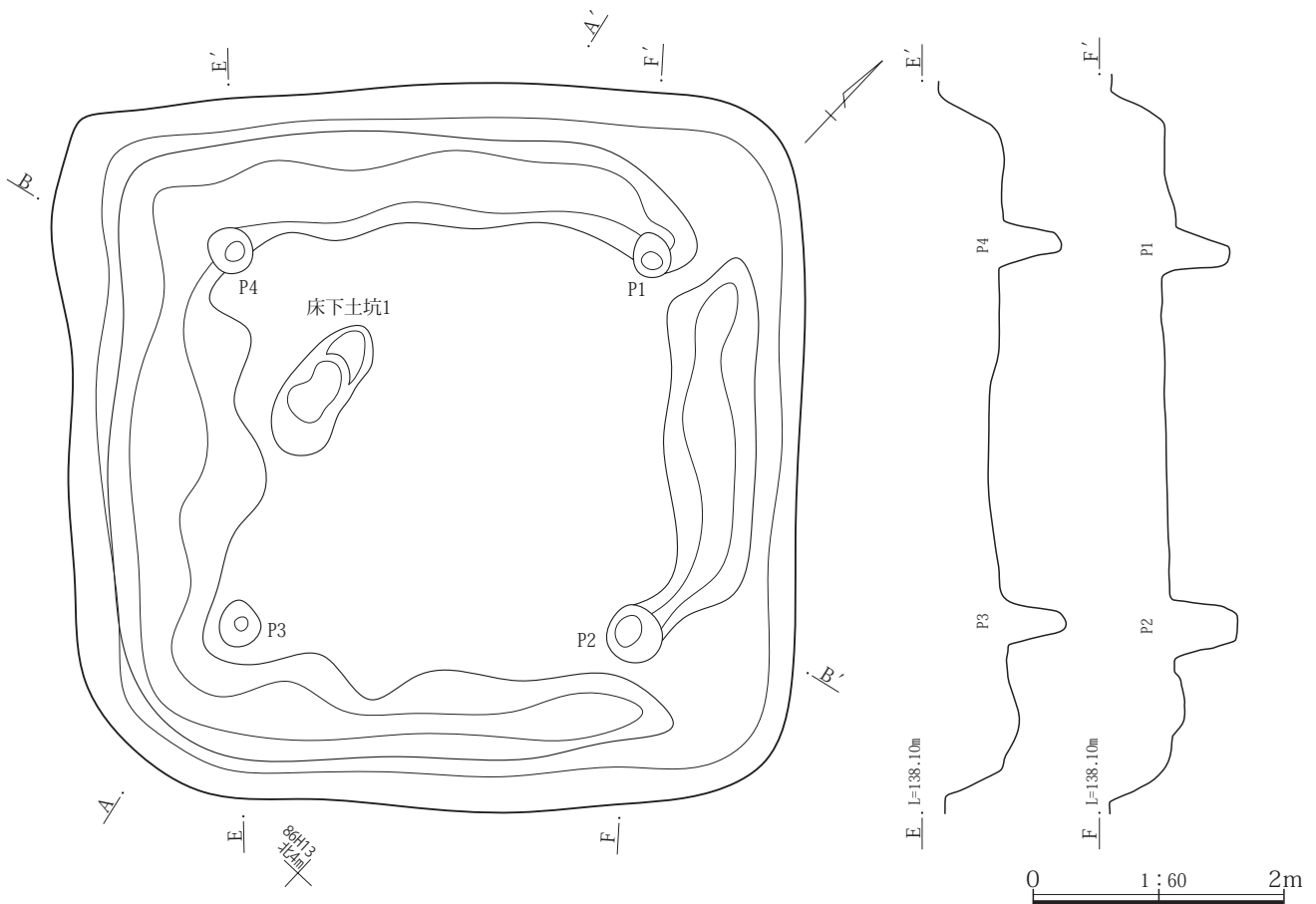
P 1は楕円形、長軸0.36m、短軸0.29m、深さ0.62m、  
 P 2は楕円形、長軸0.46m、短軸0.43m、深さ0.63m、  
 P 3は楕円形、長軸0.37m、短軸0.32m、深さ0.55m、  
 P 4は楕円形、長軸0.37m、短軸0.35m、深さ0.54mを測る。柱穴間の距離は、P 1~P 2が3.0m、P 2~P 3間が3.1m、P 3~P 4間が2.95m、P 4~P 1間が3.3mとほぼ方形の配置であった。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

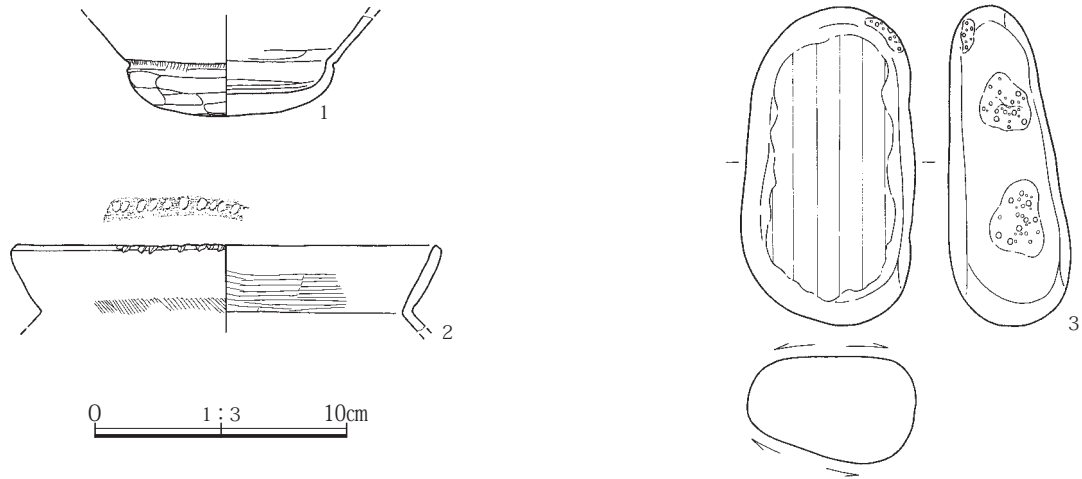
**炉** 床面を精査したが、焼土が検出されていないことから設置されなかったとみられる。

**出土遺物** 図示した遺物は埴と甕の各1点と弧編石の1点であった。このうち、1の埴が床面からの出土である。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片14点・小型製品片16点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は床面から出土した遺物から4世紀後半に比定できる。



第214図 1区2号竪穴住居遺構図(2)



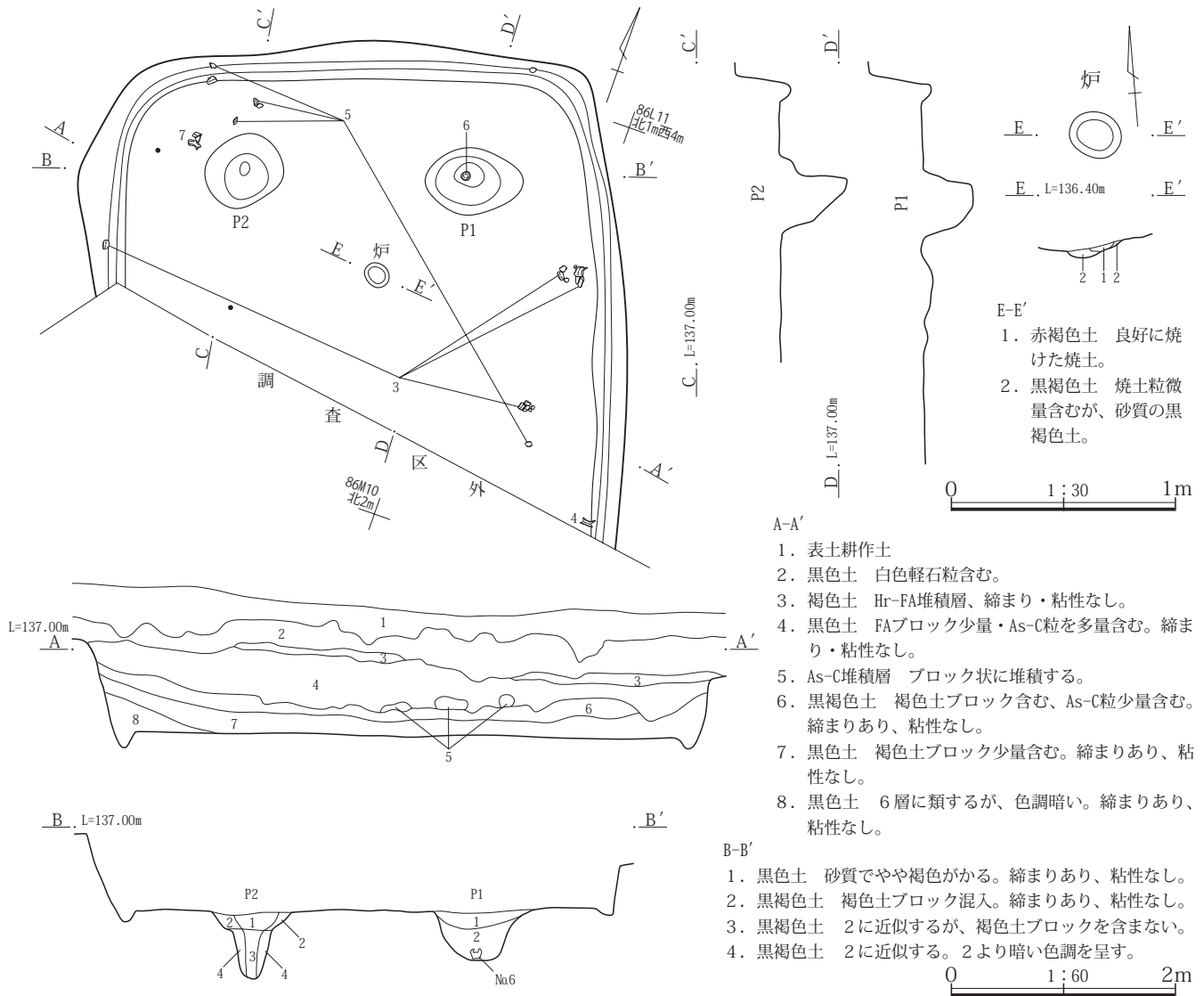
第215図 1区2号竪穴住居出土遺物図

1区3号竪穴住居(第216・217図、PL.112・173・174)

位置 1区調査区西南端、86区L-10・11、M-10・11に位置する。本竪穴住居の南半2分の1は調査対象外に

存在するため全貌は不明である。なお、1区調査区の多くの竪穴住居は小規模な谷地を挟んで立地する。

重複 調査範囲内では、他遺構との重複関係は確認され



第216図 1区3号竪穴住居遺構図

ず、単独での占地である。

**形状** 4本の柱穴を有していたと想定すると、東辺にやや張を有する長方形を呈する。

**規模** 調査区内では長軸4.74m、短軸4.20mを測る。なお、推定される長軸は5.5m前後であるとみられる。

**面積** 調査区内では11.91㎡を測る。

**方位** N-69°-E

**埋没状態** 土層断面では壁際に三角堆積をした後、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。なお、本竪穴住居埋没土の中位にはAs-Cがブロック状に、上位では部分的ではあるが、Hr-FAの堆積が観察されている。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めている。床面の状態は凹凸が多くみられるがほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.34~0.64mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘削されていない。

**壁溝** 上端0.18~0.22m、下端0.04~0.10m、深さ0.08~0.15mを測る。

**柱穴** 北東隅、北西隅寄りで2本を検出した。想定される住居の規模からみると、対角線上よりやや内側に位置

するとみられる。P 1は、楕円形を呈し、長軸0.88m、短軸0.60m、深さ0.35mを測る。P 2は、楕円形を呈し、長軸0.70m、短軸0.66m、深さ0.51mを測る。柱穴間の距離は、P 1~P 2間が2.1mである。

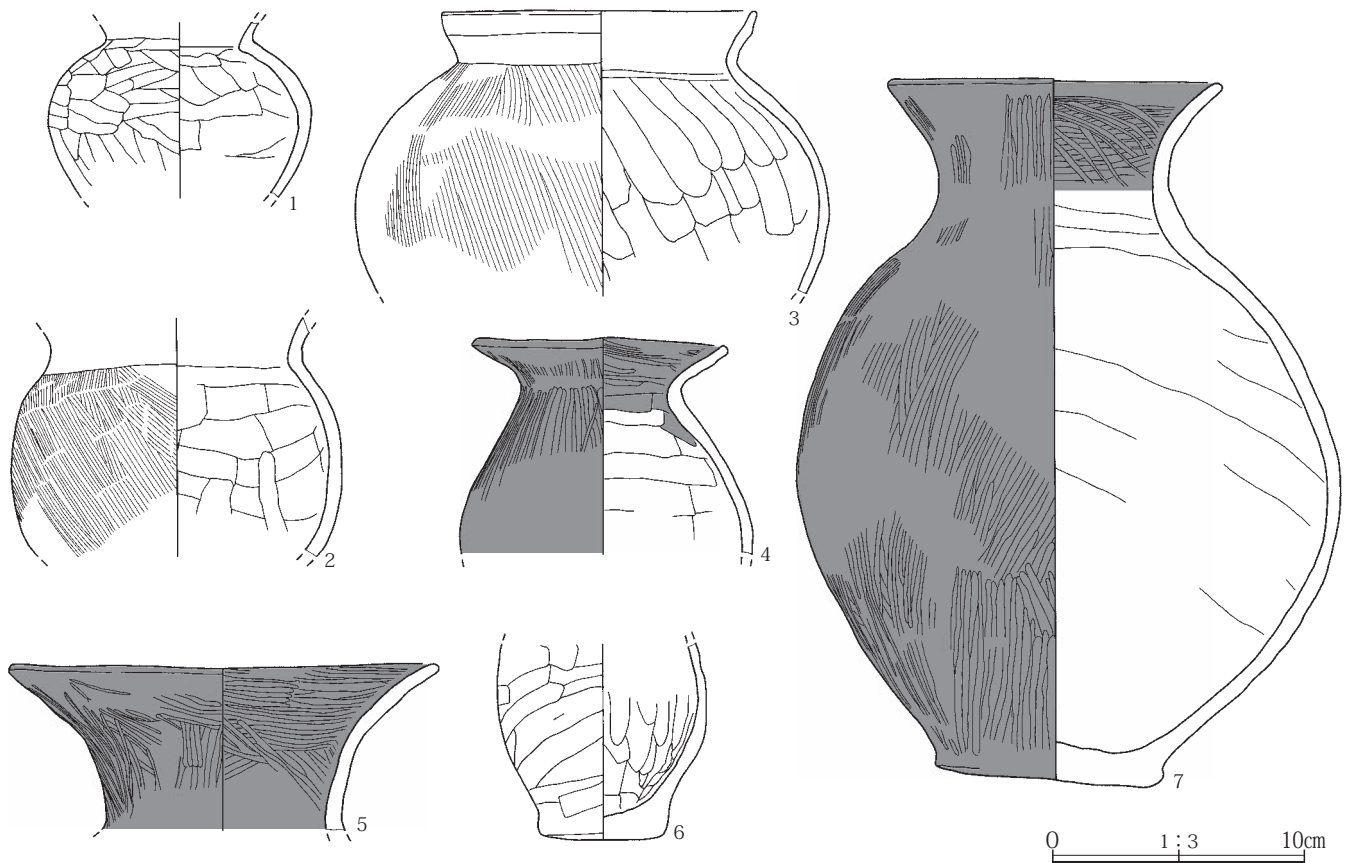
柱痕については、P 2の土層断面下半で12cm前後の痕跡が観察されたが、上半の様相から抜き取りが行われたとみられる。

**貯蔵穴** 調査区内では、検出されなかった。

**炉** 住居中央北寄りの柱穴間に近い位置から検出した。形態は地床炉で平面形状は楕円形を呈し、火床はわずかに掘り窪められていた。被熱範囲は長軸0.24m、短軸0.20mである。炉面では焼土が確認されており、被熱の深さは最大で0.08mであった。

**出土遺物** 図示した遺物は7点である。このうち、6の土師器壺が柱穴P 1底面、7の土師器壺が床面、3の土師器甕と5の土師器壺が住居内の広範囲から散乱した状態で出土している。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片37点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は柱穴や床面から出土した遺物やAs-Cの堆積から3世紀後半に比定できる。



第217図 1区3号竪穴住居出土遺物図



1区4号竪穴住居(第218～221図、PL.112・113・174・175)

**位置** 1区調査区西端中ほど、86区I-16、J-15・16、K-16に位置する。本竪穴住居の北西部分は攪乱によって欠くため、全貌は明らかではない。なお、本竪穴住居は東側に位置する谷地へ移行する傾斜地に立地する。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。なお、本竪穴住居の南側では、As-Cで埋没した畠を検出している。本竪穴住居でのAs-Cの堆積状況から

見ると本竪穴住居と畠は同時に堆積していた可能性が想定され、周堤帯付近まで耕作地として利用されていたとみられる。

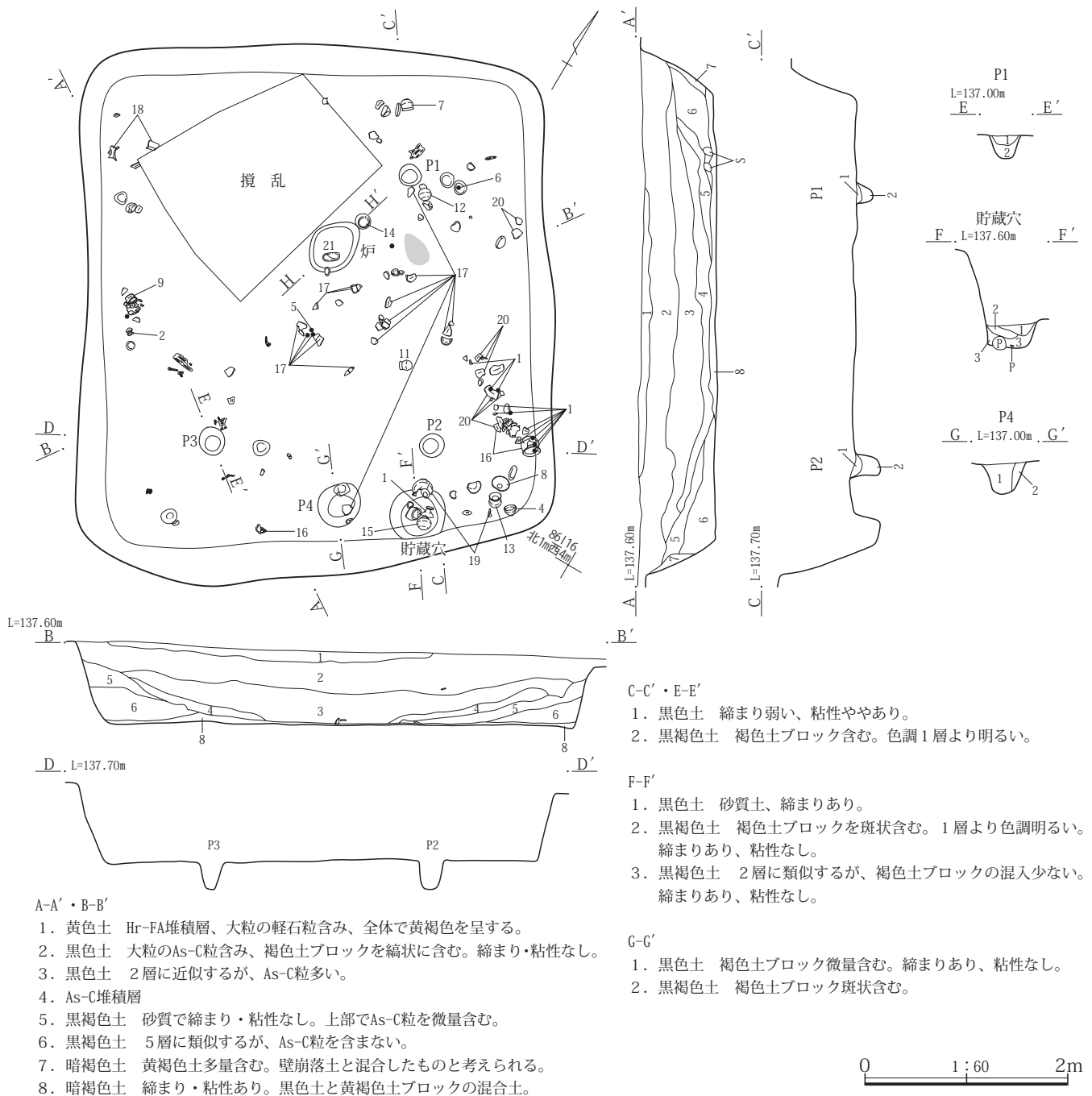
**形状** 北辺4.6m、東辺4.5m、南辺4.6m、西辺4.9mと各辺長に差がみられ、南辺がやや張る隅丸台形を呈す。

**規模** 長軸5.28m、短軸4.62mを測る。

**面積** 18.84㎡

**方位** N-32°-W

**埋没状態** 土層断面では壁際に三角堆積をした後、レン



第218図 1区4号竪穴住居遺構図(1)

ズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。なお、本竪穴住居埋没土の下位にはAs-Cが流れ込むように、上位ではHr-FAの堆積が観察されている。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めている。床面の状態は若干の凹凸はみられるが、ほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.67～0.79mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は行われていなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 竪穴住居の対角線上に近い位置から3本とP2とP3間の外側で1本の計4本を検出した。なお、P4については規模から疑問視する点もみられたが、土層断面で柱痕が確認できたので柱穴と認定した。また、攪乱で欠く部分でも対角線上に近い位置とP4と対になる柱穴が存在したと想定される。本竪穴住居柱構造としては四角形に4本の柱穴を配置し、梁間の外側に棟持ち柱的にP4の柱を設定したと想定される。各柱穴の形状と規模は次のとおりである。P1は楕円形、長軸0.23m、短軸0.21m、深さ0.17m。P2は楕円形、長軸0.25m、短軸0.23m、深さ0.26m。P3は楕円形、長軸0.30m、短軸0.26m、深さ0.30m。P4は楕円形、長軸0.46m、短軸0.40m、深さ0.40mを測る。柱穴間の距離は、P1～P2間が2.65mである。P2～P3間が2.15mである。

柱痕はP1～P3では確認できなかったが、P4では土層断面で径10cm前後の柱痕を確認した。P4は柱痕の

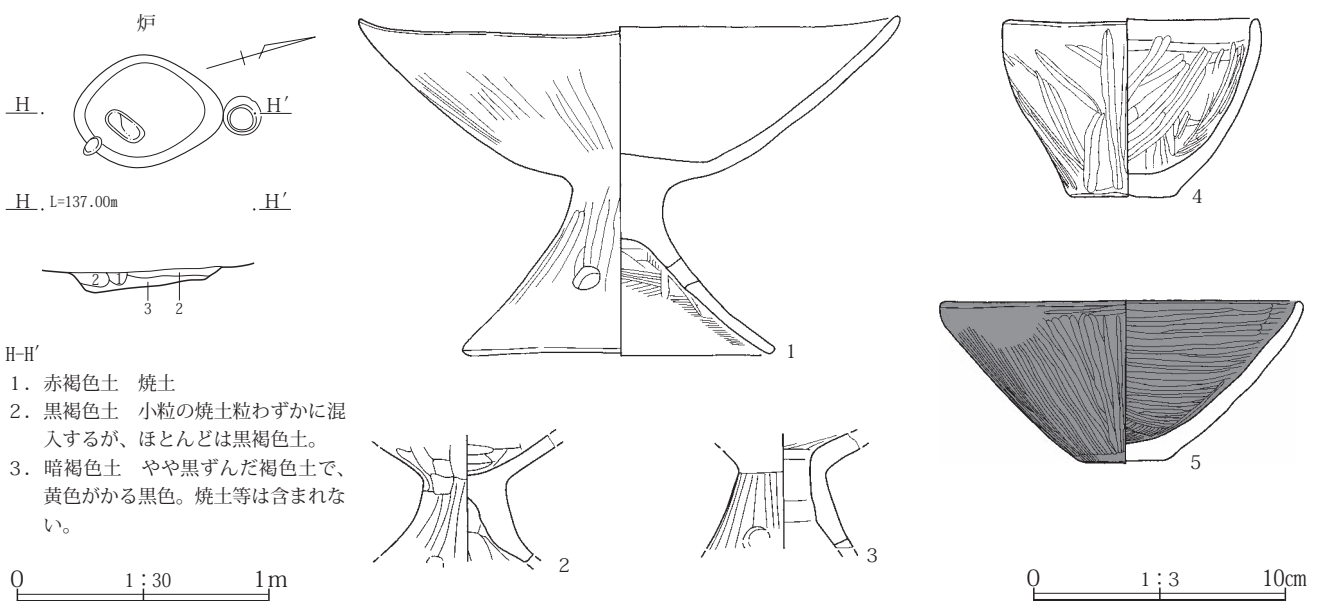
状態から、住居廃棄時に抜き取りは行われなかったとみられる。

**貯蔵穴** 南辺壁際で検出した。形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.56m、短軸0.54m、深さ0.28mを測る。内部からは1の高杯、15の壺が出土している。

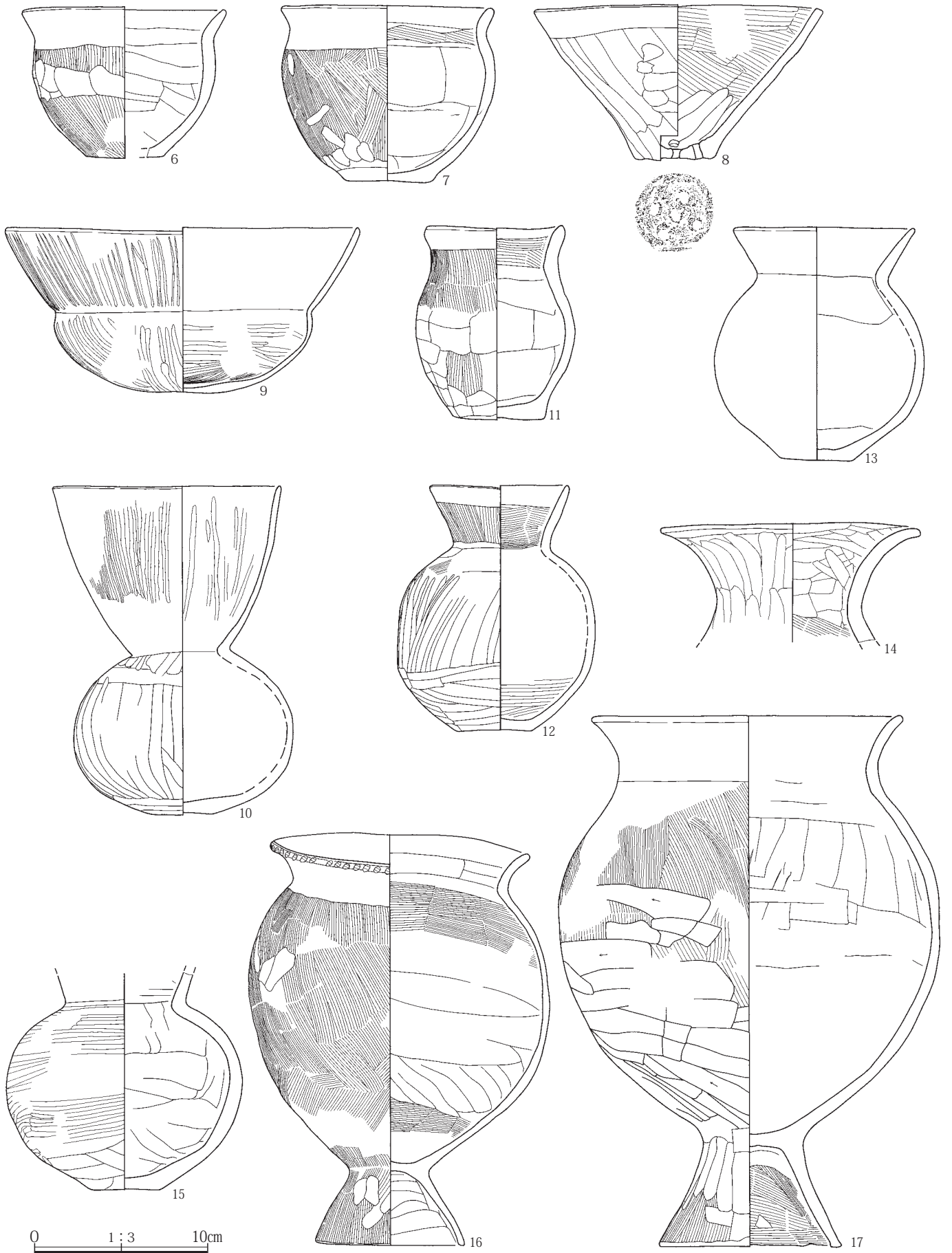
**炉** 住居中央やや北寄り、柱穴間の内側で検出した。形態は21の枕石を伴う地床炉で、形状は楕円形を呈し、火床は平坦で掘り窪みはみられない。被熱範囲は長軸0.60m、短軸0.46mを測る。焼土が確認されており、被熱の深さは最大で10cmであった。

**出土遺物** 図示した遺物は土器が20点と石製品1点である。このうち、1の高杯と15の壺は貯蔵穴からの出土であるが、1については貯蔵穴内から脚部、住居南東部床面から杯身部が出土している。この他、本竪穴住居に相伴するとみられる遺物には床面から出土した6の鉢、8の有孔鉢、11・12の小型甕、16・17の台付甕、19・20の甕がある。なお、床面から出土した遺物には1の高杯のように広範囲から出土したものが多くみられた。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片103点・小型製品片11点が出土している。また、石製品では磨石・二次加工痕のある礫が出土していた。

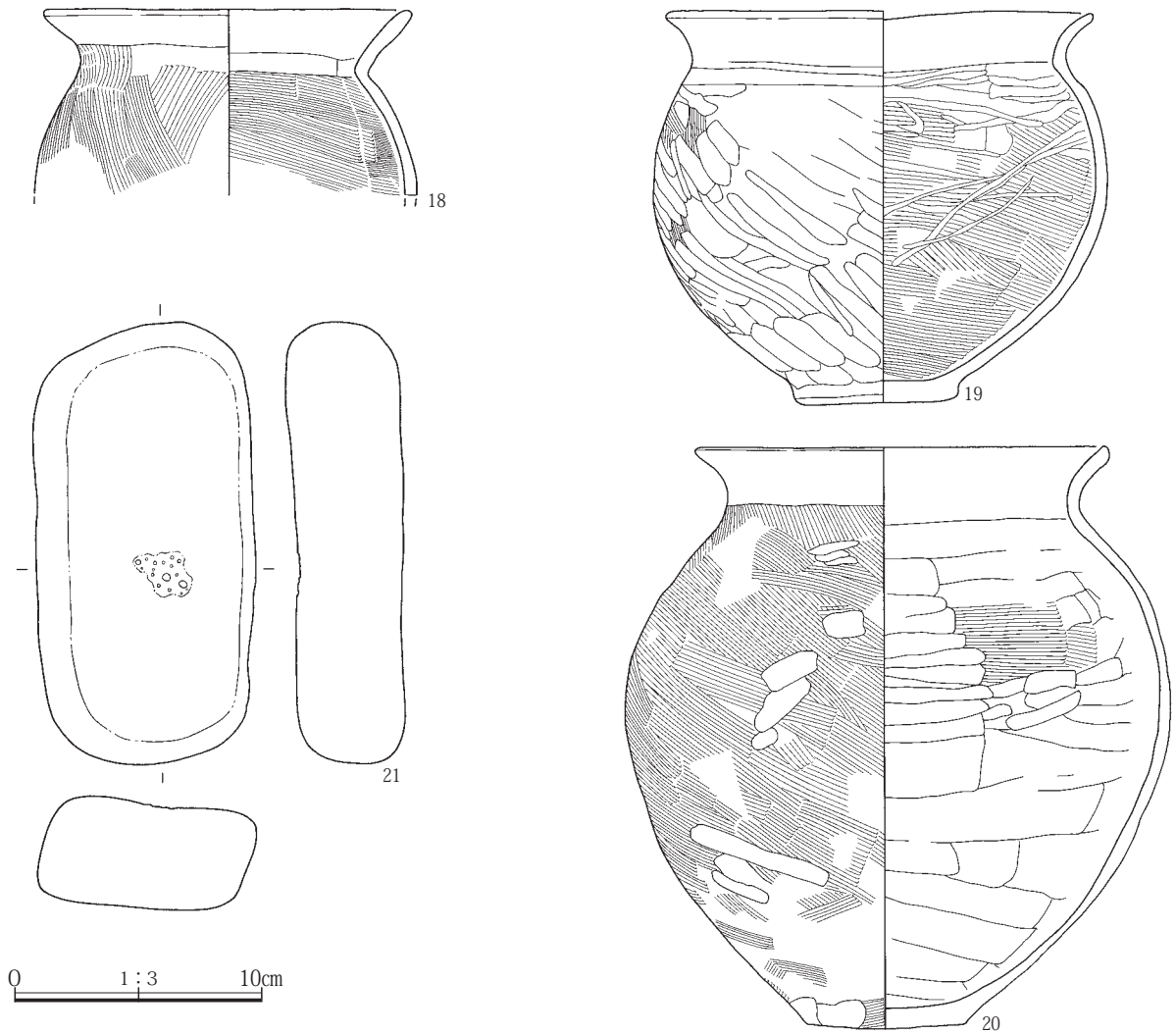
**所見** 本竪穴住居の時期は、貯蔵穴や床面から出土した遺物や土層断面でのAs-Cの堆積状態から3世紀後半に比定できる。



第219図 1区4号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(1)



第220図 1区4号竪穴住居出土遺物図(2)



第221図 1区4号竪穴住居出土遺物図(3)

1区5号竪穴住居(第222～223図、PL.114・175・176)

**位置** 1区調査区中ほどよりやや西寄り、86区E-15・16、F-15・16、G-16に位置する。なお、本竪穴住居は台地上に立地する。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

**形状** 北辺は南辺に比べ0.2mほど短いが、ほぼ長方形を呈す。

**規模** 長軸6.00m、短軸4.60mを測る。

**面積** 24.55㎡

**方位** N-70°-E

**埋没状態** 土層断面では壁際に三角堆積した後、中ほどはレンズ状の堆積が観察できることから、自然埋没と想定される。なお、埋没土上位にAs-Cがブロック状に堆積しているのが観察された。

**床面** 地山の暗褐色土をそのまま踏み固めていた。床面の状態はやや大きな凹凸が目立つが、ほぼ平坦であった。

確認面から床面までの深さは、0.52～0.76mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は、構築されていなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 南辺の南東角から1.2m西寄りの壁際に検出した。形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.60m、短軸0.44m、深さ0.24mを測る。内部からは7の土師器甕が出土している。

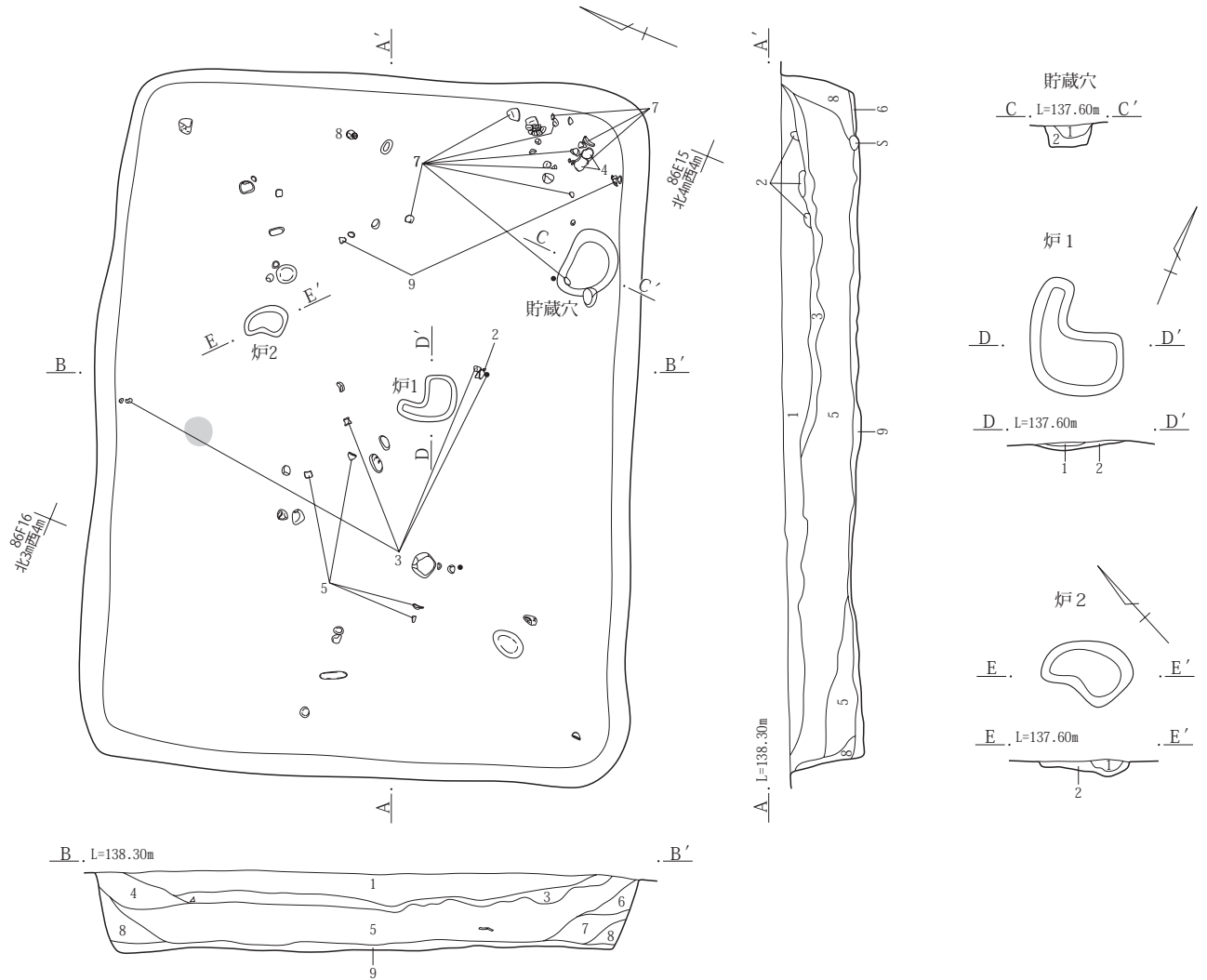
**炉** 中央やや南寄りで炉1を、やや北東寄りで炉2を検出した。炉1は、形態は地床炉で、形状が不整形を呈し、火床は平坦で掘り窪みはみられない。被熱範囲は長軸0.48m、短軸0.42mを測る。焼土が確認されており、

被熱の深さは最大で0.06mであった。炉2は、形態が地床炉で、形状が三日月状を呈し、火床は平坦で掘り窪みはみられない。被熱範囲は長軸0.40m、短軸0.28mを測る。焼土が確認されており、被熱の深さは最大で0.07mであった。

**出土遺物** 図示した遺物には高杯、器台、壺、甕、台付

甕など11点がある。これらの遺物の多くは床面よりやや上位からの出土で確実に共伴するものは少ない。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片93点・小型製品片25点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は出土した遺物や土層断面でのAs-Cの堆積状態から3世紀後半に比定できる。



A-A'・B-B'

1. 黒色土 As-C粒多量含む。
2. As-C堆積層
3. 黒色土 As-C粒少量含む。
4. 黒色土 As-Cを含まず、黄色砂質土ブロックを含む。
5. 黒褐色土 黄褐色砂質土ブロック多量含む。
6. 黒色土 含有物はほとんど見られない。
7. 黒褐色土 やや黒味のある土で、黒色土・褐色土の混成土。
8. 黄褐色土 褐色土をブロック状に含む。
9. 褐色土 褐色土ブロック・黒色土ブロックの混成土、炭化物多量含む。

C-C'

1. 褐色土 2～3cmの黄色土ブロック含む。砂質土。
2. 黒色土 1層のような黄色土ブロックは含まない砂質土。

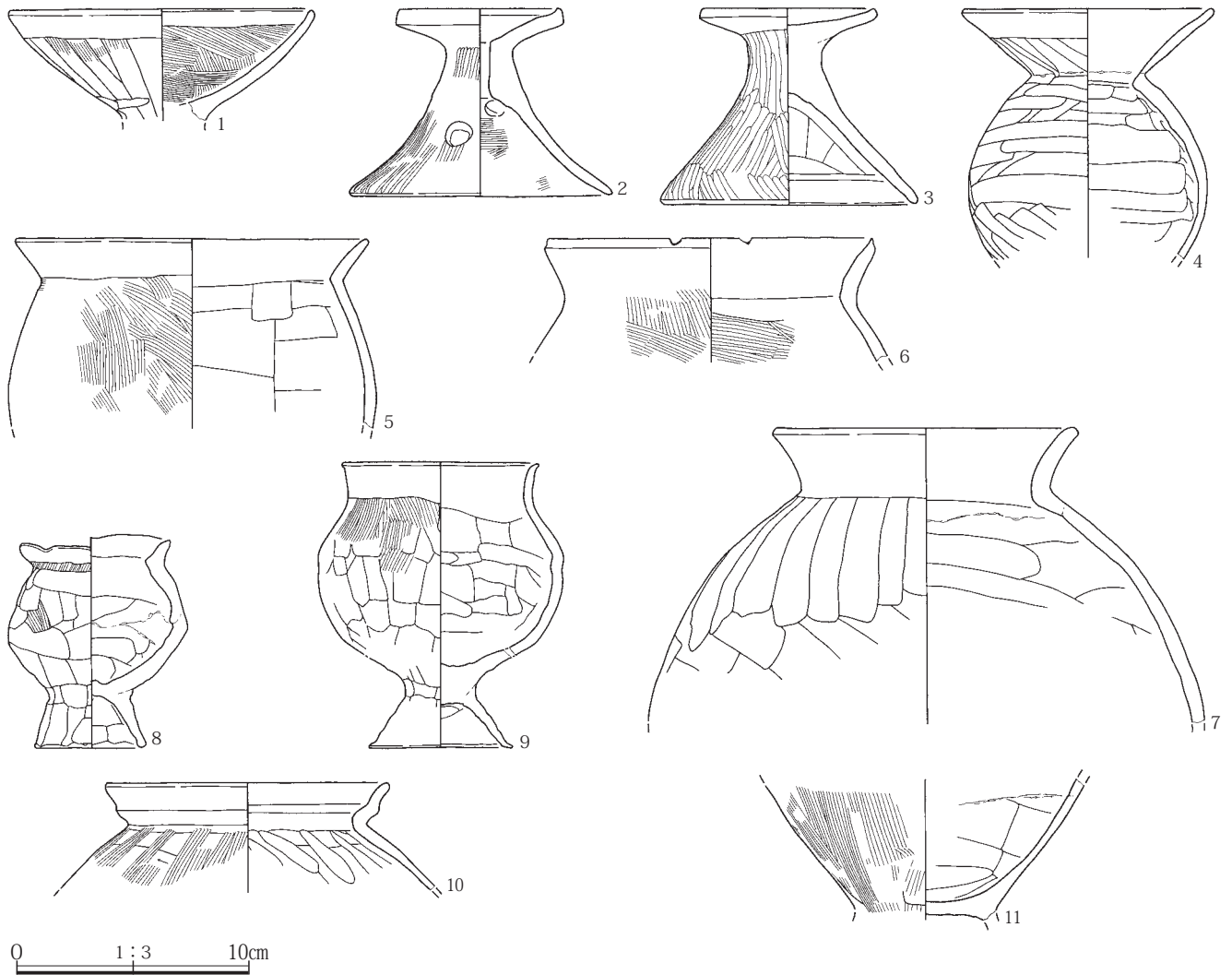
D-D'・E-E'

1. 明赤褐色土 良好に焼けた焼土。
2. 暗赤褐色土 やや黒色めいた焼土。

0 1:60 2m

炉1・炉2  
0 1:30 1m

第222図 1区5号竪穴住居遺構図



第223図 1区5号竪穴住居出土遺物図

1区6号竪穴住居(第224図、PL.114・115・176)

**位置** 1区調査区のほぼ中ほど、86区C-14・15、D-14・15、E-14に位置する。なお、本竪穴住居は台地上に立地する。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

**形状** 各辺長に若干差がみられるが、ほぼ東西に長い長方形を呈す。

**規模** 長軸5.25m、短軸4.75mを測る。

**面積** 22.03m<sup>2</sup>

**方位** N-110°-E

**埋没状態** 確認面から床面までが浅いため明確ではないが、土層断面では北西方向から土砂が流れ込んだ様子が観察できることから、自然埋没と想定される。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めていた。床面の

状態は多くの凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.01~0.27mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は、構築されていなかった。

**壁溝** 東辺中ほどの壁下で全長0.8mほどを検出した。規模は上端0.15~0.23m、下端0.05~0.12m、深さ0.08mを測る。

**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 南東隅の南辺壁際で検出した。形状は楕円形状を呈し、規模は長軸0.58m、短軸0.54m、深さ0.64mを測る。内部からは遺物の出土はみられなかった。

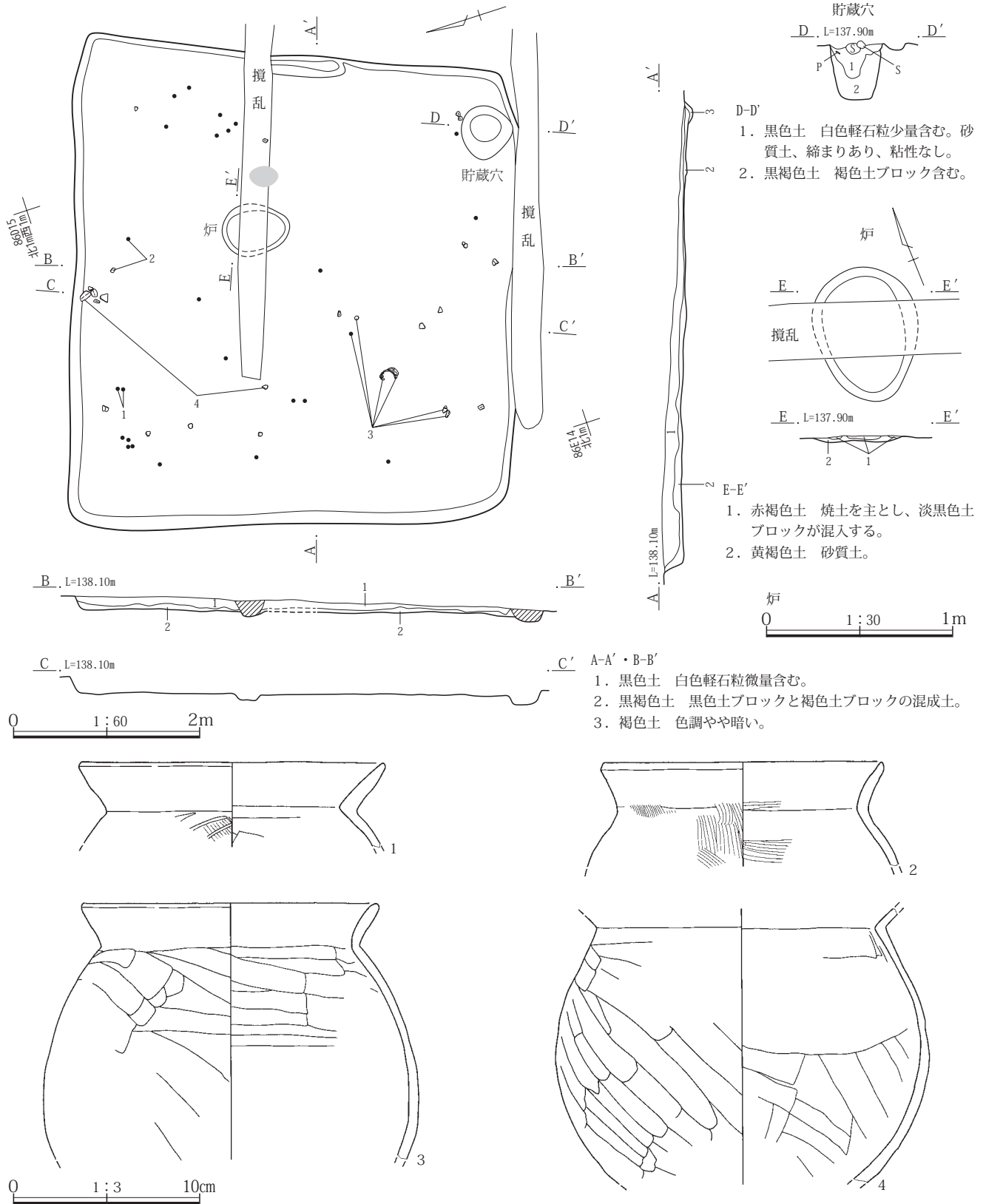
**炉** 中央やや北東寄りにて検出した。後世の攪乱により、中央部を欠く。形態は地床炉で、形状は楕円形を呈し、火床は平坦で掘り窪みはみられない。被熱範囲は長軸0.72m、短軸0.56mを測る。焼土が確認されており、

床被熱の深さは最大で0.06mであった。

**出土遺物** 図示した遺物は土師器甕が4点である。これらの土器は床面からの出土である。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片183点・小型製品片14点が出土

している。

**所見** 本竪穴住居の時期は床面から出土した遺物から5世紀前半に比定できる。



第224図 1区6号竪穴住居遺構図・出土遺物図

1区7号竪穴住居(第225図、PL.115)

**位置** 1区調査区南東隅、85区S-8、T-8に位置する。本竪穴住居は調査できた範囲が北辺の一部だけで、大部分は調査区対象外に存在するため全貌は不明である。

**重複** 調査範囲内では、他遺構との重複関係は確認されず、単独での占地である。

**形状** 調査範囲内からは隅丸長方形または隅丸方形と想定される。

**規模** 調査範囲内では北辺長が2.70mを測る。

**面積** 調査範囲がごくわずかなため計測不能であった。

**方位** 南北方向に主軸をとるとほぼ北を指す。

**埋没土** 土層断面では西側から土砂が流れ込んだ様子が観察できることから、自然埋没と想定される。埋没土下位にはAs-Cの堆積が確認されている。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めていた。床面の状態は調査範囲がわずかなため不明である。

確認面から床面までの深さは、0.60~0.70mを測る。

**掘方** 調査範囲内では地山を床面としており、掘方は、構築されていなかった。

**壁溝** 調査範囲内では、検出されなかった。

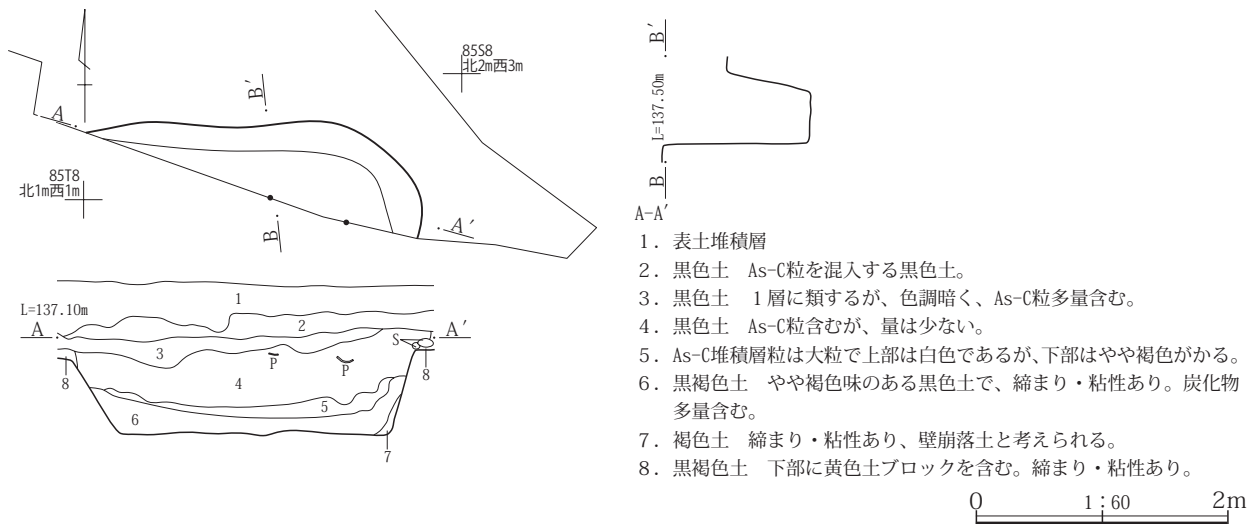
**柱穴** 調査範囲内では、検出されなかった。

**貯蔵穴** 調査範囲内では、検出されなかった。

**炉** 調査範囲内では、検出されなかった。

**出土遺物** 図示可能な遺物は出土していない。出土遺物は土師器大型製品片1点・小型製品片4点である。

**所見** 本竪穴住居の時期は埋没土に堆積しているAs-Cの状態から3世紀後半に比定できるが、床面直上には堆積していない。



1. 表土堆積層
2. 黒色土 As-C粒を混入する黒色土。
3. 黒色土 1層に類するが、色調暗く、As-C粒多量含む。
4. 黒色土 As-C粒含むが、量は少ない。
5. As-C堆積層粒は大粒で上部は白色であるが、下部はやや褐色がかかる。
6. 黒褐色土 やや褐色味のある黒色土で、締まり・粘性あり。炭化物多量含む。
7. 褐色土 締まり・粘性あり、壁崩落土と考えられる。
8. 黒褐色土 下部に黄色土ブロックを含む。締まり・粘性あり。

第225図 1区7号竪穴住居遺構図

1区8号竪穴住居(第226図、PL.115・176)

**位置** 1区調査区南東部、85区R-9・10、S-9・10に位置する。本竪穴住居は西側3分の2は用地買収の都合で21年度、残りの部分は25年度に発掘調査を実施した。なお、北西部は重複する遺構、東辺の南寄りを攪乱によって欠くため全貌は不明である。

**重複** 北西部で1号土坑と重複する。新旧関係は本竪穴住居の方が古い。

**形状** 北東角はほぼ直角、南西角はやや丸みを持つ隅丸方形を呈す。

**規模** 長軸5.38m、短軸5.14mを測る。

**面積** 23.52m<sup>2</sup>

**方位** N-22°-E

**埋没状態** 確認面から床面までが浅いため、土層断面の観察からは不明瞭であるが、北辺際で埋没を始めた時期にAs-Cの堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めていた。床面の状態は若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。

確認面から床面までの深さは、0.03~0.34mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は、構築されていなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。



貯蔵穴 検出されなかった。

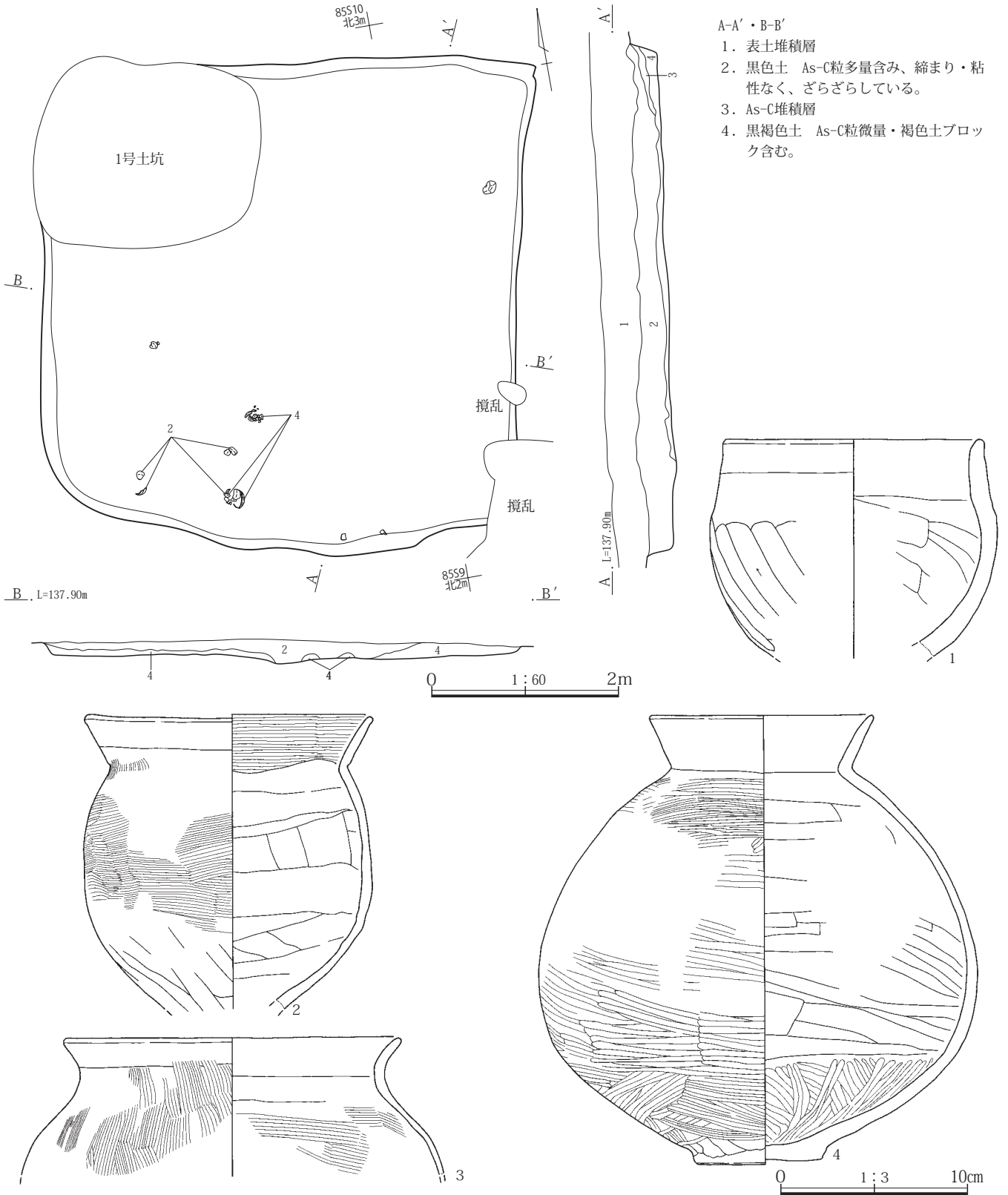
炉 検出されなかった。

出土遺物 図示した遺物は土師器鉢・甕・壺の4点である。このうち2の甕と4の壺が床面からの出土である。

図示した以外の遺物では、土師器大型製品片37点が出土

している。

所見 本竪穴住居の時期は床面から出土した遺物や埋没土下位にAs-Cが、堆積していることから3世紀後半に比定できる。



第226図 1区8号竪穴住居遺構図・出土遺物図

1区11号竪穴住居(第227・228図、PL.116・176)

**位置** 1区調査区西端、86区L-12・13、M-12・13に位置する。本竪穴住居の西半は現赤城白川左岸堤防下に存在するため、調査対象から除外されたため、全貌は不明である。なお、3号竪穴住居と同様に1区調査区の多くの竪穴住居は小規模な谷地を挟んで立地する。

**重複** 北東角で1号墳と8号溝と重複する。新旧関係は本竪穴住居のほうが1号墳より古く、8号溝より新しい。

**形状** 調査範囲内の様相からは隅丸長方形を呈すると想定される。

**規模** 調査範囲内では、長軸4.85m、短軸4.10mを測る。

**面積** 調査範囲内では、14.96㎡を測る。

**方位** N-4°-E

**埋没状態** 土層断面では壁際の三角堆積後、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。なお、埋没土中にAs-Cの堆積が観察されている。

**床面** 地山暗褐色土を踏み固めていた。床面の状態は多くの凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。

確認面から床面までの深さは、0.15~0.22mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は、構築されていなかった。

**壁溝** 調査区内では、検出されなかった。

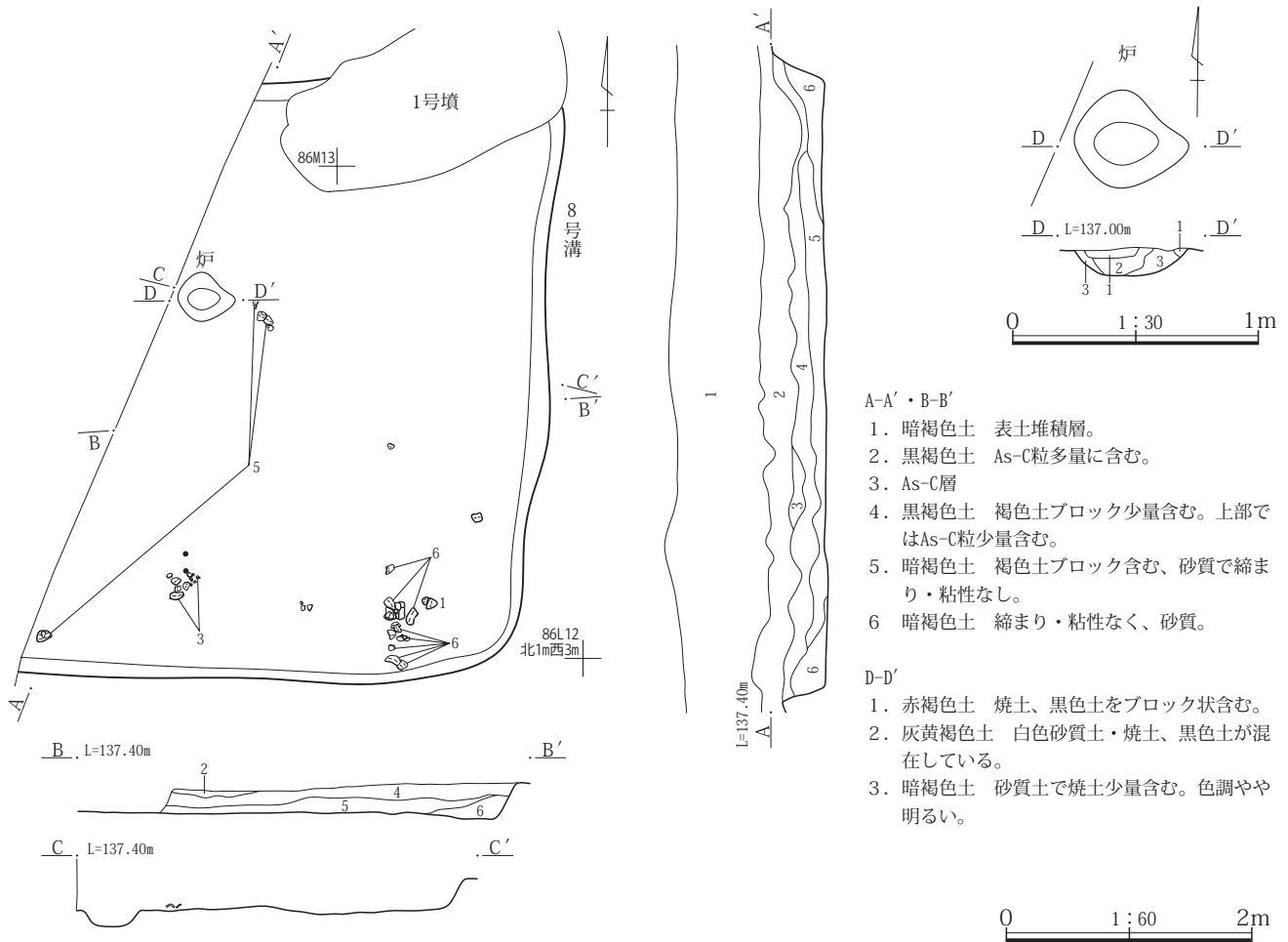
**柱穴** 調査区内では、検出されなかった。

**貯蔵穴** 調査区内では、検出されなかった。

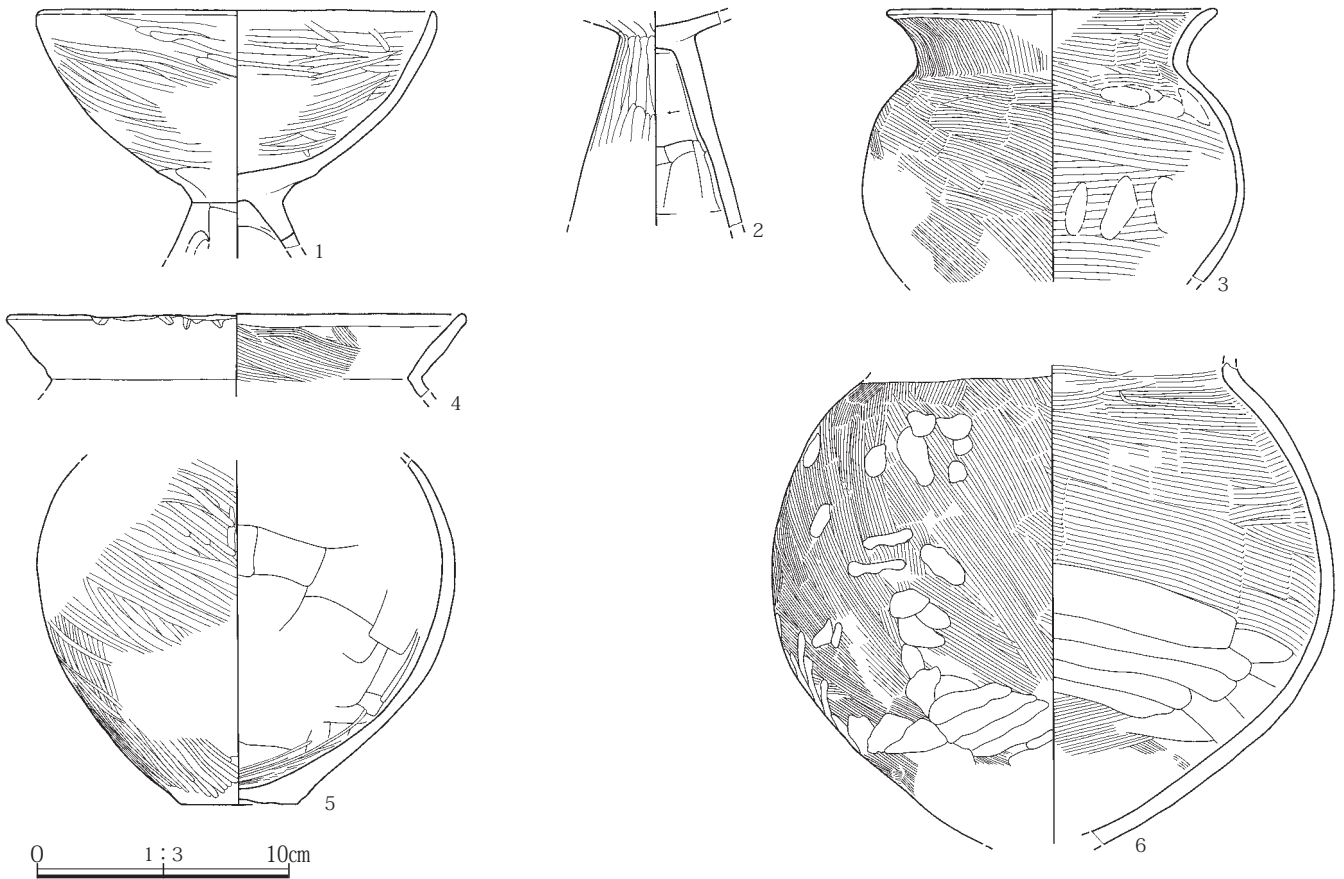
**炉** 調査区内の西端、竪穴住居のほぼ中央やや北寄りで検出した。形態は地床炉で、形状は楕円形を呈し、火床は平坦で掘り窪みはみられない。被熱範囲は長軸0.46m、短軸0.40mを測る。焼土が確認されており、被熱の深さは最大で0.16mであった。

**出土遺物** 図示した遺物は土師器高杯2点、甕4点の6点である。このうち、1・3・5・6が床面からの出土である。なお、5は炉東側からまとまって出土した他、南辺際からも一部片が出土している。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片59点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は、床面から出土した遺物や埋没土中のAs-Cの堆積状態から3世紀後半に比定できる。



第227図 1区11号竪穴住居遺構図



第228図 1区11号竪穴住居出土遺物図

1区13号竪穴住居(第229・230図、PL.116・117・176・177)

**位置** 1区調査区北西部、G-19・20、H-19・20に位置する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されなかった。単独での占地である。

**形状** 若干各角の角度が異なり歪みがみられるが、ほぼ隅丸長方形を呈す。

**規模** 長軸6.36m、短軸5.04mを測る。

**面積** 26.41㎡

**方位** N-75°-E

**埋没状態** 土層断面では周囲から流れ込んだとみられるレンズ状の堆積が観察できることから、自然埋没と想定される。埋没土下位の壁際でAs-Cの堆積が観察された。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めていた。床面の状態は、若干の凹凸がみられ、ほぼ平坦であるが、高低差14cmほどで東から西へ傾斜していた。

確認面から床面までの深さは、0.27～0.53mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は構築されていなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 各辺から1.0m前後の間隔で、竪穴住居のほぼ対角線上の位置から4本を検出した。P 1は、形状が円形状を呈し、規模が径0.34m、深さ0.83mを測る。P 2は、形状が円形を呈し、規模は径0.32m、深さ0.75mを測る。P 3は、形状が楕円形を呈し、規模は長軸0.42m、短軸0.40m、深さ0.54mを測る。P 4は、形状が楕円形を呈し、規模は長軸0.34m、短軸0.30m、深さ0.45mを測る。柱穴間の距離は、P 1～P 2間が3.05m、P 2～P 3間が2.15m、P 3～P 4間が3.25m、P 4～P 1間が2.10mである。

柱痕は各柱穴とも確認できなかったが、P 3では柱が建てられたとみられる箇所が20cmほど沈んでおり、その部分の径は15cmほどであった。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

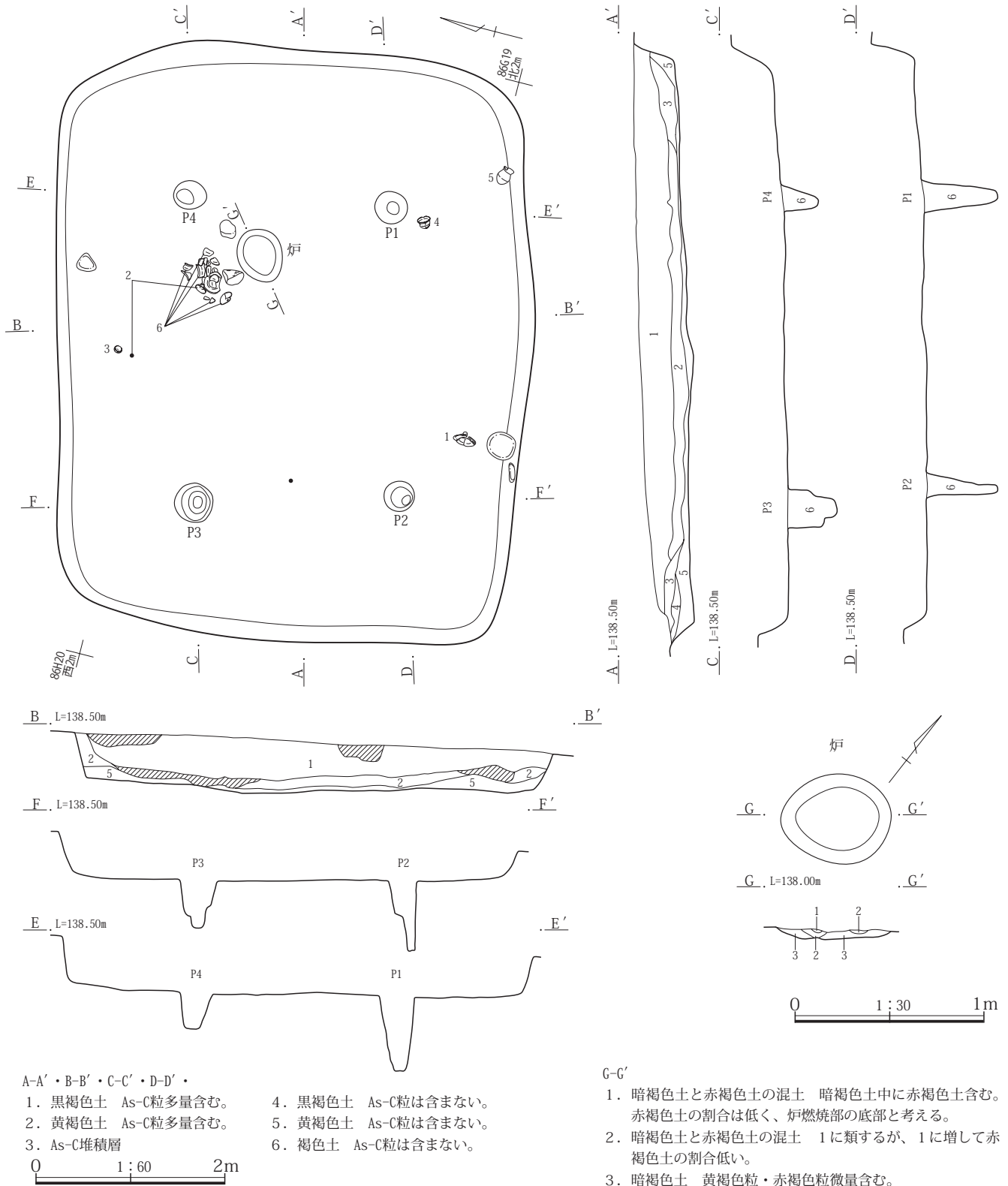
**炉** 柱穴P 4とP 1の間よりやや内側で検出した。形態は地床炉で、形状は楕円形を呈し、火床はほぼ平坦で掘り窪みはみられない。焼土範囲の規模は長軸0.58m、短軸0.48mを測る。焼土が確認されており、被熱の深さは

最大で0.13mであった。

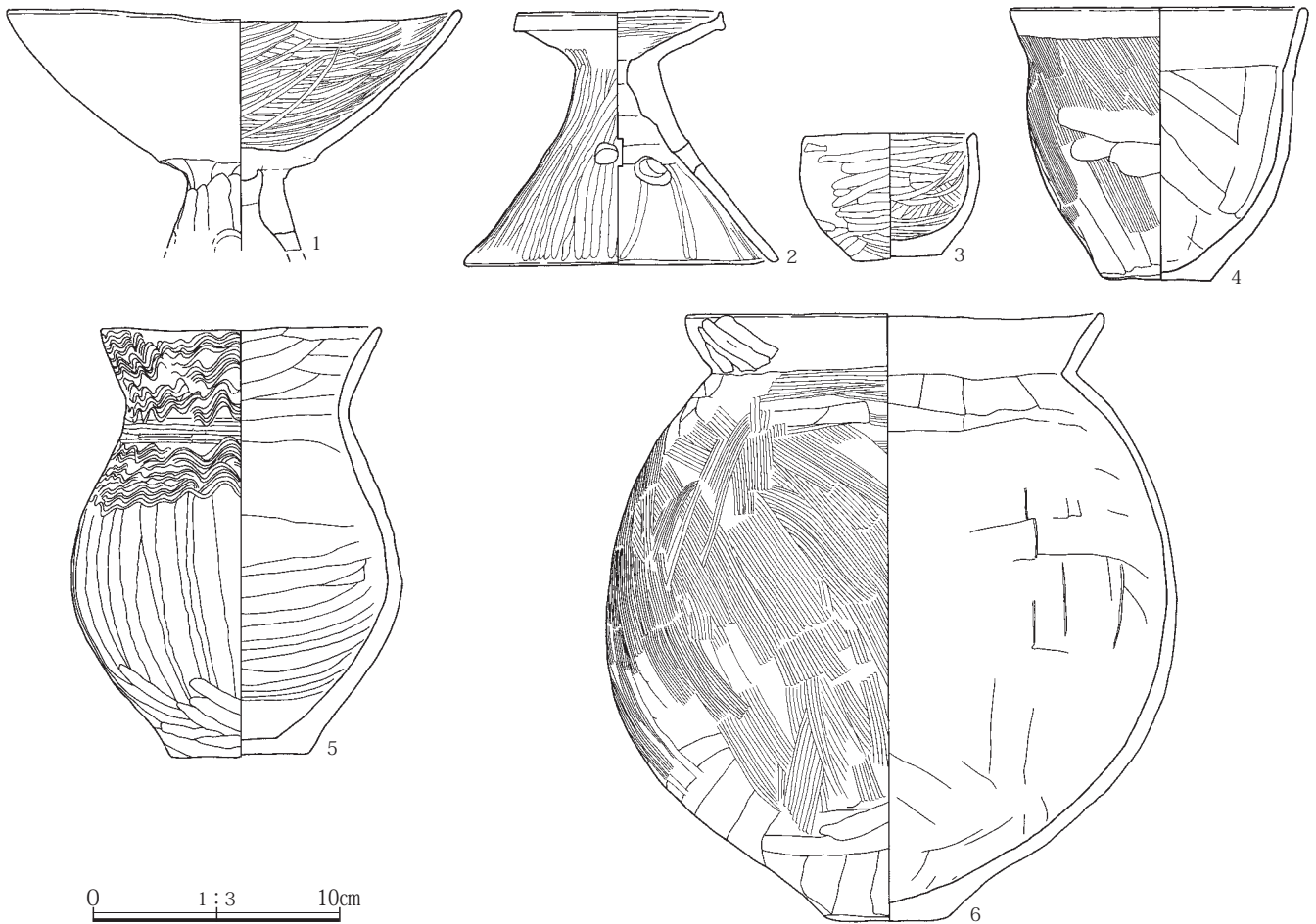
**出土遺物** 図示した遺物は土師器高杯、器台、鉢、甕、壺の6点である。これらの遺物はみな床面からの出土で本竪穴住居に共伴するとみられる。図示した以外の遺物

では、土師器大型製品片20点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は、床面から出土した遺物や埋没土中にAs-Cが堆積することから3世紀後半に比定できる。



第229図 1区13号竪穴住居遺構図



第230図 1区13号竪穴住居出土遺物図

1区14号竪穴住居(第231図、PL.118・177)

**位置** 1区調査区のほぼ中央、86区B-15・16、C-15・16に位置する。本竪穴住居は台地縁辺に立地する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されなかった。単独での占地である。

**形状** 東西に長い長方形を呈す。

**規模** 長軸4.40m、短軸3.62mを測る。

**面積** 13.38㎡

**方位** N-90°-W

**埋没状態** 確認面から床面まで浅いため不明確ではあるが、土層断面の観察では自然埋没と想定される。

**床面** 大部分は地山の暗褐色土を踏み固めているが、一部には黒褐色土を充填している。床面の状態は、若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.08~0.27mを測る。

**掘方** 1区1号竪穴住居と同様に周縁部に溝状の掘方が行われていたとみられるが、調査時には床面を地山と認

識し、確認していない。

**壁溝** 北辺から西辺、南辺と東辺のごくわずかな箇所の壁下で検出した。規模は、上端0.10~0.20m、下端0.03~0.11m、深さ0.05~0.11mを測る。

**柱穴** 検出されなかった。

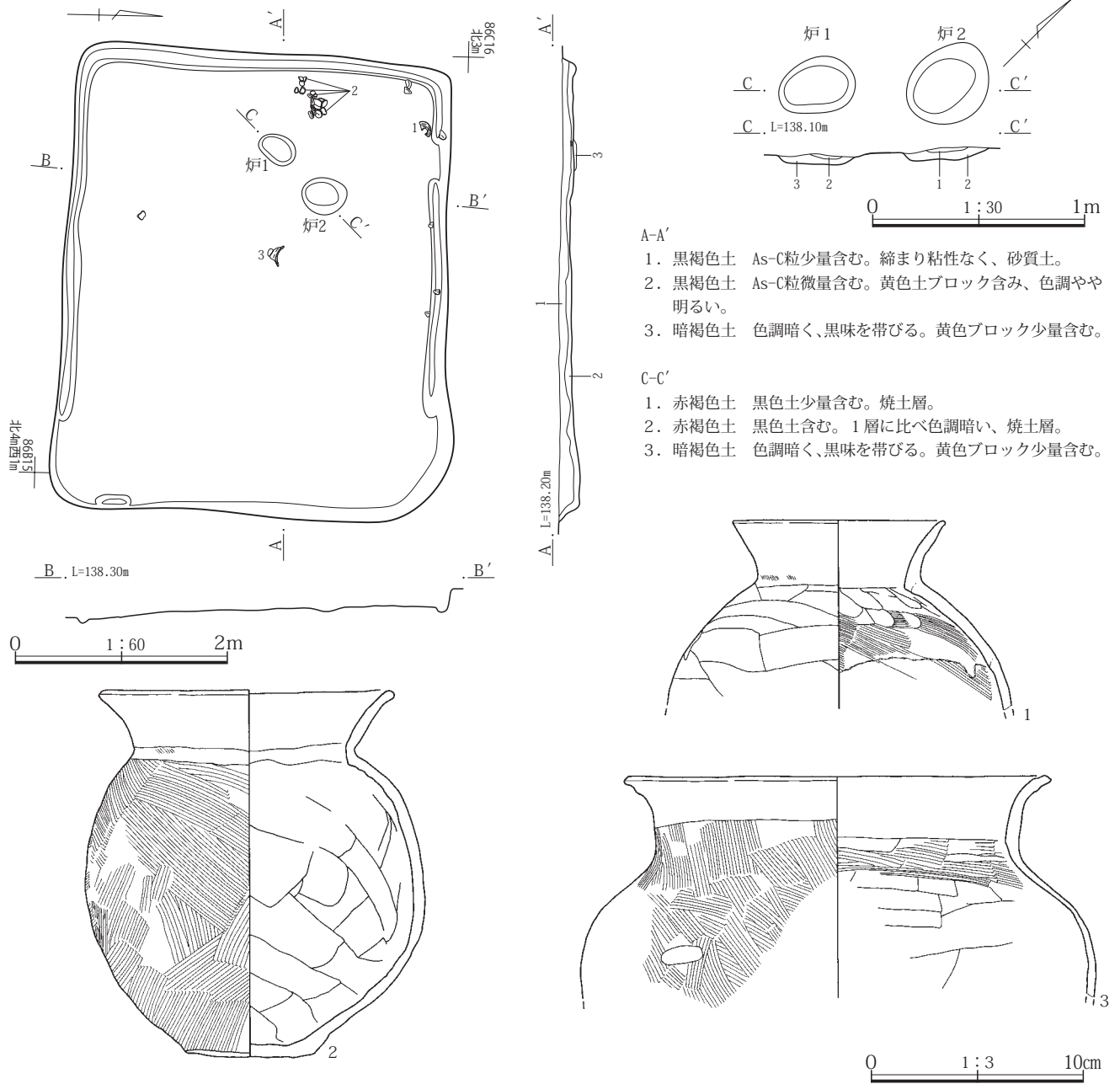
**貯蔵穴** 検出されなかった。

**炉** 西辺から0.8m、1.2mほど内側の2カ所で検出した。西寄りの炉1は、形態が地床炉で、形状は楕円形を呈し、火床は平坦で掘り窪みはみられない。被熱範囲は長軸0.36m、短軸0.28mを測る。焼土が確認されており、被熱の深さは最大で0.03mであった。炉2は、炉1の北東側に位置し、形状は楕円形を呈し、火床は平坦で掘り窪みはみられない。被熱範囲は長軸0.42m、短軸0.34mを測る。焼土が確認されており、被熱の深さは最大で0.05mであった。

**出土遺物** 図示した遺物は土師器甕が3点である。これらの土器は炉周辺の床面より出土したものである。図示

した以外の遺物では、土師器大型製品片26点・小型製品片5点が出土している。

所見 本竪穴住居の時期は床面より出土した遺物から4世紀に比定できる。



第231図 1区14号竪穴住居遺構図・出土遺物図

**1区15号竪穴住居**(第232～234図、PL.118・119・177・178)  
**位置** 1区調査区中央よりやや東、85区R-14・15、S-14・15、T14・15に位置する。本竪穴住居は台地縁辺に立地する。なお、床面の一部は攪乱によって欠落していた。  
**重複** 本竪穴住居廃絶・埋没後に耕作された5号畠と重複する。新旧関係は本竪穴住居のほうが古い。  
**形状** 各辺長がわずかな差があるため若干の歪みがみら

れるが、東西に長い長方形を呈す。  
**規模** 長軸6.70m、短軸5.72mを測る。  
**面積** 33.26㎡  
**方位** N-108°-E  
**埋没状態** 確認面から床面までが浅いため不明確ではあるが、土層断面の観察では自然埋没と想定される。  
**床面** 地山の暗褐色土をそのまま踏み固めていた。床面の状態は、若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。



m、P 2～P 3間が4.62mである。

柱痕は各柱穴とも確認されていない。

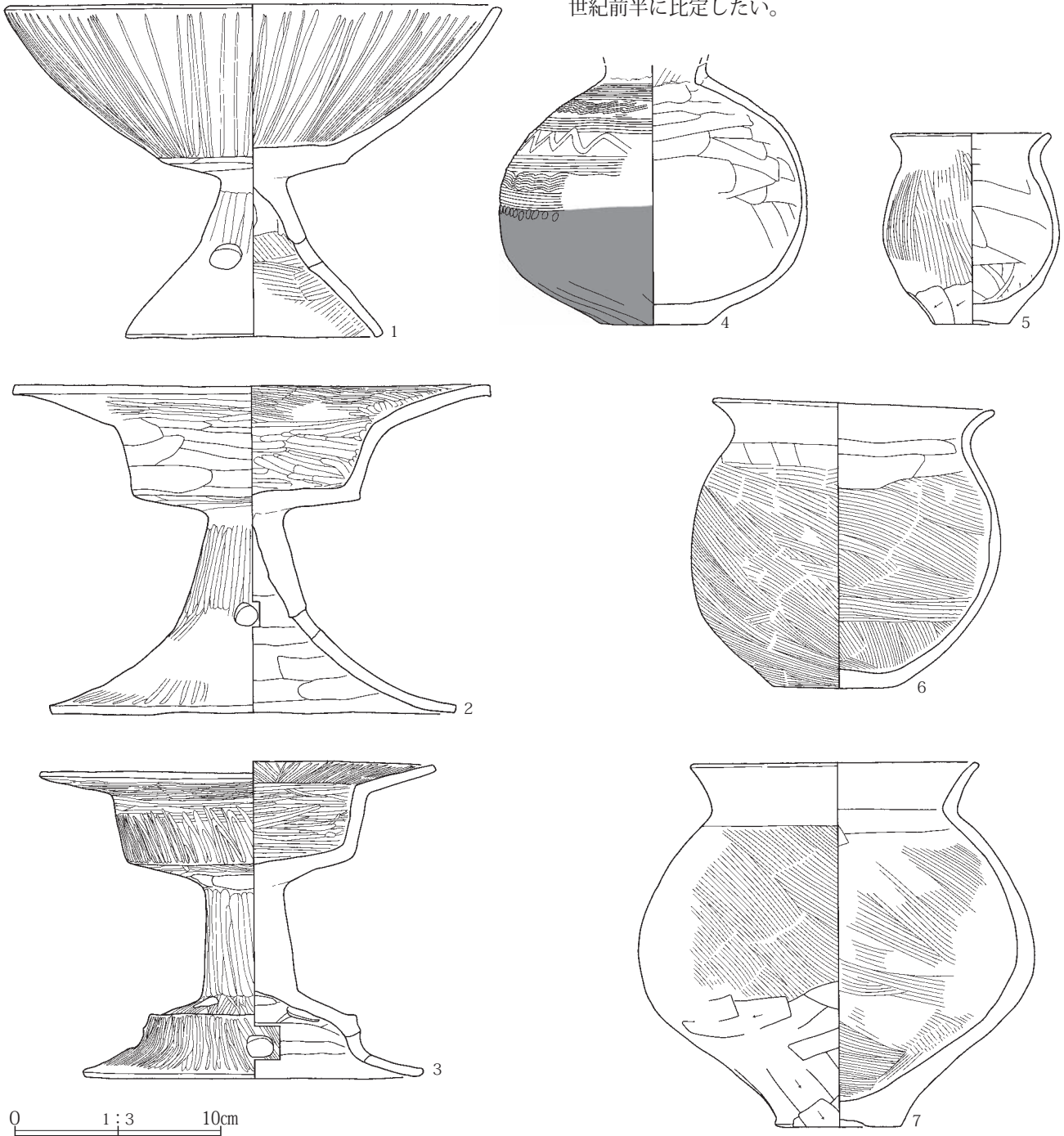
**貯蔵穴** 形状や位置から西辺際で検出されたものを貯蔵穴と判断した。形状は楕円形を呈し、規模は長軸0.80m、短軸0.57m、深さ0.29mを測る。内部からは遺物などの出土はみられなかった。

**炉** 中央やや北寄り部分にて焼土ブロックが散発的に検出したので炉の可能性が高いと判断した。形態は地床炉とみられ、形状は不整形で、火床は平坦である。被熱範囲

囲は長軸1.30m、短軸1.13mを測る。被熱の深さは最大で0.03mであった。

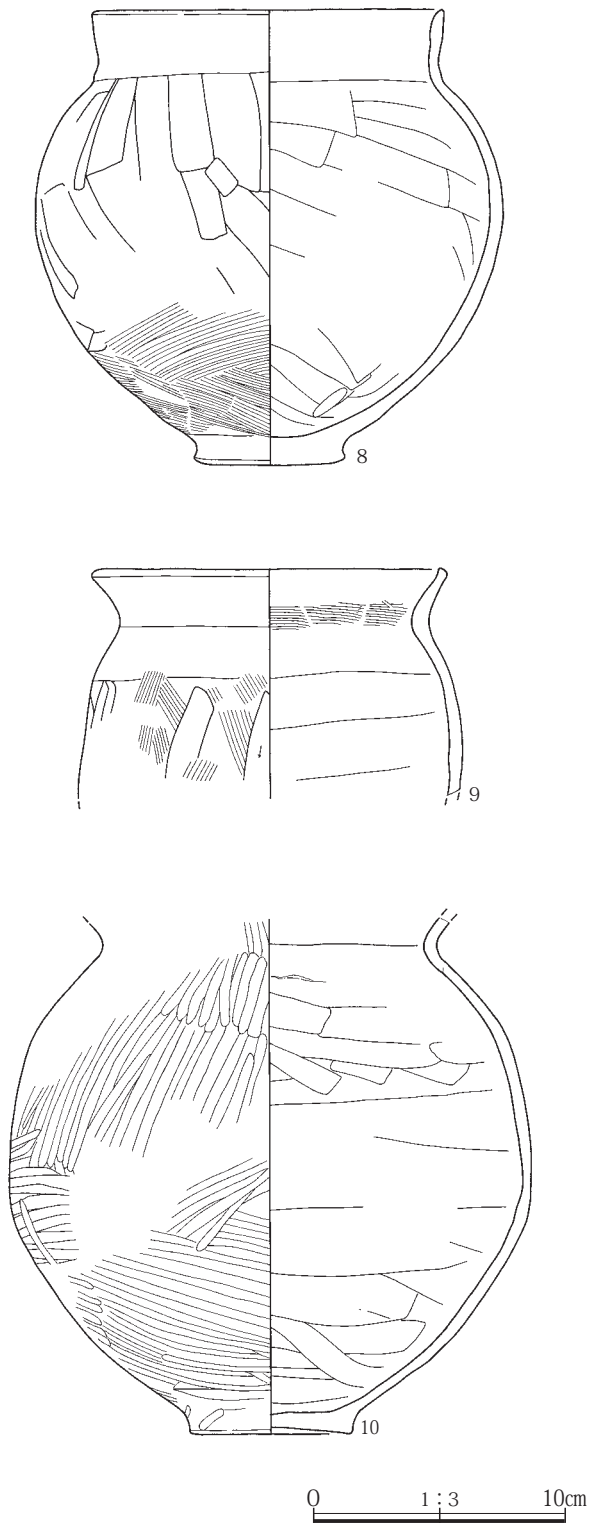
**出土遺物** 図示した遺物は10点である。9の土師器甕以外は床面からの出土である。そのうち、3の土師器高杯は貯蔵穴東側に置かれた状態で出土していた。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片60点・小型製品片7点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は、床面より出土した遺物からは、3世紀代の可能性が窺えるが、埋没土の状態から4世紀前半に比定したい。



第233図 1区15号竪穴住居出土遺物図(1)





第234図 1区15号竪穴住居出土遺物図(2)

1区25号竪穴住居(第235図、PL.120)

**位置** 1区調査区北西部、86区D-18~20、E-18~20に位置する。本竪穴住居は台地上に立地する。なお、重複する遺構によって南西部を欠くため全貌は不明である。

**重複** 6号墳と重複する。新旧関係は本竪穴住居のほうが古い。

**形状** 各角は直角ではないため、やや歪みがある南北に長い長方形を呈す。

**規模** 長軸6.44m、短軸4.40mを測る。

**面積** 25.25㎡

**方位** N-7°-E

**重複** 6号墳と重複するが、6号墳は6世紀代の方墳であり、本遺構の方が古い。

**埋没状態** 確認面から床面まで浅いため、埋没土もAs-Cを含んだ暗褐色土の一層が観察されただけであるため埋没状態について不明である。

**床面** 地山の暗褐色土をそのまま踏み固めていた。床面の状態は、若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.01~0.20mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は構築されていなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 床面からは4カ所の落ち込み検出したが、規模からみると北西角寄りのP1と中央に位置するP2が該当するとみられるが、確認は得られていない。P1は、形状が楕円形を呈し、規模は長軸0.60m、短軸0.42m、深さ0.34mを測る。P2は、形状が楕円形を呈し、規模は長軸0.65m、短軸0.42m、深さ0.39mを測る。なお、残りの落ち込みは深さが10cm前後と浅いものであった。

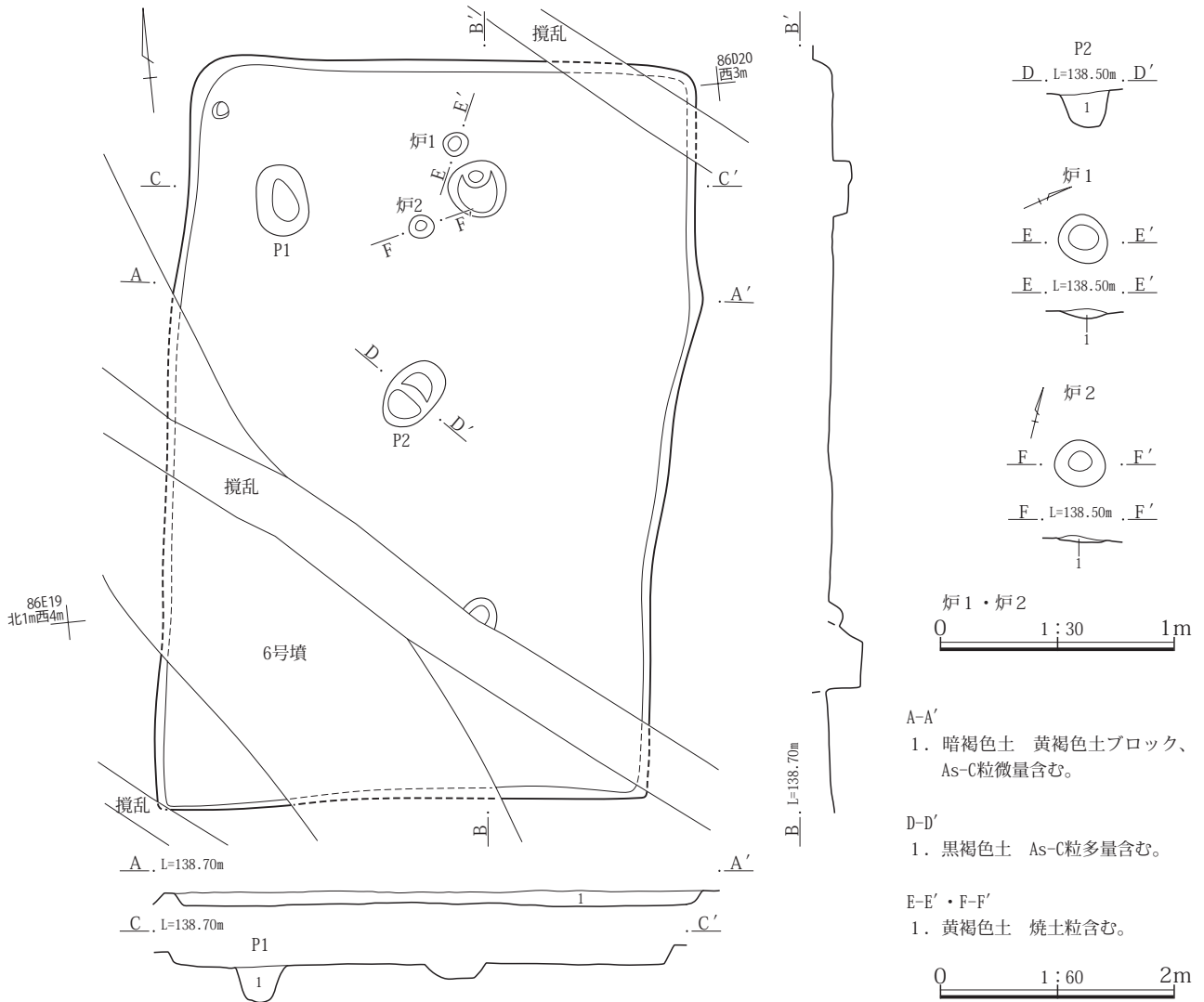
柱痕は土層断面が黒褐色土の単層であり、確認されていない。

**貯蔵穴** 形状や位置からP1が該当する可能性があるが、確認を得るまでには至らなかった。

**炉** 中央北寄り部分で2カ所検出した。それぞれ、焼土が散在し、火床がわずかに盛り上がるため炉としては疑問がもたれるが、他に床面での焼土はみられないことから炉の可能性があると判断した。炉1は焼土範囲が長軸0.21m、短軸0.19mを測り、被熱の深さは0.02mであった。炉2は、焼土範囲が長軸0.22m、短軸0.20mを測り、被熱の深さは0.02mであった。

**出土遺物** 図示可能な遺物は出土していない。出土した遺物は、土師器大型製品片4点・小型製品片2点である。

**所見** 本竪穴住居の時期は、出土遺物から4世紀代に比定できる。



第235図 1区25号竪穴住居遺構図

1区26号竪穴住居(第236~238図、PL.120・121・178)

**位置** 1区調査区北寄り、86区A-20、B-20、96区A-1、B-1に位置する。

**重複** 北辺の中ほどで16号竪穴住居とわずかではあるが、重複する。新旧関係は、本竪穴住居のほうが古い。

**形状** 各辺長は、北辺4.8m、東辺4.3m、南辺5.2m、西辺5.0mと辺長に差がみられる、東西方向に長い隅丸台形を呈す。

**規模** 長軸5.50m、短軸4.82mを測る。

**面積** 22.08㎡

**方位** N-98°-E

**埋没状態** 土層断面では西側から順次流れ込んだ様子が観察されるが、不自然な流れ込みでもあることから人為的な埋め戻しか自然埋没であるかの判断には至らなかった。

**床面** 大部分では地山の暗褐色土をそのまま踏み固めて

いたが、一部に土坑状の落ち込みがみられ、その部分では黒褐色土によって埋められていた。床面の状態は多少の凹凸がみられるがほぼ平坦である。北西隅は周囲より5~12cmほど低い状態であった。

確認面から床面までの深さは、0.29~0.41mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は構築されていないが、中央付近と南東隅で落ち込みを4カ所検出した。落ち込みは深さが30cm前後と浅く、内部から遺物の出土がみられないことから床下土坑などの施設とは判断できなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

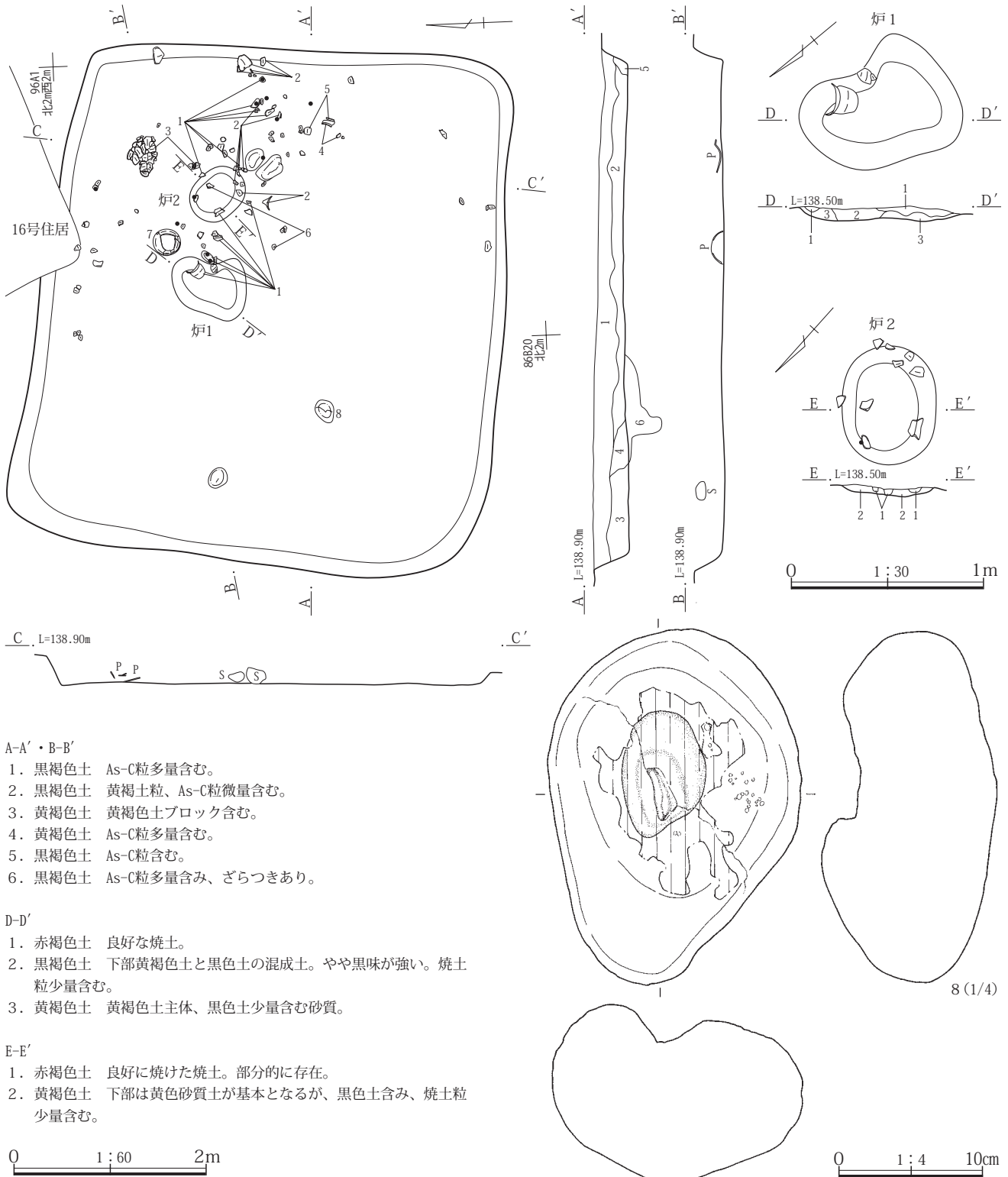
**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

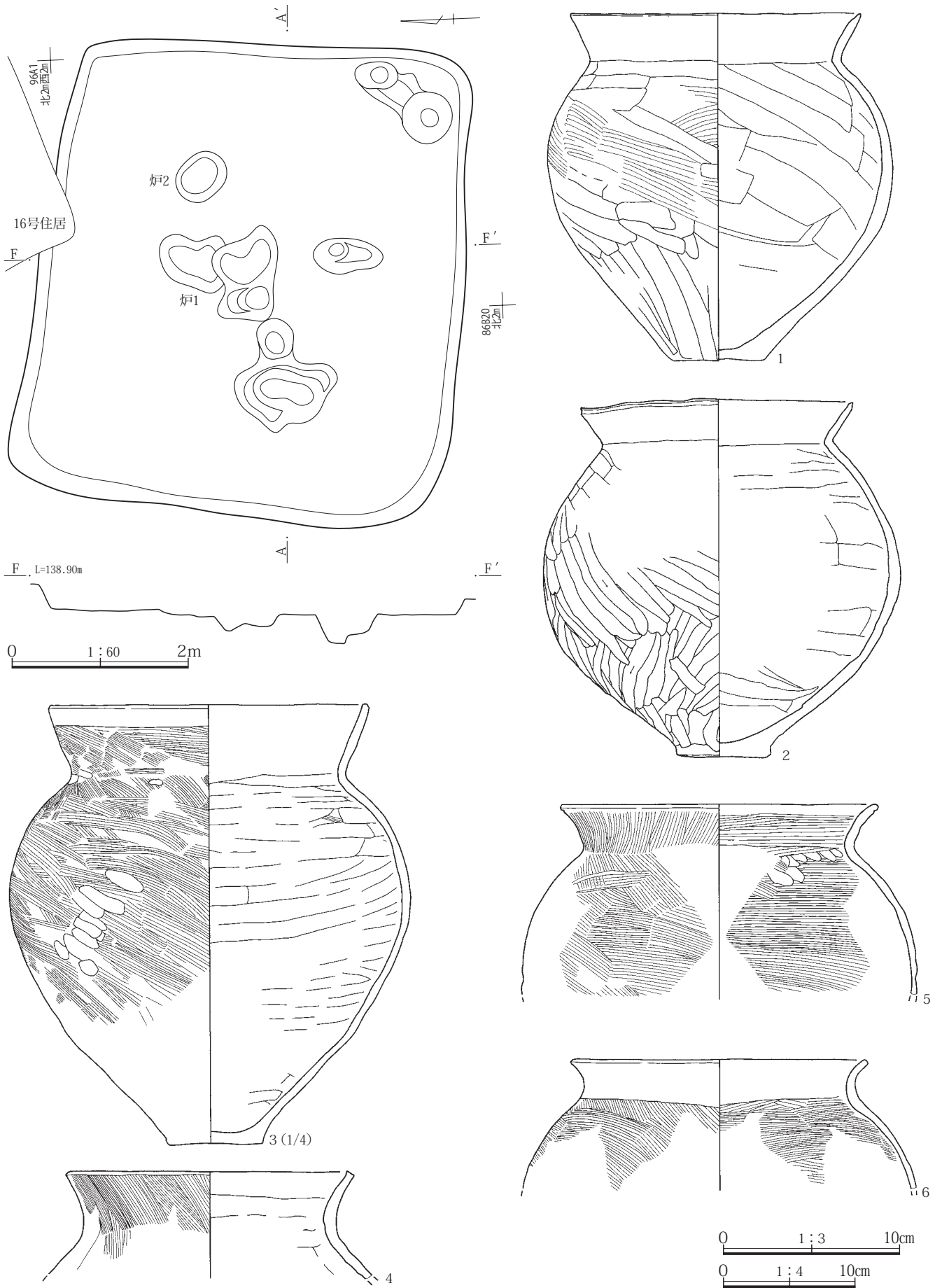
**炉** 中央やや北寄りとその東側の2カ所で検出した。炉1は、形態が地床炉で、形状は不整形を呈し、火床はわずかに掘り窪められていた。被熱範囲は長軸0.84m、

短軸0.52mを測る。被熱の深さは最大で0.06mであった。炉2は、形態が地床炉で、形状は楕円形状を呈し、火床は平坦で掘り窪みはみられない。被熱範囲は長軸0.62m、短軸0.48mを測る。被熱の深さは最大で0.09mであった。  
**出土遺物** 図示した遺物は土師器甕7点と石製品凹石1点である。土器は炉の周囲の床面からの出土である。出

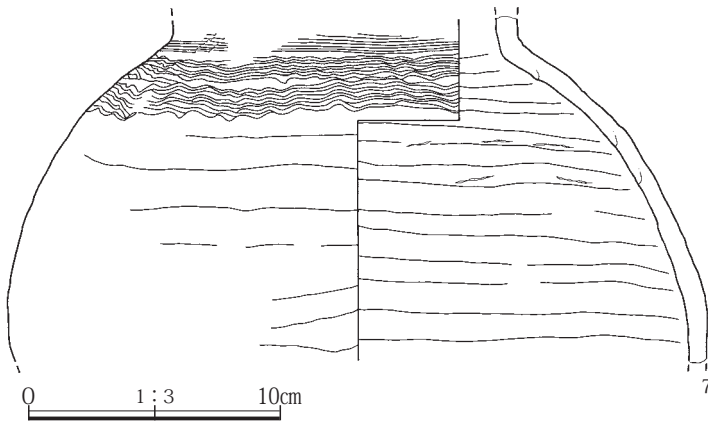
土状態は3と7が床面に置かれた状態とみられるが、他は散乱した状態であった。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片349点・小型製品片2点が出土している。  
**所見** 本竪穴住居の時期は床面より出土した遺物より4世紀前半に比定できる。



第236図 1区26号竪穴住居遺構図(1)・出土遺物図(1)



第237図 1区26号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図(2)



第238図 1区26号竪穴住居出土遺物図(3)

1区29号竪穴住居(第239・240図、PL.121・179)

**位置** 1区調査東、85区R-12・13、S-12・13に位置する。本竪穴住居は床面まで達する攪乱を2カ所と各辺上位を攪乱によって多くの部分を欠くため、全貌は不明

な点があった。

**重複** 攪乱とは重複しているが、他の遺構との重複関係は確認されず、単独で占地する。

**形状** 東西に長い隅丸正方形を呈す。

**規模** 長軸5.68m、短軸5.20mを測る。

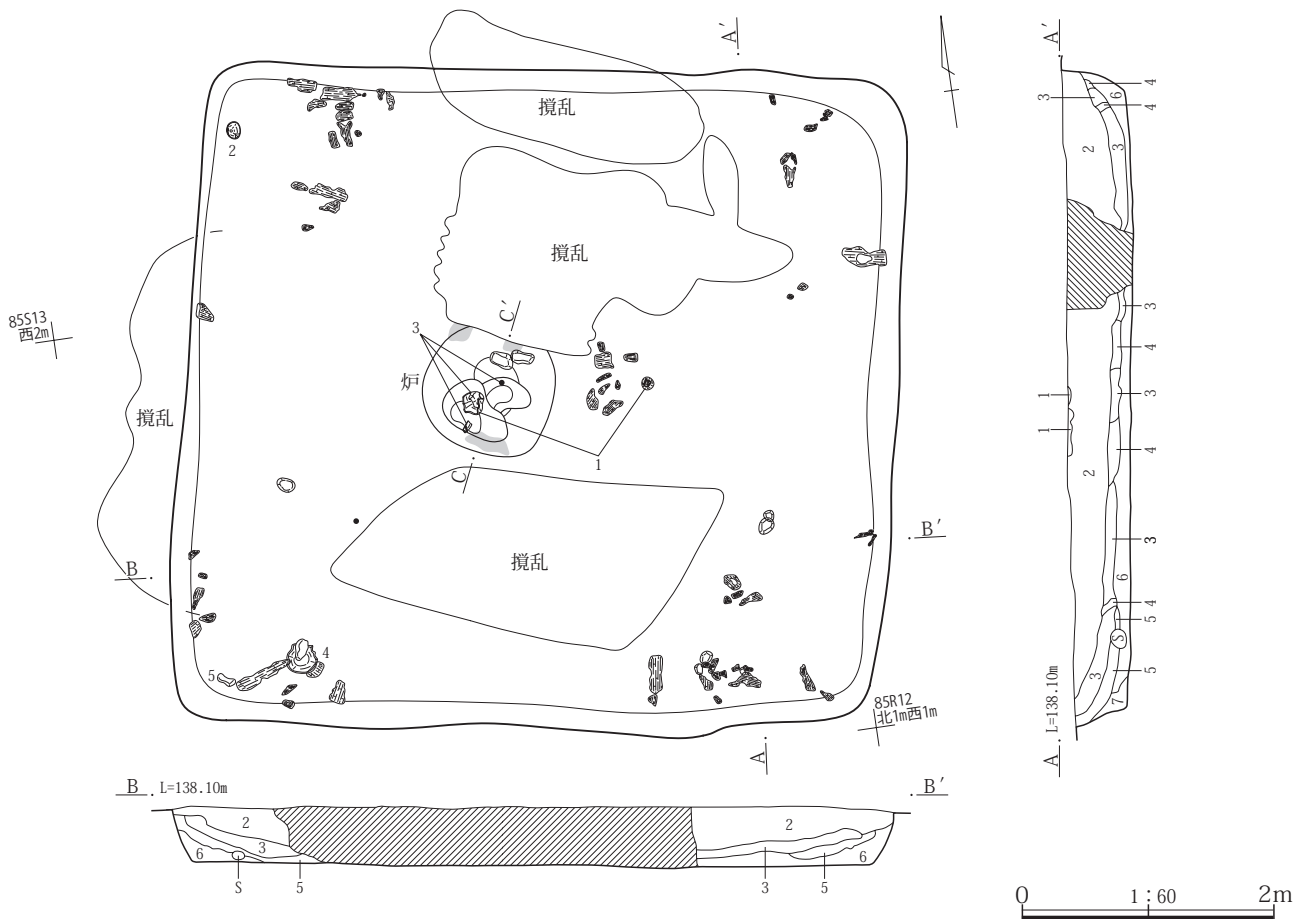
**面積** 25.72㎡

**方位** N-79°-W

**埋没状態** 土層断面では壁際に三角堆積後、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。なお、埋没土下位にAs-Cの堆積がみられた。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めていた。床面の状態は、凹凸が多くみられるが、ほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.35~0.45mを測る。



A-A'・B-B'

- |  |   |
|--|---|
| 1. にぶい褐色土 砂質土、FA少量、As-C粒微量含む。締まり・粘性弱い。 | 5. 暗褐色土 砂質土、焼土粒・炭化物微量含む。締まり・粘性弱い。           |
| 2. 黒褐色土 砂質土、As-C粒・礫微量含む。締まり・粘性弱い。      | 6. 明褐色土 砂質土、橙色ロームブロック・焼土粒・炭化物微量含む。締まり・粘性弱い。 |
| 3. As-C粒層                              | 7. 灰褐色土 砂質土、橙色ロームブロック微量含む。締まり・粘性弱い。         |
| 4. 褐色土 砂質土、As-C粒少量含む。締まり・粘性弱い。         |   |

第239図 1区29号竪穴住居遺構図(1)

**掘方** 地山を床面としており、掘方は、構築されていないかった。

**壁溝** 検出されなかった。

**柱穴** 床面が残存している範囲では検出されなかった。

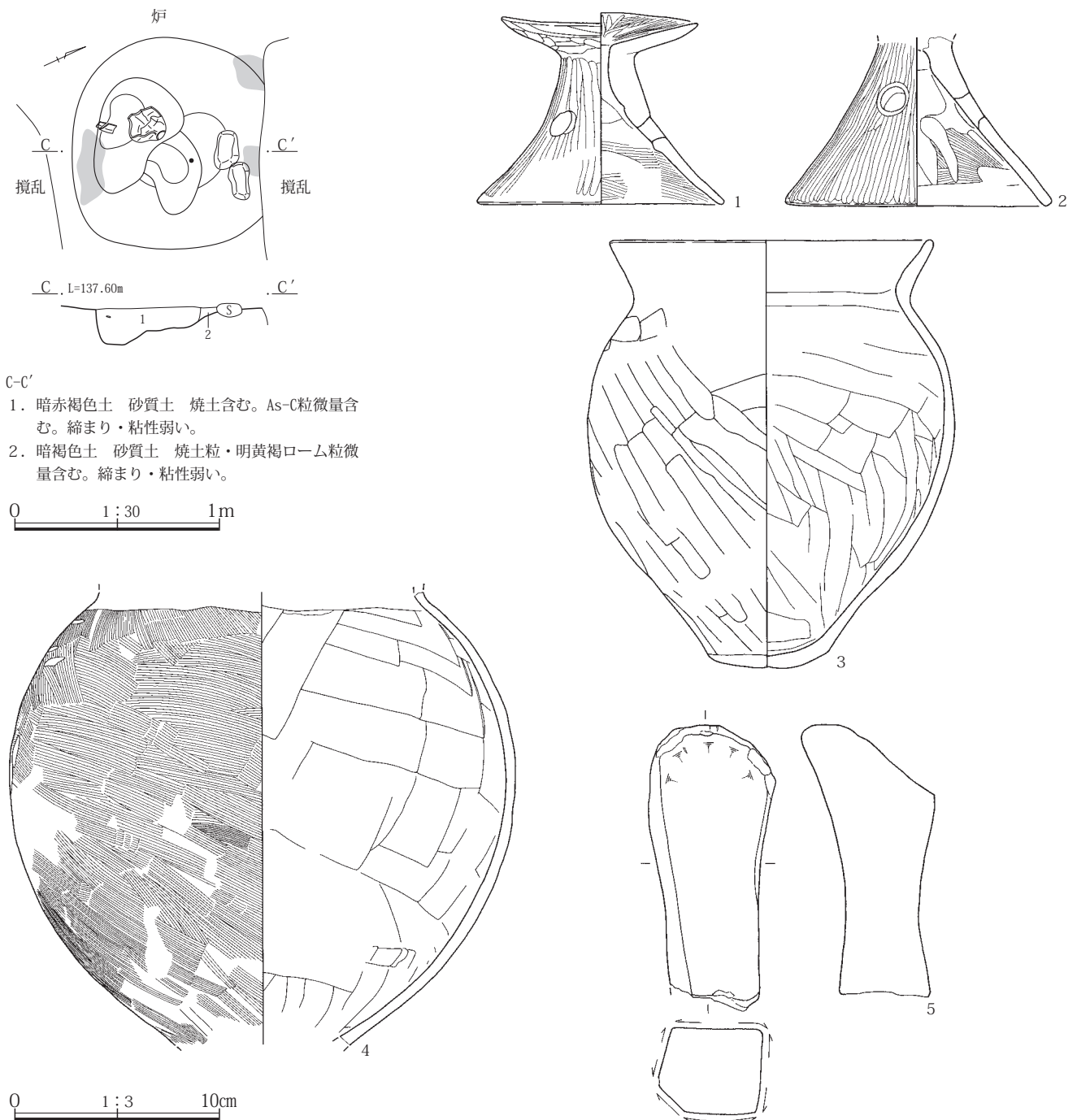
**貯蔵穴** 検出されなかった。

**炉** 床面のほぼ中央で検出した。形態は長さ30cm、幅15cm、厚さ15cmの棒状の垂角礫2点の枕石を伴う地床炉で、形状は楕円形状を呈し、火床は平坦である。被熱範囲は長軸1.03m、短軸0.92mを測る。被熱の深さは最大で0.18

mであった。

**出土遺物** 図示した遺物は土師器器台2点と甕2点、石製品砥石の5点である。このうち、3は炉内、2と4は床面、1は一部片が炉内であるが、主な部位は床面より25cmほど高位から出土している。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片30点・小型製品片5点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は炉や床面より出土した遺物やAs-Cの堆積状態から3世紀後半に比定できる。



- C-C'
1. 暗赤褐色土 砂質土 焼土含む。As-C粒微量含む。締まり・粘性弱い。
  2. 暗褐色土 砂質土 焼土粒・明黄褐ローム粒微量含む。締まり・粘性弱い。

第240図 1区29号竪穴住居遺構図(2)・出土遺物図

2区8号竪穴住居(第241～243図、PL.122・179)

**位置** 2区調査区北東部隅、84区O-13・14、P-13・14に位置する。

**重複** 東辺の北側で32号竪穴住居と重複する。本竪穴住居の方が、32号竪穴住居より古い。

**形状** 各辺長は北辺3.0m、東辺4.6m、南辺3.5m、西辺4.5mと辺長に差がみられる南北に長い隅丸長方形を呈す。

**規模** 長軸4.60m、短軸3.46mを測る。

**面積** 13.26㎡

**方位** N-37°-W

**埋没状態** 土層断面は不自然な堆積が観察できる。埋没過程としては、3のにぶい黄褐色土による埋没後、再掘削した可能性が想定される。

**床面** 地山暗褐色土をそのまま踏み固めていた。床面の状態は、若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.22～0.37mを測る。

**掘方** 地山を床面としており、掘方は構築されていなかった。

**壁溝** 検出されなかった。

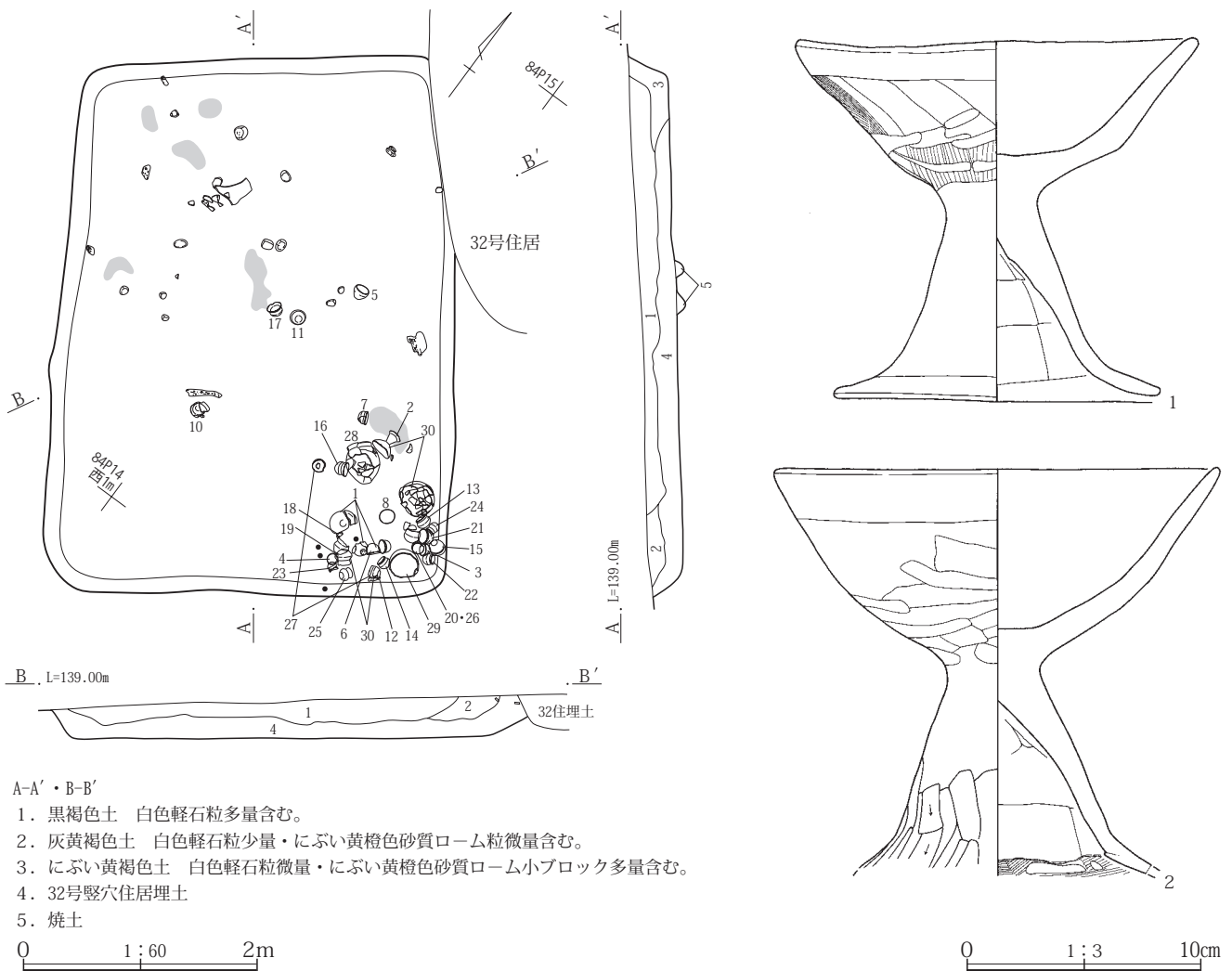
**柱穴** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

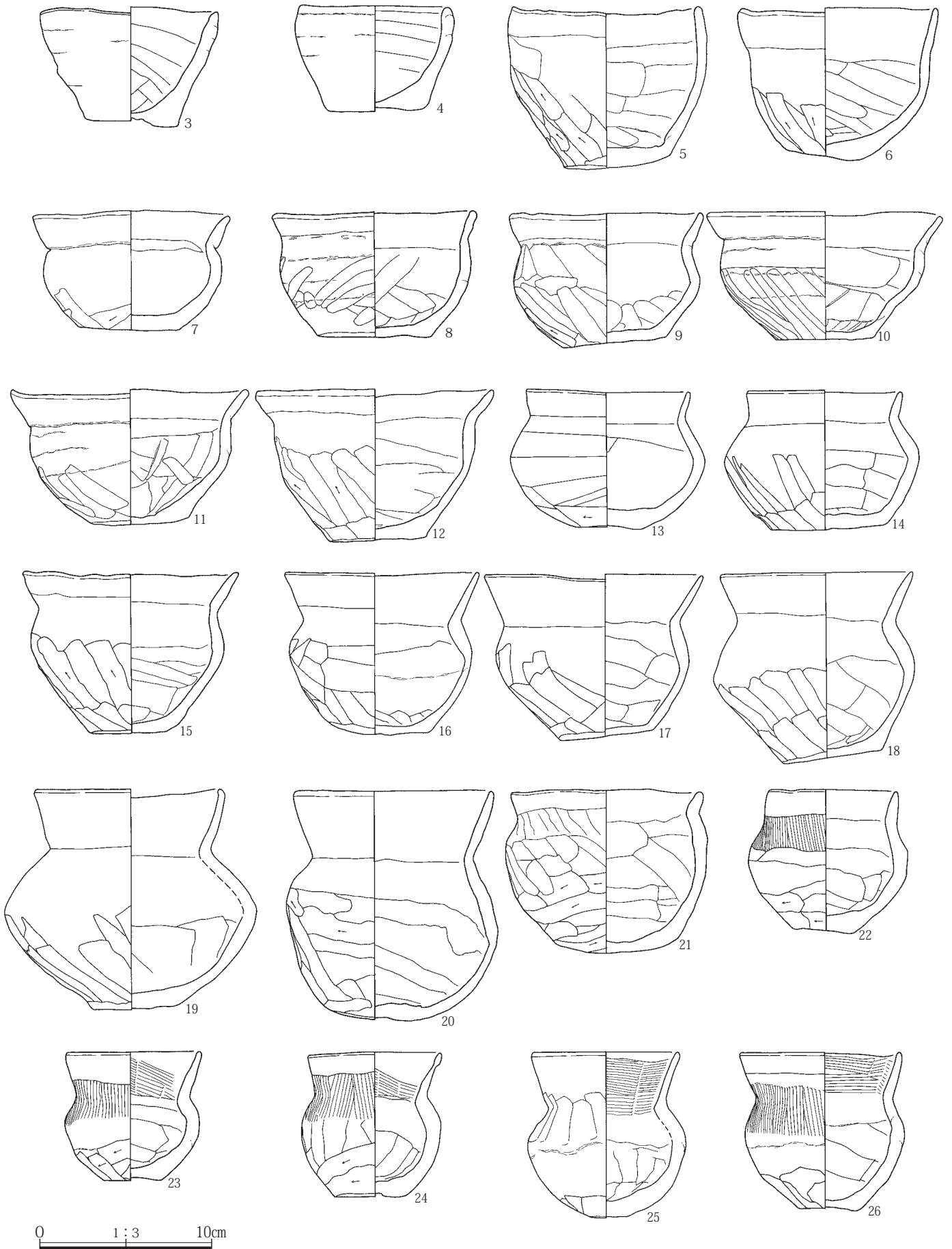
**炉** 調査時には、明確に断定できるものが検出されなかったが、中央部やや北に焼土が確認されている。この焼土範囲が炉である可能性が窺える。

**出土遺物** 図示した遺物は、土師器高杯・鉢・小型壺・甕など30点である。このうち、5・10・11・17以外は南西隅の床面に集積された状態であった。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片61点・小型製品片7点、石核1点・2次加工痕のある礫1点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は、床面より出土した遺物より5世紀前半に比定できる。

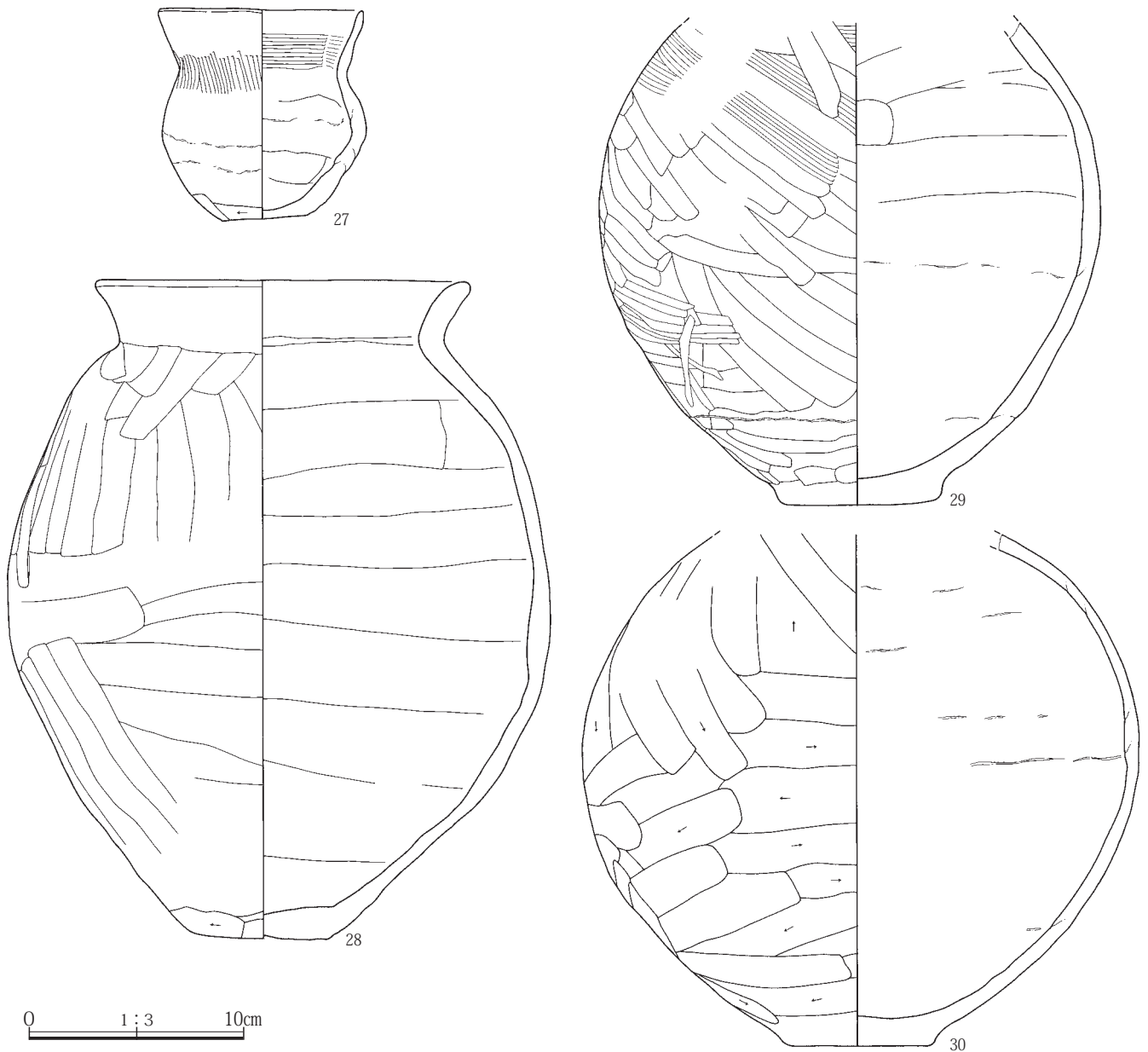


第241図 2区8号竪穴住居遺構図・出土遺物図(1)



第242図 2区8号竪穴住居出土遺物図(2)





第243図 2区8号竪穴住居出土遺物図(3)

2区9号竪穴住居(第244・245図、PL.122・123・180)

**位置** 2区調査区北東部、84区P-12・13、Q-12・13、R-12・13に位置する。本竪穴住居は、重複する遺構や谷地によって欠落する部分があり、全貌は不明である。

**重複** 西辺の南半で10号竪穴住居、南辺の大部分で11号竪穴住居、東辺で谷地と重複する。新旧関係は、本竪穴住居が最も古い。

**形状** 多くの箇所が重複する遺構によって不明であるが、南北に長い長方形を呈するとみられる。

**規模** 計測可能な範囲では、長軸6.80m、短軸6.24mを

測る。

**面積** 調査範囲内では33.70㎡

**方位** N-46°-E

**埋没状態** 土層断面では、にぶい暗褐色土が周囲から流れ込み壁面や床面を覆った後にレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。なお、埋没土上位ではHr-FAがブロック状に堆積しているのがみられた。

**床面** 掘方面より5~10cmほど灰黄褐色土を埋め戻して床面を構築していた。床面の状態は、若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦である。

確認面から床面までの深さは、0.52~0.65mを測る。

**掘方** 床下土坑などの施設がみられなかったため全面調査には至っていない。掘方面は全体的に凹凸が激しいようであった。

**壁溝** 西辺、北辺の壁下で検出した。規模は上端0.14～0.24m、下端0.04～0.10m、深さ0.05～0.09mを測る。

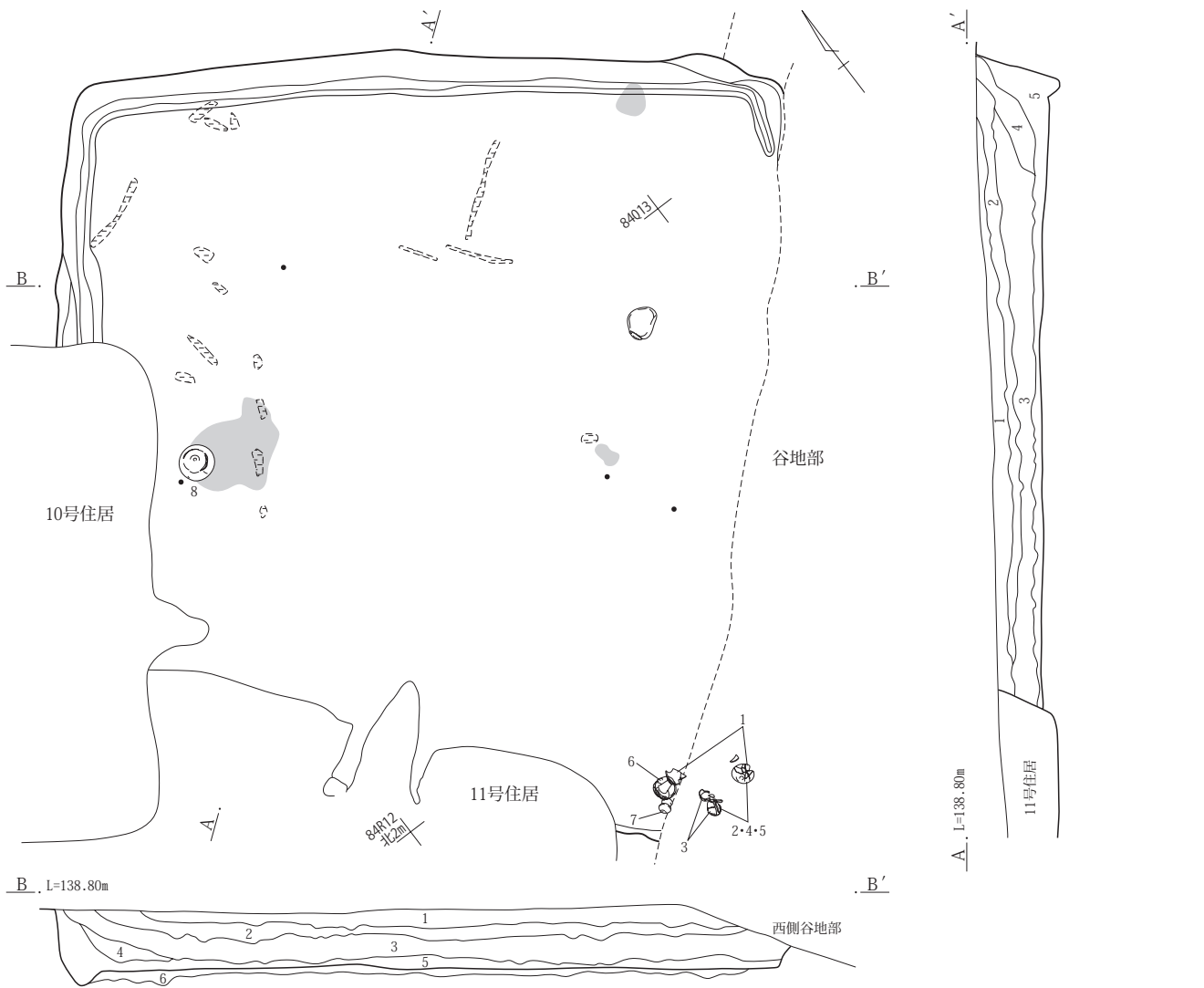
**柱穴** 調査範囲では、検出されなかった。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**炉** 調査範囲では、明確に炉とみられる痕跡は検出されなかったが、8の土師器壺の東側で焼土が検出されており、可能性が窺えた。

**出土遺物** 図示した遺物は土師器高杯・鉢・小型壺・壺など8点である。このうち、8の壺は逆さに伏せられた状態で床面より出土している。その他、図示した遺物は谷地からの出土であるが、竪穴住居内から出土した破片と接合したので本竪穴住居に共伴する遺物であると判断した。

**所見** 本竪穴住居からは、若干の炭化物や焼土が検出されているが、その量はわずかなため焼失建物とは想定されなかった。時期は床面より出土した土器から5世紀前半に比定できる。

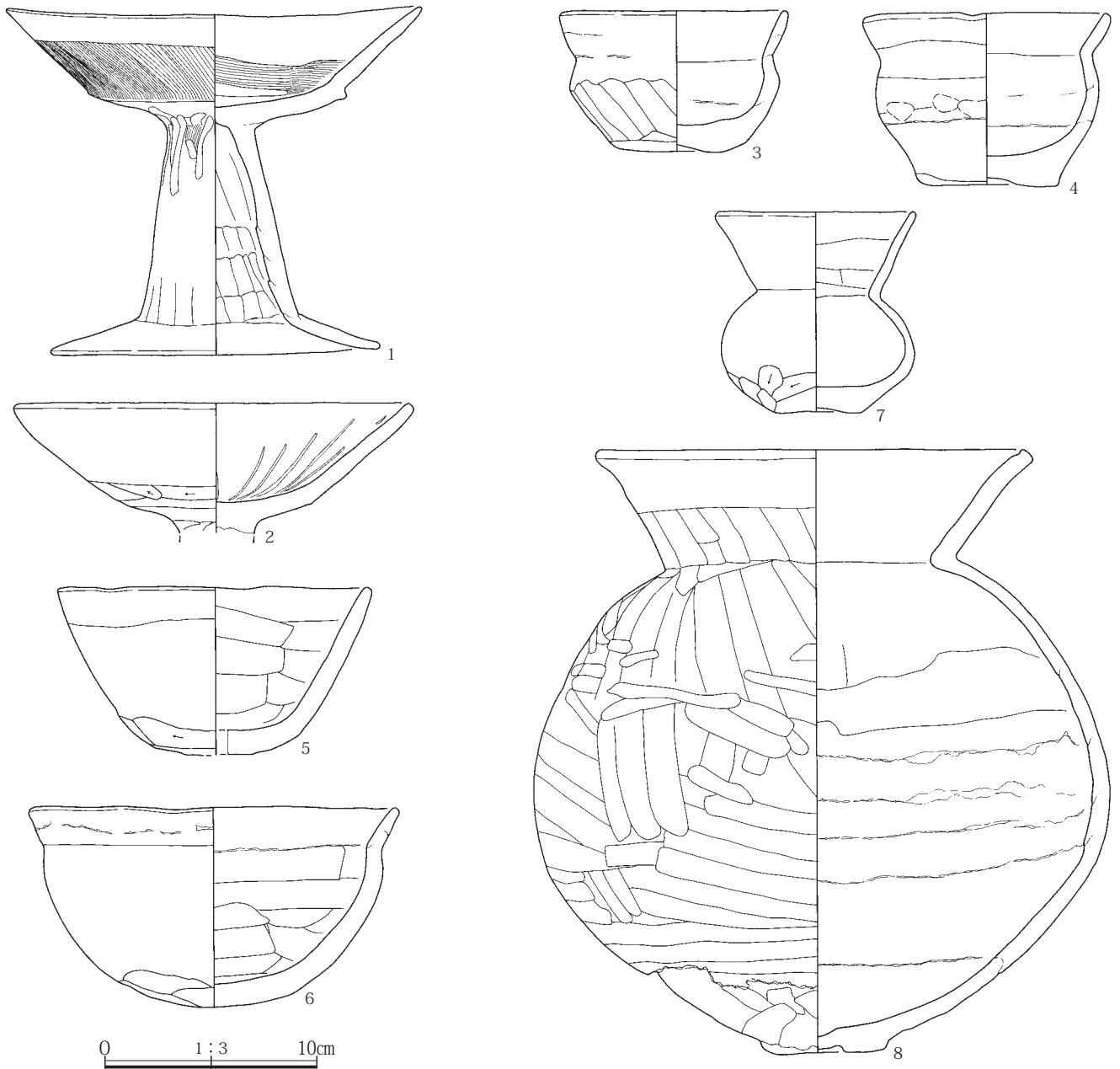


A-A'・B-B'

1. 暗褐色土 白色軽石粒少量含む。
2. 灰黄褐色土 Hr-FA多量・純層ブロック含む。
3. 黒褐色土 浅間C軽石粒多量含む。
4. 暗褐色土 浅間C軽石粒少量含む。
5. にぶい黄褐色土 浅間C軽石粒少量、にぶい黄橙色砂質ロームブロック含む。部分的に炭化物・炭化材含む。
6. 灰黄褐色土 焼土粒・炭化物含む。掘方埋土。

0 1:60 2m

第244図 2区9号竪穴住居遺構図



第245図 2区9号竪穴住居出土遺物図

**2区23号竪穴住居**(第246・247図、PL.123・180・181)  
**位置** 2区調査区のほぼ中央、85区E-11、F-11に位置する。本竪穴住居は台地から傾斜地へ移行する箇所に立地する。  
**重複** 他遺構とは直接重複関係は確認されていないが、24号竪穴住居とは隣接する位置関係である。  
**形状** 南北に長い長方形を呈す。  
**規模** 長軸3.60m、短軸3.28mを測る。  
**面積** 9.65㎡  
**方位** N-90°-E  
**埋没状態** 土層断面では、床面よりやや上に堆積してい

るAs-Cがブロック状であることなど、やや不自然な堆積も観察できるが、概ねレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**床面** 大部分は地山の褐色土を踏み固めていたが、南辺寄りでは土坑状の掘方が行われ、褐色土によって埋め戻して構築されていた。床面の状態は、若干の凹凸がみられるが、ほぼ平坦であった。

確認面から床面までの深さは、0.41～0.65mを測る。  
**掘方** 床面の項目で記したように南辺寄りで土坑状の掘方が検出されたが、床下土坑などの施設は検出されていない。

壁溝 検出されなかった。

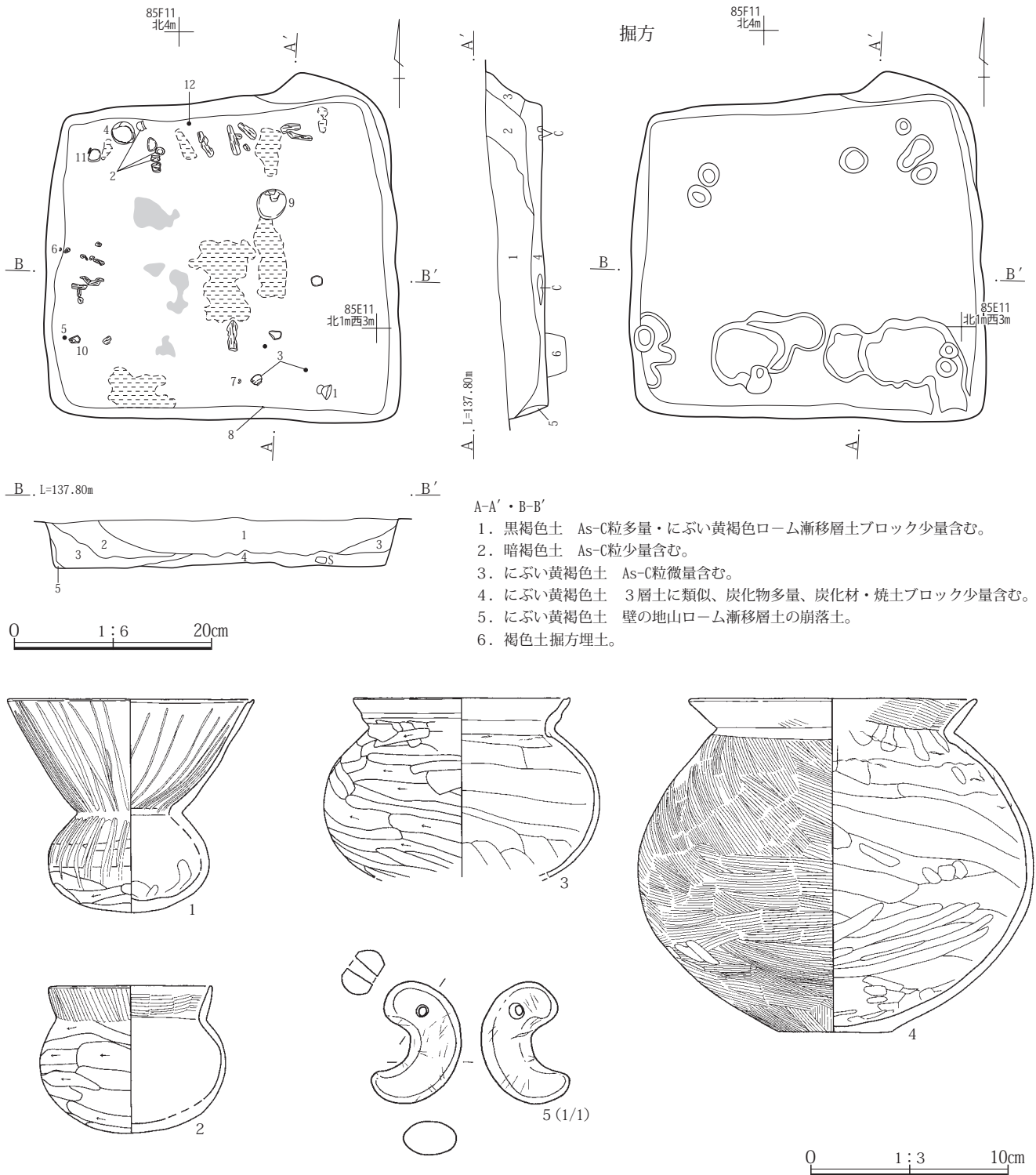
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

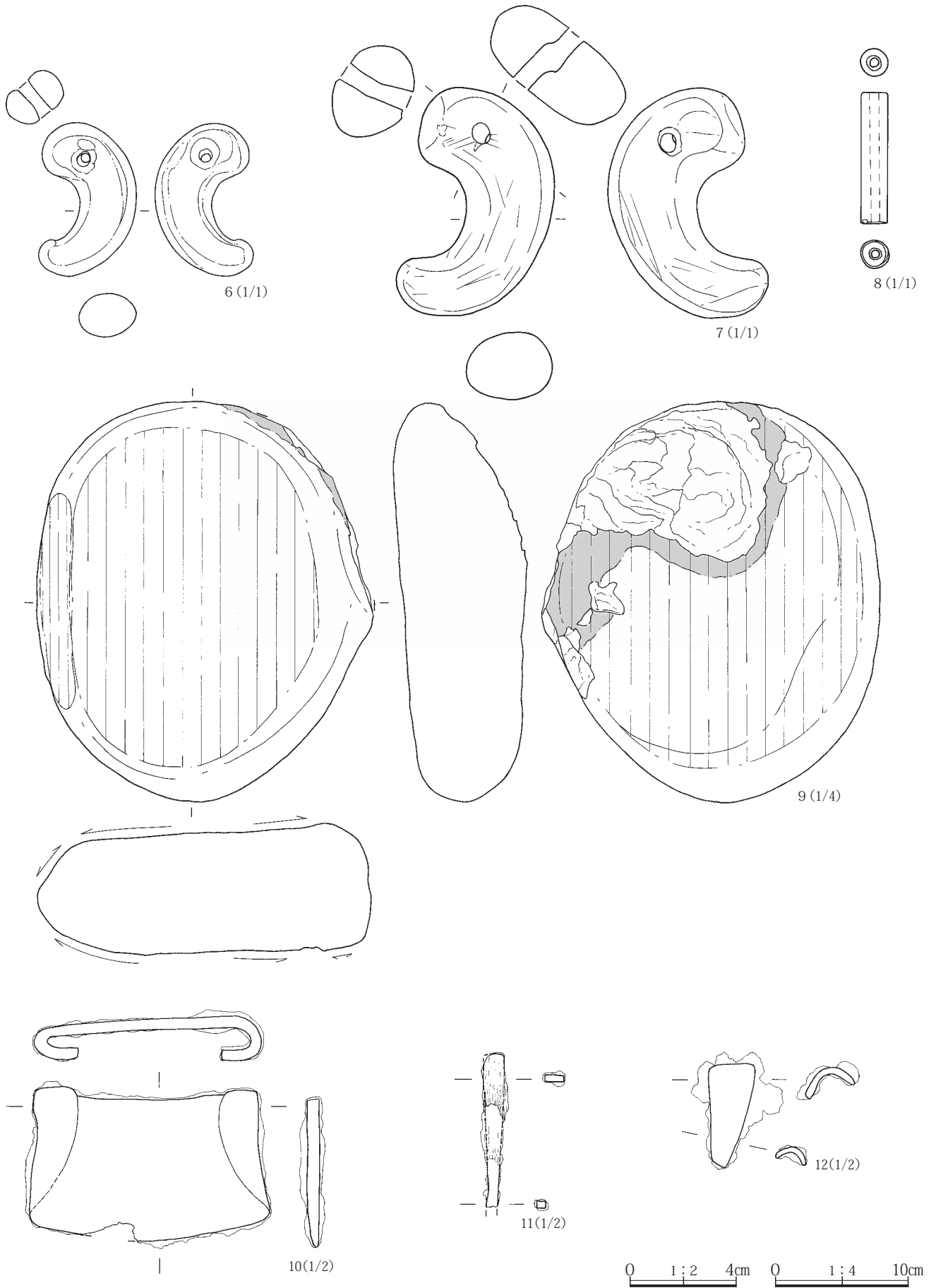
炉 検出されなかった。

出土遺物 図示した遺物は土師器埴・小型甕・甕、石製品勾玉・擦石、鉄製方形鋏先など12点である。このうち、土器は床面からの出土である。8の管玉は床面より20cm

ほど上位からの出土である。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片8点・小型製品片18点が出土している。  
**所見** 本竪穴住居内からは、炭化材や焼土が認められた。廃絶後、再利用できない部材などを焼却した可能性が窺えた。時期は床面より出土した遺物から5世紀前半に比定できる。



第246図 2区23号竪穴住居遺構図・出土遺物図(1)



第247图 2区23号竖穴住居出土遺物图(2)

2区28号竪穴住居(第248・249図、PL.124・181)

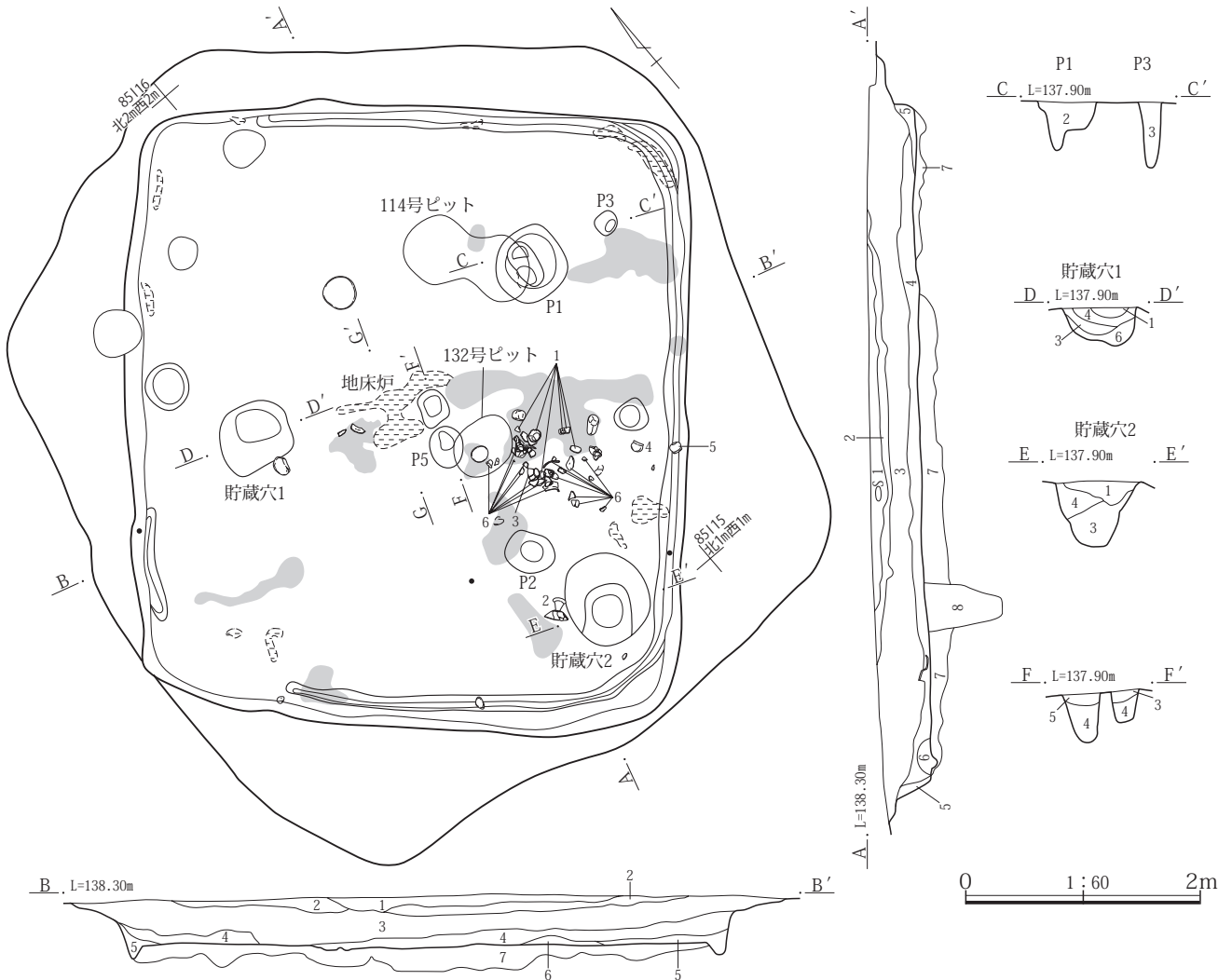
位置 2区調査区北西部、85区H-15、I-15・16、J-15に位置する。

重複 小規模な114号ピットなどと重複する。新旧関係

は本竪穴住居のほうが古い。

形状 確認時は壁上半の崩落のためか不整形にみられたが、竪穴住居本体は南北に長い隅丸長方形を呈す。

規模 長軸5.30m、短軸4.82mを測る。



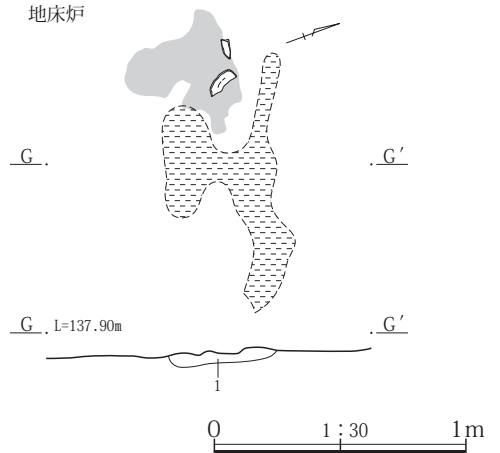
A-A'・B-B'

1. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・黄色砂質ローム粒子含む。
2. Hr-FA
3. 黒褐色土 白色軽石粒多量含む。
4. にぶい黄褐色土 白色軽石粒少量・焼土粒子・炭化物含む。
5. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量含む。
6. 焼土層
7. 灰黄褐色土 焼土粒・白色軽石粒微量含む。
8. 灰黄褐色土 焼土粒・白色軽石粒微量含む。縮まりやや弱い。

C-C'・D-D'・E-E'・F-F'

1. 黒褐色土 白色軽石粒多量含む。
2. 黒褐色土 白色軽石粒多量・炭化物少量含む。
3. 黒褐色土 白色軽石粒少量含む。
4. 暗褐色土 白色軽石粒少量・にぶい黄褐色砂質ローム粒子・焼土粒子含む。
5. 暗褐色土 白色軽石粒少量・炭化物多量含む。
6. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量含む。

地床炉



G-G'

1. 暗赤褐色土 焼土粒子を含む。地床炉、地山が焼土化する。

第248図 2区28号竪穴住居遺構図

面積 22.67㎡

方位 N-43°-E

**埋没状態** 土層断面では三角堆積、レンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。なお、埋没土上位ではHr-FAの堆積がみられた。

**床面** 掘方面より10～20cmほど灰黄褐色土を埋め戻して構築していた。床面の状態は、若干の凹凸がみられたが、ほぼ平坦であった。なお、床面では焼土や炭が散乱している状態が検出された。

確認面から床面までの深さは、0.51～0.62mを測る。

**掘方** 浅い掘り込みが住居全体に施されていたが、床下土坑などの施設は検出されなかった。

**壁溝** 北辺西南角から1mから東辺、南辺の南西角手前1mと西辺の南西角寄りの一部の壁下で検出した。規模は上端0.08～0.25m、下端0.03～0.10m、深さ0.03～0.09mを測る。

**柱穴** 東辺寄りの竪穴住居対角線上で2本を検出した。P1は、形状が円形を呈し、規模は径0.60m、深さ0.48mを測る。P2は、形状が楕円形を呈し、規模は長軸0.42m、短軸0.34m、深さ0.71mを測る。柱穴間は2.30mで

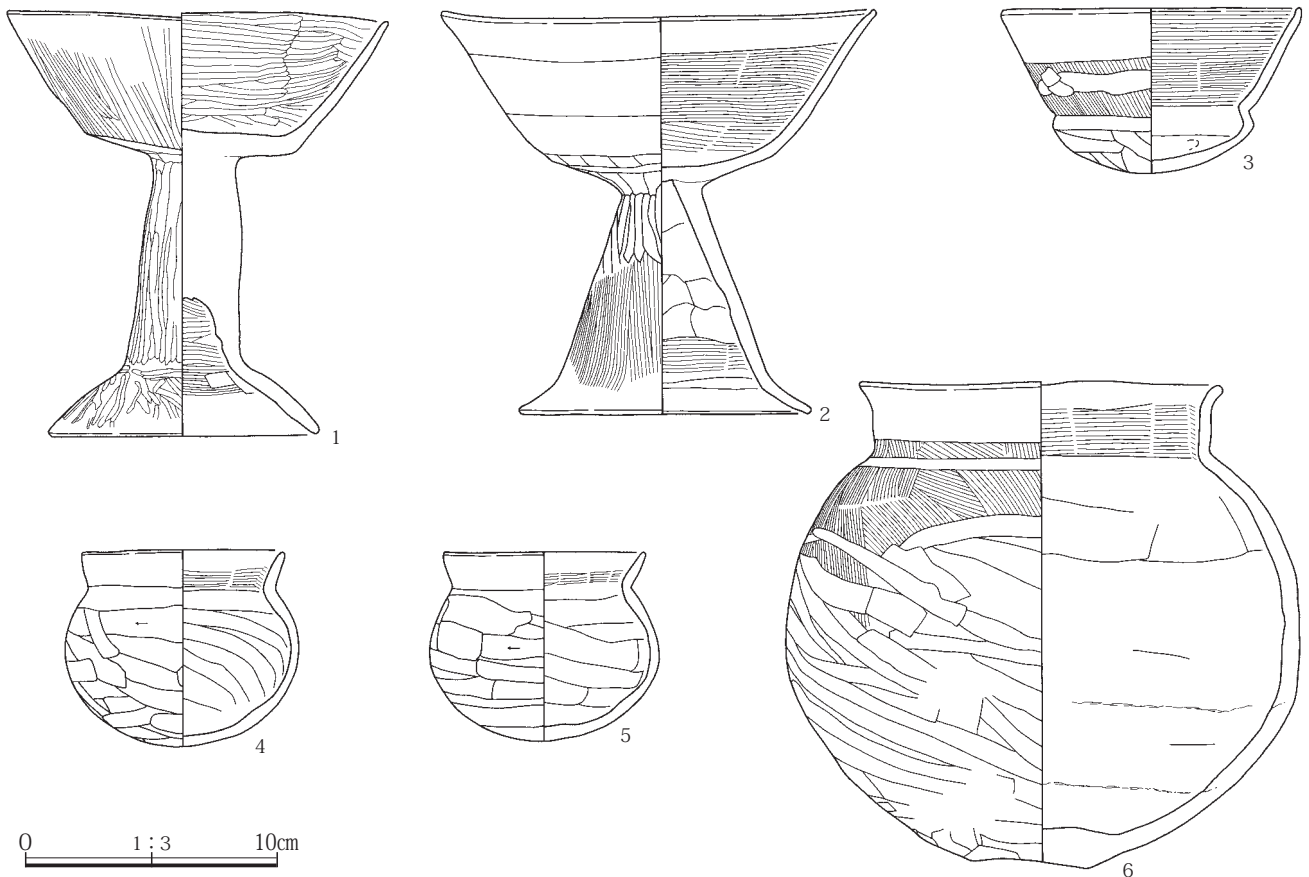
ある。なお、P1の東側に径は0.20mと小規模であるが、深さが0.59mと深いP3が存在するが、これは柱穴P1の補助的なものである可能性が窺える。

**貯蔵穴** 炉に近接するものを貯蔵穴1とし、南東隅に位置するものを貯蔵穴2と判断した。貯蔵穴1は、形状が矩形に近い。規模は長軸0.60m、短軸0.54m、深さ0.28mを測る。貯蔵穴2は、形状が楕円形状を呈し、規模は長軸0.78m、短軸0.70m、深さ0.57mを測る。ともに内部から遺物の出土はみられなかった。

**炉** 住居全体に焼土が散乱していたため、確実に炉と認定できるものがみられなかった。その中でも中央部分で床面に不整形ではあるが焼土を検出したので、炉と判断した。被熱範囲は長軸1.05m、短軸0.42mを測る。被熱の深さは最大で0.16mであった。

**出土遺物** 図示した遺物は、土師器高杯・小型壺・小型甕・甕の6点である。これらの土器は、床面からの出土である。図示した以外の遺物では、土師器大型製品片2点・小型製品片7点が出土している。

**所見** 本竪穴住居の時期は、床面より出土した遺物から5世紀前半に比定できる。



第249図 2区28号竪穴住居出土遺物図

## 2. 掘立柱建物・柵

掘立柱建物7棟と柵は2条を検出した。

掘立柱建物7棟のうち、6棟が2区から、1棟が3区からである。2区で検出した掘立柱建物は、調査区の北東部分、台地上の比較的傾斜の緩やかな箇所にとまって立地していた。建物自体はすべて側柱建物であり、桁行方向も比較的近似した方向を示している建物もみられるが、時期を特定できる遺物などは出土していないため、同時存在の建物を特定するまでには至っていない。また、柱穴は全体的に小規模なもので、建物自体は簡易的なものであった可能性が高い。

柵は、ピットが比較的直線的に並ぶことから柵の遺構とした。しかし、柱痕は確認していない、また各ピットの規模や間隔に差がみられる。いずれも2区調査区で検出した。その位置は2区20号竪穴住居と34号竪穴住居の間に並列していた。調査時には、柱穴が相対で位置することから同時に存在した可能性も想定されていたが、確認を得るには至っていない。

なお、掘立柱建物・柵の柱穴の形状、規模、柱穴間距離については表にて表示してある。

### 2区1号掘立柱建物(第250図、PL.125)

**位置** 2区調査区北西隅、85区J-18・19に位置する。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独で占地している。なお、3号掘立柱建物とは近接する位置関係である。

**形状・規模** 調査時には、北辺と東辺の中間にあるピットを本掘立柱建物に伴うものと想定したが、柱穴間距離からみると梁行1間、桁行1間の建物である。なお、各辺長は北辺2.50m、東辺2.30m、南辺2.65m、西辺2.20mと歪んだ長方形を呈す。

**面積** 5.76㎡

**方位** N-56°-E

**柱穴** すべての柱穴で柱痕は、確認されていない。柱穴内の埋没土は、白色軽石粒を含む灰黄褐色土の単一であり、柱が建ったまま放置されたか、抜き取られたかについても不明である。

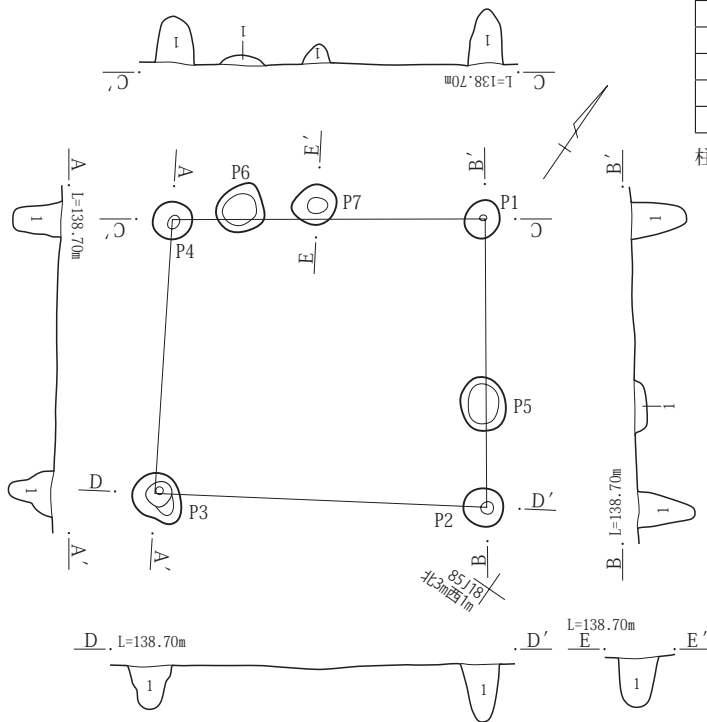
**遺物** 遺物の出土はみられない。

**所見** 遺物が出土していないため、遺物から時期の比定はできないが、柱穴の埋没土にAs-Cとみられる軽石が含まれていることから古墳時代中期以降に比定できる。

第6表 2区1号掘立柱建物柱穴計測表

柱穴NO.	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	柱穴間(m)
P 1	0.30	0.28	0.45	1.50
P 5	0.32	0.30	0.11	0.80
P 2	0.44	0.36	0.47	2.60
P 3	0.30	0.30	0.37	2.14
P 4	0.42	0.36	0.40	0.54
P 6	0.40	0.38	0.09	0.60
P 7	0.34	0.32	0.41	1.34

柱穴間は次の柱穴との距離、最後はP 1との距離を表す。



A-A'・B-B'・C-C'・D-D'・E-E'

1. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・スコリア微量含む。

第250図 2区1号掘立柱建物遺構図



2区2号掘立柱建物(第251図、PL.125)

**位置** 2区調査区北端寄り、85区D-17・18、E-17・18に位置する。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独で占地している。

**形状・規模** 梁行2間、桁行3間の側柱建物である。各辺長は東辺3.50m、南辺5.12m、西辺3.20m、北辺5.07mと東西の梁間長さに0.3mほどの差がみられるため歪んだ長方形を呈す。

**面積** 17.42㎡

**方位** N-67°-E

**柱穴** 西側の梁間では柱穴が2本検出されたが、柱穴間距離を考慮するとP7の位置が適しているとみられる。しかし、P11の底面付近には柱が置かれていた痕跡がみられることから建て替えまたは支柱穴の可能性も想定さ

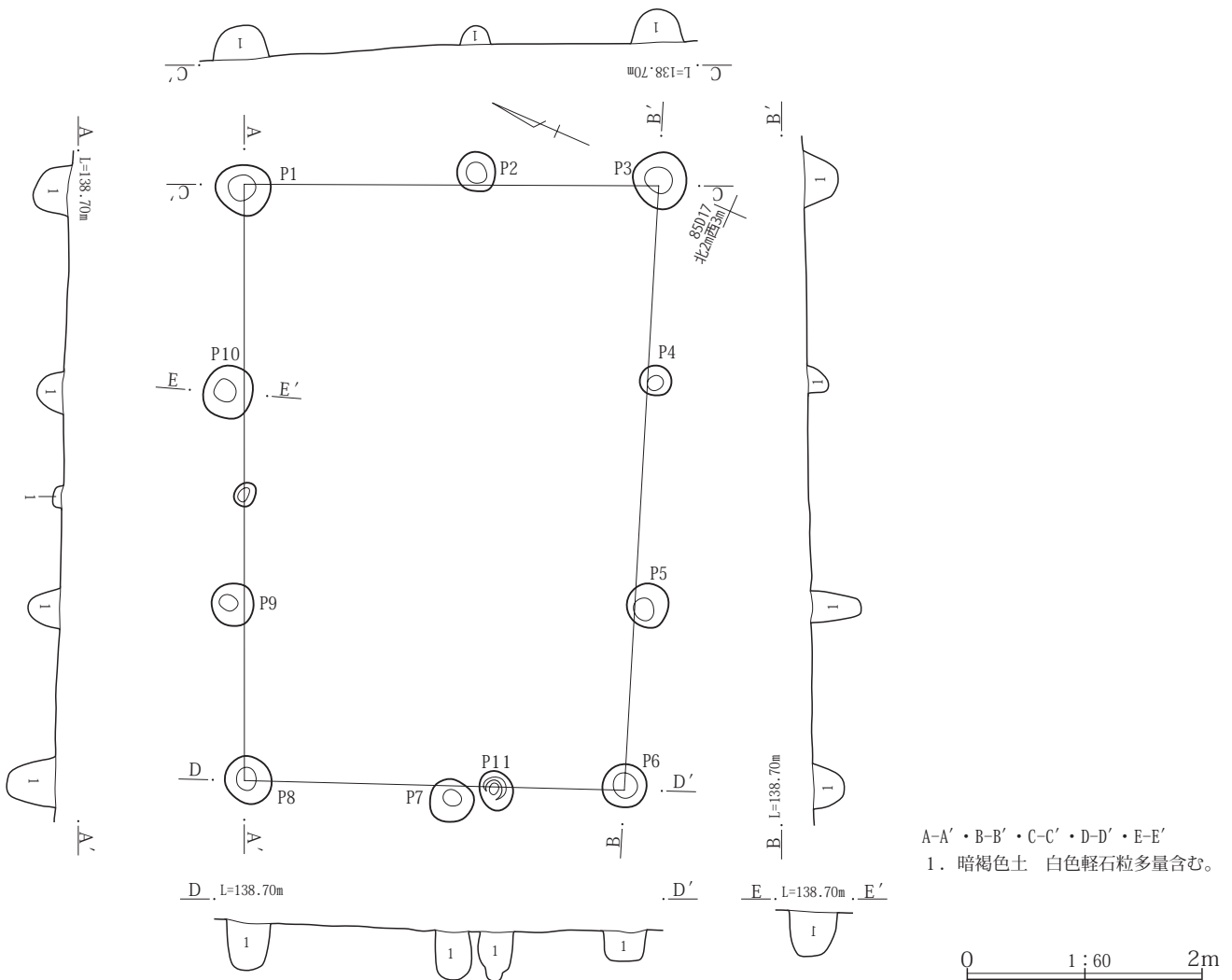
れる。なお、すべての柱穴で柱痕は、確認されていない。柱穴内の埋没土は、白色軽石粒を含む灰黄褐色土の単一であり、柱が建ったまま放置されたか、抜き取られたかについても不明である。

**遺物** 遺物の出土はみられない。

**所見** 遺物が出土していないため、遺物から時期の比定はできないが、柱穴の埋没土にAs-Cとみられる軽石が含まれていることから古墳時代中期以降に比定できる。

第7表 2区2号掘立柱建物柱穴計測表

柱穴No.	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	柱穴間(m)
P 1	0.48	0.46	0.33	2.00
P 2	0.34	0.34	0.21	1.58
P 3	0.50	0.48	0.30	1.74
P 4	0.28	0.24	0.18	1.96
P 5	0.38	0.36	0.44	1.50
P 6	0.38	0.38	0.28	1.10
P11	0.34	0.28	0.42	0.38
P 7	0.36	0.36	0.44	1.74
P 8	0.40	0.38	0.45	1.52
P 9	0.38	0.36	0.38	1.82
P10	0.46	0.44	0.39	1.72



第251図 2区2号掘立柱建物遺構図

2区3号掘立柱建物(第252図、PL.125)

**位置** 2区調査区北西隅、85区I-17・18、J-17・18に位置する。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独で占地している。なお、1号掘立柱建物とは近接する位置関係である。

**形状・規模** 西側の梁間では柱穴が1本しか検出されず、南の桁間では西側の柱穴が不均衡で2本の柱穴が検出されているが、梁行3間、桁行3間の側柱建物と想定される。各辺長は東辺4.90m、南辺5.00m、西辺4.95m、北辺5.10mと比較的均一な方形を呈す。

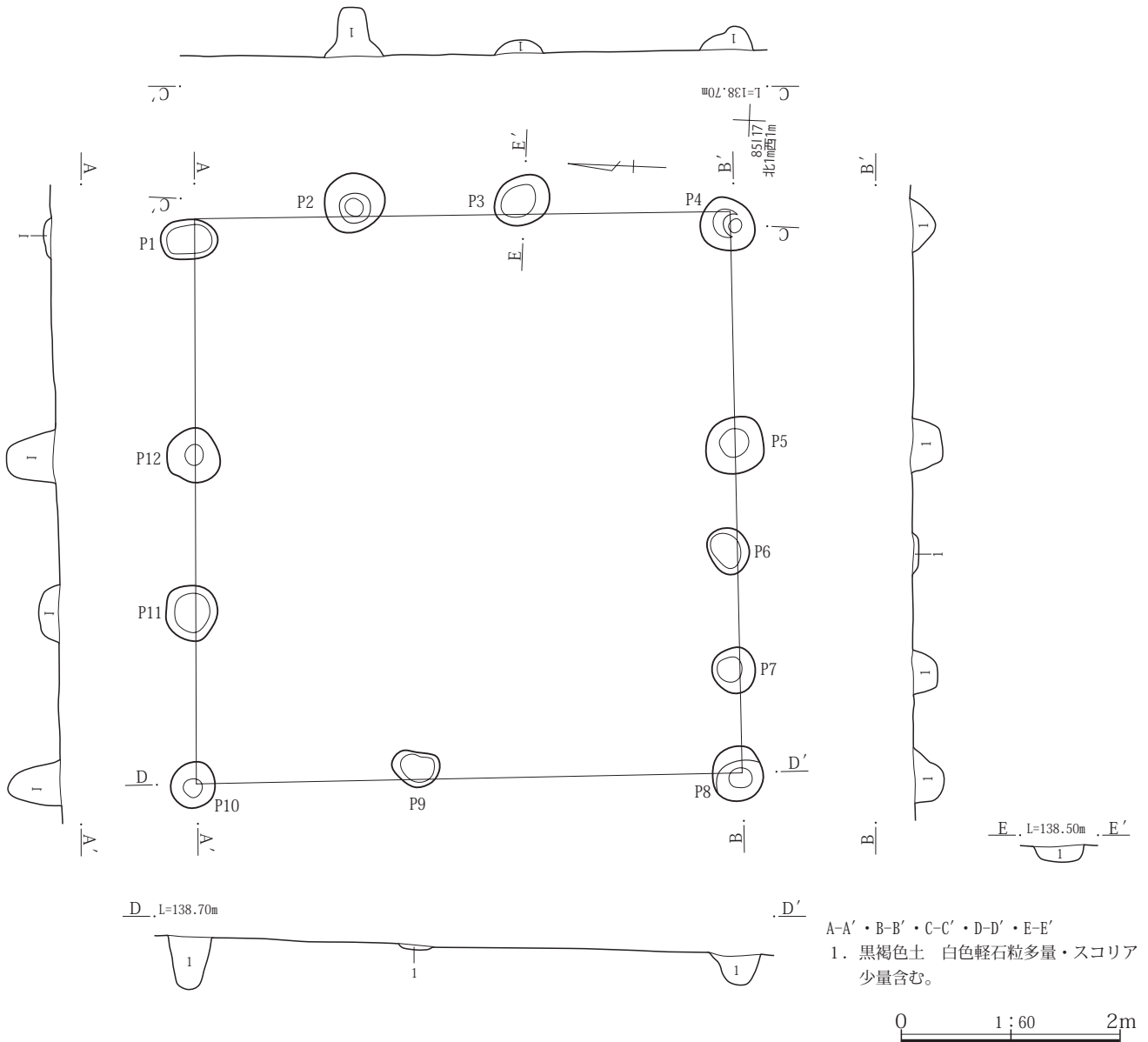
**面積** 25.36㎡

**方位** N-88°-E

**柱穴** 前記のように南側の桁間では北側の柱穴P11に対応する位置に柱穴が存在せず、ややずれた位置に柱穴P6とP7が検出されている。このどちらが該当するか、また両方が該当するかについて判断ができないため併記した。なお、すべての柱穴で柱痕は、確認されていない。柱穴内の埋没土は、白色軽石粒を含む黒褐色土の単一であり、柱が建ったまま放置されたか、抜き取られたかについても不明である。

**遺物** 柱穴P5とP10から土師器甕のごく小片が出土しているが、図示できるものではない。

**所見** 遺物が出土しているが、ごく小片のため詳細は不明であるが、この破片からは、古墳時代後期に想定できる。



第252図 2区3号掘立柱建物遺構図

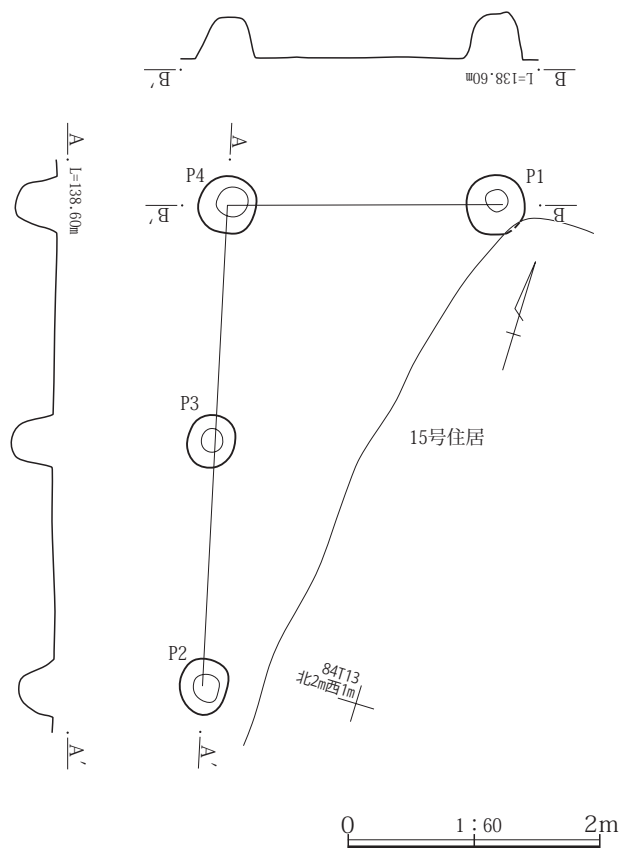
第8表 2区3号掘立柱建物柱穴計測表

柱穴No	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	柱穴間(m)
P 1	0.52	0.36	0.10	1.56
P 2	0.58	0.54	0.45	1.50
P 3	0.54	0.44	0.15	2.00
P 4	0.50	0.48	0.24	2.00
P 5	0.58	0.50	0.28	1.00
P 6	0.42	0.36	0.06	1.10
P 7	0.42	0.40	0.22	1.00
P 8	0.50	0.46	0.30	3.00
P 9	0.44	0.32	0.08	2.10
P 10	0.44	0.40	0.50	1.56
P 11	0.50	0.50	0.16	1.46
P 12	0.48	0.48	0.43	1.96

柱穴間は次の柱穴との距離、最後はP 1との距離を表す。

2区4号掘立柱建物(第253図、PL.125)

位置 2区調査区北東部分、84区T-13・14に位置する。



第253図 2区4号掘立柱建物遺構図

第9表 2区4号掘立柱建物柱穴計測表

柱穴No	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	柱穴間(m)
P 1	0.48	0.46	0.38	-
P 2	0.44	0.38	0.25	2.00
P 3	0.41	0.38	0.35	1.86
P 4	0.46	0.46	0.34	2.15

重複する竪穴住居によって東半を欠くため全貌は不明である。

**重複** 2区15号竪穴住居と重複する。新旧関係は判然としないが、本掘立柱建物のほうが古い。

**形状・規模** 検出した状況から判断すると梁行1間、桁行2間の側柱建物と想定される。各辺長は北辺2.15m、西辺3.83m、北西角が95度とやや広角で長方形を呈すると想定される。

**面積** 調査範囲が一部のため不明。

**方位** N-14°-W

**柱穴** すべての柱穴で柱痕は、確認されていない。柱穴内の埋没土は、白色軽石粒を含む暗褐色土の単一であり、柱が建ったまま放置されたか、抜き取られたかについても不明である。

**遺物** 柱穴P 1から土師器壺とみられるごく小片が出土しているが、図示できるものではない。

**所見** 本掘立柱建物の時期は、重複する竪穴住居の時期から6世紀以前と想定される。

2区5号掘立柱建物(第254図、PL.125)

位置 2区調査区北西部、85区G-16・17、H-16・17に位置する。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独で占地している。なお、4号竪穴住居とは近接する位置関係である。

**形状・規模** 梁行2間、桁行3間の側柱建物である。各辺長は東辺4.02m、南辺5.07m、西辺4.32m、北辺5.10mと比較的均一な長方形を呈す。

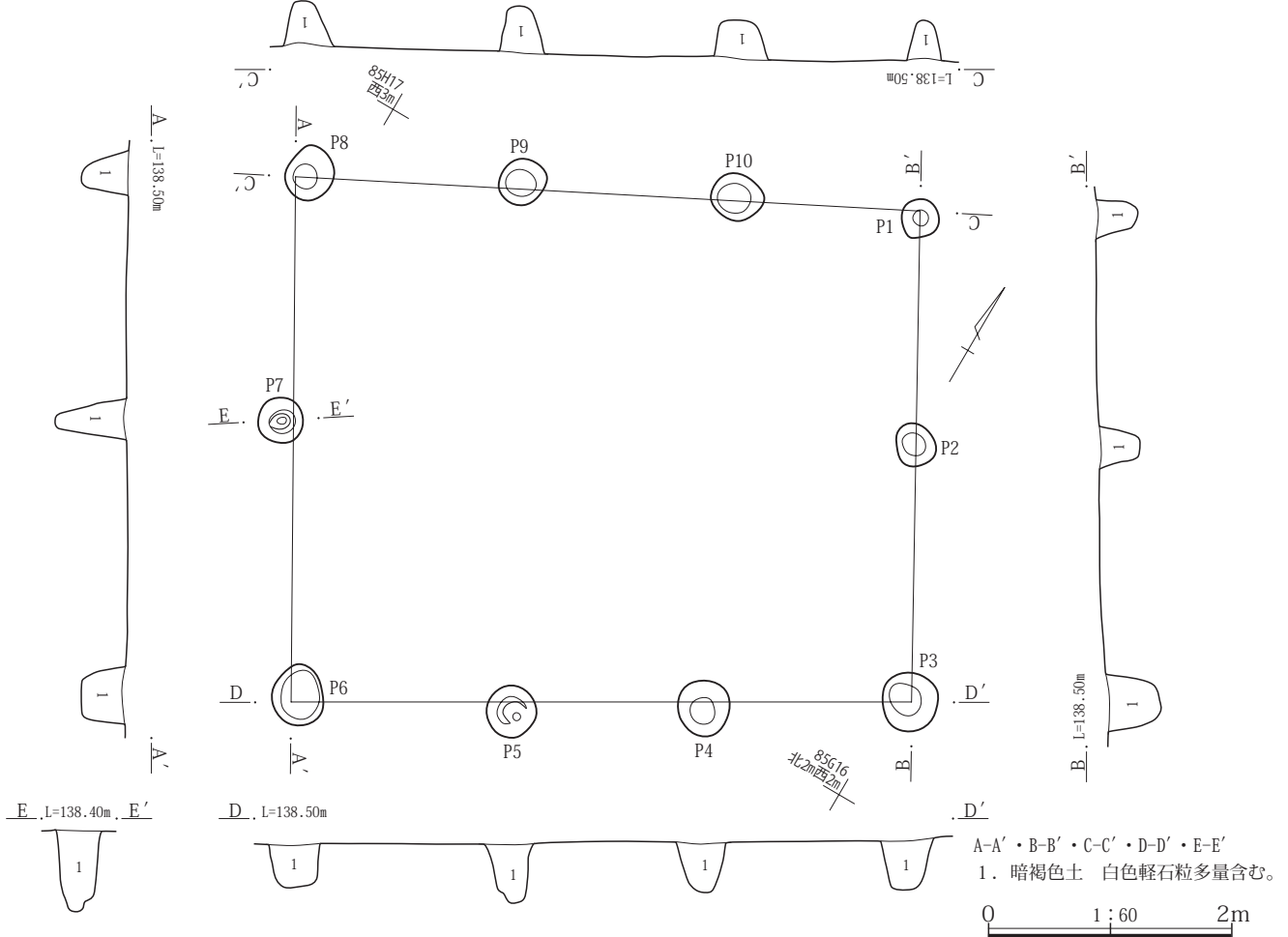
**面積** 21.44m<sup>2</sup>

**方位** N-59°-E

**柱穴** 柱穴P 7の底面では柱の痕跡が観察され、柱径は12~15cmであったと推定されるが、その他の柱穴での柱痕は、確認されていない。柱穴内の埋没土は、白色軽石粒を含む暗褐色土の単一であり、柱が建ったまま放置されたか、抜き取られたかについても不明である。

**遺物** 柱穴P 7から土師器甕のごく小片が出土しているが、図示できるものではない。

**所見** 遺物が出土しているが、ごく小片のため詳細は不明であるが、この破片からは、古墳時代後期に想定できる。



第254図 2区5号掘立柱建物遺構図

第10表 2区5号掘立柱建物柱穴計測表

柱穴No.	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	柱穴間(m)
P 1	0.32	0.32	0.35	1.86
P 2	0.36	0.34	0.35	2.10
P 3	0.48	0.46	0.45	1.70
P 4	0.46	0.42	0.43	1.56
P 5	0.43	0.40	0.52	1.80
P 6	0.51	0.42	0.35	2.30
P 7	0.38	0.38	0.65	2.00
P 8	0.46	0.40	0.41	1.78
P 9	0.40	0.38	0.41	1.75
P 10	0.43	0.40	0.34	1.54

柱穴間は次の柱穴との距離、最後はP 1との距離を表す。

2区6号掘立柱建物(第255図、PL.125)

**位置** 2区調査区中央よりやや北西寄り、85区F-14・15、G-13・14に位置する。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独で占地している。なお、25号竪穴住居とは近接する位置関係である。

**形状・規模** 梁行2間、桁行3間の側柱建物である。各辺長は東辺4.02m、南辺6.87m、西辺3.95m、北辺6.92mと比較的均一な長方形を呈す。

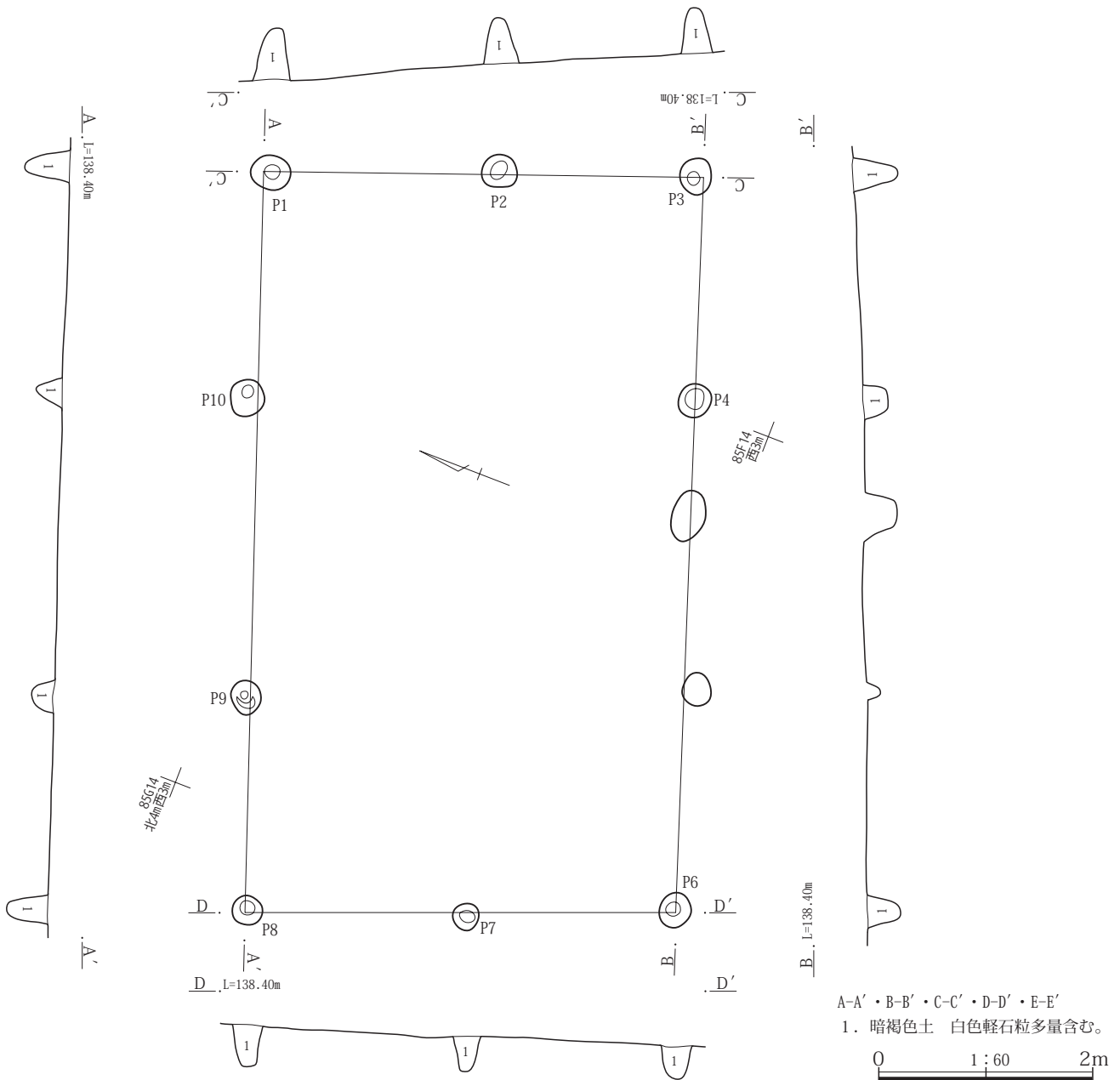
**面積** 28.46m<sup>2</sup>

**方位** N-68°-E

**柱穴** 柱穴P 2の底面で柱の痕跡がみられたが、他の柱穴での柱痕は、確認されていない。柱穴内の埋没土は、白色軽石粒を含む暗褐色土の単一であり、柱が建ったまま放置されたか、抜き取られたかについても不明である。

**遺物** 遺物の出土はみられない。

**所見** 遺物が出土していないため、遺物から時期の比定はできないが、柱穴の埋没土にAs-Cとみられる軽石が含まれていることから古墳時代中期以降に比定できる。



第255図 2区6号掘立柱建物遺構図

第11表 2区6号掘立柱建物柱穴計測表

柱穴No.	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	柱穴間(m)
P 1	0.38	0.32	0.48	2.12
P 2	0.34	0.32	0.46	1.80
P 3	0.34	0.30	0.34	2.06
P 4	0.32	0.30	0.25	4.78
P 6	0.33	0.30	0.32	1.94
P 7	0.24	0.24	0.33	2.04
P 8	0.28	0.28	0.40	2.00
P 9	0.32	0.28	0.30	2.85
P 10	0.36	0.32	0.49	2.06

柱穴間は次の柱穴との距離、最後はP 1との距離を表す。

3区1号掘立柱建物(第256図、PL.125)

**位置** 3区調査区南端寄り、84区A-2・3、B-2・3に位置する。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されず、単独で占地している。

**形状・規模** 梁行2間、桁行2間の側柱建物である。各辺長は東辺4.98m、南辺5.09m、西辺4.92m、北辺5.14mと比較的均一な方形を呈す。

**面積** 25.27㎡

**方位** N-85°-E

**柱穴** 柱痕は柱穴P 7の底面で痕跡がみられたが、他の柱穴での痕跡は、確認されていない。なお、柱穴P 7と

P 8では建て替えが行われていたとみられるが、他の柱穴では観察されていない。柱穴の土層断面では抜き取りなどの痕跡は観察できなかった。

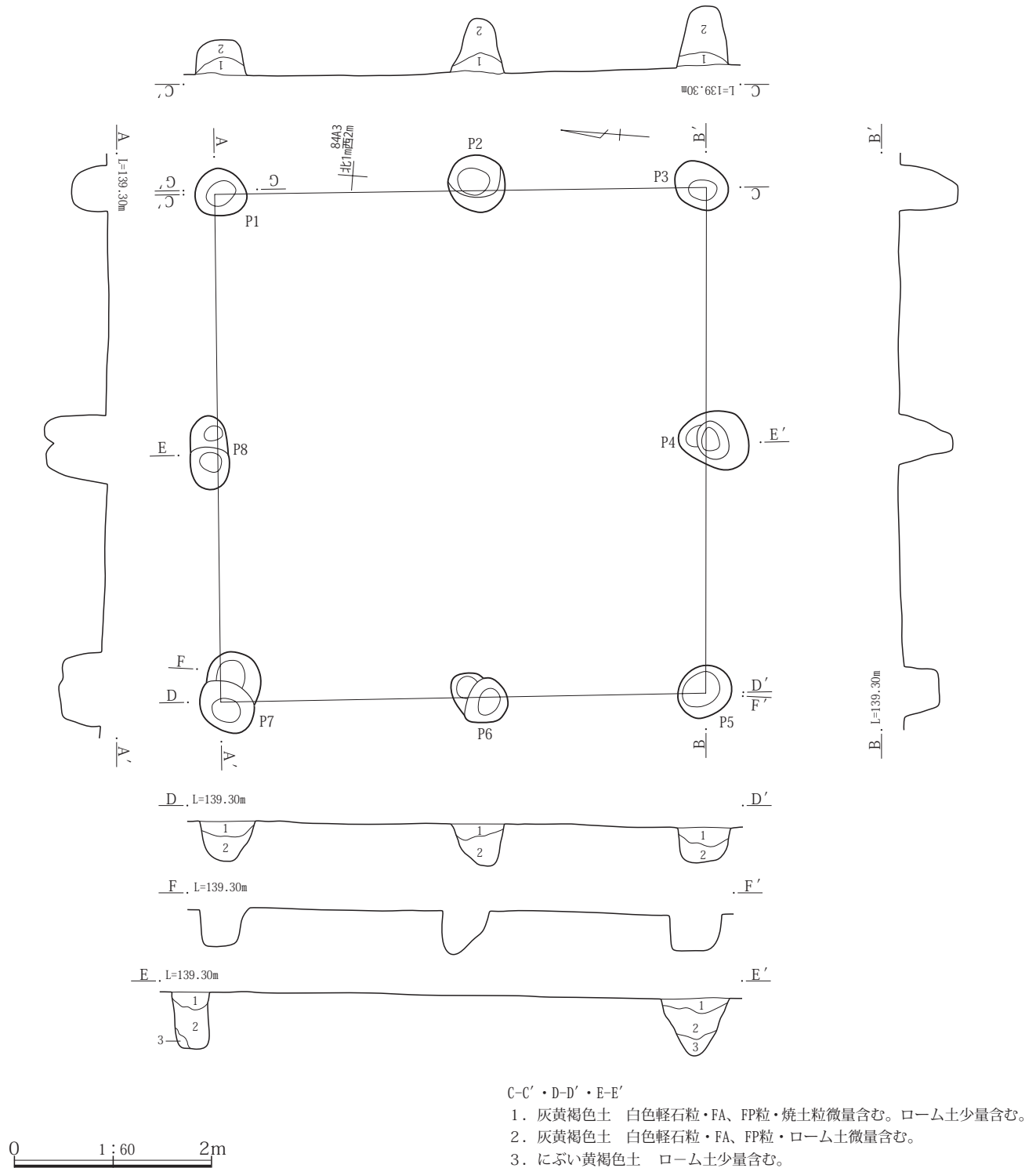
**遺物** 遺物の出土はみられない。

**所見** 遺物が出土していないため、遺物から時期の比定はできないが、柱穴の埋没土にAs-Cとみられる軽石が含まれていることから古墳時代中期以降に比定できる。

第12表 3区1号掘立柱建物柱穴計測表

柱穴No.	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	柱穴間(m)
P 1	0.52	0.50	0.36	2.60
P 2	0.58	0.58	0.57	2.30
P 3	0.58	0.46	0.62	2.52
P 4	0.72	0.60	0.54	2.54
P 5	0.56	0.50	0.39	2.20
P 6	0.62	0.50	0.43	2.60
P 7	0.80	0.58	0.43	2.44
P 8	0.76	0.40	0.63	2.50

柱穴間は次の柱穴との距離、最後はP 1との距離を表す。



第256図 3区1号掘立柱建物遺構図

2区2号柵(第257図、PL.125)

**位置** 2区の中ほど、38号竪穴住居の北側、20号竪穴住居と34号竪穴住居の間、85区C・D-15に位置し、南側の3号柵とは平行関係にある。

**重複** 確認時には、他遺構との重複関係は確認されず、単独で占地しているが、柵という遺構の性格からすると20号・34号竪穴住居とは重複していた可能性がある。

**形状** ほぼ東西に柱穴が6本直線状に並ぶことから柵と判断した。

**規模** 確認した範囲では全長7.80mを測る。

**方位** N-86°-E

**柱穴** すべての柱穴で柱痕は、確認されていない。柱穴内の埋没土は、Hr-FAを多量に含む黄褐色土の単一であり、柱が建ったまま放置されたか、抜き取られたかについても不明である。

**遺物** 遺物の出土はみられない。

**所見** 遺物が出土していないため、遺物から時期の比定はできないが、柱穴の埋没土にHr-FAが含まれていることから古墳時代後期以降に比定できる。

**重複** 確認時には、他遺構との重複関係は確認されず、単独で占地しているが、柵という遺構の性格からすると20号・34号竪穴住居とは重複していた可能性がある。

**形状** ほぼ東西に柱穴が4本直線状に並ぶことから柵と判断した。

**規模** 確認した範囲では全長6.25mを測る。

**方位** N-86°-E

**柱穴** すべての柱穴で柱痕は、確認されていない。柱穴内の埋没土は、Hr-FAを多量に含む灰黄褐色砂質土の単一であり、柱が建ったまま放置されたか、抜き取られたかについても不明である。

**遺物** 遺物の出土はみられない。

**所見** 遺物が出土していないため、遺物から時期の比定はできないが、柱穴の埋没土にHr-FAが含まれていることから古墳時代後期以降に比定できる。

第13表 2区2号柵柱穴計測表

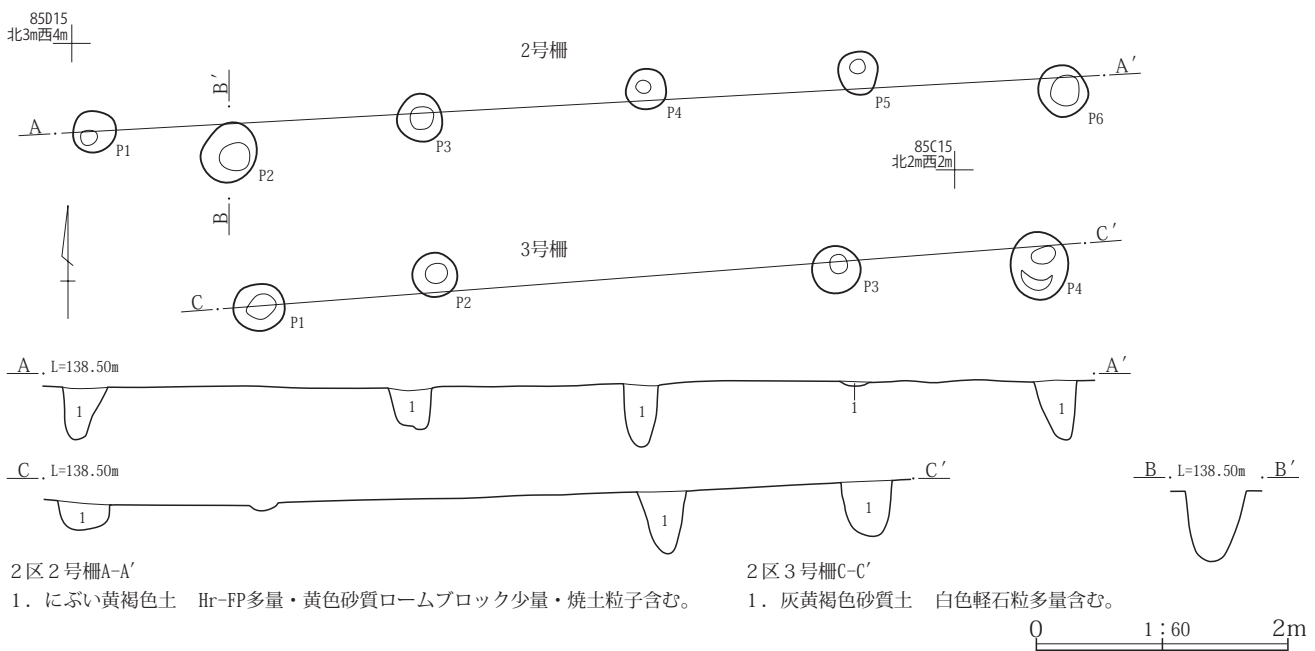
柱穴No.	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	柱穴間(m)
P 1	0.34	—	0.43	1.10
P 2	0.48	0.44	0.56	1.54
P 3	0.38	0.36	0.35	1.80
P 4	0.34	—	0.51	1.70
P 5	0.34	0.32	0.50	1.65
P 6	0.40	—	0.52	

2区3号柵(第257図、PL.125)

**位置** 2区の中ほど、38号竪穴住居の北側、20号竪穴住居と34号竪穴住居の間、85区C・D-15に位置し、北側の2号柵とは平行関係にある。

第14表 2区3号柵柱穴計測表

柱穴No.	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	柱穴間(m)
P 1	0.40	0.37	0.23	1.44
P 2	0.36	0.36	0.41	3.20
P 3	0.38	0.38	0.51	1.65
P 4	0.54	0.46	0.20	



第257図 2区2号・3号柵遺構図

### 3. 墳 墓

古墳時代の墳墓は、6基を調査した。すべて1区において検出している。6基のうち、墳丘盛土を有していたと想定されるのは5号墳と6号墳である。その他の1号墳～4号墳は、竪穴式小石槨である。1号墳から4号墳は、調査区の南西部分で検出され、墳丘盛土を有していなかったと考えられる。墳丘盛土を有していたと想定される2基の古墳も墳丘自体は後世の耕作などによって削られ、墳丘自体は残存していなかった。このうち、5号墳は天井石を欠くが横穴式石室が比較的良好な状態で残存していた。もう1基の6号墳は、調査区の北西部分で検出され、周堀の状態から方墳とみられるが、後世の耕

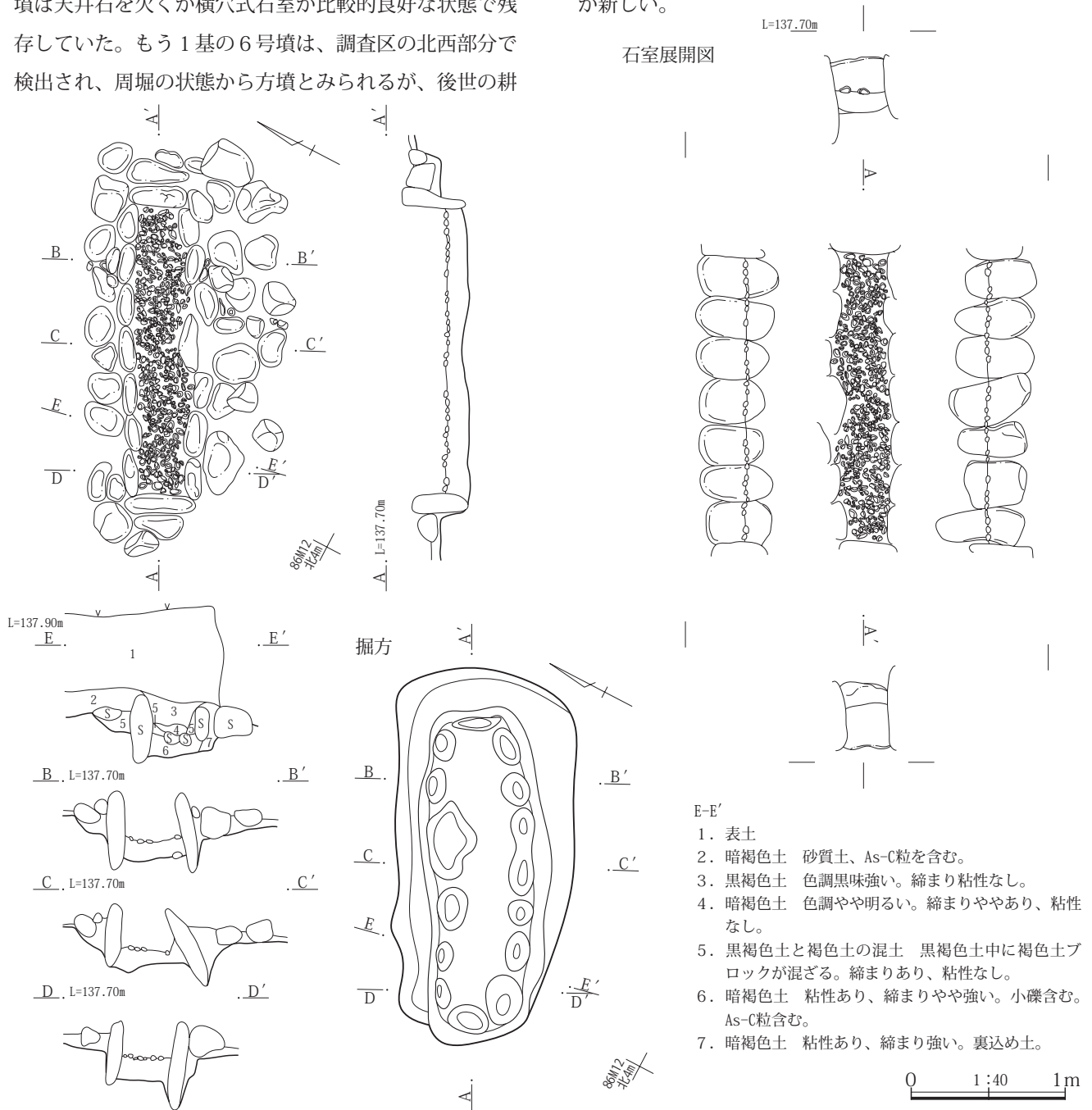
作などを受けたためか主体部は既に消滅しており、周堀部分が残存するだけであった。

今回、調査した古墳6基については出土遺物が少なく時期については、概ね5世紀から6世紀に比定されるが、詳細な時期については確定することができなかった。

#### 1区1号墳(第258図、PL.126)

**位置** 1区調査区南西部の調査区西端、86区L-12・13、M-12・13である。

**重複** 11号竪穴住居と重複する。新旧関係は、本墳の方が新しい。



E-E'

1. 表土
2. 暗褐色土 砂質土、As-C粒を含む。
3. 黒褐色土 色調黒味強い。縮まり粘性なし。
4. 暗褐色土 色調やや明るい。縮まりややあり、粘性なし。
5. 黒褐色土と褐色土の混土 黒褐色土中に褐色土ブロックが混ざる。縮まりあり、粘性なし。
6. 暗褐色土 粘性あり、縮まりやや強い。小礫含む。As-C粒含む。
7. 暗褐色土 粘性あり、縮まり強い。裏込め土。



**墳丘** 墳丘盛土や周堀の痕跡は確認されなかった。

**主体部** 主体部は、竪穴式小石槨である。長軸方位は、N-63°-Eを測る。規模は内法で、長軸1.85m、短軸0.25m～0.30mである。遺構確認面から床面までの深さは0.05m～0.20mである。短軸長は、西側の方が広く0.30m、東側の方が短く0.25mを測る。他遺跡の多くの事例では、頭位側の幅が広く、足位側が狭いことから、本墳では西壁側が頭位と考えられる。しかし、本遺跡で検出された他の小石槨の頭位が東側であること、また、地形も東側が高いこと、東西壁内法の差がわずか0.05mであることなどから、本墳も東壁側を頭位にしていた可能性が考えられる。

壁面は、4壁すべてが残存していた。長軸側はそれぞれ0.20m～0.30mの短側辺(扁平な礫の長軸方向を縦方向にして据える)を内側に向け、7石の礫が据えられていた。本遺跡で検出された4基の石槨のうち、本墳だけが、壁石の据え方を異にしている。短軸側は、東壁で0.38mの短側辺を、西壁で0.46mの短側辺をそれぞれ内側に向けた礫1石が据えられていた。長軸側、短軸側の壁面の接点は、短軸側の礫が長軸側の礫の外側に位置している。蓋石は消失しており、確認されなかった。

床面は、掘方底面から約0.15m程度埋め戻し、平坦になるように調整したのち、直径0.03m～0.05m程の小礫を敷いていた。石槨壁背面には壁石を取り巻くように長軸0.15～0.40mの扁平な礫が平の面を上下にして寄せられていた。

掘方は旧地表を掘り込んでおり、平面形は石槨の形状を一回り大きくした隅丸の長方形で、規模は、長軸2.44m、短軸1.16m、旧地表からの深さ0.25mを測る。底面には壁石が設置された部分に相当する位置に小さな凹みが並んで確認された。壁石上端の水平を保つための造作と考えられる。

**出土遺物** 人骨及び図示できる副葬品は確認されなかった。この他に図示できなかった遺物として須恵器片1点42g、土師器片3点27gが出土していた。

**所見** 本墳は墳丘をほとんど有しない竪穴式小石槨と考えられる。築造時期は不明であるが、本遺跡内で調査された竪穴住居の時期、及び赤城南麓地域にみられる竪穴式小石槨の築造時期を考慮すると、5世紀後半から6世紀代の可能性が考えられる。

1区2号墳(第259図、PL.127)

**位置** 1区調査区南西部の調査区西端、1号墳墓の北側86区M-13、L-13である。

**重複** 他遺構との重複関係は、確認されなかった。

**墳丘** 墳丘盛土や周堀の痕跡は確認されなかった。

**主体部** 主体部は、竪穴式小石槨である。西壁の南側部分と南壁は欠失していた。石槨の長軸方位は、N-20°-Eを測る。規模は、内法で長軸方向の残存が0.80m、短軸は0.32m～0.38mである。遺構確認面から床面までの深さは0.12mである。短軸長は北側の方が広く0.38mを測る。南側の方が短い。頭位は不明であるが、本遺跡他小石槨墓の例から、北壁側の可能性が考えられる。

壁面は、3壁が残存していた。長軸側はそれぞれ0.20m～0.30mの長側辺(礫の長軸方向を横方向にして据える)を内側に向けた礫2石が残存しているが、掘方の規模、壁石の残存状況から、原形は3石により構成されていたと考えられる。短軸側は、北側が残存しており、0.40mの長側辺を内側に向けた礫1石が据えられていた。南側も同様に1石が据えられていたと推定される。北壁の短軸側の礫と長軸側の礫の接点をみると短軸側の礫を挟み込むように長軸側の礫が据えられていた。遺構確認時に床面直上から出土した2石は、壁石を構成していた礫石の一部である可能性も考えられるが、原位置を留めていなかったことから除去した。

床面は、掘方底面から約0.05m～0.10m程の厚さで埋め戻し、平坦になるように調整した後、直径0.03m～0.05m程の小礫を敷いていた。石槨壁背面は、暗褐色土を埋め戻した上に小礫が敷き詰められるようにして検出されている。裏込めと考えられる。

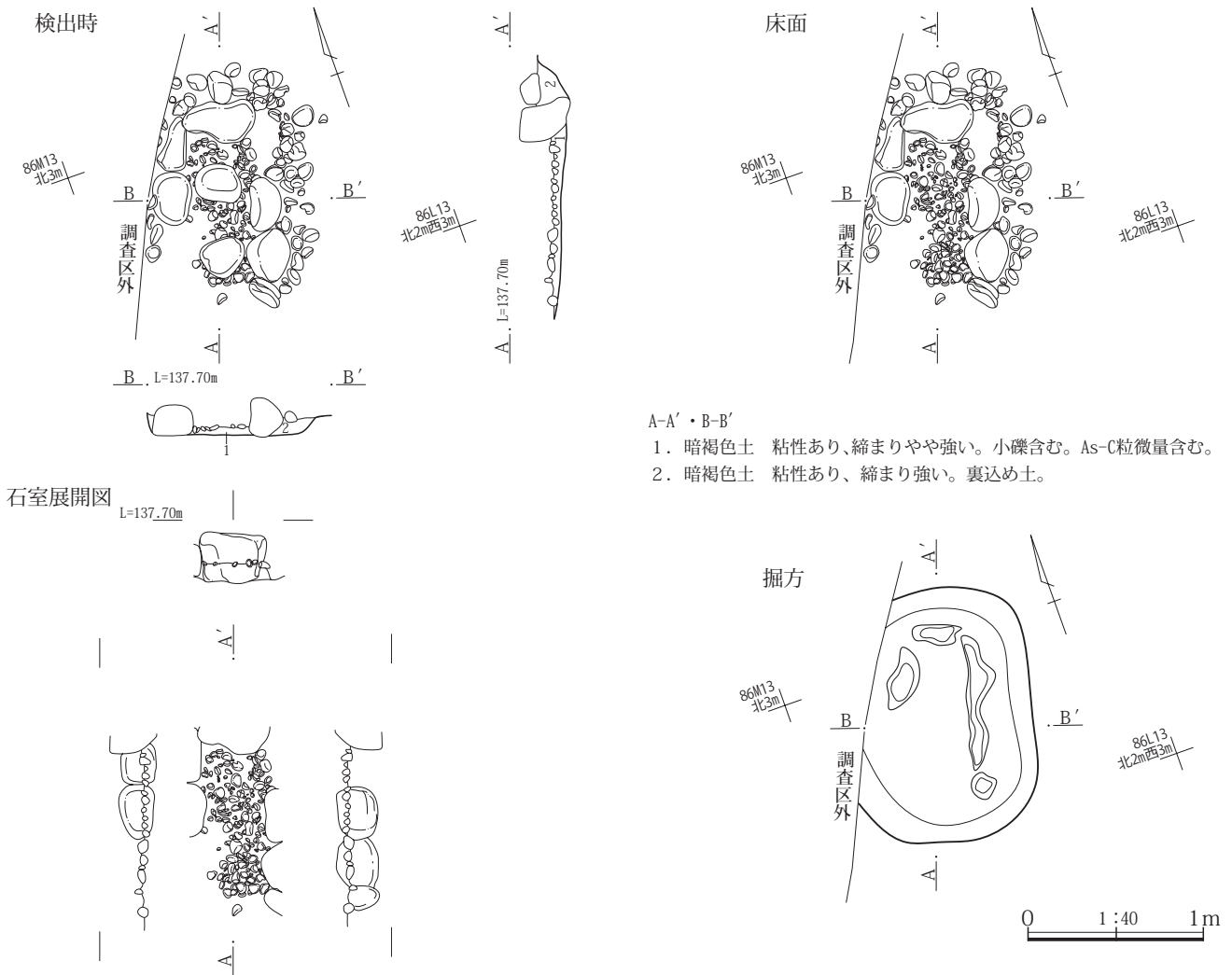
掘方は平面形が隅丸長方形を呈し、旧地表を掘り込んでいた。北西部分は調査区外に及んでいる。規模は、長軸1.44m、短軸0.98m以上、旧地表からの深さ0.22mを測る。底面には1号墳同様、壁石が設置された位置に凹地がみられた。

**出土遺物** 人骨及び図示できる副葬品は確認されなかった。この他に図示できなかった遺物として土師器片1点8gが出土していた。

**所見** 本墳は墳丘をほとんど有しない竪穴式小石槨と考えられる。長軸の内法の残存が0.8mであることから成人男子を伸展で納めることは困難と考えられる。築造時

期は不明であるが、1号墳同様、本遺跡内で調査された  
 竪穴住居の時期、及び赤城南麓地域にみられる竪穴式小

石槨の構築時期を考慮すると、5世紀後半から6世紀代  
 の可能性が考えられる。



第259図 1区2号墳遺構図

1区3号墳(第260・261図、PL.128・181)

**位置** 1区調査区の南西部、2号竪穴住居の北側86区H-15である。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されなかった。

**墳丘** 墳丘盛土、周堀の痕跡は確認されなかった。

**主体部** 主体部は、竪穴式小石槨である。石槨の長軸方位は、N-52°-Eを測る。規模は、内法で長軸1.85m・短軸0.30m~0.48mである。遺構確認面から床面までの深さは0.15m~0.18mである。短軸長は北東側の方が広く0.48m、南西側の方が短く0.30mを測る。北東壁側を頭位にしていたと考えられる。

壁面は、4壁が残存していた。遺構確認時には、それぞれ壁面を構成していたと考えられる6石の礫が確認されたが、両壁とも原位置を留めていないとみられた礫を

1石ずつ除去した。北西壁は、残存する5石のうち4石が0.20m~0.40mの長側辺を内側に向け据えられており、北西隅から3石目の礫1石だけが0.33mの短側側石を内側に向けて据えられていた。南東壁は、0.28m~0.45mの長側辺を内側に向け5石が据えられていた。短軸側は、北東壁で0.48mの長側辺を、南西壁で0.30mの長側辺をそれぞれ内側に向けた1石が据えられていた。短軸側、長軸側の壁面の接点は、2号墳と同様である。蓋石は消失しており、確認されなかった。

床面は、小礫が0.08m~0.10mの厚さで敷き詰められていた。石槨壁背面は、暗褐色土を埋め戻した上に小礫が充填されており、裏込めと考えられる。

掘方は旧地表を掘り込んでおり、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は、長軸2.68m、短軸1.28m、旧地表か

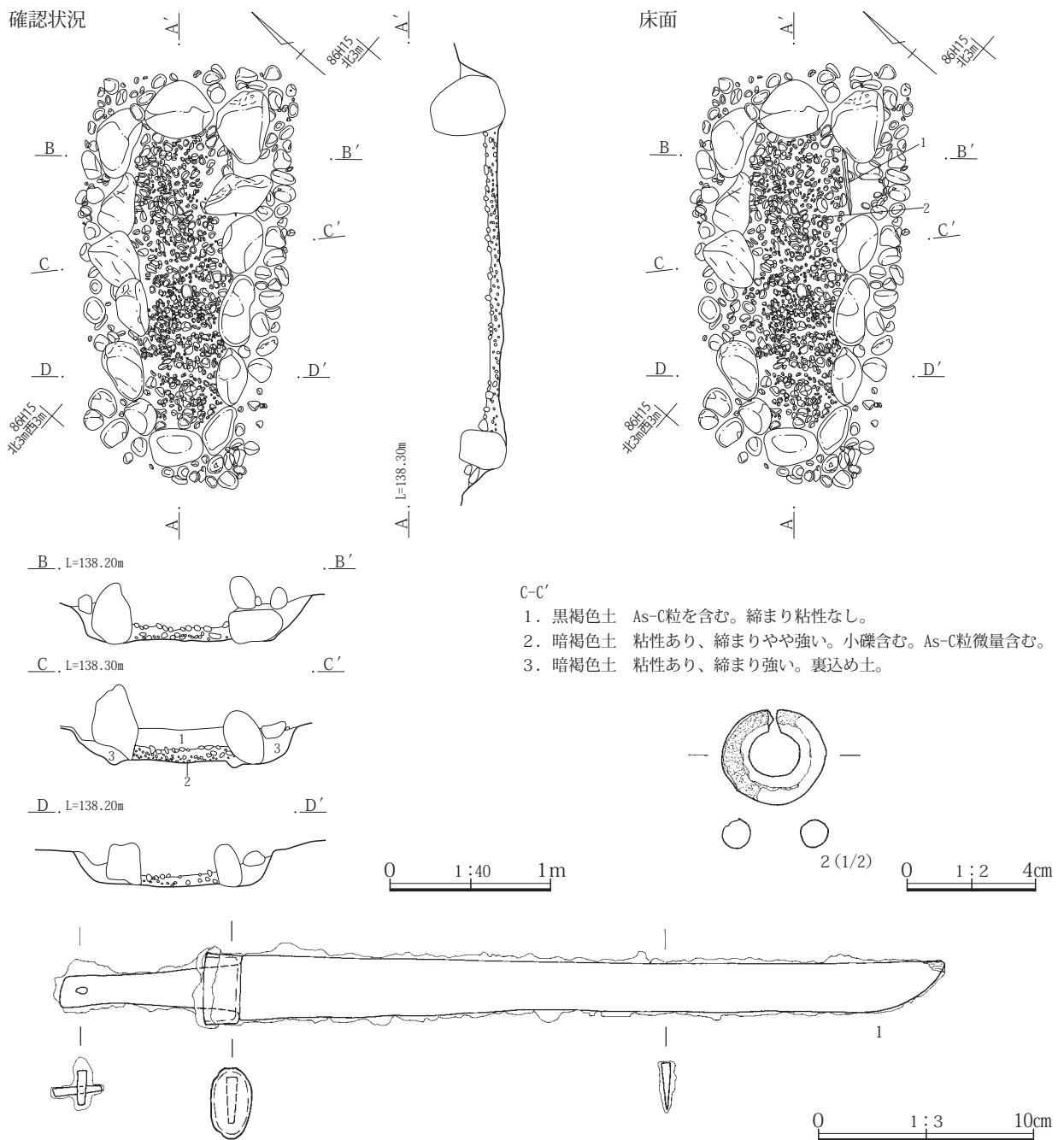
らの深さ0.28mを測る。底面には1号・2号墳と同様、壁石の下位に相当する部分に小さな凹地が確認されている。

**出土遺物** 副葬品として鉄製小刀、耳環1個が出土していた。小刀は北東隅の床面直上から出土した。切先を南西方向に向けて置かれていた。刃長は32cmで刃幅3～2.5cmと切先に向かって徐々に細くなり、先端部2.5cm程で急に細くなる。関部分には3.2×1.8cm楕円形で長さ1.7cmの鉄製釦が装着されていた。茎尻から1cmの位置に長さ2.2cm、幅0.5～0.2cmの鉄製目釘が直角に差し込まれ

たまま残っていた。耳環は床面の北寄りの位置から1点出土した。中実タイプの金環で銅芯銀板貼り、表面は僅かに金色を呈しており鍍金が施されたもの考えられる。

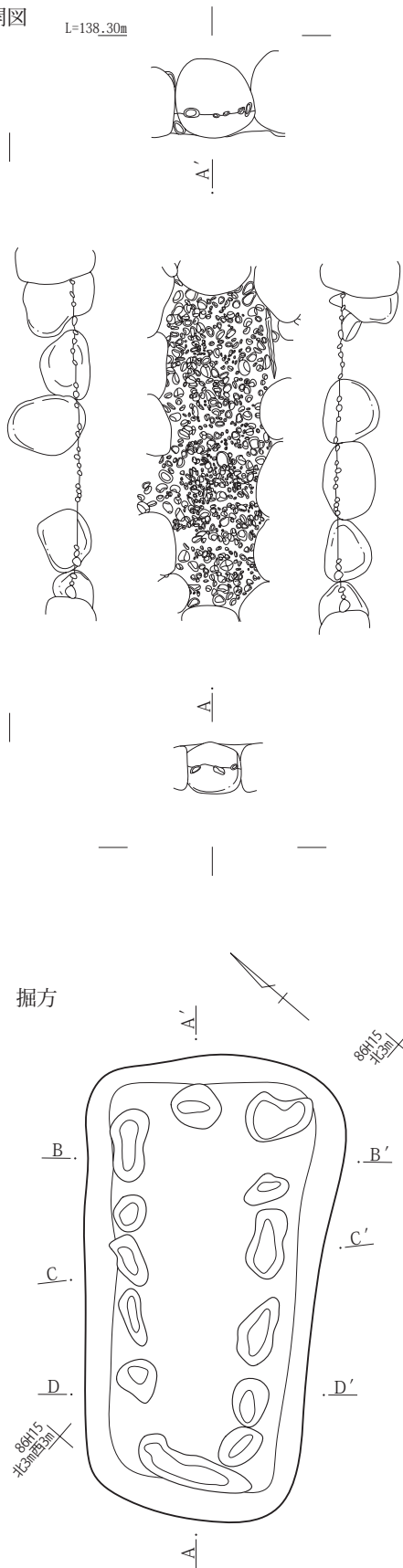
この他に図示できなかった遺物として須恵器片1点25g、土師器片2点2gが出土していた。

**所見** 本墳は墳丘をほとんど有しない竪穴式小石槨と考えられる。築造時期は不明であるが、1号・2号墳と同様の理由から、5世紀後半から6世紀代の可能性が考えられる。



第260図 1区3号墳遺構図(1)・出土遺物図

石室展開図



1区4号墳(第262図、PL.129・130)

**位置** 1区調査区の南西隅、86区M-11である。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されなかった。

**墳丘** 墳丘盛土、周堀の痕跡は確認されなかった。

**主体部** 主体部は、竪穴式小石槨である。石槨の長軸方位は、N-66°-Eを測る。規模は、内法で長軸0.72m・短軸0.27mである。遺構確認面から床面までの深さは0.15m~0.25mである。短軸長は、北東壁・南西壁ほぼ同じである。北東壁の方が大振りな礫を使用していることから、北東壁側が頭位と考えられる。

壁面は、4壁が残存していた。長軸側はそれぞれ0.30m~0.40mの長側辺を内側に向けた礫2石を据えて構築されていた。短軸側は、北東壁で0.44mの長側辺を、南西壁で0.34mの長側辺をそれぞれ内側に向けた1石が据えられていた。短軸側、長軸側の壁面の接点は、北東壁側が1号墳と同様である。蓋石は消失しており、確認されなかった。

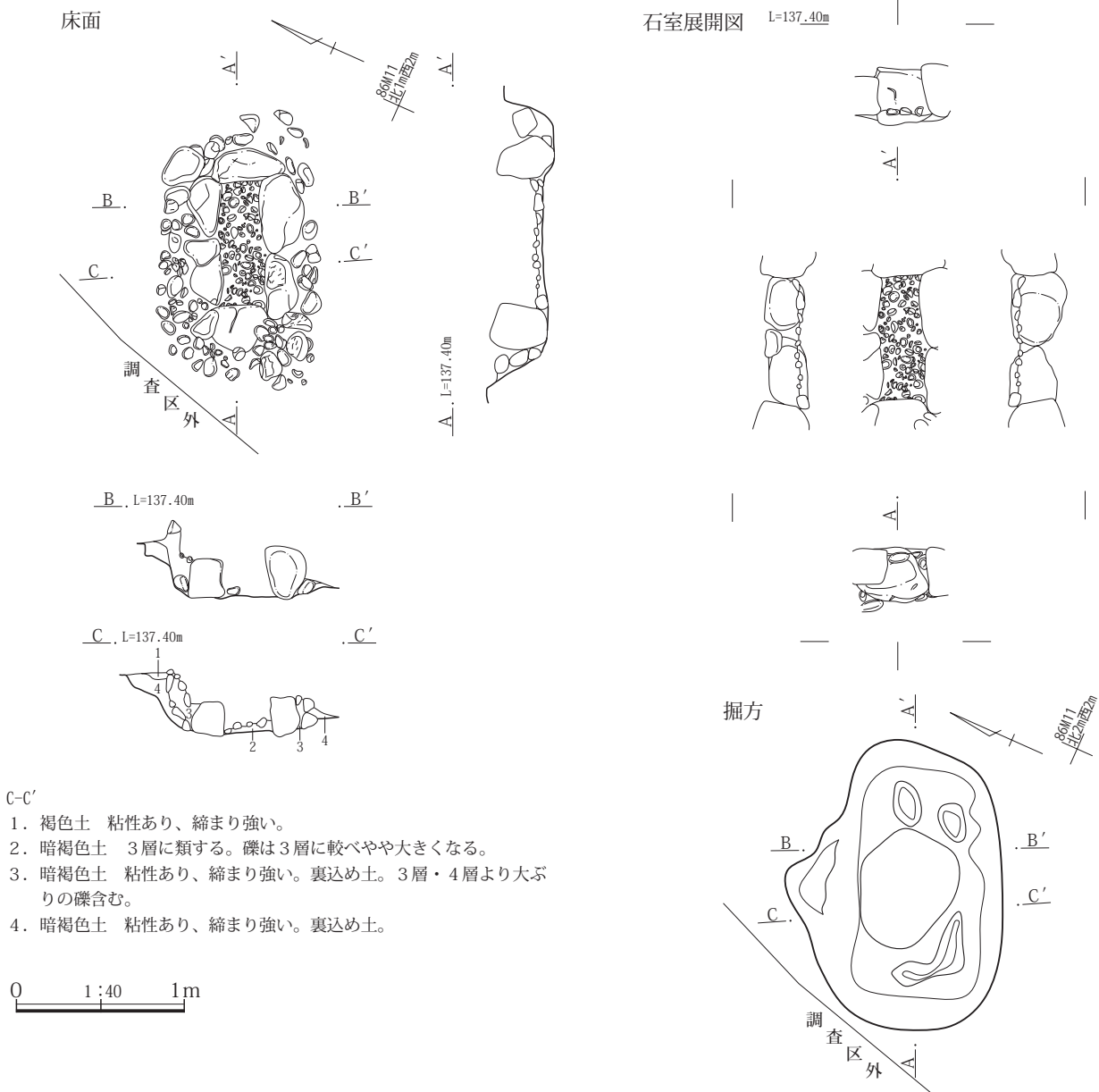
床面は、小礫が0.10m~0.18mの厚さで敷き詰められていた。石槨壁背面には、裏込めとして暗褐色土と小礫が混合されて充填していた。

掘方は旧地表を掘り込んでいた。平面形は隅丸長方形で、北西辺は乱れ、外方に張り出していた。規模は、長軸1.70m、短軸0.86m、旧地表からの深さ0.35mを測る。

**出土遺物** 人骨及び図示できる副葬品は確認されなかった。この他に図示できなかった遺物として須恵器片1点385g、土師器片2点67gが出土していた。

**所見** 本墳はほとんど墳丘を持たない竪穴式小石槨と考えられる。規模は2号墳同様小規模で成人男性を伸展で納めることは困難と考えられる。築造時期は不明であるが、1号~3号墳と同様の理由から、5世紀後半から6世紀代の可能性が考えられる。

第261図 1区3号墳遺構図(2)



- C-C'
1. 褐色土 粘性あり、締め強い。
  2. 暗褐色土 3層に類する。礫は3層に較べやや大きくなる。
  3. 暗褐色土 粘性あり、締め強い。裏込め土。3層・4層より大ぶりの礫含む。
  4. 暗褐色土 粘性あり、締め強い。裏込め土。

0 1:40 1m

第262図 1区4号墳遺構図

1区5号墳(第263～266図、PL.130・131・181)

**位置** 1区調査区の南端中ほど、86区D-9、E-9である。

**重複** 他遺構との重複関係は確認されなかった。

**調査前の状況** 本古墳は、耕作土下に埋没していたため、調査前においては遺構の存在を認識することができなかった。1区南側トレンチ精査時に、石室の奥壁が検出されたことによりその存在が明らかとなった。

**墳丘と外部施設** 調査区南端際において、石室が確認されており、墳丘及び外部施設の一部は、調査区外に及んでいる。

**墳丘** 奥壁後方の墳丘及び周堀は調査区内にあったと想

定されるが、調査ではその痕跡を確認することができなかった。築造時期を考慮すると周堀は掘削されなかった可能性も考えられる。埴輪は出土していない。

**主体部の構造** 主体部は自然石を乱石積した両袖型の横穴式石室と考えられる。袖の変化はあまり明瞭でない。

玄室及び羨道の一部を調査した。羨道の検出は左側壁の一部に止まり、開口部は調査区外にある。奥壁・左右の側壁は、旧地表下にあった基底石の全てと2段目の石材の一部が残存していた。天井石はすべて失われていた。遺構確認時、玄室内に人頭大の礫が確認されたが、これらは石室内に崩落した壁石の一部と考えられ、原位置を留めていないと判断されたため、除去した。

石室に使用されていた石材は、粗粒輝石安山岩を主体としていた。その詳細は第15表に示した。

床面検出時の石室の規模は、残存長2.38mを測る。玄室の長さは1.98m、横幅は平面形がやや胴張りを呈することから、奥壁手前で0.83m、中央で0.90m、羨道部寄りでは0.77mを測った。羨道部は、調査区外に伸びており、調査した範囲では長さ0.63m、幅0.38m以上を測る。石室の主軸方向はN-65°-Eである。

石室各部位の構成であるが、羨道は前述のとおり、左側壁の一部のみが確認されている。玄室寄りの基底石3石が検出されたが、いずれも短側辺を石室内に向けた小口積みに据えられている。

玄室奥壁の基底石は、礫2石により構成されていた。1石は幅0.7m、高さ0.62mの大礫(石材番号9)で、左側壁側に寄せて据えていた。右側壁との間には9を支えるように石材番号10の礫を据えている。10の上には石材番号11の礫を積み上げ天端の高さを左側の9と揃えており、2段目の礫が水平に積み上がるように造作していることが分かる。

玄室部左側壁は、基底石及び2段目の一部が残存していた。残存高は基底石上端で0.38m~0.48m、残存していた2段目上端で0.60~0.73mを測る。基底石は、礫4石で構成されていた。礫は長側辺を石室内に向け、横積みに据えられていた。右側壁と比較して石材の揃いが悪く、左右の壁面を対称に造作しようとする意識は低かったと考えられる。基底石の高さにも、ばらつきが見られ、1段目の天端を水平に造作する意識も低かったと思われる。2段目は3石が残存していた。石材番号5のような大礫だけでなく比較的小振りな礫も用いられていた。基底石4と2段目5の間には小礫が差し込まれており、2段目を安定して据えるための調整がされている。

玄室右側壁も、基底石と2段目の一部が残存していた。残存高は基底石上端で0.36m~0.46m、2段目上端で0.58~0.62mを測る。基底石は、礫5石から構成されていた。左壁と同様に、長側辺を石室内に向け、横積みに据えられていた。奥壁寄りの3石は、同じような高さの礫が据えられており、天端が水平になるよう意識的に礫の選択がなされたものと考えられるが、羨道寄りの1石は、他の3石の半分の高さであった。これは、奥壁寄りから大礫の基底石を設置して行き、羨道部との間に

できた隙間に小礫を置き、隙間を調整したものと考えられる。また、この小ぶりな基底石の上にもう1石礫を積み上げることで、他の基底石と天端を揃えていた。2段目は3石が残存していた。左側壁と同様、積まれていた礫には、大礫と小礫があり、ばらつきがみられた。

床面は径0.03m~0.10m程度の極小礫が敷き詰められていた。礫の大きさは不揃いであるが、玉石を意識していたと考えられる。礫敷きの厚さは0.10m~0.20mである。最下面の礫は径0.10m~0.15mとこれより上位の礫に比べ大振りである。舗石を意識して、大振りな礫を並べたものと考えられる。

羨道と玄室の境には、長軸0.30m、短軸0.16m、高さ0.32mを測る礫が据えられており、梱石と考えられる。梱石部分は、調査区際であるため、梱石がこの1石のみか2石以上で構成されていたのかは不明である。

梱石から開口部に向かっては、調査区外であるが、境界壁を観察すると、長辺0.15m程の礫が積まれていた。これは、閉塞状況を示すものと考えられる。

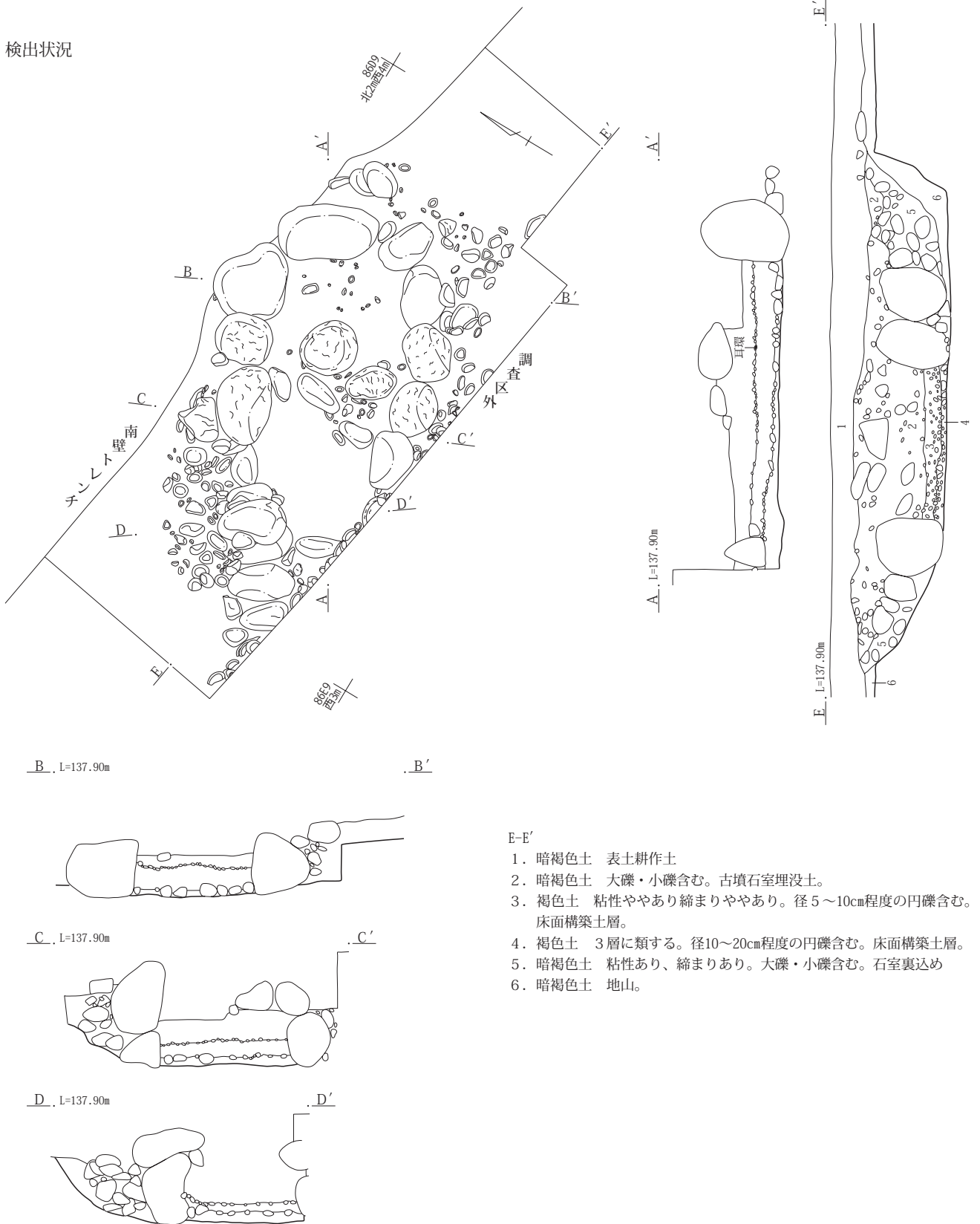
**石室の構築状況** 本石室は、旧地表を掘り込んで設けた掘方を有していた。この掘方の全体形状を把握することができなかったが、石室開口部方向が開放する平面長方形の竪穴と考えられる。規模は、残存長2.60m、横幅2.35mを測る。断面形は上方に向けて緩やかに立ち上がる形状である。底面は平坦に仕上げられており、この面に石室の基底石を据え、上位の礫を積み上げていく方法が取られている。掘方の壁面寄りの底面、石室の壁体が設置された部分に相当する範囲には小さな掘り込みが連続して見られた。この凹みは石室の断面図を見ても判然としない程度の深さであるが、基底石を安定的に据え置くための役割を果たしていたことが考えられる。また、石室内面の石材の面の方向、傾き、上端の水平などを調整するための造作であったことも考えられる。

玄室内、地山と舗石の間には褐色土層の堆積が認められる。掘方掘削後、一定程度整地した上で、床面を造作したものと考えられる。石室壁背面には、裏込めとして土粒とともに小礫が多量に充填されていた。

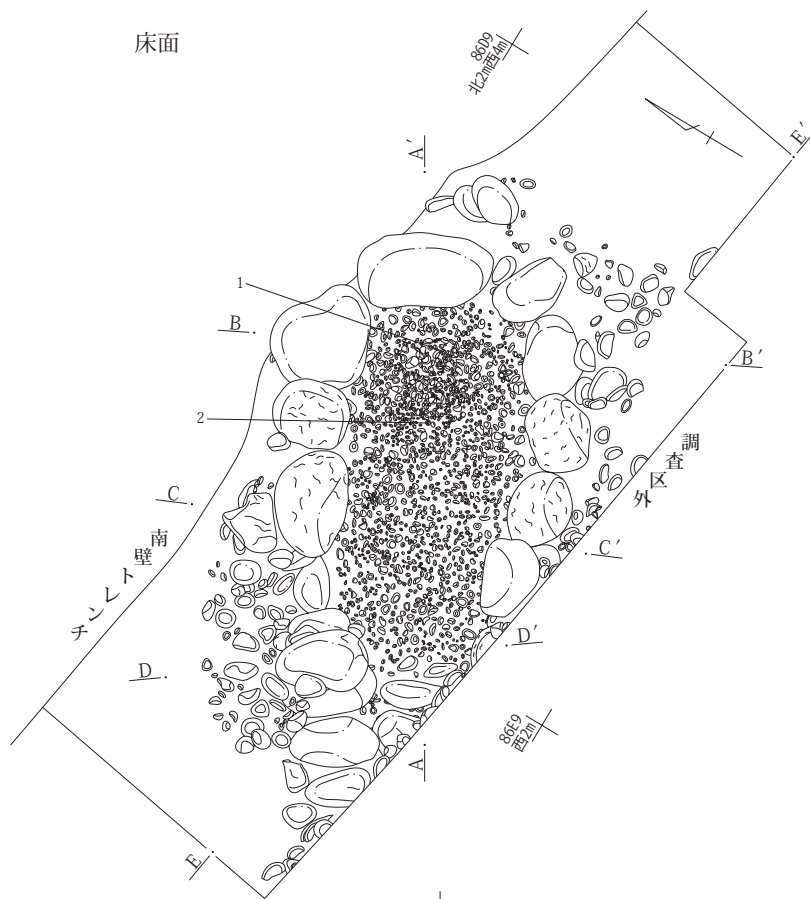
**出土遺物** 玄室の中央と奥壁に寄った床面から耳環2個が出土している。この他に図示できなかった遺物として須恵器片が1点385g、土師器片2点67gが出土していた。

所見 出土した遺物が少ないが、横穴式石室の形状や埴輪が出土していないことから、7世紀代に築造されたものと考えられる。

検出状況

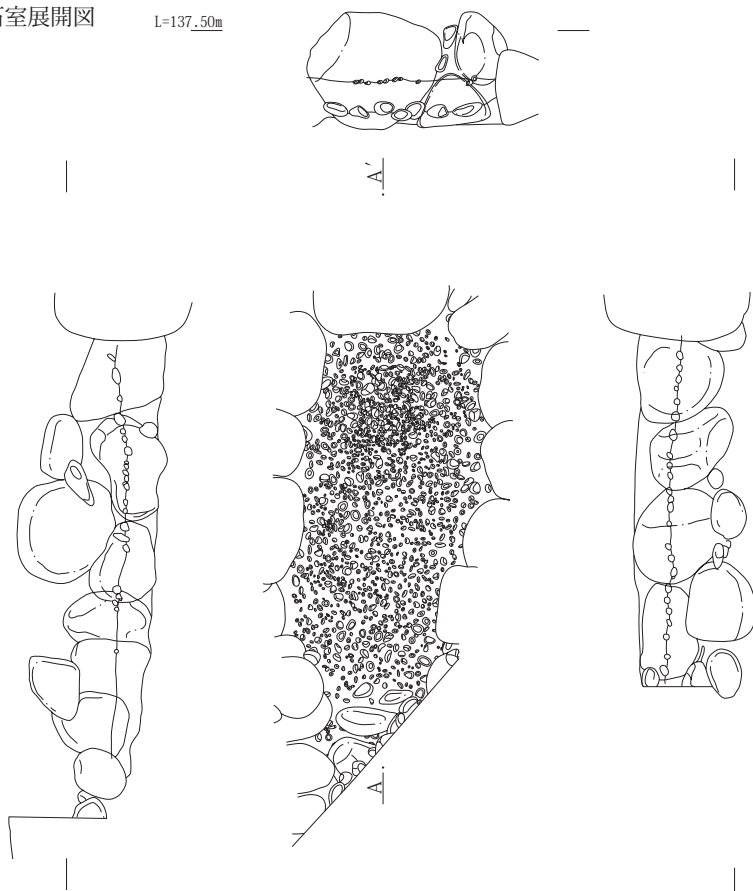


第263図 1区5号墳遺構図(1)



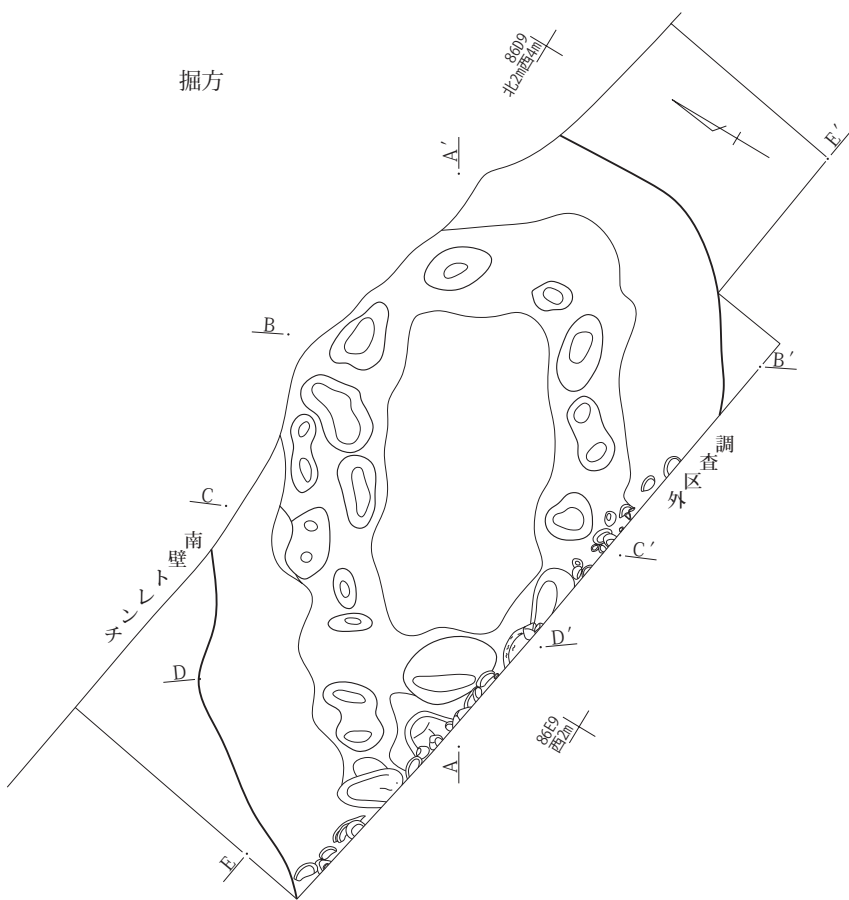
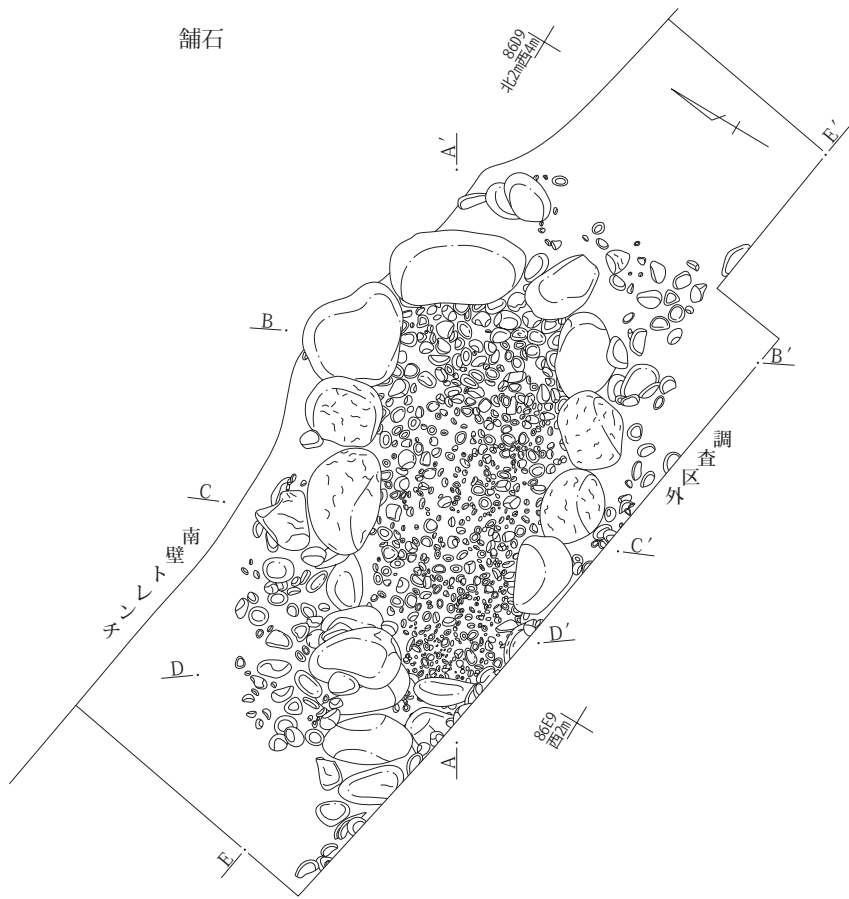
石室展開図

L=137.50m



第264図 1区5号墳遺構図(2)

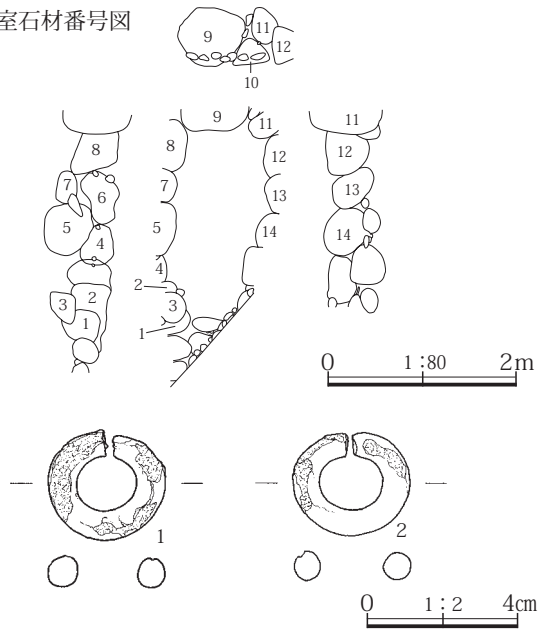




0 1:40 1m

第265図 1区5号墳遺構図(3)

石室石材番号図



第266図 1区5号墳遺構図(4)・出土遺物図

第15表 1区5号墳石室使用石の石材一覧表

石材番号	石材	状態
1	粗粒輝石安山岩	やや粗鬆、細粒ないし中粒
2	粗粒輝石安山岩	細粒、緻密
3	粗粒輝石安山岩	細粒、緻密、針状有色鉱物を含む
4	粗粒輝石安山岩	細粒、緻密
5	粗粒輝石安山岩	やや粗鬆、細粒ないし中粒
6	粗粒輝石安山岩	細粒、緻密
7	粗粒輝石安山岩	やや粗鬆、細粒ないし中粒
8	粗粒輝石安山岩	細粒、緻密
9	粗粒輝石安山岩	やや粗鬆、細粒ないし中粒
10	粗粒輝石安山岩	細粒、緻密
11	粗粒輝石安山岩	緻密、中粒
12	粗粒輝石安山岩	緻密、中粒
13	粗粒輝石安山岩	緻密、中粒
14	粗粒輝石安山岩	緻密、中粒

1区6号墳(第267・268図、PL.131・132・181)

**位置** 1区調査区北西部、96区C・D-1、86区B~E-18~20である。

**重複** 25号竪穴住居、18号溝と重複する。本墳は25号竪穴住居より新しく、18号溝より古い。

**規模** 墳丘長軸10.24m・短軸9.48mを測る方墳である。長軸方位はN-30°-Wである。

**墳丘** 残存状況は不良で、墳丘盛土は全く残存していなかった。

**主体部** 掘方まで削平され、残存していなかった。

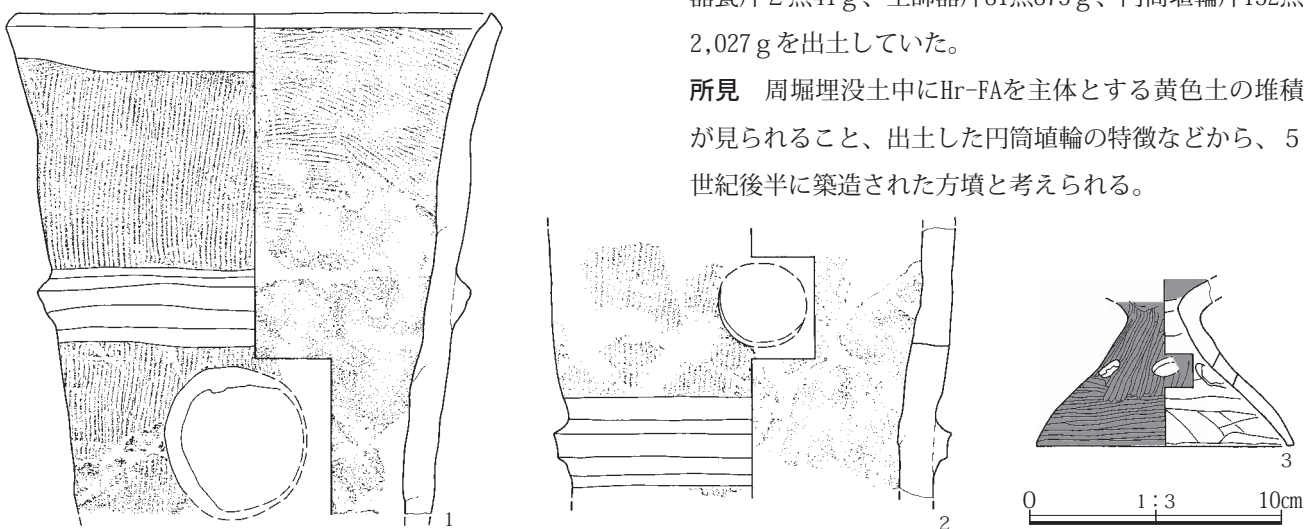
**周堀** 周堀は墳丘平面プラン同様、ほぼ方形を呈してい

る。断面形は上方に向かって緩やかに立ちあがる形状である。検出面における規模は、上端1.64m~1.92m、下端0.38m~0.80m、深さ0.06m~0.35mを測る。

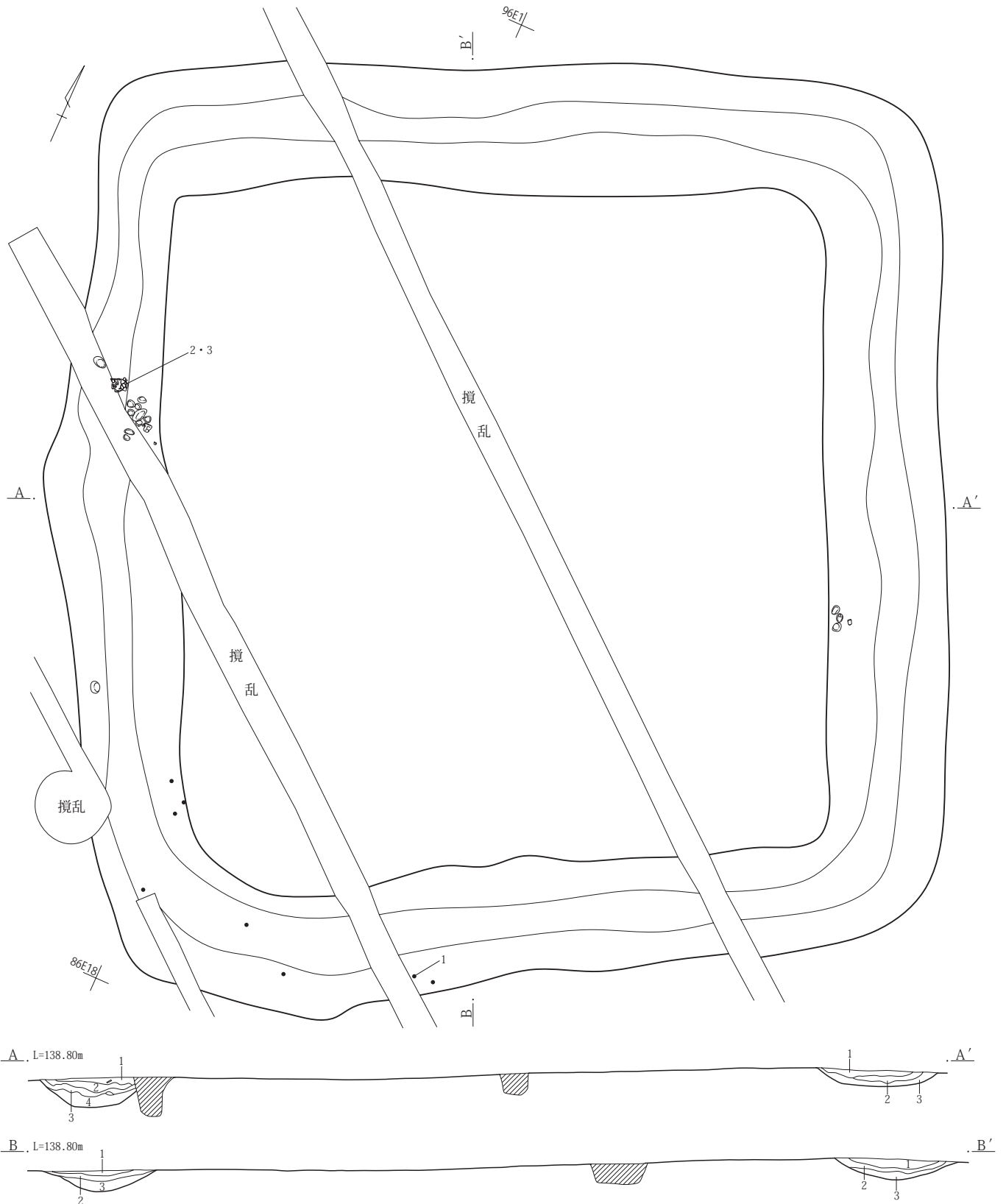
周堀の埋没状態は、土層断面ではレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。埋没土は、西側では底面から20cmほど黒褐色土の堆積が観察できるが、他の箇所では底面にHr-FAを主体とする土砂が堆積していた。

**出土遺物** 図示できた遺物には、円筒埴輪2点と土師器器台1点がある。なお、土師器器台は重複する25号竪穴住居に伴う遺物とみられる。図示できた遺物の他に須恵器甕片2点41g、土師器片81点873g、円筒埴輪片132点2,027gを出土していた。

**所見** 周堀埋没土中にHr-FAを主体とする黄色土の堆積が見られること、出土した円筒埴輪の特徴などから、5世紀後半に築造された方墳と考えられる。



第267図 1区6号墳出土遺物図



A-A'・B-B'

1. 黒褐色土 Hr-FP粒とHr-FAブロックを含む、砂質土。
2. 黄黒色土 黄色土ブロックとHr-FAブロックを含み、黄色味が強い。砂質土。
3. 黄色土 Hr-FA層が主体で、黒色土ブロックを含む。
4. 黒褐色土 As-C粒を含む。2～5cm大の黄色ブロックを斑状に多量に含む砂質土。

0 1:80 2m

第268図 1区6号墳遺構図

#### 4. 粘土採掘坑

##### 2区1号粘土採掘坑(第269図、PL.132・133)

**位置** 2区調査区東部、85区A-10に位置する。南東側に位置する谷地によって一部を欠くため全貌は明らかでない。

**重複** 谷地、30号竪穴住居・31号竪穴住居と重複する。新旧関係は、本採掘坑が最も古い。

**形状** 土砂を径0.8~1.8m土坑状に連続して採掘しているため、不整形である。

**規模** 土砂採取範囲は、東西4.85m、南北3.90m、もっとも確認面から深い地点では1.07mを測る。

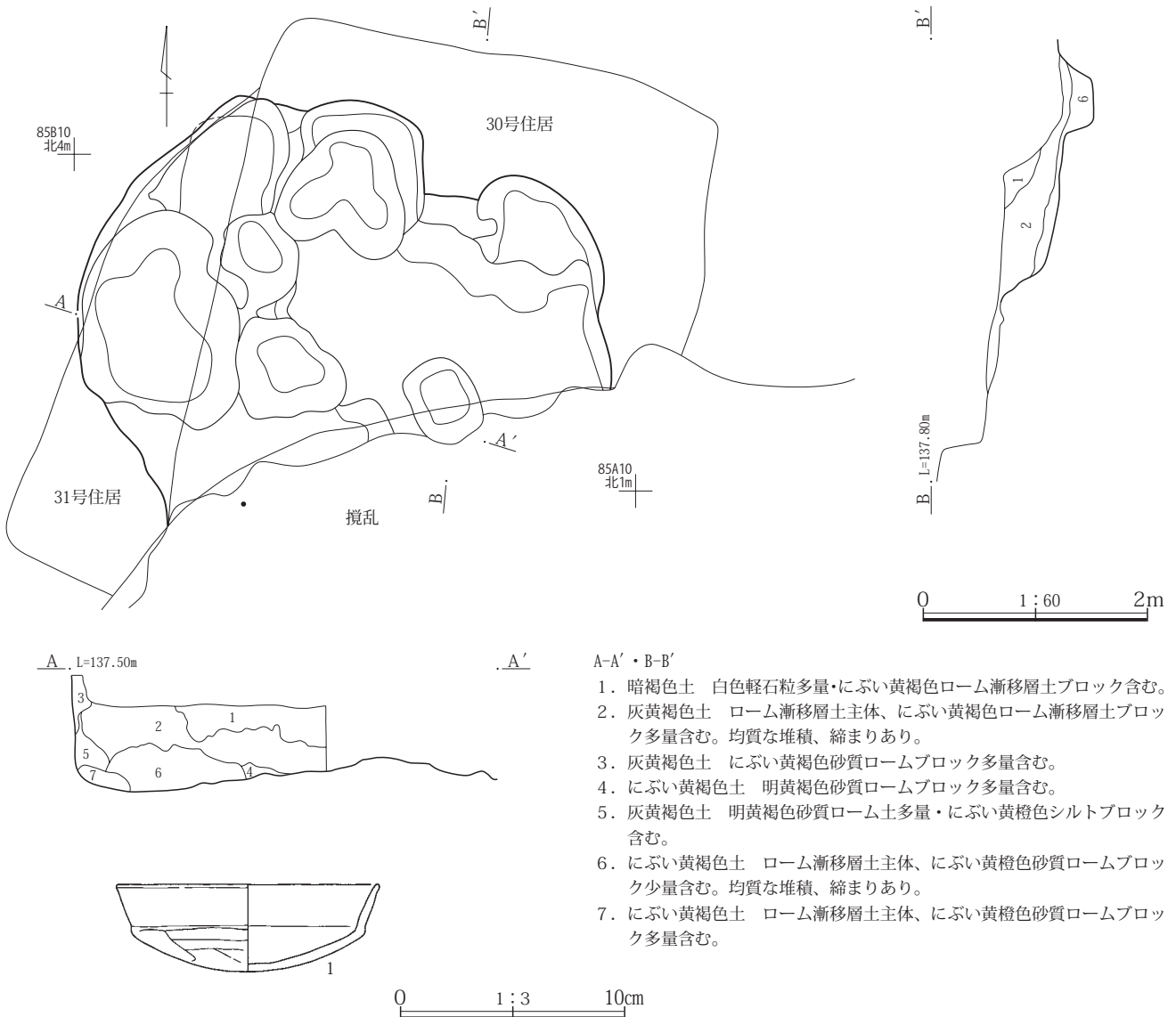
**採掘土** 採取目的の土層は、にぶい黄褐色~浅黄褐色の砂質ローム土である。

**採取方法** 土層断面からは最初に西側が北西部を土坑状に掘り込み、目的の土砂を採取した後、さらに南東方向に採取していったとみられる。

**出土遺物** 図示した土師器杯が1点の他に土師器10点208g、須恵器1点9gが出土している。

**所見** 本採掘坑の時期は、出土した遺物から6世紀後半に比定できる。

なお、採取した土砂は、本遺跡内では竪穴住居のカマド構築材として使用されていた。今回の発掘調査では採掘坑の検出はここ1カ所だけで時期も6世紀後半に限定される。しかし、山王・柴遺跡群では7世紀以降も竪穴住居が営まれており、カマドでは同様の土砂が構築材として使用されているのが確認されている。今後、この時期の竪穴住居に使用した土砂の採取方法が課題となる。



- A-A'・B-B'
1. 暗褐色土 白色軽石粒多量・にぶい黄褐色ローム漸移層土ブロック含む。
  2. 灰黄褐色土 ローム漸移層土主体、にぶい黄褐色ローム漸移層土ブロック多量含む。均質な堆積、縮まりあり。
  3. 灰黄褐色土 にぶい黄褐色砂質ロームブロック多量含む。
  4. にぶい黄褐色土 明黄褐色砂質ロームブロック多量含む。
  5. 灰黄褐色土 明黄褐色砂質ローム土多量・にぶい黄褐色シルトブロック含む。
  6. にぶい黄褐色土 ローム漸移層土主体、にぶい黄褐色砂質ロームブロック少量含む。均質な堆積、縮まりあり。
  7. にぶい黄褐色土 ローム漸移層土主体、にぶい黄褐色砂質ロームブロック多量含む。

第269図 2区1号粘土採掘坑遺構図・出土遺物図

## 5. 土 坑

土坑は、平面、断面の形状から人為的に掘削されたと思われるものを認定した。こうしたものは1区から3基、2区から2基、3区から12基、4区から2基の計19基を検出した。このうち、遺物が出土したのは2区1号土坑だけである。そのため、時期や性格を特定できたものはほとんどない。

## 1区1号土坑(第270図、PL.133)

**位置** 1区調査区東南部、85区S-10に位置する。

**重複** 8号竪穴住居と重複する。新旧関係は本土坑のほうが新しい。

**形状** 平面は隅丸長方形、断面は逆台形状を呈す。

**規模** 長軸2.42m、短軸2.00m、深さ0.35mを測る。

**方位** N-78°-W

**埋没状態** 土層断面では、一見周囲からの流れ込みとみられる堆積やAs-Cの堆積が観察できるが、重複する8号竪穴住居でも廃棄、埋没初期にAs-Cの堆積が観察されている。こうした点を考慮すると本土坑でのAs-Cは埋め戻された土砂の一部と考えられる。よって、本土坑は人為的な埋め戻しが行われたと想定される。

**底面** 若干の凹凸がみられるがほぼ平坦である。

**出土遺物** 出土していない。

**所見** 本土坑は、重複する竪穴住居との関係から4世紀以降に比定できる。

## 1区2号土坑(第270図、PL.133)

**位置** 1区調査区南東部、85区Q-11に位置する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されず、単独で占地していた。

**形状** 平面はやや歪な楕円形、断面は逆台形状を呈す。

**規模** 長軸1.42m、短軸1.07m、深さ0.15mを測る。

**方位** N-42°-W

**埋没状態** 土層断面では、にぶい褐色土の単一土層による埋没であることから自然埋没と想定されるが確認には至らない。

**底面** 周囲に比べ中央がやや窪む形状である。

**出土遺物** 出土していない。

## 1区3号土坑(第271図、PL.134)

**位置** 1区調査区南東部、85区R-10に位置する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されず、単独で占地していた。

**形状** 平面は楕円形、断面は弧状を呈す。

**規模** 長軸1.22m、短軸1.15m、深さ0.20mを測る。

**方位** N-32°-E

**埋没状態** 土層断面では、にぶい褐色土の単一土層による埋没であることから自然埋没と想定されるが確認には至らない。

**底面** 立ち上がりと底面の移行箇所が明瞭ではなく、全体的に中央がやや窪む形状である。

**出土遺物** 出土していない。

## 2区1号土坑(第271図、PL.134)

**位置** 2区調査区北西隅、85区J-17、K-17に位置する。

**重複** 1号竪穴住居、84号ピットと重複する。新旧関係は本土坑のほうが新しい。

**形状** 平面はやや歪な長方形、断面は箱形を呈する。

**規模** 長軸2.22m、短軸1.98m、深さ1.03mを測る。

**方位** N-35°-W

**埋没状態** 土層断面では交互に土砂が堆積している様子が観察できることから人為的な埋め戻しが行われた可能性が高い。

**底面** ほぼ平坦である。

**出土遺物** 図示した遺物は土師器杯の1点であるが、これは1号竪穴住居に伴うものとみられる。この他に土師器小片が32点517g、須恵器小片が1点3g出土している。

**所見** 本土坑の時期は、重複する竪穴住居の時期から7世紀以降に比定できる。なお、土坑の性格については不明である。

## 2区2号土坑(第271図、PL.134)

**位置** 2区調査区南西部、85区K-9に位置する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されず、単独で占地していた。

**形状** 平面は楕円形、断面は逆台形状を呈す。

**規模** 長軸0.93m、短軸0.80m、深さ0.28mを測る。

**方位** N-36°-W

**埋没状態** 土層断面ではレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**出土遺物** 図示できる遺物は出土していないが、土師器小片が3点184g出土している。

**所見** 時期は、埋没土から古代に比定できるが、性格については不明である。

### 3区1号土坑(第271図、PL.134)

**位置** 3区調査区東部、83区M-6に位置する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されず、単独で占地していた。

**形状** 平面は楕円形、断面は逆三角形状を呈す。

**規模** 長軸0.82m、短軸0.66m、深さ0.43mを測る。

**方位** N-22°-W

**埋没状態** 土層断面ではやや不自然な堆積が観察でき、埋没状況については判断できない。

**底面** ごくわずかな範囲のため記述できない。

**出土遺物** 出土していない。

**所見** 時期は、埋没土から古墳時代以前に比定できる。性格については不明である。

### 3区2号土坑(第271図、PL.134)

**位置** 3区調査区北東部、83区N-8に位置する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されず、単独で占地していた。

**形状** 平面はやや歪な楕円形、断面も歪んだ逆台形状を呈す。

**規模** 長軸0.91m、短軸0.80m、深さ0.31mを測る。

**方位** N-45°-E

**埋没状態** 土層断面ではやや不自然な点はあるが、周囲から流れ込んだとみられることから自然埋没と想定される。

**底面** ほぼ平坦である。

**出土遺物** 出土していない。

**所見** 時期は、埋没土から古墳時代以前に比定できる。性格については不明である。

### 3区3号土坑(第271図、PL.135)

**位置** 3区調査区北東部、83区P-8に位置する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されず、単独で占地していた。

**形状** 平面は楕円形、断面は逆台形状を呈す。

**規模** 長軸0.85m、短軸0.73m、深さ0.29mを測る。

**方位** N-76°-W

**埋没状態** 土層断面ではレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**底面** ほぼ平坦である。

**出土遺物** 出土していない。

**所見** 時期や性格については不明である。

### 3区4号土坑(第271図、PL.135)

**位置** 3区調査区中央の北寄り、83区T-9、84区A-9に位置する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されず、単独で占地していた。

**形状** 平面は楕円形、断面は逆三角形状を呈す。

**規模** 長軸0.88m、短軸0.84m、深さ0.42mを測る。

**方位** N-75°-E

**埋没状態** 土層断面ではやや不自然な点はあるが、周囲から流れ込んだとみられることから自然埋没と想定される。

**出土遺物** 出土していない。

**所見** 時期は埋没土から古墳時代前期から中期に比定できる。性格については不明である。

### 3区5号土坑(第271図、PL.135)

**位置** 3区調査区中央の北寄り、84区A-9に位置する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されず、単独で占地していた。

**形状** 平面は楕円形、断面は逆三角形状を呈す。

**規模** 長軸0.70m、短軸0.60m、深さ0.19mを測る。

**方位** N-20°-W

**埋没状態** 土層断面では交互に土砂が堆積している様子が観察できることから人為的な埋め戻しが行われた可能性が高い。

**底面** ほぼ平坦である。

**出土遺物** 出土していない。

**所見** 時期は埋没土から古墳時代前期から中期に比定できる。性格については不明である。

3区8号土坑(第272図、PL.135)

**位置** 3区調査区西寄り、84区F-8に位置する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されず、単独で占地していた。

**形状** 平面は楕円形、断面は逆三角形を呈す。

**規模** 長軸0.82m、短軸0.70m、深さ0.37mを測る。

**方位** N-82°-W

**埋没状態** 土層断面ではレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**底面** ほぼ平坦である。

**出土遺物** 出土していない。

**所見** 時期は埋没土から古墳時代前期から中期に比定できる。性格については不明である。

3区9号土坑(第272図、PL.135)

**位置** 3区調査区西寄り、84区G-9に位置する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されず、単独で占地していた。

**形状** 平面は円形に近い、断面は逆台形状を呈す。

**規模** 径1.33m、深さ0.31mを測る。

**方位** N-42°-W

**埋没状態** 土層断面では、灰黄褐色土の単一土層による埋没であることから自然埋没と想定されるが確認には至らない。

**底面** ほぼ平坦である。

**出土遺物** 出土していない。

**所見** 時期は、埋没土から古代に比定できる。性格については不明である。

3区10号土坑(第272図、PL.135)

**位置** 3区調査区北西部、84区E-11に位置する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されず、単独で占地していた。

**形状** 平面は楕円形、断面は逆台形状を呈す。

**規模** 長軸0.73m、短軸0.70m、深さ0.25mを測る。

**方位** N-82°-W

**埋没状態** 土層断面ではレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**底面** ほぼ平坦である。

**出土遺物** 出土していない。

**所見** 時期は、埋没土から古代に比定できる。性格については不明である。

3区11号土坑(第272図、PL.135)

**位置** 3区調査区北西部、84区E-9・10に位置する。

**重複** 北側で2号溝と重複する。新旧関係は、本土坑のほうが古い。

**形状** 平面は円形、断面は箱形を呈す。

**規模** 径1.50m、深さ0.40mを測る。

**方位** N-90°-E

**埋没状態** 土層断面ではレンズ状の堆積が観察できることから自然埋没と想定される。

**底面** ほぼ平坦である。

**出土遺物** 出土していない。

**所見** 時期は、埋没土から古代に比定できる。性格については不明である。

3区12号土坑(第272図、PL.136)

**位置** 3区調査区北寄り、83区T-9・10に位置する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されず、単独で占地していた。

**形状** 平面は楕円形、断面は半円状を呈す。

**規模** 長軸1.09m、短軸0.98m、深さ0.43mを測る。

**方位** N-40°-E

**埋没状態** 土層断面ではやや不自然な点はあるが、周囲から流れ込んだとみられることから自然埋没と想定される。

**底面** 丸みをもつ。

**出土遺物** 出土していない。

**所見** 時期は、埋没土から古代に比定できる。性格については不明である。

3区15号土坑(第272図、PL.136)

**位置** 3区調査区南東部、83区O-2に位置する。

**重複** 現代の耕作痕が上部に存在するが、他の遺構との重複関係は確認されなかった。

**形状** 平面は楕円形、断面は箱形に近い形状を呈す。

**規模** 長軸1.02m、短軸0.95m、深さ0.28mを測る。

**方位** N-2°-W

**埋没状態** 土層断面では西側を灰黄褐色土が埋めた後、

にぶい黄褐色土で埋没している。埋没状況については不明である。

**底面** ほぼ平坦である。

**出土遺物** 出土していない。

**所見** 時期は、埋没土から古墳時代以前に比定できる。性格については不明である。

3区16号土坑(第272図、PL.136)

**位置** 3区調査区北西部、84区I-11に位置する。

**重複** 他の遺構との重複関係は確認されず、単独で占地していた。

**形状** 平面は楕円形、断面は逆台形状を呈す。

**規模** 長軸0.85m、短軸0.61m、深さ0.28mを測る。

**方位** N-78°-W

**埋没状態** 不明。

**出土遺物** 出土していない。

4区1号土坑(第272図、PL.136)

**位置** 4区調査区南西部、83区K-1に位置する。

**重複** 5号竪穴住居と重複する。新旧関係は、本土坑のほうが新しい。

**形状** 平面は楕円形、断面は南側にテラスを有する鍵状を呈す。

**規模** 長軸1.96m、短軸1.30m、深さ0.89mを測る。

**方位** N-84°-W

**埋没状態** 土層断面では土砂が北側から流れ込んだとみられる様子が観察できることから自然埋没と想定される。

**底面** ほぼ平坦である。

**出土遺物** 出土していない。

**所見** 時期は、重複する竪穴住居の時期から10世紀以降に比定できる。性格については中位の段が昇降のための施設とみれば貯蔵用と想定される。

4区2号土坑(第272図、PL.136)

**位置** 4区調査区南西部、73区K-20に位置する。

**重複** 5号竪穴住居と重複する。新旧関係は、本土坑のほうが新しい。

**形状** 平面は不整形、断面は逆台形状に近い形状を呈す。

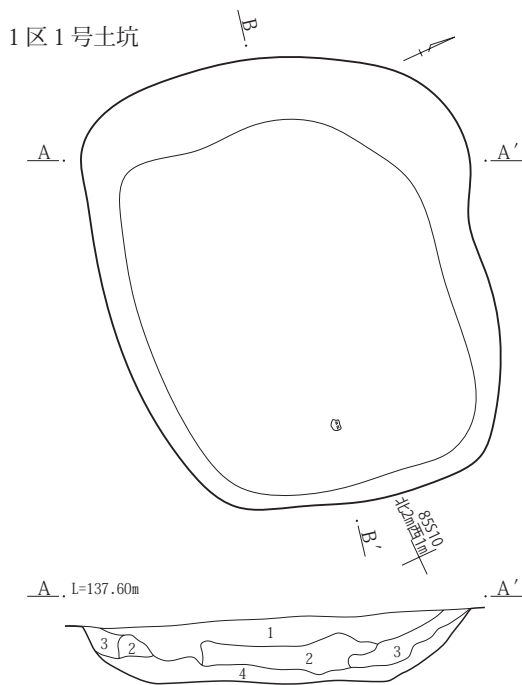
**規模** 長軸1.53m、短軸1.22m、深さ0.69mを測る。

**方位** N-87°-W

**埋没状態** 土層断面では土砂が標高の低い南側から流れ込んだとみられる様子が観察でき、自然埋没とするには不自然であるが、人為的な埋め戻しが行われたとも判断できない。

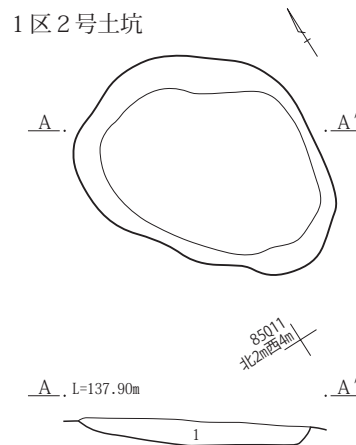
**出土遺物** 出土していない。

**所見** 時期は、重複する竪穴住居の時期から10世紀以降に比定できる。性格については不明である。



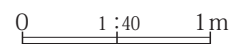
1号土坑 A-A'

- 1. 黒褐色土 As-Cを多量に含む。
- 2. As-C堆積層
- 3. 黒褐色土 1層より、色調明るい。
- 4. 暗褐色土 縮まり強し。砂質土。



2号土坑 A-A'

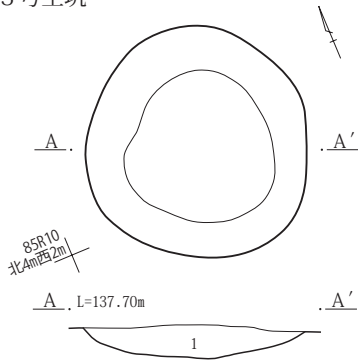
- 1. にぶい褐色土 砂質土、明黄褐色ソフトロームブロック少量含む。縮まり弱い。粘性弱い。



第270図 1区1・2号土坑遺構図



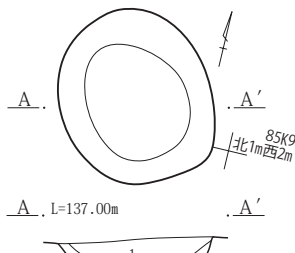
1区3号土坑



3号土坑 A-A'

1. にぶい褐色土 砂質土、明黄褐色ソフトロームブロック少量含む。締まり弱い。粘性弱い。

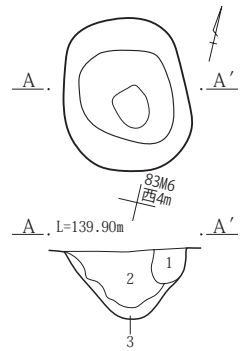
2区2号土坑



2区2号土坑 A-A'

1. 灰黄褐色土 FA、FP粒、白色軽石粒微量含む。締まりやや良い。
2. 灰黄褐色土 小礫微量含む。締まりやや良い。

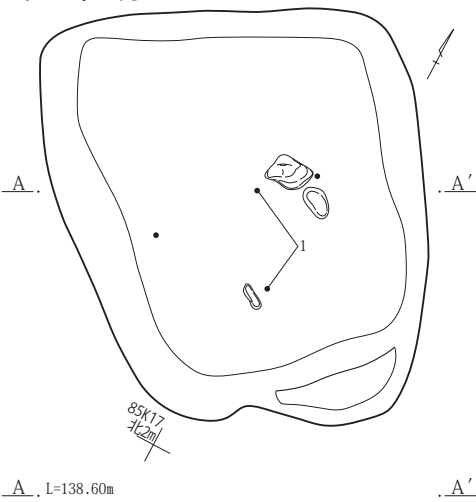
3区1号土坑



3区1号土坑 A-A'

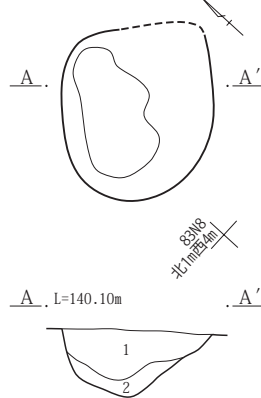
1. にぶい黄褐色土 ロームブロック多量含む。
2. 灰黄褐色土 ローム土微量含む。
3. にぶい黄褐色土 ローム土少量含む。

2区1号土坑



A-A' L=138.60m

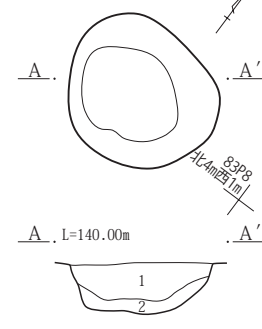
3区2号土坑



3区2号土坑 A-A'

1. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量含む。
2. 灰黄褐色土 ローム土少量含む。

3区3号土坑

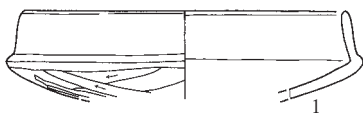


3区3号土坑 A-A'

1. 灰黄褐色土 ローム土微量含む。
2. 灰黄褐色土 1層に類するが色調暗い。

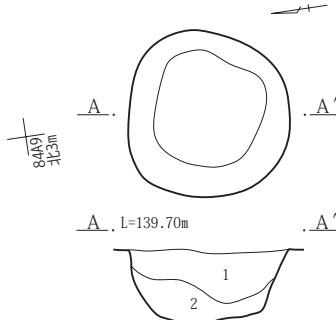
1号土坑 A-A'

1. 灰黄褐色砂質土 白色軽石粒多量・ローム粒子含む。
2. 灰黄褐色砂質土 白色軽石粒少量・浅黄褐色砂質シルトブロック多量・黒色土ブロック少量含む。
3. 灰黄褐色砂質土 Hr-FP少量含む。
4. 灰黄褐色土 白色軽石粒少量・黒色土ブロック多量含む。
5. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量・ローム漸移層土ブロック多量含む。
6. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量含む。
7. 灰黄褐色土 ローム漸移層土ブロック少量含む。



0 1:3 10cm

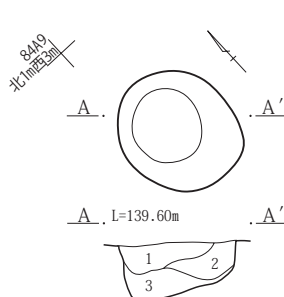
3区4号土坑



3区4号土坑 A-A'

1. 黒褐色土 白色軽石粒・ローム土微量含む。
2. にぶい黄褐色土 ローム土少量含む。

3区5号土坑

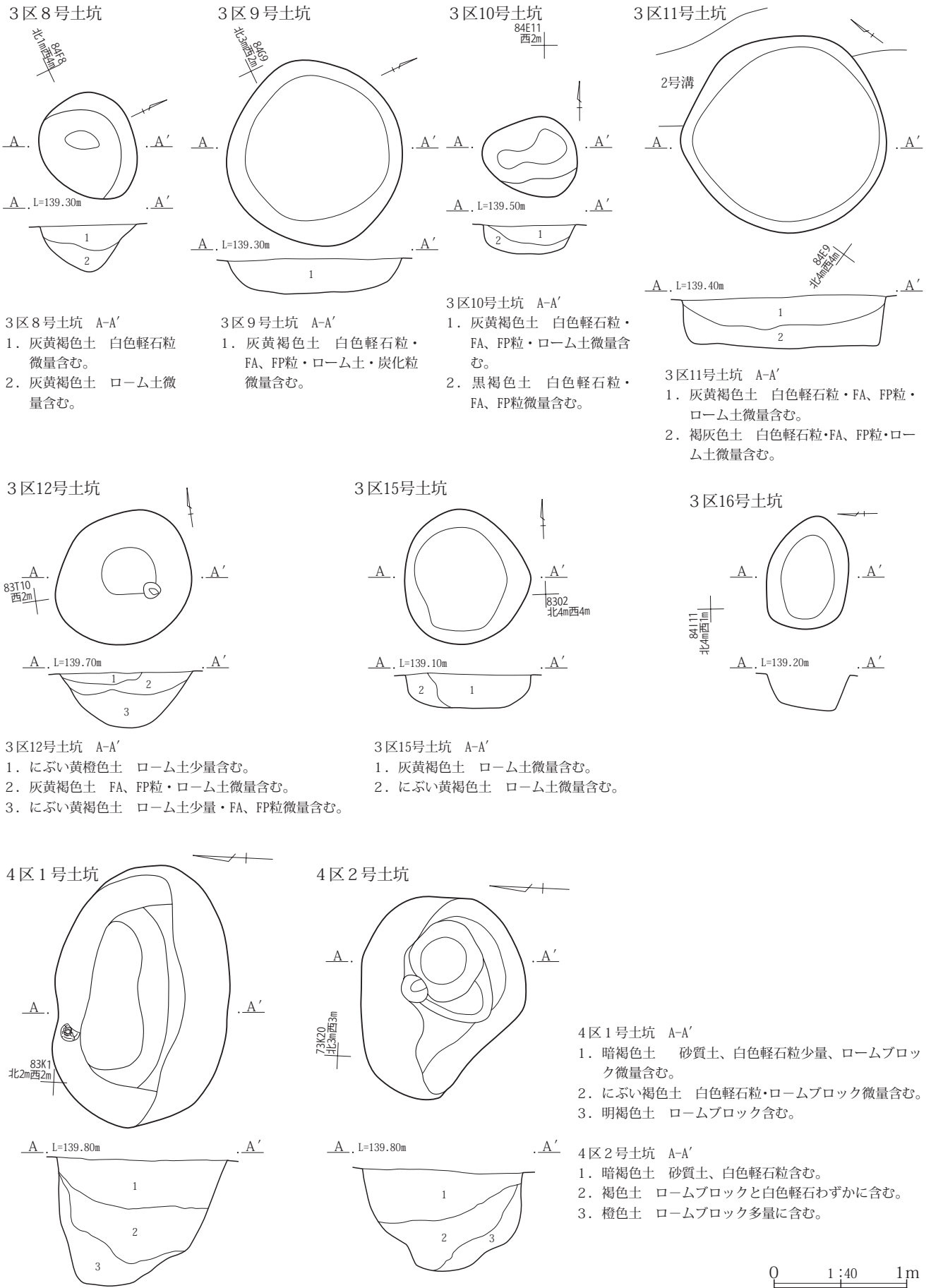


3区5号土坑 A-A'

1. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量含む。
2. 灰黄褐色土 ローム土少量含む。
3. にぶい黄褐色土 ローム土少量含む。

0 1:40 1m

第271図 1区3号土坑、2区1・2号土坑、3区1～5号土坑遺構図・2区1号土坑出土遺物図



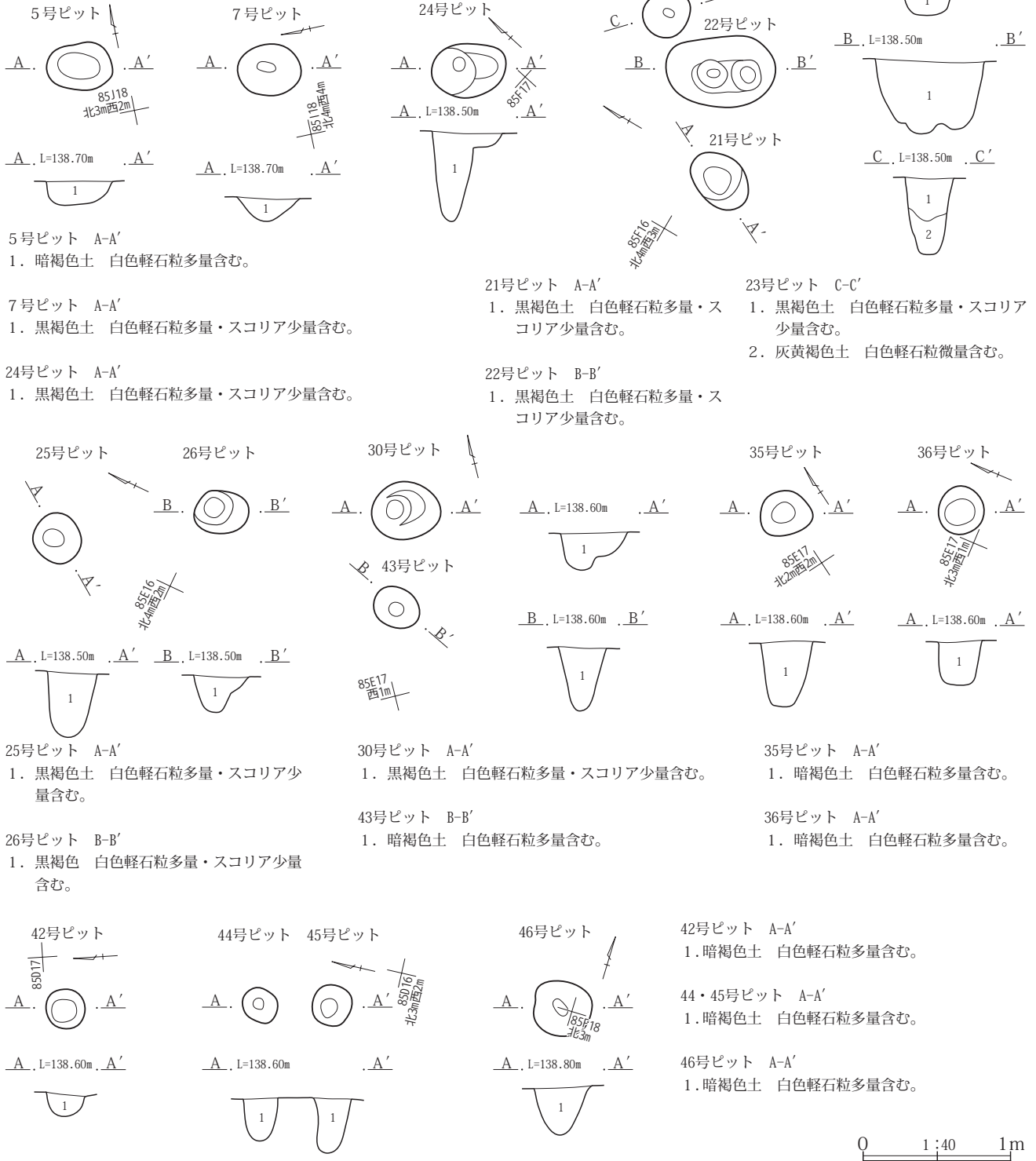
第272図 3区8～12・15・16号土坑、4区1・2号土坑遺構図

6. ピット(第273～284図、PL.137～143)

今回の発掘調査では、2区調査区から84基、3区調査区から130基、計214基のピットを検出した。これらの遺構は、当初掘立柱建物や柵の柱穴として検討したが、掘

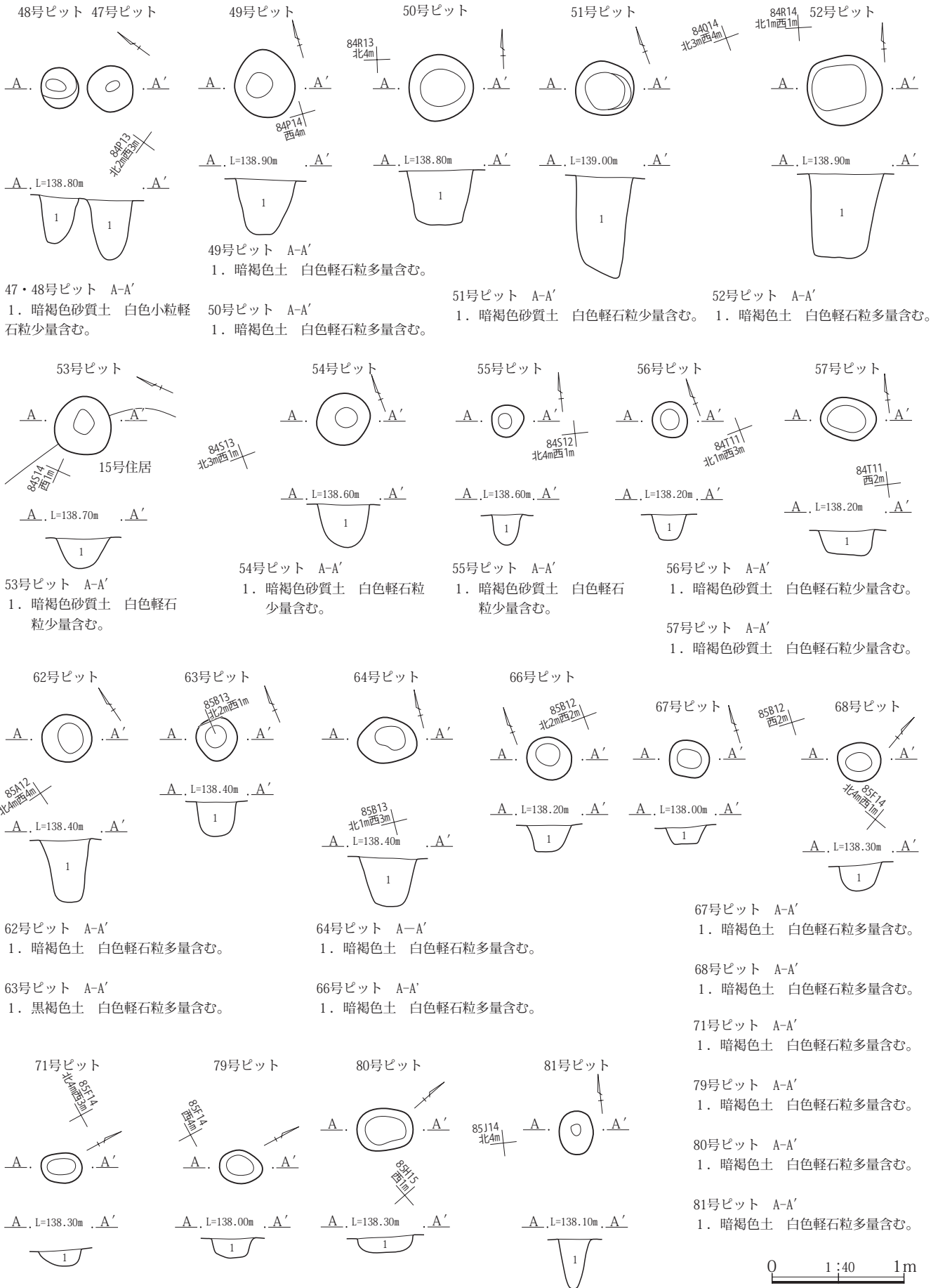
立柱建物や柵として構成できなかったため単独のピットとして取り扱った。なお、ピットからは遺物の出土はみられなかったが、埋没土から古墳時代から平安時代に該当すると判断した。ピットの位置、形状、規模などについては、第16・17表に記載した。

2区

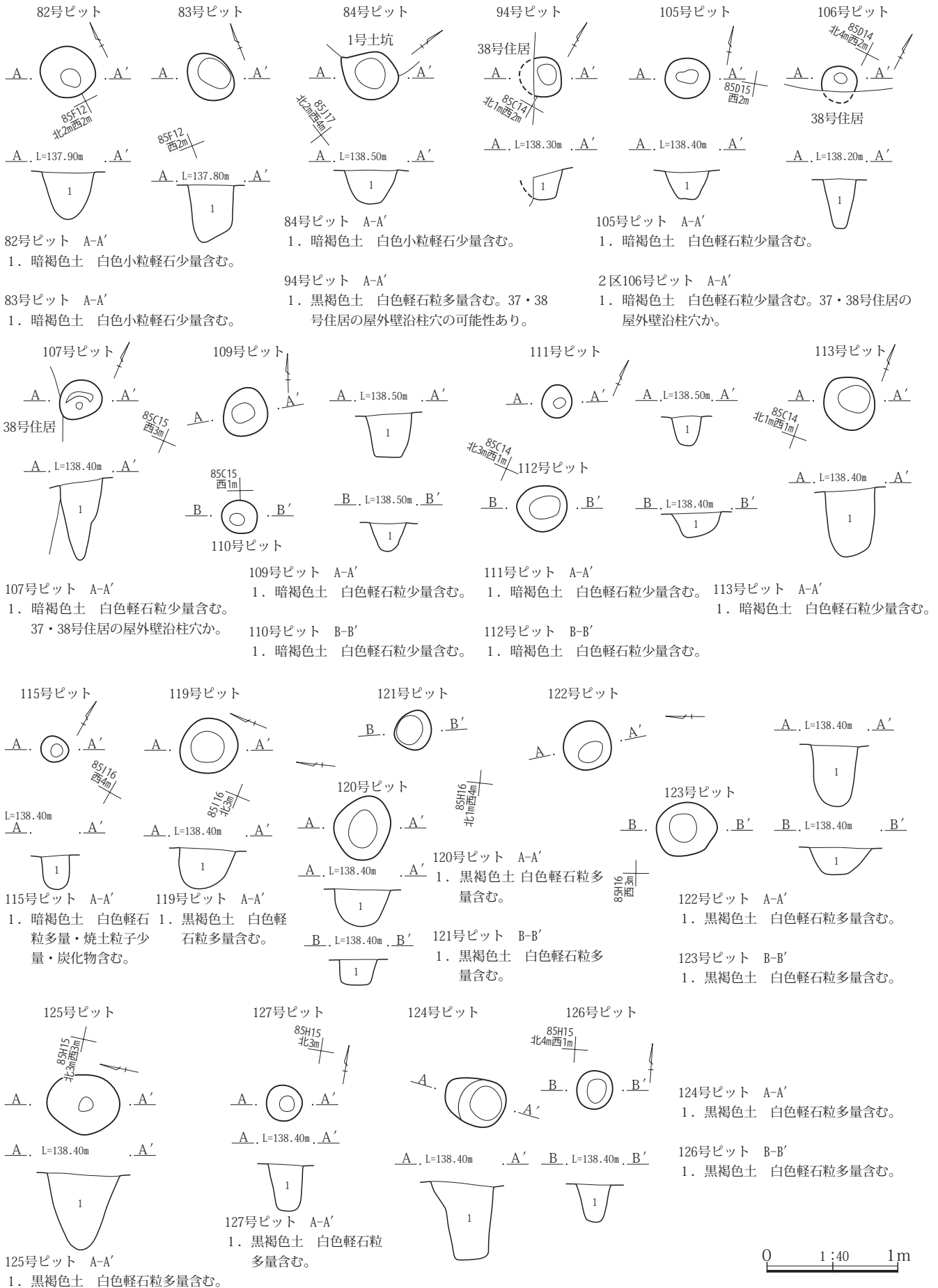


第273図 2区ピット遺構図(1)

第3章 検出遺構と出土遺物

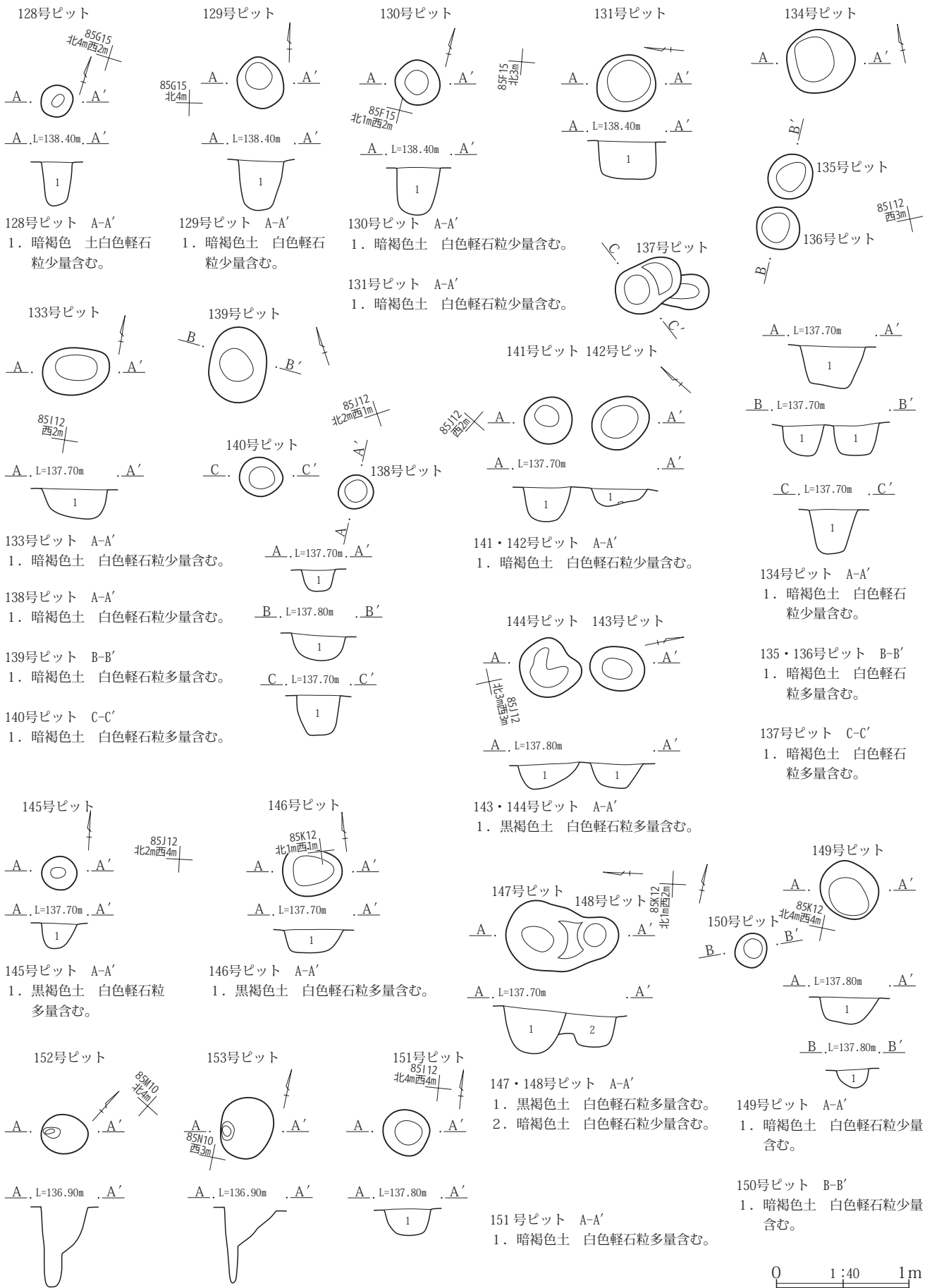


第274図 2区ピット遺構図(2)



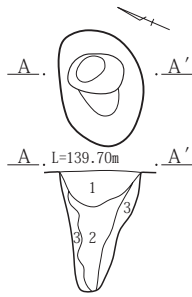
第275図 2区ピット遺構図(3)

第3章 検出遺構と出土遺物



第276図 2区ピット遺構図(4)

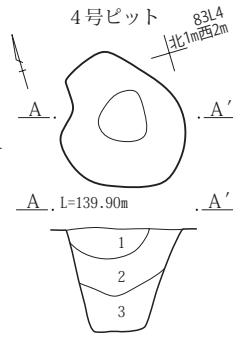
3区 1号ピット



1号ピット A-A'

1. 黒褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。
2. 暗褐色土 ローム土含む。
3. 灰黄褐色土 ローム土含む。

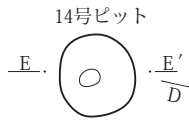
4号ピット



4号ピット A-A'

1. 黒褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。
2. 暗褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒・ローム土微量含む。
3. 暗褐色土 ローム土微量含む。

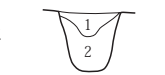
14号ピット 13号ピット



A. L=140.00m A'

B. L=140.00m B'

C. L=140.00m C'



D. L=140.00m D'

E. L=140.00m E'

F. L=139.90m F'



7号ピット A-A'

1. 黒褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。ローム土少量含む。
2. 暗褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。

8号ピット B-B'

1. にぶい黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒・ローム土少量含む。
2. 灰黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。

12号ピット C-C'

1. 灰黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒少量含む。
2. にぶい黄褐色土 ローム土やや多く含む。

13号ピット D-D'

1. 黒褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。

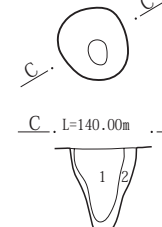
14号ピット E-E'

1. 灰黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒少量含む。
2. にぶい黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。ローム土少量含む。
3. 黒褐色土 FA、FP粒・ローム土微量含む。
4. にぶい黄褐色土 ローム土中心。

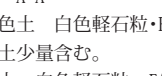
93号ピット F-F'

1. 黒褐色土 FA、FP粒微量含む。
2. にぶい黄褐色土 ローム土少量含む。

17号ピット



A. L=140.00m A'



15号ピット A-A'

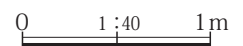
1. 灰黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。ローム土少量含む。
2. 黒褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。

16号ピット B-B'

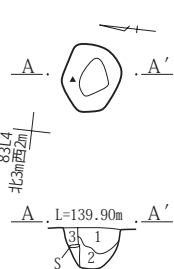
1. 灰黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。

17号ピット C-C'

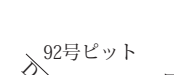
1. 灰黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒・ローム土少量含む。
2. にぶい黄褐色土 ローム土含む。白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。



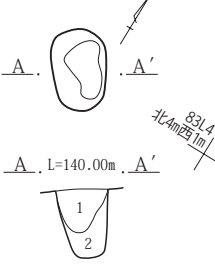
5号ピット



A. L=139.90m A'



6号ピット



A. L=140.00m A'



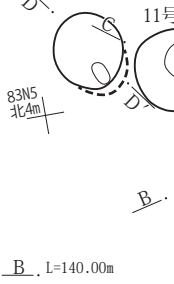
5号ピット A-A'

1. 黒褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。
2. 灰黄褐色土 ローム土微量含む。
3. 黄褐色土 ローム土中心。

6号ピット A-A'

1. 黒褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。
2. にぶい黄褐色土 ローム土含む。

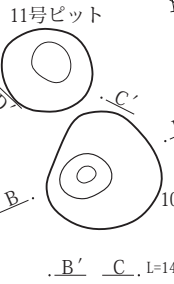
92号ピット



B. L=140.00m B'



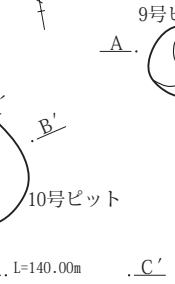
11号ピット



B. L=140.00m B'



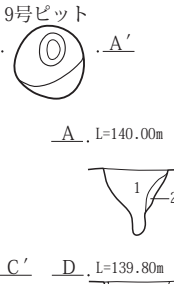
10号ピット



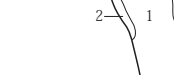
C. L=140.00m C'



9号ピット



D. L=139.80m D'



9号ピット A-A'

1. 灰黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。
2. にぶい黄褐色土 ローム土中心。

10号ピット B-B'

1. 黒褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。ローム土少量含む。
2. 暗褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。ローム土少量含む。
3. にぶい黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。ローム土少量含む。

11号ピット C-C'

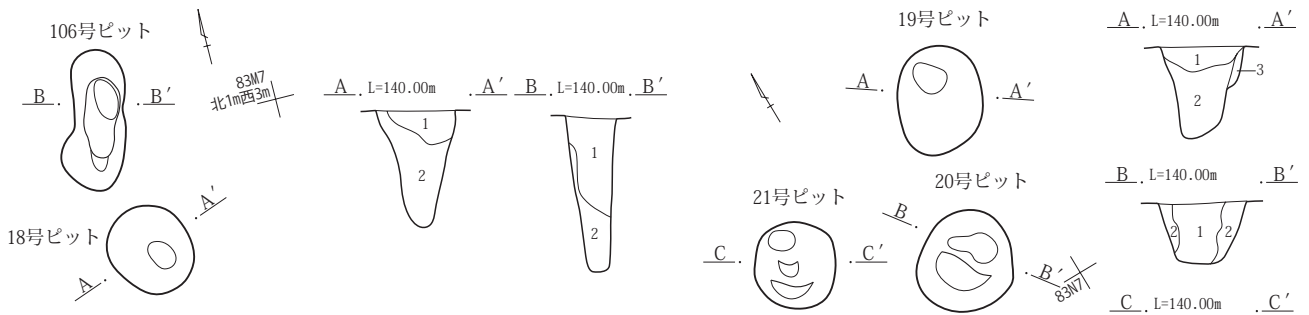
1. 黒褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒少量含む。
2. にぶい黄褐色土 締まりやや弱い、粘性少ない。

92号ピット D-D'

1. 黒褐色土 FA、FP粒微量含む。
2. にぶい黄褐色土 ローム土少量含む。

第277図 3区ピット遺構図(1)

第3章 検出遺構と出土遺物

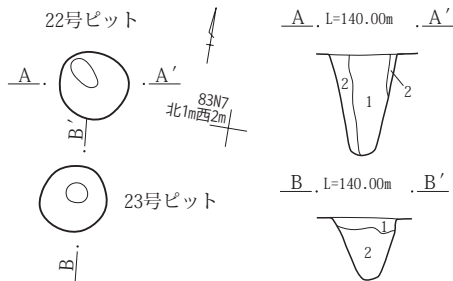


- 18号ピット A-A'
1. 灰黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒・ローム土微量含む。
  2. にぶい黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。ローム土少量含む。

- 19号ピット A-A'
1. 灰黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。ローム土少量含む。
  2. 黒褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒・ローム土微量含む。
  3. にぶい黄褐色土 ローム土中心。

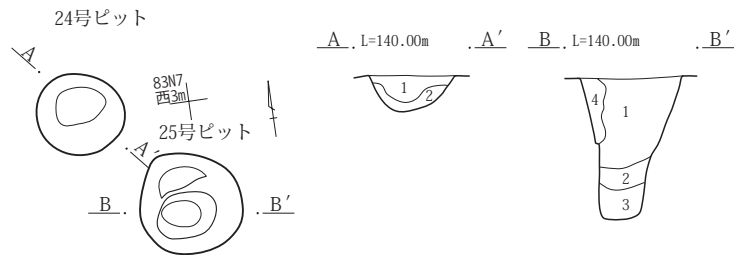
- 106号ピット B-B'
1. 灰黄褐色土 FA、FP粒微量含む。
  2. 灰黄褐色土 ローム土微量含む。

- 20号ピット B-B'
1. 灰黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒・ローム土微量含む。
  2. にぶい黄褐色土 ローム土中心。



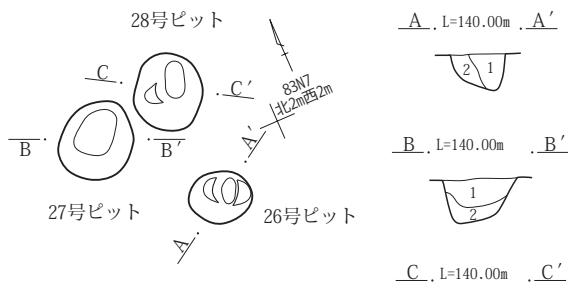
- 21号ピット C-C'
1. 灰黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒・焼土粒微量含む。ローム土少量含む。
  2. 黒褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒・ローム土微量含む。
  3. にぶい黄褐色土 ローム土中心。

- 22号ピット A-A'
1. 灰黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒・ローム土微量含む。
  2. にぶい黄褐色土 ローム土中心。



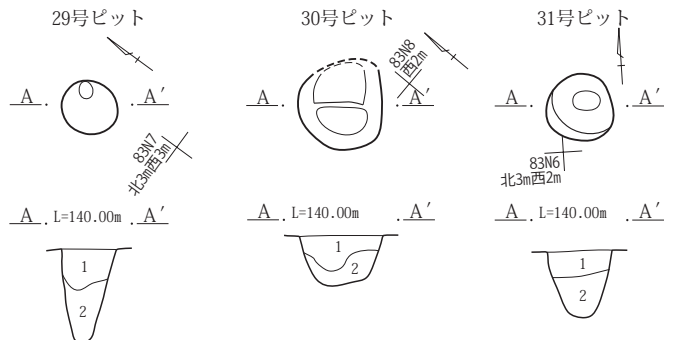
- 23号ピット B-B'
1. 灰黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒・ローム土微量含む。
  2. 黒褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒・ローム土微量含む。

- 24号ピット A-A'
1. 黒褐色土 白色軽石粒・ローム粒微量含む。縮まりやや良い。粘性少しあり。
  2. 暗褐色土 ローム土少量含む。縮まりやや良い。粘性少しあり。



- 25号ピット B-B'
1. 灰黄褐色土 白色軽石粒・FA、FP粒微量含む。ローム土少量含む。
  2. 黒褐色土 ローム土微量含む。
  3. 黄褐色土 ロームブロック含む。
  4. にぶい黄褐色土 ローム土中心。

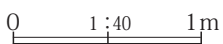
- 26号ピット A-A'
1. 黒褐色土 白色軽石粒・ローム土微量含む。
  2. にぶい黄褐色土 ローム土含む。



- 27号ピット B-B'
1. 黒褐色土 白色軽石粒・ローム土微量含む。
  2. にぶい黄褐色土 ローム土含む。

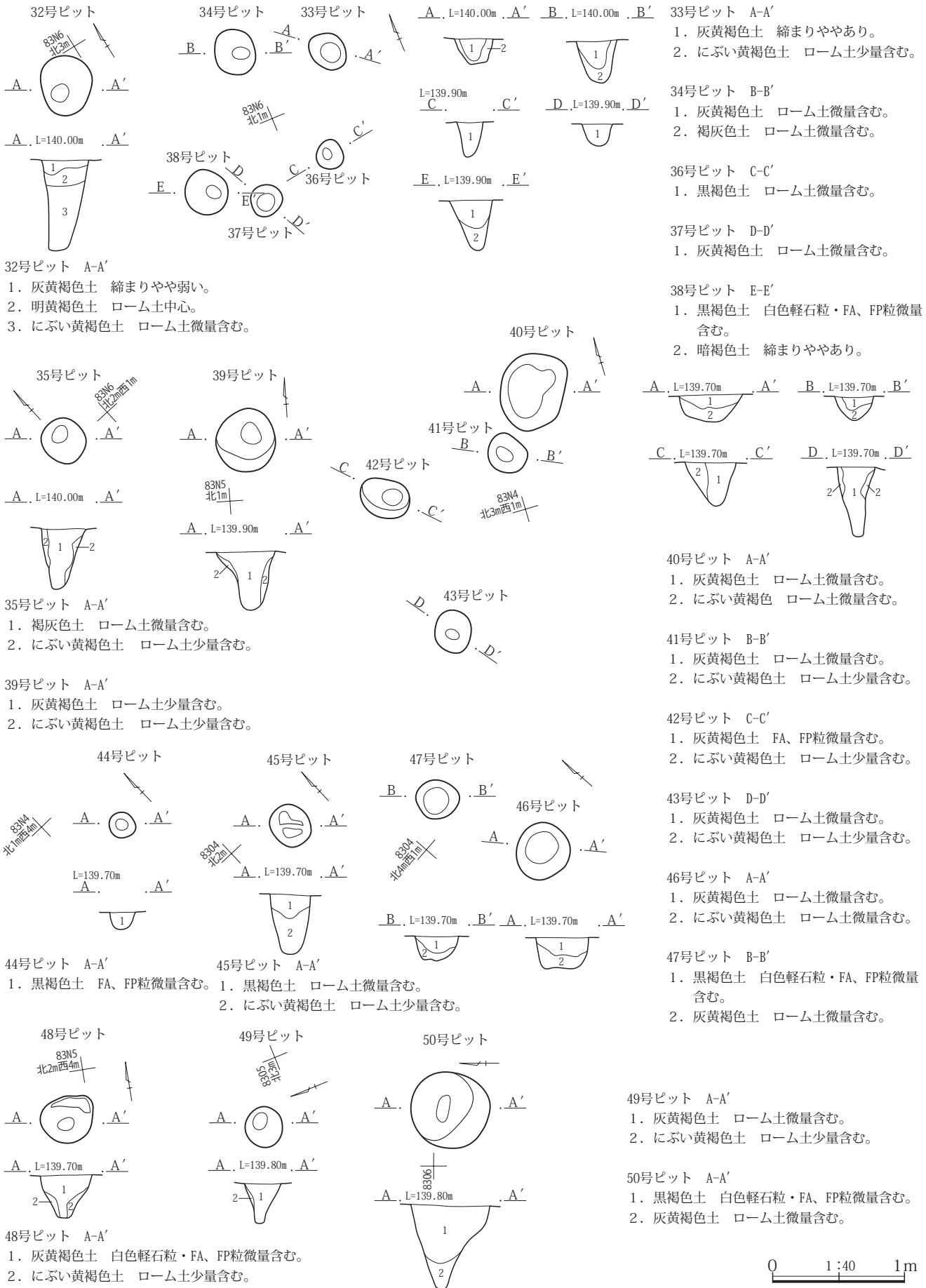
- 29号ピット A-A'
1. 灰黄褐色土 縮まりややあり。
  2. にぶい黄褐色土 ローム土少量含む。
- 30号ピット A-A'
1. 灰黄褐色土 縮まりやや弱い。
  2. にぶい黄褐色土 ローム土少量含む。
- 31号ピット A-A'
1. にぶい黄褐色土 ローム土少量含む。
  2. 灰黄褐色土 ローム土微量含む。

- 28号ピット C-C'
1. 黒褐色土 白色軽石粒・ローム土微量含む。
  2. にぶい黄褐色土 ローム土含む。

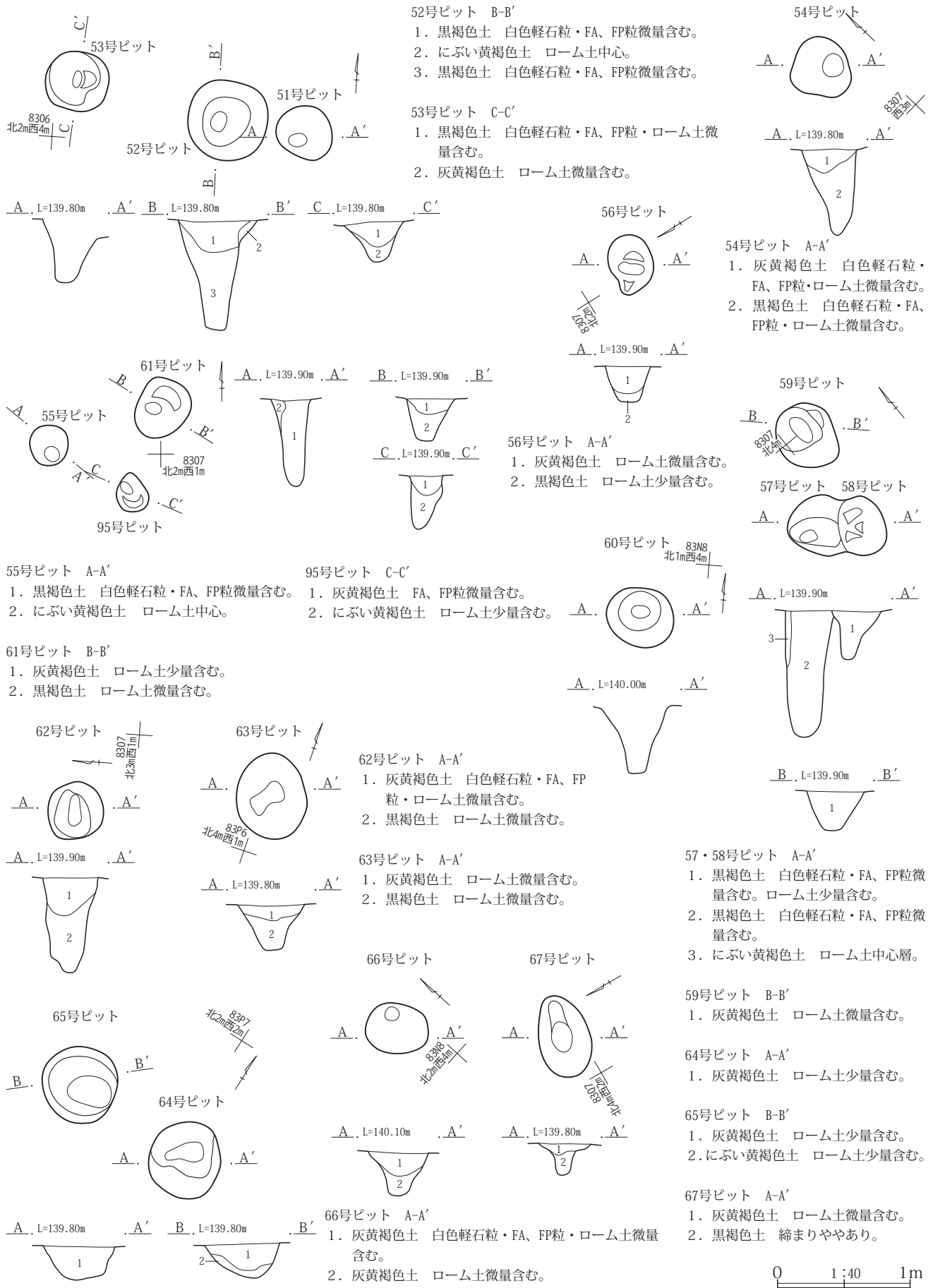


第278図 3区ピット遺構図(2)

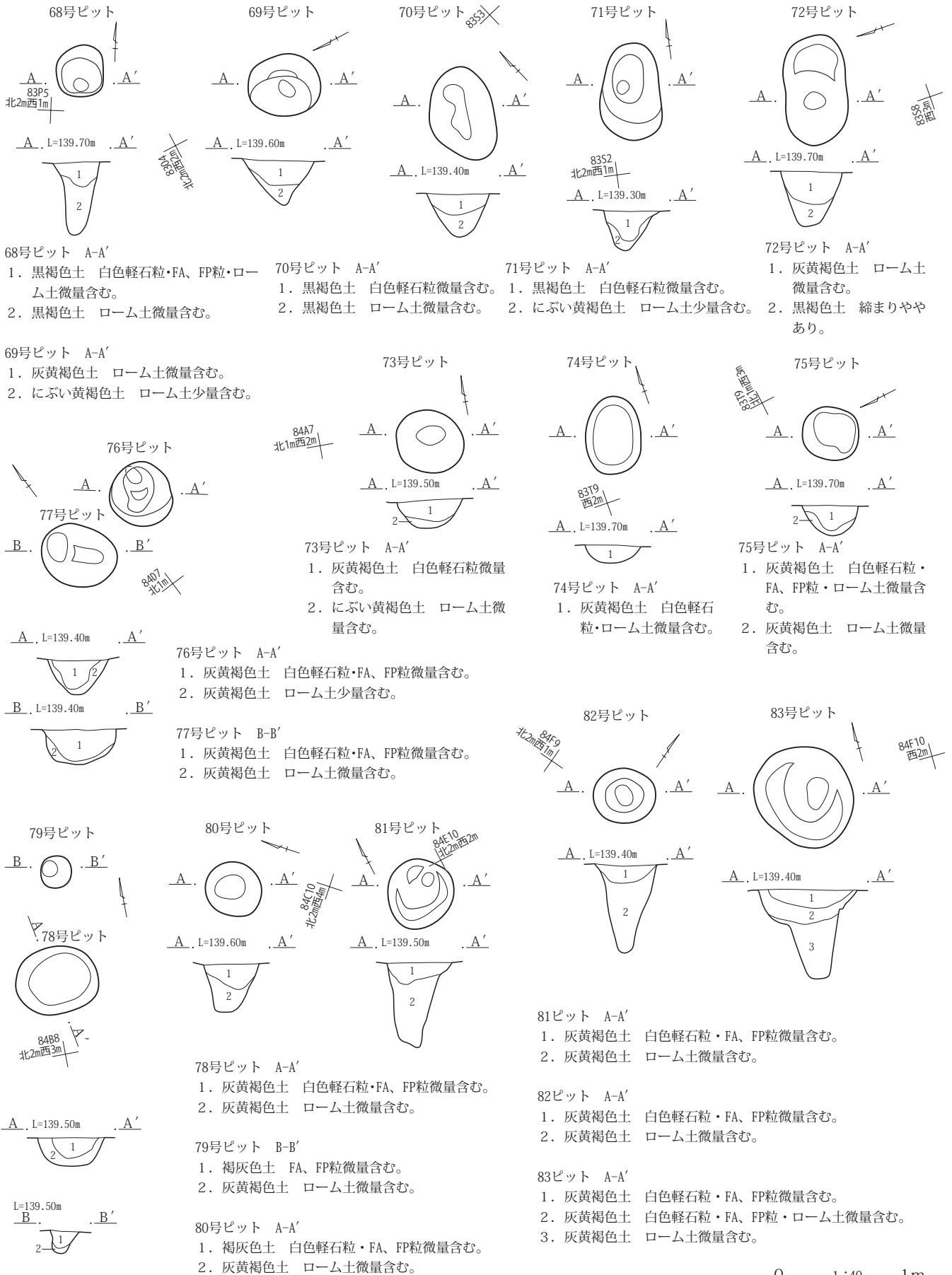




第279図 3区ピット遺構図(3)

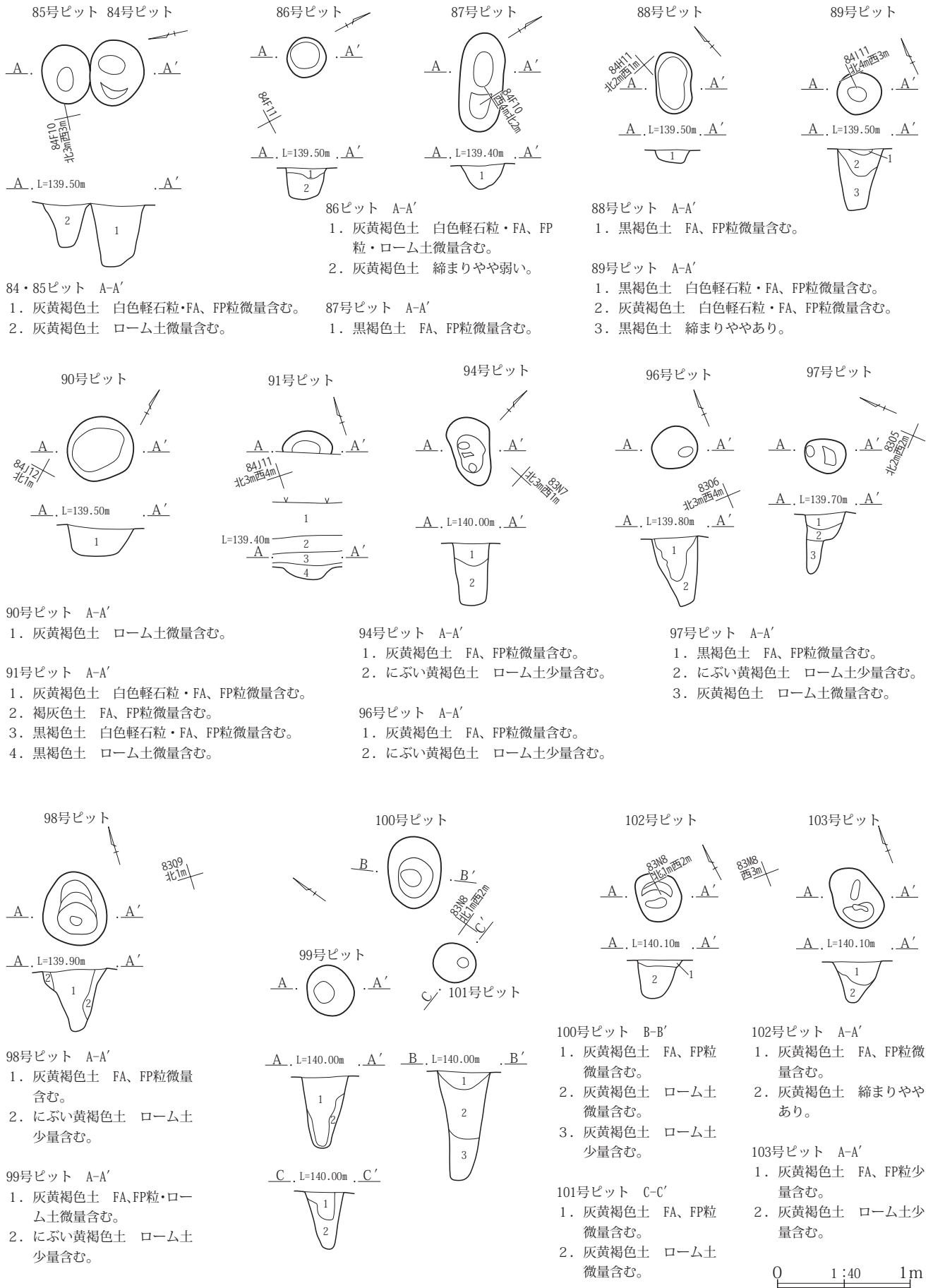


第280図 3区ピット遺構図(4)

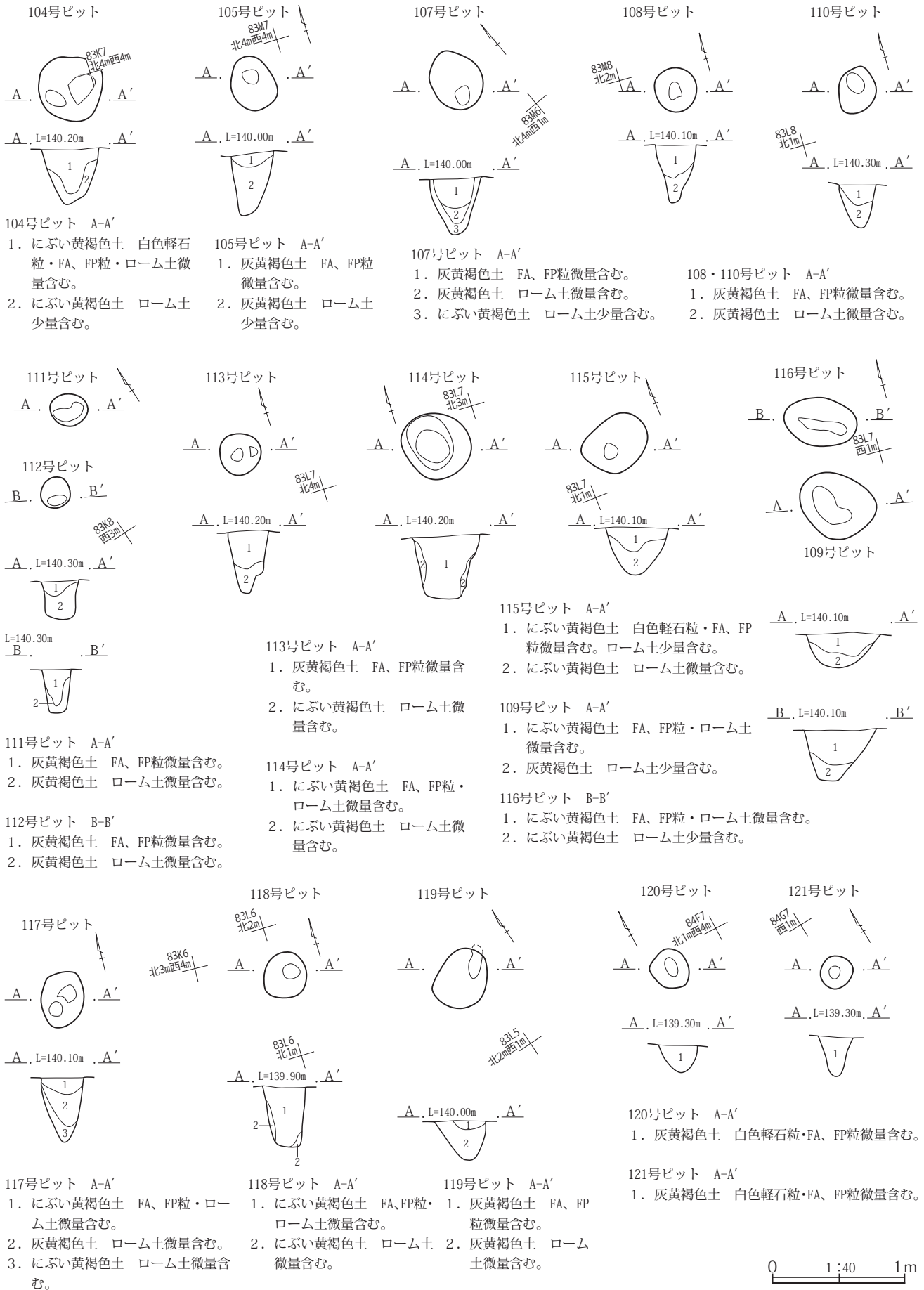


第281図 3区ピット遺構図(5)

第3章 検出遺構と出土遺物

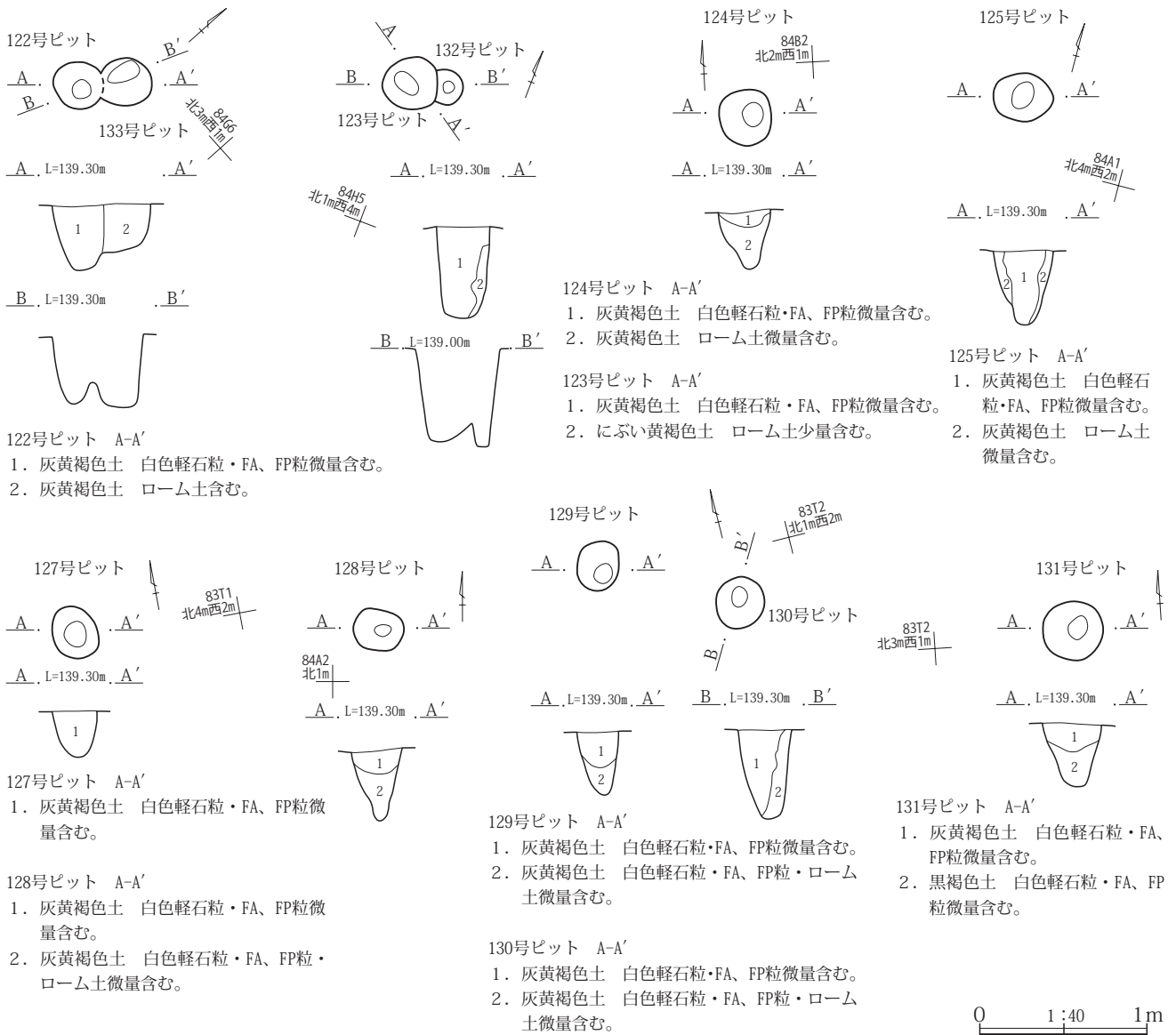


第282図 3区ピット遺構図(6)



第283図 3区ピット遺構図(7)

第3章 検出遺構と出土遺物



第284図 3区ピット遺構図(8)

第16表 2区ピット計測表

ピット番号	グリッド位置	形状	長軸	短軸	深さ	備考欄
5号ピット	85区J18	楕円形	0.44	0.33	0.26	
7号ピット	85区I18	楕円形	0.43	0.34	0.31	
21号ピット	85区F16	楕円形	0.45	0.33	0.29	
22号ピット	85区F16	楕円形	0.74	0.48	0.61	
23号ピット	85区F16	円形	0.34	0.3	0.63	土師器1点7g
24号ピット	85区F17	不整形	0.5	0.37	0.7	
25号ピット	85区E16	円形	0.34	0.32	0.5	
26号ピット	85区E16	不整形	0.37	0.29	0.44	
30号ピット	85区E17	楕円形	0.47	0.4	0.39	
35号ピット	85区E17	不整形	0.35	0.3	0.6	土師器1点10g、2号掘立柱建物重複
36号ピット	85区E17	円形	0.33	0.31	0.41	
42号ピット	85区D16	円形	0.26	-	0.32	
43号ピット	85区E17	楕円形	0.33	0.27	0.61	
44号ピット	85区D16	楕円形	0.24	0.22	0.48	
45号ピット	85区D16	円形	0.29	-	0.57	
46号ピット	85区E・F18	不整形	0.41	0.38	0.43	
47号ピット	84区P13	不整形	0.35	-	0.54	
48号ピット	84区P13	円形	0.3	0.28	0.41	
49号ピット	84区P14	不整形	0.52	0.45	0.5	

## 第2節 古墳時代～平安時代

ピット番号	グリッド位置	形状	長軸	短軸	深さ	備考欄
50号ピット	84区Q13	円形	0.5	0.49	0.42	
51号ピット	84区Q・R14	円形	0.45	0.43	0.83	
52号ピット	84区R14	不整形	0.57	0.53	0.7	
53号ピット	84区S13・14	不整形	0.44	0.42	0.37	15号竪穴住居重複
54号ピット	84区S13	円形	0.42	0.39	0.34	
55号ピット	84区S12	不整形	0.24	-	0.33	
56号ピット	84区T11	円形	0.27	-	0.29	
57号ピット	84区T11	楕円形	0.42	0.31	0.32	土師器 1点17g
62号ピット	85区A12	円形	0.37	0.36	0.51	
63号ピット	85区B13	不整形	0.33	0.3	0.3	
64号ピット	85区B13	不整形	0.44	0.35	0.48	
66号ピット	85区B12	円形	0.35	0.32	0.28	
67号ピット	85区B11・12	不整形	0.31	0.3	0.22	
68号ピット	85区F14	円形	0.32	0.3	0.29	
71号ピット	85区F14	楕円形	0.3	0.23	0.27	
79号ピット	85区F14	不整形	0.33	0.25	0.23	
80号ピット	85区H15	楕円形	0.42	0.35	0.19	
81号ピット	85区I14	楕円形	0.33	0.26	0.48	
82号ピット	85区F12	円形	0.42	0.4	0.44	
83号ピット	85区F12	不整形	0.4	0.33	0.45	
84号ピット	85区J17	不整形	0.46	0.37	0.33	1号土坑墓重複
94号ピット	85区C14	不整形	(0.32)	0.3	0.47	38号竪穴住居重複
105号ピット	85区D14・15	円形	0.33	0.31	0.39	土師器 1点28g
106号ピット	85区D14	円形	(0.28)	0.27	0.5	38号竪穴住居重複
107号ピット	85区C14・15	不整形	0.35	0.3	0.65	38号竪穴住居重複
109号ピット	85区C15	不整形	0.36	0.34	0.44	
110号ピット	85区C14	円形	0.27	0.25	0.33	
111号ピット	85区C14	円形	0.25	0.23	0.35	
112号ピット	85区C14	不整形	0.38	0.35	0.21	
113号ピット	85区C14	不整形	0.43	0.38	0.56	
115号ピット	85区I15・16	円形	0.2	-	0.43	土師器 2点21g
119号ピット	85区H16	円形	0.44	0.42	0.37	
120号ピット	85区H16	不整形	0.49	0.42	0.35	
121号ピット	85区H16	不整形	0.31	0.28	0.3	
122号ピット	85区H16	円形	0.36	0.38	0.55	
123号ピット	85区H15	不整形	0.47	0.41	0.33	
124号ピット	85区H15	不整形	0.47	0.36	0.72	
125号ピット	85区H15	不整形	0.55	0.46	0.6	土師器 1点2g
126号ピット	85区H15	円形	0.3	0.27	0.43	
127号ピット	85区H15	円形	0.27	-	0.52	
128号ピット	85区G15	円形	0.24	-	0.46	
129号ピット	85区F15	不整形	0.37	0.33	0.5	
130号ピット	85区F15	円形	0.34	-	0.45	
131号ピット	85区E・F15	円形	0.46	0.42	0.37	土師器 2点31g
133号ピット	85区I12	楕円形	0.5	0.36	0.31	
134号ピット	85区I12	不整形	0.51	0.48	0.38	
135号ピット	85区I12	円形	0.34	0.32	0.32	
136号ピット	85区I12	円形	0.34	-	0.34	
137号ピット	85区I・J11・12	不整形	0.7	0.38	0.48	
138号ピット	85区J12	円形	0.26	-	0.27	
139号ピット	85区J12	楕円形	0.57	0.42	0.32	
140号ピット	85区J12	円形	0.33	0.3	0.4	
141号ピット	85区J11	円形	0.36	0.35	0.46	
142号ピット	85区J11	楕円形	0.44	0.37	0.29	土師器 1点49g
143号ピット	85区J12	楕円形	0.42	0.33	0.27	
144号ピット	85区J12	不整形	0.46	0.45	0.28	
145号ピット	85区J12	円形	0.26	-	0.23	
146号ピット	85区K12	不整形	0.45	0.36	0.28	
147号ピット	85区K12	不整形	(0.47)	0.53	0.43	
148号ピット	85区K12	不整形	(0.31)	0.32	0.36	
149号ピット	85区K12	不整形	0.46	0.4	0.29	
150号ピット	85区K12	円形	0.26	0.23	0.27	
151号ピット	85区I12	円形	0.35	0.34	0.3	
152号ピット	85区M10	楕円形	0.35	0.3	0.67	
153号ピット	85区N10	楕円形	0.47	0.39	0.64	

第3章 検出遺構と出土遺物

第17表 3区ピット計測表

ピット番号	グリッド	形状	長軸	短軸	深さ	備考欄
1号ピット	83区M 2・3	楕円形	0.63	0.44	0.79	
4号ピット	83区L 4	不整形	0.75	0.66	0.68	
5号ピット	83区L 4	不整形	0.35	0.31	0.26	
6号ピット	83区L 4	楕円形	0.44	0.29	0.42	
7号ピット	83区M 6	楕円形	0.38	0.32	0.49	
8号ピット	83区M 5・6	不整形	0.37	0.38	0.49	
9号ピット	83区M 5	不整形	0.4	0.38	0.56	
10号ピット	83区M 5	不整形	0.63	0.61	0.73	
11号ピット	83区M 5	円形	0.49	0.46	0.95	
12号ピット	83区M 6	楕円形	0.36	0.28	0.56	土師器1点6g
13号ピット	83区M 6	楕円形	0.42	0.32	0.48	
14号ピット	83区M 6	円形	0.43	0.4	0.77	
15号ピット	83区M 6	円形	0.34	0.32	0.58	
16号ピット	83区M 6	円形	0.2	-	0.37	
17号ピット	83区M 6	楕円形	0.4	0.35	0.55	
18号ピット	83区M 7	楕円形	0.49	0.42	0.84	
19号ピット	83区M・N 7	楕円形	0.57	0.45	0.63	
20号ピット	83区N 7	不整形	0.55	0.51	0.47	
21号ピット	83区N 7	不整形	0.45	0.43	0.9	
22号ピット	83区N 7	円形	0.36	-	0.76	
23号ピット	83区N 7	円形	0.35	-	0.49	
24号ピット	83区N 6・7	円形	0.45	-	0.39	
25号ピット	83区N 6	不整形	0.54	-	0.9	須恵器1点5g 土師器2点33g
26号ピット	83区N 7	楕円形	0.34	0.28	0.39	
27号ピット	83区N 7	楕円形	0.43	0.38	0.39	
28号ピット	83区N 7	楕円形	0.41	0.36	0.36	
29号ピット	83区N 7	円形	0.29	0.28	0.7	
30号ピット	83区N 7・8	不整形	(0.50)	0.45	0.37	
31号ピット	83区N 6	不整形	0.36	0.35	0.54	
32号ピット	83区N 6	不整形	0.45	0.38	1.11	
33号ピット	83区M 6	不整形	0.31	0.25	0.4	
34号ピット	83区M・N 6	楕円形	0.35	0.3	0.54	
35号ピット	83区N 6	円形	0.34	0.32	0.77	
36号ピット	83区M 6	不整形	0.22	0.2	0.37	
37号ピット	83区N 6	円形	0.24	-	0.3	
38号ピット	83区N 6	円形	0.33	-	0.5	
39号ピット	83区M・N 5	円形	0.48	0.45	0.65	
40号ピット	83区N 4	不整形	0.59	0.5	0.26	
41号ピット	83区N 4	不整形	0.3	0.27	0.22	
42号ピット	83区N 4	楕円形	0.39	0.29	0.37	
43号ピット	83区N 4	楕円形	0.32	0.28	0.6	
44号ピット	83区N 4	円形	0.2	-	0.32	
45号ピット	83区N 4	楕円形	0.33	0.29	0.59	
46号ピット	83区O 4	円形	0.45	0.4	0.33	
47号ピット	83区O 4	円形	0.33	0.3	0.28	
48号ピット	83区N 5	不整形	0.4	0.35	0.39	
49号ピット	83区O 5	円形	0.3	-	0.44	
50号ピット	83区N 5・6	円形	0.58	-	0.67	
51号ピット	83区O 6	不整形	0.43	0.39	0.54	
52号ピット	83区O 6	円形	0.6	-	0.9	
53号ピット	83区O 6	円形	0.48	0.45	0.35	
54号ピット	83区O 7	不整形	0.45	0.43	0.7	
55号ピット	83区O 7	円形	0.3	-	0.72	
56号ピット	83区N・O 7	不整形	0.45	0.34	0.32	
57号ピット	83区N・O 7	不整形	(0.38)	0.45	1.09	
58号ピット	83区N・O 7	不整形	(0.36)	0.44	0.64	
59号ピット	83区N・O 7	不整形	0.53	0.46	0.43	
60号ピット	83区N 8	円形	0.5	0.45	0.64	
61号ピット	83区O 7	不整形	0.47	0.38	0.46	
62号ピット	83区O 7	円形	0.42	0.45	0.86	
63号ピット	83区P 6	楕円形	0.65	0.53	0.43	
64号ピット	83区P 7	円形	0.58	0.54	0.38	
65号ピット	83区P 7	円形	0.57	-	0.38	
66号ピット	83区N 8	楕円形	0.47	0.38	0.81	2号土坑重複
67号ピット	83区Q 7	楕円形	0.62	0.4	0.32	



## 第2節 古墳時代～平安時代

ピット番号	グリッド	形状	長軸	短軸	深さ	備考欄
68号ピット	83区P 5	不整形	0.39	0.35	0.67	
69号ピット	83区O 4	楕円形	0.54	0.47	0.47	
70号ピット	83区S 2	楕円形	0.71	0.49	0.5	
71号ピット	83区S 2	楕円形	0.73	0.46	0.38	
72号ピット	83区S 8	楕円形	0.82	0.47	0.5	
73号ピット	83区T 7、84区A 7	円形	0.5	0.48	0.31	
74号ピット	83区T 9	楕円形	0.58	0.42	0.28	
75号ピット	83区T 9	円形	0.42	0.4	0.35	
76号ピット	84区C 7	円形	0.49	-	0.58	
77号ピット	84区D 7	楕円形	0.57	0.45	0.46	
78号ピット	84区B 8	楕円形	0.62	0.5	0.28	
79号ピット	84区B 8	円形	0.24	0.22	0.31	
80号ピット	84区C10	円形	0.45	0.4	0.51	土師器 1点9 g
81号ピット	84区E10	円形	0.51	-	0.78	土師器 2点11 g
82号ピット	84区F 9	円形	0.47	0.41	0.68	
83号ピット	84区F 9・10	楕円形	0.78	0.71	0.74	土師器 1点30 g
84号ピット	84区F10	楕円形	0.5	0.4	0.75	
85号ピット	84区F10	楕円形	0.44	0.35	0.44	土師器 1点14 g
86号ピット	84区F11	円形	0.3	-	0.31	
87号ピット	84区F10	楕円形	0.75	0.33	0.24	
88号ピット	84区H11	楕円形	0.46	0.27	0.32	土師器 1点9 g
89号ピット	84区I11	円形	0.33	-	0.6	
90号ピット	84区I12	円形	0.5	0.47	0.32	
91号ピット	84区J11	不明	0.38	(0.17)	0.17	
92号ピット	83区M 5	円形	0.42	0.38	0.73	
93号ピット	83区M 6	不整形	0.4	0.25	0.49	
94号ピット	83区N 7	不整形	0.52	0.32	0.65	
95号ピット	83区O 7	不整形	0.3	0.25	0.53	
96号ピット	83区O 6	円形	0.34	0.32	0.6	
97号ピット	83区O 5	楕円形	0.3	0.25	0.52	
98号ピット	83区Q 9	楕円形	0.55	0.49	0.58	
99号ピット	83区N 8	楕円形	0.38	0.35	0.61	
100号ピット	83区M・N 8	楕円形	0.54	0.4	0.89	
101号ピット	83区N 8	円形	0.32	0.3	0.53	
102号ピット	83区M 8	不整形	0.37	0.33	0.39	
103号ピット	83区M 7	不整形	0.48	0.35	0.47	
104号ピット	83区K 7	不整形	0.51	0.5	0.54	
105号ピット	83区M 7	楕円形	0.42	0.34	0.73	
106号ピット	83区M 7	不整形	0.75	0.35	0.99	
107号ピット	83区M 6	不整形	0.47	0.38	0.49	
108号ピット	83区L 8	円形	0.34	0.32	0.5	
109号ピット	83区L 6	不整形	0.57	0.47	0.38	
110号ピット	83区K 8	不整形	0.35	0.28	0.33	
111号ピット	83区K 8	円形	0.29	0.25	0.39	
112号ピット	83区K 8	円形	0.24	0.22	0.46	
113号ピット	83区L 7	円形	0.31	-	0.53	
114号ピット	83区L 7	円形	0.53	0.5	0.58	
115号ピット	83区K・L 7	不整形	0.53	0.4	0.47	
116号ピット	83区L 7	楕円形	0.55	0.47	0.47	
117号ピット	83区K・L 6	不整形	0.42	0.32	0.74	
118号ピット	83区K・L 6	不整形	0.35	0.33	0.5	
119号ピット	83区L 5	不整形	0.47	0.4	0.48	
120号ピット	84区F 7	不整形	0.3	0.28	0.35	
121号ピット	84区G 6	円形	0.26	-	0.36	
122号ピット	84区G 6	円形	0.3	-	0.58	133号ピット重複
123号ピット	84区H 5	円形	0.35	-	0.84	132号ピット重複
124号ピット	84区B 2	円形	0.35	0.32	0.63	
125号ピット	84区A 1	楕円形	0.37	0.3	0.65	
127号ピット	83区T 1	楕円形	0.35	0.28	0.46	土師器 1点3 g
128号ピット	83区T 2	楕円形	0.32	0.27	0.62	
129号ピット	83区T 2	楕円形	0.32	0.26	0.55	
130号ピット	83区T 2	円形	0.32	0.3	0.73	
131号ピット	83区T 2	円形	0.38	0.35	0.57	
132号ピット	84区H 5	(円形)	0.23	(0.15)	0.88	123号ピット重複
133号ピット	84区G 6	(楕円形)	0.3	(0.28)	0.61	122号ピット重複

## 7. 埋没谷と谷水田

### (1) 概要

赤城白川の旧河道と見られる埋没谷2カ所を確認したほか、2区東端の近世水田下で古代の谷水田に伴う溝7条を確認した。

埋没谷2カ所は1区南西端と2区南西端にあり、概ね南北方向を向いていた。埋没谷は2カ所とも浅く窪んだ状態で確認され、厚い砂壤土で覆われていた。この窪地が土圧によるものか即断できないが、等高線図でも容易に読み取ることができる。このほか、1区内では17・18号溝付近に同様な窪地があり、乱流する旧河道跡としての可能性が指摘できるのではないかと考えている。

これに似た埋没谷は現赤城白川右岸に所在する引切塚遺跡・青柳宿上遺跡(当事業団報告書第602集)でも確認されており、「暴れ川」として知られる赤城白川の過去を垣間みるようである。同遺跡報告書の記載では、縄文時代早期包含層を覆う氾濫堆積物や縄文時代晩期～弥生時代中期包含層を覆う河川堆積物が明らかにされているほか、それらを切る複雑な河川堆積の様子が確認されている。

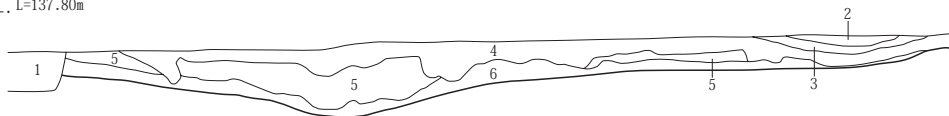
本遺跡の発掘調査で確認された埋没谷について、その全貌は明らかにできていないが、畝間にAs-Cが堆積した1区南西端の畠(古墳時代前期)が浅く窪んだ埋没谷の上にあることや、2区南西端の窪地が古墳時代住居の下に潜り込んでおり、旧河道が埋没した時期の下限を読み取ることができる。以上を踏まえるなら、水田1枚程度しか取れない幅の狭い2区東端の谷水田についてもそれが赤城白川の旧河道に起源する可能性さえ否定できないのではないかと考えている。以下、発掘調査で確認した埋没谷2カ所と、それに起源する谷水田1カ所についてその概要を記す。

### (2) 埋没谷

#### 1区南西端の埋没谷(第285～289図、PL.144・182)

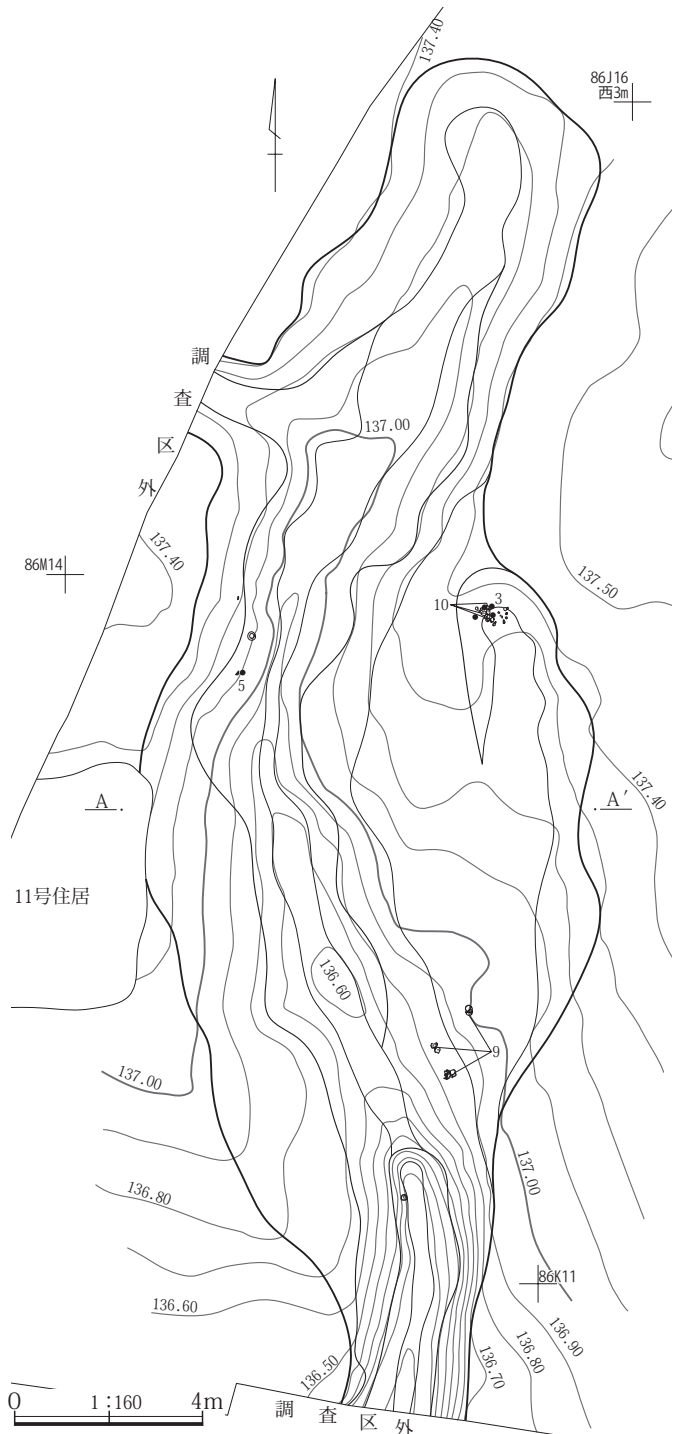
調査時に1区8号溝とした窪地が、これに相当する。

A-A', L=137.80m



第285図 1区埋没谷遺構図

同溝の北には4号竪穴住居が確認されているが、溝は住居の手前で立ち上がる。10cm間隔で示された等高線図を見ると、12・13号竪穴住居付近の両側(北西側と北東側)



A-A'

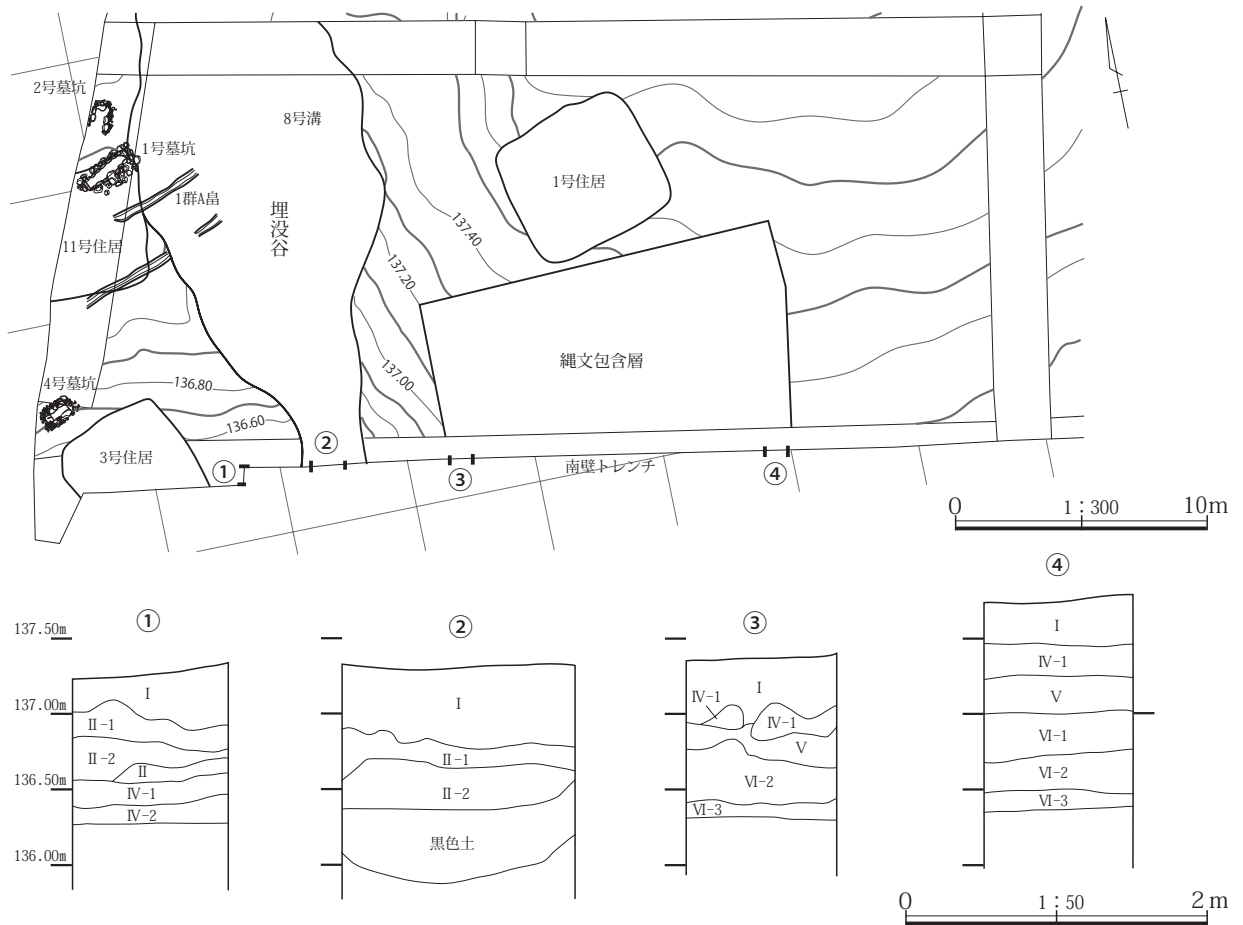
1. 11号住居埋土。
2. 黒褐色土 Hr-FP粒を含む。
3. 黄色褐色土 Hr-FA堆積層。
4. 黒色土 大量のAs-C粒を含む。
5. 黒色土 褐色土ブロック少量含む。
6. 暗褐色土 褐色土を大量に含む。

0 1:80 2m

が浅く窪んでおり、旧河道跡の存在を示唆している。これを裏づけるように、調査抗2、調査抗9・10では黒色土を挟んで厚く砂壤土が堆積していた。

1区8号溝とした窪地は確認長29.80mを測り、調査区の南へ続いていた。溝の上端幅2.50m～9.60m・下端幅0.30m～1.56m・深さ0.94m～0.13mで、断面形状は皿形状から逆台形状を呈していた。北から南に勾配があり、比高差は1.31m、勾配率は4.4%である。溝は、①11号竪穴住居と重複しており、住居は溝の5層が埋没した段階で構築されたこと。②この窪地の出土遺物には古墳時代前期から後期の遺物があり、6世紀代の土器が集中して出土、5層(8溝の埋土)が埋没したあとある程度まだ窪んでいるところへ一括廃棄したものであること。③溝が人為的な掘削であるか、自然の作用によるものか不明とする所見が記されている。溝の上層には、As-Cが混じる黒色土で埋没していたが、下層包含層の調査で厚く砂壤土(河川性の氾濫堆積物)が黒色土を挟んで堆積していることが判明しており(第285図)、これをトレースするように8号溝が確認されているわけである。

これにより、8号溝とした窪地は旧河道が埋没する過程で生じた窪地と判断されるのであるが、埋没時期についての詳細は明らかではない。出土遺物から見て、少なくともAs-C降下前の島の周辺は浅く窪んでいたこと、この窪地は6世紀代にはさらに埋没が進んだことが確実である。砂壤土の堆積時期については途中黒色土の間層を挟んで上下2層があり、上層砂壤土の堆積は縄文時代中期と想定されているが、一方では砂壤土に挟まれた下層黒色土から後期土器片が出土したという調査時の所見が残されている。下層黒色土から出土したとされる後期土器片について整理段階で確認されていないため、砂壤土の堆積時期についてその判断は保留せざるを得ないが、①1区から出土した縄文土器片71点中の62点が後・晩期の土器片であり、中期土器片は9点と少ないこと。②8号溝覆土とされるもの(第286図)は後期後半から晩期段階の土器片が主体を占めているが、このほか少量だが中期段階の土器片(加曾利E1式・中期末とされるもの各1点)があり、少なくとも上層砂壤土には中期以降の土器片が出土することが分かる。調査所見に残る砂壤土下の

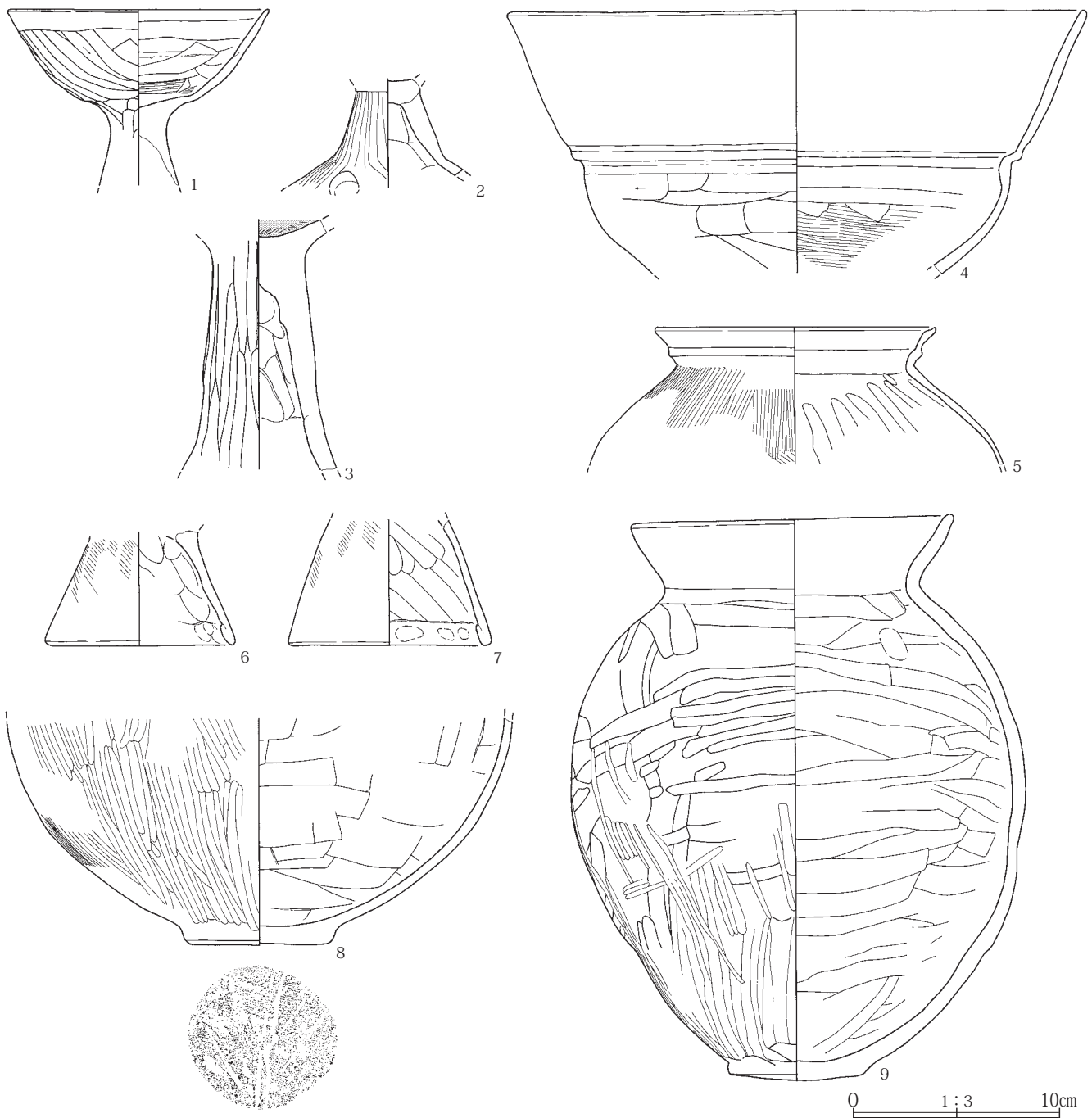


第286図 1区埋没谷周辺柱状図

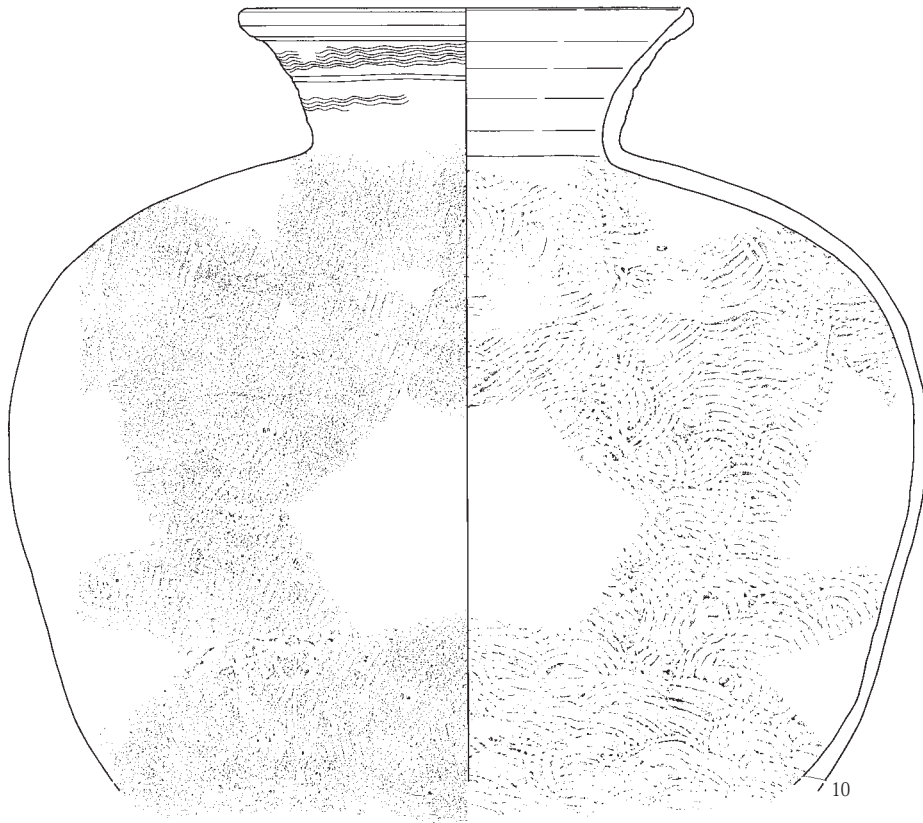
黒色土を出土層位とする土器片類について確認できない現状は変わらないが、下層黒色土中から後期土器片が出土していたという所見が事実なら、むしろそれが砂壤土の堆積時期を示唆するということになるだろう。

これに似た溝2条が確認されている。1区17・18号溝がそれで、2条とも南西方向を向いていた。17号溝は確認長34.68m、上端幅2.80m～5.36m・下端幅0.68m～1.52m・深さ0.06m～0.27mを、18号溝は確認長37.60m、上端幅1.56m～4.60m・下端幅0.64m～1.40m・深さ0.05

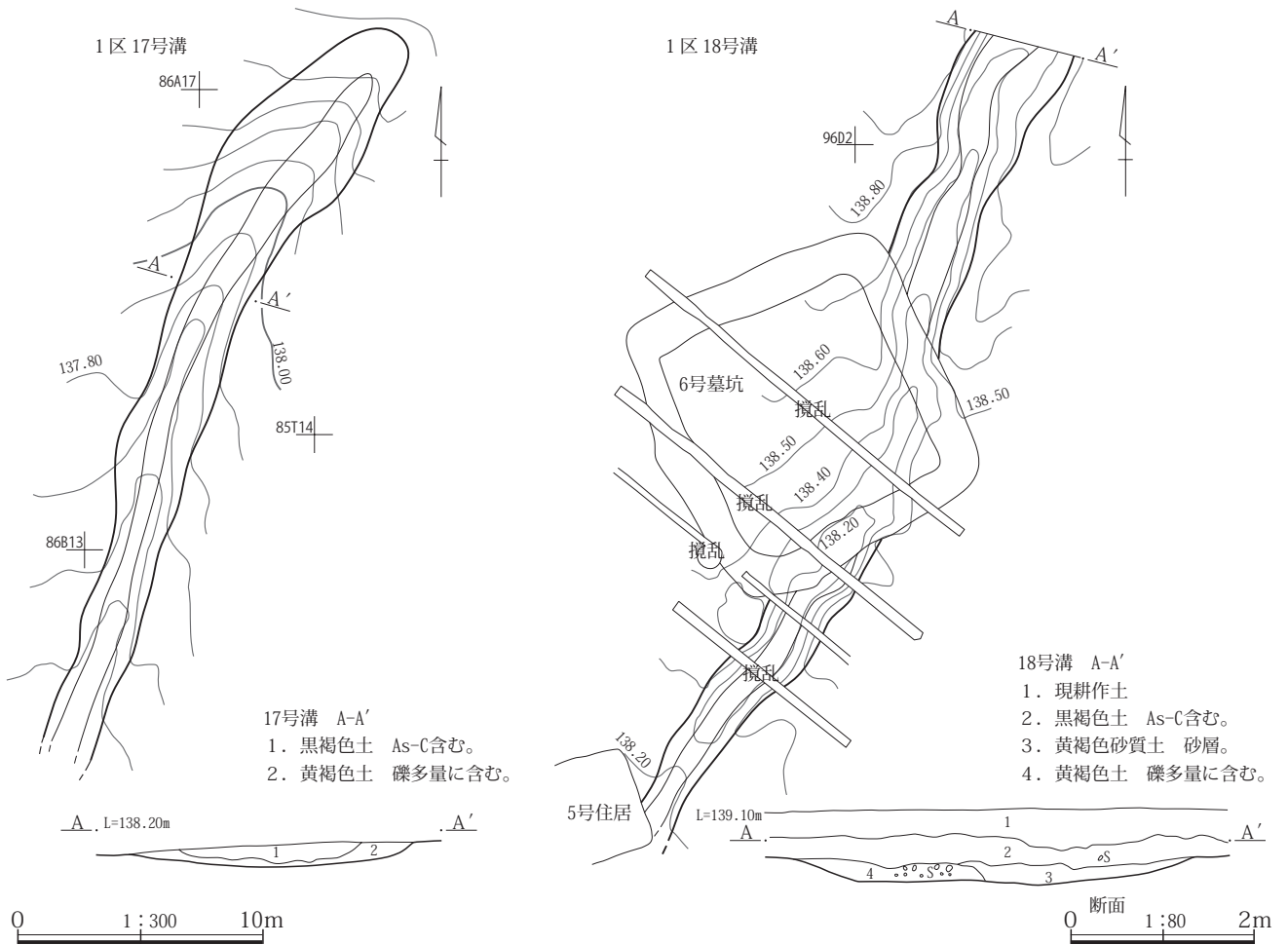
m～0.42mを測る。17号溝はAs-Cが混じる黒色土を、18号溝は礫の混じる砂質土が堆積していた。出土遺物は確認されていないが、18号溝は5世紀後半代の6号墳の下に潜り込んでいることや、17号溝も浅い窪地をトレースしていることが分かる(第289図)。17・18号溝下の土層堆積については確認されていないが、18号溝に近い調査坑10や17号溝の延長部付近(調査坑4・7)では、調査坑2と同様に黒色土を挟んで厚く砂壤土が堆積するのではないだろうか。



第287図 1区埋没谷出土遺物図(1)



第288図 1区埋没谷出土遺物図(2)

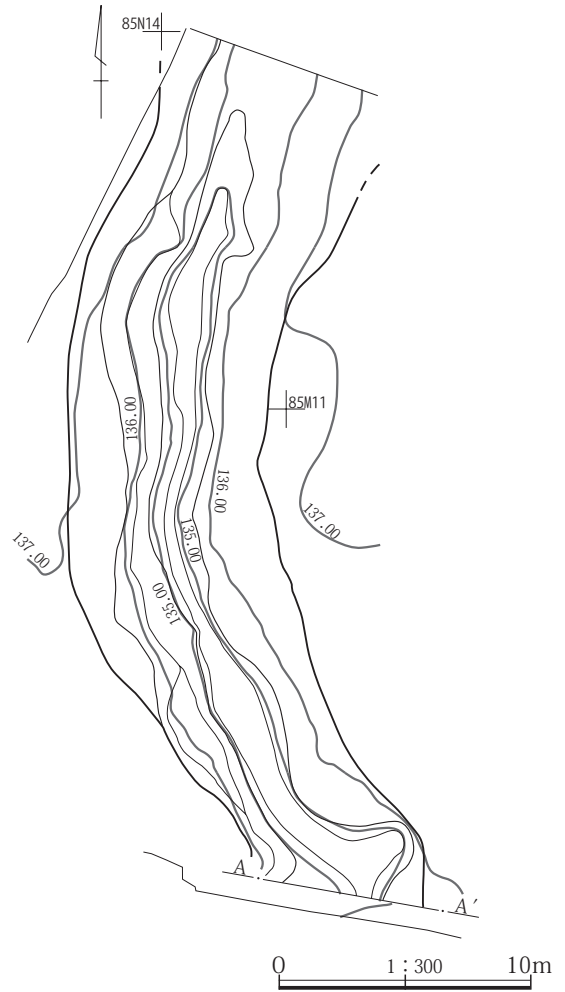


第289図 1区17・18号溝遺構図

2区南西端の埋没谷(第290図、PL.144)

現状で、埋没谷は略南東方向に向いているが、調査区南で走行を変えており、大きく蛇行している。埋没谷の確認長は36.8mを測る。上端幅9.60m・下端幅1.80m・深さ2.36m～1.57mほどで、埋没谷の断面は概ね逆台形状を呈しているが、所見では埋没谷の北側部分は浅く開き、谷幅が徐々に広がるといことである。埋没谷はローム層を削り込んで河川性氾濫堆積物(7～9層)が堆積していた。さらにその上位にAs-Cの混じる黒色土が堆積、概ねHr-FA(第290図)降下の時期には埋没を終えていたとすることができる。

この地点の埋没谷は、調査段階から自然河道としての可能性が指摘されていた。調査の発端は上層遺構の確認面が浅く窪んでおり、調査区境の南側壁面を掘り下げたところ、大きく落ち込んでいたことによる。埋没谷の全域は調査工程上の都合等で完掘できていないが、北に延びることが確実である。出土遺物は確認されていないが、埋没谷の北には2区1・43号竪穴住居など古墳時代後期の住居がある。



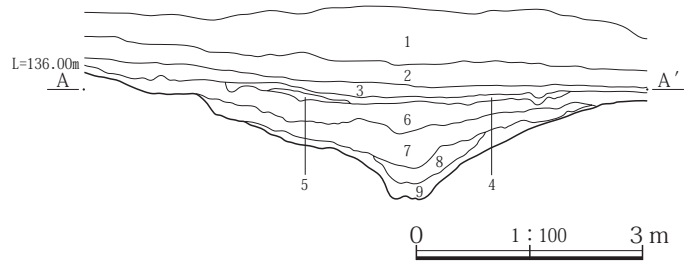
(3) 谷水田

上層水田面(1面)の下層で、水田面2面が想定されている。2面水田はAs-B下で、3面水田は2面水田耕土下の砂質土(河川性氾濫堆積物)を剥いで確認された。それぞれの水田面には、畦畔など水田認定の指標となるようなものはない。台地上には古墳時代前期から古代にかけての集落が断続的に営まれており、低地部では水田の検出が期待されていたが、上層水田と同様に台地西側縁辺に取り付く溝が確認されただけであり、遺構として水田は確認できていない。

低地部のプラントオパール分析結果は、2面水田が2,100個/g、3面水田が700個/gと少ない。特に、3面水田とした地点のそれは数字から水田耕作をダイレクトに想定するのは難しいようである(第5章、第4節)。

2区2面水田(第291・293・294図、PL.145～147・182)

2区2面水田は1面水田下にあり、620㎡ほどが調査されている。発掘調査では、水田の畦畔等は確認されていないが、台地西側縁辺の溝4条(8～10号溝)が水田に取り付く溝であろうとされた。



西側谷部 A-A'

1. 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 表土(現耕作土)。
2. 暗褐色砂質土(10YR3/3) 少量の白色軽石(浅間C軽石+榛名山ニッ岳軽石)を含む。
3. 暗褐色土(10YR3/3) 少量の白色軽石(浅間C軽石+榛名山ニッ岳軽石)を含む。
4. 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量の白色軽石(榛名山ニッ岳軽石)を含む。
5. にぶい黄橙色土(10YR6/4) 多量のブロック状榛名山ニッ岳火山灰(Hr-FA)を含む。
6. 黒褐色土(10YR3/2) 多量の白色軽石(浅間C軽石)を含む。
7. 黒色弱粘質土(10YR2/1) 多量の円礫(径30～150mm大)を含む。  
=河川(赤城白川)氾濫に伴う流入堆積か?
8. 暗褐色弱粘質土(10YR3/3) 少量の小円礫(径10～40mm大)を含む。  
=河川(赤城白川)氾濫に伴う流入堆積か?
9. 黒褐色弱粘質土(10YR3/2) 多量の小円礫(径10～40mm大)を含む。

第290図 2区谷状遺構図

水田の検出面はAs-B下にあり、黒色泥質土を水田耕土としていた。いわゆる火山灰に覆われた水田として理解されるものであるが、水田耕土は低地部(水田)北壁や台地縁辺に近い西側で薄く堆積していた。これに対し、低地部中央ではやや厚く堆積していたが、ブロック状にAs-Bが堆積するなど、堆積状態に安定性を欠いていた。水田面は1面水田(勾配率は約2.3%程度)よりさらに勾配(3.0%)があり、等高線図(第291図)を見ても分かるように、段造成されたような状況は想定できない。溝4条は1面水田に取り付く溝の内側にあり、下層水田に取り付く給・排水用の溝として理解されている。溝は4条とも近接していることから、これが同時に機能したとは思えず、水田を暫時拡張したものと捉えておきたい。給・排水用の溝と考えた7～9号溝の上位にはAs-Bの堆積が見られず、この堆積状況からみる限り、早い段階で水田復旧が行われたということになる。以下には2面水田に取り付く溝の概要を記す。

2区7号溝は確認長75.5mで、溝の上端幅2.30m～0.50m・下端幅0.72m～0.30m・深さ0.36m～0.03mを測る。その断面形状は、皿状を呈している。溝の北端と南端では比高差が1.80mほどで、勾配率は2.4%である。7～9号溝は重複関係にあり、9・8・7号溝の順に掘り込まれる。埋没土はローム土を含んだ黒褐色～灰褐色砂質土とされ、その上位にはAs-Bが混じる砂質土が水平堆積している。なお、7号溝のみAs-Bが覆土中に混じるとする記載がある。

2区8号溝は確認長41.0mであり、溝の上端幅2.00m～0.70m・下端幅1.20m～0.20m・深さ0.24m～0.10mを測る。その断面形状は、皿状を呈している。溝の北端と南端では比高差が1.00mほどで、勾配率は2.4%である。

2区9号溝は確認長75.4mを測る。溝の上端幅1.90m～0.80m・下端幅1.20m～0.26m・深さ0.65m～0.18mで、溝の断面形状は箱形を呈し深く掘り込まれ、部分的に側壁が水流によりえぐれている。溝の北端と南端では比高差が1.20mほどで、勾配率は1.6%である。

2区10号溝は確認長55.5mで、溝の上端幅1.40m～0.20m・下端幅0.60m～0.10m・深さ0.37m～0.08mを測る。その断面形状は皿状を呈し、概して浅い。溝の北端から南端では比高差が0.90mほどで、勾配率は1.6%

である。

### 2区3面水田(第292～294図、PL.148・182)

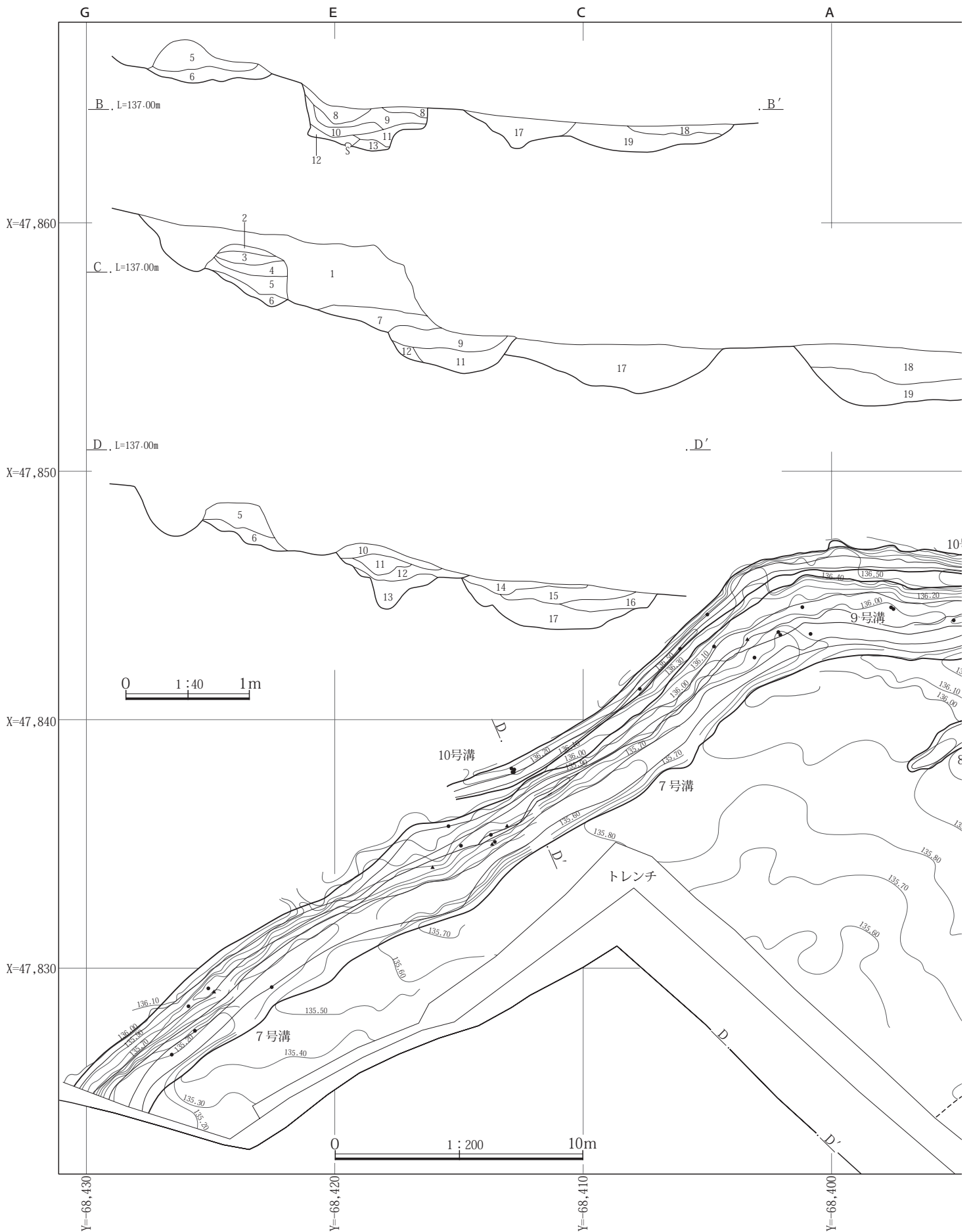
2区2面水田の下層にあり、620m<sup>2</sup>ほどが調査されている。発掘調査では、3面水田として畦畔は確認されていないが、2面水田と同様に台地縁辺に取り付く溝1条と、やや蛇行気味に走る南北方向の溝1条がある。

水田検出面は、2面水田下層に堆積する砂質土の直下で、水田面の勾配率は2.6%ほどである。畦畔こそ確認されていないが、1面水田と同様に等高線が詰まる箇所が135.80m付近と136.20m付近にあり、これにより1面水田同様の段造成された水田が想定されるかもしれない。西側台地縁辺を走る11号溝は調査区の北(O-11グリッド)で直角に曲がり、10mほど東のM-11グリッドで再び直角に曲がり、北へ走行を変える。それ以北の溝の走行は確認できていないが、その走行は明らかに人為的である。12・13号溝の新旧関係は不明で、別の遺構番号が付されているが、形状から見れば同じ溝として捉えるべきものかもしれない。以下には3面水田に取り付く溝の概要を記す。

2区11号溝は確認長77.50mほどで、溝の上端幅2.64m～1.30m・下端幅1.24m～0.30m・深さ0.60m～0.22mを測る。その断面形状は、逆台形形状を呈している。溝の北端と南端では比高差が1.80mほどあり、勾配率は2.3%である。12・13号溝と重複関係にあり、新旧関係については明らかにすることはできなかった。

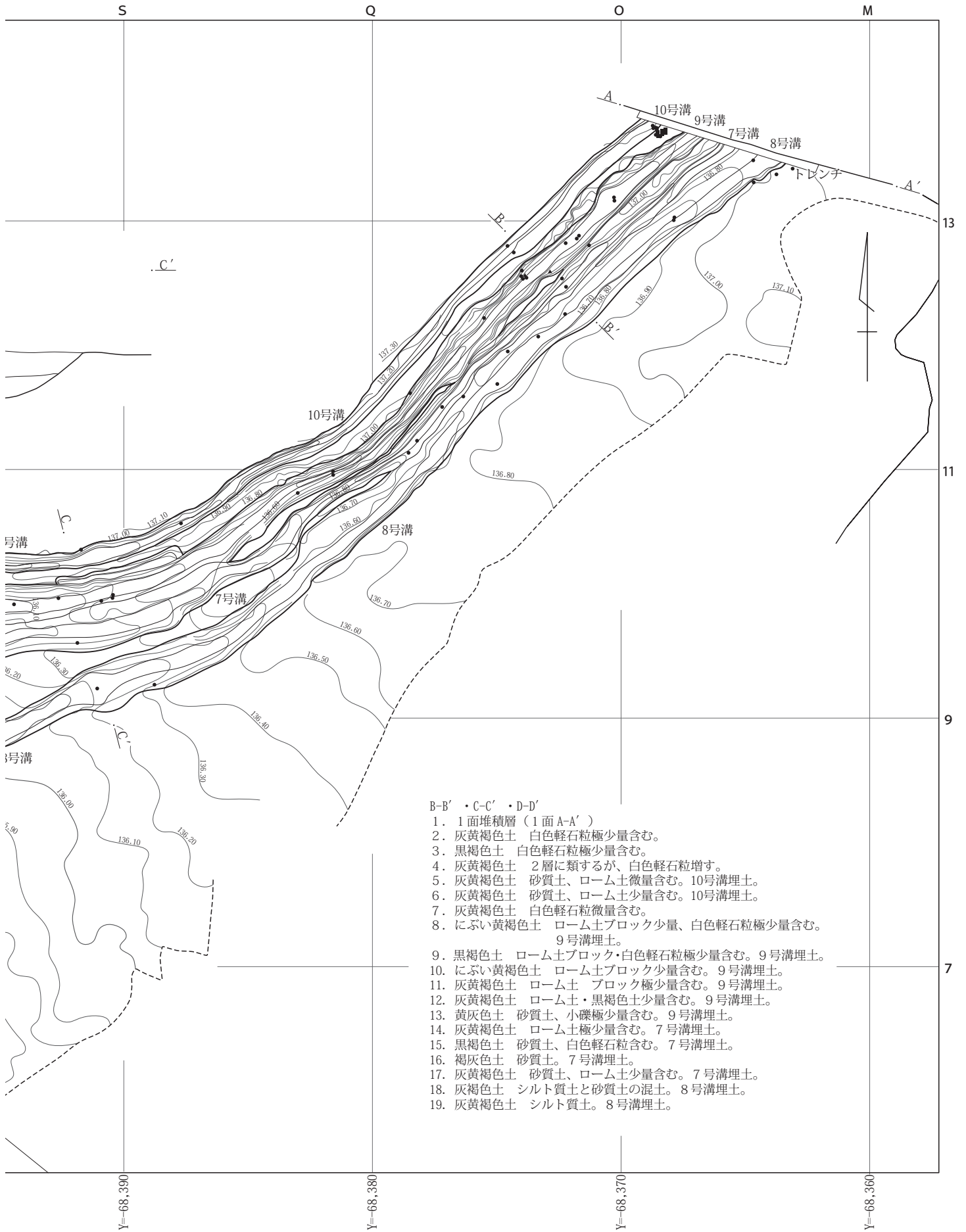
2区12号溝は確認長15.50mで、その上端幅1.25m～0.50m・下端幅0.48m～0.20m・深さ0.37m～0.08mを測る。溝の断面形状は、逆台形形状を呈している。溝の北端と南端では比高差0.60mがあり、勾配率は3.9%である。

2区13号溝は確認長19.80mで、その上端幅1.70m～0.70m・下端幅0.64m～0.20m・深さ0.35m～0.20mを測る。溝の断面形状は、逆台形形状を呈している。溝の北端と南端では比高差が0.50mほどあり、勾配率は2.5%である。



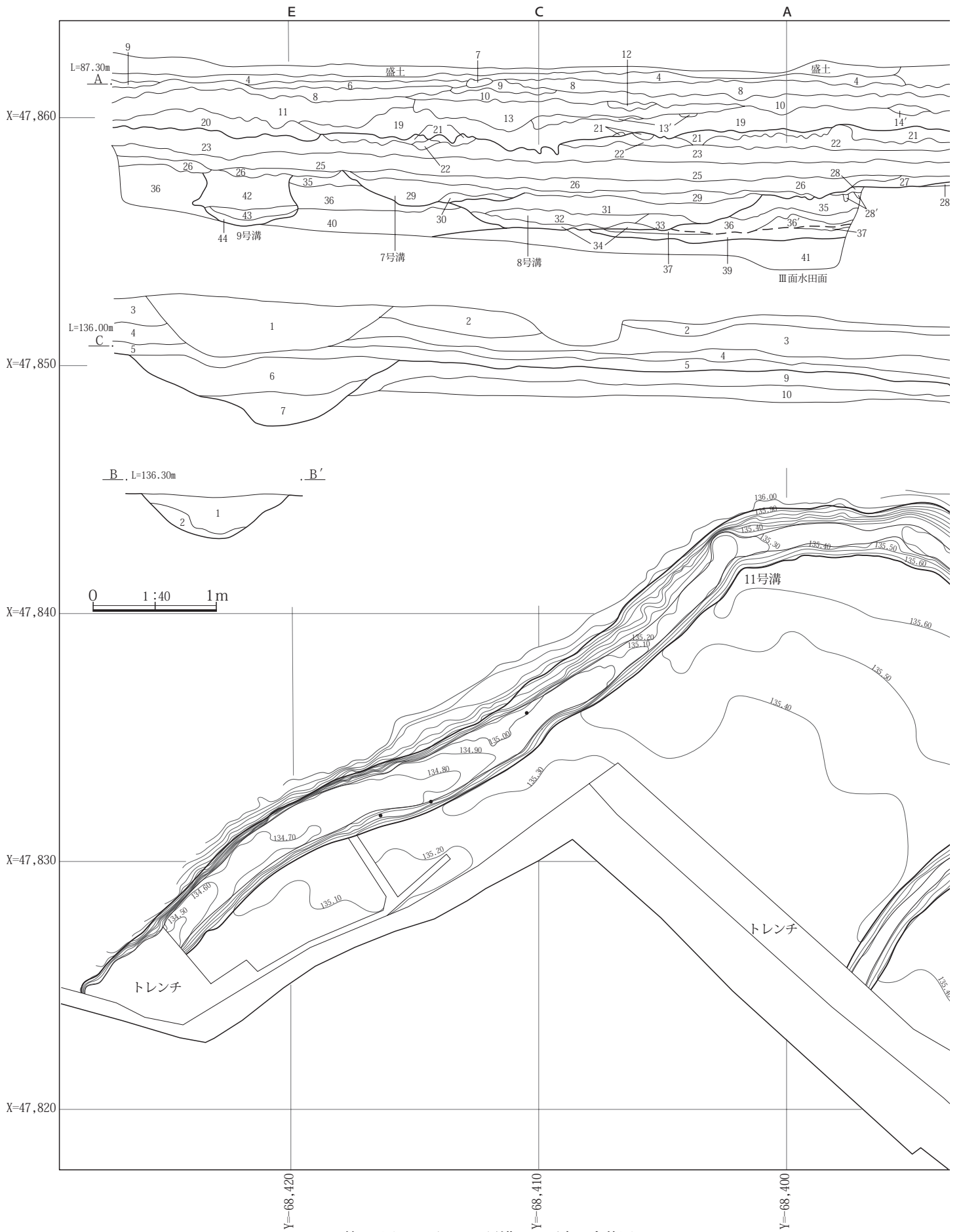
第291図 2区7~10号溝・2面水田全体図





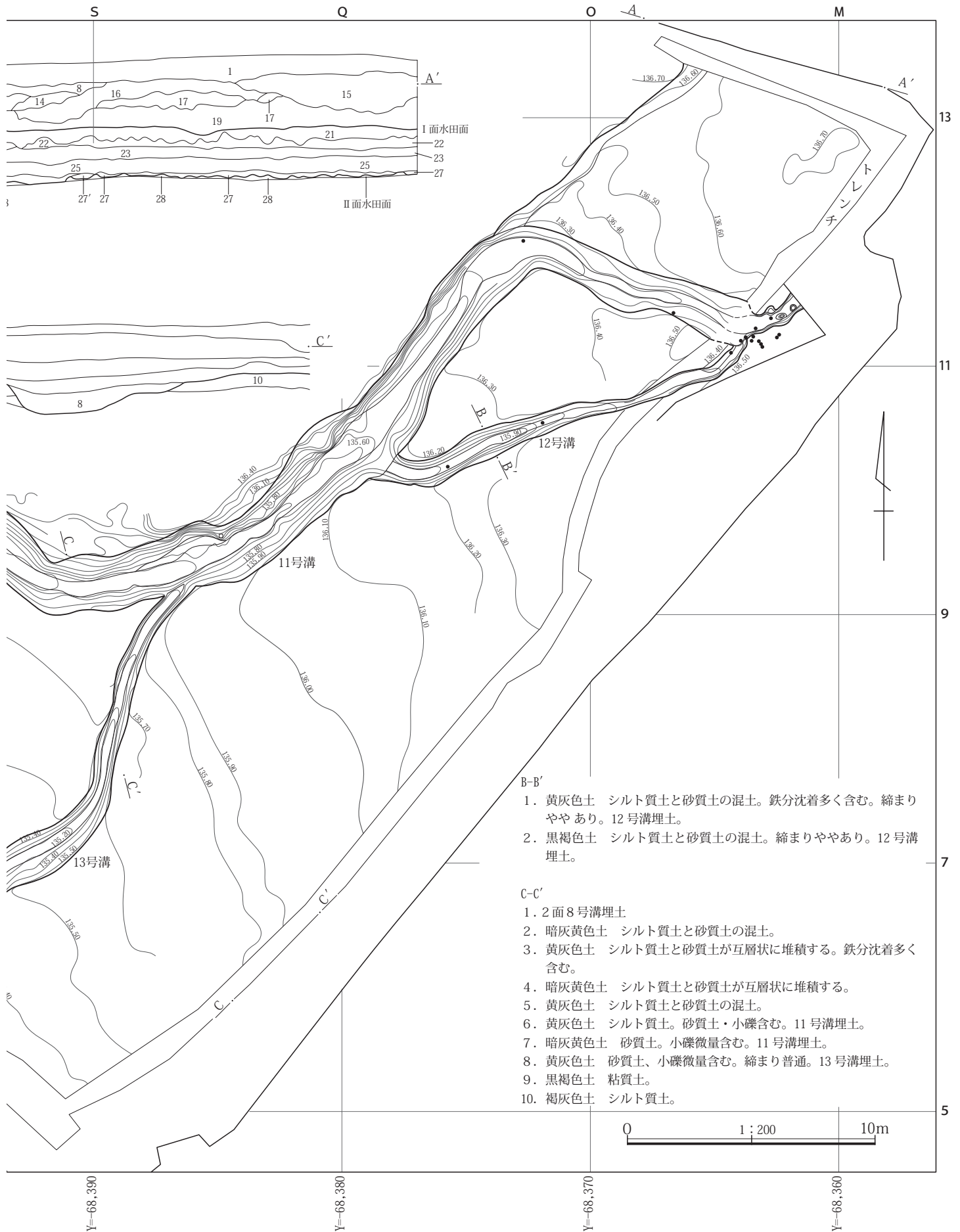
B-B'・C-C'・D-D'

1. 1面堆積層 (1面A-A')
2. 灰黄褐色土 白色軽石粒極少量含む。
3. 黒褐色土 白色軽石粒極少量含む。
4. 灰黄褐色土 2層に類するが、白色軽石粒増す。
5. 灰黄褐色土 砂質土、ローム土微量含む。10号溝埋土。
6. 灰黄褐色土 砂質土、ローム土少量含む。10号溝埋土。
7. 灰黄褐色土 白色軽石粒微量含む。
8. にぶい黄褐色土 ローム土ブロック少量、白色軽石粒極少量含む。  
9号溝埋土。
9. 黒褐色土 ローム土ブロック・白色軽石粒極少量含む。9号溝埋土。
10. にぶい黄褐色土 ローム土ブロック少量含む。9号溝埋土。
11. 灰黄褐色土 ローム土 ブロック極少量含む。9号溝埋土。
12. 灰黄褐色土 ローム土・黒褐色土少量含む。9号溝埋土。
13. 黄灰色土 砂質土、小礫極少量含む。9号溝埋土。
14. 灰黄褐色土 ローム土極少量含む。7号溝埋土。
15. 黒褐色土 砂質土、白色軽石粒含む。7号溝埋土。
16. 褐灰色土 砂質土。7号溝埋土。
17. 灰黄褐色土 砂質土、ローム土少量含む。7号溝埋土。
18. 灰褐色土 シルト質土と砂質土の混土。8号溝埋土。
19. 灰黄褐色土 シルト質土。8号溝埋土。

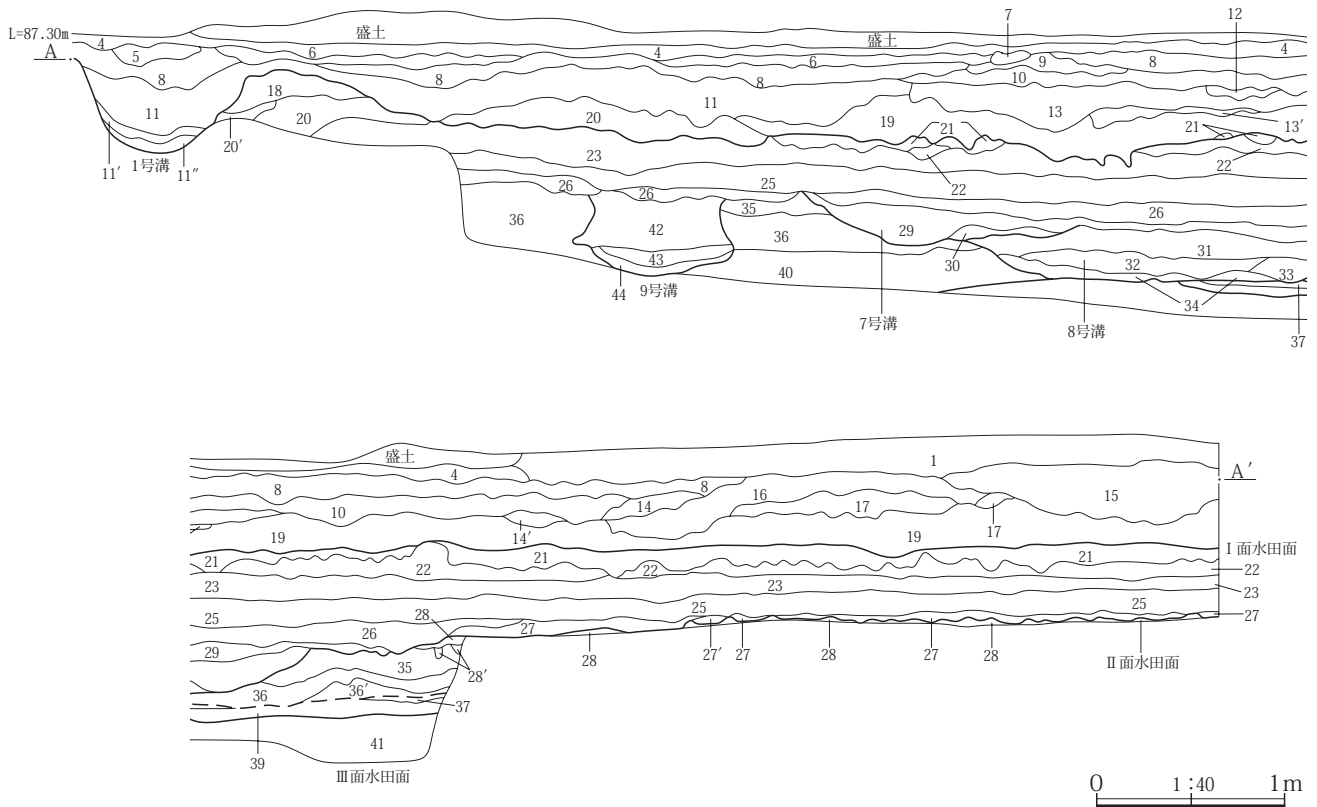


第292図 2区11~13号溝・3面水田全体図

第2節 古墳時代～平安時代



- B-B'**
1. 黄灰色土 シルト質土と砂質土の混土。鉄分沈着多く含む。縮まりややあり。12号溝埋土。
  2. 黒褐色土 シルト質土と砂質土の混土。縮まりややあり。12号溝埋土。
- C-C'**
1. 2面8号溝埋土
  2. 暗灰黄色土 シルト質土と砂質土の混土。
  3. 黄灰色土 シルト質土と砂質土が互層状に堆積する。鉄分沈着多く含む。
  4. 暗灰黄色土 シルト質土と砂質土が互層状に堆積する。
  5. 黄灰色土 シルト質土と砂質土の混土。
  6. 黄灰色土 シルト質土。砂質土・小礫含む。11号溝埋土。
  7. 暗灰黄色土 砂質土。小礫微量含む。11号溝埋土。
  8. 黄灰色土 砂質土、小礫微量含む。縮まり普通。13号溝埋土。
  9. 黒褐色土 粘質土。
  10. 褐灰色土 シルト質土。



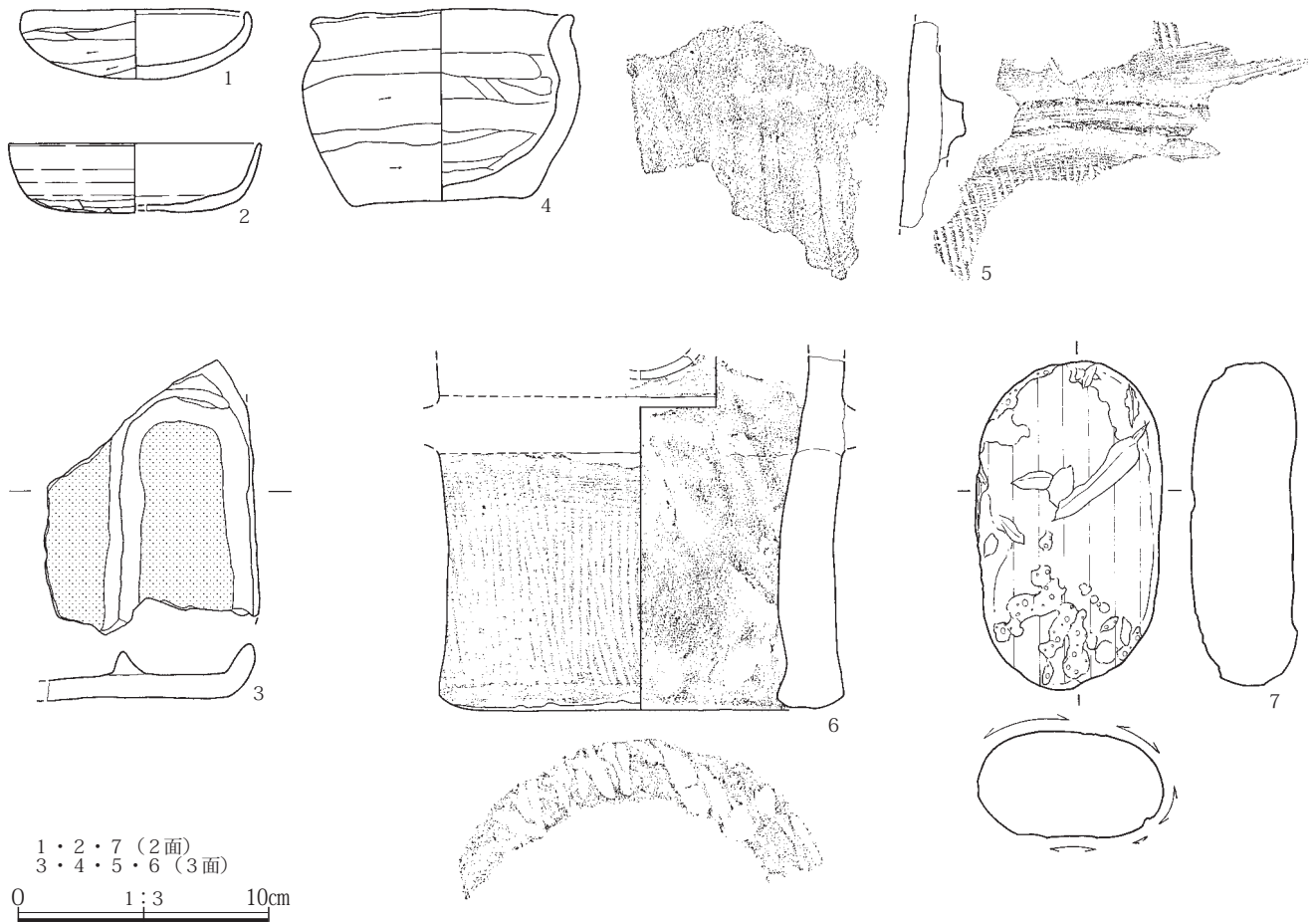
東水田A-A'セクション

盛土 調査時に盛り土した土

1. 褐灰色土 耕作土層、小礫(φ0.2~5cm)極少量含む。As-C、FA、FP粒(φ0.1~0.3cm)極少量混入、粘性なし。
2. 黒褐色土 As-C、FAFP粒(φ0.1~0.3cm)極少量混入。焼土粒(φ0.1~0.2cm)極少量混入、粘性なし。
3. 黒褐色土 ローム土混入5%、1号溝埋没土、粘性少ない
4. 黒褐色土 砂粒混入、粘性少し。
5. 灰黄褐色土 鉄分沈着層、砂質土10%、粘性少し。
6. 灰黄褐色土 砂質土主体(φ0.1~2mm)褐色土混入30%。
7. 6層に近似、鉄分沈着の強い層、内容物6層と同様。
8. 灰黄褐色土 砂質土鉄分沈着が強めの層、褐色土混入10%。
9. 灰黄褐色土 砂質土主体(φ0.1~2mm)褐色土混入15%の混入多い。
10. 褐灰色土 砂質土多い60%(φ0.1~2mm)。
11. 褐灰色土 砂質土層(粗砂~細砂)(φ0.1~2mm)褐色土3%ほど混入。
- 11'. 11層と同色 砂質土層、小礫含む。
- 11''. 11層と同色 砂質土主体、小礫含む5%。
12. 褐灰色土 砂質土主体、褐色土30%混入。
13. 褐灰色土 砂質土主体、褐色土20%混入。
- 13'. 色調同じ、褐色土10%混入。
14. 褐灰色土 砂質土50%。
15. 褐灰色土 灰色土主体80%、砂質土20%混入。
16. 褐灰色土 砂質土60%、灰色土40%。
17. 褐灰色土 砂質土40%、灰色土60%。
18. 20層に比べ、灰色土の割合高い70%、砂質土30%。
19. 灰黄褐色土 砂質土30%混入、褐色土70%。
20. 灰黄褐色土 砂質土40%、褐色土60%。
- 20'. 灰黄褐色土 20層に比べやや黒味あり。

21. 灰黄褐色土 砂質土混入10%(耕土が川の氾濫により攪乱して砂が耕土に入り込んでいる)。水田耕作土
22. 灰黄褐色土 砂質土混入5%。
23. 灰黄褐色土 締まり良、粘性少し。
25. 灰黄褐色土 締まりやや良、粘性少し。
26. 灰黄褐色土 As-B10%混入、FA、FP粒(φ0.1~4cm)極少量混入。
27. 黒褐色土 As-B混土層、一部As-Bが明暗に層として見られるところもある。
- 27'. As-B堆積層に近い。
28. 黒褐色土 シルト質近い、粘性ややあり。As-B下の耕作土
29. 灰黄褐色土 As-B5%混入、7号溝の埋没土層、As-B下の水田伴う水路、シルト質土、粘性少ない。
30. 灰黄褐色土 砂質土(φ0.1~1mm)混入30%。
31. 灰黄褐色土 砂質土(φ0.1~1mm)混入20%、シルト質土、粘性少ない。
32. 黒褐色土 砂質土(φ0.1~0.5mm)、シルト質土。
33. 黒褐色土 シルト質土、砂質土混入5%(φ0.1~0.2mm)。
34. 黒褐色土 やや粘性あり、焼土粒(φ0.1~0.2mm)極少量混入。
35. にぶい黄褐色土 細砂質土。
36. にぶい黄褐色土 砂質土(φ0.1~2mm)細砂粒~粗砂混入の土、鉄分沈着。
- 36'. 灰黄褐色土 砂質土(粗砂φ0.2~1.5mm)主体。
37. 黒褐色土 やや粘性あり、粘土に近いシルト質土。
39. 黄灰色土 38層と対応する層、砂質土(φ0.1~1mm)シルト質土がラシナ状に入る。
40. 褐灰色土 やや粘性あり、シルト質土に近い粘質土。
41. 黒褐色土 やや粘性あり、粘土に近いシルト質土。
42. 黒褐色土 シルト質土。9溝埋没土
43. 黒褐色土 締まりやや弱い。9溝埋没土
44. 黒褐色土 小礫混入。9溝埋没土

第293図 2区2面・3面水田土層断面図



第294図 2区2面・3面水田出土遺物図

### 低地部の形成過程

この低地部で水田耕作が行われていたのはほぼ確実に、調査区北に土層断面が残されている。これによると、1面水田が19層の下位、2面水田が27層(As-B)の下位、3面水田が39層(黄灰色砂質土、シルト質土がラミナ状に堆積)の下位で確認されたということである。第293図による土層注記で実感するのは容易なことではないが、2面水田より上位の灰黄褐色土とされている23～25層は河川起源の氾濫性堆積物と見られ、比較的均質である。同様に、3面水田上位には砂質土が堆積していた。3面水田の砂質土にはラミナ状の堆積が観察されたという記載があるように、何度か氾濫に襲われたことがわかる。いうまでもなく、それは赤城白川によるものであろう。3面水田下の土層堆積は確認されていないため、低地部の形成過程については不明といわざるを得ないが、低地部の東には蟬山と呼ばれる独立丘陵があり、3・4区の旧石器調査ではAs-MP以上のロームが安定して堆積する

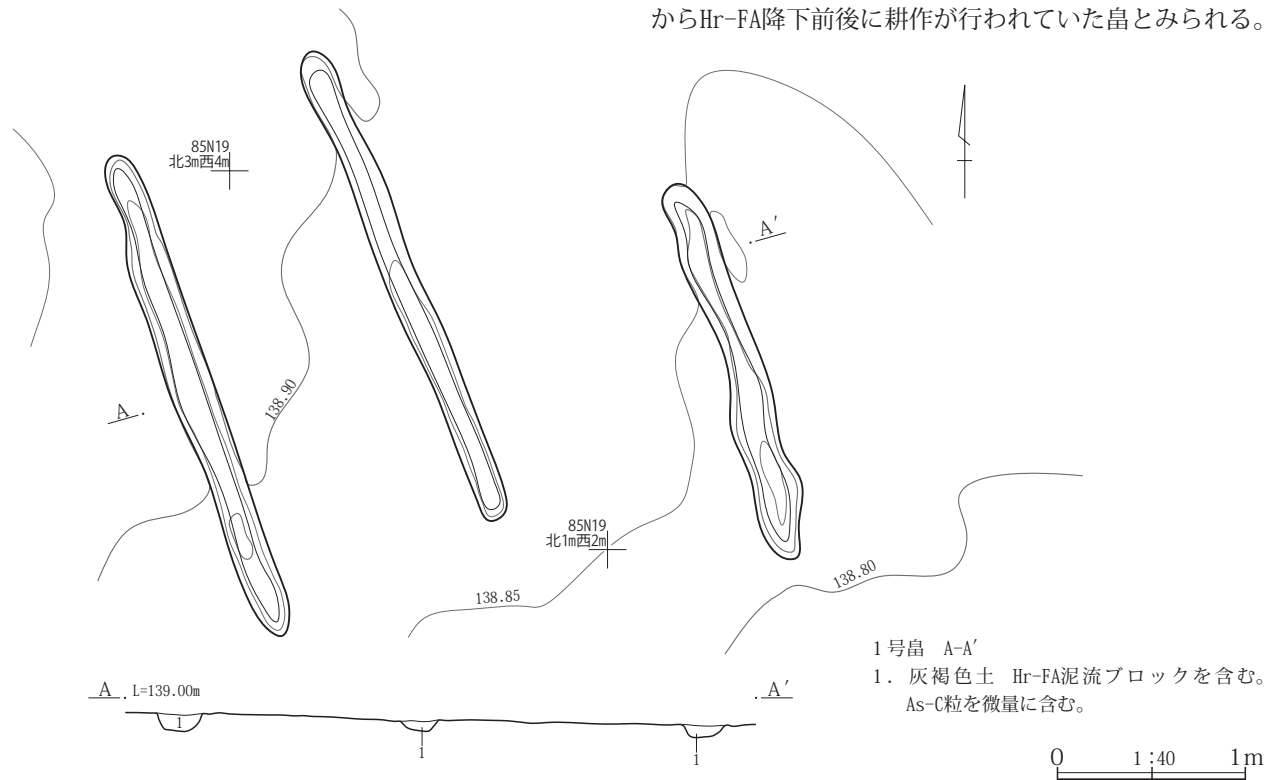
ことが確認されている。これに対し、現河道に近い1区では直接礫層(河床礫)が砂壤土で覆われていた。2区については低地部水田に接した台地縁辺でロームの堆積が確認でき、地点により堆積状況が異なるようである。「蟬山」は独立丘陵をなしているが、それは扇状地面が浸食を免れたゆえに形成されたものである。この考え方に従えば、2区低地部は旧河道(旧赤城白川)の流痕のひとつということになり、徐々に河道を西へ移動したということになる。

## 8. 畠

畠は1区からテフラで埋没した小規模な溝状の遺構が2条から5条平行して検出されたのと3区からもテフラに埋没した連続する小規模な溝状の遺構が10数条平行して検出されたことから畠の遺構と判断した。

検出した畠は、耕作範囲のごく一部とみられ、さらに埋没の状態からサクの下半だけとみられる。

なお、サクの埋没土は、As-CとHr-FAのテフラであることから、耕作時期は3世紀後半と6世紀初頭の年代に比定できる。ここでは、「古墳時代後期」と「古墳時代前期」に区分して掲載する。



第295図 1区1号畠遺構図

### 1区2号畠(旧1区5群畠) (第296図、PL.149)

**位置** 1区中ほどの東寄り、85区S-14・15に位置する。本畠の調査は平成25年度に実施したものである。

**重複** 15号竪穴住居と重複する。新旧関係は本畠のほうが新しい。

**立地** 北から南へかけての緩傾斜、サクが傾斜に平行す

### (1)古墳時代後期の畠

#### 1区1号畠(旧1区4群畠) (第295図、PL.149)

**位置** 1区調査区北東隅、85区N-19に位置する。

**重複** 検出した範囲では、単独であった。

**立地** 北西から南東にかけての緩傾斜、サクが傾斜に直交するように耕作されている。

**検出範囲** 3条のサクが南北長2.9m、東西幅3.0mの範囲にある。

**サク方向** N-20°-W

**埋没土** Hr-FA泥流を含む灰褐色土で埋没している。畠は後の耕作によって攪拌されている。

**サク間** サクとサクの芯々間の幅は1.22m~1.08mを測る。

**所見** サクがHr-FAを含む灰褐色土で埋没していることからHr-FA降下前後に耕作が行われていた畠とみられる。

るように耕作されている。

**検出範囲** 15号竪穴住居の範囲内で4条のサクが南北長3.5m、東西幅3.2mの範囲にある。

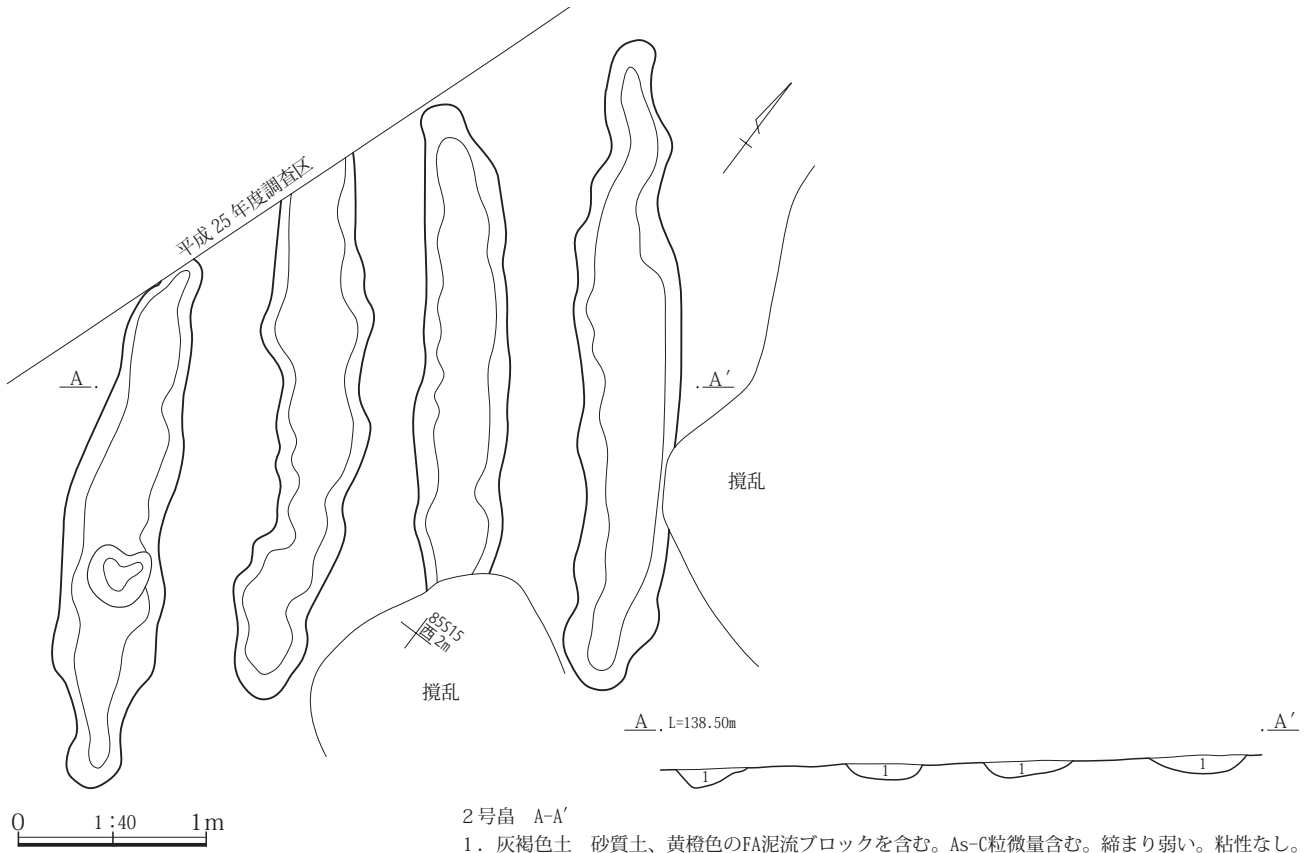
**サク方向** N-34°-W

**埋没土** サクにHr-FA泥流を含む灰褐色土で埋没している。畠は後の耕作によって攪拌されている。

**サク間** サクとサクの芯々間の幅は0.77m～0.60mである。

**所見** サクがHr-FA泥流を含む灰褐色土で埋没している

ことからHr-FA降下前後に耕作が行われていた畠とみられる。



2号畠 A-A'

1. 灰褐色土 砂質土、黄橙色のFA泥流ブロックを含む。As-C粒微量含む。締まり弱い。粘性なし。

第296図 1区2号畠遺構図

## (2) 古墳時代前期の畠

### 1区3号畠(1区1群B畠) (第297図、PL.149)

**位置** 1区調査区南西部、86区J-14・15、K-14・15に位置する。

**重複** 検出した範囲では、単独であった。

**立地** 北東から南西にかけてやや急な傾斜地、サクが傾斜に斜行するように耕作されている。

**検出範囲** 5条のサクが東西長9.4m、南北幅6.2mの範囲にある。

**サク方向** N-67°-E

**埋没土** As-Cと黒褐色土で埋没している。

**サク間** サクとサクの芯々間の幅は1.62m～1.40mである。

**所見** サクがAs-Cで埋没していることから3世紀後半に耕作されていた畠とみられる。隣接する4号竪穴住居もほぼ同様な時期であることからこの時期の竪穴住居の住

人の耕作地とみられる。

### 1区4号畠(1区1群A畠) (第298図、PL.149)

**位置** 1区調査区南西隅、86区L-12に位置する。

**重複** 検出した範囲では、単独であった。

**立地** 北から南へかけてのやや急な傾斜地、サクが傾斜に平行するように耕作されている。

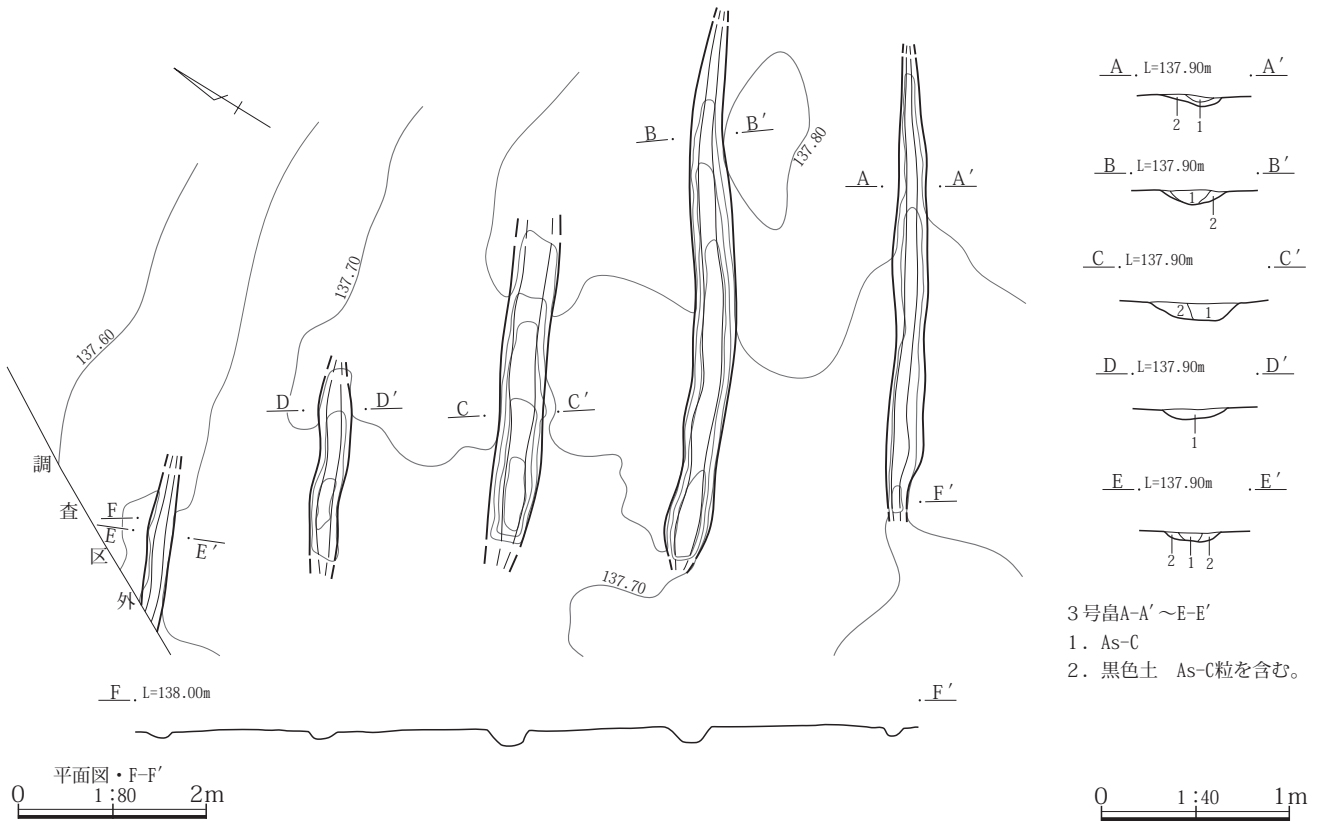
**検出範囲** 2条のサクが東西長5.0m、南北幅2.42mの範囲にある。

**サク方向** N-69°-E

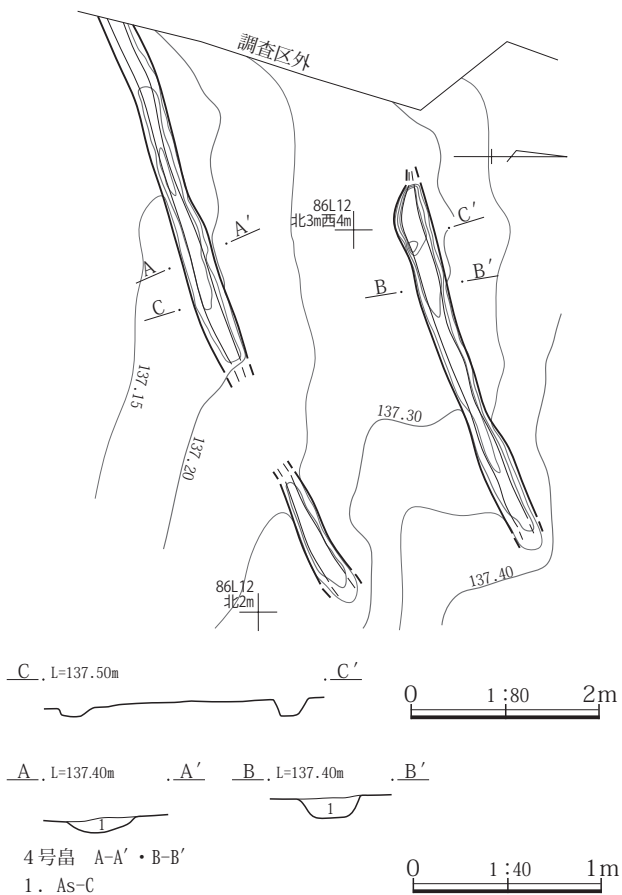
**埋没土** As-Cで埋没している。

**サク間** サクとサクの芯々間の幅は1.80m前後である。

**所見** サクがAs-Cで埋没していることから3世紀後半に耕作されていた畠とみられる。1区調査区に同様な時期の竪穴住居が存在することからこの時期の竪穴住居の住人の耕作地とみられる。



第297図 1区3号島遺構図



第298図 1区4号島遺構図

1区5号島(1区2群島)(第299図、PL.149・150)

**位置** 1区調査区西端、95区H-20、96区G-1、H-1に位置する。調査区際での確認であり、島は調査区外へ広がるとみられる。

**重複** 検出した範囲では、単独であった。

**立地** 北から南へかけての緩傾斜、サクが傾斜に平行するように耕作されている。

**検出範囲** 3条のサクが南北長2.0m、東西幅3.5mの範囲にある。

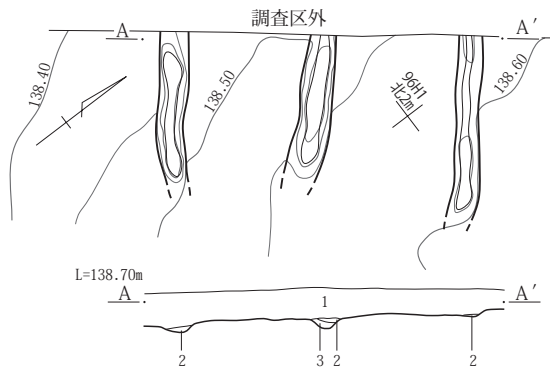
**サク方向** N-49°-W

**埋没土** As-Cで埋没している。

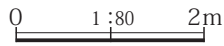
**サク間** サクとサクの芯々間の幅は1.24m~1.08mである。

**所見** サクがAs-Cで埋没していることから3世紀後半に耕作されていた島とみられる。1区調査区に同様な時期の竪穴住居が存在することからこの時期の竪穴住居の住人の耕作地とみられる。





- 5号畠 A-A'
1. 黒色土 As-Cを微量含む。
  2. As-C
  3. 黒褐色土 As-C粒を含む。



第299図 1区5号畠遺構図

1区6号畠(1区3群畠)(第300図、PL.150)

**位置** 1区調査区中央よりやや西寄り、86区F-17、G-17・18に位置する。

**重複** 検出した範囲では、単独であった。

**立地** 北から南へかけての緩傾斜、サクが傾斜に平行するように耕作されている。

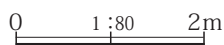
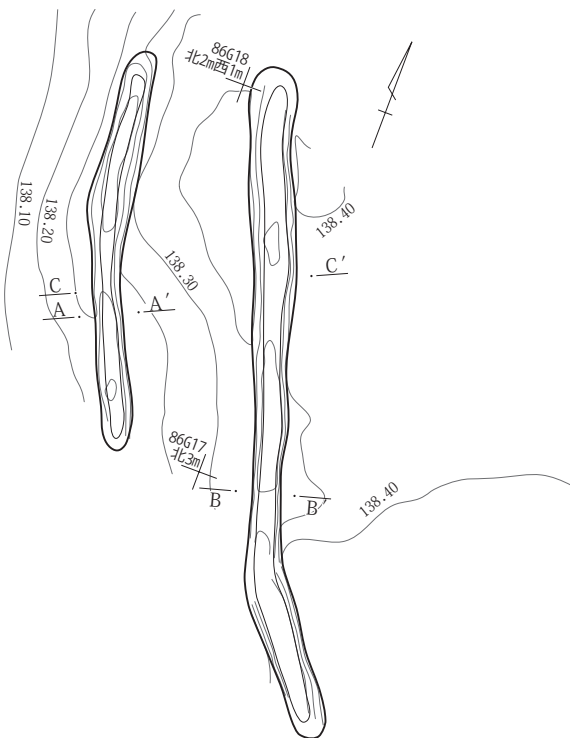
**検出範囲** 2条のサクが南北長7.2m、東西幅1.8mの範囲にある。

**サク方向** N-16°-W

**埋没土** As-Cで埋没している。

**サク間** サクとサクの芯々間の幅は1.38mである。

**所見** サクがAs-Cで埋没していることから3世紀後半に耕作されていた畠とみられる。1区調査区に同様な時期の竪穴住居が存在することからこの時期の竪穴住居の住人の耕作地とみられる。



- 6号畠 A-A'・B-B'
1. As-C
  2. 黒褐色土 As-C粒を含む。



第300図 1区6号畠遺構図

3区1号畠(第301図、PL.150)

**位置** 3区調査区南西部、84区J~N-3~6に位置する。南側は調査対象外、北側は攪乱によって全貌は不明である。

**重複** 検出した範囲では、他の遺構との重複関係は確認されず単独であった。

**立地** 北東から南西にかけての緩傾斜、サクが傾斜に直交するように耕作されている。

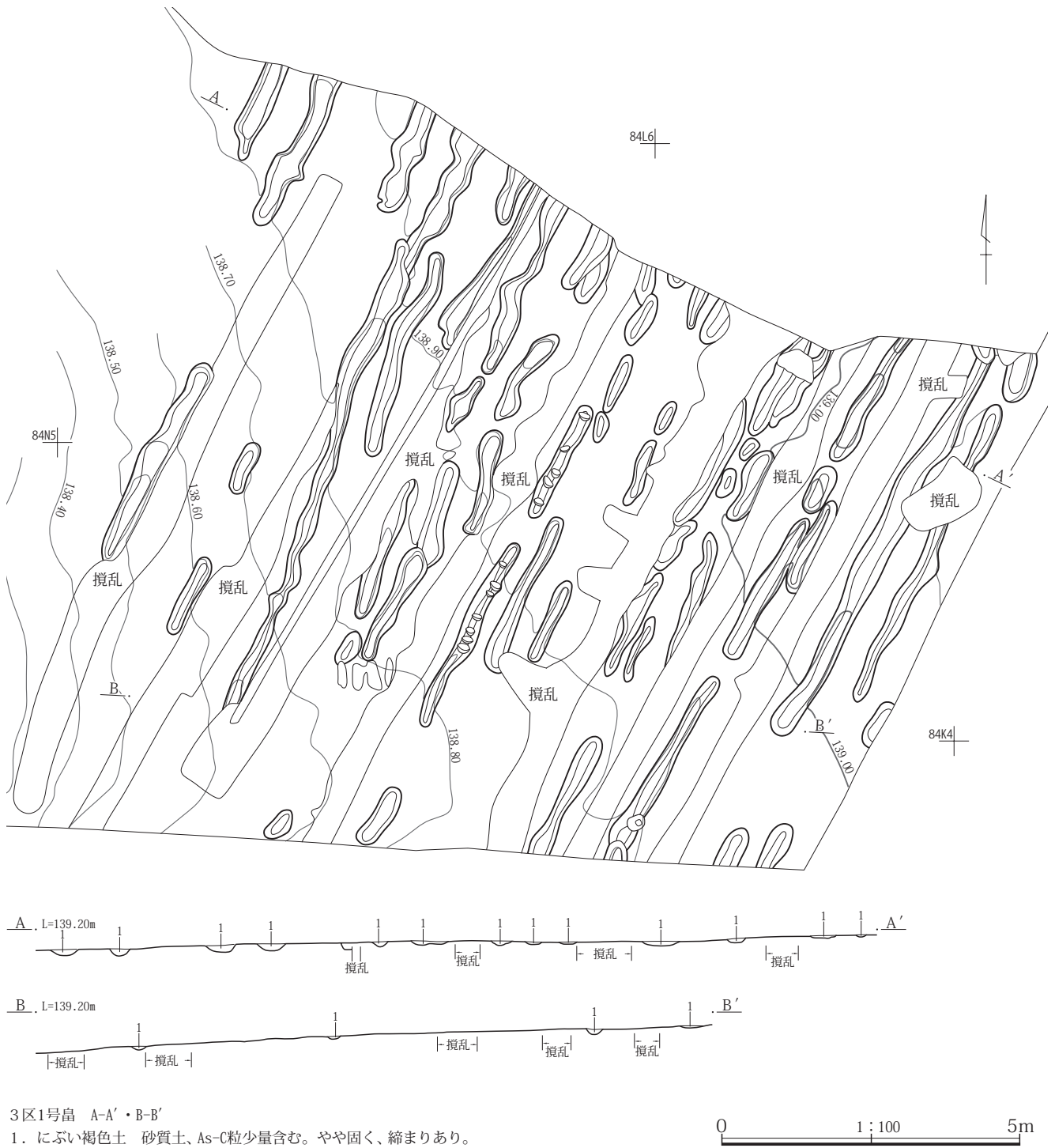
**検出範囲** 南北長13.1m、東西幅13.7mの範囲に、12条のサクがある。サクは攪乱などで途切れ途切れの状況で確認された。

**サク方向** N-20°-E

**埋没土** As-Cを少量含むにぶい褐色土で埋没している。

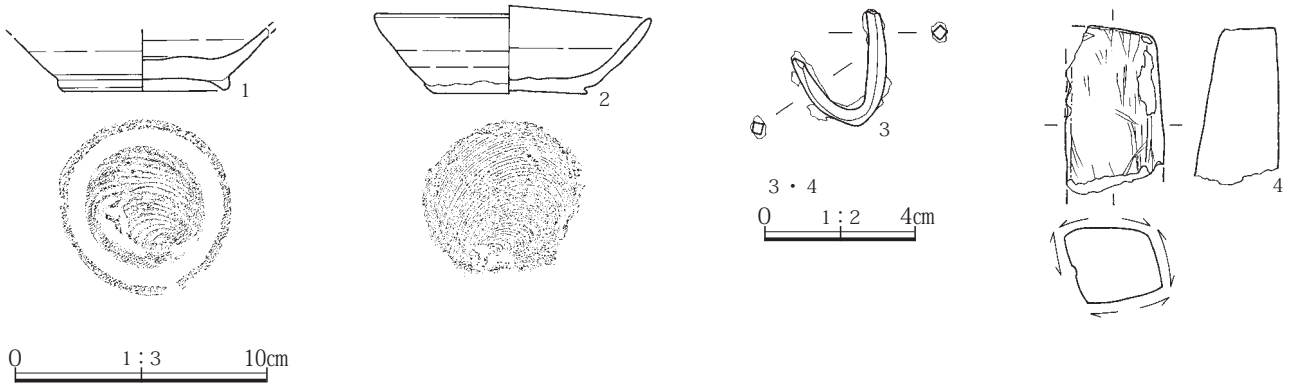
**サク間** サクとサクの芯々間の幅は1.11m~0.25mである。サクの間隔から見ると一時期の耕作ではなく数時期にわたる畠である可能性がみられるが、サクが新たな耕作にでも残存することに疑問が生じる。

**所見** サクの埋没土がAs-Cを少量含んでいるAs-C混合土で、Hr-FAを含まないことから、As-C降下後、Hr-FA降下前に耕作された畠と考えられる。

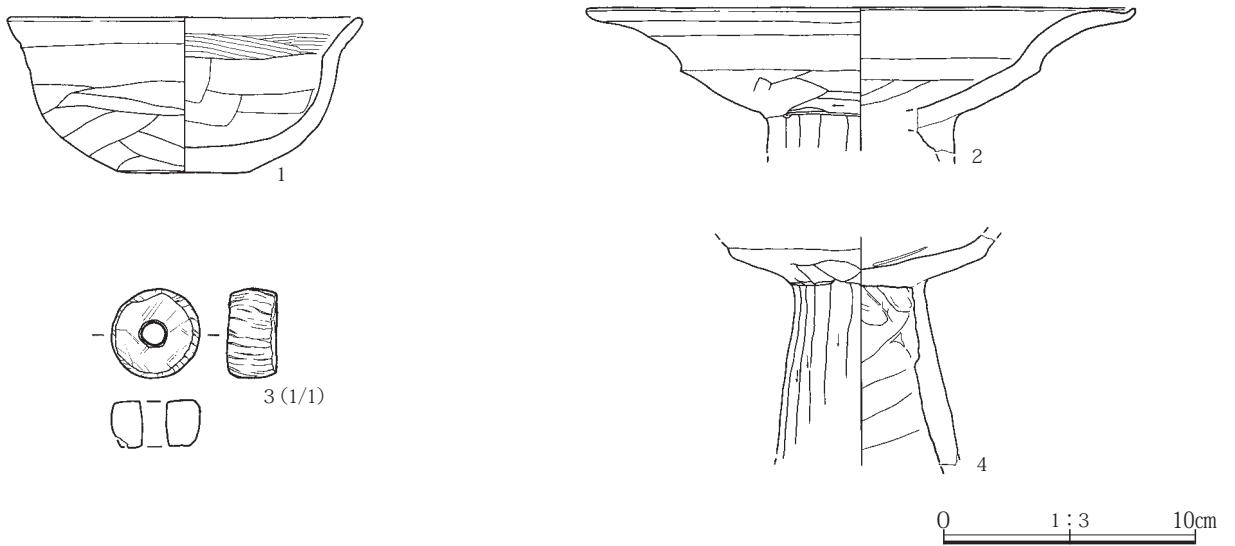


第301図 3区1号畠遺構図

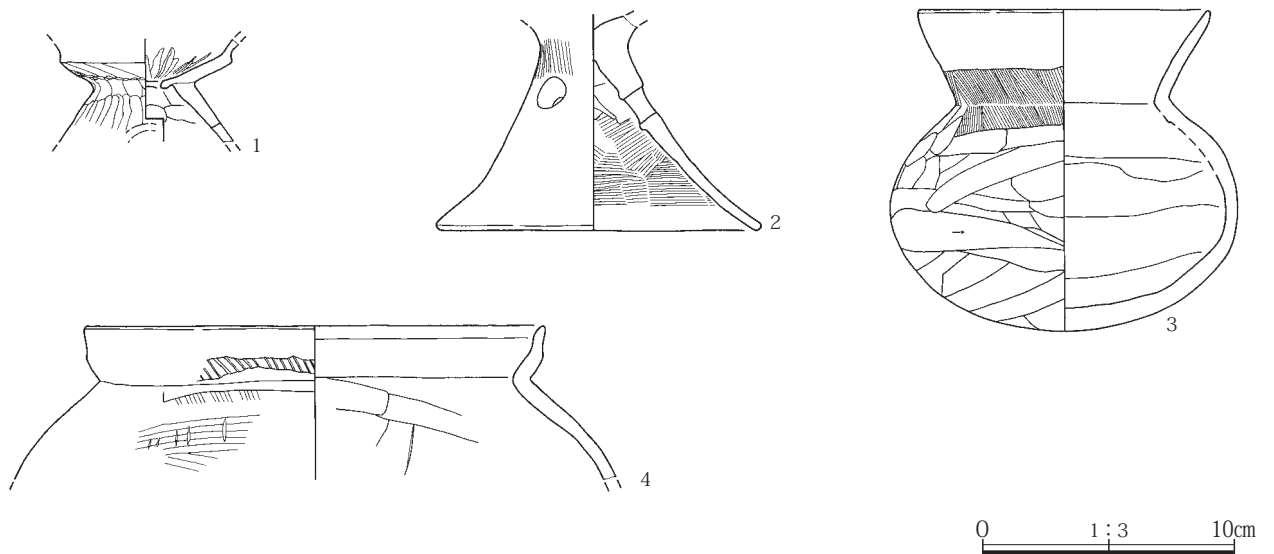
9. 遺構外出土遺物(第302～304図、P1.182)



第302図 飛鳥時代～平安時代の遺構外出土遺物図



第303図 古墳時代後期の遺構外出土遺物図



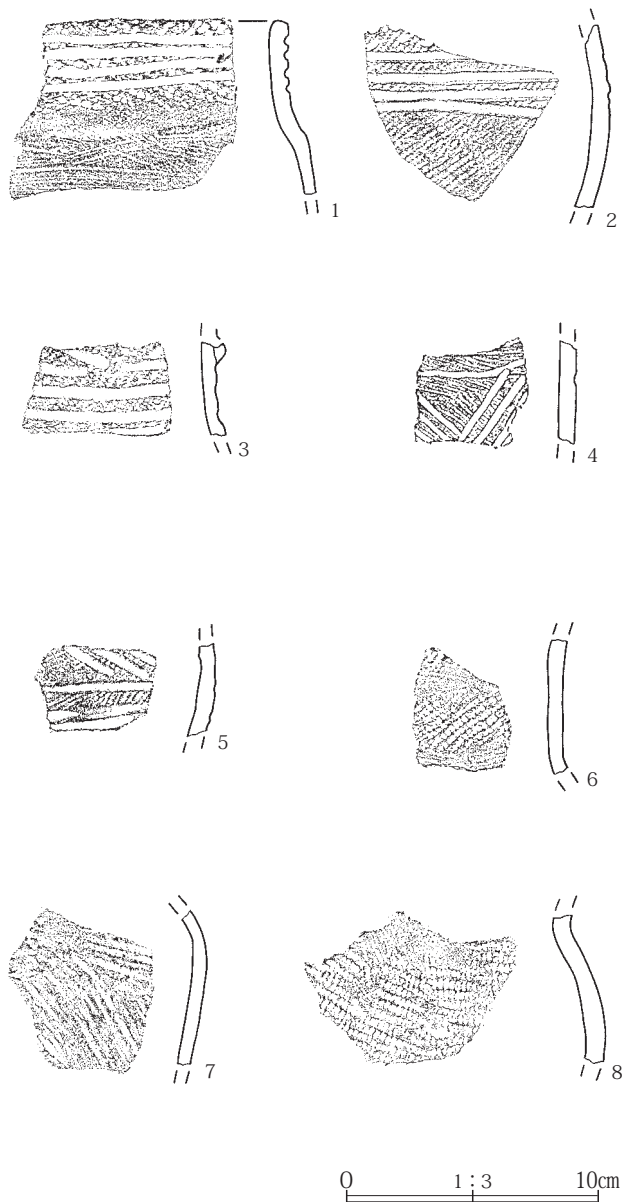
第304図 古墳時代前期・中期の遺構外出土遺物図

### 第3節 弥生時代

#### 1. 遺構外出土の遺物(第305図、PL.183)

本遺跡では弥生時代の遺構は確認されていないが、1区区古墳時代竪穴住居埋没土や谷地、包含層から弥生時代の土器が出土している。

弥生土器は赤城白川対岸の青柳宿上遺跡と同様の中期に比定されるものである。出土した土器はすべて小片であるがここに掲載した。



第305図 遺構外出土の弥生土器図

### 第4節 縄文時代

#### 1. 遺構外出土の遺物

本遺跡では縄文時代の遺構こそ確認されていないが、古墳時代竪穴住居埋没土や包含層から縄文時代の土器や石器が出土している。調査地内には低地部を挟んで形成期の異なる地形発達が見られ、それぞれに縄文時代の遺物が発見されている。ここでは、調査区毎に遺構外出土の遺物として報告する。

#### 縄文土器(第306～309図、PL.183～186)

出土した縄文土器片は出土数量で17,475gである。その分布は各調査区に及んでいるが、4区が最も多く10,055g出土している。

出土した縄文土器片類の帰属時期は、早期から晩期まで出土しているが、赤城白川に近い1区には後期後半から晩期の土器片類を主体に、少量の前期諸磯b式期や中期加曾利E式期の土器片類が出土している。埋没谷と谷水田の項(第3章第2節7)で述べたように、1区には縄文期の砂壤土(河川起源の氾濫堆積物)が厚く堆積していた。この砂壤土は途中黒色土を挟んでおり、砂壤土の堆積に間隙があることが分かる。これに似た砂壤土は赤城白川右岸の引切塚・青柳宿上遺跡でも確認されており、局所的だが赤城白川流域に砂壤土が堆積することが判明した。引切塚・青柳宿上遺跡の発掘では縄文早期条痕文期の集落を覆う砂壤土や、弥生中期土器片類を覆う砂壤土が確認され、気候変動を敏感に反映した河川氾濫が見取れる。本遺跡では砂壤土下の土器片類は確認できていない。

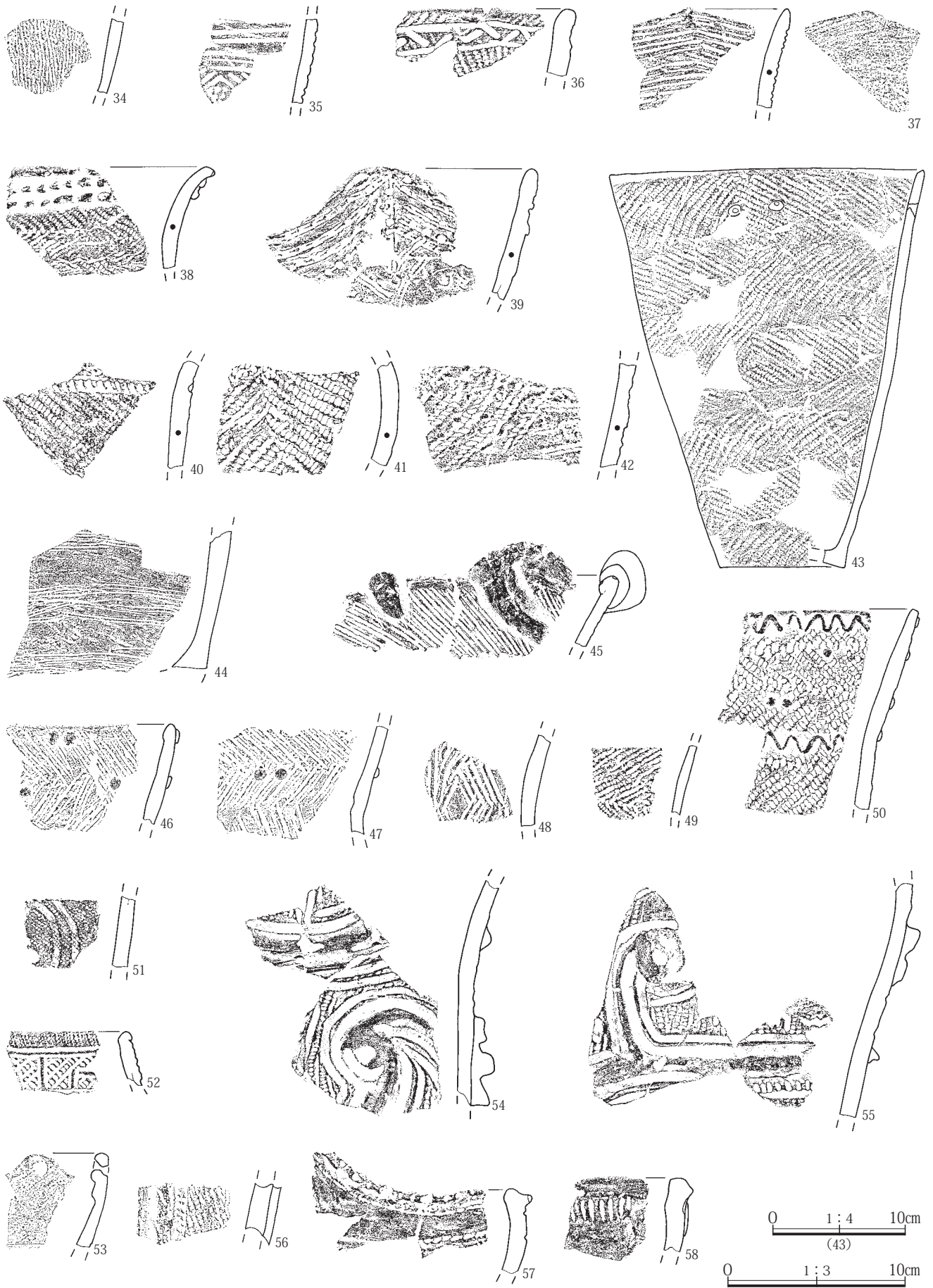
2・3区では早期から後期の土器片類が、4区では前期から中期加曾利E3式期の土器片類が出土している。こうした地点毎に異なる分布の偏在性は、居住域が限定されない地域(複雑に入り組んだ丘陵性台地、豊富な水資源など)の特徴である。1区において前期より以前の土器片類が発見されないのはそれ以前に堆積した河川性の氾濫堆積物(赤城白川起源)が厚く堆積しているためであり、後・晩期の土器片類が多出するのもこの段階の遺跡が比較的規模の大きな河川の流れる沖積低地へ立地するようになることと関係するのだろう。

ここでは、出土した土器片類から型式別に98点を選び、  
図示した。

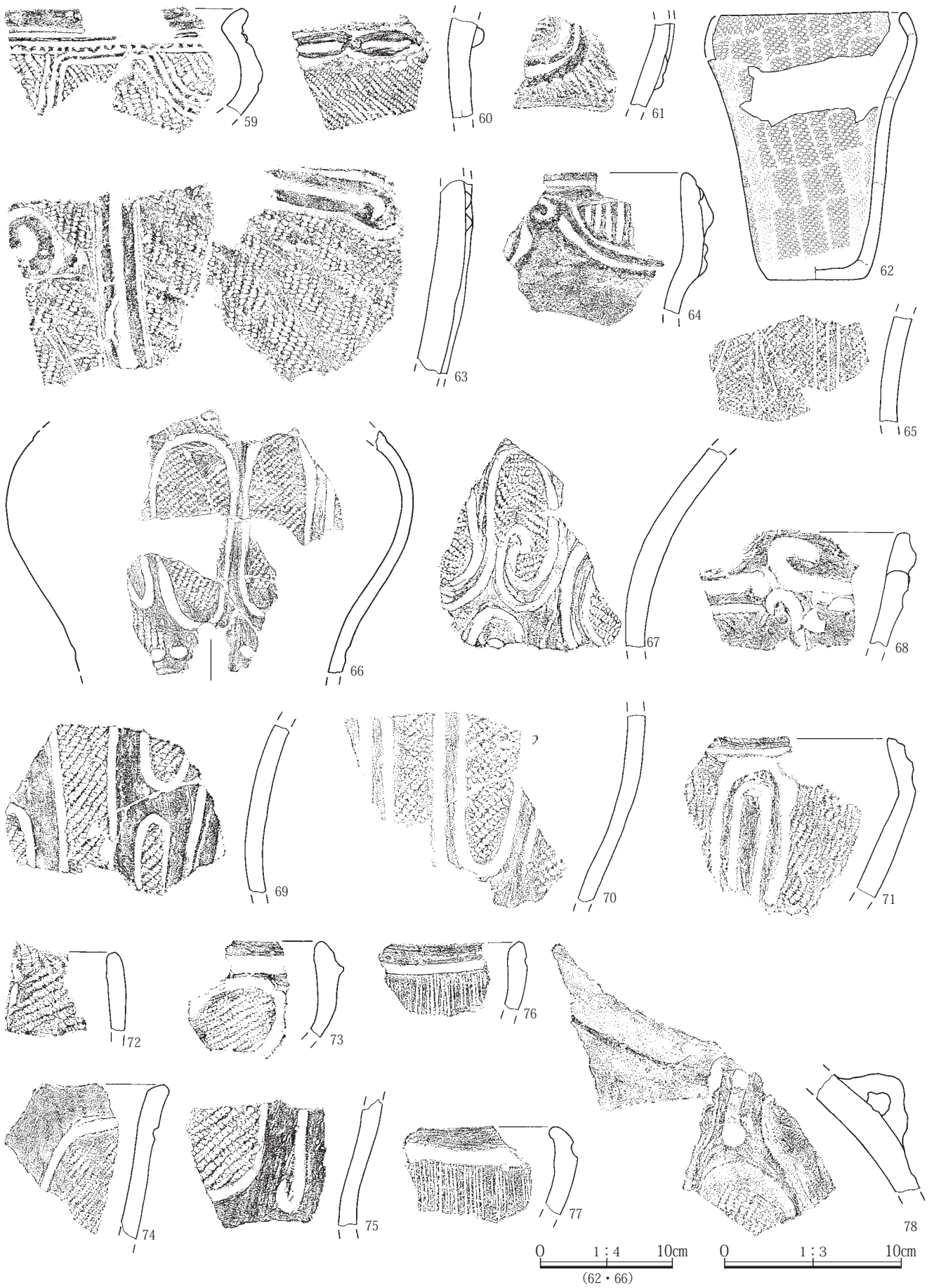
※断面中の・は、繊維を含んでいることを表す。



第306図 遺構外出土の縄文土器図(1)



第307図 遺構外出土の縄文土器図(2)



第308図 遺構外出土の縄文土器図(3)



第309図 遺構外出土の縄文土器図(4)



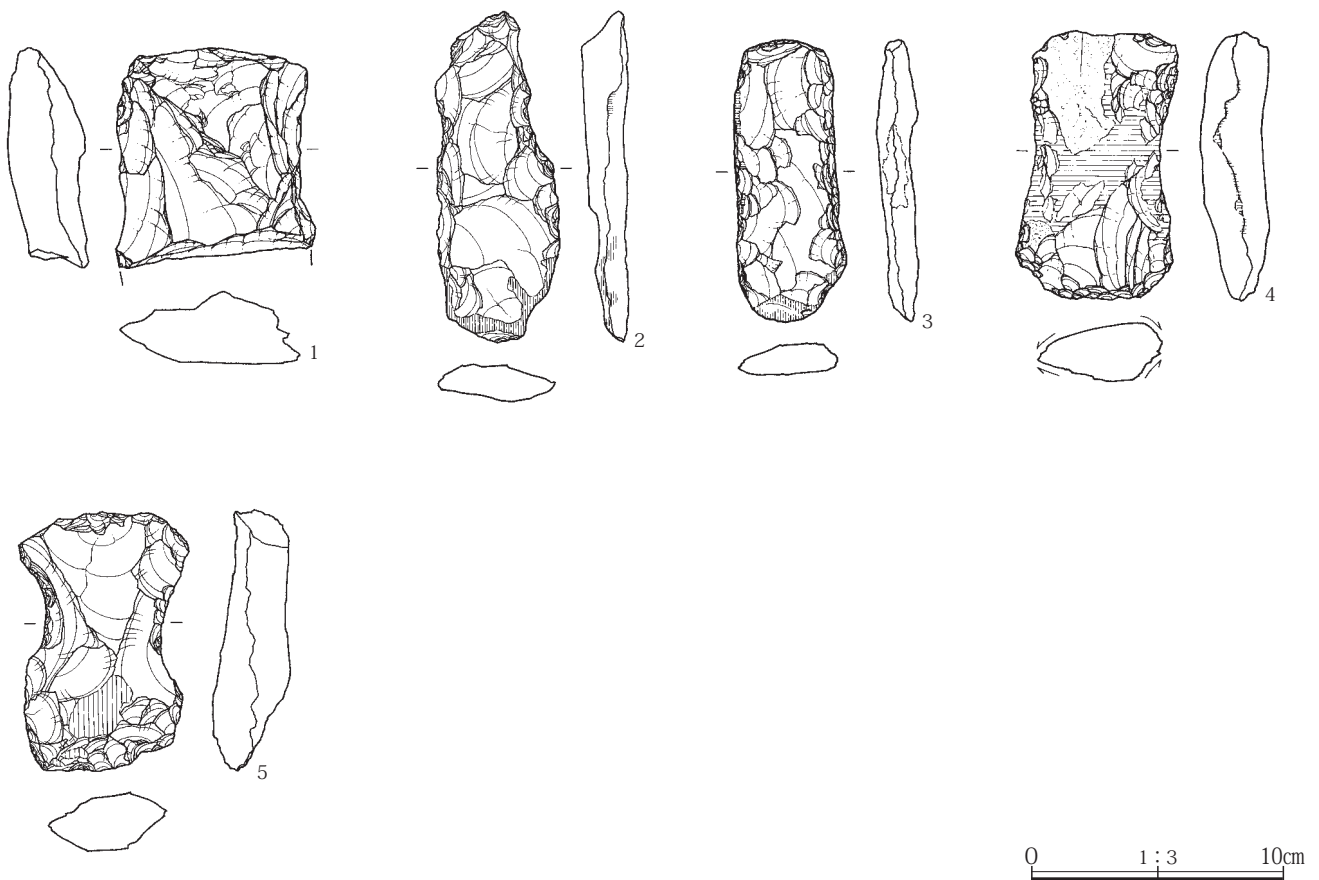
縄文石器(第310～314図、PL.186～188)

包含層出土の石器類は、計184点が出土した。この他、剥片系石器が341点と圧倒的多数を占めており、礫石器は2点と少ない。出土した主な石器には打製石斧53点、石鏃5点、石匙1点などがある。このほか、削器類(加工剥片を含む)95点、石核27点が出土している。主な石器の石材構成は10種類程度からなり、黒色頁岩を使用するものが多い。剥片類は、計341点(石材15種類)が出土している。黒色頁岩が267点(78.3%)と圧倒的に多く、これに黒色安山岩24点・細粒輝石安山岩24点が次ぐ。その他の石材は数点に止まり、限定的である。構成石材からみた石器製作は、主に黒色頁岩を使用石材として行われたものと見られる。

区別に見た器種構成は、各区とも石斧類や削器類からなり、調査区毎に大きな差が見られない。各調査区とも中期加曾利E3式期と後期後半期以降の土器が主体を占め、ある意味で似た遺跡の利用形態(生業形態)を反映している、ということになる。

器種別に見た石材構成は、石斧類や削器類に黒色頁岩が多用されるのは各区とも共通している。いずれも包含層から出土しており、その帰属時期は明らかでないが、打製石斧には短冊状を呈するものと、幅広の体部に着柄部が付いたもの、分銅状を呈するものがある。前者は前期タイプの石斧を引き継いだもので、やや重量感を増し大型化したものである。着柄部を意識したものや分銅型のもは後期的石斧であり、混在して出土している。石斧には6種類の石材(黒色頁岩35・細粒輝石安山岩5・珪質頁岩4・砂岩1・砂質頁岩1・粗粒輝石安山岩1)が使われ、多様な石材が使われているようである。1区から出土した石斧5点中3点は幅広で重量感があるもので、いずれも珪質頁岩を用いている。2区から出土した幅広の2点は黒色頁岩製1点(第312図23)と砂岩製(第312図24)である。削器類では4区から出土した円形削器様のものが特徴的である。いずれも黒曜石製であり、周辺域から黒曜石製の石器・剥片類が集中出土している。

ここでは、出土した石器類184点中の74点を図示した。



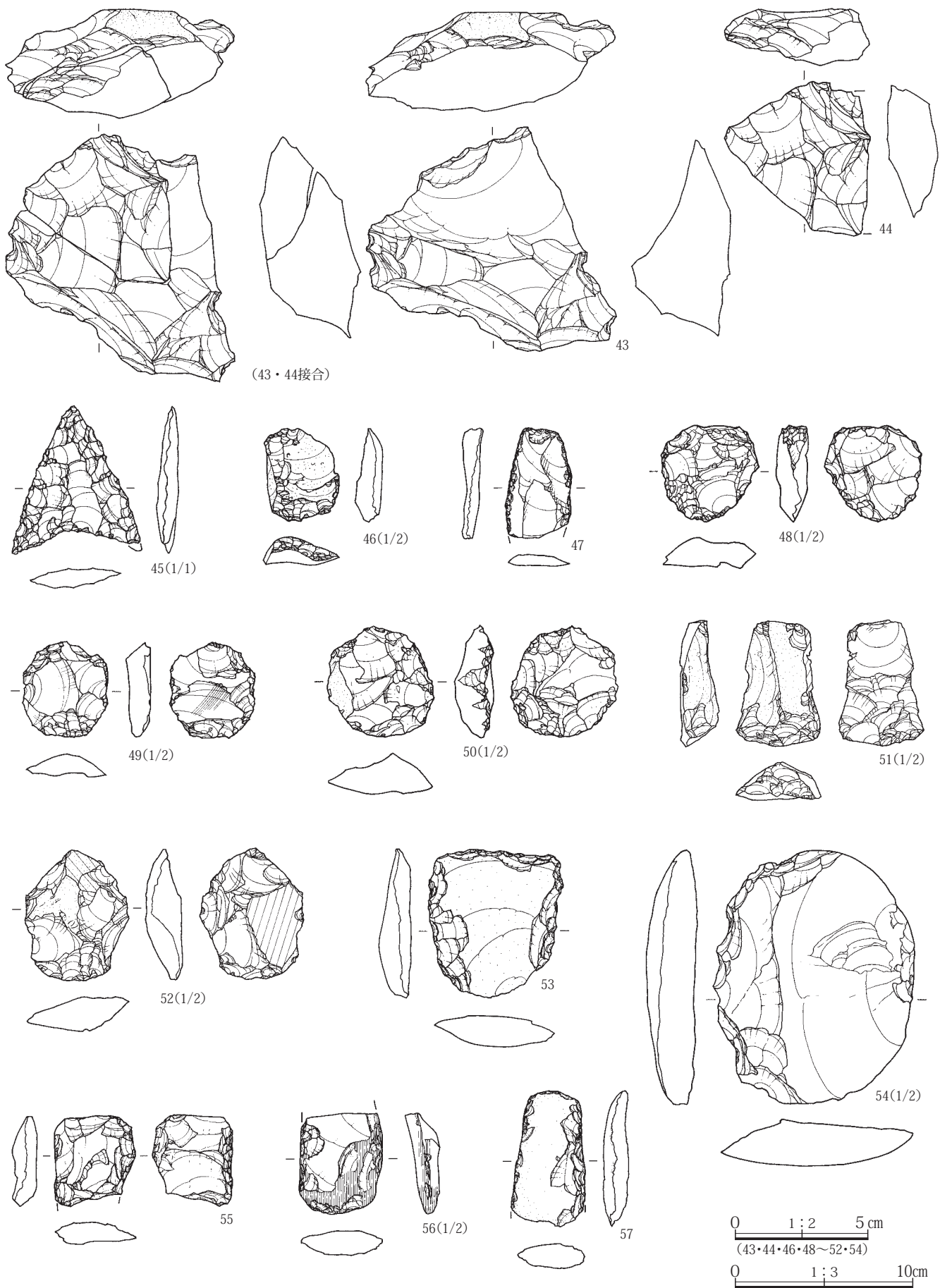
第310図 遺構外出土の縄文石器図(1)



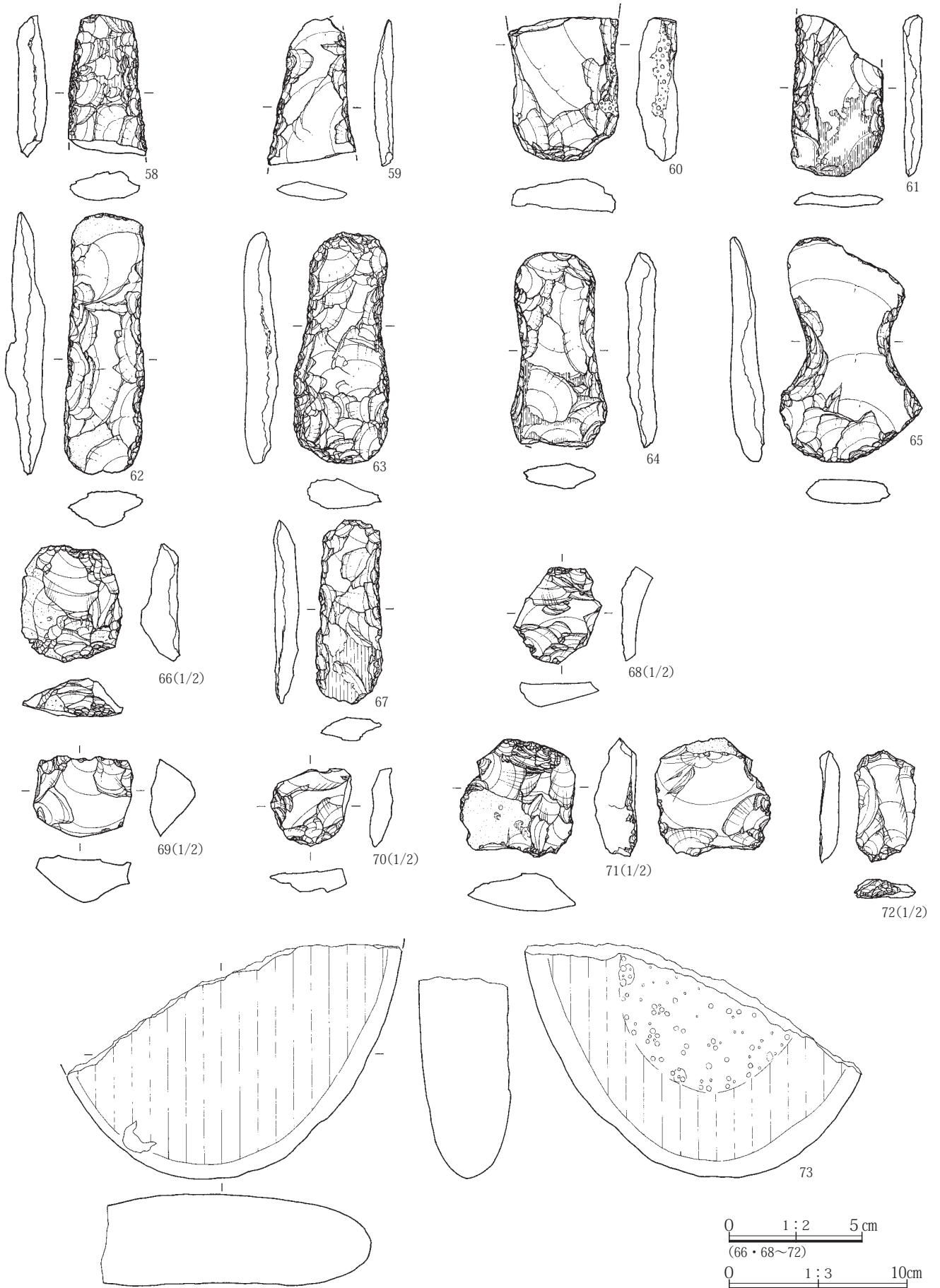
第311図 遺構外出土の縄文石器図(2)



第312図 遺構外出土の縄文石器図(3)



第313図 遺構外出土の縄文石器図(4)



第314図 遺構外出土の縄文石器図(5)

## 第5節 旧石器時代

### 1. 概要

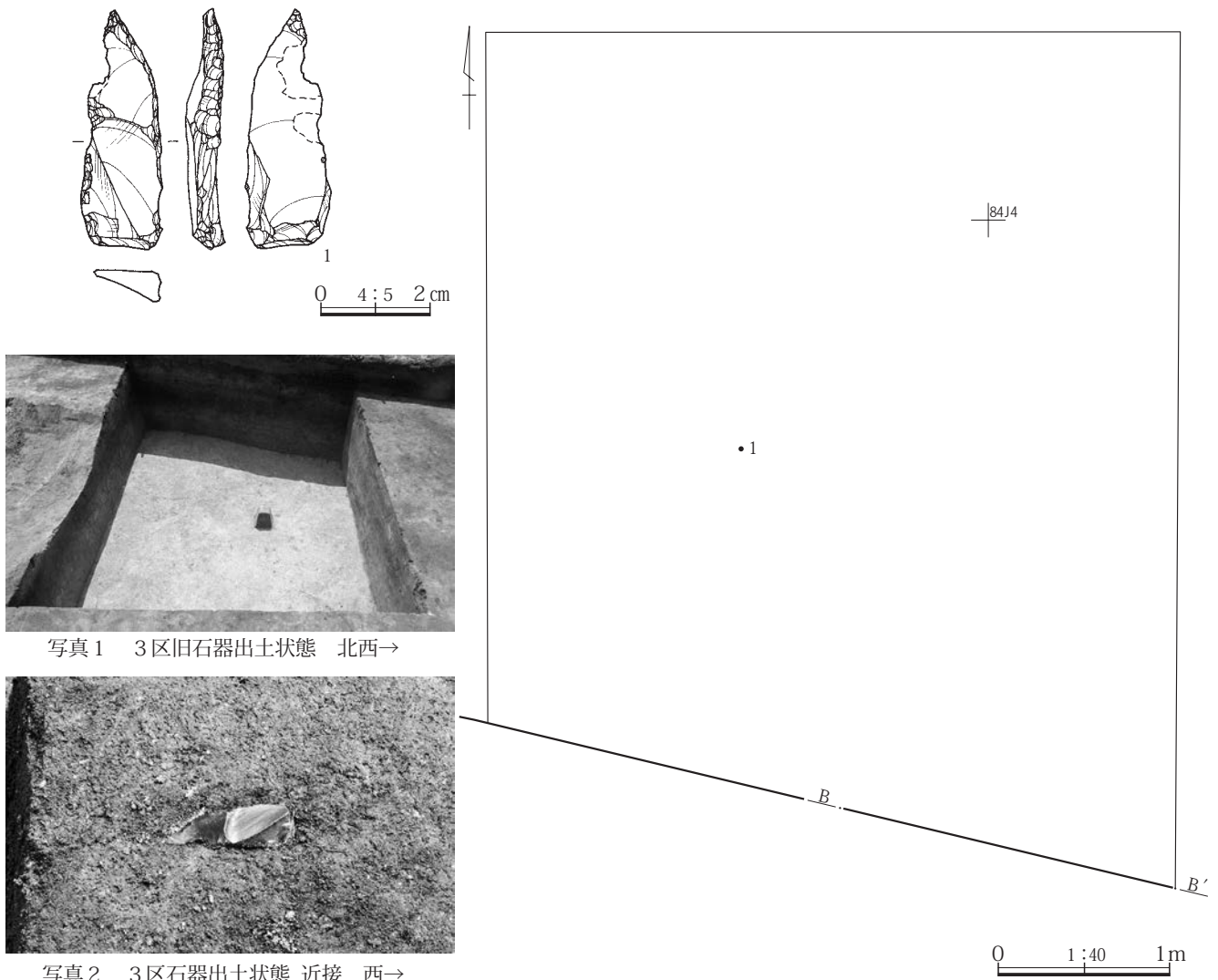
山王・柴遺跡群3区・4区調査区は、ロームが比較的良好な状態で残っていたため、遺構の調査終了後、旧石器時代の調査を実施した。3区調査区では2m×4m、4区調査区では4m×4mのトレンチを設け、その中をジョレンを用いて注意深く掘り下げた。3区調査区で25カ所、4区調査区で10カ所トレンチ調査した。調査の結果、3区調査区の84区J-3グリッドで遺物が1点出土した。遺物については、次節で述べる。

縄文時代以前の土層堆積状況は第317図のとおりである。以下に、その状況について述べる。

縄文時代相応のローム下では、3区・4区調査区共に浅間板鼻黄色テフラ (As-YP) 堆積層が確認された。(As-ok)・浅間白糸テフラ (As-Sr) 層が確認された。3区調査区でも同等の層位が見られた。さらに下位で浅間板鼻褐色テフラ (As-BP) 層が確認されている。4区調査区ではAs-BP層を3層に細分することができた。3区調査区では、As-BP層下で湧水が認められた。4区調査区ではAs-BP層下暗色帯下にて、白川の氾濫層が見られた。

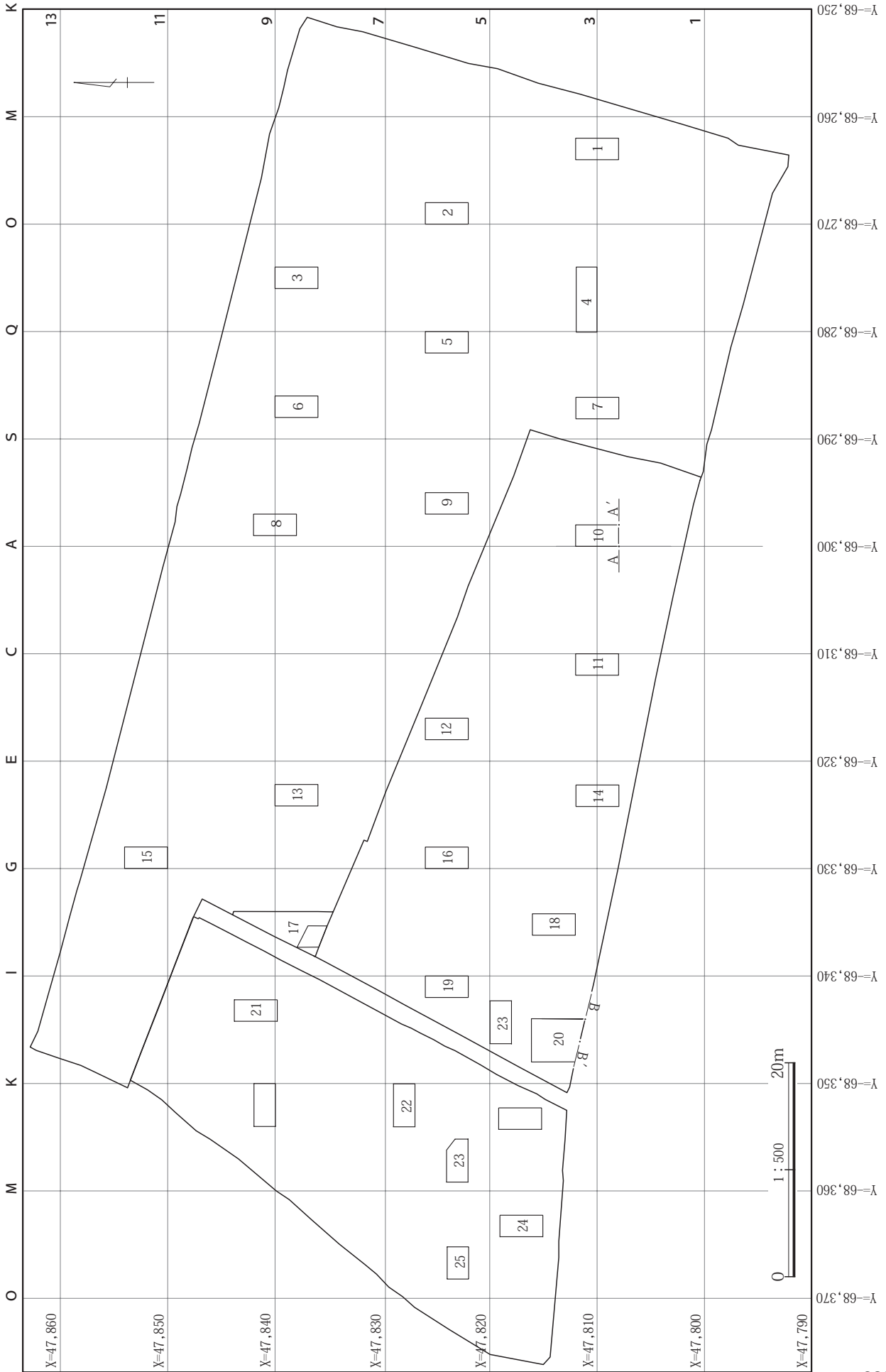
### 2. 出土石器 (第315図、PL.188)

3区調査区84区J-3グリッドから、ナイフ形石器が1点出土した。石器は、縦長剥片を素材とした黒曜石製である。出土層位は11層であり、11層はAs-YP下層である。12層はAs-ok相当であることから、この石器は、As-ok噴出より新しく、As-YPより古いと推定される。なお、土層断面は第317図B-B'を参照。



第315図 3区旧石器遺物図及び出土状態図

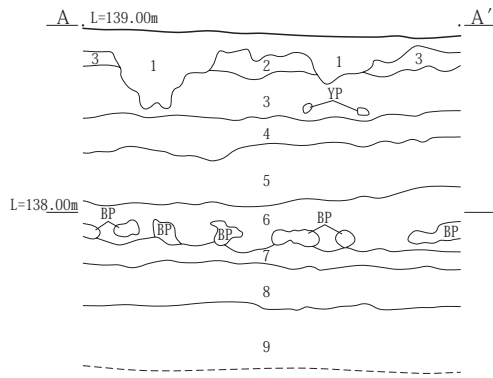
3. 旧石器確認調査状況



第316図 3区旧石器確認調査の調査地点図

第3章 検出遺構と出土遺物

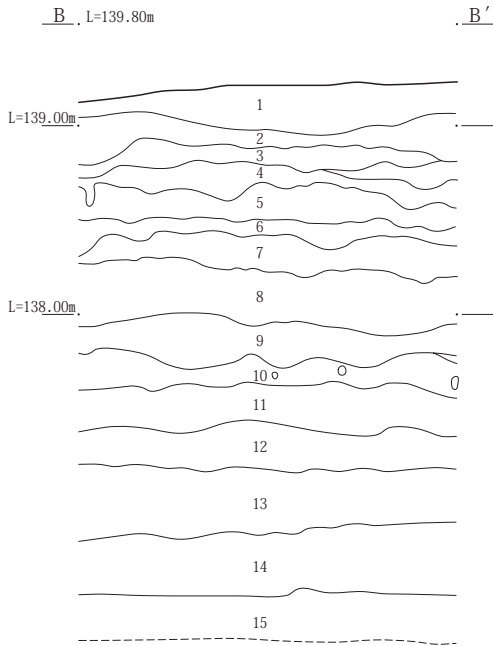
T-2グリッド南壁



A-A'

1. 灰黄褐色土 ローム漸移層。
2. 明黄褐色土 ローム土。
3. 明黄褐色土 As-YP層、YP黄褐色軽石粒がブロック状に堆積する。
4. 明黄褐色土 灰白色軽石粒極少量含む。
5. 明黄褐色土 白色軽石粒極少量含む。
6. 浅黄褐色土 As-BP層
7. 浅黄褐色土 6層に比べやや暗い色調。
8. 浅黄色土
9. にぶい黄褐色 白色軽石粒少量含む。

I-3グリッド南壁



B-B'

1. 表土
2. 近代耕作土
3. 黒褐色 Hr-FA・Hr-FP少量As-C微量量含む。
4. 灰黄褐色土 にぶい黄色シルト質土含む。
5. にぶい黄色土 シルト質土
6. 灰黄褐色土
7. 灰黄褐色土 6層に比べ色調明るい。
8. 灰暗褐色土
9. にぶい黄褐色土 ローム土
10. にぶい黄褐色土 As-YP層。
11. にぶい黄褐色土 灰白色粒極少量含む。
12. にぶい黄褐色土 マンガン斑が少し入る。
13. にぶい黄褐色土 As-BP層。
14. にぶい黄褐色
15. にぶい黄褐色 湧水層。

第317図 3区旧石器確認調査の調査地点土層断面図

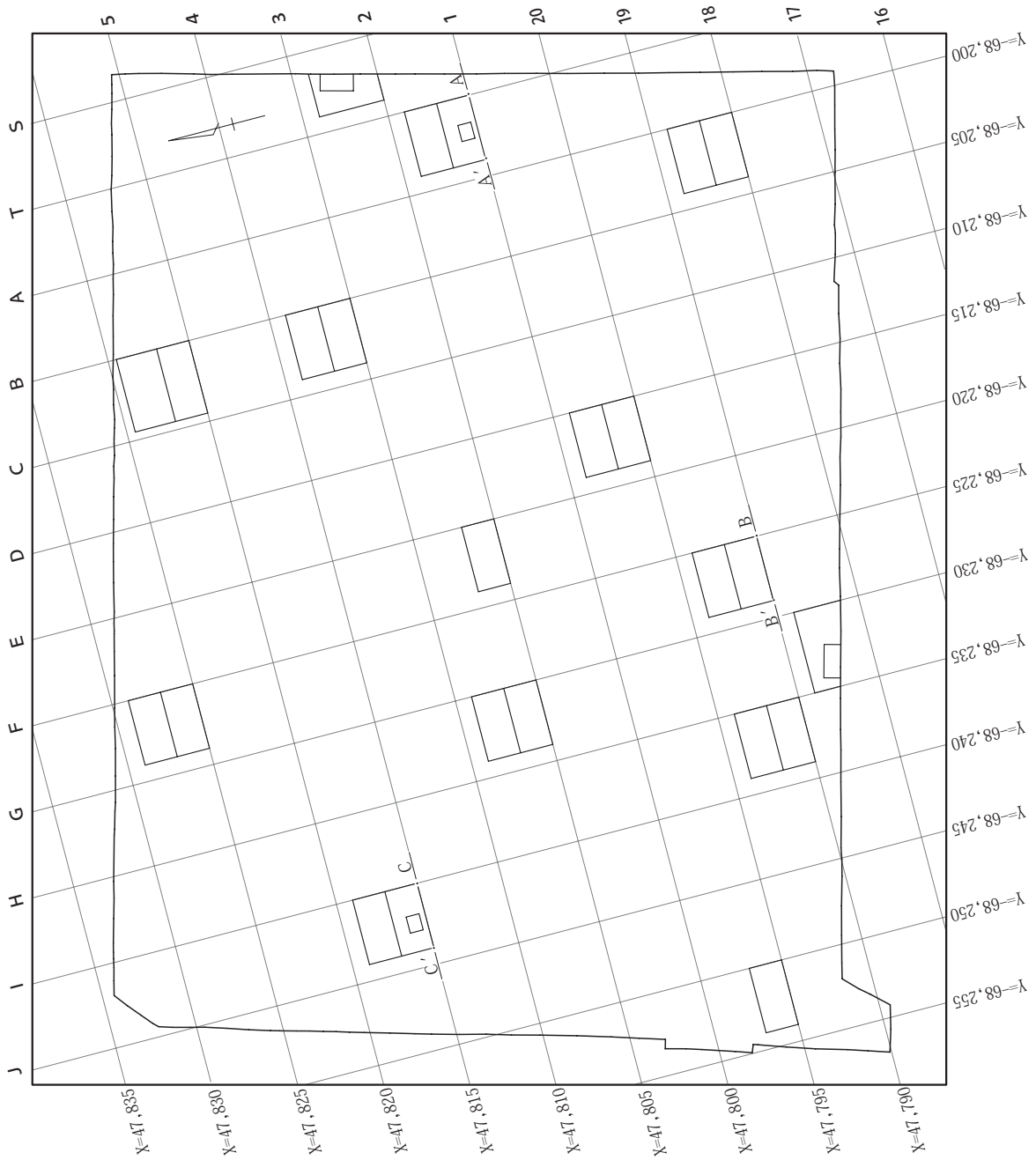


写真3 3区T-2グリッド南壁土層断面 北→



写真4 3区I-3グリッド南壁土層断面 北→





第318図 4区旧石器確認調査の調査地点図



写真5 4区旧石器確認調査 調査状況 東→

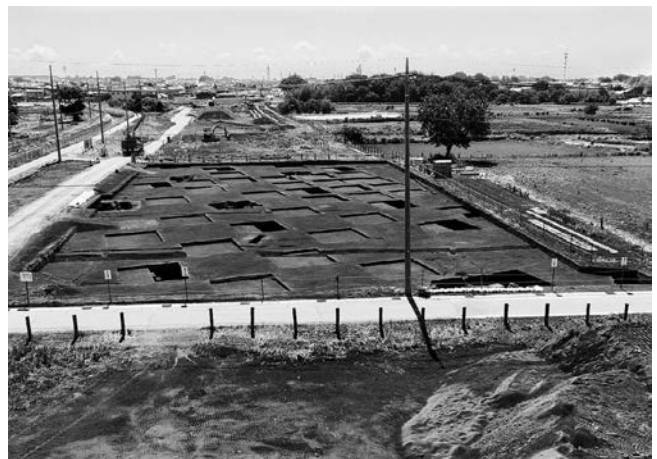


写真6 4区旧石器確認調査 調査状況 西→

第3章 検出遺構と出土遺物

82区T-1グリッド南壁

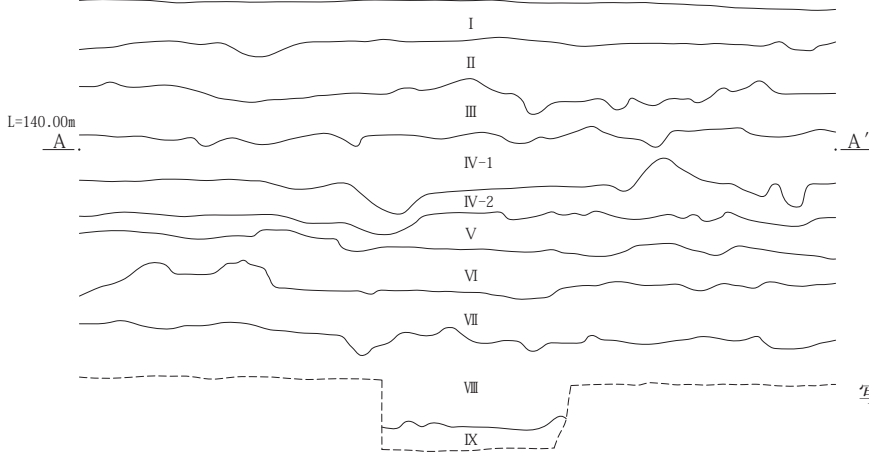


写真7 4区82区T-1グリッド南壁土層断面 北→

73区F-19グリッド南壁

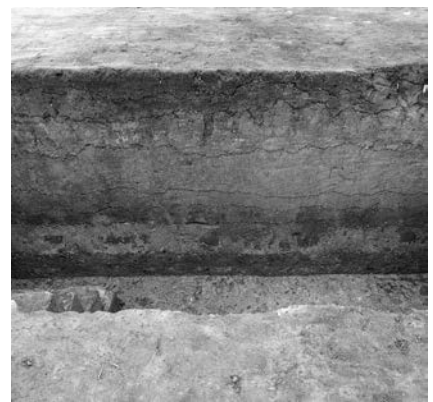
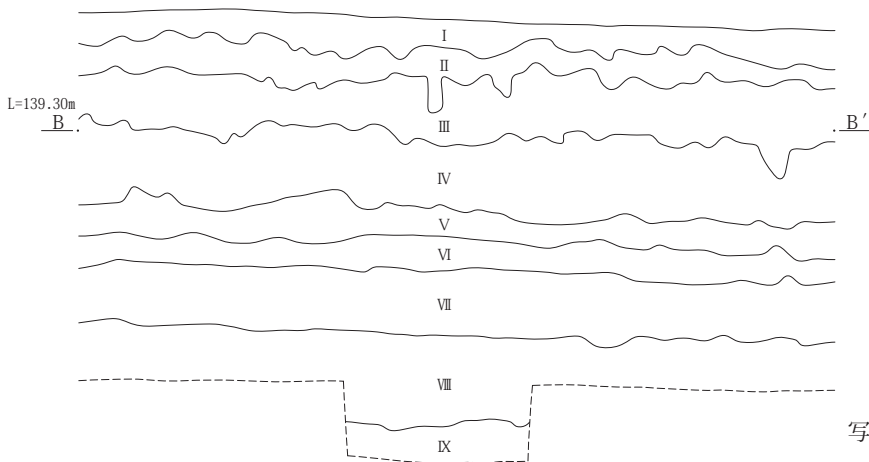


写真8 4区73区F-19グリッド南壁土層断面 北→

83区I-4グリッド南壁

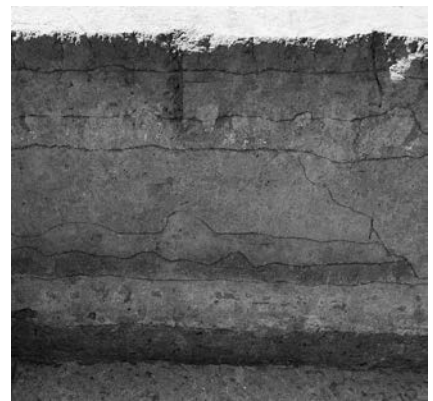
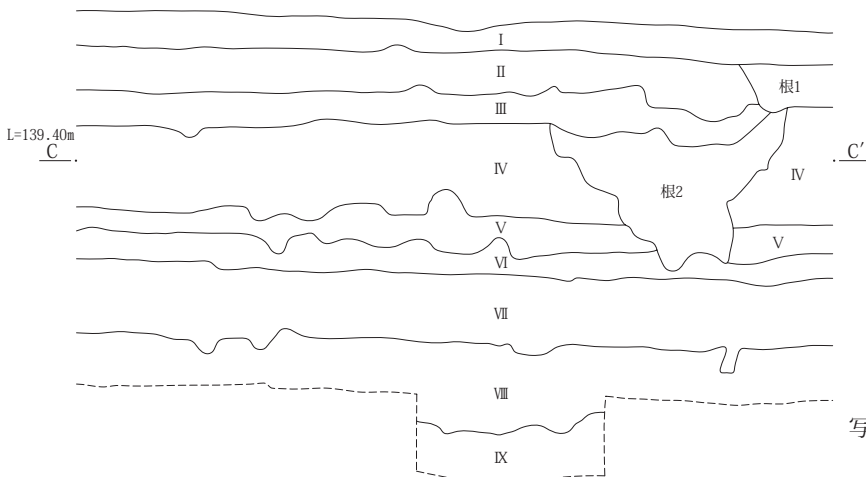


写真9 4区83区I-4グリッド南壁土層断面 北→

A-A' ~ C-C'

- I. 明黄褐色土 ローム漸移層。
- II. 黄橙色土 ローム土、白色、黄色鉄物粒が少量入る。
- III. 黄橙色土 As-YP層。砂質土、粒状に残る明黄褐色軽石を含む。
- IV-1. 明黄褐色土 As-OK As-Sr。浅黄橙色と灰白色の軽石微量含む。
- IV-2. にぶい黄橙色土 砂質土、白色軽石微量含む。IV-1よりやや明るい。
- V. 黄橙色土 As-BP-1。軟質土、黄橙色の軽石微量含む。
- VI. 黄橙色土 As-BP-2。橙色軽石と、黒褐色軽石を含む。
- VII. 浅黄橙色土 As-BP-3。所々にAs-BP-2と同じ軽石が入る。黒褐色軽石の割合が多い。
- VIII. にぶい黄褐色土 暗色帯。やや丸みで角の取れた礫を微量含む。所々にAs-BPを微量含む。
- IX. 灰黄褐色土 白川氾濫層。やや丸みで角の取れた礫を微量含む。

第319図 4区旧石器確認調査の調査地点土層断面図

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 分析の目的

山王・柴遺跡群の発掘調査及び整理事業の過程の中で、テフラ分析(第2節・第3節)、プラント・オパール分析(第4節)、炭化材の樹種同定分析(第5節)、人骨分析(第6節)、黒曜石産地同定(第7節)の5種類の自然科学分析を委託した。

テフラ分析は、平成21年度調査、平成22年度調査それぞれで実施した。平成21年度調査では、1区の遺構を被覆する火山灰及び、当該調査区の地質を探るため、地質調査とテフラ分析を火山灰考古学研究所へ委託し、報告を得た。結果、1区には、火山灰堆積物として5世紀末から6世紀初頭にかけて降灰したとみられる榛名山起源のHr-FA及び3世紀末に降灰したとみられる浅間山起源のAs-Cが堆積していた。そのうち、古墳時代前期の遺構を被覆する白色軽石粒がAs-Cである可能性が高いということがわかった。

平成22年度調査では、2区東側の谷地形にて調査した水田面について、被覆している火山灰や泥流を考察し、経営時期を推定するために、地質調査とテフラ分析を行った。21年度同様、火山灰考古学研究所へ委託した。結果は、2面目水田を被覆する軽石粒は1108年に降灰した浅間山起源のAs-B及びAs-KKであり、2面目水田は、1108年以前に経営された水田であったことが考えられる。

2面目水田下層には、2面目水田より古い3面目水田が確認されている。両遺構の間層の土壌を分析した結果、多くの洪水や泥流の堆積物が存在する可能性が指摘された。3面目から2面目にかけては、時間的な隔りがあることが考えられる。また、3面目水田の下層には、5世紀末から6世紀初頭にかけて降灰したとみられる榛名山起源のHr-FAが確認でき、3面目水田の経営時期は6世紀以降のことと推定される。

プラントオパール分析は、2区東側の水田遺構で、近世に経営されたとみられる1面目水田において、鋤先痕が確認され、2面目・3面目水田は、水田と思われる遺

構の面的広がり及び給排水を行ったとみられる溝状遺構が確認されたため、同遺構の水田としての土地利用を検討する資料を得るため土壌のプラント・オパール分析を行った。テフラ分析と同様に、火山灰考古学研究所へ委託した。

結果は、2面目水田層で、比較的少量のイネが検出され、水田耕作が行なわれていた可能性が認められた。ただし、ヨシ属と見られる種子の方が多く認められることから、水田耕作が放棄され、ヨシ属が繁茂する湿地となっていた可能性も考えられる。3面目水田層では、2面目水田層ほどではないが、イネが検出されている。この面でも稲作の可能性が考えられると言えよう。

炭化材の樹種同定分析は、3区7号竪穴住居より出土した30点の炭化材について行った。3区7号竪穴住居は、出土遺物より10世紀代に比定される焼失住居である。建築部材と見られる炭化材について、その材の原料を推定するため、パリーノ・サーヴェイ株式会社へ分析委託した。

分析の結果、屋根の茅材として使用していたのは、イネ科タケ亜科及びイネ科であった。屋根を形成する建築部材としては、コナラ節が3点であり、他はクヌギ節であった。クヌギ節を中心として、コナラ節が混じる組成であると言える。

人骨分析は、2区・3区で調査した近世墓4基から出土した人骨について、性別・年齢等が確認できなかったため、生物考古学研究所に委託した。

分析の結果、2区の墓坑3基には、推定年齢約30歳代女性・推定年齢約20歳代男性・老齢の男性・推定年齢約3歳女性(女兒)が埋葬されていると考えられる。3区の墓坑には推定年齢約30歳代の女性が埋葬されていると考えられる。

黒曜石産地分析は、4区73区C-18からまとまって出土した黒曜石について、その産地を同定するため行った。同定は、株式会社パレオ・ラボに委託した。

同定の結果は、すべて長野県和田エリア産と推定されている。

## 第2節 1区テフラ分析

### 1. はじめに

関東地方北西部に位置する赤城火山とその周辺に分布する後期更新世以降の地層や土壌の中には、赤城火山はもちろんのこと、榛名や浅間さらに遠方の火山に由来するテフラ(火山<sup>さいせつ</sup>砕屑物、いわゆる火山灰)が数多く分布している。テフラの中には、すでに層位や噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、それらとの層位関係を明らかにすることで、遺構や遺物包含層の層位や年代に関する資料を得ることが可能となっている。

赤城山麓に位置する山王・柴遺跡群の発掘調査でも、層位や年代が不明な土層が検出されたことから、地質調査を行って土層の層序やテフラの層相に関する記載を行うとともに、採取された試料についてテフラ検出分析と火山ガラスの屈折率測定を行って、土層の層位や年代に関する資料を得ることになった。調査分析の対象となったのは、1区南壁東地点、1区南壁西地点、1区西部住居址、1区西部溝状遺構の4地点である。

### 2. 土層の層序

#### (1) 1区南壁東地点(第320図、第18・19表)

1区南壁東地点では、厚い腐植質土壌の断面を観察できた。ここでは、垂円礫層の上位に、下位より砂混じり暗灰色土(層厚31cm)、黄灰色砂質土(層厚19cm)、灰色粗粒火山灰混じりで若干灰色がかった暗褐色土(層厚10cm)黒褐色土(層厚21cm)、砂混じり暗褐色土(層厚14cm)、黒褐色土(層厚14cm)が認められる。その上面には浅い谷が形成されており、それは下位より灰色砂質シルト層(層厚18cm)、シルト混じりで淘汰の良くない黄灰色砂層(層厚18cm)、灰色砂層(層厚17cm)、垂円礫に富む灰色砂層(層厚14cm、礫の最大径68mm)で埋没している。

その上位には、さらに下位より灰褐色砂質土(層厚11cm)、黒灰褐色土(層厚14cm)、黄灰色軽石に富む灰褐色土(層厚4cm、軽石の最大径7mm、石質岩片の最大径2mm)、黄灰色軽石混じり暗灰褐色土(層厚14cm、軽石の最大径6mm)、灰褐色砂質表土(層厚32cm)が形成されている。

#### (2) 1区南壁西地点(第320図、第18表)

1区南壁西地点では、下位より暗灰褐色土(層厚10cm以上)、褐色土(層厚15cm)、黄灰色軽石層(層厚7cm、軽石の最大径12mm、石質岩片の最大径2mm)、黄灰色軽石を多く含む黒色土(層厚14cm、軽石の最大径8mm)、粗粒の白色軽石を含む黄色がかった褐色土(層厚9cm、軽石の最大径42mm)、暗灰褐色土(層厚21cm)、黒灰褐色土(層厚15cm)、灰色砂質土(層厚18cm)が認められる。

これらのうち、粗粒の白色軽石については、発泡がさほど良くなく、斑晶に角閃石や斜方輝石が認められる。このことから、この軽石は6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋谷テフラ(Hr-FA、新井1979、坂口1986、早田1989、町田・新井1992)あるいは6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP、新井1979、坂口1986、早田1989、町田・新井1992)に由来すると考えられる。

#### (3) 1区西部住居址(第320図、第18表)

1区西部住居址では、覆土の断面をよく観察できた。覆土は、下位より土器片や炭化物を含む黒灰色土(層厚6cm)、灰白色軽石層(層厚4cm、軽石の最大径14mm、石質岩片の最大径2mm)、黄灰色軽石に富む黒色土(層厚14cm、軽石の最大径12mm)、黄灰色軽石を多く含む土器片混じり黒灰褐色土(層厚37cm、軽石の最大径11mm)、成層したテフラ層(層厚3cm)、灰褐色砂質土(層厚6cm)からなる。

これらのうち、成層したテフラ層は、下部の紫がかった灰褐色細粒火山灰層(層厚1cm)と、上部の粗粒の黄色軽石層(層厚2cm、軽石の最大径71mm、石質岩片の最大径18mm)からなる。このテフラ層は、層相からHr-FAに同定される。

#### (4) 1区西部溝状遺構(第320図、第18・19表)

畠遺構のサクの可能性が考えられている1区西部溝状遺構は、黄白色軽石層(層厚5cm、軽石の最大径21mm、石質岩片の最大径2mm)に覆われている。

### 3. テフラ検出分析

#### (1) 分析試料と分析方法

調査の対象になった4地点のうち、1区南壁東地点において土層の境にかからないように基本的に5cmごとに採取された試料のうちの15点、1区南壁西地点、1区西

部住居址、1区西部溝状遺構で認められた軽石層とそれに関係する土層の合計19試料を対象にテフラ検出分析を行い、指標テフラの降灰層準を求めるとともに、テフラ層に含まれる本質物質の特徴の把握を行った。分析の手順は次のとおりである。

- 1) 試料7gについて超音波洗浄により泥分を除去。
- 2) 80℃で恒温乾燥。
- 3) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

#### (2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第18表に示す。1区南壁東地点では、試料1にスポンジ状に良く発泡した灰白色軽石(最大径4.9mm)が多く含まれている。その斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この試料には、ほかにこの軽石の細粒物である灰白色の軽石型ガラスも比較的多く含まれている。火山ガラスは、試料28以外のいずれの試料でも認められる。その中では、試料32で比較的多く、白色や無色透明の軽石型ガラスのほか、無色透明の分厚い中間型ガラスやバブル型ガラスが含まれている。また、断面観察で灰色粗粒火山灰が少量認められた試料25や24には、無色透明の軽石型や中間型ガラスが少量含まれている。そのほか、試料20ではごく少量ながら淡褐色のバブル型ガラスが認められる。

1区南壁西地点、1区西部住居址、1区西部溝状遺構で認められた軽石層には、スポンジ状に良く発泡した灰白色軽石(最大径13.3mm)が多く含まれている。その斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この試料には、ほかにこの軽石の細粒物である灰白色の軽石型ガラスも多く含まれている。なお、1区西部住居址の覆土で、この軽石層の下位の覆土基底部の試料2には、これらのテフラ粒子は認められず、1区西部住居址の層位は、この軽石層より下位と考えられる。

### 4. 屈折率測定

#### (1) 測定試料と測定方法

指標テフラとの同定精度を向上させるために、1区南壁東地点の試料25と1区西部溝状遺構の試料1に含まれる軽石のガラス部の屈折率を測定した。測定には、温度変化型屈折率測定装置(古澤地質社製MAIOT)を利用した。1区南壁東地点の試料25では1/8-1/16mmの粒径の火山ガラスについて、また1区西部溝状遺構の試料1では軽石

を実体顕微鏡下でピックアップした後に軽く粉碎して屈折率(n)の測定を行った。

#### (2) 測定結果

屈折率測定の結果を第19表に示す。1区南壁東地点の試料25に含まれる火山ガラス(18粒子)の屈折率(n)は1.500-1.502である。一方、1区西部溝状遺構の試料1に含まれる軽石の火山ガラス(31粒子)の屈折率(n)は、1.515-1.521である。

### 5. 考察

1区南壁東地点の試料25に含まれるテフラについては、層位、岩相、火山ガラスの屈折率から、浅間火山起源と考えられる。より下位の試料32に比較的多く含まれる火山ガラスは、その層位や特徴などから約1.1万年前<sup>\*1</sup>に浅間火山から噴出した浅間総社軽石(As-Sj, 早田1991, 1996)に同定される可能性が考えられることから、試料25に含まれるテフラは約8,200万年前<sup>\*1</sup>の浅間藤岡軽石(As-Fo, 早田1996など)の可能性もある。また、その上位の試料20に含まれる淡褐色のバブル型ガラスは、その特徴から約6,300年前<sup>\*1</sup>に南九州の鬼界カルデラから噴出した広域テフラの鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 町田・新井1978)に由来すると考えられる。

1区西部溝状遺構の試料1が採取された軽石層は、層相、軽石の岩相、火山ガラスの屈折率などから、4世紀初頭に浅間火山から噴出したと推定されている浅間C軽石(As-C, 荒牧1968, 新井1979, 友廣1988, 若狭2000)に同定される。したがって、畠のサクと考えられている溝状遺構はAs-Cの降灰に伴って埋没したと推定される。さらに、同様の層相をもつ1区南壁西地点の試料1の軽石層や1区西部住居址の試料1が採取された軽石層、1区南壁東地点の試料1に多く含まれる軽石についても、As-Cと考えられる。1区西部住居址では、廃絶後間もないうちにAs-Cが降灰したと考えられる。

### 6. まとめ

山王・柴遺跡群において、地質調査、テフラ検出分析、火山ガラスの屈折率測定を実施した。その結果、下位より浅間総社軽石(As-Sj, 約1.1万年前<sup>\*1</sup>)、浅間藤岡テフラ(As-Fo, 約8,200年前<sup>\*1</sup>)、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah, 約6,300年前<sup>\*1</sup>)、浅間C軽石(As-C, 4世紀初頭)、榛名

第4章 自然科学分析

ニッ岳洪川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)などの多くのテフラ層やテフラ粒子を検出することができた。

\*1:放射性炭素(14C)年代. K-Ahの暦年較正年代は7,300年前と考えられている(町田・新井, 2003)。

文献

新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.  
 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.  
 荒牧重雄(1968)浅間火山の地質. 地団研専報, no.45, 65p.

町田 洋・新井房夫(1978)南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ-アカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, p.143-163.  
 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.  
 町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.  
 坂口 一(1986)榛名ニッ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.  
 早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.  
 早田 勉(1991)浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, No.57, p.2-7.  
 早田 勉(1996)関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴-とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて-. 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, VII, p.256-267.  
 友廣哲也(1988)古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」, p.325-336.  
 若狭 徹(2000)群馬の弥生土器が終わるとき. かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く-古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.

第18表 1区テフラ検出分析結果

地点名	試料	軽石・スコリア			火山ガラス	
		量	色調	最大径	量	形態 色調
(1)1区南壁東地点	1	**	灰白	4.9	**	pm 灰白
	3	*	灰白	4.1	*	pm 灰白
	5				*	pm 灰, 白
	8				*	pm, md 白, 透明
	12				*	pm>bw 白, 透明
	14				*	md 淡褐, 灰
	16				*	pm, md 灰白, 透明
	18				*	pm, md, bw 白, 透明, 淡褐
	20				*	pm, bw, md 淡褐, 透明, 灰
	22				*	pm, md 灰, 淡褐, 透明
	24				*	pm, md 透明
	25				*	pm, md 透明
	28					
	32				**	pm, md>bw 白, 透明
34				*	pm 白	
(2)1区南壁西地点	1	***	灰白	6.9	***	pm 灰白
(3)1区西部住居址	1	***	灰白	3.7	***	pm 灰白
	2				*	pm 透明
(4)1区西部溝状遺構	1	****	灰白	13.3	***	pm 灰白

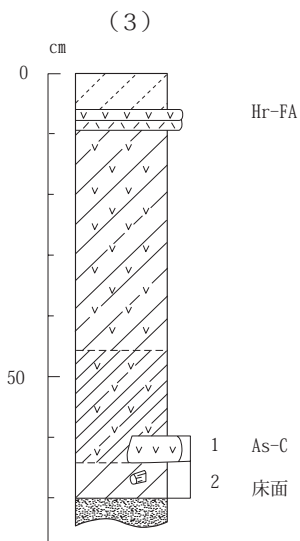
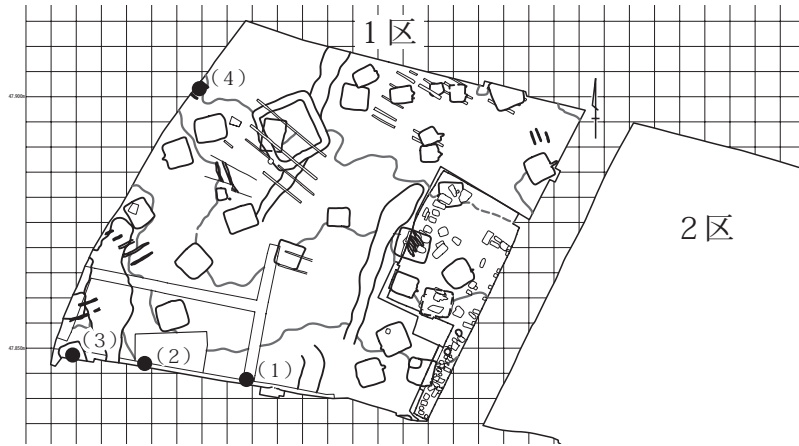
\*\*\*\*:とくに多い, \*\*\*:多い, \*\*:中程度, \*:少ない. 最大径の単位は, mm. bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型.

第19表 1区テフラ屈折率測定結果

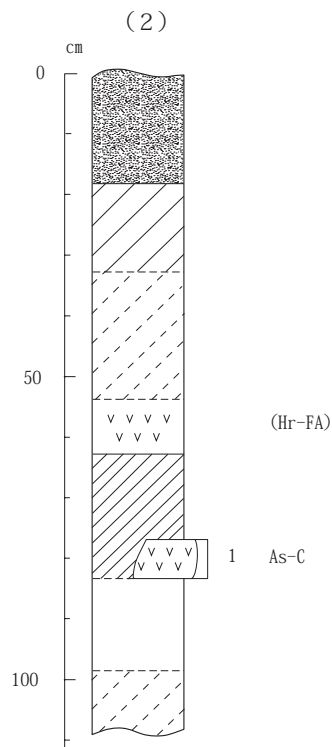
地点名	試料	火山ガラス	
		屈折率	粒子数
(1)1区南壁東地点	25	1.500-1.502	18
(4)1区西部溝状遺構	1	1.515-1.521	31

測定は温度変化型屈折率測定装置(MAIOT)による.

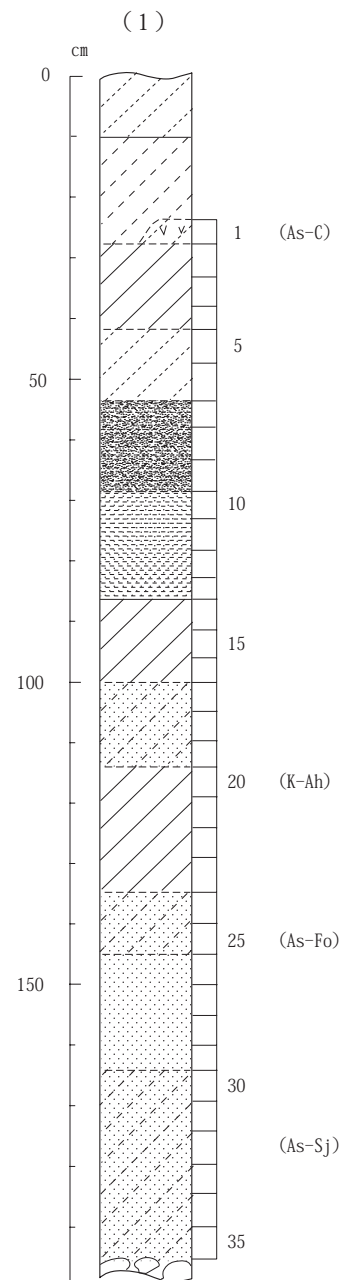
1区テフラ採取地点



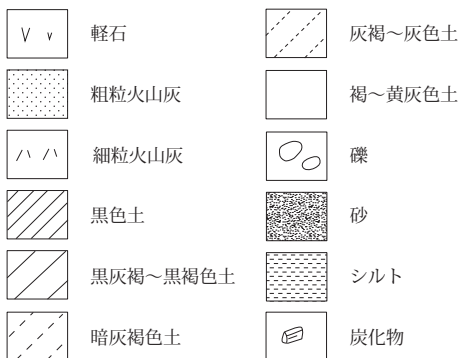
1区西部住居址の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号



1区南壁西地点の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号



1区南壁東地点の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号



第320図 1区テフラ分析採取地点と採取地点の土層柱状図

## 第3節 2区東側谷地テフラ分析

### 1. はじめに

2区の調査分析の対象は、東側谷東部、東側谷東部上方地点、水田南地点、水田南端水抜き用深掘地点の4地点である。

### 2. 土層の層序

#### (1) 2区東側谷東部(第321図、第20表)

2区東側谷東部では、下位より亜円礫まじりで砂を含む暗灰色泥層(層厚10cm以上、礫の最大径14mm)、黒泥層(層厚4cm)、桃色シルト層(層厚0.8cm)、黒泥層(層厚3cm)、黄色砂層(層厚4cm)、砂まじり黒泥層(層厚2cm)、灰色砂層(層厚8cm)、暗灰褐色泥層(層厚3cm)、成層したテフラ層(層厚10cm)、砂まじり暗灰色泥層(層厚0.7cm)、青みがかった灰色砂質細粒火山灰層(層厚2cm)、暗灰色土(層厚4cm)、砂まじり灰褐色土(層厚50cm以上)が認められる。

このうち、成層したテフラ層は、下部の若干攪乱を受けて全体として黄灰色を呈する粗粒火山灰層(層厚8cm)と上部の桃色細粒火山灰層(層厚2cm)からなる。このテフラ層は、層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 荒牧1968, 新井1979, 町田・新井2003)に同定される。また、その上位の青みがかった灰色砂質細粒火山灰層は、層位や層相などから、1128(大治3)年に浅間火山から噴出したと推定されている浅間粕川テフラ(As-Kk, 早田1991・2004)に同定される。

#### (2) 2区東側谷東部上方地点(第321図、第20表)

2区東側谷東部上方地点では、下位より粒径が良く揃った灰色砂層(層厚10cm以上)、黒泥層(層厚2cm)、灰色砂ブロックまじり暗灰色土(層厚5cm)、暗灰色砂質土(層厚0.5cm)、砂まじり暗灰色土(層厚8cm)、青灰色細粒火山灰層(層厚0.3cm)、砂を多く含み色調がやや暗い灰色土(層厚7cm)、砂まじり灰褐色土(層厚19cm)が認められる。

#### (3) 2区水田南地点(第321図、第20表)

2区水田南地点では、下位より灰褐色泥層(層厚5cm以上)、暗灰褐色泥層(層厚8cm)、わずかに黄色がかっ

た灰色砂層(層厚2cm)、暗灰褐色泥層(層厚6cm)、黄色がかった灰色シルト質砂層(層厚1cm)、暗灰褐色泥層(層厚5cm:上面が水田面の可能性が指摘されている)、層理が発達した汚色がかった灰色砂層(層厚8cm)、暗灰褐色泥層(層厚3cm)、黒泥層(層厚1cm)、成層したテフラ層(層厚10.4cm)、暗灰褐色砂質土(層厚4cm)、青灰色細粒火山灰層(層厚1cm)、砂まじり黒色土(層厚4cm)、黄灰色砂に富む灰色砂質土(層厚5cm)、暗灰褐色土(層厚3cm)、成層した黄灰色砂層(層厚6cm)、砂まじり暗灰色土(層厚19cm)、灰褐色砂質土(層厚7cm)が認められる。

この地点の成層したテフラ層は、2区東側谷東部で認められる成層したテフラ層より保存状態が良く、下位より褐色のやや粗粒の軽石を含む黄灰色粗粒火山灰層(層厚2cm, 軽石の最大径3mm)、青灰色細粒火山灰層(層厚0.4cm)、黄灰色粗粒火山灰層(層厚6cm)、桃色砂質細粒火山灰層(層厚2cm)から構成される。このテフラ層も、層相からAs-Bに同定される。その上位の青灰色細粒火山灰層は、層位や層相などから、As-Kkに同定される。

#### (4) 2区水田南端水抜き用深掘地点(第321図、第20表)

2区水田南端水抜き用深掘地点では、基盤の灰白色泥流層を切ってできた谷の埋積堆積物を見ることが出来る。その基底には、亜円礫まじりの灰色砂層(層厚17cm, 礫の最大径32mm)が認められ、その上位には下位より砂まじり灰色泥層(層厚2cm)、灰色砂層(層厚4cm)、風化した黄白色軽石や砂を含む灰色泥層(層厚22cm, 軽石の最大径16mm)、灰色砂層(層厚2cm)、砂まじり灰色泥層(層厚14cm)、黒泥層(層厚2cm)、白色軽石混じり灰色砂層(層厚4cm, 軽石の最大径10mm)、暗灰褐色泥層(層厚3cm)、黒泥層(層厚0.8cm)、わずかに黄色がかった灰白色砂層(層厚0.4cm)、黒泥層(層厚1cm)、層理が発達した黄灰色砂層(層厚6cm)、暗灰褐色泥層(層厚7cm)が認められる。この地点で最上位の面が、2区水田南地点において水田面の可能性が指摘されている層準に相当する。

### 3. テフラ検出分析

#### (1) 分析試料と分析方法

土層断面において、テフラ層やテフラ粒子を含む可能性のある砂質堆積物から採取された試料のうち、8試料を対象に、テフラ粒子の特徴を相対的に把握するテフラ検出分析を実施した。分析の手順は次の通りである。



- 1) 試料ごとに7gずつ秤量。
- 2) 超音波洗浄装置を用いながら、ていねいに泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で、テフラ粒子の量や色調などを観察。

#### (2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第20表に示す。いずれの試料からも、軽石や火山ガラスなどのテフラ粒子を検出することができた。そのうち、2区東側谷東部の試料3では、白色の軽石型ガラスや淡灰色の分厚い中間型ガラスを少量検出できた。試料1には、さほど発泡の良くない白色軽石(最大径3.0mm)やその細粒物である白色のスポンジ状軽石型ガラス、スポンジ状に良く発泡した灰白色軽石型ガラスが比較的多く含まれている。前者の斑晶には角閃石や斜方輝石、後者の斑晶には斜方輝石や単斜輝石が認められる。

2区東側谷東部上方地点の試料1'には、細粒の淡褐色軽(最大径2.3mm)や、その細粒物である淡褐色の軽石型ガラスが多く含まれている。

2区水田南地点の試料2には、白色や灰白色の軽石型ガラス、それに灰色の中間型ガラスが比較的多く含まれている。白色の軽石型ガラスには角閃石や斜方輝石、また灰白色の軽石型ガラスには斜方輝石や単斜輝石の付着したものも認められる。また、試料1には、さほど発泡の良くない白色軽石(最大径11.1mm)やその細粒物である白色のスポンジ状軽石型ガラス、それにスポンジ状に良く発泡した灰白色軽石(最大径6.5mm)やその細粒物の灰白色のスポンジ状軽石型ガラスが比較的多く含まれている。前者の斑晶には角閃石や斜方輝石、後者の斑晶には斜方輝石や単斜輝石が認められる。

2区水田南端水抜き用深掘地点の試料3には、やはり白色や灰白色の軽石型ガラスが少量含まれている。白色の軽石型ガラスには角閃石や斜方輝石、また灰白色の軽石型ガラスには斜方輝石や単斜輝石の付着したものも認められる。試料2や試料1には、さほど発泡の良くない白色軽石(最大径5.2mm)やその細粒物である白色のスポンジ状軽石型ガラス、それにスポンジ状に良く発泡した灰白色軽石(最大径2.8mm)やその細粒物の灰白色のスポンジ状軽石型ガラスが比較的多く含まれている。前者の斑晶には角閃石や斜方輝石、後者の斑晶には斜方輝石や

単斜輝石が認められる。

## 4. 考察

テフラ検出分析で認められた、よく発泡した灰白色の軽石やスポンジ状の軽石型ガラスは、その特徴から3世紀後半に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 荒牧1968, 新井1979, 坂口2010)に由来すると考えられる。また、さほど発泡の良くない白色の軽石やスポンジ状の軽石型ガラスは、5世紀に榛名火山から噴出した榛名有馬テフラ(Hr-AA, 町田ほか1984)、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 新井1979, 坂口1986, 早田1989, 町田・新井1992・2003)、6世紀中葉に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 新井1962, 坂口1986, 早田1989, 町田・新井1992・2003)のいずれかに由来すると思われる。特に、軽石については、比較的粗粒なことから後二者のいずれかと推定される。

今後、火山ガラスや鉱物の屈折率特性を把握して、指標テフラとの同定精度の向上を図る必要があるが、現段階においては、今回分析の対象となった試料の層位はいずれもAs-Cより上位にあると推定される。なお、淡褐色の軽石や軽石型ガラスを含む青灰色細粒火山灰層については、その岩相や特にマグマの混合の産物である斑状の淡褐色の軽石や軽石型ガラスがほとんど認められないことから、As-B基底部付近の降下ユニットの可能性が高い。

以上のことから、2区には、As-CとAs-Bの間の多くの層準に洪水や泥流の堆積物が存在する可能性が高い。また、2区水田南地点の発掘調査の際に、水田面の可能性が指摘された層準は、2区水田南端水抜き用深掘地点でのテフラの産出状況を合わせると、少なくともHr-FAより上位で、As-Bの下位の可能性が高い。本遺跡が位置する赤城山南麓一帯では、818(弘仁9)年の地震による斜面崩壊に起因する泥流堆積物や洪水堆積物の存在が知られていることから(能登ほか1990など)、非常に興味深い。いずれにしても、本遺跡にもこのような堆積物が存在している可能性が高いと思われる。

## 5. まとめ

山王・柴遺跡群2区において、地質調査とテフラ検出分析を実施した結果、浅間Bテフラ(As-B, 1108年)と浅

第4章 自然科学分析

間粕川テフラ(As-Kk)の堆積を認めることができた。また、浅間C軽石(As-C, 3世紀後半)、榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA, 6世紀初頭)または榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP, 6世紀中葉)などに由来するテフラ粒子も検出された。このことから、2区水田南地点における発掘調査で水田面の可能性が指摘されている層準は、Hr-FAとAs-Bの間にある可能性が高い。

文献

新井房夫(1962)関東盆地北西部地域の第四紀編年. 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.  
 新井房夫(1979)関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, no.157, p.41-52.

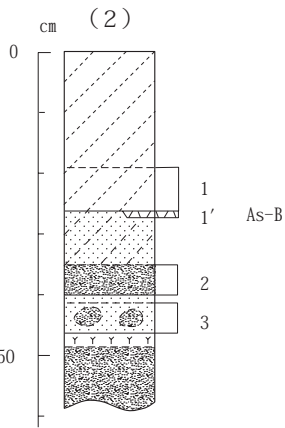
荒牧重雄(1968)浅間火山の地質. 地団研専報, no.45, 65p.  
 町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.  
 町田 洋・新井房夫(2003)新編火山灰アトラス. 東京大学出版会, 336p.  
 能登 健・内田憲治・早田 勉(1990)赤城山南麓の歴史地震—弘仁九年の地震に伴う地形変化の調査と分析—. 信濃, 42, p.755-772.  
 坂口 一(1986)榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器. 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.  
 坂口 一(2010)高崎市・中居町一丁目遺跡周辺集落の動向—中居町一丁目遺跡H22の水田耕作地と周辺集落—との関係—. 群馬県埋蔵文化財調査事業団編「中居町一丁目遺跡3」, p.17-22.  
 早田 勉(1989)6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害. 第四紀研究, 27, p.297-312.  
 早田 勉(1991)浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, no.57, p.2-7.  
 早田 勉(2004)火山灰編年学からみた浅間火山の噴火史—とくに平安時代の噴火について. かみつけの里博物館編「1108—浅間山噴火—中世への胎動」, p.45-56.

第20表 2区テフラ検出分析結果

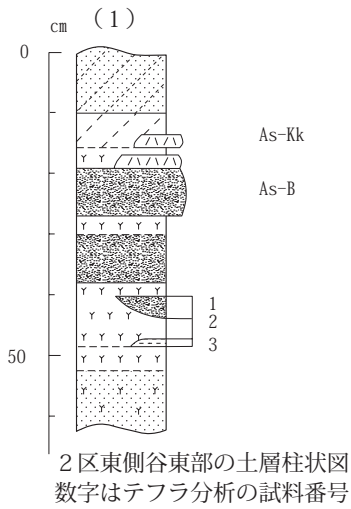
地 点	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
(1)2区東側谷東部	1	*	白	3.0	**	pm	白, 灰白
	3				*	pm, md	白, 淡灰
(2)2区東側谷東部上方	1'	*	淡褐	2.3	***	pm	淡褐
(3)2区水田南	1	**	白, 灰白	11.1, 6.5	**	pm, md	白, 灰白
	2				**	pm>md	白, 灰白>灰
(4)2区水田南端水抜き用深掘	1	**	灰白, 白	3.4, 3.8	**	pm	灰白, 白
	2	**	白, 灰白	5.2, 2.8	**	pm	白, 灰白
	3				*	pm	灰白, 白

\*\*\*\*:とくに多い, \*\*\*:多い, \*\*:中程度, \*:少ない. 最大径の単位は, mm. bw:バブル型, pm:軽石型, md:中間型.

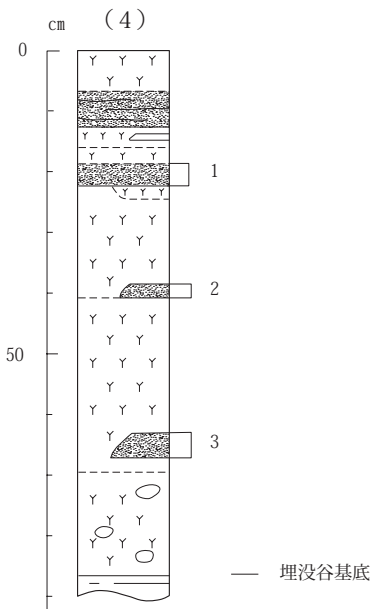
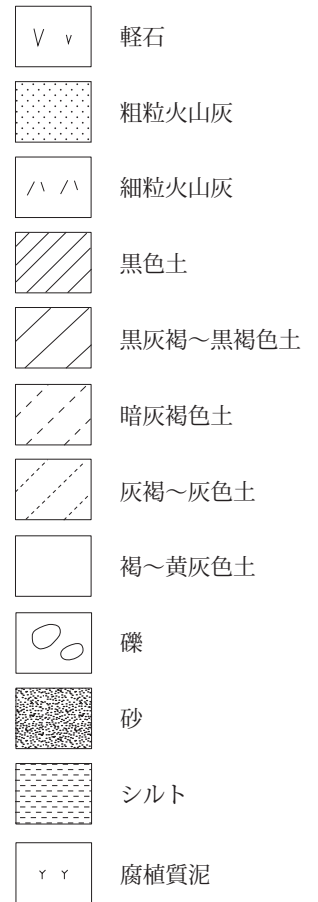
2区テフラ採取地点



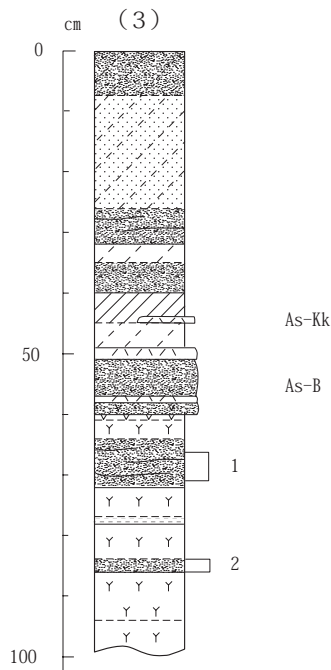
2区東側谷東部上方地点の土層柱状図



2区東側谷東部の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号



2区水田南端水抜き用深堀地点の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号



2区水田南地点の土層柱状図  
数字はテフラ分析の試料番号

第321図 2区テフラ分析採取地点と採取地点の土層柱状図

## 第4節 プラント・オパール分析

### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸( $\text{SiO}_2$ )が蓄積したもので、植物が枯れたあとも微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで水田跡(稲作跡)の検証や探査が可能である(藤原・杉山1984, 杉山2000)。

### 2. 試料

分析試料は、2区水田南地点から採取された計3点である。試料採取層位を分析結果の柱状図に示す。

### 3. 分析法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法(藤原, 1976)を用いて次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)。
- 2) 試料約1gに対し直径約40 $\mu\text{m}$ のガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)。
- 3) 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理。
- 4) 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散。
- 5) 沈底法による20 $\mu\text{m}$ 以下の微粒子除去。
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散してプレパラート作成。
- 7) 検鏡・計数。

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる

(杉山2000)。

### 4. 分析結果

プラント・オパール分析では、イネ、ムギ類(穎の表皮細胞)、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な6分類群について同定・定量を行っている。分析結果を第21・22表および第322図に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を写真10に示す。

### 5. 考察

#### (1) 水田跡(稲作跡)の検討

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している(杉山2000)。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

2区水田南地点では、As-B直下の黒色土層(試料1)と暗灰褐色土層(試料2)およびその下位の暗灰褐色土層(試料3)を対象に分析を実施した。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、試料1と試料2では密度が2,100個/gおよび2,000個/gと比較的低い値であるが、直上をテフラ層で覆われていることから上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、これらの層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。試料3では700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

#### (2) イネ科栽培植物の検討

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類、ヒエ属型(ヒエが含まれる)などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

#### (3) 堆積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、

これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。おもな分類群の推定生産量によると、イネ以外の分類群ではヨシ属が優勢であり、As-B直下の黒色土層ではヨシ属が圧倒的に卓越している。

以上のことから、各層準の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境であったと考えられ、そこを利用して調査地点もしくはその周辺で水田稲作が行われていたと推定される。As-B直下の黒色土層では、ヨシ属が圧倒的に卓越していることから、何らかの原因によって一時的に水田が放棄され、ヨシ属が繁茂する湿地の環境になっていた可能性が考えられる。

### 6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、As-B直下層(試料1、2)では比較的少量のイネが検出され、調査地点もしくはその周辺で水田稲作が行われていた可能性が認められた。また、その下位層(試料3)でも稲作の可能性が認め

られた。各試料採取層準の形成当時は、ヨシ属が生育するような湿潤な環境で、そこを利用して調査地点もしくはその周辺で水田稲作が行われていたと推定される。As-B直下の黒色土層では、ヨシ属が圧倒的に卓越していることから、何らかの原因によって一時的に水田が放棄され、ヨシ属が繁茂する湿地の環境になっていた可能性が考えられる。このような状況は前橋市や高崎市周辺などでも認められており、比較的広い範囲に及ぶ現象として注目される(杉山2004・2012)。

文献

杉山真二(2000)植物珪酸体(プラント・オパール). 辻 誠一郎編「考古学と植物学」. 同成社, p.189-213.  
 杉山真二(2004)自然科学分析が語る平安時代末期の水田跡. かみつけの里博物館第12回特別展図録「1108年—浅間山大噴火、中世への胎動」, p.57-61.  
 杉山真二(2012)浅間Bテフラ(1108年)による埋没水田の再評価. 日本第四紀学会講演予稿集, no.42, p. 116-117.  
 藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.  
 藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

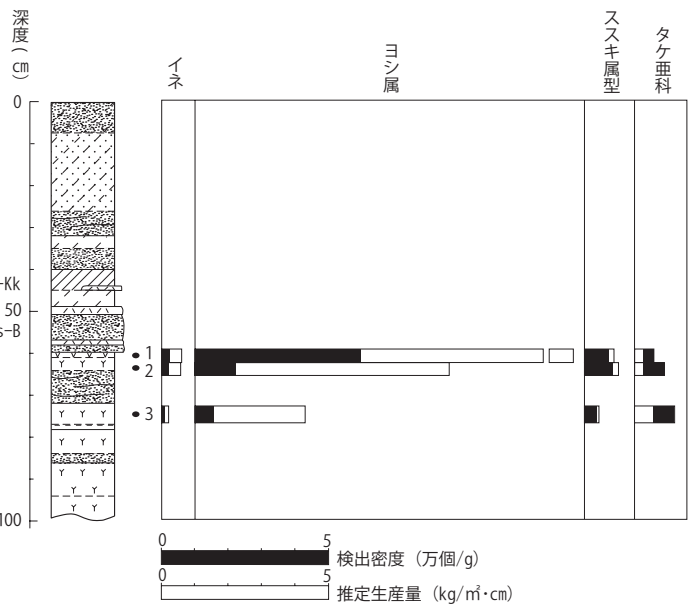
第21表 山王・柴遺跡群におけるプラント・オパール分析結果  
 検出密度(単位: ×100個/g)

分類群	学名	2区水田南地点		
		1	2	3
イネ	<i>Oryza sativa</i>	21	20	7
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	502	123	53
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	71	82	33
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i>	57	89	120

第22表 推定生産量

推定生産量(単位: kg/m<sup>2</sup>・cm): 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	0.62	0.60	0.20
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	31.67	7.75	3.37
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	0.88	1.01	0.41
タケ亜科	<i>Bambusoideae</i>	0.27	0.43	0.58



第322図 2区水田南地点におけるプラント・オパール分析結果

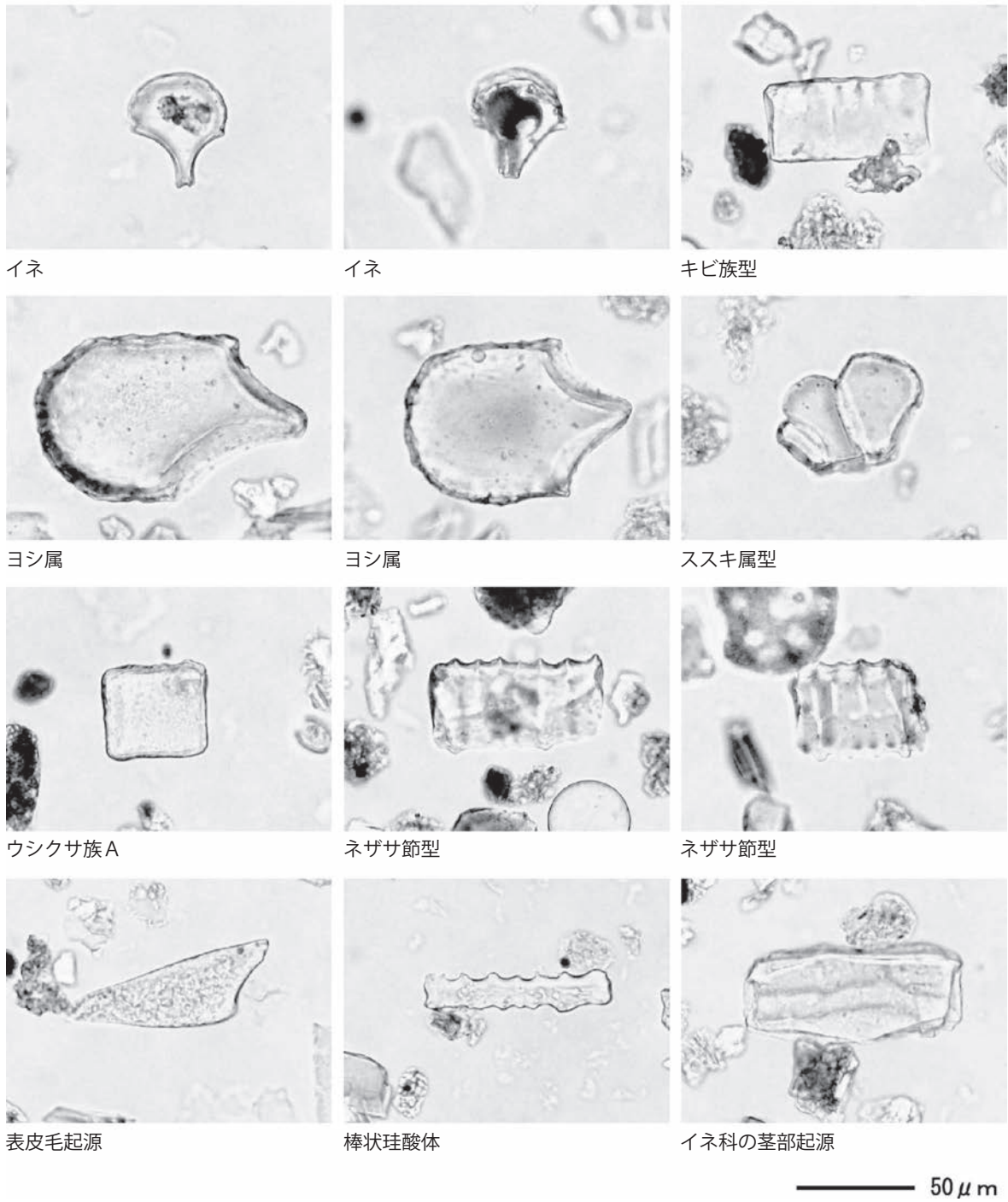


写真10 植物珪酸体（プラント・オパール）の顕微鏡写真

## 第5節 出土炭化材樹種同定

### 1. はじめに

本報告では、焼失竪穴住居として検出された古代(10世紀頃)の竪穴住居跡より出土した炭化材の樹種および木材利用の検討を目的として、樹種同定を実施した。

#### 1. 試料

試料は、3区7号竪穴住居から出土した炭化材30点である。これらの炭化材試料には、発掘調査時の取上げの際に付された名称(炭化材No.)のほか、便宜上、通しNo.1~30が付されている。このうち、出土状況からカヤ材として取上げられた通しNo.4(炭化材No.12)は、炭化した多数の稈と小径木が確認された。また、通しNo.18(炭化材No.18)は試料の一方が二又となる形状であった。これらの試料については試料の状態を考慮し、通しNo.4については状態の良い稈と小径木を、通しNo.18については芯持丸木状を呈する部位と二又に分かれる部位を、それぞれ分析に供した。なお、これらの試料については、残存する炭化材の木口(横断面)の形状観察を行い、芯持丸木状を呈する試料については直径を、分割材状を呈する試料については広い面の木取りと柾目(放射断面)幅を、それぞれ計測している。分析試料の詳細および上記した炭化材試料の観察所見は、同定結果とともに第23表に示す。

### 2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)の形状を観察し、分析試料を抽出する。抽出した炭化材について、木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)やWheeler他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995、1996、1997、1998、1999)を参考にする。

### 3. 結果

同定結果を第23表に示す。3区7号竪穴住居から出土した炭化材は、落葉広葉樹2分類群(コナラ属コナラ亜属クヌギ節、コナラ属コナラ亜属コナラ節)と、イネ科タケ亜科およびイネ科に同定された。なお、通しNo.4-dは、広葉樹の当年枝であり、成長した組織が観察できなかったため種類の特定には至らなかった。以下に、同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

- ・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1~3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独で放射方向に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと同定された。複合放射組織とがある。

- ・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1~3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと同定された。複合放射組織とがある。

- ・イネ科タケ亜科(*Gramineae* subfam. *Bambusoideae*)

原生木部の小径の道管の左右に1対の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の繊維細胞(維管束鞘)が囲んで維管束を形成するが、繊維細胞は放射方向に広く、接線方向に狭いため、全体として放射方向に長い菱形となる。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。

通しNo.1は状態が悪く薄い微細片となっており、タケ亜科以外のイネ科草本に由来する可能性があることから、イネ科としている。

### 4. 考察

3区7号竪穴住居出土の炭化材のうちカヤ材を除く試料の樹種同定の結果、コナラ節が3点認められた他は、全てクヌギ節であった。この結果から、7号竪穴住居の建築部材に利用された木材は、クヌギ節を主体としてコナラ節が混じる組成であったことが推定される。クヌギ節とコナラ節は、二次林を構成する落葉高木であるが、

クヌギ節がより湿った場所を好み、エノキ属と共に河畔林を構成することもある。クヌギ節とコナラ節の木材は、いずれも重硬で強度が高い材質を有することから、建築部材として強度の高い木材の選択・利用が推定される。一方、カヤ状の炭化物は、タケ亜科やイネ科の稈とともに、広葉樹の当年枝も確認された。したがって、萱材としてタケ亜科や小枝が利用されたことが示唆される。

3区7号竪穴住居から出土した炭化材の出土状況についてみると、住居西壁沿いから出土した炭化材、住居北側の貯蔵穴(貯蔵穴2)付近および北東隅付近から出土した炭化材、竪穴住居東壁中央付近より検出された貯蔵穴(貯蔵穴1)付近より出土した炭化材、さらに、竪穴住居中央に概ね南北方向を長軸して並ぶ炭化材と東西方向に並列して出土した炭化材に分類できる。このうち、竪穴住居西壁および竪穴住居北東隅付近から出土した炭化材は、竪穴住居壁に対して平行に出土する、および北西隅および北東隅では竪穴住居中央に向かって放射状に出土する傾向が窺える。このような出土状況から、主に壁際から出土した炭化材は、垂木を主体とした部位が想定される。また、貯蔵穴1付近より出土した炭化材は、他の地点から出土した炭化材と比較して、細片が多いという特徴が指摘できる。

なお、炭化材の木口(横断面)の形状観察では、芯持丸木状、半裁状を含む分割材状、および稈を主体とする小径木が確認された。上記した炭化材の出土状況を踏まえると、分割材状の炭化材は各地点に万遍なく確認されるのに対して、芯持丸木は特に竪穴住居北東隅付近に集中する状況が示唆される。また、これらの試料のうち、直径の推定が可能な芯持丸木や半裁状の炭化材は、最小径が約3cm、最大径が約6.5cmであった。一方、分割材状を呈する炭化材は、広い面が柁目となる試料が多く、残存径に相当する柁目(放射断面)幅は、最小が約3.5cm、最大が約6.5cmであり、木口の形状の違いに関わらず径(幅)が一定の大きさに集約する傾向が窺える。これらの特徴は、上記したクヌギ節を主体とする樹種構成とともに、当竪穴住居跡の木材利用の特徴を示している可能性がある。

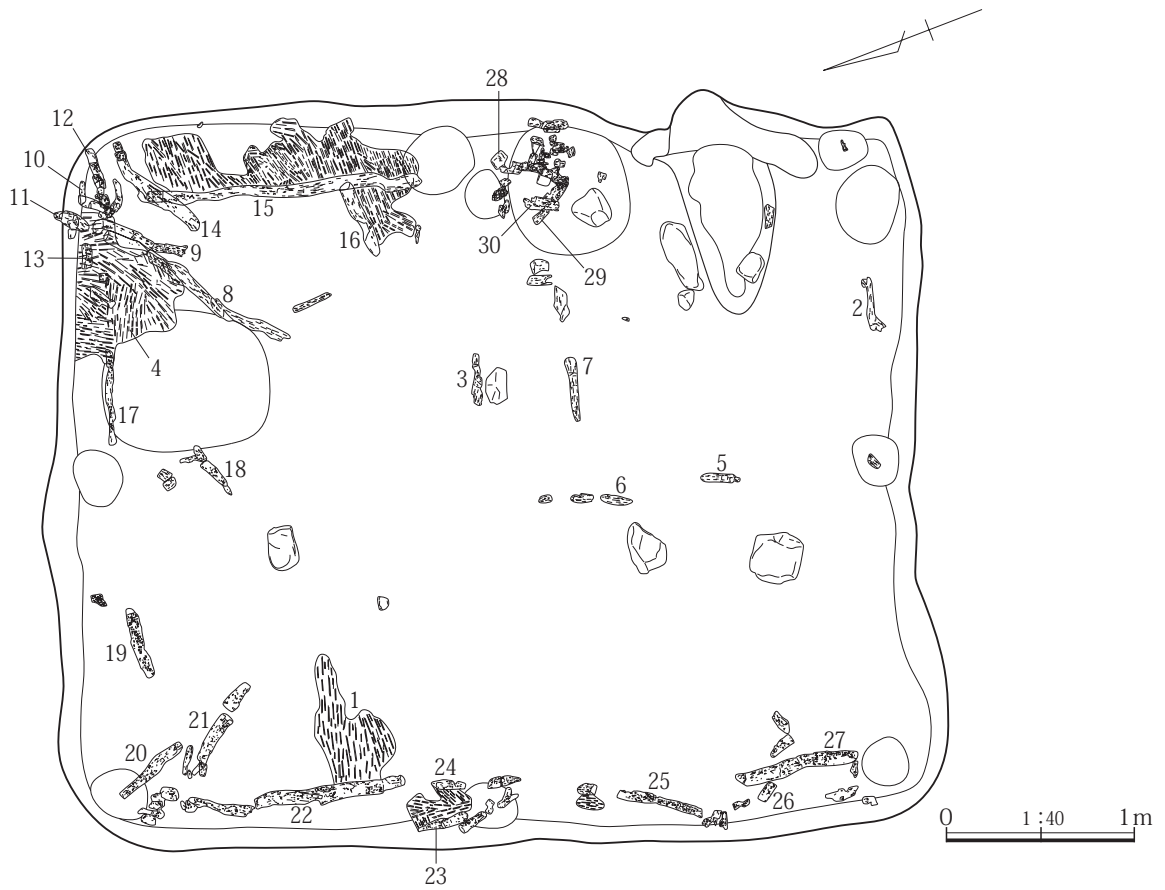
ところで、本遺跡周辺における当該期の竪穴住居構築材とみられる炭化材の調査事例では、本遺跡の西方に位置する田口上田尻遺跡(前橋市)の10世紀と考えられる竪

穴住居跡出土炭化材にコナラ節を主体としてスギ科が混じる組成が確認されている(平成28年度刊行予定)。また、利根川を挟んだ右岸に位置する下東西清水上遺跡では、10世紀前半の竪穴住居跡出土炭化材にカエデ属、トネリコ属、ケヤキ、サクラ属、10世紀中葉の竪穴住居跡出土炭化材にモミ属、ヒノキ科、イヌシデ節、クリが確認されている(植田1998)。現段階では、本遺跡のようにクヌギ節を主体とする事例は確認されておらず、群馬県内においても当該期の竪穴住居構築材に関する資料が少ないため、今後、資料の蓄積および地形等の立地条件も含めた検討が望まれる。

引用文献

群馬県史編纂委員会,1990,付図2 群馬県内主要地域の地形分類図.群馬県史通史編1 原始古代1,群馬県,902p.  
 林 昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.  
 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載I.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.  
 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載II.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176.  
 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載III.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.  
 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載IV.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.  
 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載V.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.  
 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.  
 植田弥生,1998,下東西清水上遺跡の焼失竪穴住居跡の炭化材樹種同定.下東西清水上遺跡県立前橋高等養護学校建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書,財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第239集,財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団,309-312.  
 Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989)IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



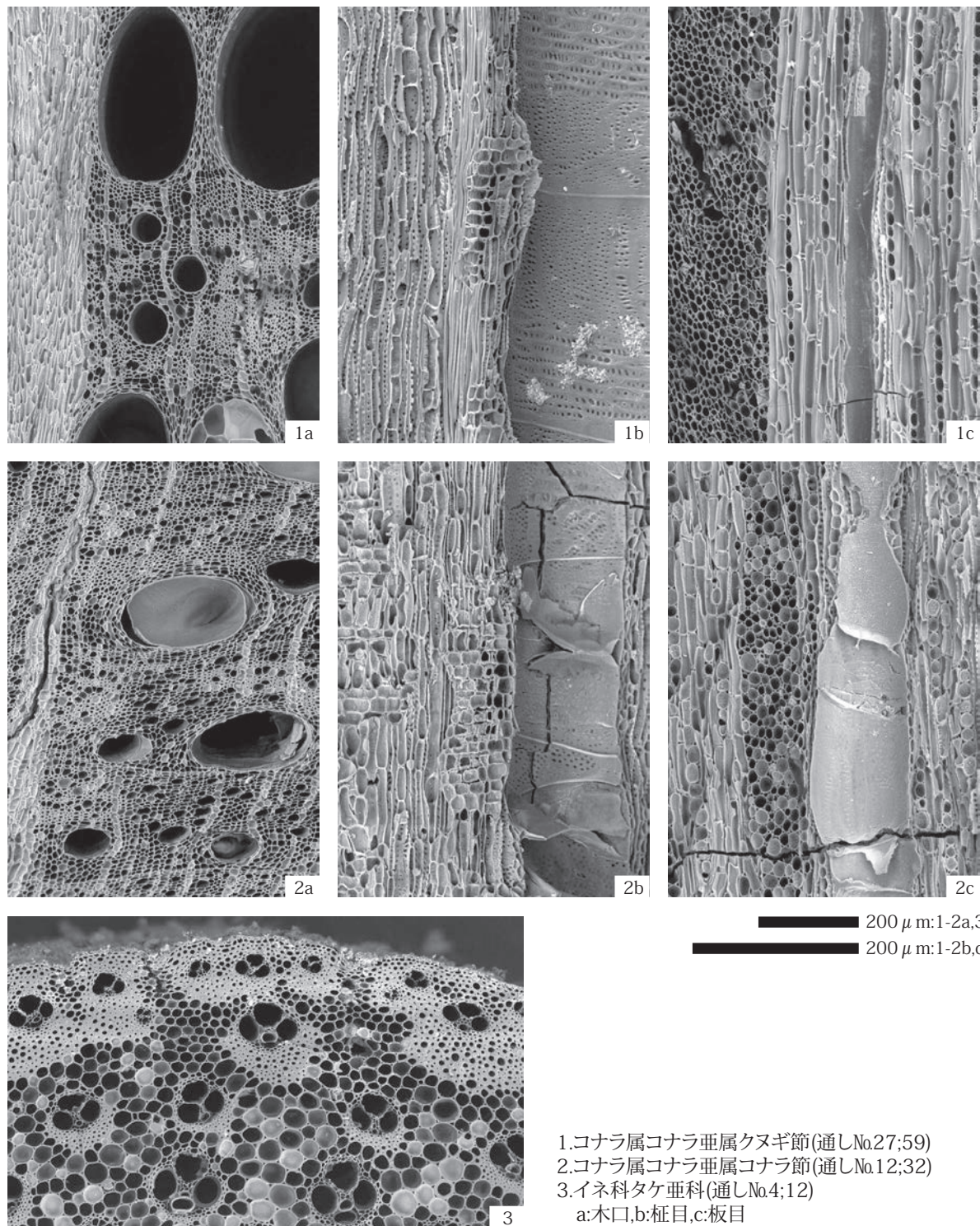


第323図 3区7号竪穴住居炭化材分布状態図

第23表 3区7号竪穴住居出土炭化材樹種同定結果

通し No.	調査区	遺構名	取上No.	仮名	形状/木取り	直径	樹種	備考
						(放射断面幅)		
1	3区	7号住居	6	-	-		イネ科	カヤ材、繊維状
2	3区	7号住居	9		分割材状(柱目)	(約6.5cm)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	(ミカン割状)
3	3区	7号住居	11		分割材状(柱目)	(約3.5cm)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
4	3区	7号住居	12 (周辺)	a	程	径約0.4cm	イネ科タケ亜科	カヤ材
				b	程	径約0.5cm	イネ科タケ亜科	
				c	程	径約0.5cm	イネ科タケ亜科	
				d	芯持丸木	径約0.5cm	広葉樹(当年枝)	
5	3区	7号住居	14		芯持丸木	径約4cm	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
6	3区	7号住居	15		分割材状(板目)	(約3cm)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
7	3区	7号住居	18		芯持丸木	径約3cm	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
8	3区	7号住居	21		芯持丸木	径約5.5cm	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
9	3区	7号住居	23		芯持丸木	径約4cm	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
10	3区	7号住居	26		芯持丸木	径約4.5cm	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
11	3区	7号住居	30		芯持丸木	径約6cm	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
12	3区	7号住居	32		芯持丸木	径約4.5cm	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
13	3区	7号住居	34		分割材状(柱目)	(約4cm)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	(角材状)
14	3区	7号住居	36		芯持丸木	径約6.5×4cm	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
15	3区	7号住居	37		分割材状(柱目)	(約5cm)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
16	3区	7号住居	38		芯持丸木	径約6.5cm	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
17	3区	7号住居	39		分割材状(柱目)	(約4.5cm)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
18	3区	7号住居	40	a	破片	-	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
				b	芯持丸木	径約4cm	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
19	3区	7号住居	41		分割材状(柱目)	(約5cm)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
20	3区	7号住居	42		分割材状(柱目)	(約4.5cm)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
21	3区	7号住居	43		分割材状(柱目)	(約5.5cm)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
22	3区	7号住居	47		分割材状(板目)	(約5cm)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
23	3区	7号住居	48		芯持丸木	径約4cm	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
24	3区	7号住居	49		分割材状(板目)	(約4cm)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
25	3区	7号住居	54		分割材状(柱目)	(約4.5cm)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	(ミカン割状)
26	3区	7号住居	58		芯持丸木	径約5cm	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
27	3区	7号住居	59		分割材状(板目)	(約4.5cm)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
28	3区	7号住居	124		半裁状	径約4.5cm	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
29	3区	7号住居	126		分割材状(柱目) ?	-	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	内部土壌化、辺材部のみ残存
30	3区	7号住居	128		分割材状(柱目)	(約5.5cm)	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	

図版1 炭化材



- 1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節(通しNo.27;59)
  - 2. コナラ属コナラ亜属コナラ節(通しNo.12;32)
  - 3. イネ科タケ亜科(通しNo.4;12)
- a:木口,b:柁目,c:板目

写真11 炭化材顕微鏡写真

## 第6節 出土人骨分析

### 1. 出土人骨について

本遺跡の2区の4基の土坑墓から4体が、また3区の1基の土坑墓から1体の近世人骨が出土したので、以下に報告する。

出土人骨は、ブラシで軽く土砂を落とし、可能な限り接合を行った後で、観察・計測・写真撮影を行った。なお、歯の計測方法は藤田恒太郎の方法に従い(藤田 1949)、歯冠計測値の比較は、現代人は権田和良(権田 1959)を、中近世人骨は松村博文(Matsumura 1995)を引用した。

### 2. 2区出土人骨

2区では、1号土坑墓・2号土坑墓・3号土坑墓・4号土坑墓と、4基から近世人骨が出土している。

#### (1) 1号土坑墓出土人骨

##### ①埋葬形態

本土坑墓は、長軸約107cm・短軸約102cm・深さ約93cmの規模の土坑である(第11図、PL. 8)。底部には、円形の溝が認められたため丸形の木桶に埋葬された可能性が高い。

##### ②副葬品

副葬品は、銭貨が6枚と14枚が癒着した状態で検出されている。しかしながら、錆化しているため、銭種は不明である。六道銭は、通常6点が多く約43%を占めるが、実際には、1点から311点まで変異がある事が知られている(鈴木 1999)。

##### ③人骨の出土部位

出土人骨の残存状態は、群馬県内の近世墓出土人骨と比較するとあまりよくない。頭蓋骨片・遊離歯・四肢骨片が出土している。

##### ④被葬者の個体数

出土遊離歯には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

##### ⑤被葬者の性別

出土遊離歯の歯冠計測値を比較すると、比較的大きい計測値も認められるが、全体的に小さいため、被葬者の性別は女性であると推定される。後頭骨の厚さも比較的



写真12 2区1号土坑墓出土人骨[後頭骨]

厚いが、ここでは、上下大白歯の計測値を重視した。

##### ⑥被葬者の死亡年齢

出土遊離歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状に露出する程度のマルティンの2度の状態であるため、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。

##### ⑦古病理

出土遊離歯の内、下顎右犬歯には、歯冠部唇側面が面状に磨耗する異常磨耗が認められた。この理由として、歯ぎしりが考えられる。

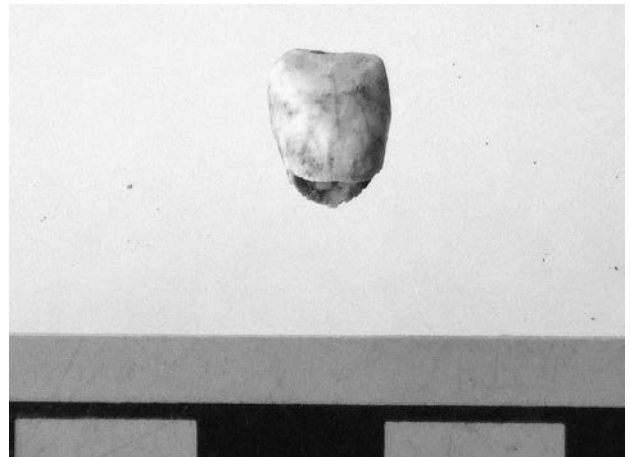


写真13 2区1号土坑墓出土歯[異常磨耗]

#### (2) 2号土坑墓出土人骨

##### ①埋葬形態

本土坑墓は、長軸約74cm・短軸約70cm・深さ約54cmの規模の箱形状土坑である(第12図、PL. 8)。

##### ②副葬品

副葬品は、銭貨が13枚と6枚が癒着した状態で検出されている。しかしながら、錆化しているため、銭種は不

明である。六道銭は、通常6点が多く約43%を占めるが、実際には、1点から311点まで変異がある事が知られている(鈴木 1999)。

③人骨の出土部位

出土人骨の残存状態は、群馬県内の近世墓出土人骨と比較するとあまりよくない。頭蓋骨片・遊離歯・四肢骨片が出土している。

④被葬者の個体数

出土人骨及び出土遊離歯には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑤被葬者の性別

出土遊離歯の歯冠計測値は比較的大きく、四肢骨も太く頑丈であるため、被葬者の性別は男性であると推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

出土遊離歯の咬耗度を観察すると、エナメル質のみのマルティンの1の状態であるため、被葬者の死亡年齢は約20歳代であると推定される。

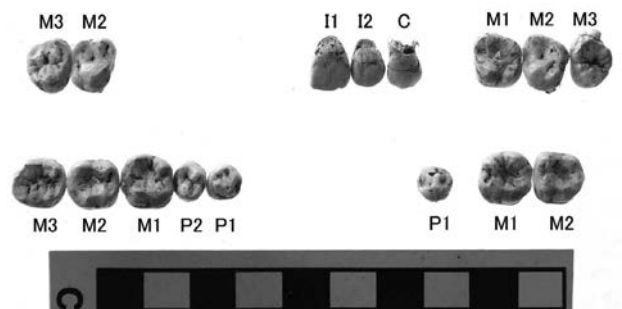


写真14 2区2号土坑墓出土人骨[出土歯]

⑦古病理

・齲蝕(虫歯)：出土遊離歯には、俗に虫歯と呼ばれる齲蝕は認められなかった。

・臼旁結節：上顎左第3大白歯(M3)の近心頬側咬頭の頬側面に臼旁結節が認められた。上顎右第3大白歯(M3)には認められなかった。日本人における臼旁結節の出現率は、第1大白歯(M1)で男性0.06%・女性0.16%、第2大白歯(M2)で男性0.46%・女性0.38%、第3大白歯(M3)で男性1.3%・女性0.72%と報告されており、男性の第3大白歯での出現率が高い事が報告されている(藤田 1949)。

(3)3号土坑墓出土人骨

①埋葬形態

本土坑墓は、長軸約90cm・短軸約84cm・深さ約71cmの規模の円柱状土坑である(第13図、PL. 8・9)。

②副葬品

副葬品は、銭貨が複数癒着した状態で4塊が検出されている。しかしながら、錆化しているため、銭種は不明である。六道銭は、通常6点が多く約43%を占めるが、実際には、1点から311点まで変異がある事が知られている(鈴木 1999)。

③人骨の出土部位

出土人骨の残存状態は、群馬県内の近世墓出土人骨と比較するとあまりよくない。頭蓋骨片・遊離歯・四肢骨片が出土している。

④被葬者の個体数

出土人骨及び出土遊離歯には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑤被葬者の性別

出土遊離歯の歯冠計測値を比較すると、比較的大きいが頭蓋骨片は薄い。しかしながら、この頭蓋骨片の薄さは老齢に関係すると考えられるので、総合的に被葬者の性別は男性であると推定される。

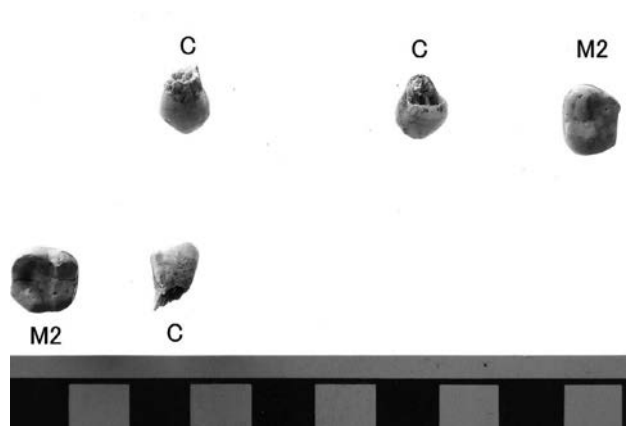


写真15 2区3号土坑墓出土人骨[出土歯]

⑥被葬者の死亡年齢

出土遊離歯の咬耗度を観察すると、象牙質が点状及び面状に露出する程度のマルティン[Martin]の3度の状態である。しかしながら、下顎骨を観察すると生前脱落が多く退縮した状態であるため、総合的に被葬者の死亡年齢は老齢であると推定される。このことは、検出された歯の数が少ないことと矛盾しない。また、歯の生前脱落が多かったために咬合せずに咬耗が進まなかったものと推定される。

⑦古病理

出土遊離歯には、俗に虫歯と呼ばれる齲蝕は認められなかった。

(4) 4号土坑墓出土人骨

①埋葬形態

本土坑墓は、長軸約54cm・短軸約52cm・深さ約28cmの規模の箱形状土坑である(第14・15図、PL. 9)。

②副葬品

副葬品は、銭貨が癒着した状態で検出されている。しかしながら、錆化しているため、銭種は不明である。六道銭は、通常6点が多く約43%を占めるが、実際には、1点から311点まで変異がある事が知られている(鈴木1999)。その他、矢立・煙管が検出されている。

③人骨の出土部位

出土人骨の残存状態は、非常に悪い。わずかに、永久歯と乳歯の遊離歯が出土している。これは、被葬者が子供であり、骨が薄いためであると推定される。群馬県出土中近世人骨の子供の骨の検出事例と同様である。

④被葬者の個体数

出土遊離歯には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑤被葬者の性別

出土遊離歯の内、永久歯の上下左右第1大臼歯(M1)の歯冠計測値は比較的小さいため、被葬者の性別は女性(女児)であると推定される。

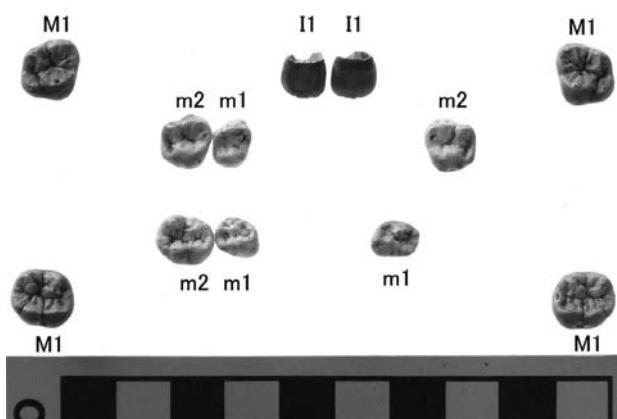


写真16 2区4号土坑墓出土人骨[出土歯]

⑥被葬者の死亡年齢

出土歯は、乳歯と永久歯の混合歯列である。この歯冠及び歯根の発達具合から、被葬者の死亡年齢は約3歳であると推定される。

⑦古病理

出土遊離歯には、俗に虫歯と呼ばれる齲蝕は認められ

なかった。

3. 3区出土人骨

3区では、1号土坑墓の1基から近世人骨が出土している。

(1) 1号土坑墓

①埋葬形態

本土坑墓は、長軸約98cm・短軸約92cm・深さ約77cmの規模の箱形状土坑である(第16・17図、PL. 9)。なお、本土坑からは木片及び釘が検出されており、約45cm前後の木棺に納められていたと推定される。ちなみに、本事例のような方形木棺は俗に座棺と呼ばれており、円形木棺は俗に早桶と呼ばれている(惟村 2004)。

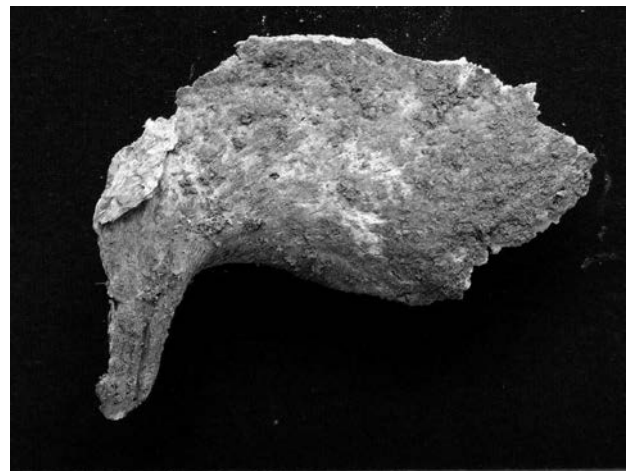


写真17 3区1号土坑墓出土人骨[左寛骨大坐骨切痕部]



写真18 3区1号土坑墓出土人骨[左上下顎骨左側面観]

人骨の出土状況から、被葬者は顔面部を北側に向け、尻を地面につけ両足を立てた状態の座位屈葬で埋葬されたと推定される。しかしながら、時間経過と共に、前のめりに倒れたために検出状況ようになったものと推定される。但し、座棺の正確な大きさが不明であるため、蹲葬と呼ばれる蹲る姿勢であった可能性もある。なお、頭蓋骨の右側が破損しているため、頭蓋骨は左側が下になった状態で検出されたと推定される。このことは、頭蓋骨の保存状態が、左側が右側に比べて良いことから裏付けられる。

②副葬品

銭貨が副葬されていたと考えられるが、出土遺物の錆沈着がひどく、判読不明である。

③人骨の出土部位

頭蓋骨・下顎骨・遊離歯・肩甲骨・脊椎骨・肋骨・胸骨・寛骨・四肢骨片等、全身の骨が出土している。

④被葬者の個体数

出土人骨には重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑤被葬者の性別

出土歯の歯冠計測値は比較的小さく、四肢骨も華奢で

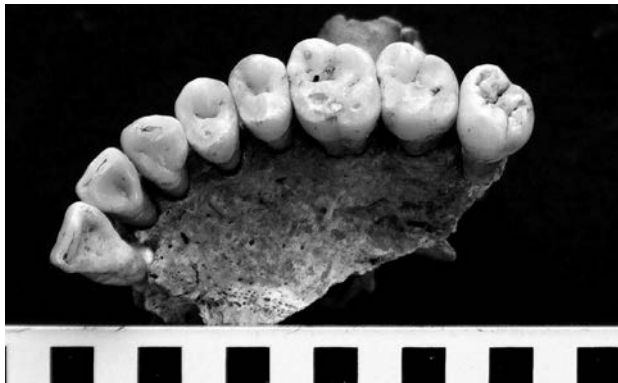


写真19 3区1号土坑墓出土人骨[左上顎歯咬合面観]



写真20 3区1号土坑墓出土人骨[左下顎骨咬合面観]



写真21 3区1号土坑墓出土人骨[前頭骨前頭縫合]

ある。また、寛骨の大坐骨切痕部の角度が鈍角であるため、総合的に被葬者の性別は女性であると推定される。

⑥被葬者の死亡年齢

出土歯の咬耗度を観察すると、切歯では線状に、犬歯・小臼歯・大臼歯は点状に象牙質が露出する程度のマルティンの2度の状態である。したがって、被葬者の死亡年齢は約30歳代であると推定される。

⑦古病理

・歯石

歯石は、一部に認められた。

・齲蝕(虫歯)

俗に虫歯と呼ばれる齲蝕は、認められなかった。

・前頭縫合

前頭骨に前頭縫合が認められた。前頭骨の前頭縫合は、通常生後約2年で癒合して消失するが、稀に、成人になっても癒合しない場合もある。現代日本人では、報告者により異なるが4.8%から7.5%に認められる。また、東日本の場合出現率は男性に多く女性に少ない傾向が認められ、近畿地方では東日本と異なり女性に多く男性に少ない傾向が認められる。近世人骨では、東北大学の百々幸雄によると、東京都江東区深川雲光院遺跡の場合、男性で5.7% [157例中9例]で、女性で2.7% [37例中1例]と報告されている(DoDo 1975)。

4. まとめ

群馬県前橋市の上細井町及び青柳町に所在する山王・柴遺跡群の2区の4基の土坑墓及び3区の1基の土坑墓

から、近世人骨が5体出土した。

以下の第24表に人骨鑑定結果のまとめを、第25表に歯冠計測値及び比較表を示した。

第24表 山王・柴遺跡群出土人骨のまとめ

区	土坑番号	個体数	性別	死亡年齢
2区	1号土坑墓	1個体	女性	約30歳代
	2号土坑墓	1個体	男性	約20歳代
	3号土坑墓	1個体	男性	老齢
	4号土坑墓	1個体	女性(女兒)	約3歳
3区	1号土坑墓	1個体	女性	約30歳代

第25表 山王・柴遺跡群出土人骨歯冠計測値及び比較表

歯種	計測項目	山王・柴遺跡										江戸時代人*		現代人**				
		2区1号土坑墓		2区2号土坑墓		2区3号土坑墓		2区4号土坑墓		3区1号坑墓		Matsumura, 1995		権田, 1959				
		右	左	右	左	右	左	右	左	右	左	♂	♀	♂	♀			
上顎	I1	MD	—	—	—	8.7	—	—	—	—	—	8.0	8.78	8.38	8.67	8.55		
		BL	—	—	—	6.9	—	—	—	—	—	7.7	7.52	7.06	7.35	7.28		
	I2	MD	—	6.7	—	7.5	—	—	—	—	—	7.1	7.16	6.97	7.13	7.05		
		BL	—	6.3	—	6.4	—	—	—	—	—	6.0	6.74	6.33	6.62	6.51		
	C	MD	—	7.7	—	7.4	8.2	8.4	—	—	—	7.3	8.01	7.60	7.94	7.71		
		BL	—	8.2	—	8.1	8.4	8.5	—	—	—	7.7	8.66	8.03	8.52	8.13		
	P1	MD	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6.9	6.8	7.41	7.23	7.38	7.37	
		BL	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9.0	8.8	9.67	9.33	9.59	9.43	
	M1	MD	9.7	—	—	10.7	—	—	10.1	10.2	—	10.0	10.61	10.18	10.68	10.47		
		BL	11.5	—	—	11.4	—	—	11.2	11.3	11.3	11.4	11.87	11.39	11.75	11.40		
	M2	MD	—	—	9.5	9.6	—	9.4	—	—	—	9.1	9.88	9.48	9.91	9.74		
		BL	—	—	12.0	11.7	—	11.8	—	—	—	11.2	12.00	11.52	11.85	11.31		
	M3	MD	—	—	9.8	9.7	—	—	—	—	—	8.9	8.9	—	—	8.94	8.86	
		BL	—	—	11.6	(12.7)	—	—	—	—	—	11.1	10.9	—	—	10.79	10.50	
	下顎	C	MD	6.4	—	—	—	7.7	—	—	—	—	—	7.06	6.69	7.07	6.68	
			BL	7.8	—	—	—	8.4	—	—	—	—	—	8.04	7.39	8.14	7.50	
		P1	MD	7.1	6.9	7.8	7.7	—	—	—	—	—	6.9	6.6	7.32	7.05	7.31	7.19
			BL	8.4	8.4	8.0	7.8	—	—	—	—	—	8.0	8.0	8.34	7.89	8.06	7.77
P2		MD	6.9	6.8	—	7.1	—	—	—	—	—	6.8	6.3	7.45	7.12	7.42	7.29	
		BL	8.4	8.5	—	8.6	—	—	—	—	—	7.8	7.5	8.68	8.30	8.53	8.26	
M1		MD	—	11.2	11.4	11.5	—	—	11.5	11.6	11.4	11.5	11.72	11.14	11.72	11.32		
		BL	—	10.7	11.4	11.5	—	—	10.5	10.4	10.8	11.0	11.15	10.62	10.89	10.55		
M2		MD	10.2	—	11.1	11.2	10.7	—	—	—	—	10.9	10.4	11.39	10.78	11.30	10.89	
		BL	10.1	—	10.7	10.6	10.9	—	—	—	—	10.2	9.8	10.75	10.21	10.53	10.20	
M3		MD	—	—	—	11.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10.96	10.65	
		BL	—	—	—	10.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10.28	10.02	

註1. 計測値の単位は、すべて、「mm」である。  
 註2. I1 (第1切歯)・I2 (第2切歯)・C (犬歯)・P1 (第1小臼歯)・P2 (第2小臼歯)・M1 (第1大臼歯)・M2 (第2大臼歯)・M3 (第3大臼歯)を意味する。  
 註3. 計測項目は、MD (歯冠近遠心径)・BL (歯冠唇舌径)を意味する。  
 註4. 「\*」は、MATSUMURA (1995)より引用。なお、MATSUMURA (1995)には、第3大臼歯のデータは無い。  
 註5. 「\*\*」は、権田(1959)より引用。

## 第7節 黒曜石産地分析

### 1. はじめに

4区73区C-18グリッドで、約2㎡の範囲から石器21点がまとまって出土した。出土層位はローム漸移層上位である。21点中19点が黒曜石製であった。これら黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

### 2. 試料と方法

分析対象は、4区南東部の73区C-18グリッドより集中して出土した黒曜石製石器19点である(第26表)。C-18グ

### 引用文献

藤田恒太郎 1949 歯の計測規準について、「人類学雑誌」、61(1): 27-32  
 藤田恒太郎 1949 『歯の解剖学』、金原出版  
 権田和良 1959 歯の大きさの性差について、「人類学雑誌」、67(3): 151-163  
 惟村忠志 2004 「東叡山寛永寺護国院墓跡の調査と成果」『墓と埋葬と江戸時代』(江戸遺跡研究会編)、吉川弘文館、pp.16-46  
 MATSUMURA, Hirofumi 1995 A microevolutional History of the Japanese people as viewed from dental morphology, National Science Museum Monographs, No.9, National Science Museum  
 鈴木公雄 1999 『出土銭貨の研究』、東京大学出版会  
 DODO, Yukio 1975 Non-Metric Traits in the Japanese Crania of the Edo Period, Bull. Natn. Sci. Mus., Ser. D, (1): 41-54

リッドからは、有尾式・諸磯C式・五領ヶ台式・加曽利E2式と幅広い時期の縄文土器が出土しており、どの時期のものが黒曜石製石器に共伴するかは不明である。試料は、測定前にメラミンフォーム製のスポンジと精製水を用いて、表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム(Rh)、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

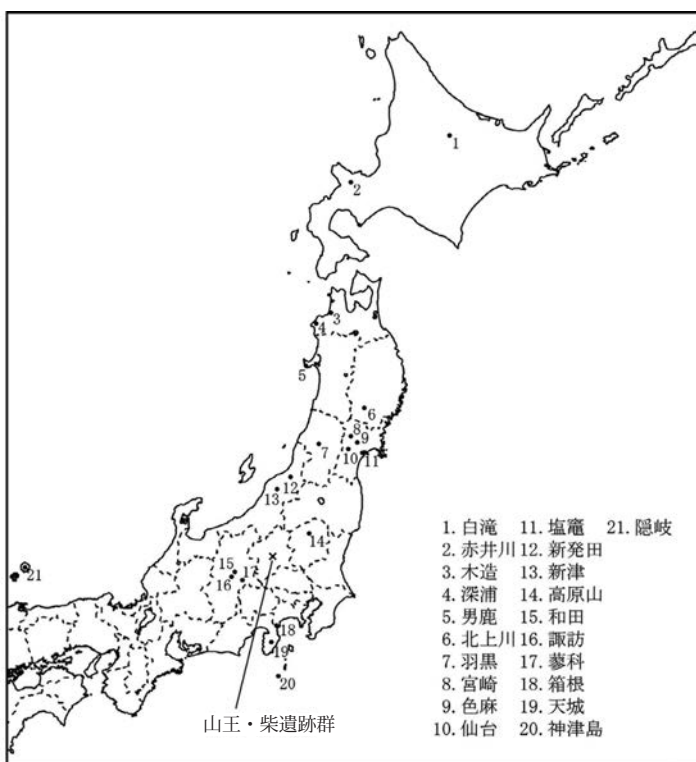
第4章 自然科学分析

第26表 出土黒曜石分析対象

分析番号	区	出土位置	取り上げ番号	種類	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	図番号
1	4	73C18	ソフトローム上14	剥片石器	スクレイパー	4.2	4.0	1.5	19.7	第313図-50
2	4	73C18	ソフトローム上10	剥片石器	スクレイパー	4.4	3.8	1.4	19.7	第314図-66
3	4	73C18	ソフトローム	剥片石器	スクレイパー	4.3	2.3	0.7	6.5	第314図-72
4	4	73C18	ソフトローム上13	剥片石器	スクレイパー	4.7	3.2	1.4	18.2	第313図-51
5	4	73C18	ソフトローム上1	剥片石器	スクレイパー	3.5	3.2	0.9	9.9	第313図-49
6	4	73C18	ソフトローム上4	剥片石器	スクレイパー	4.9	3.9	1.4	20.1	第313図-52
7	4	73C18	ソフトローム上8	剥片石器	二次加工ある剥片	4.3	4.3	1.6	26.7	第314図-71
8	4	73C18	ソフトローム上11	剥片石器	スクレイパー	3.6	3.7	1.2	14.6	第313図-48
9	4	73C18	ソフトローム上15	剥片石器	石核	3.6	3.2	1.1	10.3	第314図-68
10	4	73C18	ソフトローム上7	剥片石器	石核	3.0	3.7	1.8	18.3	第314図-69
11	4	73C18	ソフトローム上18	剥片石器	使用痕ある剥片	4.1	4.1	0.9	10.6	写真22-11
12	4	73C18	ソフトローム上22	剥片石器	二次加工ある剥片	3.8	5.0	1.3	17.1	写真22-12
13	4	73C18	ソフトローム上9	剥片石器	二次加工ある剥片	5.2	3.4	0.9	11.7	写真23-13
14	4	73C18	ソフトローム上17	剥片石器	石核	2.4	4.0	0.9	7.9	写真23-14
15	4	73C18	ソフトローム上21	剥片石器	二次加工ある剥片	2.8	3.1	1.1	5.9	写真23-15
16	4	73C18	ソフトローム上16	剥片石器	剥片	3.3	3.0	1.1	7.8	写真23-16
17	4	73C18	ソフトローム上6	剥片石器	剥片	3.5	3.1	1.3	11.0	写真23-17
18	4	73C18	ソフトローム上5	剥片石器	二次加工ある剥片	3.3	3.3	0.9	8.5	写真23-18
19	4	73C18	ソフトローム上3	剥片石器	剥片	4.0	3.8	1.3	14.6	写真23-19

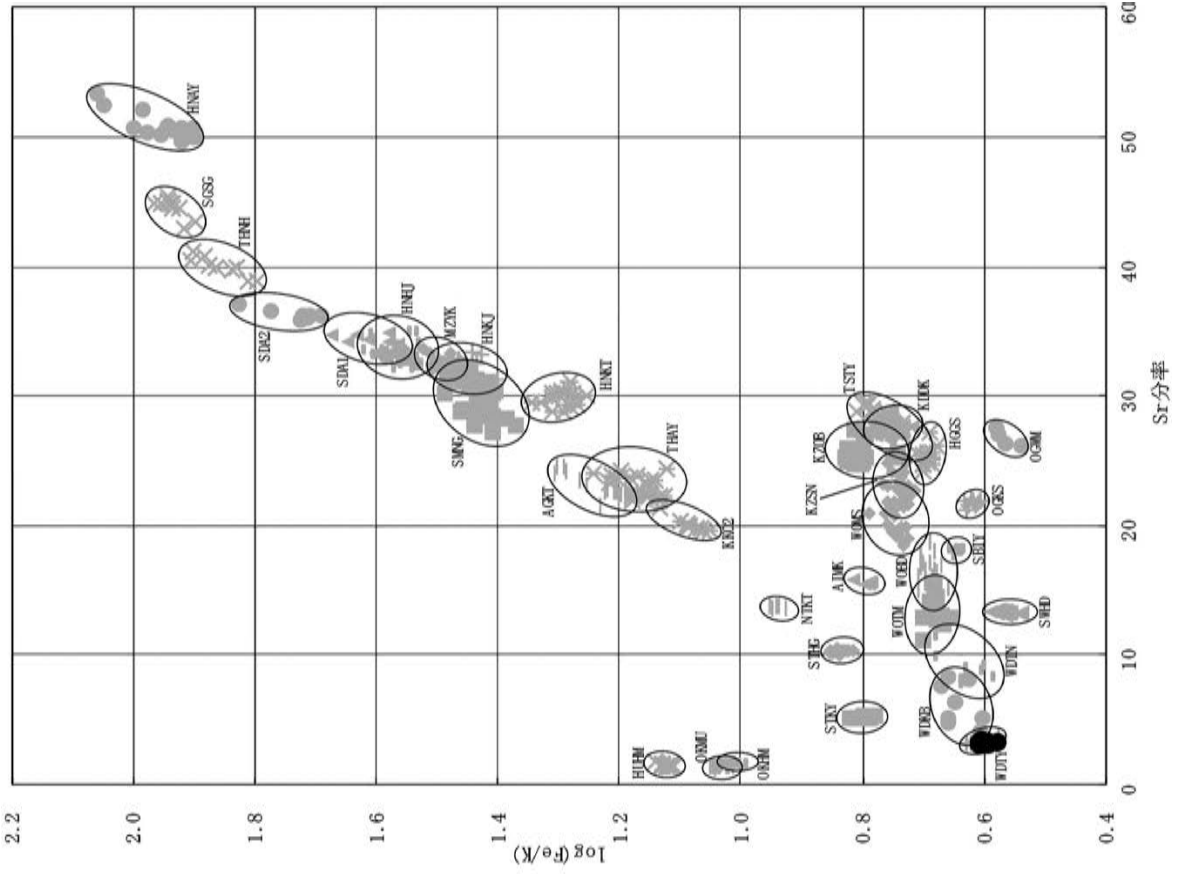
第27表 黒曜石産地(東日本)の判別群名称(望月2004参照)

都道府県	エリア	判別群	記号	原産採取地
北海道	白滝	八号沢群	STHG	赤石山山頂・八号沢露頭・
		黒曜の沢群	STKY	八号沢・黒曜の沢・幌加 林道(36)
青森	赤井川	曲川群	AIMK	曲川・土木川(5)
	木造	出来島群	KDDK	出来島海岸(10)
秋田	深浦	八森山群	HUHM	岡崎浜(7)、八森山公園(8)
	男鹿	金ヶ崎群	OCKS	金ヶ崎温泉(10)
岩手	北上川	脇本群	OCWM	脇本海岸(4)
		北上折居2群	KKO2	水沢市折居(9)
山形	羽黒	月山群	HGGS	月山荘前(10)
宮城	宮崎	湯の倉群	MZYK	湯の倉(40)
	色麻	根岸群	SMNG	根岸(40)
	仙台	秋保1群	SDA1	土蔵(18)
		秋保2群	SDA2	
塩釜	塩竈群	SCSG	塩竈(10)	
新潟	新発田	板山群	SBIY	板山牧場(10)
	新津	金津群	NTKT	金津(7)
栃木	高原山	甘湯沢群	THAY	甘湯沢(22)
		七尋沢群	THNH	七尋沢(3)、宮川(3)、枝 持沢(3)
長野	和田(WD)	鷹山群	WDTY	鷹山(14)、東餅屋(16)
		小深沢群	WDKB	小深沢(8)
		土屋橋西群	WDTN	土屋橋(11)
	和田(WO)	ブドウ沢群	WOBP	ブドウ沢(20)
		牧ヶ沢群	WOMS	牧ヶ沢下(20)
		高松沢群	WOTM	高松沢(19)
	諏訪	星ヶ台群	SWHD	星ヶ台(35)、星ヶ塔(20)
	蓼科	冷山群	TSTY	冷山(20)、麦草峠(20)、 東(20)
神奈川	箱根	芦ノ湯群	HNAY	芦ノ湯(20)
		畑宿群	HNHJ	畑宿(51)
		鍛冶屋群	HNJK	鍛冶屋(20)
静岡	天城	上多賀群	HNKT	上多賀(20)
		柏峠群	AGKT	柏峠(20)
東京	神津島	恩馳島群	KZOB	恩馳島(27)
		砂糠崎群	KZSN	砂糠崎(20)
島根	隠岐	久見群	OKHM	久見パライト中(6)、久 見探掘 現場(5)
		箕浦群	OKMU	箕浦海岸(3)、加茂(4)、 岸浜(3)

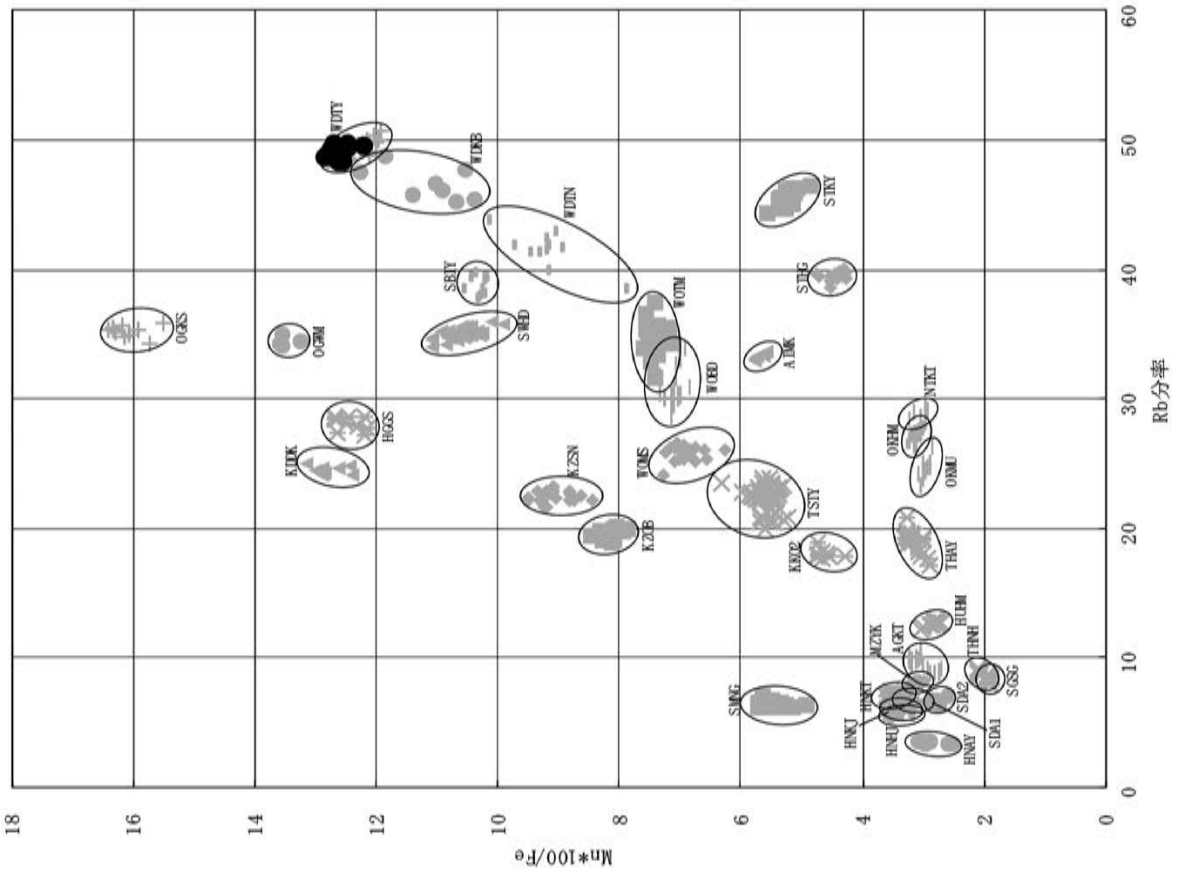


第324図 黒曜石産地分布図(東日本)





第325図 黒曜石産地推定判別図(1)



第326図 黒曜石産地推定判別図(2)

第4章 自然科学分析

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた(望月2004など)。本方法は、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム(K)、マンガン(Mn)、鉄(Fe)、ルビジウム(Rb)、ストロンチウム(Sr)、イットリウム(Y)、ジルコニウム(Zr)の合計7元素のX線強度(cps; count per second)について、以下に示す指標値を計算する。

- 1) Rb分率=Rb強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
- 2) Sr分率=Sr強度×100/(Rb強度+Sr強度+Y強度+Zr強度)
- 3) Mn強度×100/Fe強度
- 4) log (Fe強度/K強度)

そしてこれらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率—縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率—縦軸log (Fe強度/K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する方法である。この判別図法は、原石同士の判別図が重複した場合には分離は不可能となるが、現在のところ、同一エリア内に多少の重複はあっても、エリア同士の重複はほとんどないため、産地エリアの推定に問題はない。また、指標値に蛍光X線のエネルギー差ができる限り小さい元素同士を組み合わせるため、形状や厚みなどの影響を比較的受けにくいという利点があり、非破壊分析を原則とし、形状が不規則で薄い試料も多く存在する考古遺物の測定に対して非常に有効な方

法である。ただし風化試料の場合、log (Fe強度/K強度)の値が減少する(望月1999)。試料の測定面にはなるべくきれいで平坦な面を選んだ。原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。第27表に各原石の産地とそれぞれの試料点数、ならびにこれらのエリアと判別群名を示す。また、第324図に各原石採取地の分布図を示す。

3. 分析結果

第28表に測定値より算出された指標値を、第325・326図に黒曜石原石の判別図に今回の石器19点の結果をプロットした図を示す。なお、図は視覚的にわかりやすくするため、各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、いずれの石器も和田エリア鷹山群WDTYの範囲にプロットされた。第28表に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

4. おわりに

山王・柴遺跡群より出土した縄文時代前期中葉～中期の黒曜石製石器19点について蛍光X線分析による産地推定を行った結果、19点すべてが和田エリア産と推定された。

引用・参考文献

- 望月明彦(1999)上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定. 大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書2 上和田城山遺跡篇一」:172-179, 大和市教育委員会.  
望月明彦(2004)殿山遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定. 上尾市教育委員会編「殿山遺跡 先土器時代石器群の保管・活用のための整理報告書」:272-282, 上尾市教育委員会.

第28表 出土黒曜石測定値および産地推定結果

分析番号	K強度(cps)	Mn強度(cps)	Fe強度(cps)	Rb強度(cps)	Sr強度(cps)	Y強度(cps)	Zr強度(cps)	Rb分率	Mn*100/Fe	Sr分率	Log Fe/K	判別群	エリア	分析番号
1	239.2	118.7	945.1	1181.9	78.4	501.1	650.0	49.01	12.56	3.25	0.60	WDTY	和田	1
2	289.4	143.4	1136.2	1450.6	92.5	611.2	845.6	48.35	12.62	3.08	0.59	WDTY	和田	2
3	208.6	105.0	836.5	1004.3	69.8	426.1	574.3	48.41	12.56	3.37	0.60	WDTY	和田	3
4	309.6	157.3	1235.1	1514.0	96.7	634.1	817.0	49.45	12.73	3.16	0.60	WDTY	和田	4
5	304.5	155.7	1224.7	1468.7	93.2	611.8	803.4	49.33	12.71	3.13	0.60	WDTY	和田	5
6	327.9	164.3	1300.4	1549.1	96.7	643.5	846.3	49.40	12.63	3.08	0.60	WDTY	和田	6
7	251.7	125.3	984.0	1244.8	81.2	523.4	684.7	49.12	12.74	3.20	0.59	WDTY	和田	7
8	256.9	128.4	1014.4	1295.2	86.2	552.8	727.3	48.66	12.66	3.24	0.60	WDTY	和田	8
9	305.6	155.5	1224.8	1473.6	92.2	612.1	787.9	49.69	12.70	3.11	0.60	WDTY	和田	9
10	312.7	157.4	1241.3	1520.0	96.9	635.3	820.3	49.47	12.68	3.15	0.60	WDTY	和田	10
11	306.3	151.9	1212.0	1482.2	94.6	622.9	803.9	49.35	12.53	3.15	0.60	WDTY	和田	11
12	260.9	133.8	1045.0	1318.1	86.3	558.1	730.4	48.95	12.80	3.21	0.60	WDTY	和田	12
13	276.7	134.7	1049.6	1345.8	91.0	568.5	756.7	48.73	12.84	3.29	0.58	WDTY	和田	13
14	317.7	156.3	1279.6	1489.5	95.1	615.4	804.9	49.57	12.22	3.17	0.61	WDTY	和田	14
15	216.0	106.9	844.9	1081.1	73.3	464.0	608.3	48.55	12.66	3.29	0.59	WDTY	和田	15
16	314.8	160.8	1274.2	1515.5	96.7	631.1	855.7	48.90	12.62	3.12	0.61	WDTY	和田	16
17	300.2	149.8	1200.8	1450.0	92.0	601.2	773.3	49.72	12.47	3.15	0.60	WDTY	和田	17
18	300.0	152.0	1220.5	1425.9	90.8	599.2	768.9	49.43	12.45	3.15	0.61	WDTY	和田	18
19	318.0	160.4	1259.5	1585.1	102.8	669.5	877.3	49.00	12.73	3.18	0.60	WDTY	和田	19

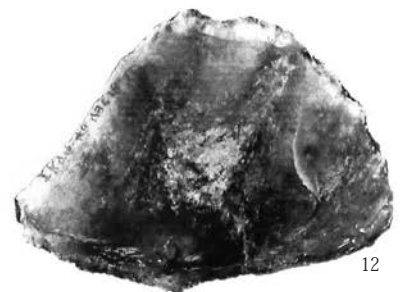
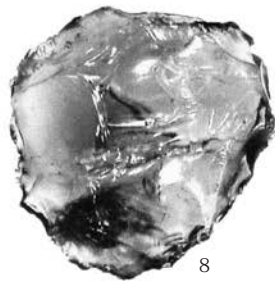
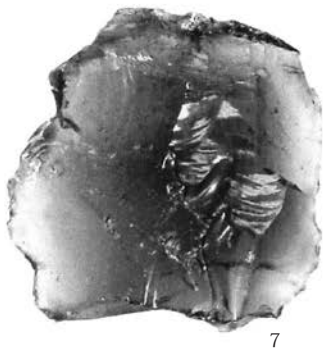
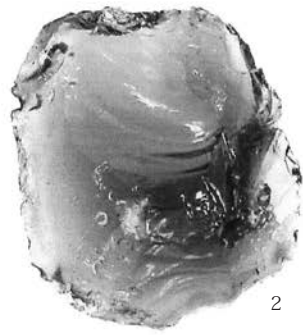


写真22 黒曜石産地分析資料(1)

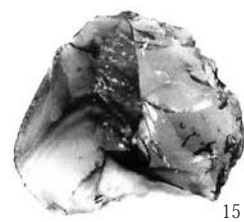


写真23 黒曜石産地分析資料(2)

## 第5章 成果と課題

### 第1節 赤城白川と縄文期洪水

本遺跡では、旧赤城白川の河道跡が数ヶ所で確認されている。第3章第2節「7埋没谷と谷水田」で取り上げた埋没谷としたものがそれである。河道跡は少なくとも2カ所で確認されているが、等高線図から見る限り、これ以外にも旧河道の痕跡が残されており、激しく乱流する川の様子が見て取れる。これまでも河川改修等に伴う発掘調査で多量の木製品が出土して低地部調査の重要性が認識され、また、河川資源としての内水面漁労や石材獲得の場として注目されてきたが、予想以上に調査例は少ないようである。また、農業用水確保という面でも重要であり、それがどのように利用されたのかを明らかにすることの意義・重要性については、敢えて指摘することもないであろう。

こうしたことは別に、洪水で埋もれた河道の場合、気候・環境的側面が問題となるはずであるが、考古学的事象とはさまざまな点でスケールが異なり、その重要性が認識されているにもかかわらず具体性に欠けている。そうしたなかでまずできることは、河道が埋もれた時期を明らかにすべきだろう。群馬県下ではHr-FA・Hr-FP泥流や818年の地震災害後に発生した泥流災害など、その発生時期・被災範囲を特定することにより、被災後どのように集落や田畠が復旧されたのか、災害復旧史的な観点から具体的検討がなされている。いずれも、古墳時代以降の農耕社会が体験した災害である。これに似た災害が縄文時代にもあり、そのひとつとして筆者は神沢川流域の洪水堆積(喜多町遺跡、当事業団報告書第519集)を取り上げたことがある。通常、洪水の発生時期は特定するのは難しく、たとえば中期以前などとして大枠で示さざるを得ないが、型式レベルでその堆積時期が明らかにされた例がある。本遺跡と同じ上武道路関連の飯土井二本松遺跡(事業団第113集、註1)の発掘調査がそれであり、間層を挟んで堆積した上下2層の洪水層の上下からそれぞれ土器が出土、これによりその堆積時期を型式レベルで把握することができたというものである。通常、

洪水堆積の時期は年代測定等によるのであるが、二本松の例は考古学的に年代を押えることができた稀有な例である。こうした成果は、同じ流域の遺跡調査に反映することができ、遺跡の継続性を評価する際の指標となるばかりか、極めてローカルな現象だが、当時の気候とも連動する可能性さえあるというのが筆者の見解である。赤城白川流域に見られた河川氾濫についてその堆積時期を明らかにしていきたいと思う。

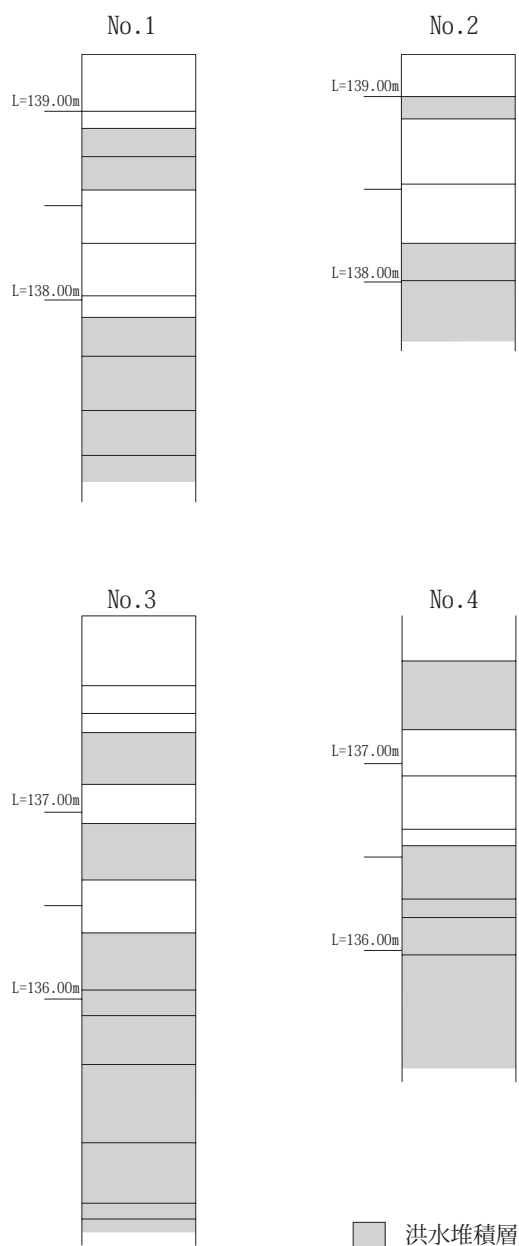
#### 1. 扇状地の概要

赤城山南麓には、形成期の異なる火山麓扇状地が複数存在することが明らかにされている。本遺跡が立地する赤城白川扇状地は赤城山南西麓にあり、富士見町大河原付近(標高580m)を扇頂部として旧利根川の形成した崖線まで広がる比較的規模の大きな扇状地である。扇状地の東を藤沢川が、西を細ヶ沢川が流れ、それぞれ異なる火山麓扇状地面に接している。扇状地は新旧2面の扇状地面に区分され、古期扇状地が更新世に、新期扇状地が完新世に形成されたとされる(群馬県史1992)。

上武道路は扇状地の末端を横断するように走り、この間15遺跡が発掘されている。扇状地には、繰り返し山側から土砂が供給されたようで、遺跡毎に見た土層の堆積状態は微妙に異なることが判明している(註2)。扇状地内を刻む小河川の流路や谷水田からみて、扇状地内には扇状を呈する小規模な扇状地地形が複合している様子が見て取れ、旧河道が激しく流路を変え、断続的・累積的に扇状地を形成したことを示している。具体例としては堤遺跡で確認されている縄文期土石流(撚糸文以前)や、東田之口遺跡の粘土採掘坑の断面で見られた土石流(As-YP降下後、註3)があり、完新世初期の河道の痕跡が印されている。その後、再び河道は西に移り、新期扇状地を形成したというのが、扇状地形成の概略であるといえそうである。現状で新期扇状地は上流側から古期扇状地を開析するように区分されているが、実態は古期扇状地内に残された旧河道の痕跡というべきものに近い。



写真24 河床礫上位の土層堆積



第327図 山王・柴遺跡群 I区基本土層図

## 2. 旧河道の埋没時期

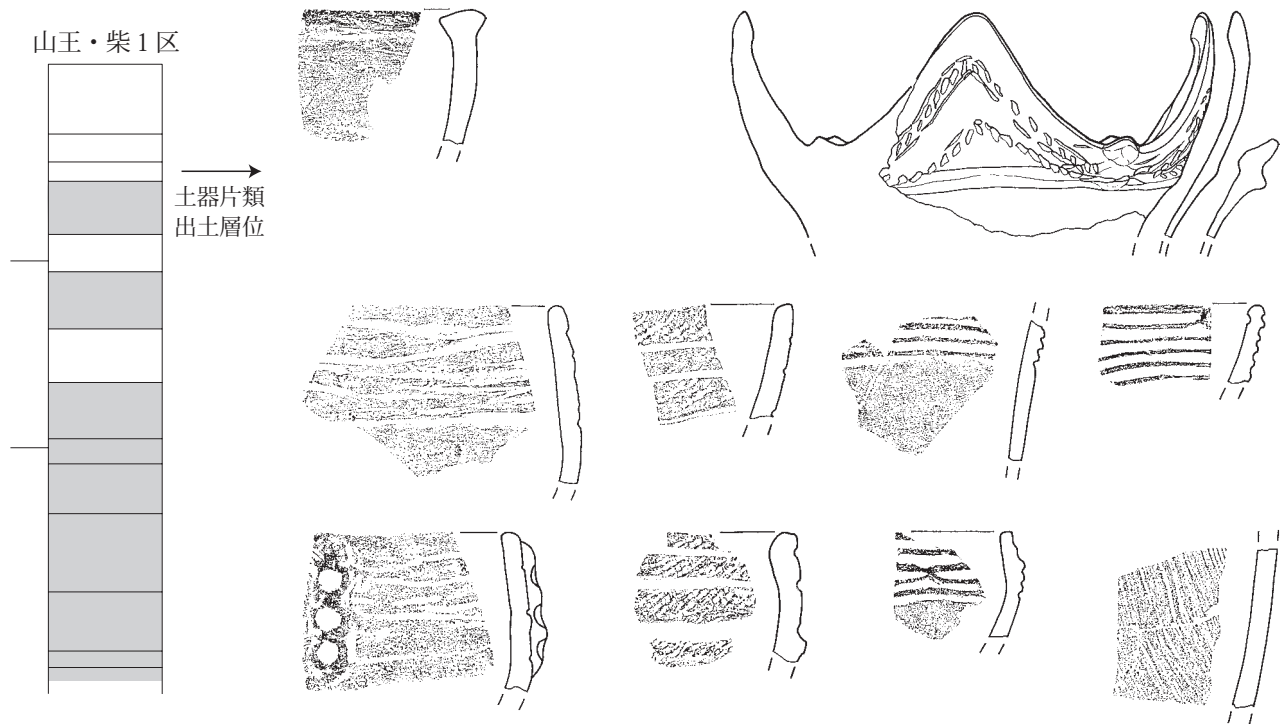
本遺跡と引切塚遺跡・青柳宿上遺跡(当事業団報告書第602集)は、赤城白川を挟んで立地する。両遺跡とも河川の洪水堆積物(砂壤土)が旧河道跡を埋めていたが、河川堆積ということもあり、地点毎に顔つきが違い、その詳細な対比は難しい状況にある。以下、遺跡毎に河道を埋めた洪水堆積物について述べ、併せて出土した土器からその堆積時期を明らかにしていきたい。

### a. 山王・柴遺跡群

本遺跡の河道跡を埋めた洪水堆積物については、本文中に記載したとおりである。本文中の記載に重なる部分もあるだろうが、手短かに整理しておきたい。

赤城白川の旧河道と見られる埋没谷は、1区南西端と2区南西端にあり、厚く砂壤土で覆われていた。両地点とも浅く窪んだ状態で確認され、これに似た窪地が数カ所で見られた。2区東端の谷水田には、古墳時代以後の洪水堆積物が流れ込んでいたが、3区には及んでいないことが確認されている(註4)。2区南西端埋没谷の堆積状態に示されるように、旧赤城白川の洪水堆積物は同区全域に及んだのであろうが、2区東端の谷水田西側縁辺にロームが顔を見せていることからすると、洪水堆積物がローム台地に乗上げるか浸食するかして、堆積しているかもしれない。これについては具体的に確認されていないため判断は保留せざるを得ないが、現状ではこの埋没谷より西側が主たる縄文期洪水層の堆積範囲ということになるものと考えておきたい。

第327図として、4地点の柱状図を示した。No.1・2が調査区北壁、No.3・4が調査区中央よりやや南に設定したトレンチのそれである。トーンを被せた土層が洪水



第328図 洪水層と出土土器(山王・柴遺跡群)

堆積物と想定されるもので、西側ほど厚く堆積していることが分かる。No.2地点(写真24)では表土下1.2mほどで礫層が確認されているが、他の3地点では2m以上を掘り下げてなおこれが確認されていない。洪水層は途中黒色土を挟んで上下二層がある。この黒色土は70cmと厚く堆積しているが、写真24で見る限り、そのなかほどに砂質土が凝集している部分があり、黒色土中に別の洪水層があるというべきであろう(註5)。他のトレンチではそれが洪水層に由来することが分からないほど斑状に攪拌されているが、洪水層が攪拌され、土壌化されたものと考えた方が他のトレンチの堆積状況(砂質土が斑状に堆積)を巧く説明できるだろうと考えている。上層洪水層はNo.2地点が12cmほど、他の地点では30cmほどであり、いずれにしても古墳時代以降の住居は上層洪水層を掘り抜いている可能性が高く、これにより下層遺物が混在する可能性は否定できないというのが実態である。

冒頭に述べたとおり、洪水堆積物の堆積時期については洪水層の上下から出土する土器が同一型式であることにより決定的となる。それは洪水が瞬間的なイベントであるからで、きわめて単純である。調査所見には、上層洪水層の上から縄文時代中期の土器片類が、洪水層下の黒色土から後期土器片が出土したという記載が残されて

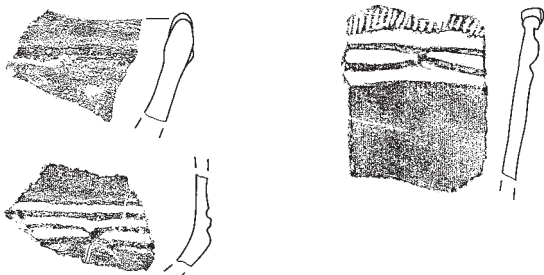
いたが、これが事実であるならば後期以後の洪水堆積ということになる。これについては図面類の記録が判然としないため、これ以上検討することはできないが、写真24で想定された洪水層が確実なら、後期に絡む洪水層ということも考えておくべきかもしれない。

現状で、1区から出土した縄文土器は71点(未掲載38点を含む)がある。うち、46点が後・晩期の土器片であり、中期土器片は9点、前期土器片は1点と少ない。第306図には包含層出土の土器として後・晩期の土器片類が図示されているが、1区南西端の埋没谷(8号溝覆土)から出土したものが多。調査所見に残されているように、下層黒色土中から後期土器片類が出土したことが事実であるならば、むしろそれが洪水層の堆積時期ということになるはずであるが、1区南西端の埋没谷には中期加曾利E1式期の土器片(第328図上段左)が後・晩期土器片とともに出土しており、現状ではこれが河道埋没の下限ということになる。洪水層の堆積時期については判然とせず課題を残した。

- 2区南西端の埋没谷の堆積時期については、
- ①洪水堆積物の上位にAs-Cの混じる黒色土が堆積、As-C降下以前は浅く窪んでいたこと。
  - ②Hr-FA降下の時期には完全埋没していたこと。



写真25 1号河道遺物出土状況(東から)



第329図 洪水層下出土の土器(引切塚遺跡)



写真26 1号河道遺物出土状況(北から)



第330図 洪水層下出土の土器(青柳宿上遺跡)

③埋没谷の上に古墳時代後期の住居が確認されたことが確認されているが、2区南西端の埋没谷は土器片類の出土がなく、その埋没時期は明らかでない。言えるのは1区南西端の埋没谷の埋没状況と同様で、ほぼ同時期に埋もれたという可能性が指摘されるだけである。

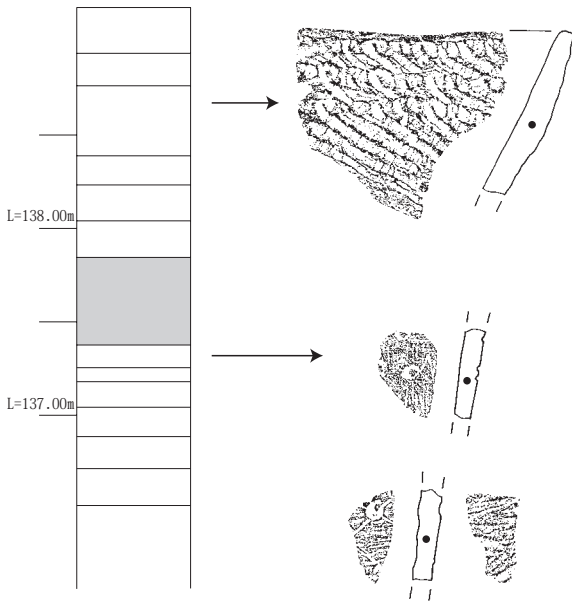
b. 引切塚・青柳宿上遺跡

遺跡地は、通称「米野街道」と呼ばれる県道を挟んで両側にある。県道の東が引切塚遺跡、西が青柳宿上遺跡と呼ばれている。河道跡は引切塚遺跡を分断して青柳宿上遺跡に続く地点と、宿上遺跡の西側にあり、厚く洪水層が堆積していた。河道跡は旧赤城白川によるものであり、南側河道跡は現在とは逆に南西側に蛇行して流れたときのものであり、西側河道跡は広瀬川低地帯に張り出した新期扇状地に連なるものであろう。新期扇状地の形成時期については明らかでないが、縄文時代の後期ではないかという見解が示されている。青柳宿上遺跡の台地にはAs-0k以上のロームが堆積、As-YP下から剥片類数点が出土、台地が古期扇状地上にあることが分かる。そして、黒色土中には洪水層があり、洪水層の下層から縄文時代の早期土器片類(写真27、第331図)が出土したということが報告されている。

<南側河道> 引切塚遺跡では遺跡を分断するように旧河道があり、これが青柳宿上遺跡の南に続く。旧河道の幅は引切塚遺跡側で30m、青柳宿上遺跡側で50mほどである。断面図(報告書の第43図、引切塚遺跡1号河道跡土層堆積)には、縄文早期包含層を覆う洪水堆積物を切る浸食があり、埋没谷を埋める最下層の黒色土から縄文晩期土器片(写真25、第329図)が出土したとされる。同断面図には、古墳時代にも河道浸食を繰り返したことが図示されているが、As-Bは見られないことからその後も激しく変流を繰り返したのであろう。この河道は青柳宿上遺跡でも確認されているが、ここでも晩期土器片(写真26、第330図)が多量に出土したとされる。

青柳宿上遺跡2号河道は、1号河道とは対岸の右岸側にあり、26号住居付近まで確認されている。河道は住居の西にも続いたということだが、東にも延びることが確実で、引切塚遺跡では河道が立ち上がりつつあることが確認されたという。この河道は、河道を埋める洪水層の上に6世紀代の集石(祭祀跡)があり、これにより河道の埋没時期の下限とすることができるが、これは山王・柴





第331図 洪水層と出土土器(青柳宿上遺跡)

遺跡群の埋没谷(1区南西側埋没谷、Hr-FAI降下段階には完全埋没)のそれとほぼ同じ頃となる。

<西側河道> 青柳宿上遺跡の西端にあり、南西から南東に大きく蛇行していた。試掘調査の結果、これより西は遺構がなく、上武道路関連の調査対象地から外されている。河道は河床礫で埋まり、上流域で流された礫が大挙して押し寄せ堆積したものとみられる。群馬県史では赤城白川の本流筋から土砂が供給され、新时期扇状地が形成されたという。その形成時期は縄文時代後期とされ、前橋市の東部を流れる宮川流域で同時期の河川浸食が著しいことからそうした現象が全県的に生じたであろうことが指摘されている。

西側河道の埋没時期については、具体的検討が難しい状況にある。写真27は、調査区北西の縄文時代早期遺物の出土状態を南側からみたものである。北側セクション面には包含層が洪水堆積物で覆われていることが見て取れる。掘削深度が深く段を設けているが、河床礫が早期包含層を覆う洪水堆積物を切り、堆積していることが分かる。調査区西の低地部は新时期扇状地とされたところであり、旧赤城白川の変流で運ばれた河床礫ということになる。報告書の写真図版(PL.65)には97区的全景写真が掲載されているが、低地に近い調査区北西に河床礫が顔を出している。掘削面は古墳時代住居の確認面だが、遺構確認の際に少量だが縄文期の土器片類が出土したということである。報告書には遺構外出土の土器として



写真27 洪水層下、早期土器群の出土状態(青柳宿上遺跡)

6,713点(時期不明の189点を除く)が出土したとあり、土器片類は洪水層の上下から出土したとされる。これが氾濫時期を決める重要な手掛かりとなるが、その詳細は明らかにされていない。ここでは、観察表の出土位置から氾濫時期について考えてみよう。

早期土器片類は5,821点があり、圧倒的多数(86.7%)を占める。その出土層位はⅦ層とされ、洪水層下包含層から出土したことが明らかである。これに対し、洪水層上の包含層から出土した土器片類については層位的記載が少なく、その全貌を把握することは難しい。そうしたなか少量だが表土・Ⅱ層と記載されているものがあり、これによると関山式期の土器が最古の土器となる。住居覆土のものを加えてみても、傾向は変わらない。これに洪水層上位の包含層を切る台地西側洪水層、洪水層下位の縄文早期包含層の関係を加味してみると、

- ① 縄文時代早期包含層の形成
- ② 早期包含層を覆う洪水堆積物の堆積
- ③ 洪水堆積物より上位の包含層形成
- ④ 台地西側の河床礫を伴う洪水堆積物の堆積

の順に整理することができ、②の堆積時期は少なくとも前期関山式期以前であることが分かる。なお、包含層出土遺物として1点(報文中の第63図156、諸磯a式期)のみⅦ層とされたものがあるが、これについては洪水堆積物の上位から関山式期の土器類片が量的に安定出土していることを踏まえるならば、混入した可能性も否定できないだろうと考えている。

c. その他の遺跡

縄文期洪水層は、堤遺跡(事業団第568集)と上細井中島遺跡(事業団第576集)で確認されている。

堤遺跡では、燃糸文土器に先行する時期の土石流堆積物が確認されている。土石流は扇状地東縁を流れる藤沢川より供給されたものと想定され、台地縁辺に厚く堆積していた。土石流は東側台地縁辺に堆積、縄文時代草創期の石槍や石鏃の包含層を切り、土石流直上の黒色土中から燃糸文土器片(井草Ⅱ式期)が出土、これにより、その堆積時期が確定した。報文中の第7図にあるとおり、土石流の下位にはAs-Sr・As-BPがあり、その上位には途中泥流堆積物を挟んでAs-YPがあるなど、泥流が繰り返して堆積したことで扇状地が形成されたことが分かる。

上細井中島遺跡では、上下2層の洪水層(報文中の第20図)が確認されている。観音川右岸低地部は調査対象から除かれているが、洪水層は観音川を伝い供給されたものだろう。下層洪水層(8層)の上層から条痕文土器が、下層から燃糸文土器が出土したとある。報告書土層注は多分に調査所見というべきものであり、報告書には分布図のみ報告されているだけである。整理段階で両者は分離できないとされているが、調査所見が正しいならおそらく条痕文土器と燃糸文土器が重複分布する地点の8層が薄く、層位的に分離できないということだろう。上層洪水層(5・6層)は厚く60cmを超える。土層注にはこれより上層の3層が中期包含層と記されているが、本文中には中期加曾利E式期の土器片類に混在して前期土器片類(関山Ⅱ式期)が出土していることが記されている。

3. 洪水堆積の時期

以上、扇状地内4遺跡で縄文期洪水層の堆積が明らかにされた。洪水堆積物であるため、その対応関係は確定できないであろうが、調査所見を踏まえその堆積時期を整理しておきたい(第332図)。

① 堤遺跡

台地縁辺の洪水層(草創期後半?～早期井草Ⅱ式の間)

② 細井中島遺跡

- ・上位洪水層(早期末条痕文土器～前期関山Ⅱ式の間)
- ・下位洪水層(早期燃糸文土器～早期条痕文土器の間)

③ 山王・柴遺跡群の氾濫層(1区)

堆積時期は不明(旧赤城白川の本流筋に近く繰り返して洪水に襲われた可能性が高い)。完全埋没はHr-FAI降下段階に近い)

④ 引切塚・青柳宿上遺跡

- ・台地上を覆う洪水層(早期条痕文土器～前期関山Ⅱ式の間)
- ・南側河道(縄文晩期～6世紀代、古墳時代に河道の埋没と浸食を繰り返した可能性あり)
- ・西側河道(堆積時期は不明)

上記4遺跡では、洪水層の堆積時期についてある程度まで絞り込めているが、型式レベルで洪水層の堆積時期を絞り込めるデータが得られたとはいいがたい。引切塚や青柳宿上遺跡では洪水層下出土の最新土器型式は早期・鶴ヶ島台式期、上層は関山Ⅱ式期であり、1,000年を超える時間幅がある。神沢川流域の前期後半期～中期前半期の洪水層でさえ約300年の時間幅があり、これにより直接集落の増減傾向を評価するのは現状では難しいのではないだろうか。周辺遺跡の調査では今後こうした

時代/扇状地		赤城白川扇状地	南麓扇状地
縄文時代	草創期	隆線文	引切塚・青柳宿上遺跡 上細井・中島遺跡 飯土井二本松遺跡
		爪形文	
		多縄文	
	早期	前葉	
		中葉	
		後葉	
	前期	前葉	
		中葉	
		後葉	
	中期	前葉	
		中葉	
		後葉	
後期	前葉		
	中葉		
	後葉		
晩期	前葉		
	中葉		
	後葉		
弥生時代			

第332図 赤城山南麓域の洪水層堆積時期

現状を踏まえ、洪水層の堆積時期を明らかにすることが課題になるであろうが、引切塚・青柳宿上遺跡や上細井中島遺跡の洪水層が前期関山Ⅱ式期より前に絞り込まれたこと、引切塚・青柳宿上遺跡および山王・柴遺跡群の河道の完全埋没が6世紀代になるということなどは、単なる偶然として片付けるわけにはいかないであろう。



第333図 山王・柴遺跡群周辺域に見られる旧河道の痕跡

#### 4. 小結

気候変動と縄文集落の増減は、相関関係にあるとされている。これに異論を差し挟む余地がないのは縄文時代が採集経済下にあり、気候変動の影響は不可避だからである。更新世においては気候変動の影響は寒冷化のそれより温暖化の方が大きいとされているが、完新世では逆に寒冷化する際の影響が大きいという。常識的には気候変動が与える影響は気候の変動幅によるのであろうが、いずれにしてもある程度までは環境変化に耐えることができ、集落を維持することができたはずで、その時々集落なり社会なりがそれを維持することのできる限界点というものがあるが、どこか、が問題になるだろう。縄文時代の気候変動が周期的なものであり、これとともに降水量が縄文期集落の増減に関連するという見解が示されているが、どのようにしてこれに環境適応したのか、生業面や集団領域、集団間関係など、あらゆる事象が問題になるであろう。

喜多町遺跡の報告では、こうしたことを念頭に縄文期

洪水層についてその堆積時期と周辺遺跡の在り方を検討したつもりであるが、先にも述べたように、型式レベルでは洪水堆積の時期が絞り込めていないのが現状で、集落の増減など考古学的事象と関連づけるにはまだまだであるように思う。

引切塚・青柳宿上遺跡で洪水層を見た印象は、赤城山南西麓でも神沢川流域(赤城山南麓域)と同時期に河川が氾濫したのではないかと考えたが、南西麓では前期前半(関山式期)に、南麓では前期後半の諸磯式期と中期前半の阿玉台Ib式期に洪水層が堆積したというのが現在の考古学的所見である。同じ赤城山麓にあり、極めて近接した地域であるにもかかわらず、洪水の発生時期が異なるというのでは、洪水と気候変動は連動しないということになりかねない。が、このことから洪水と気候変動は直接関連づけられないとするのも早急に過ぎるだろう。後氷期における環境史の画期について述べた見解(辻1988)に従えば、堤遺跡の土石流が第1の画期(約11,000<sup>14</sup>C BP)、上細井中島や引切塚・青柳宿上遺跡の

洪水層が第2の画期(約8,000<sup>14</sup>C BP)に相当する可能性が指摘されるのであろうが、それが気候の変動によるものか、単なるイベント的なものか(1960年代の黒部川変流など)判断するのは容易ではない。寒暖の変化と降水量の関係についても考慮する必要がある。通常、河道は調査対象にはならないが、河川もヒトを取り巻く環境のひとつ(石材資源・川魚等の食料源・農業用水)として欠かせないものであるなら、これについて積極的に目を向けるべきだろう。

註

1. 飯土井二本松遺跡の洪水層については、同じ神沢川流域に立地する喜多町遺跡(当事業団報告書第519集)の洪水層を評価するなかで取り上げ、下層洪水層を前期諸磯b式期、上層洪水層を中期阿玉台I b式期と捉え報告した。これについて後日検討したところ、下層洪水層の堆積時期については修正する必要がある、以下訂正しておく。

下層洪水層下の黒色土は黒浜式期と諸磯b式期を主体とした包含層であったが、諸磯c式期の土器片1点が含まれていた。①下層包含層を掘り込んでいた63号土坑から出土した諸磯b式期の土器片については下層包含層の土器片が混入したとしても不思議ではないこと、②同土坑については、上層洪水層で完全埋没していたので、洪水層の間層から掘り込まれていることは確実であること、③この間層は旧河道の対岸では中期阿玉台I b式期土器片類の包含層とすることができることが明らかであった。以上を踏まえ、下層洪水層は諸磯c式期から阿玉台I b式期の間に堆積したものと訂正する。

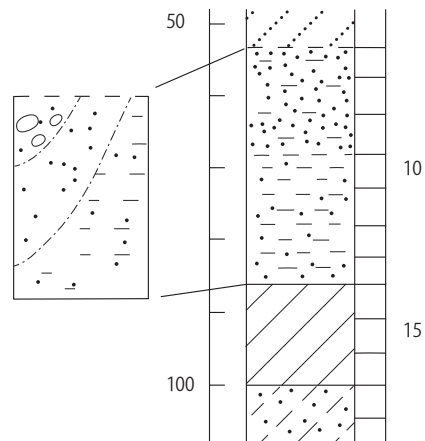
飯土井二本松遺跡A区では旧河道を挟んで、右岸側には土坑2基が確認されたのみである。左岸側には12基があり、旧河道に沿って列状に配置されていた。いずれも下層洪水層の下面で確認されており、左岸側のそれは深さ70cm程度だが壁際で確認されたそれは1.3m前後と深く、最大1.8mと深い。土坑の性格上、その埋没時期を示す出土遺物は少なく、3基のみ確認されただけであるが、いずれも覆土中から出土している。63号土坑出土の土器片(諸磯b式期)は下層包含層遺物の混入、68号土坑の土器片(浅鉢、阿玉台I b式期)・礫片類は土坑を人為的に埋める際に混入したもの、61号土坑の土器片は土坑埋没の最終段階に流れ込んだもので、阿玉台I b式期の深鉢が復元されている。土坑は狩猟用に掘られたもので、掘り直し等を考えてなお土器型式を超えて使用され続けることは考え難い。土坑の構築時期は中期前半期・阿玉台I b式期の枠内で捉えることも可能であろう。

上層洪水層については波志江中野面遺跡(事業団報告書第111集)の包含層出土土器に阿玉台I b式期の土器が含まれることから、現状で変更する必要はないと考えている。

2. 扇状地は山側から繰り返し土砂供給され、累積的に形成されるというのが専門家の見方だが、扇状地内でも「浸食と再堆積を繰り返す」ということや、扇状地内を流れる現河道にも扇状地が累積的に形成されたことを示す単位のようなものがあるという視点から、扇状地内の微地形を理解しようとしたことがある(堤遺跡、2013)。大間々扇状地等では河川が扇状地の両側を流れているが、これを念頭に赤城白川扇状地を流れる小河川の流路を見直したところ、河川が「ハ」字状に開く地点と、逆「ハ」字状になるところがあり、これが扇状地内の新旧を示唆する目安になるのではないかと考えた。扇状地内に立地する各遺跡の基本土層を確認したところ、龍ノ口川より東の遺跡ではAs-BP降下後に土石流があり、ロームが風成堆積するのはAs-0k降下前後であるのに対して、龍ノ口川-赤城白川間ではAs-BP降下後にはロームが風成堆積するようであり、扇状地内の離水時期が異なることが明らかであった。

なお、龍ノ口川の東には鎌倉川が流れ「ハ」字状に開く地形があり、上記想定に従えば最新の扇状地と目される地点だが、龍ノ口川-鎌倉川間の上町・西紺屋谷戸遺跡ではAs-Srより上位のロームが堆積していることが確認されている。同テフラの直下は灰色砂層とされ、このころ離水したものとみられる。

3. 東田之口遺跡は龍ノ口川より東に所在する遺跡で、As-0kとAs-YP間に土石流堆積物が確認されている。このほか、台地東側縁辺の粘土採掘坑付近では間層を挟んで土石流2層(未報告)があり、鎌倉川を東限とする小規模扇状地に似た再堆積地形が形成されたものと見られる。
4. 2区東端の低地部では、水田面3面が想定されている。これらはいわゆるテフラで覆われたものではないが、砂質土に覆われて発見されたものである。この砂質土は赤城白川の運んだ洪水砂と見られ、古墳時代以後も頻りに洪水に見舞われていたことがわかる。冒頭に述べたとおり、赤城白川は相当な「暴れ川」として知られ、典型的な天井川とされている。戦後まもないカスリン台風折には川が溢れ甚大な被害を与えたという。こうしてみると、赤城白川流域の洪水層は台風など瞬間的イベントについても敏感に反映している可能性があるということだろう。
5. 本遺跡のテフラ分析については、第4章第2節に記載がある。それによると、1区南壁東地点とされたところに、K-Ah(アカホヤ火山灰)を含む黒色土の上に、浅い谷が形成されていることが記載されている。この谷は「部分的であり、柱状図には記載していない」(分析者私信)が、本遺跡の洪水層を考えるには欠かせない重要な記載である。分析地点でも少なくとも2層の洪水層があり、洪水層を挟んでテフラが堆積していると報告されている。テフラは3枚があり、成層こそしていないが洪水層の堆積時期を知る目安となっている。これによると、河床礫の上位にAs-Sjがあり、洪水層を挟んでAs-Foが、30cmほど上層にK-Ahがある。K-Ahの上には砂混じりの暗褐色土があり、これより14cm上に浅い谷が形成されたという洪水層(下図参照)がある。ここでは確実な洪水層2層が確認されたことになるが、K-Ah上の砂混じり暗褐色土が洪水起源なら、都合3層の洪水層が確認されたことになる。洪水層は地点ごとにその顔つきを変えるため、1区No.3地点を除く各地点のテフラ分析が行われていない中で断定は難しいというのが現状である。



第334図 1区No.3の土層堆積詳細図(早田原図をトレース)

6. 赤城山南西縁には旧利根川が形成した崖線が続いている。現赤城白川-大堰川間においては、この崖線は新时期扇状地が形成されることにより埋没しているというのが一般的理解である。新时期扇状地は縄文時代の後期に至り形成されたとき、広瀬川低地帯に大きく張り出して広がる。同低地帯の平安期集落は地表下1.3mほどで確認されるといい、厚く土砂に埋もれている。また、桃の木川(旧利根川)左岸の微高地上に立地する前橋市南橋東原遺跡では縄文時代前期・諸磯b式期の土器片が出土していることから分かるとおり、旧利根川が残した微高地と扇状地地形が入り組み、その地形観は複雑である。

引用文献

群馬県埋蔵文化財調査事業団第113集 1991 『飯土井二本松遺跡』  
 群馬県埋蔵文化財調査事業団第281集 2001 『波志江中野面遺跡』  
 群馬県埋蔵文化財調査事業団第519集 2011 『喜多町遺跡』  
 群馬県埋蔵文化財調査事業団第568集 2013 『堤遺跡』  
 群馬県埋蔵文化財調査事業団第576集 2013 『上細井中島遺跡』  
 群馬県埋蔵文化財調査事業団第602集 2015 『引切塚遺跡・青柳宿上遺跡』  
 辻誠一郎 1988 「自然環境」 『季刊考古学』 23

## 第2節 集落変遷

### 1. 竪穴住居の年代について

山王・柴遺跡群で検出された古墳時代前期から平安時代の竪穴住居は、92棟に及んでいる。それぞれの竪穴住居については、出土遺物や埋没土中に堆積しているテフラなどをもとに存続していた時期を比定した。発掘調査の対象範囲が道路建設によるため限定されていることから、集落の広がり是不確定な点がある。ただし、東西については西側を赤城白川、東側を上細井蟬山遺跡との間の小河川に挟まれた200m弱範囲に限定できる。なお、南側については、1区の調査範囲をみると南側で傾斜が急になるためこの付近が集落の限界とみられる。2区は調査区の東西で検出した埋没谷が調査区の南側で合流するとみられ、南側の傾斜が急になることから1区と同様に調査区の南端あたりが集落の限界とみられる。3区、4区については南西に緩傾斜地が続くことから集落が広がる可能性が窺える。

集落が営まれ始めるのは、竪穴住居の埋没土中にAs-Cの堆積が確認できることからAs-Cを噴出した浅間山の噴火以前である。この噴火については竪穴住居から出土している土器の年代観から3世紀後半代に比定されている。この時期に形成された集落は、5世紀前半まで継続され、その後約1世紀は墓域として利用されている。この古墳時代前期から古墳時代中期にかけての約200年間は、2区の東側で検出された谷地の西側に限定されて営まれている。その後、古墳時代後期から飛鳥時代、奈良時代、平安時代前半にかけては、調査範囲内で一時的に竪穴住居が存在しない時期もあるが、10世紀後半代まで少数の竪穴住居が増減しながら継続的に営まれたとみられる。

これら集落を形成した竪穴住居については、前記したように出土土器とテフラから比定している。この根拠について次で提示する。

#### As-Cの堆積について

古墳時代前期から中期に比定した竪穴住居については、埋没土中に確認できたAs-Cの堆積によってそれ以前と以後に区分することが可能である。このAs-Cについても埋没土中の堆積状態に違いが観察できることからここ

で若干の検討を行う。

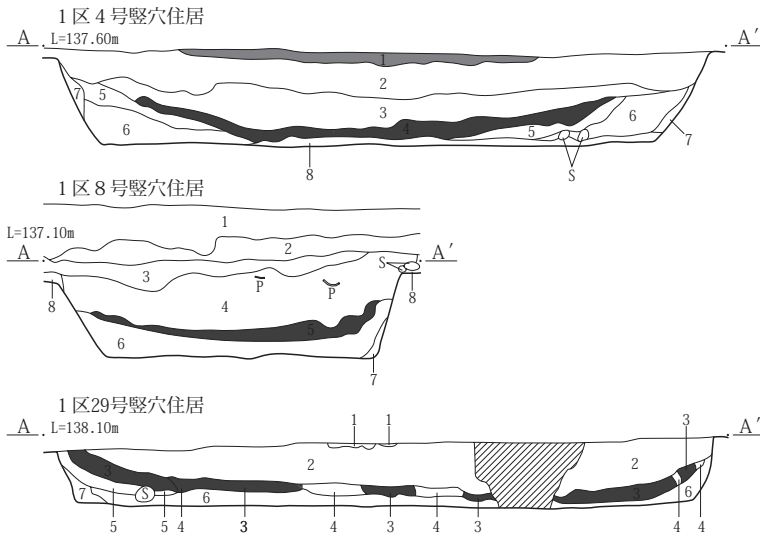
浅間山の噴火で噴出されたAs-Cは、地表面に堆積されたものは後の耕作などの攪拌によって当時の表土中に混入しているが、竪穴住居の埋没土中に堆積したものは上部を攪拌されているとみられるが、大部分は堆積した状態で残存しているとみられる。こうしたAs-Cが埋没土中に堆積している竪穴住居については、存続年代の指標となっている。

As-Cが埋没土中に堆積している竪穴住居は、1区では1号、3号～5号、7号、8号、11号、13号、29号竪穴住居、2区では9号、28号竪穴住居の11棟である。こうした竪穴住居の土層断面畔による埋没状態を観察するとAs-Cの堆積状態は一定ではない。竪穴住居は、人為的な埋め戻しが行われず自然に埋没したのであれば、周囲に周堤帯として積み上げた土砂や降雨時に周囲から流れ込んだ土砂が最初に壁際に三角形状に堆積し、そのうち中央部にレンズ状に堆積することによって埋没したと想定される。山王・柴遺跡群でも確認面から床面までである程度の深さを有している竪穴住居ではこのような埋没状態が観察できる。この埋没過程の中でテフラが堆積したのであれば、テフラは中央部の窪みに堆積する。この時、As-Cは、軽石であることから中央部への流れ込みが多くなり中央部の堆積が厚くなるのが一般的である(これをAパターンと呼称する)。山王・柴遺跡群では、1区4号竪穴住居や7号竪穴住居、29号竪穴住居でAパターンによる一般的な堆積状態が観察できたが、他の竪穴住居では異なる様相が観察できた。異なる堆積状態は、埋没土上位にブロック状に堆積する例(Bパターン)と竪穴住居の壁際に三角堆積に近い状態に堆積している例(Cパターン)である。Bパターンは、1区3号竪穴住居、5号竪穴住居、11号竪穴住居の埋没状態で観察された。これらの竪穴住居のうち1区11号竪穴住居は、畠との重複関係が確認されていることから、本来は1区4号竪穴住居などのAパターンと同様に中央部に堆積したAs-Cが耕作によって攪拌され、一部がブロック状に残存したとみられる。

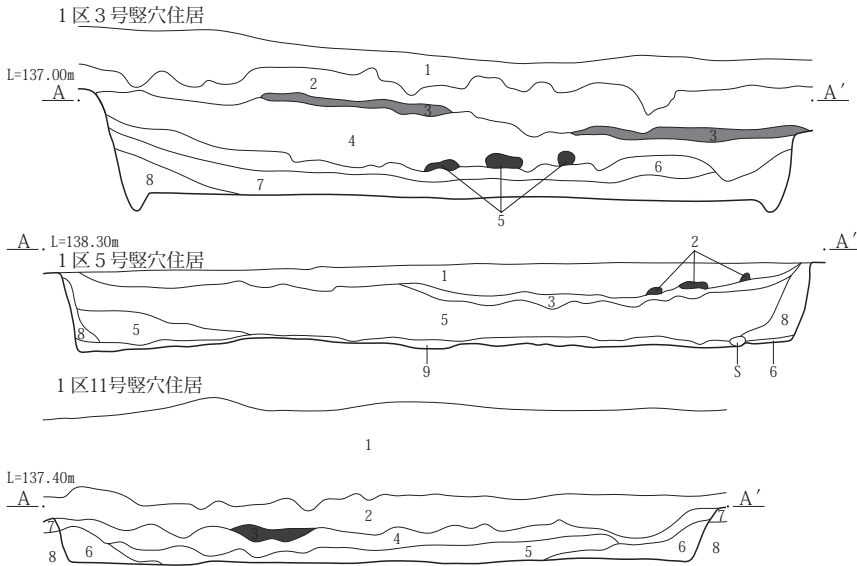
これに対してCパターンの1区1号竪穴住居や8号竪穴住居、13号竪穴住居では、AパターンやBパターンなどの竪穴住居の堆積とは異なり、壁際に三角堆積に近い状態でAs-Cも堆積し、中央部には堆積していない。

As-Cの堆積状態

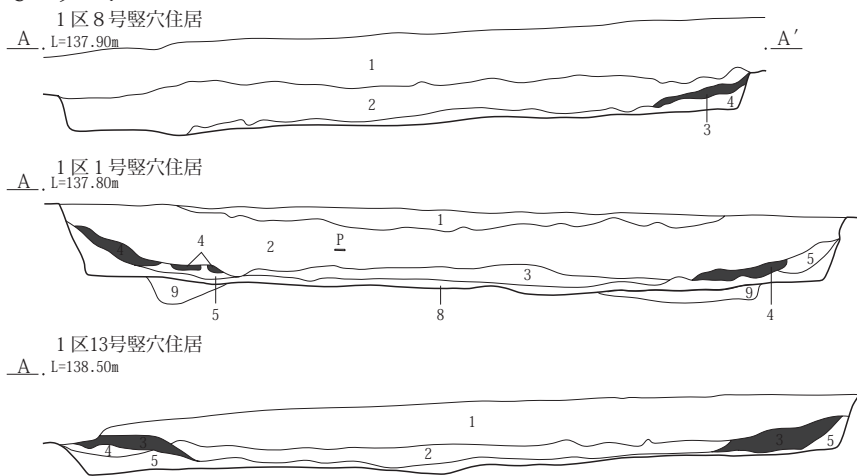
Aパターン



Bパターン



Cパターン



As-C Hr-FA

第335図 As-C堆積状態図

こうした状態は、中央部が耕作によって攪拌されたと想定することもできなくはない。しかし、古墳時代に竪穴住居が廃絶され、埋没していく過程の土地利用の中で、耕地として利用した例をみると多少の傾斜地であってもかまわず耕作している。こうした事例は、Hr-FA及びその後の土石流によって埋没した高崎市下芝五反田遺跡にみることができる。こうしたことからCパターンであっても竪穴住居の中央だけを耕作したとみることは当てはまらない。こうした条件から壁際にAs-Cが堆積している竪穴住居では、中央部にAs-Cの堆積を阻害する要素があったと想像される。今回、この阻害要素については建物の一部が残存していたなどが想定されるが、土層断面では観察できないことから課題としたい。

また、As-Cの堆積状態に複数の状況が観察できることは、埋没土中位にレンズ状にAs-Cが堆積している竪穴住居の方が床面に近い位置の堆積や壁際の三角堆積の竪穴住居より前に廃棄なり放棄されたとみられる。こうした時間差を考慮するならば出土土器にも形態的な変化をみることができると想定した。こうした点を踏まえてそれぞれの竪穴住居から出土した土器をみたが、形態や整形に変化を見出すことができないことからこの段階では土器に大きな変化は生じていないことがわかる。

As-Cの降下年代については、以前A'の研究では4世紀初頭の年代観が与えられていたが、深沢敦仁(1998)によって第2段階、3世紀後半の年代が与えられて以降はこの年代が支持されている。大木紳一郎(2012)は田

口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡から出土した古墳時代前期の土器変遷のなかでAs-Cの降下を田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡第1期とし、その暦年代を堀大介(2006)の論考より援用し、3世紀末頃、もしくは4世紀初頭の可能性が高いとしている。その一方で高崎市貝沢柳町遺跡の方形周溝墓下層のAs-Cの一次堆積層直下からパレススタイル壺が出土しており、この土器は赤塚次郎(2006)によると廻間Ⅱ式、3世紀前半代に位置づけられることからAs-Cの降下年代もこの土器に近い年代となり、前記の年代観と半世紀近い年代差が生じることを問題視し、現段階での明言を行っていない。

### 古墳前期から中期の土器について

山王・柴遺跡群における古墳時代前期から中期の竪穴住居からの出土土器は、あまり出土量も多くなく、器種構成にも偏りがみられる。このため山王・柴遺跡群での形態分類を行っても変遷の基準となる器種が全時期にわたってつなぐことが難しいため周辺遺跡での土器編年を援用して竪穴住居の年代を比定した。周辺遺跡としては、山王・柴遺跡群から北西2.5kmに位置し、集落の変遷に近い動きがみられる田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡で大木紳一郎(2012)によって古墳時代前期の土器変遷を提示している。田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡における古墳前期の土器は、それぞれの特徴をとらえて4期に変遷されている。

1期は、主体を北陸系の壺、鉢、平底甕と東海西部系の単口縁台付甕によって構成されているとしている。さらに1期では、埋没土中にAs-Cの堆積が確認されている。山王・柴遺跡群では埋没土中にAs-Cの堆積が確認できる1区1号、3号～5号、7号、8号、11号、13号、29号竪穴住居、2区では9号、28号竪穴住居の11棟が該当する。

2期は、丸縁となる「く」字状口縁平底甕と脚部が外反して大きく開く高杯や小型器台が主体となり甕の組成にS字状口縁甕が登場するのが大きな特徴としている。

山王・柴遺跡群では、S字状口縁甕がほとんど出土していないが、1区15号竪穴住居から脚部が外反して大きく開く高杯(第233図2)が出土している。この時期には1区15号竪穴住居、1区26号竪穴住居が該当する。この他、1区25号竪穴住居も6号墳墓から出土している器台が田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡2期に該当するとみ

られることから、この期に該当する可能性がある。

3期は、畿内系長脚(布留型)高杯、体部が浅い鉢形の丸底埴の伴出と田口一郎によって提示されたS字状口縁甕の分類による5・6類に特徴づけられ、整形技法では壺や平底甕の胴部下半部を削り上げるものが主流となり、小型器台が激減するとしている。

山王・柴遺跡群では、この期においてもS字状口縁甕がほとんど出土しておらず明確な位置づけはできないが、1区2号竪穴住居から出土している体部が浅い鉢形の丸底埴(第215図1)が出土しているが、この他にも2区28号竪穴住居から同様な埴が出土しているが、共伴する高杯に4期の様相が窺える。この時期には、1区2号竪穴住居が該当する。

4期は、脚柱部の太い高杯、単口縁「く」字屈曲の球胴平底甕が主流になり、新たに「臚」形埴や内斜口縁の半球形鉢が組成に加わる。また、大型甕や大型鉢が出現するのも画期的特徴といえ、整形では磨き手法の減退と削りやナデ仕上がり of 盛行が特徴的とし、S字状口縁甕を含め台付甕が激減するとしている。

山王・柴遺跡群では、2区8号、9号、28号竪穴住居から脚柱部の太い高杯(第241図1・2、第245図1、第249図1・2)、2区9号、23号竪穴住居から「臚」形埴(第246図1、第249図7)が出土している。この時期には、1区6号、2区8号、9号、23号、28号竪穴住居が該当する

暦年代は、田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡での変遷での提示を援用するが、田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡では2期を古段階と新段階に区分している。山王・柴遺跡群では該当する竪穴住居が1区15号竪穴住居と1区26号竪穴住居の2棟だけであることから区分することはできない。

### 古墳時代後期の土器について

古墳時代後期に比定される竪穴住居の出土土器には、土師器杯、高杯、鉢、甕と若干の須恵器がある。集落変遷を検討するうえでは、各竪穴住居から普遍的に出土している土師器杯や甕をもとに形態分類をし、その変化による段階的な変遷を提示によって集落変遷が明らかにできる。山王・柴遺跡群の出土土器をみると土師器杯は、各竪穴住居から出土しているものの、出土した杯では、群馬の平野部で一般的にみられる須恵器杯蓋模倣の形態

と杯身模倣の形態だけでなく北毛地域でみられる内面黒色処理を施した模倣杯形態が出土している。この出土状況については杯蓋模倣杯が主体であるが、1区16号竪穴住居のように内面黒色処理が主体(破片では平野部でみられる杯蓋模倣が出土しているが、図示できるものはない)の竪穴住居が存在する。このような出土形態の偏りは、変遷を考えるうえでの基準となる器種を設定することが難しい。また、もう一つの基準となりえる土師器甕もすべての竪穴住居から出土しておらず、出土状況も小型甕だけであったり長胴形態だけであったりと杯と同様に偏りがみられる。こうしたことから周辺遺跡で同様な時期の集落が検出されている東田之口遺跡で行った土器変遷の成果を援用して各竪穴住居の年代を比定した。

山王・柴遺跡群の竪穴住居出土土器を東田之口遺跡の土器変遷に当てはめると東田之口遺跡1期に2区24号竪穴住居、31号、34号竪穴住居の3棟が比定できる。東田之口遺跡2期には、1区19号・21号・23号竪穴住居、2区26号・29号竪穴住居の5棟が比定できる。東田之口遺跡3期には、1区9号・10号・16号・22号・27号竪穴住居、2区1号・13号～15号・19号・21号・30号・37号・38号・47号竪穴住居、3区5号竪穴住居の16棟が比定できる。東田之口遺跡4期には、1区17号・18号・20号・24号・28号・30号竪穴住居、2区11号・20号・22号・25号・27号・40号・41号竪穴住居の13棟が比定できる。東田之口遺跡5期には、2区3号・4号・35号竪穴住居の3棟が比定できる。

#### 飛鳥・奈良・平安時代の土器について

この時代の土器については、土師器と須恵器が主体で平安時代になると施釉陶器が加わる。土師器や須恵器では、朝廷による中央集権化の影響によって地方色が薄れて斉一化が窺えるとしている。しかし、この斉一化の動きは土師器の杯や須恵器杯・盤、瓶類等供膳具を中心としたもので、土師器の煮沸具などではまだまだ地方色をみることができる。今回、山王・柴遺跡群でも周辺の遺跡と同様な土器変遷をみることができることから、土師器杯や甕の変化を中心に竪穴住居の年代を比定した。

土師器杯では、畿内宮都で古墳時代の須恵器模倣から金属器模倣に変化した杯の影響を受けて古代上野でも比較的器高が高く、底部が丸底で口縁部が内湾する形態(第1段階)と緩い弧状を呈す平底を呈し、口縁部が直線的

に立ち上がる形態のものが導入される。なお、山王・柴遺跡群をみると平底形態の杯をみることはできない。これらの形態は、次第に口縁部の内湾がなくなり、器高も低くなる(第2段階)。そして丸底と平底の2形態が平底になっていく。これとともに整形も口縁部横ナデの幅が広くなり、口縁部横ナデと体部ヘラ削りの間にナデが残り(第3段階)、さらに体部ヘラ削りが省略され、底部のみヘラ削りが施されるようになる(第4段階)。山王・柴遺跡群の土師器杯をみると第1段階から第2段階の形態は、比較的各竪穴住居から出土しているが、第3段階では2区32号竪穴住居1などごく少量になる。なお、第4段階の形態は第3段階のものに比べてやや多くなる。

土師器甕では、古墳時代にカマドでの燃焼を効率的に伝えるためか長胴化が進むが、杯の形態が須恵器模倣から金属器模倣に変化するところになると器高がやや低くなり、頸部が「く」の字状に明瞭な屈曲をもつようになり、胴部上位に膨らみをもつようになる。この甕は、全段階に比べて器壁を薄くなるように縦方向のヘラ削りが施されている。その後、胴部上位の膨らみがやや増し、器壁がより薄くなり、胴部上位のヘラ削りが斜め方向、横位に変化していく。そして山王・柴遺跡群で土師器杯が一時的に減少する段階で甕頸部の「く」の字状が変化し、やや外反する頸部から口縁部に移行するような形態になり、頸部が直線的になり、口縁部に移行し、頸部が直立する「コ」の字状口縁部と呼称される形態になる。その後、頸部がやや内傾するとともに器壁が厚くなり、煮沸具に羽釜が登場する。山王・柴遺跡群の土師器甕もこうした変遷を追うことが可能であり、「コ」の字状口縁部の器壁が厚くなる段階から須恵器工人によるとみられる羽釜が共伴している。

こうした土器の変遷については、今までの土器研究で明らかにされてきており、暦年代も7世紀後半から11世紀前半までの間が四半世紀またはこれに近い期間での変遷をみることが可能である。今回、山王・柴遺跡群では、各段階の土器について提示しないが、今までの研究成果をもとに飛鳥時代から奈良、平安時代の各竪穴住居の年代を比定している。



## 2. 集落変遷について

### 竪穴住居の変遷

山王・柴遺跡群で検出した古墳時代前期から平安時代の竪穴住居については、92棟に及んでいる。それぞれの竪穴住居については、出土土器をもとに存続時期を比定した。これをもとにして竪穴住居の変遷を示したのが第336図～第340図である。集落の範囲については、前記したように北側への広がり予想されることから変遷についても確定するものではない。そのため集落の変遷も確定できないところがあるが、発掘調査の成果によって得られた範囲で記述した。

集落が形成を開始するのは、竪穴住居の埋没土中にAs-Cが堆積している状況から3世紀後半代と想定される。この時期に該当する竪穴住居は、9棟が検出されている。この9棟については、「As-Cの堆積について」や「古墳時代前期から中期の土器について」に記したように堆積状況からすべての竪穴住居が同時に存続していたとは考えられない。しかし、古墳時代前期初頭の3世紀後半代に山王・柴遺跡群での遺構外出土の弥生土器の様相からみて周辺に弥生時代の竪穴住居が存在した可能性を窺うことができないことから、この時期に他の地域からの移住によって集落が形成されたと想定される。

その後の4世紀代では、前半代に1区15号竪穴住居、後半代に1区2号竪穴住居、出土遺物が少ないため区分できないが4世紀代に比定されるものに1区14号竪穴住居・25号竪穴住居がある。調査区内では、集落形成期より竪穴住居の棟数が激減している。なお、3世紀後半から4世紀にかけての竪穴住居は1区にまとまっている。1区は西側を赤城白川、東側を2区西側の埋没谷に挟まれた台地に立地している。この時期の集落としてこの台地上にまとまって形成された可能性が窺える。5世紀前半では、1区6号竪穴住居、2区8号・9号・23号・28号竪穴住居の5棟が比定され、1区だけでなく、東側の2区の台地上に集落が展開する。この2区は、調査区の西側だけでなく東側にも埋没谷が存在し、この谷地ではテフラの堆積が観察できないことや出土遺物がほとんどないことから時期を明確にすることができなかったが水田耕作が営まれていたことがプラント・オパール分析で指摘されている。

その後、5世紀後半から6世紀前半にかけては集落が途絶え、古墳や小石槨が構築される墓域として利用される。この時期の集落は、西側の赤城白川対岸の引切塚遺跡・青柳宿上遺跡、東側の上細井蟬山遺跡でも検出されていない。また、土器変遷で参考にした田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡でも5世紀後半に激減している。この要因として自然災害が想定されているが、山王・柴遺跡群では集落は存在しないが墓域としての利用がなされていることから周辺に集落が存在していたはずである。この集落移転の要因については、調査成果のなかではみることができなかった。

5世紀前半代で集落が移転したこの地域も6世紀後半代に再び竪穴住居が構築され、集落が形成されている。この集落は、古墳時代前期から中期の集落と同様に1区、2区のやや傾斜の急な台地に営まれている。

古墳時代後期6世紀後半代には、1区12号・21号・23号竪穴住居、2区24号・26号・29号・31号・34号・36号竪穴住居の9棟が比定される。このうち、2区24号・31号・34号竪穴住居が先行して営まれていたとみられる。6世紀末から7世紀初頭には、1区9号・16号・22号・27号竪穴住居、2区1号・13号～15号・19号・21号・30号・37号・38号・47号竪穴住居、3区5号竪穴住居の15棟が比定される。7世紀前半代には、1区17号・18号・20号・22号・25号・28号・30号竪穴住居、2区3号・4号・11号・20号・22号・25号・27号・30号・35号・40号・41号・43号竪穴住居の19棟が比定される。このうち、1区17号・18号・20号・24号竪穴住居、2区11号・20号・22号・25号・40号・41号竪穴住居が先行して営まれていたとみられる。

集落の形成は、古墳時代前期から中期の集落と同様に1区と2区にまとまっているが、7世紀を前後する時期に2区東側の谷地を超えた3区に1棟だけ構築されている。この竪穴住居は、特に他の竪穴住居と異なる様相はみられない。

なお、1区では7世紀前半代の竪穴住居を最後に調査区内では集落が営まれておらず、2区でも7世紀前半代でやや傾斜の急な南西部では竪穴住居が構築されなくなる。

飛鳥・奈良・平安時代については、第3章第2節1の前文に記したように年代設定を土器の形態の様相から7

世紀後半以降に設定した。なお、古墳時代後期とは明確な区分を設定できるものではなく重複するように継続している。この時代は、土器の項目で記載したように基本的には四半世紀ごとの年代比定を行っているが、一部の竪穴住居では、区分できないものもあり半世紀単位の区分になっている。また、1区で検出した竪穴住居は、12号竪穴住居や16号竪穴住居が6号墳と10mほどの距離ではあるが、墳墓と一定の間隔を保っており、墓域としての意識を有していたとみられる。

飛鳥時代7世紀後半では、第3四半期に4区2号竪穴住居の1棟が比定され、第4四半期に3区3号竪穴住居、4区3号・5号竪穴住居の3棟が比定される。

8世紀代では第1四半期に2区10号竪穴住居、3区1号・4号・9号・11号竪穴住居の5棟が比定されるが、3区9号竪穴住居は、7世紀第4四半期に構築され、8世紀代まで存続したとみられる。第2四半期では、3区12号竪穴住居、4区7号竪穴住居の2棟が比定される。第3四半期では、比定される竪穴住居がみられない。第4四半期では、2区32号・33号竪穴住居の2棟が比定される。

9世紀では、第1四半期に比定される竪穴住居がみられない。第2四半期では、3区2号、4区4号竪穴住居の2棟が比定される。第3四半期では、2区39号竪穴住居、3区8号竪穴住居、4区1号竪穴住居の3棟が比定される。第4四半期に比定される竪穴住居がみられない。10世紀代では、第1四半期に比定される竪穴住居がみられない。第2四半期では、2区5号・6号竪穴住居の2棟が比定される。第3四半期には、2区18号竪穴住居の1棟が比定される。第4四半期では、3区6号・7号竪穴住居の2棟が比定され、7号竪穴住居は土器の様相から第3四半期に構築されたものが第4四半期まで存続していた可能性が高い。

この時代の竪穴住居は、2区北東部から3区、4区に構築されており、古墳時代前期～中期や後期の竪穴住居の構築とは異なる。地形的にみれば飛鳥時代以降の竪穴住居が構築されているほうが傾斜も緩く集落を営むには適しているとみられるが、一方古墳時代の集落がどのような要因で急傾斜の地形を選んだのが課題に残る。

調査区内の飛鳥時代～平安時代の集落を竪穴住居から見ると8世紀第3四半期、9世紀第1四半期、9世紀第

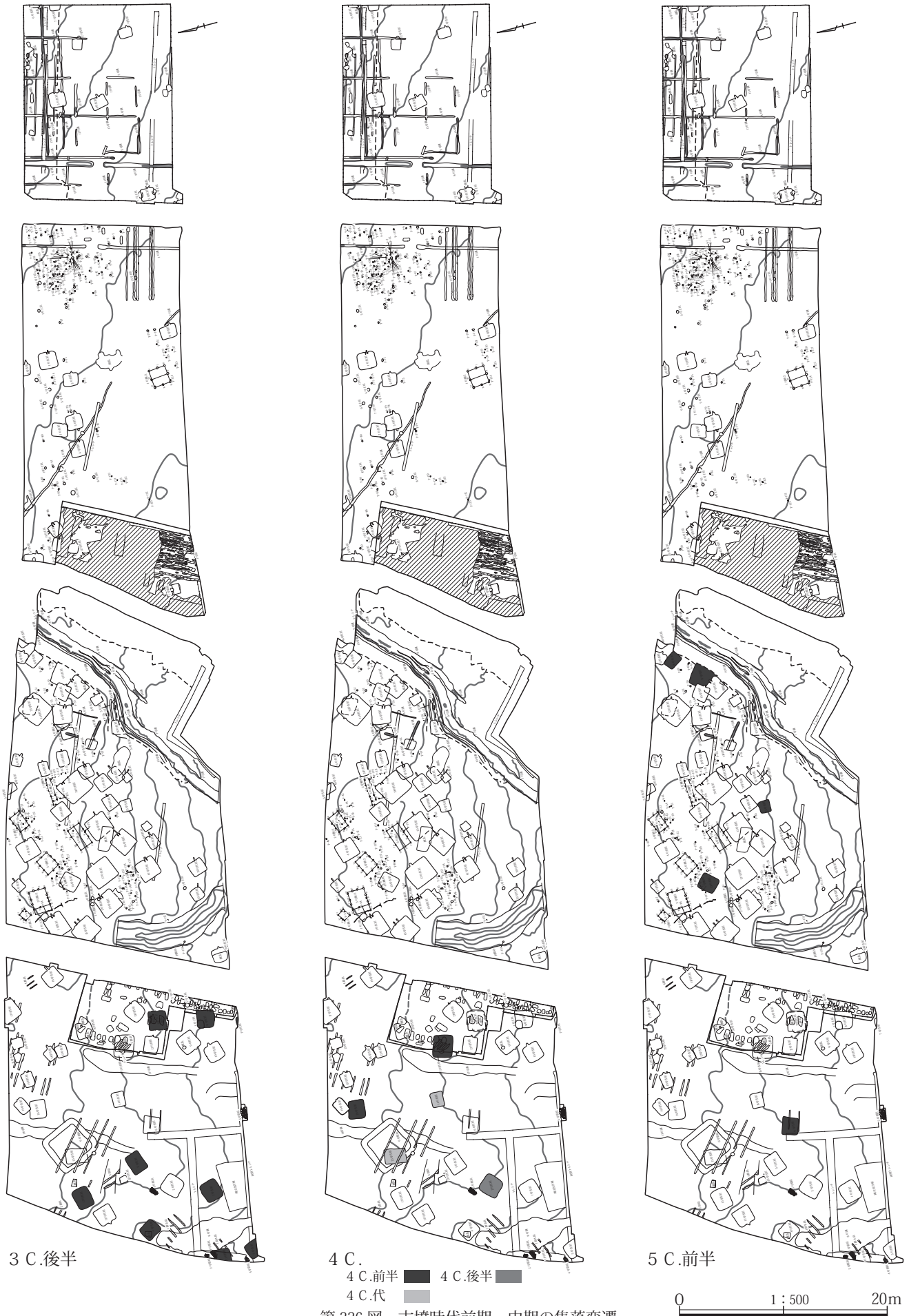
4四半期から10世紀第1四半期にかけての3時期に存在をみることができない。9世紀第1四半期の竪穴住居の減少については、桜岡正信(2013)が赤城南麓の集落を分析する中で、818(弘仁九)年に起きた大地震の時期である9世紀第1四半期にほとんどの集落では構成する竪穴住居の棟数が激減し、第2四半期から再び増加していることから地震による影響としている。地震では建物が倒壊したか否かについては確証を得られないが、地震によって発生した泥流や洪水による耕作地の被害によって集落を放棄した可能性が指摘されている。この他の時期については、その後の竪穴住居が確認されることから調査区外に存続していた可能性も考慮したい。

山王・柴遺跡群での飛鳥時代から平安時代の集落は、古墳時代にある程度の規模をほこっていたものが竪穴住居の棟数を激減させている。その後は、断絶する時期があるが数少ない竪穴住居を維持しながら平安時代後半へと移行していく。

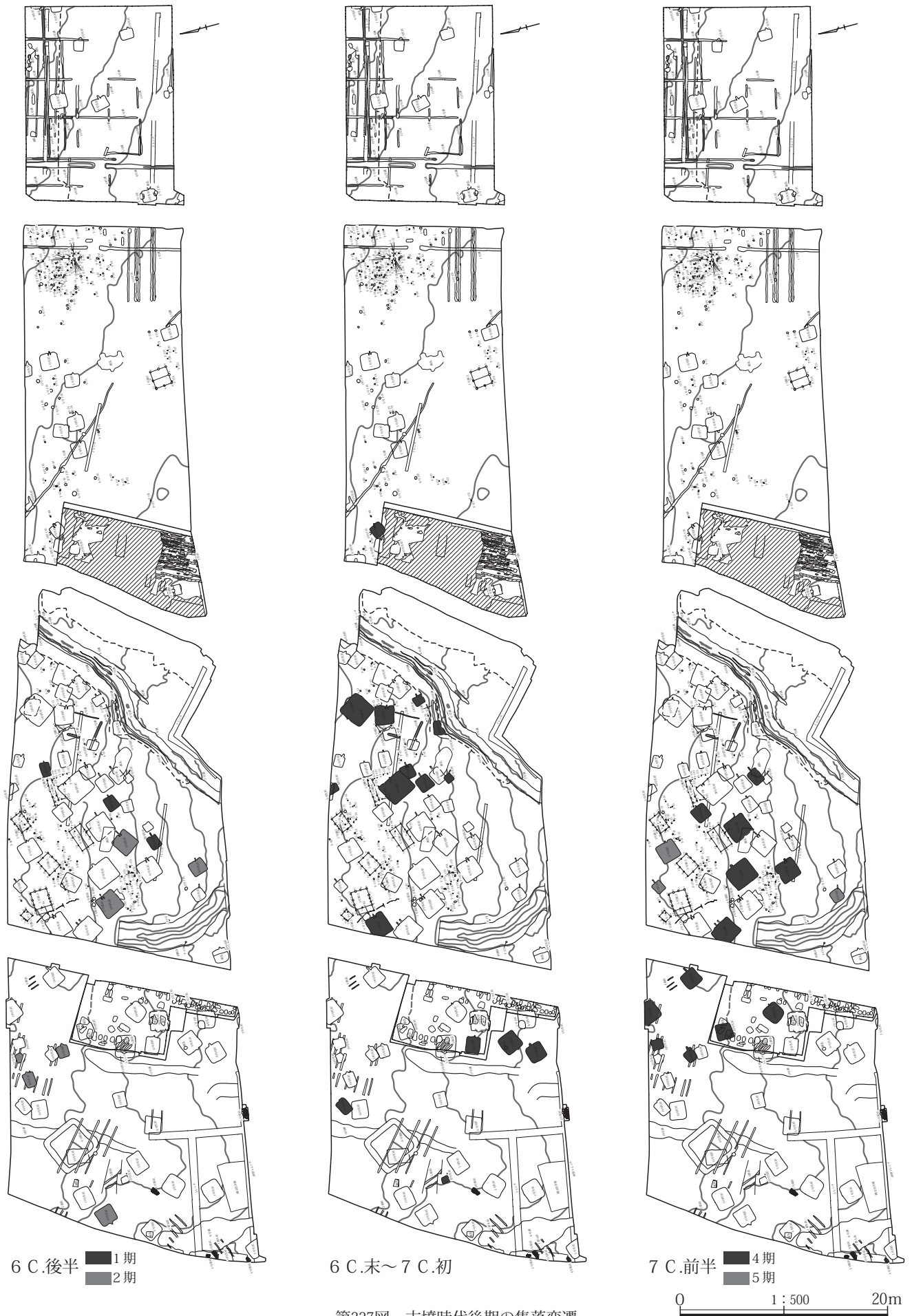
#### 集落遺跡の動向

周辺遺跡を概観し、山王・柴遺跡群の集落と対比してみると古墳時代前期に集落が形成される遺跡としては、前述のように田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡が存在している。この他に芳賀東部団地遺跡でも前期から集落が形成されている。なお、前時代の弥生時代の集落は、小神明倉本遺跡や小神明湯気遺跡で竪穴住居1棟から2棟の小規模なものしか見つかっていない。そのため古墳前期の集落は、この赤城南麓の開発を目的に外的要素によって集落が形成されたと考えられる。これらの集落は、田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡が5世紀後半、芳賀東部団地遺跡が5世紀前半と山王・柴遺跡群と同様な時期で一次途絶えてしまう。そうした中で、上武道路に伴って発掘調査が行われた芳賀東部団地遺跡では5世紀後半から6世紀初頭にかけての竪穴住居が9棟検出されている。さらに芳賀西部団地遺跡では、山王・柴遺跡群の墳墓と同様な時期である5世紀後半から6世紀初頭の古墳群が検出され、31基の古墳が調査されている。こうした古墳群の存在は、芳賀西部団地遺跡の周辺で5世紀後半から6世紀前半の規模の大きな集落が存在する可能性が高いとみられる。

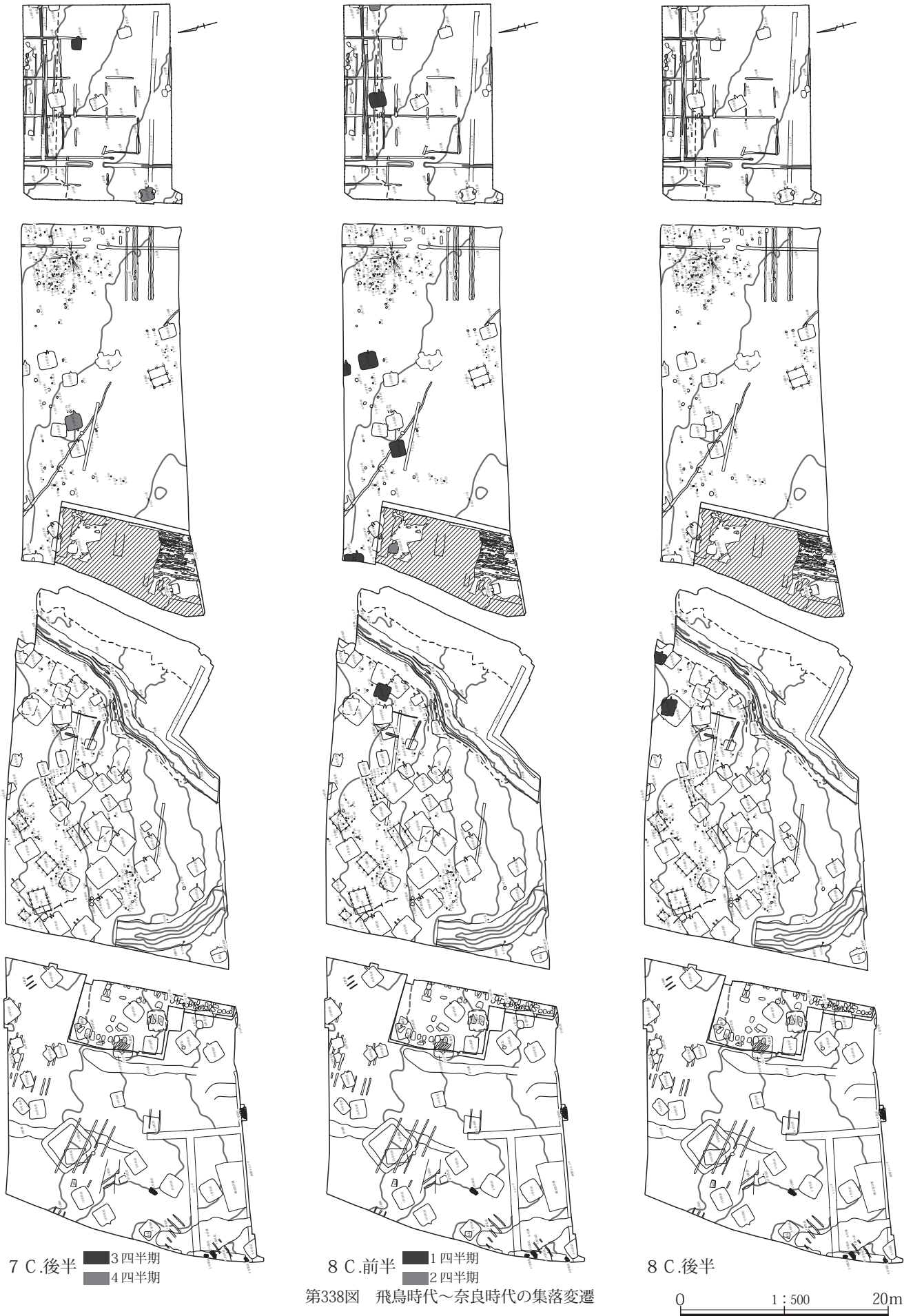
その後、古墳時代後期6世紀後半代では、赤城白川の対岸に位置する引切塚遺跡・青柳宿上遺跡でも集落が形



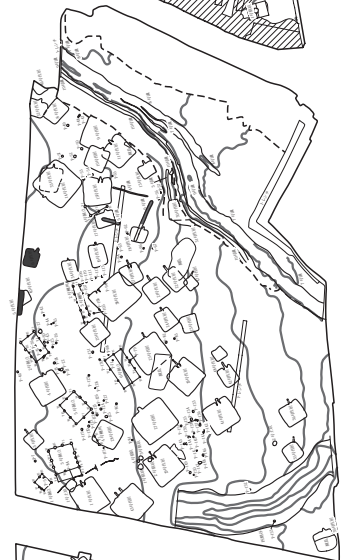
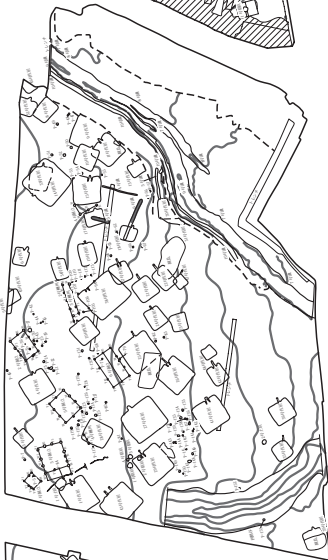
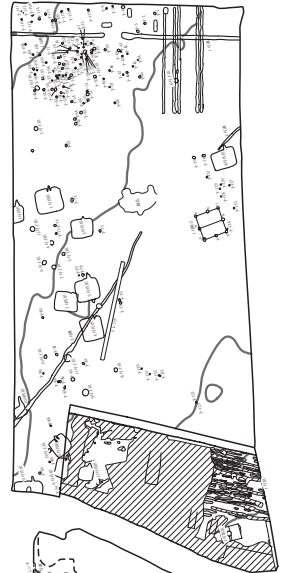
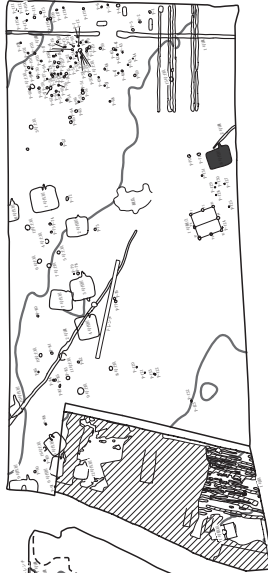
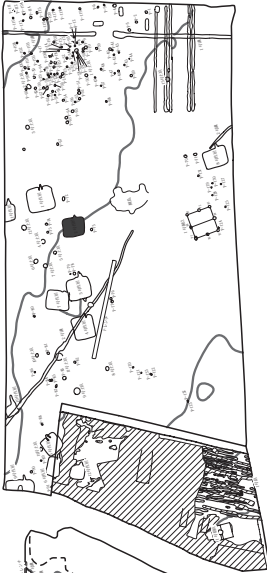
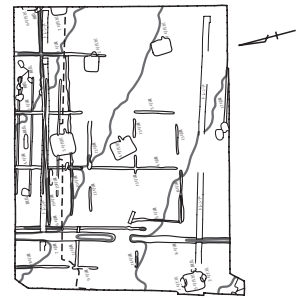
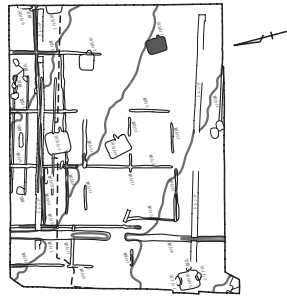
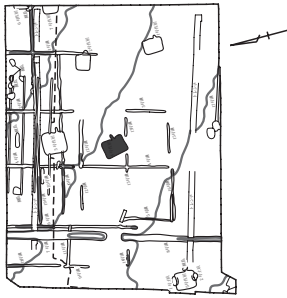
第336図 古墳時代前期～中期の集落変遷



第337図 古墳時代後期の集落変遷



第338図 飛鳥時代～奈良時代の集落変遷



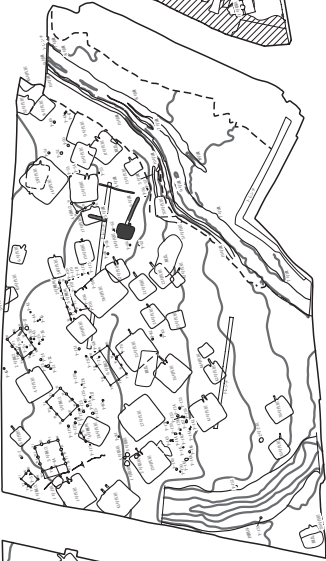
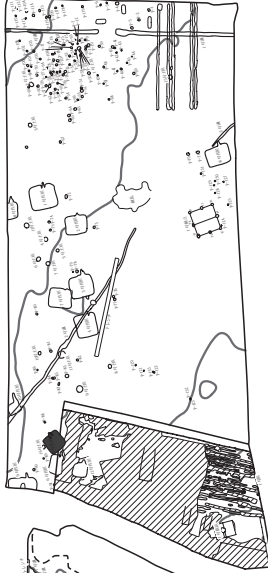
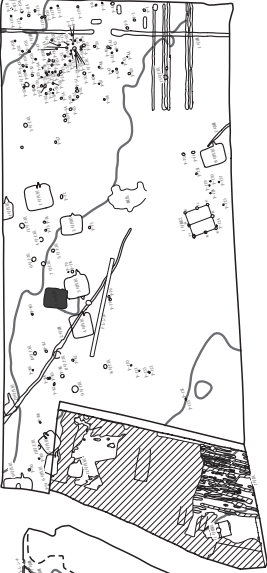
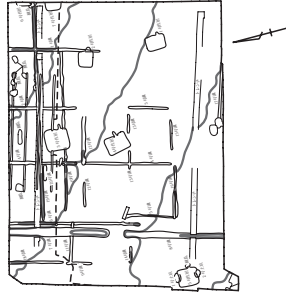
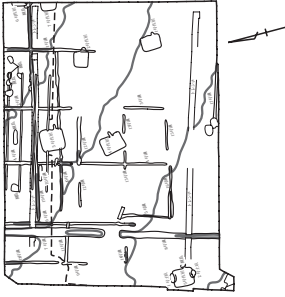
9 C. II

9 C. III

10 C. II

第339図 平安時代の集落変遷(1)

0 1:500 20m



10C.III

10C.IV

第340図 平安時代の集落変遷(2)

0 1:500 20m

成されるが、この集落も半世紀と短期間で消滅している。この時期に形成される規模の大きな集落としては、東田之口遺跡が存在する。この集落では、約9m四方と大規模な竪穴住居が2mの間隔で並列して構築されている。この竪穴住居の廃絶時期はともに7世紀前半代であるが、規模からすると同時に併存した可能性は低い。また、東田之口遺跡では、7～8m四方の規模をもつ大型竪穴住居が複数検出され、竪穴住居の規模をみるとこの地域でも特異な集落といえるが、この集落も7世紀末にはほとんどの竪穴住居が廃絶し、8世紀以降に継続していない。東田之口遺跡のような7世紀代に存続集落は、7世紀後半の中央集権化のなかで評・里として編成され、国家によって管理されていく集落とみられる。こうした状況から、この時期に廃絶する集落はほとんど見ることができない状況であり赤城南麓では評・里の編成にあたって移住政策などの人為的要因による集落の編成を考慮する必要があると思われる。

山王・柴遺跡群では、飛鳥時代以降は小規模な集落として継続されるが、東側の上細井蟬山遺跡でも同様な様相がみられる。これに対して西に位置する関根細ケ沢遺跡や田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡は、7世紀後半から集落が形成し始め、8世紀から9世紀前半代は山王・柴遺跡群とあまり変わらない様相を見せているが、9世紀後半以降は集落規模が大規模化している。こうした状況は、7世紀後半から8世紀にかけての律令制が比較的厳正に適用されている期間には田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡でも所属する郷の一集落として農耕に従事していたとみられる。その後、9世紀以降の律令制崩壊に伴って地域の富豪層による開発などで労働力の集約が行われた結果が大規模集落と小規模集落を形成させたと考えられる。

山王・柴遺跡群では、新たな開発が行われず、旧来の耕地を維持しているため集落の規模拡大が図られることなく推移したとみられる。

参考・引用文献

- 赤塚次郎2006年「東海系土器と東日本の墳丘墓」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化センター
- 大木紳一郎2012年「田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡出土の古墳時代前期の土器について」『田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 深沢敦仁1998年「上野における土器の交流と画期」『庄内式土器研究XVI—庄内式併行期の土器生産とその動き—「北関東を中心とした庄内式併行期の土器の移動」』庄内式土器研究会
- 堀 大介2006年「越前・加賀地域」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター
- 神谷佳明「出土土器について」『東田之口遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 桜岡正信2012年「古墳時代前期～平安時代の集落について」『田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 桜岡正信2013年「弘仁の大地震・赤城南麓の地震被害」『自然災害と考古学—災害・復興をぐんまの遺跡から探る—』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1998年『下芝五反田遺跡—古墳時代編—』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2011年『東田之口遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2012年『田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2013年『芳賀東部団地遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2013年『上細井蟬山遺跡』
- 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2015年『新田上遺跡』
- 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2015年『引切塚遺跡・青柳宿上遺跡』
- 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団2015年『関根細ケ沢遺跡』
- 前橋市教育委員会1984年『芳賀東部団地遺跡Ⅰ』
- 前橋市教育委員会1988年『芳賀東部団地遺跡Ⅱ』
- 前橋市教育委員会1991年『芳賀西部団地遺跡』
- 前橋市教育委員会1994年『芳賀北部団地遺跡』



## 第3節 竪穴式小石槨について

### 1. これまでの竪穴式小石槨研究

山王・柴遺跡群の調査では、1区で6基の墳墓について調査した。5号墳は古墳主体部、6号墳は方墳の底部及び周堀である。1～4号墳はいわゆる竪穴式小石槨であり、本項では、その竪穴式小石槨について述べる。

群馬県での竪穴式小石槨の研究は、1970年に「棺槨」について言及した尾崎喜左雄の研究に始まったと言える(註1)。尾崎は、「墓壇を掘り死屍を置いて、死屍に沿って、長めの礫を差し込んで造ったもの」を竪穴式小石槨とした。また、尾崎は、竪穴系の主体部についての編年も試みている(註2)。編年の基準として、尺の使用を想定した、主体部の内部構造の規模を提起した。

1988年には、桜場一寿が小石槨の分類を行っている(註3)。桜場は、竪穴系石室について、竪穴式石室、粘土槨、礫槨、木炭槨、竪穴式小石室(註4)に分類。それらについては、長さを基準に、I類—石室内に石棺を置いた施設・II類—内法全長2m以上・III類—1.5m～2m未満・IV類—1.5m以下に4分類し、さらに石材の扱いを基準にA類—河原石、角礫を地中に一列に差し込んで壁体とする、B類—乱石積の壁体、河原石、角礫を二段ないし三段に積む、C類—箱式石棺状のもので、凝灰岩などの切石を組み合わせるものと板状石を差し込んだもの、に分類した。

竪穴式小石室は、II類～IV類・A類～C類を用いて分類した。A類は、壁体が、一石のみであり、壁高が0.15～0.3mほどのものが多く、小規模な石室である竪穴式小石室の一般的な積み方とした。B類は、壁体の下部を地中に差し込み、上半に石を積み上げたものと、横穴式石室の壁体構造の影響下に作られたものがあり、後者は大型石室が多いとした。C類の板状石を差し込んだものは、切石を組み合わせるものの構造に近く、その系譜を同じくするものとした。また、竪穴式小石室について、92例を挙げ、赤城南麓(旧粕川村、旧赤堀村、旧伊勢崎市)に53例、高崎市東部の利根川左岸地域に14例、渋川市を中心とした榛名山東麓地域に10例が分布していることを示した。

2004年には、齊藤幸男が群馬県内の竪穴式小石槨について196例を集成し、その属性を抽出し、分類を行った(註5)。属性は、まず構築位置について、I—墳丘盛土内・II—旧地表下に二分した。使用石材について、I類—山石・河原石・II A類—片岩系・II B類—凝灰岩・角閃石安山岩など容易に加工できるものとした。壁体構成は、I類—1石で構成されるもの・II類—2石以上で構成されるものに大別し、さらにA類—扁平・板状の礫を用いる・B類—扁平でない礫を用いるものに細分している。長壁と短壁の接点については、清家章の分析(註6)に倣い、H型—短壁が長壁に挟まれる・II型—短壁が長壁の外側に位置する・ロ型—H型・II型以外とした。底面は造作法からI類—扁平な礫を並べるもの・II類—小さな礫を玉砂利状に敷き詰めるもの・III類—粘土を貼るもの・IV類—板状石で底面全体を賄うもの、に分類した。裏込め・被覆はI類—礫または礫主体・II類—土と礫を併用する・III類—土のみ、または土主体の3分類を行っている。これら属性について検討し、属性に時期差・階層差・地域差・集団差を表すものがあることを明らかにした。さらに、壁体構成の分類から画期を設定し、4区分しており、1—1期が5世紀中頃、1—2期が5世紀後半、2期が6世紀前半、3期が6世紀後半以降であるという段階を提示した。

他の研究に、同一遺跡内において調査された竪穴式小石槨について、荒木勇次(註7)、松村一昭(註8)、飯塚誠(註9)などが分析を行っている。

### 2. 山王・柴遺跡群出土の竪穴式小石槨について

検出された4基はいずれも1区西端部で確認された。調査された小石槨は、4基と少数であるが、その特徴から3つのパターンに分類したい。まず2号墳・4号墳であるが、壁面の構築方法が扁平ではない礫を用い、礫の長軸方向を横方向にして据えていた。長軸壁と短軸壁の接点のかみ合わせは、ともに短軸側の礫を挟み込むように長軸側の礫が据えられている。ただし、4号墳の北壁と北東側壁の接点は短軸側の礫が長軸側の礫の外側に位置しており、1号墳と類似しているが、他の接点が2号墳と同様であることから、構築時は、短軸側の礫を挟み込むようにして長軸側の礫を据えるよう意識していた

と考えられる。裏込めは小礫と暗褐色土を充填している。これら構築方法が類似しており、2号墳・4号墳を1A類とする。1A類は桜場のIV類・A類に相当、齊藤の分類では、壁体構成I B類・接点H型・裏込めII類に相当する。3号墳は構築方法が1類と同様であるが、内法が0.7m～0.8mの1A類に対し、内法1.8mと規模が大きいため1B類としたい。1B類は、桜場のIII類・A類に相当、齊藤の分類では、壁体構成I B類・接点H型・裏込めII類に相当する。1号墳は壁面の構築方法が扁平礫を使用し、長軸方向を縦方向に据えていた。長軸壁と短軸壁の接点のかみ合わせは、短軸側の礫が長軸側の礫の外側に据えられている。裏込めは扁平な礫が、平の面を上下にして寄せられていた。これら構築方法は、1類と異なるため、1号墳を2類とする。2類は、桜場のIV類・C類に相当、齊藤の分類では、壁体構成I A類・接点II型・裏込めI類に相当する。

それぞれのグループの構築時期の前後関係であるが、1A類と1B類は、構築方法が同じであることから、同時期の可能性が考えられる。1類と2類の前後関係は、不明である。しかし、先行する研究例を援用するならば(註10)、薄い壁体を用い、より箱状の埋葬施設を意識している2類の方が古い可能性が考えられる。

### 3. 山王・柴遺跡群周辺の竪穴式小石槨について

竪穴式小石槨は、古墳時代5世紀後半から6世紀代の赤城南麓地域にも見られる埋葬方法である。ここで、赤城南麓地域でも、特に山王・柴遺跡群周辺で確認された竪穴式小石槨について述べる。

山王・柴遺跡群周辺では、4遺跡6基の竪穴式小石槨が確認された。前橋市オブ塚西古墳(註11)、前橋市芳賀西部団地遺跡M-2号墳・M-20号墳・M-30号墳(註12)、前橋市小坂子油田II遺跡小石槨(註13)、前橋市正円寺古墳(註14)である。そのうち古墳は、オブ塚西古墳、芳賀西部団地遺跡M-20号墳、正円寺古墳である。他の竪穴式小石槨は、無墳丘墓である。これら竪穴式小石槨のうち構築時期が推定できるのは、芳賀西部団地遺跡M-20号墳、正円寺古墳である。芳賀西部団地遺跡M-20号墳は、出土した土師器、埴輪から5世紀後半と推定できる。正円寺古墳は、横穴式石室を有する前方後円墳で

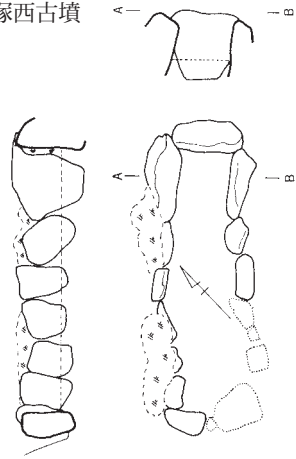
あり、くびれ部に竪穴式小石槨が構築されていた。松本浩一によると「箱式棺状石室は、転石を小口状積にして構築しているが、周囲の積土の状況から見て、横穴式石室構築後につくりつけたものである。」(註15)とされている。正円寺古墳の横穴式石室は、その特徴から6世紀前半と位置付けられ、竪穴式小石槨も同時期と考えられる。

山王・柴遺跡群近隣の竪穴式小石槨のうち、時期がわかるもの2基について述べた。この2基は古墳の主体部(副室)であり、山王・柴遺跡群は墳丘をほとんど有しない墳墓である。山王・柴遺跡群で調査された竪穴式小石槨と類似するのは、芳賀西部団地遺跡M-2号墳・M-30号墳であろう。芳賀西部団地遺跡M-2号墳は、壁面の構築方法が扁平ではない礫を用い、礫の長軸方向を横方向にして据えている点、長軸壁と短軸壁の接点が短軸側の礫を挟み込むように長軸側の礫が据えられている点、内法の規模から山王・柴遺跡群3号墳(1B類)に類似する。芳賀西部団地遺跡M-30号墳は、板状の礫を使用して壁面を構築しており、箱状の施設を意識している。扁平礫と板状礫の違いはあるが、山王・柴遺跡群1号墳に近い。また、長軸壁と短軸壁の接点のかみ合わせが、短軸側の礫が長軸側の礫の外側に据えられている点から、山王・柴遺跡群1号墳(2類)と類似していると言えよう。

### 4. 山王・柴遺跡群の竪穴式小石槨と方墳について

山王・柴遺跡群で調査された方墳(6号墳)と小石槨の関係について、述べたい。6号墳の主体部はすでに消失しており、詳細は不明である。周堀より出土した円筒埴輪の特徴から、6世紀前半に構築された方墳と考えられる。構築時期の詳細が不明である小石槨と方墳について、調査から得られた情報は、6号墳が3号墳の北東約20mの位置に構築されていたという極めて限定的な情報のみであった。これでは、考察することができないと言えよう。従って、ここでは、先行する研究成果から、山王・柴遺跡群について推測したい。桜場は、竪穴式小石槨の形態について1-群集する例、2-単独ないし複数(2基)で存在する例、3-横穴式石室と関連する例に分類をしている。群集する例とは、群集墳である。赤城南麓

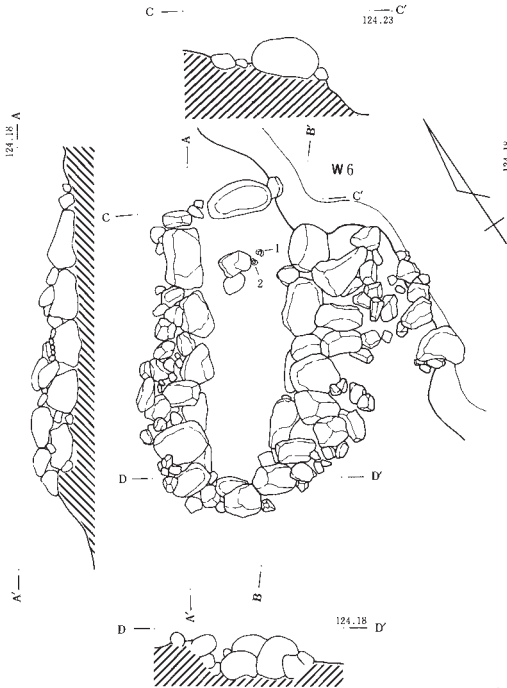
オブ塚西古墳



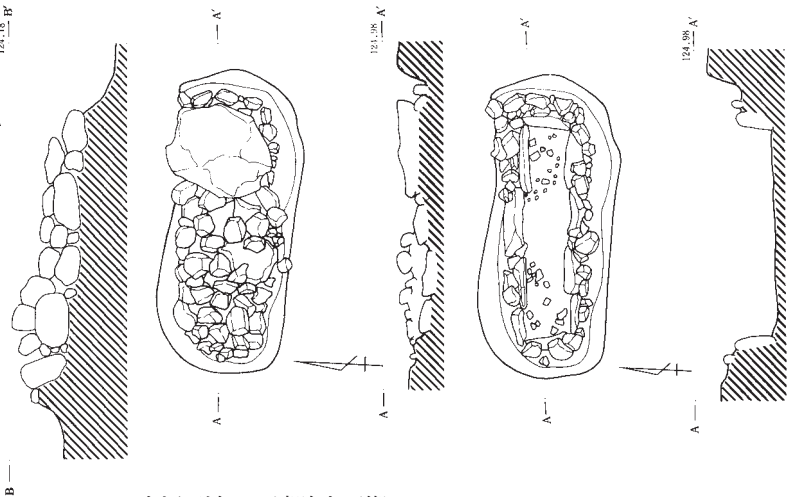
芳賀西部団地遺跡M-20号墳



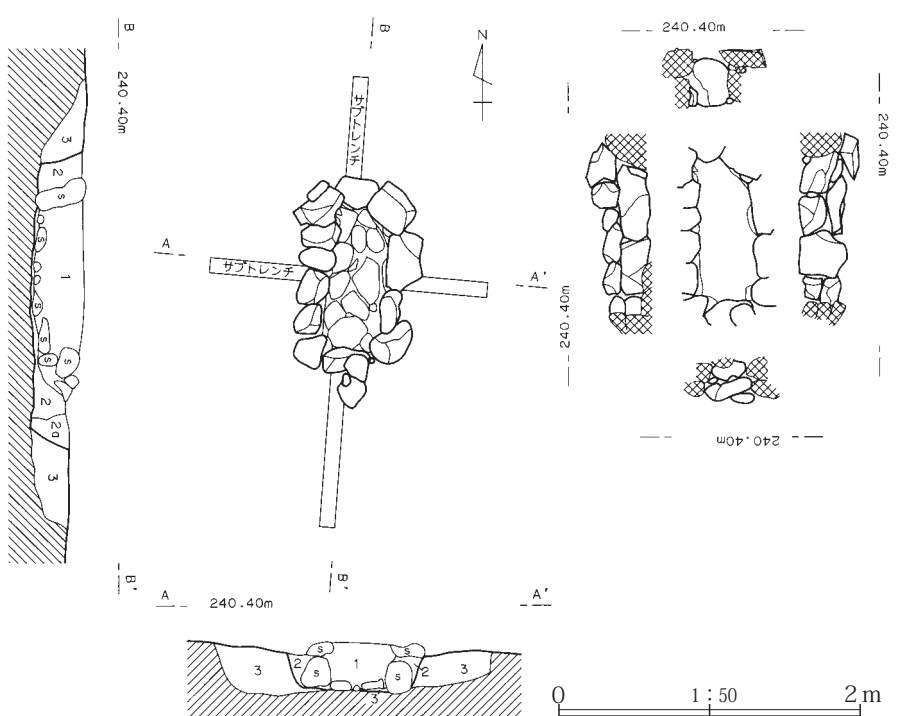
芳賀西部団地遺跡M-20号墳



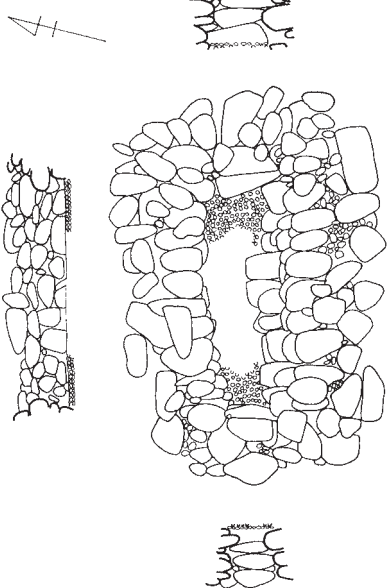
芳賀西部団地遺跡M-30号墳



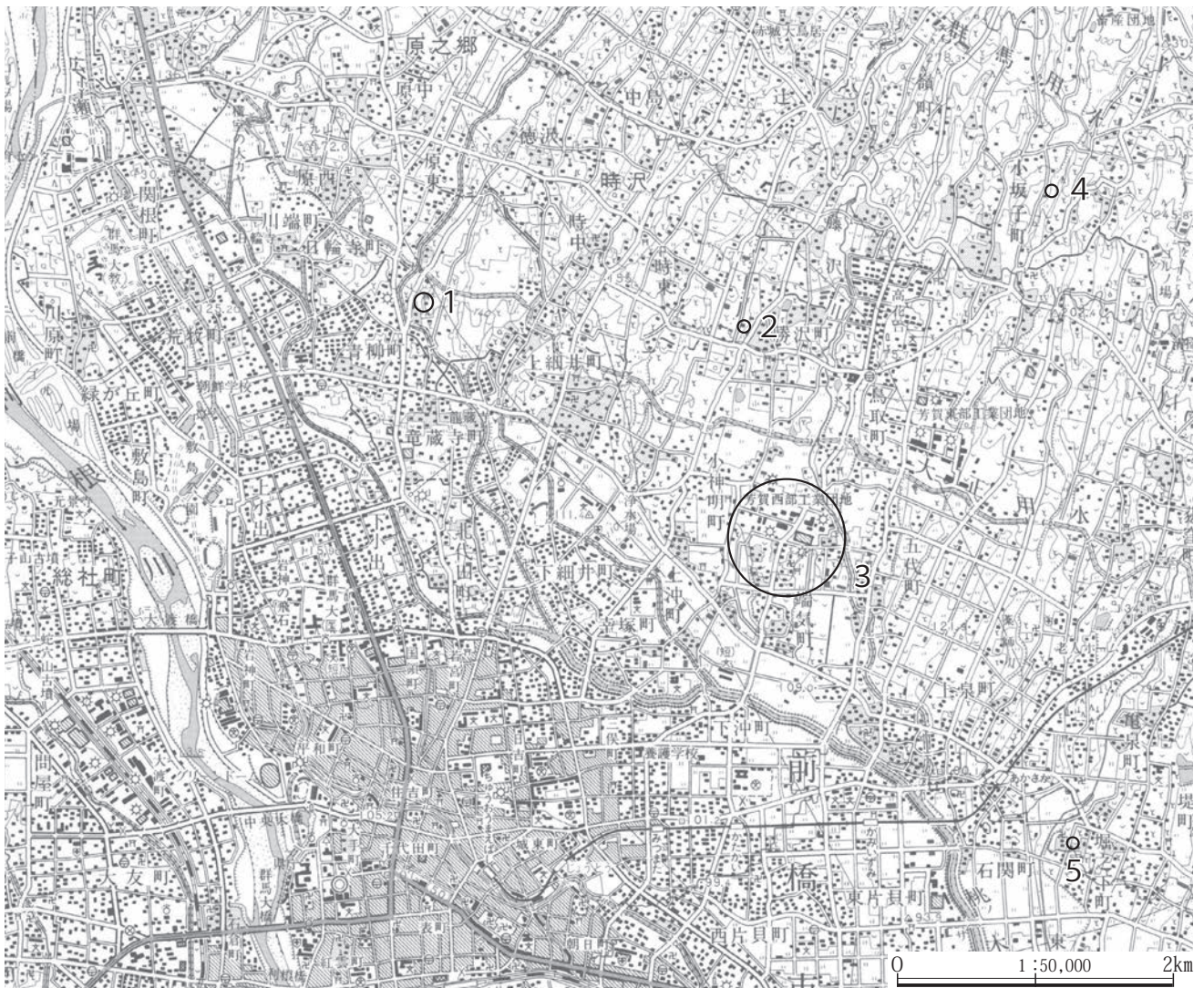
小坂子油田II遺跡小石槨



正門寺古墳



第341図 山王・柴遺跡群周辺竪穴式小石槨



1. 山王・柴遺跡 2. オブ塚西古 3. 芳賀西部団地遺跡 4. 小坂子油田Ⅱ遺跡 5. 正円寺古墳

第342図 山王・柴遺跡群周辺竪穴式小石槨位置図 国土地理院1/50,000地形図「前橋」昭和56年編集を使用

では、白藤古墳群が、43基からなる群集墳であるが、そのうち36基が竪穴式小石槨を有している。さらに、16基が無墳丘墓である。伊勢崎市赤堀町峯岸山古墳群では、調査された40基のうち竪穴式小石槨は17基あり、無墳丘墓は4基である。芳賀西部団地遺跡は、31基の中に、竪穴式小石槨が3基あった。

山王・柴遺跡群は、4基の竪穴式小石槨が調査されており、単独ないし複数で存在する例とは言えないだろう。横穴式石室との関連は、横穴式石室に小石槨を有する正円寺古墳のような例を指しており、これも当てはまらない。山王・柴遺跡群の小石槨は、群集墳の一部と考えられよう。この推測を用いれば、6号墳も群集墳を形成する墳墓との解釈も可能であろう。しかしながら、発掘の成果からは、当然言及できないため、推測として記した。

## 5. 小 結

山王・柴遺跡群竪穴式小石槨について、検討したところ、構築方法から3類に分類することができた。墳墓の形態について、先行する研究を援用し、推測した。いずれも遺跡から得られる情報が少なく、推定の域を出ることが出来なかった。

山王・柴遺跡群の発掘調査では、3世紀後半から10世紀後半にかけての竪穴住居群が検出され、この地域で集落が営まれ、農業生産などの生業が行われていたと想定されるが、検出された墳墓の時期である5世紀後半から6世紀前半の竪穴住居は確認されていない。しかし、墳墓が存在するという事は周囲に集落が存在していたことが窺える。こうした点をふまえて山王・柴遺跡群で

竪穴式小石槨が検出されたことは、齊藤(2004)が右島和夫の論考(註16)をもとに「5世紀後半は地域開発が大きく伸展し、新しい勢力が勢力をのびしたことによって古墳自体の数が増加した。さらに従来古墳をつくれなかった階層までが古墳をつくるようになった。初期群集墳の成立もこの点にある。小石槨はこうした階層が造墓するにあたって、首長墓と棺制を区別するために導入したものであり、榛名山東南麓の首長の支配地域と、これと強い関係をもつ地域に導入されたと考えられる。」(註17)と指摘している。このことは、赤城南麓でも6世紀前半ではあるが、今井神社古墳、正円寺古墳などの首長層の支配のもとで造墓にあたっては榛名東南麓と同様な階層差が生じていたと言える。山王・柴遺跡群では5世紀後半代に小石槨が造られており、赤城南麓地域の末端に位置づけられる集落と考えられるとともに、5世紀前半代までは、目立った造墓がみられなかったこの集落でも階層差が進んだことが窺える。そして小石槨と墳丘墓の年代観は明確ではないが、小石槨から墳丘墓へとの変化していることから6世紀前半代にはそれ以前の階層差がより大きくなったことが想定される。その背景には、発掘調査で手工業的な要素が見いだせないことから、耕地の拡大などによる農業生産の増大が計らえたことが窺える。耕地の拡大については、古墳時代前期の集落が立地していた場所が耕地化されていることから証明されている。

また、今回の山王・柴遺跡群では、赤城南麓において、新たな竪穴式小石槨の資料蓄積ができたと言えよう。その意味でも、今回の調査成果は、意義深いと考えられる。

- 註  
 註1 尾崎喜左雄1970「棺槨」『考古学講座』新刊 原始文化 下 雄山閣  
 註2 尾崎喜左雄1971「竪穴式古墳の編年」『前橋市史第1巻』前橋市史編さん委員  
 註3 桜場一寿1988「群馬県における竪穴式小石室の諸相」『群馬の考古学』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、1990「竪穴式石室」『群馬県史』通史編1 群馬県史編さん委員会  
 註4 桜場の言う「竪穴式小石室」が、本稿で扱う「竪穴式小石槨」である。  
 註5 齊藤幸男 2004 「上野の竪穴式小石槨」『研究紀要22』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
 註6 清家章2001「畿内周辺における箱形石棺の形式と集団」『古代学研究』152  
 註7 荒木勇次 1997 「1. 石原東1号墳の竪穴式石槨について」『石原東古墳群』渋川市教育委員会  
 註8 松村一昭 1977 「IV 編年的考察」『赤堀村峯岸山の古墳2』赤堀村教育委員会  
 註9 飯塚 誠1998「1. 古墳のまとめ」『上植木光仙房遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、1991「芳賀西部団地遺跡の古墳について」『芳賀西部団地遺跡』前橋市教育委員会  
 註10 註5文献。齊藤は薄い壁体の竪穴式小石槨をI Aとし、扁平でない礫を用いた竪穴式小石槨をI Bとした。箱状施設への意識の退化からI AよりI Bの方が新しいとした。  
 註11 相沢貞順1981「3オブ塚西古墳」『群馬県史資料編』3群馬県史編さん委員会  
 註12 前橋市教育委員会1991「芳賀西部団地遺跡」  
 註13 前橋市教育委員会1997「小坂子油田I・II遺跡」  
 註14 松本浩一1981「5正円寺古墳」『群馬県史資料編』3群馬県史編さん委員会  
 註15 註14文献、p.69  
 註16 右島和夫1993「上野における群集墳の成立」『関西大学考古学研究室創設40周年記念考古学論叢』  
 註17 註5文献、p.283

出土遺物観察表

2区1号土抗墓出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長	幅	厚	重			
第11図 PL.151	1	銅製品 銭貨	床上6cm 完形	長 幅	3.2 2.4	厚 重	1.5 35.07	銅	銅銭12枚が錆化癒着した状態で出土、両端から側面を覆う形でS撚り糸を平織した布が付着する。両端とも文字面を内側にして錆付き未分離のため個別銭種は不明。	銭の厚さ0.9+1.1+0.78+1.1+0.95+1.2+0.9mm
第11図 PL.151	2	銅製品 銭貨	床上6cm 完形	長 幅	2.5 2.3	厚 重	0.7 15.87	銅	銭貨6枚が錆化癒着した状態で出土、側面には布の痕跡等が残っていない。両端の2枚は寛永通宝で文字面を外側にし錆付く、内側の4枚は未分離のため銭種不明。	銭6枚の厚さ0.98+0.76+0.95+1.08+0.84+0.85mm
第11図 PL.151	3	鉄製品 釘	埋土 完形	長 幅	3.4 1.0	厚 重	0.7 0.72	鉄	角釘で頭は平らに延ばしたのち直角に折り曲げる。頭から徐々に細くなりとなる、釘側面全体を覆う形で針葉樹板目が錆化残存する。	
第11図 PL.151	4	鉄製品 釘	埋土 完形	長 幅	2.7 0.7	厚 重	0.7 0.58	鉄	角釘で頭は平らに延ばしたのち直角に折り曲げる。頭から徐々に細くなりとなる、釘側面全体を覆う形で針葉樹板目が錆化残存する。	
第11図 PL.151	5	鉄製品 釘	埋土 完形	長 幅	1.8 2.0	厚 重	1.0 1.57	鉄	角釘で頭は平らに延ばしたのちコの字状に折り曲げる。頭から1.5cm程で緩やかに直角におり曲りその先で急激に細くなりやよとがる、釘側面全体を覆う形で針葉樹板目が錆化残存する。	

2区2号土抗墓出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長	幅	厚	重			
第12図 PL.151	1	銅製品 銭貨	床上13cm 完形	長 幅	3.7 2.7	厚 重	1.6 40.12	銅	銅銭13枚が錆化癒着した状態で出土、両端の銭表面から側面には断片的にS撚り糸(木綿)を平織した布が残存する。両端の2枚とも寛永通宝で外縁・文字・郭とも明瞭で文字面を外側に向け錆付く。文字面にも布が付着し錆化する。内側の銭貨は未分離のため銭種不明。	銭13枚の厚さは1.2+1.0+1.1+0.8+1.1+1.05+1.05+1.0+0.95+0.9+0.9+1.05+0.95mm
第12図 PL.151	2	銅製品 銭貨	床上10cm 完形	長 幅	2.5 2.5	厚 重	0.7 18.45	銅	銅銭6枚が錆化癒着した状態で出土、側面S撚りの糸(木綿)を平織した布が付着する。端部の1枚は寛永通宝で外縁・文字・郭とも明瞭。反対側の1枚は文字面を内側にして錆付銭種は不明、外縁・郭とも明瞭だが非常に平坦で、縁から郭にかけて線条に錆溜りが見られる。内側の銭貨それぞれの銭種は未分離のため不明。	

2区3号土抗墓出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	厚	重			
第13図 PL.151	1	軟質陶器 杯	床下67cm 完形	口底	9.4 5.9	高	2.2	細砂粒・粗砂粒・褐粒/酸化焰/橙	ロクロ整形、回転左回り。底部は回転糸切り無調整。	
第13図 PL.151	2	金属製品 銭貨	底面 完形	長 幅	2.4 2.4	厚 重	0.5 8.97	銅	銅銭3枚が錆化癒着した状態で出土。外側の一枚は寛永通宝で彫深く外縁・文字・郭とも明瞭。表面に方向のそろった繊維が絡まり薄い布状に残存する。他の銭は錆付銭種不明。	銭3枚の厚さ1.1+1.2+1.1mm
第13図 PL.151	3	金属製品 銭貨	底面 完形	長 幅	2.7 2.8	厚 重	2.3 38.04	銅・鉄	銭貨12枚が錆化癒着した状態で出土。側面から鉄銭1枚と銅銭2枚の存在が見られるが1枚は錆化が著しく不明。表面に方向のそろった繊維が絡まりあった薄い布が幾重に折り重なっている。またその外側の一部に撚りのない糸を平織した布が付着する。それぞれの銭種は未分離のため不明。	
第13図 PL.151	4	金属製品 銭貨	埋土 完形	長 幅	3.3 3.6	厚 重	1.8 25.56	銅・鉄	銅銭・鉄銭が複数枚錆化癒着した状態で出土。外側の銭は裏面で錆色から銅銭と見られるが、全体を覆う錆は鉄さびで鉄銭が含まれていると考えられる。錆化が著しく未分離のため銭の枚数・銭種は不明。	
第13図 PL.151	5	金属製品 銭貨	埋土 完形	長 幅	3.3 3.5	厚 重	2.2 30.14	銅・鉄	銭貨が錆化癒着した状態で出土、両端は銅銭で内側に鉄銭2〜3枚が並ぶが錆化が著しく枚数不明。端部から側面に付けて平織の布が錆化し残存する。銭貨それぞれの銭種は未分離のため不明。	
第13図 PL.151	6	金属製品 釘	床上19cm 端部欠	長 幅	5.4 1.2	厚 重	0.7 3.56	鉄	断面0.4cm角の角釘で、頭は幅1.2cm程に幅広く広げ折り曲げている。先端に向け徐々に細くなるが端部は劣化破損する。頭から約1cmは針葉樹板目が錆化残存その先は針葉樹材木口に打ち込まれている。	
第13図 PL.151	7	金属製品 釘	埋土 端部欠	長 幅	5.3 1.2	厚 重	0.6 2.62	鉄	断面0.4×0.3cmの角釘で、頭は幅1.2cm程に幅広く広げ折り曲げている。先端に向け徐々に細くなるが端部は劣化破損する。頭から約1cmは針葉樹板目側面・その先は針葉樹材木口に打ち込まれている。	

2区4号土抗墓出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長	幅	厚	重			
第14図 PL.151	1	金属製品 銭貨	床上22cm 完形	長 幅	3.0 2.9	厚 重	1.2 13.54	銅・鉄	鉄銭2枚と銅銭2枚が重なり鉄錆により癒着した状態で出土する。周りには鉄錆化和紙と見られる繊維が折り重なるように覆っているため、個別の銭種は不明	
第14図 PL.151	2	金属製品 銭貨	床上11cm 完形	長 幅	4.5 3.6	厚 重	2.4 29.23	銅・鉄	銅銭・鉄銭10枚が錆化癒着した状態で出土。銭は銅銭4枚と銅銭3枚+2枚と鉄銭1枚と3つのまとまりをなし三角形状に錆付く。端部の銅銭3枚では表面が観察されるが文字面を内側に向けて錆付き銭種は不明。その全体を覆うようにほとんど撚りのない糸を平織した布が覆い錆化する。	

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長幅	厚重	0.1・ 0.1 合計 5.01			
第15図 PL.151	3	銅製品 銭貨	底面 完形	長幅 2.3・ 2.45 2.45	厚重 0.1・ 0.1 合計 5.01	銅	銅銭2枚が錆びにより癒着し出土。1枚は外縁・文字・郭とも明瞭で寛と通の字が見られるが周りは硬いサビに覆われる。他の1枚は文字面が癒着し銭種不明、裏面は彫は浅いが外縁・郭は明瞭。		
第15図 PL.151	4	金属製品 矢立	床上13cm 本体	長幅 13.9 3.0	厚重 1.5 16.29	銅	直径約3cm厚さ1.3cmの円筒形の墨壺と直径0.8cmの円筒形軸部からなる矢立で、墨壺部の上部にはかまぼこ型の蓋付蝶番により開閉できる構造になっている。軸は9.5cm程で折れ曲がり長さ11cmほどで破損する。墨壺部分の内面および上部の一部に墨が残存する。また円筒形墨壺の外側面に木綿と見られる平織の布が付着する。		
第15図 PL.151	5	金属製品 煙管	床上13cm 雁首部	長幅 6.8 1.4	厚重 1.8 8.30	銅	煙管の雁首部分で篠竹と見られるが端部に一部残存する。錆の下に一部銀色に光る部分が認められる。		
第15図 PL.151	6	金属製品 煙管	床上22cm 雁首部	長幅 4.9 1.1	厚重 1.1 4.33	銅	煙管の破片で火皿は破損するが、その端部の形状から雁首部と見られる。篠竹と見られるが端部に一部残存する。		
第15図 PL.151	7	鉄製品 釘	埋土 基部欠	長幅 2.9 0.6	厚重 0.6 1.52	鉄	断面0.4×0.3cmの角釘で、頭はやや幅が広がるが折り返し等はなく角型、全長約3.5cmで先端から1cmほどでくの字に曲がり先端は尖る。頭から1cmに針葉樹板目材その先には90°軸方向の異なる針葉樹板目材が錆化残存する。		
第15図	8	鉄製品 釘	床上16cm 破片	長幅 1.45 0.65	厚重 0.50 0.59	鉄	断面0.3×0.2cm角の釘、頭部分はやや大きく丸みを持つが折り返しは見られない、先端側は劣化破損する。全体に針葉樹板目材が錆化残存する。		
第15図 PL.151	9	鉄製品 釘	床上16cm 両端部欠	長幅 3.4 0.7	厚重 1.0 3.39	鉄	断面0.3cm角の釘で頭から先端に向け弧を描くように曲がり端部近くで急に細くなるとともに急角度で曲がるが先端は欠損する。全体に針葉樹板目材が錆化残存する。		
第15図	10	鉄製品 釘	床上16cm 破片	長幅 1.0 0.6	厚重 0.5 0.49	鉄	断面0.3×0.3cm角の釘、端部は劣化破損する。全体に針葉樹板目材が錆化し残存する。		
第15図 PL.151	11	鉄製品 釘	床上16cm 両端部欠	長幅 2.5 0.4	厚重 0.4 0.68	鉄	断面0.3cm角の釘で現存長3cm、先端側1cmでくの字に曲がり先端部分は劣化破損する。木質は見られない。		
第15図 PL.151	12	鉄製品 釘	床上16cm 両端部欠	長幅 2.7 0.6	厚重 0.4 1.47	鉄	断面0.3cm角の釘で現存長3cm、頭部は無く、先端側1cmで浅くの字に曲がり先端部分は劣化破損する。全体に針葉樹板目材が錆化残存する。		

3区1号土抗墓出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長幅	厚重	1.3 1.89			
第16図 PL.152	1	鉄製品 釘	底面 先端部欠	長幅 3.7 1.5	厚重 1.3 1.89	鉄	断面0.3cm角の釘で頭は半円形に薄く延ばし折り曲げる。頭から1.2cmほどは針葉樹板目材その先は90°軸方向の異なる針葉樹板目材が錆化残存するが釘本体は空洞化し破損する。		
第16図 PL.152	2	鉄製品 釘	底面 先端部欠	長幅 4.0 1.2	厚重 1.5 2.36	鉄	断面0.3cm角の釘で頭はT字形で先端部は劣化破損する。頭から1.3cmは針葉樹板目材、その先端部まで2.5cmは90°軸方向の異なる針葉樹板目材が錆化残存する。		
第16図 PL.152	3	鉄製品 釘	埋土 完形	長幅 3.0 3.0	厚重 0.9 1.39	鉄	断面0.3cm角の釘で先端に向かい細くなり先端は尖る、頭は薄く延ばしたのち斜めに曲げる。頭部分は針葉樹板目材が先端部分はそれと90°軸方向の異なる針葉樹板目材が錆化残存する。		
第16図 PL.152	4	鉄製品 釘	底面 完形	長幅 2.0 1.3	厚重 2.2 2.3	鉄	断面0.3×0.3cmの角釘で頭は1cm程を直角に曲げる頭から2cmで直角にさらに1.5cmでねじれる様に曲がる。頭部分0.5cmは針葉樹板目材その先はそれと90°軸方向の異なる針葉樹板目材(現存厚さ1.5cm)が錆化残存する。		
第16図 PL.152	5	鉄製品 釘	底面 完形	長幅 3.9 1.3	厚重 1.0 1.79	鉄	断面0.3cm角の釘で頭はTの字形、頭から3.5cm程で緩やかに90°曲がり1cm程でやや細くなり尖らずに先端となる。頭から1.7cmは針葉樹板目材そこから先端まで(厚さ2cm)は90°軸方向の異なる針葉樹板目材が錆化残存する。		
第16図 PL.152	6	鉄製品 釘	底面 完形	長幅 2.3 1.0	厚重 0.9 1.9	鉄	断面0.4cm角の釘で、頭は広く延ばしたのち斜め横に曲げられる。先端に向かい徐々に幅を減じ1.5cm程でJの字形に曲がるとともに細くなる。頭下から先端まで針葉樹板目材が錆化残存する。		
第16図 PL.152	7	鉄製品 釘	埋土 先端部欠	長幅 2.7 0.9	厚重 1.0 1.08	鉄	先端を欠く釘破片、頭はTの字形で断面0.3cm角で先に向かいわずかに細くなりながら2cm付近でゆるく曲がり端部は劣化破損する。頭から1.3cmは針葉樹板目材その先から端部までは軸方向の異なる針葉樹板目材が錆化残存する。		
第16図 PL.152	8	鉄製品 釘	底面 先端部欠	長幅 2.1 1.4	厚重 0.7 0.91	鉄	断面0.3cm角の釘で頭はT字形で先端部は劣化破損する。頭から1.5cmは針葉樹板目材が錆化残存する。		
第16図 PL.152	9	鉄製品 釘	床上14cm 先端部欠	長幅 1.4 1.2	厚重 0.5 0.56	鉄	断面0.25cm角の釘で頭部はTの字形で、頭から1.4cmで劣化破損し先端は不明。僅かに針葉樹板目材が錆化残存する。		
第17図 PL.152	10	鉄製品 釘	底面 先端部欠	長幅 2.2 2.1	厚重 0.9 0.6	鉄	断面0.3cm角の釘で頭は薄く延ばし80°程に曲げる。頭から徐々に細くなり2.1cmで劣化破損する。頭から1.5cmは針葉樹板目材、その先から端部までは90°軸方向の異なる針葉樹板目材が錆化残存する。		
第17図 PL.152	11	鉄製品 釘	底面 先端部欠	長幅 2.4 1.6	厚重 0.6 1.82	鉄	断面0.2cm角の釘で先端へ向かいほぼ同形で2.4cmで劣化破損する。全体に錆化した板目材の木質に覆われ頭の形状は不明瞭。		
第17図 PL.152	12	鉄製品 釘	埋土 先端部欠	長幅 1.7 1.2	厚重 0.4 0.75	鉄	鉄釘頭部分の破片で頭部はやや傾いたTの字形だが全体に針葉樹板目材に覆われ不明瞭。断面は0.25cmの角で端部は劣化破損する。		

出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長	幅	厚	重			
第17図 PL.152	13	鉄製品 釘	埋土 先端部欠	1.8	1.7	0.9	1.63	鉄	断面0.3cm角の釘で頭はT字形で先端部は劣化破損する。頭から1.5cmは針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	14	鉄製品 釘	埋土 先端部欠	1.8	1.6	0.7	1.22	鉄	頭部分はTの字形で断面0.3cm角の鉄釘で先端部は劣化破損する。頭部分を含め針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	15	鉄製品 釘	埋土 先端部欠	1.5	2.0	0.6	0.78	鉄	断面0.2cm角の釘で頭部はT字形、全体的に針葉樹板目材に覆われ1.5cm程で劣化破損する。	
第17図 PL.152	16	鉄製品 釘	埋土 先端部欠	1.2	0.9	0.5	0.44	鉄	頭部分はTの字形で断面0.3cm角の鉄釘。先端部は劣化破損する。頭部分を含め針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	17	鉄製品 釘	埋土 両端部欠	2.0	0.9	0.5	0.40	鉄	両端を欠く釘破片、端部断面は0.2×0.15cmの角釘で一部に針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	18	鉄製品 釘	埋土 両端部欠	2.0	1.4	0.4	0.51	鉄	両端を欠く釘破片、上端部断面0.2×0.15cm角で先端へ向かい徐々に細くなり先端部は劣化破損する。全体に針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	19	鉄製品 釘	埋土 両端部欠	1.7	2.4	0.9	1.4	鉄	断面0.3cm角の釘で両端とも劣化破損する。端部から1.8cmは針葉樹板目材その先0.5cmは90°軸方向の異なる針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	20	鉄製品 釘	埋土 両端部欠	2.1	1.2	0.4	0.39	鉄	端部断面0.2cm角で両端部とも劣化破損する。全体に針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	21	鉄製品 釘	底面 両端部欠	1.1	1.9	0.6	0.77	鉄	断面0.3cm角の釘で両端とも劣化破損する。全体に針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	22	鉄製品 釘	埋土 両端部欠	1.4	1.5	0.7	0.68	鉄	両端を欠く釘破片、上端部断面0.25cm角で先端部は劣化破損する。全体に針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	23	鉄製品 釘	埋土 両端部欠	1.6	1.2	0.7	0.94	鉄	両端を欠く釘破片。端部断面0.3cm角で徐々に細くなり他端も劣化破損する。全体に針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	24	鉄製品 釘	埋土 両端部欠	2.0	1.1	0.4	0.4	鉄	両端を欠く釘破片。端部断面0.3cm角で徐々に細くなり先端側も劣化破損する。全体に針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	25	鉄製品 釘	埋土 両端部欠	1.3	1.1	1.0	0.86	鉄	鉄釘破片で、両端部を劣化破損する。中央付近を境に90°軸方向の異なる針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	26	鉄製品 釘	埋土 両端部欠	1.6	1.1	0.4	0.58	鉄	釘先端近くの破片。断面0.2cm角で先端に向かい徐々に細くなり劣化破損する。全体に針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	27	鉄製品 釘	埋土 両端部欠	1.1	1.3	0.5	0.47	鉄	両端を欠く釘破片。端部断面0.2cm角で徐々に細くなり他端も劣化破損する。全体に針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	28	鉄製品 釘	埋土 基部欠	5.0	1.5	0.5	1.47	鉄	断面0.2cm角の釘で、頭側は劣化破損する。端部から徐々に細くなり3cm付近で0.15cm程となりそのまま先端へ向かい端部は細く尖る。全体に針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	29	鉄製品 釘	底面 両端部欠	4.0	2.2	1.2	2.2	鉄	断面0.3cm角の釘で、先端に向かい幅を減じ端部では0.1cm角となり先は劣化破損する。全体に弧を描きカーブする、表面に薄く針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	30	鉄製品 釘	埋土 基部欠	3.4	0.4	0.3	0.3	鉄	釘先端近くの破片。断面0.3cm角で先端に向かい徐々に細くなり、先端付近では尖る。	
第17図 PL.152	31	鉄製品 釘	底面 基部欠	3.0	2.2	0.5	0.7	鉄	断面0.2cm角の釘で頭部を欠く、先端近くまでほぼ同寸で端部0.5cm程で急にとがる。全体に針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	32	鉄製品 釘	埋土 基部欠	2.8	1.6	0.6	1.32	鉄	頭部を欠く釘破片で、端部断面0.3cm角で徐々に細くなりJの字形に曲がり先端部に至る。全体に針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	33	鉄製品 釘	埋土 基部欠	2.5	1.3	1.8	1.60	鉄	断面0.2cm角の釘で先端から1cm付近で直角に曲がり尖る。欠損部から1cmまで針葉樹板目材、そこから先端まで長さ1.5cmは軸方向の異なる針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	34	鉄製品 釘	埋土 基部欠	2.0	1.3	0.5	0.94	鉄	釘先端破片。端部断面0.2cm角の釘で、先端に向かい徐々に細くなり先端は尖る。全体に針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	35	鉄製品 釘	埋土 基部欠	1.5	2.2	0.3	0.42	鉄	頭部を欠く釘破片で、端部断面0.2cm角の釘で先端に向かいわずかに細くなり先端0.5cm程で急に細くなり尖る。全体に針葉樹板目材が錆化残存する。	
第17図 PL.152	36	鉄製品 釘	埋土 基部欠	1.0	1.5	0.8	0.95	鉄	頭部を欠く釘破片で、端部断面0.3cm角の釘で先端に向かいわずかに細くなり先端1cm程でくの字に曲がる。全体に針葉樹板目材が錆化残存する。	

3区2号溝出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
長	幅	厚	重							
第22図	1	鉄製品 不詳	埋土 破片	5.2	0.7	0.7	4.30	鉄	0.3cmの丸い断面を持つ棒状鉄製品で、両端は角形で特別な形状や木質等の痕跡もなく詳細不明。	

2区5号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
口底	口胴	口鏢								
第26図 PL.152	1	灰陶陶器 椀	床下39cm 1/3	17.8	8.4	8.6	6.0	微砂粒・水籾/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部切り離し技法は高台貼付時のナデで不明。施釉方法は漬け掛け。	大原2号窯式期末～虎溪山1号窯式初頭
第26図	2	土師器 甕	床上14cm 口縁部～胴部片	13.4	16.0			細砂粒・粗砂粒・片岩/良好/にぶい褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第26図 PL.152	3	須恵器 羽釜	床上10cm 口縁部片	26.0	31.4			細砂粒/酸化焰/にぶい褐	ロクロ整形、回転方向不明。鏢は貼付。胴部はへら削りか。	



2区6号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	口高	厚重			
第28図	1	黒色土器 椀	カマド 底部1/2	底	7.0		細砂粒/良好/黄橙	内面黒色処理。ロクロ整形、回転方向不明。底部切り離し技法は器面剥離のため不明、高台は貼付。内面はヘラ磨き。	二次被熱を受けている。
第28図	2	須恵器 羽釜	床上9cm 口縁部～胴部片	口 鏝	27.6 32.6		細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/明赤褐	ロクロ整形、回転方向不明。鏝は貼付。内面はヘラナデ。	
第28図	3	須恵器 羽釜	カマド 口縁部～胴部片	口 鏝	21.2 24.4		細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰・燻/黒葛	ロクロ整形、回転方向不明。鏝は貼付。内面はヘラナデ。	
第28図	4	須恵器 羽釜	床上8cm 口縁部～胴部片	口 鏝	21.6 26.0		細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/浅黄橙	ロクロ整形、回転方向不明。鏝は貼付。胴部中位はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第28図 PL.152	5	須恵器 羽釜	床上6cm 口縁部～胴部上 半1/4	口 鏝	21.8 25.0		細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/黒褐	ロクロ整形、回転方向不明。鏝は貼付。胴部は中位以下にヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第28図 PL.152	6	鉄製品 刀子	床上10cm 刃部片	長 幅	7.4 1.2	厚 重 0.7 5.44	鉄	幅狭の刀子破片、先端側は劣化破損。茎側端部は破損後錆化、全体に錆化が著しく関等は不明。	

2区10号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	口高	高			
第29図 PL.152	1	土師器 杯	床上6cm 口縁部1/4欠	口 高	12.3 3.5		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第29図	2	土師器 杯	床上7cm 口縁部・底部一 部欠損	口 底	12.5 11.3	高 3.5	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第29図	3	土師器 杯	床上12cm 1/4	口	13.8		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第29図 PL.152	4	土師器 杯	カマド 口縁部1/4欠	口 稜	15.3 12.8	高 3.6	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第29図	5	須恵器 杯	床直 1/2	口 底	13.7 10.2	高 2.8	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラ削り。	
第29図	6	須恵器 壺	埋土 胴部片	胴	17.8		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。胴部は一部ヘラナデ。	
第29図	7	土師器 甕	床上6～15cm 口縁部片	口	14.8		細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第29図	8	土師器 杯	床上9cm 1/4	口 稜	10.2 8.6		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	混入品
第29図	9	土師器 杯	床上20cm 1/4	口 稜	121.8 11.3		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口唇部に平坦部を有し凹線が巡る。口縁部は横ナデ、底部(稜下)は手持ちヘラ削り。	混入品

2区18号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	口高	高			
第33図 PL.152	1	須恵器 椀	カマド 1/2	口 底	14.8 7.3	高 8.0 7.1	細砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部切り離し技法は高台貼付時のナデで不明。	
第33図 PL.152	2	須恵器 甕	カマド 胴部～底部1/3	底	14.5		細砂粒/酸化焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。内面に輪積み痕が残る。底部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部下位にヘラナデ。	
第33図 PL.152	3	土師器 小型甕	カマド 2/3	口 底	10.4 5.2	高 11.6	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り、底部の整形は不鮮明。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第33図	4	須恵器 羽釜	カマド、壁溝 口縁部～胴部片	口 鏝	19.4 21.7		細砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形、回転方向不明。鏝は貼付。胴部中位から下にヘラ削り。	
第33図	5	須恵器 羽釜	カマド 口縁部片	口 鏝	22.0 26.2		細砂粒/酸化焰/明 黄橙	ロクロ整形、回転方向不明。鏝は貼付。	

2区32号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	口高	高			
第35図	1	土師器 杯	床上27cm 破片	口	13.8		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第35図 PL.153	2	土師器 甕	床上15cm 1/3	口 胴	25.5 30.6		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第35図	3	土師器 杯	掘方 破片	口 稜	13.8 12.4		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、器面摩滅のため単位等不鮮明	

2区33号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	口高	高			
第37図 PL.153	1	須恵器 杯蓋	床上18cm 完形	口 摘	11.4 2.0	高 3.3	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転左回り。摘みは貼付。天井部は中ほどまで回転ヘラ削り。内面周辺部に降灰が付着。	
第37図 PL.153	2	須恵器 杯蓋	床直 完形	口 摘	13.4 3.2	高 2.7	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付。天井部は中ほどまで回転ヘラ削り。外面天井部周縁に重ね焼き痕がみられる。	
第37図 PL.153	3	須恵器 杯	床上18cm 口縁部一部欠	口 底	12.1 6.8	高 4.3	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第37図	4	須恵器 杯	床上9～16cm 口縁部1/3欠	口 底	12.1 7.9	高 4.2	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第37図	5	須恵器 杯	埋土 2/3	口 底	11.6 6.0	高 4.0	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	

出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 胴	高	底				
第37図	6	土師器 甕	カマド 口縁部～体部 1/4	口 胴	19.8 20.8			細砂粒/良好/橙	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第38図	7	土師器 甕	カマド、床直 口縁部～肩部片	口	20.2			細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第38図 PL.153	8	土師器 甕	床直 上半	口 胴	21.6 21.4			細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第38図	9	土師器 甕	床直20cm 下半	底	4.7			細砂粒/良好/明赤 褐	内面の胴部中に輪積み痕が残る。底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第38図 PL.153	10	須恵器 甕	カマド 口縁部～胴部片	口	25.7			細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	口縁部はロクロ整形、回転不明。胴部内面に同心円状アテ具痕が残る。内外面に降灰が付着。	
第38図	11	土師器 杯	床直 1/4	口 稜	12.8 11.3	高	3.7	細砂粒/やや軟質/ 橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	混入品

2区39号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 底	高	胴				
第40図 PL.153	1	土師器 杯	床上12～16cm 3/4	口 底	11.2 7.5	高	3.3	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	
第40図 PL.153	2	須恵器 椀	床直 1/2	口 底	10.7 5.8	高	3.8	細砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第40図 PL.153	3	土師器 甕	カマド 1/2	口 胴	11.7 13.0			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第40図 PL.153	4	土師器 甕	カマド、床直 3/4	口 底	19.5 4.2	高 胴	27.7 21.8	細砂粒/良好/橙	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、頸部に指頭痕が残る。胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第40図	5	土師器 甕	カマド、床直 底部欠	口 胴	19.2 22.0			細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第40図	6	土師器 甕	床直～11cm 口縁部～胴部 1/3	口 胴	18.6 22.0			細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第40図	7	土師器 杯	床上9cm 1/4	口 稜	13.0 14.2			細砂粒/良好・燻 か/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面底部は放射状ヘラ磨き。	
第40図	8	土師器 甕	床直 3/4、底部 1/2欠	口 底	20.0 5.5	高 胴	38.2 20.7	細砂粒・粗砂粒/ 良好/明黄褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り、器面摩滅のため単位不鮮明。内面は底部から胴部にヘラナデ。	

3区1号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 底	高	厚 重				
第44図	1	土師器 杯	P 3 1/4	口	11.2			細砂粒/良好/橙	口唇部は横ナデ、口縁部から体部・底部は手持ちヘラ削り。	
第44図 PL.154	2	土師器 杯	床上15cm 3/4	口 高	12.8 4.2			細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第44図	3	土師器 杯	床直 1/4	口 高	13.0 4.1			細砂粒/良好/橙	口唇部は横ナデ、口縁部はナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第44図	4	土師器 杯	掘方 1/2	口 稜	18.1 16.0			細砂粒・粗砂粒・ 小礫/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第44図	5	須恵器 長頸壺	床上30～46cm、 P 3、掘方 頸部～胴部1/2	胴	17.2			細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰オリブ	ロクロ整形、回転右回りか。胴部と頸部は接合。胴部最下位に回転ヘラ削り。	
第44図	6	土師器 甕	カマド 口縁部片	口	20.0			細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第44図 PL.154	7	土師器 甕	掘方 口縁部～胴部 1/4	口	12.0			細砂粒・粗砂粒・ 褐粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第44図 PL.154	8	鉄製品 鋸	床上30cm 歯部片	長 幅	7.6 2.4	厚 重	0.7 17.21	鉄	幅2.4・厚さ0.2cm程のノコギリ破片で、先端は三角形で丸みを持つ、茎側へ7.5cmほどで破損し端部は錆化する。錆化により歯の形状は不鮮明だが7箇所ほどに不等辺三角形の歯が並ぶ形状が見られる。あさりの存在は不明。	
第44図 PL.154	9	鉄製品 錐	床直 柄部片	長 幅	4.3 0.7	厚 重	0.6 3.24	鉄	先端を山型に尖らせた、所謂ネズミ歯錐。歯から4.3cmで劣化破損、破損部から2.5cm程ではやや膨らんだ形状を示すがこれは錆化による変形と見られる。破損のため全長・柄の装着等は不明。	
第44図 PL.154	10	礫石器 敲石	床上20cm 完形	長 幅	11.2 4.5	厚 重	4.0 301.1	閃緑岩	棒状礫の下端礫稜部に敲打痕をもつ。	
第44図 PL.154	11	礫石器 多孔石	床上13cm 完形	長 幅	19.2 10.1	厚 重	7.1 1756.7	粗粒輝石安山岩	楕円礫の表裏面に断面形が漏斗状の孔を有する。孔周辺には敲打痕が残る。	

3区2号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 底	高 胴	厚 重				
第46図 PL.154	1	土師器 甕	床直～16cm 2/3	口 底	19.9 4.6	高 胴	27.2 21.2	細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第46図	2	須恵器 甕	床上30cm 口縁部片	口	20.0			細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形、回転方向不明。	

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長幅	厚	重			
第46図 PL.154	3	鉄製品 不詳	埋土 破片	長幅 3.1 1.1	厚 0.6	重 3.09	鉄	断面狭三角形の板状鉄製品で、端部は角張り他端部は劣化破損する。断面および平面形では刀子破片とも考えられるが、上面から見るとくの字に曲がり破損するため詳細は不明。	
第46図 PL.154	4	礫石器 石皿	床直 完形	長幅 42.6 24.0	厚 9.6 15000.0	重	粗粒輝石安山岩	大形扁平礫素材。正面に磨面をもち、磨面は緩やかに傾斜している。	
第46図 PL.154	5	礫石器 敲石	床下土抗2 1/2	長幅 (13.5) 5.7	厚 5.2	重 429.8	砂岩	正面および下端礫縁部に敲打痕を有する。	

3区3号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口高	口径	高			
第50図 PL.154	1	土師器 杯	カマド1 口縁部僅かに欠損	口高 11.5 3.9			細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、横ナデ下に僅かにナデ部分が残る。体部から底部は手持ちヘラ削り。	内面口縁部の一部にススが附着。
第50図 PL.154	2	土師器 杯	床直～12cm 3/4	口高 11.6 4.1			細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、横ナデ下に僅かにナデ部分が残る。体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第50図	3	土師器 杯	床上37cm 1/4	口径 13.9 11.2			細砂粒/良好/明赤褐	口縁部上半は横ナデ、下半はナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	内面体部に「作□一」と焼成後の刻書。
第50図	4	土師器 杯	床下土抗 1/4	口径 17.8 15.2			細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第50図	5	土師器 杯	掘方 1/2	口径 17.4 15.2	高 4.3		細砂粒/良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第50図	6	土師器 杯	床上51cm 2/3	口高 11.8 3.2			細砂粒/良好/明赤褐	外面に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第50図	7	土師器 杯	床上30cm 1/4	口高 12.0 3.2			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第50図	8	須恵器 杯蓋	床上35cm 破片	摘 2.1			細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付、天井部中心部は回転ヘラ削り。	
第50図	9	須恵器 杯蓋	床上32cm 摘部	摘 4.3			細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付、天井部中央は回転ヘラ削り。	
第50図	10	須恵器 杯蓋	床直～34cm 1/2	口 19.0			細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。天井部中央は回転ヘラ削り。	
第50図	11	須恵器 杯蓋	埋土 口縁部端部	口 18.0			細砂粒/還元焰/黄灰	ロクロ整形、回転右回り。天井部は周縁部付近まで回転ヘラ削り。	
第50図	12	須恵器 杯	床直 底部1/2	底台 10.2 10.0			細砂粒/還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラ削り後高台を貼付。	
第50図	13	須恵器 杯	埋土 底部片	底台 8.4 8.2			細砂粒/還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラ削り後高台を貼付。	
第50図	14	土師器 甕	床直～33cm 口縁部片	口 22.2			細砂粒・粗砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第50図 PL.154	15	土師器 甕	床直 口縁部1/3	口 21.8			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第50図	16	土師器 甕	カマド2 口縁部片	口 22.3			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第50図	17	土師器 甕	カマド2 口縁部片	口 20.6			細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第50図	18	土師器 甕	カマド2 口縁部片	口 20.5			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第50図	19	土師器 甕	床下土抗 口縁部～胴部 1/4	口胴 24.0 25.6			細砂粒・粗砂粒/良好/明赤褐	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第51図	20	土製品 平瓦	床直 破片				細砂粒・粗砂粒/還元焰/灰黄	上面は布面痕、下面は斜格子状叩き痕が残る。	
第51図 PL.154	21	鉄製品 鎌	床上32cm 柄欠損	長幅 7.6 0.8	厚 0.7 8.51	重	鉄	先端近くは断面0.6×0.2cmと平たく三角形に尖る。茎までは断面0.4×0.3cmの角形で茎との境を一周する形で段を有し、0.3×0.2cm角の茎になり0.6cm程で劣化破損する。	
第51図 PL.154	22	鉄製品 鎌	床直 基部側1/2	長幅 7.6 2.9	厚 0.6 22.19	重	鉄	先端部分を劣化破損する鉄鎌、柄装着部は右上端部をほぼ直角に折り曲げて形成する。研ぎ減りは明瞭でないが柄装着部端から4cm程でわずかに刃幅を減ずる。	

3区4号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口高	口径	高			
第54図	1	土師器 杯	カマド、床上 16cm 1/4	口 11.8			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部は上半にナデ部分が残る、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第54図	2	土師器 杯	床上37cm 1/4	口 13.8			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第54図 PL.154	3	土師器 杯	床上22～28cm 1/2	口高 15.2 4.4			細砂粒/良好/明褐	口縁部横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第54図	4	土師器 杯	床直～19cm 1/3	口 13.9			細砂粒/良好/明褐	口縁部は横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第54図	5	土師器 杯	床上6～20cm 1/3	口 19.8			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	

出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第54図	6	須恵器 杯蓋	埋土 口縁部端部片	口	10.8			細砂粒/還元焰/褐 灰	ロクロ整形、回転左回りか。天井部は周縁まで回転ヘラ削り。	
第55図 PL.155	7	土師器 甕	カマド 口縁部1/2、底部欠	口	19.5			細砂粒・粗砂粒/ 良好/明褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第55図 PL.154	8	土師器 甕	カマド、床下土 抗3・9、床上 7～28cm 口縁部～胴部上半	口 胴	21.9 20.7			細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第55図 PL.155	9	礫石器 磨石	床上8cm 完形	長 幅	7.7 4.8	厚 重	2.9 134.1	角閃石安山岩	正面に磨面を有する。	

3区6号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第57図 PL.155	1	須恵器 杯	床直 完形	口 底	9.1 5.0	高	2.3	細砂粒/酸化焰/ にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第57図	2	土師器 羽釜	カマド 口縁部～胴部片	口 鏝	23.2 27.5			細砂粒/良好/ にぶい褐	鏝は貼付。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削りか。内面は全面ヘラナデ。	
第57図 PL.155	3	埴輪 円筒	カマド 底部～胴部下半	底	14.4			細砂粒/良好/ にぶい赤褐	凸帯(断面台形状)は貼付。底部端部と凸帯の上下は縦位のハケ目(2cmあたり6本)。内面はヘラナデ。	1段目透孔 半円形3.5× 2.5cm、2段 目透孔 円形 径3.7cmか。
第57図	4	埴輪 円筒	カマド 口縁部～胴部上 半1/2	口	20.2			細砂粒/良好/ 明褐	凸帯(断面三角形に近い)は貼付。外面は口縁部と凸帯の上下が横ナデ、各段とも縦位のハケ目。内面は第3段目は斜めのハケ目を残すがその下位はヘラナデで縦位のハケ目がナデ消されている。	透孔 円形 か、4.0×? cm
第57図	5	埴輪 円筒	カマド 底部～胴部1/2	底	14.1			細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	凸帯(断面台形状)は貼付。外面は凸帯の上下が横ナデ、第1・2段とも縦位のハケ目。内面はヘラナデ。	透孔 楕円 形、4.0×5.0 cm
第57図	6	埴輪 形象	カマド 底部～基部1/3	底	15.5			細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	内外面とも縦位のハケ目、内面は一部ナデ消されている。	

3区7号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第59図	1	須恵器 杯	カマド 完形	口 底	9.4 4.2	高	3.4	細砂粒/酸化焰/ 灰黄褐	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	外面体部の一 部に煤が付着。
第59図	2	須恵器 杯	カマド 完形	口 底	8.9 3.3	高	2.7	細砂粒/酸化焰/ にぶい褐	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第59図	3	須恵器 杯	床直 完形	口 底	9.8 5.3	高	3.1	細砂粒/酸化焰/ 黄褐	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第59図	4	須恵器 杯	床直 完形	口 底	9.5 4.6	高	2.9	細砂粒/酸化焰/ 黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第59図 PL.155	5	須恵器 杯	床直 口縁部、底部一 部欠	口 底	12.6 5.9	高	4.6	細砂粒・粗砂粒・ 褐粒/酸化焰/橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第59図 PL.155	6	須恵器 椀	床直 完形	口 底	14.0 7.0	台 高	7.5 5.9	細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰・燻/ にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後高台を貼付。	
第60図	7	黒色土器 椀	床直 口縁部を僅かに 欠損	口 底	14.5 7.0	台 高	7.4 6.3	細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/ にぶい橙	内面黒色処理。ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後高台を貼付。内面はヘラ磨き。	
第60図 PL.155	8	灰釉陶器 椀	貯蔵穴2 口縁部一部欠	口 底	14.5 7.0	台 高	7.0 6.2	細砂粒/還元焰/ 灰白	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後高台を貼付。施釉方法は漬け掛け。	虎溪山1号窯 式期。
第60図	9	須恵器 長頸壺	床上17cm 頸部片					細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰黄	ロクロ整形、回転右回り。	
第60図	10	須恵器 羽釜	カマド 口縁部～体部 1/4	口 鏝	23.4 26.6			細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/橙	ロクロ整形か、回転不明。鏝は貼付、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第60図 PL.155	11	須恵器 羽釜	貯蔵穴1、カマ ド、床直 胴部一部欠	口 鏝	22.8 27.2	底 高	7.8 27.9	細砂粒・粗砂粒/ 酸化焰/浅黄橙	ロクロ整形か、回転不明。鏝は貼付、胴部はヘラ削り、底部はヘラナデ。内面胴部はヘラナデ。	
第60図	12	須恵器 甕	貯蔵穴1、床直 頸部～胴部	胴	34.2			細砂粒・粗砂粒/ 良好/ にぶい黄橙	ロクロ整形か。胴部上半は回転ヘラ削り、下半は不明。内面は器面剥落のため不明。	
第60図 PL.155	13	石製品 砥石	床直 完形?	長 幅	9.2 5.3	厚 重	2.4 121.1	砥沢石	4面使用だが、幅狭の左右側面の方が凹状を呈し、使用頻度の高さが窺える。上下端小口部では、鋭利な道具によると推定される断面V字状の線状痕が認められる。	
第60図 PL.155	14	鉄製品 刀子	床直 柄～刃部片	長 幅	11.4 2.2	厚 重	0.7 11.51	鉄	刃の大部分が劣化破損する刀子。棟・刃側ともに明瞭な関を持ち茎は7cm程で徐々に幅を減じ端部は丸みを持つ。鞘および柄の木質等は見られない。	

3区8号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	高				
第63図	1	土師器 杯	カマド 破片	口 最	12.4 12.7		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第63図 PL.155	2	須恵器 杯	カマド 1/3	口 底	12.2 7.2	高 3.3	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	
第63図	3	土師器 甕	床上7cm 口縁部片	口	20.8		細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第63図 PL.155	4	土師器 甕	床直 口縁部～胴部片	口	18.8		細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第63図 PL.155	5	鉄製品 不詳	床直 破片	長 幅	6.8 2.8	厚重 0.7 18.27	鉄	錆化した鉄製品で断面は2.2×0.3cmでわずかに狭台形状を示し、刃部等は認められず詳細は不明。	
第63図 PL.155	6	鉄製品 鎌	床上6cm 基部片	長 幅	9.8 4.2	厚重 0.8 33.23	鉄	刃先を欠損する鉄鎌、右上端部を直角よりやや深めに折り曲げ柄装着部を形成する。刃は薄く研ぎ減り等も不明瞭、刃先側はやや曲がり斜めに破損後錆化する。柄の木質等の痕跡は見られない。	

3区9号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	高				
第65図	1	土師器 杯	カマド 破片	口 高	11.0 (2.9)		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	
第65図	2	土師器 杯	カマド、床上7 cm 1/3	口 高	13.8 4.6		細砂粒/良好/橙	口縁部上半は横ナデ、下半ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第65図	3	土師器 杯	埋土 破片	口	13.8		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部上半は横ナデ、下半ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第65図 PL.156	4	土師器 甕	床直 口縁部1/4	口	22.0		細砂粒/良好/明赤 褐	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第65図	5	埴輪 円筒	床直 1/2	底	15.2		細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	内面に輪積み痕が残る。凸帯(断面台形状)は貼付、底部端部と凸帯の上下は横ナデ、第1・2段目は縦位のハケ目(2cmあたり7本)。内面はヘラナデ	
第65図 PL.156	6	鉄製品 鎌?	カマド 柄欠損	長 幅	7.0 1.4	厚重 0.6 6.46	鉄	先端部柳葉形で断面は薄い半円形でなだらかな関状に幅を減じ断面0.3cm角の茎状に移行する。鉄鎌と見られるが全体に錆化が著しく錆層に覆われ詳細な形状は不明瞭。	

3区10号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	高				
第67図	1	須恵器 杯蓋	床上11cm 1/2	口 高	7.1		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰白	ロクロ整形、回転右回り。摘みは貼付、天井部の中程は回転ヘラ削り。	摘み周囲は打ち欠きか。

3区11号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	高				
第69図 PL.156	1	土師器 杯	カマド 1/4	口 稜	15.3 13.6		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第69図	2	土師器 甕	カマド 頸部～胴部1/4	頸 胴	17.0 27.2		細砂粒/良好/明赤 褐	頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

3区12号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	高				
第71図	1	土師器 杯	床直 3/4	口 高	13.0 3.2		細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第71図	2	土師器 台付甕	貯蔵穴 胴部～台部	脚 胴	10.7 13.2		細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	胴部と脚部は接合。胴部から脚部上半はヘラ削り、端部は横ナデ。内面は胴部と脚部上半がヘラナデ、端部は横ナデ。	
第71図	3	土師器 短頸壺	床上7～17cm 口縁部～胴部 1/2	口 稜	9.3 10.2		細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	

4区1号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	高				
第72図 PL.156	1	土師器 杯	壁溝内 口縁一部欠	口 底	12.2 9.5	高 3.6	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。	9 C. II
第72図	2	須恵器 杯	カマド、貯蔵穴 1/2	口 底	13.7 6.7	高 3.1	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り無調整。	9 C. II
第72図 PL.156	3	須恵器 平瓶	床直 頸部～胴部上半	胴	12.9		細砂粒/還元焰/灰 白	ロクロ整形。胴部は天井部で閉塞する風船技法、頸部と胴部は接合。天井部にボタン状円盤を貼付。胴部上半はカキ目、下半はヘラ削り。	7 C. IV

4区2号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	高				
第75図	1	土師器 杯	掘方 破片	口	11.6		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	7 C. IV
第75図	2	須恵器 杯蓋	床直 2/3、摘み無し	口	11.0		細砂粒・粗砂粒/ 良好/灰	ロクロ整形、回転右回りか。摘みは貼付が剥落、天井部周辺部に手持ちヘラ削り。	7 C. IV

出土遺物観察表

4区3号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第77図	1	土師器 杯	カマド 1/2	口 最	9.9 10.4	高	3.5	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。	7 C . III
第77図	2	土師器 杯	カマド 1/4	口 最	12.0 12.5			細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。	7 C . III
第77図 PL.156	3	土師器 杯	掘方 1/3	口 最	12.4 12.8	高	3.7	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちへら削り。	7 C . IV
第77図 PL.156	4	須恵器 杯	床上20cm 1/2	口 底	10.8 5.4	高	4.2	細砂粒/還元焰/黄 灰	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転へら起し。	
第78図	5	土師器 甕	床直～32cm 口縁部～胴部	口 胴	20.6 15.8			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第78図 PL.156	6	土師器 甕	床直 口縁部～胴部 1/2	口 胴	21.0 18.6			細砂粒・粗砂粒/ 良好/浅黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第78図	7	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部片	口 胴	21.4 18.8			細砂粒・粗砂粒・ 褐色粒/良好/明赤 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第78図 PL.156	8	土師器 甕	カマド 胴部一部欠損	口 底	23.0 6.2	高 胴	34.1 20.2	細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はへら削り。内面は底部から胴部にへらナデ。	

4区4号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第81図 PL.156	1	土師器 杯	埋土 2/3	口 底	10.4 8.0	高	3.3	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちへら削り。	
第81図	2	土師器 甕	埋土～胴上位 口縁部片	口	19.8			細砂粒/良好/橙	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第81図	3	土師器 甕	埋土～胴上位 口縁部片	口	19.8			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	

4区5号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第83図	1	土師器 杯	貯蔵穴 完形	口 最	9.4 10.0	高	3.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。	
第83図	2	土師器 杯	カマド 1/2	口 最	9.9 10.4			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部上半にナデが残る、下半から底部は手持ちへら削り。	
第83図	3	土師器 杯	貯蔵穴 口縁一部欠	口 最	14.2 14.6	高	4.7	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。	
第82図 PL.156	4	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部	口 胴	19.6 24.0			細砂粒・褐粒/良 好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	

4区6号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第85図 PL.156	1	礫石器 不明	床上6cm 完形	長 幅	13.7 6.3	厚 重	4.8 500.1	粗粒輝石安山岩	断面三角形に近い棒状礫の正面に磨面と縦方向の線状痕を有する。	

4区7号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第86図 PL.157	1	土師器 杯	床上15～25cm 3/5	口 高	12.3 3.7			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちへら削り。	
第86図	2	土師器 杯	埋土 1/2	口 高	12.0 3.3			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。	
第86図	3	土師器 杯	埋土 1/4	口	11.9			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちへら削り。	
第86図	4	土師器 杯	埋土 1/4	口 稜	16.3 15.2			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。体部は器面摩滅のため単位不明。	
第86図	5	土師器 杯	埋土 1/3	口 稜	16.6 14.4			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	
第87図	6	土師器 甕	床上15cm 口縁部～胴上位	口	17.6			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第87図 PL.157	7	土師器 甕	床上9～23cm 2/3	口 底	23.0 5.0	高	31.3	細砂粒/良好/にぶ い橙	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はへら削り。内面は底部から胴部にへらナデ。	

1区9号竪穴住居遺構遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第89図 PL.157	1	土師器 杯	床直 1/3	口 稜	15.2 12.6	高	5.1	多量の細砂粒・粗 砂粒・褐粒/良好/ 橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。内面はへら磨き。	
第89図	2	土師器 杯	カマド 1/3	口 稜	13.6 12.4			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。内面はへら磨き。	内面黒色処理か、2次被熱を受けている。

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第89図	3	土師器 杯	床上16cm 1/4	口 稜	13.0 11.4		細砂粒/良好・燻 か/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第89図 PL.157	4	土師器 杯	カマド 1/3	口 稜	17.4 15.7	0	細砂粒/良好/にぶ い橙	口唇端部に平坦面をつくり、2条の凹線が巡る。口縁部横 ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第89図	5	土師器 高杯	床上33cm 杯底部～脚部上 半				多量の細砂粒・石 英/良好/にぶい黄 橙	脚部は縦位のヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第90図 PL.157	6	土師器 甕	カマド 3/4	口 底	18.4 6.3	高 胴 35.7 21	細砂粒/良好/橙	内面に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘ ラ削り、胴部の整形は付着土のため単位不明。内面は底部 から胴部にヘラナデ。	
第90図	7	土師器 甕	カマド、床上 13cm 口縁部～胴部 1/2	口	20.2		細砂粒・粗砂粒/ 良好/黄褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第89図 PL.157	8	礫石器 敲石	床直 略完形	長 幅	18.0 7.8	厚 重 4.1 842.0	粗粒輝石安山岩	上端部に剥離痕を有する。正面の一部に摩滅が認められる。	

1区10号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第92図	1	土師器 杯	埋土 1/4	口 稜	13.1 11.7		細砂粒/良好/赤灰	口唇端部に平端面をつくる。口縁部は横ナデ、体部(稜下) から底部は手持ちヘラ削り。	内外面とも漆 塗布か。
第92図 PL.157	2	土師器 杯	埋土 1/2	口 稜	13.2 13.0	高 4.5	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第92図	3	土師器 杯	埋土 1/4	口 稜	13.0 14.0		細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	内外面とも漆 塗布か。
第92図	4	土師器 杯	床上23cm 口縁部欠	口 高	(12.4) (3.8)		細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	口縁部をすべて打ち欠き二次利用。稜下は手持ちヘラ削り。	
第92図	5	土師器 杯	埋土 破片	口 稜	12.0 13.6		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第92図	6	須恵器 杯蓋	埋土 口縁部～底部片	口 稜	14.0 12.5		細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転方向不明。口唇部に1条の凹線が巡る。 天井部中央(稜内)はヘラ削り。	
第92図 PL.157	7	須恵器 壺	床上9cm 1/2	口 高	11.4 17.8	胴 18.8	細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。内面に輪積み痕が残る。口縁部 は2段の波状文、胴部上半はカキ目後中頃に1段の波状文、 下半は叩き痕が残る。内面は口縁部上にカキ目、頸部に接 合時の指頭痕、胴部下半にアテ具痕が残る。	
第92図	8	土師器 小型壺	床上22～24cm 口縁部1/2欠	口 底	9.0 4.9	高 胴 11.8 11.0	細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面 は底部から胴部にヘラナデ。	
第93図 PL.158	9	土師器 壺	床上17cm 口縁部一部欠	口 底	12.8 5.5	高 胴 19.2 16.5	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り後ヘラ磨き、底 部はヘラ削り。内面は口縁部上半にヘラ磨き、底部から胴 部にヘラナデ。	
第92図	10	土師器 小型壺	埋土 体部～底部	底 胴	5.6 9.4		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はナデ。	
第93図 PL.158	11	土師器 甕	貯蔵穴、床上9 ～14cm 底部欠	口 胴	16.0 17.0		細砂粒・粗砂粒・ 長石他/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	
第93図 PL.158	12	土師器 甕	床上14～18cm 2/3	口 底	18.4 7.8	高 胴 30.5 21.3	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、一部に土付着や器面摩滅のため 単位不明。胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第93図 PL.158	13	土師器 甕	床上13～18cm 3/4	口 底	17.3 10.5	高 胴 36.2 28.0	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り、胴部は器面摩滅 のため単位不明。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第93図 PL.158	14	礫石器 磨石	埋土 完形	長 幅	9.9 6.6	厚 重 4.1 380.5	粗粒輝石安山岩	扁平楕円礫素材。表裏面に磨面をもつ。	

1区12号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第96図	1	土師器 甕	床直 口縁部片	口	17.5		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。	
第96図	2	土師器 甕	床上7cm 胴部片				細砂粒/良好/黄褐	外面はヘラ削り、内面はヘラナデ。	

1区16号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第98図 PL.158	1	土師器 杯	床直 口縁部一部欠	口 稜	14.2 12.5	高 4.7	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手 持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き。	
第98図	2	土師器 杯	貯蔵穴 口縁1/2欠	口 稜	14.2 12.5	高 5.1	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手 持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き。	
第98図 PL.158	3	土師器 椀	床上8cm 1/2	口 稜	11.2 11.4	底 高 5.6 6.4	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手 持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き。	

1区17号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第99図	1	土師器 杯	埋土 1/3	口 稜	12.0 11.2	高 0	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部に段を有す。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部 は手持ちヘラ削り。	

出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 稜	高	胴			
第99図 PL.159	2	土師器 杯	床直 1/2	口 稜 13.4 13.8	高	3.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第99図	3	土師器 杯	埋土 1/3	口 稜 13.7 12.4	高	3.9	細砂粒・褐粒/良 好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第99図 PL.159	4	須恵器 提瓶	床直～23cm 2/3	口	8.5	高	28.7	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。胴部は球面側で閉塞か、頸部は接合。肩部に一对の把手が貼付。口縁部から頸部は3条の凹線で区画後波状文、胴部はカキ目。内面は平坦面側にカキ目が残る。
第99図 PL.159	5	土師器 小型甕	P2、床直～6 cm 口縁部一部欠	口 底 11.4 6.2	高 胴	11.2 13.0	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部は上位から中位はヘラナデ、下位と底部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第99図 PL.159	6	土師器 小型甕	床直 口縁部一部欠	口 底 14.4 6.6	高 胴	13.4 15.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り、器面剥落のため不鮮明、底部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第100図 PL.159	7	土師器 甕	床直～7cm 口縁部・胴部一 部欠	口 底 17.0 7.5	高	22.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第101図 PL.159	8	土師器 甕	床直～14cm 口縁～胴部2/3	口	19.0		細砂粒・粗砂粒・ 細礫/良好/にぶい 橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第100図	9	土師器 甕	床直～10cm 胴部～底部1/2	底	5.9		細砂粒・粗砂粒・ 細礫/良好/にぶい 橙	胴部は縦位のヘラ削り後下位の一部に横位のヘラ削り、底部もヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第101図 PL.159	10	土師器 甕	床直～37cm 口縁部欠・肩部 1/2欠	底 胴 9.6 45.5	頸	23.2	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	内面胴部に輪積み痕が残る。頸部から胴部はハケ目(1cmあたり4～5本)、胴部中位にヘラ削り、器面は剥落箇所があり詳細不鮮明、底部には木葉痕が残る。内面はヘラナデか。	

1区18号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 稜	高	胴			
第104図	1	土師器 杯	カマド、貯蔵穴 1/2	口 稜 12.7 11.2	高	4.1	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第104図 PL.160	2	土師器 杯	床直 1/2	口 稜 13.7 11.8	高	4.8	細砂粒/良好・軟 質/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、体部へラ削りは器面摩滅のため不鮮明。	
第104図	3	土師器 杯	埋土 破片	口 稜 12.8 13.2			細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第104図 PL.160	4	土師器 甕	貯蔵穴、床直、 土抗 口縁～胴部1/2	口	20.8		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第104図	5	土師器 甕	貯蔵穴、床直 胴部～底部	底	3.2		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第104図	6	土師器 甕	貯蔵穴、床直～ 7cm 胴部				細砂粒/良好/にぶ い黄橙	胴部はヘラ削り、一部に土付着のため単位不明。内面はヘラナデ。	

1区19号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 稜	高	胴			
第106図	1	土師器 杯	床直 2/3	口 稜 12.0 10.8			細砂粒/良好/にぶ い橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)はヘラナデ、底部は木葉痕が残る。内面は放射状、後に横位のヘラ磨き。	
第106図 PL.160	2	土師器 杯	埋土 1/3	口 稜 13.6 12.2			細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面は口縁部に横位、底部に放射状ヘラ磨き。	
第106図	3	土師器 高杯	埋土 杯底部～脚部上 半				細砂粒/良好/にぶ い橙	杯身部は内面黒色処理。脚部は縦位のヘラ削り。内面は杯身部がヘラ磨き、脚部はヘラナデ。	
第106図 PL.160	4	土師器 甕	床直 1/2、底部欠	口 底 14.6 (8.8)	高 胴	(24.0) 21.2	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	底部は中心よりずれて成形か。

1区20号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 稜	高	胴			
第107図	1	土師器 杯	カマド 口縁部一部欠	口 稜 11.5 10.4	高	3.5	細砂粒/軟質/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第107図 PL.160	2	土師器 杯	床上8cm 完形	口 稜 12.0 11.2	高	3.9	細砂粒/軟質/浅黄 橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第107図	3	土師器 杯	床直 3/4	口 稜 11.7 11.0	高	4.2	細砂粒/軟質/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、器面摩滅のため単位不明。	
第108図 PL.160	4	土師器 鉢	床直 口縁部一部欠	口 底 14.0 7.9	高	12.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい褐	甕を途中で鉢に変更か。口縁部の成形は雑、外面に輪積み痕が残る。体部下位はヘラ削り、底部は木葉痕が残る。内面は全面ヘラナデ。	
第108図 PL.160	5	土師器 甕	カマド、床直 口縁部・胴部一 部欠損	口 底 18.0 3.6	高	32.3	細砂粒・粗砂粒・ 小礫/良好/にぶい 黄橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第108図 PL.160	6	土師器 甕	カマド 口縁部・胴部一 部欠損	口 底 21.5 5.2	高	38.2	細砂粒・粗砂粒・ 小礫・石英/良好/ 橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	



挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第108図	7	土師器 甕	床直 口縁部～胴上位 1/2	口 稜	18.8		細砂粒・石英/良 好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	
第108図 PL.161	8	土師器 甕	カマド、貯蔵穴、 床上7cm 胴部一部欠	口 底	26.2 8.1	高 胴 29.8 28.4	細砂粒・粗砂粒・ 片岩/良好/明褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面 は底部から胴部にヘラナデ。	
第108図 PL.161	9	石製品 砥石	床直 完形	長 幅	20.9 6.3	厚 重 7.7 1721.3	粗粒輝石安山岩	角柱状の礫を素材とする。正面に平滑面を形成しているこ とから砥石としての機能を想定した。左側面上部に剥離痕 があり砥石の可能性もある。	

1区21号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第109図	1	土師器 杯	埋土 1/4	口 稜	12.8 13.4		細砂粒/良好/灰褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、 体部ヘラ削りは器面剥落のため不鮮明。	
第109図	2	土師器 杯	埋土 破片	口 稜	11.4 11.4		細砂粒/良好/にぶ い褐	口唇端部に平坦面を有す。口縁部は横ナデ、体部(稜下)は 手持ちヘラ削り。	

1区22号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第111図 PL.161	1	土師器 杯	埋土 3/4	口 稜	12.3 11.3	高 4.2	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第111図	2	土師器 甕	床直 胴部下位～底部 片	底	3.8		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	外面胴部の一部 に土付着。

1区23号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第113図 PL.161	1	土師器 杯	貯蔵穴、床上 26cm 口縁部一部欠	口 稜	11.6 13.4	高 4.3	細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	口唇端部に平坦面を有す。口縁部は横ナデ、体部(稜下)か ら底部は手持ちヘラ削り。	
第113図 PL.161	2	土師器 小型壺	床直 口縁部一部欠	口 高	9.3× 8.8 10.2	胴 15.0	細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り、一部 器面剥離のため単位不鮮明。内面は底部から胴部がヘラナ デ。	口縁部は楕円 形を呈す。
第113図	3	土師器 甕	埋土 底部～胴下位	底	5.8		細砂粒・粗砂粒・ 片岩/良好/にぶ い褐	底部と胴部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第113図	4	土師器 甕	床直 頸部～胴部	頸 胴	13.5 26.5		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第113図 PL.161	5	礫石器 不明	床直 完形	長 幅	15.0 4.4	厚 重 4.4 482.2	角閃石安山岩	正面および左右側面に横位の線状痕と敲打痕を有する。	
第113図 PL.161	6	礫石器 不明	床上6cm 完形	長 幅	14.0 5.4	厚 重 5.5 542.6	粗粒輝石安山岩	正面平坦部に磨面、裏面に鋭利な道具によると推定される 線状痕が認められる。	
第114図 PL.161	7	礫石器 磨石	床直 完形	長 幅	14.2 7.6	厚 重 5.3 720.4	粗粒輝石安山岩	正面に磨面と敲打痕が見られる。	
第114図 PL.161	8	礫石器 磨石	床直 略完形	長 幅	15.0 7.4	厚 重 4.7 723.0	粗粒輝石安山岩	表裏面および側面に磨面をもつ。	
第114図 PL.161	9	礫石器 石皿	床上2cm 略完形	長 幅	15.3 13.0	厚 重 4.3 786.3	粗粒輝石安山岩	扁平礫素材。正面に磨面が見られ、やや凹状を呈する。	

1区24号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第116図 PL.161	1	土師器 杯	床直 完形	口 稜	10.2 10.0	高 3.5	細砂粒/やや軟質/ 橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、 器面摩滅のため単位不明。	
第116図	2	土師器 杯	埋土 完形	口 稜	10.8 10.2	高 3.7	細砂粒/やや軟質/ 橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、 器面摩滅のため単位不明。	
第116図	3	土師器 杯	床上7cm 完形	口 稜	11.0 10.3	高 3.3	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第116図	4	土師器 杯	床上10cm 完形	口 稜	11.0 9.8	高 3.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第116図	5	土師器 杯	床上7cm 口縁部一部欠	口 稜	11.0 10.4	高 4.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第116図 PL.161	6	土師器 杯	床直 完形	口 稜	11.1 10.2	高 4.2	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第116図	7	土師器 杯	床上6cm 完形	口 稜	11.2 10.5	高 3.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第116図	8	土師器 杯	床直 完形	口 稜	11.2 9.8	高 3.8	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第116図 PL.161	9	土師器 杯	床直 完形	口 稜	11.3 10.3	高 3.9	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第116図 PL.161	10	土師器 杯	床直 完形	口 稜	11.4 10.4	高 3.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第116図	11	土師器 杯	床直 完形	口 稜	11.4 10.0	高 3.9	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	

出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 径	高	厚			
第116図	12	土師器 杯	床直～7cm 完形	11.4 10.6	高	3.9	細砂粒/やや軟質/ 橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、 器面摩滅のため単位不明。	
第116図	13	土師器 杯	床上7cm 完形	11.5 10.5	高	4.0	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第116図	14	土師器 杯	床直 完形	11.8 11.0	高	4.9	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第116図	15	土師器 杯	床直 完形	11.8 11.0	高	3.9	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第116図 PL.161	16	土師器 杯	床上11～14cm 1/2	11.8 10.2	高	4.4	細砂粒/良好・燻/ 橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第116図	17	土師器 杯	埋土 完形	12.0 11.6	高	4.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第116図	18	土師器 杯	床直 口縁部1/3欠	12.0 11.2	高	4.7	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	焼成時の歪が みられる。
第116図 PL.161	19	土師器 杯	床直 口縁1/2欠	13.8 10.4	高	5.5	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。 内面は全面ヘラ磨き。	
第116図 PL.161	20	土師器 提瓶	床直 口縁部一部欠	8.8 14.8	厚 高	12.0 21.2	細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。胴部と頸部は接合。胴部は平坦 面側はカキ目か、球面側はヘラ削り。	
第116図	21	土師器 甌	床上12cm 口縁部～底部一 部欠	18.0 7.7	高 孔	18.2 1.6	細砂粒・粗砂粒/良 好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り、一部 器面摩滅のため単位不明。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第116図 PL.162	22	土師器 小型甕	床上34cm 口縁部一部欠	9.8 6.2	高 胴	13.5 14.8	細砂粒・粗砂粒/良 好/にぶい黄褐	外面は器面剥落のため整形不明。内面は口縁部が横位のヘ ラ磨き、胴部はヘラナデ。	
第116図 PL.162	23	土師器 小型甕	床直 完形	12.1 5.5	高	12.5	細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から 胴部にヘラナデ。	
第117図 PL.162	24	土師器 甕	カマド 完形	11.4 7.0	高 胴	18.5 15.4	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から 胴部にヘラナデ。	
第117図	25	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部 2/3	17.8 8.0	高	33.5	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面 は底部から胴部にヘラナデ。	
第117図 PL.162	26	土師器 甕	カマド 胴部一部欠損	20.0 5.4	高	34.1	細砂粒・粗砂粒・ 石英/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面 は底部から胴部にヘラナデ。	
第117図 PL.162	27	土師器 甕	カマド 胴部一部欠損	19.8 5cm 前後	高	37.8	細砂粒・粗砂粒・ 石英/良好/にぶい 褐	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から 胴部にヘラナデ。	

1区27号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 径	高	厚			
第120図 PL.162	1	土師器 杯	床上10cm 完形	10.7 10.8	高	3.8	粗砂粒・長石粒/ 良好/にぶい橙	口縁部は外傾が弱く立ち上がる。横ナデ。底部外面は手持 ちヘラ削り。内面はナデ。	口縁部外面と 内面全面に赤 色塗彩。
第120図	2	土師器 杯	カマド 2/3	10.9 10.2	高	3.8	赤色粘土粒少/良 好/橙	口縁部は横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	器面は摩滅。
第120図	3	土師器 杯	床直 3/4	11.0 10.0	高	3.8	赤色粘土粒/良好/ 橙	口縁部は底部との間に稜を有する。横ナデ。底部外面は手 持ちヘラ削り。内面はナデ。	外面は摩滅。
第120図	4	土師器 杯	床直 完形	11.1 10.2	高	4.6	赤色粘土粒少/良 好/橙	器形は大きく歪んでいる。口縁部は底部との間に弱い稜を 有する。横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	器面は摩滅。
第120図	5	土師器 杯	床上7cm 完形	11.5 10.6	高	3.8	赤色粘土粒少/良 好/橙	口縁部は底部との間に弱い稜を有する。横ナデ。底部外面 は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	底部外面は摩 滅。
第120図	6	土師器 杯	床上9cm 完形	11.7 11.0	高	4.1	赤色粘土粒/良好/ 橙	器形はやや歪んでいる。口縁部は底部との間に弱い稜を 有する。横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	
第120図	7	土師器 杯	床直～17cm 完形	12.0 10.6	高	4.6	赤色粘土粒少/良 好/橙	器形はやや歪んでいる。口縁部は横ナデ。底部外面は手持 ちヘラ削り。内面はナデ。	器面は摩滅。
第120図	8	土師器 杯	埋土 完形	12.1 10.6	高	4.6	粗砂粒少・雲母粒 /良好/橙	口縁部は底部との間に稜を有する。外面中位には弱い段が 見られる。横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	器面に炭素吸 着。
第120図 PL.162	9	土師器 杯	カマド 2/3	14.0 12.2	高	4.5	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は底部との間に稜を有する。中位には段をなす。先 端は内側が削れ尖る。横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。 内面はナデ。	内外面ともや 炭素吸着。
第120図 PL.163	10	土師器 杯	床直 完形	17.7 16.4	高	7.6	粗砂粒・細砂粒少 /良好/橙	口縁部は底部との間に稜を有する。中位には段をなす。横 ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。底部の中 心に焼成後の穿孔あり。	外面の一部に 黒斑あり。
第120図 PL.162	11	土師器 高杯	床上7cm 脚部一部欠	14.5 11.0	高	8.7	粗砂粒・軽石少/ 良好/橙	杯部は浅く、皿状を呈する。上半部は横ナデ。下半部は手 持ちヘラ削り。内面には中心から放射状にヘラ磨き。脚部 は上半部が縦位のヘラ削り。裾部は横ナデ。内面は横位の ヘラ削り。	
第120図 PL.162	12	土師器 高杯	床上6cm 完形	14.1 11.3	高	8.5	粗砂粒/良好/明赤 褐	杯部は浅く皿状を呈する。上半部は横ナデ。下半部から脚 部上半部は縦位のヘラ削り。内面はナデ。脚部は裾部内外 面とも横ナデ。内面は上半部にヘラ削り。以下はナデ。	
第120図	13	土師器 高杯	床上6cm 口縁部一部欠	14.8 11.3	高	8.7	粗砂粒/良好/明赤 褐	器肉は全体に厚い。口縁部は浅く皿状を呈する。上半部は 横ナデ。下半部はヘラ削り。内面は中心から口縁部先端に 向けて放射状のヘラ磨き。脚部外面は上半部が縦位のヘラ 削り。裾部は横ナデ。内面は上半部にヘラ削り。	杯部内面に黒 色の付着物。
第120図 PL.163	14	土師器 小型甕	床直 完形	11.4 4.6	高	10.3	粗砂粒/良好/明黄 褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜め・縦位のヘラ削り。内面 は横位のヘラナデ。底部外面はナデ。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 底	高	胎土/焼成/色調 石材・素材等				
第120図 PL.163	15	土師器 甕	床直 完形	口 底	16.9 7.4	高	16.7	粗砂粒・細砂粒/良 好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜めの、底部寄り は横位のヘラナデ。底部外面もヘラ削り。内 面は横位のヘラナデ。	器面に炭素吸着。やや摩滅。
第121図 PL.163	16	土師器 甕	カマド 口縁部・胴部一 部欠	口 底	20.4	高	32.0	粗砂粒・軽石粒/ 良好/にぶい褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位に3回ほどに 分けてヘラ削り。底部寄りは横位。内面は横 位のヘラナデ。	被熱。外面の一部に黒色の 付着物。
第121図 PL.163	17	土師器 甕	カマド 口縁部一部欠	口 底	23.4 5.0	高	35.5	粗砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位の、最下位 底部寄りは斜横位のヘラ削り。内面は横位の ヘラナデ。内面の底部近くに黒色の付着物。	被熱。外面に粘土・煤付着。
第121図 PL.163	18	土師器 甕	カマド 3/4	口 底	18.8	高	32.2	粗砂粒・赤色粘土 粒/良好/にぶい橙	口縁部は3回に分けて横ナデ。胴部外面は斜 横位・斜めのヘラ削り。内面は横位のヘラナ デ。	胴部外面に黒斑。
第121図 PL.164	19	土師器 甕	カマド 2/3	口 底	19.3 8.7	高	32.3	小礫・粗砂粒・ チャート粒・長石 粒/良好/明赤褐	口縁部は横ナデ。胴部外面は上位・中位・下 位と斜め・斜横位のヘラ削り。内面は横位・ 斜めのヘラナデ。底部外面はヘラ削り。	胴部外面下位に黒斑。
第122図 PL.164	20	土師器 甕	床直 完形	口 底	22.2 8.4	高	38.0	粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は4回ほどに分 けて斜め・斜横位のヘラ削り。内面はヘラナ デ。	底部外面周辺に黒斑。
第121図	21	土師器 甕	床直 胴部中位～底部	底	8.7			粗砂粒多/良好/橙	胴部外面は斜横位から横位のヘラ削り。内 面は横位のヘラナデ。一部にヘラ削り。胴部 中位に直径0.6cmの焼成後の穿孔が一孔あ り。	器面は摩滅。
第122図 PL.163	22	須恵器 甕	床上24cm 口縁部～頸部 1/3	口 底	23.1			粗砂粒・白色鈹物 粒・海綿骨針/還 元焰/灰	外面の口縁部先端直下に沈線1条。中位は 微隆起の突帯で区画。その上下に波状文を1 段ずつ配す。	

1区28号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 底	高	胎土/焼成/色調 石材・素材等				
第124図	1	土師器 杯	埋土 2/3	口 底	10.0 9.8	高	2.9	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第124図	2	土師器 杯	東壁急斜面 3/4	口 底	10.6 9.8	高	3.5	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第124図	3	土師器 杯	床上20cm 3/4	口 底	12.0 11.0	高	3.9	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第124図 PL.164	4	土師器 杯	埋土 3/4	口 底	11.0 11.2	高	3.2	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第124図 PL.164	5	土師器 杯	東壁急斜面 口縁部～底部一 部欠	口 底	11.6 12.6	高	3.8	細砂粒/良好・燻/ 浅黄橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。内面底部は花卉状ヘラ 磨き。	
第124図 PL.164	6	土師器 杯	床上20cm 2/3	口 底	11.8 12.1	高	4.9	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。	外面の一部に煤が 付着。
第124図 PL.164	7	土師器 大型杯	床上34～38cm 1/3	口 底	17.8 17.9	高	8.7	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第124図	8	須恵器 高杯	床上12cm 杯部口縁部一部 欠・脚部欠損	口 底	13.1			細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回り。脚部と接合。 底部は回転ヘラ削り。	
第125図 PL.164	9	土師器 甕	床直～10cm 口縁部～胴部 1/2	口 底	19.2 17.6			細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ち ヘラ削り。	
第125図	10	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部 1/3	口 底	22.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ち ヘラ削り。	
第125図 PL.164	11	土師器 甕	床上18cm 2/3	口 底	18.2 8.6	高	34.5 27.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部 はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラ ナデ。	
第125図	12	土師器 甕	床上30cm 胴部～底部	底	6.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナ デ。	

1区30号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 底	高	胎土/焼成/色調 石材・素材等				
第127図	1	土師器 杯	埋土 1/4	口 底	11.0 10.6			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。	
第127図 PL.165	2	土師器 杯	床上24cm 口縁部2/3欠	口 底	13.2 11.6	高	5.3	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜 下)から底部は手持ちヘラ削り。内面はヘ ラ磨き。	
第127図	3	土師器 杯	床上20cm 破片	口 底	12.8 10.9			細砂粒/良好/にぶ い橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜 下)から底部は手持ちヘラ削り。内面はヘ ラ磨き。	

2区1号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 底	高	胎土/焼成/色調 石材・素材等				
第130図	1	土師器 杯	床上36cm 1/3	口 底	11.0 9.2			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜 下)から底部は手持ちヘラ削り。内面は口 縁部が横位、底部から体部が放射状のヘ ラ磨き。	
第130図	2	土師器 杯	床上21cm 2/3	口 底	12.6 11.0	高	4.5	細砂粒/良好/にぶ い橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜 下)から底部は手持ちヘラ削り、器面摩滅 のため単位不鮮明。内面は口縁部が横位 、底部から体部が放射状のヘラ磨き。	
第130図	3	土師器 杯	床上48cm 1/3	口 底	13.4 12.6	高	3.9	細砂粒・粗砂粒/ 良好/褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は 手持ちヘラ削り。	

出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第130図	4	土師器 杯	床上9cm 2/3	口 稜	13.4 12.1	高 4.0	細砂粒/良好/橙	口縁部に2条の凹線が巡る(有段口縁部)。口縁部は横ナデ、 体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第130図	5	土師器 高杯	床上24cm 杯部底～脚部上 部				細砂粒/良好/にぶ い橙	杯身部と脚部は接合。杯身部は内面黒色処理。杯身部底部 から脚部はヘラ削り、脚部上位は器面摩滅のため不鮮明。 内面は杯身部がヘラ磨き、脚部はヘラナデ。	
第130図 PL.165	6	土師器 鉢	カマド 口唇部一部欠損	口 底	10.4 6.0	高 6.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部が横ナデの他は内外面とも器面摩滅のため不鮮明。	
第130図	7	土師器 鉢	カマド、床上 10cm 口縁部～体部 1/3	口 最	13.2 15.0		細砂粒/良好/にぶ い褐	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、体部は縦 位のヘラ削り。内面体部はヘラナデ。	
第130図	8	須恵器 杯身	床上44cm 2/3	口 稜	12.8 15.3	高 4.7	細砂粒/還元焰/灰 黄	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転ヘラ削り。	
第130図	9	土師器 短頸壺	床上24cm 2/3	底 胴	5.4 11.5		細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部上半はナデ、下半はヘラ削 り、底部は木葉痕が残る。内面底部はヘラナデ。	
第130図 PL.165	10	土師器 短頸壺	床上21～37cm 口縁部～胴部一 部欠	口 底	9.4 6.6	高 胴 9.5 12.2	細砂粒/良好/にぶ い橙	内面黒色処理。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り、 下半は器面摩滅のため単位不鮮明。底部は木葉痕が残る。 内面胴部はヘラ磨き。	
第130図	11	土師器 短頸壺	床上42cm 2/3	底 頸	6.9 10.2	胴 12.4	細砂粒/良好/にぶ い橙	内面黒色処理。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。 底部はヘラ削りであるが一部木葉痕が残る。内面胴部は放 射状ヘラ磨き。	
第130図	12	土師器 高杯	床上19～33cm 杯部底～脚部				細砂粒・粗砂粒・ 褐色粒/良好/にぶ い黄橙	杯身部と脚部は接合。杯身部は内面黒色処理。杯身部体部 上半はヘラ磨き、下半から脚部中位はヘラ削り、下位は横 ナデ。内面は杯身部がヘラ磨き、脚部はヘラナデ。	
第130図	13	土師器 台付甕	床上38cm 底部～台部上部				細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	甕身部と脚部は接合、甕身部から脚部は縦位のヘラナデ。 内面は甕身部・脚部ともヘラナデ。	
第130図 PL.165	14	土師器 甕	カマド、床上6 ～16cm 3/4	口 底	12.6 6.0× 4.5	高 18.3	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から 胴部にヘラナデ、器面剥落のため単位不明。	底部は不整形 を呈す。
第131図 PL.165	15	礫石器 石皿	埋土 完形	長 幅	15.6 11.5	厚 重 4.7 1426.9	粗粒輝石安山岩	扁平礫素材。表裏両面に磨面を有する。	
第131図 PL.165	16	礫石器 石皿	埋土 完形	長 幅	32.0 20.2	厚 重 14.8 16400.0	粗粒輝石安山岩	高さのある大形礫素材。両面に磨面をもつ。正面中央部には 敲打痕に近い作業痕跡が残る。	

2区3号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第132図	1	土師器 杯	床直 2/3	口 稜	12.6 11.2	高 3.6	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。 内面底部はヘラナデ。	
第132図 PL.165	2	土師器 杯	床直～10cm 口縁部1/2欠	口 稜	12.8 10.4	高 3.6	細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。 内面底部はヘラナデ。	
第132図	3	土師器 杯	床上14cm 1/3	口 稜	13.3 9.7	高 4.1	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第132図	4	土師器 杯	床直 口縁部1/3欠	口 稜	12.9 10.5	高 3.9	細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第132図	5	土師器 杯	床直 1/3	口 稜	12.8 13.0	高 4.6	細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第132図	6	土師器 杯	カマド 1/3	口 稜	15.4 11.4		細砂粒/良好・燻/ にぶい褐	口縁部は横ナデ。体部(稜下)から底部はヘラ削り。	高杯か。
第132図 PL.165	7	土師器 杯	床直 口縁部一部欠	口 高	11.4 5.4		細砂粒/良好/灰黄	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、稜下はナデ後ヘラ磨きか、 単位不鮮明。内面は放射状ヘラ磨き。	
第132図	8	土師器 杯	床直～10cm 2/3	口 稜	13.1 12.3	高 3.3	細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第132図	9	土師器 杯	カマド 1/3	口	14.4		細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第132図	10	土師器 高杯	床直 脚上半				細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内面に輪積み痕が残る。外面はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第132図 PL.165	11	土師器 鉢	床直～6cm 1/3	口 高	12.6 9.6		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部から底部はヘラ削りか、器面摩滅の ため不鮮明。内面は底部から体部にヘラナデ。	

2区4号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第136図	1	土師器 杯	埋土 破片	口 稜	12.8 12.3		細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第136図	2	土師器 杯	埋土 破片	口 稜	12.8 9.6		細砂粒/良好/赤褐	口縁部に2条の凹線が巡る(有段口縁部)。口縁部は横ナデ、 底部(稜下)は手持ちヘラ削り。	
第136図	3	土師器 高杯	床上8cm 脚部				細砂粒/良好/橙	脚部はヘラ削りか、器面摩滅のため単位は不明。内面はヘ ラナデ。	
第136図 PL.165	4	土師器 小型甕	床直～29cm 底部欠	口 胴	13.4 14.4		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り、上位から中位 は器面摩滅のため単位不明。内面胴部はヘラナデ。	
第136図	5	土師器 甕	床上7cm 胴部～底部1/3	底	7.2		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第136図	6	土師器 甕	床直～31cm 胴部～底部1/2	底	13.5		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい赤褐	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第136図 PL.165	7	礫石器 敲石	床上10cm 完形	長 幅	20.3 6.9	厚 重	5.1 1002.7	変質安山岩	上端礫稜部に剥離痕が残る。
第136図 PL.165	8	礫石器 敲石	床上8cm 略完形	長 幅	18.7 6.6	厚 重	4.8 877.2	粗粒輝石安山岩	右側面礫稜部に連続した剥離痕と潰れが認められる。

2区11号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第139図 PL.165	1	土師器 杯	床上11cm 口縁部一部欠	口 稜	11.7 10.1	高	4.1	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。
第139図	2	土師器 杯	床直 1/4	口 稜	11.7 11.0			細砂粒/やや軟質/ 橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、 器面摩滅のため単位不明。
第139図	3	土師器 杯	埋土 1/4	口 稜	12.6 11.5			細砂粒/やや軟質/ 橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、 器面摩滅のため単位不明。
第139図	4	土師器 杯	埋土 破片	口 稜	12.0 13.0			細砂粒/良好/灰黄 褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。
第139図 PL.165	5	土師器 台付甕	カマド 2/3	口 脚	11.4 11.9	高 胴	19.5 14.3	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	脚部は貼付。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。 内面は底部から胴部がヘラナデ。
第139図	6	土師器 台付甕	カマド 台部欠	口 底	16.7 7.0	胴	15.1	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	脚部は貼付。口縁部から頸部と脚部下半は横ナデ、胴部から 脚部上半はヘラ削り、胴部上半は器面摩滅のため単位不 明。内面は底部から胴部と脚部上半がヘラナデ。
第139図	7	土師器 小型甕	貯蔵穴、床直 1/4	口 胴	15.6 14.3			細砂粒・粗砂粒/ 良好/明褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。
第140図	8	土師器 甕	P3、床直 口縁部～胴部片	口	21			多量の細砂粒・粗 砂粒/良好/にぶい 褐	外面頸部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴 部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
第140図 PL.166	9	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部一 部欠	口 底	21.2 3.8	高	37.4	多量の細砂粒・粗 砂粒/良好/明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り、底部は木葉痕 が残る。内面は底部から胴部にヘラナデ。
第140図 PL.166	10	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部 1/2欠	口 底	21.1 5.2	高	38.8	細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面 は底部から胴部にヘラナデ。
第140図	11	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部一 部欠	口 底	19.6 6.2	高	33.0	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面 は底部から胴部にヘラナデ。
第140図 PL.165	12	礫石器 不明	床直 完形	長 幅	12.4 6.1	厚 重	5.9 645.9	粗粒輝石安山岩	形状は三角柱形を呈する。磨面を2面もち、右側面礫稜部 には鋭利な道具によると推定される横位の線状痕が認めら れる。

2区13号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第142図 PL.166	1	土師器 杯	床上7cm 3/4	口 稜	13.4 12.2	高	4.7	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手 持ちヘラ削り、器面摩滅のため単位不明。内面は全面ヘラ 磨き。
第142図	2	土師器 短頸壺	床直 2/3	口 稜	8.2 10.0	高	5.6	細砂粒・粗砂粒・ 長石他/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)はナデ、底部は手持ちヘラ削り 。内面はヘラ磨き。
第142図	3	土師器 小型甕	床直 口縁部～胴部片	口 胴	11.2 14.8			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り後ヘラ磨き。内 面胴部はヘラナデ。
第142図 PL.166	4	土師器 甕	柱穴P1上面 胴部一部欠	口 底	18.8 6.9	高 胴	30.3 30.6	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り後下位にヘラ磨 き、底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
第142図 PL.166	5	礫石器 磨石	埋土 完形	長 幅	10.6 6.6	厚 重	3.9 344.3	粗粒輝石安山岩	扁平礫素材。正面に磨面と敲打痕を有する。

2区14号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第145図 PL.166	1	土師器 杯	床上14cm 1/4	口 稜	11.9 12.6	高	3.5	細砂粒/良好/にぶ い黄褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、 稜下にナデ部分が残る。
第145図	2	土師器 杯	床上7cm 1/2	口 稜	11.2 10.0			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。
第145図 PL.166	3	土師器 杯	床上8cm 底部一部欠損	口 稜	11.7 10.4	高	4.0	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。
第145図	4	土師器 杯	カマド 1/3	口 稜	12.8 10.5			細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。
第145図 PL.166	5	土師器 甕	カマド2、床上 7～49cm 1/2.底部欠	口 胴	17.0 17.6			細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。
第145図 PL.167	6	土師器 甕	カマド2、床上 7～49cm 1/2	口 底	20.8 7.4	高 胴	30.6 25.1	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から 胴部にヘラナデ。
第146図 PL.167	7	鉄製品 紡錘車	埋土 上端部欠	長 幅	27.6 4.3	厚 重	4.3 57.50	鉄	ほぼ完形の紡錘車で、紡輪は4.3cmの円形厚さ0.4cm程、紡 軸は0.4cm程の角型で一端は現存するが錆化が著しく端部 形状は不明瞭で他の端部は劣化破損する。糸等の痕跡は確 認できない。

出土遺物観察表

2区11号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長	幅	厚 重			
第146図 PL.167	8	鉄製品 鉄鏃	埋土 柄部欠	長 幅	7.2 3.0	厚 重	0.8 22.43	鉄	鉄鏃破片、両側に深い腸割りを持つが一方は途中で破損錆化する。茎との境を一周する形で段を有し0.5×0.4cmの茎に移行する。茎に矢柄等の痕跡は見られず0.6cmほどで破損する。
第146図 PL.167	9	鉄製品 鉄鏃	埋土 柄部片	長 幅	5.6 0.7	厚 重	0.8 4.69	鉄	鉄鏃8の茎破片と見られるが直接接合できない。断面ほぼ正方形で茎尻に向けて徐々に細くなるが両端とも劣化後破損し全体形状は不明。
第146図 PL.167	10	鉄製品 鏃?	床直 一部片	長 幅	7.4 1.3	厚 重	0.9 9.62	鉄	断面0.5×0.4cm長方形の角棒状で一方の端部で平鑿状に尖る。他端は劣化破損し茎等の形態は認められないが鑿の可能性が有る。
第146図 PL.167	11	鉄製品 不詳	床上21cm 端部欠	長 幅	4.3 0.6	厚 重	0.7 2.3	鉄	断面ほぼ正方形の角棒状で上端は劣化後破損、他端に向かい徐々に細くなり端部でやや尖る。茎破片か?
第146図	12	鉄製品 不詳	埋土 端部欠	長 幅	2.3 0.4	厚 重	0.3 0.72	鉄	断面ほぼ正方形の角棒状で上端は劣化後破損、他端部は丸みを持ち尖らない。紡錘車の紡軸端部の可能性があるが接合できない。
第146図 PL.167	13	鉄製品 釘	埋土 一部片	長 幅	2.3 1.1	厚 重	0.6 1.47	鉄	くの字状に曲がる角釘。断面は長方形で端部に折り返し等の形状は見られない。頭から1cm程には木材板目の痕跡が、1~2.3cmではこれと直交する木材板目痕跡が残存する。

2区15号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 稜	高	厚 重				
第148図	1	土師器 杯	床上14cm 破片	口 稜	13.8 12.1			細砂粒/良好/燻/にぶい黄褐色	口縁部は横ナデ、底部(稜下)は手持ちヘラ削り。	
第148図	2	土師器 杯	床直 破片	口 稜	14.2 13.2			細砂粒/良好/にぶい黄褐色	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第148図 PL.167	3	土師器 杯	カマド 1/2	口 稜	14.3 13.0	高	4.3	細砂粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第148図 PL.167	4	土師器 杯	床直~6cm 1/2	口 稜	14.8 13.2	高	5.5	細砂粒/良好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削りであるが、一部器面摩滅のため単位不鮮明。内面は全面ヘラ磨きが施されているが、口縁部は摩滅のため不鮮明。	
第148図	5	土師器 杯	貯蔵穴 口縁部片	口 稜	14.7 13.5			細砂粒/良好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削りであるが、一部器面摩滅のため単位不鮮明。内面は全面ヘラ磨きが施されているが、口縁部の一部は摩滅のため不鮮明。	
第148図 PL.167	6	土師器 小型甕	床直 口縁部~胴部 1/2	口	15.5			細砂粒/良好/褐色	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第148図	7	土師器 甕	カマド 口縁部~胴部 1/3	口	16.2			細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデか、器面剥落のため不鮮明。	
第148図	8	土師器 甕	カマド、床上26cm 底部~胴部下位 片	底	7.3			細砂粒/良好/にぶい黄橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第148図 PL.167	9	土製品 小玉	床上8cm 完形	長 幅	0.8 0.9	厚 重	0.9 0.6	夾雑物無/良好/黒	孔径0.15cm。側面の一部に剥離がみられる。	
第148図 PL.167	10	石製品 丸玉	床上6cm 完形	長 幅	1.1 1.1	厚 重	0.9 1.1	蛇紋岩	表面は丁寧に研磨されている。穿孔は裏面から正面への片側穿孔で、裏面孔付近には穿孔時の痕跡が残る。	孔径(上)3mm、(下)5mm。
第148図 PL.167	11	石製品 白玉	床上15cm 完形	長 幅	0.9 0.9	厚 重	0.3 0.3	頁岩	全面に研磨を施す。側面に整形時の線状痕が見られる。	孔径3mm。
第148図 PL.167	12	礫石器 磨石	壁溝 完形	長 幅	15.2 6.2	厚 重	5.4 833.8	粗粒輝石安山岩	表裏面、左側面に磨面をもつ。上下端部に敲打痕が残る。	

2区19号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 稜	頸 肩	厚 重				
第151図 PL.167	1	土師器 杯	床直 1/4	口 稜	12.8 11.2			細砂粒/良好/燻/黒褐色	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面は横位のヘラ磨きか、単位不鮮明。	
第151図 PL.167	2	須恵器 高杯	床直~23cm 杯部1/3	口 稜	12.4 14.8			細砂粒/還元焰/オリーブ灰	ロクロ整形、回転右回り。脚部とは接合、底部に接合痕が残る。底部は回転ヘラ削り。	
第151図	3	土師器 短頸壺	床上11cm 底部~肩部1/2	頸 肩	8.5 12.1	胴	14.0	細砂粒/良好/黒褐色	内面に輪積み痕が残る。頸部から肩部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第151図	4	土師器 甕	カマド 口縁部~肩部 1/2	口	14.4			細砂粒/粗砂粒/良好/にぶい黄褐色	内面頸部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第151図 PL.167	5	土師器 甕	カマド 口縁部~胴部 1/3	口 胴	18.6 11.0			細砂粒/良好/浅黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ後一部にヘラ磨きがみられる。	胴部中位に粘土付着。
第151図	6	土師器 甕	床直 胴部~底部	底	6.2			細砂粒/良好/にぶい黄橙	底部と胴部はヘラ削り後ヘラ磨き。内面はヘラナデ。	外面の一部に粘土付着。

2区20号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 径	高	底			
第154図 PL.168	1	土師器 杯	貯蔵穴 1/2	口 径 13.4 14.2	高	4.2	細砂粒・粗砂粒・ 褐色粒/良好/黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り、器面摩滅のため単位不明。内面はへら磨き、器面摩滅のため単位不明。	
第154図 PL.168	2	土師器 杯	カマド 口縁部2/3欠	口 径 15.3 18.2	高	5.0	細砂粒・粗砂粒・ 石英/良好/橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。内面は底部から体部にへら磨き。	
第154図	3	土師器 鉢	床直 1/4	口 径 12.0 12.0			細砂粒/良好/赤褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)は手持ちへら削り、器面摩滅のため単位不明。内面体部はへらナデ。	
第154図 PL.168	4	土師器 甗	カマド 底部1/2欠	口 底 20.1 5.2	高 胴	35.8 20.4	細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐	口縁部は横ナデ、胴部と底部はへら削り、胴部中ほどはカマド装着時の土が付着し単位不明。内面は底部から胴部にへらナデ。	
第154図	5	土師器 甗	床直 底部	底	6.7		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、底部と胴部はへら削り、器面摩滅のため単位不明。内面はへらナデ。	

2区21号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 径	高	底			
第157図	1	土師器 杯	床上8cm 1/2	口 径 13.4 13.8			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	
第157図 PL.168	2	土師器 杯	貯蔵穴 口縁部一部欠	口 径 14.0 13.7	高	4.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。内面はへら磨きが施されているが、器面摩滅のため単位等不鮮明。	
第157図 PL.168	3	土師器 甗	貯蔵穴、床上6 cm 口縁部～胴部 1/3	口 胴 17.4 19.0			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り後縦位のへら磨き。内面胴部はへらナデ後へら磨き、一部に指頭痕が残る。	
第157図	4	土師器 甗	床上22cm 底部～胴部下位 片	底	4.5		細砂粒・粗砂粒・ 褐小礫/良好/にぶ い黄褐	底部と胴部はへら削り。内面はへらナデ。	
第157図 PL.168	5	礫石器 磨石	床上8cm 略完形	長 幅 (14.9) 7.6	厚 重 (4.8) 930.4		砂岩	扁平な楕円礫素材。正面中央部に磨面をもつ。	

2区22号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 径	高	底			
第159図	1	土師器 杯	埋土 破片	口 径 11.4			細砂粒/軟質/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	
第159図 PL.168	2	土師器 小型甗	床直～9cm 口縁部～胴部 1/2	口 胴 14.5 14.1			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第159図	3	須恵器 甗	床上35cm 底部片	底	15.0		細砂粒・粗砂粒/ 還元焰/灰	ロクロ整形、回転方向不明。底部と胴部はカキ目、一部に叩き痕が残る。内面はへらナデ。	

2区24号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 径	高	底			
第161図	1	土師器 甗	カマド、床上 17cm 胴部1/2	口 径 18.7			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部にハケ目が残る、胴部はへら削り、一部にナデ、器面摩滅のため単位不明。内面は胴部がハケ目、一部ナデと指頭痕。	胴部の一部に土付着。
第161図 PL.168	2	土師器 甗	カマド 口縁部片	口 径 18.7			細砂粒/良好/灰黄	口縁部にハケ目が残る、胴部はへら削り。内面は口縁部が横ナデ、胴部はハケ目。	
第161図 PL.168	3	礫石器 石皿	壁溝 完形	長 幅 16.2 15.1	厚 重 7.2 2167.1		粗粒輝石安山岩	正面平坦部が摩滅し、特に中央部が非常に平滑である。	

2区25号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 径	高	底			
第163図	1	土師器 杯	床上54cm 1/4	口 径 12.2 10.6	高	4.1	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	
第163図 PL.168	2	土師器 杯	埋土 1/2	口 径 13.8 9.9	高	3.5	細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	有段口縁部
第163図	3	土師器 杯	貯蔵穴、床上 13cm 1/2	口 径 13.6 10.0	高	4.0	細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	有段口縁部。 内外面とも漆塗布。
第163図 PL.168	4	土師器 鉢	カマド 1/4	口 径 20.0 19.9			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちへら削り。	
第163図	5	土師器 台付甗	床上55cm 底部～脚部片	底	6.2		細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	胴部と脚部は接合、脚部の内面に輪積み痕が残る。外面は脚部上半がへら削り、下半は横ナデ。内面はへらナデ。	
第163図 PL.168	6	土師器 小型甗	カマド 完形	口 底 13.8 3.8	高 胴	14.7 13.0	細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、胴部と底部はへら削り。内面は底部から胴部にへらナデ。	
第163図	7	土師器 甗	カマド、床上6 cm 口縁部～胴部 1/2	口 径 18.4			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り。内面胴部はへらナデ。	
第163図 PL.168	8	土師器 甗	カマド 1/2	口 底 22.0 4.4	高	38.0	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、胴部と底部はへら削り。内面は底部から胴部にへらナデ。	
第165図	9	土師器 甗	床直～21cm 口縁部～胴部 1/3	口 径 17.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はへら削り、胴部は一部器面摩滅のため単位不明。内面は胴部にへらナデ。	

出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 径	口 径	高	厚 重			
第163図	10	土師器 甕	床直～32cm 頸部～底部1/2	頸 径	14.8 3.8	胴	16.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄褐	胴部と底部はヘラ削り、胴部は一部器面摩滅のため単位不明。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第165図 PL.169	11	礫石器 敲石	床直 略完形	長 幅	17.3 6.9	厚 重	5.5 1058.8	粗粒輝石安山岩	上下端部に敲打痕が残る。左側面に剥離痕が認められる。	

2区26号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 径	口 径	高	厚 重			
第167図 PL.169	1	土師器 杯	カマド 1/4	口 径	11.8 13.4	高	4.0	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、稜下にナデ部分が残る。	
第167図 PL.169	2	土師器 杯	貯蔵穴 2/3	口 径	13.8 12.8	高	3.6	細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第167図	3	土師器 甕	カマド 口縁部～底部 1/4	口 径	21.0 5.0	高	25.3	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第169図 PL.169	4	土師器 甕	床直～22cm 3/4	口 径	17.8 7.2	高 胴	33.4 22.8	細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り、一部にヘラ磨き。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第168図 PL.169	5	礫石器 凹石	埋土 完形	長 幅	12.2 9.0	厚 重	3.5 502.3	粗粒輝石安山岩	扁平楕円礫素材。正面に磨面、両面中央部に凹みを有する。	
第168図 PL.169	6	礫石器 磨石	床直 完形	長 幅	16.1 7.3	厚 重	5.3 798.9	粗粒輝石安山岩	楕円礫素材。正面中央部に平滑面が認められたため磨石とした。磨面を切って敲打痕が見られる。左側面および正面に断面形がV字状の線状痕が多数残る。鋭利な道具によるものと推定される。	
第169図 PL.169	7	礫石器 磨石	床直 略完形	長 幅	16.8 7.5	厚 重	4.4 825.8	粗粒輝石安山岩	上下端部に剥離痕が認められる。正面には多方向の線状痕が残る。	

2区27号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 径	口 径	高	厚 重			
第173図 PL.169	1	土師器 杯	貯蔵穴 1/2	口 径	10.8 9.6	高	3.4	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第173図 PL.169	2	土師器 杯	カマド 3/4	口 径	12.2 10.8	高	4.3	細砂粒/やや軟質/ 橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、器面摩滅のため単位不明。	
第173図	3	土師器 杯	埋土 破片	口 径	13.2 10.7			細砂粒/良好/にぶ い橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き。	
第173図	4	土師器 杯	貯蔵穴 1/3	口 径	13.8 12.0			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第173図	5	土師器 杯	埋土 1/4	口 径	12.0 11.6	高	4.9	細砂粒/やや軟質/ 橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第173図	6	土師器 小型甕	カマド、床直 口縁部～胴部 1/2	口 径	11.5 12.1			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はナデ。	
第173図	7	土師器 甕	カマド 口縁部1/3	口 径	19.6			細砂粒/良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第173図 PL.169	8	土師器 甕	カマド、床直～ 22cm 底部欠	口 径	22.4 17.6			細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り、胴部は土付着や器面摩滅のため詳細不明。内面胴部はヘラナデ。	
第173図	9	土師器 壺	P7、床直31cm 口縁部～頸部片	口 径	16.4			細砂粒/良好/橙	口縁部と頸部に放射状ヘラ磨き。内面は頸部から口縁部に放射状ヘラ磨き。	
第173図	10	土師器 台付甕	床直16cm 口縁部片	口 径	14.2			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目。内面胴部はナデ。	
第173図 PL.169	11	鉄製品 不詳	埋土 破片	長 幅	2.6 1.3	厚 重	1.3 4.43	鉄	径0.4cm程の丸棒状鉄製品でループ状に曲がる。両端は劣化破損し全体形状は不明。	
第173図 PL.169	12	鉄製品 不詳	埋土 破片	長 幅	4.2 0.8	厚 重	0.7 3.47	鉄	断面やや丸みを帯びた角棒状鉄製品で両端とも劣化破損し全体形状は不明。	
第173図 PL.169	13	石製品 紡輪	床直 完形	径 棒	4.1 0.7	厚 重	1.4 35.3	蛇紋岩	上面縁辺に微小剥離痕および摩滅が確認できる。側面と下面には放射状の線刻が認められる。	計測値「棒」は、棒軸孔径の略
第173図 PL.169	14	礫石器 磨石	壁溝 完形	長 幅	10.4 8.1	厚 重	4.0 474.8	粗粒輝石安山岩	扁平礫素材。両面平坦部に磨面、周囲に敲打痕が認められる。	
第173図 PL.169	15	礫石器 磨石	床直 完形	長 幅	11.9 8.0	厚 重	5.5 621.1	粗粒輝石安山岩	扁平礫素材。両面に磨面をもつ。正面に縦方向の線状痕が見られる。	

2区29号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 径	口 径	高	厚 重			
第175図	1	土師器 杯	床直14cm 1/4	口 径	12.2 13.5	高	4.5	細砂粒/良好/明赤 褐	口唇端部に平坦面を有す。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第175図 PL.170	2	土師器 杯	床直20cm 2/3	口 径	12.0 13.4	高	4.7	細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	外面は漆塗布か。
第175図 PL.170	3	土師器 杯	床直28cm 1/3	口 径	12.8 13.8			細砂粒/良好/褐灰	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第175図	4	土師器 杯	床直 1/4	口 径	13.8 12.2			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面はヘラ磨き、一部器面摩滅のため単位不明。	



挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第175図	5	土師器 杯	床上27cm 破片	口 稜	14.0 15.2			細砂粒/良好/燻/ にぶい褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。
第175図 PL.170	6	土師器 杯	床上23cm 1/4	口 稜	14.0 17.0	高 8.0		細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。有段口縁部
第175図	7	土師器 甕	貯蔵穴 口縁部~肩部 3/4	口	16.3			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。
第175図	8	土師器 甕	貯蔵穴 上半	口	17.3			細砂粒・石英/良 好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。
第176図 PL.170	9	土師器 甕	カマド 2/3	口 底	19.3 5.3	高 36.2	胴 20.1	細砂粒・粗砂粒/ 良好/浅黄橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から 胴部にヘラナデ。
第175図	10	土師器 甕	貯蔵穴、カマド 胴部~底部2/3	底 胴	6.6 20.0			細砂粒/良好/にぶ い橙	内面に輪積み痕が残る。底部と胴部はヘラ削り。内面はヘ ラナデ。
第175図 PL.170	11	礫石器 凹石	埋土 完形	長 幅	8.8 7.1	厚 2.9	重 158.0	粗粒輝石安山岩	小形の扁平な楕円礫素材。正面中央部に浅い凹みをもつ。 凹み内部は平滑である。
第175図 PL.170	12	礫石器 敲石	床上10cm 略完形	長 幅	15.9 6.8	厚 5.1	重 880.2	石英閃緑岩	下端小口部および右側面礫稜部に剥離痕と敲打痕が残る。

2区30号・31号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第178図	1	土師器 杯	30住、床上15cm 破片	口 稜	14.1 14.0			細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)は手持ちヘラ削り。
第178図	2	土師器 鉢	30住、床直 破片	口 稜	16.0 16.2			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)は手持ちヘラ削り。
第178図	3	須恵器 甕	30住、床直 胴部片					細砂粒/還元焰/灰 白	外面はヘラナデ、一部叩き痕が残る。内面は同心円状アテ 具痕が残る。
第178図	4	土師器 杯	31住、埋土 破片	稜	11.4			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。

2区34号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第180図 PL.170	1	土師器 杯	床直 2/3	口 稜	11.2 12.1	高 3.5		細砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内外面とも漆 塗布。
第180図 PL.170	2	土師器 甕	カマド、床上10 ~51cm 1/2	口 胴	18.4 18.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。
第181図	3	土師器 甕	カマド、床直~ 7cm 口縁部~胴部片	口 胴	21.4 20.5			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
第181図	4	土師器 甕	カマド 口縁部片	口	23.6			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。
第181図 PL.170	5	石製品 砥石	埋土 破片	長 幅	(4.9) 2.9	厚 2.6	重 38.1	砥沢石	4面使用。砥面は全て凹状を呈する。正面および裏面に穿 孔の痕跡を有するが、貫通していない。裏面の穴は浅く穴 の位置をずらしている。両側から穿孔しようとして調整したも の、うまく貫通できなかったと推定される。
第181図 PL.170	6	石製品 砥石	床直 完形	長 幅	14.6 5.5	厚 6.3	重 748.2	砥沢石	4面使用だが、表裏面の使用頻度が著しく砥面が凹状を呈 する。鋭利な道具によると考えられる断面V字状の線状痕 が多数見られる。

2区35号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第182図 PL.170	1	土師器 杯	床上8cm 口縁部一部欠	口 高	14.0 5.2			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。内面の 中位にヘラ磨き。

2区36号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第184図	1	土師器 鉢	床直 1/4	口 底	15.2 5.6	高 5.3		細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。
第184図	2	土師器 短頸壺	床上25cm 1/3	口 底	9.6 6.2	高 8.3		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。内 面はヘラナデ。
第184図 PL.170	3	須恵器 甕	床直 口縁部~頸部 3/4欠	胴	10.0			細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転方向不明。頸部は接合。頸部に6段の波 状文、胴部は上位にカキ目、中位は凹線の区画後2段の刺 突文、底部はヘラ削り。
第184図	4	土師器 小型甕	カマド 口縁部~胴部片	口	12.0			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
第185図 PL.170	5	土師器 甕	床直 上半	口 胴	19.3 19.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。
第184図 PL.170	6	鉄製品 不詳	床直 破片	長 幅	6.4 0.7	厚 0.6	重 4.01	鉄	断面0.5×0.3cmの長方形の狭い板状鉄製品。一端は角形で やや薄くなり刃先ともみられるが劣化破損も有り不明瞭。 他の端部で急に幅を減じ三角形にとがりその上1.8cmを木 質が覆う。

出土遺物観察表

2区37号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 径	高	底				
第188図	1	土師器 杯	床直 口縁部一部欠	口 径	11.8 12.6	高	3.7	粗砂・細砂粒・黒色 鈹物粒/良好/に ぶい褐	口縁部は底部との間に稜を有し、内傾して立ち上がる。横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	器面に炭素吸着。黒色。
第188図	2	土師器 杯	埋土 1/3	口 径	12.6 13.8	高		粗砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は底部との間に稜を有し、内傾して立ち上がる。底部外面は手持ちヘラ削り。周縁部にはナデの部分を残す。内面はナデ。	
第188図 PL.171	3	土師器 杯	床直 口縁部一部欠	口 径	12.4 13.6	高	4.1	粗砂粒・雲母粒/ 良好/にぶい橙	口縁部は底部との間に稜を有し、内傾して立ち上がる。横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	器面の広い範囲に黒斑。
第188図	4	土師器 杯	カマド 3/4	口 径	13.5 14.0	高	3.9	粗砂粒/良好/橙	口縁部は底部との間に稜を有する。直立気味に立ち上がり、先端は外側に削られる。横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	破砕後に被熱か。
第188図 PL.171	5	土師器 杯	床上15～21cm 1/2	口 径	12.8 11.4	高	4.5	粗砂粒・白色鈹物 粒/良好/にぶい黄 橙	口縁部は底部との間に稜を有する。横ナデ。底部外面は手持ちヘラ削り。内面はナデ。	器面に炭素吸着。被熱か。
第188図	6	土師器 甕	カマド 底部一部欠	口 底	12.4 3.7	高	19.7	粗砂粒・軽石粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は短い単位で斜縦位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	器面に炭素吸着。
第188図 PL.171	7	土師器 甕	カマド 口縁部一部欠	口 底	15.1 4.8	高	22.3	粗砂粒・軽石粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は縦位の、底部寄りには斜めのヘラ削り。内面の上位・中位は横位の、下位は縦位のヘラナデ。	被熱。外面の一部に炭素吸着。
第188図	8	土師器 甕	床上9cm 底部欠	口 径	18.1			粗砂粒・赤色粘土 粒・雲母粒/良好/ にぶい黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面の上位から中位は2回に分けて縦位の、下位は斜めのヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	被熱。外面の広い範囲に炭素吸着。
第189図 PL.171	9	土師器 甕	カマド 完形	口 底	18.6 5.5	高	36.3	粗砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は短い長さで縦位のヘラ削りを繰り返す。底部寄りは横位のヘラ削り。内面は斜横位のヘラナデ。輪積み痕が消されずに残る。底部外面はヘラナデ。	外面に煤付着。
第189図	10	土師器 甕	カマド 完形	口 底	18.7 3.6	高	37.8	粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は2回に分けて縦位の、最下位と底部寄りには斜横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。底部外面はヘラ削り。	被熱。
第189図 PL.171	11	土師器 甕	貯蔵穴 口縁部～胴部上 半	口 径	19.5			粗砂粒・黒色鈹物 粒・軽石粒/良好/ 橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜縦位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	口縁部先端は摩耗。外面に黒斑。

2区38号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 径	高	底				
第193図	1	土師器 杯	床上25cm 1/2	口 径	11.7 10.8	高	3.9	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、器面摩滅のため単位不明。	
第193図 PL.171	2	土師器 杯	床上7cm 口縁部3/4欠	口 径	15.6 14.3	高	5.6	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部に放射状ヘラ磨き。	
第193図	3	土師器 高杯	床上10cm 杯身部欠損	脚	8.5			細砂粒/良好/橙	杯身部と脚部は接合、脚部内面に輪積み痕が残る。杯身部内面は黒色処理。脚部はヘラ削り、端部は横ナデ。	
第193図	4	土師器 台付甕	床上8～10cm 底部～脚部上半	底	6.4			細砂粒・粗砂粒/ 良好/赤褐	胴部と脚部は接合。胴部から脚部はヘラ削り。内面は胴部・脚部ともヘラナデ。	
第193図 PL.171	5	土師器 甕	床直～18cm 底部一部欠	口 底	16.5 5.9	高	19.7	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第193図	6	土師器 甕	カマド 3/4、底部1/2欠	口 底	16.8 5.6	高	21.7	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	内面口縁部に粘土貼付カ所あり。
第193図 PL.171	7	土師器 甕	カマド 3/4	口 底	20.9 4.2	高 胴	39.4 17.5	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	胴部中ほどに土付着、カマド装着痕か。
第193図	8	須恵器 杯蓋	床上8cm 口縁部片	口 径	15.8			細砂粒/還元焰/褐 灰	ロクロ整形、回転右回りか。	

2区40号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 径	高	底				
第194図	1	土師器 杯	埋土 破片	口 径	14.4 12.0			細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	

2区41号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 径	高	底				
第197図	1	土師器 杯	床直 1/4	口 径	12.6 11.7	高	4.9	細砂粒・小礫/良 好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り、体部は器面摩滅のため単位不明。	
第197図 PL.171	2	土師器 杯	床直 1/2	口 径	13.0 11.8	高	6.2	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。内面の底部から体部に雑な放射状ヘラ磨き。	
第197図	3	土師器 杯	床直 1/4	口 径	13.8 12.2			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	内外面とも漆塗布。
第197図	4	土師器 杯	埋土 破片	口 径	12.2			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第197図	5	土師器 杯	カマド掘方 破片	口 径	12.4			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部上半ナデ、下半から底部は手持ちヘラ削り。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第197図	6	土師器 甕	床上17cm 体部1/2	頸 胴	3.4 8.4			細砂粒/良好/橙	胴部はヘラ削り、一部器面摩滅のため単位不明。内面胴部はナデ。
第197図	7	土師器 小型甕	カマド 口縁部～胴部上 半1/4	口	13.8			細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。
第197図	8	土師器 小型甕	床直、貯蔵穴、 カマド掘方 口縁部～胴部上 半2/3	口 胴	14.6 15.4			細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り、器面摩滅のた め不鮮明。内面胴部はヘラナデ。
第197図	9	土師器 甕	床直～17cm、 カマド掘方 口縁部～胴部上 半1/4	口 胴	16.0 15.3			細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	内面に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部は ヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
第197図 PL.171	10	土師器 甕	床直 口縁部	口	15.2			細砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。
第197図 PL.171	11	土師器 甕	床直 口縁部～胴部上 半1/2	口	20.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/明黄褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。

2区42号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第199図 PL.172	1	土師器 鉢	床上8cm 1/2	口 底	19.6 6.9	高 9.2		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘ ラ削り後一部ヘラ磨き。内面は底部から体部はやや雑・口 縁部は丁寧なヘラ磨き。
第199図	2	土師器 甕	床直～8cm 1/2	口 孔	17.4 1.2	高 16.1		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り、一部器面摩滅の ため詳細不鮮明。内面は底部から胴部にヘラナデ。
第199図	3	土師器 鉢	床上16cm 1/3、底部欠	口 稜	13.6 15.0			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部はヘラナデ。内面体部はヘラナデ。
第199図 PL.172	4	土師器 甕	床上12cm 完形	口 底	18.1 7.0	高 胴	20.9 19.4	細砂粒・粗砂粒/ 良好/灰黄褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面 は底部から胴部にヘラナデ。
第199図 PL.172	5	土師器 甕	床直 1/2	口 底	18.5 6.0	高 胴	34.9 20.2	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り、器面 に土付着や摩滅のため詳細不鮮明な箇所あり。内面は底部 から胴部にヘラナデ。

2区43号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第203図	1	土師器 杯	床上16cm 1/3	口 稜	11.8 12.6			細砂粒/良好/にぶ い黄褐	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。 内面底部はヘラナデ。	
第203図	2	土師器 杯	床上32cm 破片	口 稜	12.8 12.4			細砂粒/良好・燻/ 暗灰黄	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	
第203図	3	土師器 杯	床上12cm 破片	口 稜	13.0 12.3			細砂粒/良好・外 燻/褐灰	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手 持ちヘラ削り。	
第203図 PL.172	4	土師器 杯	カマド 口縁部一部欠	口 稜	12.8 14.0	高 4.7		細砂粒・粗砂粒・ 石英/良好・外燻/ 灰黄褐	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手 持ちヘラ削り。	
第203図 PL.172	5	土師器 高杯	床上14～44cm 1/2	口 脚	17.8 17.0	高 19.0		細砂粒/良好/橙	内面黒色処理。杯身部と脚部は接合。口縁部は横ナデ、底 部から脚部はヘラ削り、端部は横ナデ。内面は杯身部がヘ ラ磨き、口縁部は単位不鮮明、脚部はヘラナデ、端部は横 ナデ。	
第203図	6	土師器 高杯	カマド 杯身部	口 稜	18.5 13.2			細砂粒/良好/明赤 褐	杯身部と脚部は接合。口縁部は横ナデ、稜下はヘラ削り。 内面は杯身部底部がヘラ磨き。	内面黒色処 理、半分は二 次被熱を受け ている。
第203図	7	須恵器 高杯	床上15cm 杯部1/2	口	11.2			細砂粒/還元焰/灰	ロクロ整形、回転右回りか。杯身部と脚部は接合。杯身部 はカキ目。	
第203図	8	土師器 短頸壺	貯蔵穴2 口縁部欠	底 胴	8.6 13.4			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	手捏ね的な整形。底部はナデ、胴部下位はヘラ削り、中位 から上位はナデ。内面はヘラナデ。	
第203図	9	土師器 小型甕	床上8cm 口縁部欠	底 頸	4.5 11.0	胴 13.1		多量の細砂粒・粗 砂粒/良好/にぶい 黄橙	頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から 胴部にヘラナデ。	
第203図	10	土師器 甕	貯蔵穴3 口縁部・底部欠	底 胴	6.4 14.4			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第203図	11	土師器 甕	カマド 1/2・底部欠	口 胴	13.5 15.6			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。	
第203図	12	土師器 甕	カマド 口縁部～胴部上 半	口	14.9			細砂粒・粗砂粒/ 良好/灰黄褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り、器面摩滅のた め方向・単位不明。内面胴部はヘラナデ。	
第204図	13	土師器 甕	カマド1 口縁部～胴部上 半1/3	口 胴	15.9 19.0			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り後ヘラ磨き。内 面胴部はヘラナデ後ヘラ磨き。	
第204図 PL.173	14	土師器 甕	カマド、カマド 掘方 口縁部1/3欠	口 底	19.8 4.0	高 41.3		細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り、胴部 は土付着のため単位不鮮明。内面は底部から胴部にヘラナ デ。	胴部には土付 着、カマド装 着痕か。

出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口	底	厚				
第204図	15	土師器 甕	カマド 口縁部～肩部 1/4	口	18.0		細砂粒/良好/橙	内面に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。		
第204図 PL.172	16	土師器 甕	床直～49cm 口縁部～肩部欠	頸 胴	17.8 32.1	底	9.5	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り、一部 器面摩滅のため単位不明。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第202図 PL.173	17	石製品 管玉	床直12cm 完形	長 幅	2.3 0.7	厚 重	0.6 1.5	碧玉	全面に丁寧な研磨を施す。片側からの穿孔で、方向は上か ら下である。	孔径(上)3 mm、(下)1.5 mm。
第202図 PL.173	18	石製品 白玉	床直9cm 完形	長 幅	1.5 1.5	厚 重	0.8 2.9	滑石	表面は凹凸が残りあまり研磨が進んでいない。側面に整形 時の線状痕(斜位)が残る。	孔径4mm。
第202図 PL.173	19	石製品 白玉	床直7cm 完形	長 幅	1.5 1.6	厚 重	0.5 1.7	滑石	表面は研磨されているが、裏面は凹凸が残り研磨が行われ ていない。側面に斜位の線状痕が残る。	孔径4mm。

2区47号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	底	高			
第206図 PL.173	1	土師器 杯	床直 口縁部一部欠	口 底	12.9 6.0	高	4.9	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)は上半がナデ、 下半は手持ちヘラ削り、底部は木葉痕が残る。内面は上位 から放射状、横位、放射状のヘラ磨き。
第206図	2	土師器 杯	床直 口縁部一部欠	口 稜	12.9 12.4	高	5.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)は上半がナデ、 下半から底部は手持ちヘラ削り。内面は上位から放射状、 横位、斜格子状のヘラ磨き。
第206図 PL.173	3	土師器 杯	床直 完形	口 稜	13.3 12.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	内面黒色処理。口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手 持ちヘラ削り。内面は放射状に不規則なヘラ磨き。

3区5号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	底	高			
第209図 PL.173	1	土師器 杯	床直 2/3	口 稜	12.6 12.0	高	4.3	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。
第209図 PL.173	2	土師器 碗	床上20cm 口縁部一部欠	口 稜	9.5 10.3	高	6.1	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)はナデ、底部は手持ちヘラ削 り。内面は口唇部近くまでヘラナデ。
第209図 PL.173	3	土師器 小型甕	貯蔵穴 2/3	口 高	10.0 9.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、頸部下はナデ、胴部と底部はヘラ削り。 内面は底部から胴部にヘラナデ。
第209図 PL.173	4	土師器 甕	床上11～33cm 口縁部～胴部上 半1/2	口	13.6			細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘ ラナデ。
第210図 PL.173	5	土師器 甕	カマド、床直 口縁部～胴部片	口	18.6			細砂粒・粗砂粒/ 良好/明褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。
第210図	6	土師器 甕	床直 胴部	頸	16.7			細砂粒/良好/にぶ い橙	頸部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。

1区1号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	底	高			
第212図 PL.173	1	土師器 器台	埋土 受け部1/2	口 底	19.2 9.2			細砂粒/良好/灰白	受部体部に透孔が5カ所。受部口縁部から体部上半はハケ 目後ヘラ磨き、下半はヘラナデ、底部はヘラ磨き。内面は 口縁部がハケ目後横ナデ、体部はヘラナデ。
第212図	2	土師器 甕	埋土 口縁部～肩部片	口	16.0			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目。内面は口縁部上半が横ナ デ、下半はハケ目、胴部はヘラナデ。
第212図	3	土師器 甕	埋土 口縁部片	口	24.0			細砂粒/良好/橙	口唇端部に刻み目が施されている。

1区2号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	底	厚			
第215図 PL.173	1	土師器 小型鉢	床直 口縁部欠					細砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ、頸部にハケ目が残る、体部から底部は手 持ちヘラ削り。内面はヘラナデ。
第215図	2	土師器 甕	埋土 口縁部片	口	16.5			細砂粒/良好/灰黄 褐	口縁部に刻み目が施されている。口縁部は横ナデ、頸部は ハケ目。内面は口縁部下半にハケ目。
第215図 PL.173	3	礫石器 磨石	埋土 完形	長 幅	12.6 6.9	厚 重	4.7 549.6	粗粒輝石安山岩	扁平楕円礫素材。表裏面に磨面をもつ。右側面に2箇所 の凹みがあり、敲打の痕跡が見られる。

1区3号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				頸 胴 <th>口 <th>底 </th></th>	口 <th>底 </th>	底				
第217図	1	土師器 埴?	埋土 体部1/2	頸 胴	6.8 10.4			細砂粒/良好/浅黄	内面頸部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部はヘラ ナデ。内面胴部はナデ。	
第217図	2	土師器 小型甕	埋土 頸部～胴部1/3	頸 胴	10.0 13.0			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	頸部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり6～7本)。内面 胴部はヘラナデ。	
第217図 PL.173	3	土師器 甕	床上8～14cm 口縁部～胴部 1/3	口 胴	12.2 18.7			細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目(1cmあたり4～5本)、内 面胴部はナデ。	台付甕か、外 面に煤が付 着。
第217図 PL.173	4	土師器 小型壺	床上15cm 口縁部～胴部	口 胴	9.8 11.5			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内面の口縁部から頸部にかけて赤色塗彩。口縁部から胴部 は縦位のヘラ磨き。内面は口縁部がヘラ磨き、胴部はヘラ ナデ。	
第217図 PL.173	5	土師器 壺	床直～28cm 口縁部～頸部	口	16.8			細砂粒/良好/橙	口縁部はハケ目後ヘラ磨き、内面もヘラ磨き。	

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第217図 PL.173	6	土師器 小型壺	床上46cm 胴部～底部	底	4.9			細砂粒/良好/橙	底部と胴部はヘラ削り。内面はナデ。
第217図 PL.174	7	土師器 壺	床直 3/4	口 底	12.8 8.7	高 胴	27.9 21.3	細砂粒/良好/明褐	口縁部はハケ目後ヘラ磨き、胴部はヘラ磨き、一部摩滅のため不鮮明、底部はヘラ削り。内面は口縁部がヘラ磨き、胴部はヘラナデ。

1区4号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
第219図 PL.174	1	土師器 高杯	貯蔵穴1、床直 ～5cm 3/4	口 脚	21.3 11.9	高	13.3	粗砂粒/良好/淡黄	器形は大きく歪んでいる。最大高は14.2cm。脚部の中位に3カ所小孔を配す。杯部外面はハケ目、ナデ後、縦位にヘラ磨き。内面は丁寧なナデか。脚部外面は縦位のヘラ磨き。内面は横位のハケ目。	
第219図	2	土師器 高杯か	床上15cm 杯底部～脚部上 半					粗砂粒・黒色鈹物 粒/良好/橙	脚部中位に3カ所小孔を配す。杯部の内外面ともヘラナデ。脚部外面はヘラ磨き。内面は指ナデか。	
第219図	3	土師器 器台	埋土 受け部底部～脚 部上位					粗砂粒・細砂粒/ 良好/にぶい褐	脚部中位に3カ所小孔を配す。受け部外面はヘラナデ。内面はヘラ磨きか。脚部外面はナデの上にヘラ磨きか。内面はナデ。	被熱か。
第219図 PL.174	4	土師器 鉢	床上15cm 口縁部一部欠	口 底	9.7 4.2	高	7.0	粗砂粒少/良好/浅 黄橙	口縁部は内彎ぎみに立ち上がる。内外面とも斜縦位のヘラ磨き。底部外面はナデ後、一部にヘラ磨き。	
第219図 PL.174	5	土師器 鉢	床直 3/4	口 底	14.1 3.4	高	6.4	粗砂粒少/良好/赤 褐	外面は縦位の、内面は横位のヘラ磨き。内外面とも赤色塗彩。	外面の一部に 黒斑。
第220図 PL.174	6	土師器 鉢	床直 1/2	口 底	11.4 4.4	高	8.7	粗砂粒・白色鈹物 粒/良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ。体部外面は斜縦位のハケ目。一部にナデ。内面は横位のヘラナデ。底部外面はヘラ削り。	被熱。
第220図 PL.174	7	土師器 鉢	床上8cm 胴部一部欠	口 底	11.9 4.9	高	10.2	粗砂粒/良好/浅黄 橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は斜縦位のハケ目。一部にナデ。底部寄りには横ナデ。内面は頸部にハケ目、それ以下はヘラナデ。	
第220図 PL.174	8	土師器 有孔鉢	床直 口縁部一部欠	口 底	15.9 4.5	高	8.9	粗砂粒・白色・黒 色鈹物粒/良好/橙	底部に焼成前の小孔が5孔見られる。口縁部外面は横ナデ。以下体部は斜位のナデ、指ナデ。内面は斜横位のハケ目、下位はナデ。	被熱。
第220図 PL.174	9	土師器 鉢	床上54cm 3/4	口 底	20.0	高	9.5	粗砂粒少・雲母粒 /良好/にぶい黄橙	口縁部は底部との間がくびれる。外面は縦位のヘラ磨き。内面は縦位の丁寧なナデ。底部外面は内外面ともヘラ磨き。	器面に炭素吸 着。
第220図 PL.174	10	土師器 小型壺	埋土 口縁部1/4欠	口 底	12.9 3.2	高	18.8	粗砂粒・雲母粒少 /良好/にぶい黄橙	口縁部は内外面とも縦位のヘラ磨き。外面下位は横位のナデ。胴部外面は底部寄りが横位、それ以外は縦位のヘラナデ。内面は丁寧なナデ。	器面の一部に 炭素吸着。
第220図 PL.174	11	土師器 小型甕	床直 口縁部一部欠	口 底	7.6 5.2	高	11.1	粗砂粒・白色鈹物 粒/良好/明黄褐	口縁部外面の先端は横ナデ。以下は縦位のハケ目。胴部外面はハケ目の上にナデ。内面は口縁部の先端が横ナデ。以下はハケ目を残す。胴部はヘラナデ。	器面に炭素吸 着。
第220図 PL.174	12	土師器 小型壺	床直 口縁部一部欠	口 底	7.8 4.3	高	14.1	粗砂粒/良好/橙	口縁部は内外面とも先端に横ナデ。以下は外面が縦位、内面が横位のハケ目。胴部外面はハケ目の上に中位が縦位の、下位が横位のヘラ磨き。内面はナデ。下位にハケ目を残す。底部外面はヘラナデ。	器面はやや摩 滅。炭素吸着。
第220図 PL.174	13	土師器 小型甕	床上8cm 口縁部一部欠	口 底	10.2 4.1	高	13.4	粗砂粒/良好/浅黄	器面摩滅のため整形不明。口縁部は横ナデ。胴部外面はハケ目か。内面はナデ。	
第220図 PL.174	14	土師器 壺	床直 口縁部～頸部片	口	14.6			粗砂粒/良好/橙	口縁部外面はハケ目後、縦位のヘラ磨き。内面は横位のヘラ磨き。頸部にハケ目。	
第220図	15	土師器 小型壺	貯蔵穴 頸部～底部	底	3.9			粗砂粒・黒色鈹物 粒/良好/浅黄橙	胴部外面はナデの上に横位のヘラ磨き。内面はヘラナデ。底部外面はナデ。	口縁部の欠損 は旧事か。
第220図 PL.175	16	土師器 台付甕	床直～8cm 口縁部・台部一 部欠	口 脚	14.5 8.3	高	23.7	粗砂粒/良好/灰黄 褐	口縁部は屈曲後、外反気味に立ち上がる。横ナデ。先端面にクシ状工具による刺突文を配す。胴部外面は上位・中位が左上から右下に斜縦位のハケ目。下位上半は右上から左下へ斜縦位のハケ目。下半はナデ。基部から台部外面には縦位のハケ目。胴部内面は上位にハケ目、以下はナデかハケ目が不鮮明。台部内面はナデ。	
第220図 PL.175	17	土師器 台付甕	床直～6cm 2/3	口 脚	17.5 10.3	高	30.5	粗砂粒・石英粒・ 雲母粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は上位に斜縦位のハケ目。中位から下位に横位・斜横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。台部外面は縦位のハケ目後、縦位のヘラナデ。内面はハケ目。	外面の広い範 囲に炭素吸 着。
第221図 PL.175	18	土師器 小型甕	床上6～20cm 口縁部～胴部上 位片	口	14.5			粗砂粒・雲母粒・ 黒色鈹物粒/良好/ 橙	口縁部上半は横ナデ。下半部から胴部外面は斜縦位のハケ目。胴部内面は横位のハケ目。	被熱の為か器 面摩滅。
第221図 PL.175	19	土師器 甕	床直 口縁部1/3欠	口 底	16.8 6.6	高	15.9	粗砂粒・細砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面はハケ目の上に斜位のナデ。内面は斜横位のハケ目。一部にナデ。底部外面はナデ。	底部周辺に黒 斑。
第221図 PL.175	20	土師器 甕	床直～8cm 2/3	口 底	16.4 6.4	高	23.4	粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面の上位・中位は斜横位のハケ目。下位にナデの面を残す。内面は横位のハケ目の上にナデを重ねる。ハケ目は一部に残存。	内外面に炭素 吸着。煤か。
第221図 PL.175	21	礫石器 台石?	炉 完形	長 幅	17.8 8.9	厚 重	4.8 1425.8	デイスайト	正面中央部に敲打の痕跡をもつ。	

1区5号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第223図	1	土師器 高杯	床上14cm 杯部3/4	口	12.8			細砂粒/良好/にぶ い黄褐	杯身は口縁部上位が横ナデ、中位から下位は縦位のハケ目、器面摩滅のため不鮮明。内面は口縁部に横ナデ、体部はハケ目。

出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第223図 PL.175	2	土師器 器台	床上17cm 1/2	口 脚	6.7 11.0	高 8.0	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	受部と脚部は接合。受部は横ナデ、脚部から裾部は縦位の ヘラ磨き。内面は受部にナデ、脚部はハケ目が残る。	脚部に透孔が 上下2段に各 3カ所。
第223図 PL.175	3	土師器 器台	床上8～26cm 2/3	口 脚	7.3 10.6	高 8.3	細砂粒/良好/にぶ い橙	受部と脚部は接合。受部は横ナデ、脚部から裾部は縦位の ヘラ磨き。内面は受部に横ナデ、脚部はナデ。	
第223図 PL.175	4	土師器 小型壺	床上14cm 口縁部～体部 1/2	口 胴	10.5 10.4		細砂粒/良好/にぶ い橙	頸部に輪積み痕が残る。口縁部上半は横ナデ、下半は縦位 のナデ、胴部は上～中位は横位・下位は斜めのヘラ削り。 内面胴部はナデ。	
第223図	5	土師器 小型甕	床上7～31cm 口縁部～胴部 1/2	口	15.0		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は縦位のハケ目。内面胴部はヘラナ デ。	
第223図	6	土師器 甕	埋土 口縁部片	口	13.8		細砂粒・粗砂粒/ 良好/外 黒褐 内 にぶい黄褐	口縁部は横ナデ、頸部は縦位・胴部は横位のハケ目。内面 胴部は横位のハケ目。	口唇部に焼成 前の凹、その 両側は小規模 な打ち欠き。
第223図 PL.176	7	土師器 甕	貯蔵穴、床直～ 26cm 口縁部～胴部上 半	口	12.6		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	内面頸部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部は縦位 のヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第223図 PL.175	8	土師器 小型台付甕 (ミニチュ ア)	床上34cm 完形	口 底	6.3 3.5	高 脚 9.0 4.5	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	脚部は接合。口縁部は横ナデ、頸部と胴部の一部にハケ目 が残る。他は脚部までナデ。内面胴部は指ナデ。	
第223図	9	土師器 小型台付甕	床上17～31cm 1/3	口 底	8.3 3.0	高 脚 12.0 6.0	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	脚部は接合。口縁部は横ナデ、頸部から胴部上位はハケ目 が残る。胴部中位から脚部はナデ。内面胴部はヘラナデ。	
第223図	10	土師器 台付甕	埋土 口縁部～肩部片	口	11.9		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り後ハケ目、ヘラ削りが残 る。内面胴部は指ナデ。	
第223図	11	土師器 台付甕	埋土 底部片	底	6.0		細砂粒/良好/にぶ い黄褐	脚部とは接合、内面胴部に輪積み痕が残る。胴部は縦位の ハケ目。内面胴部はヘラナデ。	底部脚部側に 砂粒を多く含 む粘土が貼 付。

1区6号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第224図	1	土師器 甕	床直～6cm 口縁部片	口	16.1		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目後、間隔をあけて斜め方向 に凹線が施されている。内面胴部はヘラナデ。	外面口縁部に 煤が付着。
第224図	2	土師器 甕	床直 口縁部片	口	14.8		細砂粒/良好/にぶ い黄褐	口縁部は横ナデ、頸部から胴部は縦位のハケ目。内面胴部 は横位のハケ目。	
第224図 PL.176	3	土師器 甕	床直 口縁部～胴部中 位1/3	口 胴	15.6 19.8		細砂粒/良好/明黄 褐	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第224図	4	土師器 甕	床直 頸部～胴部1/3	頸	15.4		細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄褐	口縁部は横ナデ、胴部は小口痕が残る斜め方向のヘラ削り。 内面胴部はヘラナデ。	

1区8号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第226図	1	土師器 鉢	埋土 1/4	口	13.4		細砂粒/良好/にぶ い褐	口縁部は横ナデ、体部上位はナデ、中位から下位は斜めの ヘラ削り。内面体部はナデ。	
第226図 PL.176	2	土師器 台付甕	床直～13cm 底部～台部欠	口 胴	15.2 15.2		細砂粒/良好/灰黄 褐	口縁部は横ナデ、胴部は上半がハケ目、下半はヘラ削り。 内面は口縁部がハケ目、胴部はヘラナデ。	
第226図	3	土師器 甕	埋土 口縁部～肩部片	口	17.7		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、頸部から胴部は縦位のハケ目。内面胴部 は小口痕の残るヘラナデ。	
第226図 PL.176	4	土師器 壺	床直～14cm 2/3	口 底	11.8 6.6	高 胴 23.8 23.2	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、胴部は全面ヘラ磨き(一部器面摩滅のた め単位不鮮明)、底部ヘラ削り。内面は底部から胴部下位 がヘラ磨き、胴部中位から上位はヘラナデ。	

1区11号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第228図 PL.176	1	土師器 高杯	床直 口縁部～脚部上 部1/4	口	15.4		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	杯身部と脚部は接合。脚部に透孔が3カ所。杯身部はヘラ 磨き、脚部はヘラ削り。内面は杯身部口唇部が横ナデ、口 縁部以下がヘラ磨き、脚部はナデ。	
第228図	2	土師器 高杯	埋土 底部～脚部上半				細砂粒/良好/灰黄 褐	杯身部と脚部は接合。杯身部はヘラナデ、脚部はヘラ磨き。 内面は脚部がヘラナデ。	
第228図 PL.176	3	土師器 甕	床直 1/3	口 胴	12.7 15.0		細砂粒/良好/にぶ い褐	口唇部は横ナデ、口縁部は縦位、胴部は横位から斜めのハ ケ目(1cmあたり7～8本)。内面もハケ目(1cmあたり4 本)後一部にヘラナデ。	
第228図	4	土師器 甕	埋土 口縁部片	口	18.6		細砂粒/良好/明褐	口唇部に不規則な刻み目。内面は口唇部が横ナデ、口縁部 がハケ目。	
第228図	5	土師器 甕	床直 胴部～底部2/3	底 胴	4.7 16.5		細砂粒/良好/明褐	底部は小口の残るヘラ削り、胴部はヘラ磨き。内面はヘラ ナデ。	
第228図	6	土師器 台付甕	床直～6cm 頸部～胴部3/4	頸 胴	14.8 22.2		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	頸部から胴部はハケ目(1cmあたり8本)後一部ナデ。内面 胴部は上半と底部付近にハケ目(1cmあたり5・6本)、下 半はヘラナデ。	外面に煤が付 着。

1区13号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	高	胴			
第230図	1	土師器 高杯	床直 脚部下半欠	口 底	19.1 6.2			細砂粒/良好/橙	脚部に円形の透孔4カ所。杯身部と脚部は接合、杯身部底部にホゾ状の突起を有す。杯身部口縁部はハケ目後ヘラ磨きか、器面摩滅のため不鮮明。底部から脚部はヘラ削り。内面は杯身がヘラ磨き、脚部はヘラナデ。
第230図 PL.176	2	土師器 器台	床直 一部欠損	口 脚	8.1 12.4	高 孔	10.3 0.8	細砂粒/良好/にぶ い黄	受部は口唇部が横ナデ、身部から脚部はヘラ磨き、一部器面摩滅のため不鮮明。内面は受部がヘラ磨き、脚部は上半がヘラナデ、下半がヘラ磨き。
第230図 PL.176	3	土師器 鉢(ミニ チュア)	床直 口縁部一部欠	口 底	6.8 3.6	高	5.1	細砂粒/良好/橙	口縁部から体部、底部ともヘラ磨き、一部器面摩滅のため単位不鮮明。内面もヘラ磨き。
第230図 PL.176	4	土師器 鉢	床直 完形	口 底	11.8 4.3	高	11.0	細砂粒/良好/橙	口縁部上半は横ナデ、下半から体部は縦位のハケ目、一部ナデ、底部はヘラ削り。内面体部はヘラナデ。
第230図 PL.176	5	土師器 甗	床直 口縁部一部欠	口 底	11.0 5.6	高	17.3	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部から頸部は3段の波状文、1段の縹縄文、2段の波状文、胴部はヘラナデ、底部はヘラ磨き。内面は底部から口縁部にヘラナデ。
第230図 PL.177	6	土師器 甗	床直 完形	口 底	16.6 5.1	高 胴	24.5 22.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	口縁部は横ナデ、一部にヘラ削り、胴部は上位と中位がハケ目、下位はヘラ削り、底部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。

1区14号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	高	胴			
第231図 PL.177	1	土師器 甗	床上7cm 口縁部～胴部上 半2/3片	口 底	9.8			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	内面に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、胴部小口の残るヘラ削り。内面胴部はハケ目後上位に指ナデ。
第231図 PL.177	2	土師器 甗	床直～9cm 口縁部・胴部一 部欠	口 底	13.4 6.0	高 胴	17.2 15.6	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部はハケ目、底部はヘラ削りか。内面胴部はヘラナデ。
第231図	3	土師器 甗	床直 口縁部～胴部上 位片	口 底	19.6			細砂粒/良好/橙	口縁部は上半が横ナデ、下半から胴部はハケ目。内面は頸部にハケ目、胴部はヘラナデ。

1区15号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	高	胴			
第233図 PL.177	1	土師器 高杯	床直～18cm 2/3	口 脚	23.4 10.8	高	16.0	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	杯身部と脚部は接合。杯身部口縁部はハケ目後放射状のヘラ磨き、底部はヘラナデ、脚部はヘラ磨き。内面は杯身部がハケ目後放射状ヘラ磨き、脚部はハケ目(1cmあたり5本)
第233図 PL.177	2	土師器 高杯	床直～17cm 2/3	口 脚	22.9 19.4	高	15.7	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	杯身部と脚部は接合。外面は杯身部上半がヘラ磨き、下半から底部がヘラナデ、脚部はヘラ磨きであるが、器面摩滅のため単位不明。内面は杯身部がヘラ磨き、脚部上半がヘラナデ、端部が横ナデ。
第233図 PL.177	3	土師器 高杯	床直 口縁部一部欠	口 脚	18.8 15.9	高	15.3	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	杯身部と脚部は接合。外面は杯身部底部がヘラ削りと一部ヘラ磨きの他は、ほぼ全面ヘラ磨き。内面は杯身部がヘラ磨き、脚部上半がヘラナデ、端部が横ナデ。
第233図 PL.177	4	土師器 壺	床直 口縁部・体部一 部欠	底 頸	5.2 5.0	胴	15.0	細砂粒/良好/にぶ い橙	胴部下位に赤色塗彩。胴部上半はハケ目による区画内を、波状文、鋸歯文が施され、中位に1条の刺突文が巡る。内面は頸部にヘラ磨き、胴部はヘラナデ。
第233図 PL.177	5	土師器 小型甗	床直 1/2	口 底	7.4 3.6	高 胴	9.2 8.5	細砂粒/良好/黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部は上・中位にハケ目(1cmあたり4本)、下位から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。
第233図 PL.177	6	土師器 小型甗	床直～18cm 3/4	口 底	13.2 6.0	高 胴	13.9 14.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、頸部下はヘラ削り、胴部はハケ目(1cmあたり6本)、底部はヘラ削り。内面は頸部がヘラナデ、底部から胴部はハケ目。
第233図 PL.177	7	土師器 小型甗	床上6～13cm 1/2	口 底	13.6 6.0	高 胴	17.6 19.2	細砂粒・褐粒/良 好/浅黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部上・中位はハケ目(1cmあたり5本)、下位から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にハケ目。
第234図	8	土師器 甗	床直 1/2	口 底	13.7 6.0	高 胴	17.8 18.5	細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、胴部上半と底部はヘラ削り、胴部下半はハケ目。内面は底部から胴部にヘラナデ。
第234図 PL.178	9	土師器 小型甗	埋土 口縁部～胴部	口 胴	13.4 15.1			細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	外面は縦位のハケ目後口縁部から胴部上位に横ナデ、胴部中位はハケ目が残るが一部ヘラ削り。内面は頸部にハケ目、胴部はヘラナデ。
第234図	10	土師器 甗	床直 頸部～底部1/2	底 頸	6.2 13.2	胴	20.5	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	内面に輪積み痕が残る。頸部から胴部はヘラ磨き、底部はヘラ磨き。内面はヘラナデ。

1区26号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	高	胴			
第237図 PL.178	1	土師器 甗	炉1・2、床直 3/4	口 底	16.2 5.0	高 胴	19.5 19.3	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り、胴部中位にハケ目(1cmあたり4本)が残る。内面は底部から胴部にヘラナデ。
第237図 PL.178	2	土師器 甗	炉2、床上18cm 1/2	口 底	15.8 5.3	高 胴	20.1 20.7	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口唇端部に凹線が巡る。口縁部は横ナデ、胴部と底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。

出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	胴			
第237図 PL.178	3	土師器 甕	床直 1/2	口底 23.8 7.0	高 33.4	胴 30.4	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部上半は横ナデ、下半から胴部はハケ目(1cmあたり6~7本)、胴部下部は器面摩滅のため単位不明。底部はヘラ削りか。内面は口縁部が横ナデ、底部から胴部がヘラナデ。	
第237図	4	土師器 甕	床上9~11cm 口縁部~肩部	口底 15.6			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から胴部は縦位のハケ目。内面は口縁部が横ナデ、胴部はヘラナデ。	
第237図	5	土師器 甕	床上9cm 口縁部~肩部	口底 17.8 22.2			細砂粒/良好/橙	口縁部は縦位、胴部上位は斜め、中位は横位のハケ目。内面は口縁部上位が横ナデ、他は横位のハケ目、一部に指頭痕がみられる。	外面に煤が付着か。
第237図	6	土師器 甕	炬2、床直 口縁部~肩部	口底 16.4			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部はハケ目後横ナデ、胴部はハケ目。内面胴部は横位のハケ目。	
第238図 PL.178	7	土師器 壺	床直 口縁部上半	頸底 14.0 27.6			細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	内面に輪積み痕が残る。胴部はヘラナデ後上位に1段の廉繩文と2段の波状文が施されている。内面はヘラナデ。	
第236図 PL.178	8	礫石器 凹石	床直 完形	長幅 24.6 17.6	厚 12.2	重 5262.7	粗粒輝石安山岩	大形礫素材。正面中央部に長径8.5cm、深さ2.7cmの不整形な凹みを有する。凹み周辺および内面は摩滅し平滑である。	

1区29号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	胴			
第240図 PL.179	1	土師器 器台	炬、床上25cm 脚部下半欠	口脚 9.2 11.7	高 9.3		細砂粒/良好/にぶ い黄橙	受部はヘラ削り、脚部はヘラ磨き。内面は受け部がヘラ磨き、脚部上半がナデ、下半はハケ目。	脚部に透孔が3カ所。
第240図	2	土師器 器台	床直 脚部	脚底 12.5			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	脚部と受部は接合。外面はヘラ磨き、内面は上半がナデ、下半はハケ目後一部ナデ、端部は横ナデ。	脚部に透孔が3カ所。
第240図 PL.179	3	土師器 甕	炬 2/3	口底 15.4 5.9	高 20.9	胴 17.6	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第240図	4	土師器 甕	床直 頸部~胴部1/3	胴底 24.5			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面はハケ目(1cmあたり7本)、内面はヘラナデ。	
第240図 PL.179	5	石製品 砥石	床直 2/3	長幅 13.8 6.1	厚 6.4	重 552.2	砂岩	砥面を5面もつ。表面および裏面の使用頻度が高く、砥面は凹状を呈する。上端小口部に縦位の線状痕が見られる。	

2区8号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	胴			
第241図 PL.179	1	土師器 高杯	床直~18cm 脚部一部欠	口脚 16.6 13.4	高 15.2		粗砂粒/良好/にぶ い橙	杯部口縁部は横ナデ。以下はハケ目の上に斜横位のヘラナデを重ねる。内面はナデ。脚部外面は裾部に横ナデ。他はナデ。内面は横位のヘラナデ。裾部は横ナデ。	内外面に炭素吸着。黒斑か。
第241図	2	土師器 高杯	床上7cm 脚部裾部欠	口底 18.5	高 17.0		粗砂粒/良好/明黄 褐	杯部口縁部は横ナデ。以下はナデの上に斜横位のヘラナデ。内面は丁寧なナデ。脚部外面は上半部に丁寧なナデ。下半部から裾部にかけては縦位のヘラ削り。内面はヘラナデ。裾部はハケ目をナデ消す。	外面に炭素吸着。
第242図	3	土師器 鉢	床上11cm 口縁部一部欠	口底 10.2 5.3	高 6.9		粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面は粗雑なナデ。輪積み痕を残す。内面はヘラナデ。底部外面は中央がへこむヘラナデ。	器面に炭素吸着。
第242図	4	土師器 鉢	床上7cm 口縁部一部欠	口底 8.6 5.6	高 6.1		粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	外面は丁寧なナデ。輪積み痕を残す。内面はナデ。底部外面はナデ。	器面の一部に炭素吸着。
第242図	5	土師器 鉢	床上10cm 完形	口底 10.5 6.1	高 9.4		粗砂粒/良好/黄褐	口縁部は横ナデ。以下の外面はナデの上に斜めのヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。底部外面はヘラ削り。	内外面の一部に黒斑。
第242図 PL.179	6	土師器 鉢	床直 完形	口底 11.1 4.3	高 8.8		粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は下半部に斜縦位のヘラ削り。内面は斜横位のナデ。底部外面はヘラ削り。	器面の一部に黒斑。
第242図 PL.179	7	土師器 鉢	床上9cm 口縁部一部欠	口底 11.1 5.7	高 7.0		粗砂粒少/良好/に ぶい黄橙	口縁部外面は胴部との接合部分に輪積み痕状の稜を明瞭に残す。横ナデ。胴部外面は下半部にヘラ削り。他はナデ。内面もナデ。底部外面はヘラ削り。	底部外面の周辺に黒斑。
第242図	8	土師器 鉢	床上16cm 完形	口底 11.3 6.5	高 7.3		粗砂粒少/良好/に ぶい褐	口縁部から頸部直下は横ナデ。以下外面はナデ。内面もナデ。底部外面はヘラナデ・ナデ。	
第242図 PL.179	9	土師器 鉢	床上8cm 完形	口底 10.8 5.9	高 7.8		粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は一部にヘラ削り。他はナデ・ヘラナデ。内面は指ナデ。底部外面はヘラ削り。	底部外面の周辺に黒斑。
第242図 PL.179	10	土師器 鉢	床上12cm 口縁部一部欠	口底 13.3 5.7	高 7.4		粗砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部外面は胴部との接合部分に輪積み痕を残す。横ナデ。胴部外面は斜めのナデ。内面はナデ。底部外面はヘラ削り。	底部外面に黒斑。
第242図	11	土師器 鉢	床上11cm 完形	口底 13.4 5.6	高 7.9		粗砂粒少/良好/に ぶい黄橙	口縁部外面は胴部との接合部分に輪積み痕を残す。横ナデ。以下外面はナデの上に斜めのヘラナデ。内面もヘラナデ。底部外面はヘラ削り。	内面に炭素吸着。
第242図	12	土師器 鉢	床直 口縁部・胴部一 部欠	口底 13.5 5.5	高 8.8		粗砂粒・軽石粒/ 良好/にぶい褐	口縁部は横ナデ。胴部外面はナデ後、中位以下に斜めのヘラ削り。内面はナデ。底部外面はヘラ削り。	内外面の一部に黒斑。
第242図	13	土師器 小型壺	床上11cm 口縁部一部欠	口底 9.3 3.8	高 8.1		粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部直下まで横ナデ。胴部外面下部にヘラ削り。それ以外はナデ、ヘラナデ。内面はナデ。底部外面はナデ。	内外面に黒斑。
第242図	14	土師器 小型壺	床直 口縁部一部欠	口底 8.8 6.5	高 8.1		粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は底部寄りに斜縦位のヘラ削り。それ以外はナデ、ヘラナデ。内面は横位のナデ。底部外面はヘラ削り。	器面の一部に炭素吸着。
第242図	15	土師器 鉢	床上15cm 完形	口底 12.2 4.5	高 9.4		粗砂粒・赤色粘土 粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部外面はナデ後、中位以下に斜めのヘラ削り。内面は横位のナデ。底部外面はヘラ削り。	外面、口縁部周辺の一部に黒斑。
第242図	16	土師器 鉢	床上9cm 口縁部一部欠	口底 12.0 5.9	高 9.4		粗砂粒/良好/橙	底部は凸面状。口縁部は横ナデ。胴部外面はナデ。中位以下はヘラ削り。内面はヘラナデ。底部外面はヘラ削り。	胴部外面は黒斑。
第242図	17	土師器 鉢	床上9cm 口縁部一部欠	口底 12.5 5.4	高 9.5		粗砂粒・赤色粘土 粒/良好/にぶい黄 橙	口縁部は横ナデ。外面の頸部周辺はナデ。それ以下は斜めのヘラ削り。内面はナデ。底部外面はヘラ削り。	底部外面に黒斑。



挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高	胴			
第242図 PL.179	18	土師器 小型壺	床上9cm 口縁部一部欠	口底 5.6	高 10.9	胴 11.0	粗砂粒・軽石粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面の上半部はナデ、下半部は斜めのヘラ削り。内面はヘラナデ。底部外面はヘラ削り。	器面に炭素吸着。
第242図 PL.179	19	土師器 小型壺	床直 口縁部一部欠	口底 4.9	高 10.6	胴 12.7	粗砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面は丁寧なナデ。下半部は斜めのヘラ削り。内面はヘラナデ。底部外面はヘラ削り。	
第242図 PL.179	20	土師器 小型壺	床上11cm 口縁部1/3欠	口底 4.4	高 11.0	胴 13.3	粗砂粒多/良好/にぶい黄橙	全体に粗雑な仕上げ。底部は狭小で不安定な平底。口縁部外面は斜横位のナデ。胴部外面上位は縦位のナデ。中位以下はヘラ削り。内面は粗雑なナデ。粘土を貼り足し補修した痕跡あり。	胴部外面に黒斑。
第242図 PL.179	21	土師器 鉢	床上11cm 胴部一部欠	口底 7.2	高 10.8	胴 9.5	粗砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ。外面は頸部直下に斜位のヘラナデ。胴部上半部は斜位の粗いヘラナデ。下半部は横位のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。底部外面はヘラ削り。	内外面の一部に黒斑。
第242図	22	土師器 小型甕	床上13cm 口縁部一部欠	口底 3.5	高 7.2	胴 8.3	粗砂粒・軽石粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は先端に横ナデ。以下頸部にハケ目。胴部外面は中位が横位のヘラナデ。下位が横位のヘラ削り。内面は横位のナデ。底部外面はナデ。	内外面に炭素吸着。
第242図	23	土師器 小型甕	床直 2/3	口底 3.3	高 7.6	胴 7.4	粗砂粒・軽石粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は先端に横ナデ。以下頸部にハケ目。胴部外面は中位にナデ。下位にヘラ削り。口縁部内面はハケ目。胴部はナデ。底部外面はナデ。	器面に炭素吸着。
第242図	24	土師器 小型甕	床上13cm 口縁部一部欠	口底 4.0	高 7.6	胴 8.4	粗砂粒・軽石粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は先端に横ナデ。以下頸部にハケ目。胴部外面は中位にナデ。下位に斜めのヘラ削り。口縁部内面は下半にハケ目。胴部はナデ。底部外面は中央がわずかにへこむ。ヘラナデ。	外面に黒斑。
第242図 PL.179	25	土師器 小型甕	床上9cm 口縁部一部欠	口底 2.1	高 8.3	胴 9.5	粗砂粒/良好/にぶい黄橙	底部は狭小。口縁部外面はナデ。外面の頸部から胴部上位は縦位のヘラナデ。以下中位はナデ。下位はヘラ削り。口縁部内面は横位のハケ目。内面はヘラナデ。	器面に炭素吸着。
第242図	26	土師器 小型甕	床上11cm 口縁部一部欠	口底 3.5	高 9.1	胴 9.1	粗砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は先端に横ナデ。内面はハケ目。頸部から胴部上位は縦位のハケ目。胴部中位はナデ。下位はヘラ削り。内面は横位のナデ。	器面の一部に黒斑。
第243図	27	土師器 小型甕	床直～10cm 口縁部一部欠	口底 3.9	高 9.3	胴 9.8	粗砂粒・軽石粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ。内面は下半部に横位のハケ目。外面の頸部に縦位のハケ目。胴部はナデ。輪積み痕を残す。底部寄りにヘラ削り。内面は横位のナデ、指押さえ痕。底部外面はナデ。	器面の一部に黒斑。
第243図 PL.179	28	土師器 甕	床上9cm 口縁部一部欠	口底 6.4	高 16.8	胴 30.5	粗砂粒・赤色粘土 粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ。胴部外面の上位は縦位に、中位は横位に、下位は斜めにハケ状工具によるナデ。底部寄りのみヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	
第243図	29	土師器 甕	床上7cm 胴部上位～底部	底	7.0		粗砂粒/良好/橙	胴部外面の上半部は斜めのハケ状工具によるナデ。下半部の上位は斜めのヘラナデ後、一部に横位のヘラ磨きを重ねる。下位は横位のヘラナデ。内面は横位のヘラナデ。	胴部外面中位に煤付着。内面にも黒色の付着物。
第243図	30	土師器 甕	床直～8cm 口縁部欠	底	6.7		粗砂粒・赤色粘土 粒・軽石粒/良好/ 明赤褐	胴部外面上位は縦位の、中位から下位は横位のヘラ削り。内面は横位のナデと考えられる。底部外面はヘラナデ。	器面は摩滅。

2区9号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口脚	高	胴			
第245図 PL.180	1	土師器 高杯	床直～6cm 杯部1/3欠	口脚 15.2	高 19.3	胴 16.3	細砂粒/良好/浅黄	杯身部と脚部は接合、脚部内面に輪積み痕が残る。杯身部はハケ目(1cmあたり7本)後口縁部上半と稜下に横ナデ、脚部はヘラ削り、端部は横ナデ。内面は杯身部上半に横ナデ、下半にハケ目、脚部はナデ。	
第245図	2	土師器 高杯	床直 杯部のみ	口底 9.0	高 18.2	胴	細砂粒/良好/にぶい黄橙	杯身部と脚部は貼付。口縁部は横ナデ、底部(稜下)は手持ちヘラ削り。内面は放射状ヘラ磨き。	
第245図	3	土師器 鉢	床直 口縁部欠	口底 6.4	高 10.2	胴 6.5	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	内外面に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、体部から底部はヘラ削り。内面は底部から体部にヘラナデ。	
第245図 PL.180	4	土師器 鉢	床直 口縁部一部欠	口底 6.3	高 11.2	胴 8.0	細砂粒/良好/橙	外面体部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、体部はハケ目後ナデか、底部は手持ちヘラ削り。内面は底部から体部にヘラナデ。	
第245図 PL.180	5	土師器 鉢	埋土 1/2	口底 6.0	高 14.4	胴 7.8	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、体部はナデ、底部は手持ちヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第245図 PL.180	6	土師器 鉢	床直 口縁部一部欠	口高 9.3	高 16.9	胴	細砂粒/良好/橙	外面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り、体部は器面摩滅のため単位不明。内面はヘラナデ。	
第245図 PL.180	7	土師器 埴	床直 完形	口底 4.2	高 9.0	胴 9.2	細砂粒/良好/にぶい黄	口縁部は横ナデ、胴部は上位・中位がナデ、下位と底部はヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第245図 PL.180	8	土師器 甕	床直 完形	口底 5.1	高 19.8	胴 28.3 27.0	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	胴部内外面に輪積み痕が残る。口縁部は上半が横ナデ、下半から胴部はヘラナデ、底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	

2区23号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口高	胴	高			
第246図 PL.180	1	土師器 埴	床上6cm 完形	口高 10.7	胴 12.2	高 8.2	細砂粒/良好/にぶい黄橙	口縁部は放射状ヘラ磨き、底部から胴部はヘラ削り後胴部に縦位のヘラ磨き。内面は口縁部に放射状ヘラ磨き、底部から胴部はナデ。	
第246図 PL.180	2	土師器 小型壺	床直 完形	口高 7.5	胴 8.0	高 9.3	細砂粒/良好/にぶい黄褐	口縁部は縦位のハケ目(1cmあたり5本)、胴部から底部はヘラ削り。内面は口縁部が横位のハケ目、胴部から底部はヘラナデ。	

出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 胴	長 幅	厚 重				
第246図 PL.180	3	土師器 台付甕	床上7~23cm 口縁部~胴部片 1/3	口 胴	10.8 13.8			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	内面口縁部に輪積み痕が残る。口縁部から頸部は横ナデ、 胴部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第246図 PL.180	4	土師器 甕	床直 口縁部2/3欠	口 底	14.4 5.8	高 胴	16.8 20.0	細砂粒/良好/にぶ い褐	内面胴部に輪積み痕が残る。口縁部はハケ目後横ナデ、胴 部はハケ目、底部はヘラ削り。内面は口縁部がハケ目、底 部から胴部はヘラナデと一部ナデ。	
第246図 PL.180	5	石製品 勾玉	床上31cm 完形	長 幅	2.1 1.5	厚 重	0.5 2.3	蛇紋岩	全面に丁寧な研磨を施す。	孔径2mm。
第247図 PL.180	6	石製品 勾玉	床上8cm 完形	長 幅	2.9 1.8	厚 重	0.8 5.4	蛇紋岩	全面が丁寧に研磨されている。孔の周囲に径5mmの浅い凹 みが認められ、穿孔時の痕跡と推定される。	孔径2.5mm。
第247図 PL.180	7	石製品 勾玉	床上10cm 完形	長 幅	4.3 3.0	厚 重	1.4 20.5	蛇紋岩	全面に丁寧な研磨を施す。孔が垂直でなかったため、シリ コンで型を取り穿孔状況を観察した。両側からの穿孔で、 孔内部に段をもちながらも何とか貫通した様子が窺える。	孔径4mm。
第247図 PL.180	8	石製品 管玉	床上28cm 完形	長 幅	2.5 0.5	厚 重	0.5 1.0	蛇紋岩	全面研磨。穿孔方向は上位から下位である。	孔径(上)2 mm、(下)1.5 mm。
第247図 PL.180	9	礫石器 石皿	床直 完形	長 幅	30.0 25.1	厚 重	10.0 12100.0	粗粒輝石安山岩	大形扁平礫素材。両面に磨面をもつ。被熱によるハジケお よび赤色変化が観察される。	
第247図 PL.181	10	鉄製品 方形鋏鋤先	床直 完形	長 幅	5.6 9.0	厚 重	1.0 12.41	鉄	厚さ0.4cm程の長方形の鉄板の両端をUの字形に折り曲げ 柄装着する鋤または鋏先柄の木質等は見られない。平面形 はやや先端の広がった撥型で刃先側1.5cm程で薄くなるが 錆化・破損により先端形状は不明瞭。両端を曲げた方向と 逆方向に刃先がうつむく形状を示すが、鋤か鋏かの確定に は至らない。	
第247図 PL.181	11	鉄製品 不詳	床直 破片	長 幅	5.8 0.9	厚 重	0.7 4.70	鉄	断面幅0.9cm厚さ0.2cm板状で端部ではやや角の取れ丸みを 帯びる。他端に向かいなだらかに幅を減じ端部では断面0.4 cm角形となり劣化破損する。表面に木材の痕跡がのこる。	
第247図 PL.181	12	鉄製品 不詳	床直 破片	長 幅	4.4 3.4	厚 重	1.3 10.68	鉄	厚さ0.3cm程の鉄板で断面は弧の字形にカーブする。表面 は錆化が顕著で詳細は不明。	

2区28号竪穴住居出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 高	脚 高	脚 高			
第249図 PL.181	1	土師器 高杯	床直~7cm 杯部1/4欠	口 高	15.0 8.2	脚 高	10.4 16.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	杯身部と脚部は接合。杯身部・脚部ともヘラ磨き。内面は 杯身部がヘラ磨き、脚部上半はハケ目(1cmあたり8本)、 端部は横ナデ。
第249図 PL.181	2	土師器 高杯	床直 口縁部一部欠	口 高	17.1 9.2	脚 高	11.4 15.9	細砂粒/良好/にぶ い黄褐	杯身部と脚部は接合。杯身部はハケ目後ヘラナデ。脚部は 上位がヘラ削り、中位がハケ目(1cmあたり7本)、端部が 横ナデ。内面は杯身がハケ目、脚部上半がナデ、下半はハ ケ目と横ナデ。
第249図 PL.181	3	土師器 埴	床直~7cm 口縁部一部欠	口 高	11.6 6.5	脚 高	7.6	細砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部はハケ目(1cmあたり6本)後上半が横ナデ、下半も 一部ナデ、胴部はヘラナデ。内面は口縁部がハケ目、胴部 がナデ。
第249図 PL.181	4	土師器 小型甕	床直 完形	口 高	7.9 7.7	脚 高	9.2	細砂粒/良好/明黄 褐	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面 は口縁部下がハケ目(1cmあたり5本)、底部から胴部に ヘラナデ。
第249図	5	土師器 小型甕	床直 完形	口 高	7.9 7.4	脚 高	9.0	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部から底部はヘラ削り。内面 は口縁部下がハケ目、底部から胴部にヘラナデ。
第249図 PL.181	6	土師器 甕	床直~11cm 口縁部・胴部一 部欠	口 底	14.1 4.7	高 胴	19.2 20.2	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、頸部から胴部上位はハケ目(1cmあたり 6本)が残る、胴部から底部はヘラ削り。内面は口唇部が 横ナデ、口縁部はハケ目、胴部はヘラナデ。

1区3号墳出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長 幅	厚 重	厚 重			
第260図 PL.181	1	鉄製品 刀	床面 完形	長 幅	41.3 3.8	厚 重	2.3 274.72	鉄	棟・刃側ともに明瞭な開を持つ鉄刀で刃長は32cmで刃幅3 ~2.5cmと切先に向かい徐々に細くなり先端部2.5cm程で急 に細くなり先端は尖る。開部分には3.2×1.8cm楕円形で長 さ1.7cmの鉄製はばきが装着される。茎尻から1cmの部分 に長さ2.2cm幅0.5~0.2cmの鉄製目釘が直角に差し込まれ たまま残る。
第260図 PL.181	2	金属製品 耳環	床面 完形	長 幅	3.0 3.2	厚 重	0.9 23.33	銅・銀・鍍金	中実タイプの金環で銅芯銀板貼り表面は僅かに金色を呈し 鍍金と見られる。銀板の残りは悪く外・側面では劣化欠損 し、端部分ではめくれも見られる。断面はほぼ円形外形は Cの字型で両端より0.8cm付近でやや強く曲がる。接面(端 部)は銀板を内側に折り曲げていると見られるが劣化のた め明瞭ではない。

1区5号墳出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長 幅	厚 重	厚 重			
第266図 PL.181	1	金属製品 耳環	床面 完形	長 幅	2.8 3.1	厚 重	0.8 20.73	銅・銀・鍍金	中実タイプの金環で銅芯銀板貼りの表面は僅かに金色を呈し 鍍金と見られる。銀板の残りは悪く、外・側面の一部が劣 化欠損する。断面はほぼ円形外形はCの字型で両端より0.8 cm付近でやや強く曲がる。接面(端部)は銀板を内側に折り 曲げていると見られるが劣化のため明瞭ではない。

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長 幅	2.7 3.1	厚 重	0.7 18.95			
第266図 PL.181	2	金属製品 耳環	床面 完形					銅・銀・鍍金	中実タイプの金環で銅芯銀板貼りの表面は僅かに金色呈し鍍金と見られる。銀板の残りは比較的良く外・側面では一部劣化欠損する。断面はほぼ円形、外形はCの字型で両端より0.7cm付近でやや強く曲がる。接面(端部)は銀板を内側に折り曲げていると見られる。	

1区6号墳出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	18.6					
第267図 PL.181	1	埴輪 円筒	底面上6cm 上半1/2					細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい橙	凸帯(断面三角形)は貼付。外面は凸帯の上下が横ナデ、横ナデの上下は縦位のハケ目。内面は口縁部側は横位のハケ目、その下位はヘラナデ。	透孔 形状： 円形規模:6.0 ×5.5cm
第267図	2	埴輪 円筒	埋土 胴部片					細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	凸帯(断面三角形)は貼付。外面は凸帯の上下が横ナデ、横ナデの上下は縦位のハケ目。内面はヘラナデ。	透孔 形状・ 規模不明
第267図	3	土師器 器台	埋土 台部1/3	脚	10.2			細砂粒/良好/橙	外面と受部内面は赤色塗彩。脚部中央に透孔が6カ所。外面と受部内面はヘラ削り。内面はヘラナデ。	透孔は2孔で 1対か。

2区1号粘土採掘坑出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 稜	11.5 10.4					
第269図	1	土師器 杯	埋土 1/4					細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	

2区1号土坑出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 稜	12.6 14.0					
第271図	1	土師器 杯	床上20cm 破片					細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部(稜下)から底部は手持ちヘラ削り。	

1区埋没谷出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	12.5					
第287図	1	土師器 高杯	埋土 杯身部1/5					細砂粒/良好/橙	内面に輪積み痕が残る。口縁部は横ナデ、体部から脚部はヘラ削り。内面は杯身部体部がヘラナデ。	
第287図	2	土師器 高杯	埋土 脚部上半					細砂粒/良好/橙	脚部下位に透孔3カ所。脚部は細かいヘラ削り。内面はヘラナデ。	
第287図	3	土師器 高杯	底面上24cm 脚部上半					細砂粒/良好/にぶ い橙	杯身部内面は黒色処理。脚部は細かいヘラ削り。内面は杯身部がヘラ磨き、脚部は上半がナデ、下半はヘラナデ。	
第287図	4	土師器 鉢	埋土 1/4	口	27.5			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、体部はヘラ削り。内面の体部中位はハケ目。	
第287図 PL.182	5	土師器 台付甕	底面上9cm 口縁部～肩部	口	13.4			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ、頸部から胴部はハケ目(1cmあたり5～6本)、内面胴部はヘラナデ。	
第287図	6	土師器 台付甕	埋土 台部	脚	8.9			細砂粒/良好/にぶ い褐	脚部端部は内側に折り返し。脚部上半はハケ目、内面はナデ。	
第287図	7	土師器 台付甕	埋土 台部	脚	9.3			細砂粒/良好/橙	脚部端部は内側に折り返し。脚部上半はハケ目、内面はナデ。	
第287図	8	土師器 甕	埋土 底部～胴部1/3	底	6.7			細砂粒/良好/橙	胴部はヘラ磨き、底部は木葉痕が残る。内面はヘラナデ。	
第287図 PL.182	9	土師器 甕	底面上19～34cm 3/4	口 底	15.2 6.5	高 胴	27.2 21.9	細砂粒・粗砂粒/ 良好/にぶい黄橙	口縁部は横ナデ、胴部はヘラ削り後雑なヘラ磨き、底部はヘラ削り。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第288図 PL.182	10	須恵器 甕	底面上23～27cm 口縁部片	口 胴	23.4 48.4			細砂粒/還元焰/灰 オリーブ	口縁部はロクロ整形、凹線による区画の上下に波状文。胴部は外面に平行叩き痕、内面に同心円アテ具痕が残る。	

2区2面・3面水田出土遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 高	8.8 2.8					
第294図	1	土師器 杯	9溝・底面上 45cm 1/2					細砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ、体部から底部は手持ちヘラ削り。	
第294図	2	須恵器 杯	9溝・底面直上 1/2	口 高	9.9 2.7			細砂粒/還元焰/褐 灰	ロクロ整形、回転右回りか。底部は手持ちヘラ削り。内面に降灰が付着。	
第294図	3	須恵器 風字硯	11溝・底面下5 cm 一部片					細砂粒/還元焰/黄 灰	二面硯。硯面は二面ともよく使いこまれている。仕切りは貼付。裏面はヘラナデ。	
第294図 PL.182	4	土師器 小型甕	11溝・底面上 13cm 完形	口 底	9.9 7.1	高 胴	7.7 10.8	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部から頸部は横ナデ、胴部上位はナデ、中位・下位はヘラ削り、底部はヘラ削りか。内面は底部から胴部にヘラナデ。	
第294図	5	埴輪 円筒	12溝・底面上 100cm 破片					細砂粒・粗砂粒/ 良好/明赤褐	凸帯(断面台形状)は貼付。外面は凸帯の上下が横ナデ、横ナデの上下は縦位のハケ目。内面はヘラナデ。	
第294図	6	埴輪 円筒	水田・底面下4 cm 脚部1/3	底	14.0			細砂粒/良好/にぶ い赤褐	内面に輪積み痕が残る。凸帯(形状不明)は貼付。外面は底部端部と凸帯の上下は横ナデ、横ナデの上下は縦位のハケ目。内面はヘラナデ。	
第294図 PL.182	7	礫石器 磨石	9溝 完形	長 幅	13.0 7.3	厚 重	4.2 503.1	粗粒輝石安山岩	扁平礫素材。表裏面に磨面、敲打痕、線状痕を有する。敲打痕と線状痕は磨面を切っている。	

出土遺物観察表

飛鳥時代～平安時代の遺構外出土遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				底	高	厚	重			
第302図	1	須恵器 椀	底面上7cm 底部～高台部	底	6.6 6.3			細砂粒・小礫/酸 化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形、回転右回り。底部は回転糸切り後高台を貼付。	
第302図	2	須恵器 杯	埋土 口縁部一部欠	口 底	10.6 6.0	高	3.5	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	ロクロ整形、回転左回り。底部は回転糸切り無調整。	
第302図 PL.182	3	鉄製品 不詳	2区 破片	長 幅	3.1 0.6	厚 重	0.6 3.75	鉄	断面0.3cm角の角棒状鉄製品で端部やや細く角型、他端へ 向かい3cm程でゆるくJ字状に曲がる。端部は細くなりや や尖るが返し等は見られない。つりばりの可能性も考えら れる。	
第302図 PL.182	4	石製品 砥石	1区 破片	長 幅	(4.4) 2.6	厚 重	2.4 30.6	砥沢石	断面形がやや平行四辺形を呈する。4面使用だが、正面お よび裏面が平滑である。	

古墳時代後期の遺構外出土遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	高	厚	重			
第303図	1	土師器 鉢	埋土 3/4	口 底	13.6 5.1	高	6.1	細砂粒・粗砂粒/ 良好/橙	口縁部は横ナデ、体部上半はナデ、下半から底部は手持ち ヘラ削り。内面は口縁部下半にハケ目、底部から胴部はヘ ラナデ。	
第303図	2	土師器 高杯	埋土 杯部片	口	21.6			細砂粒/良好/橙	杯身部と脚部は接合。杯身部口縁部は横ナデ、底部(稜下) はヘラ削り、脚部もヘラ削り。内面は杯身部口縁部が横ナ デ、底部はヘラナデ。	
第303図 PL.182	3	石製品 白玉	2区 完形	長 幅	1.2 1.2	厚 重	0.7 1.4	滑石	丁寧に研磨され仕上げられている。側面全面に整形痕が残 る。	孔径4mm。
第303図	4	土師器 高杯	底面下7cm 底部～脚部上半					細砂粒/良好/橙	杯身部と脚部は接合。杯身部底部(稜下)はヘラ削り、脚部 は縦位のヘラ削り。内面は杯身部底部がヘラナデ、脚部は 上位がナデ、中位以下はヘラナデ。	

古墳時代前期～中期の遺構外出土遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				脚 <th>胴 高 <th>胴 <th>口 底</th> </th></th>	胴 高 <th>胴 <th>口 底</th> </th>	胴 <th>口 底</th>	口 底			
第304図	1	土師器 器台	埋土 受け部底～台部 上半					細砂粒/良好/にぶ い褐	受部と脚部は接合。脚部に透孔が3カ所。受部口縁部は横 ナデ、底部から脚部はヘラ削り。内面は受部が放射状ヘラ 磨き、脚部がナデ。	
第304図	2	土師器 高杯	埋土 脚部下半1/2欠	脚	12.5			細砂粒/良好/浅黄 橙	脚部上位に透孔が3カ所。脚部上位にハケ目が残る、その 他は器面摩滅のため不鮮明。内面はハケ目(1cmあたり7 ～8本)	
第304図 PL.182	3	土師器 埴	埋土 完形	口 高	11.4 12.7	胴	13.6	細砂粒・粗砂粒/ 良好/明黄褐	口縁部は横ナデ、頸部付近はハケ目(1cmあたり10本)、胴 部から底部はヘラ削り。内面胴部はヘラナデ。	
第304図	4	土師器 甗	埋土 口縁部～肩部片	口	18.0			細砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部上半は横ナデ、下半はハケ目、頸部は横ナデ、胴部 はハケ目後一部横ナデ。内面は胴部にヘラナデ。	

遺構外出土の弥生土器遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第305図 PL.183	1	弥生土器 鉢	1区 口縁部片					K	口縁にRI縄文を横位施文し、4本の横線文を施す。体部は 刷毛目状の条痕文を横位に施文。内面横篋撫で。色調は黄 灰色。	弥生中期
第305図 PL.183	2	弥生土器 壺	1区 胴部片(胴下半)					K	LR縄文を横位施文し、列点状の刺突文や横線文を施す。外 面煤状炭化物付着、内面斜位篋撫で。色調は黄灰色。	弥生中期
第305図 PL.183	3	弥生土器 壺	1区 胴部片					K	やや幅広の沈線文を横・斜位に複数本施文し、沈線文間に LR縄文や小突起を施文。内面風化。色調は鈍い黄褐色。	弥生中期
第305図 PL.183	4	弥生土器 壺	1区 胴部片(肩部)					K	LR縄文を横位施文し、横・斜位の沈線文を施す。内面横篋 撫で。色調は鈍い黄褐色。	弥生中期
第305図 PL.183	5	弥生土器 壺	1区 胴部片					K	RIの細密縄文を横位施文し、三重角沈線文を施す。内面横 篋撫で。色調は鈍い黄褐色。	弥生中期
第305図 PL.183	6	弥生土器 壺	1区 頸部片					K	LR縄文を横位帯条に施文。内面横篋撫で。色調は鈍い褐色。 色調は鈍い黄褐色。	弥生中期
第305図 PL.183	7	弥生土器 壺	1区 胴部片					K	沈線の三重角文を施文。外面風化、内面横篋撫で。色調は鈍 い黄褐色。	弥生中期
第305図 PL.183	8	弥生土器 甗	1区 胴部片					K	LR縄文を縦位施文。外面煤状炭化物付着、内面横篋磨き。 色調は鈍い黄褐色。	弥生中期

遺構外出土の縄文土器遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値				胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				底	高	厚	重			
第306図 PL.183	1	縄文土器 深鉢	1区 胴部片					H	LR縄文を横位施文し、多截竹管状工具による横位集合沈線 文を多段に施文。内面風化。	諸磯b式
第306図 PL.183	2	縄文土器 浅鉢	1区 口縁部片					H	無文浅鉢。外面磨き状の横篋撫で、内面横篋磨き。	加曽利E1式
第306図 PL.183	3	縄文土器 深鉢	1区 胴部片					H	逆U字状の懸垂文を施し、RI縄文を充填的に施文。内外面 風化。	加曽利E3式
第306図 PL.183	4	縄文土器 深鉢	1区 底部完存	底	9.0			H	内外面やや風化。内面一部に煤状炭化物付着。	加曽利E3式
第306図 PL.183	5	縄文土器 深鉢	1区 底部完存	底	7.5			H	無文土器。外面は削りに近い縦篋撫で。底面は丸底状で不 安定。内外面共に被熱風化。	中期末葉
第306図 PL.183	6	縄文土器 深鉢	1区 口縁1/2 胴上半 1/8	口	15.8			H	口縁端部が短く内折。口縁～頸部は無文で、以下に2～3 本単位の沈線により横位や弧状の文様を施し、交点部に八 字状貼付文を施す。	堀之内1式

遺構外出土の縄文土器遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類	出土位置 残存率	計測値	胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第306図 PL.183	7	縄文土器 深鉢	1区 胴部片		H	沈線文を横・縦位に施し、RL縄文を施す。内外面風化。	堀之内1式
第306図 PL.183	8	縄文土器 浅鉢	1区 口縁部片		H	口縁に崩れた8字状貼付文を施し、横位の沈線区画内にLR縄文を充填。内外面共に丁寧な横磨き。	加曾利B2式
第306図 PL.183	9	縄文土器 深鉢	1区 胴部片		I	横位の孤線区画内にRL縄文を充填施文。	加曾利B2式
第306図 PL.183	10	縄文土器 深鉢	1区 胴部片		I	粗い横磨きで後に斜行沈線文を施文。内面磨き。	加曾利B2式
第306図 PL.183	11	縄文土器 深鉢	1区 口縁部片		I	内折する口縁部に浅い2本の横位沈線文と刻目状の斜位短沈線文を施す。下位には稲妻状沈線文を施す。	高井東式
第306図 PL.183	12	縄文土器 深鉢	1区 口縁部片		I	内折する口縁部に2本の横位沈線文を施す。	高井東式
第306図 PL.183	13	縄文土器 深鉢	1区 口縁部片		I	隆線区画文を施し、刻目を付加する。内外面やや風化。	高井東式
第306図 PL.183	14	縄文土器 深鉢	1区 口縁部片		I	粘土帯を廻らせた口縁部に横位沈線文・刻目文や貼付文を施す。以下には稲妻状沈線文を施す。内外面共に横磨き。	高井東式
第306図 PL.183	15	縄文土器 深鉢	1区 口縁1/4	口 (28.6)	I	4単位の波状口縁。波底部に2個の貼付文を縦位に施す。口縁に平行して幅狭な山形状細沈線区画文を2段に施し、刺突状の短沈線を充填施文するが、部分的に磨き状に撫で消す。下位に断面三角形の幅広隆線文を廻らせる。内面煤状炭化物付着。	高井東式
第306図 PL.183	16	縄文土器 注口土器	1区 注口部ほぼ完存		I	外面はかなり丁寧な磨き。先端部欠損。	高井東式?
第306図 PL.183	17	縄文土器 深鉢	1区 口縁部片		J	波状口縁。波底部下に縦位の貼付文を施し、隆起帯縄文を複数帯施文。縄文はRL。内面丁寧な横磨き。色調は褐灰色。	安行1式
第306図 PL.183	18	縄文土器 浅鉢	1区 口縁部片		J	横位沈線により隆起帯縄文を描出。縄文はLR。内面丁寧な磨き。色調は黒褐色。	安行1式
第306図 PL.183	19	縄文土器 深鉢	1区 口縁部片		J	横位沈線により隆起帯縄文を描出。縄文はLR。内面横磨き。色調は褐灰色。	安行1式
第306図 PL.183	20	縄文土器 深鉢	1区 口縁部片		I	口縁外端に肥厚帯を持ち、小突起を付す。1条の平行沈線文を斜位に施文。内面横磨き。	後期後半
第306図 PL.183	21	縄文土器 深鉢?	1区 口縁部片		H	無文土器。外面横磨き、内面粗い横磨き。	後期中葉
第306図 PL.183	22	縄文土器 深鉢	1区 口縁部片		H	23と同一個体。	天神原式?
第306図 PL.183	23	縄文土器 深鉢	1区 口縁部片		H	口縁に指頭状圧痕をもつ縦位隆帯を付し、やや乱雑な横位沈線区画文を3段に施文。区画内には不規則な短沈線を部分的に施す。内面横磨き。内外面やや風化。	天神原式?
第306図 PL.183	24	縄文土器 深鉢	1区 口縁部片		H	魚尾状の波状口縁突起部。内外面やや粗い撫で。	天神原式?
第306図 PL.183	25	縄文土器 浅鉢(精製)	1区 口縁部片		J	断面蒲鉾状の浮線文を施す。内面は口縁に1条の横位沈線文を施し、丁寧な磨き。色調は鈍い黄褐色。	千網式
第306図 PL.183	26	縄文土器 浅鉢(精製)	1区 胴部片		J	断面蒲鉾状の浮線文を施し、レンズ状または網目状に構成か。色調は黄褐色。	千網式
第306図 PL.183	27	縄文土器 浅鉢(精製)	1区 口縁部片		J	断面蒲鉾状の浮線文を施し、口唇下は四字文状に構成。内面口縁に横位沈線文を施文。内外面共にやや風化。色調は鈍い黄褐色。	千網式
第306図 PL.183	28	縄文土器 深鉢(精製)	1区 口縁部片		J	山形状の小波状口縁。断面蒲鉾状の浮線文を施し、波頂下に縦位隆線文を垂下させて背割り状に沈線を施す。内面口縁に横位沈線文を施文。内面磨き。色調は鈍い黄褐色。	千網式
第306図 PL.183	29	縄文土器 深鉢(精製)	1区 胴部片		J	断面蒲鉾状の浮線文を施す。内面丁寧な磨き。色調は鈍い黄褐色。	千網式
第306図 PL.183	30	縄文土器 深鉢(精製)	1区 胴部片		J	細密なLR縄文を縦位施文。内面縦磨き。色調は褐灰色。	晩期末葉
第306図 PL.183	31	縄文土器 深鉢(精製)	1区 胴部片		J	細密なLR縄文を横位施文。内面磨き。色調は褐灰色。	晩期末葉
第306図 PL.183	32	縄文土器 深鉢(半精製)	1区 胴部片		J	櫛歯状工具による条線文を縦位に施す。内面丁寧な磨き。色調は鈍い黄褐色。	晩期末葉
第306図 PL.183	33	縄文土器 深鉢	1区 胴部片		J	櫛歯状工具による条線文を斜位に施す。内面磨き。色調は鈍い黄褐色。	晩期末葉
第307図 PL.184	34	縄文土器 深鉢	2区 口縁部片		A	密集したR燃糸文を縦位に施文。内面風化。	夏島式
第307図 PL.184	35	縄文土器 深鉢	2区 胴部片		A	横位の沈線文帯や鋸歯状沈線文および刺突文を施す。内面やや風化。	田戸下層式
第307図 PL.184	36	縄文土器 深鉢	3区 口縁部片		A	LR縄文を口唇下に横位、以下に縦位に施文して羽状構成。口縁に2本の横位沈線文を施し、その間に短沈線による鋸歯文を施文。内面風化。	花輪台式?
第307図 PL.184	37	縄文土器 深鉢	2区 口縁部片		B	波状口縁。半截竹管による横位集合沈線文を施す。内面は条痕文を横位施文。	常世式
第307図 PL.184	38	縄文土器 深鉢	4区 口縁部片		C	RLとLRの結束縄文を横位多段に施文。口縁に2本の横位隆線文を施し、半截竹管による押し引き状の刻目文を施文。	花積下層式

出土遺物観察表

遺構外出土の縄文土器遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
第307図 PL.184	39	縄文土器 深鉢	4区 口縁部片				C	波状口縁。口縁部に半截竹管による有節沈線の爪形文を4条廻らせ、波頂下に縦位沈線や菱形文の意匠を構成。内面粗い横篋撫で。	有尾式
第307図 PL.184	40	縄文土器 深鉢	4区 胴部片				C	半截竹管による横位の連続爪形文を施す。内面磨きに近い横篋撫で。	有尾式
第307図 PL.184	41	縄文土器 深鉢	3区 胴部片				C	RL縄文を横位に交互施文し、菱形の意匠を構成。内面横篋撫で。	有尾式
第307図 PL.184	42	縄文土器 深鉢	4区 胴部片				C	条間隔の開いた2本単位の回転絡条体Lを横・斜位に施文。外面風化、内面縦篋撫で。	有尾式
第307図 PL.184	43	縄文土器 深鉢	4区 口縁～底部ほぼ 完存	口底 23.5 9.3	高 30.0		C	内削ぎ状の口唇部。0段多条のRLとLR縄文を横位多段に施文して、菱形の意匠を構成。口縁部に外面から内面側へ穿孔した1対の補修孔が存在。外面下半部はやや被熱風化、内面下半部に煤状炭化物付着。	有尾式
第307図 PL.184	44	縄文土器 深鉢	2区 底部1/8				H	LR縄文を横位施文し、半截竹管による横位集合沈線文を多段に施す。外面一部に煤状炭化物付着、内面横篋撫で。	諸磯b式
第307図 PL.184	45	縄文土器 深鉢	4区 口縁部片				H	半截竹管による集合沈線文を口唇～口縁にかけて施文し、耳状貼付文を施す。内面横篋撫で。	諸磯c式
第307図 PL.184	46	縄文土器 深鉢	4区 口縁部片				D	粗い横位の篋撫で後、半截竹管の平行集合沈線文により多段・羽状に文様構成。2個一対の円形貼付文を施す。	諸磯c式
第307図 PL.184	47	縄文土器 深鉢	4区 胴部片				D	46と同一個体。	諸磯c式
第307図 PL.184	48	縄文土器 深鉢	2区 胴部片				H	半截竹管による縦位格子目状の集合沈線文を施す。内面に煤状炭化物付着。	諸磯c式
第307図 PL.184	49	縄文土器 深鉢	4区 胴部片				D	RLとLRの結束縄文を横位多段に施文。内面風化。	十三菩提式
第307図 PL.184	50	縄文土器 深鉢	4区 口縁部片				H	RLとLRの結束縄文を横位多段に施文し、横位の波状隆線文や小円形貼付文を施す。内面磨きに近い横篋撫で。	諸磯c式
第307図 PL.184	51	縄文土器 深鉢	3区 胴部片				E	LR縄文を縦位施文し、2本の沈線文を施す。	五領ヶ台式
第307図 PL.184	52	縄文土器 深鉢	4区 口縁部片				E	口唇外端に回転絡条体Lを施文。口縁部は半截竹管の横・縦位平行沈線文や格子目文を施す。	五領ヶ台式
第307図 PL.184	53	縄文土器 深鉢	4区 口縁部片				E	小突起を付した波状口縁。波頂部内面に円環状の隆帯を貼付し穿孔する。RL縄文を縦位施文し、頸部に横位沈線文を施す。	五領ヶ台式
第307図 PL.184	54	縄文土器 深鉢	3区 胴部片				G	RL縄文を縦位施文し、先端に環状突起を付した付曲隆線文やその両側に沿って沈線文を施す。内面横篋撫で。	新巻類型
第307図 PL.184	55	縄文土器 深鉢	3区 胴部片				G	LR縄文を横位施文し、先端に環状突起を付した付曲隆線文やその両側に沿って沈線文・刺突文を施す。	新巻類型
第307図 PL.184	56	縄文土器 深鉢	4区 胴部片				F	LR縄文を斜位施文し、縦位隆帯の左側沿いに2条の角押文を施す。隆帯上面にも縄文施文。	新巻類型?
第307図 PL.184	57	縄文土器 深鉢	3区 口縁部片				F	波状口縁。単列の角押文を横位に施文。内面やや風化。	阿玉台Ib式
第307図 PL.184	58	縄文土器 深鉢	3区 口縁部片				F	口縁に沿ってやや幅広の爪形文を施す。内面横篋撫で。	阿玉台Ib式
第308図 PL.184	59	縄文土器 深鉢	3区 口縁部片				H	口唇部が短く外折。RL縄文を縦位施文し、口唇下括弧部に交互刺突により小鋸歯状文を描出。口縁部に半截竹管の平行沈線により波状文を施す。内面横篋撫で。	三原田式
第308図 PL.184	60	縄文土器 深鉢	3区 胴部片				H	RL縄文を横位施文し、口縁下部に連鎖状の隆帯文を横位施文。内面磨きに近い横篋撫で。	三原田式
第308図 PL.184	61	縄文土器 深鉢	2区 胴部片				H	口縁部にR燃糸文を斜位に施文し、2本単位の隆帯によるS字文を施す。	加曾利E1式
第308図 PL.184	62	縄文土器 深鉢	4区 口縁一部欠損	口底 (14.0) 7.0	高 20.0		H	口縁～胴部下位にかけてRL縄文を縦位施文。外面やや被熱風化、内面胴部下半に煤状炭化物付着。	加曾利E1式
第308図 PL.184	63	縄文土器 深鉢	4区 胴部片				H	RL縄文を横・斜位に施文し、2本単位の隆帯による懸垂文や腕背文的な意匠を施す。	加曾利E2式
第308図 PL.184	64	縄文土器 深鉢	2区 口縁部片				H	口縁に2本隆帯による連弧状の区画文を施し、短沈線文を充填施文。隆帯の交点に渦巻文を付す。内外面やや風化。	加曾利E2式
第308図 PL.184	65	縄文土器 深鉢	2区 胴部片				H	RL縄文を縦位施文し、沈線懸垂文を施す。内外面やや風化。	加曾利E2式
第308図 PL.185	66	縄文土器 深鉢	4区 胴部片				H	幅広沈線の楕円区画内にRL縄文を充填し、沈線文をなぞり返す。内面上半部に煤状炭化物付着。	加曾利E3式
第308図 PL.185	67	縄文土器 深鉢	4区 胴部片				H	2条1単位の凹線状の幅広沈線により渦巻文を施し、LR縄文を充填。	加曾利E3式
第308図 PL.185	68	縄文土器 深鉢	4区 口縁部片				H	台形状の突起を持つ波状口縁。LR縄文を横位施文し、渦巻文や区画文を施す。	加曾利E3式
第308図 PL.185	69	縄文土器 深鉢	4区 胴部片				H	U字状や直線状の懸垂区画内に、RL縄文を充填施文。	加曾利E3式
第308図 PL.185	70	縄文土器 深鉢	4区 胴部片				H	RL縄文を縦位施文し、U字状懸垂文を施す。内面の一部に煤状炭化物付着。	加曾利E3式
第308図 PL.185	71	縄文土器 深鉢	4区 口縁部片				H	逆U字状の懸垂文を施し、RL縄文を充填的に施文。	加曾利E3式
第308図 PL.185	72	縄文土器 深鉢	4区 口縁部片				H	0段多条のRL縄文を横・縦位に施文して羽状構成。	加曾利E3式

遺構外出土の縄文土器遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長	幅	厚			
第308図 PL.185	73	縄文土器 深鉢	4区 口縁部片				H	幅広沈線の区画文内にLR縄文を充填。	加曾利E3式
第308図 PL.185	74	縄文土器 深鉢	4区 口縁部片				H	沈線区画文内にRL縄文を充填施文。	加曾利E3式
第308図 PL.185	75	縄文土器 深鉢	4区 胴部片				H	幅広沈線の区画文内にRL縄文を充填。	加曾利E3式
第308図 PL.185	76	縄文土器 深鉢	4区 口縁部片				H	横位沈線を1条施文し、多截竹管状工具による縦位条線文を施す。内面に煤炭炭化物付着。	加曾利E3式
第308図 PL.185	77	縄文土器 深鉢	4区 口縁部片				H	幅広の横位沈線を1条施文し、多截竹管状工具による縦位条線文を施す。	加曾利E3式
第308図 PL.185	78	縄文土器 浅鉢	4区 頸部片				H	RL縄文を施文。断面三角形の低平な隆帯により区画文を施し、小橋状把手を付す。	加曾利E3式
第309図 PL.185	79	縄文土器 深鉢	4区 胴部片				H	RL縄文と断面三角形の低平な隆帯文を施文するが、縄文は充填的な施文。	加曾利E4式
第309図 PL.185	80	縄文土器 深鉢	4区 口縁部片				H	RL縄文を縦位に施文し、断面三角形の低平な横位隆帯文を施す。	加曾利E3式
第309図 PL.185	81	縄文土器 深鉢	4区 胴部片				H	0段多条のRL縄文を縦位施文し、断面三角形の低平な隆帯文を施す。	加曾利E3式
第309図 PL.185	82	縄文土器 深鉢	4区 胴部片				H	RL縄文を横位施文し、沈線文等を施す。	加曾利E3式
第309図 PL.185	83	縄文土器 深鉢	4区 胴部片				H	複数本の棒状工具による粗い縦位条線文を施す。	加曾利E3式
第309図 PL.185	84	縄文土器 台付鉢	4区 台部1/3	台	(6.0)		H	1箇所に径5mmの焼成前の円孔がある。	加曾利E3式
第309図 PL.185	85	縄文土器 深鉢	3区 口縁部片				H	口縁に横位微隆起線文を施し、LR縄文を充填。内面やや風化。	加曾利E4式
第309図 PL.185	86	縄文土器 深鉢	2区 口縁部片				H	口縁に無文部を置いて微隆起帯を横位に施文し、RL縄文を横・縦位に施文して羽状を構成。外面やや風化。	加曾利E4式
第309図 PL.185	87	縄文土器 深鉢	3区 胴部片				H	L縄文を縦位施文。内面横位磨で、縦位磨き。	加曾利E4式
第309図 PL.185	88	縄文土器 深鉢	2区 胴部片				H	三角形の沈線区画文を施し、LR縄文を充填。内外面やや風化。	堀之内2式
第309図 PL.185	89	縄文土器 深鉢	2区 胴部片				I	楕円形状の沈線区画文を施し、細密なLR縄文を充填。内面横位磨で。	加曾利E2式
第309図 PL.185	90	縄文土器 深鉢	2区 口縁部片				I	波状口縁。隆帯により楕円状区画文を施し、内側に単沈線文を施文。隆帯上には刻目を施す。内外面やや風化。	高井東式
第309図 PL.185	91	縄文土器 深鉢	2区 口縁部片				I	波状口縁。口縁下位に横位隆帯文を施し、上位に横位沈線文を施文。内面磨きに近い横位磨で。	高井東式
第309図 PL.185	92	縄文土器 深鉢	2区 口縁部片				H	口縁に貼付文を縦位に施し、2本の横位沈線文を施文。外面やや粗い磨で、内面磨きに近い横位磨で。	高井東式
第309図 PL.186	93	縄文土器 鉢	2区 口縁部片				I	無文土器。口縁部横位磨き、以下斜位磨き。内面磨きに近い横位磨で。	高井東式
第309図 PL.186	94	縄文土器 深鉢	2区 底部1/2	底	(6.0)		I	底面に網代痕。外面縦位磨で、内面横位磨で。	高井東式
第309図 PL.186	95	縄文土器 深鉢(精製)	2区 胴下半~底部 1/3	底	5.4		J	底面に木葉痕。外面横位磨で後に縦位磨き。内面横位磨で。色調は褐灰色。	晩期末葉
第309図 PL.186	96	縄文土器 壺	2区 口縁部片				K	口縁に半截竹管状工具による波状文を施す。内面磨きに近い横位磨で。色調は鈍い黄褐色。	弥生中期
第309図 PL.186	97	弥生土器 壺	2区 口縁部片				K	複合口縁の上面にLR縄文を横位施文。内外面共に磨きに近い横位磨で。色調は灰黄褐色。	弥生中期
第309図 PL.186	98	弥生土器 壺	2区 胴部片				K	細密なLR縄文を横位施文し、半截竹管の平行沈線により横位の区画文を多段に構成。内面磨き。	弥生中期

遺構外出土の縄文石器遺物観察表

挿図 PL.No.	No.	種類	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長	幅	厚			
第310図 PL.186	1	剥片石器 打製石斧	1区 1/2	長幅 (8.6) (7.9)	厚 3.2 228.4		珪質頁岩	大形剥片素材。縁辺に粗い二次加工を施し整形。裏面に自然面が残る。	
第310図 PL.186	2	剥片石器 打製石斧	1区 完形	長幅 14.0 5.2	厚 2.0 147.5		黒色頁岩	横長剥片素材。両面縁辺に粗い二次加工を施す。刃部周辺の摩滅顕著。	
第310図 PL.186	3	剥片石器 打製石斧	1区 完形	長幅 11.1 4.4	厚 1.7 85.7		細粒輝石安山岩	刃部周辺の摩滅顕著。左右側縁中央部の対向する位置に褐色の変色部が認められる。	
第310図 PL.186	4	剥片石器 打製石斧	1区 完形	長幅 10.6 6.4	厚 2.7 209.4		珪質頁岩	左右側縁に緩やかな挟りが入る。刃部付近よりも石器内部の摩滅が著しい。刃部再生の可能性ある。	
第310図 PL.186	5	剥片石器 打製石斧	1区 完形	長幅 11.0 7.1	厚 3.3 243.6		珪質頁岩	刃部から約1.5cm内部の摩滅が最も顕著で、刃部再生の痕跡と推定される。	
第311図 PL.186	6	剥片石器 石鏃	2区 完形	長幅 1.9 1.6	厚 0.4 0.7		黒曜石	水と影が発達し、全体的に表面白濁。表面の摩滅も著しく水の影響を受けていると思われる。	凹基無茎鏃
第311図 PL.186	7	剥片石器 石鏃	2区 3/4	長幅 (2.4) 1.4	厚 0.5 1.2		チャート	両面全面に丁寧な押圧剥離を施し整形。先端部折れ。	平基無茎鏃
第311図 PL.186	8	剥片石器 石鏃	2区 完形	長幅 1.7 1.4	厚 0.3 0.4		黒曜石	両面全面に押圧剥離を施し整形。	凹基無茎鏃

出土遺物観察表

遺構外出土の縄文石器遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				長	幅	厚				
第311図 PL.186	9	剥片石器 石匙	2区 略完形	長 幅	3.9 (3.7)	厚 重	0.7 8.8	チャート	横型。背面側は全面に二次加工を施すが、腹面側は摘み部および側縁の一部にのみ加工。	
第311図 PL.186	10	剥片石器 スクレイパー	2区 完形	長 幅	5.5 4.5	厚 重	1.3 35.5	黒色頁岩	剥片を素材とし、左右縁辺を中心に二次加工を施す。裏面は全面自然面。	
第311図 PL.186	11	剥片石器 スクレイパー	2区 完形	長 幅	12.3 6.3	厚 重	2.0 129.5	黒色頁岩	横長剥片素材。背面縁辺に粗い二次加工を施し刃部を作り出す。	
第311図 PL.186	12	剥片石器 打製石斧	2区 1/2	長 幅	(5.8) 3.5	厚 重	1.4 36.9	黒色頁岩	横長剥片を素材。両側縁に潰れ状の剥離痕が認められる。下半部欠損。	
第311図 PL.186	13	剥片石器 打製石斧	2区 1/2	長 幅	(6.0) 4.5	厚 重	1.1 33.9	珪質頁岩	剥片素材。稜線が一部摩滅。裏面に自然面を残す。	
第311図 PL.186	14	剥片石器 打製石斧	2区 1/2	長 幅	6.3 4.2	厚 重	1.0 29.6	黒色頁岩	縁辺の摩滅が少なく基部側と判断した。裏面にバルブ部が残る。下半部欠損。	
第311図 PL.186	15	剥片石器 打製石斧	2区 破片	長 幅	(3.4) 5.4	厚 重	(1.3) 29.8	黒色頁岩	石質によるのか全体的に摩滅しているように見える。下部折れによる欠損。	
第311図 PL.186	16	剥片石器 打製石斧	2区 2/3	長 幅	8.8 5.3	厚 重	2.7 149.0	黒色頁岩	上部部に自然面を残す。両側縁に潰れおよび摩滅が認められる。	
第311図 PL.186	17	剥片石器 打製石斧	2区 2/3	長 幅	(8.0) 4.9	厚 重	2.0 98.2	黒色頁岩	左右側縁に潰れ状の微小剥離痕が見られる。下部欠損。	
第311図 PL.186	18	剥片石器 打製石斧	2区 完形	長 幅	9.7 4.6	厚 重	1.7 74.6	黒色頁岩	横長剥片素材。両側縁を中心に二次加工を施す。左右縁辺では潰れが認められる。	
第311図 PL.186	19	剥片石器 打製石斧	2区 完形	長 幅	12.2 4.9	厚 重	1.7 107.5	細粒輝石安山岩	正面右上縁辺は折れ面のままで、厚みを残す。摩滅がなく未使用と考えられる。	
第311図 PL.186	20	剥片石器 打製石斧	2区 完形	長 幅	14.8 5.5	厚 重	1.9 165.8	粗粒輝石安山岩	刃部周辺の摩滅が著しく、肉眼でも刃部に直交する線状痕が観察できる。	
第311図 PL.186	21	剥片石器 打製石斧	2区 完形	長 幅	11.2 6.5	厚 重	2.3 173.7	細粒輝石安山岩	左側面下部の摩滅が著しい。裏面下端部に衝撃剥離によると推定される剥離痕が見られる。剥離痕を打面として背面側に二次加工施し刃部再生を試みていると考えられる。	
第311図 PL.186	22	剥片石器 打製石斧	2区 完形	長 幅	17.6 7.2	厚 重	4.6 797.2	細粒輝石安山岩	打製石斧未成品と考えたが、礫素材であることから他の礫石器の可能性もある。	
第312図 PL.186	23	剥片石器 打製石斧	2区 完形	長 幅	12.8 8.2	厚 重	3.8 372.6	黒色頁岩	刃部周辺より左右側縁の加工度が高い。石器中央部付近の摩滅が著しい。	
第312図 PL.186	24	剥片石器 打製石斧	2区 完形	長 幅	12.8 8.7	厚 重	3.1 317.8	砂岩	大形剥片素材。右側縁抉り部の摩滅が著しい。	
第312図 PL.187	25	剥片石器 石鏃	3区 略完形	長 幅	2.0 1.8	厚 重	0.4 1.3	黒色安山岩	先端部の折れは衝撃剥離と推定される。	平基無莖鏃
第312図 PL.187	26	剥片石器 スクレイパー	3区 完形	長 幅	5.1 4.7	厚 重	1.5 39.9	黒色頁岩	両面縁辺に二次加工を施し整形・刃部作出を行う。上面は全面自然面。	
第312図 PL.187	27	剥片石器 スクレイパー	3区 完形	長 幅	7.2 5.2	厚 重	1.6 50.6	黒色頁岩	腹面右側縁に連続的な二次加工を施し、刃部を作り出している。	
第312図 PL.187	28	剥片石器 スクレイパー	3区 2/3	長 幅	(7.7) 5.7	厚 重	1.1 45.8	黒色頁岩	横長剥片を素材とし、縁辺を中心に二次加工を施す。裏面に自然面が残る。下部欠損。	
第312図 PL.187	29	剥片石器 スクレイパー	3区 完形	長 幅	9.6 4.9	厚 重	2.0 70.7	黒色頁岩	横長剥片の末端部に二次加工を施し、刃部を作り出している。	
第312図 PL.187	30	剥片石器 スクレイパー	3区 完形	長 幅	4.2 7.5	厚 重	1.2 23.3	黒色頁岩	横長剥片素材。裏面に主要剥離面が残る。剥片端部に二次加工を施し刃部を作出。	
第312図 PL.187	31	剥片石器 スクレイパー	3区 完形	長 幅	7.5 4.0	厚 重	1.2 34.5	黒色頁岩	横長剥片素材。下辺および左側縁に二次加工を施す。	
第312図 PL.187	32	剥片石器 スクレイパー	3区 完形	長 幅	8.6 8.1	厚 重	1.5 115.9	細粒輝石安山岩	剥片縁辺に二次加工を施し、刃部を作り出している。	
第312図 PL.187	33	剥片石器 打製石斧	3区 1/2	長 幅	5.0 3.9	厚 重	1.4 39.3	黒色頁岩	両側縁に潰れ状の剥離痕が認められる。下半部折れにより欠損。	
第312図 PL.187	34	剥片石器 打製石斧	3区 1/2	長 幅	(7.0) (3.8)	厚 重	0.9 27.2	細粒輝石安山岩	両側縁に摩滅および潰れが認められる。下半部欠損。	
第312図 PL.187	35	剥片石器 打製石斧	3区 略完形	長 幅	(10.0) 4.5	厚 重	1.2 65.8	黒色頁岩	刃部周辺の摩滅が顕著。右側縁中央部に抉りが入る。上端部欠損。	
第312図 PL.187	36	剥片石器 打製石斧	3区 略完形	長 幅	(9.1) (4.6)	厚 重	1.6 76.9	黒色頁岩	剥片素材。両面縁辺に二次加工を施し整形。正面左上は節理面である。	
第312図 PL.187	37	剥片石器 打製石斧	3区 完形?	長 幅	6.6 4.3	厚 重	1.9 56.3	黒色安山岩	正面全面に二次加工を施しているが、裏面および刃部は加工が少ないことから未成品の可能性もある。	
第312図 PL.187	38	剥片石器 打製石斧	3区 完形	長 幅	8.0 4.7	厚 重	2.6 102.4	黒色頁岩	正面下端部の剥離痕は衝撃剥離の可能性がある。裏面に自然面を大きく残す。	
第312図 PL.187	39	剥片石器 打製石斧	3区 完形	長 幅	9.3 3.8	厚 重	1.3 51.1	黒色頁岩	横長剥片素材。右側縁に連続する潰れ状の剥離痕が見られる。	
第312図 PL.187	40	剥片石器 打製石斧	3区 完形	長 幅	11.1 4.1	厚 重	1.2 65.1	黒色頁岩	剥片素材。両面に二次加工を施し整形。刃部の摩滅顕著。	
第312図 PL.187	41	剥片石器 打製石斧	3区 完形	長 幅	10.1 5.5	厚 重	2.5 132.8	黒色頁岩	刃部周辺の摩滅顕著。左右側縁に潰れが認められる。	
第312図 PL.187	42	剥片石器 打製石斧	3区 完形	長 幅	10.4 7.2	厚 重	2.4 199.8	黒色頁岩	平面形は左右非対称で、左縁辺に抉りが入っている。両縁辺には潰れが認められる。	
第313図 PL.187	43	剥片石器 石核	3区 完形	長 幅	8.4 9.3	厚 重	3.8 267.0	黒色頁岩	平坦部を打面として多方向から加撃し、両面加工体をなす。	44と接合。接合時の大きさ(cm) 長9.3 幅8.6 厚4.1



遺構外出土の縄文石器遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長 幅	厚 重	厚 重			
第313図 PL.187	44	剥片石器 剥片	3区 完形	長 幅 5.7 5.5	厚 重 2.2 55.9		黒色頁岩	上部の平坦面を打面とする。左折れ面は打撃時の同時割れと考えられる。	43と接合。
第313図 PL.187	45	剥片石器 石鏃	4区 完形	長 幅 2.8 (2.4)	厚 重 0.4 1.7		珪質頁岩	大形。両面全面に押圧剥離による二次加工を施す。	凹基無茎鏃
第313図 PL.187	46	剥片石器 スクレイパー	4区 完形	長 幅 3.5 2.8	厚 重 1.0 7.7		黒曜石	小形剥片素材、背面縁辺に二次加工を施し、下辺に刃部を作り出す。	
第313図 PL.187	47	剥片石器 スクレイパー	4区 完形	長 幅 (6.2) 3.6	厚 重 1.1 18.8		珪質頁岩	縦長剥片を素材とし、両側縁に二次加工を施す。裏面に打面部および腹面が残る。	
第313図 PL.187	48	剥片石器 スクレイパー	4区 完形	長 幅 3.6 3.7	厚 重 1.2 14.6		黒曜石	平面形は円形を呈し、両面に二次加工を施し刃部を作り出す。	黒曜石原産地 分析8
第313図 PL.187	49	剥片石器 スクレイパー	4区 完形	長 幅 3.5 3.2	厚 重 0.9 9.9		黒曜石	平面形は円形を呈し、両面縁辺に二次加工を施し、スクレイパー状の刃部を作り出す。腹面の二次加工は平坦である。	黒曜石原産地 分析5
第313図 PL.187	50	剥片石器 スクレイパー	4区 完形	長 幅 4.2 4.0	厚 重 1.5 19.7		黒曜石	平面形は円形で、表裏面に二次加工を施し、正面右側縁に刃部を作り出す。腹面側の加工は平坦剥離。	黒曜石原産地 分析1
第313図 PL.187	51	剥片石器 スクレイパー	4区 完形	長 幅 4.7 3.2	厚 重 1.4 18.2		黒曜石	背面および腹面の下端部に二次加工を施し、片刃の刃部を作り出す。	黒曜石原産地 分析4
第313図 PL.187	52	剥片石器 スクレイパー	4区 完形	長 幅 4.9 3.9	厚 重 1.4 20.1		黒曜石	両面に二次加工を施し、下端部に刃部を作り出す。	黒曜石原産地 分析6
第313図 PL.187	53	剥片石器 スクレイパー	4区 完形	長 幅 8.3 7.5	厚 重 1.8 116.6		黒色頁岩	大形剥片素材の腹面縁辺に二次加工を施す。背面(裏面)に自然面を大きく残す。主要剥離面と二次加工部では、表面の経年変化に大きな差があり、時間的な隔りがあるものと推定される。	
第313図 PL.187	54	剥片石器 スクレイパー	4区 完形	長 幅 9.4 7.5	厚 重 1.8 162.8		黒色頁岩	大形剥片の縁辺に粗い二次加工を施し刃部を作り出している。背面は全面自然面。	
第313図 PL.187	55	剥片石器 打製石斧	4区 1/2	長 幅 5.0 4.5	厚 重 1.3 34.8		黒色頁岩	剥片素材。摩滅が認められないことから基部側と考えた。下半部は折れにより欠損。	
第313図 PL.187	56	剥片石器 打製石斧	4区 1/2	長 幅 (5.6) 4.7	厚 重 1.5 49.4		黒色頁岩	刃部周辺の摩滅が顕著。上半部欠損。	
第313図 PL.187	57	剥片石器 打製石斧	4区 2/3	長 幅 (7.6) (4.2)	厚 重 1.5 50.1		黒色頁岩	左右側面に潰れ状の微小剥離痕および摩滅が認められる。裏面下部に下方向からの打撃(衝撃)による剥離痕が残る。	
第314図 PL.188	58	剥片石器 打製石斧	4区 2/3	長 幅 7.8 4.3	厚 重 1.7 72.4		黒色頁岩	両側縁には連続する潰れ状の剥離痕が認められる。下部欠損。	
第314図 PL.188	59	剥片石器 打製石斧	4区 3/4	長 幅 (8.2) (4.9)	厚 重 1.1 37.6		黒色頁岩	薄手の剥片素材。両側縁に二次加工を施し整形。下部折れによる欠損。	
第314図 PL.188	60	剥片石器 打製石斧	4区 1/2	長 幅 (8.0) (6.2)	厚 重 2.4 140.8		細粒輝石安山岩	剥片素材。正面右側縁に潰れ、刃部に弱い摩滅が認められる。	
第314図 PL.188	61	剥片石器 打製石斧	4区 3/4	長 幅 (9.0) 5.2	厚 重 1.1 52.5		黒色頁岩	薄手の剥片素材。刃部周辺に摩滅が認められ、特に正面右側縁および内部で顕著である。	
第314図 PL.188	62	剥片石器 打製石斧	4区 完形	長 幅 14.5 4.5	厚 重 2.0 141.9		黒色頁岩	裏面の一部に厚みがあり、厚い部分の摩滅が顕著である。	
第314図 PL.188	63	剥片石器 打製石斧	4区 完形	長 幅 12.9 5.2	厚 重 1.9 141.6		黒色頁岩	左側縁の潰れおよび摩滅が著しい。背面に自然面が大きく残る。	
第314図 PL.188	64	剥片石器 打製石斧	4区 略完形	長 幅 (10.9) 5.4	厚 重 1.7 99.9		黒色頁岩	刃部および裏面中央部で摩滅が認められる。刃部一部欠損。	
第314図 PL.188	65	剥片石器 打製石斧	4区 完形	長 幅 12.5 7.8	厚 重 1.9 168.4		黒色頁岩	裏面に自然面を大きく残す大形剥片素材で、両側縁に抉りをもつ。	
第314図 PL.188	66	剥片石器 スクレイパー	4区 完形	長 幅 4.4 3.8	厚 重 1.4 19.7		黒曜石	剥片素材で、下端部に片刃状の刃部を作り出している。腹面にはわずかだが平坦な剥離痕が見られる。	黒曜石原産地 分析2
第314図 PL.188	67	剥片石器 打製石斧	4区 完形	長 幅 10.2 3.7	厚 重 1.4 56.4		黒色頁岩	刃部周辺の摩滅顕著。	
第314図 PL.188	68	剥片石器 石核	4区 完形	長 幅 3.6 3.2	厚 重 1.1 10.3		黒曜石	剥片素材の小形石核で、上下端に剥離痕が見られる。裏面は剥離面だが、水和層が厚く表面摩滅。	黒曜石原産地 分析9
第314図 PL.188	69	剥片石器 石核	4区 完形	長 幅 3.0 3.7	厚 重 1.8 18.3		黒曜石	剥片素材の小形石核。裏面に自然面を大きく残す。	黒曜石原産地 分析10
第314図 PL.188	70	剥片石器 二次加工ある剥片	4区 完形	長 幅 2.9 3.0	厚 重 0.9 7.0		黒曜石	小形剥片の縁辺に二次加工を施す。	
第314図 PL.188	71	剥片石器 二次加工ある剥片	4区 完形	長 幅 4.3 4.3	厚 重 1.6 26.7		黒曜石	背面縁辺と腹面に二次加工を施す。腹面にバルブ部が残る。	黒曜石原産地 分析7
第314図 PL.188	72	剥片石器 スクレイパー	4区 完形	長 幅 4.3 2.3	厚 重 0.7 6.5		黒曜石	縦長剥片を素材とし、両面上下端に二次加工を施す。腹面側は平坦な剥離である。腹面のバルブは下方向である。	黒曜石原産地 分析3
第314図 PL.188	73	礫石器 石皿	4区 1/3	長 幅 (13.1) (18.7)	厚 重 (5.1) 1562.8		粗粒輝石安山岩	正面および裏面周辺部に摩耗による平滑面が観察される。裏面中央部に敲打痕が残る。	

3区出土旧石器遺物観察表

挿図 PL.No	No	種類 器種	出土位置 残存率	計測値			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長 幅	厚 重	厚 重			
第315図 PL.188	1	剥片石器 ナイフ形石器	3区84区J-3 完形	長 幅 4.3 1.4	厚 重 0.7 3.0		黒曜石	縦長剥片を素材とし、背面右側縁にブランディングを施す。バルブと基部の位置が一致する。	

## 報告書抄録

書名ふりがな	さんのう・しばいせきぐん
書名	山王・柴遺跡群
副書名	一般国道(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	第615集
編著者名	長谷川博幸、岩崎泰一、神谷佳明、徳江秀夫
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20160314
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	さんのう・しばいせきぐん
遺跡名	山王・柴遺跡群(前橋市0013遺跡・前橋市0014遺跡)
所在地ふりがな	まえばししかみほそいまち・あおやぎまち
遺跡所在地	前橋市上細井町・青柳町
市町村コード	10201
遺跡番号	0013・0014
北緯(世界測地系)	362543
東経(世界測地系)	1390412
調査期間	20100104-20100331, 20101001-20110331, 20120401-20120430, 20130401-20130731
調査面積	4,783
調査原因	道路改築
種別	集落/墳墓/生産
主な時代	旧石器/古墳/飛鳥・奈良・平安/近世
遺跡概要	集落—古墳～平安—竪穴住居92・掘立柱建物7—土師器・須恵器/墓域—古墳—古墳・竪穴式小石郭6—太刀・耳環・埴輪/近世—墓坑4—銭貨・煙管/生産—古墳—畠/平安—水田/近世—水田/縄文—土器・石器/旧石器—石器
特記事項	古墳時代前期から平安時代にかけての集落遺跡。竪穴住居が主体の小規模集落、古墳時代中期後半から後期初頭にかけては一時的に墓域として利用されていた。
要約	古墳時代前期に形成された小規模な集落、その後平安時代まで地点を若干移しながら継続的に営まれる。初期の集落地はその後、畠や墓域に用途が変更されている。墓域では小石槨墓と古墳が検出され、小石槨墓から古墳への変遷がみられる。

# 写真図版





1 山王・柴遺跡群遠景 南東→



2 山王・柴遺跡群近景 西→



1 1区と榛名山 東→



2 1区と赤城白川 北→



1 1区全景 垂直



2 1区全景(平成25年度調査) 垂直

# PL.4



1 2区全景 南西→



2 2区全景 垂直





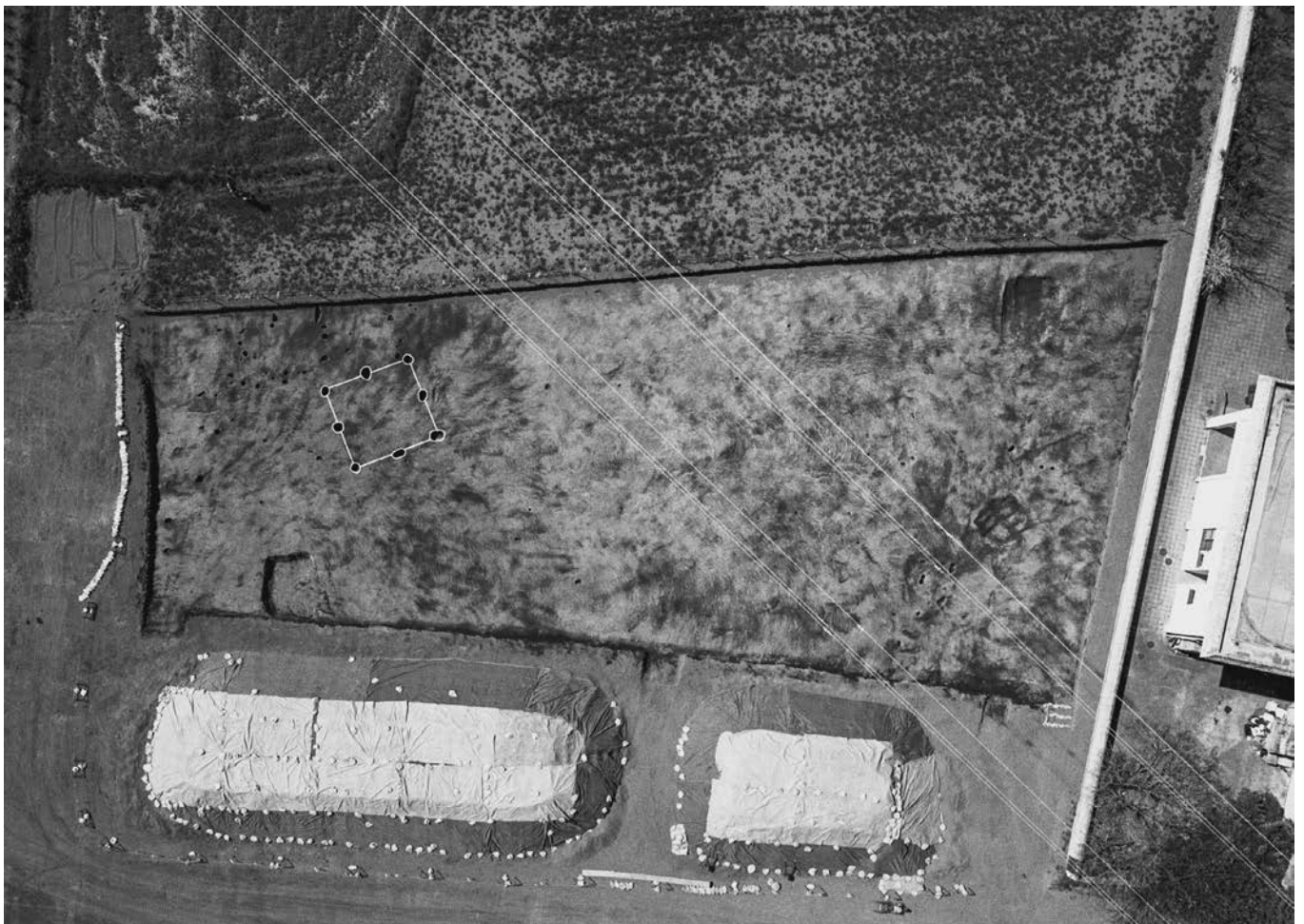
1 3区全景 南→



2 3区全景 垂直



1 3区全景(平成23年度調査) 東→



2 3区全景(平成23年度調査) 垂直



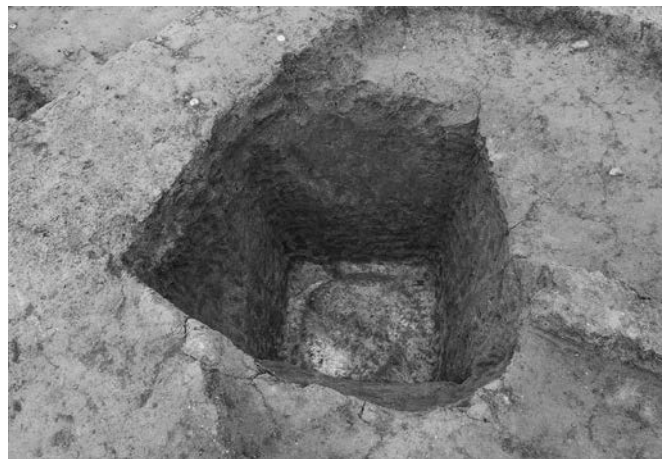
1 4区全景 西→



2 4区全景 垂直



1 2区土坑墓全景 北→



2 2区1号土坑墓全景 北→



3 2区1号土坑墓遺物出土狀態 南西→



4 2区1号土坑墓土層断面A—A' 南西→



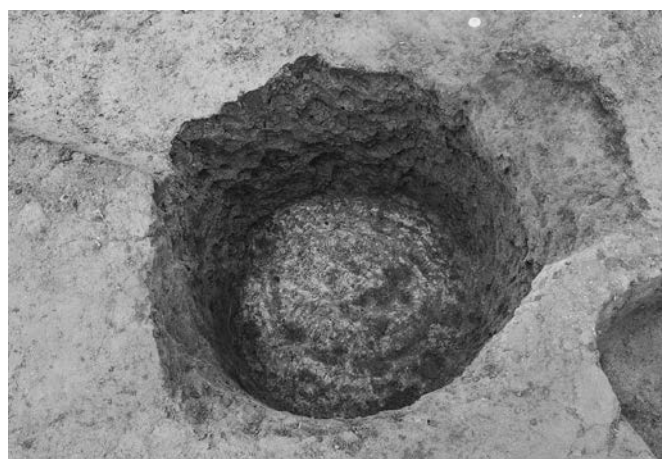
5 2区1号土坑墓土層断面A—A' 南西→



6 2区2号土坑墓全景 北→



7 2区2号土坑墓遺物出土狀態 北西→



8 2区3号土坑墓全景 北→



1 2区3号土坑墓遺物出土状態 北→



2 2区4号土坑墓全景 北→



3 2区4号土坑墓遺物出土状態 北西→



4 3区1号土坑墓遺物出土状態 北東→



5 2区東側谷土層断面A—A' 南→



6 2区東側谷土層断面A—A' 南→



7 2区東側谷土層断面A—A' 南→



1 2区1面水田部分 南→



2 2区1面水田部分 西→



3 2区1面水田部分 南西→



4 2区1面水田部分 南→



5 2区1面水田部分 南西→



6 2区1面水田耕作痕 南→



7 2区1面水田耕作痕(確認時) 南→



8 2区1面水田耕作痕(拡大) 南→



1 2区1~3号沟全景 北→



2 2区21号沟全景 南→



3 2区1号沟全景 西→



4 2区1号沟土层断面 东→



5 2区1号沟土层断面 西→



6 2区21号沟土层断面 南→



1 3区1号溝全景 北→



2 3区1号溝南侧部分 南→



3 3区1号溝北侧部分 北→



4 3区1号溝土层断面A—A' 南→



5 3区1号溝土层断面D—D' 南→



6 3区2号溝土层断面A—A' 南東→



7 3区2号溝土层断面C—C' 南西→





1 3区2号溝全景 南東→



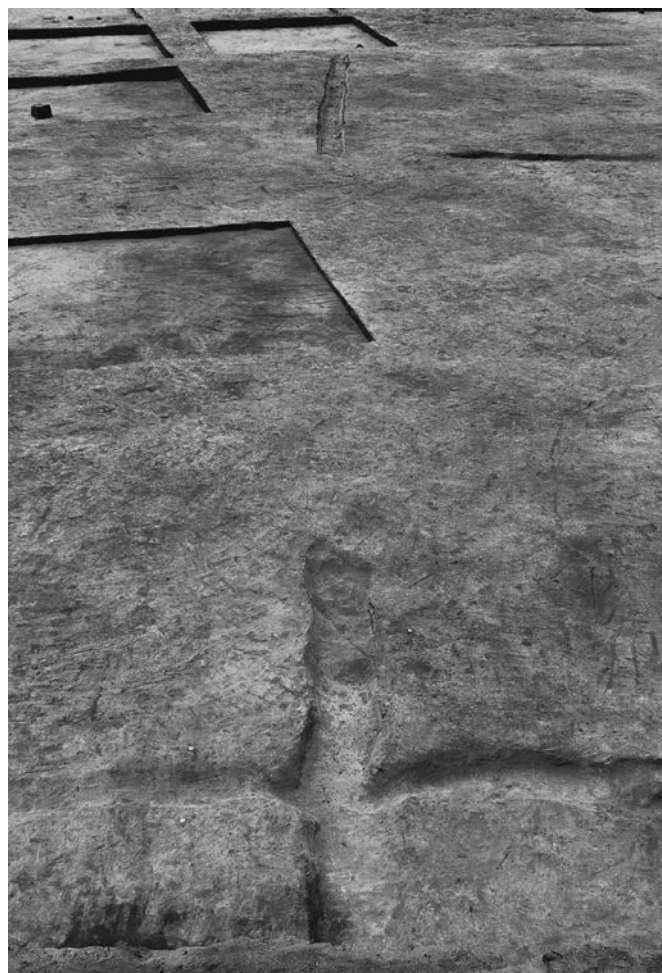
2 3区2号溝全景 東→



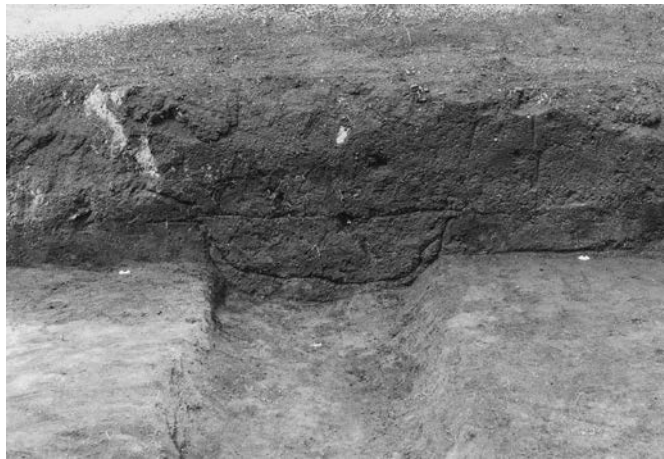
3 4区1号溝全景 南→



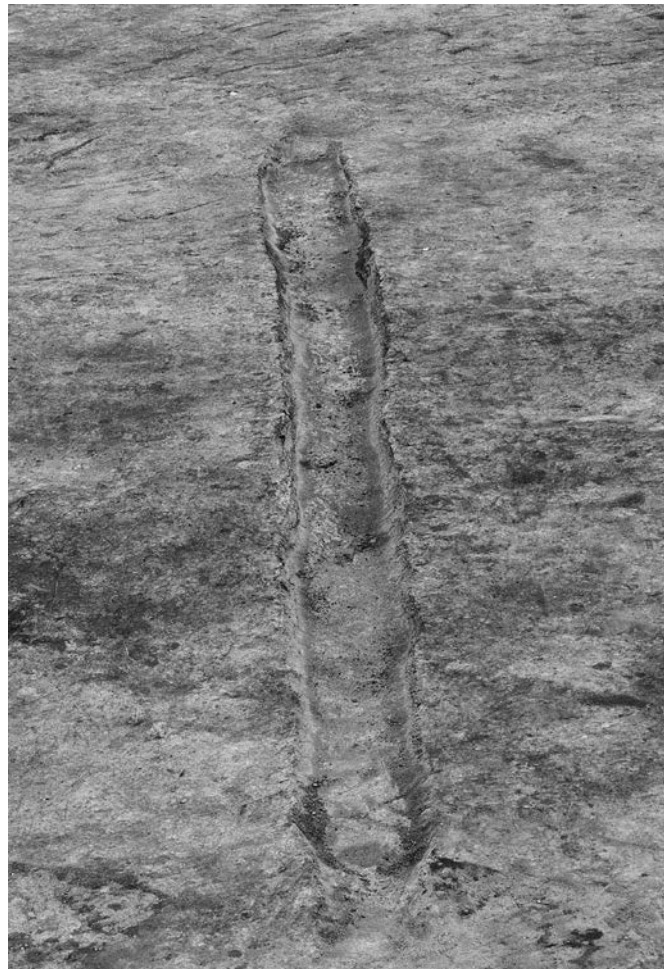
4 4区1号溝土層断面A—A' 南→



5 4区2号溝全景 北→



1 4区2号溝土層断面A—A' 南→



3 4区3号溝全景 南→



2 4区3号溝土層断面A—A' 南→



4 4区4号溝全景 北→



5 4区4号溝土層断面B—B' 南→



6 4区5号溝全景 南→



7 4区5号溝土層断面A—A' 南→



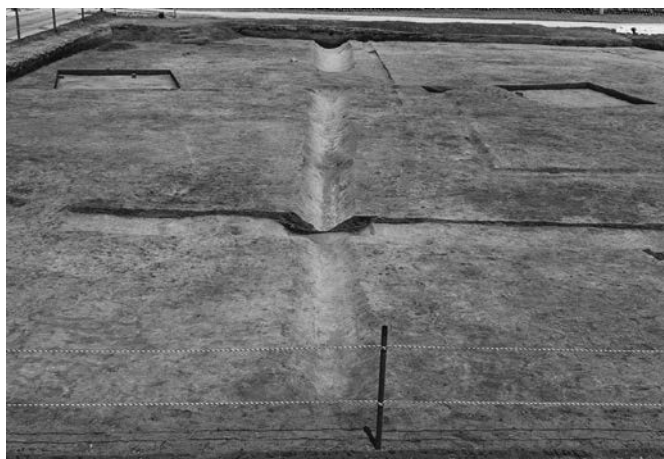
1 4区6·7号溝全景 北→



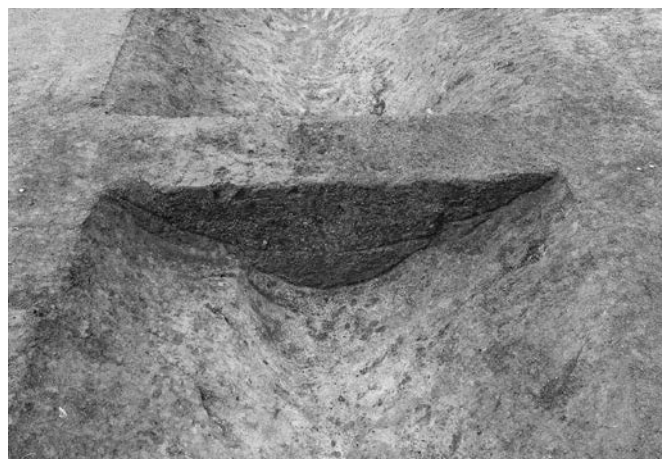
2 4区6号溝土層断面B-B' 南→



3 4区6·7号溝土層断面A-A' 南→



4 4区8号溝全景 南→



5 4区8号溝土層断面A-A' 南→



6 4区11号溝全景 西→



7 4区11号溝土層断面B-B' 西→



1 4区10号溝全景 東→



2 4区10号溝全景 東→



3 4区10号溝土層断面C—C' 西→



4 4区12号溝全景 東→



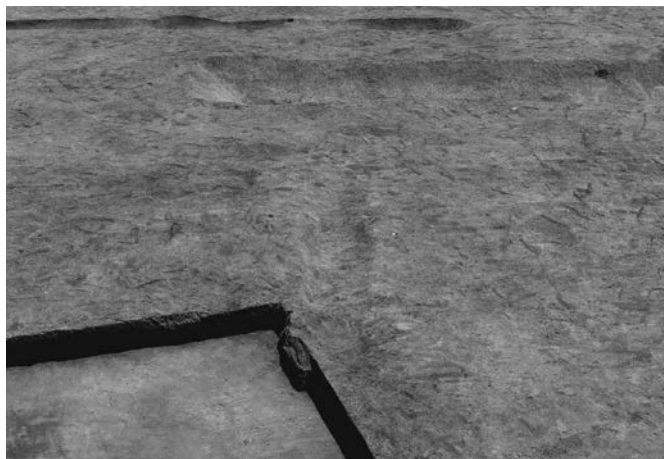
5 4区12号溝土層断面A—A' 西→



6 4区13号溝全景 東→



7 4区13号溝土層断面A—A' 西→



1 4区14号溝全景 西→



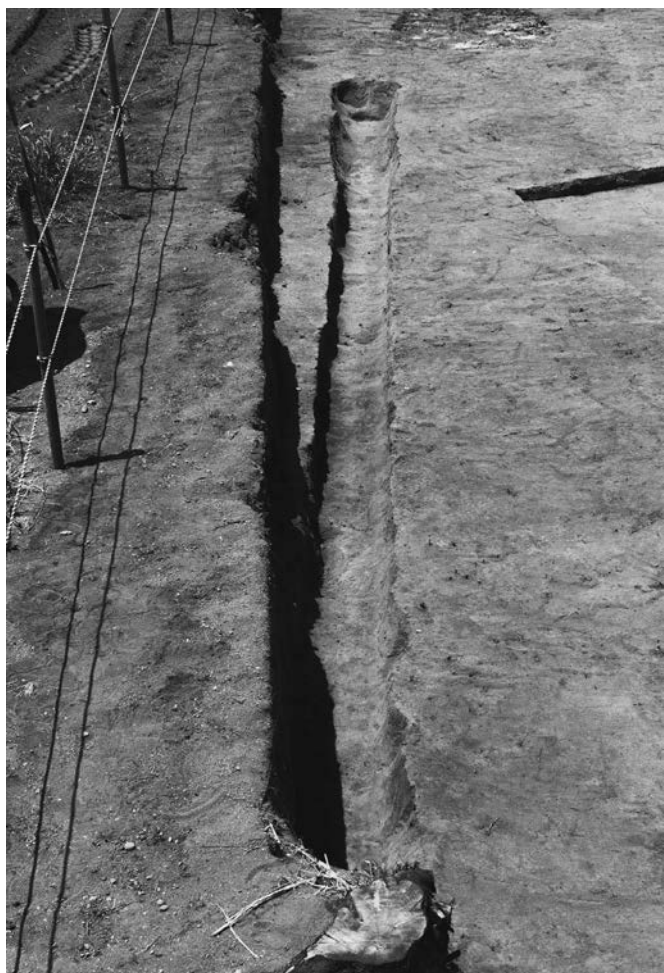
2 4区14号溝土層断面A—A' 西→



3 4区15号溝全景 東→



4 4区15号溝土層断面A—A' 西→



5 4区17号溝全景 東→



6 4区17号溝全景 東→



7 4区17号溝土層断面A—A' 西→



1 4区16号溝全景 東→



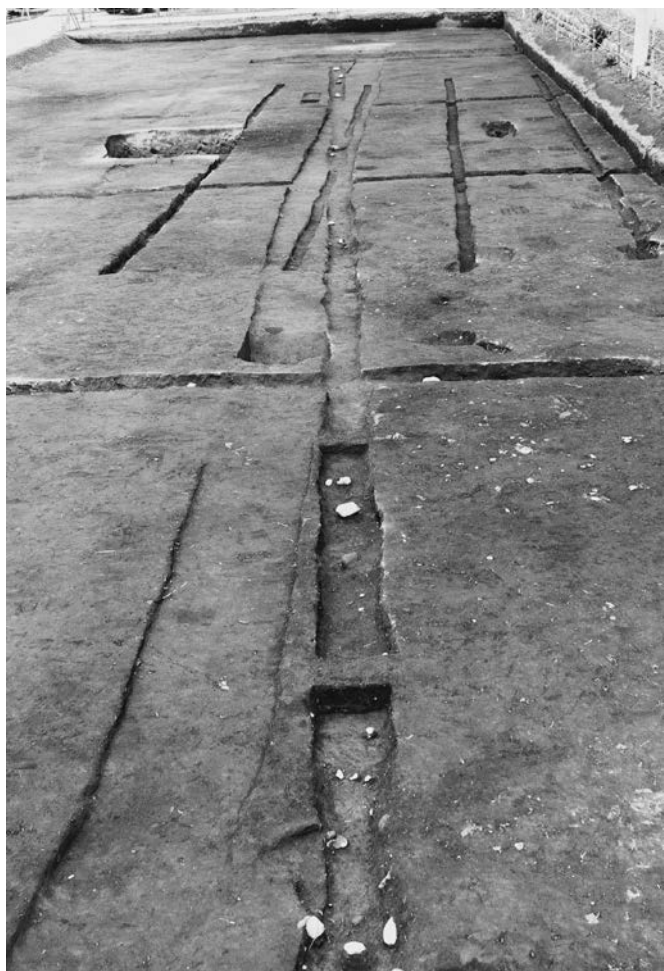
2 4区16号溝土層断面C—C' 西→



3 4区18号溝全景 南→



4 4区18号溝土層断面A—A' 南→



5 4区19号溝全景 東→



6 4区19号溝全景 西→



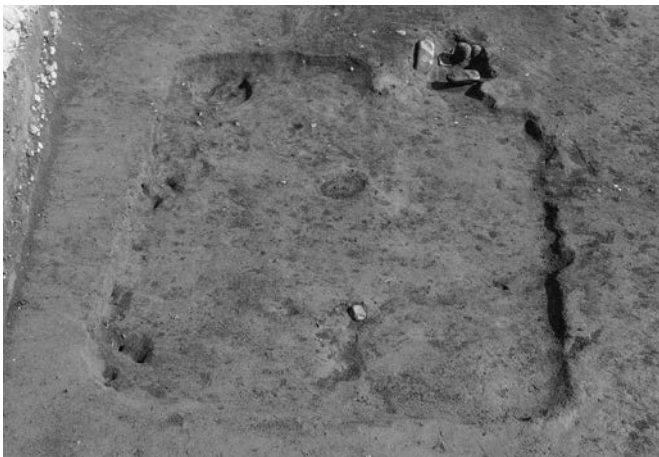
7 4区19号溝土層断面A—A' 東→



1 2区5号竪穴住居遺物出土状態 南→



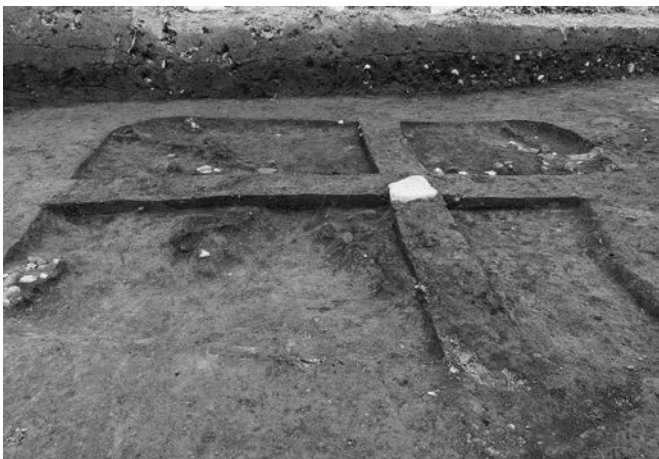
2 2区5号竪穴住居土層断面 南→



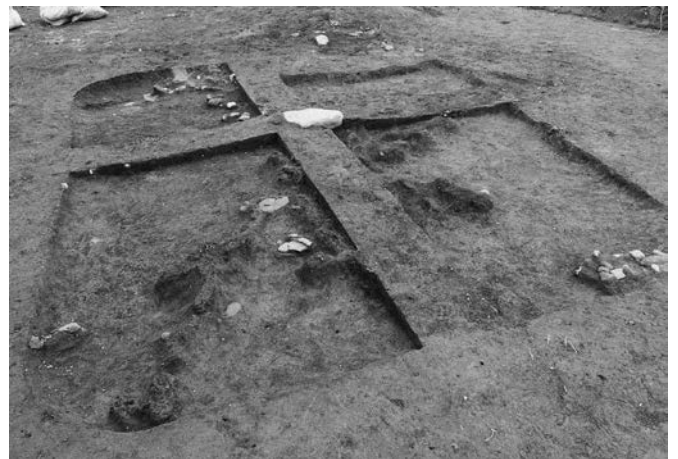
3 2区6号竪穴住居全景 西→



4 2区6号竪穴住居遺物出土状態 西→



5 2区6号竪穴住居土層断面A-A' 南→



6 2区6号竪穴住居土層断面B-B' 西→



7 2区6号竪穴住居掘方確認状況 南→



8 2区6号竪穴住居カマド 西→



1 2区6号竪穴住居カマ土層断面 南→



2 2区6号竪穴住居カマ掘方 西→



3 2区10号竪穴住居全景 西→



4 2区10号竪穴住居遺物出土状態 西→



5 2区10号竪穴住居土層断面 西→



6 2区10号竪穴住居土層断面 南→



7 2区10号竪穴住居掘方全景 西→



8 2区10号竪穴住居カマ全景 西→





1 2区10号竪穴住居カマド土層断面 南西→



2 2区10号竪穴住居カマド土層断面 西→



3 2区17号竪穴住居全景 西→



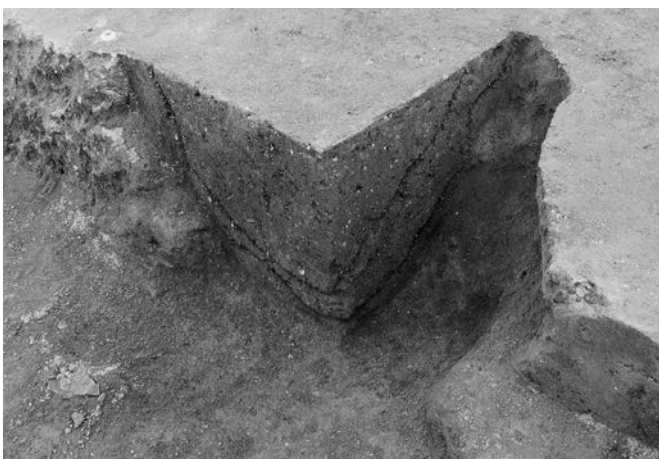
4 2区17号竪穴住居遺物出土状態 西→



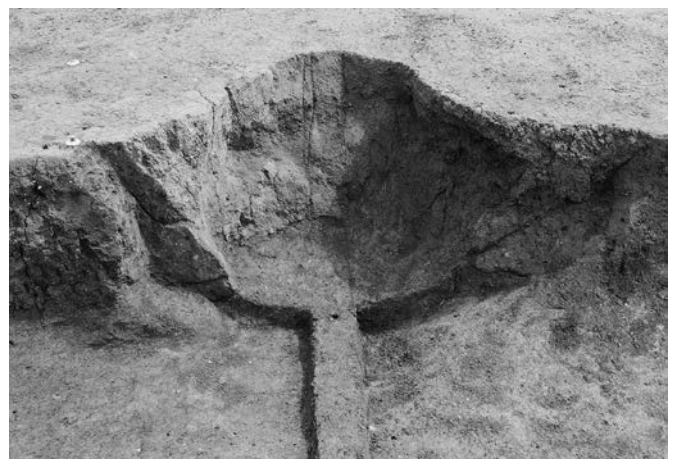
5 2区17号竪穴住居土層断面 西→



6 2区17号竪穴住居掘方土層断面 西→



7 2区17号竪穴住居カマド土層断面 西→



8 2区17号竪穴住居カマド掘方確認状況 西→



1 2区18号竪穴住居全景 西→



2 2区18号竪穴住居遺物出土状態 西→



3 2区18号竪穴住居土層断面A-A' 西→



4 2区18号竪穴住居貯蔵穴土層断面 南→



5 2区18号竪穴住居カマド遺物出土状態 西→



6 2区18号竪穴住居カマド土層断面C-C' 南西→



7 2区18号竪穴住居カマド土層断面D-D' 西→



8 2区18号竪穴住居カマド掘方全景 西→



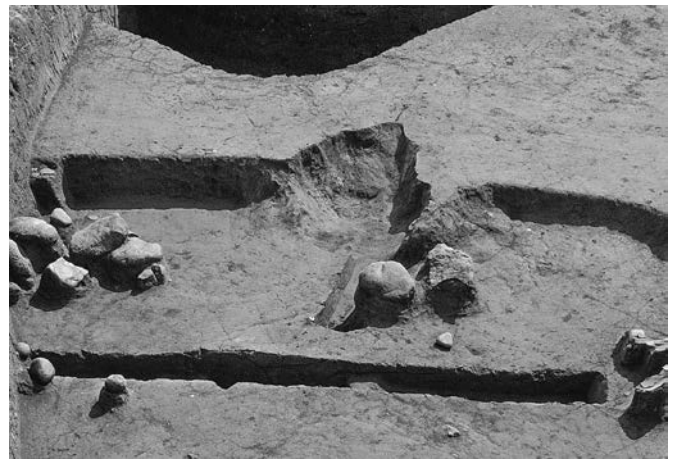
1 2区18号竪穴住居カマド掘方土層断面C—C' 南西→



2 2区32号竪穴住居遺物出土状態 西→



3 2区32号竪穴住居全景 西→



4 2区32号竪穴住居カマド全景 西→



5 2区32号竪穴住居カマド土層断面B—B' 南西→



6 2区32号竪穴住居カマド土層断面C—C' 北西→



7 2区32号竪穴住居掘方全景 西→



8 2区32号竪穴住居カマド掘方土層断面C—C' 北西→



1 2区33号竪穴住居全景 西→



2 2区33号竪穴住居カマド土層断面D-D' 西→



3 2区33号竪穴住居カマド土層断面C-C' 南西→



4 2区33号竪穴住居カマド掘方土層断面D-D' 西→



5 2区33号竪穴住居カマド掘方全景 西→



6 2区33号竪穴住居カマド掘方土層断面C-C' 南西→



7 2区39号竪穴住居全景 西→



8 2区39号竪穴住居遺物出土状態 西→



1 2区39号竪穴住居土層断面A-A' 西→



2 2区39号竪穴住居掘方全景 西→



3 2区39号竪穴住居カマド全景 西→



4 2区39号竪穴住居カマド掘方全景 南西→



5 2区39号竪穴住居カマド土層断面B-B' 南→



6 2区39号竪穴住居カマド土層断面C-C' 西→



7 3区1号竪穴住居全景 西→



8 3区1号竪穴住居遺物出土状態 西→



1 3区1号竖穴住居土層断面A—A' 北→



2 3区1号竖穴住居土層断面B—B' 西→



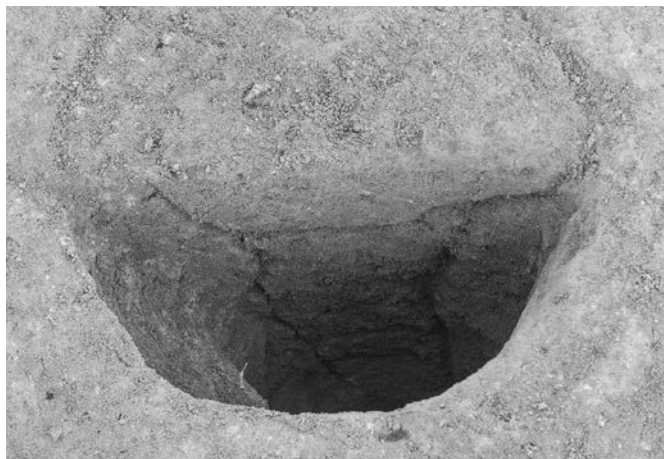
3 3区1号竖穴住居掘方全景 西→



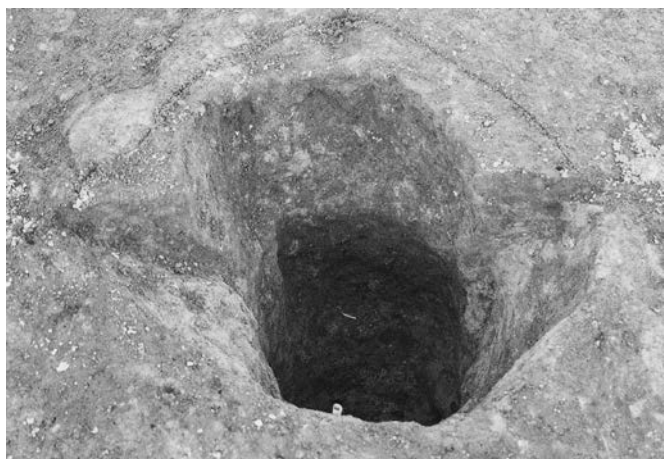
4 3区1号竖穴住居柱穴P1土層断面G—G' 南→



5 3区1号竖穴住居柱穴P1土層断面G—G' 南→



6 3区1号竖穴住居柱穴P2土層断面H—H' 南→



7 3区1号竖穴住居柱穴P2土層断面H—H' 南→



8 3区1号竖穴住居柱穴P3土層断面I—I' 南→



1 3区1号竖穴住居柱穴P 3土層断面I—I' 南→



2 3区1号竖穴住居柱穴P 4土層断面J—J' 南→



3 3区1号竖穴住居柱穴P 4土層断面J—J' 南→



4 3区1号竖穴住居柱穴P 5・P 6土層断面K—K'・L—L' 北→



5 3区1号竖穴住居柱穴P 5・P 6全景 南→



6 3区1号竖穴住居柱穴P 7遺物出土状態 南→



7 3区1号竖穴住居貯藏穴全景 西→



8 3区1号竖穴住居カマド全景 西→



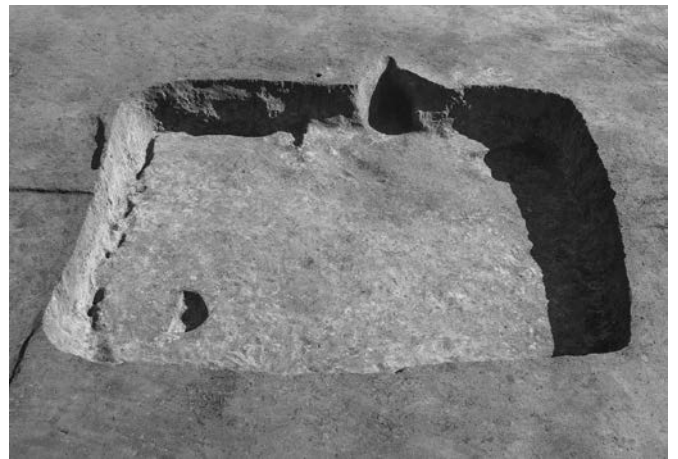
1 3区1号竪穴住居カマド遺物出土状態 西→



2 3区1号竪穴住居カマド土層断面M-M' 南西→



3 3区1号竪穴住居カマド土層断面N-N' 西→



4 3区2号竪穴住居全景 西→



5 3区2号竪穴住居遺物出土状態 北西→



6 3区2号竪穴住居遺物出土状態 西→



7 3区2号竪穴住居遺物出土状態 西→

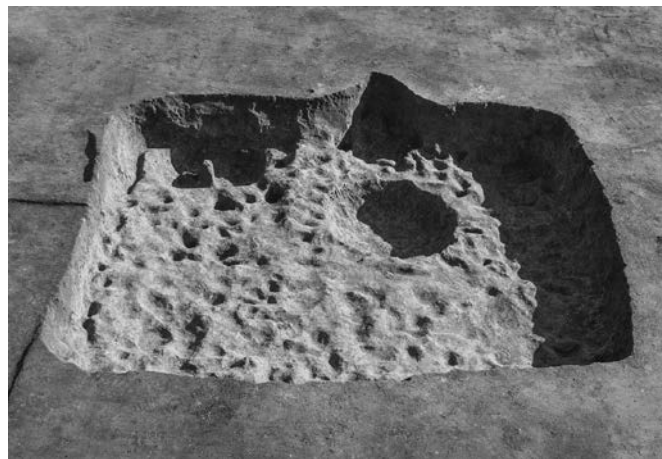


8 3区2号竪穴住居土層断面A-A' 北→





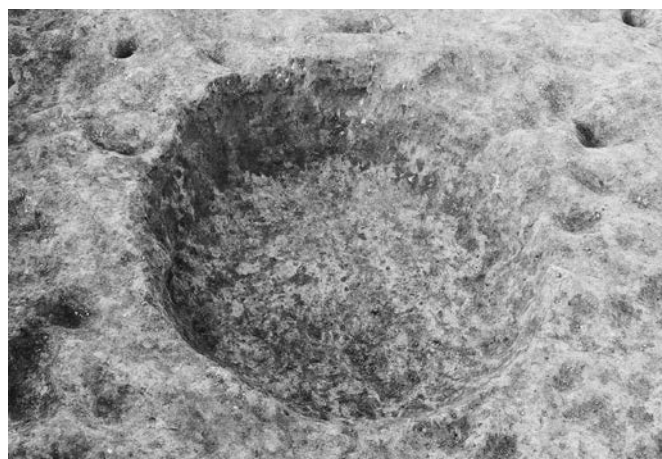
1 3区2号竖穴住居土層断面B—B' 西→



2 3区2号竖穴住居掘方全景 西→



3 3区2号竖穴住居掘方土層断面B—B' 西→



4 3区2号竖穴住居床下土坑1全景 西→



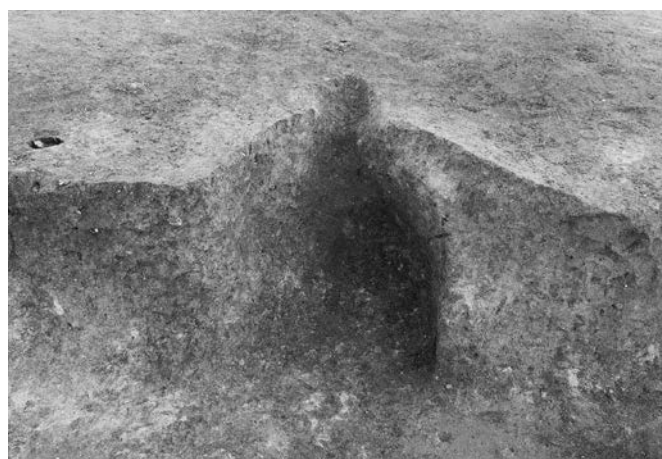
5 3区2号竖穴住居床下土坑1土層断面F—F' 南→



6 3区2号竖穴住居床下土坑2遺物出土状態 西→



7 3区2号竖穴住居床下土坑2土層断面G—G' 南→



8 3区2号竖穴住居カマド全景 西→



1 3区2号竪穴住居カマド土層断面D-D' 南西→



2 3区2号竪穴住居カマド土層断面E-E' 西→



3 3区2号竪穴住居カマド掘方全景 南西→



4 3区3号竪穴住居全景 西→



5 3区3号竪穴住居遺物出土状態 西→



6 3区3号竪穴住居遺物出土状態 西→



7 3区3号竪穴住居土層断面A-A' 南→



8 3区3号竪穴住居土層断面B-B' 西→



1 3区3号竪穴住居掘方全景 西→



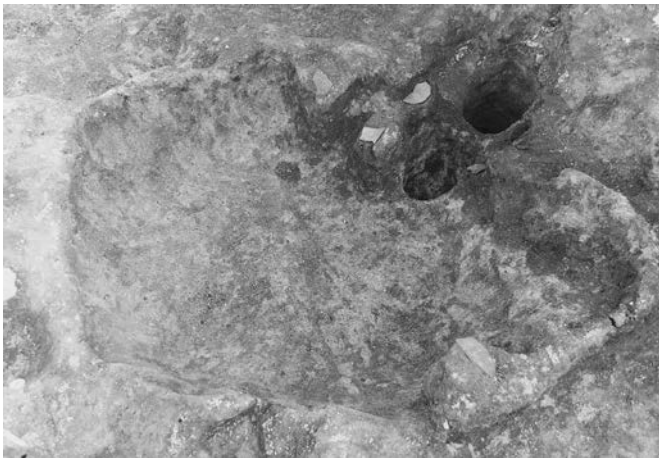
2 3区3号竪穴住居掘方土層断面 北西→



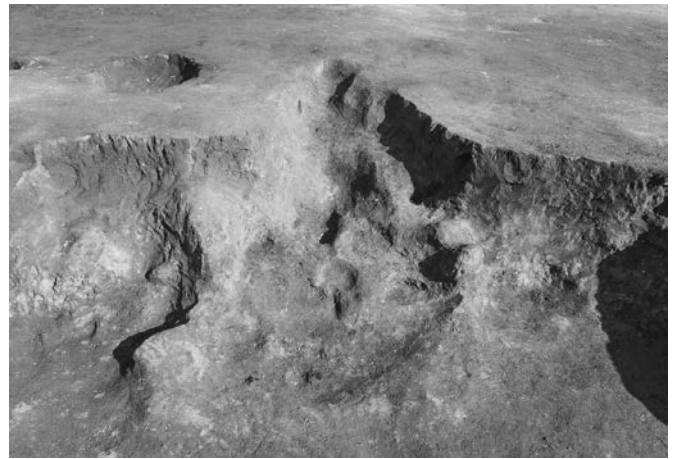
3 3区3号竪穴住居床下土坑 東→



4 3区3号竪穴住居床下土坑 西→



5 3区3号竪穴住居床下土坑 西→



6 3区3号竪穴住居カマド1全景 西→



7 3区3号竪穴住居カマド1灰層確認 南→



8 3区3号竪穴住居カマド1土層断面D-D' 西→



1 3区3号竪穴住居カマド2全景 東→



2 3区3号竪穴住居カマド2遺物出土状態 東→



3 3区3号竪穴住居カマド2土層断面E-E' 南西→



4 3区3号竪穴住居カマド2土層断面F-F' 東→



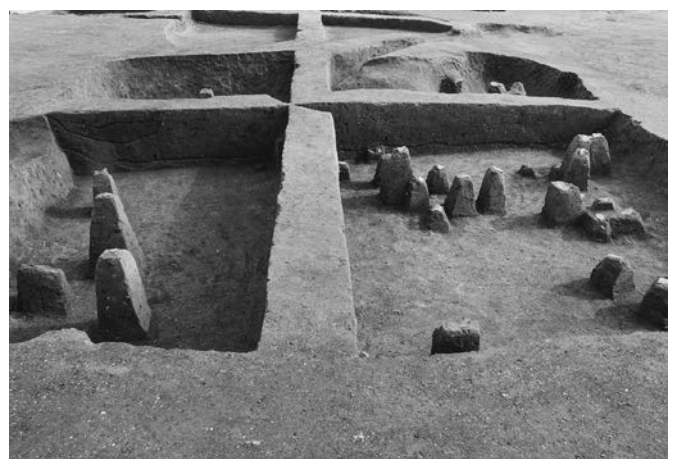
5 3区4号竪穴住居全景 西→



6 3区4号竪穴住居遺物出土状態 西→



7 3区4号竪穴住居土層断面A-A' 北→



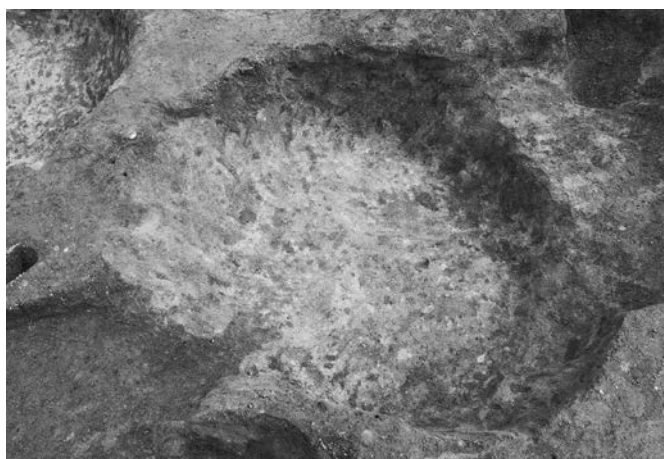
8 3区4号竪穴住居土層断面B-B' 西→



1 3区4号竪穴住居掘方全景 西→



2 3区4号竪穴住居掘方床下土坑 西→



3 3区4号竪穴住居掘方床下土坑 西→



4 3区4号竪穴住居カマド全景 西→



5 3区4号竪穴住居カマド土層断面C-C' 南→



6 3区4号竪穴住居カマド土層断面D-D' 西→



7 3区4号竪穴住居カマド遺物出土状態 西→



8 3区4号竪穴住居カマド掘方全景 西→



1 3区6号竪穴住居全景(22年度調査分) 北→



2 3区6号竪穴住居全景(25年度調査分) 西→



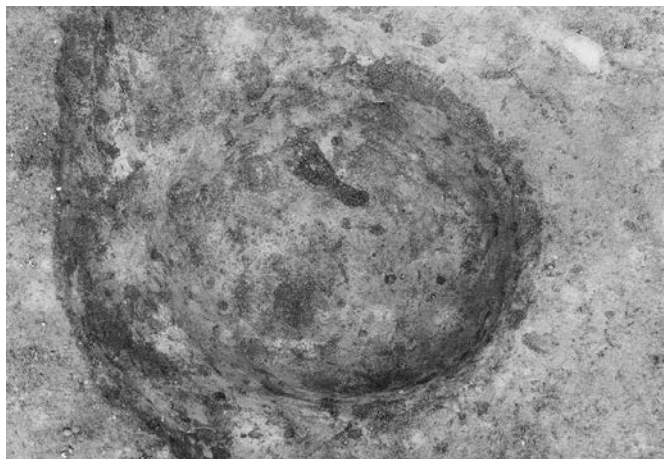
3 3区6号竪穴住居土層断面A—A' (22年度調査分) 北→



4 3区6号竪穴住居土層断面B—B'北側(22年度調査分) 西→



5 3区6号竪穴住居土層断面B—B'南側(25年度調査分) 西→



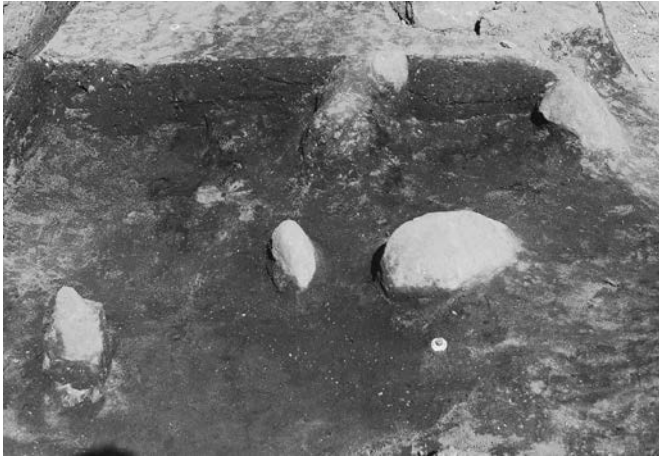
6 3区6号竪穴住居貯蔵穴全景(22年度調査分) 北→



7 3区6号竪穴住居カマド全景(25年度調査分) 西→



8 3区6号竪穴住居カマド土層断面D—D' (25年度調査分) 南→



1 3区6号竪穴住居カマド土層断面E-E' (25年度調査分) 西→



2 3区6号竪穴住居カマド掘方全景(25年度調査分) 西→



3 3区7号竪穴住居全景 西→



4 3区7号竪穴住居遺物出土状態 北→



5 3区7号竪穴住居遺物出土状態 西→



6 3区7号竪穴住居土層断面A-A' 南→



7 3区7号竪穴住居土層断面B-B' 西→



8 3区7号竪穴住居掘方全景 北→



1 3区7号竪穴住居貯蔵穴1遺物出土状態 西→



2 3区7号竪穴住居貯蔵穴1遺物出土状態 西→



3 3区7号竪穴住居貯蔵穴2全景 北→



4 3区7号竪穴住居貯蔵穴2土層断面 南→



5 3区7号竪穴住居柵状施設土層断面 西→



6 3区7号竪穴住居カマド全景 西→



7 3区7号竪穴住居カマド土層断面P-P' 南→



8 3区7号竪穴住居カマド掘方全景 西→

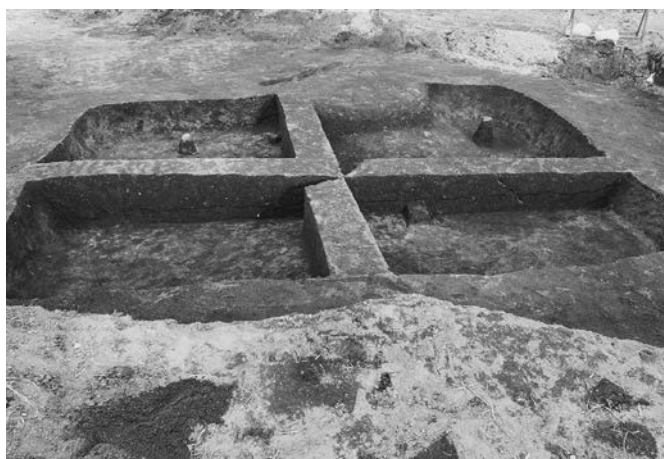




1 3区8号竪穴住居全景 西→



2 3区8号竪穴住居土層断面A—A' 南→



3 3区8号竪穴住居土層断面B—B' 西→



4 3区8号竪穴住居掘方全景 西→



5 3区8号竪穴住居カマド全景 西→



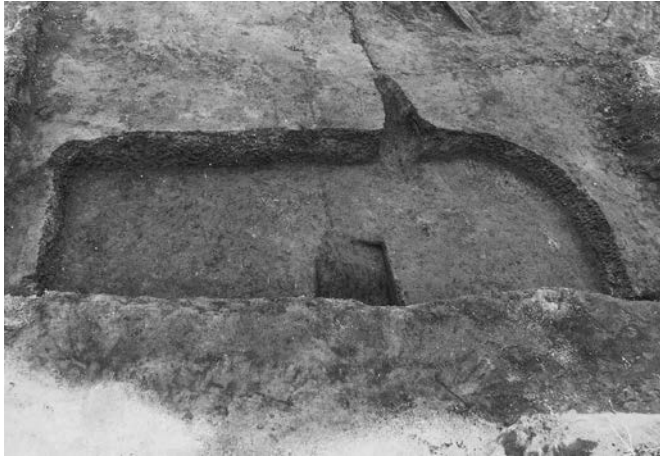
6 3区8号竪穴住居カマド土層断面D—D' 南西→



7 3区8号竪穴住居カマド土層断面E—E' 西→



8 3区8号竪穴住居カマド掘方全景 西→



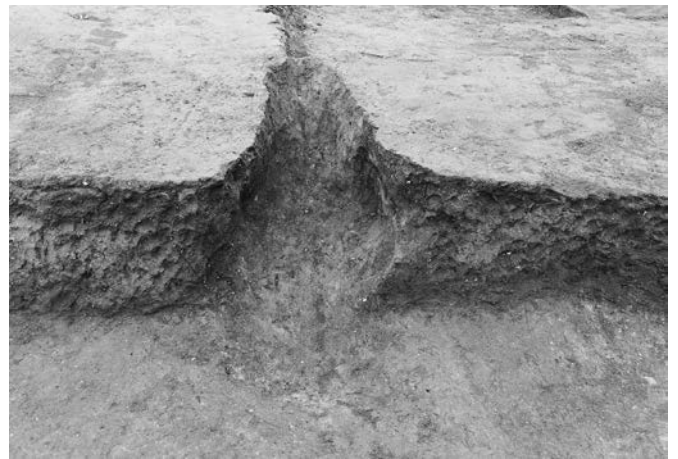
1 3区9号竪穴住居全景 西→



2 3区9号竪穴住居土層断面A—A' 北→



3 3区9号竪穴住居掘方全景 南→



4 3区9号竪穴住居カマド全景 西→



5 3区9号竪穴住居カマド土層断面C—C' 南→



6 3区9号竪穴住居カマド掘方全景 西→



7 3区10号竪穴住居全景 西→



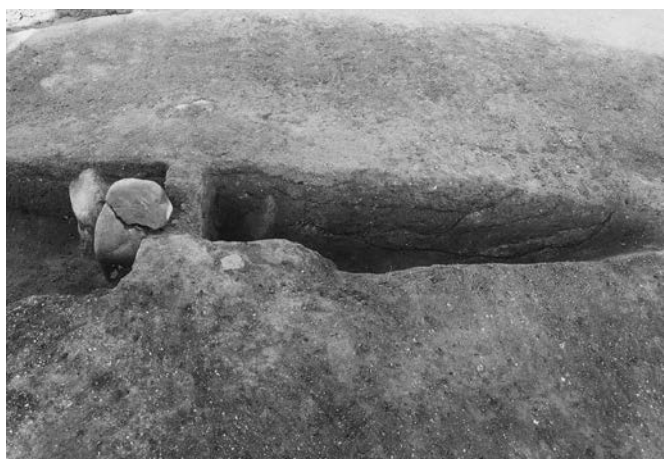
8 3区10号竪穴住居土層断面B—B' 北東→



1 3区10号竪穴住居掘方全景 南西→



2 3区10号竪穴住居カマド全景 南西→



3 3区10号竪穴住居カマド土層断面C—C' 南→



4 3区10号竪穴住居カマド掘方全景 南西→



5 3区11号竪穴住居全景 西→



6 3区11号竪穴住居土層断面A—A' 南→



7 3区11号竪穴住居土層断面B—B' 東→



8 3区11号竪穴住居掘方全景 西→



1 3区11号竪穴住居カマド全景 西→



2 3区11号竪穴住居カマド土層断面C-C' 南→



3 3区12号竪穴住居全景 西→



4 3区12号竪穴住居土層断面A-A' 南→



5 3区12号竪穴住居貯蔵穴遺物出土状態 西→



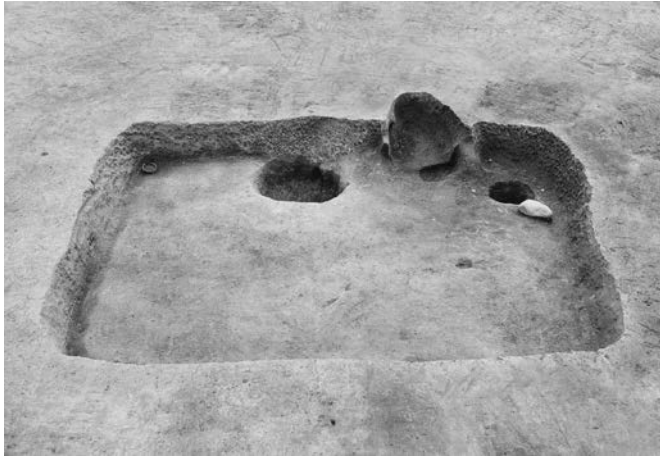
6 3区12号竪穴住居掘方全景 西→



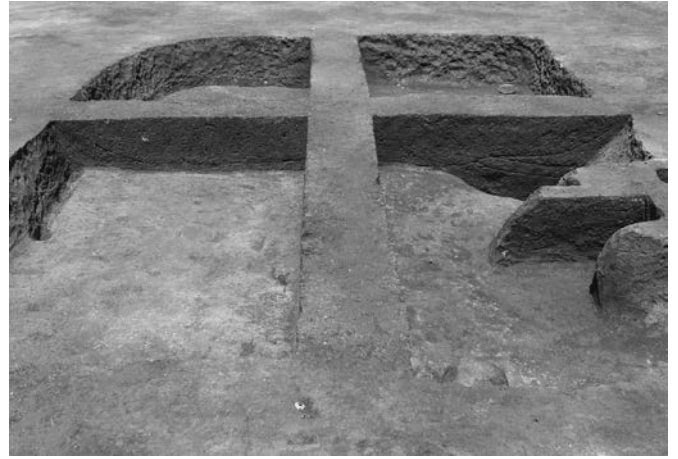
7 3区12号竪穴住居カマド全景 西→



8 3区12号竪穴住居カマド掘方全景 北→



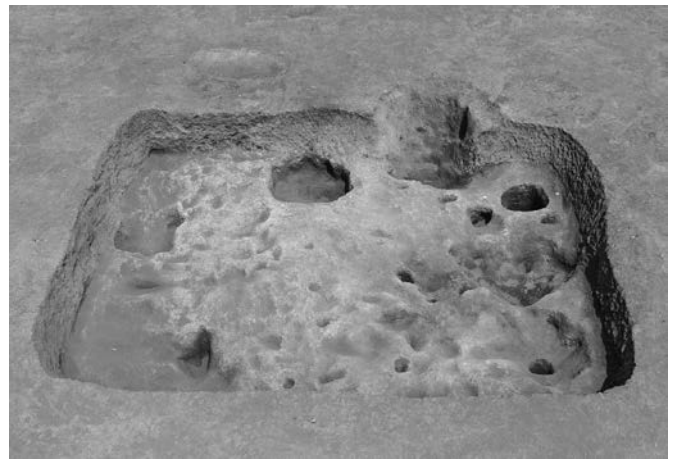
1 4区1号竪穴住居全景 西→



2 4区1号竪穴住居土層断面A—A' 南→



3 4区1号竪穴住居土層断面B—B' 西→



4 4区1号竪穴住居掘方全景 西→



5 4区1号竪穴住居貯蔵穴全景 西→



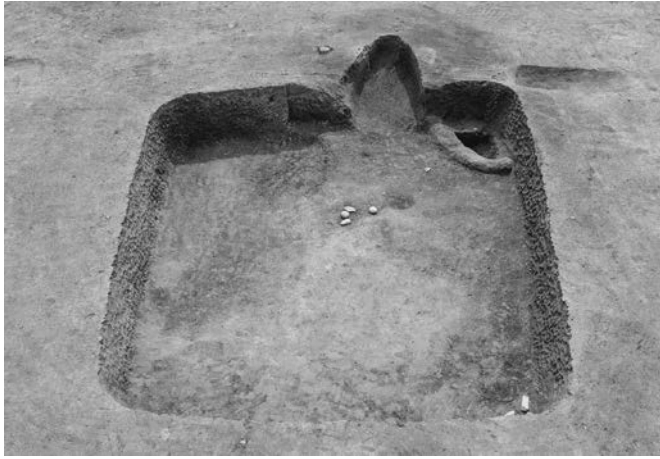
6 4区1号竪穴住居カマド全景 西→



7 4区1号竪穴住居カマド掘方土層断面D—D' 南→



8 4区1号竪穴住居カマド掘方土層断面E—E' 西→



1 4区2号竪穴住居全景 西→



2 4区2号竪穴住居土層断面A—A' 南→



3 4区2号竪穴住居土層断面B—B' 東→



4 4区2号竪穴住居掘方全景 西→



5 4区2号竪穴住居カマド全景 西→



6 4区2号竪穴住居カマド掘方土層断面D—D' 南→



7 4区2号竪穴住居カマド掘方土層断面E—E' 西→



8 4区2号竪穴住居カマド掘方全景 西→



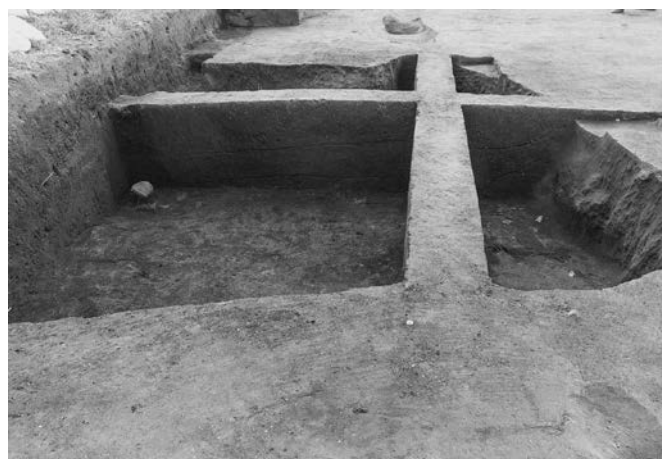
1 4区3号竖穴住居全景 西→



2 4区3号竖穴住居遺物出土状態 西→



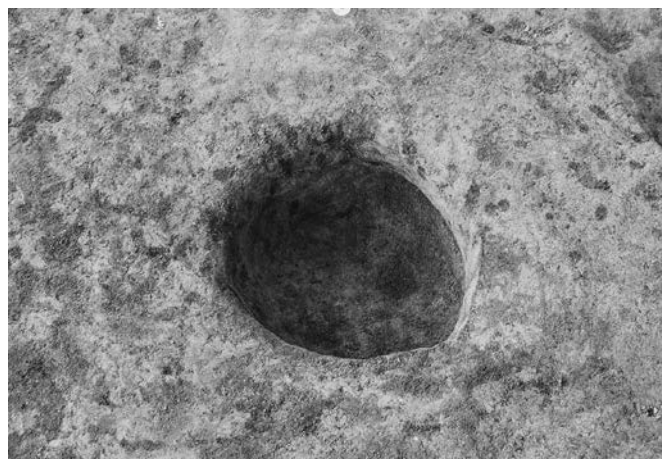
3 4区3号竖穴住居土層断面A—A' 北→



4 4区3号竖穴住居土層断面B—B' 西→



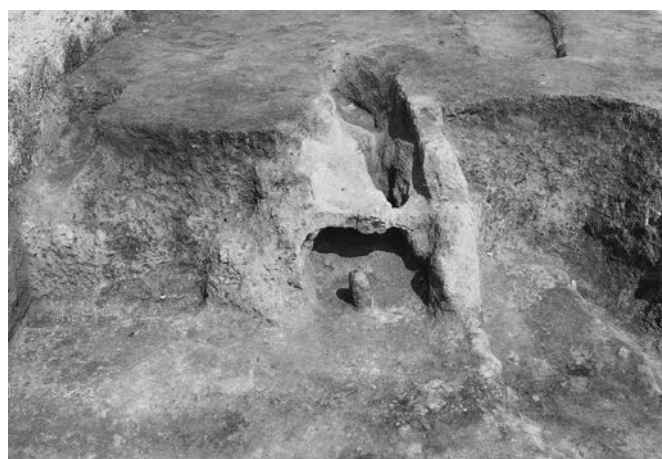
5 4区3号竖穴住居掘方全景 西→



6 4区3号竖穴住居柱穴P1全景 南→



7 4区3号竖穴住居柱穴P1土層断面C—C' 西→



8 4区3号竖穴住居カマド全景 西→



1 4区3号竪穴住居カマド土層断面D-D' 南→



2 4区3号竪穴住居カマド土層断面E-E' 西→



3 4区3号竪穴住居カマド掘方全景 西→



4 4区3号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→



5 4区4号竪穴住居全景 西→



6 4区4号竪穴住居土層断面A-A' 南→



7 4区4号竪穴住居土層断面B-B' 西→



8 4区4号竪穴住居掘方全景 西→





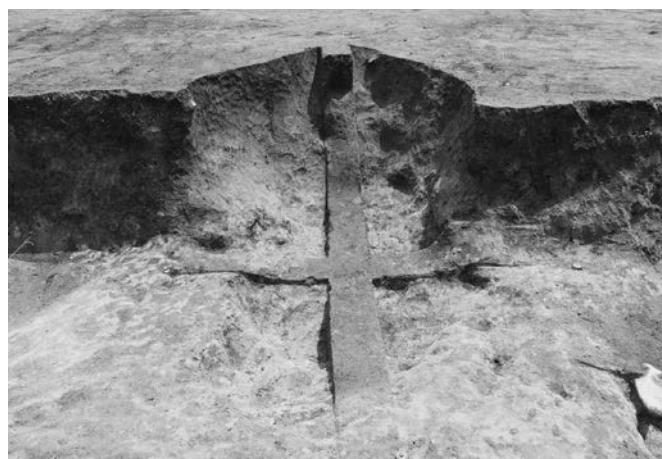
1 4区4号竪穴住居貯蔵穴 土層断面C—C' 西→



2 4区4号竪穴住居カマド全景 西→



3 4区4号竪穴住居カマド掘方土層断面D—D' 南西→



4 4区4号竪穴住居カマド掘方土層断面E—E' 西→



5 4区5号竪穴住居全景 西→



6 4区5号竪穴住居土層断面A—A' 南→



7 4区5号竪穴住居土層断面B—B' 西→



8 4区5号竪穴住居掘方全景 西→



1 4区5号竪穴住居貯蔵穴遺物出土状態 西→



2 4区5号竪穴住居カマド全景 西→



3 4区5号竪穴住居カマド土層断面D—D' 南→



4 4区5号竪穴住居カマド土層断面E—E' 西→



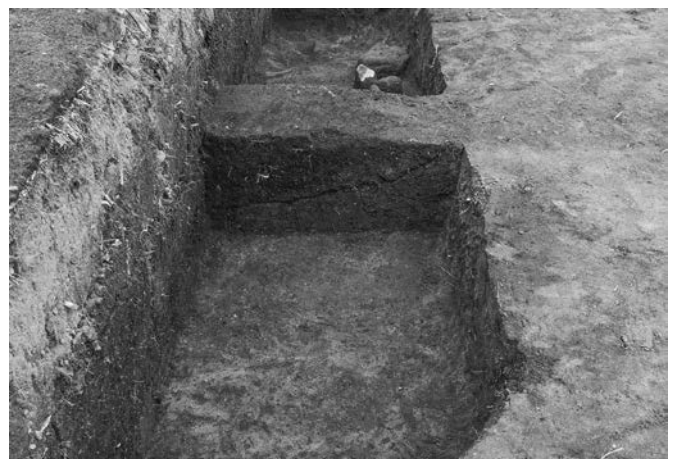
5 4区5号竪穴住居カマド掘方土層断面E—E' 西→



6 4区6号竪穴住居全景 南→



7 4区6号竪穴住居土層断面A—A' 西→



8 4区6号竪穴住居土層断面B—B' 北→



1 4区6号竖穴住居掘方全景 西→



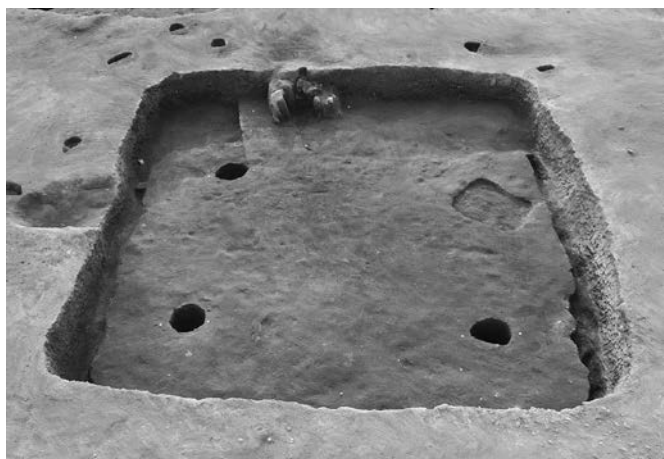
2 4区7号竖穴住居全景 西→



3 4区7号竖穴住居土层断面A—A' 西→



4 4区7号竖穴住居土层断面B—B' 南→



5 1区9号竖穴住居全景 北東→



6 1区9号竖穴住居遺物出土状態 北東→



7 1区9号竖穴住居柱穴P1土层断面 南→



8 1区9号竖穴住居柱穴P2土层断面 南→



1 1区9号竪穴住居柱穴P3土層断面 南→



2 1区9号竪穴住居カマド全景 北東→



3 1区9号竪穴住居カマド土層断面E-E' 北→



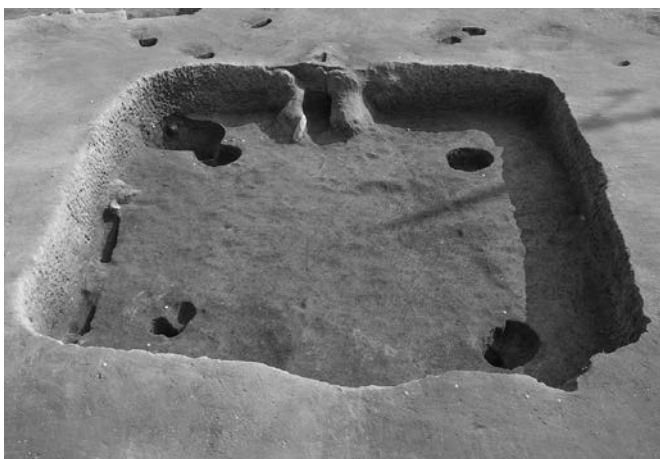
4 1区9号竪穴住居カマド土層断面F-F' 北東→



5 1区9号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 北→



6 1区9号竪穴住居カマド掘方土層断面F-F' 北東→



7 1区10号竪穴住居全景 南西→



8 1区10号竪穴住居遺物出土状態 南西→



1 1区10号竪穴住居遺物出土状態 東→



2 1区10号竪穴住居土層断面A—A' 南→



3 1区10号竪穴住居柱穴P 1土層断面G—G' 南→



4 1区10号竪穴住居柱穴P 2土層断面H—H' 南→



5 1区10号竪穴住居柱穴P 3土層断面 南→



6 1区10号竪穴住居柱穴P 4土層断面I—I' 南→



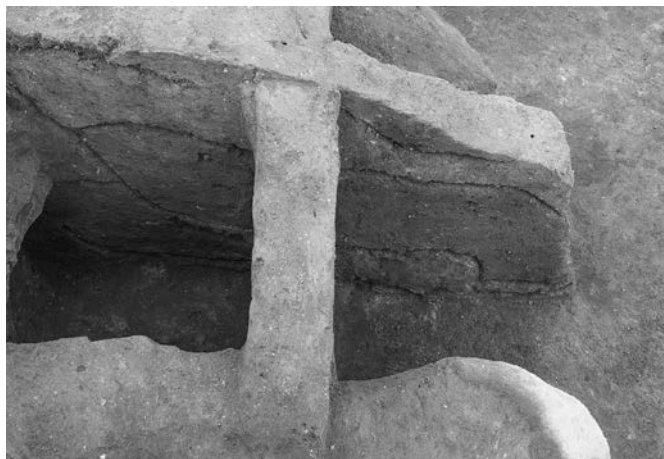
7 1区10号竪穴住居貯藏穴全景 西→



8 1区10号竪穴住居カマド全景 西→



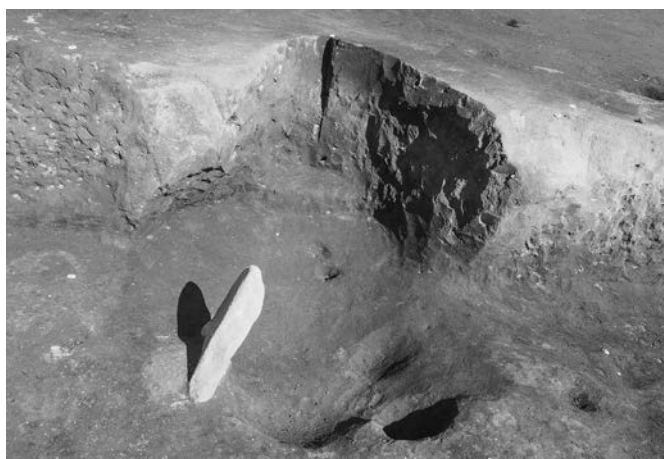
1 1区10号竪穴住居カマド全景 北→



2 1区10号竪穴住居カマド土層断面K-K' 北→



3 1区10号竪穴住居カマド土層断面L-L' 西→



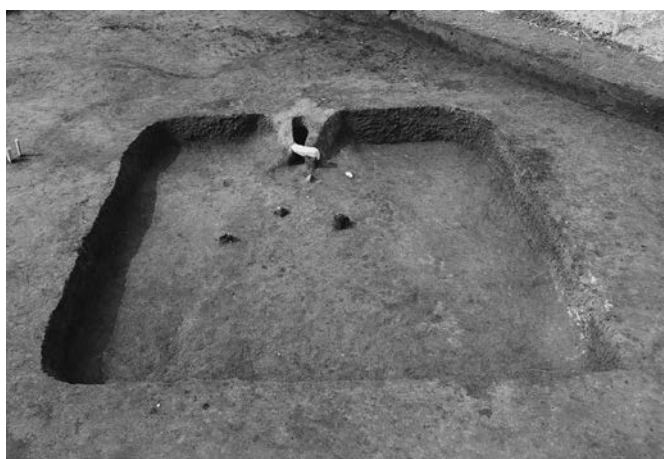
4 1区10号竪穴住居カマド掘方全景 西→



5 1区10号竪穴住居カマド掘方土層断面K-K' 北→



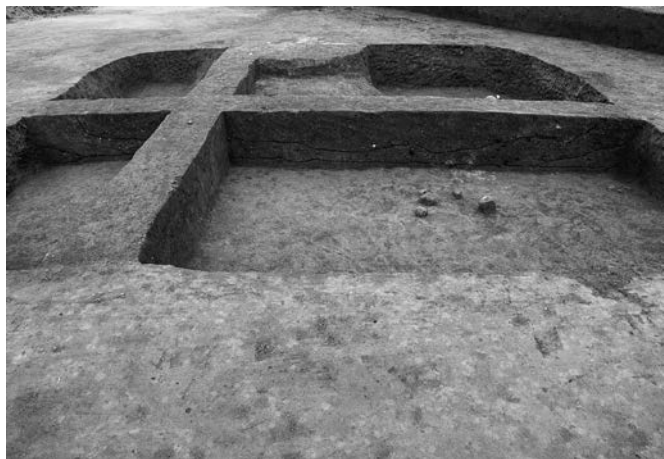
6 1区10号竪穴住居カマド掘方土層断面L-L' 西→



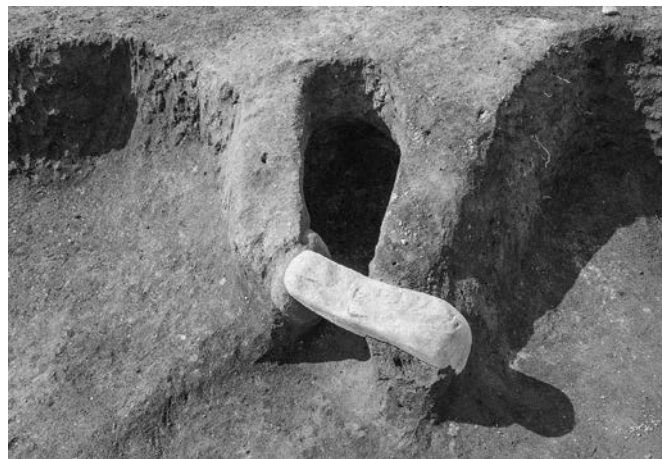
7 1区12号竪穴住居全景 北東→



8 1区12号竪穴住居土層断面A-A' 南→



1 1区12号竪穴住居土層断面B—B' 北東→



2 1区12号竪穴住居カマド全景 北東→



3 1区12号竪穴住居カマド全景 南→



4 1区12号竪穴住居土層断面D—D' 南→



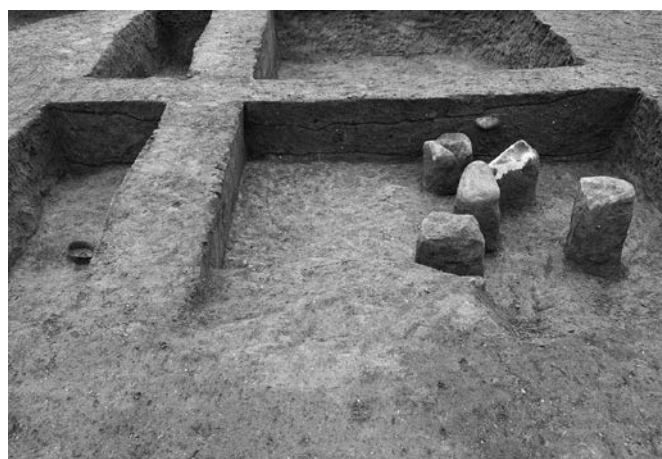
5 1区16号竪穴住居全景 南西→



6 1区16号竪穴住居遺物出土状態 南→



7 1区16号竪穴住居土層断面A—A' 南→



8 1区16号竪穴住居土層断面B—B' 東→



1 1区16号竪穴住居貯蔵穴土層断面 南→



2 1区16号竪穴住居カマド全景 南西→



3 1区16号竪穴住居カマド土層断面C—C' 南東→



4 1区16号竪穴住居カマド掘方全景 南西→



5 1区17号竪穴住居全景 西→



6 1区17号竪穴住居遺物出土状態 西→



7 1区17号竪穴住居遺物出土状態 南→



8 1区17号竪穴住居遺物出土状態 南東→





1 1区17号竖穴住居柱穴P 1土層断面 東→



2 1区17号竖穴住居柱穴P 2遺物出土狀態 東→



3 1区18号竖穴住居全景 南西→



4 1区18号竖穴住居土層断面A—A' 南→



5 1区18号竖穴住居掘方全景 北→



6 1区18号竖穴住居柱穴P 1土層断面 南→



7 1区18号竖穴住居柱穴P 2土層断面F—F' 南→



8 1区18号竖穴住居柱穴P 3土層断面 南→



1 1区18号竪穴住居柱穴P4土層断面 南→



2 1区18号竪穴住居貯蔵穴全景 南東→



3 1区18号竪穴住居カマド全景 南西→



4 1区18号竪穴住居カマド土層断面 I—I' 南東→



5 1区18号竪穴住居カマド燃焼部 南西→



6 1区18号竪穴住居カマド掘方全景 南西→



7 1区18号竪穴住居カマド掘方土層断面 I—I' 南→



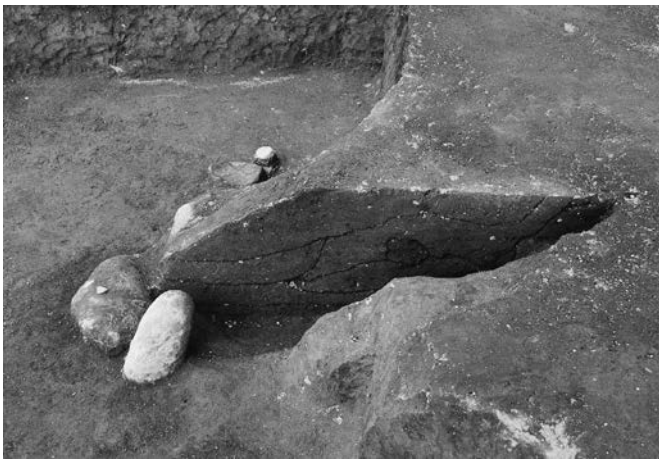
8 1区18号竪穴住居カマド煙道部 南西→



1 1区19号竪穴住居土層断面A—A' 北東→



2 1区19号竪穴住居貯蔵穴土層断面C—C' 南→



3 1区19号竪穴住居カマド土層断面D—D' 南→



4 1区19号竪穴住居カマド掘方全景 西→



5 1区20号竪穴住居全景 西→



6 1区20号竪穴住居土層断面A—A' 南→



7 1区20号竪穴住居カマド周辺遺物出土状態 西→



8 1区20号竪穴住居カマド全景 西→



1 1区20号竪穴住居カマド土層断面D—D' 南→



2 1区20号竪穴住居カマド掘方全景 西→



3 1区21号竪穴住居土層断面B—B' 北東→



4 1区22号竪穴住居全景 西→



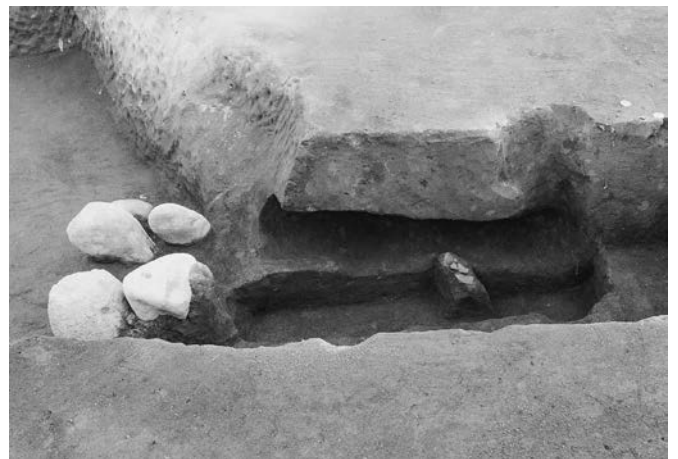
5 1区22号竪穴住居カマド竈掘前 西→



6 1区22号竪穴住居カマド土層断面C—C' 北→



7 1区22号竪穴住居カマド土層断面D—D' 西→



8 1区22号竪穴住居カマド煙道部 南→



1 1区23号竪穴住居全景 西→



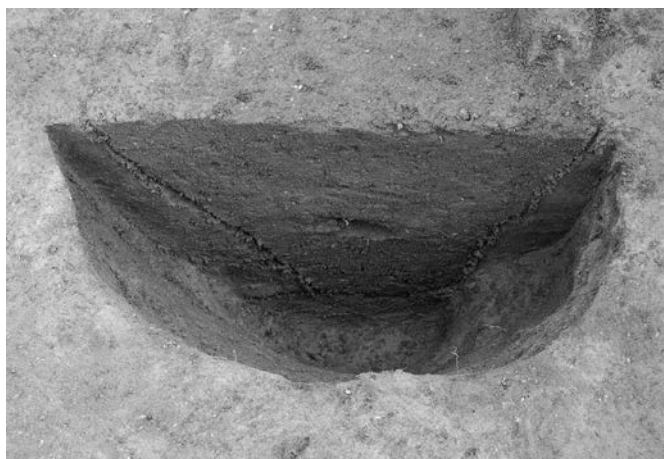
2 1区23号・24号竪穴住居全景 南→



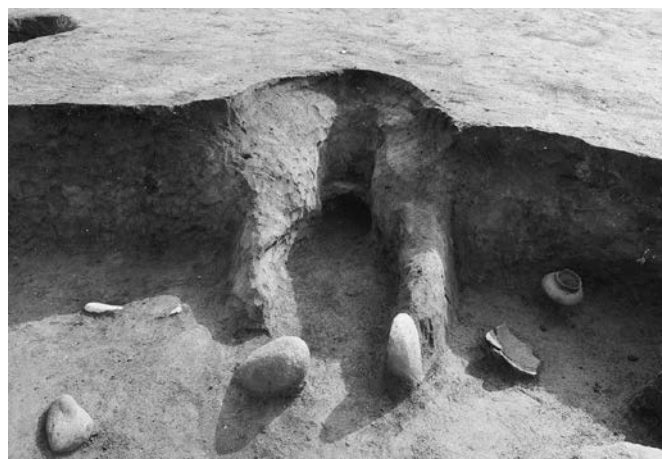
3 1区23号竪穴住居遺物出土状態 西→



4 1区23号竪穴住居土層断面 南西→



5 1区23号竪穴住居貯蔵穴土層断面C—C' 西→



6 1区23号竪穴住居カマド全景 西→



7 1区23号竪穴住居カマド土層断面 南→



8 1区23号竪穴住居カマド煙道部 南→



1 1区23号竪穴住居カマド掘方全景 西→



2 1区24号竪穴住居全景 西→



3 1区24号竪穴住居遺物出土状態 西→



4 1区24号竪穴住居P1土層断面 西→



5 1区24号竪穴住居カマド全景 西→



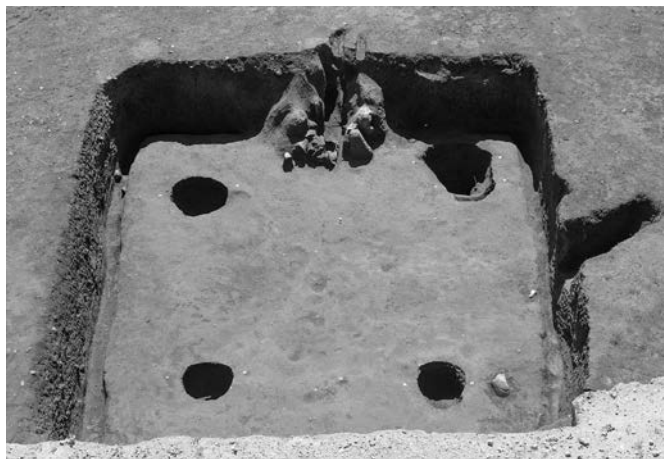
6 1区24号竪穴住居カマド土層断面E-E' 南→



7 1区24号竪穴住居カマド掘方全景 西→



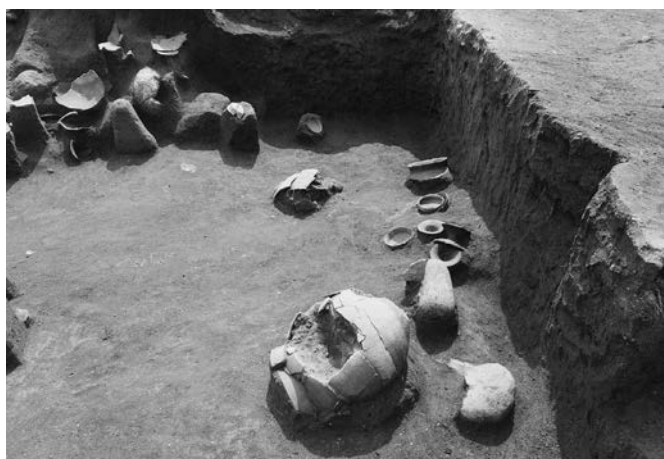
8 1区24号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 南→



1 1区27号竖穴住居全景 西→



2 1区27号竖穴住居遺物出土狀態 西→



3 1区27号竖穴住居遺物出土狀態 西→



4 1区27号竖穴住居遺物出土狀態 西→



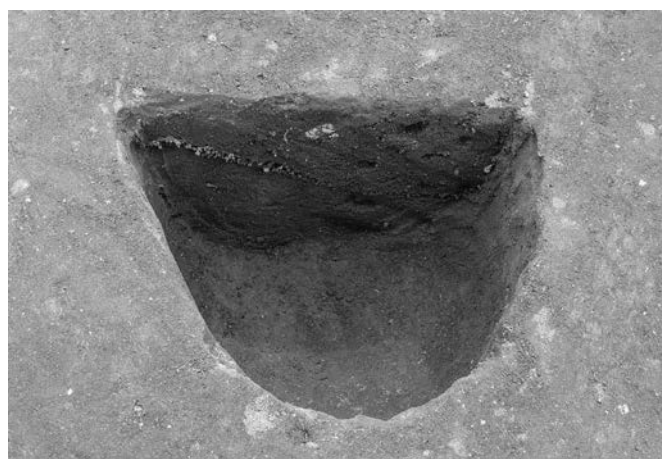
5 1区27号竖穴住居土層断面A—A' 北西→



6 1区27号竖穴住居土層断面B—B' 北東→



7 1区27号竖穴住居柱穴P 1土層断面E—E' 西→



8 1区27号竖穴住居柱穴P 2土層断面 西→



1 1区27号竪穴住居柱穴P3土層断面F-F' 西→



2 1区27号竪穴住居柱穴P4土層断面G-G' 西→



3 1区27号竪穴住居貯蔵穴全景 西→



4 1区27号竪穴住居貯蔵穴土層断面H-H' 東→



5 1区27号竪穴住居カマド全景 西→



6 1区27号竪穴住居カマド土層断面I-I' 北→



7 1区27号竪穴住居カマド土層断面J-J' 西→



8 1区27号竪穴住居カマド掘方全景 西→





1 1区27号竪穴住居カマド掘方土層断面I—I' 北→



2 1区27号竪穴住居カマド掘方土層断面J—J' 西→



3 1区28号竪穴住居全景 南西→



4 1区28号竪穴住居遺物出土状態 南西→



5 1区28号竪穴住居土層断面A—A' 西→



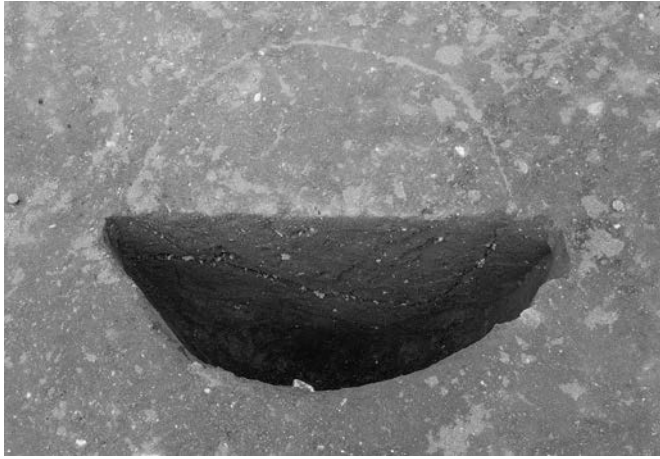
6 1区28号竪穴住居土層断面B—B' 北東→



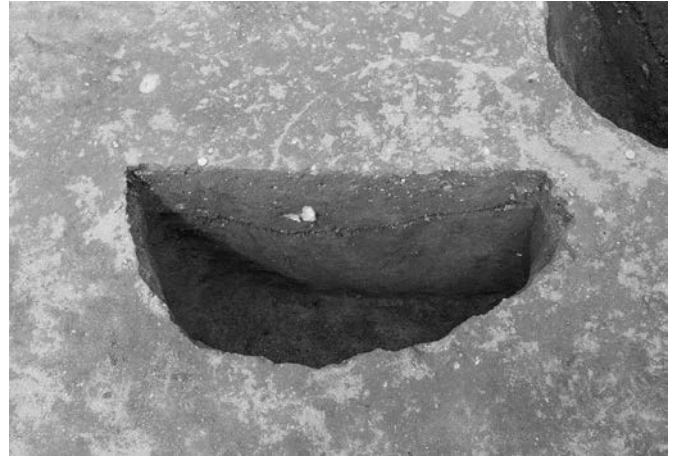
7 1区28号竪穴住居柱穴P1土層断面E—E' 南→



8 1区28号竪穴住居柱穴P2土層断面F—F' 南→



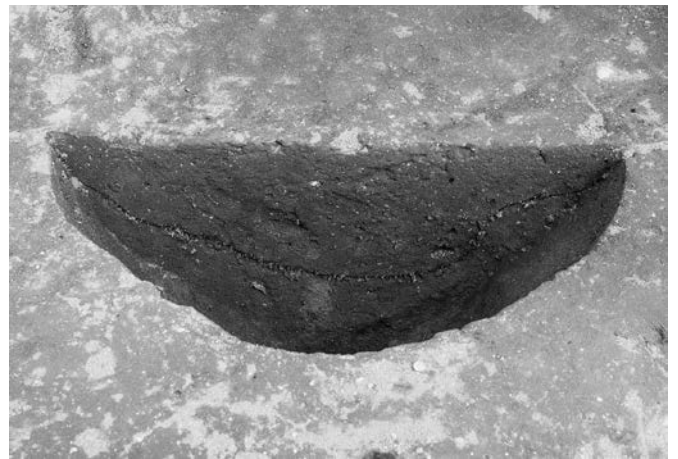
1 1区28号竪穴住居柱穴P3土層断面G—G' 南西→



2 1区28号竪穴住居柱穴P4土層断面H—H' 南西→



3 1区28号竪穴住居貯蔵穴全景 南西→



4 1区28号竪穴住居貯蔵穴土層断面I—I' 西→



5 1区28号竪穴住居カマド全景 南西→



6 1区28号竪穴住居カマド土層断面J—J' 南東→



7 1区28号竪穴住居カマド土層断面K—K' 南西→



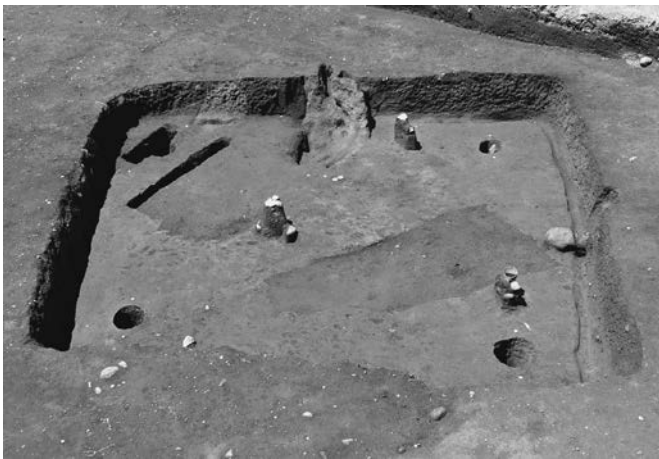
8 1区28号竪穴住居カマド掘方全景 南西→



1 1区28号竪穴住居カマド掘方土層断面J-J' 南東→



2 1区28号竪穴住居カマド掘方土層断面L-L' 南西→



3 1区30号竪穴住居全景 東→



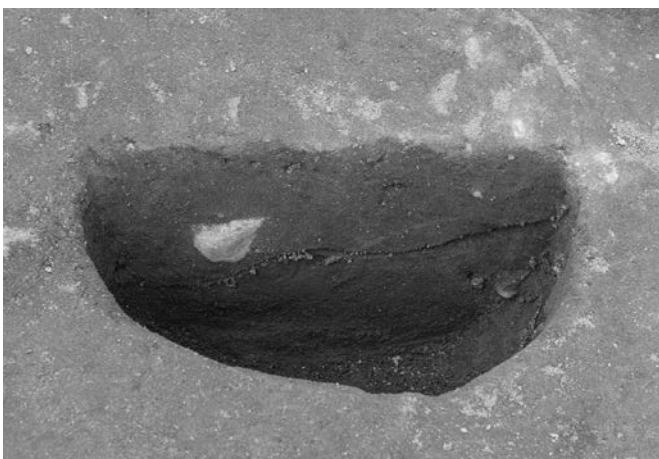
4 1区30号竪穴住居遺物出土状態 東→



5 1区30号竪穴住居土層断面A-A' 南→



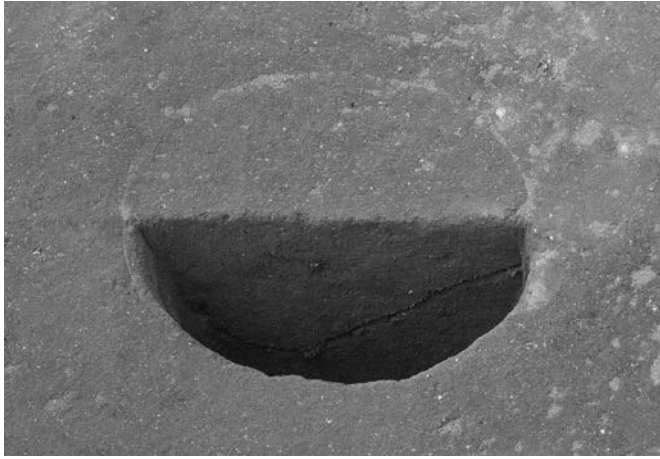
6 1区30号竪穴住居土層断面B-B' 東→



7 1区30号竪穴住居柱穴P 1土層断面 南→



8 1区30号竪穴住居柱穴P 2土層断面 南→



1 1区30号竪穴住居柱穴P 3土層断面E—E' 南→



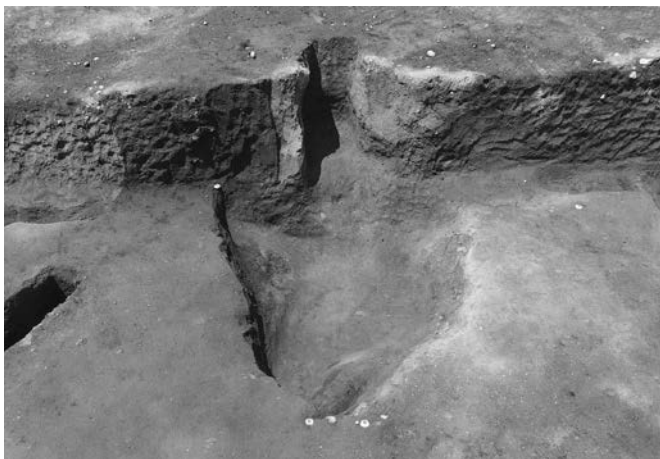
2 1区30号竪穴住居柱穴P 4土層断面H—H' 北→



3 1区30号竪穴住居カマド全景 東→



4 1区30号竪穴住居カマド土層断面G—G' 北→



5 1区30号竪穴住居カマド掘方全景 東→



6 1区30号竪穴住居カマド掘方土層断面H—H' 西→



7 2区1号竪穴住居全景 南西→



8 2区1号竪穴住居遺物出土状態 南西→



1 2区1号竖穴住居掘方全景 南西→



2 2区1号竖穴住居柱穴P 1土层断面E—E' 南→



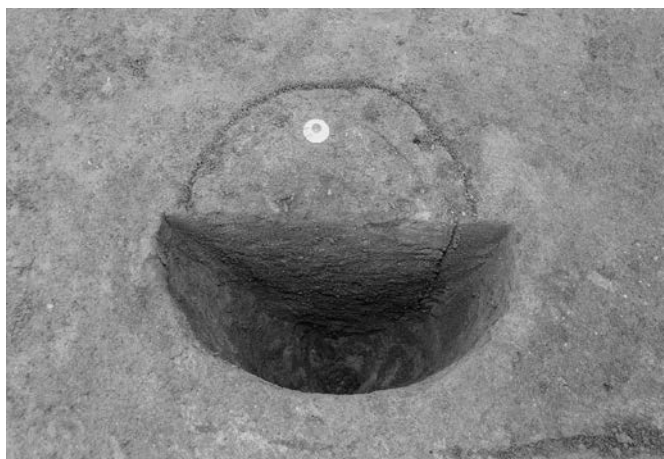
3 2区1号竖穴住居柱穴P 2土层断面F—F' 南→



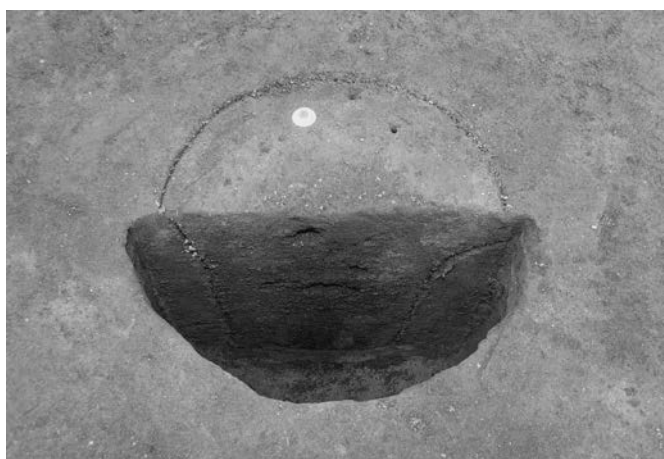
4 2区1号竖穴住居柱穴P 3土层断面G—G' 南→



5 2区1号竖穴住居柱穴P 4土层断面H—H' 南→



6 2区1号竖穴住居柱穴P 5土层断面I—I' 南→



7 2区1号竖穴住居柱穴P 6土层断面G—G' 南→



8 2区1号竖穴住居贮藏穴土层断面J—J' 西→



1 2区1号竪穴住居カマド全景 南西→



2 2区1号竪穴住居カマド土層断面K-K' 南→



3 2区1号竪穴住居カマド土層断面L-L' 西→



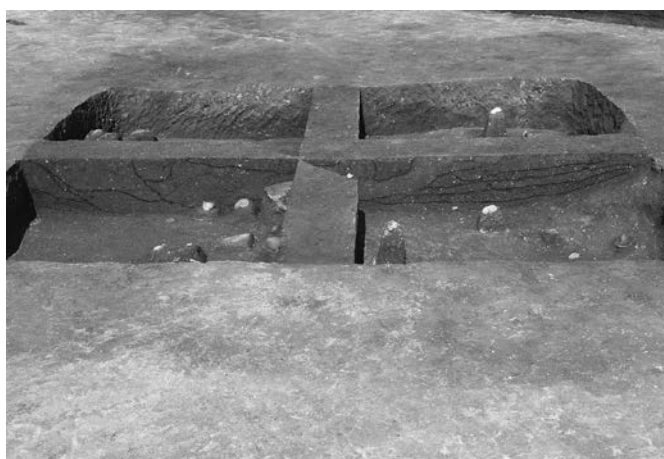
4 2区1号竪穴住居カマド掘方全景 南西→



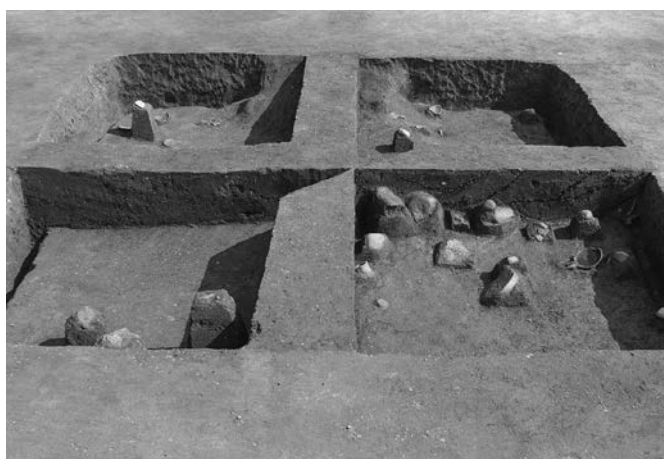
5 2区3号竪穴住居全景 南西→



6 2区3号竪穴住居遺物出土状態 南→



7 2区3号竪穴住居土層断面A-A' 南東→



8 2区3号竪穴住居土層断面B-B' 南西→



1 2区3号竪穴住居掘方全景 南→



2 2区3号竪穴住居床下土坑1土層断面 西→



3 2区3号竪穴住居柱穴P1土層断面 西→



4 2区3号竪穴住居柱穴P2土層断面 西→



5 2区3号竪穴住居貯蔵穴土層断面D-D' 西→



6 2区3号竪穴住居カマド全景 南西→



7 2区3号竪穴住居カマド土層断面E-E' 南西→



8 2区3号竪穴住居カマド土層断面F-F' 西→



1 2区3号竪穴住居カマド土層断面F-F' 西→



2 2区3号竪穴住居カマド掘方全景 南西→



3 2区4号竪穴住居全景 西→



4 2区4号竪穴住居遺物出土状態 北西→



5 2区4号竪穴住居土層断面A-A' 南→



6 2区4号竪穴住居土層断面B-B' 東→

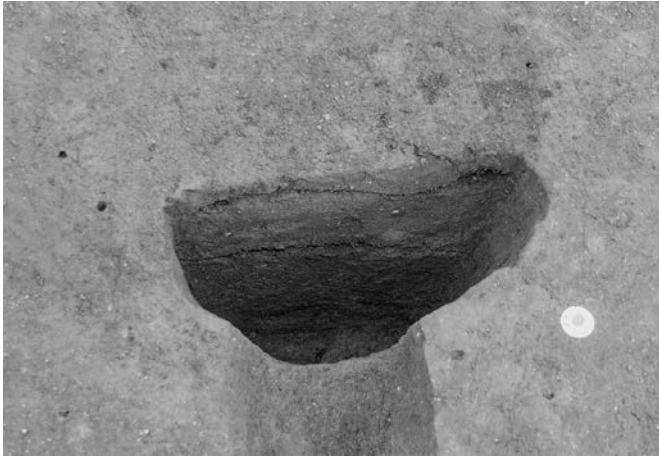


7 2区4号竪穴住居掘方全景 西→



8 2区4号竪穴住居柱穴P1土層断面 南→





1 2区4号竖穴住居柱穴P 2土層断面 南→



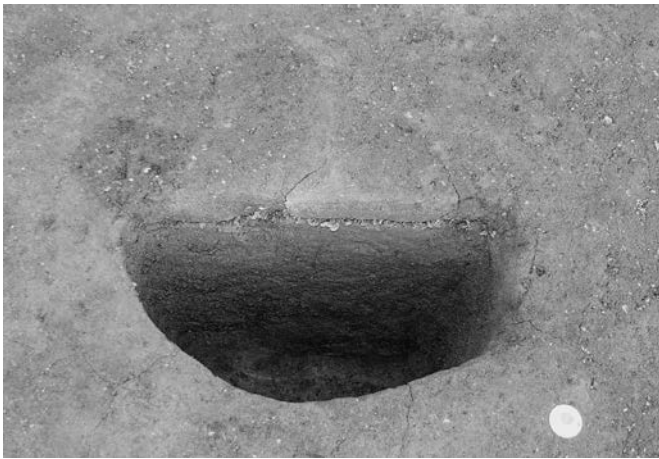
2 2区4号竖穴住居柱穴P 3土層断面 西→



3 2区4号竖穴住居柱穴P 4土層断面G—G' 南→



4 2区4号竖穴住居柱穴P 5土層断面H—H' 南→



5 2区4号竖穴住居柱穴P 6土層断面I—I' 南→



6 2区4号竖穴住居柱穴P 7・P 8土層断面 北→



7 2区4号竖穴住居貯蔵穴土層断面L—L' 西→



8 2区4号竖穴住居カマド全景 西→



1 2区4号竪穴住居カマド土層断面M-M' 南西→



2 2区4号竪穴住居カマド土層断面M-M' 南西→



3 2区4号竪穴住居カマド土層断面N-N' 西→



4 2区4号竪穴住居カマド掘方全景 南西→



5 2区11号竪穴住居全景 南西→



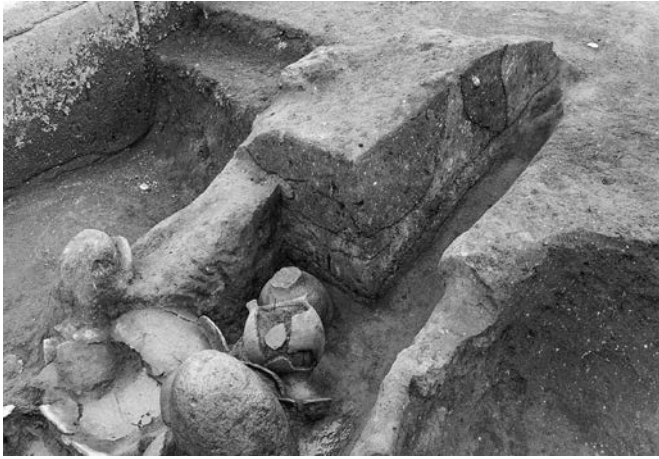
6 2区11号竪穴住居掘方全景 北東→



7 2区11号竪穴住居カマド全景 南西→



8 2区11号竪穴住居カマド土層断面 南東→



1 2区11号竪穴住居カマド土層断面 I—I' 南東→



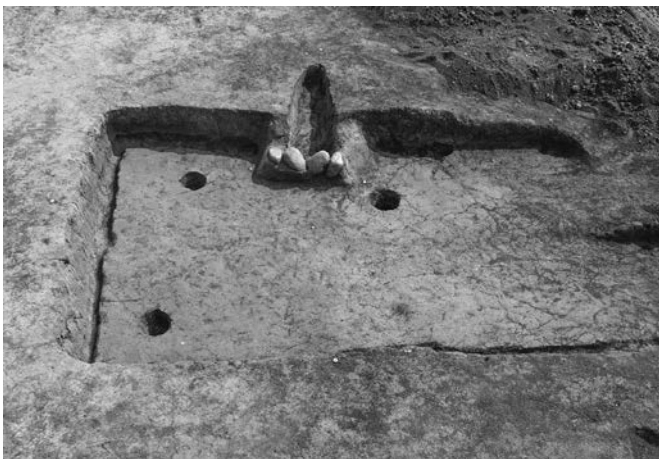
2 2区11号竪穴住居カマド土層断面 J—J' 南西→



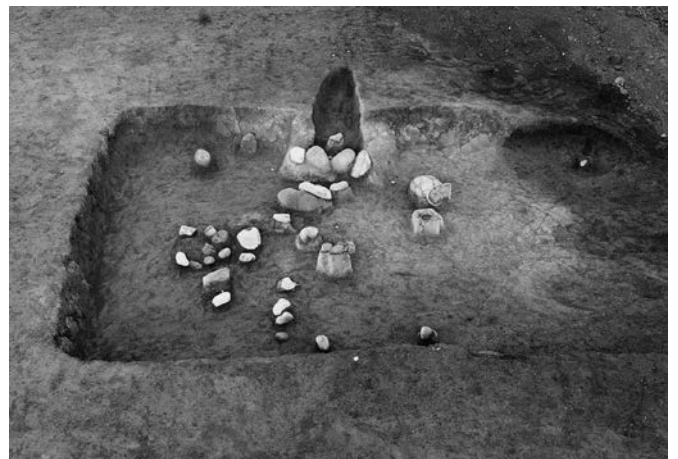
3 2区11号竪穴住居カマド掘方全景 南西→



4 2区11号竪穴住居カマド掘方土層断面 I—I' 南東→



5 2区13号竪穴住居全景 南西→



6 2区13号竪穴住居遺物出土状態 南西→



7 2区13号竪穴住居掘方全景 南西→



8 2区13号竪穴住居カマド全景 南西→



1 2区13号竪穴住居カマド土層断面 南→



2 2区13号竪穴住居カマド掘方全景 南西→



3 2区14号竪穴住居全景 南→



4 2区14号竪穴住居遺物出土状態 南→



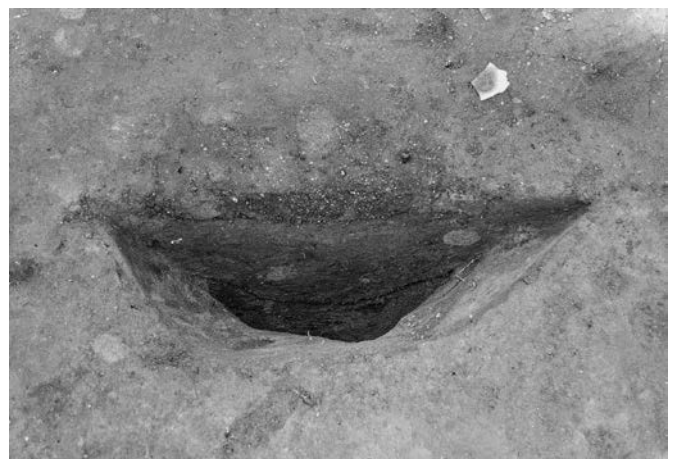
5 2区14号竪穴住居掘方全景 南→



6 2区14号竪穴住居掘方土層断面B—B' 南→



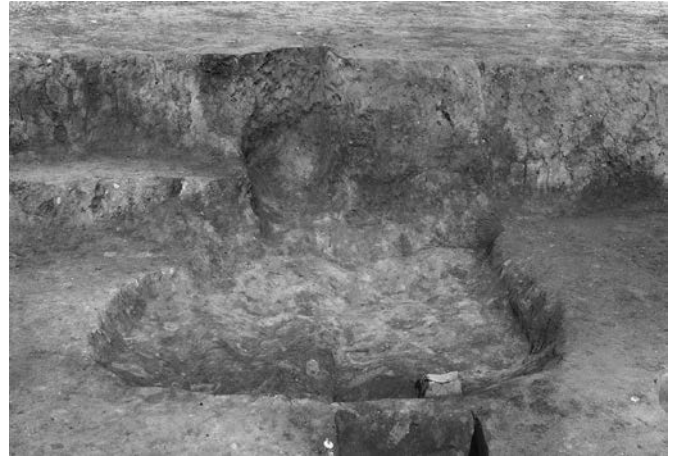
7 2区14号竪穴住居柱穴P 4土層断面 南→



8 2区14号竪穴住居柱穴P 5土層断面 南→



1 2区14号竪穴住居カマド1土層断面I—I' 南→



2 2区14号竪穴住居カマド1掘方全景 南西→



3 2区14号竪穴住居カマド1掘方土層断面I—I' 南→



4 2区14号竪穴住居カマド1掘方土層断面I—I' 北→



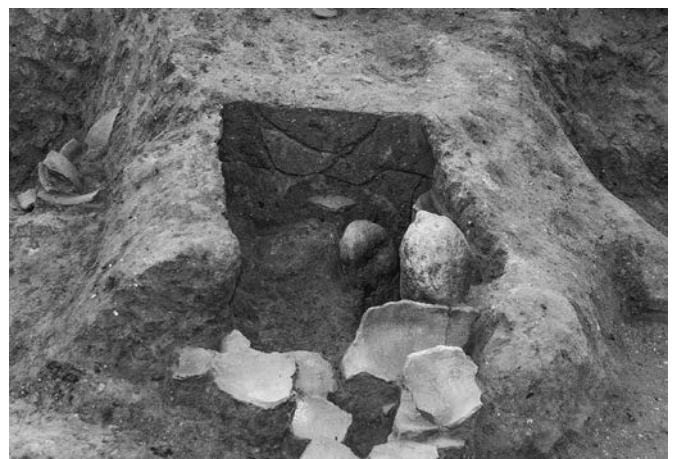
5 2区14号竪穴住居カマド2全景 南→



6 2区14号竪穴住居カマド2土層断面J—J' 南東→



7 2区14号竪穴住居カマド2土層断面J—J' 南東→



8 2区14号竪穴住居カマド2土層断面K—K' 南→



1 2区14号竪穴住居カマド2掘方全景 南→



2 2区14号竪穴住居カマド2掘方土層断面J-J' 南→



3 2区15・16号竪穴住居全景 西→



4 2区15号竪穴住居遺物出土状態 西→



5 2区15・16号竪穴住居土層断面A-A' 北→



6 2区15・16号竪穴住居土層断面B-B' 西→



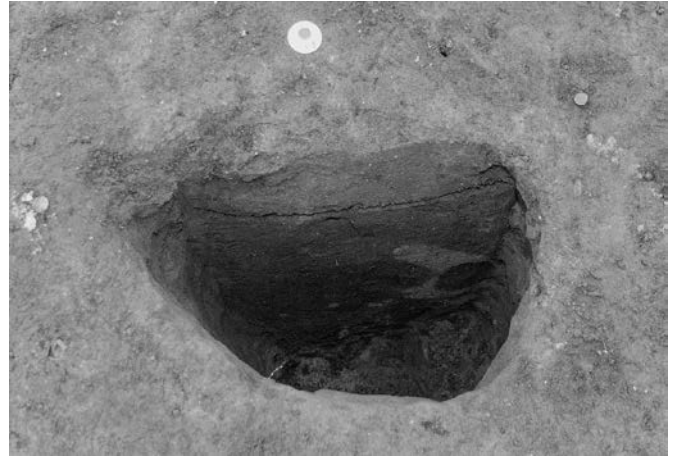
7 2区15・16号竪穴住居掘方全景 西→



8 2区15号竪穴住居柱穴P1土層断面E-E' 西→



1 2区15号竪穴住居柱穴P 2土層断面 南→



2 2区15号竪穴住居柱穴P 3土層断面 西→



3 2区15号竪穴住居柱穴P 4土層断面 F—F' 西→



4 2区15号竪穴住居貯蔵穴土層断面 G—G' 西→



5 2区15号竪穴住居カマド全景 西→



6 2区15号竪穴住居カマド土層断面H—H' 南西→



7 2区15号竪穴住居カマド土層断面 I—I' 西→



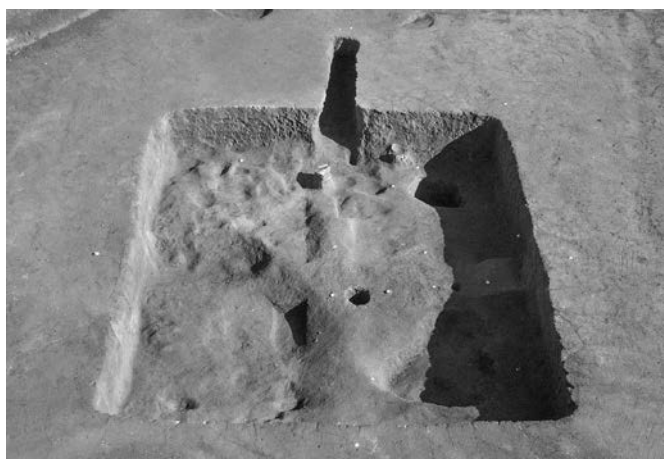
8 2区15号竪穴住居カマド土層断面 I—I' 西→



1 2区15号竪穴住居カマド掘方土層断面H-H' 南西→



2 2区15号竪穴住居カマド掘方土層断面I-I' 西→



3 2区19号竪穴住居全景 西→



4 2区19号竪穴住居遺物出土状態 西→



5 2区19号竪穴住居土層断面A-A' 南→



6 2区19号竪穴住居土層断面B-B' 西→



7 2区19号竪穴住居掘方全景 西→



8 2区19号竪穴住居掘方土層断面 西→





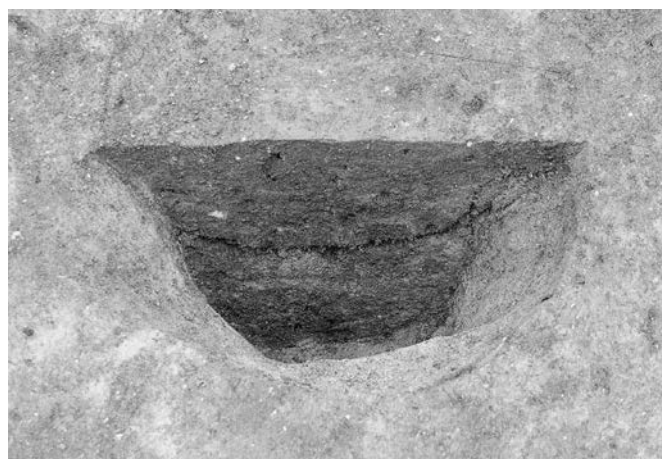
1 2区19号竪穴住居掘方全景 南→



2 2区19号竪穴住居掘方床下土坑全景 西→



3 2区19号竪穴住居柱穴P 1土層断面 南→



4 2区19号竪穴住居貯蔵穴1土層断面E—E' 西→



5 2区19号竪穴住居貯蔵穴2土層断面F—F' 西→



6 2区19号竪穴住居カマド全景 西→



7 2区19号竪穴住居カマド土層断面G—G' 南西→



8 2区19号竪穴住居カマド土層断面H—H' 西→



1 2区19号竪穴住居カマド土層断面H-H' 西→



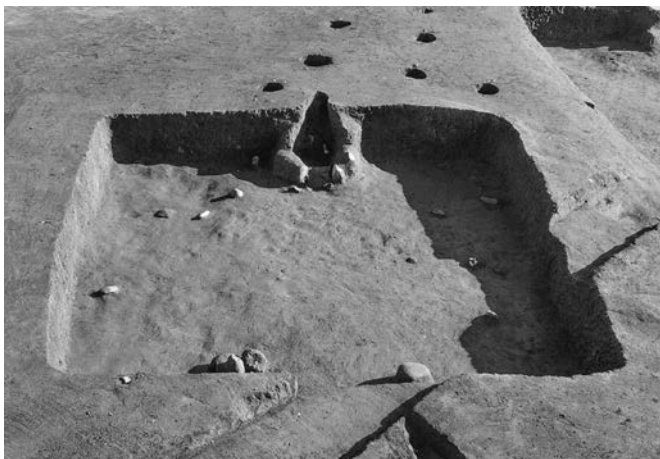
2 2区19号竪穴住居カマド掘方全景 西→



3 2区19号竪穴住居カマド掘方土層断面G-G' 南西→



4 2区19号竪穴住居カマド掘方土層断面 西→



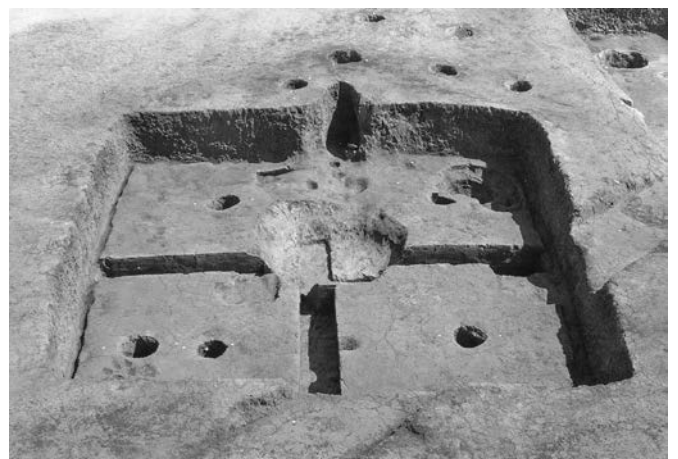
5 2区20号竪穴住居全景 南西→



6 2区20号竪穴住居土層断面A-A' 南→



7 2区20号竪穴住居土層断面B-B' 東→



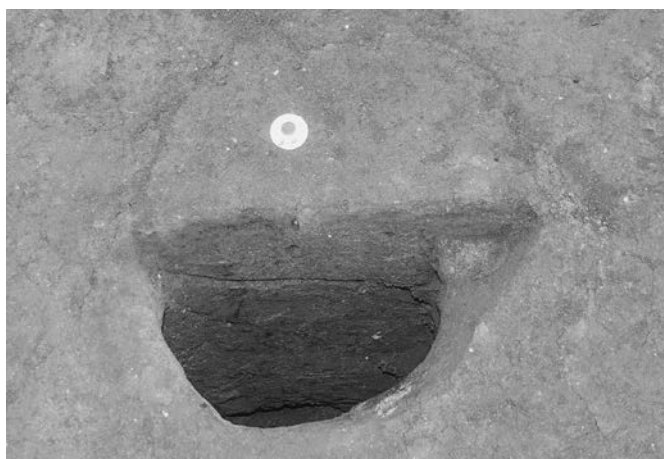
8 2区20号竪穴住居掘方全景 南西→



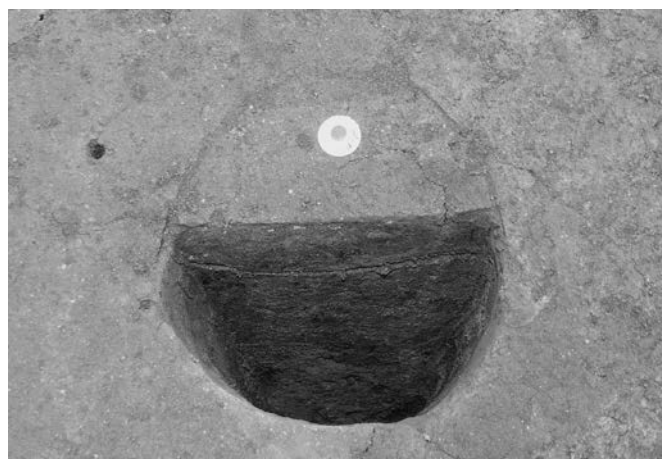
1 2区20号竪穴住居床下土坑全景 南西→



2 2区20号竪穴住居柱穴P 1土層断面 南→



3 2区20号竪穴住居柱穴P 2土層断面 西→



4 2区20号竪穴住居柱穴P 3土層断面 西→



5 2区20号竪穴住居柱穴P 4土層断面 西→



6 2区20号竪穴住居柱穴P 5土層断面 西→



7 2区20号竪穴住居貯蔵穴土層断面G-G' 西→



8 2区20号竪穴住居カマド全景 西→



1 2区20号竪穴住居カマド土層断面H-H' 南→



2 2区20号竪穴住居カマド土層断面I-I' 南西→



3 2区20号竪穴住居カマド土層断面I-I' 西→



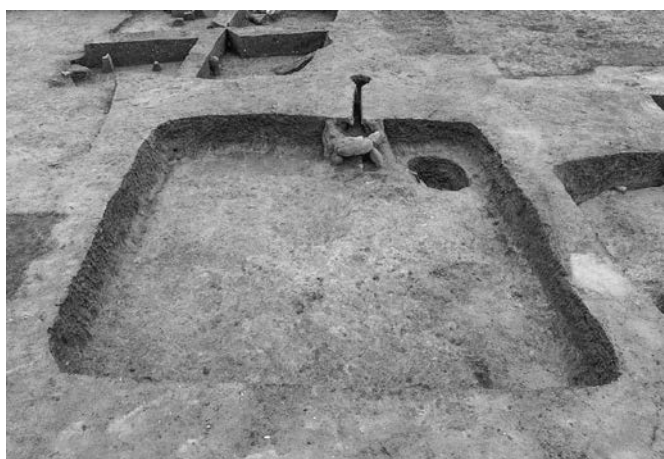
4 2区20号竪穴住居カマド土層断面H-H' 南→



5 2区20号竪穴住居カマド掘方土層断面H-H' 南→



6 2区20号竪穴住居カマド掘方土層断面I-I' 西→



7 2区21号竪穴住居全景 西→



8 2区21号竪穴住居遺物出土状態 西→



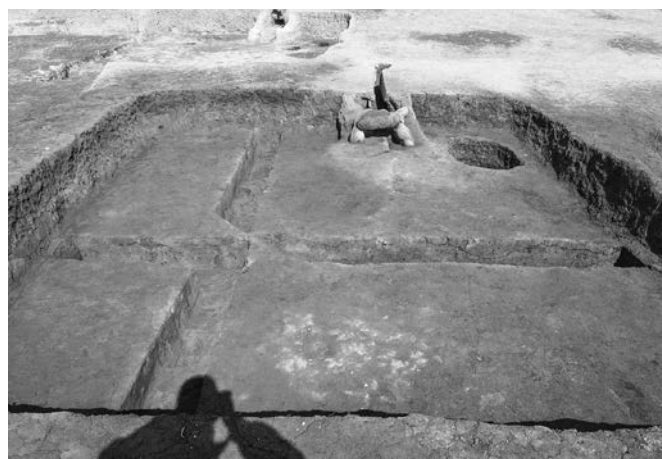
1 2区21号竪穴住居土層断面A—A' 北→



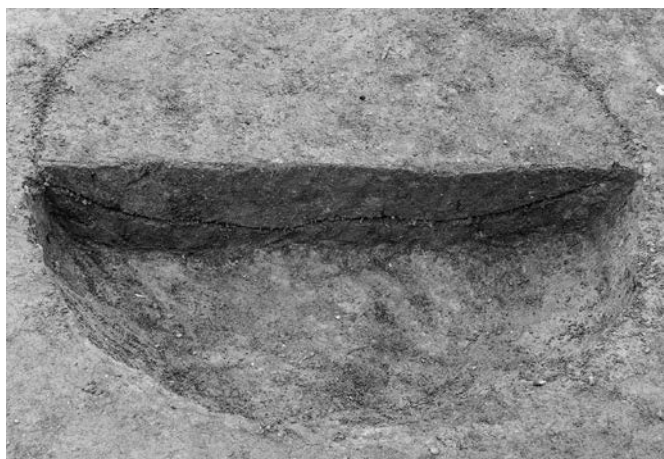
2 2区21号竪穴住居土層断面B—B' 西→



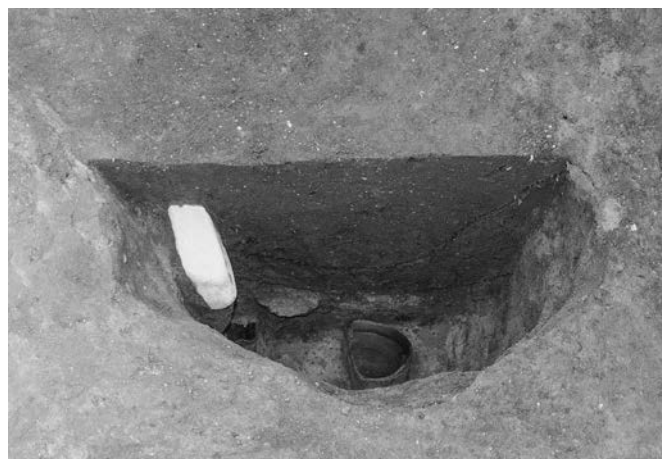
3 2区21号竪穴住居掘方土層断面A—A' 北→



4 2区21号竪穴住居掘方土層断面B—B' 西→



5 2区21号竪穴住居床下土坑土層断面G—G' 西→



6 2区21号竪穴住居貯蔵穴土層断面C—C' 西→



7 2区21号竪穴住居カマド全景 西→



8 2区21号竪穴住居カマド土層断面D—D' 北西→



1 2区21号竪穴住居カマド土層断面E—E' 南西→



2 2区21号竪穴住居カマド土層断面E—E' 西→



3 2区21号竪穴住居カマド掘方土層断面D—D' 南西→



4 2区21号竪穴住居カマド掘方土層断面E—E' 西→



5 2区22号竪穴住居全景 南西→



6 2区22号竪穴住居遺物出土状態 南西→



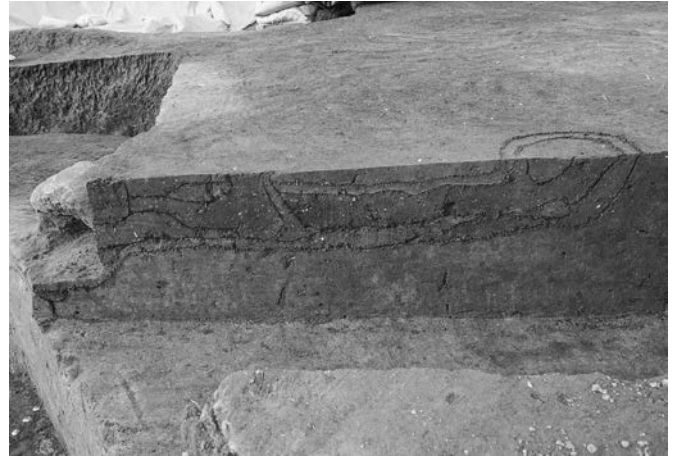
7 2区22号竪穴住居土層断面A—A' 南東→



8 2区22号竪穴住居掘方土層断面A—A' 東→



1 2区22号竪穴住居カマド土層断面B-B' 南西→



2 2区22号竪穴住居カマド土層断面B-B' 南→



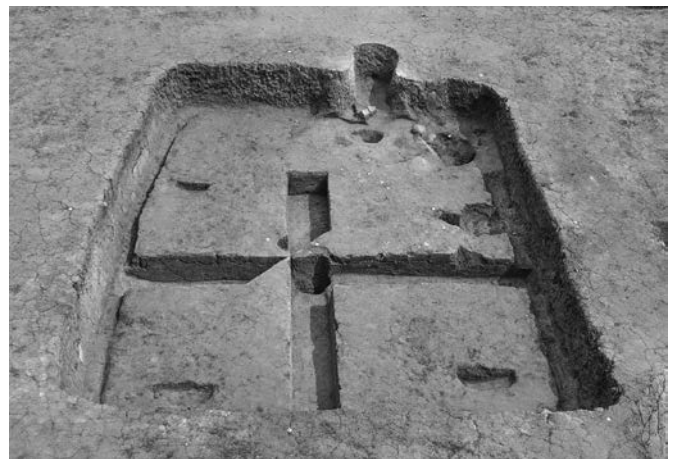
3 2区24号竪穴住居全景 南西→



4 2区24号竪穴住居土層断面A-A' 南→



5 2区24号竪穴住居土層断面B-B' 西→



6 2区24号竪穴住居掘方全景 南西→



7 2区24号竪穴住居カマド土層断面E-E' 南西→



8 2区24号竪穴住居カマド土層断面E-E' 南西→



1 2区24号竪穴住居カマド土層断面E—E' 南→



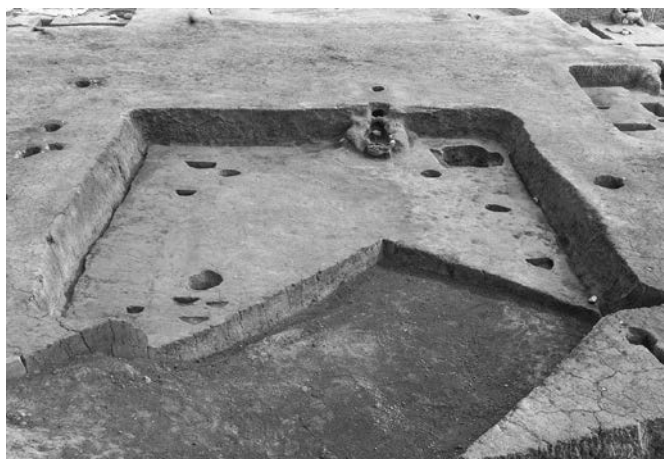
2 2区24号竪穴住居カマド土層断面F—F' 西→



3 2区24号竪穴住居カマド掘方全景 南西→



4 2区24号竪穴住居カマド掘方土層断面E—E' 南西→



5 2区25号竪穴住居全景 南西→



6 2区25号竪穴住居遺物出土状態 南西→



7 2区25号竪穴住居遺物出土状態 北→



8 2区25号竪穴住居土層断面A—A' 南→





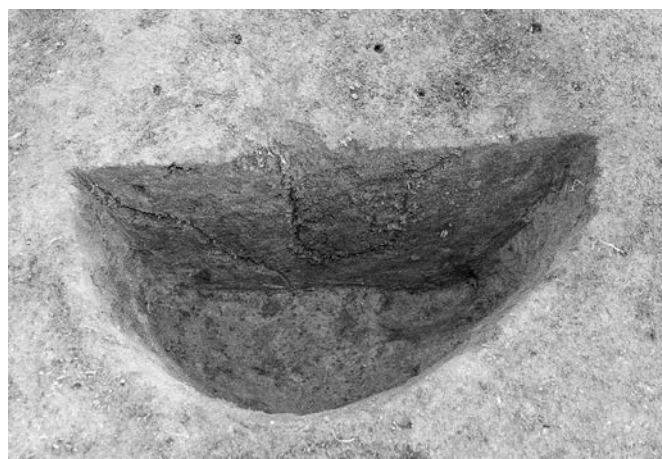
1 2区25号竖穴住居土層断面B—B' 西→



2 2区25号竖穴住居掘方全景 南西→



3 2区25号竖穴住居柱穴P 1土層断面 西→



4 2区25号竖穴住居柱穴P 3土層断面E—E' 西→



5 2区25号竖穴住居柱穴P 4土層断面 西→



6 2区25号竖穴住居柱穴P 5土層断面F—F' 西→



7 2区25号竖穴住居貯藏穴土層断面G—G' 南西→



8 2区25号竖穴住居カマド全景 南西→



1 2区25号竪穴住居カマド掘方全景 南西→



2 2区25号竪穴住居カマド掘方土層断面J-J' 西→



3 2区26号竪穴住居全景 南西→



4 2区26号竪穴住居遺物出土状態 南西→



5 2区26号竪穴住居遺物出土状態 西→



6 2区26号竪穴住居土層断面A-A' 南東→



7 2区26号竪穴住居土層断面B-B' 南西→



8 2区26号竪穴住居掘方全景 南西→



1 2区26号竖穴住居掘方土层断面A—A' 南東 →



2 2区26号竖穴住居柱穴P 1土层断面E—E' 西→



3 2区26号竖穴住居柱穴P 2土层断面 西→



4 2区26号竖穴住居柱穴P 3土层断面 西→



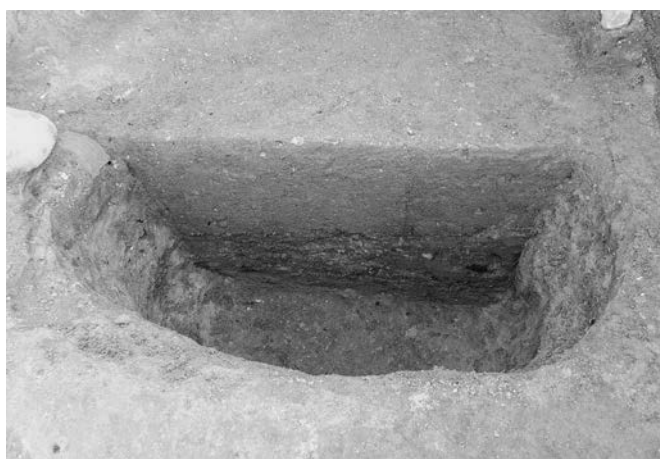
5 2区26号竖穴住居柱穴P 4土层断面F—F' 南西→



6 2区26号竖穴住居柱穴P 5土层断面G—G' 南西→



7 2区26号竖穴住居貯藏穴全景 南西→



8 2区26号竖穴住居貯藏穴土层断面 西→



1 2区26号竪穴住居カマド全景 南西→



2 2区26号竪穴住居カマド土層断面 I—I' 南西→



3 2区26号竪穴住居カマド土層断面 I—I' 南→



4 2区26号竪穴住居カマド土層断面 K—K' 南西→



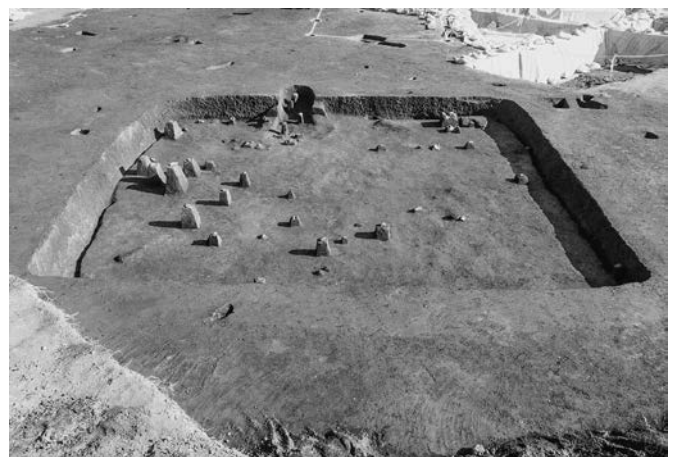
5 2区26号竪穴住居カマド土層断面 K—K' 西→



6 2区26号竪穴住居カマド掘方土層断面 K—K' 南西→



7 2区27号竪穴住居全景 南西→



8 2区27号竪穴住居遺物出土状態 南西→



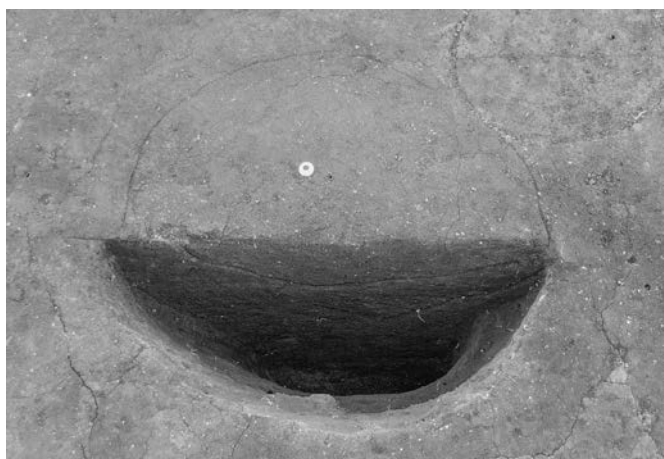
1 2区27号竖穴住居土層断面A—A' 南→



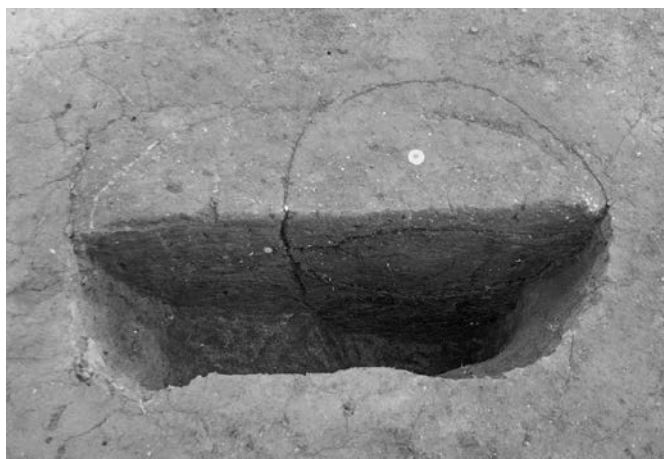
2 2区27号竖穴住居土層断面B—B' 西→



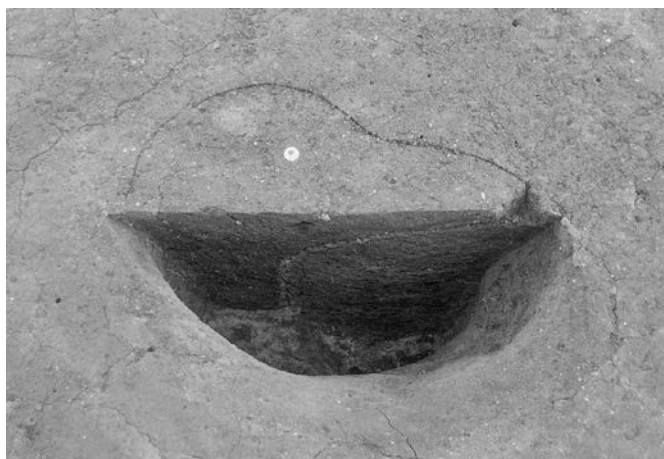
3 2区27号竖穴住居掘方全景 南西→



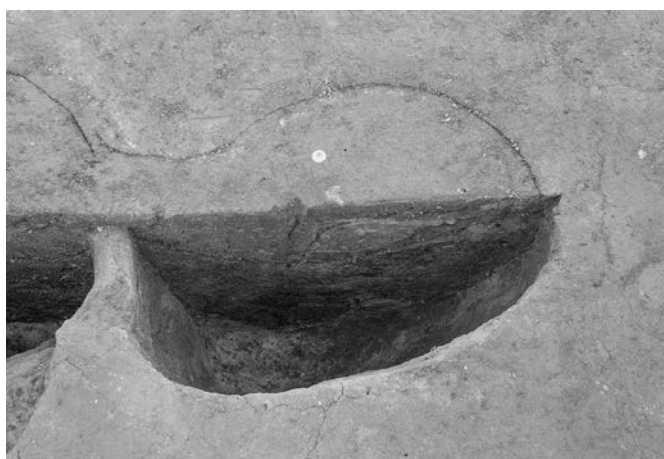
4 2区27号竖穴住居柱穴P 1土層断面E—E' 西→



5 2区27号竖穴住居柱穴P 2土層断面 西→



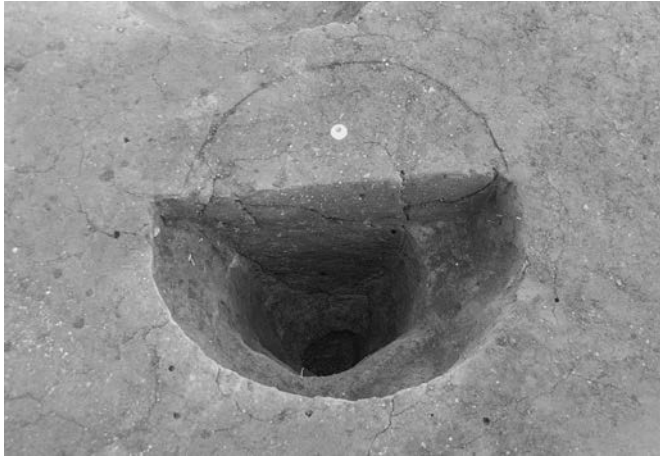
6 2区27号竖穴住居柱穴P 3土層断面 西→



7 2区27号竖穴住居柱穴P 4土層断面 西→



8 2区27号竖穴住居柱穴P 5土層断面 西→



1 2区27号竪穴住居柱穴P 6土層断面F—F' 西→



2 2区27号竪穴住居柱穴P 7土層断面 西→



3 2区27号竪穴住居柱穴P 4・P 7土層断面 西→



4 2区27号竪穴住居貯蔵穴土層断面G—G' 西→



5 2区27号竪穴住居カマド全景 南→



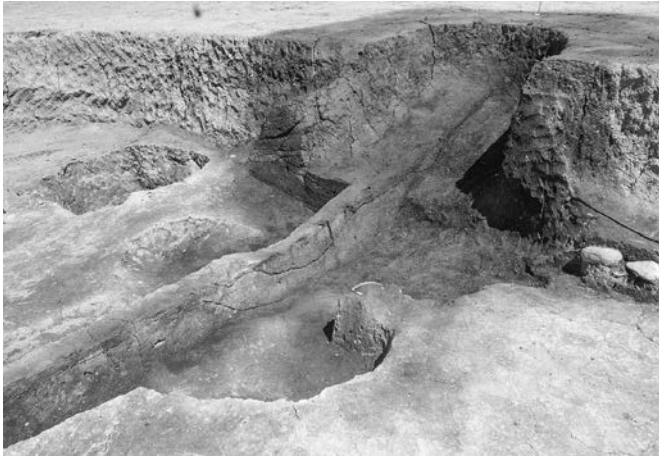
6 2区27号竪穴住居カマド土層断面H—H' 南→



7 2区27号竪穴住居カマド土層断面I—I' 西→



8 2区27号竪穴住居カマド土層断面I—I' 西→



1 2区27号竪穴住居カマド掘方土層断面H-H' 南→



2 2区27号竪穴住居カマド掘方土層断面I-I' 西→



3 2区29号竪穴住居全景 南西→



4 2区29号竪穴住居遺物出土状態 南西→



5 2区29号竪穴住居遺物出土状態 南西→



6 2区29号竪穴住居遺物出土状態 南西→



7 2区29号竪穴住居掘方全景 南西→



8 2区29号竪穴住居掘方土層断面A-A' 南東→



1 2区29号竪穴住居掘方土層断面B-B' 南西→



2 2区29号竪穴住居柱穴P 1土層断面 南→



3 2区29号竪穴住居柱穴P 3土層断面 南→



4 2区29号竪穴住居柱穴P 4土層断面 南→



5 2区29号竪穴住居柱穴P 5土層断面 南→



6 2区29号竪穴住居貯蔵穴土層断面 西→



7 2区29号竪穴住居カマド全景 西→



8 2区29号竪穴住居カマド土層断面F-F' 南西→





1 2区29号竪穴住居カマド土層断面G—G' 西→



2 2区29号竪穴住居カマド掘方全景 西→



3 2区30号竪穴住居全景 北→



4 2区30号竪穴住居土層断面A—A' 西→



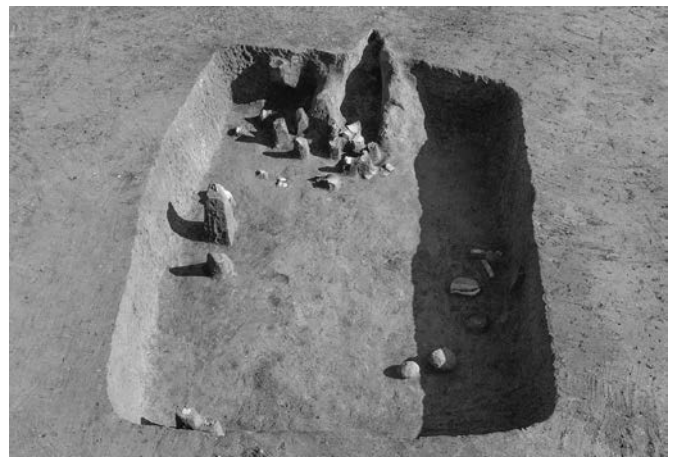
5 2区30号竪穴住居土層断面B—B' 北→



6 2区30号竪穴住居土層断面B—B' 北東→



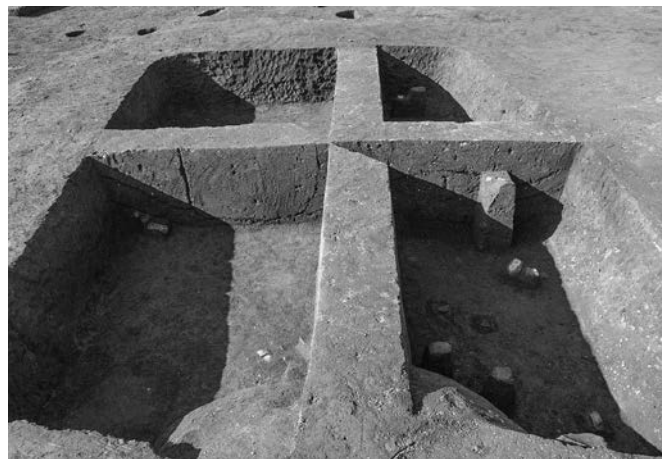
7 2区34号竪穴住居全景 西→



8 2区34号竪穴住居遺物出土状態 西→



1 2区34号竪穴住居土層断面A—A' 南→



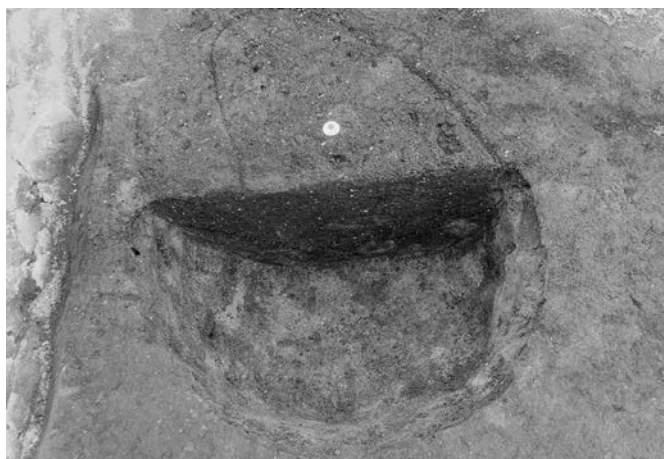
2 2区34号竪穴住居土層断面B—B' 東→



3 2区34号竪穴住居掘方全景 西→



4 2区34号竪穴住居柱穴P1土層断面C—C' 西→



5 2区34号竪穴住居貯蔵穴土層断面 西→



6 2区34号竪穴住居カマド全景 西→



7 2区34号竪穴住居カマド土層断面E—E' 南西→



8 2区34号竪穴住居カマド土層断面F—F' 西→



1 2区34号竪穴住居カマド掘方全景 西→



2 2区34号竪穴住居カマド掘方土層断面E—E' 南西→



3 2区35号竪穴住居全景 北西→



4 2区35号竪穴住居遺物出土状態 北東→



5 2区35号竪穴住居土層断面A—A' 北→



6 2区35号竪穴住居土層断面B—B' 西→



7 2区35号竪穴住居掘方全景 北西→



8 2区35号竪穴住居カマド全景 西→



1 2区35号竪穴住居カマド土層断面D-D' 西→



2 2区35号竪穴住居カマド土層断面D-D' 西→



3 2区35号竪穴住居カマド土層断面E-E' 西→



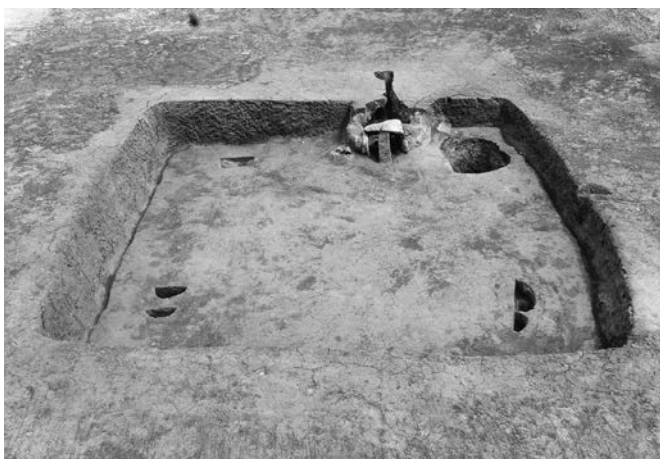
4 2区35号竪穴住居カマド掘方全景 西→



5 2区35号竪穴住居カマド袖石露出状況 西→



6 2区35号竪穴住居カマド掘方土層断面E-E' 西→



7 2区36号竪穴住居全景 西→



8 2区36号竪穴住居遺物出土状態 西→



1 2区36号竪穴住居遺物出土状態 東→



2 2区36号竪穴住居土層断面A—A' 南→



3 2区36号竪穴住居土層断面B—B' 西→



4 2区36号竪穴住居掘方全景 西→



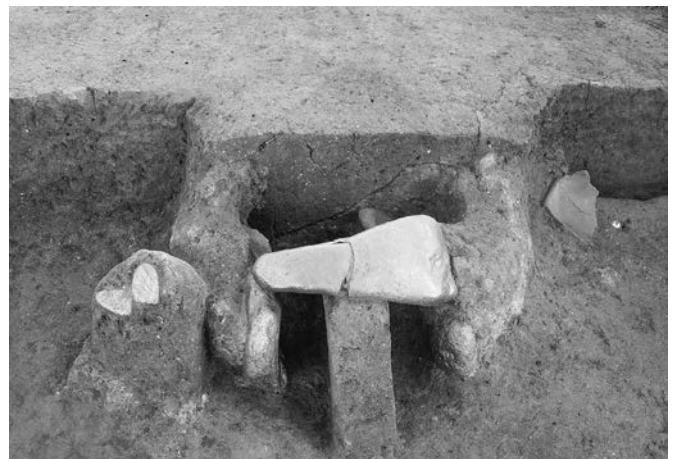
5 2区36号竪穴住居カマド全景 西→



6 2区36号竪穴住居カマド土層断面F—F' 南西→



7 2区36号竪穴住居カマド土層断面F—F' 南西→



8 2区36号竪穴住居カマド土層断面F—F' 西→



1 2区36号竪穴住居カマド掘方全景 西→



2 2区36号竪穴住居カマド掘方土層断面F—F' 南西→



3 2区37号竪穴住居全景 西→



4 2区37号竪穴住居遺物出土状態 西→



5 2区37号竪穴住居遺物出土状態 南西→



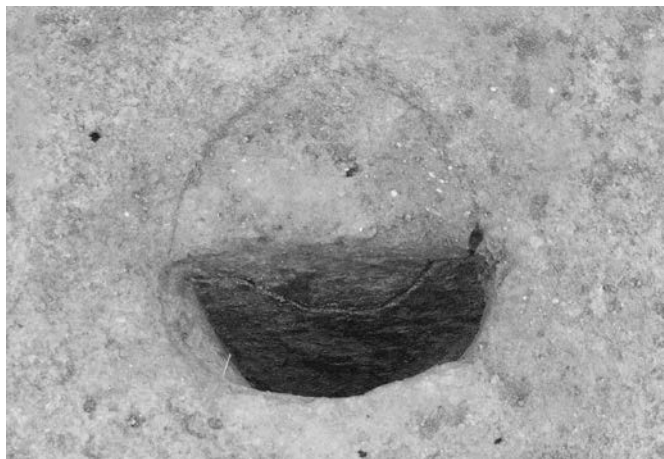
6 2区37号竪穴住居遺物出土状態 西→



7 2区37号竪穴住居土層断面A—A' 南→



8 2区37号竪穴住居土層断面B—B' 東→



1 2区37号竖穴住居柱穴P4土層断面F—F' 西→



2 2区37号竖穴住居カマド全景 西→



3 2区37号竖穴住居カマド土層断面I—I' 南→



4 2区37号竖穴住居カマド掘方土層断面J—J' 南西→



5 2区38号竖穴住居全景 南西→



6 2区38号竖穴住居遺物出土状態 南西→



7 2区38号竖穴住居掘方全景 南西→



8 2区38号竖穴住居柱穴P1土層断面C—C' 西→



1 2区38号竪穴住居柱穴P3土層断面D-D' 南西→



2 2区38号竪穴住居貯蔵穴土層断面E-E' 南西→



3 2区38号竪穴住居カマド全景 西→



4 2区38号竪穴住居カマド土層断面H-H' 南西→



5 2区38号竪穴住居カマド土層断面F-F' 南→



6 2区38号竪穴住居カマド煙道部 南西→



7 2区38号竪穴住居カマド煙道部断面 南→



8 2区38号竪穴住居カマド掘方全景 南西→





1 2区38号竪穴住居カマド掘方土層断面F—F' 南西→



2 2区38号竪穴住居カマド掘方土層断面H—H' 南→



3 2区41号竪穴住居全景 南西→



4 2区41号竪穴住居遺物出土状態 南西→



5 2区41号竪穴住居遺物出土状態 南→



6 2区41号竪穴住居土層断面A—A' 南東→



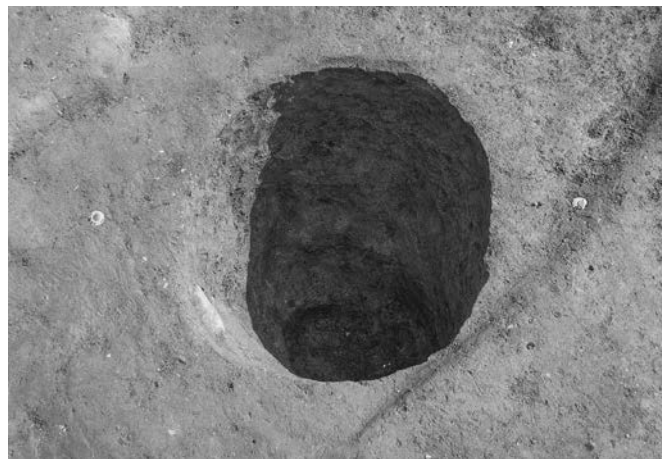
7 2区41号竪穴住居土層断面B—B' 南西→



8 2区41号竪穴住居柱穴P1全景 南西→



1 2区41号竖穴住居柱穴P 1 土層断面E—E' 南西→



2 2区41号竖穴住居柱穴P 2 全景 南西→



3 2区41号竖穴住居柱穴P 2 土層断面 南西→



4 2区41号竖穴住居柱穴P 3 全景 南西→



5 2区41号竖穴住居柱穴P 3 土層断面 南西→



6 2区41号竖穴住居柱穴P 4 全景 南西→



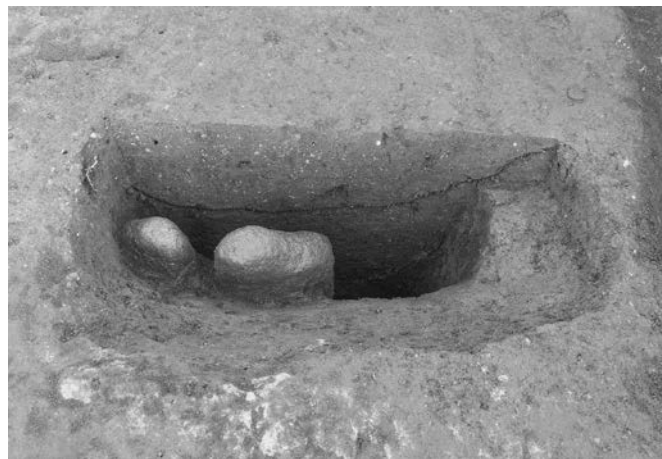
7 2区41号竖穴住居柱穴P 4 土層断面F—F' 南西→



8 2区41号竖穴住居柱穴P 5 全景 南西→



1 2区41号竪穴住居柱穴P 5土層断面G—G' 南西→



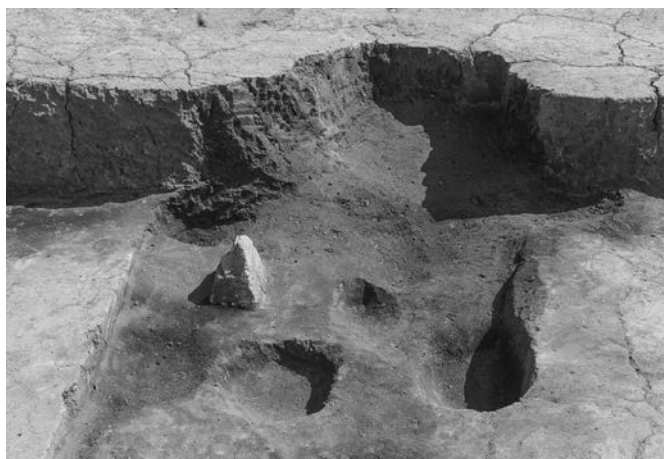
2 2区41号竪穴住居貯蔵穴土層断面J—J' 西→



3 2区41号竪穴住居カマド全景 南西→



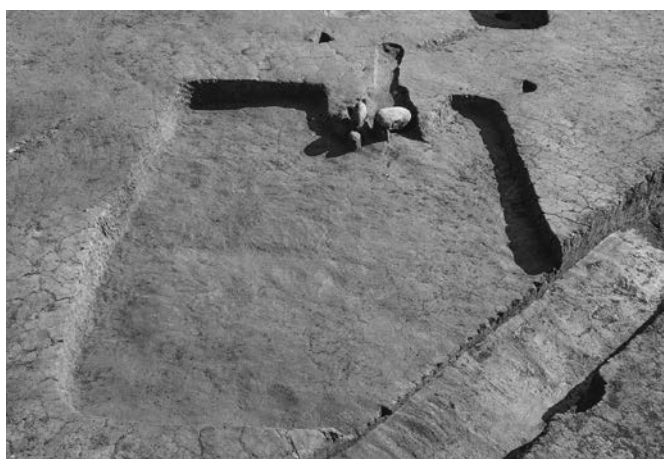
4 2区41号竪穴住居カマド土層断面K—K' 南西→



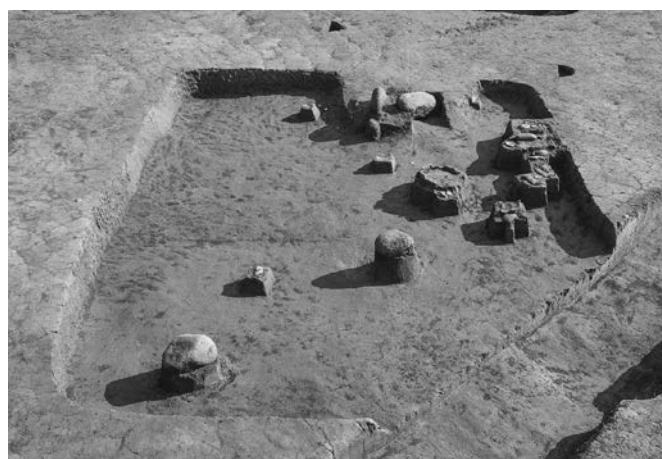
5 2区41号竪穴住居カマド掘方全景 南西→



6 2区41号竪穴住居カマド掘方土層断面L—L' 南西→



7 2区42号竪穴住居全景 南西→



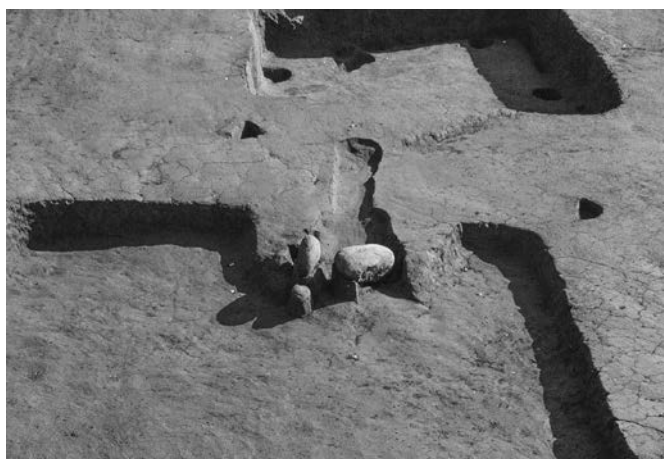
8 2区42号竪穴住居遺物出土状態 南西→



1 2区42号竪穴住居土層断面A—A' 南西→



2 2区42号竪穴住居掘方全景 南西→



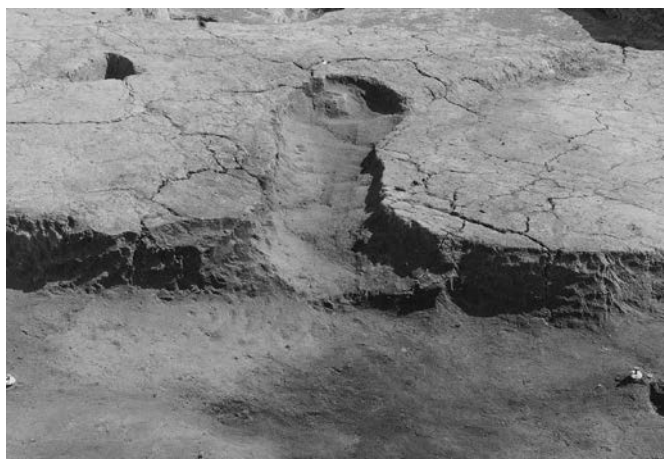
3 2区42号竪穴住居カマド全景 南西→



4 2区42号竪穴住居カマド土層断面B—B' 南→



5 2区42号竪穴住居カマド土層断面C—C' 西→



6 2区42号竪穴住居カマド掘方全景 南西→



7 2区43号竪穴住居全景 南西→



8 2区43号竪穴住居遺物出土状態 南西→



1 2区43号竖穴住居掘方全景 南西→



2 2区43号竖穴住居床下土坑1土層断面 南→



3 2区43号竖穴住居床下土坑2土層断面 南→



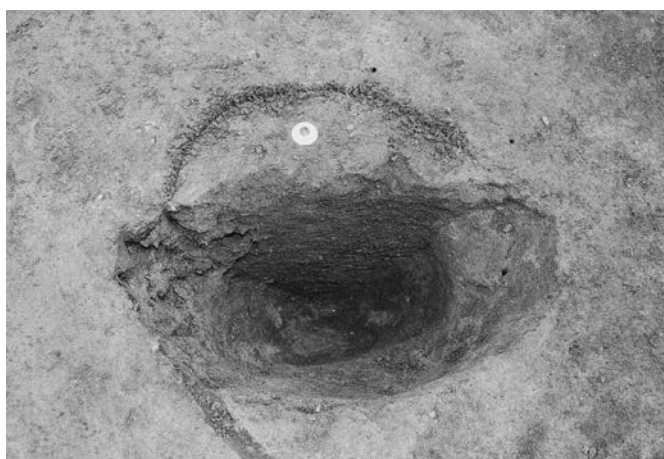
4 2区43号竖穴住居床下土坑4土層断面 南→



5 2区43号竖穴住居床下土坑5土層断面 東→



6 2区43号竖穴住居柱穴P 1土層断面F—F' 南→



7 2区43号竖穴住居柱穴P 2土層断面 南→



8 2区43号竖穴住居柱穴P 3土層断面G—G' 南西→



1 2区43号竪穴住居柱穴P 4土層断面 南→



2 2区43号竪穴住居貯蔵穴1土層断面H-H' 北東→



3 2区43号竪穴住居貯蔵穴2土層断面I-I' 南→



4 2区43号竪穴住居カマド1全景 南西→



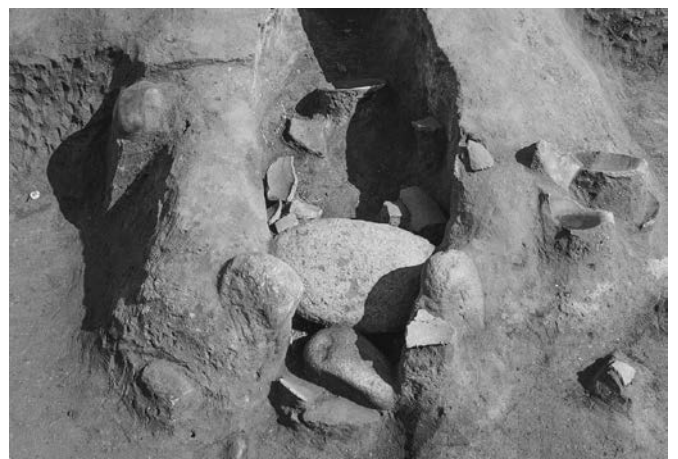
5 2区43号竪穴住居カマド1土層断面J-J' 南→



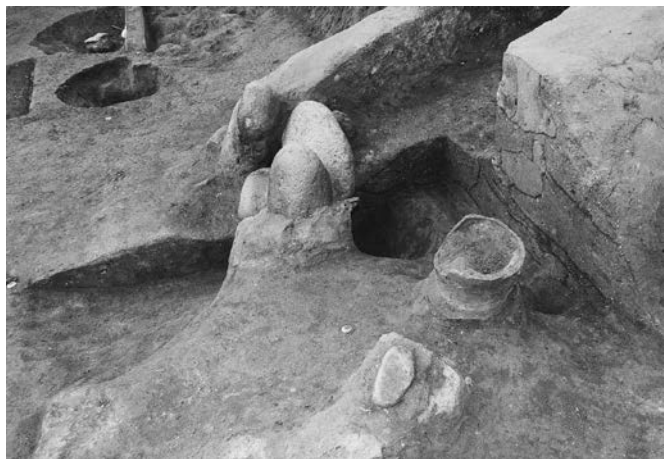
6 2区43号竪穴住居カマド1掘方全景 南西→



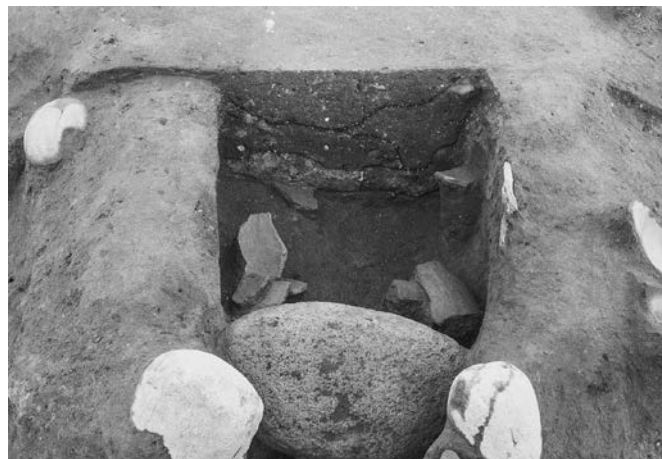
7 2区43号竪穴住居カマド2全景 南西→



8 2区43号竪穴住居カマド2遺物出土状態 南西→



1 2区43号竪穴住居カマド2土層断面K-K' 南→



2 2区43号竪穴住居カマド2土層断面M-M' 南西→



3 2区43号竪穴住居カマド2掘方土層断面L-L' 南西→



4 2区43号竪穴住居カマド2掘方全景 南→



5 2区46号竪穴住居全景 北→



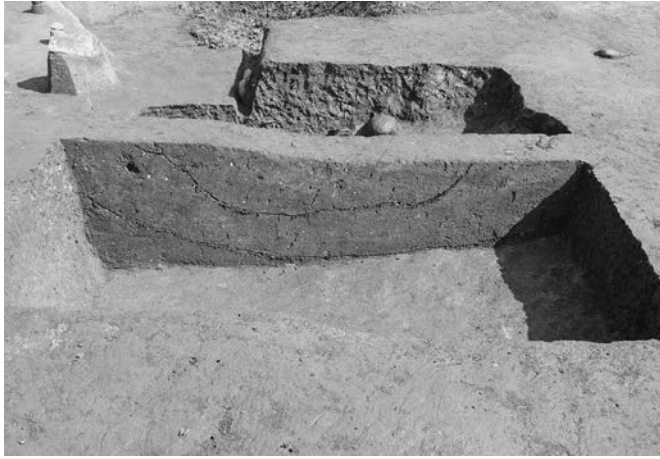
6 2区46号竪穴住居遺物出土状態 南西→



7 2区47号竪穴住居全景 北→



8 2区47号竪穴住居遺物出土状態 北→



1 2区47号竪穴住居土層断面A—A' 南西→



2 2区47号竪穴住居掘方全景 北→



3 2区47号竪穴住居カマド全景 北西→



4 2区47号竪穴住居カマド遺物出土状態 北西→



5 2区47号竪穴住居カマド土層断面B—B' 南→



6 2区47号竪穴住居カマド土層断面C—C' 北西→



7 2区48号竪穴住居全景 南西→



8 2区48号竪穴住居土層断面A—A' 南西→





1 3区5号竪穴住居全景(22年度調査分) 南西→



2 3区5号竪穴住居遺物出土状態(22年度調査分) 南西→



3 3区5号竪穴住居土層断面A—A' (22年度調査分) 北西→



4 3区5号竪穴住居土層断面B—B' (22年度調査分) 北東→



5 3区5号竪穴住居掘方全景(22年度調査分) 北西→



6 3区5号竪穴住居貯蔵穴全景(22年度調査分) 北東→



7 3区5号竪穴住居カマド全景(22年度調査分) 南西→



8 3区5号竪穴住居カマド土層断面E—E' (22年度調査分) 南→



1 3区5号竪穴住居カマド土層断面F-F' (22年度調査分) 南→



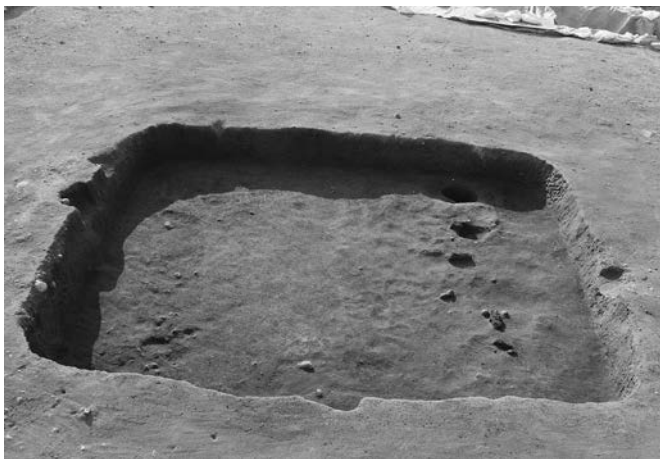
2 3区5号竪穴住居カマド掘方全景(22年度調査分) 南西→



3 3区5号竪穴住居全景(25年度調査分) 北西→



4 3区5号竪穴住居掘方全景(25年度調査分) 北→



5 1区1号竪穴住居全景 北→



6 1区1号竪穴住居遺物出土状態 北→



7 1区1号竪穴住居土層断面A-A' 北→



8 1区1号竪穴住居土層断面A-A' 北→



1 1区1号竖穴住居土層断面B—B' 東→



2 1区1号竖穴住居掘方全景 北→



3 1区1号竖穴住居柱穴P1土層断面C—C' 西→



4 1区1号竖穴住居柱穴P2土層断面D—D' 西→



5 1区2号竖穴住居全景 南西→



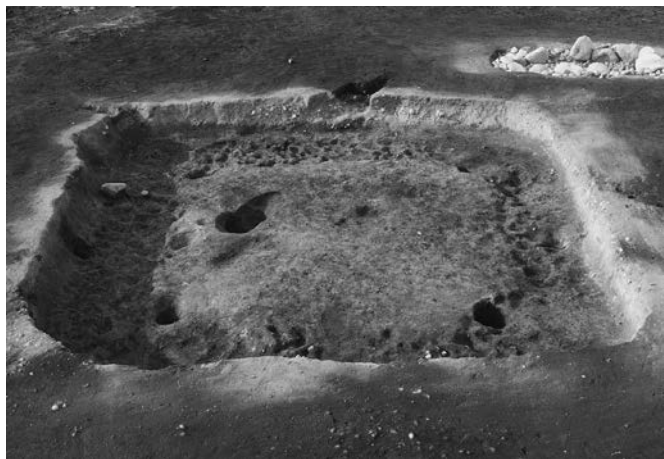
6 1区2号竖穴住居全景 北西→



7 1区2号竖穴住居土層断面A—A' 東→



8 1区2号竖穴住居土層断面A—A' 東→



1 1区2号竖穴住居掘方全景 東→



2 1区3号竖穴住居全景 東→



3 1区3号竖穴住居土層断面A—A' 北→



4 1区3号竖穴住居柱穴P1全景 東→



5 1区3号竖穴住居柱穴P2全景 南→



6 1区3号竖穴住居炉全景 東→



7 1区4号竖穴住居全景 東→



8 1区4号竖穴住居遺物出土状態 南東→



1 1区4号竖穴住居遺物出土状態 北東→



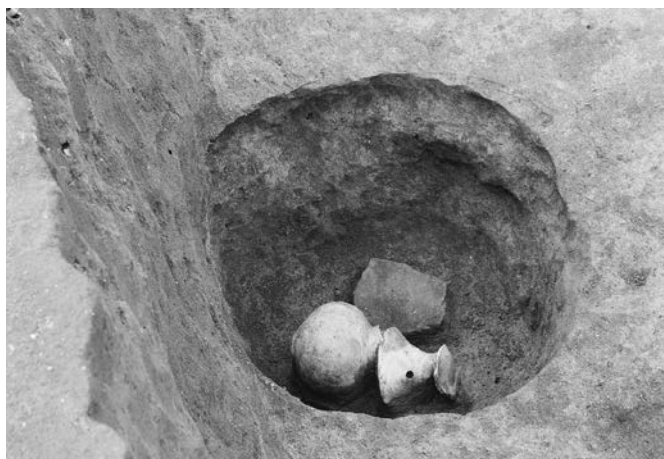
2 1区4号竖穴住居遺物出土状態 北東→



3 1区4号竖穴住居土層断面A—A' 東→



4 1区4号竖穴住居土層断面B—B' 西→



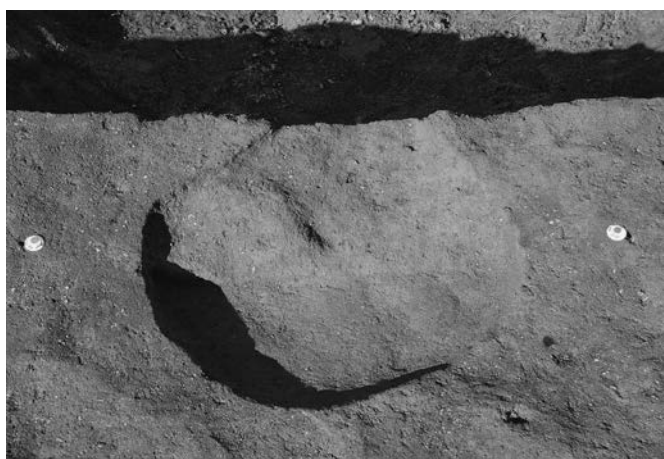
5 1区4号竖穴住居貯藏穴1全景 東→



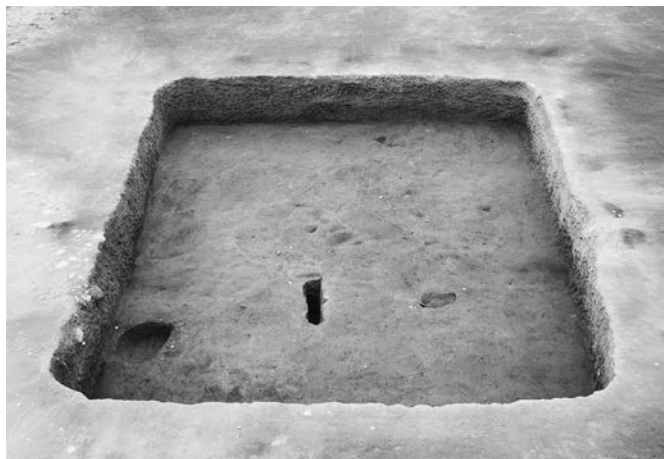
6 1区4号竖穴住居貯藏穴1土層断面F—F' 東→



7 1区4号竖穴住居貯藏穴2土層断面G—G' 北東→



8 1区4号竖穴住居炉跡全景 東→



1 1区5号竖穴住居全景 北東→



2 1区5号竖穴住居遺物出土狀態 北東→



3 1区5号竖穴住居遺物出土狀態 北東→



4 1区5号竖穴住居土層断面A—A' 南→



5 1区5号竖穴住居土層断面B—B' 東→



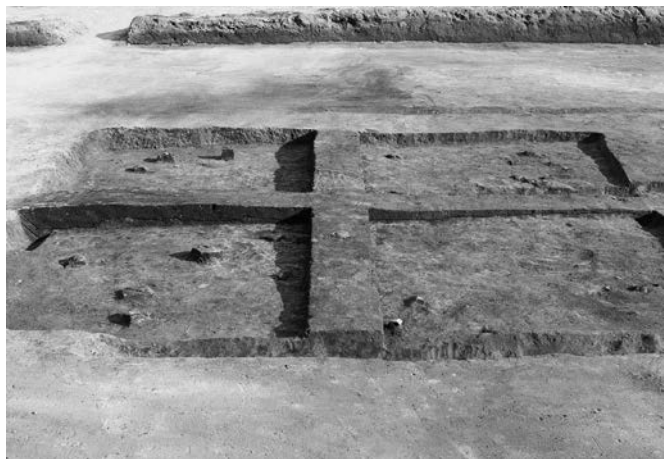
6 1区5号竖穴住居炉2土層断面E—E' 北→



7 1区6号竖穴住居全景 南→



8 1区6号竖穴住居遺物出土狀態 東→



1 1区6号竖穴住居土層断面A—A' 南→



2 1区6号竖穴住居土層断面B—B' 東→



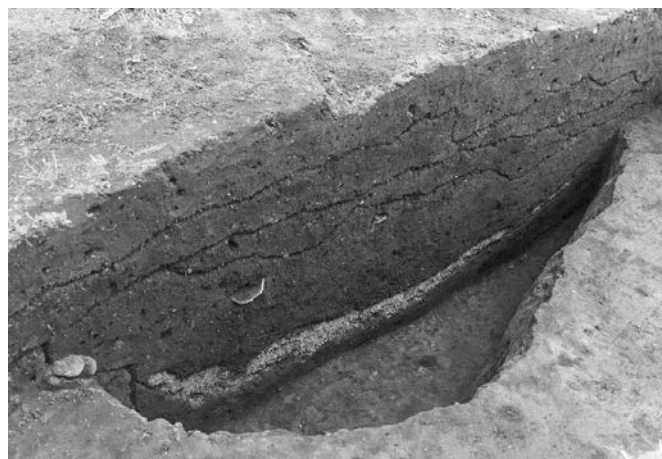
3 1区6号竖穴住居貯藏穴土層断面 東→



4 1区6号竖穴住居炉跡甃掘前 東→



5 1区7号竖穴住居全景 西→



6 1区7号竖穴住居土層断面A—A' 北→



7 1区8号竖穴住居全景(21年度調査分) 西→



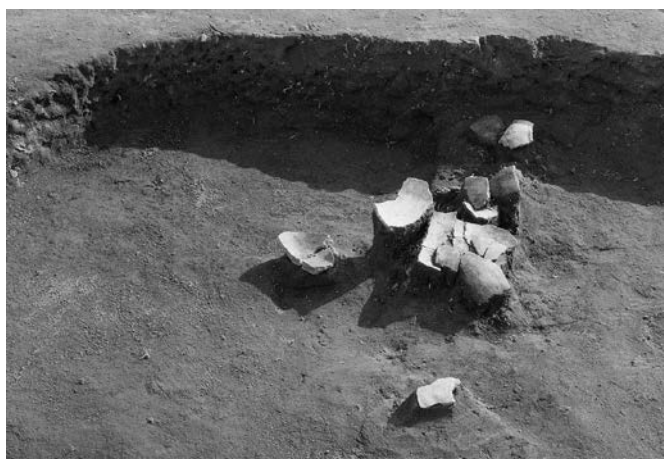
8 1区8号竖穴住居全景(25年度調査分) 西→



1 1区11号竖穴住居全景 東→



2 1区11号竖穴住居遺物出土狀態 東→



3 1区11号竖穴住居遺物出土狀態 北→



4 1区11号竖穴住居土層断面A—A' 東→



5 1区11号竖穴住居炉全景 南→



6 1区11号竖穴住居炉土層断面D—D' 南→



7 1区13号竖穴住居全景 東→



8 1区13号竖穴住居遺物出土狀態 南東→





1 1区13号竖穴住居遺物出土状態 南西→



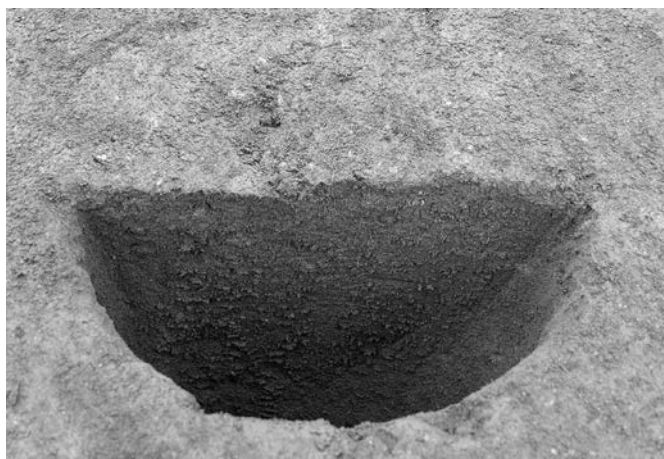
2 1区13号竖穴住居土層断面A—A' 南→



3 1区13号竖穴住居土層断面B—B' 東→



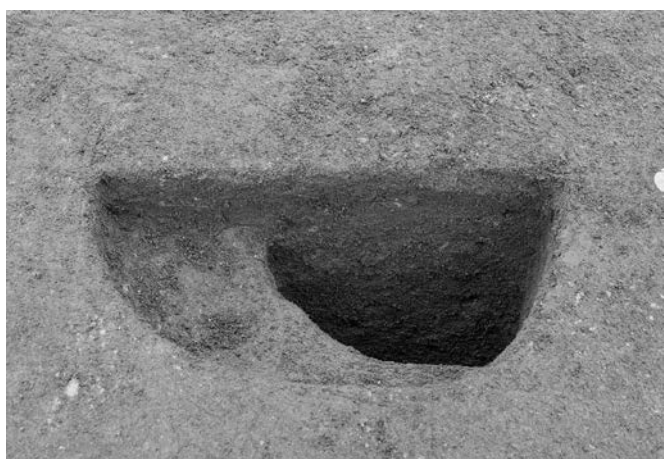
4 1区13号竖穴住居柱穴P 1土層断面 南西→



5 1区13号竖穴住居柱穴P 2土層断面 南西→



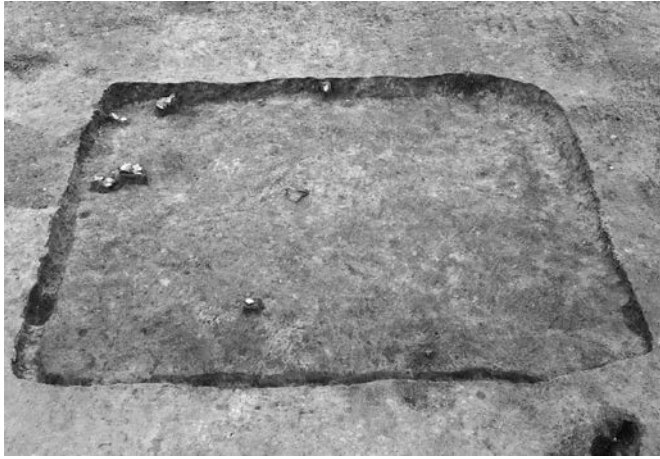
6 1区13号竖穴住居柱穴P 3土層断面 西→



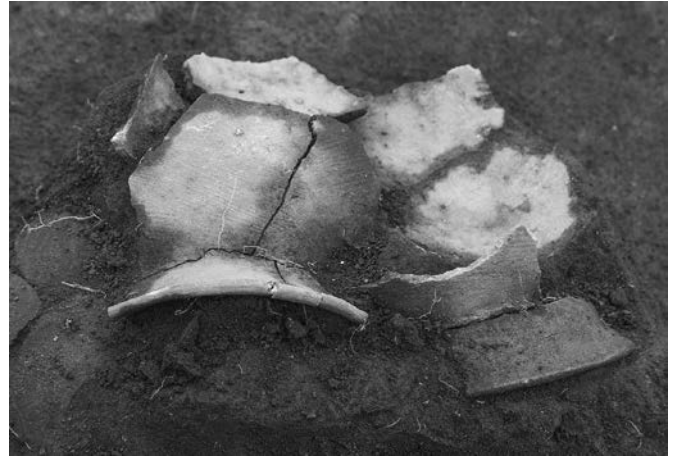
7 1区13号竖穴住居柱穴P 4土層断面 西→



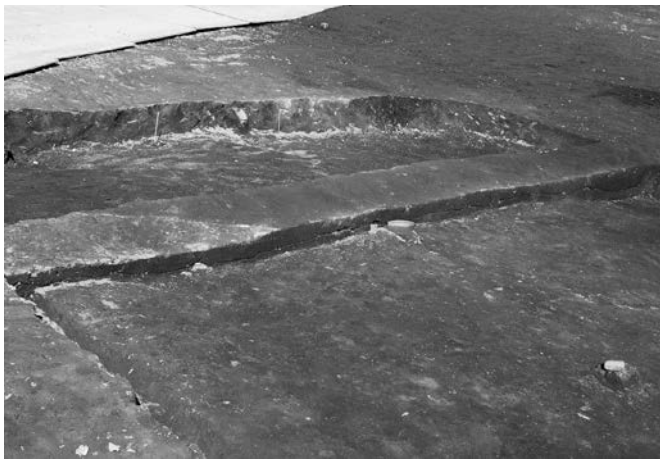
8 1区13号竖穴住居炉跡掘方全景 北東→



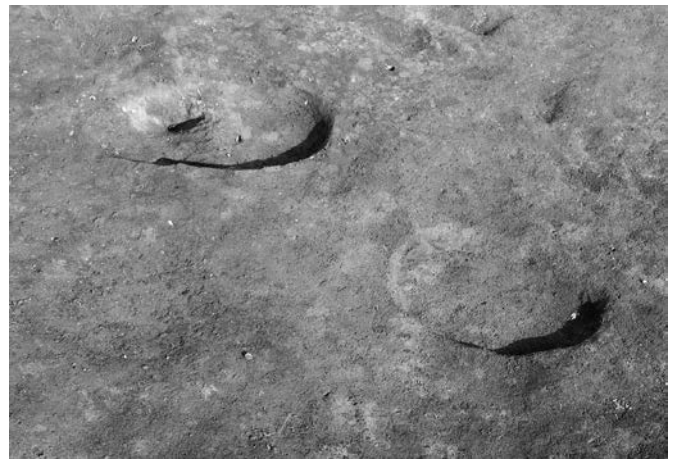
1 1区14号竖穴住居全景 南→



2 1区14号竖穴住居遺物出土状態 南→



3 1区14号竖穴住居土層断面A—A' 南西→



4 1区14号竖穴住居炉掘方全景 西→



5 1区15号竖穴住居全景(21年度調査分) 北→



6 1区15号竖穴住居全景(25年度調査分) 西→



7 1区15号竖穴住居遺物出土状態(21年度調査分) 西→



8 1区15号竖穴住居遺物出土状態(21年度調査分) 西→



1 1区15号竖穴住居土層断面B—B' (21年度調査分) 西→



2 1区15号竖穴住居土層断面A—A' (25年度調査分) 北→



3 1区15号竖穴住居柱穴P 2土層断面D—D' (21年度調査分) 南→



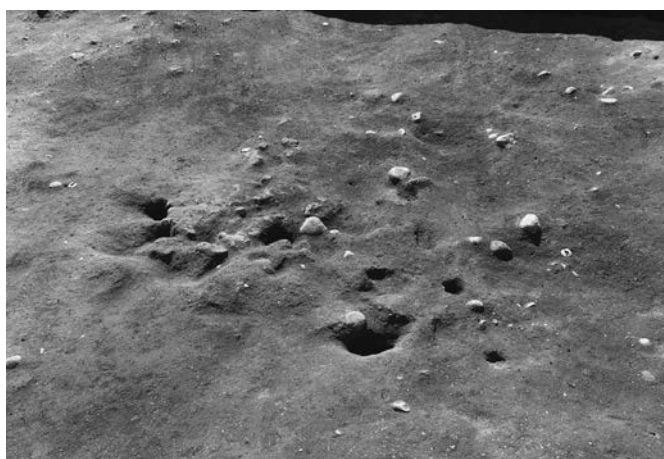
4 1区15号竖穴住居柱穴P 3土層断面E—E' (21年度調査分) 南→



5 1区15号竖穴住居柱穴P 1土層断面C—C' (25年度調査分) 南→



6 1区15号竖穴住居貯蔵穴土層断面F—F' (21年度調査分) 南→



7 1区15号竖穴住居炉全景(25年度調査分) 東→



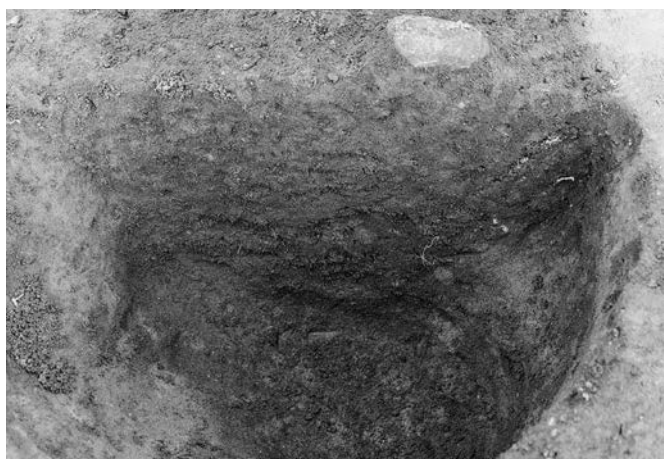
8 1区15号竖穴住居炉土層断面G—G' (25年度調査分) 東→



1 1区25号竖穴住居全景 西→



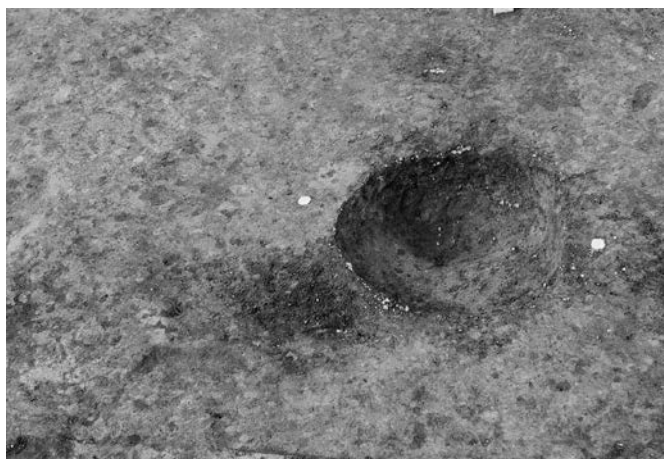
2 1区25号竖穴住居土层断面A—A' 南→



3 1区25号竖穴住居柱穴P 1土层断面 南→



4 1区25号竖穴住居柱穴P 2土层断面 南→



5 1区25号竖穴住居炉2全景 南→



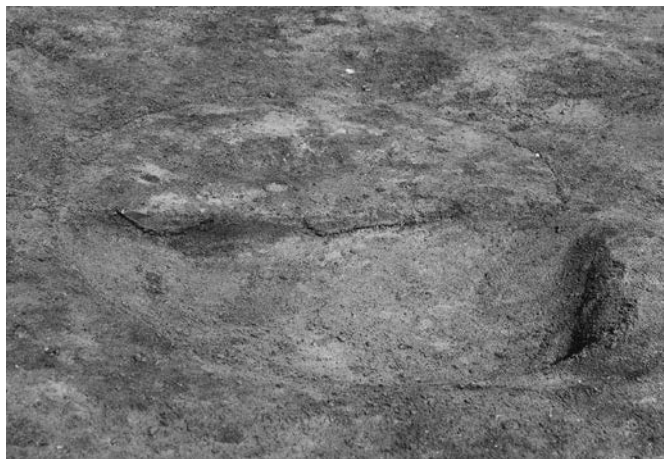
6 1区26号竖穴住居全景 西→



7 1区26号竖穴住居遺物出土状態 西→



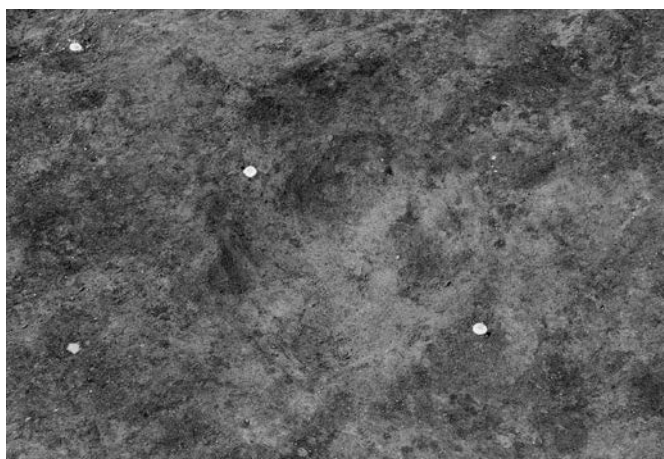
8 1区26号竖穴住居遺物出土状態 西→



1 1区26号竖穴住居炉1土層断面D—D' 西→



2 1区26号竖穴住居炉2土層断面E—E' 西→



3 1区26号竖穴住居炉1掘方全景 東→



4 1区29号竖穴住居全景 西→



5 1区29号竖穴住居土層断面A—A' 東→



6 1区29号竖穴住居土層断面B—B' 南→



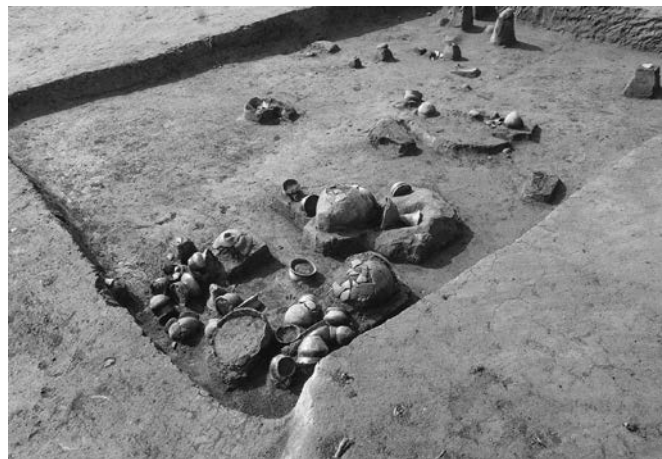
7 1区29号竖穴住居炉全景 北→



8 1区29号竖穴住居炉土層断面C—C' 東→



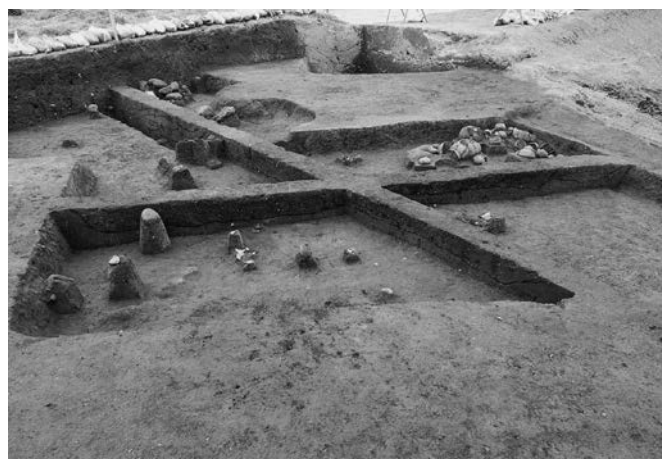
1 2区8号竖穴住居全景 北西→



2 2区8号竖穴住居遺物出土狀態 南東→



3 2区8号竖穴住居遺物出土狀態 東→



4 2区8号竖穴住居土層断面A—A' 西→



5 2区8号竖穴住居土層断面B—B' 北西→



6 2区8号竖穴住居掘方全景 南→



7 2区9号竖穴住居遺物出土狀態 南→



8 2区9号竖穴住居遺物出土狀態 南西→



1 2区9号竖穴住居土層断面A—A' 西→



2 2区9号竖穴住居土層断面B—B' 北→



3 2区9号竖穴住居重複部土層断面 北西→



4 2区9号竖穴住居掘方全景 南→



5 2区23号竖穴住居全景 西→



6 2区23号竖穴住居遺物出土状態 北→



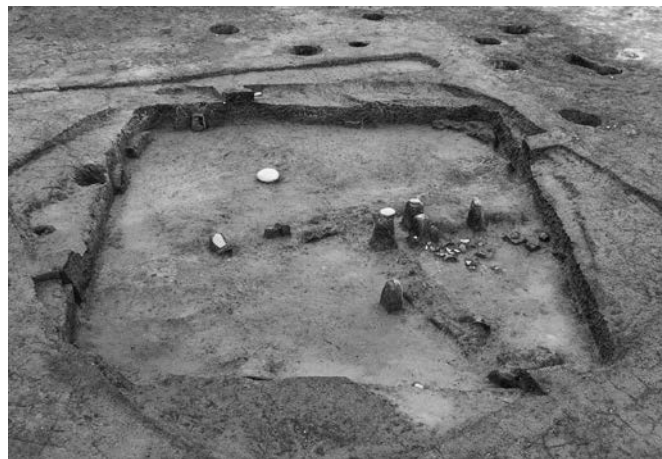
7 2区23号竖穴住居遺物出土状態 北→



8 2区23号竖穴住居掘方全景 西→



1 2区28号竖穴住居全景 南西→



2 2区28号竖穴住居遺物出土狀態 南西→



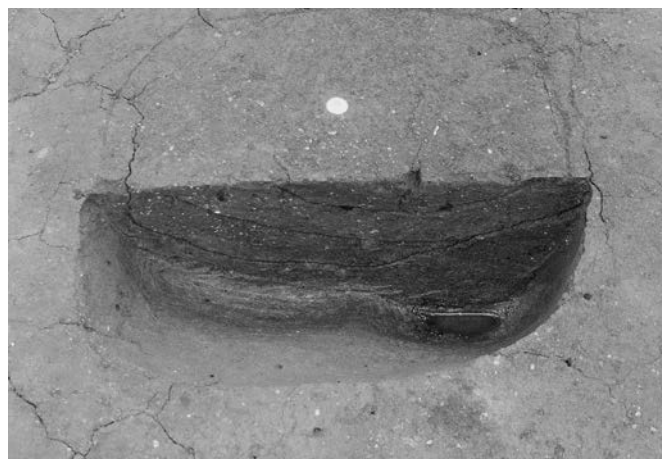
3 2区28号竖穴住居遺物出土狀態 南西→



4 2区28号竖穴住居土層断面A—A' 東→



5 2区28号竖穴住居土層断面B—B' 南→



6 2区28号竖穴住居貯藏穴1土層断面D—D' 南→

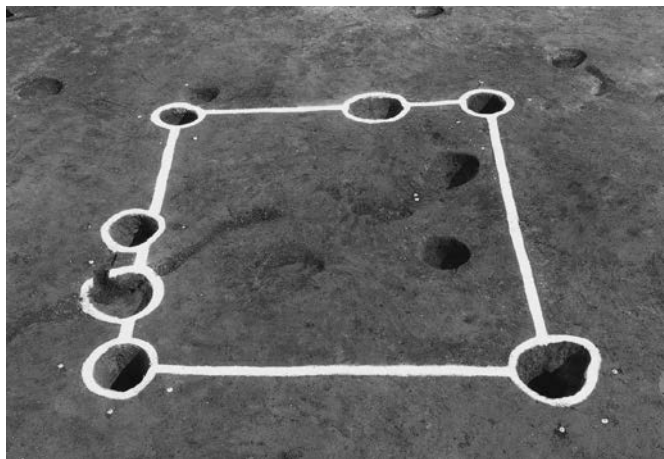


7 2区28号竖穴住居貯藏穴2土層断面E—E' 南→

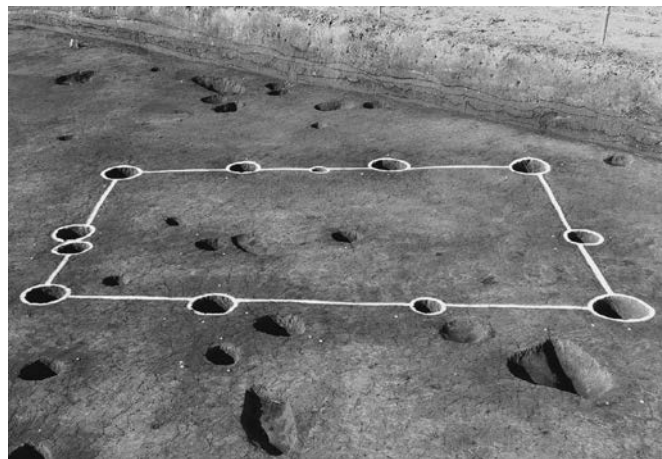


8 2区28号竖穴住居掘方全景 北西→

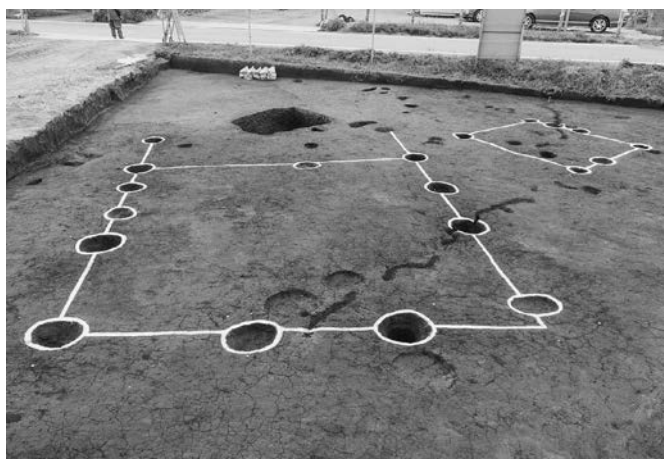




1 2区1号掘立柱建物全景 南西→



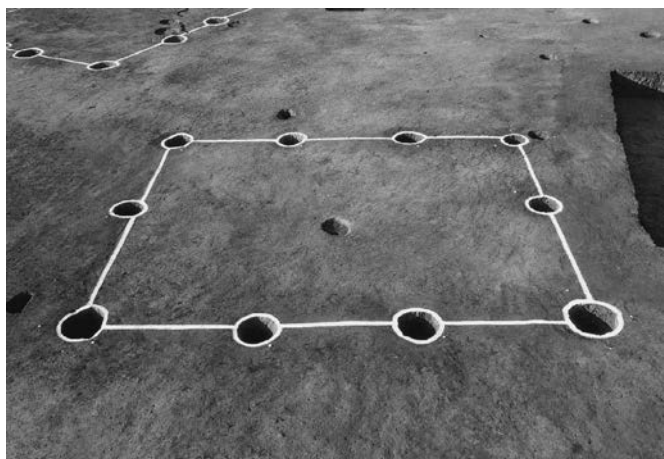
2 2区2号掘立柱建物全景 南→



3 2区3号掘立柱建物全景 東→



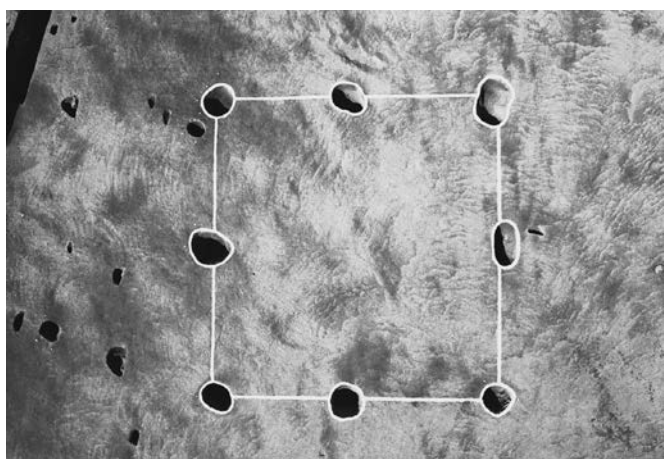
4 2区4号掘立柱建物全景 西→



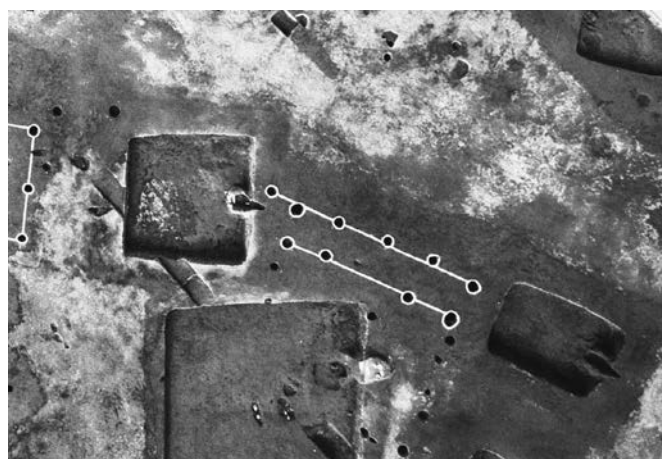
5 2区5号掘立柱建物全景 南西→



6 2区6号掘立柱建物全景 南→



7 3区1号掘立柱建物全景 垂直



8 2区2・3号掘立柱建物全景 垂直



1 1区1号墳検出状態 北東→



2 1区1号墳検出状態 南東→



3 1区1号墳検出状態 北西→



4 1区1号墳中央部拡大 西→



5 1区1号墳礫床除去 北東→



6 1区1号墳掘方検出状態 北東→



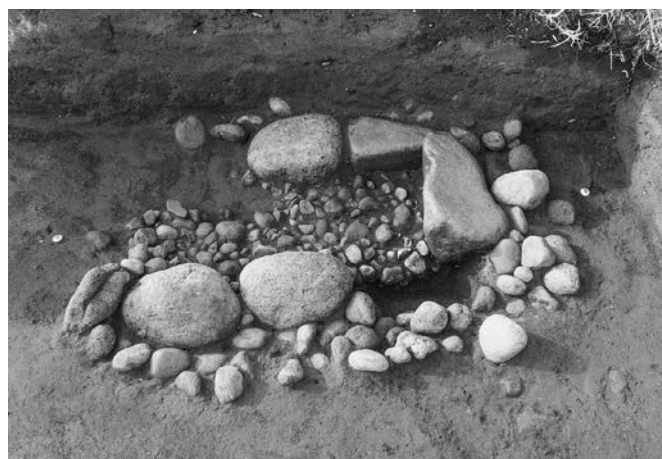
7 1区1号墳土層断面 北東→



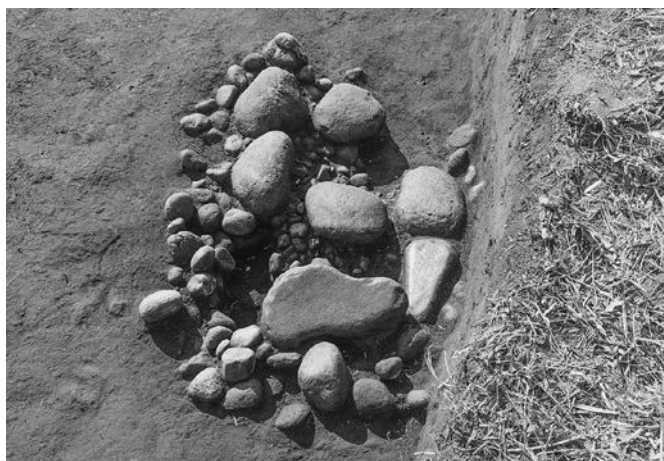
1 1区2号墳検出状態 南→



2 1区2号墳検出状態 東→



3 1区2号墳検出状態 東→



4 1区2号墳検出状態 北→



5 1区2号墳礫床除去 北→



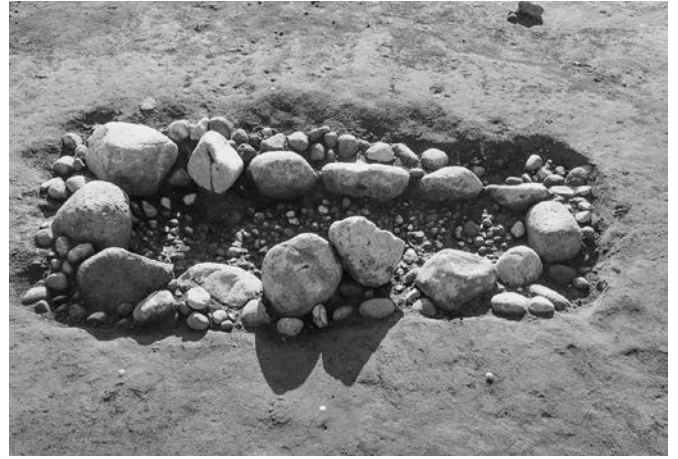
6 1区2号墳礫床除去 東→



7 1区2号墳掘方検出状態 東→



1 1区3号墳検出状態 北東→



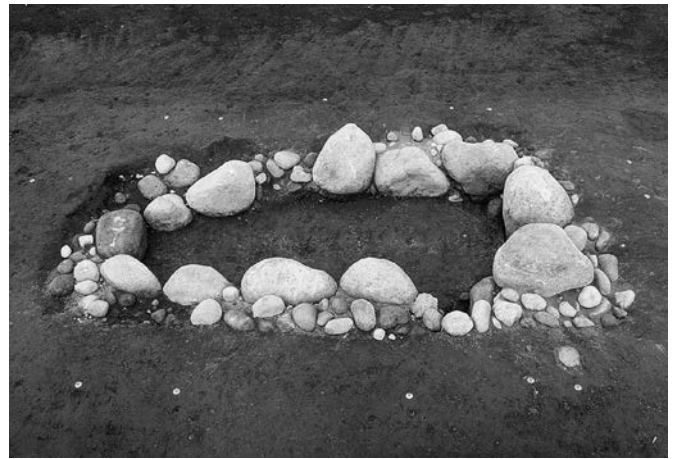
2 1区3号墳検出状態 北西→



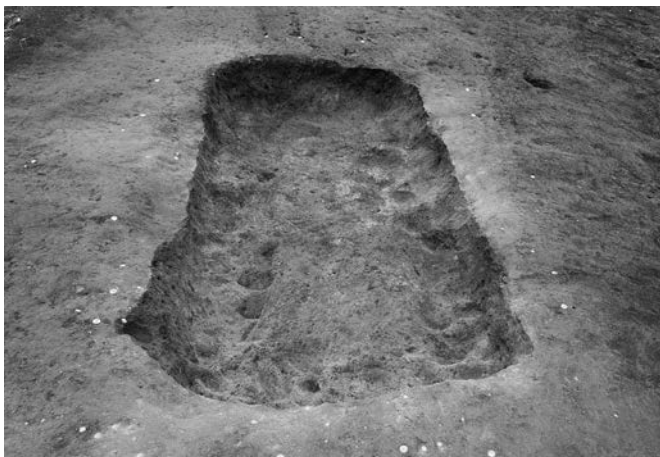
3 1区3号墳検出状態 南西→



4 1区3号墳遺物出土状態 西→



5 1区3号墳礫床除去 東→



6 1区3号墳掘方検出状態 北東→



7 1区3号墳土層断面C-C' 北東→



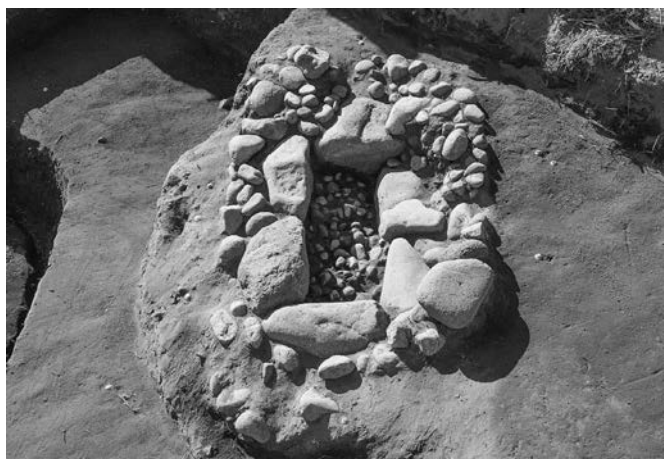
1 1区4号墳検出状態 北東→



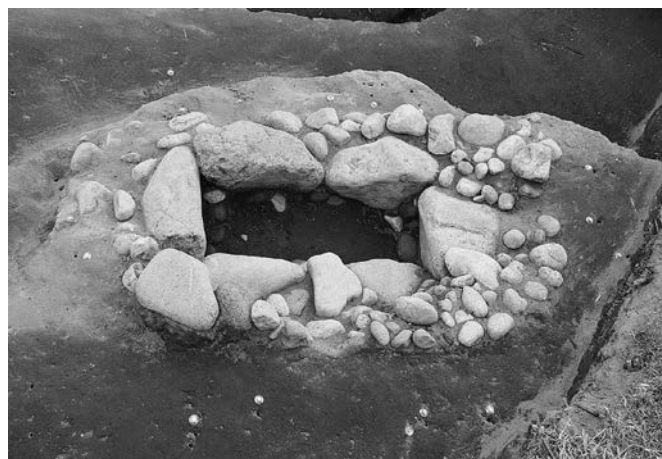
2 1区4号墳検出状態 北西→



3 1区4号墳中央部拡大 北西→



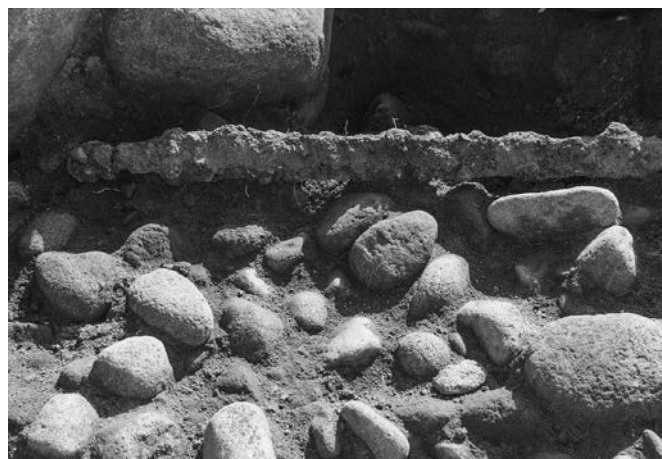
4 1区4号墳2面目全景 北東→



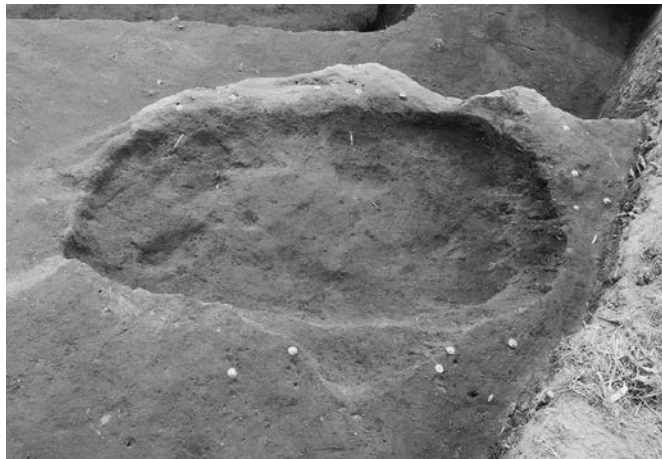
5 1区4号墳礫床除去 北西→



6 1区4号墳裏込め 北東→



7 1区4号墳遺物出土状態 北西→



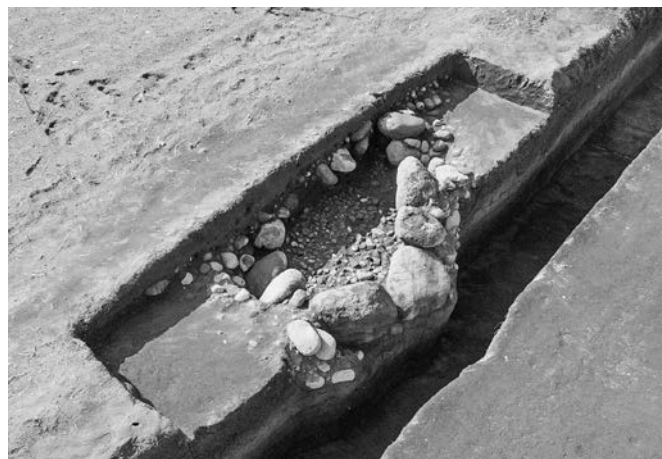
1 1区4号墳検出状態 北西→



2 1区4号墳土層断面C-C' 北東→



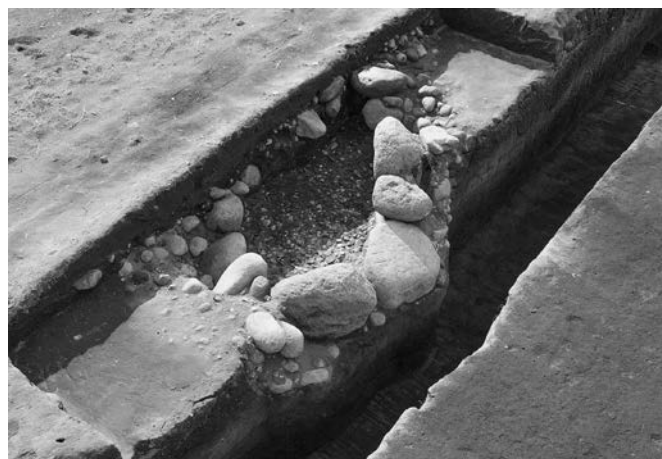
3 1区5号墳検出状態 北東→



4 1区5号墳床面検出状態 北東→



5 1区5号墳石室床面状態 北東→



6 1区5号墳石室検出状態 北東→



7 1区5号墳石室床面状態 北→



1 1区5号墳西側側壁狀態 東→



2 1区5号墳遺物出土狀態 東→



3 1区5号墳鋪石檢出狀態 北東→



4 1区5号墳土層断面 北→



5 1区5号墳掘方檢出狀態 北東→



6 1区5号墳遠景 北東→



7 1区5号墳周掘痕跡 北→



8 1区6号墳檢出狀態 南→



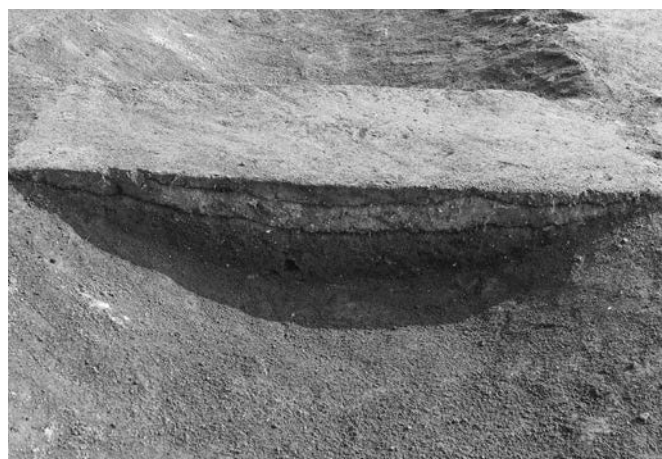
1 1区6号填土层断面A—A'西侧周掘 南→



2 1区6号填土层断面A—A'东侧周掘 南→



3 1区6号填土层断面B—B'北侧周掘 东→



4 1区6号填土层断面B—B'南侧周掘 东→



5 1区6号填遗物出土状态 北→



6 1区6号填遗物出土状态 南→



7 1区6号填遗物出土状态 南→



8 2区1号粘土探掘坑全景 南东→





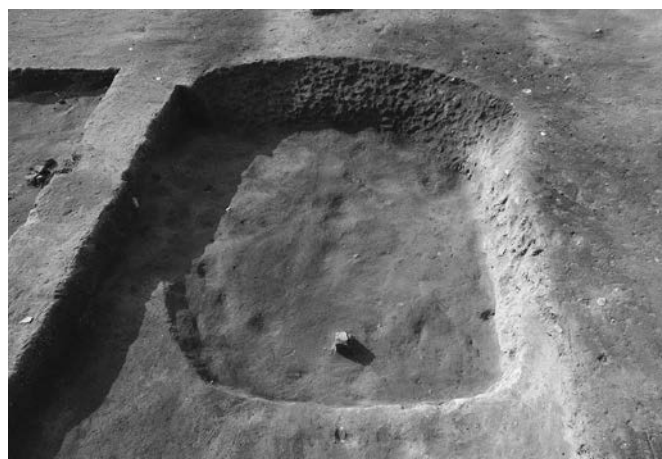
1 2区1号粘土採掘坑全景 北西→



2 2区1号粘土採掘坑土層断面A—A' 北東→



3 2区1号粘土採掘坑土層断面B—B' 西→



4 1区1号土坑全景 東→



5 1区1号土坑全景 南→



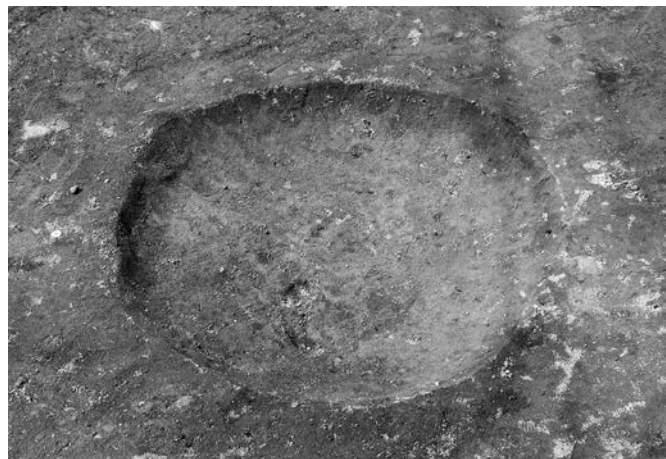
6 1区1号土坑土層断面A—A' 西→



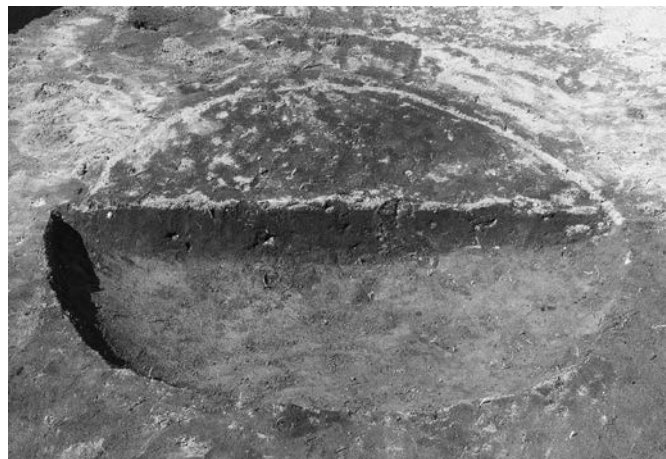
7 1区2号土坑全景 北→



8 1区2号土坑土層断面A—A' 南→



1 1区3号土坑全景 北→



2 1区3号土坑土层断面A—A' 南→



3 2区1号土坑全景 东→



4 2区1号土坑土层断面A—A' 南→



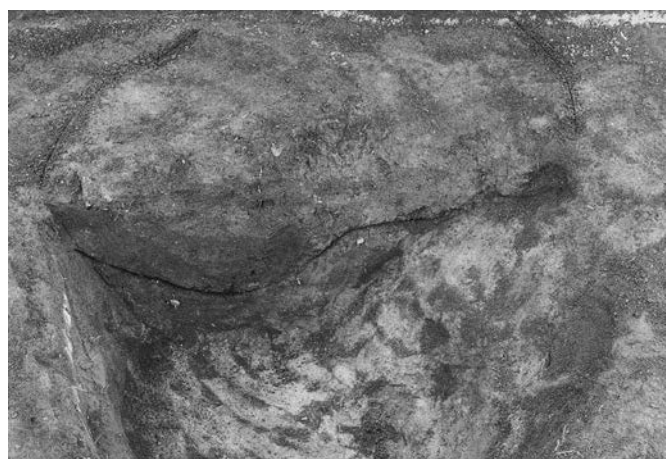
5 2区2号土坑全景 南→



6 2区2号土坑土层断面A—A' 南→



7 3区1号土坑土层断面A—A' 南→



8 3区2号土坑土层断面A—A' 南西→



1 3区3号土坑土层断面A—A' 南東→



2 3区4号土坑土层断面A—A' 西→



3 3区5号土坑土层断面A—A' 南西→



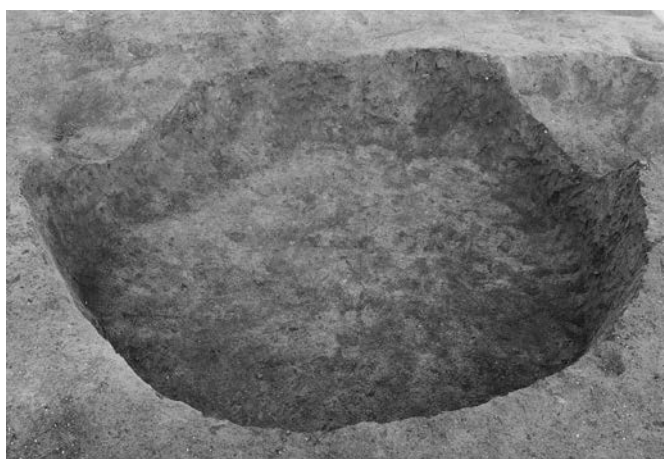
4 3区8号土坑土层断面A—A' 西→



5 3区9号土坑土层断面A—A' 東→



6 3区10号土坑土层断面A—A' 南→



7 3区11号土坑全景 南西→



8 3区11号土坑土层断面A—A' 南西→



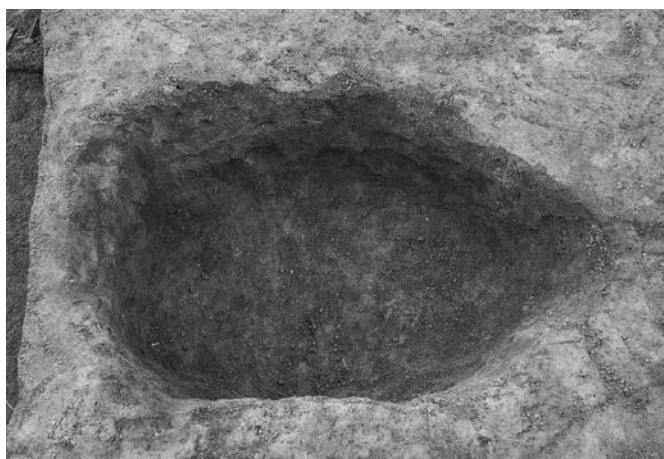
1 3区12号土坑全景 南→



2 3区12号土坑土层断面A—A' 南→



3 3区15号土坑全景 南→



4 3区16号土坑全景 南→



5 4区1号土坑全景 南→



6 4区1号土坑土层断面A—A' 西→



7 4区2号土坑全景 北→



8 4区2号土坑土层断面A—A' 西→



1 2区24号ピット土層断面 南西→



2 2区23号ピット土層断面 南→



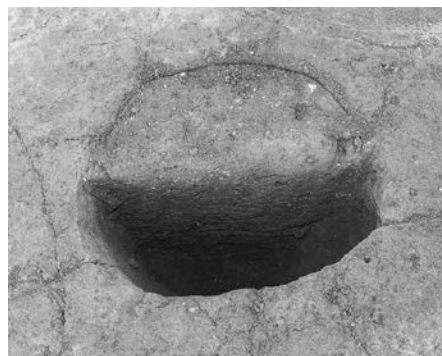
3 2区22号ピット土層断面 南→



4 2区30号ピット土層断面 南西→



5 2区43号ピット土層断面 西→



6 2区35号ピット土層断面 南西→



7 3区1号ピット土層断面 西→



8 3区4号ピット土層断面 南→



9 3区14号ピット土層断面 西→



10 3区13号ピット土層断面 西→



11 3区12号ピット土層断面 南→



12 3区8号ピット土層断面 西→



13 3区93号ピット土層断面 西→



14 3区7号ピット土層断面 南西→



15 3区5号ピット土層断面 西→



1 3区92号ピット土層断面 西→



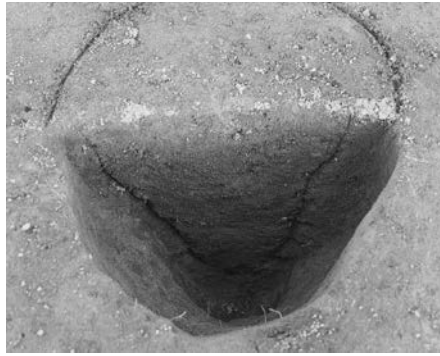
2 3区11号ピット土層断面 南西→



3 3区10号ピット土層断面 南→



4 3区9号ピット土層断面 南→



5 3区17号ピット土層断面 南→



6 3区16号ピット土層断面 南西→



7 3区15号ピット土層断面 南西→



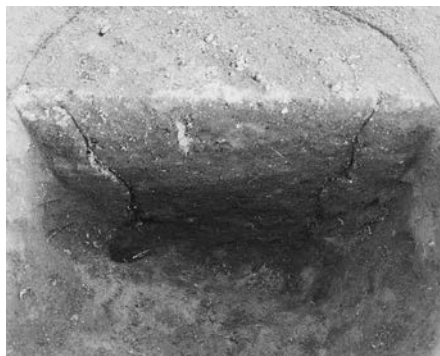
8 3区18号ピット土層断面 南→



9 3区19号ピット土層断面 南→



10 3区21号ピット土層断面 南西→



11 3区20号ピット土層断面 南西→



12 3区22号ピット土層断面 南→



13 3区23号ピット土層断面 東→



14 3区24号ピット土層断面 南→



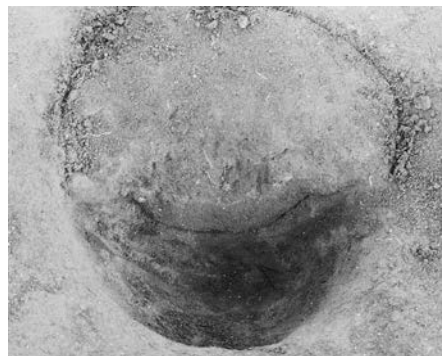
15 3区25号ピット土層断面 南→



1 3区28号ピット土層断面 南西→



2 3区26号ピット土層断面 南東→



3 3区32号ピット土層断面 南西→



4 3区33号ピット土層断面 南西→



5 3区36号ピット土層断面 南→



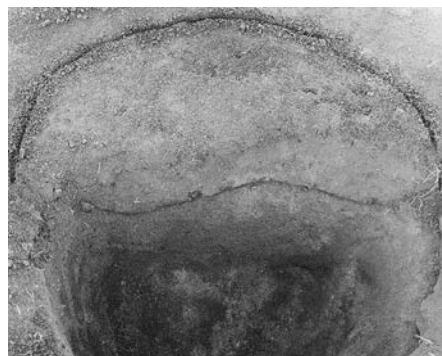
6 3区37号ピット土層断面 西→



7 3区38号ピット土層断面 南西→



8 3区39号ピット土層断面 南→



9 3区40号ピット土層断面 南西→



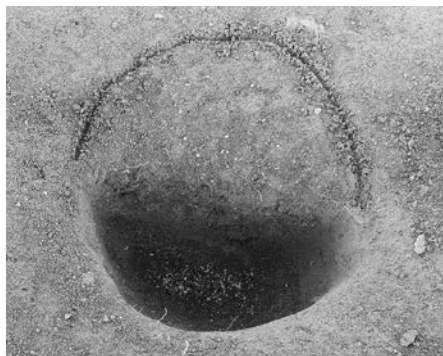
10 3区41号ピット土層断面 南西→



11 3区42号ピット土層断面 西→



12 3区43号ピット土層断面 西→



13 3区44号ピット土層断面 南西→



14 3区45号ピット土層断面 南西→



15 3区46号ピット土層断面 西→



1 3区47号ピット土層断面 西→



2 3区48号ピット土層断面 南→



3 3区49号ピット土層断面 西→



4 3区50号ピット土層断面 西→



5 3区53号ピット土層断面 西→



6 3区52号ピット土層断面 西→



7 3区54号ピット土層断面 南西→



8 3区56号ピット土層断面 北西→



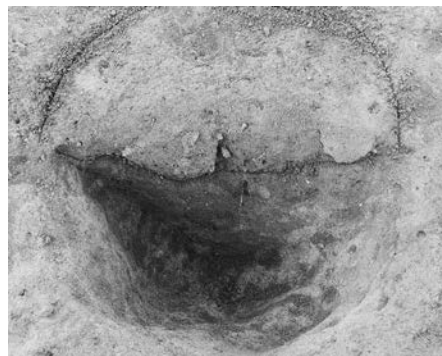
9 3区55号ピット土層断面 南西→



10 3区61号ピット土層断面 南西→



11 3区95号ピット土層断面 南西→



12 3区59号ピット土層断面 南西→



13 3区57・58号ピット土層断面 南西→



14 3区62号ピット土層断面 西→



15 3区63号ピット土層断面 南→





1 3区65号ピット土層断面 南→



2 3区67号ピット土層断面 北西→



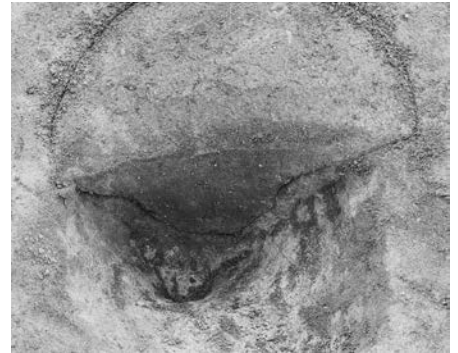
3 3区68号ピット土層断面 南→



4 3区69号ピット土層断面 北西→



5 3区70号ピット土層断面 南西→



6 3区71号ピット土層断面 南→



7 3区72号ピット土層断面 西→



8 3区73号ピット土層断面 南→



9 3区74号ピット土層断面 南→



10 3区75号ピット土層断面 北西→



11 3区76号ピット土層断面 南→



12 3区77号ピット土層断面 南→



13 3区79号ピット土層断面 南→



14 3区78号ピット土層断面 西→



15 3区80号ピット土層断面 西→



1 3区81号ピット土層断面 南西→



2 3区83号ピット土層断面 南→



3 3区84・85号ピット土層断面 西→



4 3区86号ピット土層断面 南東→



5 3区87号ピット土層断面 南東→



6 3区88号ピット土層断面 南西→



7 3区89号ピット土層断面 南→



8 3区90号ピット土層断面 南→



9 3区91号ピット土層断面 北→



10 3区94号ピット土層断面 南東→



11 3区97号ピット土層断面 西→



12 3区98号ピット土層断面 南→



13 3区99号ピット土層断面 西→



14 3区100号ピット土層断面 西→



15 3区101号ピット土層断面 南→



1 3区102号ピット土層断面 南→



2 3区103号ピット土層断面 南→



3 3区104号ピット土層断面 南→



4 3区105号ピット土層断面 南→



5 3区108号ピット土層断面 南→



6 3区110号ピット土層断面 南→



7 3区111号ピット土層断面 南西→



8 3区113号ピット土層断面 南→



9 3区114号ピット土層断面 南→



10 3区115号ピット土層断面 南→



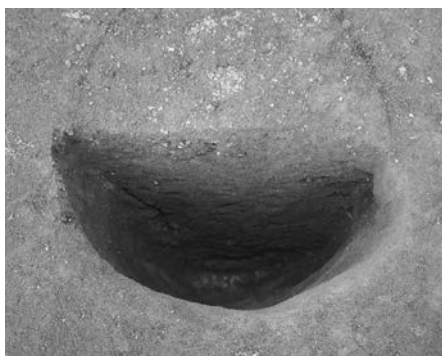
11 3区116号ピット土層断面 南→



12 3区109号ピット土層断面 南→



13 3区117号ピット土層断面 南→



14 3区118号ピット土層断面 南→



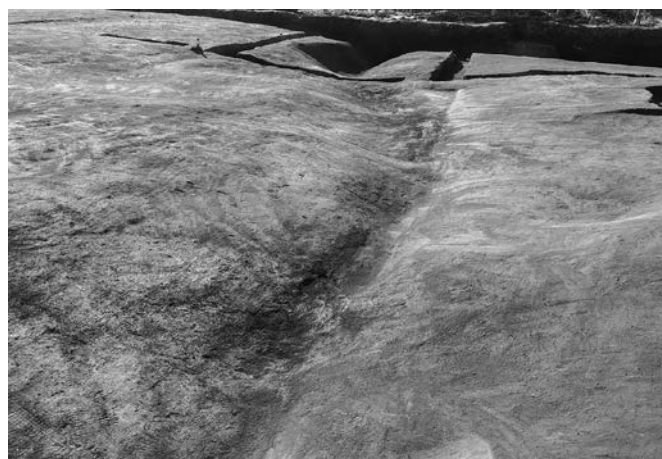
15 3区119号ピット土層断面 南西→



1 1区南西端埋没谷全景 北西→



2 1区南西端埋没谷部分 北西→



3 1区南西端埋没谷部分 北西→



4 2区南西端埋没谷全景 垂直



5 2区南西端埋没谷土層断面A—A' 北→



6 2区南西端埋没谷土層断面 南→



1 2区2面水田全景 西→



2 2区2面水田全景 垂直



1 2区2面水田7・10号溝部分 北東→



2 2区2面水田7・10号溝部分 南東→



3 2区2面水田7・8・9・10号溝部分 北→



4 2区2面水田7・9・10号溝部分 南→



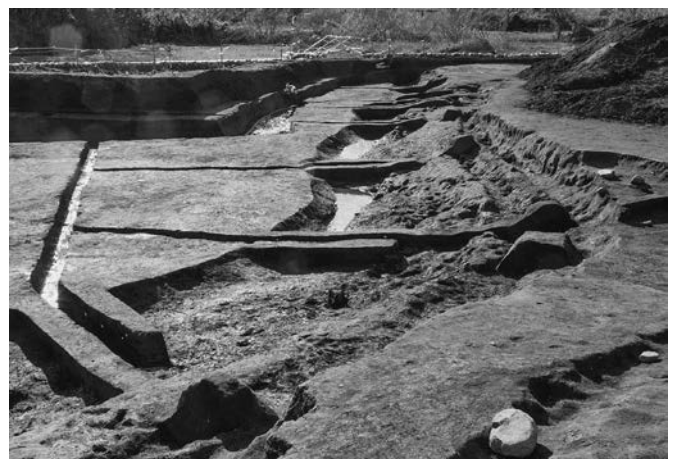
5 2区2面水田7・8・9・10号溝部分 北→



6 2区2面水田部分 南→



7 2区2面水田7・10号溝部分 南→



8 2区2面水田部分 北西→



1 2区2面水田7・9・10号溝部分 北→



2 2区2面水田9号溝部分 北→



3 2区2面水田7~10号溝土層断面B—B' 南西→



4 2区2面水田7~10号溝土層断面C—C' 南西→



5 2区2面水田7・9・10号溝土層断面D—D' 南西→



6 2区2面水田7~10号溝土層断面 南西→



7 2区2面水田D—D' 7号溝部分土層断面 南西→



1 2区3面水田全景 垂直



2 2区3面水田全景 南西→



3 2区3面水田12号溝土層断面 南西→



4 2区3面水田南壁土層断面 北→

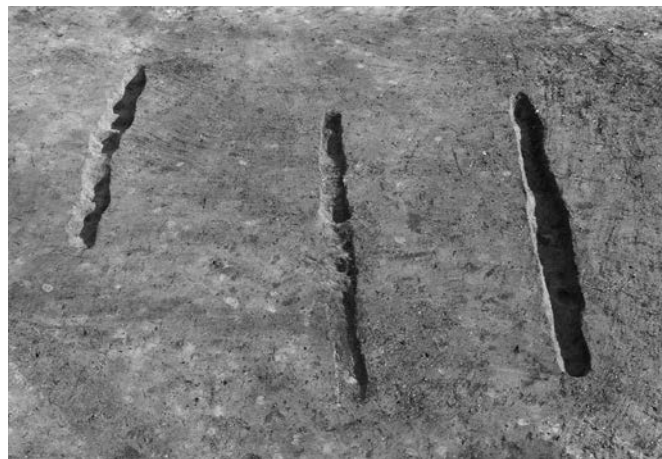


5 2区3面水田11号溝土層断面 北東→





1 1区1号畠全景 東→



2 1区1号畠全景 北→



3 1区2号畠全景 南東→



4 1区2号畠土层断面A—A' 南東→



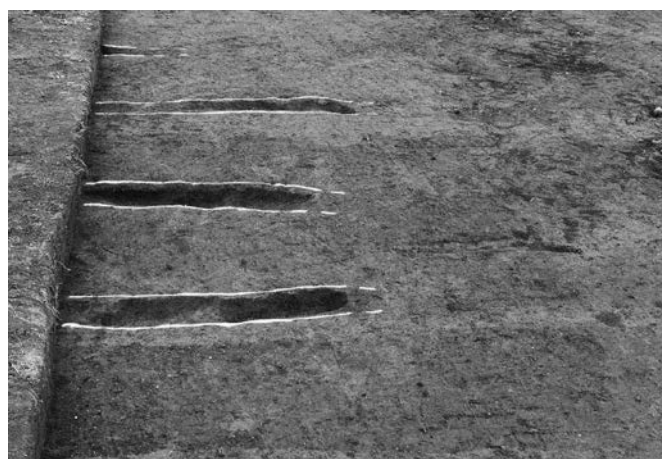
5 1区3号畠全景 南東→



6 1区3号畠全景 北東→



7 1区4号畠全景 北東→



8 1区5号畠全景 南→



1 1区5号畠全景 南→



2 1区6号畠全景 南→



3 1区6号畠全景 西→



4 1区6号畠土层断面A—A' 南→



5 3区1号畠全景 北→



6 3区1号畠全景 西→

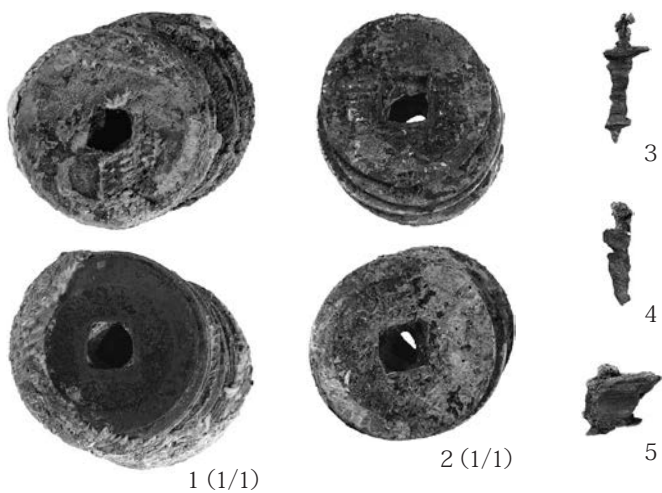


7 3区1号畠部分 北→

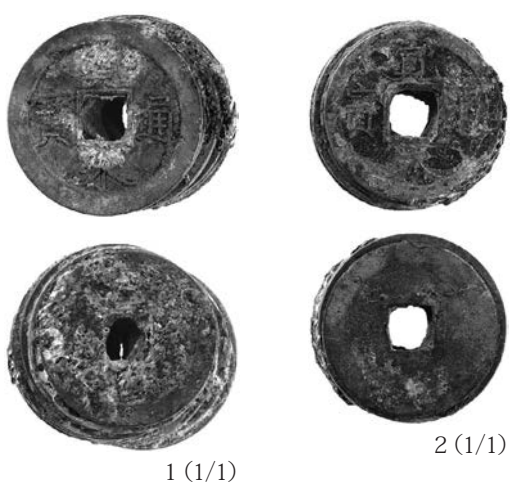


8 3区1号畠土层断面A—A' 北→

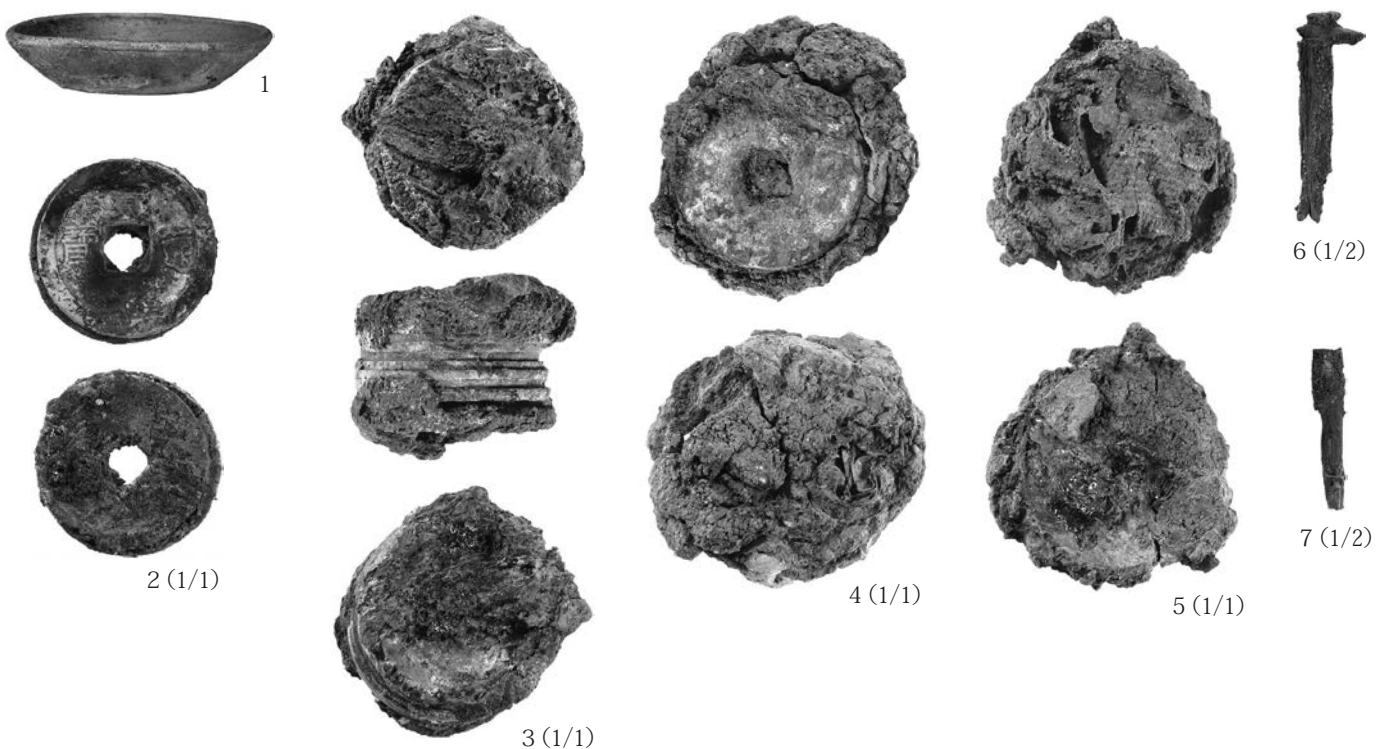
2区1号土坑墓



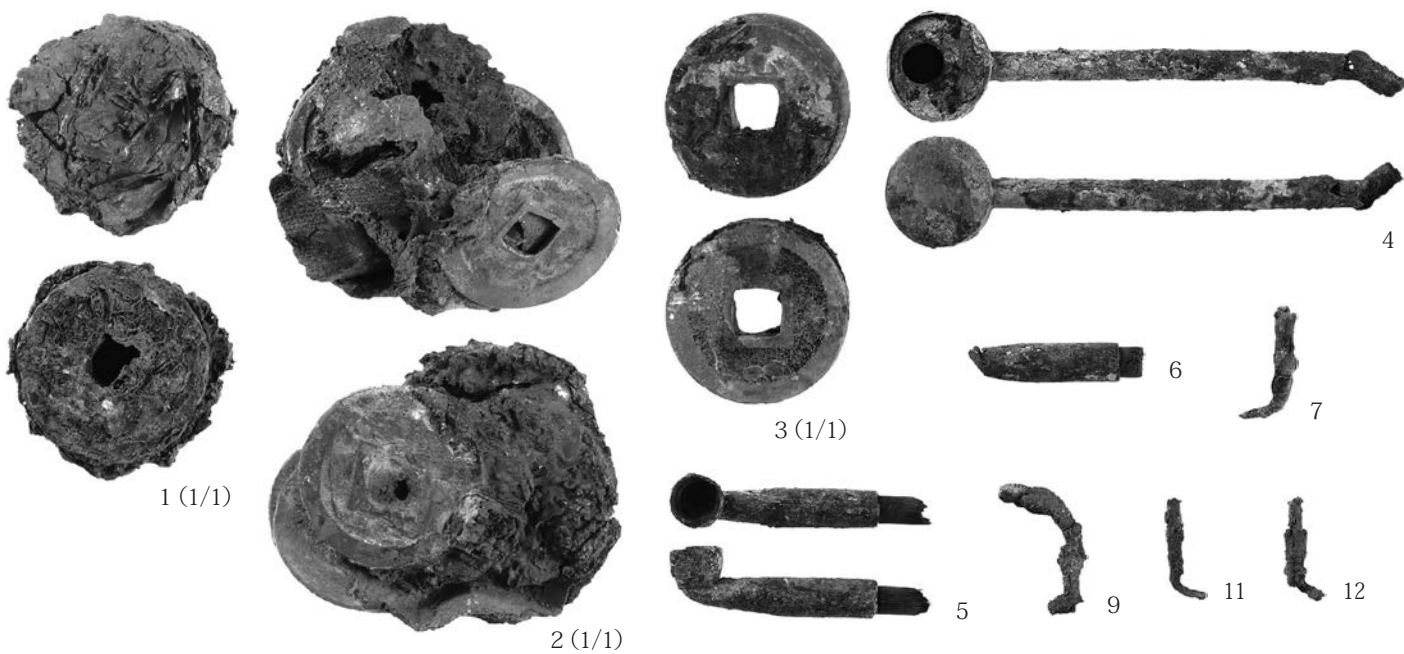
2区2号土坑墓



2区3号土坑墓

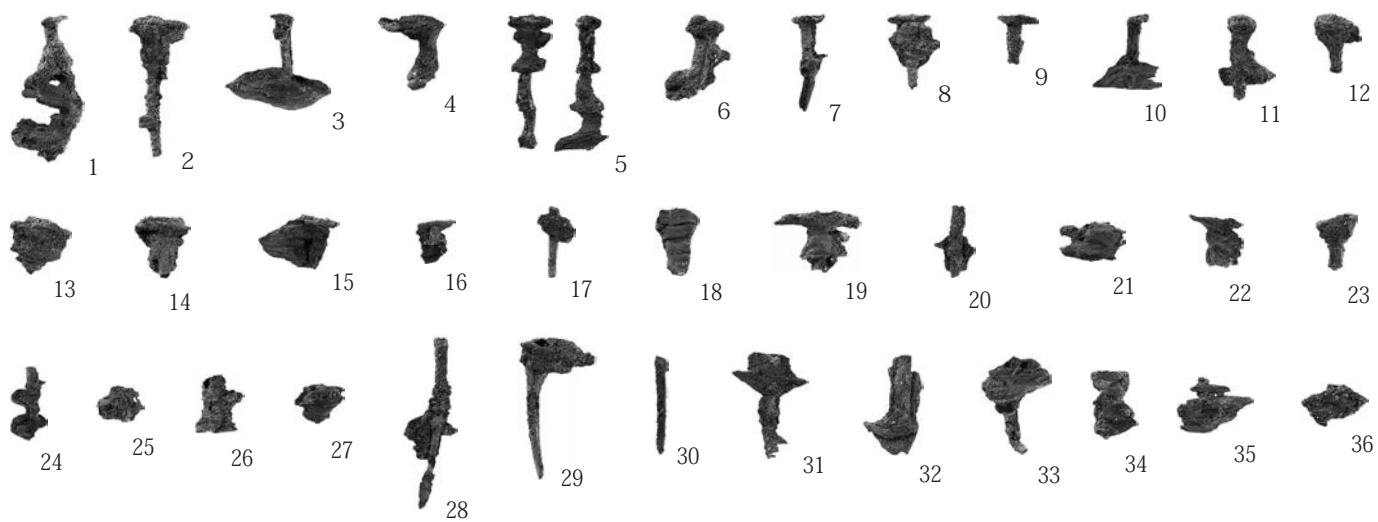


2区4号土坑墓



# PL.152

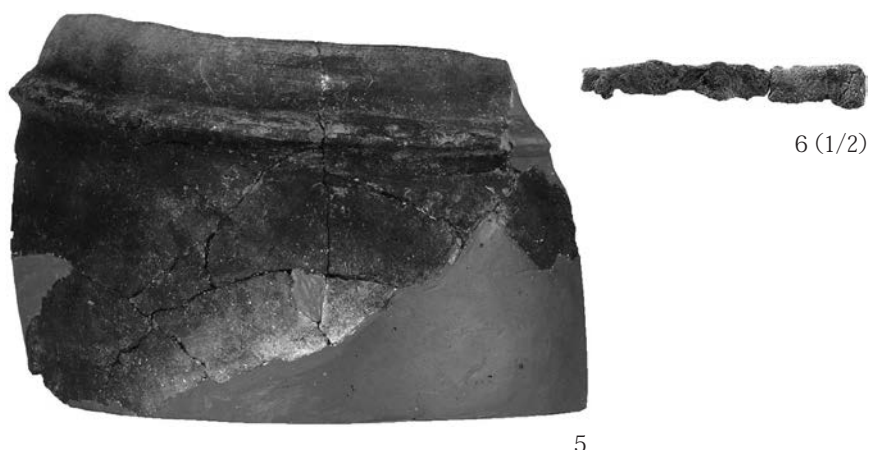
3区1号土坑墓



2区5号竖穴住居



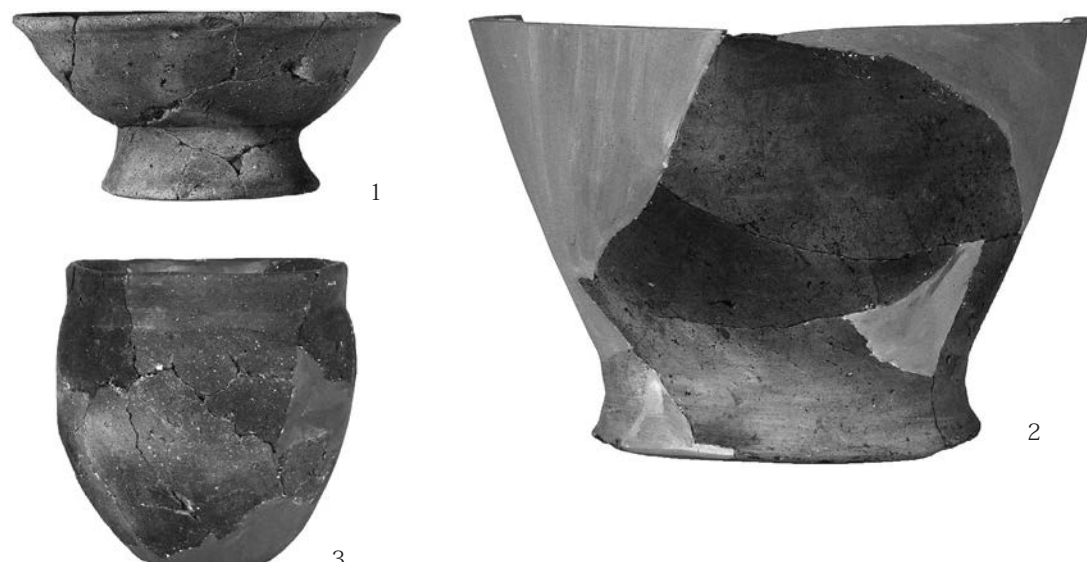
2区6号竖穴住居



2区10号竖穴住居



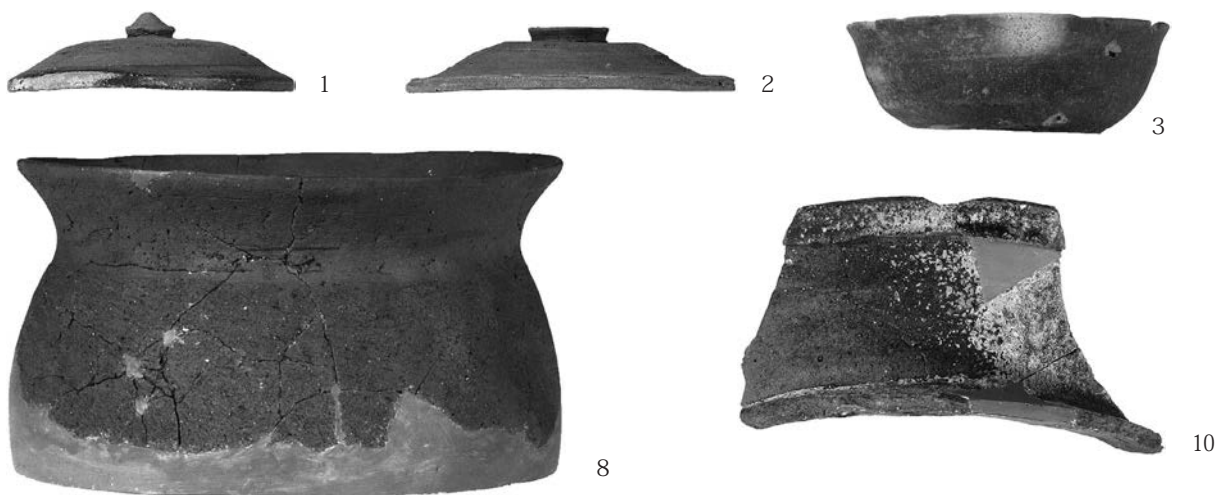
2区18号竖穴住居



2区32号竖穴住居



2区33号竖穴住居



2区39号竖穴住居



# PL.154

## 3区1号竖穴住居



2



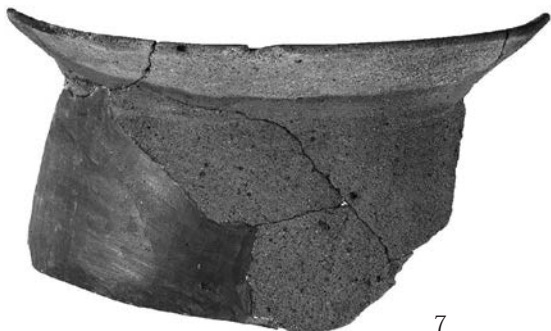
8 (1/2)



10



11(1/4)



7



9 (1/2)

## 3区2号竖穴住居



1



3 (1/2)



4



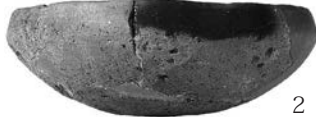
5

## 3区4号竖穴住居

## 3区3号竖穴住居



1



2



15



22(1/2)



21(1/2)



3



8

3区4号豎穴住居



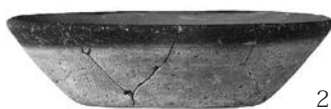
3区6号豎穴住居



3区7号豎穴住居

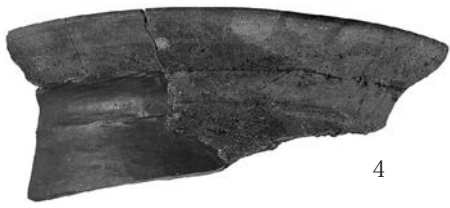


3区8号豎穴住居



# PL.156

3区9号竖穴住居



4

3区11号竖穴住居



1

4区1号竖穴住居



1



3

4区3号竖穴住居



3



4

6 (1/2)



6



8

4区5号竖穴住居



4

4区4号竖穴住居



1

4区6号竖穴住居



1



4区7号豎穴住居



1



7

1区9号豎穴住居



1



4



6

1区10号豎穴住居



2



8



7

# PL.158

1区10号竖穴住居



9



11



12



13



14

1区16号竖穴住居



1



3

1区17号竖穴住居



2



5



6



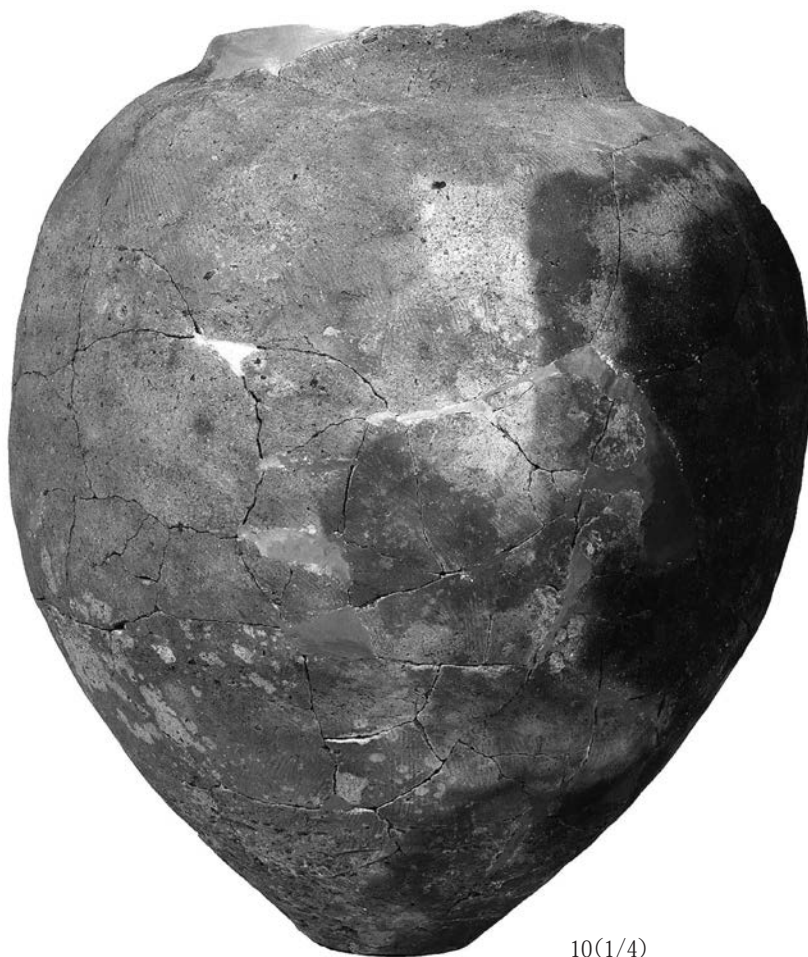
4



7



8



10(1/4)

# PL.160

1区18号竖穴住居



2



4

1区19号竖穴住居



2



4

1区20号竖穴住居



2



4



5



6

1区20号竖穴住居



1区22号竖穴住居



1区23号竖穴住居



1区24号竖穴住居



# PL.162

1区24号竖穴住居



22



23



24



26



27

1区27号竖穴住居



1



9



11



12

1区27号竖穴住居



10



14



15



16



17



22



18(1/4)

# PL.164

1区27号竖穴住居



19



20(1/4)

1区28号竖穴住居



4



5



6



7



11(1/4)



9



1区30号竖穴住居



2

2区1号竖穴住居



6



10



15(1/4)

2区3号竖穴住居



2



14



7



16(1/8)



11

2区4号竖穴住居



4

2区11号竖穴住居



1



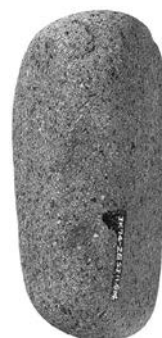
7



8



5



12

# PL.166

2区11号竖穴住居



9 (1/4)



10(1/4)

2区13号竖穴住居



1



5

2区14号竖穴住居



1



3



4



5

2区14号竖穴住居



6



7 (1/2)

8 (1/2)

10(1/2)

9 (1/2)

11(1/2)

13(1/2)

2区15号竖穴住居



3



4



6

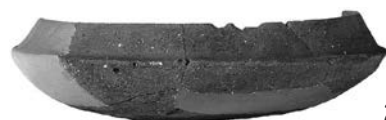


12

2区19号竖穴住居



1



2



5



9 (1/1)



10(1/1)



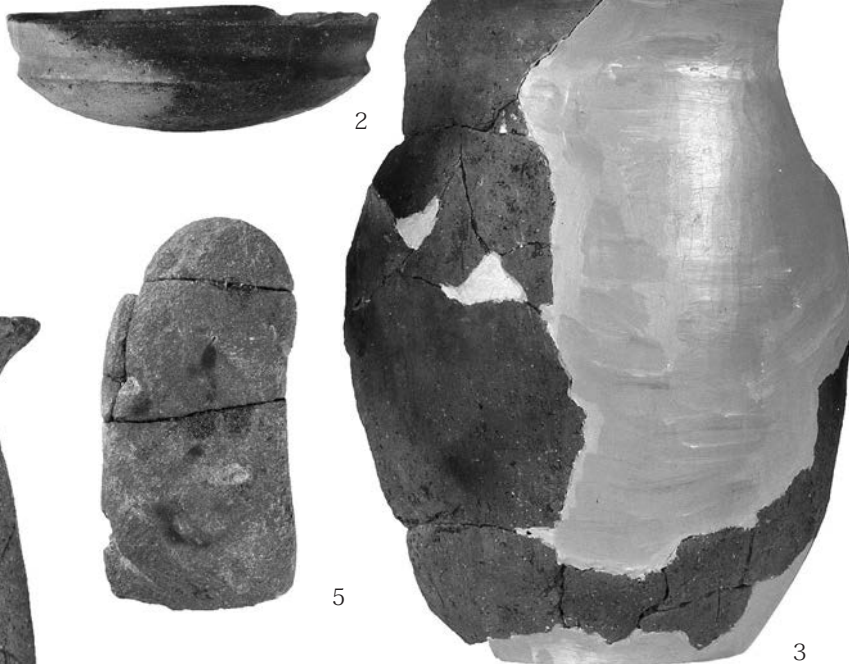
11(1/1)

# PL.168

2区20号竖穴住居



2区21号竖穴住居



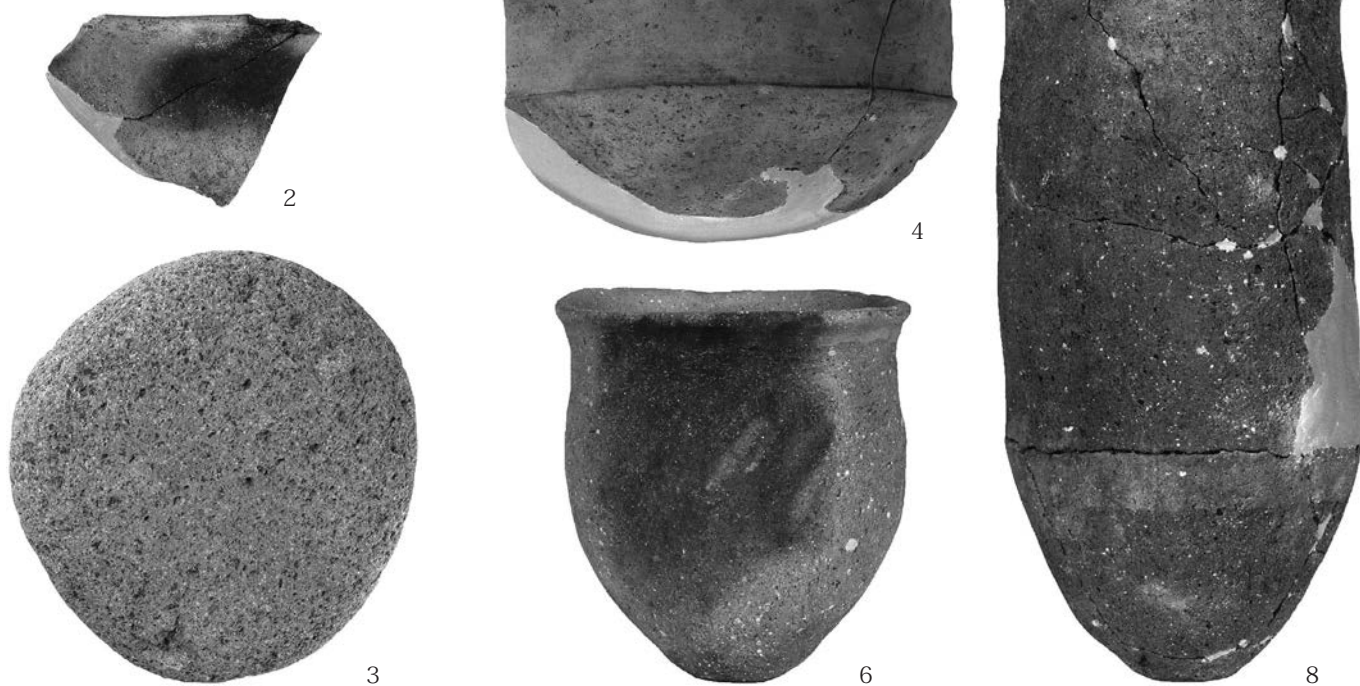
2区22号竖穴住居



2区25号竖穴住居



2区24号竖穴住居



2区25号豎穴住居



11

2区26号豎穴住居



1



2



5



6



7



4

2区27号豎穴住居



1



2



11(1/2)



12(1/2)



13(1/2)



14



15



8

# PL.170

2区29号竖穴住居



2



3



6



11



12



9

2区34号竖穴住居



1



5 (1/2)



6



2

2区36号竖穴住居



3



6 (1/2)

2区35号竖穴住居



1



5

2区37号竖穴住居



3



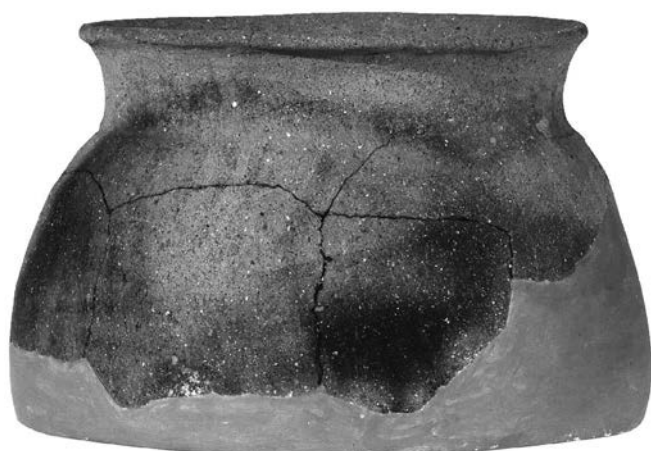
5



7



9



11

2区41号竖穴住居



2



10

2区38号竖穴住居



2



5



7



11

# PL.172

2区42号竖穴住居



1



4



5

2区43号竖穴住居



4



5



16



2区43号竖穴住居



14



17(1/1)



18(1/1)



19(1/1)

2区47号竖穴住居



1



3

3区5号竖穴住居



1



2



3



4



5

1区1号竖穴住居



1

1区3号竖穴住居



3



4

1区2号竖穴住居



1



3



5

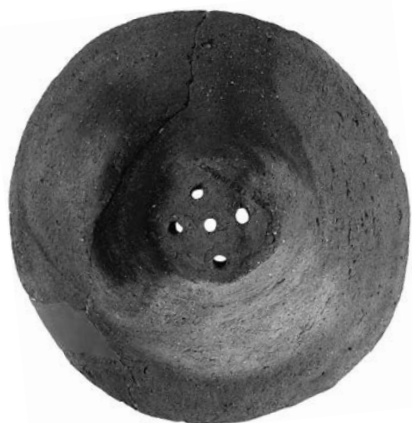


6

# PL.174

1区3号竖穴住居

1区4号竖穴住居



1区4号竖穴住居



18



17



21



16



19



20

1区5号竖穴住居



2



3



4



8

# PL.176

1区5号竖穴住居



7

1区6号竖穴住居



3

1区8号竖穴住居



2



4

1区11号竖穴住居



1

1区13号竖穴住居



2



3



3



4



5

1区13号竖穴住居



1区14号竖穴住居



1区15号竖穴住居



# PL.178

1区15号竖穴住居



9

1区26号竖穴住居



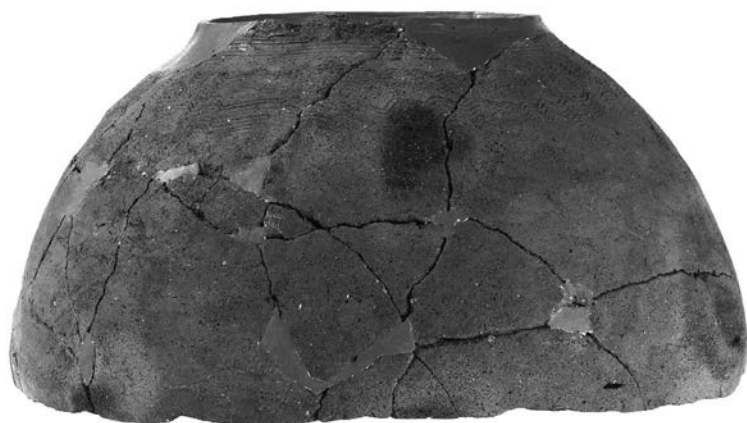
1



2



3



7



8 (1/4)

1区29号竖穴住居



2区8号竖穴住居

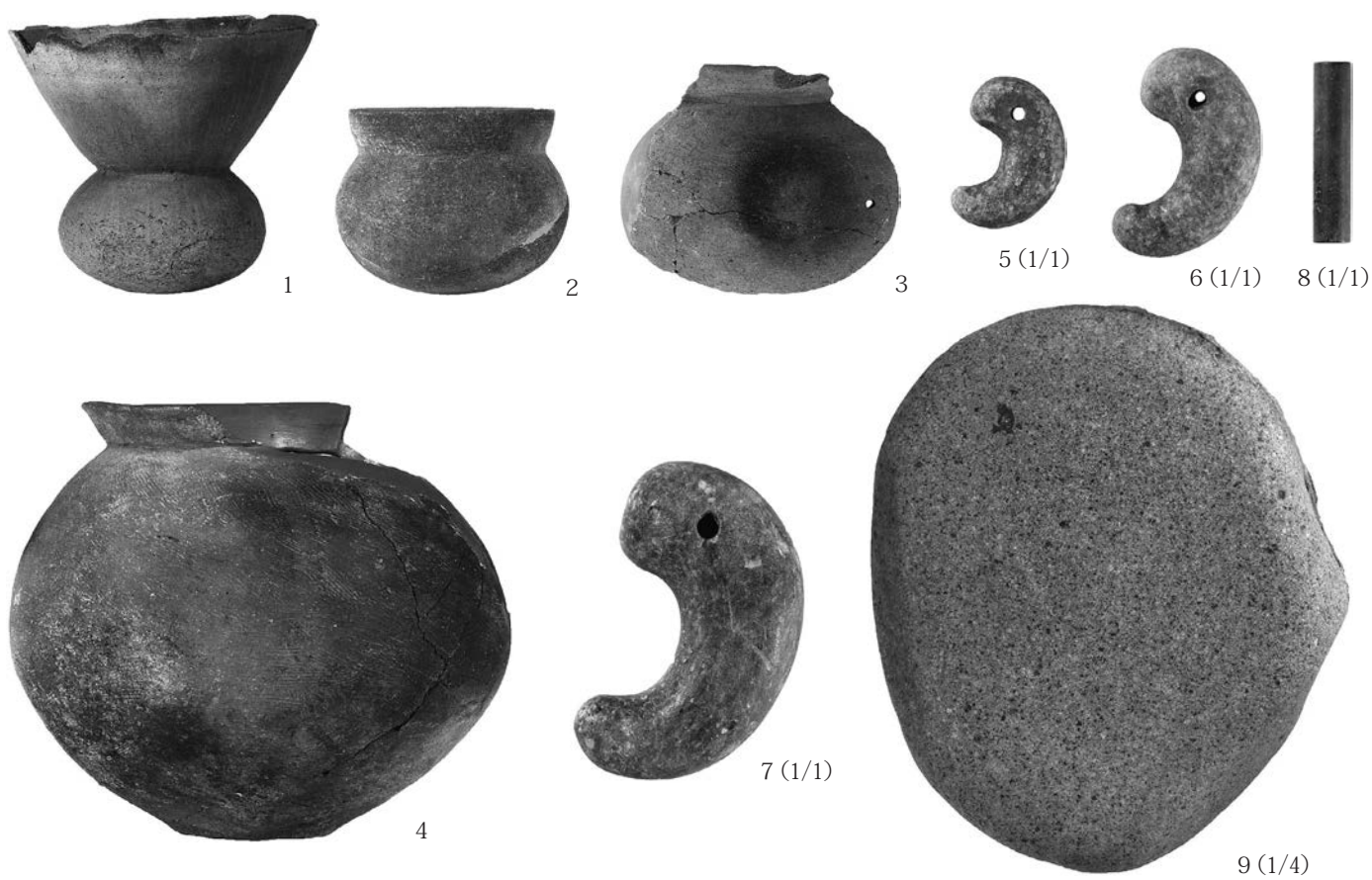


# PL.180

2区9号竖穴住居



2区23号竖穴住居





2区23号豎穴住居



10 (1/2)



11 (1/2)



12 (1/2)

2区28号豎穴住居



1



2



3



4



6

1区3号墳



1



2 (1/2)

1区5号墳



1 (1/2)



2 (1/2)

1区6号墳



1

# PL.182

1区埋没谷



5



10(1/4)



9

2区2面・3面水田



4



7

飛鳥～平安時代の遺構外出土遺物



3(1/2)



4

古墳時代後期の遺構外出土遺物



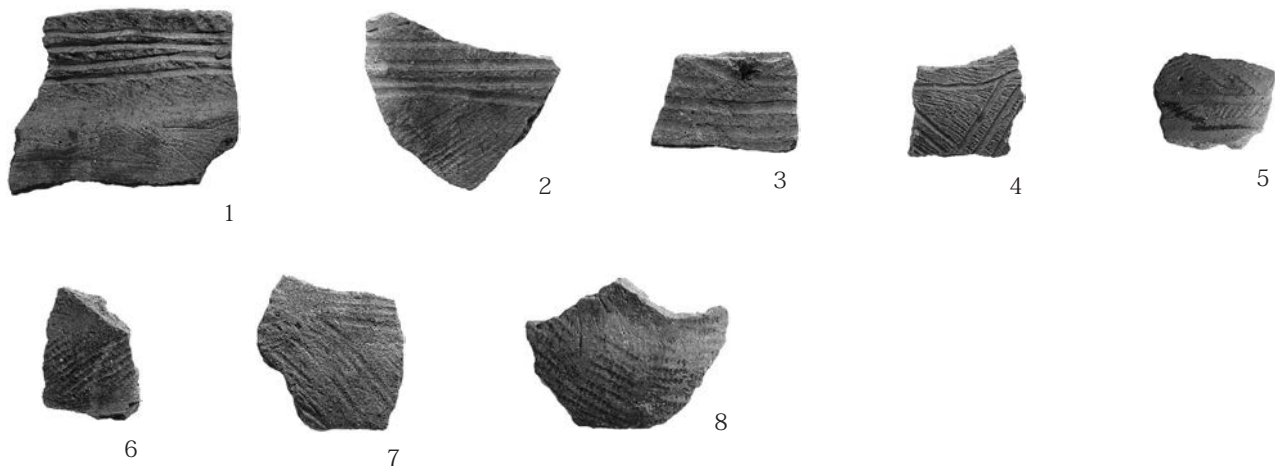
3(1/1)

古墳時代前期～中期の遺構外出土遺物

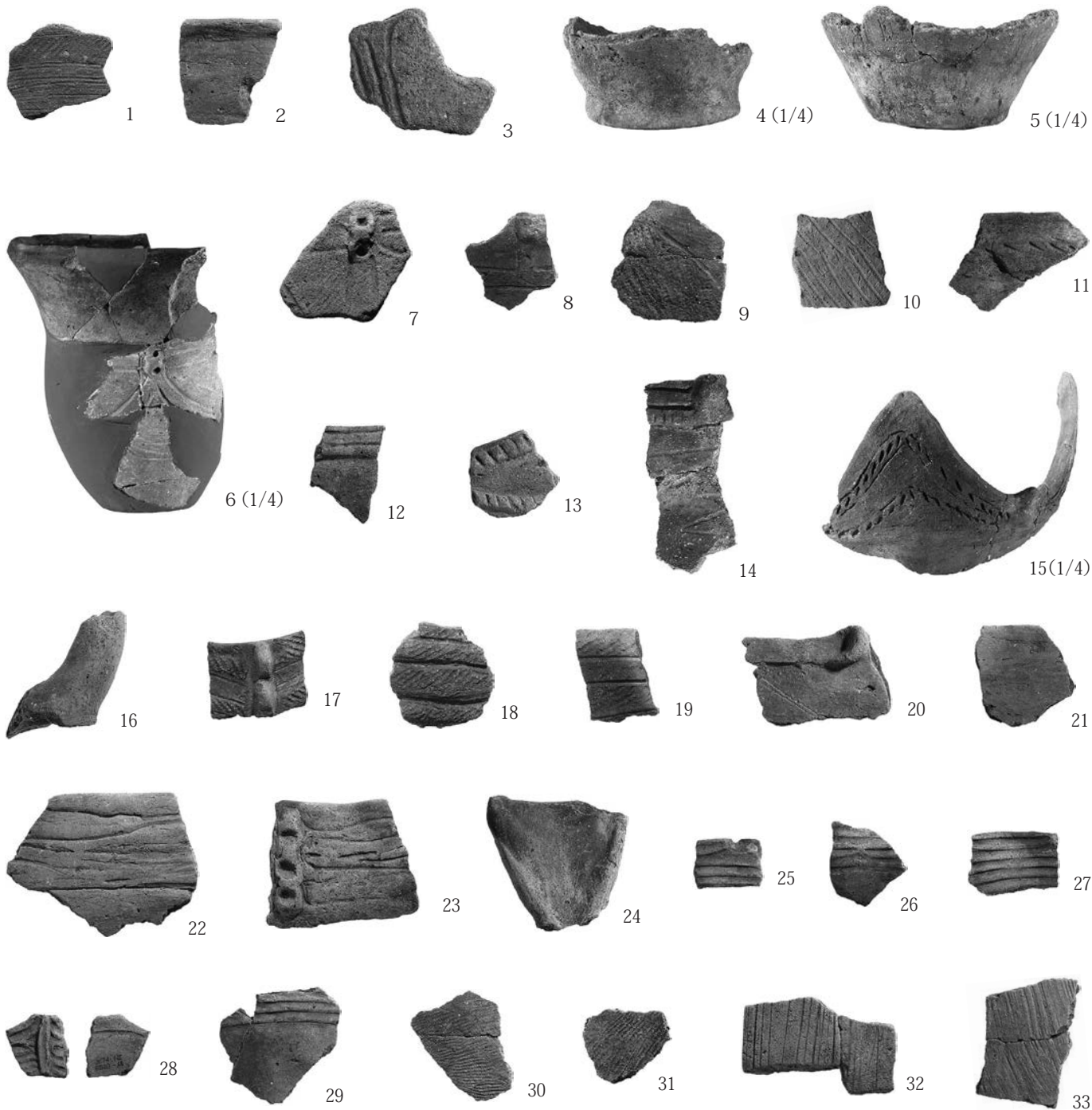


3

遺構外出土の弥生土器

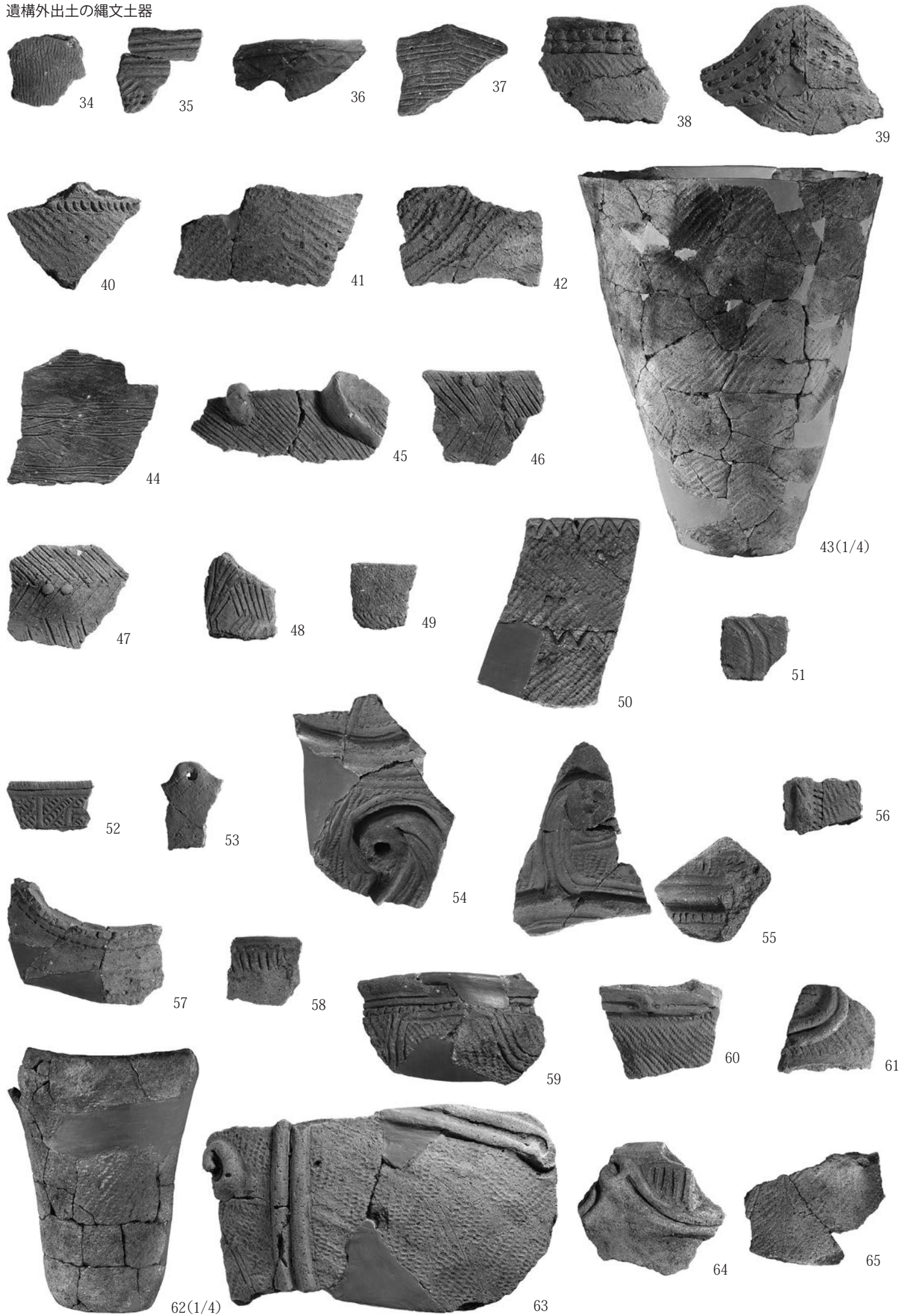


遺構外出土の縄文土器

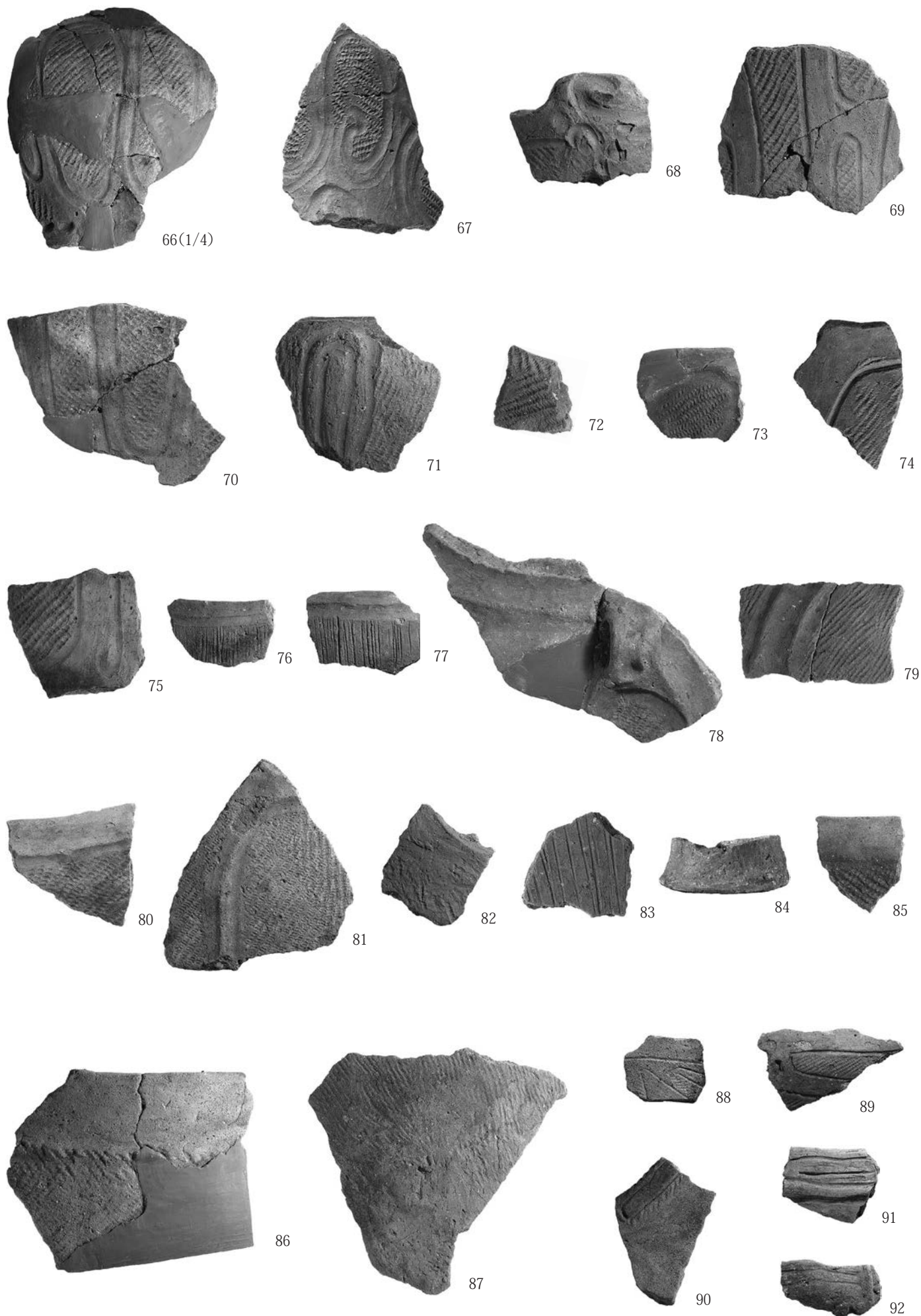


# PL.184

遺構外出土の縄文土器

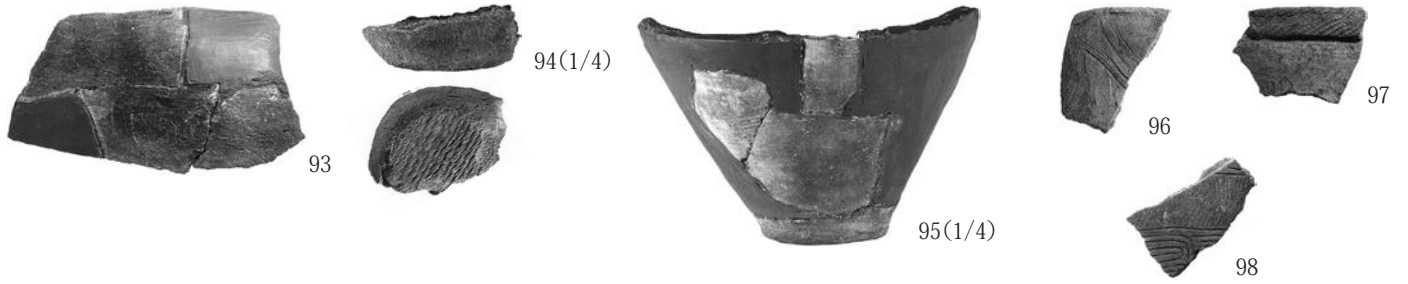


遺構外出土の縄文土器

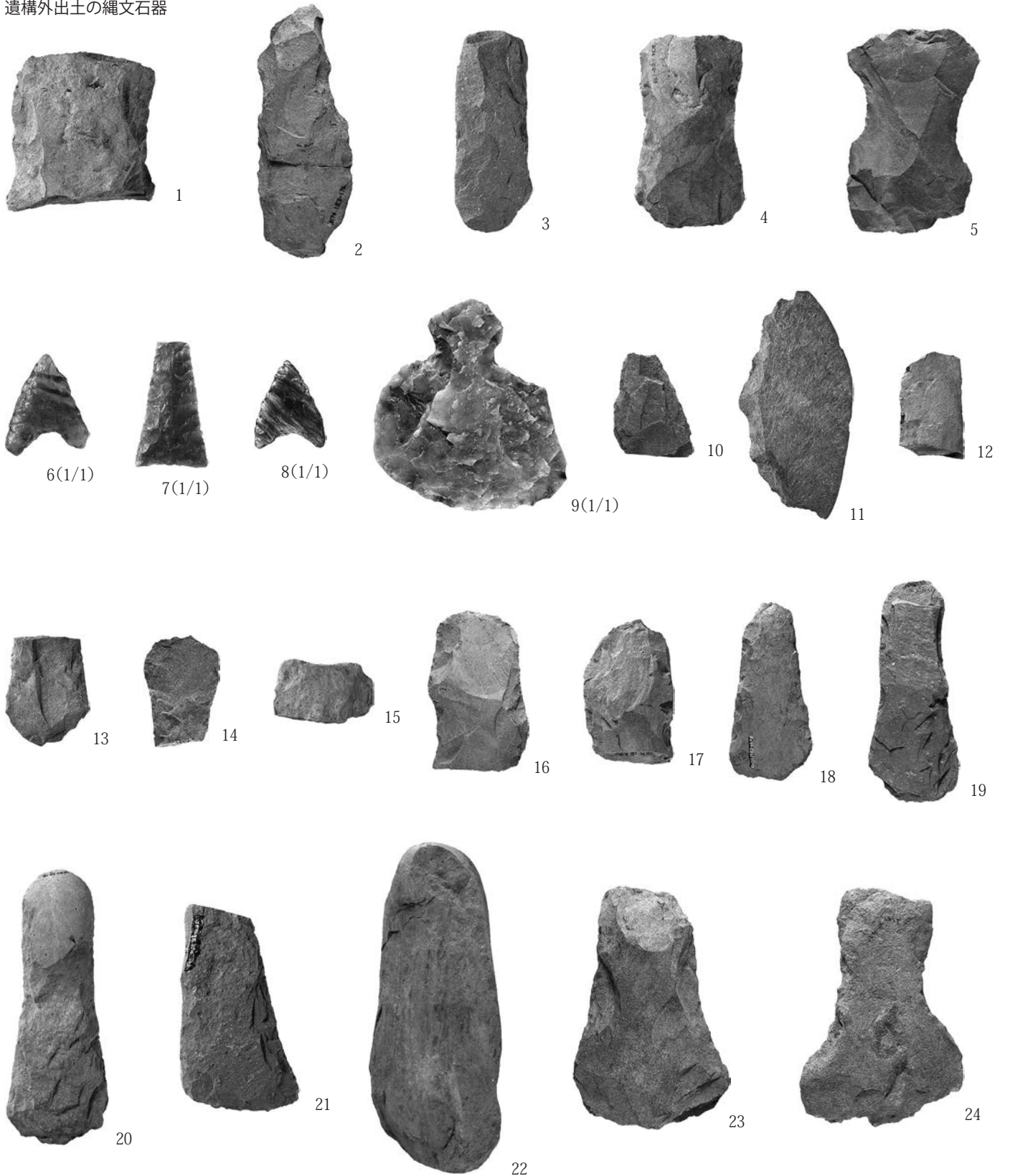


# PL.186

## 遺構外出土の縄文土器



## 遺構外出土の縄文石器



遺構外出土の縄文石器



25(1/1)



26



27



28



29



30



31



32



33



34



35



36



37



38



39



40



41



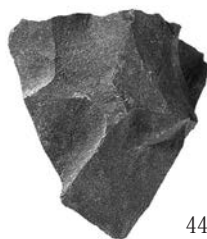
42



43・44接合



43



44



45(1/1)



46(1/2)



47



48(1/2)



49(1/2)



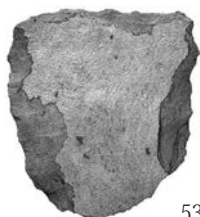
50(1/2)



51(1/2)



52(1/2)



53



54(1/2)



55



56(1/2)



57

# PL.188

## 遺構外出土の縄文石器



58



59



60



61



62



63



64



65



66(1/2)



67



68(1/2)



69(1/2)



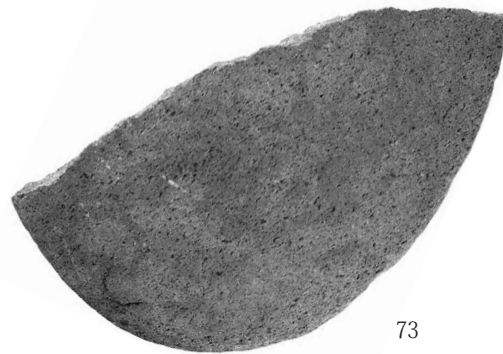
70(1/2)



71(1/2)



72(1/2)



73

## 出土した旧石器



1 (1/1)



公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第615集

## 山王・柴遺跡群

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

---

平成28(2016)年3月4日 印刷

平成28(2016)年3月11日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／朝日印刷工業株式会社

---

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第 615 集 『山王・柴遺跡群』全体図

